THE CENTRAL REVIEW

中央公論

春季大附錄號

第四十一年　第四號　第四百五十九號


理解力と記憶力
不幸なる腦神經病者は此二つを欠けり。
唯、「健腦丸」の常用にあるのみ理解力と記憶力を完全に増進せむ!!
島村醫學博士證明
島村博士證明
健腦丸
腦病
良薬
KENNOGWAN
腦神經病特効薬
特長
主効
本舗 丹平商會藥房

▼實行無限の名書

獨逸 ショーペンハウエル著
増富平藏譯
（全三卷完成）

宇宙及人生

▲全三卷總紙數 貳千五百二十餘頁
▲四六判九ポイント組
▲總洋布製函入

定價
上卷 四圓五拾錢
中卷 金四圓
下卷 金四圓
郵稅各卷十八錢

本書は獨逸の大哲學者ショーペンハウエルの大著「**意志及び心識としての世界**」の逐字的口語譯である。原書は**ニイチヱ**も一週日の間、二時に寢ね、六時に起て二千ページを讀破した」といつた位、深淵の思想と無限の興味とを兼ね具ふる點に於て有ゆる哲學書中の白眉を以て目さる丶世界的名著である。譯筆の明快は云ふ迄もない。

著者
譯者
同前

處世哲學	七版	貳圓八拾錢 郵稅十二錢
人生達觀	三版	貳圓七拾錢 郵稅十二錢
ショーペンハウエル隨想錄	三版	貳圓六拾錢 郵稅十二錢

ノーベル賞金を得たる白耳義文豪マーテルリンク著
文學士栗原古城譯

八版出來

靈智と運命

△四六判總布製・定價貳圓貳拾錢・郵稅十錢

人間の運命は果して先天的に豫定せられたるものなりや否や、人間は自らの努力によりて其運命を改造し能ふべきや否や、將た又人間の理性は奈邊まで信頼せらるべきものなりや。これ實に全人類の頭腦を惱まし來れる千古の疑團なり、マーテルリンクは、其思索の有らん限りを竭して、遠くは不可思議なる神秘境に其思ひを馳せ、近くは日常生活の一些事をも見逃さずして所謂『運命』の正體なるものを剔抉解剖して餘蘊無からしむ、靈智の明鏡一度輝いて萬妖悉く其影を潜むるの概あり、求道の士は必ずや空しく本書を看過せざるべきを信ず。

英國 ギッシング著
文學士 栗原古城譯

田園春秋

「ヘンリ・ライクロフトの手記」全譯

貳圓參拾錢 郵稅十二錢

世界の隨筆文學として其價値最も高く近代の教養ある讀書子をして擧つて感歎の聲を惜まざらしむるものである。

東京本郷西片町
玄黃社
電話小石川一三九番
振替東京七九九五番



遠山櫻　　平福百穗筆


エビス
サッポロ
アサヒ
ビール
清涼飲料
シトロン
リボン印 ラズベリー
タンサン
ナポリン

近代日本文學大系内容

或は作品に依りて之を分類し、或は作家に依りて集輯し、製作の年代に順ひ、脈絡井然として排列したのであるから、讀者は之に依りて江戸時代文藝の史的經路を辿りて其精粹に通じ、「日本文學大系」の後を承けて過去の文藝に曉達するを得るのである。

▲内容見本　申越次第進呈

▲豫約申込　四月十五日迄

購　規

▲申込金五圓▲毎月拂込金四圓▲一時拂込金九拾八圓也▲外に送料を要す▲配本大正十五年六月より毎月一冊廿五ヶ月完了

體裁

四六判天金、總布裝、口繪コロタイプ插入、極美本、全部九ポイント活字組、毎冊紙數壹千餘頁

東京市麹町區内幸町一丁目
電話銀座七八三・二一八八
振替東京五二二九八番

國民圖書株式會社


罐詰の
生ビール
日本にたつた一つ
サクラ罐詰生ビール
Sakura
BEER
株式會社

大正十五年

中央公論

四月一日發行

「春季大附錄」號

第四十一年 第四號

第四百五十九號

議會に於ける醜聞摘發を前にして

今度の議會には[illegible]問題が[illegible]に上つた。色々の問題に於て一齊に大きな[illegible]色を見せるものは所謂醜聞摘發の諸件であらう。田中大將の[illegible]事件。山梨大將の[illegible]事件。政友[illegible]政府以來[illegible]に絡まる[illegible]事件。はては田中山梨兩大將を中心とする官金不當支出事件。而して是れ等個人の私慾を[illegible]す爲の[illegible]といふのではなく、政府は政黨の[illegible]に絡み、是れ等は政黨の政治目的の爲に政府當局の[illegible]に依つて費消されたといふのである。といふ點に[illegible]の[illegible]がある。凡そ事に關係ある者の間には自分の[illegible]をこやしたのではないとはいふ。[illegible]を犯した者に[illegible]を犯しました者に[illegible]。我々は斯ういふ理由の[illegible]を以て其等の人の[illegible]を[illegible]す可らざる[illegible]如何に[illegible]人を[illegible]せしめしかは[illegible]決して[illegible]現象ではない。政界に於ける[illegible]持つまでもなく我々國民の[illegible]ある前に之を批評するを[illegible]ではならぬのではないか。今度のやうな事件は議會に於ける摘發を待つ[illegible]い。[illegible]ことは[illegible]問ふに附されたい。此の[illegible]に[illegible]は今後の摘發に一層の[illegible]を[illegible]する[illegible]ことと[illegible]の[illegible]な場合に限り、[illegible]的に[illegible]されて[illegible]が[illegible]の[illegible]は、[illegible]に[illegible]の[illegible]を[illegible]し[illegible]の[illegible]に[illegible]の[illegible]を[illegible]するならば[illegible]人の[illegible]の[illegible]は[illegible]。[illegible]的[illegible]に[illegible]的[illegible]なく、[illegible]に[illegible]の[illegible]に[illegible]のしい[illegible]さを[illegible]の[illegible]は[illegible]の[illegible]として[illegible]行たる[illegible]は[illegible]。[illegible]人は何としても[illegible]を[illegible]し[illegible]なる。その[illegible]た[illegible]とは[illegible]發しないが[illegible]良いのだといふのではない。[illegible]る[illegible]は[illegible]ない。[illegible]いものはどんどん[illegible]に[illegible]ないのではないか。[illegible]動[illegible]ないからこそ[illegible]に[illegible]よなどといふなる。[illegible]は一日も早く[illegible]を[illegible]つてゐたものはどん／[illegible]に[illegible]したい。[illegible]に今度の[illegible]な[illegible]は人心を[illegible]するのだ[illegible]を[illegible]つてはれたくなかつたのでまつた[illegible]がまた[illegible]の[illegible]問題の[illegible]しりに[illegible]なるか。[illegible]の[illegible]は、あんな風にこの[illegible]いつ[illegible]つ[illegible]たれ[illegible]た[illegible]。今後[illegible]する[illegible]の[illegible]が[illegible]。[illegible]し今[illegible]つては[illegible]しりなた[illegible]を一[illegible]し[illegible]れない。[illegible]い[illegible]風[illegible]事を[illegible]てない物[illegible]る[illegible]聞きに[illegible]まする。

併し政界の打破を以てして、今度の問題に對し十分吾人を滿足せしむべき良心の働きたつやうな措置に出づることは望めぬ。今の議員にはピンからキリまで何れは同じ穴の貉だからである。故に大體の措置に於ては政府の所は議員はされ得る。ここで此問題は單に議員達だけに委しては置けぬといふことになる。折角政界に内部改革の機運が起らずも彼等共通の大弱點を我から進んで浮々とさらけ出したのだ。之から何物かの良き結果を將來に收めんとには、是非共我々國民が自ら巧にこの好機會を利用せなくてはならぬ。是れ吾人が本問題を茲に持ち出して讀者の一考を煩さんとする所以である。

本問題を機會として我々は色々の事を政界に要求したいのであるが、最少限度として是非これだけはと思ふのは、二度と同じ様な失態を繰り返さすなといふことである。不當の金を使ふといふは其自身わるい。併し政界で金が跋扈するのは、假令それが正しい出所からのものであつても、惡い。政治の問題としては、出所の如何に拘らず金の跋扈は嚴重に喰ひ止めなければならぬ。況んや金の跋扈を許せば其結果は自然に不正の方法を促すものなるに於てをや。故に今度の問題にした所が、二度とこんな馬鹿なことを政界に繰り返させぬ所まで社會的良心を刺激するものなくては、折角の好機會も畢竟空騷ぎに終るの外はない。更に一歩を進めて直接の關係者を政界から永久に葬つて了へれば此上なしだが、刑事問題になつても平氣で居る世の中だからそこまでは望めないとして、せめてもう二度と同じ様な失態は行はれ得ぬといふ所まで行けば、國民としては滿足していゝと思ふ。

猶之に就て我々の切に國民に望む所は、此種の問題に對する評價を誤らざらんことである。某將軍は俺は自分の爲には錢一文も使はぬぞと威張つたとやら。某代議士は自分は云々の金を個人として收めたのではないと嘯いて居る。若し私腹を肥したのでないと云ふ點に諒とすべきものありなどと認定する者あらば、之は全然政治道徳を解せざるものである。又所謂無産階級の立場に在る人々は、斯種の醜聞を取て既成政黨當然の痼疾と爲し、自家の立場を主張宣傳する爲に喜んで之を利用するかに見える。他の過失を高調するに急なるものは動もすれば之を取て自家の鑑戒たらしむるの用意を缺き易い。焉んぞ知らん、彼等の失態は同じ境遇に置かれたなら亦我等の陷ろなきを保せざる失態でないかを。我々が今度の樣な問題に直面する時、右述ぶるが如き兩方面から吾人の正當な評價を妨げんとするものに出會する。之れだけ我々は良心を鋭敏にして己が獨自の立場を支持するの必要を感ずるものである。

中央公論



第四十一年第四號
春季大附錄號
第四百五十九號

政治の根本常識に於ける時代的反省

杉森孝次郎

一、緒想の或もの

政治の根本概念が、事實と論理に依據されたしかたに於て、明確に構成されてゐないならば、その社會に於ける、またその人に於ける、したがつてまたその國、群、黨に於ける、すべての想信されてゐる政治的行動、思想、及び感情は、すくなくともこの消極的事情によつて消極的に制限されたものであるほかない。

つたにいき、[illegible]。これは[illegible]もした。しかし、これは、言はゞ、ほんの地ならしに過ぎない。なにを、いかに作てるかは、全く將來の問題にある。あるひはまた[illegible]一般にさへさる。少數の、比較的に劣悪を遂げたと自任し、一部の人々から信頼されてゐる個々人及び成形的、未成形的結社式のもの、場合に於てさへ、その自任と信頼とは、なほ多少の反省と改正を、實質には、必要としてゐるものが多い。そして、これは、根本的には、特に恥づべき現象ではすこしもない。われらは、すべて、進歩、したがつて研究の、不斷の餘地と必要とを持つものであらねばならぬからだ。

一千萬の新有權者の發生は、すくなくとも形式的に、新興政治的勢力が原料として發見されたことを意味しうる。しかしながら、勿論、これにいかなる技術、科學、及び殊に哲學が加へられるかによつて、その發生は、必らずしも新興政治的勢力の、現代日本の眞の社會的良心及び慾望から考へて、最も望ましきかたちに於ける發達を約束するものではありえない。一千萬の新有權者の發生は、眞に地ならしに過ぎない。それは新たなる、たしかに大きな、一とつの**どこ**の獲得に過ぎない。新興政治的勢力にとつて、これはむしろ單なる場所が手に入つたことを意味する。その場所は、新興政治的勢力の發達のために最も好都合な場所であることはたしかだが、時代錯誤的な、あるひは要するに政治的日本の進歩的自己保存にとつて有益な、政治的勢力の進退、播植のためにも濫用、妨用、私曲用されうる場所だ。

新酒の最善容器は新甕に限るとすれば、新有權者は、新興政治的勢力の立ち場からしては、最も愛護、保持すべき土地であらねばならん。いはんや、社會進歩のために最も必要な過程及び方法の一は、すこしの疑ひをはさむ餘地もなく明白に、社會的再續化にあるに於てをや。そして、現代日本に於ける一千萬の新有權者の發生は、一とつの巨大なる社會的再續化の可能を有望に意味しうるものであるに於てをや。

いきの所に、国民の政治意識に、及び、多少とも国民によつて信用されてゐる政治的指導原則に、科学的、哲学的根據に依據した良心、名望、及び事情と能力が許す限り、賢明なる綜合的な結合を與へるべく試みることは、一とつの有り得べきことであることを疑はない。この企ては、国民の各個によつてなされることだ、一とつの時務的な當事だとさへ、ほとんど諸君に考へられるがゆゑに、私は、勿論、その内の單なる一個として、これを問題として附るに過ぎない。

二、政治の根本概念

ア、それの構成の準備

人間が複数に存在し、そして、その複数人間間に、交渉、取引、喧嘩、競争、協力等が、現實的現實として、及び、單なる可能的現實として考へられ、存在するならば、そこには、政治が發生し、且つ發達する自然的及び當然的理由がある。政治は、實に、相互間に人間的、つとめていへば道徳的、さらにつとめていへば行動的關係が現に存在する、または現に可能であると考へられる複数人が存在する場合に、その關係に政統性を與へることを意味する。それに與へられる政統性を意味する。

その關係は、しかしながら、對付そのものにほかならない。政治は、それゆゑに、對付に政統性を與へることと、對付に與へられる政統性、を意味する。對付が、政治にとつての客觀的條件だ。客觀的條件の代はりに、多少哲學的に、原料といふてもいい。

對付といふ原料が存在しないならば、政治は、それの目的的存在理由をも、それの當然的存在理由をも持たない。逆に

また、[illegible]に存在する人に、[illegible]、それ[illegible]、[illegible]それには、その生存自身にとつて、それの本然と要望とにとつて、必要だ。

経済の代はりに経営といふことばを置いて見ること、置きかへてみることは、この場合に極めて有益だ。政治は、實に、社會經營を意味する。その經營が、それの根本動機に於て、多少ともその社會内の或限られたる部分の私利、私慾、私情に存することは、ほとんど通則的に、不可避だが、その經營が、すくなくともそれの外面條件に於て、同時に多少ともその社會全部の利、福、必要に存することは、社會の發達と共にいよ〳〵完全に必然關係化される。いづれにしても、政治が社會經營であるといふ根本形式に變はりはない。すくなくとも事の結果からいふ限り、政治は、常に、社會經營を意味する。一とつの團體の經營は、それの動機に於て、及びそれの方法に於て、その團體だけが關する限りに於て、純粹に私的即ち一團員的である場合と、純粹に公的即ち全團員的である場合との兩極間の種々でありうるが、そのいづれの場合に於ても、それがその團體の經營である限り、それは自明的、必然的に、その團體に或統整を與へることを意味する。團體は、それ自身、一とつの社會であるがゆゑに、この場合、團體の代はりに社會を置いて考へて見るならば、同一の原則が同樣に確實にそこに認取される。經營の動機及び方法の上に、高低、善惡、正邪、巧拙の差は、したがつてそれから生ずる結果の上の完全不完全の差は限りもなく種々であり得るが、それが或經營であること、即ち或統整であることは、その種々の場合のどの一とつに於ても眞實だ。

社會は個々人を單位とする實在及び現象にほかならないがゆゑに、社會原則は、いつでも、個人原則として、ただそれよりも小なる規模に於て、しかしながら一層の深さ及び現實さに於て、それの類同性を持つ。社會法則の根本形式は、常に、個人法則の内に發見される。現に扱はれてゐる問題の場合に於ても、この關係は、勿論、例外即ち非存在ではな

い。そして、この問題の場合に於て、その社會原則に相當する個人原則を、例することは、問題の解明にとつて一助たりうると考へる。

個人には、個人としての生存期間に、ほとんど各瞬間に、種々の心的傾向がありうる。實在に於ての種々の興味がありうる、いなそれは必ずあるし、しかしながら、かれは、その種々の興味を、いつまでも種々の興味として、いはゞ放任的に、放任して置くことは出來ない内的及び外的事情を持つ。かれは、その種々の興味に或統整を、即ち或經濟を與へる必然及び必要を持つ。かれの性情、即ち一人間性または一とつの人的自然としてのかれと、それの環境とが、いや應なしにさう作用する。かくして、例へば、或個人は、かれに於ける自然的性本能の如きをば極度に制限し、或他の野望欲や名譽心を極度に解放するかたちに於て、かりに、かれが現に持つすべての興味をこのふたつの興味によつて代表させるならば、かれの興味群を統整する。個人としてのかれの内に、その野望欲または名譽心による專制政治が行はれるのだと、それの或場合は呼ばれうる。性本能からいへば、それは獨裁制政治でありうるのだ。また或個人は、戀愛をも人なみ、あるひは人なみ以上に行ない、結婚をもし、同時に科學、藝術、教育、宗教、政治、商業等の一種またはそれの幾つの内に、かれの興味を十分に、もしくは適當に、發散させ、結晶させるしかたに於て、かれの興味群を統整する。比較的にデモクラチックな政治だと、これの或場合は呼ばれうる。勿論、或個人は、色慾や食慾によつて、それを權力の軸として、したがつて大抵、發展といふ見地からしては、必然、比較的に甚だ困難ながら、甚だ制限されたたすのであるほかないながら、かれの興味群の軸を統整する。怜悧政治、賢明政治、及び或かたちの、即ち適當にさう呼ばれうるかたちの貴族政治または階級的團體乃至階級に依る專制政治――これの眞實の可能は、即ち成功は、原則にも、時間的にも、ほとんど瞬間に否定されるだらう。こゝでは、それのありうる限りの場合を原則に置いた――ただこれに相

[illegible]する。[illegible]、即ち[illegible]としては[illegible]的な、即ち[illegible]的な、[illegible]信仰があり、專制君主的社會のそれとしては、選ばれたる[illegible]の[illegible]に依る、[illegible]に對する[illegible]。[illegible]があり、一とつの理想としての完全社會民自治制のそれとしては、各我實現主義がある。原始的部族社會に於て酋長であり、封建社會に於て領主であり、進んだ立憲制の社會、即ち責任を條件とした自治制の社會に於て憲法であるものが、個人に於ては信仰であり、良心であり、人生觀であるのだ。

個人に於て、なんらかのかたちに於ての信仰、良心、もしくは人生觀は、當人または他人が、それを、それらの名に於て呼ぶことを肯定すると、否定するとにはすこしもさまたげられず、多少發生し、あるひは、多少發達しないことは出來ない。人間性の組織及び關係が、根本的に、さう出來てゐるのだ。統一は生活の本質に具有されてゐる一とつの傾向であるのだ。生活が進歩的である限りに於て、その傾向も必然的に成長する。統一は、無統一を意識しうるだけの聰明を所有するものにとつては、その事自身に、或深い滿足と愉悅を與へる必然力を持つものであるが、即ち或藝術價だが、そして、これは、純粹知識慾及び殊に純粹論理慾によつても說示されるが、統一の價値はそれだけにはとどまらない。あらゆる功利的見地から考へて、また、究竟、無統一は損であり、統一は得だ。統一に內在する目的でなく、統一に外在する目的を達成するための方法としても、無統一は惡であり、統一は質であるのだ。原始的社會即ち部族的社會に於て、なぜ酋長が發生したかといふに、藝術心的英雄崇拜、即ち統一のための統一崇拜もそこには多少あつたが、功利的に酋長を、即ち統一方法を實現しないならば、その部族的社會は、他の部族的社會との鬪爭に於て不利であることを、それが知つたからでも大いにあつた。日本は、半世紀有餘前に、なぜ、封建的割據日本を棄てて、中央集權的民族國家日本に躍進したかといふに、最大原因の一は、さうしないならば、外壓に耐えられないことをそれが知つたこと

にあつた。一とつの自然的社會内、一とつの人爲的社會内に、いはゞ純粹内面的意志の法則的統合が、多少とも、發生し、發達した所以も、多分に功利主義的性質のものであることはいふまでもない。一人の首長の、したがつてかれに依る社會秩序の發生は、純粹にかれ一個の意思と力に原因する現象であつて、その部族的社會の必要には、すくなくとも功利的必要には全然無關係的に、あるひは全然反對的になされたものだと理解される場合は、すくなくとも明明的意思に於ては、歴史になかつたにきまつてゐるが、これは、知られた事實からの推論としてよりも、事自身の性質に對する考察からしてすでに十分に成り立つ推理だ。個人統制が個人にとつて必然及び必要であるが如くに、社會統制は社會にとつて必然及び必要であるのだ。政治は、しかるに、要するに社會統制以外のものではない。

個人に於ける統制が不必要であれば、かれの生活行爲はこれによつて制限される。これと同様に、社會に於ける統制が不必要であれば、その社會の生活行爲はこれによつて制限される。生活行爲が制限されることは、個人としての如くに社會としても、すくなくともその個人なり、社會なりが存在する限りに於ては、その存在そのものの構成要素たる生命によつて否定される。個人統制としての常識、倫理、良心、信仰が、かれ即ちその個人の發達と共に發達するが如くに、社會統制としての政治が、その社會の發達と共に發達することは、その社會が保有する生命的生活本能からの必然理由にほかならない。

私は、上來、統制といふことばと、統一といふことばとを、同義語的に使用したが、勿論、統制は統一の或かたち、あるひは、一の場合にほかならない。只、統制といへば、内部の分裂を條件とした統一であることが比較的に表明されてゐる。けれども、内部の分裂を條件としない統一は、すくなくとも、いな殊に個人の働き、あるひは人間社會の如

き、これ自身またはこれ自體の內容を高度に複雜なものとして持つもの、場合に於ては、全然不可分なる單なる物、卽自然法そのものすらが一大統一であり、單なる物質的自然界そのものすらが一大統一體だが、そこにすら、分類しえられる、分類せらるべき內容的複雜は無限だ。人間法としての統一、人間界としての統一體の世界に、一個獨立の大位置、いな最も代表的な、最も綜合的な位置を占むる個人的統一としての信仰、及び社會的統一としての政治が、相當に發達した統整であるほかないことは容易に承認される。人は、自然から發達した進化的代表位を形成する自然にほかならない。

政治は社會統整だ、いひかへるならば社會經營だ。そして、その社會は、政治の最も代表的な形式、いはば政治そのものについていふ限り、全的社會であることが必要だ。社會も、その場合、それの最も代表的な形式、いはば社會そのものであることが必要なのだ。さらにそして、その統整または經營も、政治そのもの、場合についていふ限り、それの對象相當に全的であることが勿論必要だ。かくして、例へば、村及びそれの統整または經營よりも縣及びそれの統整または經營の方が、縣及びそれの統整または經營よりも國家及びそれの統整または經營の方が、國家及びそれの統整または經營よりも國際乃至人類全社會及びこれの統整または經營の方が、逐次に、一層完全に眞の政治の特徵、要件、對象、方法としての資格を持つ。

勿論、統整といへば、比較的に靜的特徵に於ていちじるしく、經營といへば、比較的に動的特徵に於ていちじるしいといふやうな、兩語間に於ける、多少の殊差は考へられる。しかしながら、統整といふことばを、單に原則の確立に限らず、それの運用にまで延ばし擴げ、經營といふことばを、單に原則の運用に限らず、それの、その原則の、確立にまで深め及ぼして使用すること、理解することは、決して困難ではない。私は、以上に於て、この兩語を、かかる同義語として使用した。

ただ、[illegible]、[illegible]、もしくは[illegible]を目標とする。政治は政治[illegible]に於てまた目的とする。統一ある政治組織、即ち統制[illegible]政治或ひは政治的統制として理解することは必要だが、それは、即ち政治としての統制組織または統制学では、行政的といふ問題、いな、政治的内容を常に持つ。政治の場合に於ては、対象としての事件も第一に行動的事件だが、方法としての組織または統制を第一に行政的形式に於ての組織または統制だ。例へば政治の内部的一大機能である法律だ、例へば[illegible]との比較に於て、思想よりも行動を問ひ、批判よりも統制を用ひるがごときは、この原則の一発動に外ならない。

イ、それの構成自身

政治は、ここに、政治は、[illegible]するといふた。政治は、實に、社会に与へられる政治にはかたらない。いまは、この政治[illegible]。これに対する制約たる政治を構成すべき政治の地位にある。では、いま、政治の[illegible]は、即ち、政治[illegible]内面に対する[illegible]を、出来るだけ簡明に、しかしながら明に述べたよりは、即ち、[illegible]、また、[illegible]によって、要するに、表現しようとしたよりは、簡明に、述ることに注意しよう。

例へば、[illegible]といふ[illegible]に[illegible]ては、われらは、恐らく、円とは、任意の一點から等距離を保つ一とつの軌[illegible]によって、その一部[illegible]てゐるものだといふ[illegible]へることが出来る。これが円の定義だ、または[illegible]なる[illegible]する。これ[illegible]たいなら[illegible]。例へば[illegible]。すべての点に対して、われらは、それの評価・完[illegible]いはれうる。

政治に於て、いづれにしても、この問題に對したやうな見方を、或る程度にでも、十分に滿足することが出來るならば、出來たならば、それの價値は、いくらかの關係に於て、未だ大にいふことも考へ得られもしない。

私は、政治に對して、現在の私にとつて十分の自信ある概念を構成しうる評價を持つ。

私は、先づ、最も廣い意義に於ての政治を定義づける方法として、評價的に三通りの定義を造る。その第一は、政治は、政治以外の全き社會を、その社會内の或部分が、その部分自身のために、統一的に整理し且つ經營することだ、といふにある。その第二は、政治は、政治以外の全き社會を、その社會内の或部分が、その社會全體のために、統一的に整理し且つ經營することだ、といふにある。そして、その第三は、政治は、政治以外の全き社會を、その全き社會自身が、したがつて勿論その全き社會自身のために、統一的に整理し且つ經營することだ、といふにある。

この第一は、即ち、政治は、一とつの社會内の或限られたる部分が、その部分自身のためを、唯一または主要目的として、あるひは條件として、その社會全體を統整し、經營することだ、といふ定義は、動機に於て、あるひは動機そのものに於てすでに、多少私的な政治、したがつて、その意味に於ての專制政治の各種形を定義する資格に於て十分だ。

この場合、その「或限られたる部分」は單なる一人でもありうる。いはゆる暴君政治、個人主義的または利己主義的性質の獨裁政治はこれに恰當する。それが單なる一人ではなく、或少數者である場合にもありうる。いはゆる寡頭專政がこれに恰當する。それはまた、藩閥であることもある。官僚、軍閥、貴族、元老等の多少の結合體であることもある。平民宰相を黨首とする絶對多數黨であることもある。それは、一人または少數の富豪を背景とする一團であることもある。それは、いまはむかしのフランスに於けるが如く、僧侶をも一大要素とする社會内の有限部分であることもある。それは有産特權階級であることもある。それが、無産無特權階級であることは、その二つの無が意味する限りの消

械的事情によつて制限されて、またそれによつて自明的、必然的であるが如くに、比較的に不可能な、且つ、社會進歩の法則として、無產無特權階級が政權を、間接または直接に所有する、あるひはむしろ獲得する場合には、社會進歩にとつて一つの最も必要な過程及び方法である社會的再構成化が、その政權の非公化的傾向を多少いちじるしく制限する必然がある。無產無特權階級は、通例、單なる頭數に於て、その社會内の絶對多數であること、またその絶對多數的大團結行動を取りうる外部的事情を割り引きしてあつても、かれらが現在に、間接的にでも、または直接的にならばなほさら。一つの社會に於ける政治的主要勢力たりうる頃には、即ちかれらが政治的社會統治及び經濟の中心的生產者となりうる頃には、その社會の進步的原動力は、要するにかれらの世界に移行してゐるといふ社會的根本現象がある。また、その根本現象が發達してゐない限り、かれらに、政治的主要生命なる位置は、事實的可能として、獲得されない。かれらの多少の努力は、そのまゝでは、成功によつてよりも失敗によつて結果づけられる。

勿論、事實として、一つの社會内の限られたる部分が、その部分自身のためを唯一の動機、意味、目的として、その社會の全體を統治し、經營することと、これい統治形式は、古來絶たなかつた。たゞ、現在の、いかなる時代、いかなる社會なりに於て現存の、政治を分析すれば そこに、さうした要素が多少見つかる。そして、政治の發達または進化の歴史に於て、文明なものでも一とつの政治であればあるほど、この要素が支配的位置、勢力を大きく占めて見つかる。

第一の定義、即ち、政治は、一とつの全體社會を、この社會内の支配部分が、その社會全體のために、統治し、經營する行爲だといふ定義は、いはゆる君主政治、閥族政治、個人政治、貴族即ち公的機關による寡頭政治等の各種形を云ふ。そして第二の定義、即ち、政治は、一とつの全體社會を、その全體社會自身が、いひかへるならばこの社會全體が統治し、經營する行爲だといふ定義は、いはゆる民主制、代表制、責任制、自治制の各種形を、すくなくとも傾向、光

於、反せざる人間理想と現代とに於てのほかでない。

勿論、この第一、第二の定義も、それを実現する、各時に正確にこれを実現する場合には、人間の理想とはまさに反対の状態は、ゐに、持ちえない。しかしながら、政治は、大体に於て、大体の傾向に於て、第一定義の状態に於て甚だいちじるしい状態から、第二定義のそれに於て比較的にいちじるしい状態へ、そして、さらに第三定義のそれへ、移り進む。政治の歴史は、即ち、要するにその移進過程だ。現代の、どの社会に於ける政治も、したがつて、何れも、その移進過程内の或ものだ。

現實の、どの時代、どの社会に於てなりともの現實の、政治を、全体的に観察すれば、一全体として観察すれば、そこには、多少の程度に於て、右に述べた三つの定義に相當する三つの要素なり、性質なり、特徴なりが、必ずある。さうするならば、政治の完全なる定義は、その三つの定義を、意味に於て、實質に於て、したがつて勿論形式に於ても、一とつに統整したものであるほかない。さうした完全定義を構成することは、すでに以上說述しただけの材料を手にした人にとつては、決して困難な事業ではない。

その完全定義は、例へば次ぎのかたちに於ても構成されうる。即ち、政治は、一とつの社会を、社会的實在を、それ自身が、それ自身の意思にしたがつて統整的に経営することを本質的傾向とする。そして、現實的には、その社会内の或限りある部分が、その部分自身のために、その社会全體を統營する意味を、進歩的社会に於ては漸滅的にながら多少常に持つ、及び、同じくその社会内の或限りある部分が、その社会全體のために、その社会全體を統營する意味を、同様の條件に於て多少常に持つ一とつの複雜過程にほかならない、といふかたちに於ても構成されうる。政治の本質的傾向と確認されうるものが、第三定義が代表したかたちに於て存在するがゆゑに、第一、第二の定義が代表した多少の現實的性質は、その本質的傾向が、時代の發達程度、社会の進化程度によつて、これが實現されるために、事情的に取ら

せられる。この意味に於て偶然的な、偏頗を含むものにほかならない。政治の本質的側面そのものからいへば、その

ふたつの性質は、且つ、發達不完全の社會的規範から制限としての、消極的性質のものだ。消極的性質のものではある

が、その發達不完全の社會がなほかつ政治を可能にするため、且つためには、その消極的性質に場所を與へないこ

とはできないのだ。その意味に於て、その消極的性質は、必要なものでさへある。かくして例へば、酋長令族時代に於て

は、その社會は、酋長を持つことによらないでは、その社會の統一を保つことができないだけの隔間をしかもたなかつた。

政治が、社會統制としての政治が、比較的に、利己的、利私的狀態から、利他的、公益的狀態へ、多少偶然なた

ち場を保持しながら移り、次第に、純粋に利己と利他と、私益と公益と、致した狀態へ移り進む過程は、人間性の、し

たがつて社會心理の、機械的あるひは合理的必然だ。

普選に依る自治制、それを條件とした自治制は、政治の形式として、いふところの利己と利他と、私益と公益との一

致した第一則的形式、合理的形式の、無限の將來に於ける第一歩と目される。

どうしてかといふに、そこには、すくなくとも一人一票が、原則としては、承認されてゐる。原則として、理想とし

て、一人一票が確定されてゐることは、公事に與する各人の利益が平等に公認されたことに相當する。意味に於てそ

れが望ましい。

人間は、本來、そして、いつまでたつても、多少利己的であることに由來してゐる。人間に於ける多少の利己性を假定

し、原則としたち場からしては、社會を形成する要素たる人間關係の統制は出來やうはない。

さうするならば、社會の各員に政權を分與することは、たとへ、かりに、動機に於ては、その各員が、いかに利己

的一あるを假定してさへも、なほかつ、與へられた結果を分析すれば、そこに、比較的多數の協同的、近似的、一致的

意思が發見されることを意味する。どうしてかといふに、投票する各人の心理は、どんなに公的であらうとも、直前の場合に於ては、問題自身が常に公的だ。例へば、國防を增すか、現狀維持にするか、減少するかといふ問題は、一つの政治問題たりうる。そして、それを增すこと、現狀維持にすること、減少することの三案のうちの、どれに賛成しやうが、反對しやうが、どれを主張しやうが、否認しやうが、案そのものが公的性質のものであるがゆゑに、結果に於ては、決して、さうする當人だけの利害をばそれは意味しない。その當人及び他の全社會の利害が、結果としては、結果的意義としては、必然それに含まれ、帶ばれてゐる。

即ち、自治制を形式とする政治に於ては、その社會の各員は、必ずしも公意に燃え、私利に無頓着であることを絕對的、最低限的條件とはせずにすむ。

絕對專制政治には僞善はない、あるひはすくない。しかし、それだけ政治の本質的傾向の實現もそこにはすくない。即ち、公事が公營されるといふ意味がそこには缺乏してゐる。公意的專制政治には、すくなくとも僞善の質に於てなりとも、比較的に公事的關心がある。もしも、全社會の手に依る、しかも、各人が私意を極度にすくなく、公意を極度に十分に持つた自治的政治が、多少とも可能であるとするならば、政治の進步は、その可能を完全に實現する方途にむかつてなされるほかない。その可能が多少あることはたしかだ。したがつてそれを實現するための意識的努力が必要であることもたしかだ。しかし、われらは、その可能のみに依賴すべきでも、沈溺すべきでも、そして、それだけによつて滿足すべきでも、それ以外を斷念すべきでも、政治的社會人の立ち場からしていふ限り、決してない。

先ず參政權を出來るだけ擴張せよ、それの社會に於ける分配範圍を擴張せよ、參政能力の、實質的參政能力の有無を條件として、それの確實存在を條件として、さうせよ。さうすることによつて、すくなくとも社會人の各個の私意に、

公的…に関する法律的決定の総合と見へよ。一私的人としての各人の私利が、全社会の在りかた、即ち統制されたたと目的的関係、相互作用的関係、因果的関係を有すると、かれ自身が許容しうる限りに於て、さうするならば、かれは一個の自由人になる。かれは、その機能を使用しうる位置に立つ。政治は公事だから、用意ただ社会に公益をもつてこれに当たるに、これを取扱ふに適したことは勿論ないが、その公益の発生は、即ちいはば政治道徳の教育は、公私と私利との関係を、各人の自己の選択可能な範囲内に取り入れられるにでなければ、個人と反対の十分なる発言の機会を賦くがゆゑに、市民がそれだけ制限されるほかない。

勿論、単なる一人一票を前提とする投票制、またそれを基礎とする代表制が、必ずしも完全なる自治制の、したがつてまた代表制のありかたではない。例へばヨーロッパにも確立した如く、一人にして、多数の、多少相互に独立した政治問題の両面的、及び合目的関係者たりうる。現代の発達した時代においては、むしろこのことが普通だ。例へば、一人にして、同時に、国防に関する政治意思を持ち、教育に関するそれをも持ち、外交に関するそれをも、税制に関するそれをも、交通に関するそれをも持つことが自然的であるやうになつた。さてこれを選択代表すべき人について考へても、一人にして、その一国の、あるいは単一の選挙区によつて代表されるものの一国の、輿論の現在に於けるすべての有権者の政治意思を、政治的要求を、必ずしも自律的に、代表しうるだけの範囲に存するとは限らない。むしろ、さうでない場合が例外たるを常とするにしたがつて。しかし、この事情はいよいよ拡大するさうするならば、政治の世界に於ては、投票する位置に立つ各一人も、必ずしも一票の持ちでなし、行使権の有名でさへあれば、かれの政治的自治の目的を達するための部分的統制が行はれたのだとはいへない。即ち独立した政治意思が存する、併存するためには数においても、投票は、一人の投票数が、それぞれ政治意思の範囲がその一人にある場合には、

自[illegible]に對されたる[illegible]投票が、[illegible]、その[illegible]とたる[illegible]場合に、それに照應して、投[illegible]れ補者についていふても、現在の政治意思の、國民または選擧權民が有するそれの、どれだけを率ひきまたは[illegible]として引き受けて代議するといふ制限意識と、責任意識とが、強制され且つ保護される制度的設備があることが妥當だといふことになる。さうでないならば、代議も、實力以上の責任を、たゞ名義上、形式上、代表するかたちの無責任物となり、投票も、限定された明確なる意思をもつて、明確なる目的にむかつて、なされないといふかたちに於て、共だふれになるほかない。その可能が多少あることをまぬがれない。現在の代議制が、すでにその可能を多少現實にしてゐる。

しかしながら、かくの如き事情的必要からして、當然期待される一人多票制、それを條件として改正される候補者の資格條件等は、現存の一人一票的原則が、進化的に分裂し行くにしたがつて、自然に要求もされ、實現もされる關係のものとして、ここでは、しばらく、それの現實的必要及び可能に對する集中的考察をば縱せて置く。

一人多票制よりも急な時務が、政治的自治及び責任を完成する目的から見て、われらの眼前に橫たはる。それは、社會的生産別、社會的消費別、社會的意思別、社會的地域別等の各、それの複合形及び單獨形の現實及び可能にしたがつて一とつの社會が分類され、さうして分類された各が適當に組織された一團を形成し、その形成された各團が政治的意思表示及び遂行の機會と方法を具體的に發達させべきだといふことだ。政治的自治とは、そも〳〵、政治の生産者が、それの消費者である關係にほかならない。立法、豫算、行政、司法等のあらゆる政治行動の生産者が、即ちそれの消費者であるといふ關係が、完全である狀態が、政治的完全自治だ。これを他の一端から云ふならば、政治の消費者は、必ずその政治の生産者であるといふ關係が、政治的自治の目標形式だ。そして、すくなくとも現代の實情として、その政治的生産者と政治的消費者とは、勿論、根柢に於ては、個人的であるほかないにきまつてゐるが、さらにその個人的政治生

守も、個人の政治活動も、種々の内容的分類をゆるす複雑なものであるを通則とするが、なほかつ、それは、社会的生産、消費、信仰、地域等の世界に於ける内容的傾向、性別、[illegible]並に[illegible]分化関係を持つ事實だ。それゆゑに、現代に於て、政治的自治、即ち政治的生産者と政治的消費者との間なる對立、闘爭、[illegible]を除去した状態、両者の一致提携を可能ならしめるための最大要務としては、社会的生産層、消費層、信仰層、地域層等の世界に於ける内容的判断を意味する組織[illegible]を単位として見たかたちの政治的自治を發達させるほかない。

自治制としての一人一票制は各人專制を意味する。原始的及び發達的獨裁政治は一人專制を意味した。原始的及び發達的寡頭政治は少数專制を意味した。原始的及び發達的階級政治はそれとの比較に於ては多数專制を意味した。徹底した古代[illegible]制、自由自治制は、この関係に於ては、各人專制を意味する。各人が社会の構成単位であると同時に存在し得た。各人がかれの消費するところの政治の生産者で自身であり、かれの生産する限りの政治の消費者で自身あるならば、その社会こそは、真に政治的自治の行はれつゝある社会だといはねばならん。ただ、しかしながら、政治は、其自身の形式さ[illegible]たるほかないが故に、各人專制も、政治の場合に於ては、それが政治の世界に於ける各人專制である場合に於ては、專制の形式を必要とする。さうしないならばそれは決して成り立たない。成功しない。現代に於て、それは各人專制を[illegible]するためか、事件中の[illegible]には、したがるに、前者の如き内容的統治内閣、即も、生産、消費、信仰、地域等に於ける各自的な[illegible]制度を、[illegible]的組織たらしめて、政治的に[illegible]した、したがつてこの[illegible]組織たる[illegible]を単位として、それに似る、それを基礎としたかたちの專制であるほかない。

この[illegible]に置いて見ることが、この一文の目的の一大部分であるのだが、これを述べる前に、なぜ私が、[illegible]ようになつて、政府は、政府側から[illegible]、この政府の[illegible]または全部が、国民

[illegible]

いふ結果を附したるを、説明して置きたいと考へる。

政治は、例へば経済や恋愛または性本能との比較に於て、それ自身の存在理由をすくなく持つ。最もすくなく、しかも……て食を欲する、そしてその食慾を満足させるために必要な、同時に可能な方法を人は取る。かくして、関係に於ては人の性だといへる。性本能の場合もこれに比される。学問、芸術、教育、道徳、宗教、これらはいづれも、それぞれのかたちに於て、食や色と似た独自価値を持つ。学問の場合に於ては知識慾や知的形式に於ての好奇本能があり、芸術の場合に於ては美本能があり、教育や、道徳や、宗教の場合に於ても、内的必然、それ自身に固有の必要と見られる性質が比較的に、即ち政治との比較に於て、顕著に認取されるやうに、大きな位置を占めてゐる。

政治は、しかるに、勿論根柢に於てそれ自身の興味、価値、目的と見られる性質を持つてはゐるが、なほかつ、文化全に於ける政治以外の諸内容、諸要素、諸機能との比較に於ては、独自の価値によつて代表されるよりも、それらのものに対する助成的手段価としての価値によつて代表される。政治は、即ち、いはばそれの内在価によつてよりも、それの人間的、社会的、文化的外在価によつて、それ自身の価値を構成され、決定され、維持される。

経済、性本能、学、芸、教育、道徳、宗教等は、政治から見ると与件だ。且つ目的物だ。それらの事実が先づあり、しかも、それらのものは、それが一とつの社会内の事実であるがゆゑに、それぞれに或社会的事実としての意義及び関係を必然有するがゆゑに、もしもそれらのもののすべてのあひだのすべての関係が積極的に統制されないならば、それらのもの自身がそれだけ消極的に存在、成長、実現を制限されるほかない。各種形式に於ての浪費、破壊、絶望等が、それを原因としてそこに成り立つ必然がある。関係範囲全体に対する適当の統制なきために、各部分自身の不自由が成

り立つ。例へば交通の世界に統禦がなかつたならば、發達してゐなかつたならば、汽車はどこで停車してしまふかも知れんし、どこで向ふからくる汽車と衝突するかも知れんし、發着の時間のあてなどてんで成り立たない。かくては、各種旅行慾が不成功に終はる。これと同じ様な關係が、經濟的各種人間生活、文化事實と政治との間にはあるのだ。

政治と政治以外の社會、文化、生活との關係は、それゆゑに、中間的だ。中間機能的だ。先づ政治以外のそれらがなければ、政治は始まりやうもなければ、始めがひもない。しかし、同時に、先づ政治が、發生し、發達しないならば、それらの政治以外の各要素は、十分に發達することはできない。即ち、政治は、政治以外の人間生活との比較に於て、一とつの派生物であると同時に一とつの手段事だ。現實以下の人間生活にとつてはそれは結果であり、現實以上の人間生活にとつてはそれは手段であるのだ。

政治自身が、一とつの究竟的實在である。または價値であると考想するにもました不適當見はない。したがつて、政治組織も、政治家も、即ち一切の政治的行動及び思索は、先驗的、超越的、絶對命令的などの性質をばゆるさるべき位置物でない。

いはゆる政治的專制の各種形は、多少ともその位置物に對する誤認に依ることをも意味する。

政治は、實に、多少經驗的意味に於て、空間的にも、時間的にも、一とつの中間物であるのだ。空間的にとは、一とつの社會内に於ける一種生活と他種生活との間を、統禦としての政治は、關心事とするといふ意味に於てだ。時間的にとは、具體的、限局的、現實的生活事實がまづあつて、しかるのちにそれらのものに、外部から助成を與へるものが政治であり、それらのものは、その助成をまづ待つこと、與へられることによつて、補いて、それらのもの自身の構成を、完全に實現することができるといふ意味に於てだ。

三　階級の實在及び階級意識の可能

私は、さきに、社會的生産別、消費別、意思別、地域別等を、それらが實質的に存在する限り、區別して、その各を組織すること、そして一團體または一結社のかたちに形成することの現代政治的必要を力言した。

現代の事實として、しかるに、その區別は、階級の存在を、一とつの大きな現實として發見させる。勿論、そこには、職業別も一とつの比較的に常住的な現實として發見されるし、また、殊に地域別を第一條件として、民族別といつたやうな、巨大なる、最も巨大なる一とつの現實も發見されるが、社會的生産別、消費別といふ範疇から見て、最も代表的な位置を形成してゐるものは階級だ。

階級とは、そも／＼、なにか。先づこの問ひを設け、そしてそれに答へることは、この一文の目的からしても有用だ。

階級は必ずしも職業を意味しない。特殊の職業や一定の職業をばなほさら必ずしも意味しない。階級の本質的構成要素は職業ではない。例へば、わが封建時代に士農工商の階級があつたが、現代のわが社會には、その順位に於ける、その通りの階級別は、もはやない。また例へば、古代ギリシヤや、中世に於て、下層階級に位した工匠群が、近代の初期に於ては、いちじるしく上進した。勞働者が現在のロシヤに於ては、決して十年前までの同じ社會に於けると同位の階級をば代表してゐない。即ち、一定の職業が一定の階級を常に意味するといふ關係はないのだ。

地域や種族が、したがつて民族や人種や部族やが、また決して階級と固定的一致關係を有するものでないことは、戰爭によつて、勝てばきのふまでの被支配的位置にあつたそれらが、けふは支配的位置を代表するものとなり、負くれば

きのふまで支配的上位にあつたそれらが、けふは被支配的位置に代へらるものとなつた。古來の數へ切れぬ事實によつても明示されてゐる。

しからば階級はなにか。それの本質的構成要素はなにか。それの代表的特徴はなにか。それに於けるそれ自身的。内在的。必然的要素または性質はなにか。それは。社會的自由に於ける。それの分有に於ける。或ひは。大小。厚薄の別にほかならないと私は考へる。

人によつて。自由よりもたつといものはない。いふまでもない所だ。自由とは。そもそも。選擇の可能を意味するものにほかならないからだ。人についていふならば。かれの。自身及び世界の。作りかたを。かれの意思にしたがつて選擇する。そのかたちに於て決定する。あるひは支配すること。これが即ちかれの自由だ。自由とは。喚んで字の通り。存在の原因を自己に持つことだ。ただ。人の場合に於ては。かれの存在は一とつの意思としての存在を結局意味するものであるがゆゑに。しかるに意思は選擇と創造そのものであるがゆゑに。人が選ぶ可能と。人が自己に原因を十分に持つた作りかたとは。究竟に同一事實を意味する。自己表現にほかならない。

人の自由の世界には。命令。強制に。あるひは主として。自然によつて條件づけられる性質のものがある。例へば。人としては。食餌や大氣を要求する或ひはいかなる限られたる程度以上にも欲したい意思を。それが用ゐさへすれば。持ちえないではないが。その場合の可能的不自由は。自然科學の。人間が現に作用しうる。使用しうる。自然的限りの世界に於ける不自由を。第一に意味するものだ。人の自由の世界には。しかるに。主として人間によつて。人為によつて。したがつて人為によつて條件づけられる種類のものがある。制度。習慣。社會組織等が意味する限りの自由及び不自由は。この種類の自由及び不自由を代表する。

すると、社會的自由と稱しえられるものは、人の自由の制限にはよるのだ。そして、その社會的自由の或は、すべてでないまでも、すくなくとも或大部分は、一とつの時代的範囲を任意に選んで見る限り、それの絶對量または總額、全額とも呼ぶことのできる有限を示す。そして、これらの社會的有限自由が關する限り、それが、いかにその社會員のすべてに分配されるかは、相當に道徳的、社會意識的關心事たらざるをえない。殊に、その分配されかたが、多少とも厚薄別を顯著にしてゐる時には、その厚く分配されてゐる人々のがはから、その人々の數、力、組織、及びその薄く分配されてゐる理由に對する道徳的自覺、勿論その理由に於ける社會不正的要素の存在に對する認識としてのそれ、等の程度、現實的及び可能的發達程度に應じて、現狀改善の衝動と意思と努力と運動とが發達せずにはすまない。階級意識は、これの一形にほかならない。

この機會に於て自然に注意されるが、階級と階級意識とは必ずしも同一物ではない。階級が現實であつても階級意識は現實でない場合はいくらでもありうる。心理及び事理、社會的心理及び社會的事理から考へても容易にそれは理解される事柄だが、歴史が第一にその證據を滿載してゐるともいひえられるほどに豐富に示す。例へばわが封建時代に於ける農工商もそれであつた。現代の婦女も或程度までそれだ。現代の多くの社會に於ける政治的國民、經濟的社會人もまた或程度まで確實にそれだ。一言にして、滿足してゐる奴隷、感激の念にむしろ支配されてゐる奴隷、無自覺の奴隷は、すべてこの範疇に屬する。

有限的社會自由の分配に於ける、社會的分配に於ける厚薄別、有無別が、その社會に於ける多少顯著な、或程度以上に顯著な層位別を形成してゐる時に、われらは、そこにそれだけの階級があると適當にいひうる。

有限的社會自由の社會的分配に於ける厚薄別、有無別は、すくなくとも一側面的事實としては、その厚と有には、その

商品交換を條件とし、方法とみなしてあるといふ關係を必ず持つ。例へば、金錢はそれだけの財貨的自由を意味する一種物にほかならないが、一とつの財貨に於て、或人々がこれを自由に持つことは、殘りの人々がそれを逆比的にすくなく持つことを必然的條件とする。商品及び生活場としての土地もそれだけの財貨的自由を意味しうる一種物だが、この場合にも、その財貨内に於ける或人々がこれを多く所有することは、殘りの人々がそれをしたがつて少く所有することを必然的條件とする。

かくの如くにして、有限的財貨自由に關する限り、それの財貨的分配に於ける階級關係は、また個別に、一とつの直接の物品に於ける個人の階級關係に似た關係を示す。その關係の事情はたとひどんなに複雜なものであらうとも、その關係だけは、常識に理解されうる事實だ。

現代に産業革命が必要だといへる所以にある。それは、産業革命の目的にあるとはいへ、すこし永い眼から見れば、いはれうる根據にある。産業革命は、勿論、商品世界に於ける財貨的大激増を、それの一面的意義とする。産業革命によつて、それの結果として、財貨に於ける、すくなくとも産業革命以前に比した財貨に於ける、商品・財貨は激增した。商品は、しかるに、これを消費する作用する、それが多からければ、或財貨的自由を勿論意味する商品の有害によつて、大小によつて、人は、商品の分量を欲望の滿足を、或程度まで無制限にされ、大小になる。そして、商品の目的は、存在理由は、いふまでもなく、それの作用によつて代表されず、それの消費によつて代表される。商品の主なる生産過程は、決して經濟的生産過程に於ける如き、必然的な滿足をば伴なはない。例へば、商品を生産すること自身には、樂よりもむしろ苦しみの方が恐らくは多い。いな、それは、確實に多いに相違ない。しかしながら、商品を消費することと、その上を、例へば浪費することとは、それ自分にも一とつの完成したものであり、快樂であると見られる要素をいちじるしく持つ。

また、一方、それが一度に唯一回、消費するものであるが、また一方では、それの消費は、或るによって、ある程度の
蓄積的に意味するのとどうしてかといふに、消費を目的としてつくられることもあるため、分配されたがために、その分配を受けた人は、消費する社會的自由を持つ。

その富の分配が、しかるに、産業革命以來の社會に於ては、新たなる、そして著大なる厚薄別、有無別を示すかたちに於て發達した。さらにしかるに、その富の厚的、有的分配を受くるものは、數に於てその社會内の少數者であり、質に於て必ずしもその富の生產に實質的に從事しないものであり、反對に、その富の薄的、無的分配を受くるものは、數に於てその社會内の多數者、大多數者であり、質に於て確實にその富の生產に或實質的努力を寄與するものであるといふ事情が、その發達と共に發達した。多數者はすくなくともいはゆる筋勞を拂ひ、そして甚だ薄く酬ゐられ、少數者は多くともいはゆる株を持つに過ぎず、そして甚だ厚く配當されるといつたやうな新事實が、いく多の特殊形に於て次第にます／＼發達した。いはゆる資本主義が發達した。

富の單なる生產過程にも、多少の人間的快樂と幸福とが伴なはないでは必ずしもない。例へば企業、組織、經營、それからまた科學や技術の如きには、生產過程に於けるそれらの部分には、資本主義經濟組織に於て、多少の、あるひは甚深、甚大の人生的快と幸とが必然伴ふ。しかしながら、これらは、殊にも企業、組織、及び生產業に於ける幹根的經營の如きは、いはゆる大株主の特權とも概稱されるかたちに於て、富の分配の厚き人々のみに許與される、かれら特有の、獨占の機會たる事情を、資本主義の發達と共に、むしろそれの發達の第一特徴として、無制限的に助長した。

幸福や、快樂は、自由の一形にほかならない。こゝに或要求があり、欲望があり、そしてそれが滿足させられることは、その要求なり、欲望なりの持ちぬしたる人が、かれの作りかたを、その要求なり、欲望なりが意味する限りの自然

的傾向に永存することであつて、この自然的傾向は、しかるに、勿論資産の選擇または意思的爭鬪にほかならない。

富の社會的機能は前時代に入つて、即ち資本革命以來激增した。即ち、富が意味する限りの自由の社會的機能は激增した。その自由は、しかるに、その社會に於ける大多數者の消費的功能としての意味をば、たとへ例へば單なる消防費する限りに於てのみとも、同時に、これが生產されるための成本質的必要部分としての、その部分の構成としてのみかるに於て、むつ。しかしたなら、前にした通り、富の人生に於ける代表的價值は、それの消費にある。しかるに、資本主義經濟組織における、即ち資本革命以來の代表的經濟組織における大多數生產者に、消費的機會をば少しも決定されてゐない。前代と比し、ほとんどいちじるしくこれも增したことにたしかなに、殘りの少數者との比較に於ては、これは決して一般化されてゐない。かくの如くにして、資本革命以來、資本主義の發達と共に、生產的手段を所有する、いはば富たる生產階級とも稱すべきものが社會内に、資本的社會内に、またこれを中心として廣く社會一般内に、一部の階層に於て、大規模に發達した。

そして、同時に於て、比較的少數者の所有ならしめる、いはばいたる消費階級とも稱すべきものが、これを中心として、消費を主な方法として、同時にこれと共に發達した。

消費をこれと決し、條件として始めて存される限りの自由の單なる生產階級とも稱ばれうべきものと共、それの單なる消費階級とも呼ばれてきものとた、即ち、資本的、獨占的時代には、對極的、兩端的に發達したのだ。

生きものいはば所有者たる、即ち消費に於て、經濟に於て、組織に於て、同時に於て、比較に於て、いよいよ完全に生產自らを、大規模的組織をさへ與へられれば、なしうるやうになり、即ち生產の能力の完全所有者、高度所有者となるに至つた。そして、同時に於て、これと並行して、消費の少數者は、必ずしも生產に必要な能力、組織、經濟

[illegible]

大し來たるにしたがつて、[illegible]との數はますます[illegible]になくなつてきた

富そのものは、本來、それが消費されることにこそ價値あるものであるがゆゑに、富の生産者では常にあるに、それの消費者では決してないとも形容しえられるやうな部分が社會内に大きく發達し、同時に、それとならんて、富の消費者では常にあるが、それの生産者では決してないとも形容しえられるやうな部分が、それも質的に於て前者よりは遙かに劣つて、同じ社會内に發達すれば、その生産無消費的大多數者のがはからして、目的なき生産に對する自覺が發生し、發達してくることは、早晩必至であるにきまつてゐた。即ち、生産階級の方からして、階級意識が、新階級意識が發生し、發達する確實可能が、資本主義經濟組織には最初から内在してゐた。

大多數者は、單なる筋勞程度の生産實力ほか持たず、少數者は、企業實力、組織、經營の實力等を主として持つたあひだは、全社會的必要から考へて、資本主義經濟組織に存在理由が比較的に具足してゐた。しかし、要點が次第に實力の有無を遠ざかつて、制度、慣習が與ふる、あるひは拒む、單なる機會の有無に移り行くにしたがつて、經濟組織の現實態が、それの當在態を、その機會を拒まれてゐる階級を主體としたかたちに於ての當在態を、その階級の自覺を方法として發達させた。

勿論、最初の發唱的位置に立つたものはその階級ではなかつた。その階級の他極階級、即ち機會享樂的階級ではそれはなほさらなかつた。前者は卑屈的習性ゆゑに、後者は利己的、專制的習性ゆゑに、前述の如き意味に於ての階級意識の先覺者たる自然的便宜に缺けてゐた。その發唱者は、かくして勿論、社會に於ける抽象特能的、抽象職業的特殊層であつた。思想家、學者、批評家の散在群であつた。

この搾取的関係及び関係は、富の生産及び消費に関する限り。そのいづれの階級にも明確に結びつけられてはゐなかつた。かれらの或ものは決して貧者ではなかつた。かれらの多くは決して富者ではなかつたが。必ずしも生産労働者ほどに貧一はなかつた。いづれにしても。しかしながら。かれらの主要関心事は、即ちかれらの主觀的現實は。自己の富裕、無り存在には存しなかつた。かれらは、現實の経済的階級のそとなる搾取階級であつて、その立ち場からして。かれらは、現實の経済的階級を自由に制御し。より高き社會形態を自由に構想した。しかし、そのより高き社會形態は。種々の事情によつて。無産勤労階級のために社會的自由を獲得せんと意思する立ち場から構想されたに等しいものであつた。その種々の事情中の最も代表的なものは。勿論。既成両階級のいづれの習性的支配からも比較的に解放されてゐるかれらの。純粋思索的及び純粋理想的なかれら特殊階級者の立ち場からしては。既成の社會的現實に對して未發達の社會的現實を發達させ。さうすることによつて社會的新結合を實現することが。最も發展可理的だといふ一事情であつた。道徳が生活の綜合的保存原則だが。その道徳の合理を。階級的習性からあまりに手近く強化。抑制されずに。自由に現實に。現實の社會に。要望し。發展しうる特殊的及び個人的条件を具備してゐるものとしては。社會の進化的生命のために。それの現階的経済のために不断の社會的可成を明開することが極めて自然であると同時に極めて當然だ。社會に於ける搾取階級の存在理由は。自然的にも。當然的にも。第一にここにあると見られる。かくして。階級意識の政治的發明者は。その階級の直接関係に生活する高階的な分化なる知的及び道徳的自己主張のかたちに於て特徴づけられる性質のものであつた。そして。これは。歴史上にあらはれた他のすべての階級意識の發動の場合に於てもさうであつた通りに。最近代の生産経済的なそれの場合に於てもさうであつた。

現代の階級的事實としては。資本主義の直接的結果としての意義を最も多く有する労資別的無産有産別な内容と

する階級分だ。すくなくとも産業發達國に於ては、したがつてわが國に於ても、其の代表的なものとしてのところには、勞資別的階級別たる疑ふ餘地もない。勿論、わが國には、地主對小作人階級別がある。そして、これは、いく多の點に於て資本制的階級別とは區別されべき性質及び事情のものであることも明白だ。わが國の農業は、例へばアメリカのそれあたりにくらべれば、産業革命以前の形態をいちじるしく保存してゐる。科學と機械が、そこには貧小なる機會を與へられてゐるに過ぎない。また殊に金融關係からいふても、そこには株式組織は、發達しやうもないと同時に發達してはゐない。銀行といへども、商工業に集中してゐる。そして、現代の、すくなくともわが國の現代の商は、工場生産品の販賣及び小賣を主として意味するものにすでに十分になつてゐるがゆゑに、それは工業の消費過程へむかつての直接延長にほかならない。工業的生産の社會的直接進展としての分配を意味するものにそれはほかならない。これら及びその他のいく多の關係に於て、わが國の地主對小作人階級別は直ちにこれを勞資別的階級別の世界内のものとには見られない。しかしながら、なほかつ、最近わが國の社會に發達し來たつた地主對小作人階級別の間なる、勿論その小作人階級のがはから現はれ來たる。階級意識そのものは、事實として、勞資別的階級別の世界に於ける勞働階級がはから、それを中心とした多少もつと廣い社會部分から、發達し來たつた階級意識によつて誘發されたものであることは疑ふ餘地がない。即ち、地主對小作人的階級別は、必ずしもわが國の社會にも行なはれた産業革命そのものの直接産物とは見られないが、地主對小作人的階級別に對する意識、その階級意識そのものは、たしかに産業革命に深く負ふたものだといふ歴史的事情を持つてゐる。

勿論、この事情は、わが國の社會に限らない。例へばロシヤに於ても、農民に、農業勞働階級に階級意識を發生し、發達して見いだしうるためには、近代工業の方法を農業勞働者の世界に發達させることが先要務だと、それをさう見い

だすことを必要と見た人々は既に明暸した。社會進化の一大目的もそこにあつたことは周知の通りだ。

しかし、資本主義そのものは、産業革命の直接發達としての資本主義そのものは、そも〳〵なにを意味するかといふに、それの最も代表的な特徴は極めて簡明にいひ表はされる。それは、勿論、集團主義的生産方法と、個人主義的所有方法との結合物にほかならない。資本主義は實にそれだけのものによるのだ。そこに資本主義の構成自體はあるのだ。したがつて資本主義を分解すれば、それだけの要素。集團主義的生産方法と個人主義的所有方法といふ二要素だけが、他のすべての要素を代表する性格あるものとして見つかるのだ。現代に實存する、最も強大に實存する階級及び階級意識も、したがつて、この關係に於ける生産階級と所有階級の實存及びそれに對する意識以外のものではありえない。これ以外のものでそれがありえないよりも、現代に於ける階級意識は、その階級がそれだ、それを意味するものだといふ明確なる知識によつて作用づけられることを最も必要とする。さうするならば、現代に於ける階級意識の内容は十分なものにも、明確なものにもなつてくるし、さうしないならば、それはかなりに非科學的だといはれるほど不十分な、不明確なものであるほかない。

資本主義の一要素は集團主義的生産方法であり、他の唯一的要素は個人主義的所有方法だといふことにわれわれはいま注意した。事實が極めて明白に、そして確實にこれを示してゐる。現代の富の生産過程を見るに、農業生産でなく、工業生産の過程を見るに、これは見まほしからぬほどにも複雜に、極度に集團主義的方法によつてなされる。例へば交通機關にしても、衣類にしても、新聞紙にしても、それが社會によつて使用される。即ち消費される完成品を實現するまでの生産過程は、容易にはそれを數へ盡すことができないほどの多元から成り立つ。汽車だけについて考へて見ても、石炭採掘、鐵鑛採掘、鐵鋼精錬、原料及び製品の運搬、科學、技術、鐵道使用及びそれの統制、その経營の要素

として經營。また、人々、[illegible]
ては、鐵道は主として國有。國營だから、その點に於て[illegible]。[illegible]に、ほとんど任意に他の工業生産を選んで考察するならば、その生産の過程に於ける多くには、[illegible]のものであることはすぐに發見される。例へば營利的一物産會社を、あるひはいふなる、相當にその名をあらはすほどの、會社なり工場なりを、それの生産過程の全域にしたがつて考察するならば、ほとんど無限ともいふべきを見出されよう。

その多元が、しかるに、要するに組織されてゐる。さうでないならば、生産は不可能だ。それは、ちやうど、一とつの機械そのものに似てゐる。一とつの極めて複雜にして大規模な機械そのものに似てゐる。それの各部が、驚くべく多元的な各部が、機械的に統禦されてゐないならば、その機械全體の運轉が不可能であるに似てゐる。

現代の工業生産が意味する富の生産方法は、即ち、比較的に數の知れた、及び知れない多數の人々の組織的集團的勞力を條件とするものだと判斷される。しかるに、さうして生産される富の所有方法はどうあるかといふに、それは、要するに個人主義的だ。その一契機には、資本主義經濟組織においては、個人または少數個人が、その社會内の、ほとんどいかなる巨額の富をも所有しうる自由を、制度的には拒否されてゐない。そして、現に、世界の富豪だとか、一國の財界の雄だとか、適當にいはれるものが、確實に成り立つてゐる。億を單位として見積もられる巨額の富の所有者さへも、個人の名に於てそこにはある。千萬單位、百萬單位の巨額富の所有個人はなほさらある。他面に於て、同じ社會内に、百萬長者の百分の一以下遙かに細なる富の所有者、一言にして無産者がいかに絶對多數であることか。

そして、その少數個人は、いかなる社會價値あるかたちに於ても、はたらく必要を必ずしも持たず、その大多數個人は、はたらく必要を必ず持つ。いひふるされたことではあるが、産を興こした最初の個人、いはゆる富者の初代者は、

もとの形では、この制度を必要とする。しかしまた[illegible]ない不可抗力の持ち主[illegible]し、人格的[illegible]し一であつたに
用[illegible]たい。かれらが[illegible]事件は、[illegible]、[illegible]的に[illegible]される。しかしながら、この[illegible]個人に
すつては、必ずしも全部力の持ち主しではない。[illegible]の[illegible]目的とする[illegible]。かれらにはこの必要もない。かくし
て、かれらの多くは、[illegible]に於て、[illegible]に於て、[illegible]上行為に於て、[illegible]に[illegible]な[illegible]的[illegible]の奴隷となつて行く
ことは、[illegible]自然な[illegible]行はれ。[illegible]まで[illegible]した。したがつてまた[illegible]られ、[illegible]の[illegible]す
くなくされた時代に於ては、かくして、[illegible]
以下はこれの一個[illegible]なる[illegible]。[illegible]ものは、[illegible]として、発達した。[illegible]なる
お[illegible]になし[illegible]えられる[illegible]に依る[illegible]。また[illegible]に依る。[illegible]に[illegible]力ある
[illegible]には多数個人の[illegible]。[illegible]の[illegible]た。
制度として。[illegible]に[illegible]たものであることは、[illegible]なる人間性の、[illegible]のみならずへても、容易に理解される。いはんや、
この[illegible]多数者が、[illegible]としての[illegible]に[illegible]するに及んでは、この制度の[illegible]
は[illegible]ない。

しかるに、ここにも、いはば[illegible]して、[illegible]には、[illegible]内の少数者に[illegible]、いかた
る[illegible]の[illegible]。[illegible]の多数者に。[illegible]、いかなる[illegible]の[illegible]を[illegible]した多数者
は、新たに[illegible]この[illegible]。[illegible]に、[illegible]代に[illegible]たにさかえなかつた[illegible]
まで、[illegible]、[illegible]、[illegible]の[illegible]へられ[illegible]的[illegible]は、実に、[illegible]
として[illegible]たのであつた[illegible]のものに内存したこの[illegible]内に、しかかつて[illegible]の[illegible]

史の發端からして、資本主義の完全的發達と、資本主義否定の潮勢的發達とは、兩立してゐたのであつた。たゞ、兩者は同時に顯現することは勿論出來ない。大多數生產群が、生產實力も熟し、闘爭の方法をも確立するに及んで、そして、他面に於て、少數有產群が、生產實力に於て低下し、單なる消費群に墮落し來たるにしたがつて、生產方法と所有方法との間なる根本的不合理が、その生產實力群によつて深烈に意識されて來た。きのふまでは、忍びえられる、忍ぶほかない現實であつたものが、戰鬪力も出來、社會が必要とするものを生產するといふ自群の社會價に對する良心の自信も出來、道德の根本則から考へても、富の根本目的、根本的存在理由から考へても、生產すれども所有せず、生產せざれども所有するといふ兩階級の存在は、不都合だといふ義憤も出來たけふとなつては、忍びえられない、忍ぶ必要なき現實として改釋されるほかなくなつた。現代的階級意識はかくして發生、發達した。

所有は、なに人にとつても、無關心事ではあり得ない。どうしてかといふに、所有とは、使用または消費の自由を意味するものにほかならない。自由は人の本然的理想だが、富の所有即ち使用即ち消費が、或程度まで自己の意思にしたがつて決定され、選擇されてさしつかへないといふ社會からの公認があることは、なに人をしても富を欲求せしめるに十分な事情だ。資本主義社會は、形式に於て、最も外郭的な形式に於ては富の所有權をいかなる個人にも拒否しない。しかしながら、具體的事實としては、例へば相續權的部分に於ても、また例へば相續權のかたちに於て巨大なる原料地を私有することを許容するが如き部分に於ても、また勿論そのほかの算へ切れぬほどの種々形に於て、それは、富の所有權を多くの個人には拒否してゐるに等しい部分的性質を多大に持つてゐる。かりに、鑛山の所有者は、單なる相續的一個人である場合、現代に於て決してありえなくない一とつの場合、を想像して見るならば、所有權と生產方法との間なる社會的不合理は、顯著に映眼し來たることはたしかだ。しかるに、この場合は、むろ通則の一例にすぎない。

[illegible]

て、企業者たることはできないが、それらは大きな流れに於て企業者たることはたしかだ。

現在勞働階級及び小作人階級は、完全に現代の一部の者だとは言へないが、最も代表的な一型の唯一である
ことだけはたしかだ。かれらは、實現なる經濟階級意識にとつても、また現代の政治一般にとつて、反對、淨化、實行、內
社會的意思の自然的形成者たる位置にある。

最近、わが國に於て、工業勞働者及び農業勞働者の世界からして、政治的團體が構成し始められた現象に對しても、
われらは、事後に媚びを賣る意識に於てでなしに、進步の大法が意味する、一大必要件として意味するいはゆる再燃化
の見地からして、それの健全なる發達を、それの將來に希求するほかない。

今社會の自己統帥も、形式的には參政權の普遍的分配によつて可能にされるわけだが、實質的には、現在社會內の或
部分が、比較的に主能的位置を形成する必然がある。政治そのものが常にまた多少の企業的要素を、すくなくとも進步
力ある社會に於ては、有するほかない。ちやうど、維新日本の當初に於ては、薩長土肥等が、その企業者たる位置を自
然に形成したやうにだ。そして、現代に於ては、かれら、なかんづく薩長は、政治的日本の眞の企業者たる位置をば失
うて、それの存在理由を、國家的、社會的存在理由を失うて、わづかに多少の閥として、國家的、社會的存在理由なき
閥として殘存してゐるやうにだ。

目下の日本は、目下の日本相當に、政治的企業者を必要とする。そして、その適任者は、所有によつてよりも生産に
よつて、消費によつてよりも生産によつて、意思としても、實力としても、實行としても、實績としても、特徴づけら
れる社會部分に、その反對の社會部分との比較に於て、存することは、人間性と環境との關係に關する公理的見地から
しても推斷される。

ただ、しかしながら、政治は、全社会のための全体組織が、形態としては常に存続するほかない。それゆゑに、最も高度に発達した場合の形式に於て、特定の階級が、政治の理想的領域に立つて自己を組織するとしても、それは文字通りに理想的領域たる国家共同体となる必要があると同時に、全社会の理想的生活の合目的な、知識、感情、能力を具備した究全形に於て、それらに節制することを切に必要とする。常に、階級意識の底には、それ自身からは生ぜず、それの基礎たる全社会の本能及び意識からのみ生ずる、一時代の社会の最も生ける部分。この社会全体の理想的生命と調和の空中的、結晶的部分。いはばそれの部分。社会の原則をつくるもの。この社会内の諸部分に即して調和であり、他の部分に於て比較的に非調和である時に、この部分が目下のみだ。全社会の正しい利益へ、自己を全体たる意識を持ちつつ、階級意識に於ける社会的意識は、これがさうであるに越したことは疑ひないが。たとひこれがさうでない場合にも、理想的、技術的程度に於ては、常に要求される。階級がさうなることが極めて必要だ。さうでないならば、他のすべての利害関係に上うあらうとも、この階級自身の、ただ一つでこの階級は純粋に合理的な利用は、自然的にも無為的にも、それだけ制限されたものであるほかないことだけは疑はれない。

階級は、階級自身の利益にさへ徹底すれば、全社会の利益にはおのづから徹底する結果を招来するといふ考へは、各人が自己の利益にさへ忠實であれば、全体の利益にはおのづから忠實である結果を招来するといふ自由放任主義の経済組織や、力の均衡主義の国際的原則と同じに、實際的として一度は不安定だ。それが實際的としては不安定であることは、勿論それが論理的として、不安定であることを意味する。徹底的階級利己的徹底であつて何等、全面的徹底でないことをそれを意味する。かかる階級内の理想及び技術としては、それは成立しても、全体の理想としてはそれは成り立たない。しかしながら、理想的、正しい意味に於ての理想は同時代に適用しないすべての理想と技術とは、他のすべての路に

然こはなにごともあらう上も、理想たらう、人ごと[illegible]、といふことは確なものであることだけは争はれない、

知識の世界に於ける哲學に、行動の世界に於て最も相當するものは、しかしながら、政治そのものだ。それ故に、勞働者にしても、經營者にしても、それが公式に政治家として自任する以上、そこには、哲學者が一切を抽象しうる人であらねばならぬ如くに、すべての階級から、社會、從何をあたひする社會を抽象しうる能力の健在が極めて必要だ。

階級意識は、かくして、それが最も有意義なものであるためには、もつと複雜な、もつと深大な、もつと綜合的な主張を有効に、現實に有効にするための、一手段價にすぎないといふ自覺が、それの主張者自身に徹底してゐることを最も必要とする。それは一つの名として、旗幟として、象徴として自由に意識されうる場合に、最も不可抗的な主張だ。ちやうどしたがつて、それは、必ずしもすべての場合に、階級意識といふ顯著な、表明的な形式を取らない自由を持つ。ちやうど、告白する基督教者が、必ずしも僞善を憎む人ではなく、僞善を憎む人は、基督教を告白するとしないとにかゝはらず、自由にありうる場合に、やや似たかたちに於てだ。

しかしながら、形式論として、例へばわが國の社會に於ける最も最近の政治的現實を見るならば、新興階級の政治的發達の國家的、社會的必要は、いく多の點に於て、またすくなくとも或點に於ては、不可疑的に明視される。例へば最近の議會を特徴づけた黨人及び政黨の雜多な、しかも金がなくては今日の政治は出來るものでない、今日の政治家がつとまるものでないといふ非倫的良心によつてかなりに裏づけられてもゐるらしい、いはゞ政治費用としての金策關係問題の如き、また軍國問題にも多少深い關係を有する公職私用問題の如き、これらは、新興階級政黨の心理と事情からしては、根本的に不可能に近い問題だ。新興階級政黨が成功して爛熟し了はつた遠い將來の事は、もはやそれ

に新興階級政治でなくなつて行くことだから別として、その新興階級政治が現に實にあるならば、それがどんなに發達しようとも、成功しようとも、それは、全體にかけては遙かに前衛であり、公的であり、また中間といふか切きものの存在すなば根本的に存在せず、すべての社會的和衆勢力、即ち潜在的勢力にこれの妥協の機會が出來ただけすくなく、結集的に與へる方向に思慮し、計畫し、行動するにきまつてゐる。

新興階級政治の名の下に、こゝでは、與く現在のわが日本政黨、わが國の政治にいま名のりをあげたばかりのこれをわたらは唯一的に、また中心的にすら、限つて意味したものではない。一層可能的に、それ及びその他の、及びその後の、多少新產業に於ての經濟的生活構的、しかしながら生産方面上での實力と共に實行及び生產力に於て、技術的存在理由ある、發展的にそれある、すべての個々人と階と團とを、その及びの個々人と階と團とに對立させて、かから自身の政治的組織をかれらなりに多少とも形成し、發達させた、あるひは形成したものにほかならない。十分にいまにいふならば、新興階級政治の分子は、必ずしも經濟的と無産的条件とはしない。少條件は、根本的に、生産方面、實力、實行、實現のみに限られてゐる。そしてその生存も、富の生産には決して限らない。およそ可能的ある生産できへあれば足りる。生存としての存在に於て足りる。工業的及び商業的形式に於ける經濟的並びにそれを中心としての階級の論は、その階級の成を内容としての階級政治に、新興階級政治といふものがないといふて、時代的、範囲的…を含むるものにほかならない。どうしてかといふに、相手は、高く、たきうたに人の間をもとめる、十分に自然にして十分に明確な原則の具體化であらねばならん。わが國の現在についていふならば、工業的階級及び殊に農業的階級に、その資格に於て他のすべての社會部分をはるかに凌駕する。殊に農業的階級といふなれば、わが國の生產に於ける…階級に比して、實勢、實行、實力、及び作用に於ても、…である。ふたゝび述べたところのものにただ一つ

だ。そして、そのたゞ一つのものは[illegible]だ。いひかへれば[illegible]、[illegible]は、[illegible]に、[illegible]
的及び經濟的生活資本以外に、技術、科學、知識、經驗、人材、習性等に於ける優秀なる[illegible]に於いて[illegible]その
のものの性質上、これらの實力が具足するまでには、相當の新勢力、その新勢力のための[illegible]時間を必要とする。

けれども、大體からいふて、農業勞働は、また簡單に農業は、すくなくともわが國に於けるそれの現實としては、例へば天候といふが如き純自然力の支配下にあまりにいちじるしく立つがゆゑに、その一事情のみからしても、その階級者の習性には科學以前的要素が多い。かれらは十分に進歩的でない。この點に於ては、工業勞働階級者は、最も純粹に數學的、理化學的世界の現實に、測知されうる自己の能力をもつて作業的に常に當面するがゆゑに、また、比較的に世界共通の價値の生産に從事するがゆゑに、前記事情のほか、一定の狭い土地と米の生産といふが如きに制限されてゐる農業者よりは、進歩的、改作的、自由的だ。知識と習性に於て、それの一般的傾向に於て、さうだ。

農業勞働と工業勞働は、いづれもそれの社會價に於て、曖昧の隙がすこしもなく、誤魔化しの餘地がすこしもない點に於て、ただそれだけの點に於ても、複雜なる、そしてかなりに頽廢した現代社會と現代文化に於ける、道徳的、社會理想的標準計たるべき最も代表的な位置にある。かれらを中心としての一般生産主義群の政治的、組織的自己主張は、たしかに時代の一大必要事だ。新興階級政黨は、政黨群は、それの或部分ですくなくともあらねばならん。

私は、さきに、新興政治的勢力の組織的發達は、即ち新興階級政黨の社會的發達は、例へばわが最近の議會をも特徴づけたやうな黨派關係的腐敗事件問題や、軍閥關係的腐敗事件問題の如きをば、その事件の發生因的根本的社會事情そのものにむかつて根絶の斧を揮ふがゆゑに、自然的に存在理由なくするといふことを、それの代表的功能でもあるかの如くに説き觸れて過ぎたが、勿論、かくの如きは、それ即ち新興政治的勢力の組織的發達から國民が期待しうるすべて

では決してなく、非要的ですらない。非要的は、またそのすべては、社會的再發化を意味しうる限りの進歩的、改造的、生命擁護的運動だ。

四　民族及び民族本能の實在と民族意識の價値

民族はなほ現代に於て一とつの偉大な實在だ。そして、それと密接に結合して民族本能が同様に一とつの偉大な不可分的存在だ。

現代に於て、最も代表的な團體と云へば、民族を單位とし、民族本能を內容とするものであるといふ事實は、それの一例だ。世界戰爭が、殆ど悉くの民族本能の作用によつてなされなかつたことは、その事實の一例だ。

民族的な、即ち言語、習俗、血統、宗教、風土等に於ける差別が、現代に於ける最も實在してゐる限り、その場合には、民族別は、本能に於て、階級別よりも根本的だ。本能に於ては、個人的にまたは階級的にでなく社會的にといふことだ。

いのちあつての物種といひ、人あつての物種といはれるが、現代に於ける民族的實在は、社會的に、このいのちに相當し、その人に相當する價値を、なほ確實に保有してゐる。

早い話が、もしもある民族の利益に、またある個人もしくはある階級の利益が、それらの全體的にして相殺し合はされるものとしおあると假定しても、それらは一應は、理論には、それらの個人的利益、階級的利益に、全然民族は從ふほかない。それに似た關係む、現代の民族別には、低い程度に、三は存するが、なほかつ本質的に存する。

民族は、現代に於ては、根本的條件、一般的基本條件に近いものだ。これは與へられたる唯一の條件にも近似

してゐる。わたしに、政治をも、國家をも、民族をも、未来をも、この時代に對する加工のかたちに於てすこしはかたい
戦時的現實に、歴史によつて強制されてゐる。

社會統制を意味する政治が、この民族的實在と、民族本能的及び意識的、しかしながら殊に本能的實力存在とを、十分に認識し、評價しないならば、それは不可能にもされるが、不成功にも終はる。そのほかありえない。

意識は危機に際して案外に弱く、本能は危機に際して案外に強い。この關係に於ても、階級意識は、現代の事實として、大體に於ては、なほ文字通りに階級意識であり、民族本能は文字通りになほ民族本能だ。社會統制を意味する政治は、危機を除外したものであることはできない。危機に於て失敗することは、平時の努力を瞬間に於て棒にふつてしまふことだからだ。

民族別と民族本能が現に在る程度に在ることを十分に意識すれば、例へば日本としては、適當に早く、支那との經濟的及び軍事的同盟を、國際的良心を具備した名實兩全形に於て、政治的に企業するが如き一とつの時代的必要も考へられる。その軍事的同盟が關する限り、國防機能を一部階級、しかも消費主義化した一部階級の手から完全に依つて、これを發達的全國民の手に回收するが如き比較的に末枝的な時代的必要も、先づなされべき、獨立した一根本要件として考へられる。單に國防機能といはず、政治の根本原則的組織そのものを、眞實に民族の進歩的自己保存意思に出發、有効なものであるやうに、改善すべき餘地ある限り改善的努力を常に十分に拂ふ根本的必要がある。經濟的同盟についていふても、日本自身の經濟組織が、それらの適用的、有限功利的目的から全く自由に、事自身の完全のために、先づ改善されないならば、すべての適用的、有限功利的目的などはそれの方法を開始されない。

日本の現代政治は、それの管權は、單に階級意識に對してのみでなく、進化史的には一層原始的な、しかし現實力と

して、結局本間たる民政上一つのものに対してゞ、統治の理論を固守りに於て技術的な経済にある制度主義社会の手に、精神的に、及び国民自身の利用とそれに於ける不足のために、いまだほとんど滞しておる。何故を問はするより外米特徴、したがつて部分の独占的でほとんどはあるほかないが、国民自身の利用とそれにおける不足を補充する方法は、比較的に国民自身の手の付く範囲内にある。所で、政府の教育的努力もそれにほかならない。

私は、科学的地域別を第一條件とする民政的事務について、それの知識及び価値について、政府の根本常識における時代的反省といふ点も現れる、もつと十分に考慮すべきことといふ文字を含まない、また、それ及び自己其外の多くの誤定をすすつたのであつたが、時間が来たから、以上だけで一とつの不備を、やがて成功に帰として、孤立にしたといふ自己公論において終了する。

經濟學說の社會鬪爭的背景

高橋誠一郎

一

「人生は思ふ者に取つては喜劇であり、感ずる者に取つては悲劇である。」デモクリストは笑ひ、ヘラクリトスは泣く。エフエソスの泣哲學者に取つては、相反する傾向の間に存する鬪爭は全實在の父である。一切の生活は變化であり、變化は鬪爭である。而して人間の歷史と共に社會鬪爭は開始せられてゐた。共通なる社會的特徵を有する集團は階級を形成する。階級は權力、名望及び地位に從つて隔離せられたる社會的集團である。而して經濟的事實が社會上益々重要と爲るに至つて、財産資格は社會上政治上益々大なる勢力を有することゝ爲り、階級を分つ最も有力なる標準と爲つた。土地を共同に所有しつゝありし原始的なる種族的社會の崩壞以後に於ける吾人人類の全史は實に階級鬪爭の歷史であつた。信賴す可き歷史的知識が神秘なる傳說の霧を排して現れたるの時、吾人は既に搾取階級及び被搾取階級、支配階級及び被支配階級の間に戰はれたる鬪爭の事實を見る。

希臘史の幕の開かれたる時、雅典の政權は悉くイウパトリデイ（εὐπατρίδαι）と稱する特權階級の手中に存してゐた。土地の大部分は此の少數貴族の手に領有せられ、之れが耕作の任に當れる者は小農民であつた。而して富に對する渴仰が所有階級を支配したる時、先づ彼れ等の貪慾心の爲めに滿されなければならなかつたものは實に此の小農民階級であつた。領主が小農民より勵取する貢納は甚しく苛重であつて、全收穫の六分の五にすら達することがあつた。租稅を滯納し、若しくは債務を帶ぶるに至れる農民にして指定の期日内に其の義務を完了すること能はざる時は、彼れ等及び其の家族は債權者の爲めに奴隸の境涯に沈ましめられなければならなかつた。此れと全く異る

ことなき事情は他の都市にも亦た存してゐた。希臘半島及び植民地に於て生活物に困れる貧民階級は植民地に於て其の安住の地を看出し、從屬なる地方より脱却して自ら主人の地位に昇り、土地所有階級たらんとするの努力を圖らするに至つた。斯くて凡そ西紀前八百年の頃よりして希臘半島に於ける光輝ある新植民地建設の時代が生じた。植民地の興隆は又た同時に商工業の發達を誘起した。商業は職工によつて營まれた。イオニア人は陶器、什具、織物、武器、[illegible]及び皮革を製出した。第八世紀に於ける[illegible]の[illegible]は最大なる[illegible]を[illegible]に[illegible]へた。貨幣經濟は自然經濟及び物々交換的契約を次第に代つた。

商工業の發達は又た[illegible]の上に[illegible]しなければならなかつた。專ら貴族によつて維持せられて居つた[illegible]が彼等よりも其の數に於て[illegible]大なる中間階級の[illegible]隊によつて排斥せられた。[illegible]實なる中間階級は[illegible]な[illegible]會に於て[illegible]に對して自己の地歩を[illegible]し、[illegible]するの組織は次第に[illegible]る勢力と法律上に於ける[illegible]地に於ても亦た内部の闘となつた。斯くて[illegible]暫くに久しきに亘れる[illegible]に由つて[illegible]に於て[illegible]の様子を讓られたる[illegible]階級に値揚した。

[illegible]によつて[illegible]せられたる貴族一族は[illegible]によつて漸く[illegible]せられた。成文法典に對する人民の要求に[illegible]るために、貴族はドラコーンをして紀元前六百二十一年其の法典を[illegible]せしめた。此の法典は[illegible]に[illegible]の[illegible]を以て開[illegible]。[illegible]法典の[illegible]（デ[illegible]ーデス）は之を評して、血を以て書かれたるものと稱してゐる。而もドラコーン法典の刑罰は後人によつて誇張せられたるものゝ如くである。彼は既に從來の慣習を本として[illegible]なる[illegible]法制をして成文法たらしめたるに過ぎなかつたのである。[illegible]諸法規が[illegible]に成文の形を取つて公布せらるゝに至つたことは固より重大なる進歩的現象であつた。而も法典の公布は[illegible]階級をして彼等が[illegible]の要求と信條とに於て[illegible]に[illegible]る[illegible]の[illegible]を[illegible]することを[illegible]なるに至らしめた。

紀元前[illegible]百九十四年[illegible]の不平が再び爆發せんとするに際し、貴族はソローンをして貴族人民間の[illegible]を調和し、兩者間に平和を齎すに必要なる立法を行はしめんとした。彼れは[illegible]の立法[illegible]に於ける[illegible]に基く[illegible]に從つて「一切の私有財産を保護し[illegible]しめたる旨を[illegible]せるも、[illegible]て其の有名なる「債務解除令」（Seisachtheia）を發し

て、人身擔保貸付（δανείζειν ἐπὶ σώμασι）を禁止し、現存の債務を解除若くは輕減し、苛酷なる負債法の下に奴隷たらしめられたる者の多數を解放した。ソローンは此のセイサックセイアの成功によつて、更らに進んで徹底的に憲法を改造するの任務を委ねられた。新制度の精神は富を以て家門に代へて參政權の基礎たらしめんとするに存する。彼れの憲法に從へば、國家は恒産寡頭政治（τιμοκρατία）、即ち支配階級として認めらるゝが爲めには一定額の財産所有を必要とする一種の寡頭政治の下に置かるゝものである。

ソローンの憲法は貴族及び庶民の孰れをも滿足せしむることを得なかつた。新憲法制定後、幾許ならずして平原黨、高地黨及び海岸黨の間に存したる古き不和軋轢は再び起り、主權は終に僭主ピシストラトスの手中に歸するに至つた。平原黨は主として土地所有者の階級より成り、海岸黨は貴族に屬せざる富裕階級、即ち主として工業及び勞作階級を包括し、高地黨はアツチカ高地の多數小農民より形成せらるゝものであつて、他の二黨の孰れよりも政治的自由及び平等を要望することの大なるものである。而してピシストラトスは實に此の最後の黨派の陣頭に立てるものであつた。ピシストラトスは單に名義上の自由を有するに過ぎざる小農民及び農業勞働者が地主に對して其の收

なつた[illegible]した。

寡頭政治の時代よりして貴族の主權は[illegible]せられ、一商工業より生じたる動産上の勢力に土地所有階級の地位を以て發達した。他方又農村よりの來住に由つて都市の人口は著しき增加を來してゐた。而して多數の解放奴隷を包含する新住民は次第に市民權を取得するに至つた。ピシストラトス家の僭主政治の後を承けたるクリステネスが貴族黨の首領イサゴラスの反對と鬪ひ、庶民の援助によりて遂行し得たる改革は民主々義的基礎の上に是れ等相異れる諸要素の內部的調和を行はんとするの目的に出でたるものである。而して民主政治の成熟は波斯戰爭によつて促進せられた。強敵波斯に對し希臘全土は今や其の全力を結合して當るに非ざれば勝算なきを知つた。兵士の一般徵募は約二十年內外に於て普通選擧を誘致した。雅典は其の海上權によつて聯盟の主位に立つた。平等にして獨立なる邦家の聯盟として出發せる所のものは三十年を出でずして雅典人の國家と化した。

海上權を掌握し、繁盛なる外國貿易と製造工業とを有する雅典國は一小市邦の舊態を一新した。ペリクレス時代に於けるアツチカ市民は其の收入を半ばは土地より、半ばは生産的企業に對する投資より取得しつゝある少數の富者と多數の小農民及び

工匠とから組成せられてゐた。所謂る工匠（Δημιουργοί）は内に、大工、石工及び金属工のみならず、医師及び役者を包括するものである。同国の農業は早く既に其の主人口を支持することを能はずして、都市の住民は第五世紀及び第四世紀の交には其の食料品の半ば以上を輸入に依たざるを得ざるに至り、外国穀物は黒海の北岸より輸入せられた。之れに対して同国より輸出せられたる生産物は橄欖油、無花果、蜂蜜、陶器等であつた。而して経済的見地より観察せらるゝに至り、土地は大部分橄欖栽培に使用せらるゝこととなつた。奴隷制度は所謂市民の経済生活に取つて必要欠く可らざるものであつて、彼等の総べては其の事務を遂行するが為めに一定の奴隷労働を必要とした。第五世紀の中葉よりして著しく自由工匠の数を減少せしむるの傾向が漸々に生じて来た。即ち少数人民の間に於ける富の増加が奴隷労働によつて経営せらるゝ製造場の発達を促進、之れが指揮監督の任に当れる者も亦た概ね又奴隷に非ずとするも解放民より成るに至れることと見れてある。而して解放の代物が貿易商人の新に取得せらるゝに至るに随れて、小商人及び小企業家は其の独立を失つた。

斯くの如き趨勢の資本主義的傾向は当然貧民の増加を来さなければならなかつた。斯くて紀元前四百十一九年に至つて国家は終に貧民を扶持せざるを得ざることゝなつた。而して斯くの如き扶金の高は生活費の増加に由つて一オボラスより二オボリに増加せるもの如くである。而してこれを受くる者の数は恐らく五百人以下に降りしことあらざる可く、一人宛一オボラス若しくは二オボリとすれば、之れに要する経費は少くとも五乃至十タラントンに達する計算となる。加之ならず、公務は悉く皆な報酬を受けた。市民は国庫よりして各日二オボリに達する民の劇場用料を収受す可く、ヘリアエア法廷に出席する者は其の出廷に対する手当を受く可く、又た兵士として服務せる者は等しく一定の報酬を受く可きことを規定せられた。最下等の貧困労働者の日給は三オボリ乃至四オボリであつた。古代の国家は又た公費を以て支給せらるゝ官職を有してゐた。而して市政官の数の如きも亦た用ゐ得る限りを数の人をして此の種の役職に服るを得せしむるが為めに顕るもかつた。之れに加ふるに僅数の祭祀、演技、競技が挙行せられて、一般人民に対し無料を以て供給せられた。而して是れ等の諸経費の総べてを負担せざるを得ざりしものは富者であつた。斯くの如き事態は之れに参加することを能はざる多数の奴隷の存在を除いては当さに財産共有に等しきものと称し得可きものであつた。而して唯其の民業が猶ほ毀損の状態に甘んぜずして、一種の共産主義的社会

改造に由つて當時者の理想郷の實現を思量しつゝありしことはアリストファネスの喜劇「婦人議會」(Εκκλησιαζουσαι)に依つて窺知することが出來る。斯くて當時の富者は貧民を恐怖するの極、自ら貧困と爲るを以て一種の救濟と思惟せる程であつた。是に於て乎、イソクラテスは罪を犯すよりも富裕と爲るを以て遙かに危險大なるものと稱してゐる。蓋し犯罪は宥恕若しくは寛大なる刑罰を受くることあるが故である。洵に貧富の兩階級は同一國内に二個の交戰國を構成して居つた。

二

プラトーンの理想國は實に斯くの如き環境の裡に生れ出でた。彼れを以て觀れば、一致の支配す可き場所に不一致、分離及び多數を見るよりも國家に取つて大なる惡なく、之れを結束して一たらしむるよりも大なる善はない、快樂及び苦痛の共同なる所、全市民が同一の機會に於て同じく喜悲する所に結合は存する。共同の感情なくして、單に個々の感情存し、國家若しくは之れを構成する者に對して起りたる同一事件に際し、一半は欣喜し、他は悲歎するの時、結合は解離する。而して斯くの如き相違は概して「我が物」及び「他の物」我が事及び彼れの事なる名辭の使用に就いて一致することなきに始まる。最大多數者が同一物に對し、同一の意義を以て mine 及び thine の言を使用するに於て一致せるものは最も善く統治せられたる國家である。

斯くの如き所論は一見正さに近世社會主義及び共産主義の父母たるの觀がないではない。然しながらプラトーンは希臘に於ける最高貴なる家門の出であつて、毫も民主政治に與するものではなかつた。彼の理想的國家組織は何等の法規に由つて拘束せられざる貴族政治、換言すれば、哲學者の專制政治である。謂ゆるプラトーンの共産主義は市民中の少數を抱有するに過ぎざる第一及び第二階級に適用せらるゝに過ぎずして、近世社會主義の主として念とする多數民衆は彼れの共産主義的計畫と直接の交渉あるものではなかつた。彼れの理想國に於ける支配階級は毫も自ら生産を行ふことなく、只管勞働階級の努力に依つて支持せらるゝものである。洵にプラトーンはアリストオテレスの言の如く、勞作階級に對して共産主義を適用す可きや否やを論議せることがない。是れ等大多數の民衆は依然として傳統的家族形態と將來の經濟制度とを保持すべきものなるが如くである。(彼のマックス・ベーアは此般の見解を持するも、而も吾人は未だ俄かに彼れの所論を承認することを得ない。)

プラトーンは現在の雅典國家が彼れの理想的國家の實現に

つて統一的たる生活を営むことを目的とし、且つ此の個々の自由に於ては互に没交渉に閉ぢ籠る其の生活を擁護しなければならぬのである。而も斯く法律は人間生活に依つて其の生活の設計を分割、即ち一國内に一個の支配國家を構成する所の[illegible]せんとするの希望を全然擁することがなかつたのである。斯くて其の法律的[illegible]に於ては所有の所有者に對して保障せらるゝとともに、而もそは何等かの制限を加へられてゐる。プラトーンの共産主義は其の高弟アリストテレスに由つて[illegible]の制限を受けた。而してアリストテレスは[illegible]法律は中間に在りたる財産上の不平等制限に於いて統制を下してゐる。而も吾人は是の如き財産上の制限上の理由にアリストテレスの政治的理想とプラトーンの理想、彼の共同との間に於ける根本的相違を認めざるを得ない。アリストテレスは[illegible]に於ける私有財産の所有者ではなかつた。彼は財産の所有に伴へる生産的態度を説くに努めてゐる。而してアリストテレスもまたプラトーンと等しく、[illegible]一切の関係の統制をしく全体民によつて行はれるを得ることを認め、且つ[illegible]つゝ[illegible]によつてなされたる生活を営みつゝある個々の市民階級に市民権を與へんとした。彼等と雖も、總に人間の自由及び平等が政治に参與することを考へなかつた。彼れと雖も、個々の國家的[illegible]の下に統一されたから、一切の人間を一つの共同制限に結合する根本的原理を完全に了解することを得なかつたのである。

而も當に中間階級に最良なりと確信せるアリストテレスは所有に關してすら寧ろ中間の財産を選ぶ可きものと見た。彼等が財産の所有に由つて一切の生活を支へる資格は支配するの資格なくして、所謂彼等の如くに吸收するに反し、彼れと共に獨立を破壊し、[illegible]ることを得らず。又た[illegible]とするの[illegible]なる者は[illegible]の如くに命ずる。斯くして[illegible]に人と奴隷との分合に過ぎずして、寧ろ自由民の存在を許さざるに至る。[illegible]而し、彼は個々の特殊たる人と友情との同時に[illegible]を有し得ない。是に於て、アリストテレスは中産階級の基礎の上に最も完全なる政治的社會は存在すべき可からずと確信したのである。

ソクラテスよりアリストテレスに至る三哲學は個人的自由傾向の發生に由る政治的經濟的發展に反抗して、既に動搖を來しつゝある[illegible]の理想を、[illegible]の基礎の上に建てんとせんことを企圖せるものであつた。然しながら彼等の大理想の全盛は既に失敗に終つた。往年の國家的統制に於ける價値が消滅せしめらるゝに先立つて希臘國家は其の獨立の存在を失つ

た。

三

羅馬人の傳說と制度とは彼等が國と氏族（gentes）及び種族（tribus）に分たれたることを示してゐる。氏族は家、村及び郡（部族）を連結するものである。所在の地域と氏族制度とに由つて結合せられたる氏の家は聚つて氏の村を成し、更らに氏の村は聚つて各個の郡を成せるものであらう。而して總べての政治的共同團體（civitas populus）は郡の聚合體より成れるものであつた。各個の郡が其の集合所たると等しく又た其の避難所として役立てる地方的中心を有したることは疑ひなき事實であつて、是等の中心は其の位置に基いて capitolia（山嶺）若しくは arces（要塞）と稱せられた。軈がて家は要塞の周圍に群がるに至り、輪壁（urbs）を以て圍繞せられた。斯くの如くして都市の核心は形成せられたのである。各郡は孰れも獨立なるものであつて、各自の君主、長者及び戰士の總會によつて支配せられてゐたが、諸郡は「拉丁聯盟」として知らるゝ所のものを形成し、彼れ等が同血同語の紐に結ばれつゝあることを意識せるを表明した。而して是等三十郡の聯盟の中樞たりしものは古拉丁植民地總體の母市アルバであつた。彼等は每年の集會日に拉丁人（Latini Prisci）を成して、Feriae Latinae（Latiar）に犧牲を獻げた。

羅馬史の始初に遡るを得可き、支配階級及び被支配階級の存在は明かに侵略と先住民の隷服とを物語るものであると看做されて來た。政權は貴族（patricii）と稱せられたる一部の人民に屬してゐた。パトリッキイは其の語源に於ては同一の祖先より男系を通じて傳はり、同一氏名を有する氏族の首長、即ち patres の血緣を表示するものであつて、羅馬の最古代に於ては羅馬國（populus Romanus）を構成する實際の市民を意味する。彼れ等はチベリス左岸の低丘上に於ける羅典人の植民地ラムネス、サビン人の植民地チチイエス並びにラムネスと等しく羅典人の植民地ルケレスの三種族に分たれ、各種族は更らに十部族若しくは群（curia）と分たれる。是れ等三種族の區別が極めて古くより存したるの事實は羅馬人が此の tribus 及び tribuere なる文字を單に「部分」及び「區分する」の意味に使用するを常とせるによつても明かである。ラテイツムが純然たる農業地方であつたに拘らず、羅馬は其の自然的地位によつて商業の中心と爲つた。固より羅馬人は其の耕圃を忽諸に附し、若しくは是れを以て其の生活の本據と看做さゞるに至れるものではない。而も不健全なるカムパニア平原の風土に制約れ

富を有し[illegible]
てゐた。而して古くよりして羅馬の平民の側には[illegible]外來者、少數なる舊時の人々よりの成れる平民の[illegible]が生じたのである。斯くして都市は漸次膨脹の途を辿って行った。

吾人は既に古くよりして[illegible]と自由の平民（三三）との存在について[illegible]羅馬の第二王ツルス・ホスチリウス及第四王アンクス・マルチウスによって[illegible]羅馬の地に[illegible]平民よりの出たるものである。彼等は[illegible]に對し[illegible]何[illegible]關係を有することなく、單に[illegible]即ち[illegible]自由民であった[illegible]。而も平民は[illegible]に於て[illegible]。而して[illegible]に[illegible]ることを[illegible]つたが[illegible]平民と分つことを[illegible]つた[illegible]。而して其の[illegible]に對する[illegible]に[illegible]。而して其[illegible]し[illegible]ることとなる。[illegible]羅馬[illegible]して[illegible]を[illegible]なく。[illegible]

富裕なる者より新たなる貴族（nobiles）は發生して其の家與の爲めに凡ゆる地位を略取するに至った。nobiles は出生の貴族、即ち patrizi に代れる官職の貴族であって、其の會員は羅馬の高官（curulis magistratus）の一に就けることある家族若くは其の家族を包含するものである。而も此の新たなる貴族政治の時代に於て[illegible]階級の極少なりし所以のものは羅馬市民の時間を消して[illegible]たる數多の[illegible]に存する。伊太利の土地は一旦[illegible]征服せられた。而して其の間に於て羅馬人は被征服者より其の土地の一部分を略取するの常であった。其の割合は通常[illegible]分の一であったが、其の[illegible]不同なりしものの如く、時には其の全部が沒收せらるゝこともあった。斯くの土地は一とまづ國家の手に歸して、其の大部分は富者が[illegible]せられたりつ[illegible]代を支拂って占有するに委せられたのであるが、屢々此の新たなる[illegible]の爲に[illegible]市民の間に分割せられて、其の上に植民地（coloniae）の建設を見たのである。

然るに西紀前百七十七年以後に於ては同百七十七年を以てピケヌムに於て行はれたる外は何ぞ新たなる土地の分配ありしことを聞かない。富者の占有しつゝあるものの中には最早伊太利國内に分割せらる可き公有地を[illegible]さゝる[illegible]であった。而も富者は[illegible]なる[illegible]を[illegible]して之れを増す可く[illegible]たかつ

た。但し二[illegible]のカルタゴ[illegible]六年に亘れる第二次の戰役に於て[illegible]したる所のカルタゴ[illegible]の影響は次第に羅馬に於て顯著と爲つた。[illegible]人及び羅馬人が自己の家族の所要を滿足するを目的として其の所有地を經營したるに反し、カルタゴ人は營利的職業として農業に從事した。

斯くの如き方法は羅馬の採用する所と爲つた。カンパニヤに於ける大農場(latifundia)はカルタゴ戰役の間に於て更らに普遍的と爲つた。ラチフンディアはカルタゴの農場に倣へる利潤を目的として經營せらるゝ資本的所有地である。後世に傳はれる極めて僅少なるカルタゴ文獻の斷片中にマゴオの農業に關する論述の斷篇がある。此の書は著しく讚美せられたるものであつて、羅馬の作家は孜々として之れを模寫するに努めた。

此の戰役は又た國家に對して貸付を行ひ、法外なる價格を以て船舶、糧食及び軍需品の供給を行へる資本的商人及び商事會社の發達を助成した。彼れ等は國有地及び被征服諸邦に於ける鑛坑及び石坑を採掘し、租稅を徵收し、大農場に奴隸を供給し、軍用大道路、港灣若しくは廊堂(basilica)の建設を請負つた。羅馬市民の大部分は是等企業の株主と爲り、公所(forum)及び其の廊堂は株式取引所と化するに至つた。國內に於ける最も有力なる人士は直接若しくは間接の投機業者と爲つた。羅馬の貴人[illegible]た[illegible]公然の貸人([illegible])によつて[illegible]たる作業の外に、[illegible]して居つた。彼れ等は[illegible]と呼ばれたる一種の階級に屬する。卑屈なる羅馬の貴族は一面に於て營利欲を蔑みながら、他面に於ては彼れ等自ら貸金業者を內密の手先として使用し、其の富を增殖するに努めた。スラ、ポンペイウス、ブルタス、カシアス、アントニウスの如き何れも法外なる利率を以て短期の貸付を行ふ金貸と爲り、四割八分乃至七割の利子を天引きして恥ずる所がなかつた。羅馬人が征服によつて取得せる富は先づ貴族の金庫中に入り、軈がて又た高利の害惡を生むに至つた。

カルタゴ戰役以前までは伊太利亞は自ら自己の小所有地を耕作せる剛健なる自作小農民より成る堅實なる人口を以て蔽はれてゐた。西方を征服せる羅馬の軍隊は彼れ等の間より徵募せられたるものである。羅馬共和制の最盛時に於ては農業と軍務とのみが唯り羅馬市民に相應せる業務であると看做されてゐた。然も交互に耕作と戰役とに從事せるの一事は自作小地主の多數をして負債の重荷に惱ましめなければならなかつた。彼れ等は戰場に在つて自己の田園を顧みること能はざるの時、其の耕作

を脱せざらんとしたならば、縦ひ借財を行はなければならぬ。

斯くて長き戦役の間に著しく其数を減じたる自作小農民は半ばに領土よりの輸入せられたる低廉なる穀物の競争に由り、半ばは土地所有者の取得によつて其の身に箔を付けんことを欲せる成金によつて土地が買収せられたる結果として次第に消滅した。小農場の廃墟の上に大農場は形成せられた。其間は葡萄園及び牧場となした。幾度びか小保有地制度を奨励せんとするの計画行はれたるに拘らず、吾人は殆んど伊太利半島内の何処に於ても主として自作農業の行はれつゝある地方を指摘すること能はざるに至つた。偶例なる地には奴隷農場の附属たるに適せる一定部門の商工業をすら開始した。斯くて旅宿、機織場、煉瓦製造所等は農場内に於て経営せらるゝに至つた。

斯くの如き資本主義的経済組織の結果は最も戦慄す可き財富分配の不権衡を伴つて現れた。其の奴隷の努力に生くる富者は僅数に値するものであり、自己の双手の労働に衣食する貧民は卑賤なるものと看做された。貧困の増加は多数の民衆が或いは軍隊に加入し、或いは穀物の配給を受くるが為めに都市に群れるの事実に徴して明かである。都市は貧富両階級に分離した。羅馬の市民は怠惰なる乞食と化し、労作するよりも寧ろ劇場に在つて競技に耽ることを快ぶ者となつた。貧民は街頭の上に無償の時間を空費すると等しく、富者は夕刻まで其の床の上に横はつてゐた。無際限無趣味なる奢侈は到る処に行はれた。徒らに大食飽満を誇るの時代は生じた。「驚く可き大食家」と称せらるゝは男子名を成すの最捷径であつた。莫大なる金額は政治運動と劇場とに濫費せられて、却つて政治と兵術とを頽落せしめた。固より如何なる法律も克く斯くの如き法外なる奢侈に堪へ得るものではなかつた。而して是れに由つて利得せるものは唯り冷酷なる金融業者であつた。マーカス・ポルキアス・カトオは「汝は高利貸付に就いて如何に思惟するや」と問へる者に対して「汝は殺人に就いて如何に思惟するや」と反問した。高利貸付は實に殺人に等しき罪悪と看做された。債務者は其の債権者に服従するか、若しくは叛逆及び内乱に由つて彼れ等を逐ひ払はんとするかの孰れかを選ばなければならなかつた。斯くてキンナ、カチリナ、カエリウス及びドラベラ等の標語たる「債務解除」(novae tabulae) の絶叫が起つたのである。

独身の生活を送り、出産を防止するの風は上流階級を初めとして次第に一般に普及した。伊太利半島の人口は漸次減少を来しつゝあつた。軍隊に徴集せられたる者の多数は幾次の戦争に斃れ、而して更に多数の人々は長期の服務によつて其の郷土より

不斷減少せられた。於此に土地は僅少なる人々の手に歸して其の國土より遠ざからしめ、其の[illegible]して[illegible]びに家族的生活より離れしめた。是れ等の廣大なる農場に代へて伊太利亞の人口は奴隸及び被放民の群れ、並びに小亞細亞、シリア及び埃及よりの移住せる工匠及び商人によつて補充せられた。資本主義は中流階級を凋落せしめ、商業と地主制度の繁榮とをして極端ならしめ、終には國民の倫理的政治的腐敗を來さしめた。リヴイウスの云へるが如く、資本家の入り込める所に於ては何人に對しても正義も自由も存することがなかつた。實に共和政時代に於ける地方の荒廢は私資本家の行爲に由る所が大であつた。此の時代に於ける商業は私利心に對する統制の不足であつた。而して帝政の初年に至るまで羅馬を壓倒せる混沌たる戰爭と征服との間に、吾人は社會改新の諸計畫の行はれたる事實を認める。而も伊太利亞の惱める病患は到底之れを根元的に癒治し得ざるものであつた。

四

斯くの如き時に於て羅馬に於ける貧民階級の福音として其の猶太の植民地より渡來せるものは基督教であつた。複雜廣大なる信用取引に基礎を置ける羅馬の經濟生活が激烈なる經濟的恐慌を[illegible]民衆の間にはナザレのイエスがポンテイウス・ピラトに斷罪に處せられたる年であつた。初期の基督教は貧民の宗教であつた。其の信徒の多くは貧窮なる職人、卑賤なる勞役者及び奴隸であつた。初め基督教徒の懷ける迫害は恐らく「人は神とマンモンとに兼ね仕ふることを得ざる」を說ける此の新宗教が種々なる營利上の利益を排し、現存社會制度を危うからしむるものと看做されたるに由れるものが大であつたであらう。

基督教は次第に其の激烈なる社會教化を緩げて、上層階級に浸漸せんとするの傾向を有して居たとは云ひながら、吾人は諸教父の記述する所に據つて、第三世紀に於てすら基督教が未だ貧民の宗教であり、教會が猶ほ大部に於て下層階級の擁護たりし形質を認め得るのである。官憲は未だ基督の教を承認して居ない。マルクス・アウレリウス帝の思想は幾多の點に於て基督教の其れと類似せるものであつたに拘らず、彼れは基督教理を以て帝國の福利と統一との爲めに危險であると考へて居た。是に於て乎、第二世紀に於ける「辯明書」（一三〇—二三〇）の世界に富と教養とを有する上層階級に說明せんことを始めたのである。第三世紀に這入つてから教會内に於ける下層階級的影響は徐々に減少して、資本的傾向が益々之に增加するに至つた。富者は基

の貴品を利用し、任意に寄付に財産を要求するに至つた。生前及び死後の寄贈は初め金銭及び其の他の動産物件を以て行はれたのであるが、教會の所有は漸次不動産を包含するに至つた。更らに第四世紀に至つて教會の富は著しく増加した。基督教は今や國教として承認せらるゝに至つた。皇帝コンスタンチヌスの政策より生じたる第一の結果中に算ふ可きものは、教會の領地取得に對して法律上の許可を與へたるの一事であつた。斯き附贈を教會に爲すものは同制の教會財産の保管者として俗界に於ける土地階級と同化した。

羅馬教會は古羅馬帝國の文明を後世に傳達するの媒介であつた。羅馬教會は羅馬帝國の各部分を統一に連結せる關係が切斷せられたる時、羅馬帝國を無政府状態より救ひ、而して羅化の渦中に巻き入まるゝを免れたる古羅馬の成物を長く中世を通じて保存せるものである。基督教は羅馬帝國の滅亡、封建時代の時代に於て羅馬の交通が殆んど消滅するに至り、商工業の發達未だ困らざりし間に能く其の勢力を振ふことを得來た。而して教會は其の基督教的組織の發展に應じて基督教的組織の下に全生活を統一せんとするが如き大企圖に着手した。教會は此の大計畫の一部として私有財産を以て公共の便宜の爲めに管理せらる可き委託物と見做し、精神上の義務として慈善を説き、經濟的活動を統制せんことを示すると共に、公正の價格を勵行し、利子の徴收を禁止して商工業を制限せんことを務めた。之に關する「加特力教的經濟理論」なるものは生じて來る。而して其の後に於ける經濟的發展の變化は多く、新たなる經濟上の諸勢力が相互作用し來ると共に、之れを指導し統制せんとする教會の努力より發したる結果である。（「改造」第六卷第九號所載拙稿「加特力教と商業」及び「經濟學商學及國民經濟」第四十九號所載拙稿「加特力教と經濟學の發達」參照。）

基督教的世界組織を完成せるアクイノの聖トーマスの時代は都市の住民たる商人及び職人は次第に自己の力を意識し、自治市が其の相互の利益の爲めに團結しつゝありし時代であつた。而に後れた都市に於て基督教的經濟の觀念を認めた。封建制度の大帝國を崩壊せしむ可き[illegible]の萌芽は既に其の内部に生じつゝあつたのである。都市は次第に土地及び市民の支配より自己を解放した。而して同じく市民とは往々相提携して領主に向つた。第十四、五世紀に至つて民族的國家の統合を完成すると共に、封建的貴族の政治は著しく衰頽した。都市の政治的勢力は益々重要となつた。此の時代に於ける最大なる社會的事は市民と貴族との間に存するものであつた。貴族階級の沒落なりし時期に於て資本が發達することと相切なりし新興階級の市民

は今や國王と結んで貴族階級を倒壞す可き新勢力と爲つた。宗教界の貴族は羅馬教會に對して益々多額の貢金を行ふの必要に驅られた。俗界の貴族は益々增加しつゝある軍備及び租税の支用に惱されて次第に伊太利亞、フランダース及び獨逸の銀行家より借財を行ふに至つた。斯くて伊太利亞及び其の他の地方に於て土地は次第に借財の爲めに失はれて、其の所有者たる貴族の手を離るるに至つた。

五

近世の始期は恰も社會的重力の中心が土地の上から貨幣の上に轉じ行く時代であつた。近世に於ける最大なる現象は中世的都市よりする貨幣階級の發達、資本の蓄積、並びに從來身分と家柄とに由つて占領せられる社會的地位が富の勢力によつて侵略せられたることである。近世的國家は中層階級に依賴して其の大を致せるものである。斯くて貪婪を以て凡ゆる商企業の必然的基礎なりとして之れを憎惡せる中世的思想は漸次變化を來し、富國强兵の因を個人の殷富と廣大なる商業とに求めんとする近代的學說は生じて來る。

曾てアリストオテレスは彼れの謂ゆる「貨殖の術」(Χρηματιστική)を以て農耕、牧畜を包含する自然なるものと、海商、[illegible]有利にして不自然なるものとせられた。キケロに由つ[illegible]技工を以て野卑なる業務に從事するものと做し、小商業に於ける商業を以て輕侮と爲た。唯だ世界の各方面より多額の輸入を行ひ、而して奸策を弄することなくして廣大なる販賣を行ふ大規模に卸賣を行ふ商業のみを以て、さまで不面目ならざるものと看做したるに過ぎなかつた。而も彼れは凡ゆる營利的業務中農業よりも良好に、之れよりも有利に、之れよりも愉快に、之れよりも自由民に適するものはないと說いた。聖アウグスチヌスは一切の企業を以て唯り神に於てのみ見出さる可き眞個の平靜の欣求より人心を轉向せしむるが故に不善なりと宣言した。軈がてスコラ哲學者は商業を論ずるに當つて教父哲學に準據すると共に、又たアリストオテレス哲學の貨殖論を援用した。生計獲得の正當なる方法は第一に農業、第二に手工である。商業は殆んど必然的に詐術に陷らしめらるゝものとして最も嫌惡されてゐた。農業は神を喜び、商人は神を好むこと能はずと說かれてゐた。聖トーマスすら國家の支配者に對して、自然的取財術(artes possessivae——即ち人爲的貨殖術artes pecuniativaeに對するもの)、殊に農業を獎勵す可きことを勸告し、ジャン・ビユリードンは諸種の取財術の順位を定め、牧畜、農耕及び狩獵

[illegible]の[illegible]人間の需的要求を満足せしむるに[illegible]事業を為す、行政的[illegible]を為すの。商業を後に論じてゐる[illegible]的自然的方法を以て[illegible]間の論理[illegible]。何をして[illegible]的[illegible]地方[illegible]へて、国民経済的立場よりすれば[illegible]を[illegible]に分ち、同分に取りて必要にして存在す可きもの[illegible]。即ち国内に於ける貨貨の[illegible]を増加し、又た[illegible]の[illegible]を[illegible]すべき時期、軍人、[illegible]に[illegible]。商業の自由あるよ、[illegible]に[illegible]法目の明確なる[illegible]。即ち人類的富の取引を行ひて自ら[illegible]作用め。其の富は[illegible]他人が[illegible]ならしめて取引を行ふに[illegible]まして、商も自分の必要品を[illegible]するに[illegible]するものと[illegible]であつ[illegible]の分配を[illegible]ならしめることを[illegible]と做し、[illegible]ならしむるは[illegible]とす。[illegible]其のぬ。即ち Regiminis Principum の著者[illegible]の富を増加し得可き一個の見[illegible]ある。[illegible]のであつて、人間の生活に缺く可らざる[illegible]しかも何人にも[illegible]に由り、[illegible]生活必需品を[illegible]するに[illegible]守ましきものであるとは[illegible]すること[illegible]る。……一国家[illegible]の土地よりして[illegible]な[illegible]を[illegible]するは

商業に依るものよりも遥かに[illegible]可きことである。即ち其の存在を維持する為めに一定数の商人を必要とする国家は、総べて[illegible]にして[illegible]せられんか。食料の不足に[illegible]に際して損傷を[illegible]るの恐れある為故である。[illegible]ならず。外人の[illegible]は[illegible]を数市民の[illegible]を[illegible]せしむ可し……若し又た市民が自ら商業に従事するとしたならば、[illegible]は[illegible]の不[illegible]に対して開かるゝのである。[illegible]商人の[illegible]し[illegible]利[illegible]に[illegible]合には、[illegible]心を[illegible]市民の[illegible]にせしめらるゝ[illegible]故である。……商人の[illegible]は[illegible]的[illegible]と[illegible]ること[illegible]ものである。即ち商人は[illegible]を[illegible]て[illegible]しく[illegible]的生活を[illegible]つゝある間に其の心を[illegible]と為り。其の[illegible]は[illegible]つて[illegible]的[illegible]に[illegible]するに[illegible]る為故である。……従つて商業の利用をして適度ならしむる[illegible]たる国家の必要である」と。

[illegible]るに[illegible]に於ける商取引の発達は又た教会学者の[illegible]を[illegible]せしめ、[illegible]の細[illegible]に由つて商業の[illegible]を[illegible]ん[illegible]の傾向が大いに[illegible]して来た。[illegible]市と[illegible]くなりて既に中世に在りて商[illegible]に[illegible]する[illegible]化せしめてゐた。[illegible]十四世紀の[illegible]に[illegible]たる[illegible]に(二十[illegible]hopus of Archbishop Albert と題するものがある。其の中に、[illegible]な[illegible]る商人に對して、彼れが其の商品を自己の買入

れたると等しき價格を以て[illegible]せんとするは不正[illegible]し、商人が「余は斯くの如く行ふを欲しない。即ち余にして通般の行爲に出でんか、余は如何にして余の妻子に對して報酬を受く可きか。却つて余は余と余の妻子とを扶持す可き一定の利得を確保するが爲めに、余が是れ等の物に對して支拂へる所上に之れを賣却せんことを欲するのである」と記されてゐる。」比較的高き立場を代表するレーモン・ヅ・ペニアフォルは總べて高價に賣却するが爲めに貨物を購入するを禁ぜんとせるも、其の例外として鐵銅鉛等の原料に其の技巧を以て加工する工匠及び其の勞働を償ふが爲めに轉賣に際して利得を收むる者を許容してゐる。聖トーマスは更らに諸般の例外を擴張し、商人が家族扶助及び貧民救濟の爲め、若しくは公共の利益に貢獻するが爲めに、又たは其の勞働に對して報酬を得るの範圍に其の利潤を止めたならば之れを許可す可きものと看做してゐる。次ぎにアンリ・ヅ・ガンは其の同時代の何人よりも商業の正當なることと其の效用とを了解して居つた。惟り彼れのみならず、ヅンス・スコッス及びフランスワ・ヅ・メロノアは孰れも其の著書中に於て聖トーマスの見解を祖述して居つた。トリセシウスは曰く「啻だに暴利を貪らんとせざるのみならず、又た其の一切の取引に際し、神及び人の法律を遵奉し、而して窮迫せる者に對[illegible]他の[illegible]人となし[illegible]を欺くに足ることあつても[illegible]一切の商取引に於して常に誠實にして商利何たることなきに於して容易なることではない。國土より如何なる能力と雖も、商なくして存在すること能はざるものではあるが、而も過度の商業は利得及び黄金に對する貪欲心を養成し、快樂を愛し、奢侈を好んで國民の元氣を殺ぎ、其の元氣を奪ふが故に、利益よりも寧ろ弊害あるものである」と。ヨハン・ニーデルは自ら使用するを以て目的とせずして高價に賣却するの目的を以て購入するを商賈と云ふと定義し、之れに適用せらるゝ特殊の一制規を表明して曰く、第一にそは國家に取つて有用ならざる可らず、第二に價格は動機、戒心及び取引に際して行へる冒險に相當しなければならぬと。又たカルレタスは曰く「商業は本質上不善若しくは不法なるものではないが、其の企行せらるゝ事情及び動機、之れを企行する個人、若しくは其の遂行せらるゝ方法に由つて邪惡と爲ることあるものである。例へば貪欲若しくは個人を欲するの念よりして企行せらるゝ商業は不善であつて、買占の如く、國家に取つて有害なる商業も亦た然るものである」と。

斯くの如く商業容認の範圍が次第に擴張せられたることは蓋し

[illegible]時代の[illegible]破せる者であつた。而して[illegible]に至つて著しく、[illegible]の程度を増加し来れる中央集権の勢力に[illegible]し、其の資本を大なる[illegible]せしむることによ[illegible]目的に使用し、之をして強大なる[illegible]に必要なる財源を供給せしめ、一国の武力と[illegible]を増進せしめることを期するに在つた。[illegible]に於ける都市の商工業は住民の[illegible]に[illegible]をして一国の[illegible]せしめた。[illegible]及び[illegible]の時代に[illegible]に対して[illegible]あつた。[illegible]三人[illegible]であつた。[illegible]に対して[illegible]。[illegible]れ等は[illegible]に対して人々[illegible]及び[illegible]。彼[illegible]た。[illegible]トーマス・マン[illegible]外国貿易に依る[illegible]商人階級に[illegible]へ、以て[illegible]の為めに[illegible]ものである。又た[illegible]六百年を以て

唱へたる英国東印度会社の総裁に推されるサー・ジョサイア・チアイルドは嘗つて放言して曰く、「余は汝に忠告するものは余の意見及び命令であつて、英国の法律に非ざることを忠告する。英国の法律は無用なる国会議士の多数によつて制定せられたる喋舌の堆積である。彼れ等は自己の家庭をさへ支配するの道を知らざるものである。況んや商事経営及び外国貿易をや」と。当時の経済思想は[illegible]的思想を咏いでゐた。然るに所謂商民階級たる、[illegible]制度に服従せる[illegible]制度の下に生じ、[illegible]を以て商工業を営みたる古代時代に類似する所なくして、[illegible]れ等は[illegible]方面を自ら解放せんことを努めたのである。此の時代に於ける経済思想は[illegible]其の根本原理上の関係に縛せらるゝことなく、既に特殊の[illegible]によつて[illegible]せられ、又たは時勢の変化に由つて発生せる[illegible]問題と関聯せる[illegible]終りたるゼノヴァーの連合を形成して居つた。而して商業国家の経済問題を解決したる事は[illegible]の結果を示すものである。商も[illegible]に[illegible]なる国民的目的を貫徹せる者は始めて[illegible]れであつた。彼れ等の謂ゆる国家なる観念は既に国家の利益を保全するものよりも寧ろ自己と其の関係ある商業経営の成功を図ふものを意味してゐた。而して当時の[illegible]、[illegible]及び[illegible]一般目に於けるマーカンチリズムの[illegible]及び[illegible]今日。

國民的外國貿易の發達は又た國民的生産の増加を必要ならしめた。而して資本的企業及び國際的競爭の初期に在つては國家的保護の政策は國民的產業を發達せしむるの手段であると考へられた。而も工業階級に取つて有利なる施設は往々にして土地階級の福利を侵害する場合がある。工業は農業に比して輸出品の總價値を大ならしむるものであるが故に、殊に政府の恩惠と保護とを受くるに至り、農業は比較的等閑視せらるゝの傾向を免れなかつた。斯くの如き政策に對する反動は「エコノミー・ロアイヤール」の著者にして佛王アンリ四世補弼の名臣たりしスユリー公爵の主張と爲つて現れた。彼れは富の源泉を商業、植民及び貨幣に求めずして、之を土地の產出物に歸した。而して第十八世紀に至つて極端なる「商業主義」に對する反動として「農業主義」の經濟學說が生じた。「商業主義」の餘弊は當時の佛國に於て最も甚しきものがあつた。政府は久しく製造工業、殊に絹布の如き奢侈品の製造を奬勵して全く農業の荒廢を顧みなかつた。人民は葡萄の培養を禁止せられ、桑樹の植付けが強く勵行せられた。佛國農民の窮狀は其の極に達した。廣大なる地域は荒廢に歸し、家に寢具なき窮民は「羊の如く草を食んで、蠅の如くに

[illegible]
[illegible]
滿し、一揆[illegible]發した。[illegible]都市の華美である。既に宮廷の貴族と化して國王を[illegible]せる貴族は互に驕奢を競つて、其領地を放棄し、地方の青年は陸續たる田園の勞働と不快なる兵役とを脱して都會の光榮に憧れ、家僕生活の安易を求めて走つた。農本主義經濟學者の中心人物であつたフランスワ・ケネーは農村疲弊の主因を算へて下の三つとする。第一は困窮に驅られ、直接税、兵役及び夫役を避へて百姓の子孫が其の親の有する小資本の幾分を携へて大都會に移住し、以て農村を荒廢することであり、第二は農業上の投資者より其の資産の安固を剝奪する專擅なる課税であり、第三は穀物の取引を妨害する諸制限である。

英國に於ては凡そ一千六百七十年頃よりして進んで農業改良に投資せんとしつゝある貨幣階級の勃興其の他の原因に由つて農場は大規模に於ける穀物及び肉類の資本主義的製造場と化しつゝあつた。新耕作法は資本地主と企業的經營とを要するものであつて、小農民は到底之れと角逐することを得なかつた。斯くの如くして土地所有權及び借地權の安全を奪はれたる地方民は實に近世資本主義の要求せる自由無産勞働階級であつた。手工

すなはちギルドが工業上の實權を獲得するに至るまでは未だ勞働者と稱す可き特殊階級の存在を見ることはなかつた。手工の親方は其の性質上猶ほ一個の勞働者たるを失はない。彼等の要する資本は極めて小額のものであつて、唯だ一定せる顧客の確實なる需要に應じ得可き技術上の熟練こそ最も重要なる無形の資本であつた。而して彼等に使用せらるゝ職人の境遇は何人と雖も獨立手工業者たるの地位を獲得せんが爲めには當然經過せざるを得ざる階段であつて、決して之れを以て一個終生の職業と見ることは出來なかつた。而も這般の關係は一方に於てはギルドの獨立次第に鞏固となり他方には工業愈々發達し、愈々廣大なる市場を有するに至るに連れて資本投下の必要愈々緊切の度を加ふると共に終に動搖し去られた。而して個々技人が資本の收利力を併すことをなからしめんとするの[illegible]の精神を喚起し、ギルドは其の工業管理權を利用して種々の制限を設け、以て新來の競爭者を閉止するの用に供することゝなつた。斯くて工業は漸次・富裕の資本より成る團體の手に移り、他方に於ては其の階級的利益を保守し、之が仲裁に汲々たる間に、他方には亦た種々の目的と利害とを有し、終に兩方の列に加はることを得ざる勞働者階級の發生を見ることゝなつた。而して家内工業時代に入るに及んで[illegible]と勞働者との分界は明確と爲る。

經濟的自由主義を唱道せるチュルゴオ及びアダム・スミスは共にギルドの横暴を憤り、深甚なる同情を勞働者に寄する者であつた。彼は勞働するの權利を以て凡ゆる人類の財產であると看做した。而して此の權利こそ最も古く、最も神聖に、最も不滅なる人類の財產である。然るにギルドの拘束が嚴重であつて、獨立して工業を營むこと困難となれるが爲めに、許民は已むなく親方の管理の下に從屬的地位に立つか、或は[illegible]困窮するか、然らざれば外國に流寓して工業に從事し、寧ろ本國を利することとなきに至る。是に於て乎、諸個人間本來の權利を危くする斯拘束を撤廢し、人類をして自由ならしむるは當さに爲すべき第一の政務である。須らく勞働者をして自由ならしむ可きである。從來の勞働者對雇主間の隷屬關係に代へて契約當事者雙方の平等なる權利を規定し、勞働以外の商品に在つて賣買兩當事者間に存するが如き、契約自由の制度を勞働契約に於ても認むべきものである。斯くの如き意見に基き、チュルゴオは其の一千七百七十六年二月の布告を以てギルドの特權を廢止せんとしたのである。

而してアダム・スミスは又た其の「國富論」に於て主として勞働者に及ぼす弊害より立論して「徒弟制度」を攻擊し、同條例

の限定は即ち賃金制限、若しくは極めて少額の[illegible]を以て[illegible]の労力を使傭し得るの權利を雇主に與へ、且つ彼れ自ら[illegible]して職業を営むを防げ、以て雇主の自由競爭を制限するものであると稱してゐる。而して彼はチュルゴオと等しく「各人が自己の労働に對して有する所有權は自餘一切の所有權の本源的基礎たると等しく又た神聖にして侵す可からざるものである。貧民の相續産は其の双手の力と技能とに存する。而して彼れを防げて、其の隣人に危害を及ぼすことなく、其の適當と思惟せる方法を以て諸個の力と技能とを使用せしめざるは明かに此の最も神聖なる所有權の侵犯である」と叫んでゐる。此の自由主義經濟學の使徒と産業革命を惹起せる大發明家ジェームズ・ワットとの間には奇しき縁が結ばれてゐた。當時僅かに二十才の青年であつたワットは一千七百五十六年倫敦を去つてグラスゴオに移つたのであるが同市の鍛冶職組合の爲めに阻止せられて市内に製作場を開設することを得なかつた。是に於て乎、スミスは其の同僚と協力してギルドの横暴より此の若き技術家を救ひ、グラスゴオ大學の校内に製作場及び賣場を給與して彼れを同大學數學用器製造者たらしめた。爾後スミスは好んでワットの工場を訪ひ、兩者は軈がて深交を締するに至つた。是よりして半世紀以上の歳月は流れて一千八百〇九年に至り、恰もワットが

八十三歳を迎へた時、[illegible]せ。[illegible]上げたものは[illegible]しい[illegible]スミスの[illegible]に負ふた。

然もアダム・スミスは労働階級に對して深甚なる同情を有しながら、其の全力を傾けて攻撃せる所の[illegible]制度撤廢の後に生ず可き労使關係の變化を了解することが出來なかつた。彼れは今や將に衰滅せんとしつゝある小工業のみを念頭に置いて其の大著の筆を運んだ。彼れの眼前には唯單に個人的なる産業組織が自らの、其の獨占權を濫用して貧困なる労働者と一般公衆とに損害を與へつゝありし小工業の親方のみが存してゐた。彼れは大工業の發生と其に巨額の資本投下の必要起り、之れが爲めに徒弟の條例に由る制限よりも、更らに大なる障害發生して、企業の獨立經營をして困難ならしむ可き將來の事情を豫想することが出來なかつた。而して彼れは單純なる同條例の廢止が獨立企業家の數を増加することなくして、却つて労働者の存在を危うからしめ、其の境涯をして更らに悲惨ならしむ可きを知らなかつた。（大正十二年版「經濟學の研究」所載拙稿「徒弟條例とアダム・スミス」）。

商[illegible]人はバートン・ホヰチイの言を借りて一よりな
らば好時代は其の商業中に蓄積せる資本は大なる[illegible]して[illegible]
会に分配せらるゝことなく、而して地代及び利潤と為り、[illegible]
を高くせしめ[illegible]をして[illegible]商品価格中に吸収した。斯く利潤は国民
の心に深く喰ひ入つた。マンチェスターは何よりも[illegible]をければ
益々多く有せんことを欲する。凡ゆる人は其の隣人を圧迫す
る。地主は其の借地人を圧搾し、商民は消費者を苦しめ、大資
本家は小商人を没落せしめる。其の有様は恰も市中の[illegible]門
口よりも[illegible]の角を[illegible]する如くである。何物を以ても安
定を欲いてある。国民は村落から都市へ、都市から海外へと移
住しつゝある。如何なる資本家は[illegible]有利な場所を求めて
此處に移らんとする。何れの国に於ける[illegible]人は常に労働
者を[illegible]其の調に投じて資本の力を[illegible]してある。而して其の民
は常に契約に向つて努力しつゝある。[illegible]に向つて[illegible]
を求しつゝある国民は永久に[illegible]に起るものである。」
アダム・スミスによつて[illegible]の自由な[illegible]
内に[illegible]より[illegible]に[illegible]其の[illegible]
おる。而も[illegible]
労働[illegible]せらるゝことは[illegible]
の如き[illegible]に[illegible]して、[illegible]ることはない[illegible]

まと化するに至つた。土地及び資本の対立は利潤と対比せる所
たなる地代の[illegible]に化した。同時に[illegible]の価格暴騰は[illegible]間
問を発起した。[illegible]なる[illegible]が得られた為めに[illegible]なる[illegible]村を試
しつゝある[illegible]階級は地主に対して[illegible]を[illegible]へつゝあるのであ
る。如何なる資本及び地代の原因並に其の[illegible]は[illegible]に存
するや、而して[illegible]に[illegible]を要する者であるか、[illegible]階級の
大多数は[illegible]者と化した。[illegible]は如何にして決定せらるゝ可
きものであるか。[illegible]と利潤とは如何に対して如何なる割合を
得るか。機械の使用は地主、資本家及び労働者に対して如何なる
影響を及ぼすか。而して[illegible]は如何なる階級によつて負担せら
るゝ者であるか、斯くの如きは実にデウイツド・リカードが前
に置かれたる問題であつた。彼れに取つては[illegible]常に[illegible]
及び利潤に関する研究たるよりも寧ろ[illegible]の[illegible]に分配せ
る階級間に於ける其の分配を決定する法則の[illegible]であつた
階級[illegible]の[illegible]よりも大ならず、一千八百[illegible]年に於ける[illegible]の[illegible]
約及び[illegible]は[illegible]として[illegible]其の[illegible]のものであつた。一千七百八
十九年の[illegible]に[illegible]にかゝる[illegible]に[illegible]行
財[illegible]に対して[illegible]らざる[illegible]して[illegible]第十八世紀に
於ては[illegible]は存在した。而も[illegible]は未だ其の[illegible]を見
ることはなかつた。[illegible]なる[illegible]である。[illegible]は其

の不可侵たる人民に[illegible]為にこれに對して公共の安寧を保持するによつて[illegible]を與ふるの義務がある」と規定せる「人權宣言」の第二十一條に於てこれを社會主義的のものと解釋す可きではない。同宣言の第十七條は「財産權は不可侵にして神聖なるが故に、法律上確定せられたる明白なる公共の必要の場合に於て、前以て公正なる賠償を與ふるを條件とするの外、何人と雖も之を剝奪せらる可きものではない」と規定してゐる。而して一千七百八十九年の革命主義者の大多數は啻だに財産權を尊重せるのみならず、階級鬪爭に對して殆んど何等の注意をも拂つてゐない。彼れ等は總べての者を平等一樣に市民として同胞として取扱つてゐる。資本家對勞働者の對抗は未だ十分に顧みられてゐない。一千八百三十年七月の佛國革命も亦た市民階級的性質を具有するものではあつたが、而も無産階級をして更らに著しく緊要なる地位に立たしむるの效果を有して居つた。斯くて一千八百三十一年には巴里絹織物工の一揆を見、同三十七年には勞狀黨の運動が英國に起つたのである。而して終に一千八百四十八年には貧民階級的大革命が佛國に發生した。第一革命を以て第一及び第二階級の特權に對する第三階級の蹶起と觀るならば、第二革命は第三階級の其れに對する第四階級の蹶起であると稱することを得やう。從つて此の二月革命前に於ける社會主義は猶ほ市民階級的中層階級的精神に支配せられゐた。而も吾人は先づルイ・ブラン及びプルードンの所論中に於て貧民階級的精神への過渡を認む

[illegible]階級的[illegible]一つの大なる[illegible]リカードオ[illegible]日身の[illegible]に於ち、リカードオ[illegible]經濟學の發生を見たのである。[illegible]に存在しつゝあつた社會の歷史は階級鬪爭の歷史である」と言を起し「貧民階級の失ふ所は唯だ彼れ等の鐵鎖のみであつて、得る所は世界である。凡ゆる國の勞働者よ、團結せよ」と絕叫して團結せるマルクス及びエンゲルスの「共産黨宣言」の第一版が倫敦に於て印刷器を離れたるは二月革命が巴里に於て勃發せると同一日であつたと傳へられてゐる。而してマルクスが初めて「貧民獨裁」の文字を使用せるは一千八百五十年に現れたる其の「一千八百四十八年の佛國階級鬪爭」に於てであつた。而して彼れが「階級鬪爭は貧民の獨裁に導く」と做すの觀念の創始者たることを自認せるは是れよりも二ケ年後に於けるヴアイデマイヤー宛の書簡であつた。

八

他方に於て經濟學其の者は又た勞働階級によつて變革せられた。經濟學上の理論と現實の具體的經濟狀態との間には甚しき相違の存することが發見せられた。而して這般の相違は新たなる問題が發生し、新たなる社會階級が構成せらるゝと共に擴大と爲りつゝあつたのである。洵にリカードオの光彩ある演繹的によつて破壞せられたる觀察の方法を復活せしめたるものは演

済的若は政治的の提供する論てのものであつた個人の権威に由つて而も決して個々の労働問題であつた。斯くて経済的若は政治的理論は[illegible]たゞたなかつた。経済的若は政治的に存在するものも、に人間を個々別々[illegible]とするものである。即ち一は人間を[illegible]個其の各々を[illegible]によつて[illegible]、[illegible]其の、又た彼れが一定の階級、即ち時代に於ける[illegible]て[illegible]せんとするものである。経済的若は政治的[illegible]一たければならぬ。人間の社会、即ち其の[illegible]関係の[illegible]たる[illegible]を[illegible]とするものは常に[illegible]して経済的[illegible]的若は政治的の要件[illegible]でなければならない。是に於て[illegible]更に[illegible]其の當初に於ける[illegible]に[illegible]ウイルヘルム・ロッシェルが其の[illegible]に於て[illegible]如く、[illegible]若は[illegible]問とした。而して是れに對する[illegible]は其の時代によつて[illegible]世界的に、[illegible]は[illegible]的若しくは[illegible]的に[illegible]次いで[illegible]に[illegible]めるものは、[illegible]であつた。而して吾人が[illegible]に[illegible]の[illegible]的自由のみを[illegible]せずして、[illegible]たる[illegible]のみを[illegible]して[illegible]時、[illegible]の更らに[illegible]らざるを得ない。[illegible]の其れに[illegible]し、其の[illegible]り、而して又た吾人は[illegible]

る。経済的現象は道徳的変化を存せざるものではない。経済的現象は其の存在其の者に於て倫理的であり、而して又た倫理的に取扱はる可きものである。不幸なる者の間に行はるゝ誤れる立場として労働契約を論ずるは不合理である。労働者は其の労働を賣るが、然るに是れは[illegible]せざるを得ない。而して彼れは[illegible]彼れに[illegible]する権利を[illegible]し、[illegible]が彼れより要求する[illegible]行するの[illegible]なき[illegible]に彼れを[illegible]する如き[illegible]によるのはなきに[illegible]しめらるゝのである。労働者[illegible]て自由と[illegible]するは[illegible]の自由である。而も彼れは生命を存し、[illegible]的[illegible]的の関係と[illegible]と[illegible]する[illegible]ならぬ[illegible]の自由に對し、[illegible]に[illegible]し、永久的[illegible]に對して[illegible]たる直接関係を存する[illegible]に[illegible]關係たるものではない。茲に必然[illegible]と[illegible]によつて[illegible]たる自信とによつて一[illegible]経済[illegible]は[illegible]に[illegible]することなく[illegible]ることを得たのであつた。

エンゲルスの[illegible]化[illegible]人間の制度は[illegible]を存することとなつてものであつて、[illegible]し、[illegible]は変化する[illegible]一定時[illegible]は[illegible]く其の[illegible]り、其の[illegible]経済的[illegible]て其れた[illegible]を存するものであつた。

政黨政治と政黨組織

澤田謙

一

近時わが國の政情は、いろ〳〵なことを考へさすではないか。

立憲政友會總裁、田中大將の謂ゆる『三百萬圓事件』といふのが起つた。事案は、佐藤繁吉氏なる人が、大將の政友會入りについて、その持參金三百萬圓の融通を、神戸の乾新兵衛氏に橋渡ししてやつた。にもかゝはらず、約束の報酬金をくれない。だからその支拂を請求する。といふのであつて、四十八萬圓請求の訴訟を提起したのである。訴訟は不思議にも、その翌日、すぐに取り下げられた。が、問題はその訴訟の成否にあるのではない。大將が、果して、何等かの利益を口約して、乾氏から金をひき出したか否か、その事實の有無である。大將は、「そんなことはない。事實無根だ」と、言はれたそうである。われらもまた、その『事實無根』なることを切に祈る。しかし、その積極的辯明は、まだなされてゐない。或はそんなことが……といふ疑問を遺したまゝ、事件は闇から闇に葬り去られやうとしてゐる。

一方、憲政會に對しては、こんな『噂』が立つてゐる。大阪の遊廓移轉問題について、城東土地會社が、凡そ三百萬圓ほどの札びらを、政府筋にばら撒いた。これには、田中總務や、俵、頼母木の各政務次官や、三木參與官などが、あづかつてゐる。と、いふのである。同黨の臨時總務會では、根も葉もないことを、馬鹿らしいまで滑稽につくり上げたものだ。恐らく政友會あたりの宣傳であらう。と、いふことに一致して、その宣傳をした人間を、ふん捉へることに、相談一決したといふことである。われらは、その犯人が、一日もはやく、『ふん捉へられる』ことを望むものである。でないと、その『噂』は、半信半疑のうちに、國民の頭を支配する虞があるからである。

最後に、政友本黨に對しては、昨年の春、政府との妥協料と

して、じり貧に陥つたといふ「時」がなつた。時が、いかにして、この命を、[illegible]段階まで仕向けたか、といふところまで、即しずかに伝へられたものである。議会にキャステイング・ヴォートを握る政友本党、この態度如何によつて、解散か非解散かの決が動かされる政友本党。それを背景にして、この時は、相当に物議をかもしたのである。しかもこの時も、不幸にして、つひに「時」以上に出でなかつた。

この二つの時。それは単に「時」である。いつても「時」以上に出ない。しかし、それが時以上にでないだけ、それだけ始末にわるいのではあるまいか。かういふ時が立つと、当事者は、いつでも、判で押したやうに、「知らない」「時……事実無根だ」といつて、済ましてゐる。当人はそれで済んだつもりかも知れないが、国民の疑惑は、そのたびに深まつてゆく。この疑惑は、政治家に対する「アハヽ」といふ[illegible]くらゐでは、なかなか拭へないのである。結局何が何だかわからない[illegible]り、時は疑惑を生み、疑惑はさらに疑惑を生む。

一たい、現代の政治家たるものは、国民の信用の上にたつてゐるものではないのであるか。しかるに、かゝる「時」をたてられ、これを「時」として、そのまゝに放任し、平気でゐるといふことは、すでに国民の信頼を裏切るものではあるまいか。かゝる時それだけで、致命的であるとさへないことか、すでに政治家としての資格を欠くものではあるまいか。政党にしてもさうである。あられもない時を立てられながら、その潔白をすらも証しないこと、出来ないでも平気でゐられるといふことは、その政党が公器でないこと、既に国民の上に立つてゐないことを、少なからず、立証するものではあるまいか。

そこに問題がある。政党は国民の組織する公器であるか、或は、私人の結合にすぎないか。——

政党組織の問題、それである。

二

[illegible]問題に関連して、田中大将に「政治といふものは、分からなくてはできるものではないからなあ、アハヽ」と云はれたと、新聞紙にでてゐたが、これは千古の名言である。政治に分らぬ人がなること、政党に分らぬ人がなること、これは[illegible]なければにならぬ。政党には、有価値もいれば、無価値もいる。今日[illegible]国内においては、堂々たる傑物である。政党に分らぬ必要なこと、[illegible]必要なことには、わけがわからぬもし政党の[illegible]ではないならば、[illegible]の

みが、自殺すべきはづのものではあるまい、

憲政会總裁、加藤高明伯の物故により、若槻禮次郎氏を、新總裁に推戴しやうといふ議があつたとき、若槻氏は「わたくしに財界に背景がないから、大政黨の首領としては不適任であらう。濱口君のほうがよからう」と、一應辭退されたといふことである。こゝにも、同様の誤解がある。憲政会が、若し、その公言するが如くに、國民の上に立つ政黨であり、國民の組織する政黨であるならば、黨首が財界に背景を有するや否やは、問題ではないはづである。強いて、財界に背景なきものは、黨首としての資格がない、といふならば、この政黨は、國民の外に立てるものにほかならない。

が、しばらく、『はづ』を説くをやめて、現實日本の政治を直視しやう。金がなくては、財界に背景がなくては、政黨の首領はつとまらぬのが、現實日本の事實である。政黨が國民的組織でないからである。『領袖』と稱するものの組織する私黨であるからである。原敬氏の死して以來、しきりに政黨の分裂や結合が、政治家たちの勝手次第に行はれるのも、この故である。若し、日本の政黨が、眞に國民の組織する公黨であるならば、そのやうに簡單に、分裂・結合ができるわけはない。日本の政黨の特色の一つは、それに個人的色彩が強いことである。

そこに問題がある。政黨を個人的なものに止まらしめることは、それは果して民本主義の政治を、順調に發達せしめる所以であらうか。民本主義とは、リンカーンの言へるごとく、「人民のための、人民による、人民の、政治」であるとするならば、民本主義の下における政黨も、「人民のための、人民による、人民の政黨」でなくてはならないではなからうか——政黨組織の問題がこれである。

三

つぎに、政黨自體のために、政黨政治家の立場から、これを考へて見やう。

憲政会にしろ、政友会にしろ、政友本黨にしろ、その最も關心する早急の大問題は、いかにして、普選後の政局に處すべきか、といふにあらねばならぬ。露骨にいへば、いかにして從來の地盤を擁護すべきか、或は、いかにしてさらに地盤を擴張すべきか、といふことが、大政黨にとつて、最も苦心の存するところである。從來の謂ゆる「地盤」とは、三百萬の有權者の上に有した地盤である。それが、一擧にして一千萬を増加し、四倍以上の一千三百萬となつた。かれらが『地盤』の擁護に腐

心するのも、あながち、無理ではない。

これまでの「地盤」といふのは、政黨に、黨首があり、幹部があり、その下に代議士があり、これらが、各地方において、選擧民なるものを籠絡し、これを驅使して投票をかき集めさせてゐた。それが謂ゆる「地盤」であつたのである。その地盤が、この傾向は、下層の有權者に對して、果して、役に立つであらうか、どうか。それが問題なのである。人民が築き上げた地盤ではない。黨首から、順次に、人民の前に、かき集めた地盤である。その基礎は普通選擧法の實施とともに、動揺を來しつゝある。新らしき酒は、新らしき革嚢に盛られねばならぬ。新事態には、これに順應すべき、新方法がなければならないであらう。

そこにもまた問題がある。これは、獨り政黨の問題にはあらず、われらすらも、政黨組織の問題を、眞面目に考へなければならぬほどの事態に、現在は立ち至つてゐるのである。政黨組織といふことは、もはや机上の空論ではなくなつた。

それと同時に、無産政黨組織の問題がある。第一次の無産政黨——農民勞働黨——は、不幸にして、官憲の違法たる命令のため、結黨式を擧げて、一時間の生命しかもち得なかつた。農民勞働黨が解散に處せられた理由の一つは、組織方法に關するもの——組合を單位とすることと——であつた。これでは、官憲の以つて合法的なる組織方法となすものは、果して何であるか。これが吾々の問題であるが、——（なぜなら、從來の日本の政黨は、組合といふやうなこの組織を、まだもつてゐなかつたのであるから）——無産政黨自體としても、その組織形態は、その將來の發展のために、充分に慎重なる考慮を要するであらう。若し無産政黨の使命が、政治に、合理的なるものであらうとするならば、その政黨組織の方法も、また在來の政黨とは、全然異なるものでなくてはならぬ。これを要するに、政黨組織の問題は、日本の政黨政治を向上さすために、民本主義の理想に近づくために、在來政黨のためにも、無産政黨のためにも、一面、二面、四面の意味において、現實的に考慮されねばならぬ問題である。いや、これが問題とならないやうなら、日本の政治は向上されない。

四

もう一度、あらためて申さう。日本の政治を向上せしむべき唯一の方途は、政黨組織を改革することにある、と。なぜなら、政黨政治は、現時の日本において、すでに、確定せる事實であるから。

[illegible]、[illegible]ではない。さ
『政治』、政治學の上[illegible]ではない。さ
して、政黨政治を、政治の理想とするといふことでもない。た
だ、現實の事實として日本の政治を見るとき、それがすでに、
政黨政治の形態をとつてゐるといふ事實に、眼をふさぐことは
できまい。そして、現實的政治論は、現實的政治事實の上に、
立脚しなければならない。

元來、「政黨」なるものは、『法律外の制度』（エクストラ・リーガル・インスティチューション）として
生れ、『法律外の制度』として發達したものである。帝國憲法を
とつてみても、「政黨」といふ文字は、いづこの處にも發見する
ことはできない。にもかゝはらず、憲法によつて設定せられた
政治組織は、事實において、「政黨」といふ、憲法の必らずし
も豫想しなかつつた制度によつて、運用されつゝあるのである。
この事實は注目を要する。なぜなら、そこに、民本主義におけ
る、政黨政治の必然性と、自然性とがあるからである。

この事實は、アメリカの政治史の上に、最も明瞭、強烈にあら
はれてゐる。アメリカの建國者たちが、その憲法を制定するに
あたつて、極端な政黨排斥論から、「政黨に乘ぜらるゝ虞のな
い」やうにと苦心して、その憲法をつくつたものであることは、
政治史上、有名な事實である。國祖ワシントンも、その『隱退

[illegible]
民に[illegible]
あつたく、政黨を排斥して、[illegible]
にもかゝはらず、政黨と依然として[illegible]つたのを、
メリカこそは、政黨勢力の最も強い國であり[illegible]ヴィユーな
にゆえてあるな。アメリカ政治の最も[illegible]トク
ヴィユでさへ、政黨をもつて、自由政治の「害惡」の一つに數
へてゐる。それだのに、政黨政治がかれまで發達した。その理
由は何であらうか。そのトクヴィユは、政黨が「害惡」である
ばかりでなく、「必然の害惡」であると言つてゐるが、なにゆえ
政黨は「必然」なのであらうか。そこに政黨を要請する社會的
必要がなくてはならぬ。

政黨を惡罵すること、殊に日本の政黨を面罵すること、それ
ほど容易なことはない。それは陳腐でさへある。しかし、若し
政黨が民本主義『必然』の産物であるならば、それを痛罵する
ことは、結局において無駄である。それよりも、政黨自體を改
革することーーそしてそれは主として組織の上からーーーか、
重大ではあるまいか。

しからば、なにゆえ政黨は『必然』なりといふか。

五

第一は、輿論をつくる上の必要である。

アリストートルが「人は政治的動物である」と喝破して以来、人間はだれでも、政治に関係するものであって、だれしもが、確固たる政治的意見をもってゐるものである、といふ迷信が、なほ広く行はれてゐる。したがって、輿論とは、これらの個々の政治人の意見の総和であって、放っておけば、人民の間から、自然に湧きでるものであるかのやうに、一般に考へられてゐるものである。しかし、これは、根本的にあやまれる、幼稚な理論である。事実においては、人民の大多数は、さういふ政治的意見の持主ではない。ことに、政治問題が複雑となるにしたがって、政治問題は甚だしく特殊化し専門化する。かゝる専門化せる政治問題に、一々りっぱな政治的意見をたてうる人が、幾人あるであらうか。専門的な問題を一つとって考へて見よ。これに、一定の意見をたてるためには、中央集権制と地方分権制の一般、現在の財政、租税の方法、等々の問題などぐらゐについては、一通りの知識をもってゐなければならない。知識階級とおいはれてゐる人でも、これに関する見解をたてえた人が幾人あるであらうか。普通にさう思ってゐると自認してゐる人でも、よく内省してみると、狭い意味の「新聞」「ジャーナリズム」から得た材料と、政府から受けた宣伝とによって、甚だしく影響されてゐることを、自覚するであらう。個人的な事柄だけでもこれである。しかるに、政治問題はこれだけではない。無数にある。無数の政治問題に対して、一々政見を構成するといふことは、事実において不可能である。そのためには、すべての仕事を放擲して、全精力と時間とを、これに注がなくては、とても駄目である。それでも足りないであらう。それでは、専門家は、政治ばかりになって、ほかの生活はなくなってしまふ。こゝにおいて、輿論をつくるためには、そして、輿論政治を行ふためには、宣伝や教育によって、人民に、政治的意見をつくるための材料を与へ、その興味を喚起し、自身政治についての要求を具ふるところの、一つの機関が必要となる。政党の政治的機能の一つは、かくして、輿論構成の中心機関となることである。

輿論とは、機械的に、人民の間から自然に湧出するものではなくて、一定の政治的機関の具体的な働きによって、計画的につくらるゝ人民の意見である。

この意味において、政党や新聞が、輿論を成すなどと、非難して攻撃してゐる人がすくなくないが、これほど間違ったこ

とにたい。[illegible]である。政[illegible]なしに、どうして、[illegible]
一輿論といふものが、世の中にありえやう。[illegible]の實現と[illegible]といふことには、[illegible]
治との媒[illegible]として、[illegible]的な[illegible]を現すことになるのである。
責任内閣制とか、政黨政治とかいふものは、實にこの必要から生れたものである。

六

政黨の第二の政治的使命は、かくしてつくられた輿論を、政治的に實現する機關と、なることである。

輿論の作成に參與する機能をもつものは、ひとり政黨だけではない。新聞もあれば、勞働組合だとか商業會議所だとか、或ひはローエルの謂ゆる『非政黨團體』もある。なかにも、新聞が、輿論をつくるに與つて力あることは、かくれもない事實である。しかし新聞は、かくしてつくられた輿論を、實際政治にうつすについては、直接に責任をもつことをしない。あくまで當面の責任者として、この輿論の實現に努力するものは、政黨である。

凡そ、民本主義の政治において、輿論の作成の指導者たりしものが、輿論實現の責任者となることは、輿論政治を行ふ上に、最も必要なことである。なぜなら、若し輿論の中心勢力たるものに、その實現の責任がないとすれば、無責任な意見が、輿論として横行する虞があり、また輿論ほどレデイ・メードを好むものはないから、空疏にして實現性のすくない理想論が、かへつ

民本主義の實際は、輿論政治を行ふことにあるが、輿論政治とは、なにも、直接投票――レフエレンダムとかイニシアテイヴとか――の機會を多くすることではない。直接投票制度の成功すると失敗するとは、問題にもより、政治事情にもよる。また直接投票だとて、政黨の活動なしに、うまく行くわけはない。輿論政治とは、輿論が最もよく政治を監督しうる制度をいふのである。そして、輿論が政治を監督するためには、政治の責任者を分散せしめずに、一つの具體的團體に、責任を集中することが必要である。若し、責任者が抽象的であつたり、多數に岐れてゐたりしては、輿論政治は決して行はれえない。そして政黨とは、かゝる具體的にして全部的なる、政治的責任者の團體の名なのである。

七

かういふ實際的見地から觀れば、政黨の主要なる機能は、第

に、選挙戦においてあらはれる。

輿論の力が、最初の實際政治にあらはれるのは選挙である。しかるに、若しこの場合、政黨といふやうな政治團體がなかったら、どうして各個的な輿論が、實際政治を動かすことができやう。各候補者が、一騎打ちで、選挙を争ふこととならば、選挙を左右するものは、結局その候補者の個人的勢力であつて、そして當選した個人は、たゞ私的な政治責任をもつにとゞまる。これを公的政治責任に化するのには、候補者が、政黨といふ機能的政治團體を代表するによつてゞある。

或はまた、理想選挙なぞと唱へて、自分は候補者の條件に、出して下さいと頼むのではない、諸君がたてゝくれと頼むなら、出てあげるのである、などゝ誇らげに宣言を吐くものがある。政黨が、一定の共同的な政治的意見を掲げて、輿論の指導を求め、その實現について、人民の投票を要求するでなくて、なにが輿論政治であらう。たゞ、理想選挙も、或る場合に、また無制的には、結構であるとしやう。かゝる人々は、主として、不偏不黨を標榜する所謂『中立候補』に多いが、そして中立候補も、ある特殊の事情の下には、止むをえないこともあるが、た試みからした『私利候補』であつては、輿論はつひに選挙を支配することも、したがつて、政治を支持することもできなくなるであらう。私的候補を責めるのではない。私的候補の出現を餘儀なくする、未發達なる政黨政治を責めるのである。

しかし、一旦政黨が成立すると、そこに政黨政治が發達すると、かゝる孤立なる私的候補は、實際について、出現の可能性がすくなくなる。これは、政治史上、あきらかなる傾向である。なかには、政黨と政黨との爭に乘じて、漁夫の利を占める人がないでもないが、これは少數の異例であつて、かうして當選した人も、また、實際に政治を行はふといふ誠意があるならば、なんらかの形で政黨に關係し、その政黨の力をかりて、自分の政見を實現化させるをえない必要に、迫らるゝのを常とするのである。

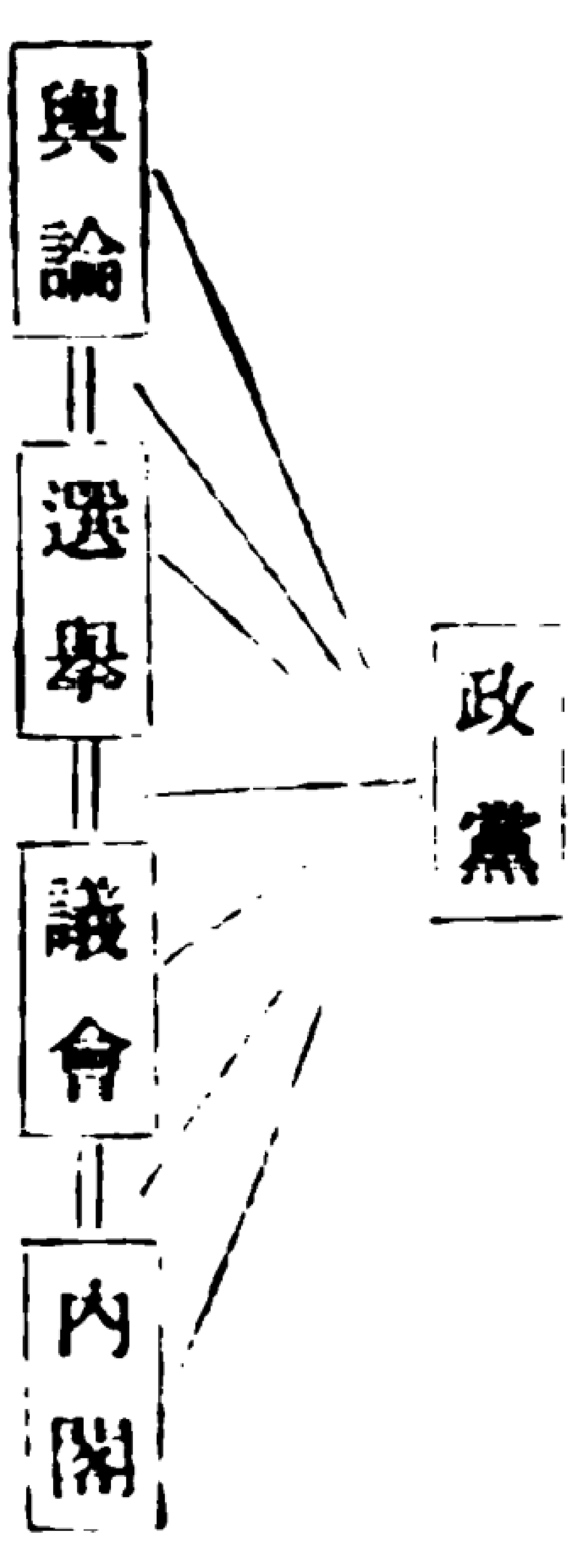
八

さて、選挙よりも大切なことは、政策の實現といふことである。昔前の劃分の慣例によるならば、政治的意見が政治的實行となるまでを、「立法」によつて、また、立法と行政との二つにしてゐる。しかし、これを一機能によつて觀察すれば、立法と行政との二つは、しかく截然とわかたうるものではない。科學的學者は、従來の慣例によつて、依然、政治組織を立法、行政の二部、または司法を加へて三部にわかつてゐるが、政治の實際

について みると、かゝる區別はありえない。事實においては、法律を制定することと、法律を施行することとの間には、避くべからざる因果の理によつて、並行關係があるのであつて、施行を目標とせずして法律を制定しがたきごとく、制定を前提とせずして施行することも不可能である。實際の場合にあたつては、勅令、閣令、省令などの名目において、行政部が立法の仕事をやつてゐるではないか。

かくのごとく、立法と行政との間には、避くべからざる因果關係がある。にもかゝはらず、三權分立の理論に眩惑されたる人々のために、實際の制度まで、立法部と行政部とを、確然と分立せしめられてしまつた。政治學者もまた、これを是認する傾向がある。そこに、制度や學理（謬まれる）と、實際政治との矛盾が出現する。かくして、實際の政治を行ふにあたつては、この制度上不自然に分立してゐる二大政治部門を、事實上において、連結することが必要となるのである。そして『政黨』は、實にその連結者としての機能を果すものである。

いくども述べたとほり、輿論の作成に政黨が關與する、そしてその輿論に對して、政黨は責任をもつのであるが、しからば、いかなる方式によつて、政黨はその責任を果すのかといへば、それは主として、立法議會においてゞあらねばならぬ。なぜなら、人民の參政權が、直接に表現されるのは、立法議會による立法部の構成においてゞあるから。ところが、實際において、立法と行政とは不可分のものであるから、立法部はかぎりで、その政策を實現することはできない。立法部の勢力が、なんらかの形で行政部を動かすか、或は立法部の構成者と行政部の構成者との間に、なにかの共通の要素があるのでなくては、政黨は輿論に對する責任を果すことはできない。また輿論も、實際の政治を動かすことができない。政黨政治とは、かゝる不自然なる制度の欠陷を補ふために、自然にまた必然的に生れたものである。輿論が完全に政治を支配監督するために、立法部と行政部との連結作用は、謂ゆる責任內閣制において、最も簡明に行はれる。すなはち、立法部で多數を占めた『政黨』が、行政部たる內閣を組織するのである。これを政治學上、『議會制』または『內閣制』といひ、イギリスを典型的なものとして、主としてヨーロッパ諸國に行はれる。日本もまた大たいこれによつてゐる。議會制の場合における、政黨の機能を、圖に示すと、つぎのごとくになる。



これに對して、アメリカ合衆國を典型とし、主として南北兩米洲に行はるゝ、謂はゆる大統領制度は、これほど簡明ではないが、そして政黨政治組織上の、一大系統の一をなすものであるが、これは、後章に譲る。

九

以上は、やゝ冗長になしたかも知れないが、政黨が政黨政治について、世に、あまりに曖昧に流布してゐるやうに思はれるので、詳説したが、これを要するに、政黨とは、政治組織の創案者が、故意に、意圖的に、設定した制度ではなくて、民衆生活の政治を運用する上の必要から、自然に、必然的に、生れ出つゝあつた法律外の制度であつて、それが自然であり必然であるだけ、それだけ、一層の政治理論や一般的な政治組織によつて、説明するあたはざるものである。

しからば、民衆生活政治の上における、政黨の使命とはなんであるか。諸々の政治現象の主動者となり、これを組織作用となり、もつて、これらその生活は流れはない現象たるべきものを、一貫した政治に仕上げることである。まづ政治的首脳の中心勢力となつて、輿論を作成せしめ、つぎに、議會の中心勢力となつて、輿論をこれに反映せしめ、最後に、內閣と內閣の中心勢力となつて、實際の政治と輿論とを、一致せしめる。輿論政治は、政黨によつて、はじめて可能となり、民衆生活の政治は、政黨が存在することによつて、はじめて一貫した生命となるのである。

現代の政治が、この主義において民衆生活、その實質において輿論政治、この運用において政黨政治、であるといふのはこの意味である。

もし、政黨政治にして、かくのごときものであるとするならば、日本の政治を發達せしめる所以は、決して、徒らに政黨を排斥することではない。かへつて、これを大なる政治機關として認め、その公的なる政治作用を、もつと堂々と自由に活潑せしめることである。政黨はすでに、私黨ではない。この政治的機關は、政治の本質を擔ふものである。簡單に見れば、內閣よりも議會よりも重大なる、國家の政治機關である。これを、やゝもすれば、私的に考へられ、私的に利用されたところに、日本の政治の缺陷がある。

つぎに、政黨を、廣く國民のものとすることである。すくなくとも政黨の組織を、國民の上に、公開せしめることである。かくして、政黨ははじめて輿論の府となり、議會の中堅となり、政黨は、內閣における人民代表となりうる。もし政黨にし

二、[illegible]

は、依然として、貴族政治の範圍を脱しえないでゐた。

一〇

しからば政黨は、いかにして、眞に、國民的基礎をうることができるか。これを識るためには、しばらく、イギリスの政治史を回顧しなければならぬ。

イギリスが現在のやうな政黨組織をつくるにいたつたのは、最近、五十年くらゐの發達である。それまでは、日本の現在の政黨と、あまり大差はなかつた。それが、從來の個人的政黨の臭味を脱して、民本的傾向をとるにいたつた契機は、一八六七年の選擧法改革、それによる選擧權の擴張と選擧區の改正にあつた。このことは、新選擧法の實施に當面する、日本の現在の政治が、特に注目していゝことであらう。

新政黨組織の先鞭をつけたのは、バアミンガムの自由黨であつた。自由協會の幹事、ウイリアム・ハリスは、この新事態に應ずる新組織がなければならぬことを信じ、一八六七年十月、新規則を制定した。これによると、およそ年に一志の會費を納むる自由黨員は、すべて會員となる。會員は、年大會において、四名の幹事及び二十名の委員を選擧し、これらをして執行委員[illegible]

[illegible]選出されたる[illegible]名の委員[illegible]。たゞ、[illegible]一[illegible]の習慣によつて、委員會は三[illegible]の成員により、なほ[illegible]の委員を加へることができるやうになつてゐる。この執行委員會が、會の事務一般を掌るものであるが、そのほかに、一般委員會なるものがあつて、それは委員數の概數によつて、普通「四百名委員會」と稱せられてゐた。當時の政策と、下院議員の候補者とは、この委員會が決定する仕組であつた。

かくのごとく、政黨の組織を、民本的基礎においたといふことは、自由黨にとつて、非常な成功であつた。その最初の總選擧において、自由黨が、バアミンガム選出の代議士を、三名とも占むることができたのは、ひとへに、この新組織のおかげであると、いはれてゐる。尤も、この組織は、ちよつとしたことから、一時頓挫してゐたけれども、一八七三年、當時の政治的天才たるチエムバーレンが出現するにおよんで、まもなく復活し、組織はさらに民本的に改定され、勢力は地方政治に擴大され、一八七三年より一八七六年に亘つては、依然として下院の議席を三つとも、全部自由黨で占めたのみならず、チエムバーレンはバアミンガム市長に選ばれて、市政の改革に從事した。

市政をまつたく自由黨の掌中におち、種々の社會施設がバアミンガムに發達したのは、この民本的自由黨組織の賜である。

チエムバーレンは、政黨組織の民本主義化について、忘るべからざる第一人者である。

二

バアミンガム自由黨のこの新組織については、當時、種々の非難が加へられた。にも拘らず、この民本的組織は、しだいにイギリス全土に模倣さるゝにいたり、一八七八年の末には、バアミンガムに倣ふ新組織をとるもの、一百に及んだといはれてゐる。こゝにおいて、バアミンガム自由黨は、この地方的組織を全國的組織にまで化せんとて、この新組織をとれる地方政黨に對し、一八七七年五月、全國聯合組織の招請を發した。その宣言に曰く。「聯合創立者の要點は、今後、自由黨の、政黨としての行動を指導せざるべからざる原則である。——すなはち、わが黨のすべての黨員が、政策選定の特定方面の、指導及び選定について、直接に參加すること、且つこれに發言權を與へられねばならぬこと、これである。この目的を達するには、政黨の組織を、代議的基礎の上におくほかに、方法はない」と。

この創立總會には、チエムバーレン自ら、議長の席についた。そして、紙上さらに光彩をそへんがため、大政治家グラッドストンの出席をも見た。當時、かれは、すでに黨首たる位置を退いてゐたが、依然として、事實上の黨首はかれにあつた。このグラッドストンが、大會において曰く。——自由黨がこゝに斯の如く、斯の如き堅牢なる主義の旗印を掲げたことは、バーミンガムの名譽である。そして、こゝにかゝる盛大なる發會式を擧ぐるをえたのは、自由黨が、この異彩すべき意義を採擇せんとする事實を示すものである。——と。

かくして、全國自由黨聯合は、賑々しく成立した。この創立總會によつて、決定された規約によると、聯合には、「總會」と稱する一大代議機關がある。總會は、各地方政黨が、ほゞ人口に比例して選出するのであつて、理事會は年に一回定期總會を開き、會長・副會長・會計係・名譽幹事長を選擧する。このほかに、一般委員會といふものがあつて、これは、民本的組織を有する地方政黨の組織發達のために盡力し、總會として活動すべき事業を決定するのが、主なる役目としてある。組織は、理事會の選んだ役員全部と、各地方から選出された委員と、各自治團體の選ぶ二十五名以下の委員とよりなる。

自由黨の新組織は、そのまゝながら、全國的に普及しつゝあつたのであるが、この全國聯合成立するとともに、さらに勢原

の大を加へた。聯合の[illegible]、な改定が行はれたが、政黨組織の基礎を、一般人民の上におくといふ原則については、變りはない。地方政黨の組織にいたつては、各地方によつて千差萬別である。たゞ、これを大別すれば、およそ三つに型態がわかれるらしい。聯合の發行した『自由黨便覽』には、地方政黨組織のモデル案を掲げてゐるが、それも、農村地方、小都會、大都會の三つにわけて、一々もつて模範とすべき規約を掲げてゐる。詳しくは、Notes and Hints for the Guidance of Liberals について見られたい。

要するに、自由黨の新組織は、かくして成立し、かくして發達し、かくして現在の狀態に達したものである。

二

これに對して、保守黨も、自由黨とほゞ同様な組織をもつてゐる。そして、自由黨のそれと、ほゞ同様な經過でもつて、相前後して發達したものである。その說明は、煩はしいから、ここではしない。たゞ保守黨の組織は、自由黨にくらべて、やゝ貴族的であり、やゝ階級的である、といふをもつて足るであらう。

保守黨について、注意すべきは、黨自體の組織よりも、むし

[illegible]
[illegible]だ。自由黨の[illegible]
位を保つてゐるのは、主としてこのプリムローズ聯盟に[illegible]リスの山間僻地にまで、行き亘つてゐるためであるとさへいはれてゐる。

プリムローズ聯盟といふのは、一八八三年、保守黨の大政治家ビーコンスフイールド卿の銅像除幕式にあたり、保守黨内の叛徒たる『第四黨』によつて設立されたもので、その名は、ビーコンスフイールド卿の好める花にちなんで、かく名付けたものであるといふ。

聯盟は、宗教の維持とか、英帝國の盛運とかを、目的とするものであると、その綱領はいつてゐるが、事實において、保守黨の遊擊軍たることは、疑ない事實である。この聯盟は、創立後四年にして、會員五十萬に達し、さらに四年にして一百萬となり、十九世紀末には、すでに百五十萬の會員を擁し、優に自由黨の脅威となるに至つた。

プリムローズ聯盟が成功した原因は、主として、(一)男のみならず女の會員を集めたこと、(二)すべての階級のものを網羅したこと、(三)名譽上の階級を附したこと、にあるといはれてゐる。なぜなら、それはイギリスの中下流階級の氣風に投ずる

ばかりでなく、社會的地位の上流に位する婦人の努力が、投票をうる上では、最も有力であるからである。

會員は、大別して二種にわかれる。第一は普通會員で、これが會員の九割以上を占めてゐる。第二は普通の會員以外に、年年クラウン（二志半）を納めるものは、騎士（男）または貴女（女）と稱せられる。しかしこの區別は、名前だけで、權利はまつたく同じである。この會費でも支拂ひ得ないもので、さらに「婦人貴女自治事務協會」といふのを設けて、年に一ギニー（二十一志）の會費を納めることにした。騎士でも貴女でも、すぐになれるのではなくて、まづ一〇〇〇〇〇〇となり、一年間の精勤によって、〇〇〇〇〇となり。さらに功績により、はじめて〇〇〇〇といふ、名誉ある稱號にも昇りうるのである。この稱號、地位に應じて、各々、勲章または〇〇〇授けられる。

〇團の支部を「ハビテーション」と稱し、十〇名以上の會員またはは貴女あるところには、〇〇〇〇〇〇〇の許可を經て、これを設立することが出來る。〇〇〇〇〇の團員は、〇〇〇〇〇〇と稱し、多く保守黨の首腦がこれに任ずる。

プリムローズ團は、選擧に際しては、有力な騎士や貴女の〇〇〇〇の會を催したり、園遊會をやつたりして、會員〇〇の〇〇〇〇〇〇つてゐるが、一旦選擧となると、會員は忽ち動員され、猛烈なる運動にとりかゝる。ことに婦人の活動は目覺ましい。もとより、雜誌やパムフレットは、絶えず出してゐるが、これよりも、選擧の際の直接運動が、最も有効であつて、自由黨の〇〇〇つたれは、この有力な團體の活躍である。といはれてゐる。

自由黨もこれに倣つて、まもなく、婦人自由黨聯合會をつくつたが、主として婦人參政權問題の下によるもので、とてもプリムローズ團の活動には及ばない。

三

しかしながら、自由黨を沒落せしめたものは、保守黨の活躍ではなくて、勞働黨の擡頭である。

由來、自由黨はその勢力の大半を勞働階級からえてゐたにまたれ中の勞働階級も、大たいにおいて、政治運動としては、自由黨を支持するをもつて、滿足してゐたのである。しかるに、この勞働階級に自覺されては、自由黨はまるくさるを得ない。しかも、勞働階級の自覺的政治運動は、必ずしも、勞働黨の成立以後にあるのではない。ハインドマン、モーリスなど社會主義者の努力による、社會民主聯合がおこつた。而〇〇〇〇黨がおこつた。しかも、これらの團體は、ついに、政治運動と

して、[illegible]たつてゐる。[illegible]たらば、労働組合とは無關係に組織され、無關係に活動してゐたからである。のみならず、かれらは、労働組合に對して、公然と『宣言』を發布して、労働組合が資本家と妥協して、本來の使命を忘れてゐることを摘發しかれらが組合員の特權的賃銀の増加にのみ腐心して、民衆の貧苦には盲目であることを、極力攻撃してゐたくらゐである。

しかしながら、労働階級の政治運動は、労働組合の力によるにあらざれば、結局において、無駄である。もし労働組合が、資本家と妥協的であるならば、その程度において、労働黨をつくらねばならぬ。この見地から、『獨立労働黨』ができた。獨立労働黨は、はじめから労働組合を基礎として、労働黨をつくるべきことを、主張してゐる。當時において、労働組合は、すでに、産業上の一大勢力となつてゐた。この勢力を、政治的に活用するためには、自由黨を後援するばかりでは足りない。獨自の政黨をもたねばならぬ。といふことを提唱したのである。

政治を支配するものは、『政黨』であるといふ、事實的眞理に、かれらは眼覺めたのである。そして、その政黨組織の方法において、かれらはまた、正確なる見識をもつてゐた。

獨立労働黨の努力によつて、労働組合大會が、労働代表委員[illegible]成立したる[illegible]、『労働黨』と改稱したのに、[illegible]七年後の一[illegible]あつた。設立當初、三十七萬にすぎざりし黨員は、七年後の一九〇七年において、すでに百萬を超え、一九一五年において、二百萬を超え、現在においては、實に三百萬以上の黨員を有する。選出代議士數も、一九〇〇年は僅かに二名にすぎなかつたが、今日においては、代議士數百五十一名、投票數九百四十八萬七千六百二十にして、英國議會における第二黨たるはいふまでもなく、總投票數の三分の一以上を占めてゐる。

それでは、労働黨が、かくまで急激なる發達をとげた、その理由は何であるか。その組織が、これまでの政黨と、全く選を異にした共働的なものであつたからである。

一四

「労働黨は、その一切の加盟團體（労働組合、社會主義團體、協同組合、労働評議會、及び地方労働黨、）並に、地方労働黨の個人黨員にして、黨の黨規及び綱領に同意する、男女より成る」

労働黨々規は、かく黨員を規定してゐる。労働黨は、地方労働黨を基礎とするを、原則とする。すなはち、労働組合、協

働組合、その他の団体を、団体として、直接に労働党に加入せず、地方労働党によって代表される。地方労働党のないところでは、労働評議会が、これに代はるのである。委代は、労働組合その他の団体と、地方労働党とが、党員数に応じて、これを定める。

党の大会の選出法は、二種である。（イ）は、党に加入する労働組合その他の団体に代はって、会員一千名につき一名の代議員を送る。（ロ）は、地方労働党の代議員で、その選挙区から選出される代議士と同数の代議員を送る。またこれらの組合は、直接に党大会に代表されるとともに、地方労働党を経て、間接にも代表されるのである。」

労働党の執行機関は、全国執行委員会で、委員数は二十三名、党大会において選挙される。

いふまでもなく、労働党の組織分子のおもなるものは、労働組合である。労働組合大会に加入する労働組合の組合員数四百三十万のうち、三百万以上は、労働党に加入してゐる。この三百十五万の労働党員のうち、労働組合に属せざる社会主義団体その他の団体の党員数は、僅かに四万五千で、三百十一万は労働組合の組合員である。

イギリスの労働党が、かくのごとく偉大な発達をとげたのは、その党の組織において、労働組合が中心となってゐるからであることは、いふまでもないことであるけれども、そのもっとも有力な理由は、労働組合員が、すでに著るしい発達をとげてゐたからである。

この点は、日本の無産政党のために、考へなければならぬところであらう。無産政党が、結局において、労働組合を基礎としなければならぬことは、いふまでもないが、無産政党の発達は、つねに、労働組合員の発達と、相伴はねばならぬ。

一五

最後に、アメリカの政党政治について、一瞥しておく。

アメリカの政治組織は、最初に、政党政治を排除しようとして、構成されたる。しかるに実際においては、かへつて、政党の跋扈は、世界中で、最も甚しい国の一つになつてゐるといふことは、まへに述べた。それはなにゆゑであらうか。

大体、アメリカの憲法は、極端な権力分立の上に建設されたものである。ただに各部の権力が、ことにこれらの権力が一政府に集中することを恐れて、立法・行政・司法の三機関を、きはめて厳格に分立せしめたのである。行政部の首長にして、内閣の任命組織者たる大統領と、立法部たる上下両院とは、法律

上、全然、別々に選擧される。だから、大統領に、直接に議會を支配することはできない。たゞ、この間に「政黨」があつて、大統領も政黨の代表者であるし、議會の中心もまた政黨であるので、この點で、やうやく行政部と立法部との連絡は、保たれてゐるのである。この三權分立の主義は、ずい分、極端であつて、立法部の議事には、行政部は一切容喙することはできないし、行政部の仕事には、立法部は干渉することはできない、といふ、極めて窮屈な制度になつてゐる。

さて、制度が、かういふ窮屈なものであると、政黨はよほど力強いものではなくては、その政治的機能を發揮することはできない。民本主義における政黨の機能は、政治の中心勢力となり、その連絡作用となつて、政治に一貫した生命を與へるにあるのであるが、制度が、この機能を排除するやうに、用心堅固にできてゐれば、できてゐるほど、その間で無理にも機能を發揮しやうとする政黨は、ます〱力強くならなければならないのである。これは、激流に架せられる橋梁が、特に堅固でたければならぬのと、同樣の理である。

かくて、アメリカの政黨政治は、建國者たちが予想したものとは、まつたく正反對な結果を生むに至つた。

いまアメリカの政治における政黨の機能的地位を、圖によつて圖表にすれば、つぎのごとくになる。



この圖表は、第八項に掲げたものと、これを對照してもらひたい。

一六

かういふわけであるから、世に、アメリカの政黨ほど、強力なものはない。アメリカでは、政黨組織の機構を、「機械（マシン）」といつてゐるが、この機械ほど、強ヴオルトの機械はない。おそらく、共和黨と民主黨の二大政黨主義は、いかなる事變があらうとも、びくともしないだらうと思はれるほど、根強い力をアメリカの政治に植えつけてゐる。イギリスも、もとは保守黨と自由黨との天下であつた。しかるに、一たび勞働黨があらはるゝや、僅かに二十年の間に、その傳統は破られて、勞働黨は、やす〱と第二黨になつてしまつた。アメリカでも、一九一二年に、ルーズヴェルトの進歩黨運動があつた。アメリカの政治は

とまつて日本の政界に称へられたかれにして、進歩党は国際は一両の興味人をも捉へることができず、アメリカの政治の進行に、小さな波紋をすら投げることはできなかつた。これはもとアメリカの政党の力は根強い。一昨年の総選挙には、ラフオレツトの第三党運動があつた。共和民主両党の候補者がかれを斥し、米国各側[illegible]、多年の政党が競つてかれを斥し、[illegible]かれを排し、組合員がかれを排し、さらに、各国の進歩主義者が、喫つてかれを助けたにもかゝはらず、かゝることは、まつたく未曾有の出来事であつたにもかゝはらず、ラフオレツトは、僅かにウイスコンシンの十三票を得たのみで惨敗し、中心人物たるラフオレツトの死とともに、第三党は、ほとんど、[illegible]としたではない[illegible]もつて、民主、共和二大政党が、いかに根強きりを有するかを、見るに足るであらう。

しからば、ただ必ずアメリカの政党は、かくまで根強い力をもつてゐるか。この政党組織が、人民の上に建てられてゐるからである。

このことはたとへ[illegible]で、アメリカの政党組織のことを、[illegible]するのは、不可能である。しかし、アメリカでは政党と、日本でいふ政党とは、同じ名は政党でも、その内容は大分ちがふ。そのことだけは[illegible]記憶しなくてはならない。アメリカでに、例は共和党だとか、一例は民主党だとかいふことを、よく聞くが、共和党とは、若しくは民主党とは、人民自身のことなのである。であるから、アメリカの国際政治においては、大統領の選挙よりも、むしろ、大統領候補者の選挙の方が、大問題なのである。民主党または共和党の大会において——その大会には、人民の選挙された代表者が、各国から参列する——大統領の候補者がきまれば、すでに、大統領の選挙は、たかだか了へたものと言つていゝ。大統領選挙においては、ただ、この二人のうちから一人を選挙さへすれば、それで任事に済むのである。

アメリカほど、選挙の多い国はすくない。大は大統領の選挙から、小は村の人民の選挙にいたるまで、この間に、州知事、裁判官、市長、区長、警察署長、あらゆる公吏は、選挙で決定されるといつていゝくらいである。この数しい選挙にも、政党がなかつたならば、いかにして選挙が[illegible]レートにまかせうる。そして、その政党が、人民の組織する政党でなかつたら、現在[illegible]の政治はいかに[illegible]。アメリカの政治組織にまで、政党の精神に[illegible]、これは村に至る政党組織あり、[illegible]政党、州政党、さらに全国的政党組織を完成し、[illegible]することによつて、政府を組織してゐるのである。[illegible]世に、大統領が国務大臣や大公使たちの高官を任命するにあた

り、その政黨的訓練のために、[illegible]のかあるか、アメリカのごとき[illegible]政治に於ては、[illegible]が、それだけの權威と勢力とをもたねば、實際政治には[illegible]に運用されないのである。アメリカの輿論は、その政黨組織を向し、これによつてのみ、政治を支配しうるのであるから。

一七

もとより、アメリカの政黨政治を、そのまゝに、日本の政黨に適用せよと、いふのではない。アメリカの政黨政治に、幾多の弊害があることは、衆人是認するところである。これは認めなくてはならない。また眞似しやうと思つても、政治組織の根本がちがふかぎり、それは不可能である。また、イギリスの政黨組織ですら、それをそのまゝに、日本に適用せよと言はうとは思はない。たゞ、その政黨組織が、個人的でなく、私的でなく、公的に、人民の上に基礎をおいてゐるだけは、多く鑑みるべき點であらうと思ふ。これによつて、政黨は、はじめて、その固有の政治的機能を發揮することができ、これによつて、民本主義の政治は、はじめて、軌道の上を走ることができるからである。

わたくしは、かならずしも、政黨政治を謳歌するものではな[illegible]この行は[illegible]ことはできない。[illegible]もつてゐる。

今日の民本主義、そして今日の政黨政治の運命、これはたしかに大問題である。近時の社會は、單なる民本主義、單なる政黨政治のみでは、たうてい解決しえられないやうな新問題が、続々として出現しつゝある。わたくしは、それに、強いて目をつむるのではない。しかし、それと、政黨組織の改造とは、自ら別問題である。理想的政治の形態を描けといふならば、いくらでも天馬空を馳けうるであらう。われらの目下關心するところは、現實政治の現實的改革である。

政黨組織の改造。それは或は小問題であるかもしれない。しかし、小問題であればあるだけ、それだけ、われらは日常の政治生活を、刻々として形成するのである。その小問題をすら解決しえないで、いかにして、將來の大問題が解決しえやう、とも言はれないことはない。

歴史はときとして飛躍する。制度はときとして激變する。しかし、人民の生活は、一歩一歩、改革され進歩するよりほかはない。政治は人民の生活の上にある。政黨政治の改革といふも、この生活の一方面にすぎない。(完)

人口問題の見地より我外交政策の基調を論ず

神川彦松

一

現下吾國の當面せる最大の問題が人口問題であることは衆論の全然一致せる所である。人口問題の見地より觀るとき吾國が吾史上稀に見る一大難關に逢着し此の難關を如何にして突破すべきかの上に吾國の將來が懸つてゐることも吾人の充分自覺するに至れる所である。現在並に將來吾國民の必死の努力が此の問題の解決のために捧げらるべきは當然であり、今に於て其妥當たる解決方法を考究し發見し決定することが吾國の緊急事に屬することは論を俟たぬのである。人口問題は此を對內的にのみ解決を論ずることは不可能であつて同時に對外的にも解決を考慮せざるべからざる問題である。然して一國の外交政策は其國の安全と利益の擁護を本來の使命とするものであるから現在の我帝國の外交にとり人口問題の解決を目的とする政策が最も重要性を有してゐることは亦明白なる所である。予は以下に於いて吾國人口問題を解決するために果して吾國はいかなる外交政策を採るを以て適當とするかの問題に關し簡單な考察を爲さんと欲するのである。由來事外交に關する場合には一般の言論界に於ても修飾合辭を弄するが普通であり、リアリスチックな觀察を缺くものが常態であるが、予は此考察を爲すに當り冷靜なる科學者の態度を、出來るだけ失はぬやうに努め、なるべく實證的な方法を採りたいと思ふ。蓋し外交的虛飾又は辭令は時事の眞相を誤らしむる虞があり吾々の如き學究には似ざる代物であらねばならぬと信ずるからである。

二

先づ第一に考究すべきは一體或國家の人口問題を解決するには一般にいかなる種類の方法が存するかの問題である。此を歴

史上の實例に據つて研究するに、此を積極的方法及び消極的方法に二大別することを得る。積極的方法とは、人口の自然的增殖の傾向に、人爲的制限を加ふることなく其增殖に對應して、生活資料獲得の方法を講ずる所の解決方法である。此積極的方法にも亦二つの別が存する。即ち武力的及平和的の方法である。前者は國家が其武力を使用して他國又は未開人民の土地を奪取し、又は政治的權力を樹立する方法であり、後者は、平和的に他國の領土又は植民地に移住し、又は、通商貿易を行ひて、一國の人口增加を緩和するの方法である。之に消極的方法は、此に反して、人口の自然的增殖の傾向が自然の進行に放任することなく、此に種々社會的道德的の制限を加へて調節せんとするの方法を指すのである。然らば此等の種々の方法の中吾人に上り、果して、何れの方法が許されてあるか將た又何れの方法が最も妥當であるかを攻究せねばならぬ。

三

先づ武力的解決方法より始める。此の方法は一言にして言へば武力的領土擴張政策であつて、從來帝國主義又は軍國主義と呼ばれてゐるものと本質を同じうする。從來歐洲の列國が人口問題を解決するために採つた政策は主として此の政策であつたのである。由來歐洲諸國の政策は掠奪であつた。彼等は武力を以て、世界到る所弱國又は未開地を征服し、其處に政權を樹立したのである。未開人の住める土地は彼等の眼には無主の土地であると、土人の人格又は權利の如きは何等も此を顧ることをしない。土人は其地に棲息する野獸と同一様に見られたのである。かくて所謂「歐洲の掠奪」となり、地球上の人類の居住する土地の十分の四は彼等が占據する所となり、其陸地面積の十分の九は彼等の政治的支配下に歸するに至つたのである。歐洲諸國の植民地侵略は十七八世紀の進行中に盛に發展し南米大陸及亞細亞の一半は早くも彼等の支配に歸した。十九世紀に入り特に七十年代より世界大戰に至るまで帝國主義は非常の隆盛を見、外交史上所謂帝國主義の一時期を現出したのである。歐洲諸植民國の第一目的とした處は未開人の土地の奪取で、此を植民地となした。而して植民地に對して、本國人を移植し、植民地をして、本國の分家となさんとした。此の本國民の移植をなすことを目的として植民地を領有する場合を特に植民主義(コロニアリズム)と稱し、帝國主義と區別せんとする學者もあるが、其本質は帝國主義たるに何を俟たぬ。或は列强は、植民地を原料品の取得、土人の使役等の經濟的搾取のために利用し又は本國生産品の市場として商業的搾取のために利用するのである。又領土的保存を

[illegible]、又は治外法權、[illegible]、勢力範圍、特殊權、[illegible]權、保護權、[illegible]の名目の下に、植民又は[illegible]地に、[illegible]的勢力を扶植し自國の發展に利用したのである。

歐洲は武力的政策によりて占據したる海外植民地に年々百萬以上の移植民を送り、以て人口問題を處理したのである、今試に大戰以前即ち一八八二年、一九〇七年、一九〇八年及一九〇九年に於て歐洲各國より海外植民地に移住せる人口數を舉げれば左の如くである、

國別名	一八八二（單位千）	一九〇七	一九〇八	一九〇九
イングランド	一六三	二六五	一七七	一八五
スコットランド	三二	六六	四[illegible]	五三
アイルランド	八四	[illegible]	二八	四四
獨逸	二〇四	三三	二〇	二五
丁抹	一三	八	五	七
ノルウェー	二九	二三	八	一六
スウェーデン	四三	二〇	九	一九
スイス	一一	四	三	四
オランダ	七	四	三	三
ベルギー	?	六	三	四
フランス	五	八	三	?
イタリー	六八	四二八	二四六	四〇六

スペイン	[illegible]	一一	[illegible]	[illegible]
ポルトガル	一	四	四	[illegible]
オーストリー	二六	一七七	[illegible]	[illegible]
ハンガリー	六	二二九	四七	一三
ロシア	?	二五	四四	八七
ギリシヤ	?	三六	二二	一四

二十世紀の初以來一九〇九年に至るまで歐洲より海外への移植民は年々大概百萬に達した。歐洲より海外に渡航せる者一九〇五年に於ては百三十一萬を數へ一九〇九年に於ては百三十三萬に上つたのであるが、しかし他方年々海外より歐洲に歸還する者も數十萬に上るであらうから之等の數字の全部を以て歐洲の海外移植民數と見ことは出來ぬが年々百萬人が歐洲を離れて海外に移住することは明瞭で、之により歐洲の人口問題は一大安全瓣を得て居るのである、啻に人口問題の緊急の要求に應ずるのみならず世界に於て未だ人口稀薄なる地方を彼等は領有して將來之に白人の子孫を以て充滿せしむるに至ることを以て白人の天與の大使命なりと確信しつゝあるのである。

四

今眼界を擴くし、全世界的全人種的に人口問題を觀る、全世

界の人口は十六億と推せられる。しかも此十六億の人類が、五大陸に、平均的に分布されて居るかといふと決してさうではなく、地球上に於ける人類の分布は極めて不平均である。今参考のために、五大陸の面積と人口数及密度の割合を左に図示して見やう。これは、一九一〇年の統計に據るもので、より新しい材料に據るを得ないのは遺憾である。が論述の必要の[illegible]には之にて事足りるのである。

五大洋と五大洲　面積　人口と密度

	面積	地球全面に対する割合	人口	密度
北氷洋	[illegible]	[illegible]		
南氷洋（南極海を含む）	[illegible]	[illegible]		
大西洋	[illegible]	[illegible]		
印度洋	[illegible]	[illegible]		
太平洋	[illegible]	[illegible]		
五大洋計	[illegible]	[illegible]		
欧羅巴（西比利亜を含む）	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
亜弗利加（同）	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
亜細亜（同）	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
大洋洲（同）	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
北亜米利加（同）	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
南亜米利加（同）	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
五大陸総計及割合	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]

地球上の陸地の総面積は地球全表面の二六・〇七%に過ぎない。五大陸中人口の既に過密なのは只欧洲と亜細亜のみである。亜細亜は地球上の陸地全面積の三一・五%を占めるが、人類総数の半数以上を包容して居る、欧洲は全人類の約四分の一を包容して居る。大西洋洲大陸にて、全人類の七割七分以上を占めて居るのである。亜弗利加は一割一分を占め大洋洲は一分六厘、南北亜米利加に至りては、其面積は地球陸地面積の三分の一弱を占めて居るに拘はらず、人口は僅かに全人類の九分弱を包有して居るに過ぎないのである。即ち地球上に於て人口の最も稀薄なる大陸は南北亜米利加である。次は大洋洲であり、次は亜弗利加であるのである。

世界の総人口は右の統計によれば、既に十六億千六百万人であるが、若し、世界の未開地が開発せられ、文明の程度が進むにつれて、[illegible]

は、世界の人口收容力は益々増して行く、更に五十億百億の人口を包容し得るに至るであらう、若し夫れ太陽の熱、空氣などを利用して生活資料を得るの方法發見されんか人類の發展は尚無限の餘地ありと樂觀しても可いのである。されば、人口問題は之を全世界的に見るとき決して行詰つた問題ではない、人類の増殖の可能は尚多大に存するのである。現在の生産方法の下に於て歐亞以外の三大陸は尚優に十數億の人口を迎へるを得るのである。之等の地を人類を以て滿たすには尚今後數世紀を要すべきである。

全人類的全世界的に見るとき、人口問題は決して緊急の問題ではないにも拘らず古來此問題が常に人間を惱まし來つたのは何故であるか、固より一つの原因は、經濟的生産方法の發達程度の幼稚に存するのであるが、近代に於ける、人口問題の最大の原因は、地球陸地が、各人種各民族の間に著しく不平均に分配されてゐるといふ事實に存するのである、歐洲外の植民地は殆ど總て白色人種の壟斷する所である、從つて白色人種全體にとつては、人口問題――特に人口の過剩問題は決して急切なものではない、彼等は之等の植民地を他人種の移住に對して、閉鎖せんと欲してゐる。植民地は白色人種の將來の獨占的發展場と目し絕對に他人種の侵入を排斥せんと期してゐる、玆に於て他人種特に有色人種又は有色人種の或る民族に人口の過剩を來すに達せる人種にとつて、人口問題は極めて切實なものとなり、其の生活問題となるのである、しかし、人類的に見るときは、白色人種には人口過剩の憂はなく、之を補充するのは、所謂有色人種であるが、民族的の又は國別的に見るときは、歐洲人の植民地は大部分アングロサクソン及フランスの占有する所であり、其分配が極めて不平均であるために、植民地を有せざる國家、民族にとつては白色人種の中にあつても人口過剩問題は時に重大となることあり得るのである。又同じく有色人種の中にあつても或る民族或る國家にあつても、時々人口過剩の狀態に達せざるものも全くないではないのである。

五

翻つて吾國の人口問題に歸つて考へる。五大陸中人口の稀薄な地方は、亞弗利加、大洋洲及南北亞米利加の三大陸である。若し各國家、各民族間に移住の自由が認められ、人種の異同、民族の區別國籍の如何に關せず、各個人が自由にいかなる大陸へも交通し移住することを許されるならば、固より今日に於ては、いかなる國家いかなる民族、いかなる人種にとりても人口過剩の問題を生じないこと前陳の如くである。されば若し吾國より移住す

[illegible]
[illegible]
最も多く使用され飛行機と共に、大なる作戦を変更するに至つたのである。長距離砲の発明と、航空機の発達のため、[illegible]海峡の如きは従来の如き天然の要害としての軍事的価値を失ひ、英國の大陸に対する軍事的地位を一変せしむるに至つた。更に陸戦用の武器として、追撃砲、手榴弾の如きも改良せられ、又突撃用タンク、航空機射撃砲も発明せられ利用せらるゝに至つた。特に恐るべき武器は毒瓦斯であつて、之は大戦中少からず聯合軍を悩ましたものである。しかし毒瓦斯は戦後各國に於て競つて研究せられ、現に二百種以上の発見を為したと傳へられ、其中には其効力絶大にして、幾萬の人畜を一時に全滅せしめ得る程のものが少なくないといはれてゐるのである。

更に海戦に於ても幾多の進歩を遂げ、潜水艇の如き大戦中盛に使用せられ、幾多の一般市民を殺したのである。

かくの如き軍事的技術の発達の結果、近時の戦争は従来のそれに比し比較にならぬ程の惨憺たる結果を招いた。世界大戦に於て、聯合國側の戦死者は四百四十萬人、重傷者、三百二十萬人、同盟國側戦死者、二百七十萬人、重傷者百萬人であるといはれる。之を従来の戦争に比較すると、佛蘭西革命の起れる翌[illegible]

[illegible]戦死者数に比[illegible]するのである。[illegible]爆発する[illegible]数は減少したのであるが、[illegible]絶大であつて、到底従来の類ではないのである。

軍事的技術的発達のため近時の戦争は惨憺たるものとなつたが、更に近代各國間に屡々行はれた軍國主義の結果各國民は全部武装し所謂 Nation in arms となりたる結果、戦争は単に一國の軍隊と軍隊との戦闘に止まるのではなく一國の全國力と全國力との闘争と化し去つたのである。一國のあらゆる人口は徴発せられあらゆる工業は動員せられ、あらゆる學術に動員せられあらゆる労働は徴発せられるのである、戦争の目的のために一國は全的に総動員を受くるのである。されば戦争は単に戦闘力と戦闘力との格闘ではなくして、國力と國力との角逐となつたのである、従つて、戦争は単に一國の消長を賭するものたるに止まらず實に其全運命を賭するものと化したのである。

戦争が全國力と全國力との競争となりたる結果、戦争は當然所謂疲弊戦争となつたのである、戦争の勝敗は、結局何れか早く疲弊し盡すかによつて決定するのである、故に戦術の目的は

戦場に於て勝利を博するにあるよりは寧ろ、今局に於て敵国を疲弊し、敵国内の人民の士気を挫くにあるのである。されば敵国の計画が重大となる、敵国を一層重大なる封鎖の網を以て困らし、国外よりの一切の物資の輸入を杜絶し、敵国民を饑餓に瀕せしめ、以て敵国人のファイティング・スピリットを破壊するのである。大戦中、経済封鎖を励行せしめたのは斯る国側の計陸の計画であつた。今後の戦争に於ては計画は益々重大なる役目を演ずるに至るであらう。

世界大戦は、史上未曾有の大規模の戦争であるが、しかし、之を以て最終の戦争と看ることは固より出来ず、寧ろ以て最大の戦争と断ずることも不可能である。世界大戦を以て「戦争を終結せしむる所の戦争」「最後の戦争」たらしめよと云聯合国側の大宣伝呼したる題目であつたが、かゝる時代は、此戦争の前に始めて叫ばれたのではなく凡そ欧洲史上に於て各国側戦争の場合は常に呼號せられた所であつた。三十年戦争の場合既にそうであつた、ルイ十四世の戦役の場合もそうであつた。ナポレオンの戦争に際しては亦固よりそうであつた。しかも戦争は少しも叫びにお構ひなく一国より一国と大規模となり凄惨なるものとなつた。欧洲の戦争発達史を繙けば直ちに判るのであるが、戦争はナポレオン時代に至つて一躍か大規模となり、普仏戦争中更に拡大し日露戦争に於て又大となつた。戦争の規模と技術は時代の進化と共に進んで益々大となり精となり来つたことを證明してゐるのである。世界大戦は決して、世界歴史に於ける最後の戦争にはならない。最大の戦争でもないと断じなければならぬ。将来の戦争は益々大規模となり益々恐ろしきものとなり益々悲惨たるものとなるものと覚悟せねばならぬのである。

なるほど、戦後国際聯盟成り、軍備制限の聲が高い、彼の華盛頓会議に於ては、曲りなりにも、五大国の海軍主力艦の制限を協定して既に實施の運びとなり、又潜水艇及毒瓦斯に關しても五国間に條約が出来た。潜水艇は商船を襲撃若は救助に撃沈するを得ずとの原則を承認したが、これは佛国の非常なる反対を押へて漸くにして調印されたものである。毒瓦斯に關し「窒息性、毒性又は他の瓦斯及一切の類似の液體、材料又は方法を戦争に、使用することは文明世界の輿論に依り正當に非難を受け且右使用の禁止は文明國の多数が當事者たる諸條約中に聲明せられたるが故に、署名国は右禁止が諸国の良心及實行を均しく拘束する國際法の一部として普く採用せられんが爲、右禁止に同意することを聲明し、且相互間に於ては之が拘束を受くべきことを約束し且他の一切の文明國に對し本取極に加入せんことを勸誘す」と約束してゐるのである。しかし、毒瓦斯に關する華盛頓会議の事

門委員會に於ては、之に[illegible]に於て[illegible]程度の使用は之を許認せねばならないとの意見に一致したのであつた。然るに此委員會の意見に對しては米國の輿論が激しく反對したので、五國代表は之に鑑みて讓歩を爲し、ともかく右の如く協定するに至つたのである。此潜水艇及毒瓦斯に關する五國條約は佛國の未批准のため、まだ實施を見るに至らないが、よし此五國條約が五國間に効力を發生するに至つた場合に於ても將來の世界戰爭に於ては恐らく實施を見ることは出來ないであらう、蓋し、此條約が世界戰爭に於て實施さるゝためには交戰國全部が此の條約に加入してゐることを要件とするのである。若し其中のいかなる一國でも條約に加入してゐない國家がある場合には、條約の全然行はれ得ないのである。しかるに多數國家間の戰爭に於て、總ての交戰國が此の條約の批准國であることは殆ど至難の事であらねばならぬ、此の條約が將來、國際聯盟によりて採用せられ一切の聯盟國が之に參加する場合の外は此の條約が將來の世界戰爭に於て實施を見ることは至難であらうと思はれるのである。

されば今後戰備の制限行はれ、軍器の制限禁止が條約上に於て約束せられるとしてもそれが必ず將來の戰爭に際し實施されるとは保證することが出來ぬ、況んや今後の戰爭は全國的總動員に[illegible]れになつてゐるに[illegible]よし[illegible]は實行せられても、いざ戰爭となると[illegible]全國的に[illegible]して戰爭は非常に大規模に行はれるに至るに相違ないと思ふ。されば將來の戰爭は過般の世界戰爭の場合よりも尚大規模に尚猛烈に行はれることであらうと想像せねばならぬのである。

右樣の次第であるから、軍事的方面から見て今後戰爭は容易に出來ないのである。國家が危急存亡に瀕せざる限り武器を以て起つことは出來ぬのである。一度戰爭する以上は全く國家の生命を賭せねばならぬのである。然らば此の見地よりするも日米戰爭は斷然避くべきものであることが判るのである。日米戰爭、之を單に日米兩國間の戰爭は限局されるものと假定して考ふるに——實際に於ては日米兩國間の一騎打と云ふが如きは想像が出來ない所で日米相戰はゞ必ず世界戰爭になるのであることは後述する——果して日本に勝算ありや。其國力の點に於ては殆ど比較にならぬのである。人員に於て、工業力に於て、財力に於て、物資に於て、[illegible]機關に於て、宣傳機關に於て、何れの點より見るも吾國は著しく劣るのである。米國を全部封鎖するとは全く不可能で、よし太平洋方面を封鎖し得たとするも大西洋方面は

干渉する由がない。米国は国団及国民其他より武器輸出を、其輸其他の物資を輸入するを得るから米国の援助を期する如きは百年河清を待つの類である。假令戦争となれば各国が最先に援助するに至る筈あるべきは想像に難くないのである。軍事的立場のみよりいふも各国に的確なる政策を立つることは極めて困難であらうと思ふのである。

七

第三に将来戦争を不可又は不能とする原因は、国際法律上の理由である。戦後国際聯盟成立し、既に、六年の存在を続けた。聯盟国は目下五十有五国に上り、聯盟外に立つ主たる国家は、米国、露国、独逸、及土耳其の四国に過ぎぬ。其中独逸は目下其の聯盟加入及聯盟理事国の件の決議により聯盟に加入し、聯盟理事国の一となるべく、土耳其もやがて参加するに至るであらう。聯盟以外に超然たる米露の二大国と雖も、全く聯盟の事業に関係せないのではなく、米国は既に聯盟の機関の一たる、常設国際司法裁判所に加入することを決し、日ならず聯盟の開くべき軍備縮小会議へも参加を承諾して居る。露国も歩一歩聯盟と接近し来りつゝあることは明白な事実である。米露両国と雖も今日においては必ずしも聯盟に反対なる訳ではなく、聯盟の技術的事業などには協力を惜まず、又右の軍備縮少会議へも主席として出席を決して居るのである。されば聯盟にも最早其世界的性質を事実に於て実現して居るのである。而して此の聯盟たる、戦争の防止国際平和の確立を主たる目的とする世界的聯合である。聯盟の治下に於ては戦争は禁止せられ、アウト・ローせられるのである。既に国際聯盟規約は其前文に於て、締約国は戦争に訴へざるの義務を受諾し、各国間に於ける公明正大なる関係を規律し、各国政府間の行為を律する現実の規準として国際法の原則を確立し、組織ある人民の相互の交渉に於て正義を維持し且厳に一切の条約上の義務を尊重し、以て国際協力を促進し、且各国間の平和安寧を完成せんが為め、茲に国際聯盟規約を協定す」と謳つて、聯盟の大精神を宣明して居るのである。この大精神を存し、聯盟規約は、凡ゆる国際紛争は、之を武力に訴ふるに先ち必ず先づ、仲裁、司法裁判又は理事会に附せねばならぬとの原則を確立した。若し聯盟国間に国交断絶に至るの虞ある紛争を発生するときは、当事国は事件を必ず仲裁裁判若は司法的解決又は聯盟理事会の審査に附すべく、仲裁裁判官の判決若は司法裁判の判決後又は聯盟理事会の報告後三月を経過するまでは、いかなる場合に於ても戦争に訴へることは出来ぬ。而して仲裁々判の判決若くは司法裁判の判決に服する当事国に

[illegible]会の報[illegible]の同意を得たるものなるときは、當事國は、其報告書の勸告に服する紛爭當事國に對しては戰爭に訴へることが出來ないのである。しかし聯盟規約は一切の戰爭を不法なるものとして否認してはゐない。即ち紛爭當事國の一方が、事件を仲裁々判若くは司法的解決又は理事會の審査に始めより附することを拒絶せる場合、之を附するも、仲裁々判若くは司法裁判の繼續中若くは、其判決ありたる後三箇月を經過せざる以前に又は理事會の審査中若くは其報告後三箇月を經過せざる前に、戰爭に訴ふるときは、他の當事國は之に應戰することが出來る。次に仲裁々判若くは司法裁判の判決後三箇月を經過したる後に於ても、若し一方當事國が其判決に服せずして、戰爭に訴ふる場合には他の當事國は亦之に應戰することが出來る。次に又聯盟理事會の報告書が紛爭國の代表者を除き他の聯盟理事會員全部の同意を得たるものに非る場合に於ては、當事國は場合によりて戰爭に訴ふることあり得べきである。かくの如き場合に於ては聯盟國は戰爭に訴ふることあり得るを以て聯盟規約は一切の場合に戰爭を否認したのではないが、原則として、戰爭を否認してゐると謂ふを得るのである。若し聯盟國にして、規約の禁止を無視して、戰爭に

[illegible]のとな[illegible]力的制裁を加へらるゝこととなり得るのである。

現行聯盟規約に於ては一切の戰爭を法律上に否認することが爲せなかつたのであるが、昨年十月二日第五回聯盟總會に於て採擇された所謂平和議定書に於ては、此點に於て更に一步進化を示してゐる。同議定書は其前文に於て侵略戰爭は、國際團體に屬する諸國の連帶關係の侵害及國際的罪惡を構成するものなることを宣言し、又署名國は相互間に於て又は本議定書所定の一切の義務を受諾することあるべき國に對し如何なる場合に於ても戰爭に訴へざることを約すと規定し、其侵略行爲に對する抵抗の場合又は聯盟規約及本議定書の規約に從ひ國際聯盟の理事會又は總會の同意を以て行動する場合のみを例外と認めてゐる。即ち議定書に從へば他國の侵略に對抗する場合、又は義務違反の國家に對し理事會又は總會の同意ある場合にのみ武器を執り得ることとなつてゐるのである。即ち凡ての戰爭なるものは一切に法律上否認されたのである。議定書は一方に於て戰爭を否認した結果他方に於ては、國際紛爭の平和的處理の道を備へてゐる。即ち或は義務的仲裁々判の約束を作り、或は聯盟理事會の審査の外に當事國による仲裁委員會、理事會による仲裁委員會の制度

[illegible]

[illegible]ればならないのである。

日米戦争の如きは、四国条約によつて、法律的に不可能とせられたのみならず更に日米間の条約によりて少なくとも今後十年間は不能となされてゐるのである。即ち一九二一―二二年の華盛頓会議の際成立し一九二三年八月十七日実施された、太平洋方面に於ける島嶼たる属地及島嶼たる領地に関する四国条約に於て、日米英仏の四国は、太平洋方面に於ける其の島嶼たる属地及島嶼たる領地に関する其の権利を相互に尊重すべきことを約し、又四国の何れかの間に太平洋問題に起因し、且上記の権利に関する争議を生じ、外交手段により満足なる解決を得る能はず、且其の国に幸に現存する円満なる協調に影響を及ぼすの虞ある場合に於ては、右締約国は共同会議の為他の締約国を招請し、当該事件全部を考慮調整の目的を以て其の議に付すべしと定めてゐる。更に又、上記の権利が四国以外の他国の侵略的行為に依り脅威せらるゝに於ては四国は右特殊事態の急に応ずるため共同に又は各別に執るべき最有効なる措置に関し了解を遂げんがため充分に且隔意なく互に交渉することを約束してゐるのである。

此の四国条約は四国協商を具現するもので、四国は、太平洋[illegible]

[illegible]ことを約束して[illegible]

し、且上記の権利に[illegible]を約してゐるのである。而して、此条約は実施の時より十年間効力を有してゐるから、一九三三年八月即ち大正二十一年八月まで効力を有するのである。且十年後と雖も、十二月前の予告を以て廃棄せられざる限り引続き効力を有するのである。されば今後七年間は何も日米間に重大紛争を生じたるときはよしそれが厳格に、四国条約の規定する事項即ち太平洋問題に起因し且太平洋方面に於ける日米両国の島嶼たる属地及島嶼たる領地に関する権利に関する争議に非る場合と雖も其争議を先づ以て外交手段により解決するに努力すべく、若し外交手段によりて満足なる解決を得る能はざるときは日米英仏の四国会議を招集し其斡旋又は調停を請ふことを条約上又は道義上の義務と看なければならぬのである。況んや、軍備制限に於ては、右四国条約の外に、五大国間に海軍々備制限に関する条約を結び、大正十二年八月十七日より実施せられたのである。此条約は、米、英、日の海軍主力艦を五・五・三の比率にて制限したものである。而して、此の条約は一九三六年末即ち、大正二十五年十二月三十一日迄効力を有するのである。此の条約は

勿論、戦争に訴へざることを約する規定ではないが、其前文に於て「一般の平和の維持に貢獻し日米間戦争の危險を輕減せんと希望み」と宣言せるのみならず、**此條約の有効期間中は相互に攻撃的戦争に訴へざるべしとの暗默的諒解の下に成立したもの**と見ねばならぬ。されば、本條約の有効期間中は日米兩國は互に戦に訴へざるの消極的義務を負擔せるものと謂はねばならぬのである。されば少なくとも今後十年間は日米間に戦争の危險なしと斷定して大なる誤はなからうと信ずるのである。

右の如く一般的に四國規約の規定及精神より論ずるも、今日及近き將來に於て、移民問題解決のため武器を執る如きは不用ならくば不可能なるべきのみならず、特殊的に、日米間の條約關係より見るも兩國は當分平和友交の協調關係にあるべき義務を有するものである。即ち國際法律國際條約の上より見て日米戦争は不可能なりと謂はねばならぬ。

八

上來、吾人日米問題の解決上武力的方法を採るを非とする事由技術的及國際法律上の理由を擧げたのであるが、此の二理由に優りて更に強力なる第三の理由は國際政治上の理由である。世上日米戦争を論ずる者約言すれば日米兩國間の一騎打的戦争をのみ眼中に置くが如くであるが、世人を誤るも亦此の點に如くものはあるまいと信ずる。若し日米兩國にして戦はば決して兩國間にのみ限局するを得ずして必ず延いて世界戦争となるといふことを世人は多く看過せるやうに思ふ。何を以て日米戦争は必ず世界戦争になると斷ずるか、其理由は二つの點にある。一つは、大國間の戦争の性質上より來り、一は日米問題の性質上より來る。世界戦争の經驗が明證に物語る如く、今日の國際關係に於て大國間の戦争は必ず世界戦争となるの必然の傾向を有してゐるのである。今日の戦争は絶對的國家戦争となり、經濟の進歩によりて時代の分る所以は上述せるのである。國際戦争の性質上交戦國は相互に連絡し、他の全世界より分離し孤立せしめることに努むるは當然である。故に交戦國は世界より斷絶する必要上、交戦國は必ず中立國の協力を依頼するに至る所であるが、中立國は交戦國により諒解さるゝ結果として戦局、戦時法に於く超然たる態度を執れず早晩交戦國の何れかに加はらなければ戦後を迎ふに決定せしむるを以て自家の利とすべきに至るのである。されば世界的に利害を有する強國は勿論中立國と雖も之に戦中に捲入されるのである。かくして、兩國間の戦争は結局世界戦争となるを免れないのであるとし、事實、日米戦争が此の理由よりして世界戦争となることを免れ得るとするも、第二の日米

[illegible]得つゝ[illegible]する

のである。日[illegible]國の[illegible]に移民[illegible]である。[illegible]して、黄色人種の市民權居住權を認めしめんとする問題である、米國を黄色人種に對し開放せしめんとする要求である。即ち亞米利加大陸に對する黄色人種の侵入權の要求に外ならぬ。既に黄色人種の移住侵入の要求であるから此の問題は單に米國の運命に關するのみならず實に兩米大陸の運命に關する。實に兩米大陸のみならず、黄色人種侵入の脅威を感じつゝある太洋洲の問題である。否、兩米大陸及太洋洲を以て、白色人種の獨占的繩張なりと自覺し、白人種の將來の發展增殖の準備地域なりと信ずる白人種全體の問題に外ならぬのである。たゞに黄色人種の脅威を感ぜる兩米大陸及大洋洲の問題に限らず、褐色人種即ち印度人アラビヤ人埃及人等及黒人種の脅威を受けつゝある亞弗利加大陸の運命に關する問題である。即ち、日米問題は、兩米大陸太洋洲及亞弗利加の三大陸を獨占壟斷せんと期する白色人種全體の利害問題に外ならぬのである、故に日米戰爭起ると假定せば米國は單に自國の利益のために戰ふには非ずして實に白色人種全體の利益運命のために戰ふものに外ならぬと感じ、且宣傳すべき筈當然である、況んや米國は實に白人種全體の代表者たり、選手たるに最も好適の資格を具備してゐる。蓋し歐洲の舊大地に

[illegible]ては、[illegible]た[illegible]相[illegible]して一[illegible]に[illegible]大陸殊に[illegible]國の舊大陸に於ては[illegible]の[illegible]は一様に民族國[illegible]の一大熔爐中に投下せられアメリカン・ネーションの[illegible]の下に相融和するのである。歐洲に於ては[illegible]なるさる民族國人も、米國に於ては互に相抱いて歡呼してゐる。米國は新大陸に於ける歐洲であり、新大陸に於ける白人種全體の國家である、歐洲の各國は各自の民族、國民の利益を代表し得るも白色人種全體の利害を代表するには適せぬ。之に反して米國は米國民の利益を擁護することは即白人種全體の利益を擁護することとなる事態にあるのである。白色人種全體の利害を代表するに米國程格好にして且其大任に堪ゆる實力を有する國は他にないのである。しかも此の米國が黄色人種との接觸の第一線に立つてゐるのである以上、米國が白人種の楯たる自覺を喚起し、白人種全體に代り、白人種全體の急先鋒として有色人種の世界に對抗せんとするに至るは寧ろ自然の趨勢と見ねばならぬのである。此の米國が日米問題即ち黄色人種の發展權の問題を爭點として戰ふ場合米國と利害を同じうする他の國家國民が何れの側に同情するに至るべきかは問はずして明らかである。米國に於て黄色人種の脅威を感ずると[illegible]する白人主義の濠洲及ニュージーランドは

戦を国に援助した国を支持するを躊躇せぬであらう。自治領の土着的傾度に動かされて、英帝国全体もが日外に傍観たるには難いであらう。彼の「林伯の秘録」「十字街頭に立てる日本」「日本の外交政策」の著者として著名なる英国人A・M・プーレーの如きは「日本の外交政策」の序文に於て「今日、可能性多き日米間の戦争に際し英国に於ける同情は、吾人の従兄弟に向ふ事は確かだ」と断言してゐる。日米戦争が日本と、アングロ・サクソン世界上の戦争に化し易きことは見易き所であらねばならぬ。既に日本人対アングロ・サクソン世界の戦争となればアングロ・サクソン国は他の全世界を糾合し日本に対し宣戦布告をなさしむることも恐れ世界戦争中米国が参戦と同時に支那の諸国を南米諸国の諸国に要望して独国に対し宣戦又は断交をせしめた場合の如くであるであらうと思はせられるのである。

人或は問ふであらう、既に有色人種の旗頭たる日本に対して、白人種世界が戦をなすに於ては、それは即ち人種戦争である、人種戦争となれば、日本は孤立する必要はない。有色人種の世界は吾人の背後にあるではないか、と。然り、日本対白人世界の戦争は人種戦争に相違ない。人種戦争に際して、有色人種世界の同情が日本に団結すべきは疑を容れないことは真に同春のごとくである。しかし有色人種の[illegible]、[illegible]制

個の問題に属する。有色人種の同情が日本に集まるとする。果して彼等は日本と実力的協働をなすの自由を有するであらうか。実力的協働をなし得るとするも果して戦争上何程の効果を発揮し得るだらうか、今日有色人種の国を成すもの既に、白人種に比して遥かに少数である。国を成し果して独立の面目と位置を有するものが幾つあるであらうか。自分の力だけにたよる国家民族が果して、戦争に有効に寄与する者幾何ぞや。或は南亜支那の如きに於ては援助し得ることあり得るとするも、然も日本の戦争力に参加し得べきは甚だ疑問に属する。殊に戦争力に日本を援助し得るのみならず何等の手足があるとしたって、直ちに日本の戦争能力を増大するの効果を齎すかも知れない。一体、然し今日に於て、白人種対有色人種の人種戦争が起らんか、殊に有色人種にとりて不幸なるのみならず彼らに将来の不幸を招くこと、人類の文化と進歩とを破壊し去るに過ぎない一であらう。殊に世界歴史の進化の道程に於て何日かは一度人種大戦争の起る時を見ることあるやも人類の進歩の運命であるかも知れない。しかしそれが人類の運命たるべからざる時であると仮定しても。人種間大戦争を今日に於て使用するとなれば果して有色人種の利益であるであらうか人類全体の幸福であらうか大なる疑問である。

人種間戦争の如きはよし一度は避くべからざるものであると

しても此を[illegible]に[illegible]力付するが人類の[illegible]に なすべき所であると信ずるのである。日米戰爭は結局、此の人種的大戰爭を誘致することは殆ど必然のものであるから、此點よりするも日米戰爭の如き、人類全體の文明と福祉との爲に極力防止すべきものであると信ずるのである。

九

上來縷述せる三個の理由に基き、予は、日米戰爭を斷じて排斥し人口問題の解決の爲めに、武力的侵略政策を執ることに反對するのである。既に人口問題の積極的武力的解決方法を執ることを非とする以上は、吾人の執る可き解決方法は、積極的平和的解決方法に非れば、即ち消極的解決方法の外にはあり得ないのである。先づ我國人口問題の解決の爲めに、消極的方法を執るの可否に就て論じやうと思ふ。

人口問題の消極的解決方法は、人爲的に人口増加の傾向をコントロールするの方策である。マルサス主義に唱へらるゝ所謂道徳的抑制（モーラル・レストレント）や、ネオ・マルサス主義の唱道する人工的産兒制限や其他墮胎や嬰兒殺の如き諸種の方法を以て、人口増殖を制御せんとする方策である。所謂サンガー法の如き其著例である、此の人工的産兒制限法は既に多少の程度に於て今日の諸文明國に於て行はれて居り、又未開人の社會に於ても見る所の現

實である。[illegible]に[illegible]し、[illegible]と共に[illegible]い、此種の傾向の著しきことは[illegible]にして[illegible]に人は問題の構成[illegible]ある。ボール・ルロアボリュー[illegible]所に[illegible]る、人口の増加率は文明の進歩と共に減少するの傾向ありと觀察する學者は多々あるのである。

此の消極的方法を以て人口問題を解決した例は古來東西の史上に多く存する。例を外國に借るまでもなく、我國は徳川時代に於て既に一度此方法により人口問題を處置したのである。寛永年間の鎖國令以來吾國は全く外部に對して自ら門戸を閉鎖し、國人の海外渡航を嚴禁し我民族の海外發展の途を杜絶した。當然の結果徳川時代の中葉に於て我國の人口は既に飽和状態に達し爾來明治新政に至るまで、我國の人口は殆ど増加する事なく常に停滯的の状態を持續したのである。

今明治五年に於ける日本人口數を一〇〇とし古來の人口の増加率を簡單に圖示すると次の如くである（[illegible]氏人口問題より[illegible]）

西洋紀元	（日本紀元）	年號	主權者	人口數	指數
六[illegible]〇	（[illegible]）	推古[illegible]年	推古天皇	四、[illegible]	一[illegible]・[illegible]
[illegible]	（[illegible]）	[illegible]八年	[illegible]	八、[illegible]	[illegible]・[illegible]
一七二一	（二三八一）	享保六年	將軍吉宗	二六、〇六五、四二五	七六・七[illegible]

二四八〇（一八二〇）	文政三年	将軍家斉	二六、二〇〇、〇〇〇	八〇・〇
二五二八（一八六八）	明治元年	明治天皇	三三、一〇〇、七八〇	一〇〇・〇
二五八〇（一九二〇）	大正九年	今上天皇	[illegible]	一[illegible]〇・〇

右図示の如く、[illegible]天皇の御宇、我国の人口は八百六十万餘なりしもの爾后一千年間に倍し、倍加となり、徳川八代将軍吉宗の時には二千六百万となった、然るに其後十一代将軍家斉の時代に至る百年間は人口全く停滞した。それより明治元年に至る五十年間には五百万を増加したが、明治時代となり開国進取の政策を採るに至って、大正九年に至る五十年間に殆ど二千三百万を増したのである。

徳川の鎖国政策が、いかに我国の人口上に大なる影響を与へたかは、上述せる所により略察せらるゝが、同時に消極的方法の如何に恐るべきものなるかを有力に証明してゐるのである。外国においても、フランス、オランダ、スイス、ニュルンベルグの如き消極的方法を實行せる國には同様なるものがある。米国ボルチモーア市ジョンスホプキンス大学附属病院の研究せる所に據るに、一個の瓶中に一對の蠅を入れ、之に一定量の食料を容れて閉鎖し置き、其の蠅の繁殖を見るのに、一定の時間に達するまでは非常なる勢を以て増加するが、それが或時期に達するや次第に増加率を減少し行き結局停滞的状態となり減少的傾向に移るといふ。人口の増加の状態も略之に類似するものがあることは、我国の前例、佛国、和蘭の例などの示す所である。

消極的方法は人口問題の有力なる解決方法なることは認められないが、しかし消極的方法は民族の発展、国家の発達の上に極めて重大なる結果を與ふるものであるから、他に方法の存する限り、之を採用するには深く考ふべきものと信ずるのである。消極的方法により人口の増加に人口を制限するの風習を生ずるときは国民の活力は一般に委縮し、其の結果は種々の方面に現はれ、[illegible]を失ふに至るものである。[illegible]今日、[illegible]国内に跼蹐するを好み、[illegible]之を[illegible]とし、徳川三百年の鎖国の遺風であらう。かつて世界に雄飛した[illegible]人の如きも、人口問題を[illegible]世界より[illegible]。[illegible]の[illegible]を好み、人口は停滞し、特に人口の減少を見るに至らしめたのである。消極的方法の採るべき[illegible]のである。

積極的方法にして[illegible]せず小成に安んじ、安価なるディレッタンティズムに陥り易き我民族は、ともすれば人口問題の解決に於いて消極的に流れ易き傾向を有するのである。若し大

に在ふすことになれば、[illegible]の二つの義を論じ、結局目下の人口問題を消極的に解決せんとするに至る虞が大にあるのである。而して米國人などは吾國が此の消極的方法により人口問題の解決を爲すに至らんことを衷心歡迎してゐるのである。若し我國の周圍に障壁を築きて我國民の海外發展を抑止して居れば日本も已むなく消極的に人口問題を解決するに至るべしと彼の國識者中には公言する者が少たくないのである。かくの如き危險ある以上尙更此の消極退嬰の方策は唾棄せねばならぬのである。若し我國民が消極的解決に甘んずるが如くば我民族の發展は今日を以て頂を劃し今後は漸衰の外あらざるべく、吾國の前途眞に寒心に堪えざるものがあるのであらうと思ふ。苟も全世界的、全人類的に人口問題が行詰らざる限り、亦國民が齊しく、人口制限の必要に迫らるゝに至らざる限り、かゝる消極的解決方法は斷じて執るべからざるものである。いかなる困難横はるとも元氣あり活力ある民族は、必ずや人口問題を積極的に解決するものである。我大和民族は斷じて消極的調節方法を排斥し必ずや積極進取の方途に出でなければならぬと確信して疑はないのである。

十

人口問題の解決に[illegible]法は[illegible]民の採るべき方法は平和的なる積極的方法の外にはないことになるのである。

平和的にして積極的なる方法の第一は、平和的なる移植民政策であり、第二は商工業發展政策即ち産業立國策なるものである。

先づ移植民政策に就て述べんに、茲に謂ふ所の植民政策とは、自國の政權下に屬する植民地に對し國人を移住せしむる政策である。移民政策とは、他國家の領土又は植民地に對し自國人を移住せしむる方策を指すのである。吾國に於て海外移住を法律上に許可するに至つた明治十八年より大正八年に至る三十五年間に於て、我國人の海外に居住するものは次の如くである。

北米大陸	一三五、〇〇〇
布哇	一一三、〇〇〇
南米	四〇、〇〇〇
滿洲	二六〇、〇〇〇
青島	三〇、〇〇〇
支那	三〇、〇〇〇
南亞細亞及太平洋諸島	三五、〇〇〇
合計	五四二、〇〇〇

四年に於ける出超人は二十一萬人であつて、之を五十年間に於ける我國民の海外移民は僅に五十萬人弱で、即ち之を合せ、八十萬人に過ぎない。然るに我國の人口は朝鮮を除き年々六十萬乃至七十萬を増加するのであつて、要するに、吾國は過去半世紀間に於て、僅かに一箇年の増加人口に相當する人口を、海外に出すに止るのである。これ明かに過去に於ける吾國の移植民事業の失敗を語つてゐるものに外ならないのである。

吾國の過去に於ける移植民事業の歴史は失敗の記録である。明治五年北海道開拓使を起し年々數十萬の補助金を與へて、移住を奨勵したが其成績は微々たるものであつた。廢使併合後拓殖計畫を起し百年三千萬圓の補助金を以て、年々十萬人の内地人を朝鮮に移植せんと企てたが、僅かに數千戶を移植したに止まる。又滿蒙に對しても政府は年々五十萬圓の奨勵金を與へて移民を送らんとしたが、成績は[illegible]はなかつた。又南米移民の如きに補助金を交付して南米に移民を送らんとしたが、一九一七年から一九二二年迄に一萬二千戶を送つた。一九二二年の如きは四千戶弱を移住せしめ得たに過ぎるのである。布哇、米國に對しては最も多く渡航を見たが、一九〇七年の紳士協約成立以來大なる制限を受け、更に一昨年の移民法により全く我國よりの移民を禁止さるゝに至つたよは人の今も記憶して忘れざる所である。

若し過去の移植を以てすれば我國の移植民は將來も一層悲觀的の方法によつて我國の人口問題を解決せんとするが如きは見込も無き所であると言はねばならぬ。外國人の吾國民を評せる如く吾國民は植民的國民ではないのであらうか、移植民により人口問題を解決する方法は斷念せねばならないのであらうか。思ふに吾國民の移植民の振はざる原因は多々あるが、其第一は吾國的國民主義の然らしむる所である。との傾向は二百年の鎖國の餘弊であると前に指摘せる所である。此の國民的根據へ宗居の觀念にして根本的に改まらざる限りは吾國民の海外發展は誠に望み少なしと謂はなければならぬ。吾國民の海外移住の不成功の第二の重大原因は恐らく國際上米國の排日人の排斥及門戶閉鎖である。吾國人の移住に最も適せる土地は大部分既に歐米諸國の領土は白人に依つて占有せられ、我國人の移住を排斥されてゐるのである。今其の地域をして門戶を開放せしめるためには武力的に戰爭を賭するに非ずんば、人道正義の力によりて白人の諒を得るの道を講じさせるより外はない。武力によるは[illegible]で有力であるかも知れないが此方法の採るべからざることは論せる所である。然らば唯今國際的で結果が望ましいが如き國際會議以來の我政府に於いて人種平等を天下に唱道し、我國が力の移植民

自由、交通の自由の如き正當なる人權の宣揚に努むるの外ないのである。更に過去に於て我國人の海外移住の成功せなかつた理由の第三は我國人が出稼根性を飽迄も捨てず、異域に根柢を据ゑ其地に同化するの精神を存せなかつた事である。而して第四は我國人が赤手空拳を以て海外に渡り資本を携帶する者のなかつたことであると思ふ。

若し從來の之等の移殖民失敗の原因に顧み、其誤を匡正し、缺點を補正するに努力せば、我國民の移殖民的發展必ずしも絶望には非ずと思ふ。此の現今及將來の移殖民奬勵の事業に於て特に注意すべき點は對外的方面に於ては(一)人種平等、移轉自由權の主張を益々國際聯盟に於て提唱し、一方に於ては、植民地を有せず、且つ人口過剩に苦しめる伊太利、獨逸の如き諸國と協調し、他方に於ては、本土狹小にして、夙に過剩人口問題に當面せる歐洲の中小國を說き、聯盟世界の輿論を興こし、漸を以て此の大目的の達成に邁進すべきである、(二)今日に於て我國人を歡迎すといはるる唯一の國たるブラジル及び必ずしも未だ我國人に對し門戸を閉鎖したと云ふを得ない南米の諸國になるべく速かに、且大規模に移民を組織的且繼續的に送ることである。なるべく速かに移民を送るべき必要ある所以は、農業勞働者の移住を歡迎するは、其國土廣大で未開拓の土地にして所謂フリーランドとも稱すべき土地の豐かに存する場合である。南米の土地如何に廣大なりとは云へ、戰後歐洲の移民は續々南米に流入しつゝある、特に米國の移民制限により大なる影響を蒙れる、スペイン、イタリー、獨逸など[illegible]としつゝある、南米の地も亦一千萬人口を收容しフリーランドには益々減縮すべく、農業移民の流入を歡迎せざるに至るべき自然の傾向にあるのみならず、其他の勞働移民の如きも、其國の人口一定の程度に達すれば之を歡迎せざるのみならず却つて排斥するに至るは米國などの前例の明證する所であるからである。加之、大戰中及大戰後漸く國民主義の自覺に眼醒め來れる南米諸國は、今後逐年此の傾向を增し、雜多の移住民を歡迎せざるに至ることは明白である。且つ アメリカ主義を通じての米國の有色人種排斥の宣傳及壓迫は次第に南米諸國に及び、之等の國も追々黄色人種の移入を喜ばないやうになりつゝあるのである。されば南米諸國の外國移民に對する門戸も永久に開放せられ居るを期し得ず、却つて今後次第に閉鎖され行くものと覺悟せねばならぬ。從つて吾國人が大に南米の天地に飛躍せんと欲せば今の中に、なるべく多數渡來するとが得策であらねばならぬ、若し然らずして悠々として徒らに時機を逸せば將來いかに悔ゆるも及ばざるに至るであらうと憂慮せられる。南米移民を大規模に組織的に行ふ要ありと云ふは、從來の如き小資本又は民間移民會社の手に放任せず、大なる資本を此方面に用ひ又移民事業を准國策として、組織的に實行すべきを指すので、かかる方法を以てするに非れば大なる成績を舉ぐることは至難であるといはねばならぬ。

移植民奬勵策として對內的に留意努力すべき點は、(一)我國

の下級中學に於て教育制度の改良である、從來の無國粹性的局に人を打破するために、教育上特に努力し、且海外發展に必要なる學科を授ける教育機關を増設普及すべきである。例へば中學程度の植民教育學校を興し、又中學校に於て漢文の代りに、支那語を課し、英語に偏する代りに、スペイン語をも教ゆる如くするが肝要である。又外國語學校を増加し、スペイン、ポルトガル、オランダ、マレイ、支那等の語學の研究普及を計ることが急務であらう、大學に於ても單に法律經濟のみに偏せず大に外國事情を紹介し、大學卒業生をして國内にのみ踟蹰せず大に海外に雄飛するの希望と資格とを有せしむるに努力することが肝要であると思ふ。(二)海外移植民事業に對する國家の財政的援助を更に大規模にすることも最も必要である。軍備制限行政整理等にて節し得たる財政的餘剩は之を大部分移植民の獎勵に投下するを可とすべしと思ふ。少なくとも今後十年間は戰爭の恐なき以上日本國家として武力的政策を執るべからざる以上、軍備縮少の如きは、更に一層徹底的に斷行すべきであらう。從來軍備の爲めに注入し來れる巨額の國費の一部分を今後對外的平和的發展のために轉用するに於ては其効果は大なるものあるべしと期待するのである。軍備の縮少は國内に於て其強化せんとしつゝある現下の情勢に適應し我國も大に平時軍備を節約して不可はなからうと思はれるのである。

十一

以上の諸點に留意し、我外交が以上に指摘努力したならば從來の不成績に比し多少良好なる結果を擧げ得るに至るであらうと思はれる。しかし移植民事業に於て、多大なる利益を有する吾國民にとりて、此方法によりの人口問題を解決せんとするが如き不可能事であるであらう。よし此方面に於て成功するとしても人口問題の壓力を多少の程度に於て緩和し得るに止まるであらう。此方面に多大の希望を繋ぐには不當であるとすれば吾國の人口問題の最も有力且有望なるべき解決方法は結局商工業振興の政策即ち所謂商工業立國策の他には道なきことゝなるのである。吾國政府及國民が協力一致して全力努力すべきは正に此の方面である。此の工業化の爲め、國際貿易の擴張國際商業の發達に於て此人口問題を解決し行くに非ずんば、或は遂に吾國の人口問題は積極的に解決せらるゝの日あらざるべきを憂ふる者である。我國の外交政策も此の工業立國政策を中心として吾國せらるべきは當然であらねばならぬ。我國の工業化の前途には多大なる障害の困難が存してゐる。すなはち我國も日に用ふるの容易なるも其實行は不確であるのである。國際商業の發展の上にも大なる障害が横たはつてゐる。しかしいかに大なる困難あるにせよ此殘されたる唯一の方面に邁進し發展するに非ずんば遂に吾國は生きるの道がないのである。商工業立國に付ては種々の外交政策上の問題多々論ずべきものがあるが、工業化の問題と共に之等は他日稿を改めて論ぜんことを期し、今は只工業化方法の重要性を指摘するに止めるのである。(一九二六・一二・九)

第五十一議會の一經驗

——二大政黨かグループ・システムか——

緒方竹虎

一

第五十一議會は、いはゆる既成諸政黨が戰後の醜態を暴露した以外、今後何年かの我が議會政治に對して一つの問題を殘した。それは少數黨内閣の問題である。今度の議會では、政府黨が衆議院の三分の一の勢力しか有せぬ關係上、政府の主張した政策は一つも滿足に議會を通過せず、すべて妥協にはじまつて妥協に終つた。これは憲政會をはじめ今日の既成諸政黨が、普選を前にして勢力の崩壞をおそれ、いはゆる苟安主義をとつた結果であることは、無論である。併しながら、假りに今日の諸政黨が面目を一新しても、中選擧區制が採用される以上、今後一黨が議會の過半數を占むる場合は容易に想像されない。したがつて今後といへども、少數黨内閣の出現することは度々あるものと考へなければならぬ。少數黨内閣と妥協は附物である。それによつて既成諸政黨がだん／＼信用を剝落して行くのは、一向吾々の關係したところではないが、これでは國民は、ある明瞭なる主義なり政策なりを豫期して投票することが出來ない。これは餘程の問題であると思ふのである。

二

少數黨が内閣を組織する場合、採るべき方法は、思ふに、他の政黨を誘うて聯立内閣を作るか、イギリスにおけるマクドナルド氏の勞働黨内閣式に、短命を豫期して仕事本位で進むか、二つよりありやうはないのである。マクドナルド氏の遣方はさすがに立憲政治家らしかつた。彼れは、保守黨内閣の「保護貿易か自由貿易か」の選擧に勝つて組閣の準備を爲すや、一九二

四年一月、アルバート・ホールにおける労働党の勝利記念大会において、「吾々労働党は決して一時便宜のために政権を取るのではない。吾々は仕事がしたいのだ」と。先づ一般的の労働党内閣の採るべき態度を示した「一時便宜のためではない、仕事本位で」くだらないことは、一見どの政党でもいひさうなことのやうに思へる。併しマクドナルド氏がかくいふ言葉の裏には、妥協はやらぬ、先づ労働党の主義によつて仕事をするのだ、若し行けなければ辞職するまでだ、労働主義のために主義を犠牲にはせぬ、労働党の将来は長いのだといふ意味がこもつて居る。マ氏は斯く態度をきめると同時に、いよ／＼内閣を組織して議会に臨んだ次第、この短期議会のうちに、よい政策も相当部を行せん議会では、多少従来の綱領を変へねばならぬと思ふ。自分は不満たらざる問題につき、スナップ・ヴォートで敗れただけでは、辞職せぬつもりである。労働党内閣は直に不信任を宣告する投票によつてのみ辞職を決する。労働党内閣は徒らに迎合するといふやうなことのみを求めない。吾々はモツト深入りした政策を行ひたいのである」と正直に宣言した。これを批評すれば、若し労働党内閣の存立が国家に害ありと見ば、不信任投票を以て来い、労働党内閣はこの行はんとする主張と政策とを持つて之を示、国民はこの主張と政策とにつき公平な判断あり、いはゆるスナップ・ヴォートによつては辞職せぬといふのである。しかして、事実マクドナルド内閣は、たとへば寄席演芸税案の修正された場合のごとき、平然として政事を続けた。

斯くのごとくして「仕事本位」の態度を宣明したマクドナルド内閣は、議会における閣員は、総員数六百十五名の三分の一にも満たぬ百九十余名に過ぎなかつたにも拘らず、僅か九箇月の間に、おしたり以上の仕事をした。ことに外交方面においては、欧洲関係の改善、ドイツ賠償問題の解決（ドウス案の採用）、ロシアの承認、国際間における重大問題を解決した。保守党の歴代内閣すら解決しえなかつたほどの功績を挙げたのである。これによつて之を観れば、少数党内閣といへども、あえて長命を保ちえなかつたにせよ。はじめから仕事本位で局に当れば、相当の政績を挙げうることを証明した。もちろん、このマクドナルド氏の態度には労働党内にも不満はあつた。内閣成立後の労働党代議士中では、マ氏を党内首領に選ぶことについて、多少異議を表明したが。しかも労働党の勢力は、敗れた総選挙においても、前総選挙に比して百萬以上の増加を示して居り。マ氏の位置も、日を経ると共に強固なるものになつた。

三

然るに憲政會の內閣は、何の政策をもつて國立を計ることもせず。さればとて、マクドナルド式な法をとるだけの決心もつかない。そこで世間は批判、政府は議會を解散して陣容を新にする所存ではないかと、萬が一を懸念したのである。併し無論解散も覺悟しない。この解散を覺悟し得ないことについては、憲政會の新頭總務町田氏が、三月號の「我觀」に偽らざる告白を爲して居る。すなはち「經濟界における一般人心は、此際黨略によつて政界を紛糾せしむることを回避したいと希望してゐる。從つて政府でも在野黨でも無理に解散に導かんとする態度を示すならば、財界一般の反感を受くることは明白である。各政黨は各自の勢力を擴張することに全力を盡すべきであることは論を俟たぬ。けれども如何に黨勢擴張が必要であるからと云つて國民全般の要求を無視することは出來ぬ。斯の如きことは一時的の効果を齎すことがあるかも知れないけれども、永續的に總選擧の收穫を減退せしむるものである。」といふのである。この告白は、町田氏みづから意識してか、無意識にか、今日のいはゆる既成諸政黨の立場を最もよく語つて居る。財界はたしかに議會の解散を好まなかつた。普選々々といふが、アト二年待てば自然に總選擧の時機は來るではないか。財界のためには政府の如何よりも解散騒ぎは眞ツ平だといふのが、財界一般の聲であつた。この財界の聲が何よりもこたへたところに、既成諸政黨の代表するものの何であるかを說くに十分である。しかして「財界一般」の希望と「國民全般」の要求を一緒に見て居るなども、爭はれざる既成諸政黨の弱點である。

第五十一議會は、思ふに、既成諸政黨が何を中心に政治をして居るかを見る、最もよい機會であつた。短命を豫期してマクドナルド式に邁進することも能くせず、解散の意思もない少數黨內閣としては、自然の筋道として妥協をえらむ外なかつた。然るにその妥協は何のためであり、何を齎したか。吾々はいはゆる妥協政治の著しい一例として義務教育費國庫負擔增額問題を先づ擧げ得る。議會は實にこの問題の妥協のために數日を徒費したのである。政府に解散の意思なく、反對黨に衝突の意思なきだけ、問題の歸趣ははじめから判つて居る。しかも問題の性質は如何といふに、國庫負擔額を今年四千萬圓增すか、今年は三千萬圓に止めて明年更らに一千萬圓增すかの差違に過ぎないのである。今年一千萬圓ヨリ多く增すのと、これを明年に讓るとによつて、國民の福祉に及ぼす影響がそうまで違ふであらうか。それにも拘らず、政府と反對黨とが肝膽をしぼつて、妥協をはからねばならなかつたのは、何故であつたらうか。

問題はこれを二段に分つて考へる必要がある。一つは無

が委員のためにその「主義」の主張を抛つたことで、一つはこの[illegible]の委員の政治的意義如何といふことである。[illegible]政府は従来[illegible]を[illegible]してきたのであつて、[illegible]の[illegible]に[illegible]したことは、一つの[illegible]となければならない。然るに政府は委員の前年度中にすこぶる[illegible]にこの「主義」の主張を抛ち、委員[illegible]に[illegible]く。[illegible]を[illegible]する本党の[illegible]を[illegible]したのである。[illegible]の[illegible]とするがよいか、[illegible]とするがよいかは、おのづから[illegible]問題である。これを外国の例に見れば、イギリスの[illegible]、フランスの[illegible]、[illegible]のプロシアの[illegible]、[illegible]によつて一[illegible]つて[illegible]る。[illegible]また理由さへあれば政党がその主張を[illegible]ることも、[illegible]ない[illegible]である。但した[illegible]の政府[illegible]のためその[illegible]の主張が抛つたといふことに、[illegible]かけた政治[illegible]は[illegible]問題であるの一である。

ことにおいて委員には果して如何なる[illegible]があつたかといふことは、問題になつてくるが、それは今年一[illegible]もく増すか、それを[illegible]に[illegible]すかの[illegible]に過ぎないこと、前に[illegible]た通り[illegible]、然らば何故にかゝる委員に政府と政党本部とが[illegible]たり、[illegible]なる[illegible]面の[illegible]を[illegible]せねばならなかつたかといへば、[illegible]するところ、政府本部ともにその面目をつ

くらう必要があつたからに外ならぬ。ゆゑに、損害は大きくても、政府も本党も交渉を決裂に導かうとする意思は毫末もなく、見物人たる国民も、少しも[illegible]の危険な気にはならなかつたのである。八百長と悟つた相撲を見物するほど馬鹿なことはない。国民は今度といふ今度こそ、[illegible]政策の下らなさをまざ／＼と見せられた。マクドナルド内閣は[illegible]よりも[illegible]といふ[illegible]の下に、少くも外交方面においては、[illegible]内閣の[illegible]し得ざるほどの仕事をした。日本の少数党内閣は、[illegible]に[illegible]、政策も主張も[illegible]の修正するに任せて、ひたすら政権と[illegible]を[illegible]へる外ないのである。

四

[illegible]政権と[illegible]を中心として動くことは、今更[illegible]明するまでもない。以上二つの例を以てしても明瞭なところである。併し[illegible]、[illegible]は、たとひ[illegible]としてにしても、政治制度の[illegible]に[illegible]し、たしかに一つの問題を投げた。それは、一口にいへば、グループ・システムを[illegible]ため、二大政党制にするかといふことである。我国における[illegible]の[illegible]には、二大政党制は[illegible]であるといふ、何れかといへば、グループ・システムに傾いた[illegible]向きもあつた。少くも[illegible]の

[illegible]であらうとすらあらうであつたる[illegible]の上に、[illegible]たげて來て居る。併し二大政黨制は果して昔の夢であらうか。第一の問題はまづ其所にある。

日本の政論家の頭を非二大政黨論に傾かしめた原因の一つは、たしかに、イギリスにおいて最近勞働黨が崛起し、從來の二大政黨に對し三政黨鼎立の勢ひを示すに至つたことにあるやうである。日本では不思議に、フランスの政界のことは問題にされない。併しながら、これは果して二大政黨時代の終焉と見るべきであらうか。進化の原則にしたがひ、新しい二大政黨時代が生れ出る過渡の現象と見るべきではなからうか。イギリス最近の選擧は、勞働黨內閣の下に一九二四年一〇月行はれたが、その前後における保守自由勞働三派の黨勢を見ると、保守黨は解散前の二百五十七に百五十六を加へて四百十三となり、自由黨は解散前の百五十八が百十六減じて四十二となり、勞働黨は解散前の百九十三が四十一減じて百五十二となつて居る。さらに三派の得票數を見ると、保守黨は前回の五百四十五萬六千に對して七百八十五萬五千を獲、勞働黨は前回の四百三十五萬八千に對し五百四十八萬二千を獲、自由黨は前回の四百二十八萬三千から實に二百九十八萬五千に激減して居る。これによつ[illegible]たド[illegible]りつゝある[illegible]あれほどまでに仕事をした勞働黨內閣が何故に失敗し、その反對に、保守黨の議席數と得票數とが何故に激増したかといふことである。これには選擧期間における例のキャムベル事件なども多少原因をなしたかも知れない、それだけでは勞働黨の得票の殖えたことに對する說明が出來ない。結局識者の輿論は、從來二大政黨對立の下における少數黨內閣になれた人心が、少數黨內閣の薄弱なるに慊らずして地辷り的に保守黨に投票したのだといふことに結着した。自由黨の將來は一概にも斷ぜられない。ロイド・ジョージ氏は敗殘の自由黨を更生せしむべく、農村改善策を提げて昨今しきりに奔走して居る。併し同時に、イギリスにおいて二大政黨制が過去の夢であると論じ去ることも早計である。ラスキー氏がその近著『グラムマー・オブ・ポリチックス』のなかに、「勞働黨の存在性の試驗は、その果して新しい二大政黨時代を作り得るか否かによつて決する」と述べて居るなども、此際興味のある斷案である。

五

グループ・システムを可なりとする論者は、グループ・システムそのものを目的とするのではなくて、大選挙区制や比例代表制と同じく、議会にはすべての国民の意見が代表されてゐなくてはならぬ。アスキス氏のいふ言葉をかりていへば「国民の心の縮図でなくてはならぬ」。したがつてその結果、この大選挙区制を以てこれを補はんとするのは無論であるといふのである。国民のすべての意見が議会に代表されることは、もちろん望ましいことに違ひない。しかしかういふ政治組織を採用した結果、政府の基礎はつねに弱く、政変相つぎ、徹底した政策が何うしても行はれぬといふことになれば、却つて、この組織についてかんがへなければならぬ。勿論とにかく議会の組織はもちろん一つの結論に過ぎず、かつ議会政治のみの政治であるといふこともかんがへねばならぬが、問題は何れにしても少数党内閣といふことで、今後中選挙区制の下に、ますます少数党内閣または連立内閣出現の機会の増ふることを思ふと、これはたしかに議会政治上一つの問題である。

私は、グループ・システムの最大の弊害は、政府の基礎が弱いといふことその何よりも、国民が直接自分の欲する政府を作ることが出来ないといふところにあると思ふのである。[illegible]関係なく[illegible]閣の成立に際して国民に問ふた政策ではない、[illegible]議政府の成立に際して[illegible]。国民がこれに関与して、其政府に参加し、其政府内閣の出現を望んだのだとすると。今回公協の結果は、折角其政党内閣が出現させて置きながら、希望した政策は実現しないといふことになるのである。

政治組織に関して明瞭なものたることを要する。議会政治の目的は、これを要するに、国民自ら政治することにあるのである。したがつて議会政治の運用を徹底させるためには、国民自ら直接に政府を作り得る組織にしなければならない。グループ・システムではこの必要の點が明瞭に行はれないのである。国民の総ての意見を議会に代表せしめる上に、もちろん望ましいことに違ひない。しかしその結果、若し議会政治の目的である、国民自ら政府を撰んで政治をすることが出来なければ、むしろ前者をすてて[illegible]ないのではなからうか。のみならず、大政党のなかにあつても、特殊な意見が発表する機会は決してない訳でない。い[illegible]ダイセーのいふが如く、婦人参政権に関するイギリス議会の注目を惹いたこと、ジョン・ミルがウエストミンスター選出の議員として出て居た時に於けるものにないといふのも事實である。今日の政党が国民の意見を代表せず、[illegible]しきつて居ることは、第五十一議会における公協政治の[illegible]にしても。[illegible]

民衆たちの心にあはきらつた内情を露つ[illegible]を見ても、[illegible]くのさは
費[illegible]になろつちのつて居るのだらう。

いつであるか、併し[illegible]には、必ずしも[illegible]法やグループ・システムに依らなくとも、現にイギリスの實例に見る如くに、新しい勢力（勞働黨）の擡起によつても遂げ得られる。何れにしても政治の刷新改善は選擧制度の改正だけでは不可能である。問題は結局國民の道德と常識といふことになる。第五十一議會の經驗のみを以て直ちにすべてを斷じ去るのは早計かも知れないが、將來斯くあらんかと思はるゝ歸趨だけはうかゞはれた。私は中選擧區制の將來政治の及ぼす影響についても多少の危惧をもつ。さらに進んで、二大政黨制を採むか、グループ・システムによるかの問題については、愼重の研究を要すと考へるのである。

六

マクドナルド內閣は、少數黨內閣として、むしろ力以上の仕事をした。併しこれはマ氏および勞働黨の幹事が、深く勞働黨の將來を信じ、初めから短命を豫期して、仕事本位の覺悟をきめたからである。いはゆるマクドナルド式は、少數黨內閣の間に當る唯一の方法であるが、これを日本の既成諸政黨に望むのは、五十一議會の實際に見て、不可能である。マ氏も次には多

國劇研究の貴重資料の複刻成る

歌舞伎年代記

—全壹冊—

菊版約五百頁。用紙上質七〇斤。本文九ポイント振假名附。天金。長裝古番附擬金紗綢かぶせ。■函入挿繪三百個寫眞版五十葉。

■内容見本 二錢切手付入申込次第進呈

特價提供！

■歌舞伎劇研究家の必携書！

「歌舞伎年代記」は立川焉馬の著にして、江戸歌舞伎の濫觴の時代より、百年文化元年までの間の芝居界の記錄なり。歌舞伎劇を口にする者の必携書なれども原版稀れにして入手困難なりしを、今回當出版部に於て經費に不拘茲に複刻する所以のものは、一つに劇界及學界の爲めにして、又時漸く盛んならんとする我國劇史研究に貢獻せんが爲めに外ならず、又同時に一般劇愛好家の渇仰を醫さんが爲也。今回複刻するにあたり從來の挿畫に更に五十葉の寫眞版を挿入したれば、附錄の索引と共に、新しき劇界の資典なると同時に一つの芝居繪畫集とも謂ふべし。詳細は内容見本につきて知らるべし。

■歌舞伎劇愛好家の必讀書！

定價	金八圓
	大正十五年六月三十日迄
特價	金七圓
送料	市内 金拾貳錢
	内地 金貳拾七錢
刊行	來る四月中旬

●他に特別申込の便法あり

東京京橋木挽町 歌舞伎座内 歌舞伎座出版部 振替東京 七一八一〇番

發賣所 東京市日本橋 振替東京二八〇 寶文館 大阪市西區阿波堀 振替大阪四三

產業立國の立場よりして小產業を振興せよ

山本 鼎

小產業はいろ〳〵あるが此處に述べやうとするのは小產業中の手工業に屬する地方副產業、もしくは都市家庭工業及び專門手工職に關係する事で、捨てかへり見られざる經濟的殘屑を契點となすものである。產業立國や農村振興を主張する政策、或は官野の社會政策家及び文化主義者達は、とかく社會問題化されたる大事象にのみ興味を寄せて世間榮えのせぬ此種の小產業問題などには極めて冷淡である。

議會前、どの政黨も競つて農村振興を政綱として掲げたが副業獎勵の項目は無かつた。嘗、政黨內閣の砌、農林大臣並に政務次官の果斷に由つて副業獎勵費は倍加されたと聞いたが、それでも僅かに五十萬圓に充たぬ小額なのである。

大震災後、生活問題を對象とせる社會事業がそれこそ雨後の筍のやうに發生し、都市家庭の內職に對しても授產場の施設を見るに至つたが、當業者の組合的團結もなく利益代表機關もないといふ始末であるから、あのまゝでは將來の發展は絕望と云はねばなるまい、要するに此方面の振興策はいつも臨時的で、豫算の消盡を以て終り、技工習得者の大多數も又それによつて確乎たる副收入を計る意志はなく、結局一時の道樂に終る觀がある。

職人に頭が無く、技師に腕の無い事は當り前のやうになつて居る、工業學校も工藝學校も職業學校も學校は皆會社向きの技師を作る處となり、親方は徒弟難に陷りかくしてまづ地方の專門的手工業は亡びゆくが是れに對して當局は何等の反省をなさす社會は何等の救濟策も企てゝ居ないのである。

蓋し手工業には二樣の悲觀的觀念が付き纏つて居るのである。其一とつは手工業其事を卑む觀念で、これは吾が國に限らす世界通有の偏見であつて歐西市人が自國の農業手工業に就て書いたもののなかにも「手工業なる語が我が國にては一種特

の心を存し、而もこれを無産者の特權とする傾向あり。」斯く合理偏見とも目さるべきは中產者及下層に對して有する觀念は、商工的政策に於て吾人の屢々見聞する所なり」云々とある。つまり本當だけでは存し立たず世間中も下層によつて團體人を助けなければならない風潮に則けて於ては地位も教育も低い細民階級に限られてゐたから商業的手工の必需などは單に技術的なりと見られ無料の向上と共に當然無用に歸すべきものゝ樣に考へられて居るのである。斯る觀念に基けば商業は一日も早く之を廢せんとして亂さるゝ事になるが更に一般的不信を除らなければ、商業の發展を來すも出來ない事である。

他の一つは、大資本を以てする商業商や現代的經營法に對して手工業は到底競爭し得ないた、といふ消極的觀念であつて、これも世界的有の趨勢であるが、さう自覺してゐる手工業の時代的價値を見限る事は早計である。近代大規模の機械力に當然對抗するには手工業も多い事ではあるが、併しそれと併行しもしくは獨り離れて發展し得る手工業も少くないのである。殊に個性的による特長とする藝術的手工業は獨立と相俟つて發展し得るならば將來に於て國家的大事業となすべきである事は多言を要しないのである、米國政府から最近出された「獨逸の手工業」を批評した一米國人はこの報告して居る。

「戰時中は、獨逸帝國のバラックへの「過渡都市」を以て現代產業文明の最高潮に達したものとなし、彼の小規模工業及び獨立手工業の如きはその必要が認めらるゝに拘らずして滅亡の運命に陷るべしと云つたが斯いふ批評家は獨逸人の調査的國民だ。今日その工業及び手工業は保存に對外の價値を認め、當局もなから經濟的發展を採ることが如何に一見滑稽の事實に對し教授として力を技するを見て驚き激賞して居る。彼等は想へらく斯る努力は一種の保守的傾向に基因し時代の潮流に無智なるに因らずんばあらずと、之の當否は兎も角獨逸人は如何小規模の經營は大規模の經營によつて壓倒されて了ふものだといふ假令の說を何等信しないのである。事實獨逸に在つては概べて之の論斷に從するわけにはゆかない、分散的經營は獨地に對しては特別技術の工藝上何等の研究を要する技術家の不少かあるが、此方法は或種の工業に於ては經濟的に原動力たるにおよばないし、とも其の應用に依し工業を變化させた細きことはないであらう。のみならず分散的經營の經營として目下工業發展上に卓れたる一方面を向上多くの工業を增加しつゝあるの事實は各地方の者なるも此の如き事實である。尚今日尚その地方に於て工業を各に推し進めらるゝ傾向ありとせば、之に對し分散的經營は必然反對の傾向を示して居る」

[illegible]
[illegible]
ニ了で斯様に多くの生產が工場工業から內職者の手に移るに至つたのは工場法の除りに嚴重なのに其因すると云ふ者もあるけれど、さうではなくて縱令小さくとも自己の所有と呼び得る家屋と土地とを有する一家の主であり度いのは人間自然の慾求で、今や此慾求を覺醒したのであるといふ風に云つて居る。そして最後に、

「要するに分散的勞働と小資本從業者とが充分に存在する事は、次第に經濟上の改善を促すに至るべく、又獨逸に於て行はれて居るやうな職業に工藝的訓練を施すことによつて男女職工が奬勵されるやうになるであらう」と斷案して居るのである。小產業だの工藝だのと云へば、大を粗造する癖のついて居る當代の政治家や實業家達は鼻の尖で嗤つてぞんざいに脊中をむけるであらうが、小產業の經濟的價値は決して馬鹿に出來ないのである、未だ小產業の組織的發達を見るに至らない吾が國でも總額はなか〳〵の額であらう、小產業中の地方副產品だけでも大正十二年の年產額が六億八千八百五十二萬餘圓になつて居り、加工的生產品が其半額を占めて居る、其內手工業の收得はどれ程であらうか確かにしないが、工藝的手工の所得は、農產、畜產、

[illegible]
[illegible]
工藝的[illegible]二十[illegible]たくさん[illegible]たこので
ある、但內の此統計は[illegible]以前のものであるから一[illegible]約四十此に當りまさに八億圓といふ高であるが此高は日本の地方產業中の大宗とせられ常に國家問題として扱はれる養蠶業の產繭價格六億八千萬圓よりも一億二千萬圓多いのである、而も此八億圓は地方住民の餘剩時間から生れた經濟的結晶なのであるから妙だ、先年來あちこちの地方へ旅行して土地の新聞を讀むとどの縣でも積極的な產業計劃を攻究しつゝあるのを見るが、斯る小產業方面には全く無關心のやうである、產業振興策として工業學校の新設もしくは擴張を企てる縣はあつても、產業工藝學校を提案する縣はない、產業と云へば多量生產を考へ、社會政策と云へば一擧手に多人數を支配する事のやうに思つて居るらしい所謂有力者なる人達は大工場向きの技術者養成する事には贊成しても、所謂分散勞働に從事する手工藝職人もしくは副業的手工業者の養成並に向上を圖る事には[illegible]らうとしないのである、其結果は[illegible]ある小產業も次第に亡び、特有の原料も原料のまゝで安く賣拂かれ或は空しく放棄さるゝ狀態にある、最近某府縣の產物は[illegible]に用つ[illegible]した、それは他府の[illegible]も

如上は甚しく實用を破壞して、殆ど出雲八雲の[illegible]を見たといふのであるが其原因を色々の手で調べて見ると第一に根柄が世界に對して疇よりも遙かに弱い事、第二には現在の加工品が工藝的價値に乏しい事であつた。ただ海外向きの需用に應ては何んの加工色が大切なものであるかを知つた、即ち工藝的價値のうちに數へらるゝ物、いゝ品が如何の重要な商品的立場を擁つて居るのであるから、困つた事には其儘白色は目を離れば燒けて茶味をさすのである。右に擬れば將來の[illegible]的改善は、將來の純白色を永く保たしむる爲めに汗を拔く事を研究し、亞硫を併ふ[illegible]調もバスケットの目を[illegible]て製作法に[illegible]商品價値を加へる。といふのが要點となるのであるが、さういふ改良は獨木利のやうに製造學校が各地にあるやうであつたら、八雲の鎌倉などに間接に影響に於て決して居るのである。木材の目に拘はらずも同じく非常であるが、あれは木材の細い木から材木の不用材を拂へ下げてゐたので、これ、ありた拂ひ物を作るのであるが、かなり一村の乏しい木材を[illegible]出から作ればとして取り來つたものである。昔は[illegible]商品、それから私共が少年の頃使つたあの由[illegible]式の[illegible]商店たるを買ひに行つただらうであるが、今日ではもはや[illegible]の籐細工を打出する風であるから同品の注文は殆どなくなり近年はこれ品目[illegible]などをやつて居る。

最近其先には[illegible]用具もほつぼつ西洋風を用ゐるやうになつて來たので、曲げ物同業組合では雑貨を中心として西洋家具製作所へ出品に來たことがある。木材の曲げ物なども、其技術を見やう多年の經驗を經たもので、あり、其製品も仕上げ[illegible]地に於ける[illegible]經濟的であるから西用雑器を發見し、[illegible]テーブル手作りの組合前價値を低くしてみたならば、必ず多少の需要に一致するものとある。一例を擧げて見れば、諸國の特選の商用木工品に見るが色もしくは形状をもつてゐつた菓子入れのやうな物はさつと功する、曲げ物に用ゐられる菓子はますます[illegible]を密着るやうになつて來たが、西洋菓子は殊に其形に適する風があつて市中にも需品に求めかゝつたものがたくさんある。伊太利當の菓子容器にはフックヅックで出來たものが些少である。さういふ向に出すと喜ばれたのかも知れないが、美しい小物入れとも菓入れともなるからつた人と云つた人との間によく良い研究の[illegible]することになる。如何にさういふ具的な小物の需要も[illegible]來ますます多くなるであらうか。其意で[illegible]要性上の作用等との間に取引の[illegible]はるゝことも可能となへらるのだが、木工の組合組員等其場合まで至いつゝあるが、木工は果なかつた[illegible]の家庭の[illegible]工山形の埋れ木細工、信濃の蔬籐料の子、鹿兒島の竹細工等々

[illegible]

め、聞く處によると、獨逸には全國に七十餘ヶ所の手工業會議所があつて、地方並に都市の手工業者の爲に有力な利益代表機關となつて居るといふことである。此會議所の經費は一半を都市の補助金にまち一半を手工業當事者の支辨によつて居るさうで、事業は主として、地方手工業者に組合的團結を促し其發展を援助する事であつて此會議所の存在は政府の手工業法と相俟て獨逸の地方手工業を美事に改善したといふ事である。又此種の小產業に對する民間の有志的後援としては、バイエルン郷土技藝學會といふのがある、これは一九〇二年に創立されたもので、本部をミユンヘンに置いて月刊雜誌を發行し大戰前會員三千名を有すと云はれてゐる。會員には知名の士や名高い美術家が澤山あつて、各自會務に從ひ遂に內務大臣の認可を得るに至つた。此會の主眼とする處は家庭工藝の發展にあつて、其の目的の下に大小無數の博覽會を開催し、孤立無援の職工を扶助誘導して其製品の販路を斡旋し農村民の手工藝に對してはナルプランネル街に小さな販賣店を設け是に常設展覽所を附設して、農村民の手に成つた陶器、籠、レース、刺繡織付型押、リンネン、薛紬の布、農夜姿の人形、匙、銅製提燈、編物下、其他種

[illegible]

術（[illegible]）に對する[illegible]する事にあつたから世間に向つて斯く宣言して居る。

「吾人は國民自身が各自に自己の獨創力、創造的能力、過去の功績及び將來の可能性を發揮せん事を希望す、吾人は吾人の趣意書を基本として働く總ての工匠に對し實際的助力を與へ彼れらの事業を廣告すべし」云々

なほ手工業者に手工藝に關する教育機關としては何處の政府もしくは地方廳都市役所等に支持せらるゝ職業學校が澤山あつて多くは單科的である。例へば、木工學校、籠細工學校、窯業學校、硝子器製造學校、官立刺繡學校、白地布細工及織物學校、官立鐵器學校、レース學校、手工美術學校等の類である。そして大ていの學校は夜間科、日曜祭日科などを設け、入學は十歲或は六才位から許して居るのも面白く學校に於ける生徒の製作品を常時販賣して所得を作者たる生徒に酬ゆる事にして居るのも實業教育らしいやり方である。

なほ此種小產業に對する金融機關も種々あるらしく、左に摘要する小木工業に對する山林局の保管規定に徵しても行き屆いたものであるらしい。

一、木工業ノ爲メ年々度ノ割當ヒドケハ（A）入林料及從價伐採料（B）競賣拂下（C）隨意契約に依リテ行ハル。

二、臨時拂下ハ入林料又ハ隨意契約ニ依リテ之ヲ爲ス。

三、木材拂下ノ爲小森林ノ區域分割ヲ爲ス場合ニ於テハ木工業者ノ利益ヲ害スル競爭ヲ除ク爲メ仲買人ニ拂下クルコトヲ許サス。

四、毎年ノ伐期ニ於テ木工業者ノ必要ニ應シタル各種樹種ノ[illegible]ヲ審査シテ[illegible]ヲ行ヒ、入林料又ハ隨意契約ニ依ル價格或ハ制限セラレタル競爭の下ニ公賣ノ方法ニテ賣拂ヲナス。

五、山林局ハ木工業者ノ窮境ニアル者ヲ保護スルノ責任ヲ有ス、斯ル場合ニ於テハ局ハ信用拂下ヲ與ヘ既拂下木材ニ對スル代金ノ徴納ノ時ニ日延契約上ニ際シ利子ヲ徴セズ。

六、木工學校、[illegible]ノ爲ニハ相當ノ價格ヲ以テ國有林一部ノ伐斷區域利用ヲ許スコトアリ又同上ノ目的ノ爲メ一定ノ期間經營ヲナスコトアリ。

七、國有林中ニ於ケル水力モ之ヲ學校實習ノ爲ニ提供スルヲ得。

八、國有林内ノ特種ノ樹木ハ工業者ノ目的ニ適シ[illegible]限リ公賣ニ付セス[illegible]ニ付ノ。

九、國有林ニ於テハ木工業者ノ必要ニ應スベク各樹種ヲ栽植ス（例ヘハ[illegible]ニ對シテ[illegible]、[illegible]ニ對シテ白樺ノ植付ヲ爲スガ如シ）

十、製材業ニ一般材木ノ讓渡ニ對シテハ特別減價賣渡ヲ施行セラル、他ノ一般木工品ニ於テモ亦同シ。

似たはたに獨逸の事例であるが、露西亞でも大戰前帝政時代には特に副業の保護獎勵が行はれて居た、何しろ露西亞は[illegible]の八十プロセント以上が土地耕作から[illegible]るといふ國柄であるのに、それの爲めに毎年五ケ月乃至八ケ月も田畝の仕事を封じられ生計の四割乃至六七割は副業の所得に依たなければならないといふのであるから、露西亞だけに特に手工業が發達したのである、

十數年前の露西亞政府の年報中にこう報じられて居る、「我が手工業は實に[illegible]制限せざる小規模なれども農業に欠く必要の生産者なり」と又「[illegible]工業の[illegible]を何ものぞ」と現に如何に露西亞の[illegible]が國家的大産業であったかは何はれるのであるが、露西亞に旅した人はモスクワかレーニングラードかオデッサかトエッの何れかで有名なクスタリヌイ陳列館に案内されたであらう、あれは其の[illegible]の手で作られた[illegible][illegible]加擦下[illegible]

ては[illegible]でタンムリンに出品したペーパーナイフ、それからつて
にゴシック式の[illegible]した家具、金銀細工[illegible]
もあり籠類、陶器、皮細工、刺繍品、ありとあらゆる手工[illegible]
が陳列してあつた、露西亞の浮世絵人形とでも云ひ度いあの有名な木人形も其處にあつた、白樺で作つた割り物の菓子器も其處にあつた、粗い手織木綿に捺染で版畫風の模様を染め出したテーブルセンターも其處にあつた、それらの物はすべて木質の曲物細工や青森の刺つ子や、アイヌの浮彫のやうにモスクワスカヤの農村民の家傳的な垢拔けのした技術を示すものなのである。クスタリヌイミユゼエは單に生産品を賣るばかりでなくサムプルの提供、前貸制度による諸材料の配給、倉庫事業、海外輸出等あらゆる産業的必要を圖つて居るのであるが、最近モスクワから歸つた人の話に此ミユゼエは依然榮えて居るといふから産業主義の勞農政府はやがて此種の小産業に對し一層に組織的な計劃を建てる事であらう。

それにつけても吾が國の小産業が、産業立國、農村振興のお題目を耳一つぱいに聽かされながら孤立無援に放つておかれるのはほんとに解せない事である。

×

農村[illegible]
[illegible]
れ不事を必要とするならば[illegible]として[illegible]としても農村の成[illegible]が一様に[illegible]を[illegible]なければ駄目であると吾々素人は考へる。次に農村民が不物労を餘儀なくされるのは冬季農閑であつて、それは吾が國に於ても少くて一ケ月乃至は三ケ月以上に及び、寒國では殆ど一年の三分の一が閑暇期となるから、此冬期農閑なるものこそ形而上的にも形而下的にも農村振興の鍵であると考へる。現在吾が農村民は其年々の閑暇期をどう利用して居るか、農村研究者、もしくは地方有力者達は其大なる經濟的空虚に對してどんな意見をもつて居るか、私は未だ冬期農閑を對象とせる立體的の研究あるを知らない。

農村は案外餘裕がある、と云ふ人もあるが、それは農村民が度を踰へた質素に慣れてしまつた事や、耳目を慰める何等の娯樂もない、不活潑單調な生活を語るものである、とにかく農村は疲れて居る、數字的に云ふと本邦の農業者はとつくに破産して居るのださうではないか、吾が農家一戸當りの年收入は平均六百四十二圓で一戸世帶の人口は平均五人であるから若しこれを一人當りにする時は一人の年收は百二十八圓となり一ケ月に割り當ると僅に十圓となる而も此等金額たるや肥料と公租公課

ならないことになつてをるといふ話が面白い。高木博士の調べられた所によると、大人子供を總算し一ヶ年六圓の生活では最低の生活としても一ヶ月十六圓を必要とするさうであるから、今日の農村生活者は何れも六圓づつの借り喰ひをして居る事になるのである。斯様に論ずると農村が各種問題を経済的不自由にして多くの生活者の一層苦しまいる。故に各種問題は農村民にとつては休養の問題であり、教養の問題であり、生活の問題である。併しこれらのすべてを有するもたゞの分な問題を有する地方も多くあつて、さういふ地方こそは則ち小作農の好き地であると思ふのである。

各種問題を除いては當然副業で、農村經濟の一面工的副業生産品一覧によると農產物關係品に九億圓、林産物關係品に四億圓、水産物關係品に四億圓、鑛工品其他工産品一億あつて其大部分を生產物總價の位置を占むしても百億圓となつて居る。要で有の經濟に一括されて居るが此等物品の品種を見るに工藝的な手工品は甚だしく比なるものが其雑な手工品なのである。例へば、藁、莚、俵、畳表、縄、[illegible]、籠、麻苧、麻織物、組紐、竹工品、陶器、木工品、漆器、[illegible]、家具、[illegible]、紙、和紙、紙布、足袋、[illegible]、ざるといふ類いのものである。これらの品物は生産の性質上から見ても仕事が簡易な點から見ても農村の副業にふさはしいものであるが、かういふ手工業に從事する事を好まない者も農村には少くないのである。なぜならばこれらの手工には技術的な面白さがないからだ。あるにはあつても極めて簡單で、工程の何處にも變化や趣向を變た事は出來ないのである。所る仕事の關心事は收益と、能率と、賃銀であつて即ち其實際的立場は經濟的價値一方であるから機械的に流し、[illegible]商的の競爭となり、競爭の結果はいつも價格なのである。從つて此種の手工業は殆ど組合組織の手に委ねられて農村民でありながら自家用の材料を[illegible]へ金を拂つて購入する者も段々多くなつて來た。

前段にも手工的副業が求められる事に就て述べたが、仕事に趣味の無い點は屢に何としてもたゞ〳〵貧乏の爲に從事する嫌ひとあつては貧ならざる者、教育あり自尊心ある者が之れを省みない事は無理からぬ事である。一個從來の副業勞働に從來的な傾向があつた。これは[illegible]なものであつたにせよ、其の[illegible]である。此種の副業は貧乏な家には[illegible]であるが、ある家には不必要である。といふ風に[illegible]たつてあつて、[illegible]從事する者[illegible]を一段[illegible]めなければならない。筆者は此意味の[illegible]

し、[illegible]物を[illegible]と[illegible]従[illegible]にいくらでもあらう、[illegible]いふ[illegible]論者に對する關[illegible]であるが、私は[illegible]なも[illegible]一とつとして、獨逸、露西亞、スカンディナビヤ、オーストリ、ハンガリ、スイス、佛蘭西、チエッコスロバーキア等歐羅巴諸國に行はれて居るやうな現代生活の趣味的實用品たる事を志したポピュレイルな手工的工藝品の生産を舉げるのである。云ふまでもなく日本人がそれを爲す場合、日本趣味或は東洋趣味を發揮する事を勿論理想とする。併しながらこの仕事は道樂ではなく、工藝專門家の自發的な仕事とも違ひ、世間を相手の所謂産業工藝であるから、産業的立場を無視してまで理想に急ぐ譯には參らない。殊に販路を海外に見込む場合それぞれの顧客に適したものを作らねばならないから、郷土色（ロカルカラー）の表出に拘泥して居られない事になる、バイエルンの木工學校の方針書きに「購求者ノアラユル趣味ニ合致セントスルニ在ルヲ以テ範圍自カラ多方面ニ亘リ、從ツテ製作品類ル雜多ニシテ、或特殊ノ型ノミニ重キヲ置クコトナシ」と云ふのがあるが、やはり此方針に從はねばなるまい。

さて吾が農村に、果して謂ふ如き工藝的小産業が植り付くや否やといふ質問には机上の思案で答へ度くない。唯七年此方吾[illegible]

さ[illegible]他に[illegible]す、都市の家庭に、[illegible]と同時に、様々な小[illegible]て將來國家的大産業を構成するに至らしむる事も決して不可能でない、といふ自信を有つに至つたと云ひ得るのである。

農村と此種の小産業の關係は經濟的寄與を理想せしむるはかりでなく、新味ある文化的開幽を理想せしめる、英國のウヰリアム、モリスは審美的感情を失つて貨殖の鬼となり了つた近代人の無慘な生活を慨して、これを藝術の趣味で救ふとし、私財を傾けて倫敦に裝飾工藝の會社を興し、自身意匠家となつて、壁紙や、飾硝子や、書籍の裝幀などを創作して、その高尚な趣味を一般市民の生活にまで普及しやうと志した、モリスは一本の釘を造るにも數人の手を經るやうな近代の分業的な工業法を極力攻撃した「社會問題が賃銀の爭ひであるうちは駄目だ、それが仕事の質の問題になつて來なければいけない」と云つた。

露西亞にも又モリスと同じ意志を有つた人が現れた、それはロマノフ家の王女マリー、テニシエフで、今から二十年も前の事であるがスモレンスクの在のタラチユキノといふ處に仕事場を設けて八人ばかりの美術家を顧問にして熱心に目的に向つ

…立つてゐる。此人達の仕事はモリスのやり方よりもぐつと平民的目的であつたが、然術、即ち彫刻や繪畫や刺繍や織物や色染や陶器であつて農村民の居住、服装を美化し、音樂や、舞踊で彼れらの精神を豐潤ならしめやうと圖つた其意志はモリスと同じである。若い王女は村落に隠れた工人を探し出して彼れの材料及傳統に對する知識を利用するに努めたといふ。例へばモルボスの片田舎から濃い赤と紫の植物材染料及其色染法に精通せる一老婆を見つけ出して其傳習を基本として、褐色、青味ある緑色、暗黒色、ビザンチン紫、鮮赤褐色、灰綠色、暗…の幽妙な…色から成り立つたスモレンスク特有の布帛工藝を大成したのであつた。

タラチユキノの仕事場で出來るものは可なり豐富である。女工が最も力を入れた刺繍の染色、刺繍の布帛類、衣裳、婦人服、芝居の衣裝、クッション、木材工藝では食器棚、長椅子、椅子、卓子、箱、門扉、衝立、…、玩具、戸棚、陳列棚、額縁、手箱、書棚、寝台、婦人室の木製椅子、バラ、イカ（樂器）、ペン軸、金屬及陶製品としては、…用の…、…、燭台、食器、花瓶、窯業工では…等がある。タラチユキノの染色及刺繍品の一特長は、吾々の作品に現れた…に對つて居て、…と同じ筆致のないことであるが、これは農婦達が各の衣服に思ひ付いた色に夫々しながら指を並ばして出來上つたものだからである。

タラチユキノには此仕事場の人達によつて小ぢんまりした木造りの劇場が建てられて居て、居室や座席の長椅子などはやはりその特製な彫刻で飾られて居り、壁の額縁や天井の太い桁などにも同じ手法の模様が描かれて居る。面白い事には稀れ學校生徒は（農村の青年男女）時々此劇場の俳優ともなるのであつた。

一夜は…やうな大騒ぎを目撃した。それは同舍での大事件であるところの素人芝居が催はしまらうとする前の騒ぎであつた。則ち込み入つた「時事物語」を出す仕度で人々は…を作つたり、小物商から借りて來た衣裳を割り合ひの取れるやうな立派な衣裳を作り上げることに大評をおいて居るのであつた。仕事場の生徒達は、仕事をしまうと急いで衣裳を着け、村内・村外にかゝり、舞台を仕組し、或は又オーケストラに加はつて手助をするのであつた――彼れらは、夜更けてこれがお終になるのを、ひどく惜しがつた。

こんな事が一佛人の「タラチユキノ旅行記」に書いてある。タラチユキノの工藝は…間に…てある一式に堂々として居る、形式が人工的すぎるとか一般向きでないとか、或は

[illegible]

く、すべての[illegible]に、[illegible]しつつ[illegible]うなどふ事が出来る、仕事のおゝした味さは、利得にのみ心を走らす普通の副業根性の製作品には決して現れつこないものである。

「中央から遠ざかり、利欲をはなれ、勘定をはなれて人々は偉大なもの、善いもの、美しいものを創作して居る」

とタラチユキノ訪問者は讃美して居るが、テニシエフ王女の仕事場（アトリエ）の指導者達はまさにさうした精神で此意義深い農村振興事業に從事して居たのであらう。

吾が農村には芝居も、踊りも、音曲も、歌も無くなつた、それに代つたものは講習會と、演説と、政治運動である、血氣な青年達は相追ふて都會に走り娘達は無造作に工場へ攫はれてゆく、何の社交的快樂があるではなし、電氣は暗く、酒食はますく、今日の農村生活はまつたく味氣無いと云はねばならない、それでも人々が割合に卑屈にならないのは農業其ものゝお蔭であると思ふ、だが村人の耕作に對する心もちには實に今昔の感があるらしい、郷里の一自作農である私の親友K君の左の話はそれをしみぐ\と語つて居る。

「私が耕作して居る桑畑に家人が『山畑』と呼んで居るのがあこ、[illegible]かみえな[illegible]さに石垣によつて[illegible]ので五六畝、狭い[illegible]になると、[illegible]畝に植えてある、面積は丁度一反位[illegible]

此畑はもと林、櫟などの雜木が密生して居た山林を私の曾祖父が幾冬かを費して開墾したものであるさうだ、田圃の仕事をすつかり片付けて、晩秋から翌春までの農閑期を、曾祖父は毎日辨當持ちで此畑の開墾に通つた、夕方家に歸る時には土の堀り口を藁や草の類で覆つて土の凍り固るのを防ぎ、翌朝はそれをはぎとつて仕事を續けたのだ、と幼い時に祖父からよく聞かされたことがある、五段の石垣の側面積は、耕地の平面積のほゞ三分の二位はあるだらうか、その石垣の石や、石垣の裏つめの礫は堀り返した土の中から出たものを用ひたものであらう、石垣を積み上げる勞力、傾斜地を平らに地ならしする勞力、木の株をほりとる勞力、それらの勞力を合算して考へて見ると、一日に平均一坪の開墾はむづかしい位の仕事の運み方であつたどらう、三百坪に三百日、一冬の農閑期に仕事の出來る日數を假りに七八十日とすれば、私の曾祖父は厳しい冬の北風に吹きさらされながら、四冬の間を此畑の開墾に暮したわけになる、

私共には出來るだけさうんざいにする程の仕事である。

もと、傾斜地の山林を開墾した畑であるから小石交りの瘠せ土で、現在に見積つて四百圓位のものであるか。万々に亘る年月に對する報酬としての四百圓は何と多くの人間を動かすには餘りに些細であるが、私共は尤、四季の辛い勞働を加へ「ヒビ」や「アカギレ」に新たな不足を加へる。三百坪の瘠せ土を加へ、耕作交通の不便を加へ、望むところの耕地の時價を加へる。この複雜な勘定の結論は、より容易な仕事によつて、よりも多くを利得する工夫をするのが、賢明であると云ふことになる。不幸にして、私共は何故永い間の複雑な算術を知つて居る。此算術の知識をもつて一切のものを代價の價値に換算させる、仕方のない自分の下劣さを考へる。さうして、仕方のない下劣な代の見積額と働いた一揃りの得るべき報酬とを比較して、一割りに合はない一割りに合はないことを承認すると、此打算は私共が働くことから當に見込みはずる。一方に此くあると、打算と行き等の知識はますことに簡單であつた。此打算を見出して一門を開かれて行くに簡易に見た。一坪、一十二、十坪と牽牛繩本が根り返へきれて私にとなり。夫共その畑を仕付けるかの如く事を考へて、多中にない一寒か、ない時間の浪費を計算する事をもてなかつた、併して一つを彼らは自ら利得として滿足した。彼等は生産を見て計算を見なかつたのだ。作られた百坪の開墾地は、一冬の夜に激しい勞働を忘れさせるに充分であつたのだらう。

私は今、一日の仕事から離れて一種の快感にひたりながら、あたい暖炉を前にして「ランプ」の下にある」と機變した二から外れての流れをなつかしく研究して

私共の十四五才の頃までは、村人にはところにも糸車があつた。私共の生れない前には、綿の栽培もして、その棉花から糸を紡ぎ出したのださうだ。私共の田つて居る時分には、綿は町から買つて來たのを用ひて居た。村秋に入つて「コオロギ」が鳴く頃になると四里もの夜は行燈やランプの下に座つて糸を紡いだ、その老人に聞かされて、手紡ぎの糸にはなかなか手間がかかる。今は糸を紡ぐ事もなくなつて居る。

機械　最初に土地は在來と改良はた其とがあつて、地表を在來にあなり實用的なものであつた。とかく　る、中には肯といわけは其日に　其　田　きい　にはた其と呼ばれて居た。その時代の改良具も、今ではあたり作式

なものになつて居る。

化學染料で自由に色を出すやうになつたのは最近のことで、以前は植物染料を山野に求めて用ひた「カリヤス」「クヌギの栗」「榛の樹皮」など、紺染だけは素人の手染にならないので紺屋の手を頼んだ、乏しい種類の染料によつて目先の變つた柄を作り出さうとするのだから、整經の時の縞割りは女達の一番苦心をした仕事であつた、色々な縞柄を集めた縞手本と云ふのが女達の秘藏品の一つであつた、又織り手の獨創になる「ヤタラ縞」と云ふのが、織り手にとつて興味ある仕事であつた、それは一と「ヲサ」の縞割りの中に同じ縞目を作らない事が織り手の興味でもあり自慢でもあつたのだ、縞割りの出來た糸に糊をして燥す時には、近隣の女達は互ひに手傳ひ合つた、さうして仕事を終つて茶を飲みながら、縞柄評や世間話をするのが女達には樂しい社交の時間であつた、風呂湯をわかして近所の人を招くのは、農村の一つの社交であるが、その時織りためた反物をもち出して集つた女達に褒められるのが、どんなに主婦には嬉しいことだつたらう。

×

私の幼い頃には時々地芝居のあつたのを記憶して居る、土地の人達が勧進元となつて當時の役者を雇ふことさへあつたが、土地の好事なお役者をつとめたこともあつた、〔芝居小屋〕は田舎には殆ど無かつたもので、鎮守のおやしろの中などに小屋掛けをしたのだ、見物人は握り飯や煮〆を重箱につめて一日かゝりで見に行つた、秋晴れの暖かな日和にはなか〳〵のんびりした行樂であつたが、たゞきまつて幕間の永いのには閉口した、素人役者に就ては色々の笑話があつた、これは母から聞いた話だが、ある山手の村の地芝居で、女形をその村の女が勤めた、ところが、平素「ハバキ」掛けですた〳〵歩きつけて居る女のことだからお大名の奥方の歩み振りには似合はしくないと云ふので、餘り大股に歩けないやうに脛と脛とに紐を結び付けて置いた、さて、所作事よろしくあつて奥方が二重へ昇ることになつたが脛の間にある紐が邪魔をしてどうしても二重まで足が屆かない、止を得ずすつて上がつた、折角の名工夫も智慧の廻りかねた處があつたわけだ。

私の村にある寺の境内には當時近傍唯一の常設小屋があつた、今は市になつて居る隣接の市街地からも、其頃は却つて私の村へ芝居見に來たものださうだ、祖父が忠臣藏の判官腹切りを勤めたといふ話を聞いて、あのしかつめらしいお祖父さんが、どんな顏で眼を白黒させたんだらうと子供心に可笑しくて

たまらなかつた。それからは、いたづらをして祖父に叱られると、障子の陰などに隠れたなぞの何時も仕切りの真似をして、祖父に對する鋭い聲をしたものだつた。

浄曲、義太夫、生花などはみんな他から渡つて居た農村の趣味であつたが、今はさういふ悠長な空氣はなくなつて了つた。其の頃村の祭典を賑やかにする為に獅子舞太神楽などは、村々の故老や青年の力を入れて稽古したことであつたが、同様の運命に陥つて居る。

農村の前代には、商業者として栄えようとする傾向が強かつた。私共は耕作者として栄えたことのみしか知らない。

耕作、耕耘の技術は最近十數年の間に著しく進歩した。私が肥料類を使つて肥料調劑のをはじめてから二十年になるが、はじめの頃は田地畑一枚で八俵目から十俵目の收穫があれば上作とし喜ばれたものだ。十二俵目の收穫は非常な豊作であつたが、今では耕地一枚に二十八俵（）で六七俵目以上收穫は珍らしくない。米は一反步當り二石、二反四石六七斗といふのが以前の平年作の成績であつたが、今では倍以上二石近く穫れるが四五の米價にきて増し…た。

これほど著しい増收をするほどに技術が進歩したから、農夫の耕地に對する觀念がだんだん後退して行く譯があるのは何故か、目先の増收を計ることには汲々として居るが、地味を改良して永く地力を培養しやうとする心掛けは薄れて居る。畔草などは作物の邪魔になるので此を刈り取られるが、多くは刈り放しに捨てゝ置かれる。山林原野の下草は肥料としてたく込みられない。金肥を使用するのが結局經濟だといふのにも一應の理由はあるが、耕地に對しては不親切な言ひ分である。私の家に助右衛門といふ老人があつた。田圃の仕事に出掛ける時にはきつと小さな籠を腰に下げて行つた。耕土の中に小石や瓦片のやうなものが見當ると、その籠の中へ拾ひとつて、耕地の外へ捨てるためだ。其の老人は田圃から歸つて自分の家に溜が空いて居ないと本家まで肥をもつて溜め貰ひに行き、肥を汲つた後の汚れ水は自宅の畑までもつて來しかけたといふほど篤農的な人だつた。こんな原始的な方法は今の時世には向かないことだらうが、耕地に對する親切心だけは何時の時代でも保存して置き度いものである。

良い百姓は又耕作道具を愛する。私の家に日傭に出きて二十年前から働いて居た作男があつた。これは近方に類のないほどの百姓の勝れ者であつたが、自分の使ひ慣れた道具を…

[illegible]いゝのだらうといふ[illegible]して、私は時々内密にもち出して使つて見た事があるが、その手際のいゝ仕事は道具のせい許りではなかつた。もし使つた事を見つかりでもしやうものなら、うんとなぐり付けられたものだつた。道具の柄や刃先のそり工合などの癖にすつかり親しんで居るので、他人に使はれてその癖を壞されるのが神經にさわるのださうだ。この男が又大の我儘者で、田圃の仕事に就ては、私の父以下の專制的權威を振つて居た。自分の腑に落ちない事は父の命令でも決して服從しなかつた「俺が作大將だ」といふ無意識な主張から、やはり無意識的に尊敬と權威を要求して居たのだ。今考へると一種の高級な勞働問題の提案者だつた。

×

今の農村の農業技術員や補習學校の農業教師のやうな地位にある人々に、百姓の仕事が嫌だから月給取りになるといふ傾向が多くはないかと思はれることがある。働き得る力をもつて居るものが、自分の經驗知識を他人に分つ地位に立つのはいゝ。働くことの出來ない人、働く事の嫌な人、自ら農業經營の安危を負ふだけの勇氣なく、安易な月給生活に滿足するやうな人が[illegible]すことは出來ても、よく勞力を[illegible]ふことは出來ない。今の[illegible]に於ける欠けて居ることは[illegible]かんとする意志、働くことを[illegible]情、及びその熱心から生れる智恵ではないか。

中等程度の實業學校の卒業生が實役を嫌ふ傾向は、中學校卒業者と差異がない。今度上級學校への受驗資格を附與されたさうだから、此傾向は一層强くなることだらう。實業教員養成所の生徒の模樣を聞くに、實習の時間は先生と成績への申譯につぶして居るといふ。この人達が農村の補習學校の先生になるのだが、もとから底力のなくなつて居る青年が、益々增長するのも故ある哉と思ふ。

×

經濟學から生產論を除くべきであるといふ議論がある。經濟の指導概念が「貨幣」又は「營利」であるとすれば、生產論が少くとも經濟學の中心問題でないことは肯かれる。然しこれは私共の生活の一事象たる經濟に就てのことである。私は生活の全部又は大部分が「營利」によつて支配されることを嫌ふ。科學者の學究の結果が實生活に應用されて非常に役立つことがあ

り、創作家の作品が生活の物資を得る道になることもある。然し、科學者は應用のためにのみ研究しない、創作家は創作そのことの興味によつて創作する。私共は農産物によつて家計のすべてを支持しなければならないとしても、生産を全くの手段視せずに、生産の働きの中に意義と興味とを見出すことは出來ないか。私は、衣食を自給し、娯樂を自給し、その他能ふ限りを自給した私共の祖先の生活の中に、働くことを樂む生活の面影を見る。そして私共の生活の餘りに分裂しすぎて居ないかを考へる。

農村の不景氣は、むしろ心の不景氣に歸して、皆深刻なものがある。此不景氣を救濟するのは蓋し容易な事ではない。スエーデンが僻村をもつて國民藝術の作興に成功したやうに、デンマークが農村をもつて協同の力の發展に成功したやうに、吾が國は何をもつて此の深い不景氣に對處したらよいか。何にしても樂味ある大衆的な娯樂が必要である。臨時的でない。お祭的でない。お盆日だけでない。永久な時間のもとに立脚して一小日かも實行してゆくものでなければ日である。例へば村同祭いやうなビラ撒式な行事では何にも大規模でも何の役にもたたない。今日の國民は一般に在よりまづむで居る、國民の中に抑壓を什入れて置く事が必要なのである。

農村生活に於ても、吾々の中に時にまた時に良い趣味の高い

たからと云つて、良い、事が出來るとは限らない。何すか今日は吾が惡いからな」と世相を慨されたさうであるが我國本の國に於切に嘆いた言葉である。農村に工藝的小産業を振興するに就ても經濟的な成果は擧げよいが、多くの從業者に製作上の心を作興する事は甚だ困難である。吾々の研究所では大正九年以來數年間約百日間連續的な教習を開いて農村からの志望者に之れを風俗人形や淨瑠璃で裝飾した小箱や其れにいろいろな土俗品の作を教へて居るが其最初の講習生である小縣郡の農民生等が自のそばくにやつと玄關な作良心の小さい若を設れて來た、特たものて、彼れらは一昨年來時々地方講習の門下として一人に數へる立場に置かれてから自分の仕事の將來さに就ていろいろと其に、おぼろ氣ながら一良い仕事にも作り出して來たことでつた。もうそう今、此最初の山村で開かれて居る講習へ助手として派遣されて居る一人から手紙が屆いたがその手紙にもかうした心の消息がよく現はれて居る

「――あの方がまさるしかもたよつた月が作つた方が私をみて、九人程のものがいたすと社上にて居ります、一人居ても九十人居ても、これは良いと思ふものは一人一人す、今度は六人程居ます。

もうおと仕事をする日は一日で何居います、……

日ごつきいたす、そうして講習も終りの頃になると仕事が六ヶさはついて來て、どうしてなほしたら良いかわからなくなつて困つてしまうので御座いますが、今度はそうした風が少しも御座いません、講習會での成績は、今迄で一番です、今日から彩色をはじめます、色は眞綿ですから丁寧にやります、彫りの上では百五十程（雛匠と鶴を合せて）出來たうち百二十もパスしたものが御座います、こんな成績は外にはありません。

今度は宿へ歸つてから夜業を澤山やりました、四五寸の人形を七つも彫りました、「仕事」は淋しさも忘れさせます、仕事は唯むづかしくなるばかりで良いと思ふ物は出來ません、でもやらないでは居られないのです、講習生達が一生懸命でやつて居る處を見ると、こらへて居られない程自分の仕事をして見度くなります、ゆつくりと落着いて自分の仕事をして見度くなります、今度は手足をたしかに作る事を修業しました、だまつて人達の仕事をして居る處を見て居て、暗示をうける事も澤山ございます、少くとも自分の爲になるものは、どんなものでも吸ひ取らうと努めて居ります。

毎冬一二度位は講習にやつて戴き度く思います、父さんに金をやるのも樂みですし、短い期間に割合澤山の金がはいります故、他の時を金の事を考へずにする仕事に使へます」

云ふ、たゞ人に[illegible]つて、判試を附つた、他人が[illegible]ういふ小作業の[illegible]ておこう。

「――私達は夏中から十一月までは、座つて居られない用事が澤山にございますから仕事のはじまるのは十二月からです、この月も師走女に介とまで云はれる時で、夏中養蠶で何も出來なかつた洗濯物や、裁縫で閑は出來ません、ですから落ついて制緒に取かゝるのは、一月中旬からであります、短い[illegible]を與く仕切り、壁へ圖案など張りますと漸く落ついて仕事が出來て參ります、正月から三月末までの農婦は、惜しい程徒〳〵な時があります、お炬燵でお茶をのみ、むだ話に半日中を過す様な日が續きます、そうした時に、いく點かの生産品を出す事は大變に愉快なものです、十日目毎に生産品を組合へ持よるのですが、一點も多くしたいと思つて夜十一時頃までも仕事をする事があります、止せと云はれても止められぬ樂しさが有ります、別の圖案を初める時の面白さ、一針〳〵から出來上る綺、外の仕事と比べて倦る事がございません。

私が農民美術研究所へ入所いたしましたのは大正九年のまだ小學校の一室を借りて始めてやり出した年で、農民美術練習所

といつた時代でございました。まだ其時分は、刺繍のどんなものかも知りませんでした。日本へ漸く流行しはじめたスカーフや、パラソルに僅に見る位のもので御座いました。山本先生にスエーデンで出来たクッションを見せて頂いた時、先生が、皆さんもやがてはこうしたものを自分で織り自分で染め、自分で繍ふのです。とおつしやいましたが、ほんとの事になるとは思はれませんでした。自分には出来ない。何となく怖ろしい恥しい様な気さへ致しました。刺繍台をみるのも、針さへもはじめてゞございました。最初は、刺繍の先生に布を張つて頂きました。図もつけて頂きました。それは三河木綿三尺程の布でございました。それに色々の繍ひ方を致しました大きな花や、葉の周囲をマツヒ縫にし中をさし縫にしたりしました。一針づゝ皆の目から先生／＼と呼ばれ乍ら方眼紙で出来上りました。何になるだらうと思つたのだ。ストーブの上の敷物になるのだと聞きました。今もこの敷物をみますと懐しくなります。このうちに、針の運びも少しは出来る様になりました。この年には大阪府の紀元節の日にはじめて在十日の教習日数でしたが、クッション、手提袋、テーブル掛、帽袋、小物等、各々十点位づゝの制作をしたと覚えて居ます。図案を学びましたのは、二年目の冬でございました。近くの林から蔦色の小さい實のついた野葡萄の蔓や、紅いあづきのやうな實をのこした野茨の枝や、細い茎の先に座のついて居る野菊や、犬じらみ、甘茶、芝、刈萱、松笠、くぬぎ、栗殻などいふものをいろ／＼採集して来て、これをテーブルの上におき、四角や長方形の紙を前にして、どう真を図案にしやうかと考へてばかりをりました。はじめは、ただもう、その材料をただ写生のやうに描いてばかり居りました。先生に見て頂きますと、先生はいつも笑つて、いけないとは云つて下さいません。それも良いでせう。しかしかう近いた方がもつと良いでせう、なんておつしやつて下さるのでした。自分では少しもよいか悪いか分りません。兎も角も先生から叱つてよいと云はれた図案を、好きな布を切つて繍ひました。糸の色もきめて出来ました。今井清代さん、今井樹枝さん、中村みどりさん、高橋八千代さん、吉川さんなんかは、ずいぶん長い図をお作りになります。とにかく商品に用ひていゝ、先生にほめられた日分位の図案を各々五つ六つは作つて居るので御座います。

想ふに、工藝的小作業は植えつけに於て意外に手間取れるとしても、一たん根を下したのちは、商品と趣味とに於る其特質の故に容易に枯れ果てないであらう。又其在方的技量に伴つては、農村の成員を都市と一緒に発展させる事を少くし、且つ、家族内労働に従ふ事の幸福を自覚せしむるに至るであらう。そ

きに[illegible]。[illegible]を。もしく[illegible]に
問はして。吾人に[illegible]い[illegible]役をたさしむるものである。

×

工藝的小產業の振興には、技術指導機關、利益代表機關、保護奬勵機關の三つが步調を合せて發展し行くのが肝要である、技術指導機關は、學校（これは出來るだけ實科的がいゝ）教習工場講習會等を含み學校には必ずサムプル製作部を置かなければいけない、若し各學校にそれを置かないとすれば、各指導機關にそれぐ〳〵のサムプルを供給するために獨立した「產業工藝サンプル研究所」といつたやうなものを設置する必要がある、產業工藝にとつて無意匠は致命的な欠陷であるから是れを最重要視しなければいけない、サムプル製作部の職責は第一に品種の撰擇、それから意匠圖案の創作、諸材料の撰定、製作法及用具の決定、等であるが其すべてに世間の好み、仕向け地の事情、製作者の能力、堅牢、能率、等の經濟的諸條件を配慮しなければならない、現代の吾が國の工藝品は意匠（デザイン）に就て甚だ無精力である、早い話が、現代の日本には意匠家（デザンナア）といふ獨立の職業者がない。意匠は主に美術家の副業で材料（モテイフ）の仕入先は殆ど歐米である、近年婦人連の手藝熱は高潮に達し、裝飾圖案に對する趣味

こ[illegible]
る。[illegible]に[illegible]される[illegible]
の[illegible]しと見てよく。さもなければ日本[illegible]の[illegible]
て婦人手藝家の意匠に於ける[illegible]を[illegible]つて居る、又[illegible]
積展覽會を見てもさうだ、[illegible]作[illegible]のもの[illegible]見られるや
うになつたけれど圖案と來るとたいてい圖案集からの燒直しで

意匠（デザイン）に於ける無教育を暴露して居るのである。

聞く處によると橫濱から米國に輸出される絹ハンカチーフは、吾が國御得意の木版捺染であるが近年次第に需要が減じ、約三分の二は內生地で輸出するやうになつたさうである、處で、其原因は結局手輕く良い圖案を得られない事にあるさうだ、米國には、サムプル株式會社といふのがあつて、例へば織物會社、陶器製造所、玩具會社、製菓社といつたやうなあらゆる製造會社に、意匠圖案を提供する商事會社があると傳聞して居たが、此頃、其方面を調べて居る友人の話によると思つたよりも大規模なものであるらしい、發端は十數人の合資會社のやうなものであつたらしいが、今日では世界到る處に支店（ブランチ）をもつて居て資本金額も六千萬圓であるといふ、參考になる事は左樣に大きな會社ではあるが專屬の意匠家は置かず廣く世間から、美術家に限らずあらゆる人達から意匠（デザイン）を買ふ事である。成程さう

してふんだんに、商品を何へでおいて八方の注文に應じたたら手軽く且つ廉價であらうし、製造業者にとつては勿論利益を收めた次第である。

次に利益代表機關は、從業者に對する機關であつて其作業は、サムプルの斡旋組合組織の指導、諸材料の購入並に配給、製作品の買入受及販賣、注文の周旋、商況の調査、諸役所との交渉等で、目的とする處は斯業の利益を擁護し且つ増進するにあつて、所謂分散勞働者の乘じられ易い、中間商人の貪慾なる利益吸收を防ぐ事なども其一つである。但し此機關の經費活用は、從業者自身の力に據る事を理想とせねばならぬ、又保護獎勵機關は專ら政府、地方廳、公共團體機關有志家等の後援に依るべきもので、法令、及官廳の特別規定による保護を期待し、前述バイエルン州に於ける協會の如き有力なる有志團體の後援、其他大小種々な後援を受けて成るものであるが、其手に行はれる事は、材料の拂下げ、各方面の注文、金融、販路の開拓、其他の奬勵的行爲等である。

指導機關の仕事として、是非共やり度い事は、職人に對する職業教育である。獨立の手工職人は今日にしか居らぬ。これは知らないが、各自に且つて是非を加へるならば大した人數である。隨て、彼等の小さな手工的小營業にとつて、は

る重大なのである。何となれば彼等に、熟練な技能者と、安物製造家たる副業的手工業者の間に立つ處の熟練工であつて、高級でポプュレイルな實用品と云へば、大ていは彼れらの手になつたものである。今私の身の廻りにある裝飾品にしろ、火鉢にしろ、襖地にしろ、襖の緣にしろ、簞笥にしろ、何にしろ皆此人達の仕事である。併しこんな事は此人達の知らる數は時代に逆進する智的能力を缺いて居るのみならず一人前にと働きれたところの、製作良心をも失つて居る、おまけに、業者が勞銀の計算にのみ走つて生産を手段視して居る、と同じやうに彼らも製作を手段視して居るのである。又一方に彼れらも賃銀と同じ一般の保護に感じて居るのだ。それは惡付で有償な手段を無償に取られるが故に、彼らの信用は既に持である、各彼等を商業にや大工場に横取りされてしまふのである、吾等の仕事は決して安物の頭取りになるといふの間の顧問が小工業の視方さなくさして居るのは屢々である。さきに彼らの感覺的な小商品は材料の小口買で中間商人の仕切の高しの爲めに、高しくなる一方だと聞いて居る。これは彼れらにどう資格を與へたらいゝか。其仕事の商賣を、既に存じめない事と、彼等を與へる事だと思ふのである。

四營には、彼れらの一般的利用機械は其の什器にとつて或は

れて居る、第三[illegible]に於いても[illegible]行はれて居るのである。例へば手工に對する興味を啓發する方便として、徒弟製作品定期展覽會を各郡に催したり、徒弟に對し餘暇利用に適當なる娯樂休養の場所と方法を紹介して町の飲食店等で其時間を空費しないやうに注意したり、善良なる徒弟には郡役所から御褒美に「茲ニ適當ナル職業選擇ト善良方正ナル品行トヲ承認ス、手工業修養上一層ノ勤勉ヲ奬勵センガ爲ニコブレンツ郡之ヲ贈與ス」などと記した二十馬克記入濟の貯蓄金庫預入帳を與へたり、一農家を買ひ入れて、之を、徒弟助工手園と名づけて各種の手工作業練習及讀書や彫刻の爲に隨意に使用出來る設備をしたり、いろ〱な方法を講じてゐる、一方には又一人前の職人及親方に對しても、補習的教育及監督が行はれてゐるのであつて、則ち、各職に對して「專門講習會」及「補習講習會」が官によつて行なれて居る、例へば、仕立職の爲には裁方、指物職の爲には色仕上げ、敷物職の爲には彩色圖案、といつた工合である、更に、商業者として必要な簿記、計算、手形などの事も講習される、さすがは、と思はせるのは、親方試驗である、これは法定の試驗で此試驗に合格したものでなければ親方として徒弟を置く事を許されないのである。親方が試驗準備をする爲めには、若干の都市で國立の親方講習會が催される

つた言つて、[illegible]い、そして[illegible]むるにあり」といふのである。

此點まで、めんどうを見ることが出來れば、さういふ[illegible]ちを見やうとするまでに政府當局や所謂[illegible]達が小産業の重大な價値を悟るやうになれば、締たものであるが、帝國議會昨今の有樣を見ては、匙を投げるより仕方あるまい。匙より、もう私は筆を投げねばならない、云ひたい事が澤山殘つたが、左の眼が霞むで字が見えなくなつて來た、私は四五日來眼を病つてゐるのである。(一五年二月十二日夜)

貧乏に惱む政黨と勞働農民黨の誕生

法學博士　渡邊鐵藏

（一）政黨と政黨費及選擧運動費の關係

我が國の立憲政治も數十年の歴史を經て衆議院に於ける政黨組織の發達して上より漸く勢力を占め、政友會の原敬氏が初めて曲りなりにも政黨內閣を組織して上より立憲政治に於ける政黨の勢力と地位が政黨に於ける其地位も、漸く國民の間に認識せられんとし、其後加藤氏の政情の爲めに貴族院內閣若くは官僚內閣と稱すべきものが出現したが、之等は皆世間で中間內閣といふ名を付けたやうに、其生命は何れも長くなく、而も其の存在中と雖も政黨の勢力を其背景とするか、若くは之を後援とするに非ずば存在不可能であり、政黨の反對に向へば忽ち倒壞せねばならぬ運命に在つたが其後、憲政會內閣を經て田中內閣成立し、漸くにして政黨政治の內閣が成立し、殊に議院に於ける兩黨[illegible]ることは出來ぬと共に、其其政的目的たる政策、行動によつて、政黨政治の實績を舉げることに努力して居る。不幸にして[illegible]に於て利權を擁して有爲した爲めに、國務に[illegible]損たる結果を見たが、併し之に代つた[illegible]政治の利權として、憲政會が[illegible]內閣として國務の爲めに[illegible]して居る。大戰中の好況時代に政友會が[illegible]して行ふ[illegible]的政策を行つたのに對して、戰後の不況と共に[illegible]して憲政會內閣は其消極的政策を以て[illegible]を切拔けんとする努力は政府內閣の目的たる[illegible]に關する好機會と云はねばならぬ。

我國の政黨政治は漸く其實力を示し得る時代に達し、且つ其內閣が交代するの場合より[illegible]として、其行方に於て國民の利害を[illegible]り、而して目的たる政策を行ひ、殊に國[illegible]

義務を負はせしめ、内容に就きては[illegible]たる選擧を有する[illegible]法案を議會に提出し、普選に伴ひ地方選擧制度の改革を行はんとし、又目下研究中であるが、國の經濟的事情の變遷に適應せしむる爲め、煩雜な關稅の改正に其手を染めて居り、其他可なり重大な政策に手を着けて前議會に於ける財政整理、行政整理に續いて、其爲すべしと信じたることに向つて可なりの努力をして居ることは多數の人の認める處であらう。元老も亦勿論從來より政黨政治の議會政治には缺くべからざることは早くから認めて居たに相違ないが、只政黨の實力の充實と政黨外の勢力關係の折合を待つて居たのであるかも知れぬが、近來漸く今後は内閣は政黨に依つて組織さるべきものであるといふ方針を具體的に是認するやうになつたといふことを新聞紙上で散見するが、恐らくは事實であらう。

斯くの如く我國の政黨は最初の政黨内閣組織以來種々の非難はあつたにしても、近來相當の實績を收め、且つ世間の信用をも厚くし來つて居る。而て此政黨内閣に依つて普通選擧が實現され益々我國の立憲政治が國民多數の意志と其接觸を密にし、從つて政黨の政治上の勢力が他の勢力に比し愈々强大とならんとする時代に當つて、政黨の組織の根本に就いて種々の疑惑と不安を挾むべき面白からぬ事實が最近に至つて繰返し國民の耳目に[illegible]ことも、[illegible]つて[illegible]すべき此の重大な時期に當つて、我々は國民の一人として政黨の政黨組織の根本に横はる病弊に就いて熟々と考へる必要がある[illegible]た。

本年第五十一議會の閉會中田中政友會總裁が將來爵位を提供する默契の下に、或實業家より政治運動費として三百萬圓を收受したといふ事件が世上に傳り、又山梨陸軍大將が政友會のため政友本黨員梅田某を通じて政友本黨員を買收せんとしたといふ噂さが立ち、續いて大阪松島遊廓移轉問題に就いて各政黨及び其幹部が金錢を收受したといふ疑が掛り、殊に憲政會の中野正剛君は田中大將の西伯利關係の事件を摘發し、更に革新俱樂部の解體、同交會と政友會との合體に就いても疑の眼を以て之れを見、同君の動議に依つて殊に代議士數氏が議會に於いて査問されることになつた。之等の事實の眞僞は固より裁判所議會等の愼重なる調査に俟たねば明かではないが、かゝる面白からぬ事件が相續いて摘發され、政黨互に相爭ふ狀態は國民の眼から見て甚だ不愉快な事である。嘗て政友會内閣の時にも、所謂滿鐵事件として政黨が之等の特殊會社を利用して政黨費を調達したと非難され、之れに對して彼の所謂珍品事件なるも、

旧つては政府の議会操縦の辞職を見たこともある。其他外にも尚ほ官や特殊銀行や或は個人商業と政府との関係に就いて種々種々の批評に上つたことがある。今借と政治との関係、政商と政治との関係については屡々各方面において又政治家の中にも其弊害を喧號する人も多い。

斯くの如く政党が不浄と目せられる弊を略受することが若し事實でありとすれば、それは單に其政党員又は幹部の政治的良心の不足なる為め、或は私的性格の不完全なことに基因するものであるとし、或は本来の本質において斯かる政党の制度を為する必要はないものと見るべきか。或は又政党は必ず其政党の存在を必要とし、何人が幹部であつても、誰が党員であつても、右の如き手段を弄するに非れば政党を維持する能はざるものと見るべきか、即ち此れなくては得ざる事と認むべきか、或は又之れにしても之れは其程度の政党の政府であつて、外国の如く政府の政党組織が合理的になれば自然に改良されるものとして單に時間を俟つべきか。或は又政党の組合的に困難なるもの、此れを得ざる事情ではあるが、之れに対して一層政治的に努むべきは、完全に又は完全に近く行かずとも、用ふる段の悪なる部門から政事實の生ずることを防止し得べきか。而して其手段は如何。目下の問題は斯の如く考へられる如く、種々の事實の打

醜聞頻々たるに當つては、此問題は國民として再び考へなければならぬこととであらう。或は單に現在の政党及政党員を非難することは單に一方的の見方に止まり、一般世人が今後の同種の事件決に對して餘りに冷淡であることが其因を成して居るのかも知れぬ。好景気時代には各政党及政党員が各自に金に豊かである爲め、無理な金銭手段も少く、又あつても目立たなかつた。反事と景気後の不景気に依り、各党員は勿論政党も亦た窮乏であつて見れば、金銭上の関門から自然問題も在來よりは起り易いことゝてあらうし。又本来の議論を経へて、各政党員各自の存在の美しからんことを望む。従つて政党の其れの美しからんとすることを欲する心理状態も常より強いに相違ない。尚ほ種々の政治上の事情も此間にこそあると種々議論になるのであるかも知れぬ。政府に信頼を置くことは同様一であるが、之れを改むることは今何困難でないからであらう。

議員政治に政党の必要なること。又政党が必要とすると同一理由に依つて、之を支持することの困難に必要なることは云ふ迄もない。大小の政党はあれ、単に政党を以て経営すると一つの組織である以上は、政党は必ず其の人々で頭領一個人に於いても種々の事情をなすべきである。政党が官僚と云し、或は強力にして實傳の要求に供して居る間はそれ程官用も

[illegible]。文明の程度を[illegible]し得る程度に迄發達し來れば、自ら其内部に種々の機關を必要とし、又活動の爲め經費を必要とする。試みに政黨は如何なる費用を必要とするかといふことを考へて見るに、第一には選擧運動費である。之れは外國と全く趣を異にして、我國に於いては特に驚くべき巨額を必要とする。此選擧費用の餘りに巨額なることが選擧其物を腐敗せしめ、又議員となりたる後は活動を公正ならしめることの妨げを爲すものである。此點に就いては我々の如き直接政治に關係なきものでも斷片的の見聞に依つても其重大問題であることを深く感じ、屢々之れに就いて本誌で論議したこともある。私は普通選擧論の行はれるに當つて、勿論選擧權の大擴張には贊成であるが、選擧費の調達方法と運動取締り方法の改善を行はねば其所期する目的を達することの困難なることを指摘し、人若し選擧權の擴張と選擧費調達及び選擧取締りの改善の孰れが重要であるかを問はば、我現在の狀況に於いては勿論後者の方が先づ重要であると答へることを主張した。今日既に普通選擧法の通過したる時に於いては、益々後者の重要であることを感ずる次第であるが、普選の實施に伴つて選擧取締法が著るしく改善され、且つ選擧費用に就いても或程度の取締りは出來たやうであるが、猶進んで選擧民[illegible]

　選擧費用と共に政黨のみならず、[illegible]しても研究すべき點があるが、政黨に[illegible]費の外、其平時の目的の遂行に就いて種々の經常の費用が必要とする。試みに列擧すれば、（一）事務所及事務費、（二）會合費、（三）交通費、（四）調査費、（五）遊說費等である。之等は公然必要とすべき費用であり、政黨の勢力の擴大と其活動が具體的に且つ頻繁になるに從つて、此種の經費は或程度迄増加すべきものである。此外に猶隱密の間に使用すべき經費があり、或は其中には公正に反するやうなものがあらうが、選擧の際或は議會の開會中等に當つて地盤の擁護、議員の結束、獨立的勢力との提携等、事の善惡は暫く措き種々の經費を必要とする。

　從來我國に於いては議會の組織に就いては屢々講究され改良されたが、選擧費並びに政黨費調達の事に關しては、單に其缺陷に對する攻擊的言論のみ多くして積極的改善策の研究が不足であつたやうに感ぜられる。事實に之れを徵すれば政治に關係する個人は立候補するに當つて巨額の費用を必要とし、又國民の選良として國家のため選擧區のために公事に奔走する爲めには少からぬ費用を要し、且つ政務員となりたる以上は自ら人情

として又自己の政治的所信を實現せんためにも、黨内に於て勢力を得ることを希望するのは世の常のことである。之れにも亦金錢が必要である。而て政黨は、既に述べたる如く、多數を得んがため、又其實力を養ひ政權を掌握するに至る爲めには、巨額の費用を必要とする。而して政黨は或目的を有する一の團體である以上必然的に其指導者を必要とする。政黨は政治にデモクラシーを實現せんとするものであるが、政黨の内部の組織が貴族政治化し少數政治化することは、之れ又必然の結論であることは政治學者の説く處であつて、例へばロバート・ミッヘルス氏の事務の遂行上内部の統制の爲めに政黨内の組織上支配的な官僚化することも自然の勢である。從つて政黨に組織を必要とし、又所謂幹部、幹部會の必要となることと、之等が政黨内部に於いて殆んど獨裁的勢力を振ふことも亦各國に於ける事實である。彼の政友會が原敬氏の歿後に亂して黨内の結束を鞏固にし、上官の命令に從ふ傳統的内規を作つたのも、自然的進化が或は自然的方針であるかは之れを問はずとも、正に政黨の自ら趨くべき途である。而して其政黨の統率者及び幹部は黨内の統制、政策の決定に就いて殆んど不可抗的勢力を與へられる半面に於いて、政黨に必要なる費用を調達する責任を負ふべきことは當然の結論である。否殆ど或場合には政黨に對して其必要とする費用を調達し得る能力のある者が自ら幹部となり、統率者となつたものとも云ひ得る。勿論此政黨に缺くべからざる統率者、幹部によつては、黨の盛衰に最も重大なる影響を及ぼすべき地位に在る此統率者は、單に金力を背後としてのみ生れ出づる者とは云ひ難い。沿革は其國、其社會の狀況、當時の政治の狀況に依つて著しく異り得るが、抑々政黨が成立し、其統率者の下に黨員の集合することは、或は其人の熱烈なる公共的精神、個人的人望、實力に依ることもあり、又家柄、社會的地位に依ることもある。しかし總ての場合に金力を背後に有する者は容易に其地位を得、又金力のみに依つて之れを得ることもある。家門や金力を背後とし、政治的優秀なる地位を占むる例に英國や米國に於いて其例を求めることが容易である。

專制君主國に於いては一人の意思に依つて政治が行はれる。現今に於いても貴族專政國に於いては國王の外の貴族が最高人の意思に追随するものである。政黨政治に於いては統率者の意思は殆ど無限の勢力を有して居る。之れは我國に於いてさへ從來より又現今に於いても之れを確認することが出來る。政黨の統率者に斯くの如き強大な權力を認めることは、自然の必要であるとは云へ、此統率者が其勢力を維持するためには矢張り金力が必要になつて來る。統率者の地位が贏ち得た經路は必ずしも金力に

依つたものでなくとも、既に一政黨を支持し其の政治的地位を維持せしむるためには是非共金力が必要になつて來る。斯くの如く政黨の幹部は自ら金力を有するか、若くは少くも其背後に金權を有するか、或は少くとも必要に應じて資金を調達し得る力のある者であることを要する。又黨の内部に於ても自ら黨員中に金力のある者と然らざる者とを生ずる。前者は選擧の際又平素に於いて黨の爲め黨員の爲めに援助を與へる力を有し、又屢々自己の勢力伸張の目的を以て進んで援助をなさんと欲する者であるが、之等の金力黨員は自ら黨内に於いて幹部役員の地位を占めるやうになる。即ち政黨は金力ある黨員に對して從屬關係を生じ、貧しき黨員は其黨に對して從屬關係を生ずる。具體的に之れを云へば黨費を調達しそれを自由に使用し得る權限を有する少數黨員に從屬することゝなる。亞米利加ではこれをカウカス・システムと云つて居る。此カウカス・システムは代議士を選擧人の主人とするが、同時に之れを政黨機關の統率者の從僕とする者である。之れと同一の狀態は英國の選擧に現はれて居る。英國に於いては單に大政黨か金滿家でなければ選擧を爭へない。言葉を換へれば小團體と貧乏な候補者は選擧場裡から驅逐される。

最近の英國の選擧に於いては少くとも百九十萬磅の費用が費されたと計算されて居る。[illegible]的に選ばれてゐるのであるか。それでは英國人は一[illegible]を以て行いて居る。千三百人の立候補者に對して六百十五人の代議士が選ばれた。而て英國の法律に依れば、各候補者に就き小都市に在つては各選擧人毎に五片、大都市に在つては選擧人毎に七片の選擧費用を使ふことを許されて居るのである。此規定に依れば右の候補者に就いて總計約七十萬磅を使用し得るに過ぎない。差額の八十萬磅は運動員の手當、選擧事務所の費用と見做されて居る。而て各候補者は其支出に就いて正確なる計算を發表する義務を負擔して居る。運動員が不熟練であれば規定額以上の支出をなし、其爲めに幸にして當選した代議士が選擧費が規定を超えた爲めに失格を宣言された例もある。此選擧費の大部分は、英國では印刷物、即ちポスター及び宣傳ビラに使はれるのであつて、最近の選擧には約三千萬枚の宣傳ビラが配布されたと稱せられて居る。而て此選擧費の大部分は大政黨の支出するものである。

英國の如く選擧費用を制限し、其計算を明かにし、又大政黨が選擧費の大部分を支出することが明かなる國に於いても、猶且つ「金と時のない者は選擧に出られぬ」といふ格言が行はれて居る位である。況んや我國の如く從來選擧費の制限もなく、

部分的の制限もなく、殊に盛んに買收の行はれる如き實際に在つては、選擧費は驚くべき巨額に達するに相違ない。而も政黨自身には政費調達に關して合理的組織もなく、又政黨の成立日淺きため、何等の財産も有せず、到底選擧に際して其黨派の力のみにて、黨員又は黨に參加せんとする者を援助することは能はぬ故、勢ひ候補者若くは第三者即ち金持に力を借りるの外はない。又候補者自身も驚くべく巨額の選擧費用を要するに拘はらず、政黨の援助が不十分であるとすれば自ら富豪の資金に賴るの途を講ずるの外はないのである。其結果として或は腐敗を來たし、或は情實を生じ、或は第三者の傀儡に甘んぜねばならぬ結果となる恐れがある。

昔時議院に於ける地主階級が絶對的勢力を占めることは確かに金力にも依らねばならぬ故、同地の者が多いためと云はれる。又兩院の役員となる者は金を持つて居るものゝ一大資格であり、其他官界兩院に於ける役員や全員の候補者を見ても、金力を有する者が有利な立場に在ることは爭はれぬことである。多數を制して、或は勢力を維持し、或は地位を求め、或は利益を受けんとし、或は勝利を得んとするためには金力の必要なことは判る爲に於ける本質である。我國政黨が政治上に對して甚大な勢力を振つたことは、云ふ迄もなくこの內閣の成立に、常にそれに附く其內閣の成分と政治的手腕が其因を爲したものであらうが、我陸軍の經費は國際的情勢の必要上といふべきか、頗る巨大であり、且つ巨額の財産を有して居るが、或は國民の目に觸れずして使用し得る秘密の資金があつて、これを利用し得る事が同黨が政治上に對する勢力を振ふに至つた原因の一ではないかとの疑も生ずる。事實の有無は知らずとも、從來の如き陸軍々人の政治上の勢力振張に對する熱中と、資金調達の能力とを見れば何となく疑惑を生ずる。

政黨に對すると均しく新聞紙に對しても金力の操縱は無視し得ないものがある。政黨にして金力のないものは他の金力に依つて其機關新聞を支配され、或は、一部の政黨目中の金持が株主となつて其新聞、其事業を所有することもある。各國の新聞社の態度を見ても[illegible]がある。彼のユマニテイ紙が長い間金持の補大人よりなる財團に依つて維持されて居つたことは周知の事である。政黨と新聞との關係の[illegible]でも、而して金力のために新聞が支配されることがある。新聞に對する金力は或は新聞の目的を有し、其勢力、名聲、[illegible]金の依託に背後よりこれを支配する者があり、又ま[illegible]然たる理由を以てこれを[illegible]する者もある。

[illegible]く如くかくし政黨も、最も重要なる輿論機關も金力に依つ

て支配さるることになれば多數國民の要求、正當なる國民の政治に反映するは甚だ微弱とならざるを得ない。我國の新聞紙に就いては、斯かる弊害は一部にはあるかも知れぬが、大體に於いて大新聞は健全な發達の途に進んで居り、編輯部の勢力が強いやうであるが、それに反し政黨に於いては、まゝ金力の支配を受けるかの如き疑惑を被ることは珍しきことでない。

政黨が相當に財力を備へるやうになれば、金持の保護を受ける必要もなく、又其財政的勢力に脅迫される恐れもなくなる。乍併其代りに此政黨は財政的に其黨の役員及び黨員を從屬せしめ得る故、黨員は益々其黨の從僕となる形勢を生ずる。獨逸の社會民主黨は其長い歷史に依つて黨として種々の財源を得て富裕な黨派となつて居るが、千九百六年に政府が代議士に對して歲費を支拂ふに至る迄は黨費に依つて代議士を補助して居る。之れに依つて餘り富裕ならざる此黨の幹部階級の人達も議會運動に參加することが出來るやうになつたのである。乍併一方に於いて黨員が黨に對して代議士として從屬的關係に立ち所謂我國に於ける陣笠的行動を爲すより外に途がなかつた爲めに、獨立に意見を發表し得ることを希望して所謂獨立社會黨の如きものが發達することになり、殊に佛蘭西の議會の如きは此種の社會黨員の爲めに社會黨の平和が攪亂された例もある。又黨が餘りに[illegible]となれば、[illegible]すことと、[illegible]にした場合に、[illegible]いせしめになるので[illegible]て黨内に不和を生ずることもある。黨費問題に依つて大なる財源を得、其黨員に對し自ら[illegible]する如き小冊子を編み[illegible]に頒布することに成功して居る獨逸の社會民主黨に於いてさへ内訌が行はれたことがある。政黨は貧乏をしても富裕になつても金のために操縦されることから免かれることは出來ないが、如何多年の歷史と合理的の政黨費調達方法に依つて金力の[illegible]かなら政黨の方が、貧弱なる政黨より有力に且つ敢然に活動し得ることは云ふを俟たない。

政黨費殊に選擧運動費用の調達が、政黨の自主獨立と國民の利害の代表とに何れ程密接重大な關係を有するかは自ら明かであらう。

（二）公的活動と私的生活の安全

世人はまゝ代議士に對して國家の選良であるの故を以てし、所謂身を犧牲にして社會の爲めに盡すことを當然とし、左程でなくとも代議士の私的生活に對して何等の同情なく、單に其人の公共的活動のみを要求する者がある。代議士を以て所謂「社會奉仕」を爲すべきものと看做すのである。

[illegible]に代議士として政府に対する者の心理状態を考へて見るに、一、日本に於ては、政党は政府のために為す公共的利便、二、国民代表としての批判的行為、三、社会的地位の向上、四、政治的[illegible]の快感、五、利権の獲得、等であらう。勿論人々に依つて其の心理状態は異り、又時代の状況に依つて著るしく変化することは云ふまでもない。代議士として本来公共的目標のみに依つて行動し、議会を通して政治的勢力の伸張を図り、又自ら求めずして国民の世話を受けることになる筈であるべきであらうが、我国に於ては[illegible]上に名を掲げられたり、或は選挙区に於いて便宜的に利用され、所謂口利役のやうな立場を作ることを求めたり、又は往々にして自己の政治的野心を満足するために政党の中に[illegible]勢力を求め、政府に近づいて官僚的地位を求めんとし、或は又議会の[illegible]、政府の権力を利用して利権にありつかんとする者もある。而してこの種の代議士の心理状態は、[illegible]の方面に強く動くかに依つて、政党の内部に著るしき影響を受ける。

現在の政党又は議員は始めに[illegible]以上の[illegible]されて居るが、目下の所我国の政党の組織は[illegible]所かる状況も未だ[illegible]ないと云はねばならぬ。選挙区に[illegible]、或は[illegible]を必要とし、多大の時間と[illegible]費を投じて単に公共的方面のみに依つて国民の代表として活動する[illegible]の[illegible]人が国民中に何人あり得るか。然らば別に求むる所があるか、或は代議士を[illegible]の方法に依つて[illegible]する[illegible]のある者の外、代議士とならないは当然のことである。或人は政府は「与へたり取つたりすること」だと命評して居るが、[illegible]の政党に対してそれを[illegible]せずに評する人は既に本的組織の世の中に於て殆んどないと云はねばならぬ。然らば代議士となることは[illegible]用して後に[illegible]取るといふやうな計算も或は[illegible]あるかも知れない。従つて[illegible]用してても取り[illegible]ふ者が[illegible]を見るのであつて、[illegible]用しても取らない者[illegible]は[illegible]々[illegible]。

又代議士生活を[illegible]い年月[illegible]より[illegible]向けの[illegible]ければならぬ。又政党内に於いて[illegible]、[illegible]すること[illegible]。[illegible]には[illegible]。又[illegible]の[illegible]中に[illegible]人[illegible]しい[illegible]。[illegible]政党内部に於いても[illegible]各の[illegible]であらう。従つて一旦政党に[illegible]継続し、日々各其勢力を伸張することを欲する。其[illegible]力となる者は個人の[illegible]であらうが、[illegible]の[illegible]力が重大な地位を有する。又政党内に於いて地位の向上を目的とする。所謂陣笠としての生活をするにしても、代議士の生活の安定がなけれ

は[illegible]なる選良としての努力を要求するのではない。[illegible]ろ利に走り、「[illegible]」やうなことにもなるのである。此故に合理を必要とし、少くとも生活の安定を必要とする國民の選良のために、此問題につきて論理的の考慮を拂はないといふことは國民として不注意なことゝ云ひ得る。

國民の選良として推された以上は何人と雖も公共のために奉仕する希望があり、又其努力を惜まぬであらう。乍併他方に於いて自己の個人又は家族の生活並びに事業に對する後顧の憂ひ、或は慾求が當然各人に存在する者であることを思はねばならぬ。多少の財産があり、或は最高教育を受けた者が生活のため其全力を盡しても猶且つ自己や家族の滿足を期し得ないことがある。公人の生活はどうなるのか。官吏は國家が其生活の保障をして居るが、代議士は名譽職と見做されて居る。勿論代議士には何等自己の營業を爲し俸給を受くる事に就いて制限のある次第ではないが、議會と政黨との活動が複雜困難となり、且つ常時的となるに從つて、なかなか片手間では出來ぬ仕事になる。世間にはまゝ職業的政治家を排斥する聲があるが實際は漸次職業的政治家を要求する機運となるのではなからうか。

英國では立候補するには「金持で且つ閑人」であることが實際的の條件であるといふ格言があることは前に云つた通りで、[illegible]と若くは金[illegible]せしめるものであることを知つたならば、金持にのみ[illegible]獨占せしむることは存續することは出來ない。又閑人であれば選擧運動、議會及び黨内に於ける活動に有利であることは云ふを俟たないが、閑人とは即ち他方に金持であるか或は又特に目ふべき能力のない無能の人間である事を推想させる。然らばこれ又立候補を獨占させるには不安な人達である。金持閑人を排斥する趣旨ではないが、金は持たずとも閑人ではなくとも合理的に資金を調達し、又他の專門的或は重要な公私の事業を棄てても議會政治の爲めに眞面目に活動せんとする者も立候補し得る狀態に置く必要がある。代議士は潤澤なる學識經驗を有することは最も希望すべきことではあるが、既に專門の學者、官吏であり、各種の知識供給、發表の機關ある以上は、代議士としては寧ろ公正を尊び、國事黨務及選擧區のために熱心奔走する活動家であることを要する。從つて代議士には意見と議論を以て戰ふ人と、黨務、地盤のために奔走する人と、其他種々區別を生じ得るであらうが、更に將來は益々政治が複雜專門的となるに從つて益々代議士は選良としての仕事に沒頭するに非ずれば、其任務を盡し難くなり、且つ勢力伸張上から見ても

代議士はたゞ多く政府及政党に議出するのみならず、継続して議席に出席することを要するに相違ない。斯かる事情があるとすれば常に閑人を求めて立候補せしめ、或は余財の余暇ある者をして政治に関係せしめることは決して国民の要求する理想的の代表者の所以でない。我国に於ける議会の会期は英国よりも遥かに短く、僅かに一年の四分の一を議会のために費せば好いやうであつて、又其會期以外に於ては政治に無関心の代議士もあるのであるが、我国に於いても追々議会の会期が延び、又政府の[illegible]と議会との接触を保ち、又議会の常設委員[illegible]するに至れば、益々代議士は政治に對して一年中[illegible]力と時間とを要求されるやうになる。[illegible]選[illegible]自ら專門的事務がある。又其普通的[illegible]の[illegible]を有する。それに反して[illegible]自ら[illegible]の方面に用ゐるにしても、大体に於いて[illegible]、且つ[illegible]経済上[illegible]の[illegible]世界の大勢に至る迄の知識を積ぶ必要があつて、[illegible]を以て[illegible]するとしても相当に[illegible]なるものである。此故に近来[illegible]政党に対する[illegible]。これは近代の政党[illegible]、[illegible]の中なる[illegible]であつて、[illegible]の弊害さへ[illegible]され

れは経済上便宜的に代議士として余力を傾けて活動すべき人を選出することが国民としては幸福ではなからうか。少くとも余裕閑人のみでなく、貧乏、繁忙の人でも議員になり得るならば代議士となり得る途を開くことが必要ではあるまいか。

或は余裕且つ閑人で而も学人の如く已れを忘れて公事に盡し、且つ頗る有徳の士があるかも知れない。併し多数に之れを望むことは出来ぬ。政党が多数なり。[illegible]を得す以上は其議員はなるべく[illegible]に[illegible]ることを[illegible]とする。然らずんば[illegible]に[illegible]たやうに[illegible]が余りに[illegible]され、[illegible]国家余りに[illegible]に[illegible]され、或は[illegible]余り[illegible]に[illegible]ならば[illegible]結果を生ずる。

代議士は[illegible]にこれを[illegible]として[illegible]としても[illegible]となる[illegible]。[illegible]のに[illegible]して[illegible]に[illegible]しても、[illegible]ない。従つて[illegible]中でも少くとも[illegible]の[illegible]に[illegible]ば、[illegible]に[illegible]ないとすれば[illegible]即ち代議士を[illegible]とも[illegible]には[illegible]に[illegible]し得ること、即ち其[illegible]に云へば[illegible]は[illegible]を[illegible]することである。但し[illegible]経済[illegible]であるとすれば、[illegible]代[illegible]として[illegible]

收入經費を供給することに[illegible]として而ま
する[illegible]は之れが[illegible]收入[illegible]ことなく然
と見ねばならぬ。——それがまゝ激増することがあるのは現在
の弊害であつて、それは寧ろ代議士を或程度迄安全な職業とな
し得ることに依つて改善されはしないか。

従來の政黨政治の歷史を見ると代議士は名譽職若くは非名譽職とされ、政黨の役員も亦それと同じく、それに對する報酬は殆んどなかつた。即ち立候補する者は金持と前提され、又金持なるが故に役員に任せられ、彼等は公共問題のために金錢を提供すべきものであり、それを名譽とする者であると見做されて居つた。其著るしい例はロンドン市長や、伊太利の大都市のシンダーチの如きものであつて此職を贏ち得てそれを圓滿に遂行するためには巨萬の私費を提供することを名譽と心得、市民も亦それを當然とし、それに對して敬意を拂つたのである。此精神に依つて英國の議會に於いては國民の選良に對して貨幣を與へることは其不名譽であると考へられた。獨逸のビスマルクの如きも千八百八十五年の議會に於いて代議士に對して歳費を與へることは其「名譽に背反する利益」であるとして反對して居る。伊太利のギオリツチも亦千九百九年の議會に於いて代議士報酬案を目して議員の名譽を損する者として反對した。伊太利では

[illegible]
[illegible]なかつた[illegible]中[illegible]に一人のみで[illegible]
十六名の[illegible]あつた[illegible]
身であつて、これも[illegible]組合の[illegible]られて居る。[illegible]
を持つ者のみが此の「パンを得ざる[illegible]」に從事し得る[illegible]
つた。

佛國の如きは可なり多くの議員[illegible]、[illegible]猶最も貧乏な階級が、屢々最も富みたる代表者に依つて立派に代表されて居ると觀察する者がある。社會黨の大會で前年其代議士の報酬に對する負擔を黨費として課すべしと主張し、其實現を見たが、其結果は他方に於いて其黨の代議士の範圍に於ける勢力を增加する結果となつた。千九百十年、ニームの會議の報告に依れば其黨の收入の半分は社會黨の代議士に關する徵集金であつた。代議士の生活を保障し、黨の議會に於ける地位を維持する爲めには、貧乏な政黨は種々の苦心をなし、代議士報酬を國家より支出せしむるか孰れかの途を選んで優秀な代議士の支持を計つて居る。

代議士又は代表者が貧乏な爲めに活動し得ぬ例はいろ／＼の場合に現れて居る。例へば議會議に對して代表者を選ぶに際しても自ら旅費を支辨し得る者が選ばれるか、或は其會議開催地

方に居住する者を、代表者として選定して適材なる財政を管り經る事もある。伊太利や佛蘭西や和蘭等では最も富者を選んで政黨の大會に出席せしめるやうな風習がある。英國では流行に個人的の金力に自由の勢力を揮はせないが、其代りに地方團體の富裕な者が自ら會議中に於いて優秀な地位を占めるやうになつて居る。其結果として地方の小團體が合併するゝやうな傾向を生じた。孰れにしても個人的に又は團體として金錢上優秀な地位に在るか、少くも政治家として活動し得るだけの資格がなければ代表的地位を占め難いことは事實である。

衆議院の一時論を知る、と云ふのは昔からいきてあつた、代議士についても「名譽職」といふ門閥的の名を正當て、勿論名譽の地位には相違ないが、他にも名譽の地位で而も優れたる地位に居る者は幾らでもあるのであるから、將來は代議士を官吏に對立する一個の職業と見做して、それに對する物質的給與の手段程度等を考慮するとが肝要であらう。但し假りに我國の代議士に就いて其經濟的地位に相當する生活費の幾分の一若くは百分の四を國庫又は選擧民より支出するとしても目下の如く選擧運動費に數萬圓以上を要するやうでは何の役にも立たない。勿論終局に解決すべき問題は選擧運動費の制限、並びに其負擔者を公明に定めることである。代議士を名譽職といふならば國家又は選擧民が選擧費用を負擔してこそ某人を選擧することに依て初めて其名譽の意義が鮮明になる。自ら數萬の金を支拂ひ術則に依賴して投票を獲る場合には寧ろ不名譽職と云はねばならぬ。代議士の名譽職なる意義を正確に解釋することが即ち政黨改造の根本義である。

三　勞働農民黨の誕生と我國政黨の將來

一方帝國議會に於いて既成政黨が勢力に其價値を減じたすのに伴ひして居る時に、他方に農民勞働黨が大正十五年三月五日を以て誕生したことは奇妙なやうですなが當然の時勢の要求である。勞働者、農民等何れの文明國にも必ず存在するものであつて、國民の大勢である。早晩我國にも出現することは必然の勢であつた。但し其誕生を直接に刺戟したものは云ふ迄もなく大正十四年の議會に於いて普通選擧法が通過したことである。在來の政黨の態度に對しては從來種々の不平があり、國民殊に無產階級として不斷供給者が成立したのは其當時であつたが、それは云ふべくもなくもただ存して了つた。次いで武藤山治氏が實業同志會を成立したのも在來の政黨團體を打破したものであり、尾崎行雄氏は獨力を以て嘗てに立憲政治の改革運動を行つて居る。年來の議會政治及び政黨の弊用に關して最も痛切に判

級を代表する者に非[illegible]民衆であると云はねばならぬ。[illegible]民衆は[illegible]無產階級の利益の[illegible]ものであるが、其綱領にも示す通り既成政黨に對して挑戰的態度をとつて居る。

勞働農民黨は其創立に當つて宣言書を發表し「立黨の根本精神を第一に無產階級生活權の確立に置き、國民最大多數の生活の安定を圖ると共に我國運の無窮隆昌と社會文化の無限の發達とに貢獻せんことを期するものである」とし、而て其手段として飽く迄「公明正大なる合法的政治の運用即ち議會政策に依つて猛進せんとするものである。」と聲明し、更に我國の議會の墮落を指摘し、國民の多數は議會に對する信頼を喪失したが、それは議會制度其物の罪ではない。從つて普選に依り新に參政權を獲得した無產階級は「純潔なる參政權を公明正大に行使して先づ議會を革正」せんことを強調して居る。其綱領政策は左の通りである。

綱領

一、無產階級の政治的經濟的及社會的解放を期す
一、不公正なる分配制度の改善を期す
一、既成政黨の打破を期す

政策

政治

一、普通選擧の實施（[illegible]集會の自由）
二、無產階級運動を[illegible]する各種法令の撤廢
三、戰死、廢兵、徴兵に依る本人並に家族の困窮に對する國家の扶助の實施
四、軍備縮少と軍政の民衆的改造
五、惡稅の撤廢と財產累進稅の創設
六、日用品消費稅の撤廢

經濟

一、團體權團體協約權の確立
二、耕作權の確立
三、少年、婦人の夜間勞働及危險作業の廢止
四、八時間勞働制の確立
五、工場法の改正
六、最低賃金法の制定

社會

一、女子の公法上及私法上に於ける差別撤廢
二、女子の人身賣買の禁止
三、女子教育に關する實際の制限撤廢
四、失業、疾病、養老災害保險制度の確立

万、義務教育、實業補習教育機關に於ける一切の費用國庫支辨

今々等の政策に關して一々與評を加へることは固より其當でたいが、綱領の成立の經過に於いて其再案が排斥された結果其主張は極めて穩和なものであり、又實行的のものであると云ひ得る。其政策の大を數は眞面目な議者の直ちに首肯するに躊躇しない點であらう。

勞働黨の規約に依れば黨の大會を最高決議機關とし、大會との中間期間は中央執行委員會が最高機關になるのであるが、此委員會は必要に應じて組織、宣傳、教育、調査、會計、國際、財政、機關紙編輯、議會對策等の諸部門を設けて活動し得ることになつて居る。斯くの如き組織行動が原則の如き効果を收め得るならば、立黨の目的は眞面目であり、黨員の利害が一致し、且つ背後に勞働組合を有して團結が強固であるだけに既成政黨よりも反つて眞面目な有力な活動が出來るかも知れぬ。殊に注目すべきことは黨費として一ケ年六十錢を徴收し、之れを本部及び地方支部に分配し、中央執行委員會が黨費の實收を作成し、大會の報告を、決算も大會の承認を得るを要するといふ點である。勞働黨は勿論其綱領目的を達するためには議會に代議士を送るに相違ないが、其選擧運動に要する費用は勿論主として此黨費によつて賄ひ、別に寄附をも受けるのであらう。

結成式に參加する團體十八萬人、やがては組織勞働者二十万人を糾合すると稱してゐるが、然らば先づ一年間に十万圓の會費を集め得るが、其中一部は事務費、一部は事業費に用ゐられ、一部が政治運動費、並びに選擧費用として用ゐられるのであらうが、其選擧費として用ひ得べき金額は一年左萬圓位乃至十萬のものであらう、解散なく四年目に選擧があるとしても僅かに二四十萬圓の選擧費を有するに過ぎない故、普通の政黨の如き黨の構成と選擧運動方法を以てすれば、中選擧區になれば勿論從來よりの巨額の運動費を要し、候補者一人に就き七萬乃至十萬圓を要するのであらうから、貧弱な勞働黨の金庫を以てしては勿論多數の候補者を立てることは出來ない。但し勞働黨は當然最も有利な選擧區を選び、其黨員の熱誠と組織的活動に依つて選擧費用を著るしく節約することを得る故、候補者一に比例して既成政黨と同じ割合で選擧費用を要することはない。年々選擧に伴ふ議員の財政が苦しくなるために、議會の如きに高なのは當然であるが、更に議會に於ても立候補者も又代議士も少くとも其政黨組織の根抵が眞面目であり合理的であることは、やがて普通選擧實施後の政黨の選擧運動にも影響するであらう。

選擧費用を選擧其日迄が負擔する慣習でなければ、又其組織が成立すれば如何に選擧區を擴張しても選擧の公正、議會の向

上を[illegible]しないことに至つて[illegible]した點であるが、既に我國議會に於いては此點に着目し、武藤山治氏の如きに[illegible]法の實行に努力し、尾崎氏も亦單獨で熱心に選擧民が年々一定金額を醵出して、それに依つて理想的の候補者を議會に送ることの必要を宣傳して居られるが、結局利害を一にする選擧民が相團結して選擧團體を作つて特定の候補者を援助するか、或は進んで小規模ながら政黨を組織してそれに年々選擧民が黨費を拂込み、それを以て候補者の選擧費用に充てることにすることが選擧革正の唯一の手段である。此意味に於いても勞働農民黨が其政治運動費用を平等に黨員に課して、金力の援助を受け從つて其制肘を被る弊害を脱し得る新機運を開くことは一般政界の革新のためにも強い刺戟として歡迎すべきことである。殊に選擧費用の收支はそれを公示することが必要であるが、前に英國の[illegible]に於いて[illegible]て報告されるとすれば茲に於ても[illegible]

伊藤公は政友會を組織して我國に於ける大政黨を[illegible]したが、但し政黨は初めは官僚派の傀儡に任せ、或はこれと妥協して居たが、曲りなりにも原氏の政黨內閣が出來てより、現內閣に至るまで漸次に政黨內閣の色彩を強めて來たが、但し他方に於いて目前に暴露されたやうな政黨の缺陷が國民の目前に[illegible]して居る。而て今將に普通選擧が實施されんとする時に當つて我勞働農民黨が出現したるは一方勞働運動に關する一轉機であると同時にそれを動機として我國の政黨政治に關する革新の轉機運の發芽すべき劃時代的現象と云はねばならぬ。今將に我國の政黨史は第三期に入らんとして居る。國民と共に其健全なる發達を冀ふ者である。

《大同館發行圖書新刊と增刷出來》

◇東京美術學校教授 白濱徵氏序 宮本幸惠著◇

新刊 彩色の研究と其取扱法

（初版忽ち賣切再版）

美麗なる石版廿五度刷色圖十六葉調和表實驗圖解は如何なる素人と雖も一見して理解し得る他に比類なき我出版界唯一の最新研究書

從來彩色に關する著書が乏しいのは實に遺憾である。本書は多年の研究と實驗から最も根本的に最も實際的に色の教育色の心理學は勿論色の科學及哲學を綜合した名著である。之れに依つて藝術家も教育者も商工業者其他何人も自分の職業教育或は商賣に自由に應用する事が出來る殊に挿入してある多數の色圖調和表實驗圖解は如何なる素人と雖も一見して彩色のグランマーを會得し衣食住或は眞善美の各方面から容易に結び著ける事が出來る。（大好評を博して增刷出來す）

菊判最上美本 全壹冊四百頁 正價金參圓八拾錢 送料十八錢

◇一條忠衛氏新著◇

新刊 社會道德論

（近世稀なる名著・萬人必讀の世界的經典）

四六判最上美本 全壹冊六百餘頁 正價金參圓五拾錢 送料十八錢

社會道德なる語は誰でも知つて居るが之を組織的に說明した本は未だ曾て世界に一冊も無かつた現代社會の暗黑面は全く社會道德の頹廢した結果である之を挽回して向上發達させる事は社會改造の最大なる問題であり世界人類の究極目的である。資本家も勞働者も政治家も教育家も思想家も科學者も之を閑却して居ては此社會は遂に大なる破滅に終るのみである。本書は之を警告した學者の先見である。

大久保龍著 ●戲曲 人としてのペスタロッチ（新刊） 金貳圓八拾錢 送料十八錢

原田實譯 ●エレンケイ女史原著 兒童の世紀（好評六版） 金貳圓五拾錢 送料十八錢

東京市神田區表神保町七番地 **大同館發行** 振替貯金口座東京八七貳番

時評

勞働農民黨に對する希望

吉野作造

勞働農民黨の成立を喜ぶ

三月のはじめ勞働農民黨の名を以て去年以來期待された無産者政黨はめでたく成立を告げた。在來政界の腐敗を矯正し普選施行の美果を收むべく新局面を打開する爲には、所謂無産階級の政治的結束は必要であつたのだ。此意味に於て新政黨の成立を見たことは我々の大に喜ぶ所である。殊に新しいこの政黨が大體理想主義の立場に在る人人を中心として組織せられたこと、爲に各地の大衆が安心して之に參加し得るに至れることは、一層我々の喜びを深うする。但し無産政黨の成立その事が直に一切の美果を我々に持ち來すものでないことは勿論である。無産者階級の政治的結束は我々の達せんとする目的の遂行の第一の關門で、之に依て前途の方向がやつと決まりかけたといふに止まる。最終の目的を達成するまでには、之から先き又色々の努力奮鬪が必要であり、且つ之を妨げんとする障礙もこの先き絶へず起るべきを覺悟する所なければならない。朝に一寨を拔き夕に一城を屠る。日に夜に奮鬪は續けられざるを得ず、途中で迂つかり氣をやすめては所謂九仭の功を一簣に虧くの恐れなしとせぬ。一つの成功を見る毎に吾人は一層氣分を緊張せしむる所なくてはならぬ。

無産政黨に對する私の立場

無産政黨の問題に就ては去年の秋以來私は再三再四本欄で評論した。之を記憶に留めらるゝ讀者は、前段の私の所説を讀んで怪まるゝに相違ない。何となれば私は絶えず（一）無産者階級は自ら進んで政黨組織に干與す可からず、（二）政黨のことは自ら政治家を以て任ずる專門家に委すべく、（三）而して之等專門政治家の問題としても、政黨組織は無産階級代表の代議士を中心とするを得策とすべく、今急いで結黨するのは將來に於て政黨を大にする所以でない、（四）且

り[illegible]と[illegible]的に日本[illegible]によるものなる[illegible]故に、[illegible]を以て作れる[illegible]として[illegible]断じて政党[illegible]のであるといふ[illegible]して来たからである。[illegible]に反対する[illegible]でないことは[illegible]ない。[illegible]の発達を希望するからこそ斯く[illegible]するのであることは、[illegible]諸君も定めし諒とせらるゝ[illegible]私は今度出来た[illegible]内閣に対しても、内[illegible]取らなかつたからとて無下に之に反対するのではない。出来た以上は之に同情もし[illegible]の将来の健全[illegible]するの[illegible]私は[illegible]した[illegible]を述べることを[illegible]して[illegible]の新政府の前[illegible]ないだらうかを[illegible]する。[illegible]く時間[illegible]ないと[illegible]ない。斯く一私[illegible]他方[illegible]に[illegible]を提出したい。新政策[illegible]に於て[illegible]のとすれば、[illegible]何であるか、[illegible]私の[illegible]する如き態度を取る[illegible]たけれ[illegible]居る。

新政府に對する希望　[illegible]政府に對する私の注文といふの[illegible]日く、[illegible]（　）……[illegible]（一）……[illegible]の[illegible]に[illegible]べく。（二）純政治家の[illegible]げらるべき[illegible]上に[illegible]自ら[illegible]べきでないと。

こゝに「政治」といふものゝ[illegible]して[illegible]の必要を[illegible]「政治」は「經綸」そのものではない。[illegible]の問題はどうすればいゝか、[illegible]にはどうすればいゝか、之を[illegible]に照し[illegible]に徴して[illegible]するのは「經綸」である。[illegible]は「政策」と[illegible]でもいゝ。之をいよ〳〵[illegible]に行ふときに於て政治の問題が起る。而して[illegible]としては「政治」は[illegible]「經綸」の[illegible]もつ[illegible]なければならぬのだが、[illegible]は極めて[illegible]に[illegible]ることが多い。[illegible]の[illegible]、各個人の[illegible]に[illegible]手に[illegible]されねばならぬのと[illegible]である。[illegible]政府の[illegible]に[illegible]になるのであるが、[illegible]来る[illegible]のである。[illegible]なる[illegible]ある政治家に[illegible]るゝ[illegible]けれども[illegible]に[illegible]ないのである。[illegible]

ちない、「政治」にとつては[illegible]ることといふことであ る「芸術」は独りでまた立てられる「政治」はさうは行かぬ。而も思ふ通りにならぬとて中途で思ひ止ることも出来ぬ。政治は謂はゞ公病人に投薬する様なもので、病人がある以上薬は何としてもやらなければならぬ。而して之をやるには多数の賛成が要る。その多数の賛成を得る為めには場合により最善の薬を見すく棄てゝ次善の薬に俟ることあるも致し方がない。理想通りにならぬからとて、丸で投薬もせずには置けぬからである。斯く云ふ點から、政治は妥協だとも謂はれる。理想家から云はすれば残念ながら妥協を餘儀なくさるゝのである。さてこの妥協を餘儀なくする原因には、官僚的専制思想の餘毒もあれば、資本家階級の利己心もある。そこで之を憎むの極遂に議会政治否認の説も起るのであるが（この意味に於て私は此種の説に理論上の承認を拒みつゝ事實上大に同情を表するものである）、既に議会政治を認むる以上、原則として到底右の妥協を認めて掛らなくてはなるまい。實際問題としては、固より妥協の程度に従つて是非の論起るを避くべきではなからうが、原則としては、既に議会政治を容認せる以上妥協そのものを排斥するのは謬りであらうと思ふ。

ことに我國のやうな政界の現状の下に在つては、妥協を必要とする[illegible]國の目をみはるべきこと[illegible]らぬ人々に依て決定さるべき問題ではない。[illegible]うしても代議士に委せなくてはならぬと思ふ。[illegible]の方法は[illegible]に立てる。議會内の態度は選挙の人々を信じて代議士に一任する、傍から指図すべきではないと考ふる。[illegible]動に就て他日代議士の行動を拘束するが如き規律を決めることは今度の新政黨に頼んで貰ひたいと云ふ所以である。

私が以前の論文に於て急いで政黨を作るなと主張したのも實はこの意味であつた。政黨といふ意味を新政治行動をする者の團體と狭く限れば、一人の代議士もないのに政黨といふのもをかしな話だ。無産者階級が政治的結束の必要に目覚めて茲に恒久的團結を組織し、之に政黨といふ名を附したとすれば、彼の差當り為すべき當然の範圍は、經綸の大綱を示すことと自家の代表者を選出する爲に今より準備しておくことに限るべきだ。政黨としての完全なる活動を今すぐに始むべきではない。其外労働組合が其儘政黨組織の構成分子となるを非とする個々の直接も加はつて居るのだが、とにかく私は英國の昔の労働代表選出準備委員會のやうなものに止めて欲しいと思ふのである。之れだけの仕事に限るものなら、政黨といふ程呼は適當でないが、

併し政友といつたか只事實この勢に大衆を引きつけるには便利かも知れない（便利なだけ後に起る弊害も懸念されるが）。要するに名目の問題はどうでもいゝとする。私は新政黨が新政治行動の干渉を慎むといふ條件の下に其成立を祝福するものである。

一部無産階級者の政黨觀

右のやうな事は一々言はなくても分つて居る。今度の新政黨が將來も政黨としての機能を發揮するの日は、必ずや私のいふやうな風にやつて居る時に相違ないからである。それにも拘らず私がこゝにこれを諄々しく說く所以は、一部の人の間に全然私の立場と違つた說を唱く信ずる人があるからである。それは外でもない。代議士は民衆の代辯者である。從て一々其の訓令するまゝに行動しなくてはならない。在來の政界の弊害は實に代議士があまりに民衆を指揮したから生じたのだ。實際政界に於ける中央集權的統制は斷じて認めてはいけないと云ふサンヂカリズムだのボルセヴイズムだのが紹介されてから、斯うした議論をなすと信ずる者の著しく多くなつたことは、改めて說明するまでもなからう。

この說の誤りなることは後に說明するとして、一體斯かる思想の起つた歷史的事情をも今へて觀ると、成程とうなづかるゝ節がある。一には從來民衆政治といふものを誤解して居つたからである。從來は民衆政治とは民衆自身のやる政治だと思つて居た。デモクラシーの定義としてよく引き合に出さるゝリンコルンの言葉即ち（Government of the people, for the people, by the people の如きは、正に其の著しき代表だ。斯ういふものと妄信し切つて、まで能く實際の政界を觀察すると、政治は必ずしも民衆の爲めばかりではなく、而も實際政界専用の道を撰て居るものは民衆の代辯を標榜する政治家と分つた。斯う分つて見ると、更に反動は起らざるを得ない。斯くして起つた反對を說明する學說にまた二種類ある。一つは民衆政治主義萬能の不可能（Undurchführbarkeit der demokratischen Idee）を說くもので、有名なMichels の政黨論など好代表であらう。此派の議論なものになると、どうせ民衆政治だなんて一時目だから、寧ろ始めから少數專門の實際に委した方がいゝなどと云ふ。哲人主義だの專政主義だのと論ずるのはそれだ。他に今一つの民衆政治は從來の代議政治だから、之からは本當の民衆政治にしなくてはならぬ。それには我々民衆が直接に目の至て、一切の問題に對する決定權を握らなければならないとするもので、或は代議制度はいけない代理主義で行かうの、又は政府の中央集權を排してソヴイエト主義で行かうのといふ類主義は、みなこの部類に屬する。從來の民衆政治が種々のあやまり

を重ねたゞけであるに、[illegible]も理はな
い。併し乍ら之等は皆研究家から觀れば、所謂徹底的民衆主義の政黨觀も、官僚的專政主義と共に、實に同一の根據から發芽した境遇の産物に過ぎぬことが明であらう。

所謂徹底的民衆主義の政黨觀の誤謬

一體徹底的民衆主義の政黨政治といふものは實際に行はれ得るものかどうか。何人にも考へつくことは、支那のやうな民間に古來自治的訓練の行屆いて居る處なら幾分行はれるかも知れぬことである。それでも政治問題の處理は本來特殊の專門的智識を必要とするものなるを思ふとき、如何に自治的訓練が行屆いて居ても、民衆が自ら直接に治め得る仕事の範圍には限りがある。此點に於て一番人をあやまる言葉は、「自分の事は自分が一番よく分る」といふことだ。成る程腹が痛いか頭が痛いかは他人には分らない。併しそれが何の病氣であるかは必しも本人に明了ではない。況して如何にして之を治癒するかに至ては專門家たる醫者に聽かなくては到底分るものではない。政治に於ても亦然り。政治家を醫者と同樣に專門家と觀れば、その智能を信頼して一切を之に托した方が得策ではなからうか。故に徹底的民衆主義の政黨觀の如きは、從來の醫者の不信に懲りて自分で自分の病を處置する樣なもので、所謂生兵法は大疵の基、危險之より大なるはな

いへらる。

尤も我々をして[illegible]を抱かしむるに至つた[illegible]は大に諒とすべきものがある。之は常に專門家に[illegible]、政治家が我々に向つて永く支配者の態度を以て臨んだからでもある。甚しきは我々の疾患を診もせず勝手に大げさな藥を盛つたからである。併し事情は事情だが理窟は理窟だ。どこまでも其區別ははツきりして置く必要がある。從來の弊害に憤慨するの餘り多少常規を逸した議論をするは已むを得ぬとして、その常規外れの議論を其儘眞理と振り廻されては困る。是れ私が老婆心を顧みず敢て斯んな餘計な議論を試みる所以である。

も一つ序に云つておきたいことは、所謂徹底的民衆主義の實際的試みは、今日其結果に於て立派に期待を裏切つて居ることである。例へば露西亞では、この主義のチャンピオンとして起つたと稱し乍ら、事實上今や之とは反對の極端に立つヂクテーター政治をやつて居るではないか。之を辯解する者は曰ふ、民衆の訓練がつくまでの暫定的政治樣式だと。其の通りだ。民衆の訓練が到らぬ間は、その完全なる自治は望まれない。問題は何時になつたら訓練が完全につくかの點に在る。民衆の完全なる自治即ち專門家を不要とする完全なる民衆直接政治は、實は民衆の極度の發達を前提とする。而してこの極度の發達は、人

類不斷の努力の最終目標にして、永遠の將來にのみ期し得るものではないか。換言すれば、現實の世界では到底期せられないといふことではないか。故にヂクテーター政治を暫定的樣式だといふのは、理論上あやまりではないけれども、他の一面からいへば、この以外の形式に依る見込は現世には絶對にないといふことにもなる。是れ人類の完成の上にのみ許し得べき無政府主義が、現世政界の實際主義たり得ないと同樣である。故に若し然を機會にしていへば、徹底民衆主義的政治を主張するなどは一種の眩惑だともいへる。故に之を眞にうけて、之からの民衆政治は尚更この式に依るべきものと思ふなら、それこそ飛んでもない大間違である。

徹底的民衆主義を試行する結果の豫想　假りに今度の新政黨がこの主義を眞に實行したとしたら如何なるか。政黨構成各分子の委員が集って中央執行委員會を組織する。それが一々代議士の行動を指揮せんとする。凡て順に行けば結構だが、代議士が果して其の言ふ事を聽くだらうか。聽かねば再選せぬまでだといはんも、代議士の選舉區を左右するまでの力はいろいろの點に於て今に新政黨にはゆめない。又さう代議士の行動を拘束するやうでは、中央執行委員會の威望の名實共に大なるものでない限り、代議士がついて來ない。折角の政黨も議會に於て多數の代辯者を有たなくては駄目だ。代議士を我に繫けつけて置く爲に、中央執行委員の我儘は何よりの禁物だ。少くとも議會制度そのものが今日の如くである以上、政治の中心勢力はやがては代議士の方に集るのが當然の運命ではないかと思ふ。現に既成政黨の狀態を見ても、代議士だけが政黨の實際上の構成分子で、代議士以外は殆んど有名無實ではないか。故に新無産政黨に於ても、中央執行委員が權威を張れば代議士と衝突して悲慘な崩壞を見るに終るべく、幸にして政黨としての機能を發揮する樣に發達するとすれば、勢力の中心は必ず代議士に移って居るに違ひない。また斯くなるが當然の順序でもある。

政黨の今後執るべき途　於是私は新政黨に對し今後採るべき途につき一つ二つの提言を致したい。

第一は新政黨の當然の運命に從順なることである。詳しくいへば、將來勢力の中心が代議士に移るを覺悟し、新政治行動は彼等に一任し務めて之を拘束するなからんことである。從ってまた他日代議士を選定するに當ても、一旦信任を與へた以上は敢なくその行動を細目に於て左右するなからんことである。何となれば斯くすれば政黨は潰れるにきまって居るからである。

第二は民衆と代議士との關係に就ては在來政黨の陥ったやうな常弊に陥らざる樣心掛くべきことである。在來の政黨も同じ

く第一に之を大衆の中に求めたのだ。其點は政黨と毫も異らない。併し實際は中央幹部が一切を切り盛りし、地方黨員は中央の命の儘に機械的に行動し即ち其指定する人に一票を投ずる道具に過ぎない。其間選擧人の自由意思の實際に働く餘地は毫末もない。新無產政黨もこの同じ過誤を踏襲しては何にもならぬ。代議士の行動を個々に拘束せぬ代り、全體として人格的に監視するを怠つてはならぬのである。それには民衆が判斷の自由を確保してゐなければならない。この意味に於て私は實は民衆の政黨參加に極力反對したのであつた。徒らに政黨の地盤政黨の犠牲となり、政界の野心家の踏み臺となるに過ぎざるを恐れたからである。之と同じ主意で私は今度の新政黨に向つても、せめては純政治行動（假令そが代議士を有つに至つたときでも）だけには極力遠ざからんことを望むものである。

茲に於ては新無產政黨として[illegible]二事件備とに關しては最も嚴選なからんことを希望する。私は代議士の選擇の標準は人格的信頼に置くべく、個々の行動を政策的綱目の提示に依て束縛す可らざるを信ずるも、其の主義政策の大綱に於ては固より始より定る所なくてはならぬと考へる。是れ新無產政黨が既成政黨の外に別に設立せらるゝを必要とする根本理由だからである。而して是亦同時に所屬代議士の行動に對する最大限の拘束線を示すものである。其中に如何なる條項を掲ぐべきやは概して略ぼ定る所ありと信ずるが、其中に特殊の人生觀を奉ずる者に限るの一條を逸す可らざるは云ふまでもない。之等の點に付ては新政黨の今後の行動に徴し更に筆を改めて評論することにしやう。

軍事機密費に關する醜聞

該問題に對する世論の一斑

憲政會代議士中野正剛君に依て叫ばれた軍事機密費不當使消の問題に關し、側面から世論の大様を觀測するに、(一)訐かれた事實に對しても訐いた事柄に對しても世間はひとしく之を苦々しく思ふに一致して居るやうであり、(二)關係者の辯解如何に拘らず斯かる事の全然誣僞なるを信ずるものは殆んど一人もなく、(三)殊に糺彈の鋒先の軍閥に向へるをば頗る痛快に感ずるもの丶如く且つ之を機會にその根本的革正を希望するの念に堪へざる様であるが、(四)併し今の

隊付には到底之を期待し得ぬと諦めて居るものらしい。

一生懸命に騒ぎ立てた所が落ち付く結果は大抵分つて居る。けれども既に[illegible]の渦中に陥ては少しでも本物の勝味に[illegible]れるのを喜ぶのであらう。そこで別にもつたい振つた理窟をつけては事件の此上の進行を極力妨げんとするものが現れる。斯らる事件は漫りに開くべきものでないと云ふ議論の起る所以である。但しこの論にも二つの種類がある。

一は議院内に唱へらるゝもので、[illegible]所で内を洗ふ様なことは流行らしたくないと云ふのである。議論としては私も之に賛成だ。但し一旦開かれた以上之を曖昧に葬り臭い物に蓋するの態度に出づるのは、色々の意味に於て宜しくないと思ふ。世間もまさに同様に考へて居るやうだ。

二は軍閥側から唱道さるゝもので、さう暴かれては士気に関すると云ふのである。その為めか宇垣陸相は議会に於て極めて明白に事実無根と云ひ切つた。不幸にして前陸相田中大将の問題に対して寄せる疑問までをも一と口に打切つて居るので、世上の疑問は依然として解けない。そこへ加ふるに軍部当局が士気の維持をせぐ為と称して此上の暴露を下手に遮ぎる様な態度の為[illegible]たとの風説もあつたので、世間の評判はどうでもいゝ、軍隊の為に之を弁つてさへ了へば軍部の士気は維持されると考へて居るのではないかとの疑も起る。但し臭い物に蓋をして事實無根と威張るのでは、破産し掛けた商人が殊に贅澤を装つて虚勢を張るやうなものではないか。封建時代の學者は、人民は始めから馬鹿なもの、そして徹頭徹尾政府に縋り切つて居るものと決めて居たから、人の心のよく[illegible]らんやうに「假令日本は弱くとも強しといはんこそ本意となすべけれ」と[illegible]論者「一切異人恐怖[illegible]」に依る」などと教ふる必要があつたらうが、今日の人民は政府が何からうが軍隊が腐敗して居やうが失望はしない。失望しないどころか却て改革の實行に當らんとしてさへ居るではないか。少くともいゝ加減の辯解を正直に受取つて引込むやうな馬鹿者ではなくなつた。軍資の問題に依て作かさるゝのは、實に軍部の士氣ではなく、軍部に對する國民の信頼だ。臭い事をして居る自分達に對する國民的不信を、士氣の頽廃と一緒にされては困る。本當に士氣の振興に忠ならんとせば、潔よく事實を明にして將來に於ける公明正大を確約すべきである。若し夫れ今度のやうな事件を軍隊と國民とを離間せんとする或[illegible]からぬの陰謀に出づるなどと言ふものあるに至ては、人を馬鹿にするにも程があるとたゞ／＼其の厚顔に呆るるのみである

疑惑一掃の責任者は誰か

この提出された問題の責任

に就て國民は皆迷つてゐる。之を此儘放任するのこそ實に社會風教上の大問題だ。是非とも之は明白な始末をつけて疑團を一掃せねばならぬ。然らばその疑惑一掃の責任を誰に求むべきかといふに、此點に對しては世論いまだ明白に其歸趨を示してゐないのは、私のいさゝか不滿に思ふ所である。

議會の問題としては右の問題は無論糺彈者にある。議會には査問會といふがある。併し之に多くを期待し得ぬことは明だ。故に査問會の決定だけで世間は決して滿足するものではない。從て世間に對する責任としては、依然糺彈者に其の發言の無稽ならざりしを證明する社會的義務が殘る。けれども之とても滿足なる根本的解決を提示し得るものでないことは、事柄の性質上已むことを得ない。さうすると結局被糺彈者が進んで自己の潔白を擧證するに非るよりは、事件は永久に迷宮に彷徨ふものと謂はねばならぬ。そこから政治道德上の問題として疑團一掃の處置に出づるの責任が被告の側にあるといふことになる。今度の問題にした所が、現陸相を始め前任者の田中山梨兩大將に於て萬人の納得する樣な説明を進んで爲すに非る限り、之等の人に對する國民的疑惑は永久に取り去られないと思ふ。我々國民も亦、査問會の決定がどうであらうと又糺彈者の證據が如何に不十分であらうと、被糺彈者の側から公明な説明に接するまでは、彼等に對する嫌疑を適當時に默殺して了ふ[illegible]務はないのである。

今までの所、宇垣陸相の態度は、有るものを無いと云ひ切る底の蠻勇を示したに過ぎない。田中山梨兩大將に至ては、或は相手方を漫罵し又は無頓着を裝ふに止まり、何等積極的態度に出でないのは、私の甚だ兩大將の爲めに惜む所である。斯くては兩大將に斯種事件の道德的意義を解してゐるかを怪しみ問ふものがあつても辯解の辭がなからう。物事に動じないのは軍人らしい矜持かも知れないが、道德品性に關する問題に付てだけは、何れ丈け神經過敏であつても構はない。軍人らしい魂の据え所は物事に依て必しも一樣でない事を忘れられては困る。併しこの目前の紛爭も煎まつたら、事件の眞相が一點の疑を容るる餘地なきまでに兩大將から徐ろに明かにされるのだらう。是を私は兩大將の名譽にかけて信ぜんと欲する。

本問題に對する諸政黨の態度

どうせ議會の論議で本問題の眞相の明にならうとは思はぬが、政黨の取扱方の餘りに見當外れなるには亦一驚を喫せざるを得ない。一番利口さうで一番馬鹿げてゐるのは政友會の態度だ。表面上から觀れば政友會の策戰は實に巧妙を極めて居る。第一に彼は陸相に向つて中野君の發言をどう觀るかと問ふた。マサカさうかな

もう云へまい。仕方なしに中野君と云ひ切ると、今度は首相に詰め寄つた。閣僚大臣としての陸相の答辯にはも責任を負ふと答へると、そんなら首相は更に憲政會總裁として中野君の發言に如何の責任を負ふかと來る。政府としては形式上中野君の發言を當時無禮と否認したからである。流石の若槻首相も之には困つたらしい。この箭書はもう前日から分つてゐた。首相にゆつくり對策をめぐらす暇もあつたらうに、責任を負はぬなどと苦しい答辯を私り出したのに観ても、首相の困却と無誠意がわかる。私なら憲政會總裁としては中野君の發言に責任を負ふと立派に云ひ切りたかつた。之と首相としての責任との間に矛盾あるをば正直に承認し、この矛盾の解決は御問責に讓るといふべきではなかつたか。若しさう云つたら事理極めて明白になる。何となれば所謂矛盾の根因は政府に在らず中野君の發言を政府が採用したことに在るからである。何は兎もあれ、此點まで首相をこまらしたのは政友會の大成功であつた。但し翻つて考ふるに、この成功に依て政友會は果して如何の印象を我々國民に與へたであらうか。觀客席に投げたものは、彼等の不備を嘲に取て借金を踏み倒したりする。議會道に醜名を受けた奴を借上が法律を斷にやりこめるのは痛快だけれど、固より之に依て借上の信用が消滅するのではない。相之此方の論客がもし極端に走ると、却て借金を踏み倒す積りではなかつたかとさへ疑ひたくなる。所う云ふ見地からすれば、政友會のあの果戰は決して賢明な兵法ではなかつた。我々國民の刑らんとする所は全然除けて、徒らに空砲の音に世人の耳を聾せんとするかに見えたからである。若しそれあべこべに中野正剛君自決案などを提出するに至ては、卿未へば所うも常識を逸するものかとただ人をして憫笑せしむるに止るものではなかつたらうか。

憲政會や政友本黨は、この點に於ては原告だけに無難な地位に居る。それでも私と彼等が本問題に依て何をつゝき出すべきやを明白に意識して居なかつたらしいのを心中大に遺憾としてゐる。軍事機密費が多過ぎるの、其の使ひ方がをかしいの、又は私腹を肥やしてゐるではないか、政府擁護の爲めに使はれては居ないかのと騒ぐだけでは何にもならぬ。幾ら騒いだとてどうせ斯んな事は結局想像の範圍を出でず首相の突き留められるものでない。前にも云つた様に、之は政治道德上の問題として被告の自發的懺悔に委すべき事柄だ。他人から追窮し得るものではない。而して彼等は此方ばかりを突つ付いて居るではないか。無用の事に力を注ぐは愚だ。之を八釜しく云ふことに依て此際私共のはツきりして置かねばならぬことは實に外にあると思ふ。此點を原告側では的と明白に意識して居ない。政界

陸軍の爲に其の甚だ遺憾に思ふ所である。

問題の要點　然らば要點はどこに在るか。先づ問題の論點から云つて見る。軍部にはふだんでも機密費が多い。所謂軍事機密費に至ては殊に多かつた。而して其のすべてが正當に使はれたとはどうしても思はれぬ。その中の幾分は軍事以外の目的に使ふべく取つて置かれたらしくも見え、又他の一部を以て私腹をこやしたものあるの疑もあるが、少くとも其間政治上の目的に巨額の金が濫費せられた形跡は掩ひ難いやうに思はるゝといふのである。これ以上は流石に公人の名譽に關することとて露骨には云つてない。併し乍ら斯く云ひ立てることに依りて何事を訐かんと欲するかは言外に極めて明白だと思ふ。試みに之を列擧せん乎、大約次の如きものであらう。

(一)田中山梨一派の人々はあの尨大な機密費の少からぬ一部を自己の爲に割き取つたのではないか。

(二)最近或は政黨の總裁になつたり又は政黨の攪亂を試みたりするのを觀ると、可なり巨額の金を擁して居るらしいが、それは機密費から割取した資金ではあるまいか。

斯くして兩大將の前途を葬り合せて今後にも起ることとあるべき政界攪亂の陰謀を未然に喰ひ止めんとする積りかも知れぬが、その事の結局徒勞に屬すべきは前にも云つた通りであらう。假令兩大將の財布が如何に多いと云つたとしても、その機密費の竊取に成るの證據は擧げ得ぬ、本當にさういふことをす程の者は容易に他から見破らるゝ様なへまはせぬ。從て訴者が山梨大將の財産を調べよなどといひ出したのは、實は折角掴へた鳥を敢なく逃したと同じ結果になり了つたものであつた。せめて問題を次の三點に限つたならまだしも騷いだ甲斐があつたらうと思ふ。即ち(一)過去に於ける機密費の使途が放漫に失せなかつたか、(二)最近に於ける政治的行動に伴ふ大金の出所は一體何處に在るか、(三)軍人の身分を以て政治に干與せしの事實を如何辯解するか、是れである。尤も私一個の考としては、(三)の點に付て私は在來の通説とは全く別個の意見を有つて居る。軍人だとて公民の一人だ。公民として政治に與るのは當然の權利で、軍人たるの故を以て特に之を奪はるゝ理由はない。但しその本務と相容れぬ場合は、其の限りに於て自由の拘束を受くるは已むを得ない。併しこはとくに軍人に限るのではなく、他の文官に在ても同様である。國家の官吏としての一般的取締を受くる以上に特別の拘束を軍人に加ふるのは、教育家は政治に與る可らずと云ふのと同じく、政治を「已むを得ざる惡事」と觀た舊時代の遺物に過ぎぬものである。併し之は私の一家言だ。今日一般に通用する見地からすれば、この三の立場

かゝる人に政治家を糾彈するの餘地は存する。次に二の點は、機密費の性質上如何樣に使消するとも法律上の責任問題とならぬのだが、併し國家の信任に背き其の利益を圖るに忠實でなかつたといふ政治道德上の責任は殘る。此點の糾彈も良心の鋭い政治家に取つてはなかなか苦痛とする所だが、我國の政治家にとつてこれ程響くかどうかは怪しい。之を糾彈する者の道德的水平が、糾彈さるゝ者同樣に低いとあつては猶更だ。それでも之等の事實を正直な國民の耳目の前にさらけ出すことは必しも徒爾ではない。終りに三の點は、在野有力な抑ゆる所とは云へたい。知らぬと蹴られゝば夫れまでの事だ。併し之は機密費濫用の問題と共に、被告の自發的釋明を見ざるまでは、永く民間に不信の印象を遺すであらう。孰れにしても以上の三點に斯ら追窮の詮索を向けるのであつたなら、少くとも將來を戒飭する意味で若干の效はあつたと思ふのに、彼等が主力を之に向けなかつたのは我々の甚だ惜しく思ふ所である。

機密費制度改革の私案　但し本問題に關して我々國民の最も痛切に關心する所は、過去に於ける正不正の問題ではなく、實は如何にすれば將來に於て機密費の使用を公正有用なものになし得るかに在る。之には制度の改革を要する。今の儘にしておいては今後も必ずや同樣の過失が行はれるに相違ない。この事を明にするためにも過去の糾彈は必要だが、併し主たる目標はどこまでも將來に置かれなければならぬと考へる。斯ういふ點から機密費の廢止又はその事前事後の監督を説くものもあるが、併し之は角を矯めんとして却て牛を殺すの類にひとしい。機密費の全く廢し得ざるは今更云ふまでもなく、其の支出に付ては軍事參議官の議に附せ（特に軍事機密費に關して最近こんな提議があつた）の又は後から嚴重な會計檢査に附せのといふは、事實に於ける其の廢止に均しい。原則としては大體現行の制度を其儘存置するの外はあるまいと私は考へる。只之より生ずることあるべき二大弊害を防ぐ爲めには多少の改正を加ふる必要があらう。二大弊害とは何ぞや。一に曰く不正行爲に使はれた金錢の隱然たるものまでをも存續せねばならぬこと。二に曰く一主管者の專斷のみで國家の高等政策に關する事項に巨額の金を擲たるゝこと。而してこの二點を取締ることは、一つには國帑の濫費を防ぎ風紀の紊亂を匡すことになり、一つには無責任者の妄動により國家の不測の禍に陷るを豫防することになる。最近の歴史が軍部の機密費を與論の點より大に取締るの必要を示せることは、識者のひとしく認むる所であらう。國民が直に不正を見んことを期待するは實にこの點に在る。我等は果して之に關し國民の希望に添ふだらうか。斯ういふ意向な

問題にはさらでも疑惑のともなひたいのに。今の内に議論せねばいつまで政黨聯絡を極むるのではとても目鼻のつく見込はない。憤慨に堪へぬ次第である。

議會の論議に上る見込はないが、如何改むべきかの私案を讀者の參考にまで揭げて見る。

まづ機密費を(甲)主管者單獨の責任で支出し得ると(乙)閣議の協議を經た上で支出し得るものとの二種に分つ。而して双方とも會計檢査の埒外におくとは從前の通りとする。すると(甲)に就ては殆んど在來のものと異る所はない。併し國家の高等政策に關するものは悉く(乙)に組み入れられるから、此方はさう多額を要しないと思ふ。而してこの項目に限り、不正な使用のあつた證跡の歴然たるものある場合之を刑事訴追の目的たらしめ得ることゝしてもよからう。

(乙)は國家の高等政策に關して支出せらるゝものを一切包含する。之はなか／＼大きい。大戰參加より引續き西伯利出征に關連して二千數百萬圓を使つたといふのも、主としてこの高等政策に關するものである。常時の機密費に就いても此種のものが大部分を占むることと想像される。現に今度の事件に就て山梨大將が新聞記者の問に答へて「金は使ふには使つたが何に使つたかは軍乃至國の機密に屬するから口外出來ぬ」と云て居られるのも之れだ。斯う云ふ種類のものは從來の通り公には出來まいが、之等はもと其の高等政策に關するものだから、本來は閣議で決めらるべきものではあるまいか。之を當時大臣單獨の裁量に任すのは理に於いて當らないと思ふ。のみならず之れがまさしく從來種々の弊害の源だと疑はれて居るのである。現に例へば大の西比利出征の事に關し人に依つては軍の機密費が却て日本帝國の利益と名譽とを傷けたといふ者もあるではないか。假りに之が讒言であるとしても、國家全體の名譽と利益と關する事項をば、他の閣員に無斷で一大臣が勝手に取りまかなうといふ法はあるまい。今度の樣な不祥な問題の起るのも畢竟かういふ制度の結果であるから、將來に再び此のあやまちなからしむる爲には、どうしても此制度を改めなくてはなるまいと思ふ。さればと云つて機密費を全く無くする譯には行かぬ。さすれば之を閣員協議の連帶責任に歸するの外道はないではないか。而して斯種の支出が閣員全體の諒解の上に爲さるべきは實は理の當然でもある。閣員全體の協議に委さるゝ以上、後よりは其使途を八釜しく詮議するの必要なかるべきは、また云ふまでもない。

猶この提案に對しては、どうせ閣議できめるのなら總理大臣の機密費として一括して内閣で掌つた方がよくはないかとの說

もあり得る。又、斯くては當局官長と部員との關係の紛更さるゝ恐あるのみならず、それ〴〵の主管大臣を經由せざるの結果、折角の機密費も有效に活らかぬ懸念なしとせぬ。矢張り實際の取扱は各省にまかしたる方がよくはなからうか。併し私は今こんな細かい點を爭ふ積りはない。根本の主義に大方の贊同を得さへすればいゝ。之を實際の制度の上に如何に現はすかは別に其道の專門家にまかさうと思ふのである。

最後に更に一言附け加へておきたいのは、機密費は此際一般に大に減額するの必要はないかといふ事である。政治が公開になれば斯うしたものは段々減る筈である。現に私の知つて居る範圍でも、下らぬ仕事が下らぬ人に依てたゞこの機密費のお蔭だけの爲に企てられて居るの事實が少くない。無ければ無くて濟み、有れば有る程不足を感ずるといふ點に於て、機密費は蓋し遊蕩費と好一對のものである。之はもつと〳〵減じ得る筈のものと思ふ。

政治教育と政治道德

政治教育の流行

昨今政治教育に關する出版物は非常に多い。之に關する講演なども定めし同樣に多いことだらう。して見ると議會も閉ぢられたなら更に一層盛になるに相違ない。尤も其中には近く實施さるべき普選を見込み在來政治家が名を之に藉りて準備行動に出づるといふのもあらうが、概していふに、既成政黨の信ずるに足らざるをしみ〴〵最近の議會に見せつけられて、民衆の政治教育の上にその根本改革の基礎を据えんとする所から、此事が最も熱心に叫ばるゝ樣になつたものであらうと思ふ。

政治教育の何たるかは既に詳細に述べたこともある（去年九月の本欄及び拙著「現代政治講話」參照）。段々この問題の實際に取扱はるゝに伴れて今後猶ほ重ねて之を論ずる場合もあらう。只茲に一つ特に讀者と共に注意しておきたいのは、その政治道德に關するものである。政治教育といへば必ず政治道德といふことが云々さるゝに相違ないが、政治道德とは一體何を意味するのか。餘程用心して居ないと飛んでもない謬妄を押し付けられる恐があると思ふ。何となれば新政治形式の採用と共に新政治道德の必要とさるゝ本當の意味は案外世間に十分了解さ

たて居ないからである。詳しく云へば政治の形式に就つても之を運用する基礎的道徳主義が變らねば何にもならぬといふ意味が一般によく理解されてゐないからである。更に皮肉に云へば、政界の先輩中には新政治形式を自己に便宜なる様に展開せしむる爲めに寧ろ古い政治道徳の流行を喜ぶといふものもあるからである。さうでなくてさへ道徳といへば多くは直に古い道徳觀を念頭にうかべ勝のものだ。道徳ほど保守的のものはないのである。夫れ丈けこの問題に付ては特に我々の思索を自由にし清新にし又鋭敏にする必要があるのである。

昔の人の政治道徳觀

福澤全集緒言中の「西洋事情」著作の由來を説ける一節に、福澤先生が文久元年歐羅巴に往つて政黨政治の説明を聞いてもなか／＼了解の出來なかつた模様が面白く書かれてある。一例へば政治上に日本にては三人以上何か内々申合せ致す者を徒黨と稱し、徒黨は曲事たる可しと政府の高札（法度の掲示場）に明記して最も重き禁制なるに、英國には政黨なるものありて青天白日政權の受授を爭ふと云ふ。左れば英國にては處士横議を許して直に時の政法を誹謗するも罪せらるゝことなきか。斯る亂暴にて一國の治安を維持すると は不思議千萬、何の事やら少しも分らずとて、夫れより種々様々に不審を起し、一問一答漸くして同國議院の由來、帝室と議會と[illegible]、[illegible]くに從つて始めて其[illegible]を[illegible]たさ[illegible]、[illegible]しい今日から觀れば嘘の様な話だが、あの時のこととしてはさもあるべきことである。流石に福澤先生には能く分つたが外の人には之がなか／＼分らない。慶應四年三月明治政府は大英斷を以て五個條の御誓文を發布し以て新式政治の大方針を示したが、同時にまた彼は他方太政官をして徳川時代の舊慣を踏襲し『何事によらずよろしからざる事に大勢申合候をととうととなへ、ととうして強てねがひ事くわだつるをごうそといひ、あるひは申合せ居町居村をたちのき候をてうさんと申す。堅く御法度たり。若右類の儀これあらば早々其筋の役所へ申出べし。御ほふび下さるべく事』の高札を建てしめた。之に依て推せば新しい政治を形式の上には立てたが、之を立派に成し遂げるだけの頭には頓と變つて居なかつたことが明白だ。明治六年一月發行の郵便報知新聞第三十三號を見ると『米國留學生高須某より兒玉某へ來書抄』といふがあり、其中に斯んなことが書いてある。『貴當國の如き公明正大はハイスト・シビライズト（最も高き開化なり）の國と呼ばるゝも、人民の黨派二ツに分れ、互に爭論を起し、入札一件の勝負を競ひ、實に聞に堪へ難し。畢竟開化も除り度に越る時はフリー（自由）の弊害恐るべきものなり云々』。之れなどは封建

的政治思想迄アメリカまで持つて行つたものである。

斯う書いて來ると、當時の人々の考方と我々との間には大變な隔りがあるやうに思はるゝか、實は必しもさうではない。前記の文中に表はれた思想を押し詰めて見ると要点次の二點に過ぎない。（一）人民か黨派を組んで政治を論ずるのは惡い、（二）國の治安は民衆の政權を介ふより起る。而して斯うした考なら今日でも一部の人から信奉もされ又唱導もされて居る所ではないか。

今日の政治道德觀

政治道德といふと、國家は斯んな有り難いものだとか、兵役の義務納税の義務は忠實に盡すべきものだとか、選擧人としての心得はどうの、議員となつた時のつとめはどうのと、巨細な科目を數々列擧する。併しこんな事なら何も政治道德などと今更特殊の名目を立てる必要はない。常識あるものには誰にも分り切つてゐるのである。今日政治道德を高唱して特に民衆の眼を新に開かんと欲するのは實は外にある。即ちそは之等の制度を運用する精神に關するものである。

そもく國家の名に於て決められた事に從へと云ふのは昔も今も變らない。變るのは其その決め方にある。昔は之を上流支配階級の仕事として一般の容喙を許さなかつた。上流階級の仕事なるが故に正しいとされたのである。今日は然らず、其事の正しい爲には一般の人民に諮らなければならぬ。政治法律に關する正義の把持者を民衆に置くのである。そんなら何故民衆に諮るのか、何故正しいのかといふに、民衆を信ずべきものと認めたからである。尤も詳に信ずべきものたらしむるには之に十分の教育の機會を提供することが必要だ。教育の機會を提供することに依て信ずべきものたらしめ、信ずべきものたるに信賴して其の決する所を正しいとする。之れが近代民衆政治の特徴である。然らば所謂政治道德はこの趣旨を十分徹底する樣に民衆を訓育することでなければならぬ。所で昨今の政治教育家は十分によくこの趣旨を理解して居るだらうか。

人民は容易に煽動者にかぶれ易いとて、官憲が濫りに思想の良否を判別し、一を人民に強いて他を嚴重に抑へんとする。是れ果して民衆を信ずるの態度といへるだらうか。議會政治を主とし、十餘年も經驗した今日、仍ほ民衆政治を勢の已む可らざるものと觀て、出來得べくんば常に絶えず其の發達を抑止するのが議會の役だと考ふるものがある。是れ民衆の良識を信ずるの態度であらうか。政治の方は勢か出來た事だから致方はない、せめて思想界だけでは勞働者の多數共働を收縮せしめてはならぬなどといふに至ては、現代思想の何處に五六十年前と異る所以を發見し得やう。今日の問題を判斷するに當り、迂つかりして居る

とはい達て[illegible]容赦なく出て[illegible]
すこと無の好きものである。夫につけても吾々の努むべきは、[illegible]してはいけない。

小題雜感

地盤關係に累さるゝ議員の去就

憲本提携の成立するや、地方黨員の之に對するの憤慨甚しきものありこの儘に放置しては自分の大事な信望に傷がつくとて、政友本黨所屬の代議士で脱黨を申出でたものがあつた。其中に高橋光威氏の如き名士がある。鐵道布設法改正問題のごたごたのあつたとき、憲政會の樋口秀雄氏は地盤關係上黨議に盲從し難しとて總務の地位を退くと云ひ出した。行掛りに拘泥せすして脱黨を決行する、わるくはない。黨議だからとて一から十まで盲從するわけに行かぬ、之もいゝ。相當の理由に依る出所進退は一國の選良として當然の行動と云ふべきも、單に地盤擁護の立場から自分の進退を輕々に決し去るのなら、それは國士にあるまじき腑甲斐なき態度といふべきではないか。一山百文の有象無象ならどうでもいゝ。私は高橋樋口氏程の名士の爲に切に惜むのである。

併し斯うした現象は必じも高橋樋口氏の輕率と責むべきでないのかも知れなぬ。今日の樣な政界の狀態では已む得なかつたのかと考へらるゝ。何となれば高橋樋口兩氏程の人でも單純に其の識見其の學德に由て民衆の附託を買つたのではないからである。兩氏の如き、その經歷とその才識とだけでも優に選良としての信頼を博するに足るとは思ふも、今日の政界では、矢張り一つには黃白を散じ又一つには政黨の背景を藉りて特殊の地盤關係を作らなければ當選の榮冠を得ることは出來ない。であるから後に代議士となつても自由の行動が事實に於て許されぬのである。一體地盤關係の如きは選擧の便宜の爲に自分の作つたものだ。而して高橋氏の場合を云へば、反對候補を斃す爲に憲政會を散々に惡口し爲めに地方に於ける自分の味方を憲政會派と不俱戴天の敵としておき乍ら、中央に於て今更自分だけその憲政會と握手する譯にもいかぬのであらう。樋口氏の場合でいへば、鄕黨の便利の爲めには盡す其の不利とする所には反對するとの冥々裡の了解の下に地盤を作つたのに、假令國家全般の利益の爲めに必しも之に拘泥し得ぬ場合が突然起つたとしても、今更前言を反故することは出來ず、さればとて一々之を辯明することも間に合はぬと云ふのだ、さてこそ總務辭任とたつ

たいであらう。要するに自分の作つたわなに自ら闘らず陷つたものなのである。

　挑發政策の不都合なものであるといふ事は之まで私は幾度も繰り返した（拙著「現代政治講話」參照）。而してこのやり方が彼等自身に取つても時に飛んだ困迷の種となることも前述の通りである。本當に學識才能の信賴のみで當選の榮を得たものなら、自分の良心に忠なる限り、どんな行動に出でやうと他の思惑を顧慮する必要はない筈である。我々國民としても、一々遠くから監視の眼を見はるばかりでなく、何をしやうと安心してまかせることの出來る樣な人を選擧するやうにしなくてはならないのである。

議會記事を讀みつゝ

　馬鹿と云はれたとて直ぐ怒る、又時としては泣き出し暴れる。そして自分の馬鹿なる所以を最も明白に立證する。斯んなのは質の惡い子供に限ることゝ思つたら、堂々たる代議士にこの傾向の盛なるを見て、つくゞく議會に人間味の溢れて居ることに驚喜した。

　議會の現狀殊に國民の多數は苦り切て居る。引き揚げた當事者は少しは後悔して居るかと思ひの外、傲然として曰ふ、諸君の勇氣ある行動に依て、我黨の面目を保持し得たのは、獨り我黨の幸のみではない、實に國家の幸である。國家の爲めに望

思想と闘ふに於て今後猶一層勇氣ある行動に勵まれんことを望むと。之を幹部の口から聞くに至ては啞然として全く言ふ所を知らない。

　人の揚足を取つたり人の頭を撲つたりして敵を苦しめ會館の混亂を招來せし者を、殊勳者などと稱へるのは、慥に文明政治の敵である。

　議員の中に露西亞から金を貰て日本を赤化せんとして居る者があるといきまく。斯く責むる者自身も何處からか何ものかを貰ひ荒唐無稽の流說を以て反對黨を傷けんとする點に於て、所謂赤化者流とその動機を同じうする。要するに名と利をあさつて東西に狂奔する人達に過ぎぬ。但し所謂赤化者流に未だ其證據なく、之を語る者早く既に其の醜狀を暴露して了つたのは情けない。

　政友會邊ではよく純野黨的立場てふ言葉を使ふ。敵の言ふことは理を非にまげても反對せよ、自分達のやり損ひは非を理にまげても推し通せ。國家の爲だらうが社會の爲だらうが、敵方とは絕對に協調するなといふのである。戰國時代でも敵國に鹽を送つたといふ美談がある。純野黨的立場なるものは蓋し古來日本人の思想に存在したことのないものである。已に執して敵を惱ますの極端なるは、頗るかの過激なる暗殺論說と似てゐる。恐らくは西洋からの輸入でもあらうか。此點をよく小川平吉なんどいふ人に聞いて見たい。

四月特輯

婦人

◇「花咲く頃の

創作欄

特價 壹圓

公論

問題號要目◇

■今の少女の幸福さ……[illegible]・小寺菊子・高安千寸子・吉岡彌生・岡田八千代

■年少者の自殺研究……吉川澄一・小南又一郎・川村多實二・中村古峡

■當世映畫女優地獄の卷……西川得

■女學校スポーツロマンス……野口武美

■信濃の春……北原白秋

■異人結婚異聞……[illegible]

■戀を知る頃の少女に與ふ……小島政二郎・江馬修・中村武羅夫・谷崎精二

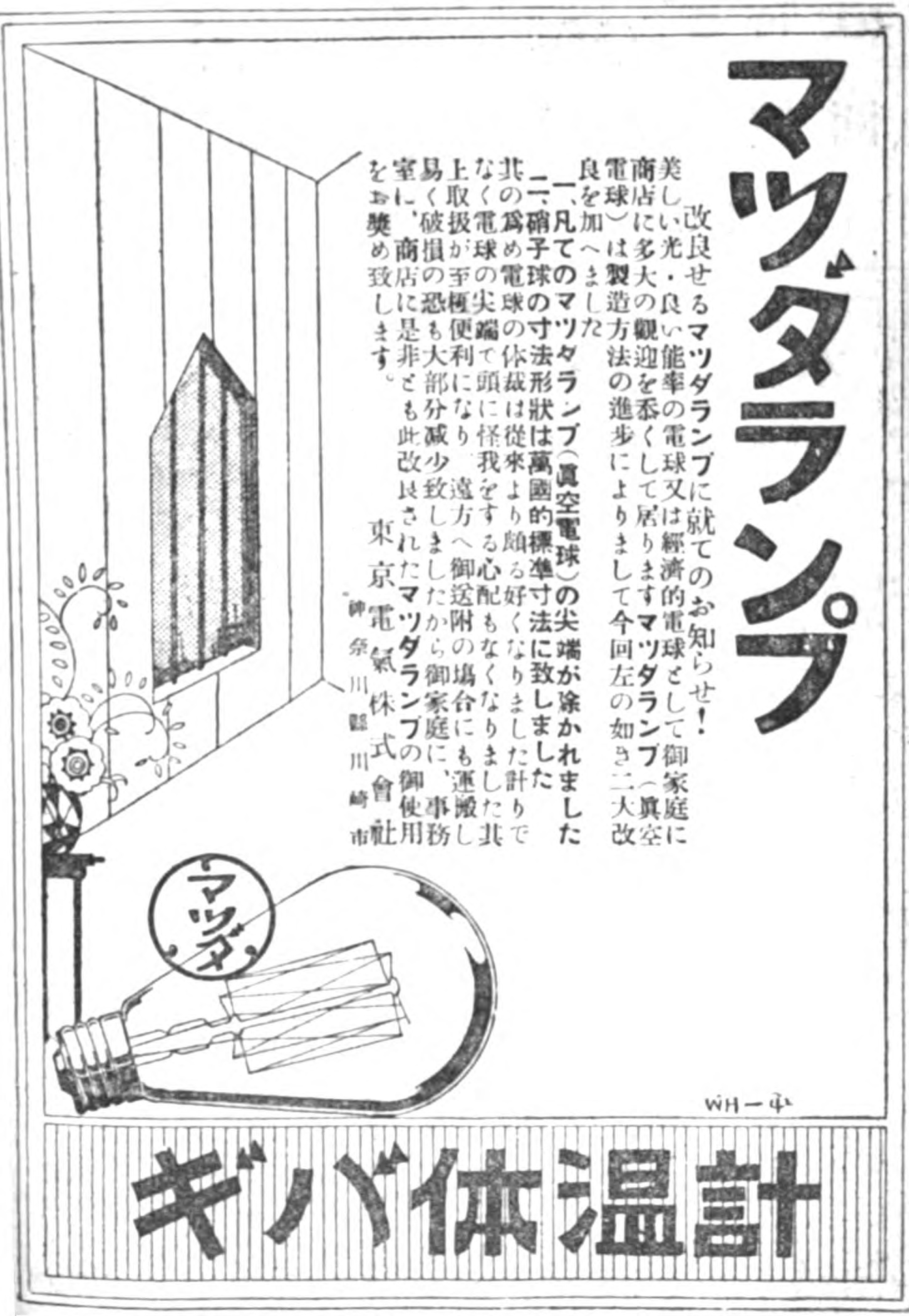
■藤井先生とその娘……水野葉舟

■黒猫と女の子……稲垣足穂

■時評……吉野作造

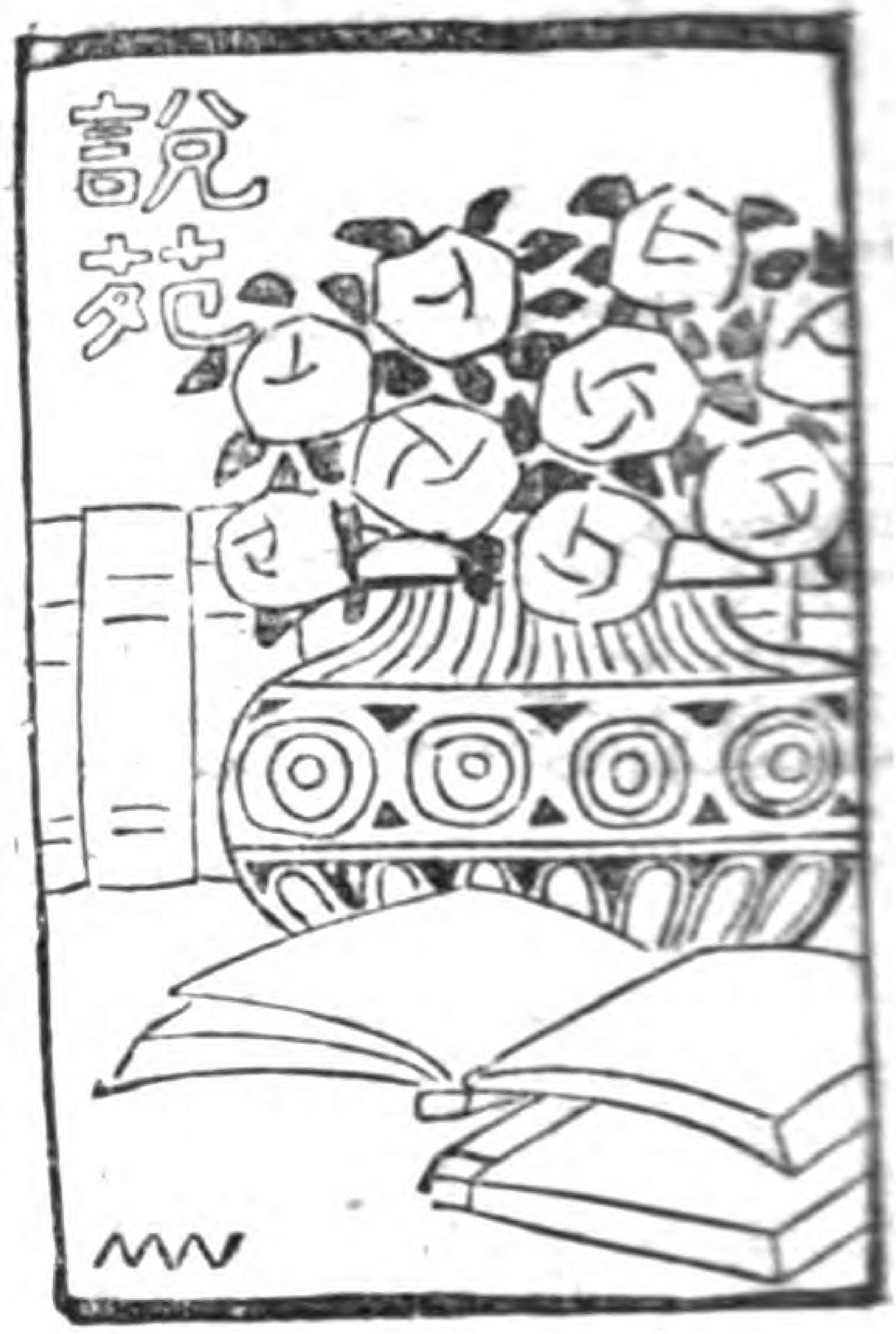
新選 女子讀本

第一章 嫁女教訓書……德富蘇峰先生選
第二章 愛の選擇……坪内逍遙先生選
第三章 デカルト……桑木嚴翼先生選
第四章 道理と道德……石原純先生選
第五章 いつゝの道……幸田露伴先生選
第六章 一茶の俳句より……島崎藤村先生選
第七章 獄中より……長谷川如是閑先生選
第八章 スチンソン嬢へ……田中王堂先生選
第九章 人に……與謝野晶子先生選
第十章 晩年のトルストイ……倉田百三先生選


マツダランプ
改良せるマツダランプに就てのお知らせ！
美しい光・良い能率の電球又は經濟的電球として御家庭に商店に多大の觀迎を忝くして居りますマツダランプ（眞空電球）は製造方法の進歩によりまして今回左の如き二大改良を加へました
一、凡てのマツダランプ（眞空電球）の尖端が除かれました
二、硝子球の寸法形狀は萬國的標準寸法に致しました
其の爲め電球の体裁は從來より頗る好くなりました計りでなく電球の尖端で頭に怪我をする心配もなくなりました其上取扱が至極便利になり遠方へ御送附の場合にも運搬し易く、破損の恐も大部分減少致しましたから御家庭に、事務室に、商店に是非とも此改良されたマツダランプの御使用をお奬め致します。
東京電氣株式會社
神奈川縣川崎市
マツダ
WH一平
ギバ体温計

頼山陽

蘇峯學人



第一　頼山陽と本文の記者

予の胸中には常に頼山陽がある。予には頼山陽が昔の人とは思はれない程接近してゐる。少くとも同時代の人のやうに考へられてならない。別段崇拜すると云ふでもない、私淑すると云ふでもない。然し何となく親まれて、吾が長者先輩に對する心地がする。具體的に云へば、勝海舟とか新島襄とか云ふ人と殆ど同じ心持を以て頼襄に對して居る。之は何故であらう。予は幼き時より彼に關する物語を聞いた。山陽は文政元年の春から冬にかけて九州旅行の際には、予の祖先以來墳墓の地である肥後と薩摩の國境なる水俣を過ぎ、出水口より鹿兒島に赴き、鹿兒島よりして大口を過ぎ、石阪總阪を踰へて、復た水俣に到つた。水俣には竹原の歌人道工彦文の墓がある。山陽の祖父享翁の配亦た道工氏だ。されば彦文亦た其の同姓乎。そは兎も角も、山陽は左の如き詩を作つて之を弔つて居る。

蕭條華北水濱村　來弔同鄉客死墳　火海飛燐本無數　不レ知若個是君魂

而して彼は村の名族深水氏や文予の宗家德富氏などに往復と も立寄り、若干の草鞋錢を得たらしい。而して其の時も外史の原稿を携提し、折々此れを取出して存りに添刪して居たらしい。亦た地酒の惡しきに苦情を云ひ、その爲め彼の接待には骨が折れたと云ふことなど、予は子供の時に親しく之を予の祖父鷗眠翁より聽いて居た。現に予の家にも其の時山陽が揮毫した成賁の額があり、爾來今尙ほ其の額の字に緣み成賁堂と稱して居る。予は五六歳の時に吾が父淇水翁が日本外史を讀んでゐた事を朧ろに憶えて居る。予が父母は常に成賁の額字を指さし、之

かは日本一の史書を書いたものであると云ふ事を話して呉れた。予は何時頃から日本外史を讀んだか覺えて居ない程早く日本外史を愛讀した。其頃は子供には解る解り難き本であつたが、予が父は此の外史を予に講義をして呉れた。それで高等段つ予の側が一通り後であるなどと云ふ事は、十歳頃には既に知つて居た。山陽詩鈔は予が最も愛讀したる一つで、予が詩に對する興味は全く之れに因つて啓發された。予が家には初印本の山陽詩鈔があつた。予は三國志や、大日本史以下にそれを愛讀した。其の何故記、詩鈔、八家文の批評、流子の批評、劇拾遺、山陽詩鈔、小文規則、山陽文稿、山陽遺稿、古文典刑、浙西六家詩鈔の評の如き、悉くも山陽の手に成れる物は何れも愛讀したが、殊に愛讀措く能はなかつたのは日本政記であつた。一口に云へば山陽の著作若しくは批評したる内にて、最も予の愛讀したるものは外史、詩鈔及び日本政記と云ふてよからう。人間の嗜好は年齢と共に變化するものであるが、獨り山陽に對しては、寧ろ年齢と共に愛着を深くし、愈々なつかしくなるばかりで、自分ながら不思議に考へてゐる。それよりて遂一山陽に敬服するのではない。議論としても同意しないものがあり、性格の上からも嫌厭して居るものがある。人物としても面白からぬ點もあるが然し山陽の著作を見れば、何となく作者と意氣を交ふる趣があつて、恰も師友か一時に下る心地がする。

明治二十六年の頃、或友人等から十二文家を出版するに際し、それぞれ撰者を定め、予は頼山陽を受持つこととした。然るに當時予と同好の森田思軒、山路愛山などありて、頻りに山陽論を闘はして居た。云ふ迄もなく予も其の一人であつた。然し森田君が餘りに熱心に山陽に就て書くから、予は寧ろ之れを森田君に譲るが穏當と認め、同君も之に承諾した。やがて二十七八年戦役は勃發し、戦役後予は世界漫遊を爲し、彼れ是れ世の風塵に逐はれて居たが、然し頼山陽に就ては常に心に懸けて、是非思軒君をして一書を成さしめんとし、屡々君に向つてこれを促した。然るに君は三十年の冬俄かに病に罹つて逝いた。其遺で予は愛山君と図つて、明治三十一年五月「頼山陽及其時代」と題し之れを出版した。其の内容の七分は思軒君の遺著であるが、後の三分は愛山君と、予の作及明治二十四年一月「國民之友」附録に掲げたる岡北會館県君の「歴史家としての頼山陽の位置」である。同書世間にも山陽に就て著述が往々出て來つた其の内にも予の知る限りでは坂本箕山君、木崎好尚君、而して最後には市島春城君の物がある。中にも木崎君は、頼家に保存せられたる山陽の自筆の日記の或る部分を資料としたから、山陽研究には恰かも新たなる光明を投つた趣き

がある。之れは[illegible]予は山陽を[illegible]るには彼の書簡に若くはなしと考へ、明治三十一年には『國民新聞』に廣告して之れを募つた。當時此れに應じて予に山陽の書簡の寫しを寄せられた方々が尠くなかつた。中には其の所藏者の姓名を知らせて呉れた人もあつた。而來機に應じ、予は之れを寛なる事を憚らなかつた。殊に故[illegible]枝光太郎君は山陽[illegible]一百五十通、内山陽の書簡百[illegible]十[illegible]通を得て、悉く之れを謄寫し予に贈られた。而して君の熱心に餘儀なくせられて、予が山陽に關する講演を築地の同氣倶樂部に於いて爲したのは、大正十一年十一月中旬と記憶して居る。其の以前にも予は山陽の女弟子江馬細香に就て『國民新聞』に掲げたが、之れは明治四十[illegible]年十一月のことだ。何れにしても予は山陽に就て常に親しみを持つてゐる。殊に大正七年『近世日本國民史』の著作に從事して以來、彼れに對する同情が、一層眞摯と成つたかのやうに思はれる。それは山陽の史論に隨喜するが爲めではない。但だ彼の筆力と文章を鍛錬したる精苦に至つては、實に嘆美せざるを得ぬのである。されば何かの機會があれば、改めて山陽に就て一言したいと云ふ考がないでもなかつた。而して山陽に就て知らなくともよき點が餘りに多く且つ普く知られ過ぎて、知られねばならない[illegible]見した[illegible]の主なる事[illegible]であつた。[illegible]山陽の家の事[illegible]とかき所謂とか不[illegible]場とか[illegible]とか云ふ事は閑却に附せられて、却つて長崎とか[illegible]とか[illegible]とかに附けに付せられて居る嫌があるからだ。昨年（大正十四年）十一月廣島に赴き、[illegible]の袋町なる春水先生以來の舊家を訪ひ、山陽の[illegible]、杏坪の孫[illegible]の遺たる春水、杏坪、山陽、聿庵、其の他關係書類等を展覽し頗る得る所あり、予が平生山陽に就て考へた事を確かなるに足る研究の資料の多きに驚いた。是を以て其の主なるものに就て之れを借鈔し、又主人の篤志もて自ら手鈔して恵送せられ、茲に於て愈々平生の考を實行するの[illegible]可からざるを覺えしめた。其處で久し振りに明治三十一年編纂したる、『頼山陽及び其時代』を取出し、之を通讀したが、驚いた事には、予が言はんと欲する大部分は殆んど思軒君が云ひ盡くして居る。我等同人の意見と云ふものは、斯くまで符合するかと自ら驚いた程だ。然し思軒君が存在しても、まさか予が今茲に頼山陽に就て語る事を無用の業とはしまい。[illegible]卿がクロンウエルに就て一書を著すや、其の書に序して曰く、『クロンウエルに就いてガアディナア、ファース等専門家の著作があり、殊に予の親友フレデリ

ツァ・リツン代の〓になら〓作がある。然し作者の佼人を心易く認めようとするのは、クロンウエルを〓ることかふ人の人格を行為にもれを解釈し、これを了解するには〓んと無意識である。と云ふた。山陽はクロンウエルの如く、〓〓界の〓〓ではない。されば必ずしも〓〓〓はあるまい。されど其の〓る人によつて其の評は同じきも、これに〓よと云ふに文明の〓なるものを〓いと結ばれる。我は我が今後〓る〓のものか、思想代〓〓代がは〓〓の〓代よ〓〓よるものがりつたとしても、我は〓〓〓をれ〓〓けんとするのではない。〓〓にも〓〓にも〓れない。我には〓〓〓の〓〓があつて、他に〓合し、〓いて我が〓〓が〓化せしたる〓を〓くはしたくない。

第二　現代における頼山陽

頼山陽は一世の〓〓〓に彼は其の生活を〓して〓〓の〓人者であつた。〓は〓人の〓者であつた〓、彼は〓〓に思ふ程〓者ではなかつた〓。彼は〓を〓し、よく〓いたのと、よりもく行われであり、其の〓〓の〓者には〓しく〓時の〓であり、〓に其の〓代に〓〓ち上下の〓〓に人を〓〓め〓あるいは〓に試みた。昔時の文学の〓門〓の〓なる〓しにならば。〓いも〓は知る〓目であつたかも知れない。〓れは〓た〓ふいとも少くとも中〓以後に〓て〓定したのは、〓〓の〓の〓〓もさることながら、〓る彼の自力、自ら自由の〓史と云はれはなるまい。彼は十〓前に〓て既に〓〓に少からざる〓化を及ぼした。彼は京都の山〓大〓〓に〓〓しつつ、其の名は〓内に〓〓。今日に於いては彼は必ずしも其の人から〓ずせられなかつた。或者は彼を〓〓の子と云ひ、或者は彼を道学者と云ひ、或者は彼を〓〓〓と云ふ。或者は彼を〓〓にして我が〓なる者と云ひた。然し何人も彼を〓〓するまでには行かなかつた。〓は将来の〓にして、〓〓の〓へは〓いて〓の〓〓となり、事物に上方を〓〓した。而かも当時の〓〓者は〓つ上方の〓せたる〓人〓者を〓〓するまでには至らなかつた。〓〓つて人〓に〓〓〓川は、〓人は山陽の〓は〓かる〓見て、〓〓〓〓〓〓。〓〓・〓字〓〓・と云ひ、文〓〓〓〓〓は、一に〓出ツモ同ニ人〓ノテ〓〓〓〓ァン〓〔〓に〓し〕と云つて居る。これは山陽生前の〓である。〓は京都に〓〓〓。〓して上方〓の〓〓〓〓の〓者ではなかつた。生前から〓に日本中の〓者であつた。今日の〓者であつた。〓〓日本外史は〓く〓る以前から多くの人はこれを続いて居た。而して〓なつ人はこれを〓して〓た。〓に〓の〓〓にして〓者である〓〓の如きも、〓今日本外史と云ふ〓〓を〓へ、それ〓〓して居る。其の〓文の如

きは倘更である。彼が『[illegible]』の詩の如き[illegible]の詩なる所であつたが、人が之れを[illegible]に示した所、道破は、讀渡賞し、之れを壁に貼付け、酒酣なる毎に朗吟して快と稱したといふ。彼の門戸は何れかと云へば決して廣くはなかつた。然し其の社會に及ぼした感化に至つては、江戸に在つては一萬石以下では抱へられないと威張つた山鹿素行よりも其の範圍は廣かつたかも知れぬ。又學者にして幕政に參與し従五位下筑後守に叙任せられた新井白石よりも大であつたかも知れぬ。殊に彼の死後に於ける感化は、改めて云ふ迄もない。彼の著作が維新大改革を目的としたか否かに就ては議論がある。何れ此の事は他の場合に於て語るであらうが、其の結果に至つては異議はない。吉田松陰の如きも、幽囚中に日本外史の註釋を作らんと心懸けた。伊藤公が日本政記によつて其の志を起したと云はざる迄も、旺ならしめたる事は、公が其の愛讀したる政記を友人である芳川顯正伯に與へたる跋文を見ても明らかである。斯る證據は寧ろ擧ぐるだけ野暮だ。彼の詩『雲耶山耶』『鞭聲肅々』などは今に至るまで中年以上の人で之れを吟じない者は少い。知らない者は殆ど無い。生前さへ彼の筆翰が流行したる如く、死後には倘更である。殊に維新前後は最も山陽風が流行した。大名では山内容堂やら秋月種樹やらは其の尤であつた。殊に[illegible]の如きに、[illegible]である。其の他の[illegible]きも、彼が何と云ふも、[illegible]い者は何くも漢學子にして殆ど無い。而して此れ丈けの今日に至る迄、凡そ儒者の書にして山陽の書翰の如く一般に珍重せられ、且つ一般に愛好せらるるものは無い。彼が何故に此の如く世中の寵兒となつた乎。而かも其の寵兒たるの壽命が、曇花の如く一朝に咲き、一朝に萎まず、彼の死後百年に垂れんとして倘ほ衰へないのである。是は何故であらう。彼が唯の學者でなく、實に日本の國民的學者であつたが爲めだ。學者としては、深き側に於ても、廣き側に於ても、彼に匹敵し若しくは彼れ以上の者が少くない。又彼と前後して彼以外、彼以上の漢學者もあつた。然し彼は眞淵本居流の國學者でもなく、又徂徠流の漢學者でもなく、又杉田大槻流の洋學者でもなく、さりとて狩谷棭齋、市野迷庵流の考證學者でもなく、猪飼敬所、太田錦城などの經學者でもなく、彼は實に日本の國民的學者であつた。彼の學問は常に日本と云ふ國家の上に立脚したる學問であつた。是が彼の本領であり、是が彼の日本國民に愛好せらるる所以である。語を換へて言へば、彼が日本國民より愛せられたる所以は、彼自らが日本國民を愛するからである。人は山陽を觀て其の學問が浅薄と乎、其の見識が先人の議論を剽竊したと乎、其の文

ツク・ハリソン代の宏大なる著作がある。然し什は予の役人を心切く湧出する事あらう。クロンウヱルならと云ふ人の人格や行爲に、之れを解釋し、之れを説明するには殆んど無盡藏である。と云ふた。山陽はクロンウヱルの如く、活動界の英雄ではない。されば必ずしも無盡藏ではあるまい。されど其の觀る人によつて其の結論は同じきも、之れに達する道に又自ら異なるものが無いとも限られぬ。或は予が今後語る所のものが、思軒作史山作若くは其他の諸作と雷同するものが有つたとしても、予は殊更に之れを避けんとする者ではない。雷同でも暗合でも敢かない、予には予一個の見解があつて、他に追隨し、強いて我が見解を變化せしむる必要を感じない。

第二　現代に於ける賴山陽

賴山陽は一世の浪兒だ。彼は其の生活を通じて學者の浪人者であつた。彼は浪人者の學者であつた。彼は世間で思ふ程貧乏ではなかつた。然し之れは彼が根氣よく稼いだのと、よりも多く倹約であり、且つ當時の學者には珍らしく理財の才があり、殊に其の細君に家持ち上手の賢夫人を得た爲めであらう。若し彼が普通の文人と同樣の放縱なる生活をしたならば。彼の生涯は困る羽目であつたかも知れない。されば彼が生活の、少くとも中年以後に於て稍安定したのは、運命の神の恵みもさることながら、寧ろ彼の自力、自助、自制の結果と云はねばなるまい。彼は生前に於て既に社會に少からざる感化を及ぼした。彼は京都の山紫水明處に高臥しつゝ、其の名は兩都は勿論、全國に響いた。彼は必ずしも凡べての人から愛好せられなかつた。或者は彼を不孝の子と云ひ、或者は彼を道學者と云ひ、或者は彼を輕薄才子と云ひ、或者は彼を高慢にして我儘なる者と云ふた。然し何人も彼を無視する譯には行かなかつた。江戸は將軍の在所にして、幕府の勢ひは延いて江戸の勢ひとなり、事毎に上方を壓倒したが、而かも江戸の諸學者は此の上方の痩せたる浪人學者を無視する譯には參らなかつた。山陽の友人田能村竹田は、世人が山陽の書に傾倒せるを見て、「擧世傾倒賴家脚。陀門・僕字諫見」と云ひ、又親友篠崎小竹は、「一二書出ヅル毎ニ人爭ノテ傳寫シ脛ナクシテ千里ニ走ル」と云つて居る。之れは山陽生前の事である。彼は京都に居たが、決して上方限りの所謂局部的の學者ではなかつた。生前からして既に日本的の學者であつた。全國的の學者であつた。彼の日本外史は出版せらるゝ以前から多くの人は之れを繙いて居た。而して特殊の人はこれを寫して居た。現に江戸の小説家にして學者である曲亭馬琴の如きも、窃に日本外史と云ふ稿本を借へ、之を騰寫して居る。其の詩文の如

きは當然であらう。彼が『日本外史』の稿の成るや、[illegible]
[illegible]てきつたが、人が之れを白河前の宰相松平定信に呈したれば、定信は一讀激賞し、之れを壁に貼付け、酒酣なる時に輙ち朗吟して快と稱したといふ。彼の門戸は何れかと云へば決して廣くはなかつた。然し其の社會に及ぼした感化に至つては、江戸に在つては一萬石以下では抱へられないと威張つた山鹿素行よりも其の範圍は廣かつたかも知れぬ。又學者にして幕政に參與し從五位下筑後守に叙任せられた新井白石よりも大であつたかも知れぬ。殊に彼の死後に於ける感化は、改めて云ふ迄もない。彼の著作が維新大改革を目的としたか否かに就ては議論がある。何れ此の事は他の場合に於て語るであらうが、其の結果に至つては異議はない。吉田松陰の如きも、幽囚中に日本外史の註釋を作らんと心懸けた。伊藤公が日本政記によつて其の志を起したと云はざる迄も、旺ならしめたる事は、公が其の愛讀したる政記を友人である芳川顯正伯に與へたる跋文を見ても明らかである。斯る證據は寧ろ擧ぐるだけ野暮だ。彼の詩『雲耶山耶』『鞭聲肅々』などは今に至るまで中年以上の人で之れを吟じない者は少い。知らない者は殆ど無い。生前さへ彼の筆翰が流行したる如く、死後には尚更である。殊に維新前後は最も山陽風が流行した。大名では山内容堂やら秋月種樹やらは其の尤であつた。殊に[illegible]きに。[illegible]上に[illegible]ある[illegible]きも。其は何と云ふも。[illegible]に。天下ない者は苟くも讀書子にして殆ど無い。而して尚今日に至る迄。凡そ儒者の著書にして山陽の著書の如く一般に愛讀せられ。且つ一般に愛好せらるるものは無い。彼が何故に此の如く世中の寵兒となつた乎。而かも其の寵兒たるの壽命が、蕣花の如く一朝に咲き一朝に萎まず。彼の死後百年に垂れんとして尚ほ衰へないのである。是は何故であらう。彼が唯の學者でなく、實に日本の國民的學者であつたが爲めだ。學者としては、深き側に於ても、廣き側に於ても、彼に匹敵し若しくは彼れ以上の者が少くない。又彼と前後して彼以外、彼以上の漢學者もあつた。然し彼は眞淵本居流の國學者でもなく、又徂徠流の漢學者でもなく、又杉田大槻流の洋學者でもなく、さりとて狩谷棭齋、市野迷庵流の考證學者でもなく、猪飼敬所、太田錦城などの經學者でもなく、彼は實に日本の國民的學者であつた。彼の學問は常に日本と云ふ國家の上に立脚したる學問であつた。是が彼の本領であり、是が彼の日本國民に愛好せらるる所以である。語を換へて言へば、彼が日本國民より愛せられたる所以は、彼自らが日本國民を愛するからである。人は山陽を觀て其の學問が淺薄と乎、其の見識が先人の議論を剽竊したと乎、其の文

當世和學が多いと云ふ。いろ／＼の雅號をつけて居る。併し一切を掃除してしまへば、山陽以前にただ山陽程徹底したる國民的學者は無かつた。何も國家が存在する以上は、國民的思想は國家と共に存在するものであれば、固より其の思想が山陽によつて見出されたと云ふ可きでなく、何んや山陽によつて創造せられたなどとは思ひも寄らぬ事だ。されど山陽以前に於ては、其の思想を學問の上に發揮し、學問を以て又其の思想を世に宣傳したる者は、絶えて無いとは云はぬが、僅かに有ると云ふ可きであらう。而も世の中には、斯る思想のある者に限つて文藝の才能が無く、文藝の才能ある者に限つて斯る思想が無い。然るに山陽には此の思想があるばかりでなく、此の思想を發揮するに、より豐富なる才能を有つて居た。所謂鬼に金棒とは此の事であらう。されば日本の國家が存する間は、縱令其の程度は時によつて相違あるも、永く國民的學者として彼の名は千載に傳はる可きであらう。

斯る成功を占め得たる山陽の一生を知る事は興ある事くない。區別すれば、文人に二通りある。一つは成る可く己を隠す者と、一つは成る可く己れを顯す者とある。山陽は何れかと云へば己れを顯す方の部類に屬する。彼の特質は甚だ明白だ。時としては人に之を淺薄と取り違へさせる。淺薄ではない。彼は隨分深く分別もした。然し陰險ではない。明白だ。彼は何れかと云へば、猫を被る事が不得手であつた。此の點に於ては、彼の友人梁川星巖と極めて好き對照である。星巖は晩年は兎も角も、中年までは如何にも猫を被つて居た。彼の詩を見ても、餘程の慧眼者でなければ、彼の眞相を看破する事は難い。如何に星巖が猫被りの大詩人であつたかは、彼の詩集の序に於て、當時の頭領株の一人林培齋が星巖を評して、「終日詩ヲ誦ズルノ外一語ノ他ニ及ブ無シ」と云ひ、「公圖ノ如キ、身ヲ擧ヘテ是レ詩」と云ふ居る。然るに其の友佐久間象山は之に序して、「作人寡欲、嘗ニ於テ噴マザル所ナシ。故モ抗徴ニシテ時事ヲ談ズ、其ノ才ノ最モ殊ニ詩ノ能クスルノミナラザル也」と云ふて居る。之れが即ち一つの詩人の詩集の序として誰か其の餘りに反對したる見方に驚かぬ者があらう。此の如く星巖には二重人格は無いが、二重人格でも三重人格でも、何ノも傳さんと欲せば能はざる氣き讀識があつたらしい。然し山陽には不幸にして、否、或は幸にしてこれが無かつた。彼は其の思想や感情を顏面の上に公言せずして已れ能はなかつた。例へば久家暢齋が山陽に與へた詩の絶句に「風流今日馬相如」としたが、山陽は恐らく不快であつたらしい。彼は司馬遷を氣取つて居たが、司馬相如などの如き詞章才子は、自ら屑としない處であつた。此に於て彼か見る

に就ての對話に、一寸病人体の身上に思を寄せた所で一寸云ふことを云つた。め直した。此にて山陽の性格が所にとりたてゝあらう。山陽の母が彼の死後その門人に、彼も生來の我儘者であつて、定めて皆さんに心配を掛けたらうと云ふ意味の手紙を送つて居るか、子を知るは親に如くはなしで、彼は所謂恕を旨として其の人を友とするなどと云ふ事は、一生出來ない性質であつた。彼の一代記は、其の行事が直ちに其の心機を證明してゐる。

而して更に彼の自傳とも云ふ可きものが二つある。其の一は彼の詩だ。彼の詩を年代を逐ふて讀めば、殆ど彼の自傳が出來る。而して彼の書翰が又た他の一つである。彼の詩と其の書翰とを年代を逐ふて配合すれば、愈々明白である。輙ち詩と書翰とを經緯すれば立派なる賴山陽自傳が出來上る。それに加ふるに、父春水の日記もあり、更により詳密なる母梅颸女史の日記がある。女史は彼の死後十一年、八十四歳にて逝き、逝く其の間際まで日記をつけて居る。此等を參照すれば殆ど山陽其の人の眞面目は、他人の描くを待たず自ら浮び上つて來る。然し山陽は時勢の兒である。山陽は家庭の兒である。山陽を知るには山陽を働かしめたる舞臺を知らねばならぬ。其の環境を知らねばならぬ。又其の家庭を知らねばならぬ。吾人は此に於て、先づ山陽の出で來る以前の時代に就て、極めて概略的に觀察す

第三　山陽以前の時勢

甲　田沼時代

山陽以前の時勢を一言すれば、前に田沼時代があり、後に寛政時代があつた。吾人は先づ田沼時代から吟味せねばならぬ。言ふ迄もなく八代將軍吉宗は徳川幕府に於ける中興の主であつた。彼によつて漸く弛みかゝつた幕府の紐は緊しく結ばれた。彼微かりせば幕府は恐らく二百六十餘年の壽命を保つ事は難しかつたであらう。吉宗は先づ倆を備へて微なる家康であつた。とても家康程の大いなる肚量も出來ず、又家康程の大經世家たる資格も持たなかつたが、然し少くとも彼は家康の血統を承けたる者たるを恥かしめなかつた。彼は吾自ら吾の宰相であつた。彼は勤勉であり、質素であり、武勇であり、活潑であり、精力家であり、且つ力行家であつた。而して學問を以て天下を治むる道も心得て居り。力を以て世を治め、德を以て人を懷柔くるの術も心得て居た。然るに彼の長子家重は親に肖ない柔弱の貴公子であつた。而かも其の次男の宗武は能く父に肖、又父の愛子であつたが、然し次男の悲しさは、彼は漸く取立られて田安家を興し、十萬石の扶持を貰ひ、三卿の一つとして立つたに過ぎた

かつた家重の子が即ち家治であつた。彼は父よりも遙か傑出してあつたが、向かも彼はこれを用ひる機會を得ずして逝いた。所謂田沼時代は家重の末期に少しく其の端を發し、家治の時代に其の全盛を極めた。さて田沼時代と稱して其の名を代表せらるる田沼意次は何者であるか乎。彼の父は吉宗が紀州家より宗家に入りて將軍となる際に連れ來りたる一人で、禄高も僅かに六百石に過ぎない小身であつた。然るに意次は一代にして五萬七千石まで取上げ、而も中の上頭と云はんよりも、事實に於ては殆ど獨裁宰相で、己れ一人の思ふ儘に政權を切り廻はした。如何に彼が好都兒であればとて、此れ程までにやりたくるには、單に僥倖とのみは云はれまい。彼には必ず他人の容易に追隨し難き敏腕があつたものと認めねばならぬ。

此の點に於て何人も驚歎するは、五代將軍綱吉の時代に於ける柳澤吉保の事であらう。彼も田沼同樣の若しくはそれ以下の小身から、遂に國持大名の甲斐の國主を賜り、一代の世に稀有の立身をした。然しこれが爲めに柳澤は田沼よりも偉らいと云ふ譯ではあるまい。柳澤は何れかと云へば自分の立身をする爲めに、將軍綱吉及び其の母桂昌院の爲めに凡有ゆる奉公をした。然しそれが天下國家に何事を爲したかと云へば、これと云ふものは無い。強ひて云へば綱吉母子の迷信を入れて、歷代の山陵の修繕か、又桂昌院の名によつて神社佛閣の修繕若しくは再建を爲した事であらう。其の他には所謂犬公方の名を將軍に與へた位の、中野に於ける犬小屋を造つたなどの事——縱令其の事は隆光僧正が進言に始まつたにせよ——と云はねばなるまい。何れにしても我が家門を大ならしむる道と、我が一身を榮耀ならしむる術に於ては、田沼は柳澤程の手練は無かつたとするも、政權を己れが隨意に切り廻した腕前は、寧ろ田沼の方に軍配を擧げねばなるまい。更に何田沼は、濁流中の政治家であつたが、然し思ひ切つて濁水を呑むだけの膽はあつた。田沼時代と云つても田沼一人が作つた時代ではない。謂はゞ田沼其自身も時代が作つた一つの傀儡である。然し彼はよく時代を代表するのみでなく、其の時代を促進せしめた。田沼時代の特色の主なる一は賄賂であつた。一切の事が賄賂で動いた。謂はゞ賄賂が政治を動かす實力であつた。固より賄賂其の物が不正であるは論を俟たない。然し幕府の如く何事も門閥格式を尊び、何事も先例故格により、如何なる人物も其の門地でなく、其の格式でなければ進む事が出來ぬ世の中では、其の活路は賄賂だ。されば賄賂自身は感心しないけれども、賄賂によつて死せる機關に活ける力を加へて來つた事は無視する譯には行かない。家康二百六十餘年間の歷史に、賢明と云はれる中にも、賄賂によつ

[illegible]人は、決して少くないであらう。例へば當時の有名なる江戸町奉行であつた矢部駿河守の如きも、藤田東湖の問に答へて、淡白に自分の現在の位置は賄賂に因つて得たものだと語つたと、東湖は其の随筆に記し、且つ却つて之を以て矢部の磊落である證據とし、敬服の意を洩して居る。斯る例は他に少くなかつたであらう。されば田沼時代に賄賂が流行したとて別に驚く可くもないが、唯驚く可きは、其の賄賂が最も露骨に、最も極端に、最も大袈裟に行はれたからである。田沼は公公然と賄賂を奨勵した。彼は曰く、金錢は人の最も尙ぶ所、其の最も尙ぶものを他に捧ぐるは之れ其の最も好意を表する所以であり、而して好意を表するものを受けない譯はないと。此の如く一方には賄賂を捧ぐる者を奨勵し、他方には賄賂を受け取る者を正認し、遂に賄賂其の者を一つのインスチチユーションとならしむるに至つた。賄賂は必ずしも群小の徒のみによつて取扱はれたるものでなく、所謂正人君子も亦斯くせねばならぬ次第となつた。即ち田沼に代つて他日樂翁時代を現出せしめた松平定信の如きも、或る時には短刀を懐にし、田沼意次を徳川幕府の爲めに刺殺さんと企てんとした程であつたが、又或る時には貧乏なる彼の身代に借金迄して、田沼に賄賂をしたと云ふ事を、自ら記して居る程であつた。

[illegible]ふ事は[illegible]ふる迄もない。[illegible]、既に[illegible]達せんとして居た。吉宗は[illegible]其の弊を改め、武藝を奨勵し、質素儉約を奨勵し、學問を奨勵し、[illegible]の風を[illegible]した。然るに田沼時代になつて其の綱が元に戻るのみでなく、更に輪を掛けて行つた。凡そ江戸に於ける凡有ゆる花柳文學若しくは花柳風俗の一般社會に普及したるは、只此の時を然りとすると云ふも過言でなかつた。之れと同時に財政が梏渇して殆ど行詰りとなり、其の行詰つた財政を疏通する爲め種々の方便が出來、茲に於て賄賂公行の半面には、又山師流行の時代が出現した。山師とは讀んで字の如く、當初は鑛山掘りを云ふのであるが、必ずしも鑛山のみに限らず、一攫千金の投機仕事や、人の氣付かぬ方面に奇利を博せんとする仕事を爲す者は、概して之れを山師と云ふに至つた。而して當時に於ける大山師は田沼彼自身と云はねばならぬ。之れと同時に密貿易がなか／＼盛んに行はれて來た。田沼も亦貿易に就ては深く見る所があつて、若し彼をして其の志の如くならしめたならば、彼は外人が來て日本を開くを待たず、先づ自ら進んで國を開く事をも敢てしたであらう。彼は外國貿易の率先者であつて、現に彼の時代に外國から金銀地金などを買入れて、我が貨幣制度の缺陷を補はんとし

たが實は盛つて居る。彼の時代を極めて手短かに約らんとすれば、當時に行はれたる左の狂歌が明瞭に之を語つて居る。

世に許ふは商賣者におごり者
　こゝび藝者に山師運上
世の中は何事申しも有難い
　御前御機嫌さこそ恐れ入る
世に許はぬは武藝學問御番衆の
　たゞ不公に律氣なる人

概して此の通りだ。田沼は平賀源内と云ふ蘭學者とか、凡有ゆる人を用ひた。源内は本草學者であり、又長崎に往來して、極めて器用ではあるが、和蘭人から種々の知識を得、石綿布を造るとか、或は寒暖計を應用して種々道具を拵へるとか、なかく工夫の騒つた男であつた。國の學者は林家の學風であつて、學者が本職であるが、而かも彼れは利を興す事に就て種々の計劃を持つた男であつた。其の他田沼の手下には河合とか永井とか種々あり、の居た。田沼の本國には田沼の關係ある者手せられた。蓋し之れ亦田沼の失敗の原因ではなかつたにしろ、少くとも其の原因の一ともなつたのであれば。更に角田沼の晩年には天災があり、洪水あり、噴火あり、米價は騰貴し、米騒ぎ起り、所謂人心恐々たる時に田沼に背いて來た。高山彦九郎などは

「若し山門の上に反古紙を焼い一緒旗を振へ、一度大喝に呼せば、難下人の同勢は出で來り、獄(田沼)を味方するに於て何かあらん」と云ふた程であつた。此の如くにして遂に所因を帯す田沼意次も敢なく沒落した。

何事にも兩面がある。田沼の暗黒時代にも亦一點の光明がある。所謂日本の開國進取の氣運は、田沼の時代に動き始めた。國より外國の文物を取り入るゝと云ふ事は、吉宗時代に於て既に其の端を發いて居た。而かも田沼時代に至つて、彼自身が果して開國進取の大方針大經綸あつたとは云はれぬが、更に角彼が積極的の態度は、自ら從來の殼を破つて、新たなる刺戟を凡有ゆる方面に與へた。彼の時代には、幕吏が和蘭人に船大工をハタヴィアより連れ來らん事を依頼し、其の事が不可能で更に船舶建造を同所の船大工に依頼したと云ふ。又國内を開放して外人を入れ、外人をして隨意に科學や技術を邦人に授けしめんと企てたと云ふ。右は當時の和蘭甲比丹チチンシの記す所で、何處迄信ず可きかは知らぬが、兎も角も和蘭學の流行、蘭學者杉田玄白なども、田沼時代は和蘭學の研究に、田沼彼自身の和蘭物を好んだか爲め、自ら好都合であつたと云ふ樣な意味の事を書いて居るから、何れにしても此の方面には確稈の新刺戟を與へたらしい。又工藤平助などの意見によつて松前方面に露西亞人との貿易を

[illegible]かつたには、苦しく[illegible]人を幸福に[illegible]しめんとし、北海道も[illegible]開拓を企てたる如き、何れにしても常に利を興す事のみを心懸けたのである。されば此の積極活動、開國進取の曙光は田沼時代に其の兆候を表はしたと云ふのも過言であるまい。

乙　樂翁時代

さて是れから樂翁時代である。樂翁とは彼が致仕後自ら稱する處、即ち松平越中守定信其の人だ。彼は吉宗の孫で、而も吉宗の愛子田安宗武の子、出でて德川家康異父弟の家久松家――松平氏を稱す――を相續したのだ。彼は實に吉宗の孫たるを辱しめなかつた。若し世の中が思ふ通りになり、吉宗の跡を宗武が相續し、宗武の跡を定信が相續したらば、德川家は三代英邁賢明なる將軍が連續し、其の基礎がいよ〱鞏固となつたかも知れぬ。然し世の中の事は思ふ樣に參らない。參らぬとても悉く參らぬでなく、其の中には幾分か思ふ事も行はれぬでもない事は、兎にも角にも吉宗の孫宗武の子が、三十歳にして老中首座に、天明七年六月十九日命ぜられた。彼が斯く任命せられた[illegible]の事自身が、既に天下に新政を號令すると同樣の效果を得た。彼が賢明なる政治家である事は、既に少壯より世に聞えて居た。[illegible]と云ふ所であつた。彼は白川侯の世子として、既に[illegible]の人物であつたのは、世の識者に認められて居た。其の白川侯と爲るに及んで、彼の施設は天下注視の標目と成つて居た。山陽の父春水の遺稿に、天明四年甲辰夏六月の年月附けにて、白川城主源君を奉送するの序文がある。其の一節に曰く、

綱常ヲ扶植シ、政教ヲ鼓動ス、四方必ズ來テ法ヲ取ル。是レ所謂世ノ爲ニ太平ヲ開ク、將ニ斯人ニ在ラントスルナリ。今ノ白川城主源君ハ蓋シ其人ナル歟。惟完嘗ニ延招ヲ蒙リ、坐ヲ賜ヒ學ヲ論ジ、且ツ君ノ教ク吾學ヲ伺ビ、異學ノ源委ヲ辯斷スルヲ聞クヲ獲タリ。惟完竊ニ謂ラク、今時諸ノ君ニ屬スル以アル也ト。

之れは定信が老中首座になる足掛け四年前に作りたるものにて、其の時に於て既に彼が天下の望を負ふてゐた事は此れにて知る可きだ。彼は初めから總理大臣たる可き大なる望を以つて學問をして居た。それで彼が此の任に膺つた事は偶然でもなければ、突然でもない。準備の上に準備を加へて居た。彼が二十七の元日には此の如き詩を作つて居る。

少小欲レ爲ニ天下器　豈將ニ文字一被ニ人知
春秋囘レ首二十七　正是臥龍始起時

彼は諸葛孔明を以て自ら任じてゐた。然し彼は孔明よりも[illegible]

縁もあれば門閥もあつた。若し血統からすれば彼は将軍家斉よりも寧ろ吉宗には近かつた。彼は吉宗次男の子であるが、将軍は吉宗三男の孫である。将軍は一橋宗尹の子一橋治済の子であれば、吉宗三男の孫に当つて居る。其運命の戯れが八代将軍に近き定信を首相となし、遠き家斉を将軍とした。然し僅か三十の年齢に似合はず、定信は実に思慮周密にして、練達其の政治家であつた。彼は何も重大の問題には、当時に於て元老とも云ふ可き尾張水戸の両家及将軍の生父一橋治済などにそれぞれ渡りをつけ、且つ何事も同僚と協議し、而して必ず将軍の裁可を受けて之を行ふた。彼には殆ど手続りなどと云ふ事はなかつた。閣下から角の立つ様な事は殆ど彼の執政中には見出されなかつた。然し彼は其の政策を行ふに於ては独断専決、決して何等責任を回避する所無かつた。彼は同僚と協議したけれども、其の責任は必ず自ら之を取つた。云ふ迄もなく彼の政治は田沼政治の逆である。世の中は紛華から俄に実質に移つた。彼は利を興すよりも、寧ろ害を除いた。凡そ田沼の施設にして人心に慊らざるものは無遠慮なく之を改廃した。田沼は積極政治家であつたが、彼は其の反対に消極政治家であつた。彼は節倹力行一點張りにて上下を率ゐた。然し之は彼が外廷に行ふたのではない。既に自ら我が身に行ひ、且つ其の君上内に行ふた所を以て之を天下に掲げたのである。如何に之によつて風俗が改善したかは、当時の落首が能く之を語つて居る。

　　ひどい人江戸中羽織ぶつさばき

と云ふ句がある。之れは従来縮緬や八丈の長羽織に短き脇の物を佩したるが、彼が旗本に向つて文武を奨励した為め、旗本御家人等迄も白川藩の士風に倣ひ、何れも木綿の馬乗りぶつさき羽織に、小倉縞の馬乗り袴を造る事になつたを云ふのである。当時の情態は森山孝盛の『蜑の焼藻』に

　　世の中俄に改りて昨日まで惰弱遊楽にのみなれたる、武家町人の風もなく見えし若手少年、無益無駄の衣に様をかへ、心にも起らぬ學問武藝に往來する有様、眼をかへたることにて、にがく敷事なり

と云ふて居るが、如何にも其の通りであつたであらう。されば蜀山人が、

　　世の中にかほどうるさきものはなし
　　　　文武文武と夜もねられず

と云ふたのも、又当時の世態の一面を写し出したものであらう。

田沼は天災地変によつて没落したが、幸に松平定信執政以来年熟して米の相場下り、之れが為めに彼の新政は一層色上をした。彼は啻に物質上に於て凡有ゆる施設をしたのみでなく、精

[illegible]上に於ける其の存分に行はれた。それは申す迄もなく、[illegible]の時であるが、今日の言葉で云へば思想統一であらう。彼自身相當の學者であり、且つ家康以來の歷代の御用學問たる朱子學の信者だ。山陽の父春水が彼の昇進を送りたる序の文句を見ても、當時既に彼の胸中には正學と異學との差別のあつた事が推測せらるゝ。今や彼は心に思ふた事を施すを得る地位と機會を得たから、直ちに之を行ふたのだ。予は此の機會に於て倘ほ彼と賴春水との關係を一言したい。

安藝の國の儒官賴彌太郎白河侯に召れて、此時も右仲同道にて謁見し、後々學問の御咄有て、近侍の人士瓶三ッと茶碗三ッを持て、右仲、彌太郎、侯の前へ壹ツヾヽ出し置ければ、儒茶をまいられよ、應本の菓子とて盆に應品の菓子を積み出だされ、是を茶碗子に參られよ、我もとてとつて喰せ給ふ、中々貴人の交りとは露計りもあらずと彌太郎語りぬとなり……（天明大政錄）

其の中に右仲とあるは田安の世臣黑澤右仲の事である。右仲は又柴栗山の親友である。彼は首相とならざる以前から、朱子學の面々とは交渉を有つてゐた。斯る次第で彼は先づ柴野彥輔即ち柴栗山を京都より呼び出し、次ぎに旗本より岡田清助を呼び出し、而して又大阪より尾藤良佐を呼び出し、而して彼が辭職したる後に佐賀より古賀彌助は呼び出された。世間では柴野尾藤古賀を寛政三博士若しくは三助と云ふてゐる。彼は又林家

の最も主なる事業として、[illegible]て其の[illegible]しめた[illegible]であつた。彼の同僚は概ね彼が未だ白川世子であつた際から、若しくば白川城主である際からの切磋琢磨の友人であつた。彼の下僚は概ね思想意見を同じくする仲間であつた。而して抽んでて學政を司さどらしめた者は思想上の系統を一つにする者であつた。されば寛政の政治は殆ど一の政黨政治と云ふも不可なかつた。否な如何なる政黨政治でも、斯程に協同勞作が完全に行はれたる例は少からう。然し定信は決して威福を弄し、己の私利私慾の爲めに天下の要路を壟斷すると云ふのでなかつたから、如何に彼が其の黨與を率ゐて其の政局を支配しても、何人も之が爲めに彼の心事を疑ふ者は無かつた。されど世の中には又彼の政治が餘りに行き屆き過ぎて、田沼時代の放縱政治を慕ふ者が無いでもなかつた。即ち

白川の清きに魚も棲みかねて
元の濁りの田沼戀しき

などと云ふ歌さへ出で來つた程であつた。そは兎も角も若し田沼政治其の儘であつたならば、大鹽平八郎の天保八年に起した大阪の騷動は、或は天明年間に江戸に起つたかも知れぬ。所謂直接行動に愬へた者が出て來つたであらう。若しくは愬へん。

る者を採用したであらう。然し定信出で來つて、天下靡然とたつた。更に岡田部によつて擁められたと云はんより殆ど半ば偏奪去られた觀は、定信に至つて再び緊縮せられた。之れが樊籬時代の趨勢であるが、尚ほ其の學問に關する方面は、更に項を改めて語らねばならぬ。

第四　山陽以前の學界

山陽以前の學界の現狀を說くには、德川幕府以來に溯る必要がある。けれども極めて概略を語る事とする。要するに德川幕府の始祖家康は、近世日本に於ける文藝の大恩人である。日本に現存せる古典作品を蒐集して、之を翻刻したるも彼である。論語とか七書とか、或は貞觀政要、或は東鑑、或は大藏一覽、或は群書治要等内外の書籍を出版したのも彼である。又林道春を採用し、官學の基礎を定めたのも彼である。德川氏を始終して林家は學問の大本山であつた。林家の始祖林道春は所謂博學強記の學者で、學問上に於ける家康の顧問として幾代の御用を勤めた。其の子春齋其の孫の鳳岡、此三代によつて林家は益々本山の基礎を完全に出來た。鳳岡の時に彼は初て官命によつて髮を蓄へ、大學頭信篤と稱した。鳳岡其の人こそは六代將軍家宣の時に、白石なる好敵として事毎に相爭ふたる對照であつた。

それから榴岡、鳳谷、鳳潭に至つて其の正系は絶え、錦峯は旗本の富田淡路守から養子に來た。而して錦峯の相續者が前に述べたる大給松平から出て來つた林衡、即ち大内記述齋先生だ。此の如く林家は鳳岡以來述齋に至るまで碌なる者はなかつたが、とはいへ何をいふても官學の頭領であり、學問の本山であつたから、苟くも學問で立身出世せんとする者は其の門人と云ふ事になつた。固より羅山以來程朱學を以て一貫して居たが、それは極めて保守的のもので、謂はゞ毒にもならず藥にもならずと云ふ程であつた。學問の歷史を語れば、德川の初期には山鹿素行の如き朱子の說に反對したる者が出來、聖教要錄を著したが、これが爲めに彼は忽ち罰を蒙り、其の書物も絶版された。又陽明學派としては中江藤樹が出て、其の門人の熊澤などは天下の士として其の名は一世に聞いたが、林家の始祖道春の如きは、陰に陽に之を排斥し、甚だしきは藤樹は耶蘇の徒であるなどと云ふことを中傷したる程であつた。それと文教の興るに從ひ十人十色で、種々の意見が自然と發表せらるゝ事となつた。同じ朱子學でも、京都に出で來つた山崎闇齋は、所謂土佐に始まつた南學の統を傳へ、林家とは全く其の趣を異にした。謂はゞ小學、近思錄、大學、中庸、論語、孟子一點張りであつた。而かも闇齋は遂に日本の神道に流れて、一種の垂加流の神道を打出した。又一方

にに禪宗に寄なる[illegible]
さるの根本原理によつて一大に古學の門戸を張つた。之と同時に其
川學である、山崎學にせよ、堀川學にせよ　殊に山崎學は、會
津に入り、水戸に入り、而も其の感化は國粹思想、勤王思想を喚
起し、刺戟するに與つて力多きに居るが、これと學問と云ふ見地
からすれば、孰れも部分的であつて全國的と云ふ譯ではなかつた。

所謂學問で天下を風靡したのは徂徠である。徂徠の出現は確かに日本の近世文教の上に於ける劃時代的のものである。吾人は今茲に徂徠學の要旨を語る者ではない。然し一言すれば、聖人の道は六經に在り、故に六經を讀まされば能く解るものではない。六經は文字章句によつて出來てゐる。故に文字章句の學を修めなければ六經が解る筈がないと。其處で彼は修辭の學を以て聖人の道に達する階梯とした。山崎流などにてはそれを記誦詞章の學として輕蔑し、學問は居敬窮理に在りとしたけれど、徂徠流では居敬窮理などは畢竟禪坊主の受賣りであつて聖人の道ではない、聖人の道は天下國家を治むるの道、と云ふ見識からして一世を指導した。これで是れまで聖人の道は、吾が意を誠にし行を正しくするに在りとしたものが、天下國家を治むる學問であるとなつて、是れまで狹き部屋の中に詰め込まれた人間が、廣大無邊の天地に飛び出た如く、實に人の氣分を一新しなかつた。

吾人はこの點に徂徠の學をして天下を[illegible]へねばならぬ。彼の聖人の道に[illegible]もの一であつて、彼の着眼は個々の人間になく、天下國家と云ふ集團である。個々の人間は兎もあれ何もあれ、天下國家を平治して凡べての者に幸福を與ふるが聖人の道を行ふ所以であるとして居る。されば學問が殆ど治者階級に局限せられた當時に於て、それが歡迎せらるゝのは當然過ると云はねばならぬ。加之、此れ迄での學者は、文學者は經學に疎く、經學者は文學に疎く、何れも片輪であつたが、徂徠に至つては一方では修辭學の大家となり、詩でも文でも支那の作者をして[illegible]れしむるの腕前を有つて居り、其の根據を六經に置き、新たなる見解を以て之を說き出したから、天下無敵と云ふも亦怪しむに足らぬ。人は徂徠の詩文は何れも李王の風を學び、古に模擬したる文學であると云ふが、然し徂徠程立派な漢文を綴り得た者は、彼の前は固より彼の後にも皆無と云はさる迄も、恐らくは尠かつたのであらう。且つ學者と云へば従前實際に迂濶の者であるが、徂徠は何處を捜しても迂濶の迹の字さへ見出されない。彼は決して空想家でなく、又机の上の政治家でもない。彼の當世の務に對する意見は、自ら徳川幕府に奉仕し將軍の懐刀とな

りし室鳩巣などに比すれば却つて實際に適切だが世の中では學問ある者は實務に疎く、實務に通ずる者は學問に疎くあるが、徂徠は二つながら兼備へて居た。のみならず新井白石などは天下の要路に立ちつゝも、外更に門戸を狹くして野中の杉の、本立と云ふ姿であつたが、徂徠は恰も、森の喬樹が自ら森を成す如く、彼は其の門戸を開放し、苟くも其の後進にして才藝に長ずる者は極力之を推挽し、之を世の中に紹介し、從つて其の門戸は自然に長大せられて來た。のみならず彼は紹介已と異りたる立場に在る者にも、能く之を容れる事を努めた。彼の門人太宰、服部、山縣、平野、今井など云ふ人々は云ふ迄もなく、例へば木下順庵の門人雨森芳洲の如き、同藩の朱子學者藪孤山の如き。必ずしも彼の經學の意見に賛成せざる者迄も概ね之を容れた。水戸の安積澹泊などとも交つた。要するに徂徠學の天下を風靡したのは、徂徠彼自身が經學に長じ、文章に長じ、氣魄があり、才略があり、且つ殊に親分肌の性質がある許りでなく、更に彼の學問が時に相應じ、而して彼の立場が極めて其の學問を宣傳するに都合好かつた爲めと云はねばなるまい。彼は初めに貧學者として柳澤吉保に仕へたが、更に彼は吉保の爲めに用ひられて五代將軍綱吉が吉保邸に臨駕の際にも、屢々講釋問答の相手をしたのみでなく、文將軍の侍講御用係りとなつて、人の知らない方面に働いた。六代家宣七代家繼の時には新井白石の天下であつたから、徂徠も民間の學者として門戸を張つたに過ぎなかつたが、八代吉宗の時に至つて、更に將軍の爲めに用ひられて、それ〲御用を勤めた。彼は八代將軍の治世享保十三年六十三で逝いたが、最早彼の日本文教に於ける位置は動かす可からざるものとなつた。

徂徠の當時に彼と頡頏相當る者は、京都に於ける伊藤仁齋の子東涯であつたが、東涯は寧ろ其の父仁齋の遺業を紹述するに止り、必ずしも徂徠と覇を爭はんとするが如き意氣は無かつた。

徂徠學は宋學派から見れば全く異端邪說であるが、然し學問を好み自ら易や論語の講釋をして、大名旗本近侍などに聽講を強制したる五代の綱吉にも用ひられ、又一方には朱子學者の室鳩巣を用ひ、他方には徂徠なども用ひて學派の異同などを眼中に置かぬ吉宗の爲めに用ひられた。されば幕府の御用學問には縁遠き彼も、彼自身が幕府の御用を勤めてゐたから、徂徠學は殆ど事實の上には將軍家御用の學問となつて、公々然として天下に橫行濶步した。然し古人も其の父仇を報すれば其の子は劫を行ふと云ふた通り。徂徠學も徂徠の死後、其の末流に至つては段々弊が多くなつた。徂徠程の學問も無く、徂徠程の見識も無く、徂徠程の膽略も無く、只徂徠の口眞似をなし、故書高

合、[illegible]つたのに、依つて一躍して世に出ることになつたのに、諸氏[illegible]と云はねばならぬ。徂徠の後に徂徠學派が如何に流行したるかは、例へば林家の學頭となつた秋山玉山の如きも、恐らくは其の實徂徠の學說を信じて居たのであらう。又偶ま徂徠の擬古文を攻擊する人々も、實は其の文章は徂徠によつて、若しくは徂徠の踏める跡に就て學んだ者が少く無かつたのであらう。然し勢極まれば必ず變ずで、徂徠學は寶曆時分が最も盛んであり、明和安永天明の頃には可也反動の勢が出來、それより寛政享和文化の頃には更らに一大反動を來した。乃ち松平定信が執政と成つた天明七年頃には、徂徠の學派に反對する者は甚だ多かつたが、然も否徂徠派が悉く皆な朱子學派と云ふ譯ではなかつた。謂はゞ折衷學と稱する、徂徠派でもなく朱子學でもなく、銘々の意見によつてそれぞれ其の說を立つる者が多く出で來つた。之れは恐らくは明末から清初にかけて支那に考證學の盛に行はれた餘風を受けた爲めでもあらう。兎に角日本の學問界は只官學のみが程朱一點張りで、其の他は個々銘々の議論蜂起の姿であつた。惟ふに此折衷學に屬する人々は、徂徠に隨喜せざる迄も、彼等は徂徠學の爲めに多大の刺戟と指導と暗示とを得た事は誣ゆ可からざるものがあらう。畢竟斯る學派が出で來つたのも、徂徠學の餘波と云つて差支へあるまい。徂徠學に對して[illegible]て、徂徠と共に八代將軍に用ひられ、[illegible]て將軍に對して陪臣であつたが、彼は其の友人[illegible]の說明によりて、六代家宣時代から直參である室鳩巢であつた。然し結果は空しく其の同志の徒と共に憤慨の情を洩したに過ぎなかつた。それは彼の晩年の著『駿臺雜話』を見れば極めて明白だ。

此の如く徂徠の學に反抗した者は徂徠の當時から既に始まつて居たが、時を經るに從つて、而かも徂徠學の弊害が世に明かになると共に彌々旺になつて來た。即ち徂徠の『論語徵』に對して極力之を攻擊したのは五井蘭洲の『非物篇』や、中井竹山の『非徵論』の如きである。前者は明和三年に脫稿し、天明四年に中井竹山が之を出板し、後者は明和四年に脫稿し、天明四年に出板せられたものである。彼等が此の如く力瘤を出して徂徠學を攻擊する事を見れば、如何に徂徠學が其の根柢の深かつたかが知らるゝであらう。即ち中國に於ては山縣周南の一派が長防二州に學問の權力を振ひ、九州に於ては龜井父子が徂徠學を主として虎視鷹揚として居た。徂徠學は至る處に其の信者があつて、肥後に於ける、高山彥九郎の親友であつた富田大鳳の如きも徂徠學者だ。又た斯く公然徂徠學を標榜せない迄も、隱然徂徠學に感染し、或は無意識の中に其の感化を被りたる者に

至つては、恐らくは校學に適か無いであらう。斯る場合に於て純粹なる程朱の學說、所謂正心誠意格知格物を主とする者が採用し來るのも、亦自ら時勢の然らしむる所と云はねばならぬ。

茲に掲げたる頼春水が白川源公に送るの序文にも、異學の源委を辨明するなどと云ふことが書いてある。茲に異學と書いてあるのは、專ら徂徠學を指したのである事は、疑を容れない。

されば白川侯の如きは、一度其の政を執るに際しては、必ず此の紛々たる學界を統一せんと彼が考へたであらう。現に山陽の父春水が廣島藩に抱へられ、學校を創立するに際しては、彼は學統論を著して居る。其の要旨は左の通りである。

我ガ安藝ノ國學、本ト程朱ノ學ヲ崇ス。天明乙巳（天明四年）仲冬、有司命ヲ學ニ傳ヘ、益々程朱ノ學ヲ奉シ、異學ヲ雜ヘ用ルヲ得ザラシム。

即ち春水は定信が天下に令するに先んじて之れを建白して、藝州一藩に施さしめたのである。されば當時異學の禁の命を發したのは、當人の創意でもなく、將世耳を衒はめでもなく、既に松平定信が天明七年六月に起用せらるる際に決定す可き事であつたと云はねばなるまい。而して彼が學制を改革するに際して、先づ其の人を採用したのは、柴野栗山である。即ち世人の所謂柴栗山先生である。柴野栗山は、學問から云ふても、人物からしても、恐らくは徂徠と相撲の取れる男ではあるまい。然し彼は寛政から文化に跨けて謂はゞ學者時代に於て一個の大立物であつた。彼は何物を以て學界に貢獻した乎、殆ど具體的に之と云ふ程のものではない。然し彼は尋常一樣の儒者ではなかつた。彼の血管中には政治家的血液が流つてゐた。彼は後藤芝山の弟子であり、又江戸に出て林家の門下となつた。斯くて阿波の蜂須賀家に聘せられて其の祿を食みつゝ、彼は依然京都にあつて其の學を講じてゐた。彼は表向き程朱學者である。併し其の心裏は何れ程までの信者であつたか——例へて云へば赤水や西山拙齋などに比すれば、恐らくは純粹の程朱學者とは云はれなかつたであらう——由來程朱學者は概ね文章には無頓着であるが、彼は寧ろ文士の上と云ふ可き程であつた。時には古文辭に出つたが、文章は可也上に入つてゐる。固より大家と云ふではないが、唐宋八家の規矩を踏んでゐた。それと今一つの彼の特長と云ふ可きは、日本の典故に通じて居た事である。之れは彼が京都に於て有職家高橋宗直に就て學んだ爲めであらう。學者として著作を後世に貽すことは兎も角も、學政を司る器には洵に適當の手腕があつた。彼は前に云ふ通り程朱の純信者とは云へなかつた。彼の理想の人物は范仲淹であつた。果して然らば彼の趣味の存する處は知る可きのみだ。然し彼が學界の

[illegible]しく[illegible][illegible]ではない。[illegible]に自ら其の中心人物たる[illegible]を具へて居た。謂はゞ學問よりも人物である。彼の人物が彼をして自ら同志の中心人物たらしめた。彼は徂徠學の親分肌には無かつたにしろ、少くとも才を愛し衆を容るゝの態度はあつた。彼が京都に在るや、其の最も親しくしたる者は皆川淇園、赤松滄州であつた。赤松滄州は徂徠學者だ。淇園は又開物學などと稱して自ら一家の言を爲し、程朱派から云へば異端と云ふ可きであつた。謂はゞ栗山の京都に於ける親友は異學者であつた。然るに彼は天明七年の暮幕府から呼び出された。彼が天明八年戊申正月東海道を下つて江戸に赴いた時には、諸葛孔明の二十七歳ではなくして、それに略ぼ倍する五十三歳であつた。然し彼が如何に意氣の昂揚したるかは、當時天龍川を渡る時に、

鳳暦天明第八年　維正月吉渉二龍川一　東風挾レ雨川雲黑　知是天龍飛上天

之を前に掲げたる定信の詩に對照すれば、如何に兩人の意氣込みがそつくり相合うて居たかゞ判るであらう。定信と栗山とは當時未だ面識は無かつた。然し定信の子供の時からの先生である黑澤石仲卿ち雉岡先生は栗山の親友であつた。されば黑澤に[illegible]つて[illegible]いたごとく、[illegible]した事は固より疑も容れない。又一橋家の門人大塚大[illegible]も栗山と親友であり、而も其の大塚が亦定信と最も關係深く、彼が實は門年死するや、其の碑銘は實に定信が書いて居る。然らば定信は黑澤を介しても、亦た栗山を知つてゐたであらう。其他水戸の立原翠軒も亦た栗山を推薦したと云ふ說がある。何れにしても兩人の相得たるは固より論を俟たぬ。

偖て栗山が如何に同志の間に重きをなしたるかは、保水が「師友志」を作り、其の交友の事を書いて居るに、中井兄弟さへも單に竹山とか履軒とか云ふて居るに、獨り栗山のみには栗山柴先生と記して居る。而して彼が栗山に就て書いた處は左の通りである。

容ヲ愛シ衆ヲ容レ、風流事ヲ好ム。而シテ談笑ノ間、事節義ニ渉レバ、音詞激烈風雨ノ如シ。余甞テ命ヲ奉ジテ經ヲ昌平學ニ講ズ。先生時ニ祭テ學ヲ視ル。「余適マ小學程子ノ人寒ヲ怕レテ餓死スルノ一節ヲ說ク。後其宅ヲ過ギル。先生曰ク聽昔ノ講說沈着痛快、人ヲシテ竦聽セシムト。

如何に栗山が保水を引立てたかゞ之れで判る。保水又記して曰く、

一日戯レニ客ニ語ツテ曰ク、我ヲシテ志ヲ得セシメバ清國取ル可キ也。閻國皆讀書ノ人、而シテ胡虜ニ北面ス。豈其レ本志ナランヤ。余海ニ航シテ以テ諸ノ聖賢哲ノ裔ニ說ス。何レカ力ヲ戮セザル者アラン。卒

ヲ以テ幽明ノ闢ル、枯ノ振ヒ朽ノ抜クガ如キノミ、豈大ニ快ナラザランヤ。二洲諾、吾ヨリ且ク、先生少シク安ンゼヨ、乃ロ寄ノ般リ蓋ノ器ニ過ギ無カランヤ。（寛政紀聞）ナリ。

彼が寒泉と共に我が事を務めしむる所の仕事を務むる事だ。又

創館時、其ノ昌平校ニドスヤ、先生ニ事ノ決ニ眼ハス。林祭酒日ク兆人ノ闢ス所小ニ非ズ、先生日ツ學ノ衰ヘタルヲ。先生曰ク然ヲ勤ガン我覺大ナリト雖モ、僻說ニ關スルニ至ノザル也。栗竹大ニ喜ブ。

以上によつて經ぼ栗山の面目が察せられる。彼と引續いて教授せられたのが岡田清助である。彼は寒泉と稱して幕府廊下の出身であるが、之れは純粹な程朱學者だ。彼は後に代官に轉じた。而して所謂異學の禁制が公然發布せられたのが、寛政二年五月廿日であつた。之れが爲めに、時物議騷然とした。之れも其筈である。江戸などでは全く閒の反對社會に於て何れも學者が門戶を張り、諸々學下の意見を主張して居た。當時江戸には山本北山、龜田鵬齋、冢田大峯、異學者中の領袖を以て自ら居り、又伊藤蘭嵎、豐島豐洲、市河寛齋、冢田大峯は何れも五鬼と稱せられ、御用學問に最も反對した連中であつた。又栗山の親友にして播州赤穂の重臣となつた赤松滄洲は、書を栗山に與へて之を諫じ、學政は斯の如く苛酷なるべからず、宜しく速に之を改むべしと論じた。然し栗山は之れに答へなかつた。栗山の親友備中鴨方の西山拙齋は栗山に代つてこれに駁した。惟ふに此異學の禁に就て最も熱心に贊成し、若しくは禁其物を促通したる者は、恐らくは第一が西山拙齋であつて、第二は春水であらう。異學禁止の布達に就て拙齋は何、栗山に向て祝賀状を上つて居る。

昨日備前學校祝文より寫り傳候ニ而、同十五日林祭酒へ被仰渡候御書付拜見候、學政振興之御旨に天下向風之儀也、誠當之事辨幸道恐悦之至ニ奉存候、而今學術正名義所思待日之儀可申、恰快不少奉存候。

斯くて其の翌年寛政三年九月二十一日には大阪の浪人備後尾藤良佐がまた召し出され、平常付きの儒者となつた。尾藤良佐は即ち二洲先生だ。彼の夫人は春水の妻の妹であり、春水からすれば義弟であり、山陽からすれば叔父である。山陽が其父春水の一節友忠の補言として引用したる者に、

當路ノ輩修業ナル寒泉先生ニ贈ッテ、先生ヲ曰ク、文付學校へ上覽ニ若クハ無ク、學問純粹ハ志ノ徒トリ是ニ於テ先生ヲ撰ス。

其侯とあるは云ふまでもなく定信であり、中臣とは中井竹山であり、上井とは尾藤である。即ち岡田清助の推薦にて、召し出されたのだ。二洲は文學者としても經學者としても恐らくは栗山以上であらう。彼の著書に、米學指掌になど何れも獨自の見識がある。其の文章は、優に一家を成して居る。又山

其の論述中に

性消ヲ暗ンデ多ク試マズ、政體ヲ論ズレバ國ヲ擧ゲテ偏然往ニ依ツテ、就テ本朝ノ事跡ヲ談ズ。又和漢名稱ノ當否ヲ論ズル甚ダ詳明ニシテ、甚ニ稱謂私言アリ。此儒名分ヲ混亂スルノ弊、今日ニ至テ大ニ革ルモノハ、先生ノ功多キニ居ル。

全く此の通りである。

松平定信の異學禁制は、謂はゞ今日の思想統一と同一で、殆ど言ふ可くして行ふ能はざるものに過ぎない。固より彼の時代には、統一と云はざる迄までも、徂徠の學派に對する反動と云はん乎、若しくば、徂徠學より一變したる折衷學派に對する反動と云はん乎、何れにしても朱子學は新なる勢を以て勃興して居た。即ち江戸に於ては先づ松平定信彼自身を初め、黑澤雉岡とか、大塚大助とか、若しくば岡田寒泉とか、服部栗齋とか何れも朱子學者であり、京都には栗山が居り、大阪には中井竹山、尾藤二洲などが居り、中國には備前に西山拙齋が居り、安藝には賴春水が居り、九州では肥後の藪孤山、高本紫溟、辛島鹽井の如き、薩摩の赤崎海門の如き、肥前の古賀精里の如き、豐前の倉成龍渚の如き、久留米の樺島石梁の如き、何れも其仲間であつた。されば異學禁制の令を發する發せぬに拘らず、事實は朱子學者が、日本全國と云はざる迄も、各處に勢力を占めて居た。されば禁令は唯其の事實を法文の上に正認したるに過ぎないとも說明し得らるゝ。然し之にて思想界を統一したりと爲すならば大に誤りである。幕府の御膝下の江戸でも、明らかに其の學說に對する者は存在した。存在と云はんよりも腕を振り肩を張つて横行して居た。

のみならず當時儒教以外に學界に二個の潮流が湧いて來た。其の一は國學であり、他の一は蘭學である。國學は元祿前後契沖阿闍梨や荷田春滿の徒が出で來り、それより加茂眞淵が田安宗武の下に於て江戸に門戸を張り、盛んに之を鼓吹し、之が爲めに和歌、國文、歷史、律令など凡有ゆる方面の研究が出で來つた。而して眞淵と時を同ふしてやゝ後れたる本居宣長出で來つて、之が爲めに國學は一大長足の發展をした。本居の不朽の著作と稱せられたる『古事記傳』は寛政十年に出で來り、文政五年には全部出板せられた。國學が如何に我が國民の思想に影響を與へられたる乎は云ふ迄もない。要するに自國を尊崇する事、皇室を中心とする事、遠くて神代近くて王朝の古を理想とする事、凡べて崇古代、崇國粹、而して尊王の精神は皆國學によつて發育せられ、長養せられ、扶植せられたものと云はねばならぬ。

又他方に於ては蘭學が出て來つた。蘭學の始祖は新井白石と云ふ者があるが、而かも實際白石は蘭學に手を着けたのではない。但彼は羅馬人シドッチ、若くば將軍に謁見の爲め長崎から江戸に來たれる和蘭甲必丹等に就て質問を爲し、其の海外に

する知識を獲得したるに過ぎない。然るに八代將軍吉宗の時代となり、將軍は海外知識の攝取に熱心であり、青木昆陽などと云ふ伊藤東涯の門人である學者をして蘭學を研究せしめ、爾來前野蘭化、杉田玄白、桂川月池等出で來り、而も田沼時代を經て蘭學は大に振ひ來つた。而して寛政の頃には蘭學者の泰斗大槻玄澤の芝蘭堂では新元會を設くる事とした。新元會とは、西洋の一月一日に會合するものであつて、其の第一回は實に寛政六年閏十一月十一日に催された。即ち當日は西洋の一七九四年一月一日だ。蘭學者は國學者とは異なる對蹠的位置を占め、其の學問の感化で其の氣分も自然世界的と成つて居た。前野蘭化が書したる文句に「紅毛碩學人間力　大業全依造化功」と云ふ文句がある。之れで見れば萬物の靈なとと云ひて自ら誇つて居る人間が、自然界に於ける一つの物體に過ぎないものと看做されたる趣がある。即ち萬物の靈が、萬物並に降格したとになつてゐる樣だ。又新元會の圖に題したる杉田玄白の子杉田勤の句には、「九千里外存知己　五大洲中如比隣」と云ふのがある。何れにしても彼等の頭は最早開國的と成つて居た。斯の如く等しく江戸に在つても、[illegible]に上古擬きの體裁をなし、自ら王朝時代の生活を夢みて居たが、新元會の連中は太陽曆を採用し、其の會合の席上では半ば西洋流のシツポク料理を用ひて居る有樣だ。今日に保存せられてゐる會合の圖を見ても分明だ。

元來徳川氏は、對內政策としては將軍本位であり、將軍本位を維持する爲に封建制度を支持して來た。對外政策に於ては徹底的に鎖國制度を斷行して來た。固より封建制度と云ふも、其の內には將軍の直轄地もあり、旗本の領地もあり、又鎖國と云ふても、支那とは貿易を爲し、和蘭とは交通をなし、又朝鮮とも通信をして居た。然し大體に於て封建であり、鎖國であつた。而も此の鎖國と封建とは將軍本位、徳川幕府獨裁政治を維持するに於て必須要件であつた。然るに復古的の學問たる國學や、進歩的の學問たる蘭學の流行を何故に看過したか。否な幕府は寧ろ或る程度迄は、蘭學を奬勵した。それは實用の爲めである。又或る程度迄は國學をも奬勵した。さなき迄も之を寛大に取扱ふた。乃ち吉宗などは古典を集め、之を翻刻、若くは校勘せしめたから、彼は國學を保護したと云へ得ないこともあるまい。識者から見れば國學も蘭學も幕府の現狀とは到底兩立し難き危險思想だ。然るに將軍吉宗が徂徠學やら折衷學などを取締りつゝ、却て之を奬勵したるは、意外と云へば意外、不思議と云へば不思議だ。此の如く家康によつて創造せられたる徳川幕府も、種種の紆餘の末、漸々分解に近付いて來た。それは必ずしも前に述べた國學者とか蘭學者とかに限つたものではない。國民の

日に何等の日に至る迄日本が續いて來た。人心は既に德川幕府の現狀に倦んで來、飽いて來、滿足しないやうになつて來、益〻に於て乎其の理想を我が王朝の昔に求むる事となつて來た。而してそれが具體的に皇室を尊崇する精神と契合し、それが又遂に尊王斥覇の氣分と成つて來た。又他方に於ては鎖國など云ふ事は不自由であり、不便利であり、不利益であり、而して又不道理であると云ふ事が、或る人々の中に不言の裡に湧き來り、茲に於て吾より進んで國を開かんとする氣分も此處彼處に生じて來た。かの八幡船や密貿易などと云ふのも、畢竟するに其の氣分の具體的に發露したる一班と見れば差支へあるまい。

然るに又た此等の氣分を格別に刺戟作興する事件が勃發した。それは對外關係だ。當時日本は三方から外國の勢力に接觸する運命となつた。北の方面からは露西亞が來た。印度洋支那海方面から英國が來た。太平洋方面からは米國が來た。而して其の最も先きに日本國民長夜の眠を驚破したのは露國であつた。所謂日本でハンベンゴロと云ひ、其の本名はフオン・ベニヨヴスキイが、露國の我が北方を窺ふ野心のある事を和蘭人を通じて報告したのは、一七七一年七月八日の日付けであつた。一七七一年と云へば明和八年である。それから寛政五年にはラクスマンが我國の漂流人幸太夫磯吉等を伴ひ來り、又文化二年にはレザノーフが長崎に來り、其の前後に至つて、て文化三年四年には露人が我北邊を侵して稍〻つゞけざまにやつた。所謂赤蝦夷の蝦夷地來侵は、實に我が人心に多大の衝動を與へた。惟ふに賴山陽が蒙古來の詩なども此の氣分に刺戟されて出で來つたものであらう。世間では寛政の三奇人として林子平、高山彦九郎、蒲生君平を擧げて居るが、子平は蘭學者ではないが矢張り其の先輩工藤平助と共に、蘭學的の思想から割り出して國防を論じたものだ。彦九郎は國學者ではないが、國學の入口とも云ふべき太平記などにて尊王の思想を養ひ得たる者であり、君平は寧ろ國防論と尊王論との兩方に跨つたる者で、素養は漢學者であるが、其の研究したる題目は山陵とか職官とか日本固有の問題であつた。人或は國學から出で來つた精神と、蘭學から出で來つた精神とは氷炭相容れないやうに思つて居るが、然し兩者の間に共通點が少くない。其の一は現狀に滿足せざる事、他の一つは國民的精神又國家的自覺だ。蘭學者の目にも國學者の目にも最も鮮明に映じたのは、大名でもなく、旗本でもなく、將軍でもなく、日本だ。既に日本と云へば下には國民があり、上には天皇がある迄だ。それで彼等は兩極より歩いて來たが、到底其の中央では接觸する運命を有つものである。而して國學者蘭學者ばかりでなく、朱子學者にせよ、又は徂

儒學者にせよ、或は意識的に或は無意識的に、此の氣運に動かされずしては居た能はないものがある。而して啻だ知識階級のみならんや。一般民衆に於ても、それとはなしに日本の國家と國家を統治する萬世一系の天皇とに、自然に目が醒めて來るべきは、所謂大勢の赴く所で、已むを得ざる次第と云はねばならぬ。即ち此の如き時代に於て彼賴山陽は生れ出でたのである。

第五　山陽の家庭及環境

甲　山陽の家庭

山陽は學者としては立派な名門閥を有つて居た。彼の父賴春水は單に藝州藩の文學と云ふ許りで無く、日本的の學者であつた。少くとも全國的に學者と云ふ位置を占めたる一人であつた。賴家は春水彼自身が書いた其父亨翁の行狀に據れば、其の祖先は小早川隆景の家來であつたが、其の後竹原に來り海運業に從事して居た。然るに中途で家運が落ちたが、彼の父亨翁は決して尋常一様の漢ではなかつた。賴と云ふ苗字は賴兼村から移つて來たから、其の頭字を取つて稱したとも云ふ事だ、亨翁は京都の田村宗安に就て和歌を學び、宗安の死んだ後には小澤蘆庵に就て學んだ。又予が聞く所に據れば、彼は竹原の人勝島常附介と云ふ醫者であつたと云ふ。常附介は竹原に於ける町宜一漢籍と國典に通じ、文天祥の書いた忠孝の二大字を鄕の在十宮崎社の手引石に刻した。春水の母は道工氏である。山陽が肥後藩北水侯にて用ふたる道工彦文と同姓であれば、何かの關係があつたかも知れない。春水は子供の時から神童の評判が近傍に高く、十九歳の時に游學發奮大阪に出て、當時有名の高かつた趙陶所の塾に知られ、暫て歸郷の後二十一歳改めて大阪に遊學し、安永二年十二月には江戸堀北側・上町に家塾を開き門戸を張つた。時に二十八歳。彼は趙陶所に就て大に得る所あり、旣に書を以て一家を成した。當時大阪は文學の淵叢であり、一方では中井竹山履軒兄弟の懷德書院があり、他方には片山北海を盟主とした混沌社があつた。前者は經學を主とし、後者は詩文を主とした。然るに春水は兩者の間に交り、何れの人からも敬愛せられて居た。春水は極めて常識の發達した篤行者であり、且つ極めて下喋い所謂文士に有りたる學者の人であつた。彼は律義且者であり、信用且者であつた。されば彼は一代の奇士高山彦九郎などとも懇意であり、京都に門戸を張りたる皆川淇園などとも交り、而して柴栗山などとも最も懇意であつた。熊本の藪孤山や、鹿兒島の赤崎海門や、其他數ふるに遑あらず。尾藤、古賀は彼の同學の親友であれば、殊更云ふ迄もない。彼が交友の天下に普ねかつたことは、彼の著『師友志』を見て分明だ。彼

の[illegible]、春風、春水、杏坪、而して[illegible]此の三兄弟の中杏坪は、文學の才と器とに於て恐らくは長兄春水を凌いだであらう。杏坪は後に藩の[illegible]に任用され、或は儒者となり、或は郡宰と成つて、それぞれ立身したが、春風は竹原に在つて故廬を守り、醫業に從事して居た。此兄弟三人を熟く知つて居る混沌社の一人篠崎三島が、『春水は四角春風は圓く杏坪は三角だ』と云ふたのは、恐らく適評であらう。然し春水は四角だと云つて唯それ許りではない。春水は世を渡る上に於ても、身を處する上に於ても、何等間違ひも無く、何等危氣も無く、實に安全第一の紳士的學者であつた。當時中井竹山は雄邁の資を以て大阪に於ける學問の覇權を握つて居た。藪孤山の詩に

大阪城中客若ㇾ雲　竹山夫子最超ㇾ群　欲ㇾ知夫子超群處
滿腹經綸滿腹文

彼は德川氏の興隆を叙するを目的としたる『逸史』の著者であり、又松平定信が執政と成つて幾許もなく上方に來つた際、彼を引見した因みによつて、彼は定信の爲に其意見書とも云ふ可き『草茅危言』を編述して呈した。均しく朱子學者として一代の泰斗である栗山と竹山とが、僅かに淀河の上と下なる京都と大阪の、眼と鼻の間に在りて遂に相見なかつたのは、如何にも[illegible]文に於て[illegible]。然し山陽にとつて重きをなす[illegible]水は、實に竹山を[illegible]者として其夫人飯岡氏を娶つたことはなか[illegible]八年十一月であつた。當時春水は三十四歳、夫人は十九歳、名は靜子、大阪生え拔きの儒者——表向きは醫師——飯岡義齋の娘であつた。竹山は合巹頌を作つて春水に贈つた。混沌社の主盟とも云ふ可き片山北海からは竹山に『千秋（春水の字）賀儀誠に大慶と存候、先生御斡旋事得ㇾ遂忝御事に奉存候』と文通した。此の如く彼の結婚は彼の交友の總ての人々より祝福せられた。越て翌安永九年の春、春水夫婦は其父亨翁に伴はれて新婚旅行を京都に試みたが、亨翁の師小澤蘆庵は花嫁たる靜子に

咲きかゝる契とならば藤の花
　松のみさをにならへとぞおもふ

と云ふ歌を贈つた。此夫人こそ後に梅颸女史として、山陽の死後十年餘も生存へた賢明なる婦人である。斯くて同年十二月二十七日に生れたる一子が即ち山陽其人で、當時春水の詩に

不知吉夢是何祥。忽喜喤々報弄璋。家居占斷熊羆兆。能爲
頎名久太郎。

とある。此れは其の祖父亨翁が彼の生れぬ前から既に命名して居たのであつた。

而して外祖父飯岡義斎からも

ひさかたの天のめぐみにたらへよと
色にいはひて送る産衣

蓋し其の産衣は翠茶であつた。此の如く久太郎の名は、彼が生れない前から祖父又十翁が命けて置いたのであつた。されば夫婦は其初孫を見せんとて天明元年閏五月一日大阪を發して竹原に赴いたが、又十翁は既に堪へず、小半紙に自ら忠孝の二字を書いて字袋に納めしめた。忠孝の二字、此れが山陽一生の護符だ。

凡そ如何なる人でも時勢に支配せられ、周境に支配せられ、過去の行き掛りと現在の狀態とに支配せらる。山陽が彼が如き一生を送りたる事も、以上見來れば必ずしも深く怪しむ可きではあるまい。

乙　山陽の一生

凡そ人の生涯には誰しも思ひ設けぬ偶然の事がある。偶發の事がある。如何なる豫定の計畫あつても、其の通りに行はんと欲して能はざるものがある。されど概して云へば、世の中には吾自らが境遇を支配するものと、境遇から支配せらるゝ者とがある。又吾自らが一生の方針を定め、其の通りに——少くともそれに接近して——生活する者と、又何等の考もなく、唯風のまにまに、浪のまにまに周囲の勢に從つて浮沈する者と、若しくは自分で折角目的を定めても、其の通り行ひ得ずして、不本意なる一生を送るものとがある。我が頼山陽の如きは、殆ど當初から考へて居た通りの生涯を、彼自ら遂行したと云ふ可きである。彼の一生を通觀するに、彼は決して臨機應變者でもなく、彼は決して漸志躬行者でもない。彼は子供の時から心掛けた通りの事を、死ぬるまで爲した者である。彼は一生我儘氣儘で押し通したが、然し其の我儘氣儘なるものは放縦軌道ではなく、ちやんと自ら定めた所を着々無二無三に遂行したるものである。山陽の一生を大觀する者は、先づ彼が一生は彼に於て不本意の一生でなく、滿足の一生であつた事を知らねばならぬ。

第六　山陽の幼時

山陽の生れた翌年、天明元年十二月には、父春水は其の國藝州の藩主淺野侯に召されて三十人扶持を賜り、爾後春水の位置は年と共に追々と重きを加へて來た。天明三年山陽四歳の時は、江戶霞ヶ關の上屋敷に居る藩主の世子侍讀の學問指南役となり、其後彼は專ら江戶詰となり、屢々歸國するも復た上府した。最初には山陽は其の母と共に暫く其の外祖父飯岡義斎翁の許に居た。されば山陽は自ら安藝の人なりと云ふけれども、大

段に生れ、其の生立ちは大阪でゝあつた。如何に彼が大阪なる外祖父の膝下にて生長しつゝあつたかは、彼の叔父賴杏坪の甲辰日記に能く之を語つて居る。此日記は杏坪が江戸より廣島に歸る事を記したるものである。甲辰と云へば天明四年である。即ち山陽五歳の時である。山陽は天明二年六月から廣島に父母と共に居り、三年八月には既に大阪に母と共に來り、飯岡方に滯在したのだ。

二十八日の夕まで飯岡氏の許に留る……二十八日の夕また打連れて西の宮にと立出づる。滄溟老人（飯岡義齋）初め名殘を惜しみ給ふ。家姪今歳五歳なり。此旅にて離合四度になりぬ。今年は智惠やゝつきぬれば、いと別を惜しむ樣に見えたり。

とある。此の叔父杏坪こそは最も能く山陽を理解し、最も能く山陽に同情したる一人にて、謂はゞ山陽の一生を通じて大なる保護者の一人と云ふ可き者であつた。天明五年、山陽六歳の時、父は歸藩し大阪に立寄り、五月山陽母子を伴ひ廣島に歸つたが、六月は再び江戸詰めを命ぜられ、八月廣出發し、茲に於て山陽母子は廣島に留る事となつた。此の如く春水夫婦は新婚早々、春水が廣島藩に出仕した爲めに、其の一身は東西に奔走し、寧處に遑あらず、されば山陽幼時の教育は殆ど母氏の手に由つたものと云はねばならぬ。彼が他日成立の後に、其の母に向つて孝養を殷にしたのも、洵に理ある事だ。當時如何に義齋が其愛孫たる山陽の身を案じたかは、後に春水に與へたる書翰を以て知る可きである。

日常秋來候處愈御江府へ御越之由誠に歎息不堪候所以然者若候之御内證世子之御成立一家中及本國他國京江戸大阪學者中間の面目御評ゲイ之稱もグンニヤリ於腕卷手足不知舞踏候彼是御心遣御憂苦察入候作併是程之面目も押し勤死骸も苦死可仕時節、若今般他の儒者交代之事に及候はゞ扨々不面目千萬なるべきに今度の仕合何角不入不可顧他事トント討死と決定せずして不叶事に御座候歸へも其分御申聞可被下候彼は何若年撫幼兒遠境大親に素居心細く可在候段は不堪に候得共隨分愛死本分之事と覺悟可被遊事に候然情愛不然の女丈夫也と被仰聞候ドー人大安心不過之候且常に臥して安樂ならんよりは病役に配して苦死せんは相勝る事尚々何代之面節操高潔賢明貞烈女中之鏡鑑ともなり父が名を揚げ世に顯はれくれなば誠に死すとも如生大慶不可有限實に彌太郎か要哉義齋が女なる哉といはれてくれなば大貞大孝無此上仕合に存候此段篤く熟々御申聞可被下候只遠境に離居仕愚女がこと悲泣に不堪如此仕合に候久太郎彌壯康之段是第一之大事、別後日々存じ谷早々而寧見聞度報に存暮し又此節故（二十一字缺讀）却て此節大飢心に如鬼相成居候手前之事はちつとも御氣遣被下間敷候

而して義齋は又た同書中に、「靜、汝は分に過ぎたる夫を持ちたるぞよ、世間なみの根生、グンニャリとした、さけんでは、キツト、トント、すまぬぞよと、御申聞被下候」と云つて居る。

此の如く祖父義齋は春水の立身を喜び、又其の愛女靜子を訓

して居る。實に斯父にして、斯女あり、斯夫にして、斯婦ありと云ふ可き哉。尚ほ春水が彼自身に就いて「一點の簡大錯肝心に卸要用候儀」と云ふ文句は五十年の後、山陽が死したる時に、梅夫人が山陽の未亡人梨影子に向つて東の如く成つて子供を教育せよと云ふた文句と對照すれば、如何に此手紙が山陽の母に强大なる印象を與へたかと云ふ事が思ひ遣らるゝではない乎。斯る次第で山陽は母親の下にて遂ひ／＼成長して來た。山陽門人江木鰐水が撰したる山陽行狀に、彼が六歲の時母に向つて、父は何者であるか問て、母が國つて以ま儒者と云ふと、それから滋に下つて父を聞き、不思議ちや不思議ちやと云つて泣いて居たと云ふ事を書いてあるのは、其の頃の事であらう。然し之は別段不思議でもない。子供は何事をも珍しがり、何事でも質問するものだ。斯る事を問ふたとて別に山陽が偉らいと云ふ譯でもあるまい。

彼は其の時分から詩書が好きであり、又身體が弱くて好く病氣した。彼は天明八年學問所に入つて學校通ひを初めた。是が九歲の時だ。然し彼は寧ろ柳本類が好きであつた。彼が後日に說したる所に據れば、彼が十歲の頃母の針仕事をする傍らの傍で、母から論語大學の句讀を授つたが、其の時分彼はそれを復習する事を嫌つて神木だけが好きであつた。春水は此の事を聞き、江戶から細入保元平治物語及義貞記を送つて來た。彼は書んで更に其の足らないものには自ら細を書いて之れを補き足して讀んだ。而して自ら「一史學習ニ淑フ此ニ開ク」と云つて居る。

彼が歷史に興味を有つたのは、殆と生來的に依るかつた。又其時分近所の子供と遊び、屢々に戰の眞似をした。如何に父が彼に望を屬し、又彼の事を念頭に置いたかは、父の許りを見れば能く判つて居る。其の中には、「家兒八歲稍知字　只長賤類問ラ入リ」と云ふる。尺刀を問ふとは何時頃までもとは無論りである乎と云ふ事を聞いてやつたのである。而其の時分彼が身弱であつた事は其の叔の日記によく出いてある。天明八年一月十三日の條には、

久太所勞あり、林に參りたり、八つ過ぎより歸る。夜林見舞ふ。藥調合。例の癇癖の氣味、朝き一兩度なり

扨て此の例の癇癖と云ふが問題だ。其の外に或は足痛とか、或は水痘とか、或は腹痛とか、或は頭痛とか、種々の病氣があつたが、然し彼を惱まし且つ彼の周圍を惱ましたる大病者は所謂癇癖だ。彼は此の時分、即ち九歲の十月より武術稽古の爲に山本盛の門に入つた。學問は森の門人にて、他日最も山陽の同情者となつた。彼が此人に負ふ所多大であつた事は、彼が三十

一緒の頃、此人に與へたる書状を見ても分る。此年五月春水は江戸から歸つた。其六月には備後神邊の菅茶山は藤井暮庵を伴ひ廣島に來り、春水を訪ふた。此時山陽は始めて茶山に見えた。當時茶山の詩に斯る句がある。『喜見汴郎耽二紙筆一　寛儀不レ倦待二我儒一』九歳の小童が茶山に見えて如何なる印象を得た乎は知らねど、烱眼なる茶山は之を必ず爲す有る者であるを見たであらう。既に耽紙筆とある程であれば、彼が文學の素好以て知る可だ。春水の位置は愈進んで來た。彼は奥詰に進み、藩主の信用も愈加はつて來た。當時山陽母子は廣島に在り、春水は天明八年の九月には又江戸に向つて發した。寛政元年山陽十歳の時には、彼は母の許にて論語を讀んで居た。母の日記中に、

　二月二十四日、晴、江戸大阪へ書狀出す。久太郎日業申しやる。禮樂征伐自二天子一出。久太郎灸治。
　三月二十二日、雨、久太郎論語修業。

江戸と云へば春水のこと、大阪と云へば飯岡のことである。即ち此時分に彼は春水の送り來つた歷史的繪本類を愛玩したのであらう。此年十二月十六日春水は廣島國泰寺裏門前の屋敷拜領の沙汰を受けた。此の屋敷は今も尚ほ頼家の所有として山陽の長子聿庵の孫頼彌次郎君が住居して居る。當時山陽は餘り勉强したから遂に眼を病つた。又此年十一月八日には外祖父飯岡義齋に[illegible]き、其際彼に會し、而して廣島に歸つた。[illegible]には眼病も癒え、其十五日には初めて藩主に謁見した。[illegible]には江戸より歸り、八月には新邸に引移つた。而して九月には又江戸に出發した。當年が即ち松平定信の異學禁制の令を下した年である。寛政三年十二歳の一月、春水は江戸から山陽の實名を命けてやつた。それは左の通りだ。

　今度久太郎に實名を付け遣し候間そのもとの膝下に呼びよせ候て別紙の通りを申付可被申字は延して付け申遣し可申候大阪へも申遣し可被申候實の一字にて候名乘にしてよみ候へはノボルなりノボリてはなし此通り可被申付候時服しかるべし
　二月十二日　　　父　惟　完
　　お靜どの

當時山陽の讀書は既に五經に及び、易を卒業して居た。山陽文稿に出でたる「立志論」は此の時の作であらう。其の冒頭には、『男子學バザレバ則チ已ム、學ベバ則チ當ニ群ヲ超ユベシ』と云ひ、又『吾生レテ十有二年ナリ矣。父母ノ教ヲ以テ古道ヲ聞クヲ得ル者六年ナリ矣』とあれば彼が六歳から學問に取掛つた事が分る。寛政五年癸丑年彼が作つた詩に

十有三春秋　逝者已如レ水　天地無二始終一　人生有二生死一
安得レ類二古人一　千歳列二青史一

共に十竹、竹秋とある。且此は寛政五年で、數へ年であればば十四である。然し彼は安永九年十二月の二十七日に生れたのであるから、十竹、竹秋と云ふても差支へないのみならず、寧ろ之れが相當であらう。彼は此の詩を江戸なる父に寄せた。それが彼の父の友人間の評判となり、遂に柴栗山の聞く所となつた。其の顛末は後日彼が書いた文にある。

寛十三歳ノ時、先人江門ニ在役ス。……柴野博士ニ語ル。博士曰ク、子秋子アリ、之ヲ教ヘテ實ナト成サシメヨ、乃チ詞人ト爲サント欲スル乎。宜シク先ヅ史ヲ讀ミテ古今ノ事ヲ知ラシムベシ。而シテ史ハ綱目ヨリ始メヨト。先君先生ノ門ニ從リ、終ノ編ヲ覆ニ之ク。寛乃ノ頒ノ發シテ之ヲ讀ム。

正しく其の通りだ。其の翌年赤崎海門が薩摩に歸る時に春水は次の詩を贈つて居る。

客地逢人還異鄕　山陽紫海接關河　阿弟十四留石谷　未足云丹山鳳

阿弟とは山陽を指したものだ。斯くて海門は同年六月四日頃薩に歸り、山陽に就ても各地に伴れてそを見、栗山からの傳言を聞いた。斯の如く山陽は十四にして既に未見の知己として栗山大先生を持た。而して彼の父春水も亦如何に彼に期待する事の多かつたかは、寛政五年の作中に、

和鄰鷄以見寄

川上竹外鷄鳴嬉　遲夜放歌向誰聞　好音欲被二凡禽妬一
嬌舌休將二俗耳傾一　宵山梅隱隱未遠　僅在枝上喚何遲
同頭學吟知止　何必上林求一枝

とて見れば春水は大眼通も同様、殆んど山陽の一生を豫言したものと云ふても差支へはない。前篇の「好音欲被二凡禽妬一　嬌舌休將二俗耳傾一」の如き如何にも山陽其人の性行と實際を云ひ表はして居る。且つ結句の二句「同頭學吟知止。何必上林求一枝」と云ふが如き、有心か無心か殆ど山陽の一世相を描いて居る。子を知るは親に若くことなしと云ふが、其親も恐くは天が斯く云はしめたであらう。山陽は孜々として勉強をした。又自然に其の才名も遠近に聞えて來た。然し彼は病身であつた。父母の心配は一方ならずであつた。今ま彼の母の日記を讀めば其事が細々と書いてある。寛政五年彼が十四歳の時、

九月廿三日、晴、夜、久太郎不快、山中に見てもらふ、肝けいの由のよし。

二十六日、曇る。久太郎同事の内病の狂へるなる由、物事に疑深し。

十月十五日の夜、春水は江戸から歸つた。然し山陽の気分はさつぱりしなかつたやうだ。それに、

二十六日、晴、久太郎同事、今日あたりより無口、氣鬱し。

二十九日、晴、久太郎同事、氣鬱し、牛尾玄珠へ療治たのむ。

十二日、[illegible]書を讀む。
二日、[illegible]久太郎を伴ひ學問所へ行く。

此等を見れば如何に賴家の家庭が其の病の爲めに父母の心を惱ましめたかゞ判る。たまさか江戸から歸りたる父も、其の子の狀態此の如きを見ては、其の心配は如何許りであつたらう。彼が久太郎を伴ひ學問所へ行つたなどと云ふ事を見れば、如何に彼が其の子の氣分轉換に心を用ひたかゞ判る。同年十二月袖留め願ひが聞屆けられ、祝ひがあつた。即ち彼も一人前の人間と成りかけたのだ。寛政六年五月叔父杏坪に伴はれて竹原に至つた。而して十月歸つた。之も恐らくは轉地養生の爲めであつたらう。此の時分彼は東坡史論を讀んで大に啓發した。彼が自ら後日書いて居る處に據れば、左の通りである。

吾家學ヲ受ケ小學近思錄ニ嫻熟スルノミ。十四五歲ニシテ書ヲ嗜スニヨツテ蘇文史論ヲ讀ミ誦ンデ曰ク、天地間此ノ如ク喜ブ可キ者アルヤト。即チ窃ニ諳習、手ヅカラ范增論及倡勇敢策ヲ鈔シ、壁ニ貼シテ日々之ヲ觀ル。是ヨリ遂ニ文ヲ學ブノ志有リ。

之れまで小學や近思錄、四角四面の學問で打固められたる彼が、蘇東坡の文に出會して如何に快活であつた乎は思ひやらる。斯くて彼は獨り自ら精神的解放を得て、寛政七年には父執豐前の儒者倉成龍渚に廣島附近の海田市に面會し、十二月二十一日には春水よりして彼が前髮取りの願を出した。此年は父春

次ぐ[illegible]彼等を見る事が出來た。[illegible]折、阿波の[illegible]、備中の古川古松軒などがそれである。古松軒は有名なる地理學者で足跡天下に遍かつた。當時彼は病中で見るを得なかつたが、古松軒は彼に向つて海内の輿地及比隣の略圖を手づから寫して之を送つて『聞く子は共に語べきものと。願はくば此學を爲せ』と云つた。彼が地理學上に於て得る所少くなかつたことは、彼の著作が能く之を證してゐる。史家としての彼の特色の一は、地理と人事との關係を極めてよく諒解したことだ。惟ふにその素地は之に基いたものと見える。寛政八年十七歲の正月には彼は愈元服をなし十五日には御禮として登城した。然るに其の六月には例の持病が發して、叔父春風も駭いて竹原から馳せつけ、其他種々の醫者に掛つたが、七月二十六日には癒え。十月二十六日には叔父杏坪に伴はれ有馬の溫泉に赴いた。是れは轉地療養の爲めであらう。斯くて寛政九年正月から愈學問所の寄宿舍に入り、三月まで伊洛淵源錄を讀み、之れから愈江戸游學の段取りと成つて來た。

第七　山陽東遊

春水の考では其の子を江戸に游學せしめ、立派なる賴家の第

一世を養成する始りであつた。才から云つても、學から云つても、又勉强から云つても、彼の相續者と成るには一點の申分が無かつた。唯申分があつたとすれば、身體が弱くて斯症を發することであつた。斯症と云へばつまり男のヒステリイだ。凡そ山陽程家庭の幸福に浴したる者も無く、父母の鍾愛を專らにしたる者も無い。如何に其の母が彼を大切に育くみそだてあげたる事は、其の日記を見れば最も明白に最も詳悉に之を語つてゐる。一寸したる下痢にさへ、感冒にさへ、如何にも彼女の日記は仰山に書き立てゝゐる。又繪を書いて遊んだとか、氣分が重かつたとか、輕かつたとか、頑是なき子供の一擧一動さへも具さに書いてある。これと云ふも畢竟此子を大切に取扱ふたからであらう。知らず山陽は何の不平があつて動もすれば癇癖を起し、無口となり、若しくば狂氣染みたる事を爲し、或は邪氣深くなり、以て兩親を心配せしめた乎。之は生理的に解釋す可き乎、心理的に解釋す可き乎。若しくは二つながら其の原因を爲した乎。之は姑く措き、彼は極めて順境に育ち乍ら、殆ど人心の開く頃からして、恐らくは十歲前後からして、反抗兒であつた。而して年と共に、近頃の言葉で云へば、性の惱みに罹つたらしい。彼は何事にも早熟であつたから、性の目醒めも亦同様と察せらるゝ。然れば彼が遊學する十七八の頃には、最早此方面の煩悶も少からず彼のヒステリイを助成したのではあるまい乎。山陽は遊學の頃より既に少からず兩親を手古摺らせたる事があり、從て其父は彼が遊學によつて彼の生活に一轉機を來さしめんとしたのではあるまい乎とも思はれない事はない。彼は叔父杏坪に伴はれて、寬政九年三月十二日廣島を發つた。之は杏坪が兄春水に代つて嵩い世子侍讀に學問指南の爲めに江戸に赴く際であつた。母は

富士の根も近江の海も及びなき
　君と父との恩わするな

と云ふ一首を餞した。祖父亨翁が彼が生れた時、春水の二字を半紙に書いて與へたのと同じ意味である。此書は賴氏傳家の珍である。此叔父と姪とは、先づ竹原に至り十二日に展墓を爲し、十七日には神邊に至つて菅茶山及其の門弟に歡迎せられ、十九日には岡山に至つて武井丈伴に面會し、二十二日には兵庫に至り古跡を遊覽し、二十四日には兵庫から郡山に至り、二十五日には郡山より伏見を經て大津に至つた。彼は大阪には立寄なかつたが、伏見から大津に至つたとすれば、京都だけは通り過ぎつたのであらう。斯くて四月の朔日には新坂に至つて荒井の關に入り、大井川の川止めにて、途中緩々歩き、六日金谷より丸子に至り、既に大井川を渉つた。彼の日記に「今日初めて快晴、

を望む」とある。[illegible]六日には安倍川を渉り蒲原に至つた『[illegible]壯なり』とある。之は蒲原驛から富士山を望んだ景色であらう。七日には蒲原から三島に至り『富士川を渉る所の望最も壯也』とある。道に山陽だ。彼は能く富士山の光景を眺めてゐる。斯くて十日には山中藤澤から川崎に至つた。十一日川崎から江戸に入つて、杏坪は駕籠を下つて霞關の上屋敷に行き、山陽は其の駕籠について永田馬場の中屋敷へ行つた。頓て杏坪も中屋敷に來つた。此の如くにして彼は草鞋を江戸に脱いだ。而して彼が落着く先は昌平黌構内の其の叔母聟尾藤博士の塾であつた。

彼が如何に老成であつたかは、途中に於ける詩作を見ても判る。詩人としての彼は、此の旅行に於て、頗る其本領を發揮した。現に山陽詩鈔中には東遊六首と題する七律があり。又『過一谷懷平源興亡事作歌』と云ふのと、『謁楠河州墳有作』との二長篇がある。之は何れも山陽詩鈔中の壓卷と云ふ能はざるも、殆どそれに庶幾きものだ。山陽は非常なる推敲家であつて、同一の詩を十回書けば、殆ど十回其の文字の異同がある程である。然れば彼が五十以後になつて整頓したる詩鈔に掲げたる是等の詩は、原作とは多少若しくは多大の修正を經たる者であらうと思ふが、それにしても無から有を生ずる譯ではなく、必ずその原作は出來てゐたに相違ない。[illegible]詞を見ても、たゞ〳〵尋常一樣の作ではない。[illegible]に

書劍何年始辭家　山川景色[illegible]京華　一[illegible]入、除一路春風野菜花

之は後年彼が其の母を奉じて南都に遊んだ時に、「行人買醉和州路。滿野東風黄菜花。」の詩を既に豫示してゐる趣がある。而して其東遊六首の中の一首に『分明攻守千年勢。著論誰逢賈誼風。』の句がある。菅茶山は之を評して『後來ノ著述蓋シ此處ニ胚胎ス』と云ふてゐるのは、定に同感だ。推ふに山陽は此の時分から心を史學に傾けたのであらう。今姑く山陽に代りて揣摩すれば、縱令眞面目臭つた顔をして父の流儀の學問をなし、朱子學一點張りでお儒者として世家第二代となつたとても、父以上の立身出世は難しく、而も出入進退悉く格式舊例に因はれ、窮屈至極、とても一人前の了見ある漢では辛抱が出來ない。されば我は我で別に自分の好む學問をなし、自分の好む立身の道法を考へた方が然る可しと、彼の心の奥には既に斯る所を聞き居たであらう。何れにしても彼は近思錄や淵源錄で一生を終らんとする事を屑とする者ではなかつた。

第八　當時の江戸

此から少しく當時の江戸に就て語らねばならぬ。山陽が江戸に滯在したのは寛政九年四月から同十年四月迄であつた。彼の滯在は僅かに一箇年に足らなかつた。然し當時の江戸は徳川氏全盛であつた。一代の賢宰相松平越中守定信は寛政五年七月其職を辭したが、當時漸く卅六歳であつた。定信が血氣將に強き卅六歳にて辭職したのは何故である乎は姑く措き、彼の後繼者には彼の同志の士松平伊豆守信明あり、殆ど定信同樣の方針を以て其の政を爲してゐた。されば將軍家齊も未だ文化文政の時代程には増長も出來ず放恣も出來なかつた。而して幕府の所謂緊縮方針は定信以來何等の弛みも生ぜなかつた。外に學制に至つては、幕府あつてより未だ當時より振つた事は無かつた。林家には林衡述齋が居り、儒者としては柴野栗山、尾藤二洲、更に古賀精里も其の前年即ち寛政八年五月に任用されてゐる。而して所謂此の官學と對立する民間にも、亦自ら學者の横綱と稱して居る山本北山や龜田鵬齋がゐ、北山の如きは盛んに徂徠流の擬古文辭を攻撃し所謂淸新なる詩文を鼓吹した。翻つて學問所官の上から云へば、昌平校の學制も從來よりは寛政七年に[illegible]出來てゐる。又松平定信の發意の下に組織したる集古十種も寛政九年に出來してゐる。而して考證學の大家吉田篁墩は寛政十年に歿したが、而かも彼の同志にして、後輩たる市野迷庵、狩谷棭齋などは、當時恰も油の乘つたる最中であつた。文獻學の方では太田錦城がゐた。文章の方では佐藤一齋もゐた。又當時[illegible]なども既に頭を擡げつゝあつた。蘭學の側では寛政八年には稻村三伯によつて和蘭語と日本語との對譯辭書が出來、ハルマ和解として同年活版にて三十部を印刷した。而して宇田川玄眞の醫範提綱は寛政十一年に成り、伊能勘解由が命を奉じて蝦夷地の測量をなし地圖を作つたのは寛政十二年だ。而して國學の方では本居宣長の古今集遠鏡が寛政九年に出版せられ、十年には古事記傳の原稿が全部出來揃つた。何れにしても學問界は洋學國學漢學を問はず全盛時代であつた。其他小說方面には馬琴があり、京傳があり、狂文學者としては蜀山人がゐ、博覽強記家としては屋代弘賢がゐ、浮世繪師としては北齋の全盛時代にして歌麿の時代は既に過ぎ、北齋の腕前は漸く世に現はれ、而して豐國豐廣も亦頭角を擡げつゝあつた。而も繪畫に至つては、谷文晁の全盛時代が既に到來したと云ふても妨げなかつた。斯る時代に於て、水戸流の史學は、茲に再興の勢を成し、立原翠軒や藤田幽谷などの努力にて勃興し、小石川と水戸との間に大日本史の名稱や、論贊、諸志表などの事に就て論議最中であつた。されば史學者としての山陽に取つては、唯此時を然りとすると云ふ可きだ。然るに不思議なるは、此一年間に於ける

山陽の一代記の頁は[illegible]であるが[illegible]てある山陽も、此一年間の事に就て何も書いてゐない。廣島から江戸までの旅行中に長篇短篇の數多の詩を作つたる山陽は、江戸滯在中には詩らしき詩は一首も留めてゐない。唯僅に紀念として見る可きは、昌平黌中の同窓共が彼の才を試み、線香一炷の間に支那の將帥を題目として四言三十首を作らしめたのが遺つてゐる。其外に山陽の自ら記したるものは、唯栗山を訪ねた事と尾藤二洲に關する話に止つてゐる。栗山に面會したる事は左の通りである。

後十八歳ニシテ東ニ游ビ、過ギリテ博士ニ謁ス、博士問フ綱目ヲ讀ミタリシヤ否ヤト。（參照三〇頁）曰ク盡ク讀ム能ハズト雖モ大意ヲ領スル耳。博士曰ク可矣ト。因テ語ル昔ハ某侯ニ勸テ此ヲ讀シム。侯後路ニ當リ職劇シ。曾テ我ニ喩ジテ謂テ曰ク、吾綱目ニ熟シ其書法發明モ亦暗記シテ失ハズ、今ハ則チ之ヲ忘ル矣。余對ヘテ曰ク、佳忘也ト。襄唯唯トシテ退ク。當時恨ラクハ數詰ツテ其緒論ヲ聽ザルコトヲ。今碌碌トシテ此ノ如シト雖、學ンデ嚮フ所ヲ知ル者ハ博士ノ賜也。今偶綱目ヲ讀ンデ此事ヲ記シ起ス。今ヲ距ル三十餘年ナリ矣。憶フ博士大聲笑談口角沫ヲ出ス。猶ホ眼ニ在ル也。

之で見れば彼は柴野栗山の宅には一度より足踏みをしなかつたらしい。少くとも面會したのは僅に一回であつたらしい。柴野博士は、父春水とは尋常ならざる交態だ。如何に博士が多忙であればとて、屢行かんとすれば行き得られないことは無かつたであらう。然るに唯之に止まつたのは、當人が三十年の後に於て之を記憶とした通りでなく、[illegible]い。當時尾藤博士には足疾があつたから、彼は[illegible]の構内に設けてあつた。彼は其恩の熟合に浴したと自ら記してゐる。博士は春水の義兄弟であり、山陽に取つては叔母聟であれば、それは當然だ。山陽は尚此事に就て左の如く語つて居る。

偶憶フ十年前江戸ニ遊ビ、尾藤博士ノ塾ニ在リ。先生嘗テ國事ヲ談ズ。而シテ諸生聽クヲ厭ノ。唯予ハ素好ニ投スルヲ以テ獨リ然ラザルナリ。先生大ニ喜ビ、飲酣ンデ燭剪ル每ニ、輙チ吾ヲ呼ビ侍座セシム。近代英雄ノ勝敗得失ヲ縱論シ、往々ニシテ三鼓ニ至リ倦マズ。博士ノ夫人ハ吾姨ナリ。每ニ吾ヲ叱シテ退カシム。記ス、先生嘗ニ歎ジテ曰ク、織田公ハ英雄ト謂ツ可キ也ト。吾當ノ時然ル所以ヲ究問セズ。今織田實記ヲ閲スル每ニ意ノ以テ之ヲ推ス。輙チ曰ク、先生豈此等ノ謂ヒシカト。

即ち山陽は十年後に尾藤博士の消息を傳へ、三十年後に柴野博士の消息を傳へた以外に、一切沈默を守つてゐる。これは語る可き事が無かつた爲め乎、將た語る能はざる者あつたが爲め乎、何れにしても推測ではあるが、江戸の遊學は恐らくは彼の父の期待を裏切つたのであらう。戀の病氣乎、肉の病氣乎、戀肉以外の病氣乎、何れにしても彼の遊學中には、彼は尋常一樣の學生として神妙に勉强したものとは思はれない。故森鷗外博士は彼が伊澤蘭軒の家に寓し、更に狩谷棭齋の家に轉寓したと云ふ說を肯定して其推測を語つてゐるが、予は猝かに然りとも然らず

も云はぬ。但だ彼が業成ると云ふでもなく、學卒ぐると云ふでもないのに、文政十年四月叉叔父杏坪に伴ひ、歸途に就たのは何故である乎。恐らくは其の說明し難き處に、其の理由は存するであらう。彼は歸鄕に先ち三月二十一日付にて其の父に、

岐蘇路の方を通しにて、村岡隊長御同道にて、御歸可被成由、叔父杏坪に就て云ふ規定り申候、・・・何樣件々無異にて打連歸國仕。積日の話可申上と相樂居申候義に御座候。

と云ふてゐる。彼は此下紀の河の木曾路を通つて歸國したが、歸國の際には一首たりとも、錄に取る可き詩は作らなかつた。但二十五年の後に或る關山に寄して「嘗行出木曾路、回首付適二十五年前」と云ふ詩を作つてゐるから、其の記憶だけは殘つてゐるたらうが、當時には詩を作る程の氣分にもならなかつたと見える。併し歸途にも亦叔父と共に備後尚茶に立寄り菅茶山を訪ふたが、茶山は左の詩を賦して彼に與へた。

賴久太郎。寓京修博士業二年。歸路過茶堂。因賦此贈。

千里方何所ゝ成、學經二歲作陽城、歸來有ゝ當付親、物不瑤殘珠玉盤

詞中に二年とあるは足掛け二年で、正味は僅に一年足るか足らなかつたものである。斯くて彼等は五月十三日に廣島に歸着した。而して五月二十七日には江戸發四月二十五日付けの文在水和の尾藤二洲からの書簡が着した。之れには隔臨から注意した山陽の身體の養生法などが細かに記されてあつた。之を見ても彼の江戸に於ける消息の一般は推測せらるゝ。

第九　歸鄕後の山陽

山陽が歸鄕の如何に其父母を喜ばしたるかは父春水が諸友門生を會して歡宴を開いたる時の席上の詩にても想像せらる。

江城五月送梅天、閒指歸期日若年、昔別孩兒初稅冠、一朝一詠之間已、學問稍得通圓何、膝下今來對畫堂、官友獻杯酬脚、西窓携手醉陶然

然るに其歡喜は只其の間であつて、忽ち彼の赤病は異なる徴候なる姿を以て出て來つた。彼は非しく煩悶した。何を煩悶したる乎。何故に煩悶したる乎。何の爲めに煩悶したる乎。而も何もの詳かに彌つた。其の樣子は彼の父母の日記に能く之を語つてゐる。春水日記に據れば、

六月八日、久太郎發狂

六月九日、夜、延病之夢賞ノ爲メ也

とある。過に嚴格なる春水も其愛子久太郎の爲には册道びをして、せめて彼の心氣を轉換せしめんと計つたのであらう。以下

彼の母の日記を見れば左の如く分明だ。

十一日、陰、久太郎夜へかけ氣色よろしからず、夜、林まねき來もらふ、ふり藥本藥とも三貼也。
十二日、晴、久太郎同事、昨日よりよき躰、夜、與一來り歩行に誘ひ行。
十三日、晴、久太郎、與一誘ひに來り夜遊行。
十四日、晴、久太郎、少よき方、夜與一來りすゝむれども歩行不出。
十五日、晴、久太郎同事、藥二貼、夜與一誘ひやぐら下邊へすゝめ遣す。
十六日、晴、御供ぶね（宮島祭）見に行、久太郎ゆかぬといふをすゝめつれ行。
十七日、晴、久太郎よほど快。

斯くて父母の限なき慈しみによつて彼の氣鬱病も少しく癒えたが、愈其年末には彼の爲めに藩醫御園道英の嫡女淳子を娶る事とした。元來春水は三十四歳の晩婚だ。然るに十九歳の、事實を云へば寧ろ十八歳と云ふ可き、其子に結婚せしめたと云ふは何事であらう。此れは兼ねて其父母が其子の病根の存する所を能く察し、此れにて其病を醫せんと企てたことも、其の一の理由であらう。斯くて寛政十年十二月には愈縁談纏り、翌十一年二月二十二日には愈其式を擧げた。然るに其前後からそろ〳〵復た病氣が初つた。それは尋常一樣の病氣でない。其年正月五日夜更けて歸つたのを初めとし、十四日の左義長の見物の歸りが遅く、且新婚間も無き二月二十一日には外出した儘三更までも歸らず、二十九日には初夜過ぐる頃大醉して歸り、翌日にも歸りが遅くなり、夏から冬にかけて外出夜歸りが殆ど常例となつてゐた。此の如く新婚の妻を閑却して、他處に遊樂を恣にしたのは、何故であつた乎。當人に聞かねば判らぬ話だが、恐らくは一方には肉欲の刺戟と、他方には胸中悶々の情が堪え難きものあり、爲に斯る脫線的行爲を爲したのであらう。元來春水は藝州に抱へられぬ以前から、同儕間に謹嚴にして品行方正の君子として知られてゐた。靜子の父飯岡義齋は道學者として認められたる一人。其女の靜子に就ては、改めて云ふ迄もない。然るに藩の儒者に抱へられ、世子の御指南番となり、藩學の教授となりたる春水の家庭に、斯る放蕩兒、脫線者を出したる事は、春水夫婦に取つては如何許りの苦痛であつたらう。而も十月六日の夜も例の通り山陽の歸邸遅きにより、新婦は此夜出で實家に泊つた。春水の日記には、

十九日、寶兒ヲ誹論ス

とあり、母の日記には

二十日、晴、久太郎他出するよし申す、とある。築山父前來り久太郎歸へ何事か申聞す。

又父の日記に

罷歸山村ル、兒ノ論ス、父撫シ去ル、深更故ニ歸ス。

と云ふ。如何に彼が父母を手古摺らせ、遂に亨山香が迄も煩すに至つたかは、察するに餘りあり。而かも彼が十九日に又かゝら戒められて二十日に又外出せんとするなど、餘りと云へば我儘も甚だしくある。其處で遂に十二月七日には春水から禁足を申し附けられた。

十二月七日、久兒夜歸ル太ダ遲シ、戒メテ禁足ス

此の如くにして寛政十一年も過ぎた。山陽は寛政十二年正月に至り、如何に心氣が一轉したるか、其父に向つて改心の事を申出した。其顛末は左の通りである。

正月十五日、晴小雨、久太郎兒意心得違ハヲ改メ候由 與二凡々申上
乙、仿一
寛兒前ノ改メ論說スル一ト有リ、自能 與一 侍座ス 存
十八日、小雨微日暎、伊助看病、久太郎に付内殿の心也 粥 敗山興
こ、手紙伊助何れも春水思慮の名具た
二十二日、晴夜雨二、新居納留、厳父ノ理ノ二存

此の如く一時暗澹たる賴氏の家庭も年と共に平用度なつて來たが、新婦の病氣は昨年の秋以來はかゞず、斯くて同年三月春水は江戸にゆき、山陽は杏山松窓の紹紹したる輔仁に加入し、文事に勤んでゐるに際し、新婦の病氣は一種のヒステリイと成つた。右の母の日記を見れば、

五月九日、晴、御イは〃不叫、御同道に來り無興二、同人なる暇分は
小兒の如く日がましく、今日など別して何やら気に叶はぬよしにて
伊、伊助 とも叱寄せ泣く、久太郎か長々机本とも持行きこわつらふものを捨置き彼に居ねといふ日斎なり。
六日、陰小雨、御同見廻、昨日の次第共語り、論し哭れらるゝやうに申す、おやの傳来あまへし其などかりそめにもなき其時にはこちらに申すを耳にも不入、よろしからぬ事なりともいふ

此の如く夫婦揃合のヒステリイにて切角山陽が氣分を直し學門に勵めば、女は又ヒステリイとなり、山陽の母も隨分骨が折れた事であらう。六月になつて又何やら山陽の病氣が出て來つたやうだ。當時廣島城下から伊勢の本居宣長に從遊せる橋本稻彦が歸つて來たから、彼は此者と交り、七月十七日には夜九つ頃歸り、同じく二十一日にも又九つ頃歸つてゐる。

然るに此處に容易ならざる一の事件が發した。九月三日竹原から春水の父亨翁の弟傳五郎の死亡を知らせて來た。其處で五日六つ半頃即ち午前七時太助と云ふ僕を從へ、山陽は廣島から弔儀の爲め竹原に行く事となつた。然るに彼は如何なる了簡にや、竹原に赴かずして上方に奔つた。此れは彼の一生に取つての一大失策であつた。單に父母の命を待ずして旅行したなどと云へばこれ迄の事であるが、其頃の制度に於て、其家の總領である者が無届けにて藩の外に奔るといふ事は重罪だ。重くすれば其家は扶持を離れねばならぬ。輕くとも其の主人は閉門、

評価は免れない。山陽はなも既に分別ある三十一歲だ。誰が出奔の如何に其父及び其家に迷惑を掛ると云ふ事位は心得てゐ可き筈である。然るに彼は何故に斯く無謀の事を敢てした乎。恰もたる一藩の中に蠢々たる奉公人と伍し、池の中の金魚の如くくるく廻つてゐる生活を慊らず思ひ、所謂大行は細瑾を顧さる底の了簡にて斯る無謀の擧に出でたのであらう。然し此一事は山陽の一生に取つて重大なる結果を來してゐる。彼に對する惡評は固より、即ち彼の同情者さへも之に對しては辯護の餘地が無く、彼の死後門人江木鰐水が彼の行狀を撰した時にも、此事だけは全く沈默に付してゐる。兎に角山陽も此一件が如何に彼の一生に高き代價を拂はしめた乎と云ふことは、當時に於ては想ひ及ばなかつたであらう。

或人は山陽が脫藩する爲めに、是れ亦已むを得なかつたと云ふ者もあるが、然し必ずしも是れ程までの荒療治を用ひなくとも、他に方法が無いとも限られない。山陽は本來常識家である。彼は決して粗放とか磊落とか云ふ質でなく、隨分何事にも細かく考へ過ぎる程の漢である。何れかと云へば理性の勝つたる漢で、決して感情に任せて前後左右を打忘れるが如き事は平生しない漢である。然し時として非常に熱狂し、利害を超跳して寧ろ彼の情意の欲する所を窃らに行はんとする傾向もあつた。所謂狂的の氣分は同家の遺傳性と見えて、其の長男聿庵にも、三男三樹三郎にも遺傳せられてゐるやうだ。

話元に反る。廣島では八日に至つて、山陽が竹原に行かずして道より他に赴いたと云ふことが漸く分つた。彼の母の日記を見れば即ち彼女は風呂など焚かせ久太郎が今や歸ると待ちゐる際に、彼女は初めて彼女の子が出奔した事を聞いた。母の驚きが如何ばかりであらう。其の日記には『物怪強く夜一向に眠らず』とある。又十三日の日記には『思ふ事なくて見ましやとばかりに後の今宵ぞ月に泣きぬる』と云ふ歌がある。

斯くて諸方の心當りに人を派し、叔父杏坪は山陽の母の里篠田隱岐に向つて左の通りの手紙を送つた。

古屋船便一書啓上仕候久々早書も不仕御疎遠に打過候秋冷の砌愈益御多祥奉欣賀候然ば久太郎義近年兎角放縱に有之候處當年家兄（春水）留守中浪遊に耽り候故親戚朋友切戒異見も仕候得共不相改當月五日竹原大叔父（傳五郎）病死仕候に付爲弔問家來（太助）添差遣候處途中より遁竄仕候家來歸り私方も早速に聞き竹原よりも追手差出候得共既に時日も經候事故今以本得不申最今日迄樣子相知不申候藩封內より備後福山領へ出候迄は相分り申候左候得者何分浮浪間に潜伏候事と被察候此間中井御父子（竹山蕉園）に書狀にて此儀申遣候貴家へ別紙（略す）御報知可仕の處あまり至急にて不及其儀中井へ傳言賴み遣し候へば御聞可被下と存候然處右之浪人者も出奔仕候へば此段宜に相成候事に御座候得者如何なる事仕出し可申も難計宗家一子の儀も有之

〇〇〇〇公私共に□□附付て御帰不申候に付而は不申候付□□手がゝり有之
候ハヽ相分り候様御座候はゞ、中井父子、御相談被成て可然御取計可被
下候、本人義、別に罪道を犯し候と申儀にては無之、但全体狂気の所為にて
御座候故、狂気なりに治志も有之事と相見、候得ば當分は蟄居候て退
手を召可申者は御見當り次第御留置被成候はゞ、必逸居可仕候間、御見當
の事も御座候はゞ、随分申合に御用向御取計候程、誠に□家存亡の所
係に御座候得は費用は何程入候ても不苦候間、御手段に御取計可被下候

恐惶謹言

九月十九日　賴萬四郎

篠田□□様

尚々家内も驚き心痛の事に候。御座候より色々思ひ詰候江戸へは申不遣候
何分可得貴意に申述候

篠田□段は、仮名式の名、式は篠田伊勢と云つた。男子無き為め養子を取ることにした。之れが即ち□□である。

斯くて九月の□日となつて、新婦は御中方に帰つた。十月朔日大坂の中井家より消息があり、同じく四日□より京へ上り、大坂に下りし金山市左衛門方よりも消息があり、初めて山陽の居所が判つた。即ち彼は九月二十八日京へ上り、福井新九郎なる者を訪ねて行つたと云ふ事だ。斯る事とは夢にも知らず江戸に在つたる春水は、十月十日に初めて其事を聞いた。彼の日記に曰く

十日、十月、晩飯中、京書到、亡人ノ事ヲ告ス

只此一何如何に春水が心を傷ましめたるであらう。斯るさきの中にも御国に帰つたる新婦は何時の間にか懐妊して居た。斯くて叔父杏坪は山陽を連れ帰る可く九月十日京都に向つて出発した。當島の所寄宅では、連れ来る山陽の為めに、座敷牢を構ふる可く夫れ〳〵準備をした。

二十三日、晴陰不定、夫人大坂□□の件、今夜大石□る、との事にて夜か□□相い許りなし
二十四日、晴雲、大に今少までにて済む
二十五日、陰、自江戸御も問、今度の賢、逃去□□□由
二十八日、晴陰定なる方、自江戸御状到来
十月十一日、御返、大喫驚、初めて知□□□□□御返事

此一事は如何に頼氏一家をして狼狽せしめたであらう。已に同十一月三日山陽は連れ帰られ、新しく用意した座敷牢に入れられた。久太郎を改名して□□と仮称した。二十九日の夜□事は山陽を訪ひ種々教訓する所があつた。叔父杏坪も亦来つた。二子は御国家を□□上□となり、十二月二十日には里方にて、子を安守した、之れ即ち他日の與一である、與一は生れながらにして母の手を離れ、祖母の手に養はるゝこととなつた。而して其の名を都具雄と名付けた。五月十六日には春水も帰藩した。而して山陽は四月二十八日から座敷牢を移して、事相を許さるゝ事となり、其室を仁宇と名付けた

それから彼が三十歳文化六年の秋、彼は招かれて茶山の廉塾に赴くまで約十ケ年は、山陽に取りては退屈ではあつたが、極めて意義多き生活であつた。何となれば、彼が後來日本文壇の泰斗となる可き凡有ゆる涵養、研精、修練は殆ど悉く此間に出で來つたからだ。世の中には監獄學校と云ふ言葉があるが、山陽の大學校は此の幽居の學校であつた。之れは山陽許りでなく、異つたる意味に於て吉田松陰なども同樣である。人間は一生の中に少くとも四五年間は、一心不亂に心を落着けて讀書修養する必要がある。即ち此幽居が山陽に向つて其の機會を與へたのだ。人間萬事塞翁が馬、何れが得、何れが失、到底一生を通過した後でなければ、何とも判定は出來ない。

偖て必然の結果として山陽は廢嫡となり、春水は假養子として弟春風の長男熊吉を申出で、兎も角も此破綻を收拾した。若し春水に同情者無く、若しくば春水が多く敵を有つてゐたならば、彼は其の子の出奔によつて一頓又起つ能はなかつたであらう。然も彼には第一其の主たる淺野重晟を初め、執政堀江典膳などの同情者ありて、兎も角も彼の位置には何等變化なかつた。

山陽は此機會に於て父からも非常に督勵せられ、當人も亦非常に勉強した。彼は其の子の出奔事件に際するや、私かに書を其の親友菅茶山に與へて、其の處分方法に就て依頼する處あつ

た[illegible]候得共可被下候、其譯は[illegible]などとは遣し、[illegible]の[illegible]
候へば、不可然候、且は此[illegible]乃父[illegible]事にて、門々有之候、たとへば
とお[illegible]めの事に候

[illegible]太郎殿且

賴久太郎

右は不行跡の趣相聞候に付蟄居被仰付

閉門の樣なる儀に候

[illegible]太郎

右は家内示し方不宜候樣相聞へ遠慮被仰付。

などと申類の事にて、蟄居と申候へば例に入れ、錠入りにて飲食は窓より入れ遣候事、是迄出奔の後、其通りに仕置候、其時は狂病と申事故、圍へ入候と申出候計ひ、其代りに病氣追々宜敷と申出候故、又圍を出し申度と申候間、只今の通りに相成申候、此後蟄居と申事に成候へば、生涯出申事叶ひ不申候（中略）老拙が有の候共に成候上は、一藩にて失面目候事共に候、其の遠慮と申候事は、長き事は無之例に候へ共、何分面目は無之候

右不行跡と申事、[illegible]夫の賊盜のと申事には無之候、第一は冶情より浪子遣ひ過しと申樣の事、少年の常態不足罵候事に候へ共、其所以然の所を申候へば、甚以可恐候事にて、餘計亦甚、かの梶山などは、腹心の者に候へば、相謀罷在候、他人は後ろ指にて嘲嗤罷在候、此節頃に防ぎ見居申候、何分にも急成事は無之候、何卒貴地か鴨方邊共、京大阪に候へば更妙）にて、養子に遣候所は有之間敷候哉、左候はゞ他國へ養子に遣度と申候て、此地を引拂ひ可申候、後は濟み可申候、此度養子の先きの有之にても無之、たゞ可也に仕居相成候て、朝夕畑を立てる事も出來候はゞ其土地に暫時宅をかまへ候迄の計にてもよ、

「中略」何分是非此事に一物人いたし、其上かゝる物人事にも可成い、猶心御配し可被下候、左兄の心をも、左様か家作のためにも是と思、かゝる不快の事を出来候事、御憐察可被下候、御近々に大野に誠なと申様成ものに成候かとも存じ、是も幽室の人に是不申候へば、許可は出不申候
親存とも承存候故、内々申試候、御考可被下、御賞後内丁

此れに恐らくは山陽が幽室を移して仲城を許されたる後の事であらう。父は此の如く彼に随分に寄し養子生きを親友に向つて依頼しつゝあるに、當人の山陽は實に一室の中に蟄居して而かも意氣沖天の概があつた。予は昨年十一月廣島袋小路國泰寺賓頭鋼次郎君の廬を訪ひ、山陽幽居の跡を見、鋼次郎君が秘蔵せられたる山陽が其の親友梶山與一に與へたる陳情書を示され、之を見て予が山陽に對する疑問の一切が悉く解決せられたるを覺えた。故に君に乞ふて其の寫を得た。それは例の長文で實に堂堂たる大文章である。自ら紙を節約したといふた通り、如何にも細字で書いてある。之を一讀すれば彼の一生が全く他人に依頼なくせられて送つたものでなく、彼自ら彼の傳さんと欲する所を傳したる事が判る。此れを彼の本に就て見れば、或は彼自ら彼の一生の陳情書と云ふ事も出來、之を彼の一生に就て見れば彼の一代記と云ふ事も出來る。彼は當初より[illegible]い下に軒せ、予を突いて貴人の前に[illegible]ずる論者たることを目的としなかつた。彼は少くとも地方的學者でなく、天下の大部に出て、文壇の上に赤幟を立て、一代の文事に貢獻せんと欲してゐた。此れは餘りに長文であるけれども、未だ一度も世間に之を出したること無きものであるから、煩を厭はず掲げる事とする。

僕ニ頓首シテ謹テ啓ス

君修（梶山與一）足下。此ノ口數々兩家ノ間ヲ奔走シ人ノ間取モツテ煩ルコトヲ得タリ。未嘗無望不實故人情ヲシコレヲ察スルニ、家翁（春水）、家叔（杏坪）ノ意足下ノ心ニ感ズル所ナルヲ以テナリ。不然ンバ如何ゾ肯テ碌々走卒ノ労ヲ不厭モツテ此ノ中ニ周旋スル如此ナランヤ。感謝ニ勝ヘン。

過日トキニ書翰ヲ寄サトサル僕ヲトリコレノ缺ル久シタヽツモフニ[illegible]

[illegible]

[illegible]

此[illegible]一身ニ自[illegible]ノ身ノ不[illegible]ナルスラ如[illegible]

ノ志スノ私情ノ合ワナレハ僕[illegible]安自ニアラズ日人[illegible]

[illegible]

イカニ一臣ノ[illegible]見ガル[illegible]

一[illegible]ノ大綱ノモ[illegible]ノ秋[illegible]見々トシテ[illegible]

[illegible]明友[illegible]モツテヲモンミレバ

[illegible]今日ニアルヘシトツヰヒ居タレドモ不[illegible]今[illegible]

皆ニ附從セラル僕敢テ嗜好ヲ叱罵セザランヤ然ニ耳目ヲ讀ノ上層ニ列スシカレドモ僕敢テコレヲ以テ律令トスルニ非ズタヾ從前ノ沉滯ニ文リタレバ循序漸進如ニ糧食ヲ案セント欲スルナリ故ニマヅ僕ノ意如此シト云コトヲ諸執事ニ觀シ選シテ諸長ニ達セバ幸甚足下亦謂觸リ經籍ノミナラズ文章ノ書ナドモ望ミ出ブベシト周悉除挹コヽニ至ル感荷々々タダ僕ムカシ唐宋以後ノ雜書ニ渉獵シ金匱石室以上ニムカエバマヅソノ蹟カタキヲ悔リカツヲモシロクヲモハズシチヤミシコレヲ讀ルニ聰柔ノ木ニ慣レ盤根錯節ニムカエバ酣斷スルガ如シモト利器ニアラサレバナリコヽヲ以テ數百卷ヲ累ヌトイエドモ經詁ノ旨ヲ得ルニ由シナシ其歸カナラズ終身カノ那他底的ノアイダニ咲々トシテヤムニ至ル今コレニ艾リタルハツトメテ彙皆ノ好ムトコロ唐宋以後ノ書ニチカヅクマジト欲ル也荇孝亭子、朱子、手定ノ經注ノホカハイラヌコト也僕足下ノ悉スル所ノ如ク窮愁以來奮然志ヲ立テ古ノ廣觸司馬子長モシクハ柳河東氏ノ如ク大ニ其力ヲ文章ニ肆ニセント欲ス亦タヾ六經四子ノ文投勝ト一樣ニナリ古聖賢ニ目擊耳提スルガ如クニナラント欲スルノミ其餘ハ秦漢以降縱豐ノ交ニ至迄ノ衡聞ノ放失ヲ罔羅シ遺日太史氏ノ乘錄ヲマツト公業ヲナサント欲スコレマタ處士ノ一大愉快ニシテ麟經ノ遺意ノ萬一ニ副ヒ且ツ吾文ヲ無用ノ物ト呼バルルコトヲ免レンカコレマタ家翁昔シ僕ニ命ジタルコトアリ語猶在レ耳也シカシ罔羅ノ業ハ身自由ニナルノ時ヲマツ今ソノ勞繁ハ具ニ體而微ナルモノヲナシヲキタリマタソレニ續キテ心中ニ浮ミ出ル每ニ書付ヲク也彼塲偏ノ細人例ノ猜疑懸擬ノ議論ヲ發シ僕ノナストコロヲ見テ盻々然トシテ凡ソ學者操レ觚御當代ノ忌諱ニ觸レサヘセネバヨキニ細人ナドハ日本ノ事ヲ叙論シサヘスレバトガメアヤシム也舊習未ニ脱洒ナドト云ハレンコトヲヲソレテ筒ニ秘ス僕ガ文章ハ如此キ志ナレバ世ノ賦頌記序詞壇ニ坍ヲ闘ス

モノト異ナリ夕々唐宋以後ノ文ナミヽコトヲ欲セズヤムコトナク[illegible]秋戰國先秦兩京ノ其言達調テ於六經ノ風ニ[illegible]バコレヲ學ンデ聖人ノ旨ヲ得ルニタヨリスベシ且ツ僕ノ所以黜之不文一タヾニコレノミナラザル也又不二自揣一時ヲ得テ小說ノ學ヲモ世ニ內セバカノ所謂豐岡（今此風ヲトロヘタル樣ナレドモ凡文ヲ以テ家ニ名クルモノ陽排陰取シテル樣ニ存申候（原注））古文辭ナルモノヲ毆碎セント欲ス足下亦例ノ狂志ト笑フコトナカレ且ツ僕ノ其極緊ヲノブルツキキ玉ヘ讃ノ光芒横鋪鑑ニ溢一時誦延ニ今ニユエンハタヾソノ文運ノ開ノ會ニ出デ時ノ無人ニ乘ジテカノ新異ノ說ヲ立テ較スルニ文章ヲ以テセシ故也今其學ヲ破ラント欲スルマヅ其而道トタノムトコロノ文ヲ絕ツニシクハナシ日本ノ文字謙ク彼老漢ノ附隷也近來一二ソノ而道ヲ絕ツヲ自任トシ居ル先輩アリ僕其文ヲ見テ惑ヘリ諸ナントナレバ仍殆定ノ餘習ヲ脫洒スルアタハズ模擬剽竊斷錯スル上ヘニ北地（李夢陽）彰郡（何景明）歷城（李于鱗）太倉（王元美）ノ茶飯トキニソノ間ニアラハレ古辭ヲ割裂綴緝スルノ習ヒ依然タリ某々ノ俊髦マタヾ斷ニ所謂靡ヲ闘スコトヲ務メテ實用ノ文ヲ遺ス其氣味冒緝敷腴ニトヾマツテ勁氣條骨雄俊縱横古ノ龍門後世ノ眉山ノ如キモノナンゾソノ寥々タルヤ中ニ就テコレヲ論ゼバ滬府（水戶）史臣濟泊（安積）觀瀾（三宅）諸君子實ニ有用ノ文ト云ベシナカニモ宗子ハ眉山ノ風アリシカト覺ユ雖群鶴ト云ベシ然ルニ諸子蔬ニ敵スルアタハザルハ重厚ト輕浮ト異派ト謂トイヘドモ要ハ之ヲ它ハ唐宋以後ヲ學ビ蔬ハ頗ル古典ニ親ミ其文雅健簡勁製以ニ光燦ニシ故也近來諸家ハスデニ縱横雄俊ナルアタハズ又或ハ雅文中ニ語錄中ノ俚語ヲ間出スルアリコレヲ以テ蔬ノ膜ント欲ル難シカツ字句顚倒ノ間ニ炘々シテソノ優劣ヲ抗ス抑末也乳臭綴執ノ身トシテ妄リニ先輩長老ヲ上下スル不遜ノ至極ナリトイヘドモコレニシ[illegible]

[illegible]所以[illegible]ノ[illegible]

是[illegible]見[illegible]出[illegible]所ナリ[illegible]

ハ傾[illegible]ノ[illegible]學[illegible]代[illegible]何ツ[illegible]

ナノシトス家[illegible]ハ學[illegible]提[illegible]

ニ議論ノ[illegible]攻ル[illegible]中國[illegible]

ヌ[illegible]

ツ今[illegible]何[illegible]思[illegible]之[illegible]ニ[illegible]

ヒカノ議論[illegible]ノモツテ[illegible]以降[illegible]

ント欲ス[illegible]力[illegible]

ニ文字[illegible]心[illegible]

ワザレトモ[illegible]ハ[illegible]ノ[illegible]心[illegible]

子ノ一忠臣タランカ[illegible]人[illegible]

ノ學ハ父母ノ[illegible]

詞小[illegible]大[illegible]身ノ[illegible]小技ト人ノ[illegible]

出ヅ[illegible]

ト云[illegible]

ヲ[illegible]治[illegible]之文[illegible]之文[illegible]之文[illegible]

史[illegible]之文[illegible]是也[illegible]之文[illegible]也

[illegible]

時[illegible]之[illegible]

也ノヨ[illegible]人[illegible]

ヲ文字[illegible]此[illegible]

定論トス[illegible]

ノ[illegible]今[illegible]以[illegible]

レ[illegible]シカシ[illegible]ノ[illegible]カノ[illegible]

日本ノ時[illegible]以降[illegible]ノ習ヒ盛ニナリカケタル頃ニアタリテハ

是ノ以テ[illegible]レントスコトノ[illegible]我ガ[illegible]ニ入リ西土ノ[illegible]

ルニ文ノス[illegible]、[illegible]トスコトニ心付カズ文ノハナミテ理ノトキ我

論[illegible]シテ彼ノ[illegible]アリヨレ[illegible]ニ[illegible]スルニ非ズ[illegible]ノ[illegible]文

ニ心ス生[illegible]カノ[illegible]以後ナル者ニ[illegible]

安スカツ其[illegible]ト[illegible]別[illegible]不[illegible]カツ無用[illegible]ヲ用[illegible]シ如[illegible]

ヲ附加[illegible]下[illegible]カツ議論ノミニテ叙事ニノヨバズ[illegible]ノ叙事モ

古今中上落下ニテ項羽紀ナドノ[illegible]タル風ハ[illegible]ナリ[illegible]足ヲ

[illegible]スルニ足ラズ[illegible]ノ[illegible]時[illegible]ノ後[illegible]ノソムニ由シナケレドモ[illegible]

ノトコロハ[illegible]ノ本旨實用ニ[illegible]ニトマリ我[illegible]不立文字[illegible]ノ

心性ノ盛ニ說カレシモ[illegible]法[illegible]盛ナリシ故ナリ[illegible]故モアリ日本ノ時

運ニハ[illegible]ノ論[illegible]故ニ[illegible]說ノ招ク[illegible]カト[illegible]

指人心見性成佛ト云ヒ[illegible]ニアラザル者ノ大ニ人ニ示シタシシカルニ本

ダ[illegible]ノダニナシ得ズ[illegible]山陽自身の附することなり[illegible]

ル文字[illegible]ノタメニ[illegible]シタルモノニテ[illegible]

詞[illegible]方[illegible]ノ[illegible]シキモノ[illegible]ノ[illegible]

明本[illegible]ノ[illegible]

[illegible]自[illegible]ノ文字ニ[illegible]

ニ[illegible]大[illegible]今[illegible]

クハ[illegible]人[illegible]ノ[illegible]アリ[illegible]

詩ノ文ノ學[illegible]山ノ文[illegible]之[illegible]

ノ[illegible]スクナシ[illegible]

モノ[illegible]ノ[illegible]以下ハツノ[illegible]

ヨリ[illegible]ト[illegible]カニス然ドモ先ヅノ論ノ[illegible]

ソノ[illegible]シタル[illegible]ソマタ〳〵[illegible]〳〵スレバ[illegible]ノ本邦古今ニマレ

ナレ太平ノ世ニ生レアヒ文運大ニヒラクノ會ニ用テイマダ賤ノ丈夫ナハ古儒ノ書ニアラズヤ願クハ父兄施友ノ今日今ニ此ノ等ノ役ヲ委任シ玉ハヾイササカ家學ヲ卒業シテ腹ノ大略ヲ承ント欲スケ様ニ申セバ小技ト云テ御笑アルベケレドモ僕モト是等ヲ小技トヲモヒ功名ヲ經濟ノ上ニアラハシ不レバ(シカアイン)游俠ナドシテ娛樂致シ身トヲモヒシ故此様ニ至レリ今ヲモフニ蕭曹ノ功名諸葛史ノ治績諸豪俠ノ素標ナドモミナ子長氏ノ區々筆端ニ㳂置スマタ孔鄭等ノ注疏精粗二子長ノ麟經道旨ヲ得タル勳慰ノ親切著明ナルニ及バズ其度ノ功勳モ柳州ノ一學大ノ不朽ヲナシタル業ニ及バズ叢者ノ如ク衛賊ノ見ニ已レノ不案内ノ事ヲ外慕センヨリ幼少ヨリ家翁家叔父ヲ勞シタル文學ノ可レ悅可レ樂終身遊隱ノ地トスルニ足ルニ如カズト存ジ極メ候也彼不レ知レ我者見レ此必言ハン語氣ナヲ醇粹ナラズ粗豪舊習未レ脫ト僕ハナントカンガエテモカノ印板吠嘷ノ徒ノ如クナルコトハ死シテモヨクセズカツ生レ得テ骯髒モト苦衆叢中ニ俯仰スル姿ニアラズ只鴻ノ志日ニ堅シ濱居ノ諸恩ハ忘レザレドモカノ・今許ナル者諸子ナル者ノ如クナル身上ニテ酔謔ヲ假借シ長老ニ媚ルコトハイヨイヨヨクセズ只行僻ヲ始終聞キ申度故昔日ノ事ニ因テ此ニ及ブ千萬諒察

此書ハ書積一事ニツキテ長日上ニ及ビタル也其間忘疏ルナク自許太過剛愎不遜ナル語多シタヽ仰次ヲ傾倒シテ知己ニ示サンコトヲ欲スル日ヲスボメ面ヲ莊ニシ兒女ノ人ニ媚ル如クシテ人ニ溫謹君子ト云ハレンコトヲ倖フ者ノ如クナランコトヲ欲セザルユエ也シカリトイヘドモ知己ユエ我ヲアヤシマズトヲモフ也不知已者ニイカデカヽル壯言ヲハカンヤ●●●●ハ要語也頭字ソコラ内ニ書加エ御讀被成ガタカラン其段御推恕可被下候此書紙ヲ省ユエ也呵々

請レ讀トコロノ書目コヽロミニ臚列如レ左

論二

右ハ僕日父ノ論イヒシ[illegible]ニ[illegible]一[illegible]ステ[illegible]之[illegible]之[illegible]父母ナレバコレヲ願トシテ[illegible]ニ[illegible]リ父ソノ後コトニ[illegible]心ニ仕度候ミナ此書ヲ史只トシテ諸書ニアテル志也

孟子　小學　孝經

大學或問

大學

小戴

大戴

儀禮

詩

書

周官

春秋

左

公

穀

中庸　近思錄

易

右ノ如ク次第シツノ講讀ノ急シキハメ度候

六經ハ修身ノ業ナレドモ先其字面一通リスマサバ(老列荘[illegible]列等諸子遠經書目氏荘淨[illegible]秋[illegible]白虎[illegible]通[illegible]見西京以上ノ書ミナヨミ申度候)

文章ノ法ニ仕候書如左

史記

項羽紀留侯傳刺客傳貨殖傳

左氏 宣成ノアタリ

莊子

國策

漢書賈誼傳鼂錯傳

荀子

韓非子

如何ニシテ叙事議論ミナ其妥當ハ

和ノ文章ハ賦頌記序碑碣等ニトドマリ時勢ヲ論ズルコトナシ蘇氏ノ如キ史論ナシ故ニ賈誼韓非ヲミルコトノ求メ又時務ナドハ尤大ニナリ易ク韓非子ハ簡勁ノ辭ヲ以テコレヲ行シ餘然シ諸書ソロエルモ六ケ敷ケレバ

○文體明辨ノ同内賈誼ナド少用テノル所ノ國ノベキカ國策ハ用所ニアルカ

屈山ヲ學ント欲セバ國策賈誼韓非子荀子等ヲ觀熟セザルヲ得ズ

經書ノ外文體明辨・唐宋八家文讀本ハバアノ内ニハ古文モアリ又後ニ云トコロノ時輩屈山ナドノ意味トアリ日録ヲ劉臣ヲ用シモヨイ申ベシト

日東ニ生レタル儒ノ職分ニハ日本時勢人情ノ條理ヲ内外ノ利害ヲ議論シ我邦ノ時宜ニ合スベシトノコトノ此日氏ニシツスガ當リイヱ也タヾ是ヲノ人ガ已ニ聞クホドナシニタリ日伸ムカシヨリ自ノナリタルコトハ和史ヲ覽ユル事也今國分ニ心付タル故カタノ八和事ノ議論スルコト多レ以人事物議ヲ起サンコトヲ懼ル故コヽニ對ス表箚及叔ナドハ已ニ儀

ノ如ルコトノカシ必シモ疑ザル也

タトエバ帝子ニ臣シ命ガ如シ必ズ已レヨク辭命ノ撰スル者而可也時輩ノ從一タビ筆ヲトレバ顛倒ダラケナリソレ八僞ハ千古聖人ノ命ヲ當世ニ行ノモノ也而如此人皆此韓子ノ行ノトコロ其人ノ命ニ相違ナシト云フヲ信センヤ故ニ漢ノ人ノトコロ古人ノ書ニ附スル得ザル者アリ

ニ蘇竹仕也蘇氏ノ聖人ノ道ヲ術ト見タルハトラズ戰文縱横ノ學ノミ

關子ガ城ハ少年ニミセメ南野作也ト云ハレシコトヲ今ニ伸合ト存ズル者多シ僕ハコノマズ南野ハ略弱散陳ノミ

足トノ惡ニスル所ノ如ク得邪以來スコシツヽ詩歌ナドナシタレドモ去去年忘ソ文ニ立テシコノカタ詩モ歌モ平歸ノ折ヲ得ルニ絵セズトナモヒ日來之嘆ナドノコトヲ思合セテ一切ヤメタリ故ニ詞藻ヤ略高ヤ也ミナ我志ノ中ニアラズ

今マデ對股ノヨシト思シ也碑ノ類記王ノ作ヲ記ナド對股ノ用ユ六朝風ト流記リシトモ目リ分今アタリニナキコトト存候

○此トイエドモ固ヨリ朝揚退波ノ欲スルニアナズ實ニ大觀ニ大陸シ四方ヲ觀欲シテ思遠ニ期ルコトヲ堅ク成メ者ニ指日當ラレヌ様ニナシテ千古ヲ觀ルノミ

去ル人僕ニ語テ日在外無ニ在國 國中人ヲ四方ニテモ耻時ヲ致ナドスレバ國ニ裨補スル也ト

僕ヤヒテ失笑シツグニ嘆ヲ以ス蛇人果ハ果ノ都ノ望タリト呼バレバ量ヲ以テ國光ヲ増スニ非ズヤ本ニ諸父兄朋友ノ恩ニテ僕ノ素願ナラントスレバ又カヽル紛議ヲ發シナコレヲ沮ミ僕ヲ埋沒ニ終エシメントス慨歎スベシ足下千萬御察伍。僕翻ス

此書翰は歲月の徵すべきものないが、書中の文字と山陽の履歷

とによりて、享和二年二十三歳頃のものと推定せらる。猶此て以上つは郷黨の親字もて一枚の紙に認めたるものにて、更に其の上層の餘白にも片目等が列記せられ、又た本文の間に挿注がある。然も彼の胸中云はんと欲する處を次第順序無く思ふ位に吐き盡したるものなれば、文章として見れば聊か體を成さゞるものもあれども、然し之は實に彼の僞りなき告白狀にして、彼一生の本事は殆ど此處に盡くると云ふも差支あるまい。

今試みに此中から主なる要領を抽き來らば、彼は道學先生として立たず、文士として立たんと欲した。春水は彼を儒家第二世とし、立派な藝藩の御儒者と仕立上ぐる積りであつた。即ち道學先生第二世である。然るに彼は當初から其氣分になれなかつた。彼は死すとも能はずと云ふてゐる。而して彼の所謂文士とは詩文を作つて生活を爲すと云ふでなく、他の方面に立脚地を覓んとした。それは所謂修史である。つまり文學上の素養を修史の上に發揮して、中原に出で他の文士と角逐して、自ら日本の學界に一生面を拓くと云ふが彼の目的であつた。如何に彼が批評的本能を發揮し得たかは、此文を見れば實によく判つて居る。彼は徂徠學に滿足せず、さりとて當時徂徠を駁する山本北山一派にも感心せず、彼は自ら支那文學の精髓たる先秦の古文辭を研究し、之を以て徂徠派を驅逐せんとした。所謂室に入つて戈を操ふとは此等たる[illegible]、古人の口吻を模するこ[illegible]擬發的の古文辭派、若くは[illegible]口吻を爲す[illegible]人、何れも唾でも吐き掛ける者共であつた。彼は支那文學の精髓を得、之を以て支那の經典を解釋し、且つ之を以て日本の事態に當嵌め、之を以て謂はゞ支那學を日本化する、即ち日本の思想と生活に十分消化せしむるや否應用せしめん事を明した。予が彼を評して一代の批評家と云ひ、又た日本的若しくは國民的學者と云ふは此れが爲めだ。彼は出奔したるが故に己むを得ず父の相續者とならずして別に大地を開拓したのでなく、別に新たなる大地を開拓せんが爲めに出奔したいのであつた。罪を獲たから彼の生涯が變化を來したのではなく、變化を來さんが爲めに罪を獲た。彼の志は本來の志で、出奔と否とに關係するものではない。彼は全く吾が思ふ通りの生涯を自ら造り出したものだ。

偖て出奔は彼の一生に取つて大なる失策であり、取返しのつかぬ失敗であり、到底癒やし難き深傷であつたが、而も出奔の結果として、二十一歳から三十歳まで幽居に屏居したのは、彼に取つては大なる幸であつた。

彼は此の幽居屏居中、存分に讀書し、存分に作文著述し、存分に思索研究した。彼は初め狂人取扱をせられ、座敷牢に入れら

れた。それが寛政十二年十一月三日であつた。即ち彼が二十一歳の時だ。翌年四月二十八日、幽室を移し柵が許された。其処を仁室と呼んだ。享和二年二十三歳十二月十日彼の母の日記には斯く書いてある。

　十二月十日、晴、仁室より著述物見せる、伊助より取次ぐ。

此の著述物と云ふは日本外史の初稿の一部であらうと云ふ説がある。或は新策の一部ではあるまい乎とも思はれぬ事はない。斯きの山陽が梶川某に宛てた手紙の文句で見ればさうらしく考へられない事もない。然し當初は新策も日本外史の一部分として著述せられた事であるから、日本外史の初稿と云つても差支あるまい。尚ほ彼が修史苦書の中に在昔凡例と云ふ題目がある。後にこそ改めて六略八議とした。若し夫れ叙事の類は彼が陳情書には、「永享以降[illegible]に至る迄の治乱の得失を網羅し」とあれば、當初の目的は足利氏の時代頃より豊臣氏の末まで百七八十年間の事を書くつもりであつたが、それが漸次時代から徳川氏まで延長して来たのであらう。一道の光明は既に此處に發射せられたのだ。享和三年十二月廿日春水の養子能吉の内伺書を届けられ、同六日山陽の幽居は許され、假名倅二の代に一武傳す可しと申渡された。其文句は左の如し。

同氏久太郎義先年出奔、其際逃隠、囲ひに被入置候処、病氣追々居合候に付、先例より出、勿論門外者不仕、家内引籠候、猶猶去相加申度候、願之通り、格別を以て相済候事、

而して又其翌年文化元年甲子正月十五日假養子能吉の養子願ひが公然聴許せられ。山陽は茲此處に純乎たる一個の部屋住となつた。彼は最早宅内にては値すると云ふ許りに殆ど自由を得た。然し彼は幽居中[illegible]度の[illegible]を[illegible]し、六月頃より眼病に罹り、右の眼は腫れ塞つて其の為めであらうが、例のヒステリイは復た發し、而る父母に心配を掛けた。六月八日の春水日記には斯く書いてある。

　八日、晴、見夜[illegible]兒ノ病氣ノ事アリ、伊助[illegible]ス

[illegible]兒と云ふが最早二十五歳の山陽だ。決して子供ではない。伊助は春水家に入りの若者であつたが、彼の推薦にて本藩に出仕したる手島伊助だ。此年山陽は偶然にも市河米庵と相見えた。米庵は市河寛斎の子で、寛斎は曾つて林家の塾頭をして居たが、寛政の學制改革の際に罷めたつた。然し彼は江戸に於ける新進の儒者であり、其子米庵は長崎に赴き、其の帰途廣島に來り春水を訪ひ、此處で偶然山陽と出合したのだ。當時米庵二十六、山陽二十五、山陽は當時の事に就て「孔陽余ニ長ズル一歳、髯テ予ノ山陽ニ於ケル、如ノ揭ゲテ役帰リ、偶然トシテ共ニ其志ヲ言フ」と書いてゐる。而して米庵の日記にも當時の事を斯く記し

[illegible]太郎

二十三。

二日、七日　夜明、頼先生ヲ訪フ。令子出デ、同ク食ヲ共ニシ、先生看ヲ命ジ、余ヲシテ陪食セシム。

六日、夜明、頼先生ニ歸ル。先生余ヲ待チ談論スルコト數時。……午後此地ヲ發セント欲ス。此ヨリ前余少ク風邪有リ、頭痛絶エズ。遂ニ留ル。先生余ヲ遇スル甚ダ厚シ。

米庵は周防の錦帯橋見物の爲めに出掛けたが、舟の都合悪しくて頼家に歸り來り、風邪の爲めに留まつた。

七日、發熱甚シ。寒シ。痰咳之ニ加ル。平臥ス。令子僴二余ノ左右ニ侍ス。投藥自ラ勞ス殊ニ厚シ。

九日、先生朝ニ出ヅ。午後ニシテ退ク。令子僴二ト談話愈々熟ス。

之にて觀れば如何に山陽が米庵と相得たるかゞ判る。山陽は決して無我無心に世を渡る漢では無かつた。彼は交友に就ても常に獨り自ら商量した。彼は友を求むるの道も知り友に交るの道も知つてゐた。彼は宣傳が人の成功には最も有力なる要素であるを知つて、如何なる場合でも其の機會を取り逃さなかつた。殊に江戸は宣傳場として最も有力に且つ最も有效である事を知つてゐたから、彼は苟くも江戸から來た者には特に心を用ゐた。彼が米庵の病氣を自ら親切に介抱したるが如き、且つ米庵を殊更よく優遇したるが如き、固より他心なかつたとしても、而も米庵が江戸に於ける名家の子であるを山陽が意識してゐたことは爭を容れない。彼は眞心の一部にて山陽を江戸に宣傳せしめんとしたのであらう。其の結果天下に風靡するまでに決して至らなかつたにせよ、山陽から十二分の好意をもつて優遇したる米庵が山陽を江戸に吹聽した乎、將又た山陽自らがその廣告に心掛けた乎は、暫く措き五山が作つた『五山堂詩話』を見れば明白だ。

春水ノ子襄、字ハ子成、甲子ノ歳、米庵西遊シテ歸リ、屢其才調ヲ談ズ。余ガ胸中ニ横ル者之ヲ久ウス。忽チ杏坪ニ托シテ書ヲ寄セ、亦タ相訪フノ意ヲ道ヒ、且ツ近業一冊ヲ示ス。頃日又米庵ノ机上ニ於テ、其戯文將鼠子傳ヲ見ル。甚ダ愛ス可シ。此ノ如キ才人、我將ニ黄金ヲ鑄テ之ニ事ント欲スル也。

彼が杏坪に託して書翰を五山に與へ、又近業一冊を示したのは、恐らくは彼が尚廣島屏居中であつたらう。五山をして我れ黄金を鑄つて之に事んと云はしむるに至つたのは、山陽の腕前が尋常で無かつたことが判る。且つ五山の語る所によれば、五山からは碌に返事もしないのに、山陽は屢ば五山に通信してゐた樣だ。文化二年彼二十六の正月、春水の病氣を看護し、五年振りに初めて、『觀德川氏卅八將圖』の長篇を作つた。同年五月には春水の病中山陽は愈父の助教となることを得た。

此儀教道筋仕廿相見合門外も仕廿度候、存寄之通、可被仕候。尤勤學筋之儀者勿論、外向參會等之義も、萬端謙遜第一之心得、肝要之事

此時に先立ちて、彼に親き菅茶山取持ち一方ならずの骨折なり。之と杏坪は其日記に書してゐる。茶山は常山不盈の事だ。如何に山陽が彼に負ふ所の多くであつたかは此の一事でも思ひ遣らるゝ。兎も角も彼は殷中の大門目の下に人並の交際が出来る事となつた。彼は此年に於て初めて公然門外出行をするを得た。七月には舍弟御次郎と木川に卅遊びし九年振りの行樂をした。八月には父に從ひ竹原に歸省した。九月には菅茶山西山拙斎が交杏坪を竹原にみふたから、共に礼四山照蓮寺にて雅會を張つた。山陽は竹原四山序。を作つた。同年十月伯父の上國途中か大阪に過ぐ、頭次來訪した。彼は途中に春水の長子にして、頭族の見た。彼の一文を以て抑ふ可し。

足下與吾以門ノ風雅ス。行動クハ時ノ以ノ足下ノ目ガ可カル一文奈ノ以テヤン。他人爲リト雖モ、我人ノ交ヲ開セイメル也。足下願クハ今ヨリ俗ノ習ヲ除トナリ、他ノ俗ガ進ノ弘セ、子聚歡ンべ。

曲伝生とは史記に出てゐる故事だ。要するに彼が后を人下に寫告するから、作る所は下に流告せよ、后に流告の交換をしようではないかと云ふ事だ。如何にも簡單明瞭の語である。尚彼が大阪滞在の時に贈したる偶文がある。之も同年の事であつた。それにはよく書いてある。

與大槻子繩論詩

大槻子繩、一嘗ッ寄セテ曰ク、古人古子ト称セシ元服、古賀溥卿トソシテ共ニ書カシメント欲ス。吾先ヅ古人ニ於テ並ニ二子ニ致ス。寂ニ子ト盟ノ結バント欲スルコト久シ矣。然乎、以テ富一盤血トス可シ矣。

子繩は蝋ち大槻平泉で、盤渓の從兄だ。恐らく彼は山陽と江戸にて相知りたる者であらう。當時既に畑井晃太郎、古賀文太郎、相久太郎は儒門の三太郎として知られて居る。元服は昭陽で南冥の子、溥卿は穀堂で精里の長子。

山陽は相變らず頭る勉强した。文化二年彼が二十七歳の時には小文規則や古文典刑が出て來つた。山陽詩鈔には文化四年初めて東遊以來の詩が一首出てゐる。其一は、二月九日父見形日作家翁、但言語知耳忌、と云ふ題で、帆丈字翁の祭日に於ける時である。其二は、丁卯春事、として時事を咏じたものである。當時米價騰貴して其路内の賊が北海に來つて天下を驚かした。彼が詩は之に及んで居る。此年彼は新策は開行本として成つた。之は彼が歴史中の一部分として組立てたものであつたが、後に歴史と切離して別書を成したものだ。其中の八論の初めなる樂論は十七歳の時作つたものと云ふ。此書は彼が晩年改めて新論となし世に行はれたが、然も新策は新策として依然別に行はれてゐる。文化五年彼年二十九、初めて武元登々庵と交つた。登々庵は備前の人にて郷里の名あり、天下に周遊し、山

陽は支那に足を入るるに及ばず、真実つてゐる一人であつた。
當時山陽が如何なる方を有つてゐたかは、彼に於ける消息に答へたる書翰がよく之を悉くしてゐる。

新年の御慶拝見仕候、如レ命改歳の慶滿地同然、目出度申納候、弥無異御迎新被レ賀候、當地老少打揃加年仕候、舊年大阪寺川氏へ被レ托候御書、腹中か元日の頃に相達申候、其答は已に寺川申候様覺申候、其節は誠に珍貴の硯御惠投、家翁大悦此事に御座候、新歳の詩此硯にて試筆候て公上へも差出候事御座候、家翁へ加歳の命を蒙申候、今春妹一士家へ縁付申候、乍レ序慶事御知らせ申上候、僕は碌々依レ舊感慨逐年新御座候、被二仰下一候義縷々承知仕候、奔走中過二光陰一詩文等も不出來と□御諭何方も左様と存候、僕杯は其業に候處兎角時明不レ申候、况如二賢契一乎、家翁病氣逐年復レ常自身養生も至極よろしく今年は珍しく藥を止居申候、萬御降心可レ被レ下候、身體髮膚の御願、御附紙御座候乱覺不レ申、其外は相違候事と被レ存候、猶何申聞べく候北邊恂々如レ諭、靜ならねば隱家もなしの歎如御座候、然し志士試二其所レ學一の秋とも可申哉、僕弱冠學二兵法一其後は純一の書生に御座候處此節は浮鮎故懸チト出申度様御座候と申は誠にて實は杞憂此事御座候、大小御聞せ面白御座候、上ツの字をドに仕候はゞ懸念時勢と可申候、敝藩には公儀打拂の御號令に付別に解有レ之此事於二武門一可レ恥事にあらず、鼎立中間敷と申事にて人數備有レ之、僕父子も編二行伍一候、然し是は謀畫の列に御座候て急に喋血の患も有レ之間敷とたゞ存候、何分如何なる時運になり候事にや歎はしき事に御座候、右に付理裝致向の様の義心がけ敷、それに家妹の資送等彼是左氏所謂有二三年之艾一有二索中之米一にて御座候、僕依然多病近來得二一絶一申候

御一致可レ被レ下候、將又奇を兩人一候、此頃二一種ノ大論申候、是實ニ其人一、轉用其言一、食二此遣與一、詩評之〔ニ〕、當實にて〔候〕、實論を自信候て松崎之二一□存れ候事如何敷候、何分方今時勢人才之人大成信之人無レ濟濟邦一候はねば事之結局未レ可レ知候、何卒內村候御指役さし度事御座候、是も信謀一件にて國家の評不宜にや。此等御覽後御火中可レ被レ下候多言日咒申恐候、頓首

三月二十九日

今春も風雨中に暮申候、防邊の事に付文章も御座候へ共公便急にて不レ及レ入二貴覽一候、何々良藏君東行寂寞と存候、京都同方の義承知仕候、是は大阪便にて候、此間龜井元鳳より一書差遣し是も母喪に遭、神氣沮脫と申越候

尙此年彼は亦豐前の僧大含の來訪に接した。大含は彼が親友の一人雲華師だ。好事魔多し、彼も最早三十歳に近くなり、父の覺も追々芽出度なり、一家も圓滿に成りつゝあるに際し、彼の舊病は復た再發した。文化六年正月頃より存りに例の外出やら夜深しをした。彼が義弟權次郎と共に惡友相作ひ、頻に脫線したる消息は、彼の母の日記がよく是を語つてゐる。其の要領左の如し。

二月十二日、晴、久太郎素平へ行
二月二十三日、晴、久太郎素平同伴、東邊遊行、歸遲、甚不束也
三十日、晴、久、權、牛山園（杏坪）へ行、桃林從方などへ寄り、四ツ頃より夜かね前歸宅

三月卅日、晴、久、榎、昨日歸ヱく、いそしかる
二十九日、晴、久、森平へ行、沙汰なし
二十九日、晴、久太郎森平へ行
四月十六日、晴、有久より納兒事、書話移時（佐）
二十二日、晴、久太郎、熊田、森平へより手紙来、行よしにておふく
歸、大不機嫌
五月二十六日、晴、細生、夜田る様子也
六月十一日、晴、久太郎、夜、斷なしに田門前邊にて涼みしといふ
十九日、晴、久太郎、森平へ行、深夜歸る
二十七日、晴、久太郎平山へ行、稽古なし、森平へ行きしよいふ
七月四日、晴、久太郎、權太郎角に遊ぶ伊助も行、晝前より行き、夜
五つ前歸る
八月十一日、晴、久太郎森崎家中も斷り岡田へ行、晝六つ前歸る
森平より舟にて岡田を誘ひ行きしよいふ
二十四日、陰夕雨、夜、久太郎在寄中上、又御中間の事有伊助も列座

彼が當時如何に堕落したる事に就ては、其消息を詳しく語る必要は無い。唯彼は或は當時に戀したると云ひ、或は宮島に遊妓があつたと云ひ、種々の說があるが、要するに彼は堕落したのである。其理由に就ては彼が分家を去つて茶山の塾に往く際に、其叉人宇心自に與へたる書中の一節がよく之を語つてゐる。

小子事、御承知の通り分家へ、……何の……も、……中候、……何之、……人も御……候……、……無御……も……、……分門、……にて……も、……不

中略……にて、彌々……此度何……無御……、小子も……無御……、御定に……も御……之處、御承知の旅……に及び中候事に御座候、是も權太郎、此地に……て茶……はいりなし繁く御座候故、夫を療治可仕と……をはじめ、小……子もおもしろくなり候て、何の通……候、其内に小……心底、……門を……無人に致し、自身……よりも……を……し、……事、夫れが口惜くて、……御知れても構はぬ氣になり、……流……仕候事に御座候

之れでは、木乃伊取りが木乃伊となり、茶山は愼太郎を……から救ひ出さんとして、再び花街に陥る事になつたのだ。然し之のみではなかつたらう。一方には自家が不和……たる事も彼も自ら語つて居る通りである。然もそれ許りで無く、此方面は彼の性格中最も弱點であつたらしい。何れにしても彼は再び父母の心を傷しめた。此場合になつて彼を救ひ出したものは即ち菅茶山である。茶山は彼の父の同窓であるのみならず彼の知己であつた。茶山の炯眼は未だ彼が十歲に滿たざる時から、此の塾……器量に注いでゐた。而して彼が如何に茶山に傾倒してゐたかは、文化四年七月七日付にて茶山に與へた彼の書簡の一節にて明白だ。

一、小子大患……、……作……之不……出し……中……
有候、家翁……御……被下……分……有之候、……一……
見付候……、不……以……、……
中……不可忘不有候、近來此件より御……可被下候何卒……有之、

ず此間合仕候處には相當出置候處、自分の身にて頭を致し候へば不叶可然と何かに、かく子も左様にて相果候に可然中路中に相成候、其、以今の處に一は何卒何卒父様、父病気も本快仕兼候にて竹原へ参り候にて家は斷じて候、随分禿も尻力盡心候と存候へ共、何事も不叶候間、猶更父隔て御間之候故在事迷惑仕候、不而目事に候へ共不得不衰寄於此丈候、唯御察路、今晩其外皆則辛苦……

之は正しく茶山に向つて何とか家庭圓滿に取做して貰ひたいと訴へてゐる次第である。父からも子からも茶山は双方より懇へられ、且つ山陽の文才には兼ねて惚れ込んでゐた次第であれば、遂に双方の間に斡旋して、山陽は愈茶山の廉塾に引取らるゝ事と成つた。其の表向きの手紙は文化六年九月十六日附けにて左の通りである。

一筆致啓上候、時節漸冷侵レ肌、彌ミ御清祥被レ成御座候半と承度存候、然ば久太郎殿部屋住と申趣にて御座候、不レ苦御座候はゞ私方へ申請申度存候、私も御案内の老境、闘塾附屬いたし人無レ之不都申候に付存寄候事に御座候、可二相成一事に御座候はゞ御相談被レ成度御返答次第にて可レ然人にても指上可レ申候、先任二御聽合一書中如レ此御座候、此方闘塾もいまだ半經營に候へば、學力有レ之人に無之候ては取續出來がたく候間、偏に所レ希に御座候、尙近々可レ申上候、

斯くて春水は例の茶山の書を相談を爲し、愈公邊の許を得て出掛ける事となつた。山陽が此際如何なる積りであつたかは、前に掲げたる彼が榊守元良に與へたる書中の一節がよく之を語つてゐる。

……然る處、當時の事情にて歸國の上は何も存ぜず候ては、今更何とも致し方無之候、甚だ以て……と申し候、是は他に何とも致し方無之、此人家督方へ、私を取立いたされ候は、女中……ものに候故、右學校の後繼致すもの無之、何卒有り人を見込くれ候はば、大に忝けなく存候、さりながら大志ある人なれば、斷然の出來可申哉の由、夫れを私には知らせ不レ申、内々相談の上、廉山氏取持にて、段々小子志の所申上有之、漸く此所相濟、内何成就の上、本國まで出置候て、程なくあの方より人參り引越申候筈に候、尤も養子と申にては無レ之、家名等改候に不レ及、學統相繼候までの事に御座候、小子も心には滿ち不レ申候へども、更に斷々と致居候より先は身分片付候方に候故、此上遊蕩の事も、追々成就可レ仕と存じ、樂居申候、父母もさして老年侍養人と申すにても無レ之故、後事は更不レ申候、存に付き御闘、踏出候事故、少々私若無レ之候ては、何事か御座候節、心細御座候故、小子内銀の内持參可レ仕存候へども、今迄の内銀は、今年の遊蕩にさつぱり拂切申候て、一錢も餘裕無レ之、何卒貴兄御憐愍を以て、開札にても五両ほど、拝借はなり不レ申間敷や、甚だ無體の義と可レ被二思召一候へども、いつぞや被レ仰候趣も有レ之、丈夫必報相許、相當必可レ信と存じ申上候、勿論何事もあの方世話にて、不足は無レ之事に候へども、また内々入用の義も有レ之ものに候へば、申上試候。

是で彼も固より滿足ではなかつたが、兎も角も上方に上る第一歩と思ひ、謂はゞ茶山を初めから其踏臺として出掛けたのではなかつたか、父に於ては厄介拂ひと云ふ位ではなかつたか、兎も角も

家に居れば家庭の不和を釀し、又脫藩するに於ては、如何なる騷擾それが發展す可きや知る可からず。されば春水の心には恒に爆裂彈を抱いて眠りつゝある危險狀態であつた。幸ひ其の親友の茶山が之を引取ると云ふ事は、春水に取りては如何にも願つたり叶つたりであらう。山陽は愈文化六年十二月二十七日廣島を發して神邊に赴く事となつた。何事にも細心である春水は、彼に向つて左の如く訓誡を與へた。

菅翁へ御挨拶候には

一　先生家法大切に相守り、先生存意、毛頭背き申間敷候義は勿論、諸事瑣細の事たりとも相伺取計候事

一　先生家學精勤いたし、諸學徒相和、同く、同に課業無怠候事

一　人才を賤み不レ申樣にと、常に心懸可レ被成候

一　近邊其外附合、講習を主とし、別て御山脚家中、失敬無レ之樣可レ致候事、用人の男女共、家内之事無レ之樣可レ致候事

一　飲食衣服、自己内分の取計有レ之間敷、たとへ些細たりとも同樣の事、諸般の用人、自分相對共、皆々其意を受取計候事

一　朝夕お行事相互之時刻等、自己の便利にて自由ヶ間敷義不レ可レ有之候事

一　近所の出歸共、度々相伺候事、此儀は勿論、諸方其外へ度々足又相伺候事

右之條々能相守、何先生教示も可レ有之候

頑なつた山陽も家を離れて見れば實に殊勝に見えないものがある。彼が備後に赴く途上の十首中に

阿爺申ニ我訓一　阿孃喚ニ我衣一　何以酬ニ斯恩一　中心有レ所レ期

彼は寸心期する處があつた。此の如くにして寛政十年十九歳にして江戸から歸りたる山陽は、文化六年三十歳にして再び廣島を出で、茶山の塾に赴いた。彼は是から彼の宿志であつた通りに、中原に出で、文壇に角逐するの門出を爲した。

第十　廉塾より上方へ

山陽は心ならずも茶山の許に赴いた。大魚小池に遊ばずで、茶山の田舍塾の後繼者などとは夢にも關する所でなかつたが、然し窮屈なる家を脱出す方便として出掛けたのだ。反之茶山の喜び知る可きなりで、彼は追々年を取り後繼者無きに心細く感じた際、幸にも故家の寧馨兒を得、先づ以て安心をしたであらう。それよりも尚更ら愉快であつたは、當時彼の詩集を刻せんとする場合であつたれば。不取敢詩社教授の任を彼に托したのだ。兩人の年齢から云へば父子の相違があるが、其の詩から云へば殆んど山陽は茶山の壘を摩し、文章の上から云へば迚も茶山などの兩立つ處でない。されば茶山の塾教授には、恰も適才を得た譯だ。加之山陽は文學的良心の最も前衛にして且つ銳敏なる筋であつたれば、彼は十二分の努力を以て其の任に膺つたものと思はれる。當時如何に山陽が茶山の目に

決したるかは、菅茶山も八月二十八日附けにて伊澤蘭軒に與へた書中の左の一節を見ても判る。

私方へ頼久太郎と申す、春水の後住と申すもの、養子にいたし引うけ候。文章は無雙也。隣人は不識よく存居申候。年すでに三十一、すこし流行におくれたるをのこ、廿前後の人の樣に候。はやく年よれかしと奉存候事に候

文章は無雙也と書いてあれば、如何に茶山が山陽に傾倒して居たかゞ判る。又年既に三十一、少し流行に後れた男二十前後の人のやうに候とあれば、如何に山陽が坊ちゃん育ちであり、我儘氣儘に成長し、世の中の辛酸をも辨へず、學問の方では四十五十の人も及ばざるに拘らず、世事にかけては僅に二十前後の者と見えたかゞ判る。然るに此八月二十八日頃は最早山陽は茶山塾を飛出す可く、それぞれ其の羽繕ひをしつゝあつたのである。彼は實に七月二十六日附けにて書を舊師築山奉盈に呈して其の志を述べてゐる。

幸便に任せ一筆奉二申上一候、殘暑之節、益御勇健被レ遊二御座一候哉、承知仕度奉レ存候、其以來は打絶不レ承レ何情二本意一罷在候、誠に去臘は卒遽之義にて、委曲申承候隙も無二御座一何樣色々と御世話被レ遊被レ下御別の剰も、御親切之條々心肝に銘し、今に目前に在るが如く、忘れがたく奉レ存候、其後も度々御噂ども被二成下一候趣、叔父方より申越候、誠に愚父へ御許容も御座候へども、小子幼少より御退意に被二仰下一御馴染に被二思召下一候故哉、何樣の所業も御見捨不レ被レ下候樣、身に於て母一人なる仕候、是非は扨て、實にこれ、この御心ここに、御國へ者に御座候へば、一人たりとも御役に不レ被、存じ、二心なく付御心勞、叔父方杯も相出、其に付て等不快なおも奉レ窺、御目一覧、是も叔父共國に御座候、然る處例ながら内々心事申上候義御坐候内、外手筋より此書差上申候、今般廿年の私、所行誠に寒心と不レ可レ申、凍兩をも不レ辨義、口の端にも不レ可レ陳義に候、其段御海恕を被り候所も、何角と御恩に預り候儀、是又今更忘れ申間敷候、誠に父臣、士民より御取立を被り、外諸士よりも、御國恩海山に御座候へば、其子たる者、粉骨碎身仕候ても、御報公可レ申筈に御座候處、有之通之身分に相成、致方無レ之、又何分御使被レ遊被レ下候義、應レ出來仕候而も、生得多病病質之私、少しの事にも耐兼候故、自身に甚だ無レ覺束一奉レ存候、強而相勤候而、却て事を損り、不忠不孝を致し候樣の事も難レ計、且又私一家、重疊に官祿を奉仕候義故、一人は浪人仕候方、天道にも叶可レ申候哉、又御奉公不レ仕とも、御報恩の致方無レ之とは不レ可レ申。自身に是程の事はたしかに出來可レ申と存候事にて、尺寸の報を心懸居り候事に御座候、學者講釋等も不得手の儀、得手と申所は史學文章に御座候、是にて少々にても御國の御用に相立候樣仕度、即ち居以來、日本外史と申、武家の記録二十二巻、暮迄成就仕居候得ども、是は區々たる事にて、引用の書とも不自由、私心に滿不申、愚父壯年の頃より、本朝編年之史、纂め申度志に御座候處、官事繁多にて十枚計致し候まゝにて相止候、私儀幸ひ隙人に御座候故、父の志を續、此業を成就仕、日本にて必用の大典とは我國の書物と人に呼申度念願に御座候、此儀は三都に居申候而、書物を廣く取集め、多聞の友を多く取り不レ申而は出來仕らぬ事に御座候、水戸日本史杯も、江戸にて御建被レ遊候は、此節に御座候、有史前なしと申す大造の義に御

候故、一分にて朋友門人など相集、仕上候儀は手習御座候、少しも得
上の御弟子人等、堅く然義は無之候、中々見込より學名の業を成し候
地は都の外は無之候、如何なる詩人にても用合然は用に立不申、
開齋、仁齋、徂徠などの様の業は、都合ならでは出來不申、如此人
人にても左様に候へば、まして凡人は何処の事にても、不肖の私に御座
候得ば、何分右の所に用、名儒等も御座候はゞ、學業成就、名
を天下に顯、末代迄も仙州に何某と被呼候はゞ、本望の至りに御座候
様にて、少しは御國の光とも可申候品、何分學者と不相成、二都に居
不申ば詮無に居候も同前に御座候故、今から御林の一人に相成候故、今
生の思出に大坂へ罷出、正學を以て四方を御見申度候、生前の念願不
過之本より有候、此義は數年來、日も夜も思慮罷在候事、何卒様にも御承
知の義にて、先年も私共の身分に相成候上は、即一年も早く罷在候義、
出來可仕と被仰聞候故、人々参り候に月日を送り候處、彼是小十年に
も相成り、頭り人の様に黙々と向合ひ罷在候、且又此方に參り
候ても一件、宋長とも私へ一向相知らぬ不申、間断に相成、漸く着仕候、私
好み不申事に御座候へども、已に罷出候儀、今更致方も無、追に
退くも相成り候儀、其以来當年の世話にて仕候ても、何分不納得
義に御座候へば、[illegible]の外
は、藩品仕候人も無之、祖父幽山の家中へ御召仕候節も、おもしろか
らざる事のみに御座候、夫ばかりにも、御召に居候節は、また時節も
有之候はゞ、都合用事も出来可申と、今日に有居候處、愛許へ參り
候ては其御用も無之候故、日々無益に仕候事に御座候、然る處幽山の家の
に向ては、私を取放し不申候とて、役人とも寄合、彼是と取合仕、私に
如何敷、下僚に取合申度候、内意先生より被申聞候、先生に
は私所存を詳承知無之、不仕合の私故、是は宜しき事に有付候事故、

承引可仕旨申とめられ候、私に於ては、是は案外の事を承り候、私
不能出來候身に候得者、本國にて仕可申筈の義に御座候、本國にて
も不公不仕候上は如何様の御勸にても、決して此義可仕様無御座
旨申候へば、大は小國の[illegible]候へ、小國にても依躰は随分よろ
しき[illegible]申候處、私は義の[illegible]を申候、義に協へ不申義に候はゞ、
加賀[illegible]申上り所にて罷り候而も、見向も不仕手筋に御座候、大恩の
本國に居ては此の身を思ひ不申、他國にて身を立てと出仕候上、私存生
に御座候へば可然、尚も人に[illegible]御座候へば何の面目にて、天下の人
に對し可申哉と申切候、祖父私に妻を迎へ候様すゝめられ候、此依
も私其仕候譯は、私義身に生れ、父の家を繼、父を安穩ならしめ候
筈之處、尚様の身分に相成、他所へ參り候へば、世並の人間の身にして仕
候而は、天罰可畏候、生前[illegible]不仕候而、自分の[illegible]、せめてこの中
譯に仕度[illegible]有候故、此義も相[illegible]候、祖父私を幽山家老の方へ、出府
に相模[illegible]候節、客分にあしらひ有居候處、當大仲登とも申様のあしら
ひにて呼捨に致し候、是まで日頃く有居候處、役人の方にては私に不
的を捨て[illegible]氏を名乗候様の[illegible]に相聞候、今[illegible]學者相成とも申て、
當の後仕の様のものと申事故、可然義と存居候處、右之通にては儒
の身に大に恥と仕事、父に對し申訳無之候、右様の義は幾中にも相
押り、此方申分相立候事も可有之品に候へども、私も年の[illegible]、逆
候間は無之様に見候様、叔父兎四郎、別の[illegible]、何分神[illegible]と
なし、隨分覚悟[illegible]候て出來候旨、私に[illegible]候、此
方へ參り見候へば、左様の事にて無之、よし左様の事出来候而も、私
本意は成就不仕候、何分年少[illegible]の内に、一度人[illegible]へ出て、當世の
才[illegible]とも呼候者共と、勝負を決し申度存候、亦父叔父共は、御承知
の[illegible]手に御座候故、免角手放候事致兼、定而[illegible]候とも、兄弟同

候つとめにあづかり罷在候、其余は鍛工等之、其内にて半も妻候男兒分別れにも、くとも心配可申候ことも、私は若輩のみにて無之、所詮の大老御座候故に御座候、此念願と申も、人に少しも世話を懸け、物入をさせ候事にも無レ之、唯一箇の許を受候へば私一分の上覺を以て、一人は食候事は如何とも仕候、家元より仕送り等に相成候共は、一錢も煩し不レ申積りに御座候、未だ若年の私に御座候故、繁華の地にて身を持崩し、父の面よごしを可レ仕候と、其段も氣遣申べく候得共、全體人の放蕩と申も、自身に定り候業無レ之、かゝり人根性に相成候故に御座候、自身世帶仕候へば、一錢を遣候而も、自身の難儀に相成候事に候得ば、左樣の事は爲よと申而も、爲る者にも無レ之、右之通大儒名家と被レ呼申度志の者、少しにても人々へかゝり候義御座候而は、萬事瓦解仕候は勿論に候、皆川文藏樣（淇園）の所行は、老人故人も立て置候、若年のもの其眞似は出來不レ申候、何分藝州の何某と名乘申候へば、何處迄も君父の恥辱に相成候樣の義は可レ仕樣無レ之候、凡人を氣遣申候は、其者居場に安じ不レ申候而、別の存念を出し、兎角も仕候故に御座候、其者の念願を遂しさせ候はゞ、其上に何を存立可レ申候哉、又燒島にへ緒を申樣に、人を氣遣候而者、盡期有レ之間敷候、左候へば廣島に右之通にて差置、神邊に此通にて差置候得ば、雙方何日迄も安心仕候期は有レ之間敷候、此地に居申候へば、三十人ほどの書生に先生と被レ仰、田地等の家督も御座へども、何分人の跡を遂ひ、機嫁を取りまわり候事は不二面白一存候、家父老年に相成て、他處へ罷越候義如何御座候得ども、此所へ參居候も、京大阪に居候も、五十步百步の違に候へば、同事に候得ば、きらびやかなる處へ罷出、一本立候事、拜見申度、偖樣の處にぐづ／＼仕候事、何とも始終澁申間じくまた菅先生福山より扶持頂戴致し居られ、其養子あしらひに仕候へば、

右樣仕官致し候て、又之所存も申合し、此節には其分の量にも大坂に浪人の居り候へば、其一日由に出來申候、此處に居せ候時は相成候内、菅先生貴音の恩義は日々に重り候而、彌以て相成可申、今もとても多年の念願、何に仕候も疏念ず味、申候も無之如何可仕候と案じ候、當所へ參り候而より、下地病氣弱不仕候、食事も大に減少仕、内職仕候すらに御座候而、ぶらぶら仕居り申候、已に當所にて學頭仕候もの、段々此以前死去仕候もの御座候由、何分御公樣の御儒塾にて、人一人御救被レ下、本意を遂候事は出來申間敷哉、左樣にも相成候はゞ爽氣百倍仕、多病の身も學問精出、天下之人に一人も追付せ不レ申了簡に御座候、身分落着、業事成就仕候上は、家父も安心仕、少少は御國の御用に相立候事出來仕可レ申候、何卒兩親存生中に、此場を見せ申度奉レ存候、何時迄も不得心の事仕候而は、いつ安心を仕らせ、喜悅の眉を開かせ候期も無レ之候へば、甚不本意の義に御座候、尚樣の存念、廣島に居申候節より申上度奉レ存候へども、憚多く時節も到來仕らずと存、默止仕居候、去冬も右の趣にて事已に定り候上、あまり多忙の義に御座候故、默々として不二申上一候、此事菅先生へ打明可レ申候とも存候得ども、難二申出一、恩父恩叔父抔へ申出候とも、中々差許不レ申候て、出來候事も出來ぬ樣に相成可レ申、左候ては生涯の點忽に相成、恩を傷候事候、父叔父などの氣遣申候に付、私身分に於て何ぞ手放難レ成樣の義は有レ之まじく候哉と、御疑被レ遊候義も有レ之べく候へども、是は骨肉の間は、何日來ても小兒の樣に存じ、思切取計は得出し不レ申候、病人の療治は他人決斷仕候如く、此場は他人の所決に御座候、尊公樣ならでは、此義御決斷被レ下候人は無之候故、半年の餘りもとつおいつ案じつめ候て、此度不レ顧一生涯の浮沈と、無情相究申上候、一年レ憚能々御勘辨被レ下、何卒宜しく御計も御座候而、尊

公様の御心附として被仰出可被下、私事先年より御領分内にても、田舎稚成身に候処、格別の御取成を以て、当所名跡相続申候、又父高橋々仕候事、如何可有之哉、何分為公様御了簡にて、よろしく御取計被下度、私生涯の大守御さゝせ被遊候はゞ、此御恩生々世々忘却仕まじく候、今日的便に承、隣先府々数尚日候、是にても心事難尽重々御賢察被遊可被下候、御思召に叶ひ、尚様の義申上恐入候、譲一個国に居候ても、御国の義は、よかれかしとのみ存所候事に御座候、京公様国の為に御自愛可被遊候、乍恐当仕御承明被[illegible]候様、乍然[illegible]仕候、あはれ身分、人並に御座候はゞ、御国家粉骨忠尽ものに御座候、我方も無之事、せめて御文の通り、自身田来候位に御座候事にて、よそながら尺寸の報恩仕度存在候故、乍此上御見捨被遊不被下、御世に被成下候はゞ、難有存候、乍御頼申上もに[illegible]御願候、京公様に御座候付ては、私の為にも御長寿不被下ては相済不申候、失敬の罪、御免被遊可被下候、よっても委には思も不申、申留候、頓首敬白

本山仙台先生家下

此書状相計候処、一歴史を存候間、一筆にても御答御聞せ可被下候、然し御答被下候はゞ、公介俊九郎御呼寄せ、御申付被下候へば、便を求め差越し呉れ候、俊九郎は御存知の者の様に承り申候、市右衛門と男、市之丞の弟に御座候、私忠意に仕候ものに御座候、尚様の義申上候義、家父母父とも承り候はゞ、よの様に不興成可し仕も計り候、乍去よりも打田[illegible]可然被思召候はゞ、御申付被下べく候、打田候而は甚りし申候に、却て私申伝はなくては仕まじくと奉存候故、不得止如此に御座候、不明白の様の義にて、心細候よし、其段御内々被遊可被下候、

乍御心得候義申上候、先年去る人、私身上の事相談り候て、京大阪にて御上の御調ものの書物柄などの世話を仕候ものになり候事は出来申間しく哉と申事有之、御存の為に申上候、何分思召有之、京住被[illegible]御付、少実成就の上は、被仰付候義有之様、御目付[illegible]申事に出来得者に御座候哉、左候はゞ何処にても宜しく申者は有之間敷候、当所へ参り候而も、国山の自由に致候事はなり不申候、本国の御指図次第にもつと存在候、右様の事、私より申上候ゞ、或は恐入候故に御座候へども、度々書状に申上候も、却而失敬に御座候故、此度を以て申上置候、もしも御つ合に相成申候義も有之候とも存候、或は御相談にあまて、失敬の義可有之、其段は御許容被遊可被下候。

右様の書付御覧後、火中被遊可被下候、御子息様にも御頼置被成下候得共、京公様行には乍恐不存候、もしそれ候義御座候ては不宜、尚非[illegible]多少の用にて、直に私方へは両申候、弐一件に一個に候とも、一己限り不宜事に御座候得共、此書状内は[illegible]事書斎の事に御座候、此書分介[illegible]九郎御呼申上候間、御内に御承被下候はゞ、猶有可存候、乍然、兄相はさせ候のみにて、家中の趣知らせては不仕候、御迷惑相叶不申候へば、御直々に御内談御日[illegible]にて内に被[illegible]被下候はゞ、此方へ早速同申候て私安心仕候義に御座候。

頼　久太郎拝

仙台先生

之にて一切の要は分かるであらう。山陽は廉塾に在る僅々半歳か過ぎたばかりにて、最早遁び出す支度中だ。当時茶山は既に此事に気付きたるや否や。彼の漢文にて認めたる茶山に上るの書は恐くは茶山に與へた後の事であらう。茶山が早く備ふれか

[illegible]の塾に[illegible]と云ふ[illegible]によつて、[illegible]飛び出す可く料理られをしつゝあつたと云ふ事には、未だ氣付かなかつたのであらう。如何に兩人が相得たかは茶山の死後山陽が其の遺稿の序中に斯く書いてゐる。

既ニ壯ニナルヤ、其延引ヲ蒙リ、往テ其塾ノ講讀ヲ督ス。其詩ヲ刊セント請フ者アルニ會スルヤ、余ニ囑シテ校理セシム。乃チ悉ク其管龍ヲ發シ、始テ之ヲ縱觀スルヲ得タリ。……余ガ讀書ノ暇翁ノ室ト水竹ヲ隔テ相對ス。評論アル毎ニ、童生ヲシテ箋ヲ擎ゲ往復セシメ、筆ヲ以テ舌ニ代フ。此ノ如キコト閲歲……

とある、茶山は山陽が才識餘りあるに驚異し、愈彼を推薦するの意あり、山陽は其の志あればある程躍になり、愈飛出す事になつたであらう。彼が古賀穀堂に答へたる書は、漸く茶山の家に出掛んとする際、若しくは其の前後であつたと思ふ。然るに其時既に彼は江湖に放浪し、其の爲さんと欲する處の意を云うてゐる。彼は決して茶山先生に失望したのでもなく、又廉塾に不滿であつたでもなく、當初より踏段として出掛けた者であつて、其の處を飛出すに至つたのは寧ろ時間の問題であつた。

彼が愈それを決心したのは、其の恩師築山奉盈に向つて申した通りだ。偶茶山が彼を福山藩に推薦したるが動機ともなり、機會ともなり、且つは口實ともなつたのであらう。彼が茶山先生に上る書中には、仕へんと欲すればこそ彼の[illegible]甚をなせ[illegible]て[illegible]に不足[illegible]云ふてはない[illegible]仕ふこ[illegible]が嫌ひであるし、[illegible]福山藩は[illegible]俗質や諸侯から來てもこれに[illegible]ないと云ふてゐる。而して彼が仕ふる事を欲せざる所以は、茶山先生に上るの書中に、

襄天質多病、疎放習ヲナシ、衣冠ヲ整フル能ハズ。久陪スル能ハズ。周伸スル能ハズ。起臥ヲ時トスル能ハズ。從フテ入從フテ出ヅル能ハズ。遠親囁嚅、不情ノ言ヲ爲シ、以テ相應答スルニ至ツテハ、尤モ能ハザル處ナリ。性合少シク忍ビ、或ハ恒人ト異ラザラシムルモ、久シク之ヲ忍ベバ即チ其氣ヲ結蓄シ、發洩スル處無シ。必ズ心ヲ喪ヒ狂ヲ病ミ、身家兩ツナガラ敗レン。而シテ國ニ益無シ。是亦何ゾ仕ニ取ランヤ。

と云ふてゐる。即ち欲せざるばかりではなく、全く能はざると云ふ譯だ。何れにしても彼は遂に三十一歳の一年を茶山の許に送り、文化八年三十二歳閏二月七日には、多くの人が引留るを聞かず、遂に飄然として廉塾を飛び出した。茶山の彼を送る詩には、『山來上國饒二才子一、誰作二樊川一作二水婿一』と云うてゐる。道が茶山も愛想を盡かし、此の放蕩野郎奴又上方に放蕩をしに行くかと思ふたのであらう。彼を杜樊川に比したのは、其の才情より寧ろ『贏得青樓薄倖名』の點であらう。實を云へば意味たつぷりの送別の詩だ。然し山陽は自ら彼が籠から飛出したる

に堪へてゐる。而して[illegible]大阪[illegible]と殊勝なる態度を示してゐる。尚山陽に就ては、茶山もよくよく其の腹に据ゑ兼ねたと見え、伊沢蘭軒に與へた書中に斯くいつてゐる。

追啓御覧後御火中

先達而頼久太郎事申上候へども不常の事に而御座候、勿論人之惡事を一々に申たて候も心にあらず候故さつとあら／＼申上候も不仕候也、然るに此比承候へば、[illegible]出府いたし候次に取なし候而、[illegible]人へも申上京よりつれ帰りて又[illegible]へおし入れ候[illegible]有之候よし、[illegible]御きき可被下候

一、頼久太郎芸州公府之手形をいたし候事あらはれ人[illegible]とも可有御座候、[illegible]申たて一[illegible]人れ、[illegible]一切[illegible]、[illegible]

一、[illegible]

一、[illegible]いたし、[illegible]いたし自身にて[illegible]かしこ[illegible]候よし、其事大[illegible]また官職にもかゝるべき所な、[illegible]の心にて引うけ候、然るを[illegible]人れんと計り候

一、頼[illegible]候よし、

この節は[illegible]に而御座候

右の[illegible]可仕心に御座候處、中々[illegible]、彼[illegible]にまかせ上京いたさせ候、かゝる[illegible]にてはかくして[illegible]候、必竟にも不申候[illegible]、もし[illegible]の人へも申候様

之ことも御座候はゞ、官[illegible]、尤も[illegible]之企も人の推察に候へばさも無之事もあるべし、左候へば程他も宜候、私も三四十年来の志に而[illegible]小學院をたて、御前を拝み御手跡の額をも願らけ永久にも傳度候處、かのごとき[illegible]に附し候は心に[illegible]候、御推察可被下候、都合を申せば彼は學問ずき也、頼太郎には一子也、藝州に而何にも不被用、然に居られぬといふ處にて見候へば、[illegible]たることに候へども、私もあのほどにあらうとは夢にも不存候ひき、かへすがへすも[illegible]もし此事打いたさず候はゞ大事に候、それなりに御秘し可被下候

勿論事大になり[illegible]かへらぬことゝ我兄御身の[illegible]となりそふに候はば御用心可被下候か様に申上候も[illegible]にはいよ／＼しれぬがよく候

之は茶山自身の爲めにも決して[illegible]と言ふことを許すものではないが、然し如何に山陽が不快の念を茶山に與へた[illegible]と云ふが知る可く、[illegible]ることゝした。如何にも[illegible]不[illegible]な奴と云ふ茶山の[illegible]、ありありと言外に現はれてゐる。

第十一　上方に於ける山陽

偖て山陽は是から所謂脱[illegible]に、物行には何（一二）物と云ふ風情にて、[illegible]中[illegible]村の小野[illegible]を訪ひ、[illegible]大阪に閏二月十五日に乗り込んだが、大阪の中井氏[illegible]氏など[illegible]以来縁故の家では固より彼を相手とする者無く、只[illegible]に同情を表したの

に、[illegible]

[illegible]つた。此時代に於て少しく小竹に就て[illegible]

何となれば小竹は山陽の一生に於て最も重大なる關係ある一人にて、彼は山陽に取つては眞に益友と云ふ可きものであつたからだ。

小竹の養父三島は生え抜きの大阪町人であつたが、學問が好きにて徂徠學を爲し、混沌社中の一人で、後には其の本業たる紙屋を罷めて梅花社と名づくる私塾を立てゝゐた。小竹は豐後出身の醫者加藤吉翁の子で、天明元年四月十四日大阪に生れた。即ち山陽と小竹兩人は齊しく大阪つ子であり、年齡も半[illegible]年とは相違しなかつた。彼は其の養父に學び又江戸に赴き古賀精里に學び、當時既に梅花社の若先生としてゐた。如何に彼が山陽と相知つたかは、其の詳かなるを語る能はざるも、父と父とが懇意であれば、彼等二人が相知る可きは當然であり、現に山陽が廣島屏居中に小竹は左の如き手紙を與へて居る。

其後西人の浪華を過ぎて東するもの、足下の逸才を稱せざるは無く、又足下の常病を憂へざるなし。僕は疑ふ、常病人にして成業するものあらんやと。其後僕阿波に遊びて小寺官五（姽峰）等の話を聽くに足下病益す甚だしくして而して學は益す進めりと。僕いよ〳〵疑ふ。三四年前仙臺の大槻子縄西より歸り詳かに足下の近狀を語る。又足下佐賀の古賀穀堂に和する詩を誦す。又聞く既に著書若干卷ありと。僕是に[illegible]足下[illegible]益[illegible]一書を送[illegible]に流り、或は[illegible]はざるものあり。足下既に[illegible]古人に[illegible]能はず。乃ち病に困り一世を[illegible]、遂に[illegible]として山陽の[illegible]家となれり。僕の疑ふところ是に於て渙然氷釋し毀數從うて加はる

此處に其の後とあるは何時頃であつた乎。山陽が東遊の際は西の宮から郡山を經て行つたのだから、固より大阪にて面會す可き樣はない。されば其の歸途であつた乎、或は他時他所であつた乎。何れにしても彼等は既に相見てゐないとしても相知つてゐた。然に中井家や越智家の門戸が此漂泊兒に向つて閉されたる際に篠崎家では之を優遇し、現に小竹は自から斯く書いて居る。

子成ノ始テ西ヨリ來ルヤ、單衣双劍、半落蕭然タリ。人共ガ重ンゼズ。予則チ推服心醉シ、其外史ヲ借覽シ、一部ヲ手寫ス。子成曰ク、朋友者ハス所、自ラ寫スヲ憚ラズ、眞ニ知己也。

元來山陽は天才的才人で、小竹は凡才的才人だ。小竹を見れば何處にも天才の閃めきは無い。然し經書を講ぜしめても、詩文を作らしめても、書を書かしめても、何處に押出しても引けは取らない。加之、絶倫の精力と圓滿なる常識と、堅實なる品性と緻密なる計數とがある。彼は學問したる大阪町人であり、又大阪町人の學者である。山陽に取つては彼程よき相談相手

は無かつた。而して彼等兩人は相互推奬合名會社を組織し。互に相ひ扶け相ひ保護する事を努めた。固より山陽はシテで小竹はツキ師である。然し此シテには此ツキ師がなかく重寶であり。又此ツキ師には此シテがなかく重寶であつた。勿論小竹自ら『余依竹龍ニ攀テ鳳ニ附スル者。何ゾ與ニ品評スルニ足ラン哉』と云うてゐる通り。山陽に對しては數步を讓つてゐるが。然し山陽も亦彼を推重し。文事俗事の差別なく。事毎に彼と相諮つた。小竹が山陽の餘光を借りて自ら大を成したるは云ふ迄も無い。小竹の一生は殆ど山陽の作成宰相と云ふも妨げあるまい。然し山陽に取つては眞に無くて叶はぬ一人であつた。

而して彼等の永き交情は此時から初まつた。山陽は文學の才たけでなく。其の友人を作るにも一種の天才であつた。彼は大阪に住む可きか、京都に住む可きかに就て考へた。彼の門戶を張る點からすれば、大阪は富の都であり。其の門人も自然金持が多かるべく。從て大阪を以て利益としたかも知れぬ。然し大阪では中井碩智などが彼を容れず、而も大阪の學問の覇權を握る中井を向ふに廻して。固より山陽が自立し得る餘地も無く。寧ろ比較的抵抗の力薄く且つ少き京都を撰んだのであらう。彼は京都に於て彼の父の友小石元俊の子元瑞と相知り。元瑞によつて京都に在料を駛かんとした。其の顛末は彼が大阪から小石に與へた左の書簡がよくこれを語つて居る。

昌平下奴の使に貴書被下忝拜見仕候、清勝相慶し候處益々御安穩被成御座候由奉賀候、小子無異滯留仕居候、偖衣服の事段々御世話なし被下、不大方忝奉存候、此度縞紬羽織御下し被下忝奉存、昨日以來處々まねかれに着あるき都人よろしく交可申候、就居の事も又々御世話昌平より承り申候、室町丸太丁上ル所せまく候へ共、よろしく故多候、諸傳候認書留置、と待申候處やうやく昨夜相達し申候、京校に向住居の事少しも苦文無之、官邊振合浪仲郎史にきゝあわせ候迹の事に御座候、此上は一日も早く再出京仕度候へ共、此地被留候認ものも有之それ等仕舞次第上り可申十八十九兩日には超ゆ間敷、又々不相變御世話依希候、右室町借家見所の上學建其嚁吠ニ辨可申候、又々貴家へたけ請用候間、御家内さまへもよろしく被仰置可被下候、大阪住居すゝめるものあれ共數々かましく候へ共、又京にはよき申ものも有之勿論小石多さり定居候事故御指無之其上貴家へ御世話を無に仕候てはと決心、同札仕候間然々依賴候、爺吉はやはり貴家に居可申候、不埒無殘に御座候、此度ハ上らぬと申候、理屈申試度と存候へ共とても朽木不可雕と打棄置候昌平はまた可被成御座候へ共、一學僕あれば宜敷なり、是も御考へ可被下候、いらぬ事か、海屋並鼎輝など、は賴にするに候へ共、問合せ申位の事御盛に而とんと止申候、先は拜上になり申候故向上と申止候、それまでに貴答を待候へば別よろしく候

頓首不盡

四月十九日

山陽が大阪到着の上數日小竹方に滯在し。其の紹介にて京都の小石元瑞を訪ふた事は。小竹が三月二日付けにて廣島の賴家

[illegible]切り合つて居た[illegible]へつ[illegible]いたされた[illegible]とある不見二[illegible]。これから山陽に[illegible]大阪に下り、大阪から元端に與へた手紙が即ち前掲のものだ。

備後島では山陽から愈上京するとの手紙を受取り、彼が出奔の際、態々京都迄上りて連れ還つた叔父春風は、再び事情偵察に京都に出かけたが、彼は京都の六條で山陽に出會し、山陽より委曲の事情を聴き、五月二十四日京より下阪、篠崎を訪ひ、六月上旬歸國した。尚六月二日付けにて山陽が春風に與へた手紙は左の通りである。

先月廿九日の貴書、今月二日相達、難有拜見仕候、若二御座一先夜は押て御出拜二尊顏一大慶不レ過レ之奉レ存候、其後二十四日、御下阪、御無難御滯留被レ遊候趣奉二承知一奉二恭賀一候、竹原船出帆遅引、明日あたりにも可二相成一由被二仰出一候故、乍二憚燈一此書一候、篠にては終日御咄話の由、私是迄の樣子くはしく猶御聞可レ被レ下と奉レ存候、此京阪にて冶遊などの繭も有レ之樣に懸念して話し申候由、是は左もあるべき心あたり御座候、京より引拂下阪候節、永訣に可レ成も難レ計故、何方にてなり共一個別可レ仕と小石申、河東などは若何と申し一大笑候事も有レ之、阪にては浮薄の樣に存居申候、逗留中故人にさそはれ芝居見物に參り其返りに九一杯、揚屋の内一見いたさせ度と申し、誘延候事も有レ之、それなどを色々と申し、篠へ告候ものも有レ之樣子、篠は私へ忠告に及び、形迹相慎可レ申とて、其後は決して左程の事は無レ之、すべて浮[illegible]只今ケ樣に[illegible]依仕、頃日[illegible]事、用[illegible]申候、下阪の節、小石より預置候金の内、一兩受取參り、それに今少し足し、其上に沒布にて取候少々の両気、一兩一歩ほども利をつけ返すと申し、一條仕候事にて御座候、イシ、[illegible]々喩、或高知にて脇中木村孝安など、私を深知候ものも、案外否之人とて驚居申候位之事に御座候間、此等は篠之過慮に御座候間、御氣遣被下まじく、否尊大人などへ被二仰傳一候て、又々深く御氣遣、家大人などへ聞へ候て、更に一段懸念可レ申候間、此段御用捨被レ遊可レ被レ下候、只々如仰、提に氣遣を懸け、其身は不レ顧にて、工合宜よろしく祭宮なき樣、[illegible]懸念など、修法調整爲、隨て用心可レ申候間、成御安心被レ遊可レ被レ下、右官邊の差支、程よく參候へかしと奉レ存候。此間、篠より見せ來候、家大人の書、并私へ遣被候儀師（石井）の書なども、皆の方へ遣、勢へ願遣とも、貴家の手を經不レ申ては、取計難二出來一と存候、私は御見限被レ下候とも、家翁は御安心御察被レ下、よろしく御取成御執成被レ下候樣奉レ希候段、深く申遣候、されども皆へ返るとの事は勢二出來一と存候へば、國へ呼戻し申候て、又々若[illegible]年一に發在て（？）在候はゞ私身は何[illegible]是非一家大人御命根續き申間敷と存候へば、夜も寐られ不レ申、成[illegible]不二面目一快々在居申候、早便に金山申候條などは、成へ被二仰遣一被レ下候哉、儀卿へ返書も申返候、所を不レ知候故、貴書にて相認申上候通の義に被二仰傳一被レ下候樣奉レ願候、先早早家大人御安否被レ遊候樣仕度奉レ存候、先々若二金山一の策、家大人御返書、并義已述答の様にて決[illegible]可[illegible]申奉レ存候、尤此間も十人位く[illegible]に入門、其内に[illegible]

候もの、五人ほど有レ之、先新居にては繁昌の方に御座候、所レ變は盡く小石へ預置候、懐無二一錢一候、先私心には、ヶ様に自身働出し、衣食候事、心には苦腦の場は無レ限候へども、本意には存居候、仰ニ人鼻息一生活仕候儀、何とも不本意に奉レ存候、昔へ養子に參候義備者分上に有まじき事などとの外評も承申候、彼是考候へば、當時の所、終焉の地と奉レ存候、違ニ懸眼一候は、備も京も五十歩百歩に御座候、何とぞ官邊さへ程能申譯相立候て、萬苦成業可レ仕と奉レ存候間、御深思御相談被レ遊可レ被レ下、乍レ惶奉レ願候、暑中御舟行、何とぞ御無恙御歸鄕、やがて御吉左右奉レ待候、頓首不盡。

六月二日　　久太郎

尙々彼長左は評判の堅男にて、家に留守居付合ものゝ登樓へ越し、異見いたし困らせ候などと、アノ家内申候、自身にも朋友の内纖芥の義氷候ても、胸に難レ容存じなど申居候、されども私へ申候處は、一尤もの義感剛聽從仕申候、兎角在國の時とは違ひ、錢出候へば、錢だけの不足になり、自身の新儀に御座候、如レ座漏船一身上に候へば、決て不足以爲レ憂候事、御察可レ被レ下候

斯くて春風は六月五日大阪を出帆し十日に竹原に着いたか、山陽は亦六日十五日付けにて左の手紙を春風に送つてゐる。

追々無レ恙御歸帆と奉レ賀候、小子無レ恙御放念被レ遊可レ被レ下候、此書狀阿波仁より戻來候へども、又々下し申候、其後登々庵へ、右許など呼合候處、若ニ別紙一申越候、彼などは附合廣き男に御座候處、如レ此先先御安心被レ遊可レ被レ下候、小子生得人に彼是被レ云候性に御座候、然し御密書の懇訓は、縷々剛レ骨、以後深相心得、免レ罰候樣可レ仕間、御安心被レ遊可レ被レ下候、金山に承候へば、小山助右衞門殿より、家大人へ小子事被ニ呼遣一候由、左様なれば手つゞきよろしく候故、諸方賺し合せ、宜敷樣御返答被レ下候事と、先々安心仕候、竹山、昔あたりへ出候書狀、此節は皆々相違候事と存候、昔離緣の内心とも申候も、表立候事に無レ之候へば、申譯さへ宜敷樣相立候はゞ、内意は如何樣にても不レ苦事哉と相考候、但家大人に御宥心懸候事と、此節は晝夜快々仕居候、何卒程能參候へかしと默禱仕居候、急便申留候。

頓首不盡

六月十五日　　久太郎

春風は日の當り山陽に面會し、又山陽からの追々の書狀にも接したれば、彼は其の兄春水に向つて『此書面まんざら詭言許にも有之間敷候、篠小竹書状も差上申候、長左衞門は善友にて同人決して許し不申樣子に御座候』と書いてゐる。此書面とは山陽の書面で長左衞門は即ち小竹の事、春風も小竹を以て山陽の上方に於ける一大保障と見做したものであらう。然し小竹は却却手堅き男であつたが、山陽はさほど手堅き男でなく、彼が自白の通り案外吝嗇の人であつたには相違なきか、冶遊にかけては隨分除外例もあつたであらう。

尙六月五日付けにて武元登々庵が彼に與へたる書中にも、『誠に烟花街の遊び惡評も有レ之趣と申候へ共、私共一向承不レ申、少々ありとも少も齒牙にかゝらぬ事也』、と云うて居る。されば彼は廉塾を飛出したる後鬱憤散らしに又上方で多少の遊蕩を爲したものであらう。尙同書中に

[illegible]、[illegible]、[illegible]を[illegible]大阪は[illegible]ず、[illegible]中候、只何事もせずに[illegible]にかゝはらぬ、[illegible]のみ[illegible]被成候事のみ[illegible]候

と云うてゐるを見れば、彼が大阪にゐなかつたのは、或る意味から云へば大阪には居られなかつたものであらう。當時の京都は寧ろ落莫であつた。栗山、洪園若くば赤松滄州などの老大家は或は去り或は逝き、宿儒として存する者は僅に村瀬栲亭などの類ひであつた。されば彼が京都を其の舞臺と選んだのは、已むを得ずではあつたにしろ、寧ろ又見識ありと云ふ可きであらう。彼は兎に角も京都に落着いた。而して如何に村瀬栲亭などが彼を門下に引つけんとしたかは彼が小竹に與へたる書中に

當地にては交友少く、村瀬などよりは手を翻し引寄せ候やうに致候へ共、其地老先生の訓を守り、樹幟一隅不肯降參候、自註この事宜しく被仰可被下候

とあるを見て判る。之は文化九年三十三歳彼が京都に寓した翌年の事である。亦た以て彼の意氣を知る可しだ。

山陽が京都に卜居すると間も無く大阪の中井履軒雄督高州などから、其の不孝を咎められ、何故に歸つて父母に孝養をしないかと云ふ問題が出て來つた。それは藩の方で歸郷は差支無しと二三[illegible]もしないつた。其處で山陽は[illegible]を篠崎小竹に與へた。

昨日試書可申と存候は、文盲家の仁科四方にふおのこ也、此男の手に不合、また延引仕居候所へ、論題より貴書相届候、扨、感、の論、頂門一針、不可遁避候、不知老兄以爲何如、愧悔御察可被下候、されども家翁心に、先只今の體、いがみなりに安心致居候哉、何とも申出も不仕、また節發歸國候處、家翁の氣に入候哉、否哉、亦未可知、藝城の識は所不免なれども、是れは命さへあれば補償は出來ると云ふものなれば、是れは頓着なけれども、扨ドンナモノ也、歸れば復出る事甚六ケ敷、山欄の所謂一年一二度の遊子とは、國元の様子しらぬ說也、さらば茶山へ歸らんと云所、茶山不受は必然、國元へ歸れば、私俗久太郎事常太中方學統相續に遣沿候所、太中家風に不應に付差戻し申候と云書付を公へ出し、依而廢息と云ふもの也、廢息と云者は何二過失而不[illegible]者にて、國元には相付きと稱候、相付仲間へ這入、錦城次郎のよれかぶりにて、[illegible]、よれは[illegible]、養子に行たか不縁せられた、もはやよい年なるにけれども、つまらぬもの、聞けば上方へもいていたけなか、いかな、[illegible]ござすご戻て來たけなと云て家翁百歳後、また上方へ出ると云所、たゞへ要路に知己ありて服得たる所、此儀成事、牛井耕次郎方の居候になり居ねばならず、左ある時、家翁家は安心仕可申哉、元來茶山方不居合にて國元へ歸可申筈の處、上國へ出候は此事也、上國の守まで散不居合なれば、前後の相違あれども先其の道理也、一度便宜の人になり

候もの、五人ほど有レ之、先新居にては繁昌の方に御座候、所レ獲は盡く小石へ預置候、懐無二一錢一候、先私心には、ケ樣に自身働出し、衣食候事、心には苦脳の場は無レ限候へども、本意には存居候、仰二人鼻息一生活仕候儀、何とも不本意に奉レ存候、皆へ養子に參候義備者分上に有まじき事などとの外評も承申候、彼是考候へば、當時の所、終焉の地と奉レ存候、違二慈眼一候は、備も京も五十步百步に御座候、何とぞ宜達さへ程能申譯相立候て、萬苦成業可レ仕と奉レ存候間、御深思御相談被レ遣可レ被レ下、乍レ憚奉レ願候、暑中御舟行、何とぞ御無恙御歸鄉、やがて御吉左右奉レ待候、頓首不盡。

六月二日　久太郎

尚々彼長左は評判の堅男にて、一家に留守居付合ものゝ登樓へ越し、異見いたし困らせ候なとゝ、アノ家内申候、自身にも朋友の内織介の義承候ても、胸に難レ容存じなど申居候、されども私へ申候處は、一尤もの義感剄聽從仕申候、兎角在國の時とは違ひ、錢出候へば、錢たけの不足になり、自身の難儀に御座候、如レ座二滿船一身上に候へば、決て不足以為レ憂候事、御賢察可レ被レ下候

斯くて春風は六月五日大阪を出帆し十日に竹原に着いたが、山陽は亦六日十五日付けにて左の手紙を春風に送つてゐる。

追々無レ恙御歸帆と奉レ賀候、小子無レ恙御放念被レ遣可レ被レ下候、此書狀阿波仁より戻來候へども、又々下し申候、其後登々庵へ、右評など承合候處、若二別紙一申越候、彼などけ附合廣き男に御座候處、如レ此先先御安心被レ遣可レ被レ下候、小子生得人に被レ見被レ云候件に御座候、然し御密書の懇調は、縷々剄レ背、以後深相心得、免レ點候樣可レ仕間、御安心被レ遣可レ被レ下候、金山に承候へば、小山助右衛門殿より、家大人へ小子事被レ申遣一候由、左樣なれば手つゞきよろしく候故、諸方躁し合せ、宜敷樣御返答被レ下候事と、先々安心仕候、竹山、菅あたりへ出候書狀、此節は皆々相違候事と存候、菅離緣の內心とも申候も、表立候事に無レ之候へば、申譯さへ宜敷樣相立候はゞ、內意は如何樣にても不レ苦事哉と相考候、但家大人に御密心懸候事と、此節は晝夜快々仕居候、何卒程能參候へかしと默禱仕居候、急便申留候。

頓首不盡

六月十五日　久太郎

春風は目の當り山陽に面會し、又山陽からの追々の書狀にも接したれば、彼は其の兄春水に向つて『此書面まんざら詭詐計にも有レ之間敷候、篠小竹書狀も差上申候、長左衛門は善友にて同人決して許し不申樣子に御座候』と書いてゐる。此書面とは山陽の書面で長左衛門は即ち小竹の事、春風も小竹を以て山陽の上方に於ける一大保障と見做したものであらう。然し小竹は却々手堅き男であつたが、山陽はさほど手堅き男でなく、彼が自白の通り案外吝嗇の人であつたには相違なきか、冶遊にかけては隨分除外例もあつたであらう。

尚六月五日付けにて武元登々庵が彼に與へたる書中にも、『此に烟花街の遊び悪評も有レ之趣と申候へ共、私共一向承不レ申、少々ありとも少も齒牙にかゝらぬ事也』、と云うて居る。されば彼は廉塾を飛出したる後鬱憤散らしに又上方で多少の遊蕩を爲したものであらう。尚同書中に

貴樣などの事よりは貴國の御事書として、貴兄より先年におほせの方がよろしき事に、早くよりも見込の通り候、然ながらはそこまでは話ならねども、何れ大阪は儒者の居る處にあらず、私は近時京都へ來居候、下拙數日申候、只何事もせんなく\／安樂にかゝはらぬ、大阪のむも、御安心不被成候事のみ來候

と云うてゐるを見れば、彼が大阪にゐなかつたのは、或る意味から云へば大阪には居られなかつたものであらう。當時の京都は寧ろ落莫であつた。栗山、淇園若くば赤松滄州などの老大家は或は去り或は逝き、宿儒として存する者は僅に村瀨栲亭などの類ひであつた。されば彼が京都を其の舞臺と選んだのは、已むを得ずではあつたにしろ、寧ろ又見識ありと云ふ可きであらう。彼は兎に角も京都に落着いた。而して如何に村瀨栲亭などが彼を門下に引つけんとしたかは彼が小竹に與へたる書中に

當地にては交友少く、村瀨などよりは手を廻し引寄せ候やうに致候へ共、其地老先生の訓を守り、樹幟一隅不肯降參候、自註この作宜しく被仰可被下候

とあるを見て判る。之は文化九年三十三歲彼が京都に寓した翌年の事である。亦た以て彼の意氣を知る可しだ。

山陽が京都に卜居すると間も無く大阪の中井履軒越智高洲などから、其の不孝を咎められ、何故に歸つて父母に孝養をしないかと云ふ問題が出て來つた。それは藩の方で歸鄕は差支無しと云ふ事になつたから、[illegible]もしないつた。其處で山陽は其の處置をおふる可く方つて[illegible]篠崎小竹に與へた。

昨日延壽向申と存候は、支遐家の仁科四方こふおのこ也、此男の手に不合、また延引住居候所へ、鉛(?)より貴國相伺候、頃、藝、の論、頂門一針、不可逃避候、不知老兄以爲何如、愉悅御察可被下候、されども家翁心に、先只今の體、いがみなりに安心致居候哉、何とも中川も不仕、また新發歸國候處、家翁の氣に入候哉、否哉、亦未可知、藝城の識は所不免なれども、是れは命さへあれば補償は出來ると云ふものなれば、是れは較齊なけれども、扨ドンナモノ也、歸れば復出る事甚六ケ敷、山權の所謂一年一二度の遊子とは、國元の樣子しらぬ說也、さらば茶山へ歸らんと云所、茶山不受は必定、國元へ歸れば、私儕久太郎事賛太中方學統相續に遺濟候所、太中家風に不應に付差戾し申候と云書付を公へ出し、依[illegible]廢息と云ふもの也、廢息と云者は何二過失而不[illegible]者にて、國元には札付きと稱候、あれは[illegible]養子に行たが不繼せられた、もはやよい年なるべけれども、つまらぬもの、聞ば上方へもいていたけなが、いかた、頃はすご戾て來たけなと云て家翁內證後、また上方へ出んと云所、たとへ要路に知己ありて取持たる所、其歸し成事、中山神次郎方の居候になり居ればならず、左ある時、家翁家內安心仕可申哉、元來茶山方不居合にて國元へ歸可申筈之處、上國へ來候は此訶也、上國の學子を故不居合なれば、前後の[illegible]あれども先其の道理也、一度他國の人になり

候へば、それより外へ參候所、固より不レ聞、先三年尽儘也、家翁も以來上國負劍同遊、是より度々東遊可レ仕と申、私も以來は時々歸省可レ仕申、また來春などは家母家妹も出來と云事、併可成に決心いたすなど、家に居候時とは天地懸隔の體也、是はかくなりゆく勢にて今更不レ可レ若何、附翁遂兄の論、正則正矣、夫れ如其情如何、されども一概に申て、其他鄙儀を修候は、ここの所也、されば本町一なりとも引込、風流三昧にて暮し可レ申と存候、嗚呼聊記レ此、所欲レ知レ己者之諒察耳、臨楮依々不盡。

襄

茶山仁兄

之は文化九年彼が出京後一年である。其の頃までは彼に對して隨分斯る議論もあつたであらう。否、此議論は恐くは介水の生存中に彼に附纏つてゐたであらう。燕雀安ぞ鴻鵠の志を知らんと云ふが、燕雀でない中井や越智の如き大家名家から月並的の非難を受けには、山陽も全く困つたに相違はない。殊に困つたのは茶山の感情を害した事だ。誠に所謂可愛さ餘つて憎さが百倍と云ふ譯でもあるまいが、茶山の立場から見れば此れも無理はない。山陽が九死一生の場合に漸く拾ひ上げ、之を人間並に仕立たる恩義をも打忘れ、後足に砂を蹴立てゝ去り、のみならず、其の塾生を誘拐して京都に引張るが如き形跡さへあつた。されば彼が山陽に對する感情は、俄然悪化しつゝあつたのも、決して不自然ではなかつた。狡獪にして聰明なる山陽は、之を緩和す可く頗る努めた。何となれば茶山の關門が通らなければ、到底他儒との調停は難しく、又茶山に嫌はれては、一生運命の拓くる望も少い。されば彼は殆んど全力を傾けて茶山に向つて緩和を努めた。即ち左に掲ぐる一書は如何にも能く當時の彼の生活及び心緒の模様を盡くして居る。

別啓申上

襄又近今今承候、私事出京を後悔仕候哉と御座候由、右御趣ニ御敍示被仰付候、存候、私事後悔なども申義は御座無之、追々繁昌之方ニモ有之、頗數々有之候故、よくも既二官職仕候よく拜々變へ、或は隱居仕候、或は出兩也し、恐恐しき様々有候、何分相別居候ても永穏之勢方も可有之、御取成二御合交所にても致候事出來候へかし、斷候とも、是は先生御僞は決して無之、同凡の許容相得申候と左様に付ても御發成之程誤候申、今一応御不請御申候、是に付ても御承認之程御謝申候、今少々御同様御如く、私義始より素懇相談之義出來かたく存居候て、同凡出立前も不納得之所を、不意に申付被下候事故、日夜不安次第に日益相成候ては御慈之罪悪其候へば、一日も早く御同意方情態にて好處置可有之と、扨てこそ在京も今略候所、外御相談可被下、同凡の方もよろしく御取被下、數年來の宿願を遂け今日中原に翱翔仕候も、全く先生の御蔭と奉存候、左なくばいつ迄も田舍に埋首致し終身可申と、是又毎時心中に御禮申上居候事に御座候、それ故に何様人彼是とひいきの引たをしと申様に相留候者も御座候へども、右の事上の事情は少しも知らせ不申候、兩與二先生決定申候、先生にも私をどうあつても後任に被成度とて御呼寄

被レ下候御心にも無レ之、左あれへよし左たくに拔二一羽思之人先、至ニ其志罷了と申し思召之義ハ没きへ被 走候所答にも被二仰下一候通ニ御座候、左候へば某上ノ一件ニ付而ハ一旦意絶と申義も有之ましくと存レ存候、しかるに去歳以來兎角御機嫌不レ宜、乙レ止候義御座候てもしらく御答も被レ遊不レ被レ下候ハ如何ノ義に付思召ニ遊ひ候事にやと、自顧未レ得二其說一候、或ハ東上の節毅生一二三輩も隨從候義、悉く私よりそゝのかし候樣ニ被二思召一候ニヤ、又跡より一兩輩も追來候も其約あつてなどと被二思召一候にや、此義もたとへ私よりそゝのかし候にもせよ、せぬにもせよ、世間の醫師同商賈の得意を取るなどと申凡陋なる論には無レ之、たとへば道義が弟子なれば京にても江戶にても道義方の師を尋ね隨從仕度存候、精齋門人なれば上京候ても精海の術を待ち候人に付と申氣味にて、其者從來信二先生一候故波二及於小子一仕、外師に從ふよりはと申意と奉レ存候、小子も節度使部下小將外征候時節度帳前之倂兒を分諫せられ戰塲にておくれを取らぬ樣に致しもらひ候樣の心持ニ存候、苦からぬ事とのみ存居候（譬喩ノ類不レ恭候へども實意申上候）實に新居にて一人にても弟子あるを好み候時節に候へば、來者不レ拒と申樣ニ仕候段御恕察被レ遊可レ被レ下候、是等の事ニ付折角憐才恤窮之念化爲鳴鼙致討之心ニ候にやと奉レ存候、もし左樣の思召にも御座候へば以來尋繁の弟子尋ね來り候とも、先生御添書無レ之候ハヾ直に逐返し候樣ニ可レ仕哉とも存居申候、しかし左候テは世間ニハ愈先生と私の際不和とのみ存可レ申とも奉存候、先生と不和と申候ては私京住仕度候ても不得已國元へ引戾され、又々舊日の如く樹食甕ニテ終身申さねばならぬ樣ニ可二相成一とそれのみ日惜奉レ存候、私はともかくも家翁の命つづき申間敷と毎度の義ながらせる方なく奉レ存候、毎度御聞も可レ被レ下、國元官遊御地ニ居候由ニテ先生御指圖ニテ上京仕居

候趣[illegible]候事ハ[illegible]候、こゝをもつて候へに[illegible]候趣も、家翁より何度金山遣ハ申事々付き驚申候趣一御座候、されども從前國元の不首尾御救ひ被レ下其御口にも被爲御慰ふ仕らねばならぬ所、又々我儘を申上京と申ものに候へば、家翁などは對二先生一面皮無レ之、其上色々の義奉煩候儀候事ハ相術騷擾仕居候樣ニ相見申、さぞさぞ日夜それのみ案煩居可レ申候と奉レ存候、此義先生御汲取被レ下いついつ迄も御見棄なく、國元公邊首尾よろしき樣ニ御なし被レ下候はゞ、家翁生前の大慶無二此上一と奉レ存候、先生餘伎術ニ憫小子二孤イレ念ニ家翁の痛心疾首一ケ樣ニ申候程ならば只今迄の處ケ樣のはこびならぬ樣ニ可レ仕事、今更左樣ニ申上候ハ若何ト申ものも可レ有レ之候へとも、もはや騎虎の勢不レ可二中止一候、何事も打棄歸國仕候ても一向ツマラヌものに御座候、此上ハ坐ニ斷然下土ニ噴付候ても成レ家申さねばならぬ事に御座候、其義の成否は先生の御懇慈に御座候、いかに激昂仕候ても上と炳に勝てぬと申樣に、本國公邊のさわり出來候ては然事夢泡に歸し申候、是は咽喉吧緊の處ニテ申上候、是を除て申候ても海內諸公知レ爽者無レ如二先生一御樣ニ平生存居申候、作二一詩一構二一文一候ても、先生の賞鑑を經不レ申候內ハおもしろからず奉レ存候、左程に存居候所ニ只今の樣に參越ニ相成ては、假使ニ遂二其志一も無レ所二聊頼一候、知己と申ものは千歲上下ニも難レ遇ものに御座候所、折角得先生爲之依歸居候て旋豚の群をなさずとも、千里咫尺劾寸尺於文下禁の塲、聊爲先生の犀援申度心懸居候處、案外ニ御座候、先生ニ於テハ如レ寘二之十百人其有其無固無加二損於先生一候、實ニ在ては大壞間ノ大遺憾ニ御座候、此義考安などにも毎時申居候、從來父執帯愛作々に候所、不圖其報復我儘を仰き候故左ニ所謂畏か來ニ惜しと思召候事も其數レ奉レ存候、其、縷々申上候通ニ候へバ、其處ハ御指使被レ下度、改て尚丈にかぶる事を得

申候ハヾ我身不申訳候とも、心は眼下ニ付従仕候心ニ而御座候之不可し
れ存候、如何成共被仰付候はゞ、実翁も一大安堵無此上ニ可存
候、只今之所ニテハ我も職ニ相のはさまり一ト候様ニテ、時々安心仕
りましく落居仕候、ケ様ニ申上候義、一ハ情實、一ハ利害ニテ不得不
然候處、御憐愍思召被下ましく不希候、文句雅俗混雜仕候ハ御仁ノ
實東の常に御座候へハ御賢察ニ験しき處も可有之候へ共、所謂情從辭
發不知所裁候ニテ御座候、今日も他行之候段々、淡路の所觀々とも存し
存候へ共、一刻を遅くすれば実翁一刻の不安に御座候へハ、亂筆なが
ら奉ニ申上候、萬々御想察可被下候、何分寒を先生へ、日夜忘却
仕候ものハ無之此の様に存し存候候へば、如何様に申上候ても先人
恐し主、入申間敷とは不存候へ共、實は其者然申上度、不斷相知し此
御座候、いつまで申上候ても盡期も無之候へば申留め候
恐惶

三月廿一日

淡州行の許容被下候はゞ御座候へ共、一々は不申如申も恐入候、此十
二月の頃ニハ餘程寄折申候、五山詩佛などニ作らせ候ハバよき事と可
申候へ共、不案内の上ニ掛了代人候て、毎も止り先生の外無之可仰
の人ニ候故、何卒此度は御安置なく被仰下候様々不希候、一字ニテ
もよろしく候、外へ御見せ不申中候私願心得ニ仕候事に御座候、御批正
の後竹原へ御遣し被御見せ被下候ハヾ難有奉存候、またよろしく方よ
り御返し申上候節ハ御面倒ながら御上け可被下候、御頼み恐入候、

泉横諸山對立舟。滿堂解豹忠守頭　多情明有舉飛翅。將我依々拜淡州
淡島齊乘浪帯舟。海府吳日數回頭　舟人指點山々色。漸是泉州又紀州

此書は文化九年三月廿一日發信した。彼は[illegible]町に僦居してゐたが、更に翌年東片町に轉居した。此書は後所から出してゐる。此書が何時なる如果を來したか判らない。併し何うも彼は賴が許容ならざるまでも、開設に去年来内でも不可出来たらしい。それは彼が脇島高の上方留守居本山源左衛門へ贈り、文化十年正月二十五日付にて左の書翰を與へたのを見て分る。

偏々不快は、大方復候へども、大小之拵疵し仕居候而、畫伴無之、
見に而不得一使用、御無沙汰申候、呵々
御無沙汰仕候、春來御障もなく候由、存候、今日、ぞ公之處、御
見せ被下、特御禮申出、然申連此之處はわ之候、とをとは申越候
へども、齊狀之細密依然候故、先々安心仕候、小子事は、乘何頃造
申候事と相見え申候、官敷御止め不申候、當時に而は、國元に居
候時とは違ひ、萬事皆自身所爲御座候故、決而らちゝ仕候事は無
之、播州下なども、彼是と致遣可申候へ共、京師學者家近国かさ
は、不際仕申、又其作計にても、衣食不足と申にても無之候へよ
も、少々作可有候へば、ケ様の事も不得不致候、京阪に而、三
年來、人に義理を附候様之事は無之、不意所生之心計因分たし
かに御座候、先今日に二は取つゝき候而、安心仕居候事故、是等の
所、昔時之様に、手中外より氣遣ひ在不申候様、何卒貴兄御申通に御
見せ被成候様、被仰遣被下候様存願候、兎角文の不住候と
宅存を致候つみ、一大關與に而、寂寞にも共々心に計候義に御座候、
小生身上は、唯今成丈其所為候事に御申候、其中に而、文付日前にテラブ
ヲ仕ドまぬ利よのみ存候而、然日月候には、遂にまさり申候事に御
座候、御黙思にまかせ、入らぬ身上の咄、長日に御免可被下候、其
内得貴意可申承候、頓首
正月廿五日燈下

如何に厳格でも、親には親心がある。春水も直接には山陽と通信しなくとも、東左衛門を介してこの消息を通じたものと思はる。山陽は出京以来随分稼いだ。即ち茶山への手紙にもある通り、彼は上京の年には淡路に出稼ぎした。翌年の九月には播磨に赴いた。而して文化十年三月には父春水が山陽の子餘一を伴ひ、有馬温泉入湯の名義にて上京した。之は入湯であつたが其實山陽の生活情態を見る爲であつたことは言を俟ない。當時山陽は三十四、春水は六十八、孫の餘一は十三の童子であつた。山陽は之を迎ふ可く三月二十五日雨を冒して淀河を下り、大阪なる篠崎小竹方に至つた。春水は二十一日大阪に着き、二十四日篠崎方に滞在してゐたから、二十六日四年振りに親子三人面會した。四月四日には更に相伴ひ淀川を溯り京都に着し、十一日まで滞在した。斯くて十二日出發二十三日西の宮まで見送つた。其の旅行の顛末は彼が其の叔父竹原なる春風に與へた手紙がよく語つて居る。

乍二延引一貴報申上候、三月六日出之貴書、同月廿四日相達、拜誦仕候、其節、益々御機嫌能被レ遊二御座一、奉二恭賀一候、小子も無レ異罷在候、乍レ然御省念可レ被レ遊下一候、誠に此度家大人御入湯、御願被レ爲レ叶、上國諸舊知御尋被レ遊候に付、小子御勘氣御免被二仰下一、久々拜顏、悲喜交集仕候、能こそ御しらせ被レ遊候、御状拜披仕り候日は淀方[illegible]、[illegible]に付、[illegible]候はば、[illegible]氏にも早々罷出候て、一書申候様に御座候、大人は二十一日に御着坂にて、篠氏へは二十四日に御出被レ遊候由に御座候、思ひ有レ之、二十六日に拜顏、直に歸京、四月四日に大人御上京、十一日迄、處々遊覽、淀道に其日一宿、翌十二日伏見にて一先作レ別、十九日に下レ江二十三日に西宮迄御見送申上、一時之樣に奉レ存候。奉レ別之節は、僞神の恐有レ之、決別も不レ仕、わざと抱腹歸申候、扨御老親之御體も少々御見へ被レ遊候得共御精神御強壯の所は、依レ然少壯の者も有レ之不レ及候故、先々恭悦、乍レ此上奉レ存候、小子今少し繁閙仕居候はゞ、家政の我方も可レ有レ之候得共、何事も不レ任二心底一遺憾之義のみに御座候、且つ又日用之事に困レ乏候義は、即て御氣に入不レ申候樣に奉二恐察一候故、何事も苦勞候、二十四五日は、船にて舟荷物抔積過し、取片付、一昨九日歸京仕候、今日金山重郎參御あつらえのものいまだ出來不レ仕、不レ遠差下してよろしく申上くれと申居候、乃翁も座上を逍歩候程になり申候、先生の御逗留中は、是程にも無レ之、殘念と申居候由に候、扨明日迄に、貴地へ御着の御積と被レ仰候、如何少しは途上にて御險人被レ遊候義と奉レ存候、有馬湯は、小子も御留申上候得共、兩度は御入被レ遊候由、少し御動し被レ遊候處、京都にても御腹痛少し御不例に被レ遊御座候、御下阪後は、御隨當と承候、途上は如何被レ爲レ在候哉承知仕度奉レ存候　留守國母上樣なども無御屈指御待可レ被レ遊、[illegible]寄居守被レ成候故、御安心之義に御座候、此度大人其外書状差上候答に御座候得共、先づ差控、皆様迄如此御座候、三月二十四日より[illegible]迄、[illegible]候得共、無[illegible]樣に存じ候、同方へも宜敷御傳へ、今日より[illegible]、[illegible]問作二此書一候、親族御仁[illegible]候、恐々不備

六月廿日　　　　　　　　　　　　　　徳太郎　頓首

今成九大人

侍下

尚々御前様にも、御聞可、例の何以被候、在候由、年恐御氣の毒申上候、先年杯内の御好も、被候、存候、御配慮被遊候故、別而御不仁之恐可有之候、存候、願くは右者右思召被為在候、中途無之候得共、致候、偏に罷在候、何卒大人より、宜敷御聞可被遊候、何卒御多可被遊候。

大人御出坂後、或は月城に被為在候由、彼成候。坂城三日位に安着、別段何も無之候。竹内同所迄若山見。闕山坪水若何。御備前嶋遊可申候、今度御供仕、以國可仕、當時可有之候得共、思召も御座候、且當度之勢不可申上、萬々御面談被遊可被下候。

茲に徳太郎とあるのは、久太郎を改めたのだ。同年九月には彼は又美濃に遊び、尾張伊勢等を経て十二月の末に帰京した。此旅行には彼は随分收穫があつた。其の中では彼が唯一の女弟子とも云ふ可き江馬細香と相知つたのと、又彼が門人の中頭で他日彼の推薦にて小竹の聟となりたる後藤松陰を得たる事だ。猶ほ江馬細香に關しては予は曾て女詩人と題し、彼と山陽との経緯なども掲げて居たから茲には略するが、何れにしても所る才子と佳人とが、師となり弟子となり、而も兩心互に相許しつゝ遂に天下晴ての夫婦となる事を得なかつたのは、果して兩人に取つては不幸であつた乎將た幸であつた乎、今以て予も疑問とする。

文化十一年八月上旬には、例て歸省する事となつた。彼は神邊に至り茶山を訪ふたが、茶山は江戸に赴いて不在で、都講北條霞亭と會飲し、八月二十三日廣島に歸着した。歸途九月十三日には竹原に行て叔父春風に會見し、又神邊に立寄つたが、恰も當時米佐の父小河貴齋の長崎より歸るに同所にて出合した。

今や春水も安心し、山陽も其の所を得、茲に初て圓滿なる頼家の和樂が廣島と京都の間に成立つた。文化十二年正月二十八日義弟權次郎は二十六歳にて逝いた。四月には春水が病氣したから、彼は二日に大阪より上船して、七日に廣島に着した。其の六日には既に春水の用狀者となつた。之が二回目の歸省である。翌文化十三年二月十八日彼が莊子を講釋中、父春水危篤の報があつたから直ちに出發し、二十四日朝廣島に着したが、父は既に十九日七十一歳にて歿し、葬儀を終つてゐた。彼も亦廣島にて發病し、三十餘日にして漸く癒え、三月二十二日歸程の途に就いた。彼は之より三年の心喪に服した。如何に彼が死せる父と生ける母とに向つて孝養を盡した乎は、彼の詩稿と母の日記とが之を語つてゐる。當時山陽の京都に於ける位置は未だ鞏固とも安全とも確定とも云ふ程ではなかつた。されど如何に彼が京都

の學者輩を輕侮してゐた事は、左に掲ぐる京友に與へたる書牘の一節が、分明に之を示してゐる。

○京儒平ㇾ名候樣御申下候へども所謂中風取合候女之外は、させる大將も無之と見へ候、近來、樹辻春樵（自注――中風先生門人）と云詩家流行申候
其友に彼中島文吉（棕隱）（自注―同門）と申、是は御存の先年有ㇾ稼名一候もの、近來、自二江戸一歸、鴨東四時詞と申一小册を出、竹枝六十五首、狠褻頑猥を極申候、元來、竹枝と云もの、如何之物と云事を不ㇾ知樣に相見へ候、それはともあれ、あの邊の名を被て、又降寄、たれも取合ぬ筈の處十へり用申候者も有之候、世は廣きものに候、其内京人喋喋二其才否一、不ㇾ論二貴不肯一、問二其貧富一、不ㇾ問二其食廉一、廉恥と云二字なぞは、夢にもしらぬ斗多く御座候。春樵は、受ㇾ妻、敗二其所帶采之金一、而後出ㇾ之候人に候、海保儀兵衞（自注―稱名彥六）は、江戸吉原に而、儒者彥と云し太鼓持なりし。彼緣女先生に續き候位に御座候處、是又中風仕候。其外、醫者より業讀師匠に變じ、只今大分大醫などの息子を弟子に致居候は、朝倉玄蕃と申もの有之、號二荊山一候、故岩垣之門人に、遵古堂と云もの御座候、同門に猪飼敬所と申もの御座候、是は自身腕は立不申候へども、人の文などを指摘させ候へば、尤なる事を申候ものに候、皆川門之小儒、大分有之、其巨擘は北小路大和之介（竹窓）と申ものに候、先是等に而可有之候、外斗儀帶帶、相應に茶粥は啜居申候と見へ候、如ㇾ褻新來、於二釋其間一、御存之京人之氣に而、一年にても古きものを用申候故、孤立無援候、登々（庵）などは、親父輩を信服させ候に得ㇾ妙申候故、大分よろしきと見へ候、そして其讀書之致方は、比ㇾ褒更倍薄、筆硯書畫などの好事は、毛頭無之候、樂なる人に候、褒新居、比ㇾ舊大分廣敞に候へども、寸土寸金、[illegible]候はゞ、不ㇾ堪二寂寥一と存候。

此れは文化十二年八月廿九日付。京地[illegible]のた。此れにて山陽の京地に於ける氣分が判る。

第十二　九州旅行

文化十四年五月には精進の爲に腸胃を害したから、貝原益軒の養生訓を讀み精進落をした。文政元年二月五日廣島に歸着し、其十九日には父の大祥忌祭を行うた。斯くて三月六日門人後藤松陰を伴ひ西遊の途に上つた。彼が九州旅行は彼の一生中の一大旅行である。彼は何の爲に態々鹿兒島迄赴いた乎。或は史料を得んが爲と云ふ人があるが、それは決して然らずだ。日本外史は夙の昔に出來上つてゐた。彼の骨折は概して其の文章を推敲するに止まつてゐる。山陽の歷史は始めから史料など左問題ではなかつた。されば何の爲めであつた乎。所謂金儲けの出稼ぎであつた乎。將た鬱散寄しの漫遊であつた乎。若くは兩者を兼ねてゐた乎。彼が三月六日付にて廣島から篠崎小竹に與へたる書によつて略ぼ其の動機を推察する事が出來る。

一筆啓上仕候、春暖日加候處、文候萬福と奉遙賀候、誠に先山にも過訪一、尼ケ崎龍溪は、于ㇾ今不ㇾ可ㇾ說候、依亦、無ㇾ泣拙府、大時忌祭

も、無據相濟、所謂隙然に御座候、時ニ暫然之後、追以當然拙然序ニ長崎逸と思ひ申候、此度も久敷ニは、乍年之志願ニ遂と存申候、依ニ之京之留守は、先暫し片付け所ニ申と存申候、諸城の將も可ニ存ニ之鉄へ共、切ニ身損益には不ニ可ニ換候、小石へ尊々も遣候、宜よろしく御心添可ニ被ニ下候、尚事不ニ宿敗ニ申と存、小石へ十箇中遣候、先に片付仕候迄は、ばつと披露不ニ致候様に致度存候、貴家は親類之御義故、此義先ヅ御申上候、萬々歸路拝話と申殘候 頓首

三月六日 頼 久太郎 襄

篠崎長左衛門様

尚々、右之仕合、先人秋興帖之跋も、又々延引及申候、宜しく御申候、

彼の九州旅行に就て、第一の獲物は其の詩であつた。彼は自ら明の盛茂燁の山水端渓の古硯を得たのを其の詩として居るが、何を云うても獲物の第一は詩であつた。彼は三月の下旬に下ノ關廣江殿峰の家に入り。茲で初めて酒徒たる洗禮を受けた。是れ彼に取りて一生の不幸であつたが、詩人としての彼には聊か仕合でないこともなかつた。四月下旬には筑前博多なる松永子登の宅に迎へられ、龜井昭陽などと交友した。昭陽は所謂二太郎の一人昱太郎で、双方の父以來の舊交だ。龜井は家學の徂徠學で、經學文章を以て西國に牛耳を取つてゐた。然も其の趣向相ひ異あつて、山陽と相得るには至らなかつた。それから佐賀を經て大村から長崎に赴いた。彼は長崎に滞在する事六十餘日、果して何事を爲したのであらう乎。若し彼が新智識を得るに熱心であつたならば、彼は滞在中之を得るの機會は少くなかつたであらう。文政元年と云へば和蘭商館には、ヅーフは既に去つたが、彼の後任者は能く彼の意志を遂行し、文化の輸入に就ては、日本及日本人に向つて出來る限りの便宜を與へて居た。假りに新井白石をして六十日間長崎に在らしめば、山陽所作の僅かに『荷蘭船行』『佛郎王歌』若くば『長崎謠十解』などの詩にて滿足する者ではあるまい。山陽は『荷蘭船行』では相變らず鎖國論を主張して居る。文政元年と云へば外國が日本に迫つて來てゐるのみならず、日本の國民も亦外に向つて動かんとしつゝある。然るに彼は殆どこの國運轉換の徴候には何等關心せざるものゝ如くある。彼は『蠻舶相調倣』詩。兵器猶不ㇾ敵、勁韜。嗚呼小醜何頑甚、日嗇萬里逐利往、豈啻諸と詠つてゐる。即ち外國が貿易の利の爲に來るものである事を、別に恐怖の心配をする必要が無いと云つてゐる。されば彼は長崎に於て那箇の莫斯古收策を識りたけれども、其の影響が日本に如何なるものを齎らした乎と云ふ事は頓着ない。茲に至つて彼が六十日餘間長崎に滞在したのは得る所だと云ひたい程である。彼は八月廿一日付にて、其の母及び子餘一に與へたる書中に、

當地逗留外不面白、何分肥後に而梅墩を作し不申候様に御用候

と云うてゐる。又た

男人の重ひあまり申候、とかくなさにはこまり申候、

と云うてゐる。又た九月頃、當時見送、遊行した人達の書状中にも、

長崎に、今年はよき唐人も居不申、書畫古玩、何も買物も無之誠に可笑事に御座候。

と云うてゐる。されば彼が長崎滯在は、旅稼ぎと書畫古玩を漁りたる位が關の山と云はねばなるまい。又た彼が肥薩に赴きたる理由は、彼の前書中所謂の長崎の面白からぬ爲めに、機嫌を直す爲め乎。將た同書中

旅寢の夢は、先大人（春水）御嫁に被遊御座候義、於今不忘候故、此度を旅の仕舞と仕度、存候へば、序の事とどこもかもあるき候て、遺憾なき樣に仕、歸申度來存候。

と云ふ譯であつた乎。何れにしても彼の長崎滯在や、肥薩行には、特別深き意味を持つてゐなかつたらしい。然し彼は長崎で官事を以て來遊したる古賀穀堂などとも詩酒の交をなし、斯くて八月の下旬には長崎から熊本に赴き、熊本から阿久根を經て薩摩に入り、薩摩から又肥後に入り、肥後から豐後に入り、竹田にて田能村竹田を訪ひ、日田にて廣瀨淡窓を訪ひ、豐前に入つて雲華師と耶馬溪に遊び、斯くて年末に下ノ關の廣江氏に歸着し、茲で四十歲の新年を迎へた。彼は長崎を第一に、他の地方にても若干の逸話を留めた。併しそれは近否相半ばするものに過ぎない。故山縣含雪公は彼が鎭西漫遊手控帳を所持したと云ふことであつたが、これが[illegible]一[illegible]に[illegible]失せたのは[illegible]に帰帆と云はねばならぬ。[illegible]に與へたる[illegible]の。如何にも旅行中の[illegible]又は鹿兒島[illegible]時の[illegible]勢が能く云ひ現してあるのは、流石に山陽亦た一隻眼を具すと云はねばならぬ。

其後ハ海山杳然久不奉伺候候失敬打過申候、發錄時分早々相認候、其節奉申上候通飄然遊興已盡而道途阻絶不可遽歸、此行[　]豊尾之遊ニ御座候故序の事と存是迄寄申候、此地氣候ハ上方中國などの盆過と申位に御座候、御地など今比已裝綿候程と奉存候、不斜酔時安否物過命旭未曽不東望來憶、今夏の御京遊追々奉承知候、此義御預定に御座候はヽ早春奉訪候節此ニても御知らせ被下候ハヽ西帳ハ止可申處、借々參差可恨候も、是も風斗被乗興候事奉存候、拙西遊處々苦樂相半と申内、十中九八苦ニ候、時々自問胡爲乎來哉未免贈有識之揶揄候、先人被成汗漫候事共今更存出悵然仕候、山川都邑風俗物產種々滋料ト相違仕候事も御座候、如懸算候事も多御座候、驚人候ハ鹿兒島の粉花ニ御座候、其謀國の拙可笑事のみニ御座候、大隅居院中の政にて後白河不啻と相聞候處々歸路ニ可申上候、是ノミ相樂居申候、別紙拙詩奉遊寄候御一笑可被下候、何卒短章にても御作被遣下候ハバ生涯之思出ニ仕度奉存候、是迄未得使字見賜、私身ニ取候ニ一大缺典ニ御座候、可惜信ハ替々翁ニ御座候、和井原ニテ把臂話舊獨有這翁、旅中得計不意斷腸御察可被下候、西湖竝翁之跡候處は毎々歸話を相樂居申候所、有之通頗若力申候、此度もむだに仕まじくと存候と云へは月ヽ隆に御座候へ共、違京滯賦長古稀古に仕申候へ共、無這翁無可相示者候、伏爺先生作御南御歸後整鉄乞斧可申候間、御揃揃可被下、海内青術調諸先生鉛篁爲道

爾後生御自重千々萬々奉祈候事に御座候彼苅山茫々臨柄悵然何れ今職中二八不盡候耕に御座候、期其時申留候　草々不盡

七月廿九日所見頼州淡陵下作此書申述々々揚州山人の怨依成

尚々南畔と同宿仕居候、同人もよろしく申上くれと申居候、京都ニテ小生を色々だ評仕候モノ有之候よし、京には居らぬつもりなど申觸れ候ものも有之と留守より申越候、其訓先生を嫌候仰なと申聞候ものも有之など承候、如何なれば小生先生を指揺誹謗候事ニヤと存候、何分暇貼候て承知可仕と存候へ共、又もとの所に仕立候事六ヶ敷と存候、何れ大出ニテ御座候

○別紙忠詩御斧正被下候へば、御家中潔生可有之、右御両側添削に御座示被下度奉希候、下手な詩扨任人欠御可申候、其、前書ニ申上置候事一大遺憾に御座候故、此帖を切せ申置のみに御座候

茶山老先生　几丈　　　　襄升

尚々守邸守へ旅況可被申候分今年中に北游の積に御座候、今明中此地申候、熊本に少々留留而歸よりト関　右申上く候處、風波危候にてヤハリ下関より路に可仕と存候處、長崎は九月末より八月下旬迄居申候、是等之義は國元より通々御聞可被下不申上候、其以前の義は廣江松永二子より可申上と存候、猶謹答故無外何方へも是無沙汰候

此の如く彼は茶山公の廣島に於ける評判を探問し、更に猶茶山に向つて彼の弁解がましき事を申してゐる。彼はよく／＼茶山の不快を氣にしたものと見える。

斯くて彼は文政二年二月四日廣島に歸省し、二十三日には母を伴じて廣島を發し、二十八日には神邊に泊し茶山を訪ひ、一日滯在し、三十日に神邊を發してゐる。茶山の感情も、もはや此際には緩和したものであらう。それから彼は親孝行を一圖にし、或は嵐山に母を伴ひ、それから吉野に赴き、母は閏四月の上旬まで京都に在り、或は洛中洛外の見物、或は琵琶湖の遊覽など、痒き處に手の届く程馳走し、遂に母を送つて閏四月二十六日には神邊の茶山方を訪ひ、其の二十九日には廣島に歸宅した。

却說改めて茲に特筆するは、山陽が文化十二年結婚した事だ。彼は廉塾に入られんとするに際しては、其の師菅茶山翁に生涯妻帯せぬ杯と放言したが、京都に住して見れば、とても家庭を作る必要にせまられ、遂に此に至つたのであらう。山陽三十六歲、妻中島女十九歲、其の身元は江州仁正寺の某の女とか云ふが、小石元瑞の義女として小石氏を稱した。即ち梨影女史だ。或は彼女が山陽の死後の手紙に十九年連れ添ふたとあるから、山陽の死せる天保三年壬辰の歲から溯れば、文化十一年となるから、十一年であらねばならぬと云ふ說もある。何れにしても問題とする程の事ではない。彼女は實に山陽に取つては、二つ無き好き細君であつた。彼女の如何に家持ちが上手で且つ一心に山陽に奉仕した乎は、想像に餘りある。山陽は實に家庭に於て恵まれたと云はねばならぬ。されば彼が長崎に於て一家有之稱衣侍苦

返『夏全書』水巳三年』と云うたつも其に在る可き事であらう。此の如くにして文政二年は過ぎた。

第十三　四十以後の山陽

四十歳以後の山陽は寧ろ順境であつた。彼の文壇に於ける名聲は愈揚り、彼が門下に出入する人も追々加り、彼は隱然關西に於ける一敵國を爲すのみならず、江戸に向つては又少からざる評判を與へた。之からは廣島に母を見舞ふ事と、母を廣島より迎へて諸方を見物せしむる事とが彼の年中行事の一と成つた。

文政三年四十一歳の十月七日に一子が産れた。それが辰藏だ。文政四年四十二歳、彼は兩替町に家を構へ、齋微閣と唱へた。八月佐藤一齋の江戸に歸るを餞けした。此秋日野大納言資愛に招れた。此れから日野家との交渉が追々親密になつた。文政五年四十三歳正月、德太郎改めて舊名久太郎に復した。大阪に移らんとし、網島に家を見立てたが、遂に果さなかつた。而して十一月に三本木に移り水西莊と名づけた。此處が山陽終焉の家となつた。此年春水遺稿の校訂を終へた。彼が父の遺稿を出板する迄には實に尋常ならざる骨折をした。彼の眼から見れば、父の詩文は隨分指摘す可き物が多かつた。其處で彼は出來得る限り整理した。又之を補修した。而して其遺稿の終には義弟權次郎の遺著をも無關係にした。之れにも未だ言へたものに云ふ可きもない。作文遺稿中最も出色は『津起事』と云ふ物である。『津紀事』は彼が纂輯に出作せざる以前大阪に於ける交友彼等の記事であり、『詩友志』は彼の師若くは友人に就て記したものである。山陽は眞に父の遺稿のみでなく、他人の詩文を見るとも決して忽諸にはしなかつた。自分の詩文は猶更であつた。文政六年四十四歳、六年振に田能村竹田と大阪にて出會した。十一月に復た一子生れた。それが復二郎支峰だ。文政七年四十五歳、二月母は廣島を出發し、山陽は三月十四日大阪に迎へ、十月二十四日送りて廣島に歸つた。歸途には姫路に滯在し、藩校仁壽山黌にて講義をした。文政八年四十六歳、三月叔父春風は京都に來た。此二十八日に辰藏は死んだ。『別レ春又別兒』此日兩傷悲』の詩を作つたは此時である。四月十四日春風は出立して歸國した。五月二十六日三本木八、所謂他日の賴醇古狂生三樹三郎は生れた。此年小竹星巖等と紀州に遊んだ。秋九月十一日叔父春風は逝いた。彼は復た姫路家老河合漢年に招かれた仁壽山黌にて講義を爲し、遂に廣島に歸省した。此年彼の媒酌にて後藤松陰と篠崎小竹の長女町子とは結婚した。文政九年（四十七）梁川星巖夫妻が九州旅行から歸り來り、相攜へて嵐山に遊んだ。此年日本外史の改寶全く成つた。文政十年二月母は叔父杏坪と相攜へて上京し

たゞ由て技を長くに作ろ一字軒に花を觀た。今回も頗る長逗留に亙つた。両人は五月相携へて廣島に歸つた。五月廿一日には樂翁公から外史を徴められたに就き、之を關に併せて書を上つた。八月には茶山危篤の報に接して急行したが、遂に及ばなかつた。十月二日には樂翁公より外史獻上の挨拶として白銀廿枚と東吉十種二函とを贈られた。此年から政記の稿草に取掛つた。文政十一年水西莊の水に臨む所に一室を築き山紫水明處と稱した。文政十二年正月樂翁公から外史に就ての評を賜つた。二月十八日は春水十三回忌の爲に歸省したが、三月には母を奉じて京に上り、家を携へて伊勢參宮などし、十一月三日送つて廣島に到つた。天保元年（五十一歳）六月母の病を聞き歸省した。母は病癒えて七月下旬歸京した。天保二年彼年五十二歳の五月、廣島なる與一は江戸勤務の途次入京した。彼は之を瀬田に送つた。九月には歸省した。此れが最後の歸省だ。十二月歸京した。天保三年（五十三歳）五月大阪に遊び又嵯峨に遊んだ。六月十一日咯血、同二十六日又咯血、七月廿五日大に咯血、八月十八日咯血、廿二日咯血、廿四日病状を江戸なる與一に知らせた。九月十四日親友小竹來つた。廿三日危篤、暮六ツ切諭いた。廿五日は光林寺にて葬式、其の夜直ぐに東山長樂寺の後ろ山に埋つた。享年實に五十三。此が唯彼の最後の十年間を目錄に書いたものだ。

第十四　人としての山陽

吾人は山陽を多くの方面から研究する必要がある。先づ第一に人として彼を觀なければならぬ。人として最も眼に着くのは彼が親孝行の事だ。此れは彼が卅歳過ぎ迄親不孝を爲し盡して、其の前科を償んが爲にしたと云へばそれ迄の話だ。又不孝者の評判が餘りに世に高くて彼の社會上の立場が面白くないから、此れを拭ひ消す爲、努めて孝行をしたと云へばそれ迄の話だ。固より人間は山陽に限らず、誰しも全く眞純なる者ではない。されば彼の孝行にも幾許か他の動機も加味しないとは云はない。併し如何に考ても彼は、人見せや若くば差引勘定にて親孝行をした者とは思はれない。良心者養せざらんと欲するも能はざる者あつて此く爲たのであらう。或は彼が年々山陽道を往來するを見て、此れは母を見舞ふ爲でなく、寧ろ母に托して旅稼ぎをするのであらうと云ふ者もある。固より彼が所謂旅稼なるものは、當時の彼に取ては其生活上必須の要件であつたかも知れない。然し縱令其の事なしとするも、彼は必ず歸省したであらう。若し歸省が旅稼ぎの爲と云ふ事であれば、何の必要あつて彼は其の母を京都迄伴ひ來り、短かくも數月、長ければ半年に垂

んとする程書をせしめ、身持を慎つて其の親心を得べく孝行し奔走してゐたのであらう。何れにしても彼は實に孝行兒であつた。元來彼の親不孝と云ふのも心からの不孝ではなかつた。唯子供の時には癇症や病氣が手傳つた。壯年に在れば其上に更に放蕩が手傳ひ、心ならずも父母の心を傷めたのだ。彼も父母の心を傷むるの善き事でないのは能く承知して居た。そこで彼は時として自ら改卒と付けて悔悟して見た。又出奔した後にも、何ぞ父の喜びたる物を見たしと申出でた事もあつた。彼が廣島に屏居して居る中に、菅茶山に與へたる書中に、斯の如き文句がある。

菟角以二氣短促一、自損二精神一候事多く、是にては長壽成業無二覺束一存候、併(し)竹原行以來、家翁復二昔之歡一を日親、小子心胸弛之爽快、氣色取直候、是と申も先生(の)春風被二我父子一、洽與洽融仕候事と、感銘仕候

之れを見れば如何にも孝子の心状が活現してゐる。元來彼の父は山陽の眼から見れば餘りに几帳面過ぎた淡であつた。山陽は彼の父を評して、『方正端亮』と云ふて居る。父を知るは子に如くは無しで、如何にも其の通りだ。春水は當時の文人には稀しき堅き男であつた。出身して廣島藩の儒者と成つてからは愈以て堅くなつた。固より彼は多藝の男で、書が巧く、酒も呑み、人並の付合も出來、いくらかそれで洒氣があつたとしても、本來餘りに嚴格に餘りに四角であり。又恐らくは彼の子も彼流儀の嚴格に一教育せんとしたならば、山陽は益々之に反抗したに違ひなかつたのであらう。然し山陽は決して父の恩を忘れる者では無かつた。彼は學問や才藝では父には感服しなかつたとしても、父が方正にして一般の師表ともなる可き行狀には、尊敬の念を拂つたには相違無い。五十にして父母を慕ふを大孝と云ふと孟子は說いたが、彼は死に至る迄其の父を忘れなかつた。況んや其の母に於ておや。彼が母に恭順であつた事に何となくラスキンを憶ひ出さしむる。彼は實に母の限り無き愛情に利息を付けて之を拂つてゐる。彼は母の前には一代の泰斗でありつゝ矢張尋常一樣の子供であつた。彼は母の戒めをば比較的によく守つた。彼の母が如何に非凡であり、又女丈夫であつたかは、其の日記を見ても思ひ遣るゝ。即ち彼が四十五歲文化七年母が京都に來り彼家に寓したる際、其の六月四日の項に付く、

久太郎過酒故か直ちに醉ひ寢る事度々、云ふ處、今日御遺書を掛け其前にて誓を立て過酒禁ず。

御遺書とは春水の書いたものである。又七月四日の項に、

七月四日、雨、書物なし、夜よく寢る。久太郎按摩し呉れる。

尚彼が母に與へたる書簡には一として情趣ならざるものはない。而して母が或時小竹の處に向つて與へたる書中には

誠に御兩人樣共御底意なく御心切になし被下候段申盡まるらせ候、

(註、之れは山陽より母に宛たる書簡の意味、私に於てもさてノヽ添く

存じまゐらせ候、誠に人にすぐれ候賢婦者の稀なるものに御座候ことぞ。さぞ御困り被遊候はんに、ようこそ御あしらひ被下候御事と忝く存候。

如何にも可憐の文句で、山陽其の人が紙上に活躍してゐる。

又山陽が文政八年四十六歳の六月母に送つたる手紙の中に左の項がある。

此度第、御眼可申上は小夜若輩候處夜學又是午時いよ〳〵豐に可仕旨、午時は不仕候、夜學はこれに對しても乾度可仕、然母の此永以升御了簡此儀は可仕と別一種に存候、誠に難有奉頭存升思召仕候、兎角酒過き候て直に寝候事時々有之、此斷相止め如斯處先生、茶山、此度量を相定め、酒後にても夜學出來候様に可仕、追々燈火可親相成候、今日叫朔の際、年の中に御座候、たしか先往千御前生も今日と存候、是を今度の日と仕久しきものに御座候、其ウカノヽ不仕出精不朽の業を成申度存候、何卒御張顔御座候に推譯候て、篤小兵部区家母御斷文に仕候様の者御承引御成被下、他人の異見より十倍と本存候

斯る文句は拵へても出來るものではない。如何にも能く情を寫して居る。予は凡そ世間に山陽と其の母との如き相得たる者あるかと、今更羨ましく思はざるを得ない。

文人不精とは能く世間にいふた言葉であるが、山陽は決して不精ではなかつた。彼の書翰を見れば才に任せて書なぐり、時としては何處やらが漏らしき口吻もないではないが、それは寧ろ筆が余り過ぎたといふもので、彼は決して不精兒ではなかつた。何れかといへば彼は怨みを謝し恩のを寄ふるといふでなくして、恩に感じ義を思ふ者であつた。彼が忘恩者でないと云ふ證據は、父母は云ふ迄も無く、茶山杏坪を再生の恩人として常に之を記憶し、又茶山に對しては、實に始終一貫恭敬の至りを盡くしたとにても判る。固より茶山の機嫌を直し置き、又其の機嫌を取り置く必要があつたには相違無い。然し彼が茶山に對する態度は單に損か得失の打算からばかりでなく、其の恩を知り之に報ゆるの心があつたのだ。有體に云へば茶山も山陽に對しては好意のみでなく、彼が廉塾を去つて以來當分の中は隨分不快であり、其の爲めには彼の目の先、鼻の先から隨分山陽の惡宣傳となつたに相違はない。然も山陽は斯る事は噯氣ひにも出さず、只其の恩義丈けを人にも吹聽し自ら報んと勉めて居る。又春風杏坪兩叔父に對する態度も殆ど完全と云ふ可きに近かつた。而して父執たる茶山尾藤古賀諸先生に對しては必ず相當の敬意を拂つてゐる。彼は友人としても決して信義を缺かなかつた。彼には世の所謂義俠心なるものがあつたか。所謂献身的犧牲なる者があつたか。己を捨てゝ人に殉するが如き氣分あつたか。それは誰と受合出來ない。されど義俠心無きが爲めに不實であるとは云へない。彼の交友關係は己を損して人を益するでもなく、人を損して己を益するでもなく、謂はゞ公平貿易主義であつた。即ち我も得し彼も得すると云ふ意味だ。謂はゞ

世が五の物を以て與ふれば我も亦五つの物を以て報ゆると云ふ事だ。彼は他人の不義不都合をした事に就ては之を看過する程寛大なる漢ではなかつた。例へば彼が骨折つて探究したる作に潤筆料を拂はず、若くば不十分なる潤筆料を拂ふ者ある場合には、随分苦情をも云うてゐる。然し決して不相當なる要求を他に向つてしたる例は無い。彼には一種の正義の念があり、又彼流儀の衡平法がある。例へば彼が物を人に遣る時に、此方に剩餘があり、且つ其者がうまきから獻上すると云ひ、而も相手の方にさる場合があれば、此方に送り與へよと云うてゐる。如何にも當り前の事だ。又彼が懇意なる伊丹の酒屋に不幸があつた時に弔文を送つて、香奠をやれば又香奠返しの必要が出來るからわざと送らぬと斷つてゐる。如何にも勘定高きやうであるが、彼の勘定は決して相當以外に出てゐない。彼には珍らしく嫉妬心と云ふやうなものの發露が、其の奔放自在の手紙の中にも見當らぬ。随分同時の人々を熱罵し、冷嘲したる例もあるが、それが嫉妬根性から來たと考へらるゝものは一つも見當らない。實は彼自ら高く標置して、他人を嫉妬する必要を認めなかつたのであらう。彼は何れかと云へば惡口家よりも感心家である。彼程の眼識があれば白石や徂徠にも今少しく惡口を加へても差支へが無い筈である。然るに彼は如何にも先輩に感心してゐる。又同輩の人々、文章家に對しては、茶山の如き心を傾けてゐた人に感服が掛引なかつたとも限らないが、竹田の畫に至りては全く[illegible]から感心してゐたやうだ。星巖なども詩人として能く其の長所を認めてゐる。其の他後輩に對しては何處迄も寛大である。彼には親分程の襟度は無つたが、餓鬼大將の氣分があつた。若し彼が今少し大膽であり、大氣であり、義侠心があつたならば、立派な親分と成つたであらうが、此點に就ては彼は寧ろ餘りに小心者、横着氣が少く、徂徠程の親分にも成り得なかつた。但だ彼には、陰險と云ふ分子は殆ど無い。或は全く無いと云ひ得られる。學者とか文士とか云ふ者には何やら御殿女中氣分が付纏ふものであるが、彼にはそれはなかつた。さりとて彼は淡水の如き漢ではなかつた。随分執着心もあつた。畢竟彼が藩を飛出し一本立ちで成功したのは、初一念に對する執着心があつた爲めだ。所謂彼はお人好しと云ふ程の好人物では無かつた。然し腹黑い處は見當らない。掛引もあつた、勘定高くもあつた、愛憎もあつた、若干の山氣もあつた、法螺も吹いた、氣取もした。然し何れかと云へば其の皮相こそ父と雙つて居るが、矢張彼は律氣几帳面なる春水の子であつた。

世の中に最も不幸なる者は其生立ちの時に愛に渇するのと金に渇するのとである。或は父母を失ひ或は貧苦に呻吟する時

は、これが一生其人の性格に刻印せられて附纏ふものだ。山陽は何れかと云へば彼の家は父母共に並々ならぬ儉約家であつたれば、贅澤には馴れてはゐないが、決して貧乏の味を嘗めた事は無い。彼は父母と云はん乎、或は寧ろ母と云はん乎、殆ど一人にて其愛を專らにしてゐたれば、愛には食傷する程であつた。それが所謂彼の母の云ふ通り大氣儘者と成つた一つの理由であるが、それと同時に彼が御殿女中的の人間とならなかつたのも其の爲であらう。子供の時には彼が癇癪深く病んでゐると母の日記にはあるが、それは彼が神經過敏で早熟であつたから、色々氣を廻して餘計な事迄心配し若くは悲痛したものであらう。然し茶山が云うた通り、三十にして尚二十位の氣分であつたとすれば、寧ろ彼のお坊ちやん氣質が、一生彼に附纏ふて居たものと云うて差支へあるまい。彼は一生お山の大將で終した。佐久間象山が彼を評して、「剛[illegible]恬足在[illegible]間」と云うたのは、如何にも適評だ。

彼の弱點を云へば第一が異性に對する事だ。彼が三十六歲にして梨影女史を娶つて以來は、當時京都に賴氏の驕縱と云つて夫婦同行が通り者となつた程でありたれば、爾後他に多く錯誤す可き理由も無い樣であつたが、然も之は確かに彼の弱點であつた。其の次は酒だ。此れは三十九歲以來の事で、要するに彼の命を取つたものは色と酒との二つであらう。それから彼は又食家と云ふでは無いが、食物には頗る吟味を仕つて居た。何でも日彼の書翰の多くは酒か食物かである。當時の歌に

　さて賴さんのおしものは、川魚に赤味噌、葱小口切り熊膽の丸だき、
　大根の胡麻に尖丹らるか、駱駝に一錦伊丹酒、

とあつた。全く間違無きところだ。又其の外には骨董である。彼は學者であるから書籍を愛するは當然であるが、書籍の方は何時も他人よりの借用にて濟まし、苟くも餘力あればそれを書畫骨董に傾けた。其の次には金錢だ。彼の書翰には金錢の話が頗る多い。之は如何にも外について高尚なる學者の氣品と相容れぬやうであるが、彼は大阪生れで廣島に生成し京都にて終した者であれば、彼が金錢を口にするのも決して無理は無い、但彼は所謂拜金家ではなかつた。金は欲しかつたが、取る可からざるものは取らなかつた。即ち彼の手は金錢に向つては淡泊ではなかつたが、汚れてはゐなかつた。彼が如き何等定まりたる收入無く、而も彼相當の地位を保ち且つ聊か道樂をもするには金の必要は勿論である。況んや其の妻子百年の計を爲すに於ておや。されば彼が金錢を得ん事を努め、又得たるものは之を失はさらんが爲めに種々其の心を勞したるは、彼が獨立の地位を保持するには當然の事と云はねばならぬ。彼は決して金持の金を拒んだでもな

ら大名の金を呑んだのでもない。何くも依頼する者あれば、一[illegible]利家とか[illegible]豪家とか、[illegible]に依其の他地方の富豪の依頼にも應じた。彼が其友人古賀穀堂から鍋島侯の爲に朝鮮布に書を作らんことを依頼された時に、詩を作つて之を謝絕したるを見て、大名や金持からの依頼ならば何でも頭から拒ねつくる者も思ふのは大間違ひだ。彼が穀堂の紹介を受入れなかつたのは、多分彼の腹に蟲の居所が悪しかつた爲であらう。若くば穀堂からの註文の仕方が彼の腑に落ちなかつたのであらう。彼の書は決して無代價で書いたものではなかつた。彼は書を以て生活して居た。彼の書は職業的だ。今日であれば彼程の文才あれば原稿生活で立派なブルジョアたることが出來るが、當時に於ては文章は殆ど錢に値せすで、專ら書を以て生活の足しとした。乃ち偶ま作つた書も決して無報酬ではなかつた。例へば彼が門人橋本竹下の爲に作つたる耶馬溪圖卷の如きも、必ず當時に於きては相當の潤筆料を得たのであらう。要するに彼は書でも畫でも文でも金を取らぬのでは無い。道を以てせねば取らぬと云ふ丈けだ。

概して云へば文人としての彼は、當時の標準からすれば寧ろ立派なものと云ふ可きであらう。彼は決して聖徒ではない。彼は寧ろ生活を享樂したる人だ。彼はストイックよりも寧ろエピキュリアンの徒だ。然し[illegible]享樂[illegible]に[illegible]く、生活の一部として享樂せんとしたことであつた。[illegible]彼流儀に於ける[illegible]作的生活を目的としてゐた[illegible]とに於ける生活の意義であつた。

山陽と同時の人々は何れも山陽を見識家として敬服して居た。其の門人宮原節庵は其の友野本白巖の山陽を論じて、「先生の學は及ぶ可き也、先生の文は及ぶ可き也、先生の詩は及ぶ可き也、先生の識は及ぶ可からざる也」と云ふ言を記して、自らもそれに賛若してゐる。又彼の親友篠原小竹は「人皆君を稱するに才學を以てす、僕等は即ち尤も君の識に服する也」と云つてゐる。彼の寧ろ先輩である猪飼敬所まで彼は評して、「學問は粗なれども大いに有識」と賞讃してゐる。要するに彼が見識家でゐると云ふ事は殆ど通論と成つてゐる。されど其の見識とは何物である乎、誰しも語つてゐない。若し予をして之を云はしめるなれば、山陽の見識は、彼が夙に日本國民の自覺的精神を呑み込み、之を發揮するを以て彼が畢生の仕事としたからだ。即ち彼の學問も藝術も著作も、凡べて此の日本國民の自覺的精神を打ち込んでゐるからだ。

凡そ世の中には二通の人がある。第一は世の中から甚だ進んだ者であつて、所謂先覺者。第一は世の中と共に動く人であつ

て、即ち世間並の者。第三は世の中から取殘された者で、所謂落伍者。山陽は何れの階級に屬するかと云へば、多くの人は第一階級に屬する者と判斷するかも知れぬが、予は然らずと思ふ。山陽は決して先覺者でもなく、又落伍者でもなく、百歳の前に立つて百歳の後を指導する人でもない。彼は全く世間一般多數の階級に屬する所謂時勢と共に動く一人であつた。然し更に此中間階級に就て見るに、此内にも亦三種のものがある。均しく時勢と共に動く中でも、或者は少しく時勢に先だち、或者は全く中し、或者は後れかける。若し中間階級に於ける山陽の地位を指定すれば、彼は時勢と共に動きつゝあるが、一歩若くは半歩之れに先んじた。彼は時勢から引ずられる者でもなく、又取殘される者でもない。云はゞ其の第一種に屬したるに相違ない。只だ早くから時勢を感じ、他の者と異ならなかつたのは前に云うた所のだ。若し山陽をして一代の政治家たらしめたらば、彼は恐らくは公武合體論者であつたらう。彼は固より革命家でもなく、破壞者でもなく、さりとて因循の保守者でもなく、現代に殉徳長を捧げて畢生を死する者でもなく、又温和なる進歩派であつた。或は進歩的保守派とも云ふ可く、若くは保守的進歩派とも云ふ可き一人であつた。されば時勢を超越して大改革大改造などと云ふやうな大見識に乏かつたが、然し世の中がことは知らず時勢は彼の間に於て大いなる飛躍を爲しつゝある事には、彼は敏かに氣付いてゐたに相違ない。若し彼に見識なるものがあらば、それに氣付いた所が即ちそれである。要するに彼が歷史家たる所以は、國民的自覺を意識し、彼と同時の多くの學者は之を意識せず、若くば意識しても彼程明でなかつたからだ。兩者の差は、只一歩若少の間に過ぎない。彼が嘗て其の友人梁川星巖の西側に序して、「必スシモ人ヨリ遠キニ非ズ、筆フトコロ尺寸ノ間ニアリ」と云ふたが、之は恰も彼自ら學者としての、彼を評するものと云つても差支あるまい。

第十五　學者としての山陽

彼の學者としての立場に就て考ふれば、彼は全く三つの性格を有つてゐた。第一は愛國者である。第二は批評家である。第三は藝術家である。彼は愛國者の心を以て感じ、批評家の眼を以て見、藝術家の手を以て描き、茲に一個の賴山陽なる一つの立場が日本の文學史上に出で來つた。勤王家といひ、愛國者と云ふ。其の旨は同一觀念を表裏より觀察したるものにして、觀念的の相違に過ぎない。故に山陽を愛國者と云へば、勤王家たるは云ふ迄もない。愛國と云ふ一要素の中には、少くとも山陽の時代に於ては、勤王の意味が十二分に含まれてゐる。前にも云うた通り、山

時に國民的自覺の時代に生れて彼自ら其の自覺者の第一と成つた。彼が一切の作物に悉く國民的自覺の色彩と音調とを帶ばない者は無い。それは既に掲げたる彼が幽居中の梶山君修に與へたる手紙の中にも言及して居る。(四三頁參照) 彼は支那の學問を支那人として學ぶのでは無く、日本人として之を學び且つ之を日本の用に立てんが爲に學ぶのだと云ふてゐる。彼は如何なる場合でも己れが日本人であるを忘れず、又日本の爲めに學問をするを忘れなかつた。而して日本の國體は萬世一系の皇室によつて立ち、皇室の爲めに立つてゐるを彼は心得てゐたから、彼自然には尊皇主義者と成つたのだ。彼は徒に尊皇主義者ではない、國民的自覺、國家的觀念の中樞點として皇室を尊崇したのだ。彼が蒙古襲來の歌もそれが爲めだ。彼が北條氏の罪を責めつゝ尚恕する所があつたのもそれが爲めだ。彼が王朝の政治を顧望したのもそれが爲めだ。彼が南朝に同情を表したのもそれが爲めだ。彼は彼の同時の或人々に比して世界的知識が多かつたとは云ひ得ない。若し白石をして彼の時代に在らしめば、白石は更に彼に十倍乃至數十倍するの世界的知識を吸收したのであらう。山陽の國防論などは、徒らに、蒙古襲來の時の經驗を繰返さんとするに過ぎなかつた。併し乍ら彼は何人よりも國民的に目覺めて居た。若し漢學が徂徠の時代に於て始めて漢學者の漢學となつたならば、山陽に至つて更に日本人の漢學と成つたと云はねばなるまい。固より[illegible]てゐた者は少くなかつた。併し彼が如く有効に漢學界に於ける風氣を一轉化せしめた者はあるまい。彼と同時の龜井昭陽の如きは、相變らず徂徠學を奉じ、彼をして『龜井父子文章今に正德享保のはやり風仕り候事と見え申候況んや詩おや』と云うてゐる通りで、彼は龜井等の時勢遲れを見てゐる。彼が時勢に適合する學者であつたと云ふ事は、必ずしも徂徠の學風を蟬脫して、唐宋八家を學んだと云ふばかりで無く、蘇東坡に私淑したと云ふばかりでも無い。是等は寧ろ枝葉の論だ。それよりも彼の着眼點が違つてゐる。徂徠は何處迄も支那人の立場に成つて支那の學問をした。山陽は何處迄も日本人の立場からして支那の學問をした。之が二者の相違である。彼が歷史も此れが爲めに一種のインスピレーションを讀者に與へた。彼が詩も之が爲めに國民的歌謡となつた。而して彼が作物の一切は之れが爲めに國民的文學となつた。此の意味に於ては、京傳や三馬が世俗的文學を以て書きたる洒落本小說などよりも、山陽の漢字を以て書きたる者が却つて國民的文學と云ひ得られる。何となれば、京傳三馬は只市井の風俗を寫した迄で國民的生活の一部には觸れてゐるが、其の大精神には何等關係を有たない。然るに山陽

文字は漢字を用ひて居るが、而かもそれは國民的生活のみならず、又其の思想に觸れてゐる。所謂國民的仰望、國民的理想、國民的感激に觸れてゐる。是れが彼の作物の脚なくして千里に奔つた所以であらう。

第二は即ち批評家だ。批評家の仕事は、新規なる事を創作するのではない。既に現存する物に就て之を比較研究し、之を選擇し發揮し、時に其の最善最美なるものを摘出して之を、世に宣傳するものだ。此の意味に於て山陽は立派なる批評家だ。山陽には殆ど創造的頭腦を具有せぬ。彼が國史の研究は、少時の時代から初まつて一生に亘つて居ると云ふが、然かも彼は史論として何等新しき見解を出させるのみならず、一の史實さへも之を發見し得ない。之れを思へば彼の國史研究と云ふは、頗る怪しいと云はねばならぬ。此點に於ては彼は新井白石に比して大いなる劣目がある。然るに彼が當時に於て何故に其の見識を一世から公認せられたであらう。それは彼が批評家であるが爲めだ。彼は批評家としては洽ねく天成の本領を有つてゐた。即ち天才的批評家だ。一度び彼の眼が觸るれば、忽ち鑒別が出來た。人或は彼より以前の作物に就て彼が勝手に判別したと云ふ者あれども、吾人の見る所では之れは判別では無く、彼が批評眼に映じた通りに其の選擇をしたに過ぎない。謂ば彼が新井白石の論を讀んだなどと云ふ人もあるが、白石から云へば　彼のお蔭で其の議論が世の中に紹介せられた上で感謝せねばなるまい。批評家の資格は不羈であらねばならぬ。大膽でなければならぬ。第一の條件は偶像を作る事だ。山陽は文士の常として無論偶像を作つた。例へばカーライルがクロンウエルに於ける、ラスキンがターナーに於ける、マコレーがウイリヤムに於ける如きだ。山陽も亦東坡を偶像とし、日本に於ては白石なども其の偶像の一であつた。然し彼は比較的偶像に囚はれなかつた。彼の支那文學に於ける議論を見れば、彼は何人にも雷同してゐない。彼には自分の批評があり、尺度があつた。尤も遺憾とするは、彼に一部の支那文學史を書かせなかつた事だ。されど彼の凡有ゆる著作を見れば、それを綜合して自ら先秦時代より明清時代に於ける彼の文學上に於ける意見の一斑は、略ぼ之を窺ふ事が出來る。彼には考證學者の流弊である樹を數へて林を遺るゝが如き弊は無かつた。彼は寧ろ大觀的であつた。何事を見るにも大局から判斷を下した。之は彼が歷史的修養の結果と云ふ可きであらう。通例考證學者は局部に頭を突込み、それに拘泥する癖があるが、彼は其の癖は少かつた。少かつたと云ふのと、全く無かつたと云ふのとは意味が違ふ。時として彼にも其の癖があつた。之は白石も同樣である。又批評家は他の美點を探す

るに過ぎであるのみならず、[illegible]でなくてはならぬ。然るに山陽は寧ろこれが弱點と云はるゝ程であつた。彼は徂徠などの如く、冷酷の風が無かつた。固より山陽も竹南畝などに對しては無暗に惡口を云うてゐるが、それは彼の除外例であつて、彼は支那人に向つても日本人に向つても、前代の人に向つても同時代の人に向つても、如何にも寛大であり、如何にも他の美點に推服するに吝ではなかつた。彼は概して云へば、他の缺點に對しては尋常の眼を以て見るが。其の長所に對しては擴大鏡を以て見てゐる。即ち缺點は當り前に之を見てゐるが、長所は寧ろ彼自ら之に隨喜して居る趣きがある。彼は冷やかなる批評家でなく、熱ある批評家であつた。固より熱があるから愛憎もあるが、然し概して彼は愛憎の爲に極端に走るが如き愛は少かつた。批評家と云へば必ず奇矯に馳する事が無いではない。然し彼はそれを爲すには餘りに常識があつた。彼は努めて人に勝たん事を求めず、努めて前人の意見を翻さん事を求めず、努めて前人未發の説を吐ん事を求めず、只當面接觸したる其者に就ての正當の判斷を下さん事を期してゐた。若し批評家として彼の缺點を擧ぐれば、餘りに寛大過ぎると云ふ點にあつたかも知れない。又時としては餘りに一時の感興に委せ、委細に省慮しなかつた事もあらう。又書物を讀む事の少かつたのも、批評家として一つの缺點で[illegible]者でもなく、[illegible]はなかつた。彼の[illegible]につてゐた」就中彼は世に向ては、清朝の學者を相手にせないやうな口吻を漏らしつゝも、殆ど彼と同時代迄の清朝學者の著作を讀んでゐた事は、單に予が推測するのみならず、彼自ら無心に記したるものを綜合すれば之を知るに難くない。それで又彼は不思議に要領を得たる學者であつて、彼が瞥見は恐らくは他の熟讀よりも能く書物の本意を得たらしく思はるゝ。彼の批評中には、彼が果して眼を觸れたや否や疑はしきものさへあるが、それでもそれに就て記したる處は、概して大趣旨を誤つて居ないやうだ。且つ批評家としては其の眼界が廣くあらねばならぬ。彼は其點に就て頗る群を超えてゐた。彼は日本の漢學者が殆ど己れも亦支那人であるかの如き立場から一切を判斷するを面白く思はぬのみならず、國學者が唯國學者と云ふ立場に限つて自ら漢學を排斥するのを嗤つてゐた。彼の立場は實に廣大無邊であつた。彼は國學者に向つて付て此の如き事を云つてゐる。

子等我邦ヲ小視ス。故ニ介介然トシテ、漢ヲ抑ヘ和ヲ揚グルコトヲ務ト爲ス。余ノ如キハ思ラク、我邦甚大、四外貢スル所ノ文物ヲ取リ、以テ我用ヲ爲ス。何ゾ敢テ漢ヲ以テ對ト爲サント。其人爽然タリ。

此の如く彼は日本を本位とし、而かも日本を偉大なる者として、支那學も其の用を爲す可き者としてゐる。所謂世界の凡有ゆる物を攝取して我用に供すとは、彼の批評家たる立場だ。此點に於ては彼は思想上に於ける開國者と云つても差支ない。彼は決して空疎なる議論をしなかつた。其の點に於ては彼は通人である。倘ほ第三に彼が最も大いなる資格は藝術家であることだ。如何に批評家でも、彼に藝術が無かつたならば、殆ど用を爲さない。然るに彼は實に彼の時代に於ける大いなる藝術家であるのみならず、幕府三百年を通じての藝術家であつた。何人も完全なる者は無い。若し孔を探せば彼にも幾多のそれがある。然し如何なる缺點があるに拘らず、彼は實に大いなる藝術家であつた。彼の詩に「作詩自知難入格。眼高其奈手低何」と云うて居るが、それは全く彼の自嘲の言葉であつて、眼が高きのみではなく、手は眼より高かつた。即ち茶山が言うた通り、彼の文章は無双であつた。彼の同時代には作家が少くなかつた。中にも松崎慊堂、佐藤一齋などは江戸にて雄飛してゐた。殊に一齋は一代の文章家として、官學の學頭として鳴してゐた。併し上手下手は暫く措き、一齋の文章は堆砌細工の如く、到底製造物たるを免れない。之れに較ぶれば山陽の文は生きてゐる。命がある。其處が取柄である。詩に至つては彼の同時代には作家が輩出した。關西に於ては老將軍の茶山があり、江戸には市川寬齋があり、其の同時の五山天民翁があり、又少しく遅れては江湖の詩人梁川星巖があつた。然し彼等の詩は要するに只彼等の詩であつたが、山陽の詩は國民的歌謠となつた。即ち單に眼前の景、口頭の語を以てするでも、山陽の作は寫實寫眞寫意寫情、何處までも命があつた。山陽の詩とか書とかに就ては、別に茲に品隲する必要も無いが、而かも彼自ら一家の風を爲してゐた事は間違ひはあるまい。何れにしても彼は藝術家であり、又天才的藝術家であつた。而して單に天才と云ふ許りでなく、彼は畢生の努力を此の一方面に傾けた。彼の藝術が何故に此の如く命があるかと云へば、彼の魂が其中に入つてゐるからと云はねばなるまい。夫れに就ては尚一言する必要がある。彼は古人の言うた通り、文は道を載するの器と云ふ事を服膺してゐた。彼は決して所謂食ふ爲めの藝術家でもなく、享樂する爲の藝術家でもなく、道樂の爲めの藝術家でもなく、職業の爲めの藝術家でもなく、又藝術家としての藝術家でもなく、職分の爲めの藝術家であり、奉仕の爲めの藝術家であつた。話は元に戻るが、所謂文章報國が彼の目的であつた。山陽以前の時代の作者若くば同時代の作者中には種々の人があつたが、其の中には所謂藝術の爲めの藝術家でなければ、衣食の爲め乎享樂の爲めの

事蹟家が多かつた。近世でも[illegible]でも、[illegible]の如きは自ら申譯を爲しつゝも尚ほ其の同類たるを免れなかつた。然し山陽が外史や政記や新策や通議を著したのは金儲の爲めでもなく、閑日月を銷する爲めでもなかつた。彼は之を以て世に奉公せんが爲めであつた。彼の藝術に關する見解は恰もラスキンが『藝術は藝術の爲めの藝術でない、人生と關係ある所の藝術である。個人及國民的性格の表現としての藝術である。』と云うた意味に於ての藝術であつた。彼が歴史家としての立場は更に別に説く所があるが、既に前にも言つた如く、彼は愛國者の心を以て、批評家の眼を以て、藝術家の手を以て、其の爲す所を爲した。玆に於て乎日本文學史上に於て、前に山陽無く後に山陽無いと云ふ可き獨特の地歩を占むるを得た。

第十六　日本外史

山陽をして日本の文學史上に不朽ならしむる者は、第一に日本外史、第二に山陽詩鈔、第三に書後題跋であらう。其の中に於て日本外史は彼が畢生の力を竭めた大作で、所謂我を知る者も日本外史、我を罪する者も日本外史と云ふ可き程、彼自身も之を重要視してゐた。されば吾人も此書に就ては聊か吟味する必要がある。而かも順序として先づ彼は如何にして此書を成したる

[illegible]時代とも云ふ可きであつた。中井竹山の『逸史』、同じく履軒の『通語』やも、彼が外史に着手する少しき以前の産物だ、又水戸などでも一時殆ど中止せられたる『大日本史』の校訂や、若くば[illegible]やらの事に着手し懸けてゐた。青山延于の『皇朝史略』の如きも、外史と略ぼ同時代の産物だ。又た山陽の父春水の『在津紀事』を讀めば、混沌社の連中が詩會をする時に國史を題目として詠ずる事を書いてゐる。春水も未だ廣島藩に抱へられない以前に、大日本史を節寫して之を廣島藩に納めたることもある。又彼が天明元年十二月廣島藩に抱へらるゝや、天明四年十月には日本歴史治亂盛衰の模様を概括したる書籍編纂の事を申立て、翌五年九月より愈着手し、其の草稿の一卷丈は猶存してゐるさうだが、遂に果さなかつた。されば山陽が日本外史を作つたのも、必しも所以無しとはしない。彼は子供の時から軍書物が好きであつて、繪入の保元平治物語や義貞軍記などを玩んだ事は既記の通りだ。十八歳にて東遊する時に、源平から徳川氏の初に至る治亂興廢の跡を辿りて『著論[illegible]風』と云うてゐる。彼が江戸遊學中に得たる重なる一は、其の叔母の夫尾藤二洲の國史に關する談話に接した事であらう。彼は織田氏の事を記する時に至つて始めて二洲が當時信長は偉いと話した、其の偉い

所に思當つたと云うて居る。二洲が雜帖の「通語」を書くに際し、其の相談相手であつた事は、春水の「在津紀事」にも掲げてある。山陽は凡ての素養に於て殆ど歷史家たる可く生出した。彼は弱冠にして小學とか近思錄とか淵源錄とか、宋學者の用意的なる書物を讀んだが、彼には何うもそれが面白くなかつた。後日彼が趙甌北の「二十二史劄記」の後に跋して「蓋シ經學ハ既ニ之ヲ爲ス者多シ。故ニ去テ一ノ境界ヲ求ヌ。是レ雲崧(甌北のこと)門戶ヲ樹テザルノ門戶也。」と云うてゐるが、是語は移して彼自ら斯く云ふものと見て差支へない。彼が外史に着手したのは、江戶から歸り、出奔して引戻され、家の一室に幽居せしめられたる頃であつたらう。既記の梶山竹松に與へたる陳情書が能く之を語つてゐる。尚彼の母の日記にも此事が書いてある。

十二月十日（享和二年）晴、仁平より書寫物見せる。伊助より取次ぐ。

此の伊助は手島伊助と云ひ、春水の若黨であつたが、彼の幽居にて濟の書物方となり。尚賴家の執事の如き仕事を内外ではしてゐた者だ。山陽は幽居であつて。一度仕事に縣れば却々熱心である。彼が最初のプランは梶山竹松に與へたる書中の如く、永享頃から織豐頃迄とし。其の他に幾多の史論を加うる積であつた。其の同年若くは翌年梶山竹松に與へたる手紙になれば、左の通りである。

此節、日本史相認候に付、本朝將家諸氏の世家作り可申と、就結仕居候、是は日本史、源平諸公之傳各處に散見不便、通語も平語に源氏の事記し、平家候も、足利三世後織豐迄之制とたり作付候、然し此内一年已に此志御座候て、其間も御顧申上候は、世家列傳にて、武門盛衰を作り可申哉に存候へ共、總日本史を修め候人御座候へば、我書好批と成候故、日本人不屑之業と可申候へば、大より法使世刻學の者と、有之内に世家計りに旅囘伸と不押合、十六氏世家と申物を致可申かと存居候、大人にも御熟申上候間、兩城遊候のみに御座候、別記題號日數間、無御座候處御應候樣被申候、御來批に二御致可被下候、

日本世史　十六世家　十三世家　鬪史　本朝劄史

源氏世家　此書爲武門興起、故以源氏爲首、以日本劄記也。讀文政而歩云、日本有平家、平鳴四大姓。是我國大勢以世家。

平氏世家。爲史曰。當時世衣不制。而以平氏冠書首。但佗論究。而缺平氏。勢月今之。故附之下此。與源氏世家合、得其升降之變。

北條氏世家。北條氏乃源氏臣、然受上爵來天下、則列諸世家亦可。大凡出論紀綱。而綱紀名分自行其間、平治著。則史有成敗一不必高焉也。

右將世家　鬪之書叙官軍諸將之事。但失鋒突。然爲其以征夷大將軍職宗家諸將之首　楠氏諸人　新田方以抗足利氏者數世　是亦可劄者曲

新名　宗良親王　楠氏　北畠　名和氏　兒島氏　菊池氏　河野氏

新田足利氏世家、以梢開之　附後學裁足利氏世家。

山名細川氏世家。自二氏外争。足利氏失權而天下分裂、細川氏敗而三好氏興　舉中國之故名累世　獨源氏之有北條氏。則列諸世家不失體。

三好氏世家　以長宗我部氏附　以長宗我部氏　氏之變也　日以平論

南論也

伊勢氏世家　小田原北條氏以後二三爲、繼其上杉之統、然新二國南北

羣雄。並列爲世家。
毛利氏世家。△吉川△小早川二氏附
○上杉武田氏世家
東諸氏世家
△里見氏△佐竹氏△伊達氏△今川氏△朝倉氏△齋藤氏
西諸氏世家
△大内氏△尼子氏△大友氏△島津氏△龍造寺
織田氏世家
△丹波△柴田△瀧川△池田諸氏附
○豐臣氏世家
△加藤△小西△増田諸氏附
合二三家爲一世家。猶錯叙之蓋史記有之。大家之劇附見小家。亦史記所有。○者係已成。世家之名。因叙其世代與。有列傳而名世家者。不必拘其體。蕭曹陳吳之類是也。此書本意。欲兼紀傳編年兩體。便觀者以次看過。乃得時變概梗焉耳。故不必具諸小家也乎。諸小家△者皆是。且紙當世事者不皆載也。

尚又之と多く時を隔てざる間に於て彼が大槻平泉に與へて其の序文を乞うたる手紙に據れば、

歷史五種。卿顧題一言。因記其梗槩。以汙尊矚。覽後得訊是幸。
三紀。提記神武至後陽成大事爲三卷。便童蒙也。凡以下諸書。皆爲便蒙而作。非所以示大方也。
五書。輿地書。官制書。財用書。法律書。
九議。大勢議。平安議。前鎌倉氏議。中興議。室町氏議。安土氏議。浪速氏議。總議。
十三世家。藤原氏世家。平家世家。北條氏世家。楠氏世家。新田足利氏世家。足利氏世家。伊勢氏世家。毛利氏世家。武田上杉氏世家。織田氏世家、豐臣氏世家。
二十三策　君權内治。大臣監察。歷史專業。分職選擧。用才擇人。均田籍籍。財利之計。財利之計。財利之計。財利之計。財利之計。財利之計。務農富國。裁制商賈。平均米價。開墾新田。水利河渠。金錢楮鈔。銅鐵之制。市肆征課。貨幣弊弊。法律刑名。訟獄保甲。
右皆猥陋不足見者。獨僕性資讀國志。卒得此數種。若其擬策。徒擬其文爲耳。非助談經濟。爲出位之言也。千萬無妬。

而して更に先書を修正して

昨夜見枉　得聞延耳之談　鄙吝頓消　爾後悖條萬端　所謂託鄙署昇胥　悖稿已成　而方有所更改　已經思之　足下胸中五鳳樓已成矣　而猶父欲更其柱礎　而改其棟宇　何其無分別也　僕曾欲史名三紀日統略　井後五書　總名日六略（以其事略、不謂之紀者也　次十氏世家　源氏以下至豐臣氏　已成稿矣　而欲添藤平二氏　以其觸諱除之　次十五記事　僕所用力　莫若十氏世家　至此記事　則弱冠時　擬保元以下至新鉄山崎等　天下最大戰鬪之事　爲十五首　名紀本末　其文依倣左氏　乃遊戲餘技耳　爾後琢磨　不忍割愛　次八議　次二十三策　最後附雜文一種　混而合之　號隊史六種　然後得足下已成之序冠之　僕終身守之爲榮多矣　是勝更名文編　如其成構者遠矣　願勿厭其煩　而辭其勞　僕坎軻　思得舊友一言　常觀以遣其悶也耳　千萬懇察

三月廿日　襄　頓首再拜

大槻子縄賢兄

玉案下

此手紙に據れば既に源氏以下豐臣氏に至り既に功を成し

云ふて居れば、彼が広島謫居中の所則であらう。要するに彼が此書を成したる行緒は、彼が大宰大弐に與へたる書中に最も明白である。

竊ニ外史廿卷ハ亦僕ガ平生ノ仕ゲ候、也年ノ間漸ク野史ヨリ抄出ス。然ル後一月ニ一卷ヲ訂シ、且ツ紀事ノ文ヲ學ブ、亦ク之ヲ百ヘニ不朽ノ盛事、藏ク之ヲ百ヘニ閒ノ消閑ノ娯ミノミ。……

と云ふてゐる。然れば先づ其の要目を、読んだ書中より鈔出し、然る後一ヶ月に一巻宛と云ふ式で漢文に譯したのであらう。而して彼文の法を用ひたのだ。彼文とは先づ抄出した時にて其の文を綴り、これを又漢文に譯する事だ。又

足利時代文治氏ニ從ツテ其ノ事實ヲ抄セント欲シ、而シテ參考ヲ以テ擧グルヲ果サズ。此ノ後諸家ノ記録ニ徵ヒ近人ノ碑誌狀傳ヲ集ス。此レ聞キ知ル所ニ就ク矣。僭竊ヲ兩間ニ於テ武門ノ終始ヲ綜ス。好ム所異ル有リト雖モ、而モ何ゾ其ノ相背クニ至ラン哉。

と云うてゐる。斯く一一彼が広島謫居中に全部を脱稿して居た事は、彼が曾て某に答へたる書中に於て之を漏して居る。

病後以來文墨ヲ以テ自ラ遣ル、最モ留心スル所ハ本邦ノ爲ス所ヲ記シ、國ニ之ニ做ント欲ス、其ノ稿本ノ大略ハ出来、其ノ當編ニ苦シミヌ。又室町の後藏諸家ノ要領ヲ得難キヲ病ヒ、因ツテ自ラ揣ラズ、源平氏ヨリ以テ今代ニ至ルマデ、家別ニ之ヲ記シ、外史二十餘卷ヲ爲ス、又其ノ治亂ノ際、制度ノ略、兵食刑法ノ沿革ヲ論シ、新策二十餘篇ヲ爲ス、自ラ謂フ當ニ便ニシ、他人ニ觀ス可キ者ニ非ズ。家公ノ志ヲ纂圖ニ捧クルニ在リ。寔ノ爲ス所ヲ觀テ世ニ用無シト爲シ、一覧ヲ許トセズ。相見ルノ際、厚ク問ヒ及バル、而シテ敢テ出サザル者ハ此ガ爲メ也。然リト雖モ何ゾ此ニ至ル。此ノ取ル所ノ者何ゾ必ズシモ秘スルヲ爲サン。當ニ更ニ正ヲ乞フベキノミ。

之は父が自分の著述を相手にせぬから、父の前で彼等が此事を問ふも出して見せなかつたが、左程見たいと云ふ御希望ならば、必ず御覧に入れて教を乞ふであらうと返事をやつたのだ。以上を綜合すれば、文化六年彼が三十歳頃には外史も新策も一通りは出来上つて居たのが判る。彼が文化七年三十一歳の時菅茶山の塾を督しつつある際、恩人築山に與へたる書中にも之に言及して居る。尚ほ文化四年彼が二十八歳の頃、池口子遜に與へたる書中にも「私著作仕居候處、事缺申候故、御當代三世家系迄を德川氏四卷と仕合せて、二十卷に致候」とある。之に據つて既に徳川氏迄當時出来てゐたのが判る。彼が三十二歳上方に上つた當時、小竹が彼の日本外史を寫し取つた事は既記の通りであるが、舊稿はこれから以後の事であるらしい。文化九年三十三歳の頃小竹に答へた書中に

讀史餘論、拜借大日本史なども此地にても不自由に御座候、拜借するからは暫く閑暇を作候、御貸可被下候、自然今年中位のことに、舊稿は今後にせんとしては惡らん哉、先づ無理なりに卜し可申哉とも存候、しかし於他日と申てもホウブなき事也哉

とある。即ち彼が讀史餘論や日本史の後録を參考書として當

賛を作る可く、其の信用を小竹に申込んだものだ。されば論賛は外史の本文よりも數年後に出來た事と判定せねばならぬ。何彼が文化十四年三十八歲の頃、備中長尾の小野本太郎へ宛てたる手紙に

尙々近來は外史を直し申候、少々之柱一本入かへと存候所、ねだまではづし柱をも取かへと申樣に相成候。論賛も書申候、又十年前とは見識かはり申候、しかし京儒皆川流の經義穿鑿ならねば、江戶流之詩を作るなどの外は無之、新田は御當家之宗家など申候へば、びつくりすると申人多し、それ故獨爲而獨看四顧無可與語者、あはれ新地之衛あらば、貴公並に泉藏君などと討論仕度、直し畢候はゞ直し候本を下し可申候間、其の方の本へ御直し可被成候

とある。如何に彼が外史に骨折つた乎は、彼が九州旅行の際にも其の稿本を携へて、暇毎に訂正しつつあるのを見ても判る。彼が最も精力を傾けたのは議論でなく、敍事である。如何に文章を推敲した乎は、草稿と云はんよりも既に定本と成りたる物を更に訂正したるものに就て見ても知る可きである。予は備中の生長氏所藏のそれを一見したが、頁毎に之を直し、中には殆ど全文を書き替へた所さへある。而して之を對照して見れば、其の進步は實に著しくある。苦心の跡以て知る可しだ。

偖て彼が何時頃之を校正し終りたるかは、彼の遺稿に其門人の歸態を送るの詩の題言に時余刪二改所著外史一方成とある。之が文政九年四十七歲の冬だ。されば彼が四十八歲の文政十年二十餘年稿成れりと云うたのは直に其の通りである。偖彼は何故に外史の校正を文政九年頃に取急いだかと云へば、それには理由がある。彼は之を作つたが如何にして之を世に出す可き乎と云ふ機會を考へてゐたのである。彼は自ら勿體を附けて、之は自分の爲に自分が書いたので、人に見す可きもので無いと云うてゐるが、之れは漢學者流の月並で、實際彼は此著物を以て世に立たんと欲したのである。されば彼が之を世に出す方針に就ては初めから考へてゐた。彼が殊更其の稿本を大窪天民などに送つて批評を求めたのも、畢竟下地はそれである。何を云ふても江戶が本場だ。名を爲すも江戶、評判を取るも江戶、江戶で無視せられては迚も日本全國の大立物と成る譯には行かぬ。されば彼も之に就ては餘程考へたのであらうが、幸に彼はよき手引を有つて居た。それは即ち市川米庵だ。彼は米庵に書を送つて此の事を申込んでゐる。其の顚末は左の通りだ。

此節外史日夜校正、大方正月中旬迄には、差下(江戶へ)可申候間、よろしく御周旋可被下、序文杯之事も如何とも御思慮被下、只々私爲國爲世道稱成此書、乍憚天下後世に不朽と相成候樣に御座候へば、只今瞑目候ても無遺恨候、是に而釣名射利之念は、微塵毛頭無之事は、老兄も御垂知可被成候。竹山逸史など、輿論の中に而、差向益二人心一とも相見不申候へ共、得レ眠不二沈埋一候事に而も、其尙未公

周旋之力と可申候、御譚々相其所候。

廿七日　　　　　襄拝啓

米庵仁兄

此れは文政九年歳杪（十二月）廿七日付である。猶も前に掲げたる詩の題言と照應してゐる。此の書簡は、實に山陽の外史著作、及び外史出版に對する、滿腔の熱血を披瀝したるものとして、日本外史に對する、當人第一自發の文字と云はねばならぬ。

尚ほ文政十年には、更らに左の一書を米庵に與へてゐる。

以下御閲覽

外史一部、もはや僕久中に被相願候へども、今少心得之事有之候而、それを済候上可差上と存候内に、存外寄などに一先間罷候、一部位には出來居候也、自此方御亂一被下候様に申御念に一林家ノ川杯の事然へ、勿論實心山門におゐて、台侍中間に而自此方何等の有所求自懸ケ申様に申すまじく、類之波方より時有之見定めより一ツ出し候かと申林へ出候一ツ出候へば相に候、是等仕先を見周旋、御一ツ可被下候、大略如此來、於時此書之時計居候、林公にも御時あり、申居候此在か、自川閣守居不被存門と申人、内品心得の位思を取計り候、有之事可申談候、外史の時に成り候、何卒人之者存之御覧合申候ニ而置候、已に其使に用内十冊と申事其いたし越、其内は外史を写しいたし置これ、是は其事と申候存申候存卒京之者名川通ニ申付、ヤレ候か一外に申事申候、傳内事に随分承知申候、是と先ニ存候御内意にもに御座候ハヾ、何卒表向にて致度云ておこしてくれ、さなくては是又自然周納之法有之候、今般自此方も御覽之願度と存居候事に候故、表向に命を蒙候はゞ謹て献上仕度と相願置候、是又右兄御耳に入置候也

彼藩も御上使取込にてそれ處こもあるまじ、近々入京の様にも申候、またしれぬとも申候、　　　　襄侯内

四月九日

彼は其の親友米庵のみならず、其の門人村瀬藤城の江戸に滞在しつゝあるに向つて、左の如く申し送つてゐる。

外史の校正候事も御居候、當世人情同、此自術之浸をいたし候様にとも、不知心者共取ゞ決ニ存候も口惜候。何卒御取計にて、彼方ニ林家斎などより取寄見せてから被と申候と申に候如何ノヽ。足下如に名、使心事件質も御存なるべし、成此書不行候之外、無累於所求、以上には、鉄石の事に候、所兄贊襄もカヲリヌ事なれ共、士之所以不可不慎候。外内、林述齋、先生御噂、内々被仰下、是亦得一大知己一候と被存候。併不堪愧者如何、有甚如何、且其斟酌不止於此と被存候。そして序文に一向……此書……に相成候へとも、自作米十之はいや也、……候、例々。

此れは十二月十六日付にて、恐らくは文政十年であらう。尚ほ十月十八日付一文政九年なるべし一の書にも、

何分拙著一本の為に長く寄、日御下に……候、謹久傳度ものと被存候、且外史一件に御承候、御追々御計會申度云々。

と云ふてゐる。されば彼は文政九年から十年にかけては、外史を世に出すに就て、必生必死の運動をしたらしくある。

ここで見れば彼が如何に立身出世をせんとするにて苦心したかゞ判る。彼は先づ其の門人村瀬藤城の手を経つて、但し當時官學の大本山林家へ獻上す可きやと相談をかけてゐる。又松平定信の手からとも考へてゐる。彼が定信との關係は父春水からの事であつて、滿更知らぬ仲でもない。されば遂に其の手からして世に出づる事となつた。此運動は如何にも巧妙に行はれ、此一事に依つても彼が外交手段の尋常ならざる事が思ひ遣られる。彼は遂に運動の結果、愈樂翁公から要求せられて之を獻上すると云ふ態度を取つた。玆に於てか堂々樂翁公に上るの書を作つて之を獻納に及んだ。『ソレ襄敢テ閣下ニ求メズ、而シテ閣下襄ニ求ム、襄ノ榮大ナリ』と云うてゐる。猶當時の模樣に就ては彼が菅茶山に與へたる書翰がよく之を盡して居る。

一書を呈し奉伺候、梅天に相成鴨河例に依り……此節京は大政大臣成の謝恩の御使參りまぜ返し申候、されども世外之者は傍觀而已、越中様は彼中山取合之時より京都受惡しき故歟、又彼御家に始めての事ゆへ精神に附届等甚よろしき由、彦根はとんとヤラヌト申す事に候、是は所謂すれ枯しなるべく候、家母抔一使京人を拜見して出立などもうし候へ共、私申候は日本一之シツヘク大名二頭揃にて被參候に、可觀事あらんやうなく候故、遺憾なく御出あるべしと申候に候、果然樂翁様より私所述之外史御覽被成度とて、此序に一部所望申來候、當代にて彼御人に觀てもらひ候へば本意至極に候、幸近年來大分改正淨成候處にて遣し申候、間合ある事あれば又々御一閲請正之筈なれども、何を申候事ニ[illegible]候、未だ[illegible]候、何分宜しく[illegible]候、[illegible]申候、候、頓首[illegible]　襄

五月二十五日

茶山老先生　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　侍者

然し山陽は決して形勢を見て機を窺つてはゐなかつた。彼は無論彼に取つては豫定の行動であつたらしく思はるゝ。何れにしても樂翁公は文政十年閏六月十一日に讀み始め、七月五日には全部二十二卷を讀了してゐる。而して其の九月二十九日には、左の如き書翰を山陽より樂翁の侍臣田内主税に與へてゐる。

御狀拜見仕候、御上益々御機嫌能被爲在、奉恐悅候、貴公様愈御安健被成御勤仕、珍重存候、然者先達而被御申遣候拙者外史、暗愚に相協ひ候に付、爲御會釋、御思集之集古十種全部二箱、加之白銀二十枚、御恩賜被仰付、不存寄一榮耀之至、投く永藏可仕候、不可申、誠恐誠惶仕候、數十年盡心力候義、僅に一有識公の賞目候さへ、丞欠第に奉存候、不圖此節此賜に預り候、本意至極に奉存候、早速亡父墳前へも申遣、一同感佩仕候事に御座候、亡父在世に候はゞ、如何程か相喜可申、是又、一同に佗仕候、是等の趣宜しく御取成被仰上可被下、奉謝上候、集古は未だ得詳覽、猶追々可申上、御謝詞迄如此御座候、恐惶謹言

九月二十九日　　　　　賴　久太郎　襄

田内主税殿

此の如くにして愈日本外史は公然世に出でた。而して文政十一年正月樂翁は左の如き題辭を書いた。

おほよそ事を記すに、もらさじとすればわずらはしく、はぶけば文要を失ふ。そのほどを得る事はいとかたかるべし。評論するも自己の見出さねば、自ら正理に歸りぬべし。さらば敗北の目に見えることまでものがす事なく穏當にして、其理をうるになん。これをまたく備へしものはこの日本外史とや云はんと、私かに思へば茲にしるしつ。彼の人の論はた如何あらん。（文政十二年正月風月翁）

併し之は外史に掲げたるものにして、其の初稿にて[illegible]松平子爵家に藏せられたるものは少しく文句を異にして、其の前年の正月二十五日付のものがある。何れにしても樂翁公の裏付にて日本外史も殆ど公然天下を披つて世の中に出づる事となつた。山陽が如何に樂翁公の此擧に滿足したるやは、所謂云ふ迄もない。彼が小竹に與へたる書中にも斯る文句がある。

先頃樂翁公よりの返事如何と御尋ねされよんと打忘れ居候、今度本書共返し申候、此事巴兄及山崇升興つに力あり候、故に御沙汰申上候、しかし右公この位はよほどのはりこみと人々申候

樂翁公が非常なる節約家であつたことは世間に隱れなきことである。されば彼が銀二十枚を致贈に逢つたのは、世間でも餘程の優遇と見たには相違ない。然し山陽に取りては銀が有難いではなく、全く彼が外史に奥書して貰れた事が有難かつたに相違あるまい。然し推し來れば之も亡き父春水の、曾て樂翁公の知遇を辱くした餘慶と云ふものでもあるまい。

嘗て日本外史が未だ出版せられざる前、殆ど天下の識者の間には大評判となり、又それが追々と諸方に借寫されて居る。小竹は勿論備中長尾の小野氏、若くば大塩平八郎などに彼が贈つたことは、彼の書中にも明かである。而かも姫路の酒井家、米澤の上杉家、又彼の本藩たる藝州淺野家などにもそれが分配されてゐる。現に山陽と同時と云ふよりも、寧ろ其の前に生れ、其の後に死したる曲亭馬琴の如きも、態々之を寫して居る。されば如何に之が出版以前に廣く天下に行はれたるかは言ふを待たぬ。併し茶山も曾つて云うた通り、山陽は其の生前から嫉妬の焦點となつてゐた。彼が才名の餘りに高き爲に、又彼が才能を消化する事能はざる爲に、彼の敵が多かつた事は論を俟たぬ。必ずしも攻撃ばかりでもなく、斯く世間の焦點となれば自然に其の瑕を探す者の出て來るは論を俟たぬ。日本外史が天下を風靡するの勢を以て行はれたると同時に、種々の非難攻撃は行はれてゐる。今試に其の要點を擧げて見れば、第一に彼が新井白石の議論を全く剽竊して知らぬ顔でゐる事だ。第二は事實に誤謬の多いと云ふ事だ。第三は文章が卑弱と云ふ事だ。第四は其の體裁が誤つてゐると云ふ事だ。尚其の他にも種々あるであらうが、先づ此の四つの要點に就て觀察するであらう。斷つて置くが、予は山陽の辯護人ではない。何等彼の爲めに辯護の必要を感じてゐない。併し以上の山陽に對する非難攻撃は、盡

む不氣に考へて見たゞ、後世史家の澤田も行の、皆云ふも近つた、所には外れてゐる。第一、新井白石の讀史餘論を讀んだと云ふ事は、一寸山陽の門人とも成つた鹽谷宕陰も

近世ノ史論賴山陽ヲ以テ稱首トナス。然レドモ其源ハ新白石ヨリ出ヅ。特ニ字ニ眞假ノ別アリ、文ニ和漢ノ異有ルノミ耳

と云うてゐる。而して田口鼎軒に至つては、『日本外史と讀史餘論』と題して逐一之を對照し、山陽をして殆ど辯解の辭なき程手厳しく遣つけてゐる。成程之は間違なき事である。其の事は何人よりも當人の山陽が第一に斯く識認してゐるのである。彼が小竹に與へたる手紙を見れば其の事が能く判る。

今年は外史（毛利武田上杉北條其外御當代の初新田の事とも）を大分直し論賛も白石論（原註源氏賛ノ類）を踏襲の嫌ある處など大分かへ申候、イツゾヤ奉乞正候賛數（按ずに此の賛數は、大日本史の賛數でなく、山陽の日本外史に添へたる論賛を纂めたるものだ）一卷今猶在几下否、一先御返し被下候てもよし

史賛と云ふもの史論なとの樣に馳騁出奇候事もあしく、正論なれハ不免踏襲の事出來候、コマリ候もの也

聚新意事も餘程あれとも一々左樣ニも不參候、白石ハ餘論假名書也、漢文ニいたしても其論究意の處人以爲剽竊於前說候を恐れ候也、如何やゝ、白石は八幡太郎を論し候處從源氏賛に御引合御覽可被下候、あれを直すと工合あしき處多く出來候也

復月廿五日　　　　襄

小竹老兄

山陽も後年此點に注意したものと見える。彼が常々と云ふ頭原の名を出して白石の名を史賛の中に出さなかつたのは、實が後世から非難せらるる一の主なる理由であつて、彼としては申譯はあるまい。此點に就ては吾人も如何ともする能はずである。併し彼は必ずしも事毎に白石の意見を踏襲したものではない。彼自身の意見を出した處のあるのは、一生懸命に彼を攻撃したる田口氏の如きも尚ほ之を認めてゐる。足利義滿に關する論、織田氏に關する論の如きは特にそれである。又毛利とか北條とか武田上杉などに關する議論も其の通りである。殊に信長などに關しては、全く白石とは見解の立場を異にしてゐる。予は白石が信長を唯殘忍一點張りの者とし、而も其の勤王心に對してさへも相當なる識認を與へざるを遺憾とする者だ。惟ふに是等の點は則ち山陽の見識を察す可きものではあるまいか。

又た事實に誤謬があると云ふ點は勿論だ。栗原信充の如きは『日本外史正誤』を編して其誤謬を正し、又清宮秀堅の如きも『外史箚記』を作りて、其中に外史の誤を指摘したる所あり、殊に近來に至つては川田甕江博士の如き、『日本外史辯誤』を作りて外史の誤りを正してゐ、遂に其の書は全部脱稿に至らなかつたが、若し此書一たび世に出でなば、外史は完膚なきに至るであらうと云ふ人もある。

凡そ如何なる人でも思ひ違ひ、考へ違ひ、記憶違ひ其他の間違無きを必としない。況んや源平より德川氏に至る歷史を一人にて書綴り、一點も他よりの非難せられざるものを作り出すが如きは、到底人力の得て能くする所ではない。此點に於ては山陽自身が誰よりも能く其の缺點を知つてゐる。彼が樂翁公に上つた書にも

其謬誤ノ訣ト臣■集職忠邪ノ跡トヲ顯ンコトヲ要シ、其大體明確ナル者ヲ取ル。夫ノ博引旁搜、錙銖ノ必爭スルガ如キハ、世自ラ其人アリ、以爲ラク寡聞ノ及ブ所ニ非ザル也

と。及ぶ所に非ずとは謙遜の詞で、其の眞意は實は之を屑とせずと解する方が當つてゐるかも知れない。此の如く彼は唯だ大體の筋を逐つて書いたものであるから、其の間誤謬のある事は已むを得ぬと云うてゐる。但だ問題は誤謬の程度だ。此點に就ては、吾人も外史に多大の遺憾がある。又第二、外史の文に至つては當時の漢學者中に異論が多かつた。例へば「大日本史」は勿論安積澹泊の「烈祖成績」の如き、若くば其前に溯りたる林羅山、同春齋等の「本朝通鑑」の如き、漢文ではあるが、何人も之を文章としてではなく、記述として見たものだ。それで是等に向つて、文章として左か喧しく云ふ者が無かつたのは當然だ。然るに山陽以前若くは同時に出で來つた竹山の「逸史」、履軒の「通語」、若くば龜井昭陽の「蒙史」の如き、何れも古文辭格にて或は左傳の口調を學び或は徂徠派の擬古文字を用ひ、初めて文章らしき文章として識認せらるゝに至つた。然るに如上の標準から見れば、山陽の日本外史は餘りに平明であつて、謂はゞ假名を漢文に直した迄である。されば當時の漢學者流が、其の文章に批評をつけたのも已むを得ぬ譯だ。即ち彼と同時の古賀侗庵は、「平衍平凡、一點ノ古色無シ」と云うて居る。又龜井昭陽の如きも山陽を評して、才子なりと云ひ、學術は何も無しと云ひ、彼を徂徠門下の平金華に比してゐる。固より當人が、典もよきの「蒙史」の著者なれば、外史の文章に感服しなかつたのは、想像する迄もない。帆足萬里に至つては、

僕嘗テ竹山先生逸史ノ文章未ダ工ナラザルヲ恨ム。今マ足下ノ外史ヲ覽ルニ逸史ニ下ルコト數等。賴生作ル所ノ文章、迂闊、和習兩出、加フルニ叙事錯漏、議論平弱、眞ニ以テ醬瓿ヲ覆フ可シ。然是ヲ以テ而名ヲ得タルハ、眞ニ僥倖ス可シ。

と云うてゐる。

斯る苛評も古文辭派の彼等から見れば、必ずしも當らない事はない。又第四の體裁云々に就ては、誰が眼に見ても矛盾がある。日本外史は所謂將門の歷史で、征夷大將軍の職を奉じたる家を正統としてゐるのである。即ち源氏足利氏德川氏がそれである。然るに其中に新田氏を正統の中に加へたのは、如何に考へても

尊氏が立たない。新田氏は自ら立たなくって、[illegible]にでもなければ幕府を開いた者でもない。それを特に尊氏足利氏[illegible]氏に比したのは、畢竟德川氏の祖先が新田氏であると稱せられてゐたからで、強く非難すれば德川氏に諂らふ爲に然かしたと云はれない事もない。若し又た例へば太史公が諸侯でない孔子を世家の中に列したるが如き、所謂一種の除外例から見れば、南朝方では勤王の首唱者には、新田よりも山陽が崇拜したる楠木を擧げねばなるまい。されば此等の點に就て彼此異議を云ふ者あるも、誠に已むを得ない次第だ。

然し予の見る所に據れば、以上四個の非難は何れも相當の理由はあるが、然も山陽の急所には當つてゐない。山陽の目的は大なる藝術品として外史を作り上げたのだ。此の藝術品を科學的見地から批判して、科學的精神の缺點とか、科學的研究の不足とか、科學的結構の不備とか、彼是非難するのは、寧ろ大なる見當違ひではあるまいか。役者が舞臺で立合をする時には、只だ舞臺上の効果を收むる乎、收めない乎と云ふ事が目的である。それが武道指南者の目から見て法に叶ふと乎、叶はぬと乎議論するのは、野暮の骨頂である。若し攻擊をせんとせば、寧ろ根本的に山陽が歴史を藝術化したるを攻擊せねばなるまい。然し藝術的作品に向つて科學的批判を加ふのは、全く標準が異つてゐる。畫家[illegible]

[illegible]以てそれが[illegible]の法に叶はぬと乎、[illegible]は相違して居ると乎、彼是非難するのは全く見當違ひである。例へば伊能忠敬は測地者である。谷文晁は畫家である。文晁の畫を忠敬の測量法に叶はぬとて非難するは、猶ほ忠敬の測量圖を文晁の繪畫面白くないと云ふと同樣だ。白石は科學的歴史家だ。讀史餘論は全く科學的精神を以て史實を批判して居る。日本外史は藝術的歴史だ。踏み込んで云へば、歴史的ローマンスだ。事件を描いて、其の鮮明なる印象を讀者に與ふるが目的だ。論贊の如きは謂はゞ刺身のツマである。山陽は初めから議論文として外史を書いたのでは無い。叙事文として書いたのである。其の論贊も十中の八九は無韻の詩であつて、自らの活々したる感激を以て、之を他に鼓吹せんとしたるのもである。論贊は外史の全體から見れば十分の一にも足らない。其の論贊の中でも議論に屬するものは又た極めて小部分だ。然るに其の一小部分たる論贊中の議論を以て、外史全體を批判し去らんとするが如きは、山陽に取つては頗る有難迷惑と云はねばならぬ。山陽作史の目的は、所謂彼が自から矜りとしたる文章の力を史實の上に發揮するにあつた。それで彼は二者兩立せざる時に於ては——事實の爲に文

章を枉る乎。又は文章の爲めに事實を枉げると云ふ事に許容した場合し彼は寧ろ文章を主とし、文章を重としたであらう。さりとて彼は遂に事情を文章の生命としてゐたから。文章の爲めに彼の意見や感情を枉げ、若しくは偽めた心理はなかつた。而して彼は本來唯直截簡潔の簡潔派であるから、故らに華容の文字を濫用する如きことはなかつた。それ已に百と云ふよりも千と云ひ、千と云ふより萬と云ふ如き、文章の力を若くば色彩を添へ加ふるが如き場合は、彼は最も文章に効果をきかしめるを選んだに相違ない。例へば彼が本塚某に與へたる書翰に斯く云つて居る。

今般は河越夜戰の戰、私儀々相紛敷に存候に付、回り向日比較字を夜中に向申候、上杉十六將何分丸提灯指揮に一切候の事を数し、北條家の大將駿河守と皆々合せ、關東に依るいたし川ヤ不駄さんために此物を指申候、是も是之處駿河守殿被仰付申候八一同死いたし候、夫もおもしろき事に候、是を兵術にしてはよく人を驅て仕舞はねばならず候、外夜軍に定候所へ實買、待合いたし大變仕候、英雄所見略相同と可申候

と云ふ如何にも奇なる、提灯の事物の爲めに此の戰が後年に知らるるなどゝ云ふ事は、餘りに事實が誇張したる所ではない乎。又彼が小野木太郎に與へたる書中にも斯く云つてゐる。

外史ののこり不揃心懸け候申候、今存中には別に可出候、八少し御待可被下候、近江と丹波はいかがなるもの也、外史に偏倚の間違ある事は不可一概論也、自由書已然事故所謂以一人之手門書數百千年之事、此間必有千古遺誤、両時代人指摘故献不能史に云々、アノおすかは餓物のよにはゝゝもなき事此、事にても可知也、日本史なとも忘れはせさるを延引、是は追々上げ可申候

彼は斯くの如く近江と丹波と取違へたのを他より指摘せられて、別に驚きもしないのだ。其等の事は彼の目には全く重大と見えてゐなかつた。然し何れかと云へば彼は却々精密家であつて、比較的に間違は少い方だ。何れかと云へば彼の間違の其は、彼自らが間違つたのでなくして、原料其物が間違つたのだ。彼に責む可き事があれば、彼が如何がはしき俗書を基として、日本外史を編したのが間違ひの因と云はねばならぬ。何だ俗書から此の如き美術品を作り上げたる彼の手際に敬服せざるを得ない。今度に日本外史に就て予が敬服して居る點を擧げて見れば、第一、美術品として誠に能く出來て居る。謂はゞ巧妙なる劇作者が戯曲を作るが如く、一部の外史が自ら一の大なるドラマを形造りてゐる、日本外史は唯多くの部分を集めた許りで無く、外史其物が全體を爲してゐる。即ち外史を評するには、何れの部分と云ふ事で無く、外史全體を取つてこれを見なければ、未だ以て作者の苦心を諒とする事が出來ない。固より外史の前に本朝通鑑の如き、若くば大日本史の如き大著述がある。前者は編年體にて、後者は紀傳體であり、何れも山陽の當時は未だ刊行も經ずし

些も書簡には先づ之を以て一部の纂輯物として觀られてゐた。然るに日本外史に至つては、何れの部分をも全體に關係を有ち、全體が又何れかの部分に關係を有ち、恰かも人間の四肢五官が人體より切り離すとの出來ない如く、其の全體に脈絡が貫通してゐる。其の點から見れば、馬琴の『八犬傳』を讀むのも、羅貫中の『水滸傳』を讀むのも大差がない。即ち保元平治より慶長元和に至る凡そ四百五十年間に亙る時代を經となし、其の間に出で來る重なる人物を緯となし、其の間の治亂興廢を劇作家的眼光を以て之を觀、劇作家的筆を揮うて之を描き出したものだ。即ち保元平治の亂から關原大坂役に至つて徳川氏が太平を贏ち得たる大團圓に至る、其の間の波瀾起伏は、自ら全體の局面に關係を有つて隨處に照應して居る。但た缺點を云へば、著者が餘りに藝術品として取扱ふた爲めに、例へば織田氏の興つたのは畢竟重盛忠孝の餘澤と云ひ、若くば徳川氏の天下を得たるも其祖先新田氏の南朝に忠勤を勵んだ遺徳の致す處と云ふが如き、如何にも牽强附會の説を爲してゐる類だ。第二は、上記の理由に由つて日本外史大體の筋が極めて好く通つてゐる。固より彼は初めから胸中一部の日本外史があつて、然る後に筆を執つたものではあるまい。然し其の成果に就て見れば、恰かも其の通りに思はれる。之は彼が久しきに亘つて此外史を完成したからである。多くの作者には[illegible]に全體に力を用ゐる事を忘つてゐない。吾人が日本外史に於て先づ感ず可きは、大體の筋がよく通つてゐる事である。恰も一の大なる川の流が、源頭から海に入る迄の間千山萬嶽の間を通つて來るが、而も其の一の川である如くに、外史の筋は三千萬言の間を一貫してゐる。第三は、其舞臺の局面が能く描かれてゐる事だ。兎角尋常の歴史家は、大なる舞臺を寫すにも、唯其舞臺の前後、若くば同時に出で來りたる事件を個々別々粒々雜々に寫すから、それを讀んでも何等之が大なる舞臺に於ける出來事であり、又大なる舞臺を成す出來事であると云ふ感じを與へないが、山陽は能く其の事を承知してゐる。彼の胸中には一の時代には若干の舞臺があり、一の舞臺には若干の人物があり、史家は能く其の時代に舞臺を配合し、其の舞臺に事件と人物とを配合し、各彼等が爲す可き所を爲さしめ、彼等が働く可き所に働かしめてゐる。而して彼は其局面を描く許りで無く、合せて局面の轉換を描く處に於て最も巧妙なる手際を示してゐる。筋肉は、從つて其の人物が活躍してゐる。活躍と云ふ言葉は生きてゐると云ふ意味で、必ずしも其の人物が人物相當に描かれてゐると云ふ意味ではない。何れにしても山陽以前の歴史家が人物を描くや、多くは木偶のやうである。精々よく描いた處で操人形に過ぎな

い。然し山陽の描いた人間は更に何生きてゐる。切れば血が出る様だ。活躍では楠何でも尊氏でも、正成でも、殊に武田上杉などの川中島戦争の如きは、何となく舞台の芝居を見るが如き心地がする。然るに、山陽の日本外史に至つて漢文が全く日本化して来た。之は世間で所謂和習なるものとは全く異つてゐる。和習とは漢文を書くに日本流儀の口調や語法を交ふるもので、徳川氏初期に於ける林羅山などが其の見本であらう。之は日本化したのでは無い。漢文化せざるのである。云ふて見れば未熟なるが故に和習がある。即ち十分に漢文に成り切れずして、和習たつぷりの俗然たる文章を臆面なく作出したのだ。之を以て山陽の文章の日本化と云ふ事と同一視せられては、山陽に取つて是程迷惑はあるまい。蓋し山陽の文の日本化したと云ふは、全く漢文のテクニックを心得、それに熟練し、而してそれに止まらず、更に漢文のテクニックに透徹して、而も能くそれを日本化したのである。語を換へて云へば、和習一変して漢習と成り、漢習一変して更に所謂山陽の日本化となる。山陽は謂はゞ徂徠や竹山などの行く所までは行つたが、止まる所に止まらずして、更に一歩を進めたものと云ふ可きであらう。之は単に文章許りでなく、詩も其の通りである。従つて又た彼は其の漢文のうちでも、日本流儀の文字や句を能く用ひてゐる。然しそれが全文の語調を強からしめ、若くは色彩を鮮明ならしむる為に特に用ひたのであつて、羅山などが無意識に不知不識に委せて、所謂和習を放出したるものと同一に語る可きものではない。日本外史の中にはそれが随処に表はれてゐる。彼は自ら「邦俗語ノ如キ助ツテ直チニ用ヒテ本色ヲ見ルニ足ルモノアリ。凡ソ此レ櫛度精功ナルモノニ非ザレハ與ニ語ル可カラズ」と云うてゐる。彼は文章に玄人であるのみならず、亦た苦労人であつた。鈍八は、文章が平明である。之は竹山の逸史、蛻軒の通語と対照すれば能く分る。平明と云へば大日本史の文章と同様である。然し大日本史の文章は謂はゞ一種の記録体の文にて、事柄を記するに止まつてゐる。然し日本外史は平明のうちに力がある。気格がある。精彩がある。熱情がある。固より外史の文章にもそれ／＼来歴があり、其の文字も出典がある。然し彼は決して難字を使はず、難句を用ひず、苟くも一通り漢学の素養ある者には、一読して直ちに其の意味が了解せらるゝやうに書いてゐる。日本人の手際にて漢文を和文の如く漢文のテクニックに依り、然もよく日本化して、日本の歴史を日本人に咀嚼せしむる様斯く日本的に作用したのは、前にも後にも山陽一人と云ふも恐らく過言であるまい。之にて彼が骨折の一通りでなかつた事がよく分つてゐる。恐らくは彼の精力の過半は之が為めに消耗されたのではあるまい乎。

之れを思へば冗言の贅字を省き盡して、必要にのみ適せる科詞を撰した事を寧ろ適性とせねばならぬ。要するに、文章が如何にも簡潔に出來てゐる。源平盛衰記や太平記で喋々喋々したる處を、彼は一句數句でよく之を盡してゐる。之は漢文其物が邦文に比して簡潔である爲めでもあらうが、然しそれのみでは無い。彼は實に無用の文字を使用するを出來る限り避けた。彼は凡ての點に於て儉約家であるが、文字に於て殊に然りとする。簡潔とは簡單では無い。簡單とは詳しく云ふ可き事を手短かに云ふ事だ。即ち其の中には省略と云ふ意味が籠つてゐる。簡潔とは長き文句で云ふ同樣の意味を短かき文句で云ふのだ。時としては短きが爲に却て其の力を加へる事となる。之が即ち簡潔の簡潔たる所以だ。例せば、敍事に於て新井白石の藩翰譜には、比類少き名文が往々見出される。山陽は殆どそれを見逃さず、それを採用して漢文に飜譯してゐる。例へば小田原征伐の際、家康が秀吉に府中（靜岡）の城を明渡した時に、稠人公座の裡で本多重次が家康を詈りたる事を記して

同き廿日關白殿駿河の國府の城に入りたまふ時、徳川殿長久保の御陣より參り玉ひ、御對面の儀ありて、重次此所に參りて關白殿御家人あまた將並たる所にて、徳川殿の御後より參りて立はだかり、大に聲をいからかして、やあ殿よ殿、あつぱれ不思議を振舞ひ玉ふよ、國をも保たんずる人が、我が住む城を打明けて、暫しも人に借す事やある。そのかみに天下に人の殿ばらにいはれしに、一足も退かまじき事になんずるよな、むかし公はかゝる事よなと、思ひしゝき候る。徳川殿人々に打向ひ玉ひ、今の老人が申たるやうを聞たまひてこそ候らめ。あの老人と申は、本多作左衛門重次とて家康が累代の家人、家康が幼なきより仕へぬ。年若きうちより、弓矢うち物取ては、人にも知られて候ひしが、今は見たまひし様に年もいたう寄て候。されば家康も不便のものに存ずといへども、天性我儘なる根性にて、人をば小蟲とも思はず。人々の御玉ふ所にてだに、家康をかく罵りまじら申す。まして只二人うち向うたる時の事、思ひやり給ふべし。常には如何にも候ひなん。いかで、けふしも、かゝるものゝ様をばふるまふべき。人々の思ひ給はん所、耻しう候と仰ければ、在あふ人々一同に、此人の事久しく承り及ぶといへども、見及びしは今日こそ始なれ。誠に聞くにもまさりて候ものかな。事新しうは候へ共、かゝる御家人の候事、奥ゆかしう覺えて候と色代せしと云。

山陽は之を左の如く飜譯してゐる。

大納言聞二秀吉至一。留レ兵而來會。與二七國諸將一皆在二其次一。本多重次以レ事來謁。自レ後厲レ聲曰。主公以二此大事一。主レ於レ國者。皆有下空二其城一假中人哉。如レ是則人或欲レ借二夫人一亦許レ之乎。且顧且叱。諸將相視而嘻。大納言謂二諸將一曰。彼本多重次者。僕舊臣也。自二僕幼時一從而百戰。僕亦愛二慰之一也。然天質頑梗。及レ老益甚。今於二稠人中一詬レ僕如レ此。諸公可二以想二其平時一矣。衆謝曰。聞二此老之名一久矣。今乃得レ見。有レ臣如レ此。眞可二欽羨一。

白石の原文は如何にも名文であるが、山陽の飜譯も決してそれに劣つてゐない。又石田三成が七將に迫られて、身を家康に

したる際、本多正信が家康に見へんとしたる事に就き、常山紀談は左の通り記してゐる。

初め大坂にて大名七人、石田治部少輔を成敗せんとす。德川殿の人々を制し給ひしに因て事平らぎぬ。其時伏見の御館にて正信御前に參りしに、其夜いまだ夜の半なるに、はや御殿ごもりあり。正信打噦きく參り、今夜は早ら御寐ならせ給ふと申す。德川殿いま何事かありて參ると仰せられしに、正信別の事にも候はず、石田が事いかに思召すと申す。されば我も其事をこそ思ひ謀れと仰せらる。正信さては心易くなつて候ふ。其事思召しはかられん上は、正信何事をか申すべき。御暇給るべしとて罷り出づ。德川殿また仰せらるゝ旨もなし。其時に土井大炊頭利勝、御傍に在つて承りきと、後に石谷將監に語りしなり。

然るに山陽は之をかく翻譯してゐる。

七將逼之。夜治部率兵各赴之。而因唱此。内大臣心自計之、經而不宣。本多正信入謁。秋日。何故成之也。内大臣自中呼而問、敢謁曰正信。家事。曰所言何事。正信曰。治部何。内大臣曰吾方思之。正信曰。主公已思之、臣則得焉。臣不必言也。[illegible]

翻譯は茲に至れば實に巧妙と云はねばならぬ。第八には、稍の理想が全編に流注してゐる。これは尊皇斥覇といふ精神だ。唯其の精神が流注してゐる爲に、或者は日本外史の著作を以て徳川幕府顚覆の檄文と同一視するが、其の結果の然ると然らざるとは姑く之を論外として、彼にさる者の氣がつた事は、外史其者が能く之を證明してゐる。但し、彼は國民的自覺、尊皇的精神の勃興時代に成長し、極めて鋭敏に之れを感受したから、彼の歴史が自ら其の理想に満ち溢れてゐる事は固より已むを得ない。此點に於ては、文章の巧拙こそあれども、日本外史と殆ど同時に出來上りたる岩垣松苗の國史略の如きが之を證明してゐる。松苗には

獨リ我皇朝天照皇太神、業ヲ創メ統ヲ垂ル。而シテ神武天皇初メテ中國ニ都シ、天下ヲ一統スルヨリ、歴世ノ天皇、正統一系、萬世ニ亘ツテ革ラズ。天下ハ即チ一人ノ天下ニシテ、天子ハ實ニ天上ノ人也。

と云うて居る。此の如き尊皇の精神を以て國史を論述したるを見れば、山陽の日本外史が殊に此の理想を以て全編を貫注してゐるのも決して不思議はない。唯松苗は筆を豐臣氏に止めたが、山陽は徳川氏の初期迄引延してゐる。其處で山陽には松苗以上の苦折があり心配が出て來た。筆禍を買はざらんが爲めに、特別に注意をせねばならぬ必要に迫られたのであらう。然し山陽のドラマ的傾向からすれば、徳川氏迄書かねば大部分とする事が出來ないので、之を餘儀なき次第であつたかも知れぬ。

第九は、不偏に對して英雄崇拜の氣分が漂うてゐる事だ。中井竹山の逸史は全く徳川家康を中心人物として書いたものであれば、家康以外の人に對しては大の注意を拂ふ必要はない。然し山陽は家康も亦其の中の一人として書いてゐる。決して唯一人

ではない。彼の最も崇拜したのは楠正成であつたらう。然し正成の事は赤坂千早の籠城や櫻井驛や湊川の討死に止まつて、信長とか秀吉とか云ふ程の、國家の大局面に於ける大なる働を見せしめず、從つて山陽をして唯低徊顧望、所謂長く英雄をして涙襟に滿たしむるの情を發揮せしむるに過ぎなかつた。其の他義經の如き、時宗の如き、謙信の如き、何れも山陽同情の對象だ。殊に織田信長は彼が最も力を極めてよく描き出してゐる英雄の一人だ。凡そ信長を美文的に描き出したるものは、前にも後にも山陽である。第十は、詩趣を以て滿されてゐる。日本外史を以て一篇の詩史と見るも差支ない。ミルトンが其の詩想を發揮する爲に『パラダイスロスト』の題目を捕へ得たる如く、山陽も亦滿腔の詩想を發揮すべく日本外史の題目を得たのである。殊に論贊の如きは、彼が湊川に於て正成の墓に謁したる作、若しくは一谷に於て平家を弔したる作等に比ぶれば、更に一層の詩趣を帯びてゐる。

以上綜合して概說すれば、日本外史は全く詩的ローマンスとも云ひ、ローマンス的歷史とも云ひ、何れにしても藝術品であつて、決してそれが科學的歷史でもなく、又當初より山陽は科學的歷史を作らんとするものでもない。他人がいろ〱科學的歷史の見地からして之を批難するも、山陽彼自身に於ては所謂仁を求めて仁を得たり又何をか怨みんで。批難されても山陽には只其術策を應ずる要はあるまい。歷史には理性に訴へる科學的歷史があり、感情に訴ふる藝術的若くは文學的歷史がある。山陽の歷史は前者に非ずして、後者である。後者としては先づ成功してゐる。

然し吾人は批難ではないが、單に之を藝術品と見ても、尚ほ二三遺憾の點が無いではない。山陽の描ける人間は皆生きて居ると云ふたが、それは唯他の描ける木偶との比較であつて、山陽は人物描寫に於て必ずしも成功してゐるとは思はれない。彼の人物描寫は、概して平面的である。短き言葉で人物の眞相を穿つ腕前に於ては、或は時としては白石の方が優りてゐるかと思ふ。唯白石は山陽に比すれば、其の同情の範圍が極めて狹くある。山陽は英雄崇拜者であるが、白石にはこれが少い。彼は己の利害と密接の關係ある柔弱なる家宣とか、能役者上りの間部詮房とかに傾倒してゐるが、多くの傾倒さる可き資格ある人に向つては何等其の傾向を示してゐない。それに比すれば山陽の同情心は寧ろ廣い。然し彼の描ける人物は往々月並的皮相に止まつて、其の眞相を穿ち得ざる憾がある。彼の最も成功してゐるのは、外史中に於て恐らくは織田信長であらう。之には彼が自白してゐる通り、江戸遊學の砌、尾藤博士から聞いた事が其の原因した

業を成したのであるまい乎。彼は清盛に對しても全く何等の理解を有つてゐない。賴朝には同情が表してゐないが、其の偉大なる人格だけは往々認めてゐるやうだ。併し彼が若し眞に東鑑を讀んだなら、彼は今少し賴朝に對して彼の人間味を識認せねばならない。恐らくは彼は東鑑を讀まず、讀んでも精しく讀まなかつたのではあるまい乎。又南朝方には概して贔負をしてゐるが、然れながら南朝の大立物と申すは後醍醐天皇である。南朝では其の人物から見て足利尊氏と對抗す可き大物が見出さぬ。若し強て之を求むれば、後醍醐天皇と申さねばならない。天皇は固より一點の過無き御方とは云はない。然し何れにしても英主であつた。然るに山陽は後醍醐天皇に對しては十分識認してゐない。足利尊氏は山陽の眼から見れば逆賊である。併し逆賊であつても人間としては彼亦偉大なる傑物であつた。例へば三國志に於て曹操は漢の天下の竊うた者であるけれども、英雄である事は誰も認めてゐる。逆賊たるが故に英雄でないとは云へない。然るに山陽は殆ど足利尊氏の人格を認めてゐない。又上杉謙信なども山陽が認めてゐる程の淡泊磊落の人間ではなく、隨分表も裏もあつた、中々油斷のならない人物であつたらしい。武田勝頼なども山陽が見てゐる程の馬鹿な大漢でもなかつたやうだ。何れにしても彼の人物描寫は餘りに素人臭くある。又文章の點から見ても日本外史は申し分なき藝術品ではあるが、如何にも才子の文章で、重々しき力ある文章とは認められない。此點に於ては山陽が常に口を極めて攻撃してゐる中井竹山の逸史に較ぶれば、逸史は極めて脫多きが、それでも何となく堂々として大家の大手筆たる趣がある。山陽のは餘りに凡ての物が整ひ過ぎて、所謂才子と云ふ輕薄の二字は當て免らぬか、才子の筆と云はねばならぬ様な心地がする。此れは誹謗と云ふよりも、山陽其の人の性質が一代の才人であつたから、其の作物も自然才華煥發したるものとなつたのも致方はあるまい。且つ山陽の史家としての大なる弱點は、(一)多く材料を研究しなかつた事と、(二)若くば最も信頼す可き材料と信頼し難き材料との區別をしなかつた事と、(三)は徹頭徹尾世間知らずの書齋的の人間で、大世間の空氣に觸れず、實務に携はらなかつた事であらう。支那に於て歴史家と云はるゝ人は、悉くとは云はぬが、山陽が最も崇拜したる五代史の作者歐陽修でも、或は通鑑の作者若くは其の作者總裁とも云ふ可き司馬光の如きは、何れも當代の政治家である。英國のマコレー、佛國のギゾー、何れも其通りであり、即ち新井白石の如きも藩翰譜や讀史餘論などを作つた際は、また幕府の大政には與つてゐなかつたが、而も甲府邸に出身してゐた。中井竹山の如きは大阪懷德書院の長として陪臣儒者の身であつ

たが、司馬遷は正に[illegible]、官職とは淺からざる關係を有つてゐた。然るに山陽は部屋住みの時に外史を作り、爾來其の文章に修正を加へて息まなかつたが、而も彼の一生は徹頭徹尾書齋的の人で、何等實際には關係無く、其の往來する人も概ね文雅風流の人で、實務に關係あるものとては全く無いとは云はないが、甚だ少なかつた。されば彼の歴史が實際の經驗から教へられたものは殆ど皆無と云つても差支あるまい。其の點から云へば、吾等は寧ろ日本外史が實務に遠く、實際の問題に觸るゝ事の少きを遺憾とするよりも、却て其の遺憾の比較的少きを感心せねばならない。何れにしても古のヘロダタス、ツキヂデスは云ふ迄もなく、支那に於ける歴史家の祖たる司馬遷の如きも、皆世の中の實務に多少の關係を有つてゐたものだ。然るに全く無關係なる山陽が日本外史をあの位まで書き上げたのは、彼の天才の天才たる所以と云つて差支あるまい。然し吾人は彼がせめて三年五年の間なりとも、父の相續者ともなり、江戸に出て役人交際をしてゐたらば、其の何れとも殊更に指定は出來ぬが、日本外史が必ず今少し實際問題と相觸るる處が多かつたであらうと思ひ、聊かそれには遺憾の情がある。

尚ほ今少しく日本外史に就て不滿の點を擧げて見たい。山陽は日本外史の體裁を以て頗る得意がつてゐる。彼は之を稱して

史記宇宙未ダ曾テ有ラザルノ體裁アリ、之ヲ叙スルニハ、宜ニ宇宙未ダ曾テ有ラザルノ文體ヲ用フベシ

と云うてゐる。併し此は宇宙未だ曾て有らざる文體とは思へない。謂はゞ其の體裁は史記を襲ふてゐる。史記體の變化が無く、謂はゞ史記の世家の體裁を外史全體に應用してゐる。之も宜しくないとは云はない。然し此れが爲めに同一の事を屢々繰返す事になる。彼は其の繰返す事になりたるを一の利益としてゐる。曰く

古人云フ、史記ヲ讀メバ一事、紀中ニ之レ有リ、傳中ニ亦之レ有リ、記識シ易シ。通鑑ノ如キハ、一見スレバ輙チ沒了ス。是レ紀傳ノ長スル所也。此書ノ如キハ關原ノ役ヲ叙スルニ、織田豐臣毛利上杉皆其概略ヲ擧グ。而シテ後特ニ末編ニ詳カニシテ、重複ヲ辭ケズ。其他皆此ニ類ス。

と云うて居る。末編に詳かなりとは徳川氏の部分に於ての事だ。關原に限らず、例へば大阪役の如きも、豐臣氏の方にも徳川氏の方にも記してある。山陽は巧みに此れを利用して同じ事柄でも、徳川氏の方に記して都合の惡しきものは、之を豐臣氏の方に記し、豐臣氏の方に記して面白からぬものは、之を徳川氏の方に記すると云ふ如く、必ずしも同じ事柄を記するにも、其の組織の角度を違へ、其の用筆の權衡を別にしてゐる。されば山陽が云ふ通りに重複も亦利益が無いとは限らない。然し同一の局面を幾多の場面に分割し、分寫するは、全體の效果を見る點に於て甚だ不充分である。山陽は何故に斯る月並的の前例に則り、自ら新なる歴

中國的法、即ち編年史体でもなく紀傳体でもなく、さりとて又記事本末体でもなく、三者を打つて一丸となしたる方法を採らなかつたのであらう乎。此くすれば一の事件一の人物を描くにも、全幅の力を之れに傾注する事が出来、其の效果は頗る著明なるものがあつたであらう。例之、關ケ原の戰を叙するにも、彼が徳川氏織田氏豐臣氏毛利氏上杉氏に分描したる處のものを集めて此れを關原戰争なる一の題目に集中する時には、其の題目に相當する價値を生したであらう。予は如何に考へても外史が山陽の云ふ如き、宇宙未だ曾て有らざる文体などとは見受られない。却つて聞く、此處で文体と云ふのは、文辭の結構を云ふではなくして、歴史の體裁を云ふ意味に當る。

又無くもがなと思ふ事は、參照に掲げたる日本外史引用書目だ。彼の參考書の數は二百九十二部に成つてゐる。之れは此種の歴史を作るには別段珍しき事ではない。問題とする程の事ではない。然し山陽にしては問題とせねばならぬ。山陽が外史を作つたのは、廣島にかける幽居若くは謹居中である。其後は文章を修飾したのと、論贊を附け加へたのに過ぎない。固より若干事實の改訂をもした。併しそれは決して修正本來の目的ではなかつた。彼が幽囚中や謹居の中にて二百部に垂んとする參考書を蒐め得たや否やは頗る疑問だ。如何に考へても、彼が日本外史を一通り書き上ぐる迄に讀んだ本は、此内の一割も有るか無いかと思はるる。川田博士（甕江）は「日本外史辨誤」を作りて、山陽が讀んだものは本朝通鑑、大日本史、通語、逸史、烈祖成績等の漢文の外、陰徳記、保元物語、平治物語、保暦間記、源平盛衰記、平家物語、神皇正統記、太平記、明徳記、應永記、[illegible]應仁記、信長記、太閤記、藩翰譜、武徳編年集成等を參用し、僅に數十部の書に依つて成立ちしものと察せらると云うてゐる。之は適評である。予の見る處に據れば、彼は[illegible]も漢文が參考書に用ひらるゝ限りは、漢文の物を用ひたやうだ。本朝通鑑や大日本史、最も近世に至りて烈祖成績などが專ら彼に用ひられたのもそれが爲めであらう。又山陽は逸史を攻擊しつつも、殆ど逸史の蹈を踏んで居る處が少くない。それは同じき事實だから致方がないと云ふけれど、其の文章迄も如何にも類似してゐる。例へば秀吉最後の場を記するに、逸史は

[illegible]者平信ニ私シテ曰ク、太閤ノ恭仁ヤ、勢此ニ至ルモ猶相合ウセント欲ス焉。見ル[illegible]、時スモノ也。吾今ヤ呼吸ノ間ニ在リ。之ヲ除クニ如カズト。乃チ[illegible]下ニ合シテ、一丸ヲ食中ニ投ツ。遂ニ呼[illegible]呼ンデ曰ク、事諧ハズ矣。從容輿ニ据テ自殺ス。

安積小信の烈祖成績には

[illegible]者平信正大相謀ツテ曰ク、事既ニ此ノ如シ。秀頼生存セバ、則チ必ズ後患アリ。如カズ毒テ之ヲ殺サンニハト。乃チ[illegible]飲ヲ發ス。治長[illegible]

久事ノ濟ザルヲ知リ、火ヲ城中ニ放チ、[illegible]。
時ニ年二十三、大膳尻（[illegible]）人ヲシテ己ヲ殺サシム

山陽は曰く

直孝重信ニ謂テ曰ク、大臣仁恕ト雖モ、禍ヲ貽スノ道也。是レ我輩ニ在ルノミト。乃チ銃ヲ倉中ニ發スル者二。秀頼以下難ヲ知リ、皆火ヲ縱チテ自殺ス。

三者の中にて山陽のが最も簡潔である。然し竹山は自裁と云ひ山陽は自殺と云ふ。竹山は禍根を貽すと云ひ、山陽は禍を貽すと云ふ。如何に考へても之は暗合と云ふでなく、蹈襲と云ふ能はずんば參稽したと云ふ可きであらう。予は決して山陽が竹山に模擬したと云ふのでもなく、固より竹山の文を泥坊したと云ふのでもない。只如何に彼が之を參考した乎と云ふ證據に擧げて置く迄である。山陽が書物を讀まないのは周知の事であつて、茶山が山陽に與へた詩に『付知司馬偏修史　聞道歐陽不讀書』と云ふ句がある。之は文政五年の作で、恰も山陽が外史を脫稿したのみでなく、殆ど完成せんとしたる時だ。然るに山陽が自ら此句に圏點を附し、且つ不の字抜も切と云ふてゐる。彼自身も歐陽修同樣餘り多くの書を讀まない事を許してゐる。然るに拘らず、此く讀まない書迄も引用書に引つ張出して置くのは、如何にも彼の底意が判ら無い。之は何故であつた乎。所謂素人威の爲であつた乎。それとも彼が是だけの書は參考す可きものと書いて[illegible]、[illegible]に[illegible]へた[illegible]に[illegible]は於に引用書目を[illegible]ね、其の[illegible]げたき[illegible]目を[illegible]方に掲げたものと云つて居る。（國學者[illegible]）又外史の著者光吉君は大方逸史に掲げたる參考書目を、其の俗用入加除して外史の參考書目としたものであらうと云つてゐる。何れにても斯る書目は無くもがなと思ふ。之が有つて山陽の光を増すでなく、無くて損ずるでも無い。無い方が寧ろ正直で、吾人には滿足だ。縱令一部の參考書目が無いとしても、何等差支へない。外史の價値は其の藝術的作品としたる上にある。

次に無くもがなと思ふは、卷末の德川氏を賛したる一文だ。之は文章としては洵に名文であり、又此文があつて初めて曲終つて雅を奏し、目出度〳〵の大團圓の幕を閉す事が出來る。文章には異存が無い。併し乍ら如何に德川家康を讃美せねばならぬ必要がありたればとて、斯くまで讃美せねばならぬと云ふ事は無い。山陽は逸史を以て諛史と稱し、之は德川幕府に諛を貢する爲の歷史であると迄云つてゐる。成程竹山が逸史の冒頭に書いた家康頌德の文などを見れば、斯く山陽から罵らるゝも申譯は無い。併し大阪の一件に就ては、山陽も亦咎めて其の咎めに做ふ者であつて、竹山の辯護說と五十步百步處ではなく、殆ど互に御用辯護を競つてゐる傾がある。山陽は日く

世ノ論者或ハ大阪ノ事ヲ病ヒテ、東照公ノ德ノ累ハスト爲ス。是レ時勢ノ知ラザルノ論也。

又曰く

公ノ雄武英斷、太閤ト雖モ其ノ恐ルル所ニ非ズ。況ンヤ當時ノ群雄ニ於イテハ、直チニ之ヲ兒戲視ス。而シテ何ゾ區區豚犬ニアランや。而シテ公謀ヲ爲ヘ慮ヲ積ンデ之ヲ斃スト謂フハ、皆時ノ情ノ知ラザル者也。

と、一種の反語と取れば取られない事もないが、餘りに眞面目に論じて居るから、遺憾ながら反語にして片付けて終ふ事が出來ない。竹山は曰く

讀者往往謂フ、太大君家康孤子ヲ除ント欲スルノ日久シ。而シテ其辭ナキノ病フ。故ニ鐘銘ノ假リテ罪狀ヲ興シ、以テ其禍ヲ構ス。知ラズ是レ何ゾ言ノ謬レルヤ。大坂ノ罪、鐘ノ銘ノ前ニ在リ……太大君勉メテ無事ヲ圖リ、而レテ其墜逆ヲ見ルヲ遁ヒ兵端ヲ啓ク。而時ノ合從ニ於テ事出ヅ。何何ゾ鐘銘ニ有ランヤ。讀者事實ノ究メズ、妄ニ疑志ヲ爲ス。惜ム可シ矣。

と。其の辯護の拙劣なるに云へば山陽の方がとても上手だ。而して其の効果から言すれば、亦山陽の方が最も有效だ。彼は何の必要があつて既く家康の爲めに辯護を爲す乎。家康が一代の英雄であることは、彼を愛する者も愛せざる者も承認せねばならぬ。併し苟くも史眼ある者は、彼が日暮れて途遠きの爲に、遮二無二生きて居る中に大阪を片付けたいと云ふ一點から、遂に彼が如き家康に不似合なる下手な芝居を打つたのであり、家康が今少し若かつたら、必ず水到り渠成るを待つてゐたであらう。然るに向き要の日が日に迫けて猶ほ那つるを待つたであらう。然るに向き様に手に判を立てつつ之を纏めねばならぬとは、家康の爲に犠牲となりたる淀君や秀頼よりも、家康自身が實に悲劇の主人公と云はねばならぬ。山陽は僞りに勢と云つて辯護してゐるが、天下が家康に歸したのは勢であつたらう。併し乍らそれが勢であつたにもせよ、然なきにもせよ、彼が殊更らに大阪側を挑發して事を擧げしむるに至つたのは、少しく歴史の裏を見る者は諒解するに苦しまない。彼が大勢を以て之を片付けてゐるのは、議論の本位を取違へてゐる者と云はねばならぬ。併し予は山陽と此事を論ずる者ではない。徳川氏が天下を取つた事は、大阪の存亡とは別問題だ。秀頼が一つの諸侯として存在するもせぬも、問題ではない。彼が徳川氏に相當長を上らんとせば、斯る頼まれもせぬ辯護を待たなくとも、他にいくらも方法はあつたであらう。然るに何の必要あつて殊更らに、最も徳川氏に取つて拙手である大阪の事を以て辯護の材料とした乎。如何にも合點が出來ない。

此機會に於て吾人は一言したい。如何に考へても、山陽の頭の中には、徳川氏打倒などと云ふ念では無か、恐らくは夢にも見なかつたであらう。彼に現狀に滿足といふ言葉は頭きに過

ざるから知れぬが、己も自ら之に忍にしてゐた。而して彼は幕府の將軍家慶に向つて不平どころか寧ろ感謝してゐた。或は之を爲めにする所あつての事であらうと云ふ人もあらう。外史の發行通過を圖る爲に、最後の一文を以て全編の尊王斥覇の大精神を緩和したものと云ふ人もあらう。成程さう思へば思へない事もない。山陽の勤王論は外史の隨所に出てゐる。

古ノ所謂武臣ナル者ハ勤王ヲ云爾。源氏平氏ノ如キ、皆然ラザルハ莫シ。平治ノ後ニ至ツテ綱維ノ弛ムニ乘ジ、以テ跋扈ノ欲ヲ逞ウス。最憚忌ム無キ者アリ焉。稍猜測ラザル者アリ焉。爲ス所同ジカラズト雖モ、其ノ王憲ヲ蔑ミシ、私利ヲ營ムハ一ノミ。

と云ふが如きは、言々句々咄々として人に迫り、直ちに將軍政治に對する彈劾文と云ふ可きだ。然も徳川氏を記するに至つて

源平以還治少クシテ亂多シ。群雄蜂峙シ、分裂梗塞シ、其ノ幾百歳ヲ歴スルカヲ知ラズ。而シテ今吾綏帶垂冕、權ヲ奮サズシテ行ク焉。則チ誰ノ力ゾヤ。

と云うて家康を頌してゐる。而して此文句も亦山陽が讀史と冒りたる逸史の結尾の句に相類するは實に不思議千萬だ。曰く

天下又安シ、変恬武嬉、恩萌隷ニ逮ビ、而シテ威蠻貊ニ加フ。隆治ノ澤、前古比無シト爲ス焉。盛ナル哉。ア、是レ誰ノ力ゾ與、亦偶然ニ非ル也。

それは偖て措き、山陽が徳川氏頌徳のアイロニイでなかつた事は、彼が修史の詩に『保元窮到二慶長尾一。自嘆雅邈生二擁雲一』とあり、又臨終に際して之に識したる文に

因テ敢ズ、今ノ太平盛時ニ仕當ス。而シテ竊ニ此文ノ萬一ヲモ作リ得ズ。併テ外史ヲ修メ、末ノ一哉ニ至リ、斷此意ヲ換ス。然レドモ謹論ノ實日ニ落ツ。所謂翁ノ月ヲ學ブ者ノミ

と云うてゐる。此の如く彼は正直、正路、眞面目に徳川氏の太平に安着してゐる。而して又家康を詠じたる詩には『東照麾學有レ限。金城伴暖游ニ祥棋一』又關原の役を詠じて『休レ道西人謀大錯。天教三介冑換二衣冠一』と。此の如く彼は家康に随喜し且つ家康に由つて開かれた徳川幕府を讃頌してゐる。されば斯る思想の中に徳川顛覆の思想などの有り得可き理由は無い。但だ彼が一方に於ては尊皇論の急先鋒であるが如くにして、他方には却て此の如き所以は何ぞ。彼は北畠親房と同様に、皇權の衰へたるは武臣が之を竊んだ爲でなく、衰へたが爲に竊んだと云つてゐる。其の結果が武門政治である。故に武門政治は彼としては最上善ではないが、苟くもそれが皇室を擁護し、社會の治安を保つに於ては、實行的次善であると認めてゐる。而して斯る實行的次善制度を造つたのが家康である。是則ち彼が家康に對して頌徳表を上つた所以であらう。其の頌徳表を上つた事には異存無い。然も大阪の役までも擧げて殊更に辯護する必要は無いのだ。

要するに山陽は餘程筆禍を恐れたらしい。彼は之には頗る神經的であつたかの如くに思はれる。彼が小竹に與へたる書中は

僕事府議故人以下當代ニサハリ可申ト申もの役人惡敵者に有之、無據割愛、其代に六首ほど補作、別錄乞正、竹田世弘にも御見せ可被下候

とあるを見ても判る。日本樂府は詩にて日本歷史を詠じたるものにて、それさへも他人の批評を聞て之を削るなどいふ事があるから、外史に於ては猶更であつたらう。之を思へば彼が言論不自由の時に於て、戰々兢々、首を提れ尾を怖れたのは、多少と云ふよりも多大の同情を禁じ得ない。

第十　政論家としての山陽

是から少しく方面を變へて、政論家としての山陽に就て觀察するであらう。山陽は恐らく政論家を以て自ら任じてゐたと云はさる迄も、彼の自ら任じてゐたる中の主なる一としたであらう。彼は未だ外史に着手せない以前に、既に新策に着手してゐる。新策は東坡の策論に倣うたもので、半は歷史上から古今の沿革を演繹し、半ば時務に應用する當今の急務を論じたるものであつた。而して之を晩年に作り變へたのが即ち通議だ。通議が即ち政論家としての山陽を最も遺憾なく發揮してゐる。彼が通議を著したのは天保元年五十一歲、彼が死する二年前だ。彼に於ては最も老熟したる時に成りたる著作である。謂はば山陽の時務に對する　時務に關する一切の經綸は此中に在りと云はねばならぬ。彼は自ら其首の絕句を其後に題して居る。其中に

洪流日夜淺成深　木缺金甌自古今　篇々漢過各同一意
無人或得賈生心

即ち彼が通議に於て、或は鎌倉或は室町、或は織豐に就て記したる事も、其の目的は德川幕府を對象として論じた事は、此時に在つても諒取せらるゝ。予は通議を熟讀して、如何にも其の文章が平易にして明快且つ雄健なるを喜ぶ。近頃の新聞紙に行はれたる漢字制限の約束に從ふも、通議の文章は殆ど其の外に出づる必要を認めない程、難しき文字を使用してゐない。之を言文一致體に直しても其の儘通用する程である。通議の一斑から判斷すれば、新聞紙の論説記者としての山陽は、全く理想的に近い。併し其の論議は概ね平凡であり、何等目覺しき點は無い。山陽は元來東坡に私淑してゐるが、東坡其人も文章に於ては當代無雙であつたが、其の政治論は概して何等の新味も多くなかつた。謂はば東坡は北宋の末に近き時代に於ける保守論者であり、山陽は又德川の末期に近い時代に於ける極めて穩和なる漸進論者であつた。通議の文章で最も面白きは論勢の一篇である。元來勢を論じたる文章に韓非の難勢、賈誼の治安策若くば蘇老泉の審勢

又東坡の策略中にも若干ある。されど山陽の言も必ずしも其の創見でないことは勿論であるが、併し彼が幕府の現状に就て所謂其の勢の變遷を察し

夫レ其勢ノ未ダ極ラザルニ先ンデ之ヲ爲ス。則チ之ヲ爲ス者ハ權アリ。而シテ天下ノ意外ニ出ヅ。已ニ極ツテ之ヲ爲ス。則チ天下其ノ爲ザルヲ得ザルノ勢ヲ覩ヒテ、而シテ之ヲ爲ス者ハ權ナシ。其勢ニ因リ、而シテ人ヲ使チ其ノ勢ニ因ルヲ知ラザラシムル、是ヲ之レ善ク勢ヲ制スルト謂フ也

と云うてゐるは、聊か肯綮に中つてゐる。勢の成らざる前に、其の勢の生じつゝある處を察して、吾より進んで其の勢を利用するのが即ち勢を制する者だとは、善くも言ふた。彼は自らそれを意識した乎否乎は兎も角も、彼自身徳川幕府の既に分解期に近き時代に生活したれば、金甌無缺の幕府制度が漸く分解し初めつゝあると云ふ事を豫感したのであらう。是に於て斯る議論を發したものであらう。併し惜むらくは如何にして之を制する乎と云ふ事に就ては、彼は一切之を語つてゐない、彼の論權三篇は幕府の老中制度を論じ、即ち幕府が大藩の大名には中央政府の政權を與へず、中央政府の執政者をば大なる大名と爲さず、所謂權ある者は力無く、力ある者は權無からしめた事を論じ、又御側御用取次などの手に政權が動もすれば渡らんとするを論じてゐる。上中下の三篇、何れも幕府の現状に就て觀察を下したものにて、任ずる所新しい處は無い。其の六の論策の上に、三十幕府の本様や當代や大名や小大名やを死ぬるが如く配置し、更に幕制せしめた事を説き、其の中には武家制度を説き、其の下は士風の振作を説いてゐる。又論利の上は創業の古に復る可き節儉政策を説き、中は利を興すよりも害を除くに若かざるを説き、下は重農政策を説いてゐる。又官制論上では我國の王公將相世襲制度に就て、其の弊害の澁滞偏枯にあるを論じ、門閥制度は其の儘として別に安全瓣を設け、人材を登用せしむるを論じてゐる。下では民に接する官吏を優待す可きを論じてゐる。民政論の上では土地兼併の弊を論じ、さりとて急に之を改むれば民を煩はすを以て、兎も角も現状に就て之を善處するを論じてゐる。

夫レ政ヲ爲スニハ、因ルヲ貴シテ革ムルヲ貴バズ。民ヲ治ムルニ簡ヲ貴ビ煩ヲ貴バズ。苟クモ君相治ヲ圖フノ心ヲシテ、誠實物ヲ字アヲシメバ、大小ノ吏盡ク其心ヲ體ス。則チ其舊ニ因テ而シテ之ガ意ヲ加フ。要スルニ貧民ヲシテ流亡ニ至ラズ、富民モ亦其產ヲ破ラザラシム。田野日ニ闢ケ、汙萊日ニ理リ、均シカラザルヲ患ヘズ。詳カナラザルヲ患ヘズ。而シテ國計贏矣

と云うてゐる。恰も今日云ふ所の温情主義である。民政論の下では租税の多寡を論じ

織田豐臣ノ民ニ取ル如キ、王制ニ二十倍スト日フト雖モ可也。吾邦ノ民、古ニ生レズ而シテ此時ニ生ル。何ゾ其レ不幸ナルヤ。

と云うてある。是れは所謂、濁谷渠渡同一意で、織田豐臣を云うのではない。徳川の苛斂誅求を指した者であらう。併し彼は別に何等の新見をも出して居ない。次に禽獸論は門人江木鰐水の撰した彼が行狀には、死に先つ三日忽ち曰く、猶ほ言はさゝ可らざるものありとて即日に草したとあるが、事實は親しく病床に侍した門弟藤陰が、山陽の子餘一に與へたる書中によれば、天保五年九月即ち彼が死する月の上旬に起稿し、九月十九日即ち彼が死する五日前、藤陰に筆錄せしめたものと云ふ。之は所謂大奧の婦人が國家の政務に容喙するの弊を論じたものである。惟ふに將軍家齊の晩年は內寵多く、女謁盛んに行はれた時であり、彼は何か其等の事に就て感ずる所あつて、死に瀕して之を加へたものであらう。次に市糴を論じてゐる。之は米相場の弊を認め、官府宜しく米價調節を爲し、米價低落の時には時價よりも少しく高く買入れ、騰貴の時には時價よりも少しく廉く賣出す事を論じてゐる。次の地力論には農民を其地に土着せしめ、何時に其土地を離れしめさるやうにする事を說てゐる。又遊民を聚り、其の勞力を供せしめ、官にて監督して開墾を爲さしむる事を論じてゐる。次に水利を論じ、日本は中央の脊背が高く、急傾度で川が海に入るからして、堤防など作るのは間違である。「堤ヲ増スノ一尺ハ河ヲ浚フノ一寸ニ若カズ」と云うてゐる。次は錢貨を論じてゐるが、其の大綱には人民が金銀銅の貨幣を珍重するは、金銀銅其者の珍貴なるを知る爲で、又其の楮鈔を珍重するのも、其の手形であつて何時でも交換が出來る事を知つてゐるが爲めである。然るに其の珍貴なる金銀銅に粗惡の物を雜へしめ、或は政府にして金銀銅を捨てゝ專ら楮鈔のみ用ひ、威力を以て之を行はしめんとするも、實行し得らるゝものでないと云うてゐる。其の下篇は金銀銅を以て佛像及器を作る者は政府悉く之を買上げて貨幣に作る可しと云うてゐる。而して曰く

錢賤シケレバ則チ貨ノ傷メ、物賤シケレバ則チ農ノ傷ム。農ノ傷ムハ國ノ害也。貨ノ傷ムハ必ズシモ國ヲ害スルモノニ非ル也

と。それで彼は成べく流通貨幣を多くする事を說いてゐる。而して日本から銅を海外に輸出するを休む可しとの意を洩して居る。次に法律を論じて、日本には日本流の質朴簡易の法を以てし、支那流の繁密なる文法を施すは、我が民情に反すると云ふ事を論じてゐる。次に訟獄を論じてゐるが、訴は下僚に委せず、長官自ら之を聽き、又大獄は代官自ら斷す可き者であると云うてゐる。彼の兵制論上は究竟する所、先づ武士の困窮者を土着せしめ、それを優遇して漸次土着者を加ふ可しと云ひ、其の下には時々練兵を爲して之を訓練す可しと云つてゐる。而して遊民とか窮民とかを招き聚り、荒無地を開墾せしめ、それを兵として將

士の子弟中に於て然る可き者を擇び之を率ゐしむ可しと云うてゐる。其の騎兵論には、騎兵の缺く可からざるを說き、外敵を防ぐにも、敵の上陸した時に之を擊破するには騎兵が最も必要であると云うてゐる。邊防論には

短ノ短ナル所ハ乃チ我ノ長ズル所。曰ク短兵也。格鬪也、短兵ヲ執テ而シテ格鬪スルヤ、則チ彼ノ十以テ我ノ一ニ當ルニ足ラズ。故ニ彼其船ニ據テ其大ヲ挾ム、我必ズ較セザル也。其來リ迫ルニ及ンデ、決死敢進、出沒奮擊、彼ヲシテ其ノ長ズル所ヲ用ユルニ暇アラザラシム。縱ヒ其ヲシテ陸ニ上ラシムルモ、之ヲ阻隘ニ要シ、其前后ニ伏シ、擊テ而シテ之ヲ塞ニス可シ。夫レ我ガ守ル所ノ者ハ土地ニ非ズ乎。吾ノ土地ハ寸モ失フ可ラズ。寸ノ外ハ雲海茫々、天ト際ヲ爲ス。何ゾ吾事ニ與ラン。何ゾ必ズシモ擾々タルヲ爲ンヤ。

と云うてゐる。火技論には、大砲よりも寧ろ小銃が便利であり、大砲などを恃んでも役に立たぬと云うてゐる。

夫レ銃ノ大ナル者ハ運用ニ便ナラズ。能ク之ヲ運用スル銃ノ如ク、又能ク命中スル者是レ異材ノ士。常ニ有ラザル者也。縱ヒ之レ有ラシムルモ、一國數人ニ過ギズ。海內ヲ通計シテ數十人ニ過ギズ。數十人ヲ用テ以テ四邊ヲ防グ可ケン乎。

即ち日本中を搜し廻つても大砲を運用する者は數十人であらう。それで四方から寄せて來る外敵を防ぐ事が出來るものかと云うてゐる。水戰論には、

彼風潮ヲ逐フテ來ル。其船長ク大ニシテ、事ヲ施ス、其法アリ。而ルニ我船無ガズ。而シテ我ガ所謂水戰ハ我ガ海濱ニ戰フヲ而已。則チ其船ヲ許ス、戰施ス可ラズ。施ス可キ者ハ、鳥銃ニ止マル。其戰法ニ依リ、隊ヲ數ヘテ進ム。……然ラバ則チ何ヲ用ヒン、曰ク其衆ヲ用ヒン耳。夫レ小ハ小ノ利アリ、大ハ大ノ不利アリ。大ノ不利ハ進退不便ナル也。合スレハ輒チ分レズ、分レバ輒チ合セザル也。小ノ利ハ進マント欲スレバ則チ進ミ、退カント欲スレバ則チ退ク。合セント欲スレバ合シ、分レント欲スレバ分ル。……我ハ水ニ習フテ、而シテ彼ハ我ガ習ニ如カズ。則四面ノ海ハ乃チ我ノ海也、海ノ險、然シテ後萬世ニシテ而シテ恃ム可キ也。

と云ひ、大艦が、我沿岸の暗礁や淺瀨にて操縱の自由ならざるを語り、我が小艦が斯の場合に頗る輕快なる運動の出來る事を語り、所謂蒙古襲來の時に於ける我が戰法を尙ほ現代にも應用するを以て上策と云うてゐる。

以上を通視すれば、彼が實論の「治安策」同樣一代の大文論として著述したる通議は、時務策として殆ど用ゆ可きものは無い。諸士土着論の如きも蕃山や徂徠の意見を踏襲してそれよりも尙ほ不徹底である。而して一體の調子が蕃山の『大學或問』や徂徠の『政談』や若くば白石、鳩巢、栗山の建議や上書や竹山の『草茅危言』などに比べても頗る見劣りがする。それは鄕黨山陽が

的滑稽で全く實務に沒交渉であつたのと、當時天下日治の形勢に沒交渉と云はざる迄も、殆んど接觸してゐなかつた爲めであらう。これで所謂の彼の政論も全く御座なりの月並論で、見る可きものは無い。固より彼は本來何れかと云へば、急激なる進步黨でもなく、又明達なる保守黨でもなく、謂はゞ保守的進步黨若くば進步的保守黨であつて、其の他に何等異常の見もなく、本多利明が日本の國號をカムサスカの土地に移す可しと云ひ、若くは佐藤信淵が宇內混同策を說く類に比れば、井中の蛙と云ふも過言でないやうだが、併し彼は恰も通論に於て當時の時代思潮を代表したものであらう。

彼はまた識者を以て自ら居る甲斐もなく、世界が日本を開かんとするのみならず、日本自身もが自ら開かんとしつゝある兆候をすら認め得なかつた。彼の友人小石元瑞の如きは、其父元俊以來蘭醫たる緣によりて大槻玄澤の門人であり、京都に於ては錚々たる者であるが、而も彼は小石と日夕往來しつゝ、蘭に何等蘭學より得る所は無かつた。彼が果して新井白石の『采覽異言』や『西洋紀聞』を讀んだか否やそれさへ判らない。山陽程の明敏の者にて此方面に殆ど無關心であつたのは、如何にも意外と云へば意外である。山陽と殆ど同時とも云ふべき古賀侗庵の『海防臆測』を以て通論と比較すれば、まるで別世界に入りたる心地がする。『海防臆測』は天保九年に出で來り、山陽の死後是掛け七年、其の通論の成りたるより十年を出でざるものであるが、而も其の思想に於ては殆ど百年を隔てたる感がある。今一々是を比較すれば餘りに繁雜に亘るが、侗庵は山陽の如く徒らに敵の上陸を待つて之を馬關にかけて斬倒るなどと云ふ論でなく、水軍は彼の長ずる處、陸軍は我が長ずる處であるから、我が長を以て彼が短を破るは無論だが、時として水戰も必要であるから、大に軍艦を造り水戰を習はなければならぬと云ひ、即ち大艦巨砲の必要を認めてゐる。而して彼は蘭學の必要をも認め、和蘭のみならず、他の二三國の通信交通を許し、之に由つて外情を察す可きを說いてゐる。而して彼は日本の恐る可き敵は露西亞と英吉利にあると說き、露西亞の北邊より窺ひ寄る患ふ可きも、英國の我に通る患の更により甚だしきを說いてゐる。其他外國の近きを察し、宜しく內政を改革し、上下一致大に國防を講せざる可からざるを論ずるなど、如何にも能く事情を洞見してゐる。而して彼は日本の鎖國主義を罷めて永祿の舊制に復し、直ちに港灣を開き貿易を開始す可きを論じてゐる。之を山陽が『小海元々大卜默ヲ爲ス何ゾ吾事ニ與ランヤ』と云うてゐるに比すれば、天地雲泥の差がある。然し是等は侗庵と山陽との見識の相違と云ふ許りでなく、寧ろ其の境遇が異つてゐたからであら

う、何と云つても山陽は京都に閑居して、それのみに於て常に深山の傍ら群小と詩書酒を事としてゐたのは、彼が世界的智識者や時務的經綸家となる爲に頗る不利益であつた。

第十八　詩人としての山陽

政論家たる山陽より轉じて詩人たる山陽に至れば、何となく氣分が霽々とする。恰も隧道を過ぎて大なる街道に出で、圓滑瀏潤なる光景に接する心地がする。要するに山陽は總ての中に於て文士たる要素が最も多く、文士の中に於て詩人たる要素が最も多い。其の詩人とはマシュー・アーノルドが所謂『詩は人生の批評である』と云ふ意味に於ての詩を作る人として。而して予が茲に詩と云ふものは必ずしも韻文のみを指すではない。日本外史の如きも其の一半は即ち詩と云ふも妨げあるまい。然るに不思議にも山陽自身は詩人と云はるるを喜んでゐなかつたやうだ

文章於レ世本纖瑕　唯恐相波沒ニ術津一　欲レ製ニ鯨魚一無ニ氣力一
半生徒被レ喚ニ詩人一

是れが彼の自述だ。而して彼が死に垂んとするの際、彼の詩集に親友篠崎小竹が序を作り、『然リト雖モ子成豈獨リ詩文ヲ以テ世ニ傳フルコトヲ欲スル者ナラン哉』と記したるを見て、『所謂百尺竿頭一歩ヲ進メ、人ヲシテ粲ヲ拊チ快ヲ呼バシム。子成ノ舌ヲ假ツテ説カシムルノミナランや』と云ふてゐる。然しそれはそれとして、彼は詩に就ては必からざる自負と自信とを持つたやうだ。それは同じく彼が死に瀕するの際、篠崎小竹に永訣に來ては如何と申遣したる書翰中に『頼襄が然に詩を作ること第一様に候如何、河喜の様は如何、河満様也ちと校下に告たを減じて早く刻上ては如何との議はいらぬ事賊』と云ひ、『河内屋校合摺チト拝閲の節に見度もの也』と云うてゐる。茲に河喜とあるは河内屋喜兵衛で、即ち山陽の詩鈔を出板する書肆であるが、せめて生きて居る内に校合摺の一部分でも見たいと云ふ事だ。之は天保三年九月十一日付で即ち死する十三日前の手紙である。如何に死に瀕して詩に執着したる乎を知る可きであらう。予は既に山陽を以て、日本に於ける國民的詩人と云うた。果して然らば其の詩が國民的詩であつた事は云ふ迄もない。今茲に國民的と云ふたが、然も其の文字が漢字で、其の形式が漢詩である事を忘れてはならない。それにも拘らず尚ほ國民的と云ふ所以は、要するに其の内容に在る、其の意氣に在る、其の精神に在る。日本に於て漢詩の流行したのは、王朝の昔からである。中にも菅原道眞などは白樂天張にて、當時の作家と稱せられてゐる。而して彼の作中には往々彼の心からの聲が響いてゐる。今日に至るも尚ほ彼の『去年今夜侍清涼』たるその作は、人口に膾炙し、惻々と

し亡人を弱してゐる。然し概して云へば王朝時代の詩は白樂天の眞似をしたと云ふ許りであつて、唯文字の遊戯に止まつてゐる。五山時代に在つては何れの禪僧も殆ど詩を作らない者は無かつた。蘇東坡黄山谷は禪宗とも淺からぬ關係あつた爲でもあらうが、最も五山禪僧の愛誦し且つ研究する所となつてゐた。中にも絶海などは明初の大家名家の中に加へても、其の風韻格調に於て少か劣らぬ者がある。徳川氏の初期に於ては石川丈山が最も名あつたが、富士を詠じて「白扇倒懸東海天」と云ふ如き和臭滿々たるもので、ただ以て大雅の詩と稱す可きではない。漢詩は元祿以後正徳享保の時代に至り頗る旺んとなつた。當時徂徠門下の南郭などは大家として知られてゐたが、予は寧ろ白明、僞體にして氣魄雄厚なる點に於て白石を取り、温雅、奇抜なる點に於て白石より少し後れたる秋山玉山を取る。然し是等の大家も其の詩が所謂和臭を脱して、支那人の詩らしき漢詩であると云ふに止つて、未だ其の特色を發揮し得た者が無かつた。謂はゞ正徳享保の諸作家は模倣の極點に達したと云ふに過ぎなかつた。獨り山陽に至つて、は其の詩人としてのテクニツクに於ては白石玉山などよりも或は劣つてゐるとしても、是に初めて日本人の漢詩、若くは漢詩の形式を應用したる國民的の詩歌を作り出した。固より山陽の詩が悉く皆然ると云ふではない。唯其主なるものに就て、若くは最も優秀なるものに就て此く云ふ。併し山陽は決して獨り自ら其の功を專らにす可きではない。山陽の詩を說く者は茶山を忘れてはならぬ。詩人としての山陽が茶山に負ふ所の少くなかつた事は、苟くも兩者の詩を讀む者は熟く之を知つてゐる。それは山陽が詩の學問を茶山から教はつたと云ふではない。彼が茶山に得たのは詩人としての着眼點だ。即ち詩學でない、詩情だ。詩式にあらず、詩趣だ。彼は詩の格調に於て、若くば文字の用法に於て、茶山と趣を殊にしてゐる。併し事實其者を直ちに詩と爲し、實情其者を直に詩となし、詩と實際生活とを別別に考へず、實際生活の中に詩があり、詩の中に實際生活があると云ふ如く、兩者の間に親密の關係を見出し、此くて眼前の景口頭の語を悉く詩中に取り入るゝに至つては、彼は茶山に負ふ所多大である。勿論茶山は寧ろ田園詩人であつたが、山陽は一方には歴史家的眼光を以て詩を作り、他方には畫家的眼光を以て詩を作り、茶山に比すれば彼の天然と人事に跨る詩境は更に廣大であつたが、而も新ならんよりも寧ろ眞を求め、奇ならんよりも寧ろ實を求め、何處迄も飽く迄も人生の實際に立脚したる點は、兩者其の揆を一にすると云はねばならぬ。

龍山や圃齋を始めとし、東海道を往來したる詩人は澤山ある。されど茶山の東海道往來の詩を讀めば、何となく虚頌の譏を觀

る心地がする。譬へば

　　曉發田井

大洋浪容暮靄　雨天深合未起風　路至三原陀一夜醉艇

三桜花白眠風中

何も殊更に趣向を設けたのでもなく、唯有りの儘に景を寫したのであるが、如何にも身自ら其の駿河灣に瀕する道中を往く心地がする。又

　　玉水路上作

南都山翠北都迷　淀水斜通笠置川　壞道久無ニ禁暢過一　當時

朽藥滿ニ春田一

何人も春先きに京都から奈良の間を徘徊する者の常に見る光景であるが、然し一度詩人の眼を經れば、此の如く典雅優麗、人をして一唱三嘆せしむる作が出で來る。此の絕句の如きは、所謂寫實より進んで更に其の景の中に織りたる懷古の情を敍し來り唯、あつさりと旅客の感慨を陳べ、然も此の如き絕唱を爲して居る。山陽は恐らく茶山の此等の三昧から悟入したであらう。然らざるも彼自身悟入したる所を、茶山の此等の作によつて更に一層緊切ならしめたであらう。詩人としての山陽は必ずしも八方無礙とは云はない。若し漢詩の世界を二分して李白と杜甫とせば、山陽は前者に屬せずして後者に屬する者だ。山陽は抽象的

に對[illegible]ない。[illegible]

い。彼は[illegible]

過ぎる點である。然しこれだけ彼の詩には形式如何に拘らず、文字如何に拘らず、國民的詩人としての價値がある。何故なれば文字や形式は支那のものであるが、其の題目其の內容其の精神悉く日本的である。縱令支那の事を詠じても、日本人の眼を以て見たものだ。彼の詩鈔中で最も面白き部分は、恐らく西遊稿であらう。之れは彼が九州旅行の詩だ。九州には彼以前には玉山の如き大作家があり、彼と同時にも亦廣瀨淡窓の如き作家があつた。彼の後にも幾多の作家が輩出した。然し彼の西遊稿程特色ある者は無い。鄕土的色彩の濃厚な者は無い。之れは何故である。九州の土地も風俗も人情も一度彼の眼に觸れば、乍ち其の眞面目が發揮せられたからだ。如何に彼が風景に對して別樣の眼光を以て居たかは、彼の詩が能く之を語つてゐる。長崎に於ける彼の詩を讀めば、少くとも長崎が如何なる場所であり、又當時長崎に於ける生活狀態が如何にあつたかが略推測せらるゝ。彼の『長崎謠十解』の如き若し之を平らたく解釋すれば、或は風俗壞亂の罪に問はるゝが如き文句さへある。然し和蘭商館や支那商館の生活の反面が何如にあつたかはこれで判る。熊本に於ける彼の詩中の『銀杏城』天知ニ敵國一丹樓拔ニ地見ニ解城ニ』の如き熊本以外では

して作る事の出来ないでゐる。昔の詩人が唯古人の口調を真似て、自分は何月などと何處へ行つて作つても差支なき詩は、山陽の西遊稿には殆ど一つも無い。又彼が熊本を發する時の詩に

大道平平砥不如　熊城東去剰青蕪　老杉夾路無他樹　一缺處時時見阿蘇

の如きは其地を踏んだものにして初て其の妙が解る。唯斯く景色を寫した計りで何等妙味が無いと云ふ者もあらう。これは恰も風景畫だけを見ても面白くないと云ふ人と同じ事だ。此等の詩は其の一半を言葉に現し、他の一半を讀む人の心中に於て、随意に作らしむる爲に、餘地を存してゐるのだ。即ち面白き風景畫を見て吾等が其の畫に就て眼下に種々の感じを起すのと同樣だ。これが出來ない者は所謂る俗物の發作だ。又鹿兒島の「前兵兒謡」「後兵兒謡」の如きは、硬派の鹿兒島と軟派の鹿兒島の兩面を描寫して、殆ど眞に入つてゐる。又薩摩詞八首中の、

郷兵團結百餘團　黨衛人要何錯大　半合株翻遊冶郎　家家各稱淡婆姑。

等の如き、百二都城の郷士たる者の状態を穿ちて眞に迫つてゐる。斯る詩は枚擧に遑が無い。之は九州に限らず、彼の足跡の到る處概ね然らざるは無しだ。之に就ても甚だ遺憾に堪へないのは、彼が九山九水と稱はれたる山陽道を十年間に九回も往來したるに拘らず、日本の絶景とも云ふ可き東海道をば十八歳の時唯一回通過し、然も一詩をも留めなかつた事だ。若し彼が東海道を山陽道のせめて三分一程も往來し、又鹿兒島迄行いた如く、奥羽出羽若くは關東北陸道を旅行したならば、日本の風景詩は彼によつて如何に發揮せられたであらう。若くば彼が最後に志したる如く、其の晩年を江戸で送るを得ば、江戸を中心として關東の風景は、如何に其の光を彼の詩によつて加へたであらう。例へば彼が「和州路上」の詩

小市平橋路幾叉　法隆寺塔接當麻　行人買醉和州路　滿野東風黄菜花

今日でも吾人が大和路を春日に旅行すれば、此詩を幾回か低唱せずにはゐられ無い。又「過南禪寺」に

第二橋東雨後泥　杜鵑聲落路東西　遇人休問南禪寺　一帶青松路不迷

今や保守的の京都も大革新を經、且つ一帶の青松も其の若干は故山縣公爵の無鄰庵の園内に取込まれ頗る其の趣を變じたが、予が少年時代京都に在つた際は此詩の通りであつた。彼は風景の詩人たる詩人として、日本に於て獨特の地位を占めてゐる。次には歴史的詩人だ。此點に於て彼が尋常一樣の史論よりも尚稍超越して居る。彼の史論は奇拔なる創見と、周到なる哲學的

要素と云ふやうなある人間らしきものを缺いてゐる。然して其の缺點に彼の詩的性質によつて作つて居られる。[illegible]には於てはない、無味ではない。彼は常に[illegible]を冷靜に判斷する者ではない。彼の判斷には必ず感情が伴つてゐる。斷つて置くが、彼は感情に任せて判斷する程沒理性的の漢ではない。但だ理性の判斷のみにて滿足するよりも、彼は詩的熱腸を持つてゐた。是に於て彼は日本人が殆ど手を觸れなかつた彼獨特の天地を開拓した。其の主なる收穫の一が即ち日本樂府だ。日本樂府は神武建國より秀吉朝鮮役に至る迄の日本史上の主なる題目に就て六十六闋を爲してゐる。彼の友人竹田が之を評して

史才有ル者ハ詩才無ク、詩才有ル者ハ史才無シ。山陽ハ倶有兼出ス。故ニ是ノ六十六闋有リ。

此れは至言だ。彼が日本第一の史家としての史才は兎も角も、日本の史詩作者としての彼は他に競爭者が無い。彼の楠公を詠じた長篇の如き、其の初稿は既に十八歲の時に出で來つてゐる。又彼が西遊稿中の『下筑後河』の長篇の如き、或は李杜同の石將軍の歌に模して未だ至らざる者と云ひ、或は其の文句が妥當を缺くと云ひ、或は歷史的事實に錯誤すると云ひ、種々の議論があるが、而も此詩が如何に我が勤王の志士を鼓舞し激勵したかは、何人も之を疑ふ事は能はぬ。彼の詠歎は南朝の諸士で[illegible]に於てゐる。其の[illegible]を其の一點に對する[illegible]何れも[illegible]ある。而して彼の壯烈なる風景の詩でさへも、楠公と結合しなければ又一種の悲壯感湧き出づる。例せば

攝津路上

酒家粉壁映二晴波一　官道猶通二淀河一　依然人欲レ老　風景楠公墓下十經過

の如き恰も彼の先輩茶山が

宿生田

千歲恩讐兩不レ存　風雲長爲弔二忠魂一　客窓一夜聽二松籟一　月暗楠公墓畔村

と何れも異曲同工と云はねばならぬ。若し夫れ彼が「蒙古來」の詩の如き、是亦其の初稿は十七八歲の時に成り、父執柳井道敏の愛吟する所となつたと云ふが、後にはそれを修正して、日本樂府中の一に加へてゐる。此詩の如きは實に痛快にして、今日誦來つても猶人の血を沸騰せしめる者がある。

山陽は又た實に人事の詩人であつた。若し彼をして杜甫の如く、陸放翁の如く、若くは元遺山の如く、國家喪亂相踵ぎ、若くは外敵來り迫り、若くは社稷覆滅の如き場合に在らしめたらば、彼が詩人としての技倆は更に幾許發揮せられたであらう。」然し詩人の不幸、國家の幸、彼の時代は天下太平であつて、彼

は僅に歴史上の題目を捉つて、其の詩情を發揮するに過ぎなかつた。

山陽は寧ろ主觀的詩人だ。從て山陽彼自身の殆ど凡てが彼の詩に表れてゐる。單に彼の外的生活のみならず、内的生活も亦表れてゐる。彼の詩は彼の自叙傳と云ふも過言でない。彼は殊更に詩を作つたのではない。(或已むを得ざる場合を除いて)只彼が内部の言葉を簡潔に寫したに過ぎない。固より何人の詩集若くは歌集を見るも、多少は斯る痕跡が無いものは無い。最も離隔的精神に富む沙翁のソンネットを讀んでさへも何處やら彼自身の匂が嗅ゐる。但し山陽に至つては殆ど全くそれである。前にも云つた通り彼には熾烈の獻身的精神があつた乎は疑問である。但し彼には物の哀を解する情緒があり。殊に我が身邊の者に就ては、極めて優しき温情を湛へて居た。凡そあらゆる詩人の中にて彼程詩中に家族的の事を詠じた者は絶無で非ざるも僅少であらう。此點に於ては、彼自身がその大宗師と認むる杜甫の嫡流であつた。若し彼をして杜甫の如き國步艱難の中に在らしめば、恐くは杜甫の如く國家に關する多くの題目を捉へ得たであらう。彼は太平の世に生れた爲め其の方面に力を傾注する機會が無く、因て家族方面に專ら彼の詩情を流洩した。今試みに彼が家族に關する詩の若干を掲げて見るであらう。彼が故郷を出て菅茶山の塾頭と成つた頃の詩に曰く

春日客懐

閉門春盡落花紅　欲問三年學藝功　百事無成親已老　等閑三十一春風

世間では彼を稱不孝者と云うた。不孝者で此の如き詩が出來得可き乎。世の中に彼程親を思ふ者は無かつた。予も少年時代兩親の許を去つて東西兩京に遊んでゐた頃、屢々此詩を誦して暗涙を垂れた事を覺えてゐる。又彼が茶山の塾を去つて京都で一本立となり、初めての年を京都で迎へた際の詩に曰く、

歳暮

一出郷國歳再除　慈親消息定何如　京城風雪無人伴　獨剔寒燈夜讀書

彼は家をも名をも抛捨てゝ、只志を行ん爲に出奔したのである。然るに慈親の消息定て如何と氣遣うて居る。彼は親から叱責せられても尚ほ親を思ふ事を忘れ得なかつた。又彼が已に京都に在る年の年月を重ねた除夕の作に曰く。

傍人客京城住幾年　寺鐘報影月依然　孤燈自覺歳添白　況夢苦慶慣不識

彼が内省の第一關には、先づ兩親の事を思出すと云ふ例にてゐたやうだ。彼は又其の遊を悔した。彼は少壯の時に風流の

過多く、彼を知らざる者に、彼の家庭は定めて羨んで居たたらう、と思ふであらうが、學者の家庭として、若くは凡ての人の家庭として、彼の家庭は實に寵しきものであつた。彼の夫人は其の才色に於て梁川星巖の妻紅蘭に比す可き者ではなかつた。固より山陽と文藝上の話など出來得る教養は無かつた。彼の遺稿の詩中に『内子作蘭戯題』とあれば、山陽の晩年には夫人小石氏も蘭を描く位の事は出來たらうが、此方面ではそれが頂上で、全くの世話女房であつた。併し彼女は能く山陽を理解し、又能く山陽に奉仕した。山陽も亦能く彼女に信頼する許りでなく、又心から愛してゐた。彼が九州旅行の途中にも、『憶家』の作があり、茶山をして、『子成四十情痴未醒』と云はしめた。當時山陽三十九で而も十二月廿八日生れなる點からすれば卅八と云ふが適當であらう。併し彼が妻を憶ふ事は年齢の如何ではなかつた。又長崎での『家有ニ納衣待ニ吾返一。孤衾如レ水已三年』の詩は、彼が父の喪中禁欲生活を爲した事を知る者は、更に此詩が事實を語つた事を諒とするであらう。山陽の詩中其の老母に關する詩は更に一段の情趣がある。例せば

余到レ藝留數旬將レ歸ニ京寓一遂奉レ母偕行作ニ侍輿歌一

輿行吾亦　行輿止吾亦止　輿中道上語不レ輟　歴指某山與某水、有レ時倚レ埋ニ機結一母呼レ兒前兒曰唯　山陽一路十往返氣若[illegible]一[illegible]於見我[illegible]生路　[illegible]

情況見る如してある。[illegible]の樣子、此詩を誦して泣かざる者幾人かある。又九州旅行から京都の家に歸つたる時の模様は、

到レ家

窮巷踩ニ深泥一　既雨方絲絲　近レ家情卻怕　所寓恐傳疑　山妻記ニ足音一　喜極又成レ悲　兩歳始歸到　[illegible]　煩レ湯洗ニ吾脚一　新滋火傳遲　新滋且不レ妨　唯喜命有レ期

當時の九州行は今日の世界漫遊などよりも餘程眼劫であつた。主人が家に歸り、留守居をしたる夫人が其の足音を聞き付け迎へ出でたる時の模様は、如何なる光景であつたらう。此詩は實にそれを語るのみならず、併せて迎へたる妻と還つた夫との心持をも語つてゐる。吾人は、現在汽車や電車や電信やラヂオの世の中に棲みつつも、尚此詩によつて之を諒解する事が出來る。又彼の夫人小石氏が京都に於て、初めて男兒を出産したる時

病臥晩擧ニ嬌兒一　愁絶家尊不レ及レ知　莫レ願ニ乃翁一歸ニ乃祖一

容膝向當有ニ請安一

其の容貌が何處となく父の春水に似て居るを見、子供の將來も脱線的な自身よりも几帳面な春水のやうにあれかしと願うた

のも無理はあるまい。其の他の其妹や愛品に遺したる其の長子餘一やに就ての事は、餘りをくして悉く之を擧ぐるの煩を省く、彼は又其の什器の事をもよく詩に作つてゐる。彼の詩を讀めば其の生活の模樣が仔細に判る。彼の庭には如何なる花卉がある乎。彼の部屋の方位は如何である乎。殆ど其の詩が之を說き盡してゐる。其等は今悉く之を擧ぐる必要は無い。玆に僅二三語る可きは彼と母との事だ。

中秋無月侍レ母

不レ同二此夜一十三回　重得二秋風一奉二卮一　不レ恨尊前無二月色一
免レ看兒子鬢邊絲

是等は實に如何としても傑作であり、又能く彼の情を盡くしてゐる。併し予の見る處に據れば、是よりも尚ほ適切に感ずるのは、冑山の歌だ。

冑山歌

冑山昨送レ我　冑山今迎レ我　默數山陽十往返　山翠依然我白
髮　故鄕有レ親親已老　四年兩度下二此道一

何人も大阪神戸の間を往來する者は冑山を見るであらう。今は汽車は勿論幾多の電車あり。一顧も冑山など注意にも付くまいが、山陽時代年々此山を眺めて四條畷邊で上り下りする者には、如何に此山が彼に親しみがあつたらう。彼に取つては此山は種々の思出が籠つてゐたとせねばならぬ。彼は母が追々年を取つたから、又明年は此道を下つて廣島に行くであらうと云つてゐる。何ぞ知らん彼は母に先つて逝き、老いたる母は彼の死後十年餘の生命を保へてゐた。世の中の事は實に意外と云へば意外である。尚ほ彼の詩に於て其の子辰藏の死んだのを哭する短句がある。辰藏は即ち前に掲げた小石氏に生れたる第一子だ。

哭二阿辰一此日春盡

別レ春又別レ兒　此日兩傷悲　春去有二來日一　兒逝無二會期一　勾
萌一現前娛レ目　造物戲レ人何術哉　明年東郊春レ徐齡　誰復
挈レ孤庭レ將來

此の詩の味は子を失ふた者でなければ、十分に解得する事は能ふまい。又彼が母及叔父杏坪を奉じて芳野に遊んだ詩に、

前度奉レ杏作二山遊一　今來膝下照二人新一　十年羈紲不二生試一　擧
母奉遊二芳野山一
侍レ輿下レ坂步遲々　…花…帶二別離一　母已七旬兒半百　此
山再到定何時

此等の詩は尋常一樣文字の上で讀む可きものではない。

又彼の詩中に「讀書八首」あり。之は文政十一年戊子の作にて、彼が死する五年前である。此詩は詩として見るも、何れも力あ

る作にて、山陽の半生の事情によれば更に一層上つてゐる。

其中の一首に曰く。

今朝風日佳　北窓過ニ新雨一　謝レ客開ニ吾帙一　山妻來有レ叙
無レ論須ニ柴米一　八口豈獨處　輪鞅不レ到レ門　饑寒恐自取　願
少退ニ其鋭一　應接雜ニ娟嫵一　吾病雖砭箴　吾豈大賊予　不レ
然父母國　何必解ニ珪組一　今而勉齷齪　無ニ乃欺ニ君父一　去矣
勿レ聒レ我　方與ニ古人一語

文學者の家庭では往々斯る苦情を細君から持出される事があらう。小石氏は果して斯る泣事を山陽に云ふたや否や、それは保證の限りでないが、恐らくは山陽は其の妻に答ふるの辭を藉つて自らの志を明かにしたものであらう。又

東山何藹々　夕陽發ニ紫色一　鴨水收ニ微瀾一　粲同展ニ白玉一
兒兒知ニ日暮一　相喚歸ニ汝宿一　吾亦收ニ吾書一　戒レ婦開ニ吾醁
醁　河鮮自可レ烹　竹筍自可レ斷　就ニ吾東軒下一　一杯聊相屬

彼の日常生活を寫してゐる。山紫水明處の生活は正しく此通りであつたらう。

築レ室鴨水上　挿レ柳纔數尺　來往方六年　其高已過レ屋　上
枝栖ニ鳴蟬一　下枝排ニ浮鷺一　中枝映ニ吾几一　翠陰青可レ掬
仰觀樹如レ此　歳月如レ流速

是は何等の作意を用ひず、只見る處を叙したのであるが、最後の句は[illegible]の一句に[illegible]してゐる。

吾思[illegible]行　[illegible]吾見一　[illegible]
又思江廣元　[illegible]時見ニ嫌疑一　寂資貴別當　朗詠收大臣　一
予洵可レ察　不レ問ニ儒林傳一　通レ時長所レ學　千載見ニ其面一
榮辱安乘除　利鈍疑ニ依戀一　不レ如草莽士　沛沒余ニ介狷一

之は彼が三善清行大江廣元に託して自己の抱負を述べたものであらう。當時山陽は既に生活の安定も略ぼ得たのであつて、必ずしも前に掲げたる詩の如くでは無かつたらしい。併し人間は決して如何なる場合でも、安着し得可きものではない。必ず其の先々と考へて行く。山陽も外史が既に成り、樂翁公に獻上も濟み、最早一段落がついたから、彼も如何に今後は新局面を打出す可き乎を考慮し、安心の裡にも更に新たなる煩悶を生じたのであらう。何れにしても古人が「詩は志を言ふ」と云うてゐるが、正しく其の通りである。

更に彼が天保二年五十二歳九月京都を發して廣島に下る時作つた「淡山歌」に曰く

淡山於レ我何有レ情　華城作送赤石城　城東旗亭倒レ尊醉　淡
山對レ面喚欲レ與喚　山同醉山不レ答　自レ此分行終離別　吾時
上高一回レ頭　山猶依依遙相揖　歎吾此行淹幾時　知汝一
笑先展レ眉　廿年京攝多ニ交友一　久要似レ汝果阿誰。

予も「京城日報」の記者として、年々数回山陽道を上下する際は、恒に淡路の山を眺めて同様の感を生じた。詩人の眼から見れば山も亦旧友の一である。之が彼の広島に帰りたる最後であり、又母を見たる最後である。されば盡い知らずにやあらん、彼は母に別るゝ時に左の如き一詩を作つてゐる。

別母

強舎行杯拝北堂。輿能仰視阿娘顔。萬端心緒無詩付
與湖辺楊柳間

「輿能仰視阿娘顔」の一句、如何にも彼が別を惜んだのみならず、言明す可からざる感じが其の中に湧いた事が思ひ遣らる。又其の十二月家に帰つた時の詩に、

到京

夜乗浪華舶　朝看伏水曦　寒日破廟額　孤樹塔婆巻　廿年
寄家室　自嘆逆天涯　何顔發書報　歸到家郷知　喜到楊柳
街　來迎九齢兒　滿面今朝日　好看已垂々　悄報如山車
迎著白髪親　歡喜不報徳　西風長數嘯

途中迄九つになる兒が（又二郎聿庵）己を迎へに来た事に就て、自らが其の年ころ、父春水の江戸から帰るのを迎へた広島にての昔を聯想し、其の感慨を洩らしてゐる。五十にして父母を慕ふは大孝であると孟子は云つてゐるが、孟子の言に従へば。

山陽は正しく其の一人と云はねばなるまい。天保三年元日には斯の如き詩を作つてゐる。

櫻島将回已飼衣　営閑過年未持扈　迎作今歳多三心緒一
西憶阿娘東憶兒

江戸に長子餘一が在り、広島には老母がある。彼を憶ひ此を憶ひ、正月の屠蘇も、餘りに甘くなかつたのであらう。彼が如何に家庭の情趣に濃かであつたかは、以上記する所によつて之を察するに難くあるまい。

尚ほ左に掲ぐる書翰は、彼が詩に就て如何に考へ居る乎を語つて居る。

神辺遊歴ねまの中より頭を出し候別後以来彼此存然如何小生神辺に五日来滞留林下涼き事如訪
洋樹村酒湖上吏。未知佐藤十載情。
笠月樽湖窓頭。梅花香夏夕陽側。
と被致候を拝して
鳳樹新酒嶺雲吏　舞遊父親不堪情
老僕恐洲流相逢　萬竹蔭杯情未開
先候如此それより岡山にて今村と遊び一宿候鞆泊へ参候渉道十里至今次候笠岡に招請致舞有之猿路よりねたり候酒は笠岡より鞆へ達来候笠にても名氏不付之魚のみたへ候べどもヲコセハ無之酒ハ相應也因此の越し分ハたはひ候両技尾へ十七日に発泉尾も来会そこにて決問酒吻初の鞆泊跡より来候様は舟に両舟に相候故とて昨良不染指呼酒非乾物

書食[illegible]舌書ふたものジヤと云[illegible]大[illegible]書に見[illegible]

人之情[illegible]候故人可不逢[illegible]を相見可未可知[illegible]に生[illegible]に候

家郷行已近　指指大雲山
憶昨[illegible]住　如今再[illegible]還
[illegible]橋高樹側　[illegible]店夢時聞
每[illegible]停輿處　依々記笑顔

御[illegible]察可下候知此意者唯足下故相示し候

[illegible]疲[illegible]該作二[illegible]退一　茅店呼茶正午[illegible]
[illegible]角竹弓[illegible]子戲　阿年恰與我兒齊
家々競計[illegible]迎新　飲食[illegible]又[illegible]
飄泊半生成何事　窮陰[illegible]作未歸人

ケ樣の狀にて廿八日別家候

阿年[illegible]侍[illegible]那[illegible]　[illegible]
稚子[illegible]吾向[illegible]訊　阿[illegible]何不伴[illegible]

約之山陽惜家詩に候へども情衝レ吻而發不レ得レ不レ如レ此候なれども今年は心[illegible]によき年取申候それと申も足下父子厚情周旋所致に候

以上書中の詩は必ずしも山陽の傑作と云ふ可きものではないが、而も彼が如何に詩に就て考へてゐ、又如何に考へたる所を實行した乎を見るに足る。此書簡は、文政八年の正月十五日付けであれば、恰かも彼が四十六歲の時に書いたものだ。彼の詩は天然と人事に渡つて兩つながら能く彼の云はんと欲する處を云ふてゐるが、彼は詩のテクニツクに於ても、決して才に任せてやり放したものでは無い。彼は天生の詩人である許りでなく、文學史上の[illegible]人である。其[illegible]詩に[illegible]年八月[illegible]したる唐[illegible]選[illegible]る。文化戊午と云へば三十一歲、彼は茶山の塾に在る頃だ。彼は李于鱗の『唐詩選』にも據らず、又王漁洋の『萬首絶句選』にも與[illegible]あつて、自ら唐絶の最も妙とする處を選んでゐる。彼は其書の例言に於て王漁洋は唐詩萬首選より選んだが、彼は當時七十五であつたから、恐らく老耄したであらうなどと云つてゐる。當時彼の眼中既に古人無しと云はねばならぬ。彼は歷代の詩を讀んでゐるが、彼が自ら語る如く、杜甫、韓退之、蘇東坡、陸放翁などの如き最も能く讀んでゐる。就中韓蘇、韓蘇中に於ても蘇東坡を讀んでゐる。例へば彼が阿嵎嶺の詩『天連水處是盜灣』は東坡の『青山一髮是中原』を聯想し『楠公墓下十經過』若くば『默數浮沈十年事』などは東坡の『默數十淮中十往來』を聯想する。若し仔細に見來らば斯る類は必ず少くないであらう。併し彼は徒らに韓蘇の文句を踏襲したのではない。其の作法を學んだのだ。進んで云へば其の氣象を學んだのだ。固より彼は自ら斯く語つてゐる。

評レ詩群觀宋元僻　論レ味爭收中晩腴　斷粉零香合二時哈一門
君何苦學二韓蘇一。

然し之は彼が理想であつて、風氣の移す處彼の詩は却て宋[illegible]

的清朝人の境地に彷彿きものがあると云ふ説を為す者がある。之れも強ち然らずとは云はれまい。併し何れにしても彼の詩の巧拙は暫く措き、彼の詩の言葉は死んでゐても、詩其者は活きてゐる。即ち活きたる精神が其の詩の中に動いてゐる。之は題を設けて考へたのでなく、感じたから詩を作つたのだ。作らんが為めに作つたのでなく、作るを禁ずる能はざるが故に作つたからだ。如何に彼が詩に就て工夫を用ひたかは、恐らく何人も其の實際に就て、驚嘆するであらう。山陽詩鈔は彼が五十歳以前の作だ。正確に云へば四十六歳迄の作だ。之は彼が死する以前に既に出版者の手に渡して居れば、彼が定稿であるは論を俟たぬ。遺稿は文政九年丙戌彼が四十七歳から天保三年壬辰五十三歳彼が死する迄の作を集めてゐる。其の。巻尾に若干拾遺がある。之は年代に拘らず遺ちたるを拾つたのだ。然し此の遺稿も亦恐らくは、彼の死する以前に彼自ら參訂したるものであらう。何となれば若し彼の詩を集めたらば、彼が遺稿は恐らくは現在に倍するものがあつたであらう。然るに詩鈔は云ふ迄もなく、遺稿も思ひ切つて割愛してゐる。而してそれのみならず、其の作が何れもそれぐ十分の修正を加へてゐる。彼の書簡などには暗から暗に葬られた詩を往々見受ける。彼は旅行の際には随分盛興に詩を作つたが、然それを物にするには或る種の推敲を我

した。今一例として、彼の西遊稿を擧げんに、此れ亦「不甚刪潤」セズ。要スルニ當時ノ興會ヲ存シテ、以テ他日ノ檢念ニ供スルノミ」と特に断つてゐるが、此「不甚刪潤」との四字が問題だ。之を見れば彼が西遊稿は殆ど原稿の儘採録したるものとより外に思はれないが、事實は全く之に反してゐる。今予の手許にある、彼が旅行の途次肥後阿久根の川南瀬兵衛の為に書き與へたる西遊詩の複製卷と、詩鈔とを對照するに「甚不刪潤」と云ふ言葉は寧ろ初めの「不」の字だけを削る方が事實であるまいかと思ふ程だ。世間で最も評判高き「山耶山耶」の如きは其の原作は左の通りである。

擁艣衝底響奔潮　天草洋中夜泊艇　太白一星光似月　波間照見巨魚跳

然るに詩鈔には左の如く改刪してゐる、

雲耶山耶呉耶越　水天髣髴青一髪　萬里泊舟天草洋　煙橫篷窗日漸沒　瞥見大魚波間跳　太白當船明似月

一詩を對照し、之でも「甚不刪潤」と云ふ言が受取られやうか。又細井元展の女少野女史の墨竹に題する詩に

未成落墨自清雄　並見尋常用下風　倚得竹安盤硬法　寫他疏影兩横窓

然るに山陽詩鈔には斯く作り變へてゐる。

叢祠老樹　湖中有汀一葉丈　[illegible]

千枝垂文字

如何に彼が推敲を費したかは、之を以てもよく知る事が出來るであらう。然して石西遊詩卷に詩鈔中收めざる七絶八首七古二首がある。其の割愛の程度も亦知る可きである。彼の先作者茶山も亦彼同様最もよく推敲した。山陽は其遺稿に序してＯく

病釋ノ間ヲ檢シテ前ニ示ス所ノ原稿ヲ得タリ。此若干首ヘ選ン手自ラ塗改スルコト數四ニシテ成ル者。字ハ蠅脛ノ如ク。愈ヨ改メテ愈妙挺。乃チ歿スルニ先ツ兩旬ノミ。

茶山は死する際まで尚其の詩の草稿を自ら檢閲して改めてゐたのである。彼の稍後進とも云ふ可き梁川星巌も亦同様であつた。然し果して茶山も、星巌も彼以上であつたか、それは明言の限りで無い。彼が如何に詩の爲に骨折つたかは、彼が死するの年、即ち天保三年壬辰五月彼が彥根に遊んだ時の作に就て見ても知る可きである。彼は彥根から歸るや間も無く血を吐いて不治の病床に就いた。然るに彼は彥根の往來の詩の中でも、原作と遺稿とを見れば頗る異つてゐる。例へば堅田の詩の如きも原作には

蝋燭秧田互可ㇾ呼　晴波一束似二湖蘆一　平生漫說織川記　始信濃尾飛渡ㇾ湖

[illegible]の「[illegible]」を一大[illegible]と替へてゐる、又「[illegible]十日也」の

大[illegible]小[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]見

湖東[illegible]山

此れを遺稿には「湖[illegible]對[illegible]化現始見湖南[illegible]山」と改まつてゐる。

尚ほ彼が病を力めて作つたる「寄題金谷鳥州香山樓」の原稿と遺稿とは左の如き相違がある。

妙義如ㇾ削[illegible]　武甲似二郭熙一　[illegible]山[illegible]ㇾ雨成[illegible]兒（原小米）[illegible]山經ㇾ霜[illegible]二大癡一　不二獨此樓吞一連山一（原山色）主人胸府（[illegible]）邱壑奇　吾亦東（原背）遊阻（議）京上　觀圖彷彿搞在ㇾ目　何時左折（枉道）來此牌　[illegible]渡[illegible]川到二君座一　共對（相）二眞山一論二畫山吞ㇾ山吐ㇾ水樂（共）忘ㇾ返、

此の如く彼は殆ど死に至る迄詩を刪る事を忘れなかつた。彼は自ら詩人でもなく詩を本領とする者でもないと云ひつゝも、如何に詩に力を用ひたるかは之を以て知る可きであらう。而して彼の推敲は決して徒勞でなかつた。彼が應酬の卒[illegible]などは、臨分凡作、俗作、平板作、月並作が少くなかつた。彼は實に化鐵作金の術を心得てゐた。即ち彼は殆ど其の精力の一半を詩に傾けたと云ふも不可であるまい。されば彼自らが死際に云うた通り、

風雅の藝術」を尚ぶと爲すは、全く不當であらう。

第十九　書後題跋と山陽

山陽の著書にて書後題跋は一種出色のもの、之には素人でも玄人でも山陽好でも山陽嫌ひでも、何れも愛讀するを禁じ難きものである。此書は、恐くは山陽の死する極めて近き以前に、其の門人兒玉旗山が山陽の命を受けて集めたるものにて、勿論山陽の訂正を經たるものであるには相違あるまい。其の中には當時彼が未定稿である問例(日本政記の稿本の後に書する)の文があり、而して其の編輯者門人兒玉旗山(雄)の引には、天保壬辰秋八月とあるから、死する前一ケ月に成りたるものなるを知る。其の書後は經史に關するもの二卷、詩文に關するもの一卷、合せて百三十三首によつて成り。其の題跋は、專ら書畫碑帖等の類にて、上下二卷八十九首。固より大作と云ふ可きでなく、彼が時々刻々其所感を書せる所の者、觀る所の書等に就て書き付けたるものにて、謂はゞ彼に取りては一口淨瑠璃にて、サワリを口吟すさみたるに過ぎない。然も彼の全き面目が恐く此に現はると云ふ能はずんば、少くとも彼の全き目錄が此に有りと云ひ得らるゝであらう。凡そ彼が學者として、歷史家として、詩人として、文章家として、而して又人物として、凡有る方面から眺めた彼の凡ての消息は恐く此の中に有りと云ふも差支あるまい。されば苟くも山陽其人を知らんには、此書を讀むに如くは無い。此書を讀んで吾人が最も感ずるは、彼が批評的官能の超越したるとだ。彼には創造の才と見る可きものは不幸にして多く見出さないが、何も彼が接觸する所に於て、其の中に潜んだる或物を見出す眼力と、之を又發揮する筆力とは、兩つ乍ら卓越したるに驚嘆せざるを得ない。書後題跋の中には彼が經書に關する意見も少くない。歷史に關する意見も少くない。諸子百家に關する意見も少くない。又支那日本諸大家の作物に於ける意見も少くない。若くは支那日本の法帖書畫其の他に於ける意見も少くない。必ずしも悉く妥當とは云はぬが、但だ尋常の同意不同意に拘らず、實に其の手際は鮮かなものだ。即ち彼が最も長所は、創作よりも寧ろ批評家であつたことが、之によつて十二分に證明せらるる。彼が批評家たるの特色の一は前人を毫も恐れざるにある。彼は仁に當つては師に讓らず底の心持を以て、凡ての物に對してゐる。前人が如何に云ふたとて、合點の出來ない事は何處迄も出來ない事としてゐる。即ち從來の成見に囚はれないのが彼の彼たる所以だ。それに彼は亦凡ての眞善美に對して鋭敏なる感識力を有つのみならず、温かなる而して寬闊ならざる同情心がある。固より彼には熱情の代償として愛憎の念も少

ノくまい。彼は亦グード・ヘーター（善く憎む者）だ。一度不義に嫌はれると、彼は全力を竭くして之を嫌ふ傾がある。即ち八家中の曾南豐の如きがそれであり、又愛する者には全力を竭して愛してゐる。蘇東坡の如きがそれである。然し概して彼は辭退之や蘇東坡の詩に對しても、異存を云ふ可き場合には異存を云うてゐる。決して東坡の瓦石を璧と見る程の痴漢ではない。彼は亦後進を引立てる爲には隨分相當以上の言葉も使つた。又彼が世間を渡る關係の上にて、其の儕輩に對し聊か寛大過ぎる程に取扱つた點もある。例せば米庵の詩若くは書に對する讃辭や、小竹の詩文若しくは書に對する如きがそれである。併し大體に於て彼程の批評家は徳川二百六十餘年間を通じて、恐くは多く其の類を見まい。若し彼が畢生の力を文藝批評家として盡くしたなら、彼は佛國の十九世紀の上半に於けるサン・ボウ以上の効果を世に惠んだであらう。それが唯だ渺乎たる書後題跋に止まつたのは甚だ遺憾だ。併し其の外にも、例せば孟子に對する批評や、唐宋八家に對する批評がある。是等は支那に行はれたる蘇批孟子や茅鹿門、儲同人、沈徳潛の唐宋八家に關する批評と比べて劣らざるのみか、寧ろそれよりも數層緊切であり、痛快であり、面白くある。書後中に掲げられた、彼が詩經書經に對しての見識は

詩ハ當ル所ニ足ラズトモ也。書ハ則チ次韻ノゴトキ也。詩ハ閑下最六ノ由ル所ヲ見ルベシ、書ハ古今ノ大盛衰ヲ叙ス。唐宋ハ專ニ於テ最モ拙ナリ。故ニ此ノ二書ハ明人必讀ノ書ト爲ス。

の一句で澤山だ。又孟子の批評に、

萬乘ノ國其君ヲ弑スル者ハ必ズ千乘ノ家ナリ。

とあるに、萬乘の横には足利と註し、千乘の横には細川と註し、

千乘ノ國其君ヲ弑スル者ハ必ズ百乘ノ家ナリ。

とあるに百乘の傍に三好と註してゐる。只此の足利細川三好で凡ての意味がよく通じてゐる。何たる氣の利いた批評の仕方であらう。古を知るには今を以てし、今を知るには古を以てし、日本の事を支那の事で説明し、支那の事を日本の事で説明し、古今を問はず、上下を論せず、恰も合せ鏡にて觀るが如く、中外透徹、表裏洞通、如何にも明快と云はねばならぬ。彼は日本人が支那の經書に彼是沒頭するを見て可笑しき事と思うてゐた。彼が其の門人村瀬藤城の問に答へて

六經ハ漢土ノ物也。六經ノ言フ可キ者ハ漢土ノ人之ヲ盡クス矣。而シテ日本人敢テ之ヲ是非ス。是レ猶ホ三家村ノ子弟ガ都下ノ演劇ノ月旦スルガゴトシ。

即ち日本人が經書の議論をするは、田舎者が都の芝居の評判記を書くやうなもので、莫迦々々しいと云うてゐる。之も又一説である。彼の家學は純粹なる朱子學であつたが、自らは決し

てられに因はれなかつた。日く、

世或ハ謂フ、吾家學ニ背キ其ノ師ヲ信セスト、實ハ日ク、吾ガ其ノ信ゼズ、故ニ其ノ信ゼザル所有リ 其ノ其ノ信ゼザル所有ルヲ以テ、以テ其ノ其ノ信ズル所ノ私ニ非ザルヲ知ル可キ也、

謂はゞ自分は悉くは信せないが、信せない部分を除くの外は信じてゐるのだ。即ち信せない部分の取り除を爲すと云ふ事が、彼る部分を信じてゐる證據であると。何れにしても彼は因はれてゐない。批評家の本領は因はれない處にあらねばならぬ。若し自ら因はれてゐれば、即ち原告か被告かの何れかの側に立たねばならぬ。批評家は裁判官の位置を占む可きものだ。山陽が批評家として他凡を占むる所以は、其の因はれざる處に有りと云はねばならぬ。只因はれざる許りでは足れりとせぬ。山陽は其の接觸する凡ての物に對して、非凡なる鑑別の見識を以てゐた。彼は砂の中から金を拾ひ、石の中から珠を取り、荊棘の中から花椅を見出す。如何なる物でも、直ちに其の中から精粹を抽き出す事が出來た。彼が世間で云ふ凡山凡水と云ふ山陽近の風景に對してさへも、其の詩料を發見したのは、畢竟之に由ると云はねばならぬ。且つ彼は肥前手倶の見越入道でなく、彼自身非凡の文章家であつた。故に他人の作物をよく消化する事が出來た。彼が如何に一隻眼あつて他と雷同せざる乎は、明初の文章に於て人皆拙叔子を貶めてゐたに拘はらず、彼は却つて

大凡文ノ病ハ淺ト俗トニ在リ 錢ノ如キハ俗ナラズ、但淺ヲ嫌フ耳。

と云つてゐるを見ても知る可しだ。

彼は彼と程遠からぬ近世の作者に就ても、又見る所が要を得てゐる。日く、

紫公ハ奇ニシテ而シテ俊、錦公ハ正ニシテ而シテ博。尼公ハ則チ雅密精確。文各其人ノ如シ。

と。如何にも栗山精里二洲の文を評して簡にして要を得たものと云はねばならぬ。又彼は

余儕輩中ニ於テ特ニ推服スル者ハ、茶山自信ノ二先生、修翁之ニ次グ。其學古今和漢ニ貫通ス。能文ノ所ヲ問ヘバ日ヒ淨ト日ヒテ而シテ已ムガ如キ一ニ非ザルヲ以テナリ

と云うてゐる。是亦當つてゐる。且つ徂徠に就て日く、

余嘗テ謂フク、徂徠翁ハ人ニ超越ス。而シテ一事ノ缺クル有リ。日ク古學。而其ノ資有リ。日ク古學、日ク古文辭。此二事無カッシメバ、則チ人才ノ論、恐ク瑕疵少シ。惜イ哉。

古學古文辭は如何に拙き、徂徠の立身は必ずしも彼の累とするに足らぬ。徂徠が卿相に用ひられたるは、其の學術を以て用ひられたるのみにて、彼として何等恥しき事は無い。若し徂徠の立身が問題であれば、白石の立身も問題だ。而して白石が間部詮房によつて立ちたるなども同じ問題とせねばならぬ。唯徂徠か

伊藤父子のあらゆる所に、當時に於て一自ら闢天地を拓く可く、而る熟り過ぎたる氣味がある事を遺憾とするのみだ。白石に就ては、

吾ノ解スル能ハザル所ノ者ハ、白石ノ時務ニ通達スルヲ以テ、論スレバ輙チ雕文華修ヲ喜ブ、婦女ノ見ノ如キハ何ゾ哉。

と云うてゐる。是亦當つてゐる。併し山陽は別に徂徠でも白石でも、神とも鬼とも思うてはゐなかつた。彼の眼中には唯だ先輩と云ふ迄であつた。

彼が日本の詩を評して

正德諸公ノ中、余ハ白石玉山南海蛻巖ノ四先生ニ推服ス。白石玉山ノ律詩、未ダ明人ノ氣習ヲ脱セズト雖モ、其古體ニ至ツテハ皆格ヲ具フ。蛻巖ノ七古短篇ハ俊爽秀異、諸家ノ無キ所。南海ノ絶句多ク漢人ニ逼ル。徂徠詩ヲ以テ長ヲ見サズ。而シテ其詩ハ骨氣アリ。南郭諸人皆王李ノ奴隷、必ズシモ論ゼザル也。之ヲ要スルニ、此諸公皆學殖中ヨリ徹出ス。故ニ各觀ル可キ有リ。近時詩風一變シ、前輩ヲ以テ陳腐トナシ、空靈清新ヲ以テ相尚シトス。然ルニ其才華力厚ヲ論ゼバ、恐クハ及ブ能ハジ。唯茶山西野及ビ六如師ハ代雄スルニ足ル耳。

以上の評、概して適切と云はねばならぬ。只彼が妄りに南郭を非難したのは、世間で南郭を以て詩の大宗師と崇め尊びたる惑ひを打破せんが爲めでもあらうが、聊か公平を缺いてゐる。

彼が書畫の鑑識は如何なる程度であつた乎、恐くは今日の標準から見れば、彼も亦幼稚であるを免れまい。彼の時代には博物館も無く、展覽會も無く、國寶的のものを見るには、頗る困難であつた。されば彼が二十七歳で京都に出掛けて、東寺の寶物を見る爲めに大騷ぎをした程である。これは彼の題跋中に『同二徐承弼及諸子一觀二東寺古書畫一於二中某家亭一記以二長句一』とあるを見て分る。彼は其の友人と東寺の寶物を見て、實に愉快に堪えず、『皆眼盡二寺樂一、一日成二萬古一』と云うてゐる。而も此の見物に行つた時には、『油幕與二小輿一、興レ病冒二大雨一』と云ひ、友人と駕籠に乗り雨を衝いて東寺に出掛けたのだ。又彼が其父と嚴島に遊び、神庫の藏する古物を觀たる長篇がある。それは彼が其友佐伯子幹——彼が廣島を發して茶山に赴く時に、私かに貲を與へ、父春水の書を抵當として金を借りたる棚守元貞其人——の厚意に由りて然ることが判る。斯る次第で彼の書畫に對する見聞は、今人に比して甚だ狹かつたと云はねばならぬ。されば其の批評眼の必ずしも當てにならないとは云ふ迄もない。凡そ書畫に對する鑑識は其の精美精眞なるものを、最も多く見て其の眼力を養ふを第一義とせねばならぬ。然るに其の第一義が山陽に缺けてゐたとすれば、彼の批評眼が此の方面に於て必ずしも今人に優つてゐない事は論を待たぬ。而して彼の繪畫の批評家としての缺點は、德川中世期の日本の文人畫以外のものを殆ど無視したる事だ。乃ち支那畫の系統に屬するものと雖も、足利時代に於ける日本の作家などは、殆ど沒交渉だ。彼の題跋中には雪

自ら畫けれは間文も驚く。元作も無ければ大小も無く、讀んで抑幽溟佳合や、讀んで若かな宗趣が躍なや。偶ま岡山興學の文風たとに就き記したる事もあれども、それは唯だそれ迄の事に過ぎなかつた。彼は同時の作家としては、唯最も竹田に敬服し、其の先輩としては野呂介石に敬服してゐた。而して竹洞、春琴などにも相當の敬意を拂つてゐた。彼は殆と日本畫家の局部を知つて、其の大體を把握してゐる如き概があつた。彼の眼中からは文晁は俗讀者の俗畫にて、四條派の諸家などは殆んと相手としなかつた。彼が小田海僊に與つた詩の一節に「一間君寫烟雷先」「一揺溪落日揺揺」「蒼紫直師造化工」「畫不縉紳市原閔」「邵邱對峙所見余　數个偉神明師神速　法門一開世容錬」「爭攫娃婿且嫉妬」「豈無[illegible]格滌浮花　不見[illegible]在何役鐵」「烟水今見湖海大廟、學山流斜下千里」「人字[illegible]百行人」「後頭今見田百谷」とあり、此れにて見れは蕪翁や呉谷をはやゝ忽記してゐる樣だが、然も其の目的は寧ろ四條派の缺點をよく穿ち、其を海僊（百谷）に歸してゐる。海僊が果して山陽の重とする程の畫家である乎否乎は姑らく措き、山陽の畫に對する眼識は、清純なれば敏感である。彼は此の一點に於ては、殆ど畫家に因へられたものといふも過ではあるまい。予は彼自らが畫に就ていふ所の記述によつた乎を詳にしない。但だ彼は自らも畫でないと威張つてゐたが、彼の作品は少からずある。彼の生活費の大部分は彼の揮毫から來たが、其の主要なる分は書であつたとするも、畫も亦幾分衣食の料となつたであらう。彼は富利追欲に畫を描き、娯しみに畫を描いたかも知れぬが、隨分俗氣の多き彼なれば、とても之を無代價で他に書き與ふ可き筈はない。予は彼が力作と稱せられたる耶馬溪圖卷を見たが、成程力作には相違ないが、其の珍重す可きは畢竟彼の畫たるが爲めであつて、畫其物たるが故とは受取られない。彼の畫は畢竟素人畫たるを免れない。而も其の世に愛せられるは、却て其の素人畫たるが爲であらう。寫實としての耶馬溪圖卷は問題ではない。予も耶馬溪を一見したが、畫卷と實際とは丸きり別樣の感がした。

昔は王摩詰の詩中に畫ありと云ふたが、山陽の文中には時々畫よりも尙ほ佳なるものがある。例へば

戸外ニ出デ、緣田溝ニ入リ、夏彩ノ鳳眼ナルヲ覺ル。西南ノ雨霽レンデ影ノ畫クル處、指シテ傍人ニ問フ、彼ハ何ノ處ゾ。日ク某某也ト。既成功ガ依賴ノ鉄ヲシコトノ憶ヒ起シ、慨然之ヲ久ウス。

の如き、此れは阿閣翁の詩の數であるが、堂々たる文章、實に文中畫あり。畫も亦及ばすと云はねばなるまい。

要するに彼が批評家としての本領は、其の簡數に於て之を見

ろことが出來なかつた、恐らくは[illegible]に
するを得なかつた事だ。若し彼が自ら批評家たる天職を自覺し、是等の方面に全力を盡くしたらば、彼は恐らくは更により大なるものを遺したであらう。

之から日本政記に就て云ふ可きであるが、之は彼が最後の著作であれば、彼の臨終と共に語る事を寧ろ便利とするから、彼是取束ねて之を叙るであらう。

山陽は文政の末既に日本外史を全く仕上げ、夫からそろ／＼國朝政記に取掛つた。天保元年正月頃には既に延喜の朝迄進んでゐた。之は專ら議論を主とするものにて、叙事は唯議論と議論の間を繋ぐ迄であつた。然るに彼が不起の病は、意外にも天保三年壬辰の夏末に發した。當時彼は大なる希望を蓄へてゐた。其の年に果さんとした乎、若くば其の翌年に果さんとした乎、それは明白でないが、兎も角も彼が最後の一奮闘を試みる可く、江戸に赴かんとした事は明白だ。其の事は他の場合に語るが、兎も角も彼に取つて天保三年は希望ある新年であつた。四月には其子又二郎門人石川君達(關藤藤陰)を從へ高槻なる門人藤井竹外を訪ひ大阪に下つた。其の時大鹽平八郎にも面會し、彼の古本大學劄記の原稿を見、之が序文を草せん事を約した。斯くて五月

八日に[illegible]、又彼の招きにより彦根に赴いた。之が彼の最後の旅行であり、又彼に取りては最後の快遊であつたらう。彼の門人牧百峰は送つて大津に到り、翌朝別れた。山陽は船を隆井村に寄せ中川祿郎を訪ひ、これから彦根へ赴いた。彼は彦根では非常ならざる歡迎を受けた。其の模樣は[illegible]の詩によつて推察する事が出來る。

謫居詩賦動江關一　勞汝舟船一往還　鷗鷺將迎芳草岸一　煙嵐背指夕陽山　姓名莫レ問百年後　盃酒且歡十日間　石衣英雄盡鳴去　只留三爽水一照二酡顏一

此詩の註に左の文句がある。

予成平生喜ンデ古英雄ヲ談ズ、是日盃酒ノ間、佐々木暾田村宗等ノ諸蹟跡ノ所ヲ指シ、往談太ダ劇シ。

山陽は何れかと云へば雄辯家でもなく、雄談家でもなかつた。併し酣酬なれば隨分喋つた者であらう。彼が得意の歷史談を其の快友の坐に作りて、其の眼前に展披せる諸の古跡に就き、之を點指しつゝ爲した事は、今尚ほ睹るが如き心地がする。

彼は五月八日に京都三本木宅を出で五月二十日に歸つた。彼が五月二十四日付けに[illegible]に與へた書中に

別後十日南竹達底にて與[illegible]郎小[illegible]郎を伴へ上[illegible]て[illegible]分了
彼[illegible]風其間成[illegible]ノ島ニ繫泊無聊殊甚だりし

とある。此の中川祿郎は、他日井伊直弼に向て、開國說

したる一人だ●

第二十　最後に於ける山陽

惟ふに此の旅行は單に彼が遊樂の爲め許りでなく、多少川稼ぎの趣があり、隨分懷中も脹れたる事であらう。彼が星巖に「今度御周旋大分ならず好意不可忘」と云つたのは、單に接待許りでなく其の方の周旋も少くなかつたのであらう。彦根作遊の際山陽が星巖と共に茶山の留題したる大洞山に上りて作つた詩を對照すれば、亦た一種の興味が湧く。

檣帆涵映女墻飛　大洞山頭雲木歸　可惜江城如畫處　臨風唯憶謝玄暉

此れが茶山の原作だ。星巖の次韻は

湖島雙々鷗鷺飛　扁舟容與帶忘歸　忽然驚起老官何　更上洞山看落暉

又山陽は

朱欄逍遙俯鷗飛　外湖遊罷內湖歸　頭白詩輸與茶翁好　坐看江城帶落暉

三人三樣の詩で、如何にも各自の本色がよく現るゝ。前記の如く、山陽は彦根から若干の潤筆料と、恐くは又若干の依賴物と土産物とを携へ、誠に愉快なる旅行を終つて家に歸つたが、好事魔多しで、意外にも翌六月十二日に咯血した。其の顚末は彼が七月廿四日付にて、彼の愛する劍菱酒の製造主坂上桐陰に與へた書中に明かである。

……又春來申候咳血歎と云し古を作申候病氣を餓にするそれ所でなきと醫は申候へども迷惑可申候
何卒御に御聞も可被下候も咳血之病にて六月中旬よりなやみ精神氣力違ひ候事はなく候へども醫者は養怡せよと申何も止て養生一方にかかり居候是は年來美酒を恣に致候ゆゑ報と天罰とあきらめ居候也因此彼御記の手本の樣のものも木下氏秋涼居候或は上々年來犯實歸有旅行校死之種とかくさつぱりと不致馳氣不和時歎等御床候事それのオドモリにやよし翼は申候血症は久々止居候間先々御安心可被下候何分以來は御家釀御なかり申候事も疎濶に可相成と存候也

桐陰老契　　襄

此時迄は彼はまだ全く死ぬる者とも覺悟はしてゐなかつたやうだ。又彼は彼の友人にして彼の掛醫たる小石元瑞にも、七月二十四日付にて斯く云ふて居る。

昨夕も忝存候作御草々仕合に候今朝御約束之丸藥可賜候取に差上申候用法委細御命申候外に例の滋州丸藥も不斷候喉逆近日先程の方と申上候へ共今晩なと十八日有自中道候之者不能不喫之氣味依然今一見強相成候へバ先日血症再發之時の狀と同樣可有之候自覺候處ニ候悟御考申上候昨夕も申上候通御治療之次第御任分ニ被成下度月日の職人候

事に何しら不吉な事に對して氣付いた申上候……

此頃迄は彼もまだ一縷の望があるものと思つて居たらしい。然るに八月十四日付にて、彼が友人であり又彼に取つては一種の銀行とも云ふ可き、小野叔好兩人に向つて與へたる書中には、最早や覺悟を極めたやうである。而して文中にもある通り「一般國朝政紀、未落成だけが殘念故、ソレニ晝夜かゝり、生前に整頓いたし置度」と云つてゐる。序でながら彼の喀血に就ての詩は左の通りである。

患二咳血一戲作レ歌

吾有二一腔血一　其色正赤其性熱　不レ能レ灑二之明主前一　赤光爆向二廊堂一徹上　又不レ能レ濺二之國家難一　留二痕大地一碧非レ滅　鬱積徒成二磊塊一凝　欲レ吐不レ吐中逾熱　一日咯出學二今賀一　難レ收糝地紅玉屑　或曰先生嗜レ史過二義雄道一天罰　睢陽之齒顏常舌　渥無二寸傷一已自殘　憤滿遂致二肺肝裂一　或曰先生殺レ人千無レ銕　發レ奸摘レ伏由二筆舌一　以レ心誅レ心人不レ知　冥冥冥冥濺二陰血一　吾聞二此語一兩未レ領　童子進曰走意別　先生肉中本無レ血　血腹中奇字傳可レ劉　賤二得杜康一作戲酒　飼姿如レ劍酊停　大禍藏府受不レ起　溢爲二赤漿一戒二曝筵一　唧哉此意愼勿レ說

彼は中江兆民の一年有半に比すれば其の死刑の宣告が切迫してゐたやうであるから、其の骨折も尋常ではなかつた。彼は單に日本政記の未完成を心殘りに思つて居たので無く、世に出でたるは〔……〕の稿にてあつたものを、これを〈出板してすまさ〔……〕きもの〔……〕でありしした。彼は又當時春秋膝下なるものを書いて居たやうであるが、

今茲不成ノ事見、昭公ニ至ツテ而シテ成ル。蓋有ヲ時ニ起ラザランヤスト。自ラ此事ノ終ザルヲ慨ス

と云うてゐる。されば之は到底完成の望無きものと見切をつけたものであらう。尙政紀に就ては、山陽の命を受けて遂に之を完成に到らしめたる門人石川君達（關藤藤陰）が、〈當時關五郎と云ふ〉山陽沒後、十月二十七日付けにて、江戸にある山陽の長子頼與一に與へたる書中に委曲を悉してゐる。

一日本政記ノ儀申上候此書ノ事先生御新著モ被テ有之御承知トモ存候へ共始ヨリ申上候有ノ書紀事ハ四年前ノ冬被遊被置候御論八十餘篇是ハ一昨年冬ヨリ昨年早春へ掛リ御成置ニ候何レ追々御辨正被遊候御積リニテ有ノ通ニ相込置被遊候處當年夏六月十日始テ御吐血ノ御患出來政記ト云大業ノ出來取調被置ザレバ第一殘念ト御申聞夜某助（牧ニ三郎　昔）私共侍議中聞候御稿本御取出段々其へ、一寶被仰付其後大切ニ相成其後四五日ヲ經テ御病狀聊宛カ御快キ樣ニ被爲成候故彼是ハ議論ノ出來候被仰付候譯ニ候定日ニ一二三篇ヅツ御病床ニテ三四人掛リ寫シ上候樣ル記事ニナリ候處御原稿モ試ニ讀被候樣ニ相成申ノハ餘程御手入不被候テハ誰テモ見寫候ニハ無之樣ニ御座候處八月八日比ヘ被仰付候ハ記事ニナリテ續キモノユヘ人ニ被託候事ハ却テ不宜其方人ニ任スルユヘ其方略進ナスル心持ニテ所々ニ什目中當〔……〕可被成ハ外也ト違ヒ候樣ニナリ候モノ故卜木シテ當方子孫ノ家藏ニ殘シ置度奉〔……〕

上木候時ハ其方ノ名ハ押名ノ次ニ書出スベシト申候不滅候事人ノ樂ニ以來何事ノ打捨置ノ是ヘ掛リ候度候ト御申遣テ承知罷在候九日ヨリ創業日本史皇朝史略國史略編年小史ノ類ノ名有之掛年月事實書例ツ一々吟味済錄ニ掛候其後牧之助ニ御申遣元郎、石川（信達）ニ計功ノ賞ハルモ晩念ナランソ其方ヘモ分限御遣スト被仰テ兄子人員ヨリ撰冷泉ニハ菖助校正仕候私ハ仰ニハ一人ニテハ險人候故菖助ヘモ可御カト前日御噺私モ左様ニ相成候ハ難クハ官御座候ト御答申上候處右ノ通ニ菖助ヘ御申遣候也御役本百日役有ノ事ニ掛居三郎、（敬）三介（長政）ハ御介袖仕候得其私ノハ一向御付仕無之故此ニ枚ナリト澤山念ニ用來候方何ヨリノ紀業獻安ト被仰候事ニ候時々議論例自之役頂差御座候得其記事ノ御原稿ハ元龜元年姉川合戰ノ處ヨリ御座候テ其後ニ十年斗ノ事ハ未ダ御草稿不被済有之道々有ノ方ハ寫置リ候處先生御起草ノ思召ニテ置テ御座候處只様工合不宜ニ付私ハ被仰付其方構稿前例ニ合ヤ用スベシ左候ハハ添削致遣ハシ遣モ脱稿稿事ハ六ケ敷ト被仰人ヨリ姉川以後ハ私取掛候處御添削ノ御氣力モ無之樣ニ相成候段誠ニ殘念故前文ニ申上候通之御病中以來ノ此記ニ掛候事ハ斷中ニ生熟如菖助等モ承知罷在候有ノ譯ニ御座候此所存錄相濟シ今日私ノ稿本ノ處ハ菖助ハ見セニ遣候是ヨリ先生御叱文稿淨錄不相濟分マダ〳〵御座候故大ニ掛度候時ニ此記ハ有ノ通ニハ外史等ノ如キ先生十分ニ御點觚ヲ御把遮タリトモ御中存錄ナ今不容易間別紙ニテ張紙申上置候得共ナホ一郎中開セ定免無之位ノ紙味一御座候十分相濟居候ハ議論位也夫ニ付菖助モ私存罷中今・疎取調置度モノト申居候故明ナドト申様ノ事ハ中々急ニハ參リ不申大兄モ御熟覽之上義光杯ノ手ニモ觸度モノト存候夫故今少シ未定本ノ工合モ有之私モ外ノ事ニ除取ル候御座候間此記ハ部寫取差上候儀ハ今少シ見度本有候此下役字様ヘモ遣御申上候得共畫中ノ工合ハ菖助能々承知仕居候是モ左樣ニ申居候其内後使ニ先生政記議論ノ爲名目錄ト申様ノモノ・巻ガ譜ノ代ニ巻ガ執ノ天子ノ時ト申位ノ事備致覽度候外史字部寫シ掛モ是モ今部ニ致置度候御上（武州淺野氏）へ御獻上ノハ大瀬半八郎ニ字部取皆御座候間是モ取返シ可差上宮候ト先生御申ニ御座候政記十六巻ノ内ニ巻菖助校正御跡ハ私仕候未ノ・巻ハ記事草稿ヨリ仕試候如何可相成ヤ今日菖助ヘ遣置候三郎ヘモ御覽ノ積リニ御座候何分先生具志所係此方ニテ菖助杯遣御上木候ヤ何カ私共ハ天竺浪人ノ事進退川處不相分終始大兄御引爲御勿之様ニ可相成事ト奉存候何レ來春何モ角モ御世話御處置被遊候事ニ候ヘハ其内ニ急早々御覽之思召ナレハ他日役宇様ハ御申越被遊議論ノ處ノ寫手ヘ遣可申様可被成ヤ記事既成ハ誠ニ愉快ナル事ニ御座候其議論旨ニ思心仕候次第過談ト此議論ハ誠ニ何ニモ角ニモカヘラル、モノニハ無御座様ニ奉存候

以上にて如何にして日本政記が出て來りたるかゞ分る。序ながら玆に申して置くが、關五郎に就ては森博士などは其の何人たるやを知る可く餘程骨折り、關は苗字で五郎が名であるや、又關五郎と云ふ名であるや、而して推察すれば石川君達即ち關根峻陸其人に相違なきも、其の邊確と分明でないとて、餘程骨折つたやうだ（參照森博士著伊澤蘭軒）。又篠小竹の知人名簿に石川關五郎とあるから關五郎は名であらうと云ふ人もあつた。然し彼が他と連署名の手紙に於ても、又は山陽葬儀の次第書に於ても、何れも關五郎とありて、如何なる點から考へても關は苗字で五郎は名であつて、之は間違は無い。只關五郎が何人であるかゞ

國語であつた。伝中々闊の人にして最も是等の事に通じてゐた森田思軒の如きも『闕何人にして賴氏家中の事を綜記する殆ど此くの如くなるぞ』と云つてゐる。然し思軒は山陽の日本外史を記する條に斯く云つてゐる。

余が童時先考嘗て余に語りて曰く「余が句讀の師を闕兔翁といふ、汝の王父一齋先生とは和歌の友にして本村に在りて醫を業とせり實に山陽の兩足闕藤藤陰の伯兄たり藤陰の山陽塾に在るや山陽の外史一卷稿を脫する毎に輙ち寫取して以て之を伯兄兔翁に贈り久しきを積んで外史一部二十二卷自ら兔翁の家に具はり存せり……」

然るに思軒は却て此闕五郎其人が闕藤藤陰である事に氣付かなかつたやうだ。予は藤陰が當時山陽の塾中にあつて筆寫したる新稿を藏してゐる。其の卷頭に丸山作氏が題したる文に據れば、石川成齋は闕政孝の同母弟也とある。石川成章が即ち闕五郎にして、闕政孝が所謂思軒の兔翁である事は殊更云ふ迄もない。此にて闕五郎が姓名であり、且つ闕五郎が石川君達である證據が明白だ。兎も角も山陽は其の死際に於て最も賴もしき門人を得たのだ。

偖政記の事に就ては尙彼の夫人梨影女史の手紙にも出て居る。梨影女史の山陽病死前後に關する手紙の第一は、最初森田思軒之を『國民之友』に於て發表し、爾來予が校訂したる『賴山陽及其時代』に揭げた。之は閏十一月十日附にて小野泉藏の家內に送つたものだ。第二は山陽の友人竹田[illegible]に寓居したるものにて、之も閏十一月二十五日附にて門闕の廣江吉郎夫婦に送つたものだ。これは此頃市島謙吉氏が『隨筆賴山陽』中に採錄せられてゐる。第三は今日迄恐らくは世間に知れざるもの、十月三日附にて江戸なる賴餘一に送りたるもの、現に廣島の賴家に藏してゐる。此等を對照すれば殆ど其模樣が手に取るやうである。即ち廣江夫婦に與へたる書中には左の通り云ふである。

扨久太郎事此六月十二日よりふと大病に取あひ誠にはじめはち（血）も誠に少々にて候へども新宮にもけしからぬむづかしく申候、久太郎もかくごを致し私どもにもつねぐ〳〵申して、ゆひごんも其節より申おかれて候やうな事にて、かへても何分と申、くすりをすすめ、先々大どう次第と自分も申いられ候、六月十三日より、かねて一兩年心がけのちよじつ（著述）ども、いまださうこうまゝにて、夫を熱中にせき（闕）五郎子いられ、一人にまかし候てかかさし、又自身がなをし候てうつさし、日本せい記と申物に候、又なをし其間に詩文又だいばつ、みな〳〵はん（版）になり候やうに、さつぱりとしらべ申候、存せき（政記）も九月廿三日迄ばつ文迄出來上り候、廿三日夕七ッ前迄、五郎子かゝりうつし候、夫を又見申候て安心いたし、半時たゝぬ内ふし候申候所、私むねをさすり居候、うしろに居るは五郎かと申、もはや夫きりにて候、くれ六ッどきに候、

之にて彼の如何に病中著述の事に氣骨を折つたかゞ分る。又餘一に與へたる書中にも、

御病ほつ（發）より御はしめしつきの御ちしつ（著述）もみな〳〵五郎

打かへり一二けるから[illegible]これ迄し候[illegible]出来申候何も、左郎[illegible]に入申へしと[illegible]一ノ事承り候御かんかへの一此人にもきらに書状[illegible]とされ候。

之によつて如何に関五郎が最後に於ける山陽の爲に骨を折りたるかゞ判る。又関五郎の頼與一に與へたる書中にも政記に就て斯く云うてゐる。

一、政記跋文繕寫ト御申越是ハ後室樣ヨリノ御存命ノ上合ニテ右樣御承知ト奉存候所文中ト候通御臨終前小生ヘ浮書、繕寫御担任八十餘日前ヨリ御申付候并ノ事ナリ是ガ政記ノ最後ニツヽ候御積リニ御座候何分御最前ノ文故寫取差上候（大関増田翁ノ論ニテ[illegible]ノ論ト首尾）相應ノ思召ト承候

尚ほの政記跋文は、山陽の死する十餘日前に出來たるものにて、それを関五郎が淨書したものだ。其文何は即ち左の通り

嘗ニ樂翁公嘗ニ外史ヲ求ム。既ニ置テ手カラ筆シテ[illegible]ノ其後ニ國ス。大意ニ曰ク、事ヲ叙シテ要關ノ宜シキニ適シ、事ヲ論ジテ偏私ニ任セズ、而シテ讃先ヲ洞中スト。[illegible]ニ献シテ寄セズ、余知ル之之ヲ嘗ニ思ジ、又以テ自ラ勉ムル有リ、且後通鑑ニ十八編ノ作リ、古今ノ制度政賞ノ得失ヲ述論ス。近ゴロ又衛ガ政記ノ意ニ做ヒ、國朝政記ノ修ム。問關ヨリ起リ續近ニ至ル。其人事ノ紀シテ論ノ作ル八十餘首。所謂偏私ニ任セズ、讃先ノ洞中スル者ニ於テハ、未ダ能ク公ノ示ニ負カザルヤ否トノ問ツテ。而シテ公逝テ已ニ四年矣。寛今亦重患ノ罹ナ、嗚呼起タズ、今昔ノ[illegible]シ[illegible]ノ[illegible]シテ慨然タリ。

然し之が眞の絶筆で無く、全くの絶筆は大関増田兩翁にて之は政記の欽末に附けたるものである。即ち此跋は彼が九月三日に作り、二十三日午後に関五郎をして故らに清書せしめたのである。尚其の時の模様は彼の書簡中斯く書いてある。

山陽先生御即世之日ノ事情ハ兩三日來御症[illegible]今朝ニ至リ格別ニハ申義モ相見へ不申候得共第一喬ニ息切レガスルトウカト被仰候今日ハ小石ニモ早ク見舞候樣申遣置有之件其時迄ハ是ト格別ニ御變狀モ可不見午後ニナリ大漸之狀御自身ニモ被爲覺候ヤ今日ハ遺言何角夫人ニ記候可遣候間巻紙ヲ認候可申ト被仰候間次中ニテ當三郎午後早々職ニ掛リ候後室樣ハ又三郎付ノ教ヘ三木三樹ノ兄ト召ヘ呼ニ御遣有之處助ノ者呼ニ可遣ト先生ノ命アリ行違ニ七ツ前八ツ半頃ト申頃ク又助來父三郎付三木三郎付打揃而御歸候是ヨリ内々小生ヲ御呼寄有之即申付之候ハ政記々事ノ草稿如何ナル出來候ヤト樣ニ御尋有之譯ハ小生御答申上候ハ今朝迄ニ草稿ノ相濟シテ今朝ヨリ淨録仕居候即浄書仕候ト傍ニ寄セ置候稿本取出シ候然シ反古ノ如クニ相成候稿本淨録不仕候テハ讀兼候樣ニ有之候故強ヲ先生ノ御手ヘハ不差出側ヨリ一枚一枚トクリカヘシ御覽ニ入候先生御申ニハ其淨録相濟候ハヾ序例可致ト云樣ノ氣力ハ殆ト無之樣覺候大ハ以前ノ書例迄ニ其方承知之事ニ候ヘバ其方ノ存寄ニテ書取來ヘツブケ置ヨシ作意ゲハ政記ノ末ヘ入置度文[illegible]ノ[illegible]ト申スシテ風[illegible]命スレバ後ニテ如何樣ノ[illegible]改[illegible]其故[illegible]所[illegible]ノ[illegible]古ノ如クニシテ[illegible]候トモ申サズ[illegible]ナリト申付候之早速[illegible]浄書仕候テ夫人ヘ覽候先生眼鏡ノ御掛有之手ノ御用シ[illegible]ノ取テ一ト々御覽[illegible]中[illegible]候處ハ小生[illegible]候テ御本申上ト存ジ候故右樣[illegible]候ノ御覽先生ヨリ被申候ハコヽノ字ケ様く小生事[illegible]ニ補入仕候小生事ハ夜直御介抱申上候得共政記跋正ニ

面會候テ以來ハ晝分ハ御寢處ヘハ得と參不申水亭ニテ終日淨讀等仕居候處日々ノ例ナレバ又水亭ヘ參リ草稿淸書ニ其念可申處ナレドモ何角御工合不宜狀例ヘ做シ就本ノ場合ハ大敍亂其儘ニシテ御枕頭ヘ出掛候時ニ七ツ時過ナリ詰居候者ハ奥樣父二郎樣牧萬助小生ナリ省三郎ハ末森三助ト更代ニ參候或ハ兩人共ニ參リ居候時モ　ノ有之處右七ツ時頃ヨリ頻ニアツヒ〳〵ト御申左右ノ模樣風等ヲ取退ケ候樣御申付起タリ經タリ被成度樣子ニ御爆有之候得共格別御動シ申上候ハ却テ不宜ト大抵ニ仕置始終三人位按摩ニ掛リ居候彼是スル內小石氏相見ヘ候一診被致候處先生御申ドウモ工合ワルク御座候ト御申有之位ノ事ナリサフラン杯御用申上候此時按摩御望ノ處ハ御脊ヨリ腰ヘサスリオロスト御腹ヲジツト押居候ト有之右ハ二人ノ役ナリ連座ノ者更ル〳〵仕居候折節爲度私便所ヘ罷出其序水亭ヘ罷出候テ模散亂ノ品ヲ取收少シ早ケレドモ戸ヲシメ掛置候杯トヤリ掛候內先生御呼被成候由ニテ奥樣御呼被成參上候處脊ヨリ腰ハ私ニ可仕樣御申付腹ハ奥樣御押ヘ有之其頭ニ父二郎樣御侍座折節萬助ハ小石ト奥ノ間ヘ行相噺居候此時小石掛申候條今夕ガ保養候也ト兄玄三郎モ七ツ時ヨリ來直周旋餘リ人ノ多キハ父御嫌有之候故宜敷樣ニ仕候淫燈ヲ點ズルノ時刻ニ相成候處玄郎ハト御申奥樣被申候ニ脊ヲサスツテ被居候人玄郎殿ニ御座候御眼前ニ父二郎樣御侍座故其手ヲ御取被成候工合ニ相見父樣ヨリ手ヲ御出シ杯シテ其御意ヲ被承居候彼是致ス內私ハ後ニ居候故御顏色ニ氣ガ付不申奥樣前ヨリ御覽被成候處御眼睛上ヘツキ是ハト思召父二郎樣大音聲ニテオトツサン〳〵ト五六度御呼被遊候初ノ一度位ハ聊御小聲ニテ御返事有之樣被覺候得共其跡ハ齒ヲ御カミシメ被遊候テ頓ト仕樣無之併五六度ノ又樣ノ聲ハ御耳ニ達候事ニ相違無之ハ其度每ニ聊ウナツキ被遊候氣味ニ御座候奥樣横莊　鄕見精神聊亦遂水ヲ含テ御口ヘ吹込被遊杯折節三本三郎樣ハ鳥渡門口ヘ御出被成候ナ直ニド呼ニ罷出候處御酒ナ御國樣御伺被成萬助三郎元ヨリ宅生ノ五郎ト御申ノ時分ヨリハ殆ト御聞不申候也私ト萬助ト先生〳〵ト御呼申候事モ一七八度ヽヽ也小石ハ決モ不叶事不忍見ト被思候ヤ鳥渡此時外ヘ被參候時ニ呼ニ遣シ候シカシ小石被歸候時ハ已ニ片付キ被遊候シカシ小石被居候共致方モ無之事ニ候何分奥樣父二郎樣萬助三郎私共都合三人列座詰居候也三助ハ鳥渡小石ヲ迫掛テ呼ニ出ルニ付聊他出候得共是出不得已テ詰居候連中ナリ何分父二郎樣ノ五六度大聲ニテ御父上樣ト被仰候ヲ一々御聞有シト見エ御領ノ狀誠ニ〳〵思出シテ落涙仕候血症モ久敷相止劇症無之試ニ虛脫ヲ絶メ御易簀ニ御座候大故油斷ハ不仕候得共其日ニナリ逃カニ御大變ニ及候事ハ大ニ意外ノ方ニ御座候併迚モ六ケ敷御本復不相叶事ハ覺悟久敷事ナリシカシ蓋世ノ大先生遺憾不過之候者議モ更番夜直參候人數中方日々來直候得共折惡敷御臨終ノ時ハ間ニ合不申御臨終ノ時改テ御遺言モ頓ト無之是モ先生其死ヲ不爲覺ニハ無之ト奉存候以前度々奥樣ヘ御申有之候由御病中ニ其邊ハ小石樣ヘモ御噺被遊居候私モ兩度承候

又通議に就ては斯く記してある。

一、九月十九日ニ通議ハ補人被遊候內近ト申　爲ノ淨錄被仰付是モ九月初旬ノ御起草ナリ其御草稿讀被候處ナト十九日ニ別ニ御ニ有合ノ反古ヘ御書御座候此後ハ餘リ委ヲ御取ノ事モ無之故ニ聊ノ反古ノ裏ニテ文一篇ノ中ノ聊ナル事ニ候ヘ共御絶筆ニ相成候御臨終ノ時分如何シテヤ殘リ居候御絶筆ノ如クニ御座候モノ故別ニ後室樣ヘ申上取置被遊候事此度大兄ヘ差上被置候也御濟手可被遊候右內近ノ論十九日所淨錄候是日姫路河合小太郎殿ヘ先生ヨリ被遣候テ同人東行致候件之介ヘ御相渡候筈是ハ昨年河合ヘ通議被贈候故其中ヘ補人被致可申樣ニトテ右ニ小太郎殿ノ東行便先生被聞及候申上有之十九日ニ小太郎殿伏見ヲ通

[illegible]ニ政記ノ論ヨリ後ニ出来ト可申キノカ

山陽は何に感じて九月初旬病を力めて起草したる内廷論を、死する五日前に謄録せしめ且つ自ら修補したる乎。それは前文の所記にて略ぼ推察が出来る。關五郎の言の如く、これが却て真の絶筆であつた。又猪飼敬所翁が病氣見舞に來た時に南北朝の論に及び、其爲に特に政記中に一編を加へた事は江木鰐水の草したる山陽行狀中にも書いてある。曰く

其病メル十猪飼敬所翁來リ訪フ。談南北正統ノ事ニ及ブ。議大ニ合ハズ。僕（鰐水）時ニ側ニ侍ス。翁既ニ去ル。先生曰ク何モ北朝ヲ以テ正統ト爲ス、豈猪飼田翁ノ說ヲ以テ亂臣賊子ト爲ス乎。方ニ之ヲ正フノ時日暮リ肝剣ル。其心情激烈。病メリト雖モ堪ヘザル也。遂ニ史ニ正統論ヲ著シ、之ヲ政記中勿論ノ後ニ置ク。

之は實に九月十一日の夜脫稿し翌日書いたものである。其原稿が關藏本（關五郎）の手許に保存されてゐた。其の原稿を見るに實に起稿者決。如何に彼が病を力めて書いたかゞ分る。而して其跋に曰く、

在南北朝論ハ甚ダ政記ト統合ニノ餘ニアリ。既ニ一論アリ。近頃客アリ、此說ノ誤ス。予之ノ相論ゼント欲ス。而シテ病アリ瞬ス可カラズ。遂ニ更ニ一論ノ作ラント欲ス。九月十二日ノ夜。睡ル能ハズ。枕頭ニ到テ腹稿ス。明日稿ヲ修スル此ノ如シ。病因縁ニヨリ精神ノ靈ヲ政ニ比ル。制止スル能ハザル也。

九月十七日彼の親友小竹が淀川を溯つて彼に永訣に來た時にも、此論を示して何云ふ志があつた。「頼彩女史の書簡には十四日後藤關三人上京、三日程滯在とある」左に掲ぐる小竹の跋文にて明白だ。

德本ノ五律ハ去秋九月十七日作ル所、易簀ヲ去ル前ニ六七日。蓋絶筆ニ係ル矣。（註、其詩下ノ如シ。京闕存友者　力疾喫相迎　俗押出新書　病來成課程　丈夫知己在　生死向前行　有酒倶坐住　体嫌不其飯）子成大ニ余ガ執ヲ問フヲ喜ビ、且南北正論ヲ出シ、特ジテ曰ク、猪飼翁ハ爲時ノ巨擘、而シテ此說ヲ出ス細事ニ非ザル也。僕病メリト雖モ、辯ゼザル可ラズ哉。是稿本也。予成吟曲自ラ犯ザルヲ知リ、云夜燈ヲ照リ其政記十餘巻ヲ繙リ成ス。未醫神ノ沮メドモ聽カズ。君遅侍リ卒ズ。陶ナ饋レバ隨テ冠ス。予成寡ンデ曰ク、此子作業ヲ助ケ成ス者矣。因ノ此帖ヲ授クト。稿借遂ニ在レバ乃チ遺ヲ辨ノルノ衣鉢。五律ハ余ガ爲メニ作ルト雖モ、而モ余當フ能ハザル也。

とあつてゐる。是にて如何に彼が正統論の爲に最後の力を致したかゞ判る。彼の死に先立つて坤田實山は美濃から來て病を問うた。彦根に寓したる丹巖も亦將に江戸に赴くからして生別死別を兼て彼を訪うた。第一回が九月九日で、次回が九月十七日の夜であつた。山陽は死に面して何等辟易する處は無かつた。適に彼は丈夫兒の如くにして死に向つた。一日生存すれば生存する丈けの仕事はした。又其の仕事を爲し終らん迄は、死せざる積りで、彼の仕事と彼の死とは互にマラソン競走をした如き

できあがつた。而して彼の最後の詩書の出來上ると同時に逝つた。彼の病氣の苦痛は決して尋常ではなかつた。梨影夫人の許に與へたる書中の一節に曰く

九月三日よりそろ／＼と御よわり一日／＼と御つかれ出申候へともさしてかはりはなく九月六日御そなへ物も少しく御つとめ申上候へども御手つたへ遊し候又十日ころよりたつこう（脫肛）とか出御こらへお出遊し候へ共御痛り誠に御なんぎ遊し鹽をいりて御あたゝめ遊し又鹽をやきかえ／＼して私事つゝみ上候十日ごろより御丸にて兩便とも取十四日ニ大阪篠崎後藤廣瀨三人見まいニ上京大いに御悦遊し候三日ほと居て出足十六日より御丸ニ御出遊ばし候事もいきがきれしやう仰られ候夫よりむつきにて取申候小水はひようたんニて取申候十六日ごろより夜分御やすみ遊し候へバころ／＼おたんのやうな御やうす有りおそばにありし者誠に氣づかいニ存御せきか出ろくに御やすみ遊し候事出來がたくらつ／＼遊し候共御たんが二夜ほどでおさまり其の後は御やすみ遊し候へば何からつ／＼と仰られ候やうに相見え誠に御つゝなそうに相見え候事と御目のあきて御たづね申上候へば思つた樣ニなく人ニきろんをいたし居と仰せられ候執中ニ三人いられ關五郎子菅三郎子ひろしまさい所末森三介と申者いづれも／＼先生おもひにて誠にしんせつな人にてよく／＼かいほう致しくれ牧兒長とも是らもたへず御見まいに參られて其方より四つころ迄九つころより朝七つ前迄執中一人又かよひの内なじみの人一人參私夜分しはしハお隔か居りおもうやうなりがたく九つころより二人にかわりてもらい朝七つ前より私參二人の人をやすませ候御身ハおつかれ遊はされ候へとも御せいしんハ少しもはじめよりかはり不申御しよくじもすこしつゝニ候へとも三度づつおまゝ白かゆめしあがりおじにいつもかはり不申と仰せられ候誠にたしかニ存候御介抱申上さりながらたん／＼と御つかれも勝小石はしめ牧兒玉執中はそ／＼と相たん有候へとも御きふんにかわりなく三度の御あがり物みな／＼御このみ遊ばされ何一つ御せとはり致し手をつくしとうぞ／＼御口にかない候やらと存候て致上候御くすりも一せつハ三ふくづつめしあがり候へとも九月五日ころよりむねが不かつきがあり二ふくつゝを四度にめしあがり御丸藥やら水ぐすりよと御あがり種々くすりの數多くて御こまり遊はされ候十六日よりハもはや御こけ遊し候へば其まゝにて御夜具のまゝでひきまわしたかまくらがすざり候ても三人よりてかきすり上候御めし物たくれ私がなをし候間もはや其まゝにして置くれいきがきれくるしくなると仰せられ候十三四日ころハまた哥つくえにてとき／＼御かゝり何か御かんがへ遊し候もせきつよく出申候廿二日ころよりかハり／＼ニさすりつめ申候廿日ころ御氣づかひ申上候ゆへ御きぶんはいかゞと御うかゞひ申上候へばいつもかはりなく小石ともたいそう御むつかしく申誠に御氣つかい申上候もしもの事あらせられ候へはなんと致し候事と申上候へば今までの通り何も／＼かわりなく此家此方の家ゆへ地めんをかしてくれるまでハ此處ニすまいをいたし候やら度々仰せられ候子どもらの所はいかがとおたづね申上候へば子どもやはり牧兒長へはん料出してあずけ置内ニ置候へばやくにたゝずニなると仰せられ候金子のひやいにてそこそこにいけてもしもいけねば二日の内をこき取にして子どものみついたらをする迄くらし候やう仰せられ候子ともの川施でなくばその内取つきこじき（乞食）もしよまいと仰せられ候御まゝ様も御存じの大切の御かけ物御すゝり誠に／＼御むつかしき方の内いろ／＼と遊ばされ候て御手ニ入候品々たん／＼と有り御大切の物は外へあずけ候事と存し

此方ニくらもなくと御たづね申上候へは是らすこしも外へあづけ候事ニハおよび不申しようもあらまなく〳〵私の大切ニも助人にあづけ候は人ニとられ候と仰られ候日々ニ後有り余のかすをまかせ候やう仰られ候早々く作書御らん人ニ候内ニ置候はよじん(用心)あしく是は小石へあずけ候やら仰られ候又是ほどはかやらに致し候やらにと仰られ候私ニ二人の子どもをそだてこけ(後家)をたて何の仰られ候事事につくしかたく誠ニけん出來候事たのしみ此方の火事のめい路とならへてたてもらい候やうにいたし候やらと仰られ候其所が誠に〳〵大事の事此方迄人がわらひ候とくれ〳〵も仰られ候此上は其方心のこと仰られ候誠に〳〵有がたく事大ゆへ外へ物一つあずけ不申是迄其方にまかし置処から小石へあすけあ一かい申事もかはいそうな事とおもらて仰られ候誠に〳〵有かたくもつたへなく事にて候とうも〳〵申上やらもなく其の事たしかに承り御らけ申上候其夕貝におかくれ遊し候

彼は五十三歳だ。彼が生を欲するの念は尚旺盛である。即ち生死の合戰、死神と生神との格鬪を、此の瘦せ衰へたる彼の一身に見るは、彼の附近の者には苦かつたに相違ない。彼は實に善く戰つた。彼が死に垂んとして其の寡婦孤兒を心配した事は如上の文字にて想ひ遣らるゝ。彼が死するの少し以前に夫人に向つて、「有金の數をきかせ候やう被仰候」とある通り、彼は寡婦孤兒の生活さへも氣に懸つたのであらう。然し之を以て彼が死際の未練であつた、と云ふ可きではない。爲す可き事を爲し盡る可き事を盡り、彼としては最厄中に於ける最善を竭くした者と云はねばならぬ。彼に多くの敵意を抱かさる者も、彼が六月十二日喀血以來九月二十三日易簀迄の擧動を見れば、何人も彼に對して脱帽するを禁じ能はぬ。彼の最後は實に其の學ぶ所云ふ所に負かなかつた。彼は實に堂々たる大人英傑の如くして逝いた。

偖て日本政記は彼の晩年の作にて、謂はゞ日本外史と有ゆる點に於て對照す可き者である。日本外史は山陽の春から夏にかけての著作で、日本政記は秋から冬にかけての著作だ。或は之をミルトンの失樂園や復樂園と比較する事も出來やう。日本外史は年代からすれば、廿餘年の時間を要してゐる。山陽が自ら語れる處に據つて見るも、文化甲子より文政丁亥戊子に至る凡そ二十三年と云つてゐる、文化甲子は元年で彼が二十五歳、丁亥戊子は彼の四十八四十九の時である。而して山陽の外史校正の事を全く收めた時が再び政記の事を初めた時と云つても差支あるまい。然し其の時間は頗る短かつた。恐らくは二年乃至三年半位のものであつたらう。而も其の終りは殆ど未定稿であつて、論文の間に挾める記事の如きは全く石川君達が書いたるものだ。然し彼が胸中には、既に一部の日本歴史あつたは、外史の後、政記の前に日本樂府が出來てゐるを以て知り得らるゝ。之は文政十一年の冬に成りたるものにて、日本の開闢以來太閤の明の封冊を裂いたる所迄日本歴史を六十六の題目に綴つてゐる。

然ら山陽の多くの著述で山陽の生前に出版せられたものは唯此日本樂府のみであらう。卷末には文政十三年庚寅の冬月發行と記してある。發行者は江戸大阪京都三都の書店である。文政十三年は即ち天保元年で、十二月の十日に改元があつた。此の如く山陽には兎も角も其胸中に一部の日本歴史が出來てゐた。それは二十餘年間日本外史を作り且校正する間に自然平安朝から奈良朝に溯り、又それより近江朝廷推古時代に溯つて、建國當初に及んだのは不思議はない。日本歴史を詩化したのが日本樂府であり、それを議論化したのが日本政記である。石川君達は政記と通議が山陽必傳の傑作であると云うてゐるが、それは兎も角も此兩書は互に精神脈絡が通つてゐて、日本政記は通議の延長と云ふ可く、通議は日本政記の結晶とも云ひ得られない事は無い。唯通議は專ら時事を論じたるもので、政記は史論であるが、然も其史論は概ね時事問題を對象として、時務に適用せらる可き論である事は言を俟たぬ。政記は右の次第であれば議論專一であつて、日本外史の如き無前の詩と云ふ可きものとは全く反してゐる。切言すれば、外史には詩ありて論少なく、政記には論ありて詩無しと云ふも過言ではあるまい。偖て政記の議論は外史の論贊同様、必ずしも悉く山陽の獨創で無い事は論を俟たぬ。日本政記の叙事は本朝通鑑即ち山陽が所謂國史實錄と、大日本史により、其の議論は大日本史論贊、讀史餘論等に出づるもの少からざるは言を俟たない。山陽は、大日本史贊藪を金科玉條として居る。世間では之を山陽が抄錄したと考へてゐる。山陽自らも亦『余ガ力購ヒ得ル能ハズ、故ニ姑ク其贊ヲ抄ス。贊ハ是レ書中ノ白眉、全體ヲ概ス可キ也』と云つてゐる。即ち大日本史を購ふ力が無いから其の贊だけを拔いて置くと云つてゐる。然し此贊を拔萃したのは山陽ではない。贊藪と云ふ名さへも山陽が付けたものではない。贊を云へば、此大日本史贊藪なるものは、延享三年田希文なる人が抄出したるものにて、其時に之を贊藪と名付けたものである。田希文とは、仙臺藩の儒者田邊希文だ。山陽はそれを謄寫したるものにて、此贊藪なるものは、山陽が作らなかつたのみで無く、延享三年と云へば山陽の生るゝ二十七年前に出で來りたるものだ。如何に山陽が此贊藪を大切にしたかは、彼の書翰に屢々之に説着してゐるを見ても判る。例へば小竹に與へたる書中に

贊藪急に御返璧之事兼而致候只今借寫手急に寓居中候間少寛假之

とある。

世間では山陽の信樹者は新井白石のみと思つて居るが、其の實は白石に負ふ所よりも水戸義公に負ふ所が多大である。歴史上の議論の要點に就ては白石に負ふ所もあるが、山陽の歴史

の者に對する心持。歴史其の者に對する見解、歴史其の者に對するに情緒、殆ど悉く水戸流に養成せられたと云うても差支あるまい。殊に日本政記を見れば、彼が大日本史に負ふ處の少からざる事は能く分つてゐる。白石は單に歴史上の或る事柄に就ての判斷を山陽に授けてゐる。而も大日本史は山陽に向つて日本歴史の總觀を授けてゐる。山陽が政記及び外史に於ける意見議論、及び情緒好惡は、要するに水戸流史學の範圍を出でなかつたと云ふも酷評ではあるまい。固より大日本史の論贊は義公修撰の筆を以て極めて質實に、極めて簡潔に書いてある。史の要締は生花造花御寄附御斷りと云ふ事であつた。即ち議論も唯筋道だけを書いて別に張膽明目してゐない。然し一を聞いて十を知るは山陽の山陽たる所以だ。彼の頭は打てば響くといふ敏感を持て居る。されば簡敏に書き表はしたる一言半句は忽ち山陽の頭を通して有々數百言の文字となるは決して不思議ではない。予は決して田口氏が山陽を彈糺して、白石の議論を無斷にて盜みたると云ふ如く、水戸流の議論を盜みたるものとは云はぬ。然し彼が負ふ所の多大なるは自ら掩ふ可からざるものがある。今試みに其の一二の例を擧げて見るであらう。今日では聖德太子は日本に於ける最も人望ある方であり、日本歴史上の大立物として崇拜せられて居る。然し大日本史は聖德太子に對しては頗る遺憾の情を洩して居る。

> 馬子不軌ヲ謀ル。而シテ太子知ザル爲ナスル者ハ、唯朝廷ニ在テ而シテ討ツ能ハザレバナリ。責ムルニ春秋ノ世子止ノ義ヲ以テスレバ、則チ太子興ニ大事ヲ行ノト謂フト雖モ、亦辭スル能ハザル也。太子漠然顧ル所無クシテ曰ク、此レ過去ノ報ヒ也ト。佛氏因果ノ說ヲ立ツ。其要ハ人ヲシテ惡ヲ斷チ善ヲ修セシムルナリ。而シテ流弊此ノ如キニ至ル。今子其父ヲ弑シ臣其君ヲ弑ス。而シテ過去ノ報ニ諉セバ、則チ天下得テ而シテ治ム可ケム哉。

即ち聖德太子は馬子と同罪と云ふも致方ないと云ふ筆法である。然るに山陽は、

> 夫レ人臣弑逆ヲ行フ。開闢以來無キ所、天地ノ大變ト謂ツ可シ矣。而メ之ヲ過去ノ報ニ委ム。三綱淪ミ而シテ九法斁ル、ニ繼シ。廐戸智慧人ニ絕ス。始ク太子ト爲リ以テ人望ヲ屬ス。其志異日位ニ即キ、天下ヲ新セントシテ、馬子ノ勢ニ倚ルニ在リ。

と云うてゐる。

聖武天皇に關しては、大日本史は

> 帝崇重佛徒、土木妄リニ作シ、下ヲ恤ムノ誠、佛ニ事フルノ心ニ勝ツコト能ハズ。天下ノ財力ヲ殫シ、以テ方宮佛像ヲ鑄、國分二寺ヲ七道諸國ニ建テ、億兆ノ民ヲ率キテ、以テ浮屠ノ法ニ歸セシム、三善清行ノ所謂天下ノ費十分ニシテ五ナル者、切ニ時弊ニ中レリ……

山陽は啻に聖武帝の民の膏血を絞つて佛教に奉仕したるを非難するのみならず、更に唐の高宗に比して居る。又後醍醐帝の中興の事に關しても大日本史は曰く

[illegible]遷セラレテ貢賦盡レ、近臣去リテ紀綱廢ル。忠臣義士有リト雖モ、草莽ノ野ニ淪レテ、能ク之ヲ救フコト莫キノミ。特ニ皆ム、其ノ駕馭ノ才ハ、以テ使役ヲ驅使スルニ足ルモ、規畫ノ略ハ忠佞ヲ甄別スルコト能ハズ。延喜ノ治ニ復セント欲スレドモ、其レ得ベケン哉。蓋シ創業ハ既ニ難クシテ、守文ハ尤モ難シ。古ヨリ皆然リ。要努以テ國ヲ興ス可ク、逸豫以テ身ヲ亡ス可シ。世帝未ダ之ヲ思ハザリシカ。

山陽は曰く

後ニ國ニ歸ルヲ得レバ、即チ晏然姑息シ、宮室ヲ營ムヲ以テ急ト爲シ、妃嬪ヲ悦バシムルヲ以テ務ト爲ス。記錄所有リト雖モ、蓋シ數バ親臨セズ。而シテ日内ニ居リ、内勅ノ令スル所ト、外廷ノ指揮ト、毎ニ與ニ牴牾ス。武人ノ邑ハ往々内官ノ私給ト爲ル。試ニ亂ヲ思フ、固リ其レ宜ベ也。

斯る例は他に幾許もある。以上を見て直ちに大日本史を踏襲したと云ふは、餘りに山陽を見縊りたる言葉だが、然も大日本史によつて彼が大體の考案を得たとは間違ひない。要するに山陽の日本歴史に於ける精神の全注する所は南朝正統論だ。而して之は全く水戸流の史學が明目張膽して天下に唱道したるもので、山陽も亦其の風を承いて興つた者と云はなければならぬ。彼が死に垂んとして尚ほ正統論の爲に更に別に一論を書加へたるを見れば、如何に彼の根本思想が玆に在るかゞ判る。然し日本政記は必ずしも悉く大日本史や讀史餘論の焼直しではない。ヒントは他人から得たとするも、これを活用するの點に於ては、山陽には[illegible]エマーソンは、「善き文句の作者に次ぐは、その文句の引用者である」と云うてゐる。然も山陽は決して單純なる模倣者ではなかつた。彼は自から其の手腕を發揮してゐる。殊に日本政記を讀んで最も感ずるのは、彼が道を論じた一點である。之れは彼が漢學者と云はず、國學者と云はず、凡有ゆる門戸の見に超越したるものにて、山陽の山陽たる所以は全く此處に在ると云はねばならぬ。彼は此點からすれば、固より外國崇拜者でもなく、さりとて亦排外論者でも無く、實に國民主義から世界主義迄一貫してゐるのである。少しく長きに失するやうだけれども、此文丈けは掲げて置く。

道ハ一ノミ。道ノ天下ニ在ルヤ、猶日月ノゴトシ。日月ハ天下ノ日月也。一國ノ私用スル所ニ非ズ。道モ亦然リ。父子君臣夫婦、國トシテコレ無キハナシ。而シテ慈孝忠義別アリテ雜ラズ。皆自然ニ存シテ人作ニ待ツコト非ル也。我邦列聖、民ヲ保ツコト子ノ如ク、唐虞禹湯ニ讓ラズ。其風俗君ヲ尊ビ上ヲ親ミ、相愛シ相養フ。又唐虞三代ノ民ニ過グルアリ。則チ經籍無シト雖モ、其道ハ固リ其ニ在リ。特ニ未ダ名ケテ之ヲ教ヘ、仁ト曰ヒ義ト曰フモノアラザルノミ。譬ヘバ人家ノ若シ、同ジク是レ一里也。而シテ之ニ居ル舊アリ新アリ。某巷陌某井溝竹名目アリ。記スルニ帳籍ヲ以テス。新者必ズ舊者ニ問ヒテ之ヲ知ル。舊者曰ク是舊巷陌井溝ナリト。可ナランヤ。今天下ノ仁義也。儒者指シテ之ヲ私シテ曰ク、是漢ノ道也ト。國學者ト稱スル者アリ。斥ケテ之ヲ

外ニシテ曰ク、是我ノ道ニ非ル也ト、皆非也。道豈彼此アランヤ。之ノ叙スルニ文ノ以テスルコト、彼較ヤ我ヨリ善シ。彼來リテ之ノ貸シ、我取リテ之ノ用ユ。儒術經論ノ工ト何ゾ異ナランヤ。故ニ經論ハ經綸濟治也、而シテ仁義ハ其趾也、器也、他米用器也、他米用縦置奈ヲ以テ、彼ヨリ來ルト爲ス者ハ、儒者ノ見也。經綸濟治ノ験セント欲スル者ハ國學者ノ説也。故ニ曰ク皆非也。夫レ道ハ一ナリ、明ナ學モ亦一也。寧ロ所謂國ト云フモノアランヤ。隣ナル品、且人レ先ニ已ニ取リテ之ノ用ノ。蓋シテ合典ト爲シタリ。而シテ敢テ之ヲ非議ス。是先王ノ典ヲ議スル者、於ニシテ孫ノ類ル、ノミ。

之を見れば何となく、「知識を世界に求め大いに皇基を振起す可し」てふ高然の御誓文の一箇條を。彼が預感して宣言したものゝやうに思はれる。固より此の如き思想は山陽が獨り有するものでもなく、又山陽に始まつたものでもない。然し乍ら彼が日本政記の中に張膽明目して之を論じてゐる事を見れば、實に彼が此一點に於ては、我が大和民族の今古を一貫する日本固有の精神を、最も完全に代表したるものと云ふも過言であるまい。

尚彼が前人と意見を異にしたる點は、神功皇后に關したる點である。仲哀天皇の崩御に就ては種々の説があり、大日本史の如きも、神功皇后に就ては多少の異議を挾んで居る。新井白石の如きも、仲哀天皇の崩御に就ては、「我帝皇に於て、ただ疑を免かざる也」と云うてゐる。然るに山陽は、之に就て一點の疑なきものとし、極めて何等疑ふ可き理由の無きことを述べてゐる。

予は何れにも相當の理由があると思ふが、兎に角山陽は山陽だけの意見を提供してゐる。又後醍醐天皇が大塔宮を足利直義に托し給ふて、宮は直義の爲に殺され給ひたる事を、大日本史では托する所の者を過りたと云つてゐるが、山陽は更に一歩進んで、後醍醐天皇は護良親王の威名を忌み、之を殺さんと欲するの心あつて、故に尊氏の爲に乘ぜられたものである。即ち人を過りたるでなく、故意に殺さしむ可くして之を直義に托したのであると云うてゐる。是等は少しく議論が穿ち過ぎてゐるやうだが、又一説として見られない事も無い。又楠正成の足利氏に降りたるを辯護したる如きは、強いて楠氏の爲に、其の一族から足利氏に降參するが如き者を出すなからんと欲して、殊更に此論を爲したるもので、謂はゞ山陽は楠氏の御用記者と云ふの外はあるまい乎。然も其の苦心の跡は同情す可きものがある。尚彼が最後の論文豐臣氏増田祖論の如きは、彼は之を重大なる問題として特に加へたものであるが、即ち此論と南朝正統論と通鑑の內廷論との二者は、彼が死に垂んとする際の形見と云ふ可きものである。而も此増田祖論は白石の論を祖述したるものに過ぎない。白石の「讀史餘論」には斯く記してある。

この人軍法に因て一錢切といふ事を始めらる。たとへ一錢を盜めるにても死刑にあつ。而軍既に多くなりしかば、軍卒の就をば道に切限頭は

[illegible]におく。[illegible]なども[illegible]に其に一つな
し[illegible]
ば國に大臣の大官にたえず、[illegible]殺を[illegible]つべきの時に及
びても封刑の[illegible]き、議せらるべき事にて。

之にて見れば、一錢切りと云ふ事は白石は秀吉に屬せしめてゐたのを、山陽は更らに之を信長に移し、而して秀吉をば専ら田租の事に就き論じた。然し山陽が之を特に政記の末尾に掲げたのは、當時の時勢に就て所謂重税論を擊破する爲であつたらう。即ち古を論ずるは今を議する爲であつたらう。予が『日本政記』を以て『通議』の延長とするは此の故である。『日本政記』は文章としては前に述べたる如く、詩趣に乏しく、又歴史論としても聊か『東萊博議』の如く、往々議論の爲の議論で、且つ餘りに一本調子であると思はるゝ點も無いではない。然も此の如く日本歴史を、初めより近世に至る迄議論もて一貫したるものは無い。例へば山鹿素行の『中朝事實』の如きは神代紀を論じたものであり、栗山潜鋒の『保建大記』の如き、三宅觀瀾の『中興鑑言』の如き、若くは中井履軒の『通語』の如き、何れも或る時代に過ぎず。新井白石の『讀史餘論』の如きも『本朝天下の大勢九變して武家の代となり武家の代また五變して徳川氏と成り』たりとて、寧ろ文徳天皇より起してゐる。然るに山陽の『政記』は兎も角も神武紀元より豐臣氏の末に及んでゐる。此點に於て寔に簡にして要

お[illegible]ゐる。又[illegible]日本[illegible]する[illegible]に、むしに於ける[illegible]史[illegible]することゝ[illegible]。[illegible]大學中庸より借覧したる事に、中[illegible]の[illegible]する所に據つて[illegible]であり、又彼が趙甌北の『廿二史箚記』を讀まんとして、羽倉簡堂より附與せられたるは、彼の自ら記する所だ。彼が常に支那の史論を讀み、支那の史實を我と對照したるは、又『日本政記』の一の特色である。此書が如何なる程度に於て天下を益したる乎は予の深く知る所ではない。但此書は外史通議と共に山陽の死後六年、即ち天保九年には既に活版に行はれてゐる。而して予は曾て故芳川越山伯が故伊藤博文公から贈られた古活字本の『政記』を見た。今此書は帝國圖書館に在りと云ふ事であるが、伊藤公が此の書に跋せられたる文は左の如くである。

山陽賴子成著ス所ノ日本政記若干卷ハ、之ヲ讀メバ以テ祖宗開闢來二千有餘年事ヲ盡ルニ足ル矣。其間世ノ變遷汙隆今日ニ至ル者ハ又々以テ觀ル可シ矣。然リ而シテ王朝ノ衰替武臣ノ僭竊、又今日ヨリ甚シキ者無シ。此書ヲ讀シテ勤王ノ志ヲ起サザレバ、億萬年ノ古ノ事ヲ知ルト雖、何ノ益カ之レ有ラン。是ニ於テカ叙ス。北本洋[illegible]

之に由て觀れば少くとも此政記が、伊藤公をして勤王の志を振起せしめたる一であることが判る。一人の伊藤公を振起せしめても、尙ほ此書を著したるだけの目的は達したと云ふ可きである。況んや伊藤公一人に止らざるに於ておや。

第二十一　山陽及び其の交友

是から山陽其の人、及び其の周邊の事に就き少しく語るであらう。山陽は自分の事を迂拙男子と云つて居るが、之は決して其の儘受取り得可き言ではない。成程一己の策略を構へずして人の歡心を迎ふと云ふ意味から云つたのであらうが、山陽は決して身を處するに於て迂拙ではなかつた。寧ろ巧妙と云ふも差支なかつた。併し山陽が世渡り上手であるから、必ずしも單に世渡りを目的としたと云ふではない。唯世を渡るは彼の目的ではなかつた。彼には當初から生活の意義があり、目的があり、それを遂行するが爲に世を渡つたのである。これは世の所謂世渡り上手と云ふ隨波逐浪者流とは同日の談でない。凡そ世の所謂文士には、往々意志薄弱の者が多くある。時として意志薄弱は文士の通病であるとも見受けらるる。然るに山陽は其の一生を通じて概觀すれば、決して薄志弱行の文士ではなかつた。彼には徹上徹下一貫したる志望あり、又其の志望を百折不撓貫徹するの意志があつた。固より彼も人間であり、殊に中年時代迄は隨分俗氷の所謂冶遊に耽つた事があり、又死に到る迄も飲酒に耽り、其の爲に命を縮したとも云はるる。早歳の時期では酒が禍を爲したと云ひ、小竹の時期では酒色が患を爲したと云ふ。何れにしても、酒と色とは山陽の大敵であつたに相違はない。併しそれにも拘らず、彼は當初立てた志を、如何なる障碍も排除しても之を達せん事を勉め、且つ之を達し得た。彼は本來氣儘者であり、又自ら好む所の多かつた故に、強いて其の氣儘を矯め直さうともしなかつた。詰り彼は大膽兒として・世を始終したとも云ひ得らるる。併し單に彼が大膽兒であつたならば、迚も彼程の成功はしなかつた。彼は與論を尊重すると　即ち與論者を相手に、むしろしく屈服した風をすると　が出來なかつた。自ら高慢者となることが出來なかつた。謂はゞ本來の正直者であつた。他人を物の數とも思はぬ傲慢の氣質、及び傍若無人の態度は、時に誤解を招き・敵を招き、彼の一生に取つては多大の損をした。併し彼はそれのみではなかつた。自らお山の大將を以て欣んで居たが、これのみでは滿足しなかつた。彼は世を渡るの方針として、堅實なる友人の必要を認め、有力なる後援者の必要を認め、之を得ん事を努め、既に之を得れば、之を失はざらん事を努めた。次には如何なる才能ある者も、如何なる技藝ある者も、世間が之を認めねば施すに由なきを知り、從つて人の生涯には宣傳が最も大切であるを認め、之が爲に多大の力を竭くした。山陽が生前に於て彼が如き名を成し、彼が如き地位を得たのは、彼の力でもあり、又彼が春水の子である、學者門閥の出であるが爲とは云へ、半以

上は其の後援者を與へ[illegible]人とに因つて而して彼の[illegible]の力と云はねばならぬ。而して彼は無意識的に斯る因果を受けたのでなく、當初から意識的に之を努めたのだ。彼は決して出鱈目に生活したのではない。彼は豫め生活の方針を定め、成る可くそれに遵據せん事を努めた。彼の學問上の後援者であるのみならず、其の一身を處する上にも少からざる干係を有つて居る者は菅茶山だ。茶山は表向きは何等の欲望もなく、唯詩を能くする田舎漢のやうであつたが、彼は却々食へぬ親爺であつた。其の洒々落々たる肚の裏には、何處やら手を觸れば刺す如き鱗甲があつた。山陽が如何に此親爺の歡心を得ん事を努めたかは、單に彼が恩惠ある師である許りでなく、彼に惡宣傳をされては迚も立場がなかつたからであらう。篠崎小竹とは互に利益を交換する一種の合名會社を作つて居つた。山陽は小竹を褒め、小竹は山陽を褒め、例へば山陽が序を作れば小竹に跋を書かせると云ふ有樣で、學問上の事は勿論、其の世渡の上に於ても、互の相褒めにて潤筆料なども增加し、若くは釣上げた事は疑を容れぬ。彼は又小石元瑞、浦上春琴などとも親しかつた。之も互に利益の交換であつた事は疑を容れぬ。彼は亦肥前の古賀穀堂、筑前の龜井元鳳、江戸の市河米庵などとも相當に交つた。又京都東本願寺の學頭である雲華上人とも交つた。寧ろ晚年ではあるが、大阪に於ける大鹽平八郎、京都に於ける[illegible]とも交つた。[illegible]記の[illegible]學者であり、之を[illegible]であつたから、彼は自ら一歩を彼に讓つて、却つて猜疑の虛榮心を表に利用した。大鹽に至つては、學問上固より山陽が敬服す可き程の者ではなかつたが、彼は當代に於ける有名なる大阪の町與力、後に其の隱居であつたが爲に交つた。京都に於ける平塚飄齋（茂十郎）の如きも、亦彼が日本の國史に通曉したるが爲でもあらう。山陽が大鹽に交つたのも、或は其藏書借用の爲であつたかも知れぬ。（それ許りでなかつたにしても）。又彼は生活方面に於ても適當なる後援者を得た。尾道の橋本元吉、備中長尾に於ける小野泉藏、同本太郎の如き、又馬關に於ける廣江三郎の如き、斯る類は少くなかつた。又劍菱泉川等の諸造酒家の如きも、單に酒を吞む爲め許りでなく、生活上にも多少の便宜を得たであらう。東本願寺などとの交涉のあつた事は、彼が「涉成園記」を見ても判る。日野家と交際のあつた事は、彼が日野資愛に與へた書を見ても判る。有栖川家などにも關係あつた事は、彼の書翰が之を證して居る。有栖川家の織仁親王の息女にして、毛利齊房即ち端恭公に歸嫁したる貞操院の如きは、山陽の手本を習ふてゐた。彼の交際は甚だ廣いとは云はぬが、併し自ら欲しき所にそれぐ手掛りを着けて、生活の保障と名譽の保障とを兩ながら得ん事を努めた。又

淡路の宍戸河合の如き、山根の大身木俣及び小野田の如き、何れも彼と關係を有つて居た。殊に河合などは頗る彼を優遇した。彼は又長州とも關係がある。彼の門下に遊んだ山根子俶の如きあり。又長州侯齊熙即ち清澄公の依賴によつて「兩海関記」を作つてゐる。彼が文人古賀穀堂の手によつて鍋島侯の爲に書を依頼せられたる當然侑に、「寄向侯門一喚畫師」の絶句を大書して、之を返却したなどと云ふ事を見て、彼が一切大名とは關係なかつたと思ふは大なる間違である。「此膝不屈於諸侯、聊爲故君之德二」と云つたのは、唯封册的にお出入りとならなかつたと云ふ丈けの事で、荀くも其の道を以てすれは、大名の爲にしも、金持の爲にても、隨分彼は字を書き、書を書き、文を作つたのである。彼は自ら書を賣り、文を賣り、畫を賣ると云ふてゐた。此の如く多くの交際の中にて、彼が心から尊敬したる者は誰であつた乎。それは何とも明言は出來ないが、少くとも先輩に於ては白石と徂徠に敬服してゐたやうだ。柴栗山にも多少敬服してゐたであらうと云ふ事は、彼が詩にて測定せらるる。彼は後に菅茶山に與へたる書中に於て、東都遊學の際、栗山の俗眄にも係らず、聊か悃つたかつたから、其の門に屢は行かなかつたことを悔いてゐる。彼が書に於て一般も感服したのは、恐くは竹田であらうが、之は寧ろ相撲れとも云ふ可きで、竹田の方でも山陽には餘程（其の人物と學識とに、敬服して居たやうである。詩に於ては五山天民などは、腹の中では殆んど相手としなかつたらうが、心から尊敬を以て居たのは、先輩に於て茶山、而して若干の注意を拂ふたのは、恐くは彼の少し後輩である梁川星巌であつたらう。文章に於ては其の精錬警拔に於て佐藤一齋、博贍強記に於ては古賀侗庵などであつたやも知れぬ。而して猪飼敬所にも博贍強記には參つてゐたのであらうと思はるる。但し彼は他の長所を觀ると同時に、其の短所を看過さなかつた。其の短所を觀ると同時に又他の長所をも看過さなかつた。殊に彼が如何に生活術、若くは宣傳學の博士であつたやは、江戸の客を優遇した事にて判る。彼は市河米庵を廣島の幽居時代から相知り、而も其の時から並々ならぬ親切を盡した。其の父寛齋には茶山の紹介で、寛齋が長崎の歸途に面會したが、彼とも好く交つた。菊池五山は「五山堂詩話」を作つて一種の宣傳機關の持主であつたから、山陽は屢々其を送つて賍物を通じてゐる。大窪天民には其の秘藏したる外史さへも送り示した程であるから云ふ迄も無い。天民が上方に來た時には、山陽は何かに付け其の便宜を圖り、之を優遇した事は、彼が劍菱の主人に與へたる書簡を觀ても能く判つて居る。太田錦城の如きも、山陽は固より自ら經學を好まず、經學者などは相手にしなかつたに拘らず、錦城を優遇して、錦城も亦頗る之を欣んで

ゐる。●論境に付く。

山陽翁子成ノ鴨川ノ書樓ニ過ギ、子成、伊丹ノ剣菱ヲ醸ト、以テ予ニ飲マシム。皆甘醇也、飲ム處ト同ジ、京師ニ來ッテ數月ナリ矣。此日始テ京師ニモ亦酒有ルヲ知ル。蓋シ子成才學文雅、京師ノ後生ヲ壓倒スルヘ、世人ノ知ル處也。予又何ヲカ贅セン。唯其鐵字ヲ察スルニ、一時爽快ノ士也。諸タ關左ノ人ニ負タリ矣。京師關東士氣ノ異ナル、唯酒味以テ之ヲ知ルニ足ル。予既ニ相待ツノ厚キヲ悦ブ矣。又窃ニ感ズル所アリ焉。乃チ一絶ヲ賦シテ之ニ謝スト爾カ云フ。

京釀味甜不レ中レ飲。君家何處得ニ芳醇一。清香痛快關東士。難レ與皇都軟脚人一

素より山陽は氣に入らぬ客には一杯の酒でも容易に飲しむる者ではない。然るに大切にして取つて置いた伊丹の酒を出して接待したと云ふ事は、錦城なるが爲のみでなく、彼が江戸に於ける大家であるが爲であらう。果然山陽の考へ通り、錦城は久振にて酒らしき酒に有りつき、山陽を見て江戸ッ子氣質と云ひ、頻りに頌徳表を奉つてゐる。而して山陽も亦た錦城のことを、其の女弟子江馬細香に與へたる書中に、「詩ハ下手と相見へ候、經學家也、何れ風流は薄く候ゆへ、詞は合不申候方也。されど共京儒よりはまし（に）候」と云ふてゐる。實を云へば山陽には江戸ッ子氣質は藥にしたくも無い、彼は其の骨から肉まで上方者である。併し彼は江戸者に對すれば、江戸者らしくする丈けの方便は知つてゐる。殊に佐藤一齋の如きは、山陽の爲に頗る優遇せられてゐる。然も山陽の爲に一杯あつたのである。[illegible]、と亦、彼の知己には能く[illegible]忘られなかつた。それは彼が茶山に與へた手紙に明かである。

……佐藤捨藏昔時は京はつれかげ人に遣申候、夫へ寄て浪華へ参、直に東都と申事にて、鳥羽迄送参申候、覚饒州若黨などにて、田舍代官の毛見と云風に御座候。

如何にも一齋を活現してゐる。平生財布の口を締めた山陽が、其の門人を引連れて一齋を送迎し、大盤振舞を爲したる事は、一齋の書いたものでも能く判る。山陽は一齋が如何なる地位を、江戸の文壇若くは學壇に於て占めて居るかを能く心得て、其の驩心を得るに努めてゐた。

何と云うても江戸の大立物は樂翁公と林述齋である。されば此巨頭に對しては、彼は恐らく凡有ゆる方便を以て能く之に胡くしたものであらう。其の事は樂翁公の日記が能く之を語つてゐる。林述齋は夙に山陽の才學を認め、彼の如き者を窮地に置くは其の才學を傷くる恐があるから、何とか沈滯たる藝州から拔擢でも與へるやうにしたいと心配してゐるが、公然彼を推薦する譯にも行かず、唯其の意味を諷する許りにて、今以つて行はれないなどと歎息してゐる事などと。而して白銀二十枚の外史禮金は、述齋が樂翁に亦く網を作せと云ふたからの事である事

杯なども、茶山の日記に書いてある。それを見れば此一片の頭が如何に山陽に就て考へたかは能く判つてゐる。此の如く山陽は、苟くも江戸から來た者であれば、特に意を用ひて之と交り、其の歡心を得ん事を勉めてゐる。此れは江戸を以て宣傳の中心點としたからであらう。彼は京都では可也敵が多かつた。其の模様は彼が「上日野相公書」によつて知る事が出來る。彼の反對者の親玉は恐らく中島棕隱であつたらう。中島は或時には山陽の近傍に棲んで居た。それは山陽遺稿にも「棕隱僦居北鄰見贈二長律一。姑酬以二斷句一」といふ詩がある。併し山陽は此漢を諭が好かなかつた。彼は棕隱を、北鄰の風流先生と稱して與廻にしてゐた。當時の上方での唄に

　篠は詩は山陽に書は貫名
　　經は猪飼に猫は文吉

とあつた。篠は小竹、貫名は海屋、猪飼は敬所、文吉は即ち棕隱である。棕隱が音頭取となつて京都の學者文人を語らひ、山陽をボイコットせんとした形勢は、山陽の「上日野相公書」に能く悉くして居る。之は山陽が所謂滴木風狹き理由でもあつたらう。山陽程の者であれば、仲間から嫉妬せらるゝは不思議でない。茶山は

子成■章ヲ賞クシ、書札ニ工ミニ、妍ヲ取ル數ニ多シ。今其書ヲ示ル、亦凡ナラズ、我恐ル、父書者ノ妍ム處トナラン。……子成此乎タル妍骨、此四妍ヲ負フ。天地廣シト雖モ將ニ容ル所無カラントス。

と云うてゐる。之は冗談ではあるが、偶ま一片の眞理はあつたに相違はない。併し彼が妍を取つたのは、…には彼が世の中の與廻々々しき者、無けれども有るが如く飾り立つる者などを、一切假借せなかつた代價と云はねばならぬ。彼が僞し江戸の人を作調する如く、今少しく腰を卑くし、顔色を下して京儒と交際したらば、上方の學者も左程ではなかつたらう。併し彼は苟くも交らんと欲する者には能く交つた。猪飼敬所の如きは、何人にも容易に許さなかつたが、山陽には頗る傾つたやうだ。

下人ニ於テ二ノ悔アリ。壯年履軒ノ學識ヲ知ラズ。故ニ之ニ從テ學バズ。老年山陽ノ奇才ヲ知ラズ。故ニ之ト友タラズ。此ノ如キ二子、豈得易ランヤ。

と。又天保四年正月廿一日付にて、敬所が仁山に與へたる書中に、

一昨日彼の門人兒玉三郎より山陽易簀之後ニ遺識ニ寄を示し、臨偏を被訂せんことを乞ふ、書經義後跋文を見るに、學問は疎なれども大に有識、往々卓見と合す、宜なるかな本生子を通識と稱するを、他の浮華の文人の及ぶ處にあらず

と云ひ、又

聰明可其處正大之道者と卅餘年同じく京都に住し不相交、昨年四月以來親しくなれば、病起り、病中三四度訪ひしに偶與余論經史

と云うてゐる。又た山陽の逝去の一月前、天保三年六月廿三日川村貞誠に與へた書簡は、

當月初頼山陽他へ贈られ候文二首老拙へ相示被致、最早少々删正致候處、甚氣に入從ひ被申、且老拙筆削之草稿を併せて其人に被贈候、老拙筆削を不隱、磊落之氣象感入候、彼水亭にて共に一醉せんと申請候故、八日に參り未刻過より二更迄相對し、舉杯和漢の史を談じ候、經學者多不通人情、老拙事情に通ずと甚被賞、外史並此節著述の通議一閱を被請候、内人も被出、雙鬟大に親まれ候様子に御座候、老拙件年より彼人を知己と存居候處果然り、京師にて可共語者此人と存候

當月十日頃山陽吐血せられ、自身は大に懼れ期し死居られ候へ共、旁觀は元氣も不易、左は有間敷皆々申され候、廿一日老拙訪候處、追々快方と被申、元氣も克く談話被致候、此後保養被致却て保壽可被申と存候、贈所門人齋藤出雲近來山陽と甚親く、通議を被贈、尙外史も可贈と約被致候、先日齋藤方にて通議一覽致候、山陽は誠に東坡の流亞當世之才子と存候、彼人の眼空一世、四月廿八日夕被招候て右齋藤同伴にて參り談話致し候、其節老拙今時の儒者如何と問候處、龜井元鳳は西國の田舍漢、古賀侗庵は江戶の田舍漢、皆天下の現勢に不通と、愚意にも此論至當と存候、一昨日も暫時談話留られ候へ共、其朝は講釋有之候故、近日又々緩々と可參と申歸り候來月月夜に又訪申可候

六月二十三日　　　猪飼敬所

川村貞誠様

之は實に山陽が死する三ケ月前の日付である。元鳳を西國の田舍漢、侗庵を江戶の田舍漢と評した言葉の如き、恰も一齋の扮裝を見て田舍代官の毛見と稱したのと一般、實に穿ち得て妙と云ふべきであらう。

山陽は何れかと云へば餘りに多くを書いた。併し彼の文字は錢に値しなかつた。固より依頼を受けて書いた物には報酬もあつたであらうが、外史などは草稿の儘で、彼も外史が他日刊本と成らうとは豫期しなかつた。彼の詩鈔は既に死に先立つて本屋の手に其の原稿を渡してあり、其の外通議と政記丈けは板にしたいと思つてゐたが、外史が眞逆彼の子孫に衣食の料と成らうとは豫期しなかつた。何は兎もあれ、彼は全く硯田を耕してゐた。即ち書が彼の飯の種であつた。彼の道樂は若い時は所謂冶遊であつたが、九州に赴く頃から、即ち三十九歳頃から馬關で飲み始めた酒が原となつて酒徒となり、酒に肴は附き物で、彼は却々食通であつた。彼の手紙の大部分は飲食に關する事である。殊に酒の事が多いが、食物や料理に就ても、それぐ\嗜好があつた。併し彼は父傳來の締り屋であつて、寧ろ餘り締屋であると云ふ可きであつたらう。彼は晩年平曲を語つたが、それも餘り上手と云ふではなかつたらしい。門人の牧百峰などは、相手を申し附けられて又かと閉口したと云ふ。然し、彼の一生を貫いての道樂は書畫骨董であつた。之には締り屋の彼も可也散發もし、可也苦勞もした。而して之が爲に彼の評判も惡くなり、聊か人格を傷けた如き事も全く無いではなかつたらしい。付つて歲

村瀬栲亭が

自ラ六經ニ通シテ書畫器玩ノ文ヲ出シ、以テ俗嗜ヲ化ス。人ノ書畫器玩アルヲ見レハ、必ス之ヲ作銘シ、之ヲ文ノ序ナカス。或ハ假リテ獻ケス。此竹媒嘉自ノ好ム者ニ從ガル所、而シテ山陽公然之ヲ爲ス。則ハ後陳名トナ以テ自ラ居ル。無用ノ思ヲ、諸ヲ文字ニ費シ、以ノ自ラ玩弄ス。乃チノ所謂守錢ノ類也

と云うてゐる。之は酷評である。併し若し彼に骨董道楽かなく、骨董に對する執着の半分を割いて書籍に移したらば、彼の學問は幾分か廣味と深味とを加へたであらう。然るに之れが思ふやうに行かなかつたのは、畢竟彼が藏書の少かつた爲と云はねばならぬ。彼は用不用の道具を有つてゐたが、六書通さへも自ら有せず、之を小島那山から入用毎に借りてゐた。彼の行状には「家ニ藏書ナシ。四子五經古文、東坡集、唐宋八大家文鈔、本朝史ハ唯皇朝組成績、讀史綱目ノミ」とある。必ずしも一冊も無いのではなかつたとは、彼の藏書目録を見れば明白だ。併し大抵は他人の本を借用して濟ましてゐたらしい。彼程に本を集めて之を讀まないのも、藏書家の特徴であるが、山陽の如く書物を持たない者も亦珍しいと云はねばならない。予は此點に於ては二十年來多少の苦心を爲し、凡有ゆる藏書家に就て其の所藏を訪求して居るが、嘗て山陽の手澤本なりと云ふ者を見た事がない。偶々山陽の批評を加へたものを見るも、これは他人の書に加へたものであつて、山陽彼自身のものとして見る可きものは殆ど見當らない。

山陽程の學者にして山陽程書物を持たない者も、亦不思議と云はねばならぬ。彼は必ずしも大なる教育家ではなかつた。彼が文章や詩や若くは其の書風の如きも一世を風靡し、維新以後今日に至る迄彼の書風を慕ふ者、若くは自ら其の然るを覺えずして、山陽流の書を書く者さへ少くないが、而かも直接に彼の門人と云ふ可き者は、彼程の地位の人としては多いとは云はれない。其の意味に於て彼は徂徠若くは山崎闇齋に比す可き大なる教育家と云ふ可くはない。其の一般に及ぶ感化に至つては、實に他に比類少き者であるが、其の直接の門人と云ふ者の中には、彼に後繼する者は愚か、彼に追随する者さへも無い。闇齋の門人には佐藤直方、淺見絅齋、三宅尚齋などと云ふ人物がある。徂徠の門人には服部南郭、太宰春臺、山縣周南などがある。然し山陽の門人にはこれにさへ比較する者は無い。後藤松陰、牧百峰の徒は尋常一樣の學者である。森田節齋が彼の文章の衣鉢を傳へたりと云ふも、到底比較にはならぬ。彼の最後に死水を取りたる石川竹崖の如きは、學者としてよりも寧ろ政治家として成功したが、其の他村瀬秋水、村瀬藤城、宮原節庵、[illegible]田[illegible]雨、江木鰐水、家長福庵、兒玉旗山、藤井竹外、阪井虎山其の他多少の人はあるが、先づ以て尋常一樣と云ふの外はあるまい。されば彼の感

仁に卒不過程でなして、過程であると云はねばならぬ。其の間接の感化に到りては、些も彼自ら豫期する位でなく、實に非常なる好成績と云はねばならぬ。

彼の自敍傳とも云ふ可きは、前述の如く詩と書翰とである。彼の書翰は彼の生前から非常に大切に持囃されたものらしく、其の爲め斷簡零墨でも尚ほ保存せられてゐる。米庵が之に就て「才氣如湧」と云うたのは決して溢美の言ではなく、彼の書翰は長き物は五千言、短き物は五十字といふ程にて、其の眞面目なる物は梁山泰然に與へた如きものがあり、短き物には劒菱の主人などに與へたものがあり、何れもそれぞれ名文である。彼は決して等閑に手紙を書かなかつた。恐くは彼は太史公が任安に答へた書翰より以下唐宋八家殊に東坡などの書翰文を能く熟讀して、其の三昧を得た者であらう。されば彼が書翰文を見て、出鱈目に書なぐりたと思ふものは大なる間違ひである。出鱈目に書なぐりたるが如き趣を具へて而も其の實は彼が細心なる文學的技巧を弄してゐる事は、深く這般の消息に通じた者でなければ判らない。曾つて西園寺公と山陽の書翰を展觀したる折に、公は山陽の手紙を見れば如何なる短き物でも、彼が心から樂んで書いたもののやうに覺えると云はれたが、之も亦適評の一であらう。兎に角彼は自ら一代の文豪頼山陽であると云ふ事を意識して書いたものと云はなければならぬ。然し此手紙に於ても、宅念素山に若干負ふ處があるに拘つてゐる。泰山の手紙は山陽程ではないが、恰も其の詩が山陽の藍を爲した如く、手紙も亦同様である。

山陽は始から江戸に結んで居たが、遂に彼は江戸に出掛けるの志を起した。其の事は彼が天保三年壬辰の正月「題二畫富士一」の詩に

自レ別二芙蓉一三十年　容於二圖畫一辨二雲煙一　再會遂レ躬富レ有レ日　白頭相照兩皤然

又星巖が翌年夏山陽の子餘一の江戸から歸る時に贈れる詩に自註して『乃翁東游ヲ擬ス。承緒（世應）厮舍ヲ修メテ以テ之ヲ俟ツ。既ニシテ翁病ンデ卒ス』とある。惟ふに山陽が天保三年五月彦根にて星巖と會せる時、互ひに江戸に上る打合せを爲したのであらう。彼は永久に江戸に移住する積であつた乎。若くは唯三十年振に江戸見物に赴く積であつた乎。兎に角京都にて此儘行詰りの生活を爲すよりも、江戸に出で更に一生面を開かんと試みたのではあるまい乎。之は山陽其の人に聞かねば判らぬが、兎に角都合が好ければ江戸に足を止め、惡しければ引返す迄の事で、江戸に出掛ける決心をした事丈けは間違ひない。彼は死んだ時五十三である。彼が後十年生きれば六十三、廿年生きるも七十三である。假に彼が七十三迄生きるとすれば、それ

は恰も嘉永五年、即ち日本で最も重大なる米艦渡來の癸丑の年の前年である。假に彼が最後の廿年を江戸に送りたりとすれば、彼は何事を爲したであらう乎。何れにしても彼は淺見絅齋の如く、一生江戸に行かぬなどと云ふ見識を有つてゐたのではない。彼が京都にゐたのは、彼が草鞋を脱ぐに都合が好かつたからだ。京都なるが故に京都にゐたのではない。予の好奇心から考れば、彼が最後の廿年を江戸にて如何に暮す乎と云ふは心配だ。寧ろ彼自身の爲から見れば、彼は五十三にて京都で死んだのが、却て彼の名譽の爲に仕合であつたのではあるまい乎。と思はれないこともない。何故なれば彼が爲す可き仕事は殆ど爲し盡してゐる。此上一生面を開くとすれば、洵に結構であるが、然し若し萬一江戸に出でて、佐藤、林などの仲間に入り、せい〳〵將軍に御目見得する迄に立身しても、寧ろ山陽の爲に累とこそなれ、決して彼の名譽と云ふ事は出來ない。且つ又彼は彼の天職として爲す可き事を仕盡して、此上爲す可き事は殆どないのである。強いて之を爲さんとして、此れ迄の成功したもの迄も傷くるが如き事あらば、勞して却て損する所以であつて、之れを譬へば、山陽は實に戰士が矢叫びの聲の中にて討死したるが如く、自ら銷消して仆れたのは、彼に取つては名譽の最後と云はねばならぬ。乃ち山陽の一生を文章と見れば、彼の晩年は實に常山の蛇勢とも云ふ可き、最も立派な文章と云ふ可きものであらう。

（大尾）

（大正十五年一月七日起稿、一月廿八日一校過　於大森山王草堂　蘇峰老人時年六十四）

アヴェック・マ・ピープ

「パイプを啣へて」

石川欣一

アヴェック・マ・ピープは、申す迄も無く With my pipe である。再び、申す迄も無くレオン・ヴェルトの Voyages avec ma pipe の後半を盗んだのである。

「パイプと共に」どうしやうと云ふのではない。訓はゞ「パイプを啣へて」である。實は以下の如き雜文を集めて發表するに際して、「パイプを啣へて」なる題をつけると一番いゝのだが、殘念ながらこれはもう本の名に使用して了つた。

私の雜文集「パイプをくはへて」は、大正十三年早春出版された。パイプ大流行の時期に達してゐなかつた爲か、又は――恐らくこれが眞であらうが――内容が詰らないせいか、親類の子供が

パイプを啣へて實はエヤシップ

なる、辛辣な批評を端書に書いてよこした以外、何の反響も起らず、そのまゝ消えて了つた。

だが、如何にどこかへ消えて了つたからとて、「パイプを啣へて」を再び題にする譯には行かぬ。そこで不自由を忍んでアヴェック・マ・ピープ。即ち昨年初冬から本年にかけて、ひまな時にちよいちよい、パイプを離さぬ呑氣な調子で書いておいた雜文數篇――パイプの話もあり、さうでないのもあるが、題に因んで、矢張りパイプや煙草に緣の近い物を選んだ。書いた時期は一篇づつ異つてゐるが、別に日づけを書く必要もなからう。

パイプの種類

パイプの種類や吸ひ方に就ては、いろいろな書物も出來てゐるし、及ばずながら私も本を書いてゐるから、こゝで改めて云ふ程のこともない。然し順序として一應、私の知つてゐる丈のことを書いて見やう。

我々が最も普通に見うけるのは、ブライヤである。これはフ

ランス、アルゼリア、コルシカ等に産する灌木ブライヤの根でつくつたもので、他のいづれのパイプよりも吸つた味がよく、また手に入りやすい。

ブライヤの根は、一人前になる迄に、六十年乃至百五十年を要するさうである。だから需要の多い今日、中々さう澤山は得られない。フランスに於ては、古い根は殆無くなつて了つて、只新しい物のみが掘り出される。つまり現在のフレンチ・ブライヤは、あまりよくないといふことになる。

元來、フランスやアルゼリアの、ブライヤを産する地方の地質は、砂を多く含んでゐる。然るにコルシカに於ては岩が多いので、ブライヤの根は成長を妨害され、その結果却つて密な物が出來る。だから質に於ては、コルシカ産の物の方が、フランスやアルゼリアを征服してゐるのである。恰度コルシカから出て來たナポレオン・ボナパードが歐洲を征服したやうに。

地中から掘り出したブライヤの瘤根錯節は、土や腐蝕部分を奇麗に取去つてから、大鍋で煮られる。それから、一定の塊に切斷し、先づ蒸氣で、次には室で乾燥するが、これはパイプになつてから龜裂を生じたり、收縮したりするのを防止する爲の手段である。

かくてパイプの原料たる木塊が出來上ると、所謂ダライ盤を使用してパイプの上部をつくり、下部とステム（軸）とはフレージング・マシーンと稱する物で擦り耗らして形をつける。そこで大體の形が出來、それに鑢紙をかけ、粉末にした輕石と油とで仕上げをし、更になめし革でこする。これでボウル（雁首）は出來上つたので、それからは琥珀なり、ベークライトなりのマウスピース（吸口）をつければいゝのである。

製造家の話によると、パイプの質の良否は、鑢紙をかける時、始めて現れて來る由である。だからアルゼリアなり、フランスなりのブライヤ生産地で、掘り出したばかりの根つこを買ふのは殆ど投機で、素晴しいのがあつたり、仕方の無いのがあつたりするといふ。我々は、その素晴しいのを莫迦に高く買ひ、やくざな奴は買つてもすぐ駄目になるのだから、結局パイプ製造者は、損はしないことになる。

次にメヤシヤウム、日本の煙草屋さんは「メショム一」とか何とかいふが、眞白な奴で、これは土耳古、小亞細亞から出る土である。掘り出した時は柔かいが、日光と空氣とにあてると、すぐ固くなる。細工をするには水につけ、ナイフで形をつける。それから例のダライ盤をクルクル廻してボウルをつくり、或はナイフで彫刻をする。そこで蜂蜜を沸かした釜の中へ

入れてゐる。

キャラバッシといふ瓢簞みたいな奴は、まさに瓢簞で、南阿を原産地とする。カルフォルニヤでも栽培の試驗をやつてゐたが、その結果は知らぬ。乾いたのを腐いて皮を出し、內側に本當のメヤシヤウムや、人造メヤシヤウムや、素燒粘土等をはめ、ゴムや琥珀の吸口をつける。日本の瓢簞でやつたら面白からうと思ふが、臆劫なのでまだやつて見ない。

アメリカに多いのがコーン・コブ。これはその名の示す通り、玉蜀黍の穗軸(コブ)を乾燥させて、中心をまるくゑぐつたのに莖をさし込んだ物である。燒けるのを防ぐ爲に、何かのプラスタアで加工してあるといふが、それでもブライヤに比べると矢張り焦げやすく、吸つてゐる間に夏の緣日のやうな香を發することがある。

テニソンが好んで吸つたといふクレイは、白い粘土の素燒で、いゝ品はフランスで出來、安い奴はイギリスで出來る。どうかすると吸口が唇にくつついて、あまり吸ひ心地がよくない。もつともコーンやクレイは、他の品に比較して安價なので常とするから、何とも致しかたあるまいと

右のブライヤ、メヤシヤウム、キヤラバッシ、コーン、クレイをパイプ世界の五大強國(ファイヴ・パワーズ)として、その他竹、陶器、鐵、櫻等、いろ／＼な材料でつくつたのがある。私の手もとにあるので一寸珍らしいのが二つ。一つは紐育の沖仲仕が吸ふチミイ・パイプ。これはコルクの層を壓搾して――西洋風呂の敷物と思へば間違ない――外側をつくり、クレイで內側をつくつて、何だか知らぬが木の枝の吸口をつけた物である。元來がコルクだから、物にあたつても毀はれず、水に落ちてもプク／＼浮いてゐる。何でも五仙位で買つたと思ふ。

もう一つは京都のある人が拙著「煙草とパイプ」と交換に吳れた生蕃のパイプで、竹でつくり、ニッケルの輪が入つてゐる。この輪は日本の十錢ニッケルをナイフで削り、竹でまるめて打ち込んだ物である。私は友人等に、次のやうに話してゐる。

「昔、臺灣の山の中に、獰猛な酋長がゐて、日本の巡査を殺し、その財布を盜んで、ニッケルを取出し、そしてこのパイプをつくつた。これは彼にとつては非常な家寶であつたが、その後彼も皇化に浴して歸順し、後悔のしるしとしてこのパイプを總督府の役人に進呈した。それが轉々して僕の手に入つたんだよ」と

この話はうそだか本當だか、實は私も知らぬが、皆感心するから、いまだに人に話して聞かせる。

私はパイプを吸ふのは好きだが、まだコレクトする迄には行つてゐない。ぼつ〳〵心がけて、金と時とのあり次第、集めて見度いと思ふ。だが日本にゐて世界のパイプを蒐集するのは、退屈でもあり、無理でもある。パイプは吸ふ方にしておいて、煙管をコレクトした方がよささうである。

森さんのパイプ

文藝春秋に「最初のシガア」を書いてからしばらくして、友人山田珠樹が大學圖書館の用事で大阪へ來た。山田は森さんのお嬢さんの御亭主だから、「文藝春秋を讀んだかい」と聞いたら、「まだ讀まない」と云ふ。「それぢや家へ歸つてから見せよう。」と云ふ事で、大阪で大いに飲んでゐる内に、全體何を書いたんだと聞くから、「實は俺が生れて初めて小說を書いて、それを森さんに見て貰つて叱られたことを書いた。森さんが櫻のホルダアでシガアを吸つてゐたもんだから、俺も生れてはじめてト團鏡のシガアを吸つたんだ。」と話して聞かせると、「そのパイプなら俺が持つてゐる」との言葉であつた。

私は大いに興味を感じて、「ぢやあ今度東京へ行つたら見に行くよ」と云ふと、「お前にやらう」と云ふ。「貰つてもいゝけど、俺の子孫の代になつて、何だか分らなくなるとこまるから、箱書きをつけてお呉れ。」と私は子孫の爲に美田を貰ふ氣で云つた。

それから二三ヶ月して、山田の事なんぞ忘れて了つたぼ――頃のよき友は文通なんぞしない――突然小さな小包と厚い手紙とが大阪へ來た。小包は古梅園の墨の箱に綿をつめ、その中に櫻のシガア・ホルダアが入つてゐる物で、手紙は山田夫人が「これは父が毎日愛用してゐたパイプだ」と、くはしく書いた物であつた。これで私の數すくないコレクションに、非常な寶物が加つたことになり、私は大いによろこんだ。

所が最近、東京の宅から私の幾片を全部送つて來たので、一日社を休んで整理してゐたら、森さんの手紙が出て來た。いろいろ書いてあるが、その中に

「――（　）小說ノ閱讀ハ時間ヲ費候ニ付原則的に謝絶仕居候へ共一寸一見可仕候。（　）處女作ハ大抵好キモノニ候（　）推ヲ下セバ字々抽象的ニナリ又ハ世間ニアリフレタ贅語トナル質ノ人ハ知ラズ其他ハ處女作ハ相應ニ出來ル物ニ候（　）處女作ニ由リテ未來ヲトスル事ハム大カシト存候」……

とある。其の處女作は、文學的試にも書いた通、さん〴〵某さんにしかられた拙作なのである。十年後の今日、この手紙を讀んでゐるうちに、私の胸臆には冷たい汗がびつしよりとたまつた。「處女作によつて未來を卜することはむづかしい」とあるのに力を得るよりも何よりも、先づあの忙しい、勉強家の森さんに、よしんば「一寸一見」でも何でも、あんな下らぬ物を見て貰つたことが、實に相濟まぬやうな氣がした。私は二階の書齋へ上つて、机の引き出しから櫻のホルダアを出して、しみじみと見詰めた。――この頃、すこし個人的になつて相濟まぬが、どうも書かずにはゐられないので、つい書いて了つた。

南瓜とキャラバッシ

ラフカディオ・ハーンの編んだ Gombo Zhèbes (New York: Will H. Coleman, 1885)には

Giramon pas donne calaaasse

といふハイティの諺が出てゐる。これは佛蘭西語に譯すと

Le giraumon ne donne pas la calbhasse

即ち「南瓜はカラバッシを生ぜず。」若し生ずれば、鳶が鷹を生み、小使の子が大學教授になつたやうなことになる。ハーンは Giramon に註をして曰く「このスペリングはビゲロウ氏が一八七九年のハーパアス・マガチンに寄稿した書に據つたが、どうも違つてゐるらしい。ルイジアナのクレオール語では Giraumon と云ふ。佛蘭西語は Giraumon である。」と。キャラバッシの語を書いた序に一寸一言。

戸外のパイプ

メヤシヤウムは恐ろしく面倒なパイプなのである。キッドの手袋をはめてゐなくては、絶對に吸つてはいけない、寒い風の吹く處では絶對に吸つてはいけない、雨の降る日に、濕つた場所で吸つてはいけない……かくの如き「切れ」が、非常に多いのである。これは勿論メヤシヤウムがブリトルであるのと、美しいニコテイン色にするのに年月を要するのと、この二つの理由から來てゐるのであるが、一體戸外で吸ふパイプとして最もよいのは、ブライヤである。クレイも破損しやすい、コーンは重心がうまく取れない、キャラバッシはかさばる。そこでブライヤといふことになるが、ブライヤにしても色々な形がある。

この間の日曜日に、用があつて神戸へ行つた。冬にはふさはしく無い位あたゝかい日で、郊外電車は散歩の客で一杯だつたが、最も私の注意を引いたのは、二人の青年紳士であつた。

二人が二人とも、當世流行のアッシのステッキを持つてゐた

のはさだよしとして、二人ともパイプを電車の中で手に持つてゐたのだ、妙に私の好奇心をそゝつた。見ると二のパイプのステムが、すこぶる長い。そこで私は、あの紳士は、パイプの喫煙法を知らぬなと思つて、落膽したのである。

何故かと云ふに、戸外で吸ふパイプは、短い方がいゝからである。長いパイプは混み合ふ所では人にぶつかる、一寸した藪に入れば枝にさわつて火を落す。ポケットに入れればマウスピースが出る。散歩用、運動用の、ステムの短いパイプが出來てゐるのに、室内用の長いパイプを持つて郊外電車に乘つて散歩に出かけるのは、いはゞ松本のステーシヨンで、アイスアックスを水平に持つて階段を昇るのと同様に、危險で且つ無趣味である。

チヨン・コトン

ストラットフォード・オン・エーヴオンは、一から十まで失望であつた。

あるひは私の行つた時期がわるかつたのかも知れぬ。美しい英國の秋に行かずして、十一月の末の、しめつぽい、雨の多い頃に出かけたのが、私の失策だつたかも知れない。が、それにしても、驛に着くなり沙翁記念劇場で、ピックフォードとバスタア・キートンの活劇をやつてゐるといふ、ビラを見たるには、うんざりせざるを得なかつた。

とまつた宿屋がまた、部屋の一つ一つに沙翁の劇に出て來る人名をつけてゐるので、すこし食傷の氣味であつた。私にあてがはれた部屋がたしかオフエリア、隣は申す迄もないハムレットである。狹い廊下の向側がマクベスと來ると、その邊に幽靈がウロ〳〵してゐさうで、とてもやり切れない。

かくの如く私はストラットフォードには全く失望したが、只一つ、沙翁の故郷は私に何ともいへないゝ煙草を提供した。それはこのチャプタアの題をなす、チヨン・コトンである。

「マイ・レーディ・ニコティン」の主人公は、ストラットフォードで、煙草屋二軒と喧嘩した。二軒とも、彼の煙草入れを輕蔑したからである。パイプの愛用者たる私も、ストラットフォードの煙草屋に對しては、甚だスケプティカルであつてよかつた筈である。然るに私は、ストラットフォードには失望したが、この町の一軒の煙草屋には、いまだに感謝してゐる。

前の晩に着いて、そのあくる朝、ホテルの食堂であんまりうまくない食事をした後、パイプを求めてオフエリアの部屋に歸つた私は、煙草入れが殆ど空になつてゐることに氣がついた。」

これで[illegible]、[illegible]にして、ど
こ[illegible]。とあるトバコニストの店に入つた私は、そこのカウンタアに明眸皓齒を發見したのである。

どんな美人だか書いて見ろと云はれると閉口する。實はよく覺えてゐない。覺えてゐないのが即ち、この娘があまり美人でなかつた證據になるかも知れないが、とにかくその朝は、これは美しいなと思つた。その美しさも沙翁のオフェリアの如きヒヨロヨロした影の薄いのでもなく、またオフェリアの實物なりと學者が云ふデンマータの娘の如き、頰の赤い、房州から來たてのおさんどんと云つたやうな、衛生美人でもなく、つまり英國風の、肉のしまつた普通の美人であつたと思ふ。

朝まだきに——それでも十時頃だつたらうが——かゝる明眸皓齒にぶつかつた私は、たちまち旅人一流の浮氣を起した。一分間でも長く、この娘と話をしたいと思つたのである。それで、私がいつも吸ふ煙草が棚にあるのにもかゝはらず、「私は何を吸つていゝか分らないが、何かいゝものを下さい」といふ意味を述べた。

そこで娘が出して來たのが、チョン・コトンである。「これが一番いゝ、すこし強い」と云ふ[illegible]よかつたら、私はホテルのスモーキング・ルームで、半日ヨロヨロして暮した。何でも小雨が降つてゐたと思ふ。話はこれだけである。

好きなパイプ

大正十四年秋、大阪に於る嫁入仕度のレコードは某氏の令孃、大阪中のデパートメント・ストアから好きな物を選んで、その總額四萬八千圓、その他に帶が七十五本に下駄が何十足と、か、ある朝新聞で讀んだ私は、四萬八千圓にも吃驚したが、この方は吃驚するばかりで、あまり額が多い爲にピンと來ず、むしろ帶の七十五本に興味を感じた。

たつた一つの細腰に、七十五本の帶をどうするのだらう。毎日毎日しめかへるのかしら。それとも朝、晝、晩と、かはつた帶をするのかしら……貧乏人が金持の實生活をのぞいた時によくやる様に、私はとりとめもない假想にふけつたが、結局、いやその お嫁さんも、若し本當に趣味があるならば、いつでも締め度く思ふ帶は、七十五本中の一本か二本で、あとは仕舞つておくのだらう、と思つて、やつと安心した。

實は私も、一度に一本しか吸へぬパイプを二十本近く持つて

ゐる。高いのや安いのやグレインの通つたのや、使用價だけ私ので所有權は他人のや、借金をして買つたのや、青年時代の思出の多いのや、色々ある。だが不思議なことに、いつでも手の出るのは、たつた一本である。BBBのOWN MAKEであんまり好きでない銀の輪がついてゐる。元來私は輪が嫌で、まだダンヒルの方がいゝと思つてゐる。そしてダンヒルの方を大事にする。然るに、パイプを吸はうと思ふと、きつとこのBBBに煙草をつめて了ふ。何の思出があるのでもない。どこで買つたのか、それさへ忘れてゐる。同じ吸ふならリインゴットのナチュラルや、メヤシヤウムを吸ふ方が、色がついて樂みな譯なのである。

時としては、ナチュラルを吸ひ、ダンヒルの一本を吸ふ。だがその後で、必ずBBBに手を出す。まつたく不思議と云はねばならぬ。只氣が合ふのであらう。このパイプと私との間に、何か縁があるのであらう。

私のやうに好きになると、パイプがイムパアソナルな物質でなくなつて來て、一本一本人格を備へてゐるやうになる。殊に啣へた時の重さ、全體のバランス、色合、マウスピースの硬度、ボウルとステムとの角度、殊にこの兩者が相交つて構成する曲線、その曲線が自然に持つ味、それ等のすべてがより集つて、パイプ一本づつにインディヴィデュアリティを與へてゐる。その個人性と、私の個人性とが、あるひは一致し、調和し、または全然相反し、離反し、不調和することによつて、我れ自らは知らぬながら、つい手の出て了ふパイプと、どうも自然に手の出ないパイプとが出來るものらしい。

勿論私は、決して不用意にパイプを買つてはゐない。だから、少數の、貰つたパイプを除いては、悉く氣に入つたから買つた物ばかりである。それにしても一年、三年、五年、十年と吸つてゐる間に、こんな奇妙なことが起つて來る。これを私は縁と云ふ。

やにだらけな、醜惡なパイプをひねくり廻して、人生問題を論ずるのもいゝ加減なものだが、どうも人間、縁が無いと萬事駄目らしい。十目の見る所、完全な條件を持つた男が、百指のゆびさす所變てこな女と心中したり、兩親親戚がヤイ／＼云つて一緒にしやうとする男女が、どうしても夫婦にならなかつたりするのは、縁が無いからであらう。こればかりは仕方が無いものらしい。だからこのBBB、今は私とこんなに仲がよくつても、あるひは赤坊が焼べるかも知れず、または物好きな泥棒が盗んで行くかも知れないが、その時は矢張り縁が無かつたと諦める迄の話である。

そこで我も十五の子供さんも、七十か八十の爺さんもみんな〳〵始めて、その一本づつに個人性を見出したら、既に其の合ふ帯が出來るかも知れない。もつとも上流社會の帯には、春夏秋冬の帯や、ダンスの帯や、演劇の帯や、喫茶の帯や、濃茶の帯や、お葬式の帯があるまいものでも無い。さうなると私のパイプとは、いさゝか話が違つて來るが、まるで「縁」の無いあかの他人のことを、そこ迄心配する必要もあるまい。

シガアと爆彈

ある男が、戀人である若い女を抱擁しかけて、一寸待つたとばかりポケットの中のシガアをすつかり机の上に置いたので、女が戀人であることを辭任したといふ話があるが、私はそれよりもつと痛快な話を知つてゐる。それはAとBとの會話である。

A「おい、君はCを知つてるかい？」

B「あゝ知つてるよ。あいつ、いやに馴々しい奴で、往來で逢ふといつでも（オイ、どうだい）なんて云つて俺の胴をつつきやがる。」

A「うん。俺にもさうだ。お影で俺はづい分シガアをこはされた。癖にさわつて仕方がないから、俺はいゝ事を思ひついた。」

B「いゝ事とはなんだい？」

A「一件はこないだつから、シガアの代りに爆彈を胴のポケットに入れて歩いてゐるんだ。早くCに逢へばいゝと思つてゐる。」

忘れたパイプ

童話詩人によると、唄を忘れたカナリヤは象牙の船に銀の櫂、月夜の海に浮べると忘れた歌を思ひ出すさうである。甚だ結構なことだが、パイプを忘れて長い旅に出た愛煙者ばかりは、象牙の塔の屋上庭園（ルーフガーデン）で、銀の匙からカンテロープの黄金の露を啜つても助からない。

前の晩の夜行で大阪を立たうと思つてゐたのだが、急に神戸に用事が出來て、とうてい間に合ひさうにもないから寢臺券をかへして了ひ、あくる朝の特急券を買つたのが、そも〳〵間違の起りであつた。どうしても、その日の夜、東京で逢はねばならぬ人がある。この特急に乘れたらそれつきり、と固く心にきめてかゝつたから、當日は、いつもの寢坊が、また日の出ぬ内に目を覺し、足元から火のつくやうに朝飯を食つて、洋服を着

て、さてチヤブ台の一間に腰をかけて時計を見ると、大阪を汽車が出る迄には三時間以上もあり、郊外電車に要する時を一時間としても、二時間あまつてゐる。旅館ならぬ悲しさに、一とねむりといふ訳にも行かず、結局持つて行く荷物を、すこし大きなのにつめかへて、さして時をつぶさうとした。鞄の錠前を外すと、ギユー詰めになつてゐた品物だ、やれ助かつた！とばかりにはみ出して来る。下着、ワイシャツ、本、新聞紙、雑誌、化粧道具、シユー・トリイス、靴下、がま口の腹みたいにふくれたパウチ、ダンヒル二本を入れた桐と革のケース。

旅行には随分なれてゐる。殊に東京大阪間は、父の家が東京にあつて勤めが大阪にある私のことだから、何度往復したか見当もつかぬ。それでも気張り、名前が和田を出た時にはホツとした。外套を脱いで、シガレツトに火をつけて、朝日と新聞とを読んでゐるうちに、いつか竹林の多い山崎のあたりまで来た。窓の外も十二月の朝に似合はず暖かさうだが、車室の中はスチームの加減が何ともいへず、如何にもパイプに適した温度である。私は外套のポケツトから、「茗煙」を取出し、次に立上つて網の上の鞄を下した。

隅から隅までさがしても無い。をかしいな！と私は外套のポケットに手を入れた。そこにも無い。上衣、ズボン、最後にはチヨッキのポケットに指先をつつこんだが、パイプもパウチも出て来ない。

私はまた鞄を調べた。その鞄の中。まつたく不思議にも中学校の一年の時、算術の試験で零点をとつたことを思ひ出した。

今でも憶えてゐるが、問題は五つ出た。最初に目を通した時は、みんな出来さうな気がした。一問に十分づつ費すとして五十分。最後の十分で調べ直す。――かう云ふ計画で、私は悠悠と鉛筆を取つて、先づ第一問をやつて見た。ところが、どうしても出来ぬ。中途でやめて第二問にうつつた時には、もう三十分立つてゐた。……あわてて私は五問全部に手をつけて、而も結局一つも出来ない内に、とうとう一時間が経つたのである。これが第一問題だ。第一、第二の両問題とも落第点をとつてゐる。こいつも駄目だと落第して了ふぞ。と、私は怖くなつたり寒くなつたり。小便が出たくなつたり何かしたから、第五問の、不器用の書きかけを白紙で[illegible]ゐるゐる思ると何とかかんとかしたと云ふ奴と格闘したのであつた。

同志が言ふ。パイプもパウチも無い。あなりさきから此煙を。

パイプをなくしたから、私はこの[illegible]のことを思ひ浮べた。

恐らく靴や外套や上衣や何かをさぐり求めた氣持が、五つの問題ことごとくを、やつたりやめたりした時の氣持と同じだつたのであらう。

いよいよ無い、と知つた時、私は坐席にドサン、と腰を下して、思はず

Ow Hell!

と叫んだ。ヘルとかデヴヰルとか、甚だよくない言葉だが仕方がない。これから東京まで、一日中マドリガルとバットを吸ふのでは、全くやり切れない。私は京都から女房に電報を打つてパイプを東京へ送らせやうかと思つた。然し只さへ年末で小包郵便のこむ時である、間に合ふかどうか。それに若し下手な包装をされて、途中でステムが折れでもしやうものなら、それつ切りである。東京へ着いたら新しいパイプを買はうかとも思つた。然し、新しいパイプはいやである。人のパイプを借りるのは、人の煙草を吸ふより、もつと惡い。いよいよPipeless week、救世軍なら克己週間で、俺は「無パイプ週間」だ、と腹をきめた。

京都で大部人が乘り込んだ。冗談でも、誇張でも何でも無い、長い旅を、パイプさへあれば、窓外の景色も乘合客も、すこしも氣にならぬ私であるが、この日ばかりは、他の人々の顏でも眺めて暮すより他に仕方がなかつた。で、おれ等の隅つこに坐つたので、一人一人の、多くは後姿を見ては、いろいろと空想を走せた。何か惡いことを考へては、心の中で人々をのゝしつた。あすこに眠てゐる丸髷の女は名古屋の藝者で——この女が本當に名古屋で下車したには、ニヤリとした。——京都迄男に逢ひに行つたに違ひないとか、あの男はえらさうな顏をしてゐるが貧乏者だとか——。恩怨共にない旅の道づれを心中罵りつゝ、バット、若樂、マドリガル、……東京迄の旅は實に長かつた。

妙な部屋

四疊半で、長火鉢と置火燵とがあり、その置火燵のかけ布團が赤いモスリンだと云ふと、女郎の部屋か、又は所謂下町情緒の部屋みたいだが、何をかくさう、それが今私のゐる部屋なので、女郎にも下町情緒にも關係がないばかりでなく、ふと氣がつくと非常に妙な部屋である。

部屋それ自身は、すこしも妙でない。西が一面の壁、南と北は障子。東は南側の四尺五寸が床間で三尺引つこみ、北側の四尺五寸は押入で、波に千鳥の襖がはまつてゐる。私は今床柱を背

に、左手に神戸で買つた三圓の火鉢を置き、右手には長火鉢、右手椅後方には置火燵、女房みたいな布團を引張つて膝にかけ、長方形の食卓の端を火鉢と長火鉢との間に割り込ませて、この原稿を書いてゐる。何故そんなに火鉢や火燵でかこまれてゐるのかと不思議に思ふ人があるかも知れぬが、實は十日ばかり前からわけの分らぬ病氣になつて、やつと昨日床を離れたばかりだから、用心してゐるのである。

所でこの部屋、何が妙かと云へば、たかが二坪と四分一の四疊半で、地球の面積の何億分一だか何兆億分一だか、面倒臭いから調べもしないが、至つて狹いのにも拘らず、ありとあらゆる物を持つてゐるからである。今朝までは別に氣がつかずにゐたが、病氣なんぞして他に考へることが無いので、考へて見ると實に奇妙である。勿論これが博物館か、企畫家の飾り窓ならば、同じ面積の部屋に何があつても不思議は無い。が、開けたる一月給取の、借家の四疊半にしては、驚く程多くの物が、世界中からここに集つてゐる。而もそれが各々自己の本分を守つて、いさゝかの矛盾も衝突もしてゐない。だから妙である。

先づ壁にくつついた、西北の隅の一劃には、紙屑籠と鼠不入とパシフィック・コースト・ビスケット・コムパニイのソーダ・ビスケットの広告罐と、サイドテーブルとが乘つてゐる。鼠不入は今まで用ゐてゐて、すこぶる工合がいゝ。あまりよすぎて、下の方に五つある引出の一つをしめると他の四つが皆出て來て了ふ。その内には何が入つてゐるか知らぬが、上には右から順に凡に一二のイカの寫眞機とゲルツのウェスト、ロンドン・タイムスのリテラリイ・サップリメント、年始状の端書百枚ばかり、東京藤村の羊羹、ネッスルのミルクフード、メリンス・フードと七品がのつてゐる。

鼠不入の右端は柱になる。柱の底部には前に云つたビスケットの罐。それは今パン入れになつてゐるが、その上にイルフオードの乾板箱にオーストラレアのバタを入れた奴が乘つかつてゐる。プレートの箱にバタを入れるとは變だが、これは東京からどなたかが心して送つて呉れたのだから仕方が無い。

柱の上部には印度支那の土人がつくつた木皿がかけてある。直徑約一尺、縁の一寸に黄、赤、紫で唐草めいた模樣をつけ、中心部は八幡の紋のやうな圖案で、極樂鳥のやうな羽根をはやした男と女とがひつついて立つてゐる。

サイドテーブルは丈夫な桿材で二段、上段には見渡す所右から不二一箱。俗にクリスマスフラワーと稱する所の、花だか葉だか分らぬやうな赤い葉（？）が青い葉の上に出る植物の鉢。

更紗のネッタレースをまとつて、立つてをどりをしたフラ〳〵・ダンスの人形。下段には支那のお茶碗で同じ頃に呉れた宏茶入つマニラの五十本入。上に矢風。菓子器がお年玉に呉れた兎の笑みたいな香が入つてゐる竹の香入れ。マニラの隣は、これはまた好きな人が見るとよだれをたらすが、何とかつくる所の燕麦の花活け。――フラ〳〵人形の後に、私の懐中時計がガチ〳〵云つてゐるのを、こゝまで書いて發見した。

この一帖で、地理的調査をやると、一々品物は書かぬが、獨、英、米、日、印度支那、加奈陀、濠洲、布哇、マニラの五國、北地域が集つてゐることになる。

その南隣は半帖で、こゝには小さな本棚がある。この本棚は最初二階へ、大きな本棚と一緒に置いたのだが、家が古い爲に二階が曲り、あわてゝこの部屋へ持つて來た。いはゞ居候であるが、それでもワイルド、カーライル、アントニイ・トロロープ、シュニッツラア、ゲーテ、イブセン、ビョルンソン、ストリンドベルグ、ハウプトマン、シラア、メレデイスの全集、または選集の原本　または獨逸譯が儼然として居候面をならべ、その上一番上の段にはスウヰスの小型置時計と、玩具の虎と、イカの取枠と、紐育で買つた札入と、ボルドウ製の銀貨入れとお客樣の居候をしてゐる。

この半帖　日、英、米、獨、佛、太平洋の南に島嶼があるまつてゐることと遠は、書かなくてもいゝだらう。

部屋の南側は、壁に並行して疊が二つ。その一つを占領して赤坊がねてゐる。この子は間違ひのない日本人だが、布團の上に敷いてある半毛布は、間違ひのないアイリッシ・ウールで、頭の傍つちよに投り出した毛糸の帽子は、間違ひのないイングリッシ・ウールである。だからこの、赤坊にかゝつては、愛國問題は起らぬ。――丁度今目をさまして、私の顔を見ながら、しきりに「マンマ」とか「ウマ〳〵」とか泣いてゐるが、これだけはエスペラントなんぞよりや餘程分りやすい世界語である。

赤坊と同じ一疊の北の端を占めてゐるのが、食卓である。これは當大阪府池田の道具屋で、十一圓で買つた。不細工だが丈夫でいゝ。實は新婚當時、如何にも新家庭的な一月堂の机を三越で買つたのだが、新婚の夢が覺めると共に癪にさわり、一夜斷然として斧でたゝき割つて了つた。所がその翌朝から早速こまり、社への出がけに道具屋で買つたのが、この食卓である。

食卓の上には三田燒の茶器が置いてある。三田は申す迄も

く有馬線の分岐點で有名だが、別に大した所ではない。只、三田焼は田舎味を帶びてゐて、中々よい、と云ふより、古い三田焼には中々いゝ奴がある。それから朝鮮の水鉢に赤氷のチョコレートがすこし入つてゐる。

この一帶、英、愛、日、鮮。

次の一帶には、神戸で買つた安火鉢と私とがゐる。火鉢には東京の父に貰つた本物の南部と明珍とがある。で、この一帶は日本ばかりみたいだが、私がエディンバラで風邪を引いて買ひ求めたスコットランドのウールのシャツを着、倫敦で買つた埃及木綿のズボンドをはいてゐることを念頭に入ると、日、鮮、埃の三地域が代表されてゐることになる。

最後の一帶は部屋の北側を東西に長く占る。ここには火鉢と長火鉢。長火鉢は食卓と同じ家で、同じ十一圓で買つたもの——十二圓もするかと思つてゐたら、十一圓なので吃驚した——で、更に驚く可きことには、チークで出來てゐる。まるで汽船の甲板みたいな奴だ。チークと云ふからには、いづれ印度あたりで象の鼻にまかれた過去を持つてゐるのであらう。

こゝで一言斷じて置くが、私は一體長火鉢趣味が嫌ひである。妾宅にでも置くのならいゝが、どうも奇妙なる月給取の家

壁に掛へつける可き品ではないやうな氣がする。それにも拘らず、この安物を買つたのは、實は銅壺がほしかつたのである。銅壺で燗をした酒がほしかつたのである。」

最後の一壁　日、印。

四疊半には入らぬが床の間がある。入江來布氏描く所の爽裕のかけ物、これには

地のもの、當然として南の湖

なる句が書いてある。杜の先生がこれを書いた。こゝで始めて四疊半らしい趣味が現れたと思ふと、その下にはお三寶に栗具、歳の暮、果物、蜜柑、てつぺんに紀州のポンカンが乗つてゐるのは、南天、日瞭、ポンスをつくるので燗をつかつて了つたからである。

床の間の右端には卷き煙用の矢が一本。左端にはゴチャ〱と——振りない一見ると——延音香、頗る大きなＩＩＯの煙草入、ＥＥＥのＣＥＮＭＡＫＥ、埃及のシガレット「ナチュラル」の罐（惜しいかな空である）、瑞典フロスト製の獵刀、昨冬渡來した父がおみやげに呉れたヨセミテ公園の熊のついたマッチ立てつき灰皿、名越國三郎畫伯が私の「パイプを咖へこ」

の底として畫かれた下繪を額に入れた一時、一面木堂右長が描かれた陶印。そして左の柱には、カルメンがカタ〳〵やるカスタニエットが一組。セヴイルのおみやげである。

床の間、日、英、米、瑞、西、埃。最後の字はエヂプトにも、ほこりにもなる。

更に進んで北の障子を開ければ、そこにはナヴアホ印度人(インディアン)の敷物があり、棚にはテイロールのリュックサックがあり、南の障子の外では獨逸ローラアが囀つてゐる。戸棚をあけると何が入つてゐるか見當もつかぬが、そこ迄云ひ出すときりが無いからやめるとして、この四疊半にゴチヤ〳〵と、日、英、米、獨、佛、瑞、西、埃、蘇、愛、濠、印、鮮、滿、加、布、マニラ、印度支那と、七國十九地域にわたる物品が集り、その中で飯を食ひ、酒を飲み客に接し、時に原稿を書き、トロロープを讀み、そして赤坊は多くこゝで生長して行くのだから、日本は不思議な國である。

「パイプ店」

私は時々いろんなことをやつて見度くなる。勿論その多くは空想にとゞまるが、それでも隱居仕事か道樂商賣として考へると。中々面白い。

一時は牧場で大農場を經營して見度かつた。農業といふよりは、大農場を馬に乗つて廻り度いのである。又ある時は、日本アルプスの案内者――インテレクチュアル・ガイドなる名稱をつけて――にならうかとも思つた。おでん屋を夢みたこともある。もつと高尚なのは、ウヰリアム・モリスみたいな印刷、製本をやることだが、とても資本が無いから、この夢想も二三日で消えて了つた。

自分でもよく承知してゐるが、どうせ私が何か商賣めいたことを始めれば、それは士族の商法で、結局損をするにきまつてゐる。初から損をするにきまつてゐる商賣なら、やらぬ方がいい。だが、それにもかゝはらず、矢張り何かやり度い。目下、三四十年後の隱居仕事として最もやり度いのは煙草屋である。以下いさゝか私のやり度い煙草屋を描いて、同好の士の批評を仰ぎ、私自身の空想に自由を許して、この佃春の一夜を送らうと思ふ。

第一に店を開く場所である。どこでもいゝが、どうせ日本でやるからには東京としたい。東京の銀座、それも大通を一寸入つたところに、間口は二間としておくか。

店の名前は大いに考へる。十六世紀の詩によつて、Pipe and Can としてもいゝし、バリイの傑作の名をかりて My Lady Nicotine としてもよく、また私の煙草、クレーヴン・ミックスチュアの商標をそのまゝ Black Cat としてもいゝ。若しこの三つの中の一を採るならば、ニュールンベルグあたりの鍛冶屋に注文して、薄い鉄板にすかしぼりを施した看板をつくる。これは店の正面に直角に、往来へつき出すのである。

然しこの三つは、皆六箇敷い。殊に第一の "Pipe and Can" なんて来た日には、何のことか訳が分らぬ人が多いであらう。これでは到底繁昌しないから、思ひ切つて「石川煙草店」とする。そして店の軒には、横に金文字で

K. ISHIKAWA. TOBACCONIST.

とやる。もう一つ思ひ切つてその上へ

ALL KIND PIPES AND TOBACCOS

とやつてもいゝ。これは妙な話だが、大阪の犬やさんで、[illegible]にも ALL KIND DOGS と看板を出してゐる人があるから、その真似をしたのである。

専賣局で売れる(?)赤と白の「たばこ」といふ奴は、どこへ出したらいゝか分らぬ。面倒だつたら店の内につるさう。そんな事をしてはいけない規則があるのなら、パイプ専門にする。そして看板も只

THE PIPE SHOP

とする。

この THE PIPE SHOP は、倫敦タイムスが只 THE TIMES と称するのと同じく、すこぶる痛快である。だから店の名前はこれにしてもいゝ。

店の往来に面した所は、間口二間のうち、一間半を硝子張のショウ・ウヰンドウにする。こゝには云ふ迄も無く ALL KIND PIPES を並べるのだが、あまりゴテゴテとならべず、ほんの僅か、それも日本の所で出る位高価な奴を——先づ最低三十四——陳列する。かうして風来坊を追つぱらはないと、會社員や商店の小僧が、昼食時間に冷かしに来て困るだらうと思ふ。最低三十圓を見て、而も戸をあけて入つて來るお客なら、本當に金があるか、その銀行をだまして二十萬圓盗んで來たか、又は特に主人、即ち私の御高説を伺ひに來たかと認めて差支へあるまい。もつともこれでは商賣になりさうも無いが、何、本當にやるんぢやあ無いんだから、何を考へても構はない。

ショウ・ウヰンドウに一間半とられると、入口は三尺になつてしまふ。三尺はどうも狭いが、たいていの人ならば通れるであ

らう。そこが通れたやうなテフに、[illegible]で、入口を入ると右手は壁。こゝは一面に、深さ五寸位の硝子戸棚にして、ありとあらゆるパイプをかけて置く。戸棚を銀鼠の天鵞絨で張ると、パイプが引き立つて見えていゝ。

左手も壁は硝子戸棚にして、パイプの箱入りや、パイプ架や、若し煙草も賣るのなら各種の刻煙草を仕舞つておく。だから此の戸棚は、右側の奴みたいに、奥行五寸といふ譯には行かぬ。一尺五寸位は必要であらう。その代り高さは、右側のは六尺を越してはお客様に見えないが、こいつは天井まで屆いてもいゝ。

そこから三尺前に、硝子の陳列箱を置く。脚は鋼鐵で高さ二尺、その上に丈夫な硝子で高さ、奥行各二尺、長さは一間といふ、一寸博物館のミイラ箱みたいなのをのせる。この箱は、陳列箱と同時に勘定臺の用をするのだから、非常に丈夫な硝子でつくる必要がある。その上お客の胸の邊に來る角のところには、細長く、箱の内部だけを照らすやうなガス入電燈を裝置する。この電燈は、箱の上にも、スタンドのやうにして、二つ三つ建て度い。

これでまア、店の準備は出來た。どこからかパイプや煙草の香をとゞいて、陳列[illegible]「[illegible]箱との間に椅子を添へて、ふんぞり返つてゐる。[illegible]には、お客に對するエティケットとして、唄はぬ方がいゝであらう。——これ丈でも私はパイプ店のおやぢにはなれさうもない。——猿飛佐助の立本でも讀んでゐると、ショウ・ウヰンドウの三十圓に吃驚しない奴が入つて來る「いらつしやい!」なんて云はないで、只頭を一寸さげる。お客はヂロ〳〵その邊を見廻して、パイプを買つて出て行く、口錢は一割五分ときめるんだから、大部儲る。

然しこんなお客では面白くない。入つて來るなり、「とてもいゝパイプはありませんか。八十圓位までなら揃へるんだが。」とでも云ふ人がいゝ。私は一寸考へて、先づスタンドのガス入電燈を點じ、ありとあらゆるいゝパイプを持ち出して、電燈の光でくはしく各個のパイプの木理を見せ、何故にこのパイプが六十圓で、このパイプが八十五圓であるかを說明する。ガス入電燈の光はつめたくて氣味が惡いが、そのかはり如何に微小な傷でも浮き出させる。お客は本當に氣に入つた物を買つて歸る。

女の客が來ると、又別の方法をとる。私は先づ猿飛佐助を床に落して、あまり露骨で無く、觀州をやるのである。マダムとマダムゼルとを第一に見わける。若しマダムで、如何にもいゝ

店の名前は、大いに考へる。十六世紀の詩によつて、Pipe and Can としてもいゝし、バリイの傑作の名をかりて My Lady Nicotine としてもよく、また私の愛喫、クレーヴン・ミツクスチユアの商標をそのまゝ Black Cat としてもいゝ。若しこの三つの中のを採るならば、ニユーンベルグあたりの銀細工に注文して、厚い銀板にすかし彫りを施した看板をつくる。これはその正面に直角に、往来へつき出すのである。

然しこの三つは、皆六ケ敷い。殊に第一の Pipe and Can なんて来た日には、何のことだか分らぬ人が多いであらう。これでは到底繁昌しないから、思ひ切つて「石川煙草店」とする。そして店の軒には、横に金文字で

K. ISHIKAWA, TOBACCONIST.

とやる。もう一つ思ひ切つてその上へ

ALL KIND PIPES AND TOBACCOS

とやつてもいゝ。これはかなり野暮だが、大阪のたやさんで、現にも ALL KIND PIPES と看板を出してゐる人があるから、その真似をしたのである。

新宿辺で見かける(?)赤と白の「たばこ」といふ看板は、どこへ出したらいゝか分らぬ。西洋だつたら店の内につるさう。そんな事をしてはいけない規則があるのなら、パイプ専門にする。そして看板も只

THE PIPE SHOP

とする。

この THE PIPE SHOP は、倫敦タイムスが只 THE TIMES と称するのと同じく、すこぶる痛快である。だから店の名前はこれにしてもいゝ。

店の往来に面した所は、間口二間のうち、一間半を硝子張のショウ・ウヰンドウにする。こゝには云ふ迄もなく ALL KIND PIPES を並べるのだが、あまりゴテゴテとならべず、ほんの僅か、これも日本の人の愛用する位高価な奴を一つ一つ好低三十四陳列する。からして風も埃も通つてはならはないと、合耽りや商店の中など、専門に来て困るだらうと思ふ。結局二十間を出て、門もドアをあけて入つて来るお客なら、本当に分かあるか、その煙管行かたをして二十間盗んで来たか、又は特に土人、即ち私の御商売が会いに来たかと思つて来るへあるまい。もつともこれでは商売にならないかもしれないが、何、本當にやるんぢやあ無いんだから、何をどうへても構はない。

ショウ・ウヰンドウに、間口とられると、入口は二尺になつてしまふ。二尺はどうも狭いが、たいていの人ならば通れるであ

らう。そこが通れるやうなテブは、全部とりすてて、入口を入ると右手は壁。こゝは一面に、深さ五寸位の硝子戸棚にして、ありとあらゆるパイプをかけて置く。戸棚を銀鼠の天鵞絨で張ると、パイプが引き立つて見えていゝ。

左手も壁は硝子戸棚にして、パイプの箱入りや、パイプ架や、若し煙草も賣るのなら各種の刻煙草を仕舞つておく。だからこの戸棚は、右側の奴みたいに、奥行五寸といふ譯には行かぬ。一尺五寸位は必要であらう。その代り高さは、右側のは六尺を越してはお客様に見えないが、こいつは天井まで屆いてもいゝ。

そこから三尺前に、硝子の陳列箱を置く。脚は鋼鐵で高さ二尺、その上に丈夫な硝子で高さ、奥行各二尺、長さは一間といふ、一寸博物館のミイラ箱みたいなのをのせる。この箱は、陳列箱と同時に勘定臺の用をするのだから、非常に丈夫な硝子でつくる必要がある。その上お客の胸の邊に來る角のところには、細長く、箱の内部だけを照らすやうなガス入電燈を裝置する。この電燈は、箱の上にも、スタンドのやうにして、二つ三つ建て度い。

これでまア、店の準備は出來た。どこからかパイプや煙草の香などおいて、[illegible]の[illegible]と一[illegible]箱との間に椅子を据えて、ふんぞり返つてゐる。帳場は、お客に對するエティケットとして、[illegible]はおだかいゝであらう。——しこれ丈でも私はパイプ店のおやぢにはなれさうもない。——猿飛佐助の豆本でも讀んでゐると、ショウ・ウヰンドウの三十圓に吃驚しない奴が入つて來る。「いらつしやい！」なんて云はないで、只頭を一寸さげる。お客はチロ〳〵その邊を見廻して、パイプを買つて出て行く。口錢は一割五分ときめるんだから、大部儲る。

然しこんなお客では面白くない。入つて來るなり、「とてもいいパイプはありませんか。八十圓位までなら拂へるんだが。」とでも云ふ人がいゝ。私は一寸考へて、先づスタンドのガス入電燈を點じ、ありとあらゆるいゝパイプを持ち出して、電燈の光でくはしく各個のパイプの木理を見せ、何故にこのパイプが六十圓で、このパイプが八十五圓であるかを說明する。ガス入電燈の光はつめたくて氣味が惡いが、そのかはり如何に微小な傷でも浮き出させる。お客は本當に氣に入つた物を買つて歸る。

女の客が來ると、又別の方法をとる。私は先づ猿飛佐助を床に落して、あまり露骨で無く、觀相をやるのである。マダムとマドムゼルとを第一に見わける。若しマダムで、如何にもいゝ

人で、[illegible]たら、私は[illegible]の、スーム[illegible]の[illegible]美しいパイプをすゝめる[illegible]しいスームのパイプは、日本以外では吸へない[illegible]のパイプなら、誰でも好きになるといふのは一これが御主人に[illegible]ことになつて、御主人の足を[illegible]に[illegible]であらう。御主人は、一層早く家に帰つて、あのパイプを吸はうと思ふ一念に、[illegible]みた、ただ[illegible]

[illegible]といふのは、あの[illegible]御主人を[illegible]し、命令するやうな[illegible]であらう。こんな人には、スームの短い、バランスのとてもよく取れたパイプを押しつける。これを贈られた御主人は、日曜日の朝、食後に一服へてゐるなり、ただ[illegible]ウンダアルストに[illegible]れてゐ、パイプが目にした[illegible]に[illegible]あらう。[illegible]人にあらずしてパイプにあり、即ちパイプを贈つた[illegible]ことになるから、[illegible]と云はねばならぬ。

ある時は、若い、美しい[illegible]いてはいけない。パイプ[illegible]の主人たる私はパイプを[illegible]でゐるのだから。——[illegible]に入つて来るのであるが、そして「私、あの、パイプがほしいんですが……」と口籠る。私はこの娘に、いゝ人がゐるんだな、と思ふ。私は日本の若い男を[illegible]して、[illegible]たり、[illegible]よく

肩から[illegible]ドリる。「人[illegible]ですが、[illegible]」私はこのいやうに[illegible]といふ。「あの、そのお方は初めてパイプをお吸ひになるんですか、それとも大分パイプにお詳しいんですか?」突然の質問に、お嬢さんはすこしドギマギするが、ピックホックをみたいに、ダッドウホールに[illegible]人を見て安心し、「初めてなんですの」と云ふ。そこで私は、あらゆるパイプを例子の[illegible]に[illegible]、[illegible]お嬢さんの[illegible]にさせる。何故かと云ふに、[illegible]パイプを吸ふ人なら、そして日本[illegible]に[illegible]つてゐる青年なら、お嬢さんが[illegible]な[illegible]にも無様に見えるからである。反対に、「え、大分パイプを持つてゐます」と云ふ[illegible]だつたら、私は[illegible]のパイプ[illegible]ことごとく時代[illegible]して、プリンス・オブ・ウエールズが持つても[illegible]しくないやうなパイプを、お嬢さんが[illegible]に[illegible]して[illegible]る。

だが、[illegible]、女中さんに[illegible]て、[illegible]りのは、お[illegible]けたり[illegible]つてなにをしてゐたら、若し彼女のフィアンセがパイプ好きなら、私は[illegible]くれた、下品な、[illegible]のまゝのみたいなパイプを、[illegible]やる。前[illegible]青年をなふんでゐる。こんな場合に[illegible]代に、いやなパイプもストックしてゐるのを、今[illegible]た

パイプ放送

大阪放送局から電話がかゝつて來て、二月一日の晩の趣味講座があいてゐるから、何かパイプの話をしろとのことであつた。私は筆を執つては、(一寸話は大きいが)千萬人に對しても平氣だが、どうも講演と云ふ奴には閉口する。しかもそれがラヂオなる、いまだに私には理屈の分らない、即ち薄氣味の惡いものになると、注文を聞いた丈で寒くなる。だからその旨、電話で斷つたが承知しない。皆さう云ふけど、とにかく一度やつて御覽なさい。たいていの人は放送室が氣持がいゝので、つい喋舌り過ぎる位だ、との事。それならやります。但し私の放送が下手で、JOBKの評判が惡くなつても知りませんよ、と云つておいた。

大阪放送局は三越にある。七時一寸前にエレヴェータアで上つて行くと、出た所が食料品部の横つちよで、ガランとした部屋。どこかで猫が啼いてゐた。あれは番犬ならぬ番猫ださうで、なる程三越では猫が鰹節の番人をするのかと感心した。

さて放送局の客溜りへ入ると、そこに小さなラウドスピーカアがあつて、女の聲が

「はい、それではもう一度やり直します。エー、ビー、シー、ディー。エー、ビー、シー、ディー。」と云つてゐる。はてな、日本にABCDなる放送局があるのかしら？ いや、これはきつと新米の女アナウンサアが、どこかで練習をしてゐるのだ。成程、あゝ、エー、ビー、シー、ディーの發音が惡いので[illegible]に叱られて、それでやり直してゐるのか。アナウンサアも樂ぢやないぜ。なんて、まだ見ぬ女アナウンサアに同情して聞いてゐると、どうも様子がおかしい。ふと壁にかけたプログラムを見ると、これは大阪で有名な婦人英語學者が、初等英語講座を放送してゐるのであつた。

講座がすむと、しばらく休み。そこへ私のあとで芝居の合評をするメムバアの中、齋藤與里さんと木谷蓬吟氏がやつて來られる。與里さんは前から知つてゐるので、色々な話をしてゐると放送局の人が、「二十分から三十分ばかりニースがあり、すぐあなたのを願ふから、まだ早いけど今から放送室へ行つてくれ」と云つた。立ち上ると與里さん、氣毒さうな顔をして「君、もう行くのかい？」と聞く。何だか手術室か斷頭場かへ行くやうである。

放送室の工合や、マイクロフォンの形や、その他のことは今さら何も書く必要はあるまい。もうラヂオは「新しい物」の域を脱してゐる。只私は話をしてゐる最中に、ふとこの寒い夜、どこかのラヂオ屋の店さきから、私の聲が聞く人も無い暗やみに、徒に流れ出てゐるのではあるまいかと思つて、いさゝか悄氣た。

私はこ備へつのやうな話をした。

何故私はパイプを喫ふか。人間が煙草を喫ふ方法は多い。アフリカの土人は地面に穴を掘つてそこで煙草の葉をもやし、はらんばいになつて煙を吸ふ。紀州のある地方では刻煙草を椿の葉に捲いて喫ふさうである。こんな特別な方法はともかくとして、シガアもありシガレットもあり、日本には昔ながらの煙管がある。然るに何故私はパイプを喫ふか？

地面に穴を掘る方法は、やつて見たことがないが、雨でも降つたら不可能である。刻煙草を椿の葉で捲くのは中学時代にやつて見たが、練習不足のせいか、どうも面白い味がピンと来ないでてこずつて困る。葉が乾かなければ煙草も落ちる。便利に喫すまいとすると火と煙草とが一緒くたに口の中へ入つて来る。シガアはいゝが高すぎる。シガレットはそれが悪いとすすめ少く、その上煙を吸ひ込んで了ふので口がくろくなる。煙管は一服の分量がすくな過ぎる。かるが故に私は雨が降つても吸へ、松い所に於る危険が無く、俺もやすく、紙を喫はずに済み、一服の分量も多いパイプを最も好んで喫ふ――

勿論私は約二十分にわたつて、もつとくはしく、もつとユンヴィンシングな例をあげて、パイプの功徳を説いた。ただすでに所謂演題を貸つてゐる以上、またそれをすつかり書いて今度は原稿料にするわけには行かない。だからこの位でやめておくが、私のついたことが二つ。その一つは原稿用紙の枚数と時間との関係で、私にはあらかじめ原稿を書き、若干のまくらを除いてはほとんど原稿用紙九枚で丁度廿分かかり、あとで傍聴の方で聞いてゐた人から、いつもの君に似合はずゆつくりと よく喋舌つたと云はれた。もう一つは放送に於けるひとつのこつで、こいつは余程に注意が要ると思つた。御話を諒解すると云ふやうにも、果して問題何千人だかの聴取者が一生懸命に聴いてゐたかどうか分らず、中には一寸これなんぞやしとたたいたとたんにつまつたのもあるかも知れないのに、如何に自分が問いかけて一同に云々は出来ない。これでお仕舞に[illegible]ても[illegible]には見えない。草稿を書く時には、この所をへてゐなかつた。何と云はなくても説明とんぼで、納りがつかない。仕方がないから一枚のパイプのおすはこれでお仕舞です。お辞儀をしたつて皆さんには見えないから、お辞儀の代りに、パイプをよろしく！と云つた。よくもへるところも拙い。

だが暇して云ふと、[illegible]の人が云はれた如く、ラヂオの放送はさう[illegible]見えないから、私は、ある時に、聴衆の顔が見えないから こんなふことを分つたかどうか見当がつくまいと思つて心配したが、考へて見れば分らない人は部屋を出て行くか、頭にかぶつてゐる物を外すか、金魚の鍵みたいな物を廻してガーガーにしてしまふので、本当に話の分る人と、分り度い人とだけが聞いてゐるのに相違ない。さう思ひついたので、存外楽に話をすることが出来た。

生きてゐる鬼

長谷川伸

【一】

往來の男も女も皆ひとしく地面の一ところを瞶めた、そこには異樣な物が、日の光りにきらきらと焔のやうに輝いてゐた、怪しいこの小さな光り物を、遠卷きにして瞶めてゐる人人は、お互に顏を見合せても何一つ言葉が出せなかつた、どの顏にも危惧が漂つてゐた、女の中にはもう泣きさうな顏さへあつた、それでゐて人は集る一方だつた。

「退け、退け退け」

元氣のいゝ聲で怒鳴りつけながら、人混みを背中から押し分けて、前へ出た馬乘り袴を穿いた旅裝の若武士が二人、一人は寒竹の鞭を腰にさしてゐた。一人は朱總のついた鞭を手首に絡め鞭のさきを半ば押し立てゝゐた、二人はこの先の馬場へ馬術を練習しに行くぶらんさん出の異人警護の士であつた。

前列に出た二人は、だれの說明を待つまでもなかつた、往來の人の足で踏み固められた地面に、小さな光り物が黃金の焔をあげてゐる、人人はそれに恐ぢ怯み怖れてゐたのだ、二人もまた口の中で「お」といつて容易には近づかなかつた。

「これは何時からあつたのだ」

鞭を腰にさした方が、右の方を向いて皆に訊いた、だれもそれに答へなかつた。

「だれも知らぬのか、では、一番先に見つけたのは、だれなのだ」

皆は矢張り答へなかつた、で、今度は左の方へ顏を振り向けて訊いたが、皆はぢりぢりと尻ごみをして、答へやうとする者がなかつた。

「だれも知らぬ、これ程ゐて、だれも知らぬか」

鳴りを鎮めた人人は、いつまでも問ひに答へなかつたが、眼

は地上の光り物から二人の若武士に轉じた、若武士二人は大勢の眼が自分達にあつまつたのを知ると同時に、相向ひ合ひに顔と顔とを見交した。

「傍へ行つて見やうか」

と鞭を手にした方がいつた、相談をかけられた方は、返事の代りに腰の物を手にとつた。

「まさか、この儘には出來ないなあ」

「だが、何だらう」

「さあ、餘程小さな物らしい」

かう囁き合つてはゐるが、急に近寄つて行く氣にはなれなかつた。で、二人は互にそれとなく讓り合ひたさうであつた。

見てゐる側では、血氣な武士が二人現れない前は、たれもかれも同樣に、怪しいこの光り物と首つ引きの氣がしてゐたが、かうして乘り出した武士があつてからは、もう自分達はたゞの見物の位置にある氣がしてきた、で、當然、責任をのがれた輕い氣もちで、勝手なむだ口か、先づ他人の背後に首を縮めてゐる奴からはじまつた。

「きたない、早く見屆けなよ」

「いよう宮戸川」

さまざまに交はされる私語を衝いて、この混つ返しが後の方から高らかに叫ばれた。

若武者はむつとした。

宮戸川といつたのは、明かに淺草の觀世音縁起をとつていつたものだ、大變古い昔の昔、釣を垂れ網をひく武藏の國宮戸川の漁夫、檜熊の濱成、竹成兄弟が江戸の海で觀世音の像を引きあげた、それを今こゝの地の上で光つてゐる物に當嵌め、佛像發見であると假りに見ていつた譬ちだつた、が、見物の多くは默つてゐた、僅に二三の者がこの寓意を解し、くゝと低く笑ひ殺した。

この中に、ぶらんさんといふ私語が、若武士の耳にはひつたので、二人共怒つた。

櫻田門の變があつてから、旗本の厄介と稱へられる二男三男、何もする事なしのぶらんさんの、扉はれの口が開かれた、坂下門事件などがますますぶらんさんを狩りあつめさせ、その後、世の形勢の險しきにつれて、ぶらんさん多用時代がめぐり來つて、いろいろの用途に振り向けられ、殊にこの頃は江戸にはひつてきてゐる異人警衛に、ぶらんさんは少からず採用されてゐた。

二人はぶらんさんといふ私語を侮辱と聞いて、顔と顔とを見合せた瞬間に、四つの眼は期せずして決心の光りを放つた、思

にぬた[illegible]勇士にたりかけた二人は、つかつかと近づいて行つた。その足許近くになほ一道の光りをあげてゐる怪物は、龍の眼ではないかと思はれる形ちをしてゐた、株の知れぬ不思儀な凹凸をもつた眞ん丸いこいつは、地面にぴたりと吸ひついた一つの生首から、金色の氣を吐いてゐるのであつた。

「ほツ、これは」

「あーー見ろ生首、獄門首」

鞭をとり直して若武士はめいめい一足後へひいた。すわといへば鞭をあげて叩き伏せる意氣組だ。

見物は固唾をのんで控へた。

【二】

「見ろこれを、この獄門首、何といふ生生しさだ」

「うむ、生きてゐるやうだ」

「穢はしい」

「穢はしいーーが、どうしやう」

「さあ、何としたものか」

二人は生生しい人の首形に、油斷のない眼をそゝぎながら當惑した。

もつと大きい物だつたら、引つ提へて押へつけ、變化の働き[illegible]、ところにも足らぬ形ちが餘りに小さ過ぎる、しかし、この首は[illegible]してゐればゐる程、唇を動かしてものをいひかけさうだ、瞬きをせぬ眼はあらぬ方を今向いてゐるが、ぢろりと二人の方へ瞳を向けさうな氣がした、首は現在では横貌を見せてゐるが、不意に二人の足許に顔の正面を据ゑさうだ、二つの眼から凄じい眼線が放たれるのではあるまいか、口を開いて何か恐しい事をいひ出すのではあるまいか、と思ふと二人は落着いてはゐられなかつた。

手早く二人共鞭を腰にさし、刀の鯉口を切つて本腰を据ゑた。少しでも地上にある金色の首が動きかけたら、日本刀の斬れ味を賴みに、抜き打ちにする覺悟を極めた、二人が二人共、顔色が變つて頬や口許の筋がぴり〳〵と躍動しはじめた。

見物は事態のただならぬのを知つた、緊張めた若武士の態度に氣壓され、むだ口を叩く餘裕はもうなくなつた、から咳をせく者もなく、唇をひしと閉ぢ息といふ息は大きく皆うねりを打つて、麻布古川べり[illegible]町に人なきが如く森となつた。

時に、どこから出てきたものか、一個の怪奇な生き物が、人混みの中から大股にはみ出して、金色を爛とたちのぼらせる小さな首に近づいてきた。體に着けてゐるものは古く色あせた下草の[illegible]と、鼠色に汚つた[illegible]は[illegible]らしい[illegible]。[illegible]

頸に二重廻はして胸紐状にした格好が、甚なしく尋常ではない、が、しかし、それだけならまだ奇怪なといふ程でもない。日頃横着をする人には時として、こんな姿を見かけないものでもない。が、奇怪だといふのは其の風采ではなく、顔の色が生と白い。そればかりか佇むが抜群の高さである事だ。たとへに大男といふならば、力士を見慣つてゐるこゝの人達は驚きもしまい。驚いたのは褐色の髪の毛を無雑作にたばねて肩から背に垂されてゐるのが、月代の痕もない珍しい髪形と共に奇異だつた。江戸には人の数が夥しくある。けれども、黒毛赤毛はあつても褐色の髪の毛をもつた人間はゐなかつた。然るにこの男は日本人無類の色をした髪の毛をもつのみか、顔は色が乳のやうに白く、頬には血走るやうな色が浮いてゐる。手足のあたりには、血が滲んでゐるらしく、却つて無気味に赤くなつてゐた。

この大男が大股に歩いて出て、地面の上の金色に吸ひ寄せられるやうに近より、やがて腰を折つて眼を近づけ、しげしげと見入つてゐる態を、若武士はぎよつとして眺めた。何たる男氣。それとも白痴者か。いづれその二つの中でなくては、こんな振舞ひが出来るものではないと思つて、互に眼と眼とを見合せた。

奇妙な男は、いつまでも根気よく見極めてゐたが、長い腕をやがてにゆつと出した。

「おゝ！　彼奴あれを掴むぞ」

「あ、無法な！」

若武士が口早にいひ合つてゐる間に、彼の男は常人よりは度外れた長さの二本指で、首のついてゐる金色の固い物を摘みあげた。

見物は身動きさへすら自由には出来ない気詰りさで、森閑とした。

「あ、掴んだ」

「あ、あ、だが異変は起らぬ」

彼の男はすつくと腰をのした。そのとたんに、指の股から金色の首が辷つて、きらきらと光りながら元の地面へ戻つて行つた。そしてチーンと冴へた高音を立てた。

「やーーー、小判に似た音、さうだらうか」

「うむ、黄金の音だつたな」

若武士は一度に苦笑した。二人は殆んど命がけで物騒がつた物が、何であるかを漸く悟り得たのであつた。紛れもなく寺楠寺にゐる紅毛人所有の服の飾りの黄金細工、それに必らず違ひはないに極まつた。

さうとわかつてしまへば、詰らぬ苦労をした後悔が胸の中で

おとなとして、腹立たしさに怒つてきた。

「こら、差出た事をする奴だ」―

「その品よこせ、お前はそれを持つて行く氣だつたらう、怪しからぬ奴」

彼の男は慌てて、首のついた黄金細工を掌へのせて、普通より長めな右手を差し出した時、若武士は手首から二の腕が、尋常ならぬ白さである事と、風態に似合はしくない髪の毛の異彩とに漸く氣がついた、「あ」と口走つた二人は更に愕くべきものを見た、この男の唇は血よりも紅く、鼻が稲穂鉾のやうに鋭く、眉毛は棕櫚の如く、瞳は青茶褐色でしかも秋の夜の星の如く光つてゐる事であつた。

「あ、紅毛人だ」

「――それにしても服装が」

「駕籠かき人足にも劣つた態だなあ」

【三】

雑武町の往來を騒がせた黄金細工の首と、古襦袢古股引の噂の紅毛人と、二つの變事に出會つた若武士二人は、何がなし昂奮して後をついてくる大勢を尻目にかけ、メリケンコンシロの異様な旗のかゝげられてゐる萬福寺へきた、一人は例の黄金細工を、破れ約束いにしておにおんでおききにおんでゐた、一人は追剝ぎにあつた紅毛人――さうとしか考へられない――の先に立つて案内顔をしてゐた。

屯所から五六人がそれと見て、鉢のやうに飛んで出てきて、ぐるりと包圍してしまつた、どれもこれも刀を腰にした連中で、笑ひ顔などしてゐる者は一人もゐなかつた、古股引の紅毛人は顔を土色にして戰慄した。

「何だいその抓んでゐるのは」

「この紅毛人はどうした譯だ、川越し人足といふ態をしてをるなあ、おゝ徒足だ」

二人はここで金細工の首を一同に見せたが、見ただけで尻ごみばかりした、一人として手にとらうとする者がなかつた。

「穢しい物を拾つてきたな、どうで碌な物ではあるまいに、古川へ投げ棄ててくれればよかつたものを」

「馬鹿をいふな、古川の底にこんな物がゐたら諸人が迷惑する、こんな奇態な物は何をするかわかつたものか」

「といつてどうするのだ、して、この紅毛人はどうしたのだ」

二人は交り合つて今しがたの事を語つたが、だれも古股引の紅毛人と、手真似にしろ話をしやうとするものがなかつた。

「紅毛人もその首も早く渡してしまへ」

一同は口口にすゝめた、裝飾用の金細工らしいが、瑣細な事はわからない、見る眼の穢れになる獄門首などに、いつまでも拘り合つてゐたくない二人は、境内の敷石を急いで歩いた、その後から彼の古股引の紅毛人が、がたがたと顫へながら恐しさうに跟いて歩いた。

「可哀さうにあの紅毛人はメリケン國の者ではないらしいな、あの歩きつきを見ろ、びくびくとしてゐる、異國の者とは全くあれた、だが、年にしては大きな圖體だ」

のんきさうに同僚がいふのを聞き流しに、二人はまだ張り詰めた氣もちで歩いた。

左手の坊から、この頃すつかり聞き慣れてきた靴の音がして、日本人に似通つた顔つきの紅毛人が出てきた、この人は愛嬌がよいのと長崎訛りはあつたが日本語が出來るのと、そして伊達の女を引きつけてゐるのとで、だれよりも一番先に知られたヒウスケン通譯官だつた。

お世辭者の通譯官が、愛嬌笑ひをして、よく唇の代りに間に合う眼で二人の若武士に何事ですねと訊いた、その眼が二人から逸れて古股引の紅毛人の上へ行くと、ヒウスケンの顔がくらくなつた。

「これ、この品、この品、私、そこ、直ぐそこで、近くあります、拾ひました」

と、いひながら、指で抓んできた黄金細工の首を見せると、相手の紅毛人は眉と眼との間を、思ひきりひろげて、紅を塗つたらしい口をあけて笑つた。

「有難う、有難う」

ズボンのかくしへ手を入れて、小さな丸い物を七八つ出して、左の指さきを掌へやつて數へてゐたが、忽ち笑ひながら無雜作に件の首を受取つた。

「私のです、落しました、有難う」

輕快にお辭儀の眞似をして、掌をすなほに二人の前へ出し、小さい黄金色の物を見ろといふ顔つきを相圖のやうに振つて見せた。

二人はヒウスケンの掌を見た、そこには今し方抓んできたのを入れて同じ形ち同じ色でどれもこれも首を生々と彫りつけた物があつた。

二人は顔を見合せ、ぐつともいへなかつた。

「おかね、私、國これ小判」

いゝ音をさせてヒウスケンはかくしへ入れた。

「小判、あれが」

「あちらではあれが天下の通用品か、ふうむ」

二人ともつい気になつたか、二人には何かわからぬ奇妙な言を聞いた。ヒウスケンの顔を見ると、べらべらと舌が妙な形をさして動いてゐた。顔は古股引の紅毛人に向いてゐるからヒウスケンは徒足の紅毛人に、どうした譯かと尋ねてゐるのだとわかつた。

「これで役はすんだなあ」

と一人がいへば、一人は首肯いた。

「異國の談合を聞いてゐても無益だ、さあ引きとつて休息しやうか」

二人は門前の屯所へ引返しかけた、でも、多少の心殘りと好奇心があつたので、振返つて見るとヒウスケンは、いつもの愛想顔をどこかへ忘れたやうに恐しく悶苦しい顔つきをして、舌を無性に卷き返しながら、耳にもとまらぬ早さでぺらぺら獨りでいつてゐた。古股引の紅毛人は凋れ返つて、棒杭のやうに、そこに突つ立つて身動きもせずにゐた。

それから程たつてから、ヒウスケンからだといつて、三本の硝子徳利にはいつた物をくれた。何物だかわからないが、一應、支配の頭に伺ひを立てると、此些たる飲料なれば指圖に及ばぬ勝手にいたしてよろしからうといふ事であつた。

「さあ、この中にどういふ物があるか、だれも知るまい。皆、

寝た、見た、聞けるなら」

だが、その夜陀太の耳にはなかなか何かなかつた。

【四】

露之助は人間といふものは、自分とは皆が皆違つてゐるものだと思つてゐた。今まで見た人間といふ人間は、一人殘らず、髪の毛も黒い眼の玉も黒かつた、それればかりか生みの母もその又母も父もすべて黒い眼をもち黒い髪の毛をもつてゐたのであるのにたゞ一人露之助だけが髪の毛が褐色で眼の色が碧だつた、物心つく頃からどうして自分だけがさうなつたかわからなかつた。

子供の時分、祖父が、こんな眼の色をして物が見えるのか知らんといつた。見える筈はない多分見える振りをしてゐるのだらうと祖母がいつた。だが、露之助は火を見て赤いといつた、墨を見て黒いと一度だつていつた事はなかつた、碧い自分の眼でこんなによく物が見えるのに、外のものは黒い汚ない色の眼をしてゐる、あれでも自分と同じやうに物が見えるのか知らんと疑つた事も一二度あつた。

露之助の體は雪より白い、と家の者がよくいつた、それは全くさうだつた、生みの母の體でも自分程に美しいものではなか

つた、まして祖母や祖父やはくらべ物にならない汚い顔だつた、が、汚ない祖父母に綺麗な顔の露之助を憎がつた、何とかいふと、手前などは殺つぶしだ、くたばれ、くたばれといつた、時には露之助を殴つた、その度に母も矢張殴られた。母は露之助をいつも庇つた。

いつとはなしに露之助は、自分の顔の色が美しいのがいけないのだと気がついた、それからは成るべく汚くすることに心がけた髪の毛の色も悪いのだと思つて、炭俵の煤を塗つた、その時だけは祖父も祖母も、山の一つ家が倒れさうな笑を一笑つた。だが、この畜生の眼がいけないといつて、結局はたゞ眼り露之助に礫を投げつけた。

露之助はそれから後は家へ帰るのが厭はしくなつた、母だけはたつた一人の味方で、祖父母のゐない時には、大きな顔の露之助を引き寄せた、子よりも小さい母親はさめ／＼と泣いた。そんな時、露之助も矢張涙ぐまずにはゐられなかつた、が、泣くのも容易ではなかつた。何時で祖父母がそれを見てゐないとはいへなかつた、三度に一度は母と子とが相抱いて泣いてゐる所へきて、一度こ二人共殴られるのであつた。そんな時には祖父はいつもよりも激しく怒つて、地の上に数限りなく踏み付けながら母子を殴つた。殴られるものよりも殴つてゐる祖父の方が、動へ垂れ流させる涙はいつでも多かつた。

「泣きやがるな、うぬ等が泣くより俺が方で泣いてゐるのがわからねえか、うぬは泣く位なら何でこんな事にした、生れ在所を捨ててこんな山住居をたれがさせた、うぬとそこにゐるうぬの子おやれえか、この不孝者めが、親も家も台なしにした、死んでも先祖様にすまねえと思ふので俺は死ぬ事も出来ねえ」

いつも極つて祖父は大地に倒れ伏し、聲をあげて泣くのが終だつた。

「悪いのはわしだ、この子に罪も科もあるではねえ」

高い聲で叫んで母は露之助をカ一杯抱き締めた、子は抱かれながら母の肩から上へ胸を出して泣いてゐた。

「そのさき何だい」

満面涙に濡らした祖父は怒つて猛り立ちまた新しく殴りかゝつた。

「殺せ、殺してくれ、殺すのなら母子二人とも殴ち殺してくれ」

母は髪を振り亂して猛り立つ日もあつた。

「おゝ、殺してやる、こんな畜生を見て生きてゐて何するものか、うぬ等殴ち殺して俺がもくたばればいゝだ、さあ殺してやるー

そんな時に露之助がそこにゐると、祖父は鬼みたいに狂つて飛びかゝるに極つてゐた、遂に母を捨てて露之助は山深く逃げる事を慣ひにした。

晩になつてそつと歸つて見ると、祖父は門口近くにいつもうろうろしてゐた、露之助の姿を見つけると手招きして、「露之やや」と優しく呼んでくれた、傍へ行くと大きな孫の胸に縋み付いて泣きしやべつた。

「何でわれはそんな體で生れてきた、可哀さうな奴め、可哀さうな奴め」

と、止め度なく泣くのだつた。

殴られもしたが憫まれて愛されもした露之助は、母が木の枝のやうに瘠せて死んでからは、祖父母の手で殴られなくなつた、その代り老人夫婦は泣いてばかりゐた、夜中に祖父母が泣いてゐるので目をさまし勝ちだつた冬を名殘りに、露之助はただ一人山の一つ家で生きてゐる人間になつてしまつた。

祖父母の朽木のやうな死體は、母をしたのと同じやうに、土を掘つて埋めてしまつた。

たつた一人になつた露之助は、今までの通り炭燒きをつゞけても仕方がなかつた、露之助が里へ背負つて行つた木炭は、たれも買つて はくれなかつた、それのみか子供は石を投げつけた、大人は罵つたり追ひ出したりした。

山に永らく一人でぶらぶらしてゐた露之助には、何といふ目的もなく、住み慣れた家を捨てゝ出て行つた。露之助の行く處はない筈だのに。

それから足かけ二年目、露之助はヒウスケンから譯のわからない言葉をかけられた、生れてはじめて聞く奇妙な聲に、おつ氣にとられたこの時の露之助は十九歳だつた。

米國の捕鯨船メルカトン號が、北海で邦人の漂流者十余人を救つた、そして相州浦賀へきて抑留されたのは弘化二年の夏、もう十九年たつてゐた。

【五】

露之助と對ひ合つたヒウスケンの顔に、だんだんと困惑の色が出てきた、知つてゐる限りの言葉をいつてみたが、原人を通り越した汚ない日本人姿のこの白人は、一言も答へないのみでなく、怪しげに身をすくめて小止みない戰慄をしてゐた。

こんな姿の白人にされる事は、この國の人より遙に高等である人種の面目を傷ける、といふ外に、兩國のいづれの國籍の人かまだわからないが、こんな蠻風の國へきてかういふ住民以下の姿になつてゐる事は、到底見てゐられる事ではなかつた、ヒ

ウスケンは手真似でお前を保護してやるといつた。手真似ならば大船の意味は露之助にもわかつた、漸く少しばかり安心が出來て、戰慄は段段にやんできた。

それから程なく露之助は、異樣な容器のある處へ入れられて茫然自失した、それでもどうやら大きな容器の中に、ぬるま湯がはいつてゐるのに氣がついた、體を洗ふのだといふ事がわかつた。

湯から出ると今まで身につけてゐた襦袢も股引もなかつた、その代りの股引と布袋みたいな物と、奇妙な形ちの襦袢にしては厚ぼつたい物があつた、露之助はそれを手にとつて見てゐる中に、山の一つ家に母がまだ生きてゐた頃、喜田親子喧嘩を激しくした晩だつた、祖父母が母や露之助の氣嫌をとるのに努めてゐた事があつた、その時、母が、今ここにある物と同じではないかと思ふ物を出して露之助に着せた、露之助は着方を知らなかつたが母は知つてゐた。

「きゝ事へないものだ、よく似てゐる——露之助やこれはお父さんのかたみだよ」

とその時母は泣き顏をしていつた。祖父も祖母もその晩は氣嫌よく、立派だといつて笑つて見てゐてくれた。

それから後も折折露之助はそれを出して着た、祖父母の氣嫌の惡い時に着て口汚なく罵られてからは、母にもいはずにその着物を持ち出して、穴を掘つて木の葉を敷き詰め、その中へ隠して置いて、山深く逃げて行つた時はいつもそれを出して肌につけた、身につけてゐると見た事のない父親が懐かしくなつて、袖を通しながら涙をこぼした事もあつた。

露之助は見知らぬ者で。異國人からあてがはれた着物を身につけるのに、左程當惑はしなかつた。が。微妙に働く血縁の情が湧かずにはゐなかつた。事によるとさつきの唐人は、俺か父親ではねえか知らん——さうかも知れねえ、こんな着物をくれるのだもの」

かう思ひつくと恐しいと思つた人が。急に懐しくなつてきた。が。あの人の眼は碧くない。黒くもない。露之助は何といふ名の色か知らないが。自分のとも母のとも眼の色が似てゐないのに氣がつくと。また再び元元通りのたよりない淋しい氣に落ちて行つた。

ヒウスケンが出てきて何かいつた。露之助はその口許を好奇に眩めく眼つきで眺めてゐた。一言だつて返事の出來ない言のわからない呼吸ばかりだから。口を開く事が出來なかつたのだが。ヒウスケンは露之助の顏を見て。悲しげな表情をして励るやうな手真似をした。露之助は喜んで首肯いた。

やがて露之助に食事を與へられた、皿の上に見た事のないものばかりのつてゐた、どこから手をつけてよいか見當がつかないので當惑の顔をした「ウム」とヒウスケンはいつて自身起つて葡萄酒の栓を拔き、コップに赤い酒をついで飲めと手眞似をした、通譯官はこの極度に疲勞した白人は、氣を引き立たせる爲に飲み物が欲しかつたと勘違ひをした。

露之助か、透きとほる解けない氷で、つくられたやうな容器に盛られた血潮を見据ゑた顔を、ヒウスケンは人生の悲慘事として見た、神經の衰弱甚しいこの白人は、飢ゑた人が食物に喰る前のやうに、燃ゆるが如き可憐な眼つきをしてゐるのだ、今にも歡喜して叫ぶだらうと想つた。

哀れな白人は歡喜の叫びをしなかつたが、叫ぶ以上の昂奮を手の顫えに示して、一盞の酒を恐れ戰きつゝ嘗めた、味ひが舌に觸れた時息もつかずにゴクリと酒を咽喉へ走り込ませた、その顔つきは寧ろ悲壯に近いものであつた。ヒウスケンは痛ましげにそれを眺めた。

露之助は白い細い棒を手渡しされた、指にその棒を挾んだ時、しゆつ、といふ異様な爆音を聞いた、この深切な異人は指の間から火を出したのであつた

露之助は眼を張つてその火を眺めた、その態度をヒウスケンは、[illegible]白人が[illegible]に[illegible]る行爲と見た、[illegible]る事にも東洋人に似たところある[illegible]に、この時[illegible]に狼狽してゐた。

【六】

屯所の外は靜だつた。境内の逆さ銀杏がこんもりと、淡い銀星の夜空を飾つてゐるその向ふに、黑い屋根が聳つてゐるのが米國使ハルリスのゐる善福寺の本堂だ、そこから門前まで下つてくる途中に坊坊が幾つかある、境内の諸所に見慣れない紙屑や、判斷の出來ない品物が落ちてゐて、けふも墓參にきたものが、恐しがつて眼を閉ぢて逃げて行つた。誰はその外に出入りする紅毛人の姿を、面白がるものが二人あれば恐しがるものも二人は缺かさなかつた。総江からきた女はやむを得ず擦れ違つて、紅毛人の牛乳臭さに噎せ返り御式通りへ出るが否や嘔れを催ふした、それもこれも夕方からは一日の終りになつて、紅毛人も出入りをしなかつたし、外から寺へくる人もなくなつた。」

屯所詰の警衛隊は毎日、門に落ちて行く西色を仰ぐとホッとした、夜は夜で亂暴浪士が近づくのを、十分に警戒しないと直ぐ腹切問題が起つてくる。それでも夜は晝よりも安心だつた。靜に更けて行く麻布山境内に、風もなければ時に咽び泣くやうな江

異人の悲しげな咽喉も聞えた。

「さあ、この中にどういふ物があるか。だれも知るまい。皆、寄れ。只今、開けるから」

拾つた金貨の櫃に附られた炭酸水の瓶を、ひねくり倒して困難したのはそんな際だつた。

「この方がやつてみる。かういふ物を抜くには舶用発明の名でないといけぬものだ」

入れ代つて試みたが、瓶の口に施された栓は頑固不落だつた。

「いやこれは逆さに倒して置いて、尻から叩く呼吸によつて、容易に口は開くのではないかな。異人は案外なからくりを心得てゐるから、多分はさうだらうと思ふ」

瓶は忽ち左手で逆さにされた。右手をあげて気合をはかり、おッと喚いて瓶尻を叩いたが、口が無関係である事は元の通りだつた。えいッと励声一番、勢よく叩いてみたが矢張り口は依然としてゐた。

「逆さにしてはいけない。口はそれによつて首尾よくぬけても中なる飲物は下へ落ち流れる。異人の事なればさぞ不始末なからくりはいたさんだらうが、察するにこの口についてある金物を取り除いてからの話だ。さもなくては具合が開けぬ」

この説は大砲を動かせた代りなものとなつた。が、瓶口の金物を除く事はこゝにゐる手合の器用では間に合はさうもなかつた。

「残念ながら本堂へ参り、いかがいたすものか、教へをうけてくるより仕方がないなあ」

この説はさすが満堂に否決された。

「かばかりのものが相わからんとあつて、異人に侮辱をうけては、あれ見よ、日本人は悉か拙いだと、嗤はれるに極つてゐる。日本人の恥辱だ。断じて満堂の教へなどうけてはならぬ」

手を打つて否決に賛成するものが多かつた。

「とはいふものの、難儀千萬」

次から次へとひねくり倒す中に、どうやらかうやら口金は除き得た、もつとも、門前の住持から信川の灯抜きがなかつたら、あさつてになつても到底とれなかつたらうものを。

「今度は木栓だ、いや木ではない、妙な物だ」

「どれ、木だよ、よく異国にはこんな木があるのだ」

「どれどれ乃公が鑑定してやらう、ふむこれはまさしく木だ、」

「異国の品故、朽れてか、ぼろぼろと性を失つたのだらう、その証拠には黒く小さな斑があるではないか、腐れてゐる証拠だ」

鑿、釘、小柄といろいろの道具をつかつて、コルク栓を抜きらうとしたが、穿てば穿つ程脆く缺けて、容易な事では抜けなかつた。

「今度こそは斜に持つて、尻を叩けば必ず自づと抜け飛ぶに違ひないだらう」

さうかも知れぬと試みたが、結局それは効がないらしい、で、更めて小柄を揮つて瓶に立ち向つたのが賭られ主、ぶらんさんと私語された若武士の一人であつた。

「どうだ、具合は」

「上々の首尾――とは行かぬが、こゝまで攻めつけたからには、最早程なく本望成就だ」

ぽろりと一かけらのコルクがとれたので、若干あせり氣味となつた若武士は、更めてコルクに刺す小柄に力を罩めて一壓し。

ぶあん、しゆつ、つ。

瓶口が爆裂して天地を震撼する音響、屯所の紙障子の全部がびりりと鳴つた。

瓶口から噴き出す妖氣は、眞白くしゆつしゆつしゆつと天に冲し、天井に噴き當つて疊に落ちた。

時に、天井裏でずしりと重い物音がした。

「すわ」と起きてまつた一同の人々、思はず退つてこそりと息をつけ柄に手をかけた、飛び退る時點の上に投げ出した奇怪な怪は、偶然、いや人々には決して偶然とは思はれず、すつくと立つて口から白濁の妖氣を逆發させてゐた、若武士は眉を顰めた容を深く咬みしめた、ぶるツと顫えた。

ぶうん、と不思儀な臭氣が冲逆に迫つてきた。

「あツ臭いぞ、こりや確に、異變だ」

外氣を入れる事に心づいた者が、慌てながら起つた時、天井裏がぐわらぐわらといつた。

一同はツとして音のした方を仰いだ時は既に遅かつた、みしり、ばりりと錯雜した音が天井に起つて、砂ほこり鼠くそがタ立雨のやうに疊に音を立て、きやつといふ叫びが天井板の裏に起つて、木の裂けた屑と共に滿面朱を灑いだ異樣巨眼、生きてゐる鬼の首が逆さになつて現はれ一同を睥睨した。

一同が總立ちになつた頃、生きてゐる鬼は首を天井裏に引きこめた、それから暫くは屯所を踏み崩すやうな家鳴り震動が、屋根裏で起つた。

瓶から妖氣は悉く出盡した、だが、また一本の瓶が殘つてゐた。

「鬼を招ぐ界剛の秘法だつたのか、ヒワスケン殿は人が悪い、我我の腕力を試めさうとしたのだ——が、この二本を何としやう」

【七】

魔法瓶の處分は贈られ主の若武士二人の責任になつた、爭ふても仕方がない、瓶だといへば武士に似合はぬ卑怯者といふ譏りを免がれまい、といつて鬼を招いだ事實を知つてゐるだけに、一本たらず二本まで瓶を携へて棄てに行くのには、並並ならぬ大決心がどうしたつて必要だつた。

吉川を舟で海へ出る、そして品川の海中へ投げ込んでしまへば、いかに魔法の瓶だからとて大海では手足が出まい、もし手足を出したら鬼だとて溺れずにゐる筈はない、「西の海へさらり」とは鬼を厄介拂ひするいゝ文句だ、西の海でなく品川の海たりとも錘をつけて投げ込めば大丈夫、といふのが此断評議の決議だつた。

若武士は右手に一本づゝの瓶を持つた、この二人は、剣術同僚の激勵を聞きながら、斬り込みをかけに行くやうな血相をして、雇つた小舟に乗る小桟橋まで、足はどこを踏んでゐるかよくわからなかつた。

「無事を祈つてをるぞ」

「有難う、安心してくれ」

「必らずやり遂げるからなう」

二人は胸を左手で叩いて、勇氣のありかを見送り一同に示した、が、果して若武士二人は今叩いた胸に、鬼を招く二本の瓶を恐れぬ魂があるかどうか、實は心許なかつた。

「日本男兒だ、確りやれよ」

陸からは流れに近づくる小船に、勇氣づけの餞別言葉がかけられた、船中の二人は硬くなつた表情の緊を解く力はないが、臆した氣色はさすがに見せなかつた、血色はいよいよ悪くなつてゐたが踏張つた姿を舟上に浮べた。

何も知らぬ船夫は水棹を苦勞なしにつかつてゐたが、やがて小舟を向けはじめた、若武士二人が頻りに重大扱ひをしてゐる異國物らしい瓶に目をつけてやがて顔を曇らし、時にはそつと溜息まで吐いた。

若武士は赤羽から櫻川へかかり森の突き出た五重の塔を仰ぎ見もしなかつた、金杉橋をくぐつて丹羽左京亮屋敷、松平肥後守屋敷を左右に見て船は漸に海へ出たが、一言も發せず四つの眼は瓶にそそいだ儘だつた。刀の鯉口は切られて片膝はいつでも浮いてゐた。船夫の顔は今通つてきた芝山内の森よりも青くなつ

ゐた。
「まだこの邊ではいけまいかなあ」―
「うむ、まだまだ」
これだけいつて若武士はまた寂寞にかへつた。品川の海の色は青く、向ふ地の山容がかすかに雲のやうだ、左は洲崎の出濱、右は品川から羽田近く陸地の容が泰平の相を見せてゐた、臺場だけが殺風景に江戸の海の砦らしく見えた。
「もうこゝらで始末をつけてはどうだなあ」
「さうだな、陸からも大分はなれた、この邊ならば障りはあるまい」
一人が瓶に錘を結びつける間、一人は鯉口を切つた刀に手をかけて張り番をした、波のうねりで瓶が輕く踊り出すと、二人はその都度に尻込みをした。
「旦那方、そ、それは何でございますね」
様子でとくから覺つてゐる船夫が、怯えた眼をそつと瓶にそゝいで尋ねた。
「何でもない、聞かぬ方がお前の爲だ」
「で、ござりますが、どうも妙な事がありますのでございます、そ、それで伺ひますので、はい」
「妙、妙な事とは、何だ」
「何でもあつたのか」
若武士は船夫のくらい顔を瞰めた。
「どういふものか、船の足が重い、變に、妙な、どうも譯がわからない、重いのでございますが、船の中に何か怪しい事があるのではございますまいか」
ぶるぶると船夫の聲が顫えた。
「さうか」
と若武士はいつただけで、二つの顔は今までよりも一段と陰欝になつた、口金を除かないでもこの瓶は、そんな異力をあらはしてゐたのか、それならば錘をつけ海へ投じても、鬼神にとつては何でもない事で、或はその爲に憤りを却つて招ぎはしまいかとさへ思はれた。
ことり、ことりと二度瓶の底で不意に音がした、船夫は腰を浮かしてともに逃げかけた、若武士は二人共まつくらな顔をして、こればかりが頼みの刀に手をかけた。
「た、何でございませう、變な音、あ變な音が今いたしました、お聞きになりましたか」
「聞いた」
息を吸ひ込んで答へただけで、二人共に二の句が次げなかつた。やがて二人は顔を見合はせた、どうしたものか、さあどう

したものかと二つの目は、眼にあいいは似て鴫のやうに目をもぐもぐさせた。

「かうなるからは是非に及ばぬ、見届けた上で、成るやうに成らうではないか」

「いふにや及ぶ」

決然として二人は、怪しい音のした洞の間の板戸をめくつた。

「あ」

そこに與へられた衣服をつけて露之助が佇んでゐた。

【八】

露之助はヒウスケンの殺害に吃驚した。

が、他を除く外の人間は叔父でも村の者でも、怖みもしたが愛しもした。その以外では人といふ人は悉く露之助に良くなかつた。山のくらしの永い間に僻ちもの組間にも幾人かあつた、その中の一人だつて露之助の心を惜れて近づくものはなかつた。底の木挽職人がアカ川の家の灯を通つて來た事がある。その木挽は露之助を見ると、命からがら二番目つ大鋸を抱いて逃げた、逃げながらその男の投げた石は露之助の頭を傷けた。外つ國小屋の者すら大た餘りに露之助を扱へ、ひどい目にあはしてから以來、一家は再び山深くに小屋を新たに建てて移り住んだ、はじめは山路は在程中から遠くなかつた、在年七年、段々と山中から遠くなつて露之助は滅多に外の人間を見かけなくなつた。そんな有ち方をした露之助が山を出てからの一年間は、あらゆる無情の裡に旅斗をうたせられてきた、わが生れ折りにされた事が無かつた、狂人染みた旅の武士から、不意にとびかかられた事も一再ではなかつた、露之助を見る人間といふ人間の眼は、怖れでなければ怖みでいつも白くなつてゐた、であるのに苦に作むこの異國人は、死んだ母のやうに露之助を飼つた、血臭い物を鍋つて食べると、有難さと困難さとで泣めはしたが、深切から出た心だとはよく合點が行つた、それにしても露之助は正體の知れぬ物を、食べねばならぬ深切さに苦んだ。

時がたつにつれて露之助は、かうしてこゝにゐる事が辛くなつた、深切の押し付けの間に縛りつけた、逃げたい方へ逃げられる儘い自由さがなつかしくなつた、異人の妙な姿に肩むのが悲しくなつてきた、それにまた露之助は、この異人の手許を、永く保護してくれる所とは思つてもみなかつた、一飯のめぐみ、今までにも折々あつたそれと同じく、この事もただ一飯のめぐみを與へる迄と解してゐた。

異人は妙な聲を出して何かいひかけた、露之助には何である

かわからなかつた、異人は紙の上へ文字を書いた、露之助は金色の毛がちよろちよろと生へてゐる異人の手を見た、が、指が綴り出す文字は風に吹かれた草の葉、それより外に思ひやうがない形ちだつた。

異人はたうとう手眞似で話しかけた、露之助はそれに對して正直に身の上を語る事を先づ躊躇した、この男のやうな生ひ立ちをしたものが、初對面の男、しかも、目の色はやゝ似てゐるが髮の毛の色はまるで違つてゐる異國人に、打ち明ける氣にはなれさうな筈がなかつた。

言葉でも手眞似でも遂に答へない露之助を、ヒウスケンは太息を吐いて眺めた。腕を後に組み部屋中をうろ／＼と歩き、口の中で呟き續けてゐた通譯官は、困惑がこの男を激しく虐待して、あらゆる記憶を失くしてしまつたと考へねばならなかつた。

こんな國へやつて來てこの男は空つぽの人間になつてしまつた！と。

夜になるとランプがつけられた、露之助は不思儀な光りを燃す道具を、碧い眼を据ゑて見た、ヒウスケンはその哀れな姿を眺めてひどく感傷的になつた、やがて煙草とマチを與へた、この役所の室だつた狹い部屋は、困惑に魂を削り減らされた國籍不明の白人を、暫く休息させるのに丁度よい處だつたらう、哀れな男よ、そこで氣を落つけて、幾分でもいゝからお前の過去を呼び起すがよい、かう呟いて部屋に出て行つたのはそれから間もなくだつた。

露之助はほつとした、放たれた喜びを感じたが、いつまた異國人がやつてくるかわからない、といふ閃く考へと一緒に起ちあがつた、こゝを逃げ出さねばならないと思つたのだつた。人は皆深切ではなかつた、深切に見えても油斷は決して出來なかつた、生捕りになつた時の露之助は、うまい物を食はされた、ちよつとした着物も貰つた、そして二日目には竹の枝で腿を打たれた、變な形ちに體をまげて、譯のわからない唄をうたへといつて拗執に責められた、辛うじてそこを逃げてはまた生捕られた、最後に逃げたのはつい四日前だつた。多分ここでも、明日は藝當を教へられるだらう、夥しく叱られて竹や木の棒で打たれるだらう、そんな處には居られなかつた。

露之助は逃げる經驗には富んでゐたから、徒らに恐れてそこに愚圖愚圖してはゐなかつた、窓から外へ、銀星のきらめく空の下へ、そつと出た露之助はもう一度部屋へ逆戻りをした、今までの中で一番興味を惹いた物、それを卓の上から盜んだ、そして今度は完く逃げ出さうとした、盜んだものはマチであつ

た。

逃げは逃げたが恐しい武士の姿が、そこにもここにもあつた、露之助の足にはめてゐる黒い鮹が、うるさく相圖をすると見えて、どの武士も露之助を見て軽く一瞥した。何故露之助は武士からさうされるかを知つてはゐなかつた、だから、コンシロの異人殿として、一瞥されるのだとは知らう譯がなかつた。

たうとう露之助は足にはめた黒い物をとつた、今度は跫音が少しもしなかつた、間もなく露之助は近くにあつた家の中へ逃げ込み、怯え切つて天井裏に這入込んだ。

だから炭酸水の沸騰に驚いて、天井裏で跳ねあがつたものは露之助だつた、天井板を頭で叩いて顔だけ出したのが生きてゐる鬼ではなく、日本人の母の子である哀れな男だつたのだ。炭酸水の瓶で苦労を重ね、決死の覺悟で品川沖へ出た武士も、天井裏から逃げ出して舟底にもぐり込んで、怖れながら死を覺悟してゐた露之助も、よくよく語り合へば同じ弱さで生きてゐる人だつた、が、武士の眼は黒い、露之助は碧い、それはどうにもなるまい事であつた。

【九】

舟底から人間を見出した若武士が、河童になるよりも船夫の方が一入青くなつた、何事もいはずに身を翻らして水の中へ姿を消した。恰も傍に帆を卷いてゐる漁船があつた、船夫はそれを見かけて海へ投じたので、死ぬよりは助かる爲であつた事は勿論だつた。

若武士は舟底から出たものが、窮屈さうに身を起すのをろくろく見ず、漁船の方へ悲痛な顔を振り向けた、船は今の入水で激しく動揺し、彼の瓶はかつかつと觸れて瓶の栓を浮かす響きを立てた。

漁船のこべりに手をかけた船夫が、何やらいふが否や、漁夫は一所に大活躍をはじめた、互に叱咤しながら二人總がかりで、舟は巧みに操られて若武士救助に動いた。

「旦那、は、早く早く」

と船夫は濡れ髪を八方に飛ばしながら、身悶して両手で招いた。

ひらり、ひらり、と青い顔の武士は漁船に首尾よく避難した。小船は一人が飛び移つて行く毎に、大きく動揺して瓶はかつかつと無氣味な音を立てた。

漁船は瞬然に小船から逃げた、かうすれば魔法からくりの瓶二本と、海の底から舟の中へ忽然と侵入してきた外、思ひやうのない怪しいものとは、あの船と共に行衛定めずなるだらう。

「後を見るなよ、祟りがあるといかん」
「振り返へるな、決して振り返へるな」
かうして若武士は恐しい物と絶縁する事が出來た。その爲に小さな舟一艘の犧牲は左程惜しいとは考へられなかつた。
「鬼神を噴き出す瓶は鬼と共に大海へ棄ててきたさうだ。あれ達の勇氣はさすがだ」
若武士二人は勇士だといふ事にされた。時がたつに隨つて、ぶらんさん出身の二人は、武勇自傳の一つにこれをよく語つた。

露之助が取り殘された船は風まかせに流れた。金華山沖から流した船が米大陸についた例はある。が、風まかせ潮まかせの船は、そんな遠い國へは流れて行かなかつた。昏迷と絶望とで一時は假死に陷つてゐた露之助が、息を吹き返したのは夜だつた。磯臭いそこは、眼の前に黑くずつと續いたものがあつた。その諸所に黑い物が更にあるのは、森か家か、とに角陸であるには違ひなかつた。船は底を洲に乘らせてゐた。知らぬ間にさげ潮の加減で、船は潮から置去られてゐたのだ。露之助はそんな事を知らなかつた。船から陸へ逃げ込めばよかつた。陸が露之助には地獄だつたのだが、それでも波が巻き込みたがつて船を襲ふ海よりも、逃げ場の多い陸の方が嬉しくあつた。

足許でかちりと瓶が轢んで音を立てた。半ば手探りで瓶をとつて見た露之助は、それが血を盛つた硝子徳利であると思つた。しかも二本まであつたのは、限りなく、白人の皮をかむつた災城爺の孫を喜ばせた。

あの異國人のくれた眞赤な血の汁は、船中を焚火のぬくもりよりよく溫めてくれた。手足の關節には快いだるさが催ふしてきた。呼吸がはずんで氣が引き立つてきた。その快さは次第に消え細りながら、船底に隱れる時まで續いた。露之助は今その血潮を盛つた硝子徳利を手に入れた。しかも二本、洋服徒足の男は有頂天にならずにはゐられなかつた。

船を棄ててくらい陸へあがつた。ここが何處だかは、たとへ教へられても結局知らない土地だつた。葛飾の鍋高新田、入江の川口近い洲に小船は漂つてきたのであつた。

兩手に硝子徳利をさげて露之助は歩いた。的もなく歩く足許は、度々窪地に入り込んで當惑した。砂地に生へた小松を踏みつけて倒れかけた事もあつた。

「あつちの方の空が明るい、あつちへ行つたらいけない。俺はくらい方へくらい方へ行けば間違ひはない」

ながらくうろつき歩いた後で、ふと魚を炙ぶるにほひを嗅い

だ。露之助は腹がへつてゐるのに心づいた。耐らなく何か食ひたくなつた。鼻を鳴らした。

「こんな時に血を飲めば、うまいぞ」

慌てて硝子徳利の一本の口を撫ぜた。口金は指の腹を擦すやうにヒヤリとした。あの異人はどうして開けたかを思ひ出すよりも、斉い氣がしてきて遂にやめた。

疎な林の下に狹地があつて、そこから不運が飛び出した。二三人の影がちらりとさして、露之助はその人並に包圍された。眉間を叩かれた感じで體中が冷めたくなつた。

「あ、あ、また生捕りになるのか」

【十】

そいつ等は何事もいはずに露之助を毆つた。毆られてよろめくと同時に逃げ出したが、そいつ等は例の如く執念深く追ひかけた。二三人と思つたのが五六人になつて、何れ喚きながら、擴げた網のやうに露之助を追ひ詰めた。そこは先刻一二度迷ひ込んだと同じ細い路のついた袋地だつた。どつちへ行つても水田がずつとのびてゐて逃げて行く道は絶えてゐた。もう觀念して生捕りになる外はない。と露之助は諦めをつけた時、飛び込んできた奴が一人。強かに露之助の二の腕を毆つた。大切な硝子徳利はケシ飛んで宙に筋斗をうつて追ひついた四五人の眼の前へ落ちた。極度に動搖してゐた炭酸水は怕然の爆裂をした。白い水がぱつと飛んだ。異香がぷうんと放たれた。

今まで剽悍だつた奴原は、きやつといつて地を這つた。動く事が出來ずに唸つてゐる奴もあつた。露之助を毆つた奴は猫のやうに引つ返して、第一番に逃げた。殘つたものも地の上で體を捻ね返してゐたが、どうにか、かうにか、恐しい現場を這ひ出して丸くなつて逃げて行つてしまつた。

露之助は一人になつた。事は露之助にも意外だつた。地の上に尻を据ゑ手に殘つた硝子徳利を、頭から遠く棒げて覗いた。恐しくもあつたが捨てたくもなかつた。が、間もなく露之助は硝子徳利を横にしたり起してみたりした。何の怪しい事もなかつたので安心した。と、ゆうべ、天井裏で聞いた爆音が思ひ出されてきた。

露之助は殘る一本の炭酸水を、また血の汁のはいつた物と信じて手放さなかつた。そして、角を灸ぶるにほひに惹かされて歩き廻つた。が、うまさうだつたあのにほひは、最早何處をさがしてもしてゐなかつた。あつたのは少しの錢と米だけだつた。今の男達は賭博をやつてゐたのであつた。暫くの後に露之

脚は惰性の陸に躊躇つてゐた、もう歩くのが厭になつた、足は何の苦も告げないが、飢えて根氣が衰えたのであつた。だが、生臭いにほひがどうやら漂つてきた氣がした。露之助の勇氣がその爲に再び盛り返してきたその時、向ふの空の下で寺の鐘が吱り出した、盤木も亂打され出した、竹法螺が尻ながに吹き出された、静な夜は眼をさましたやうになつた、高調子な人聲が急にどこか遠くから聞えてきた、火がくらい向ふで二つ三つあらはれた。次第にその數が夥しく加はつた。

露之助はあッ氣にとられた。

村の夜はまどかだつた、入江の川口に近い洲に漂着した小船が、異貌異裝の露之助を送り込んだとは知らなかつた。が、爆音を聞いて怪んだ人はあつた、間もなく村の若い者が、怪物が入り込んだといふ警報を齎して歩いた、村はあげて怪物退治に騒動した、退治るよりは村を護る爲に、めいめいは獲物を執つて駈け出さずにはゐられなかつた。

寺の鐘は異常に吱り續けてゐる、盤木は喘いで鳴つてゐる、竹法螺は消魂しく叫んでゐる、太鼓は勇氣づけるやうに鎮守の杜から響き出してきた。人は浮き立つた、獲物は強げに灯に照つた、提灯、松明は馳せ違つた、諸所に篝火が焚かれた。

露之助はこの大袈裟な騒ぎに、驚くよりも呆然とした。したが、この騒動がだれの爲に起つたかは知らなかつた、露之助の怖れるのは生捕りだつた。生捕りの爲にこんな大仕掛けは付てなかつた事だ。

しかし、夜の灯は美しい、露之助は逃げる事も隠れる事もよく知つてゐた、まだ何者にも發見されない間は、騒動によつて點ぜられた全村の灯の影を、口を開けつぱなしで見物してゐられた。

縦横にめぐる灯の渦、呼び交はす人聲、事件は露之助に近づいてきた。

程近い處で竹法螺が吹かれた、露之助は人間の口で吹く音とは氣が付かなかつた、ましてそれが怪物發見の相圖の爲に、長短三節に吹いたとは知らなかつた。

灯は列をつくつて近づいてきた。その美しさは露之助に警戒を忘れさせた、山の祖母がよく話した狐の嫁入りとは、これだなと思つた、そして唾を褐色の眉毛に塗つた。

灯の列は近づいた、殺氣立つた人の聲も跫音も物の觸れる音も、ひたひたと露之助に近づいてきた、灯は既に露之助を照しはじめた、さすがに形勢の切迫は漸く氣づかずにゐられない險しさだつた、露之助は逃げやうとした、それを村人は危害を加へるべく跳躍する怪物の恐怖すべきものと見た。

「鬼だ鬼だ――――わあッ、わあッ」

一先づ村人は雪崩れをうつた。

【十二】

遠巻きにしてゐる村の人垣から、篝火、提灯に送られて出た七人の男があつた、村の勇者が鬼退治に決死隊をつくつたのである、その七勇者は猛り立つて進んだ。

露之助の、怯えた眼は七人の男の手にある竹鎗と太い綱とを見た、今迄の生捕りの經驗になかつた太い綱は、魂を摧めとる恐しさだつた。

「あ、あ、生捕りにまたなるのだ」

悲しい聲で自分の落ち込む運を嘆いた、こんなに太い綱で縛るやうでは、この先どうなり行く事か全くわからない、單なる生捕りではないだらうと思へた。

「殺すのだ、それに違ひがない、あれあの棒だと思つたもの〻先が光つてゐる、あれで俺がは突き殺されるのだ」

七勇者は怪しい眼つきをして肉迫して來た、七つの顏が狼より怖い相をしてゐた、露之助にはその人影が七つにも十四にも見えた。

露之助の頰は止め度なく流れる涙で冷くなつてゐた。が、それよりもここを逃げたく思つた、見廻すと到底逃げられない事がわかつた、どちらの方にも遠卷きの人垣が犇めいて立つてゐた。

「あ、さうだこれがあつた」

血の汁を詰めてある瓶は、惜しかつたが、一度知つてゐる怪しい音響、殊に一度は先刻の危い折を救つてくれた、多分今度も逃げる道をつくつてくれるかも知れないとおへると速坐に、一瓶は勢ひよく七人の男の前へ投げられた。硝子は碎けて水を噴いた。音はしたが、露之助の期待した大音響はしなかつた、あれよりは低い、物の潰れる音だつた。

七勇者は一時狼狽して逃げ去つたが、再び敢然として前進をはじめた。

失望した露之助は、何故爆裂しなかつたかを怪しんだ、怯んでゐる一方に、恐しさが身に迫つてゐるのを忘れなかつた、氣が狂ひさうに頭をふつてゐる中に、ふと思つたのは異國人が抗の股から火を出す事だつた、餘りにそれが面白かつたので身を逃げる時、その品物は盗んで今も荷物についてゐる袋に入れてある。

「これで火をつけて俺は燒けて死んでしまうがいゝだ、こんなに苦患ばかりしてゐては生きてはゐられない」

覺悟は悲壯な方法に決せられ、マチは上着のかくしから摑み出された。

七勇者は鷲足をして、生きてゐる鬼に一足づゝ近づいてゐた。

露之助は、ゆうべ寺でよくよく見て置いた通り、小さな箱から白い棒をとつた、異人がしたやうに前から後へ摺つた、が、火は發しなかつた、慌てて諸方に摺り當ててみた、なかなか發

大しない、その中、突然火が發した、露之助はきやつといつて躍りあがつた。

七勇者は鬼に間近くなつた時、しゆつといふ音と共に小さな火が走るのを見た、火の色は鬼の顏をかつきりと照し出した。

「わあツ――鬼が爪から火を出した」

轟高新田の七勇者は再び脫兎の如く逃げた。村の人の本陣でもその火を認めた。七人が逃げてきて後も、鬼が頻りに火を出して諸方へゆらゆらと動かしてゐるのが見えた。

「あ、あ、あ、大變だ、鬼が怒つて火を放けるぞ、この村を灰にするのかも知れねえぞ」

「そんな事されたら大變だ、皆でかかれ、愚圖愚圖してゐると村が灰になるぞ、かうなつたら皆も命賭になれ、鬼だといつて一匹じかゐない、人間はこんなにゐるのだ、遣れ、遣れ」

三度び七勇者が先頭に立ち、總勢すぐつてひたと押し寄せはじめた。

露之助は根氣よく火を摺つてゐた、折角火がついても、草の間に差し入れると消えた、次から次へ夢中になつてマチを一心不亂に夥しく擦つた。

「あ、あ、いけない」

マチの軸木をつかい盡してしまつた

さつきから白んでゐた東の空から、明るさがめきめきと世の中にさしてきた。

朝の日が赤くのぼりかけた時、村の人は漸く意久地なくなつてゐる鬼を生捕つた。

「お天道樣の御光にはさすがの鬼も通力を失つたのだ――おかげ樣で村一統が助かつた」

皆は天日を三拜九拜した。疲勞しきつた露之助はぐつたりとしてゐた、でも、いつもの生捕りの時のやうに、とに角、程なく何か食べ物が貰へると思つた。その外に今は何も考へてゐなかつた。

【十二】

急造された牢格子で組まれた箱の中に、露之助がゐる、その前には竹鎗やら本物の鎗やらを持つた村人が番をしてゐた、いつもの生捕りと違つて今度は手荒い、食べ物が貰へると思つたのは誤つてゐた、露之助は一滴の水も與へられてゐなかつた。

日が快く照つてゐるので、露之助は綱を死にもの狂ひで攻み切つた後の疲れが幾分か和げられた氣がしてゐる、それにつけても飢えがひどい。

野良犬が一匹そこらをうろついてゐた、露之助は濁つた眼で眺めてゐた、犬の尾の上に傷があつて血が少し出てゐた。血、血の汗、異國人がくれた赤い血の味と、飲んだ後の快さとが思ひ出された、露之助は牢内を這ひ廻つて犬を呼んだ、犬は怯え吼えながら、それでも結局は近づいた牢格子から出た露之助の手は、忽ちぎやんといふ犬の肢を掴んだ、消魂しく啼き騷ぐ犬と、顏中を赤くした露之助とは必死になつて引摺り合つた。

警戒の村人は、槍も竹鎗も押し立てゝ一つ處に集つた、犬が

生きながら鬼に食はれる凄じい有様は思つただけで恐しい、しかも今、目のあたりでそれを見せられるのだ。

犬は食ひ付けて尻から先きに、牢格子の中へ引き込まれた、そして露之助は犬の尻の傷へ口を押しつけて血を吸つた。ちゆつ、ちゆつと音が高い。

「わあツ、鬼が暴れ出した」

竹槍も鉈も入り亂れて潰走した。犬は格子を抜け出して、股から腹へ尾を引きつけ啼きながら逃げ去つた。

「違つた、あんな味ではなかつた」

獣の頭と唇に血の痕を殘して、露之助は石のやうな顔から先に、牢内の土の上に倒れ伏した、それから後の事は知らなかつた。

「鬼様、鬼様、どうぞ鬼様」

甲高く走つた女の聲が聞えてきた、露之助は顔をあげたかつたが、息詰りがひどくなつてゐた。

「鬼様どうぞお願ひ申します、可哀さうと思召して、わたしをお助けくださいませ」

喘ぎ喘ぎ露之助は若い艶のある女の聲を聞いてゐた。

「あなたの外にたよる方は、この廣い世間にありません、どうぞ、どうぞ」

露之助は眼が眩んできた、胸が壓しつけられるやうで、苦しさが激しく寄せてきた。

「どうぞ、わたしの思ひを叶へてくださいまし」

その女の顔が見たいと露之助は思つた、が、苦痛は鋭く詰めかけてきた、耳の底が鳴つてきた、頭のしんが動き出してきた。

「いふ事を聞き届けてくれないとわたしは死にます、死んでしまひます」

露之助は苦悶しながら「うむ」と呟つて兩拳を握つた。

「あ、わたしの願ひを叶へてくれますか？有難い、ああ本當に嬉しい」

その時露之助はのけぞつた、ちらりと女の白い顔が笑つてゐるのを見た、見たのではなく瞳に映つてきて知つたのであつた。

番人が多勢と一緒にやつてきた。牢の前にゐた女は、多勢の一人から強か叱られた。

「こいつめ、またそんな奴について歩いてゐをる、親のいふ事きかねえと、鬼に食はしてしまうぞ」

女は悲しさうな顔をして後を向いた、そこには鬼様鬼様といきり立つて祈願する女の後から、默つて頭ばかりさげてゐた若い男がゐた、顔を見合せるとこの男女は、鬼が「うむ」といつた事を思つて、望みありげににこりと笑つた。

「おや、あ、あ大變だ――鬼が死んでゐる」

先頭の七勇者の一人が消魂しく叫んだ。

（をはり）

佛國議會に於ける脚本檢閲問題

――ゴンクウルの「娼婦エリザ」――

岸田國士

一八九〇年十二月二十二日、佛國上院に於ける豫算質問中、議員アルガン君は、政府が民間の一小劇場に對して、年額五百法の補助を與へ、同劇場を推奬する意圖を表示したことを攻撃した。

その劇場は即ち自由劇場であり、攻撃の理由は、同劇場の上演脚本が、屢々風紀を紊すものであるといふのである。

之に對して、時の文部省藝術局長ラルウメ君は、極力自由劇場の功績を賞揚し、一二脚本の選擇を誤つたとしても、それは當局の信頼を傷けるものではない――殊に、補助金と云ふも、實は、座席の豫約に過ぎず、監督官を派遣してその都度報告を得る爲めに必要な處置を取つたまでゞあると辯疏是れ努めたが、アルガン君、何時かな聽き入れず、遂に、最近問題になつた脚本の筋を述べて、盛に右黨の老人連を憤慨させた。ラングル・ド・ボオマノワアルといふ侯爵議員は、「監督は巡査で澤山だ」と叫ぶなど、なかなかの騷ぎ。文部大臣も遂に見兼ねて、演壇に立ち、「アルガン君は、若い劇作家が、自由劇場によつてのみその才能を世に問ふことが出來るといふ事實にお氣付きないか」と喰つてかゝる。左黨の議席から拍手が起る。「勿論、中には良くないものもある」と云ふと、アルガン君すかさず「皆良くない」とやり返す。大臣は「皆ではありません。而も、今日迄上演した脚本の中には、なかなか注目に値するものが多いのであります……」そして遂に、「若し、諸君が、本案を否決されるやうなことがあれば、我が劇藝術の爲め由々しき大事である事を警告したいと思ひま……」と見得を切り、遂に投票採決の結果、原案は無事通過。

越えて、昨年の十一月二十四日、自由劇場はまたもや、今度は、下院の議場を賑はした。即ち議員ミルラン君が文部大臣に宛てゝなしたる質問演說から初まる。

ミルラン君は當時賣り出しの少壯辯護士、最近まで佛國共和國大統領の椅子に在つた現代有數の政治家であることは讀者も旣に御承知のことであらうと思ふ。

時の文部大臣は、これも最近まで上院議長の職にあつたレオン・ブウルジュウ君である。そして、政府當面の責任者文部省藝術局長ラルウメ君こそは、劇文學者として、巴里大學講師として、更に劇評家として、「演劇史及演劇批評の研究」「モリエールの喜劇」「マリヴォオの生涯と作品」等の名著を公にした人である。

扨て、議長は誰であつたか、これがわからぬのは甚だ遺憾であるが、手許には速記錄の抜萃だけしかないので、致し方がない。これから、その記錄を讀みながら、討議の大要と、議場の空氣とを寫すことに努めて見よう。

ミルラン君（發言）――諸君、今回檢閱官はジャン・アジャルベエル氏が、エドモン・ゴンクウル氏の作を脚色したる「娼婦エリザ」の上演を禁止しました。

此の事件に關し本員は旣に世上の問題となりたる禁止不法の批難を此處で繰返さうとするものではありません………本員はたゞ檢閱官が、其の職權を行使するに當つて果して充分なる酌慮と機宜を得たる處置を取られたかどうかと云ふ點について、一般の注意を喚起したいと思ふのであります。

聞く處によれば、「娼婦エリザ」の禁止は先に上院に於ける豫算討議の結果が此に及んだのだと云ふことであります。上院有識の一員アルガン君が文部藝術局長に向つて發せられた稍微妙な質問は、本員の個人的印象によれば少からずかの政府當局を惱ましたらしく思はれます（微笑）………然しながら年額五百法の補助金は自由劇場の監督を便ならしめ、今日「娼婦エリザ」の上演を禁止する結果を生んだものとすれば、此の小額の支出は必ずしも無益でなかつたと云はなければなりません………。

諸君、本員は此の假定から遠かります。そして單に此の戲曲が如何なる動機によつて上演禁止の厄に遭つたかを研究し、其の眞相を探知したいと思ひます。即ち、禁止の理由は左の二點以外にはない――作者が作中に於て支持しようとした思想、及び、其の思想を包んで居る形式。

先づ、其の形式でないことは次の二つの理由によつて明かであります。

第一は檢閲官が作者に對して何等の修正をも求めなかつたことであります。…………

背てロクロワ氏が文部大臣在職當時同じゴンクウル氏の「ジェルミニイ・ラツセルトゥウ」をオデオン座で上演した際、檢閲官は作者に或る部分の修正を希望し、作者は之を快諾した事實もあります。これが檢閲官の最も單純な、そして第一に盡すべき義務なのであります。

…………どうして檢閲官は此の戯曲中眼ざわりの個所を指摘して訂正を求めなかつたのでしよう。

それは、諸君、本員をして云はしむれば、檢閲官が此の如くする時は、問題の解決があまりに容易だからであります。

上演に先ち、ゴンクウル氏は新聞記者の問に答へ、此戯曲は最も純潔なる文字を以て綴られたものであると述べて居ます……

ディオニ・オルヂネエル君——處が主題はさうでない。

ミルラン君——諸君、ゴンクウル氏の言は親が其の子について語るやうなもので、信ずるに足らないと云はれるならば（微笑）不肖本員が此の戯曲の保證人となつてもよろしい。本員は總稽古の當日實際に舞台を觀、なほ上演禁止の發令と同時に再三、問題となるべき第一幕を讀み返して見たのであります。そして、若し本員が檢閲官であるとすれば、作者に修正を希望するであらうと思はれる個所を四ヶ所だけ發見したのであります。只今から、此の議場に於て、其の個所を讀み上げて見ようと思ひます。勿論、傍聽禁止を求める必要はありません。

此の四ヶ所だけは檢閲官が作者に修正を求める權利があると思ひます。ただそれだけであります。文部大臣は、若しそれ以外の個所について御意見があれば、此の議場に於てそれを指摘されたい。

御心配は無用である。若し朗讀する個所が穩かでないと御思ひになつたら、議長、どうか御注意を願ひます。

ルグラン君——議會の檢閲が不法だと云ふんでしよう。（笑聲起る）

ミルラン君——作中の一人物、プウレットがその朋輩の女エリザに向つてから云ひます「こいつあ、可笑しい………」なるほど、かう云ふ言葉は、わがアカデミイでは使ひません。われわれは、やはり、アカデミイの會員ではないのであります。が、（笑聲）「こいつあ、可笑しい。お前がそんなだつてこた、夢にも知らなかつたね、誰かに上氣せちまふなんてさ……。だつて、今迄、お前のつていふのが一人でもゐたかい……。男だらうが、女だらうが、お前にうんて云はせたものは、一人だつてゐやしない……。あたしや、お前つて女は、さういふ風にできてな

いんだと思つてたよ……。處が、そこは、味を覺えたね……」こゝが、問題にすればできる一ヶ所であります。（議場騒然）どうです。本員は諸君と同樣廢止ではありませんか。

第二の個所。同じ人物の口であります「ちえツ、およしつたら、下らない理屈は……。どうせ女ぢやないか、あたしたちは……。それに、人樣の御厄介になつてやしないんからね……。人殺しをした覺えもなけれや、泥棒したことだつてありやしない……。お前の云ふことを聽いてると、丸で、あたしたちは罪人ぢやないか……。あゝして、家のなかで働くのが……」（議場騒然）

左翼の一議員——傍聽禁止を求めます。

ミルラン君——諸君、つまり、本員も、此處を削除すべきだと思ふのであります。然るに檢閲官はそれをしなかつた。「世間にいくらだつてゐる。あの亭主持ちの女と、一體どう違ふんだい……亭主を持ちながら、それが不足で色んなことをする女とさ、……」それから、最後の一ヶ所は、プウレツトが「見ておやりよ、この色氣狂ひをさ ……」と云ふと、エリザが「あらさうぢやないんだよ……。だつて、もう十五日も家の中ばかりに引込んでたんだもの……。たまに一日ぐらゐ、檻の外で暮したいよ……いゝ天氣だね……ぶらぶら歩いて見たいね」すると、プウレツトが「云つとくけど、うつかり つかつたまゝ眠つちまつちや駄目だよ……お神さんは 日曜と來ちや、それこそ手におへないんだからね……時間に間に合ふやうに歸つといでよ……」（議場また騒然）

以上の四ヶ所を削除すれば……。

左翼の一議員——全部削除し給へ。その方がました。

オルヂネエル君——汚らはしい、實に汚らはしい。

ミルラン君——つまり、檢閲官は、これだけの個所を修正した上、上演を許すことができたのであります。それに、何等の注意も與へないで、いきなり上演を禁止すると云ふことは、今日までその例がないのであります。

……戯曲の他の部分については、本員は、全然上演禁止の理由を認めません……。事件の行はれる場所については……。

ノエル・パルフェ君——テーマがよくないんだ。

中央の一議員——あたまもよくない。（笑聲起る）

ミルラン君——テーマですか。そのことは後で述べます。……

……次に人物についてゞあります。なるほど、人物は何れも娼婦であります。然しながら、文部大臣は、觀衆たる善良な勞働婦人が、之を見て嫌惡と羞恥の情を感じるよりも、富裕な、氣樂な、贅澤な娘の生活を、嫉妬と羨望を以て見る方が一層危險

で且つ不道徳であるとは思はれませんか。(左翼より拍手起る。中央及右翼之を遮らんとす)

或は事件そのものが良くないと云はれるのですか。第一幕の終りで、エリザが其の情人を殺す、それがよくないと云はれるのですか。それならば御尋ねしますが、現在市中の大劇場で、成功裡に某アカデミイ會員の作を上場して居ます。そして、其の作品の第一幕の終りに所謂濡れ場があつて、遂に服のホツクを外すと云ふ所で幕になる。後は見物の想像に委せるわけであります。(左翼より「然り然り」と呼ぶものあり。議場騷然)

若しも、かういふことを許すなら……勿論、本員がかれこれ苦情を申立てるわけはありません。(笑聲起る)

今日まで、一般の批評家は、自由劇場の上場脚本に對して可なり峻嚴な態度を示して來ました。然るに、此度は、只一名の批評家を除く外、一齊に此の作品の傑れたる特質を擧げ、上演を禁止するほどの必要は毛頭無いといふ說を發表して居ります。

オルジネエル君——それは仲間褒めだ。

ミルラン君——いゝえ、仲間褒めではありません。なぜならば、あなたの齊友であるフランシスク・サルセエ氏は、其の劇評に於て、常に自由劇場の上場脚本を批難攻擊して居るに拘はらず、此の度に限つて、「娼婦エリザ」は毫も上演に差支なきものであることを述べて居ます。たゞ同氏は、此の作品に「芝居になつて居ない」と評して居るだけであります。其他、當代の權威ある批評家、ジユウル・ルメエトル、アンリ・ボオエル、セアアル、……等の諸氏は等しく、此の禁止をいはれなきことと宣言して居るではありませんか。その上にです、文部大臣、あなたの管下にある大學教授にして同時に最も卓越した批評家たるエミイル・フアゲエ氏、同氏も亦、新聞「太陽」紙上に於て、此の作品の價値を認め、殊に第二幕法廷の場の如きは驚くべき正確を以て描かれてあると云ひ、これこそ一個の寶石であると推賞して居ります。

…………………………

かくの如く、批評壇の輿論は此の作品を純潔にして資質に富むものと見做してゐる。實際、悲痛な作品が不道徳であることは稀れであります。「娼婦エリザ」は決して風俗を紊す作品ではありません。

これで先づ、形式の上で上演に適しないと云ふ理由は消滅しました。今度は、先程も申しました通り、作者の支持して居る思想について吟味して見ませう。

娼婦エリザは、なるほど虐げられたものゝ爲めに放たれた憐憫と正義の叫であります。其の人物の一人が云ふ如く、彼

は、無智と病毒と貧窮との三重の運命を背負はされて居るのであります。即ち、「娼婦エリザ」は、社會に對する呪咀の一叫であると云へます。

……なほ、娼家を監視する警察官を以て、一種の客引なりと斷じたのは、決して此の作者が初めてゞはありません。（議場騒然）

ブルウス君——諸君は子供ではないだらう。

ミルラン君——本員の言葉遣ひが聞くに堪へないやうなものであるとは思ひません。が……（續け給へと呼ぶものあり）

……警官を斯の如き名で呼んだ最初の人は、——これを申しても誰の迷惑にもならぬと信じますが——それは、文部大臣の御同僚たる、ギュイヨオ君であります。同君の醜業婦に關する著書を見られるがよろしい。（笑聲起る）ギュイヨオ君は其の著書の中で、「娼婦エリザ」に關し、最も正しい批判を下して居られます。

ギュイヨオ君（勞働大臣）——其の意見は今日も變更しません。

ミルラン君——意見を變更されない。よろしい。本員もさう信じます。「娼婦エリザ」は、棘の花を持てる婦人の群より離れて、貧しき少女の上に眼を轉じたことが、世間を騒がせた」と云つて居られるのは至言であります。

即ち問題は、劇場に於て、此の種の社會問題を取扱つた作品を上場することが危險であるかどうかであります（文部大臣首を横に振る）

大臣は危險でないと云はれる。それならば、上演禁止の理由は作品の思想と關係はないことになります。或は、「娼婦エリザ」が公衆道徳を紊すものであると云はれるなら、政府檢閲官が、今日まで、果して公衆道徳の完全な維持者であつたか、どうかは、知る人は知つて居るのであります。（左翼より「然り然り」と呼ぶものあり）毎夜、半裸體の婦人の群を舞台に上せ、卑俗極まる歌詞を高唱させて居る幾多の劇場や寄席は一體どうしたのですか。之を取締らずして、一方、近代小説史上、最も偉大なる名を殘すべき作家の一人、ゴンクウル氏、並に、批評家が擧つて其の才能を謳歌しつゝある新進アジャルベエル氏、此の二人の名を冠した、嚴肅にして道徳的な作品「娼婦エリザ」の上演を禁止するとは、實に言語同斷であると云はねばなりません（拍手）

………………　………

本員は、平素、其の人格に多大の敬意を拂つて居ります文部大臣から、檢閲の標準について明確な指示を與へられることを希望します。………あまり長く喋舌り過ぎたやうです。（「そ

んなことはない」と叫ぶものあり）然しながら、問題は我が佛國の文學藝術に關する極めて重大な問題でありますから、敢て議員諸君の配慮を煩はす次第であります。（左翼議席より一齊に拍手起る）

レオン・ブウルジュワ君（文部大臣）登壇――ミルラン君の御質問に對して、成るべく御滿足な御答へを致したいと思ひます。……最も愼重に、最も自由な立場から、戲曲「娼婦エリザ」を研究審議致しました結果、公衆道德の上から見まして、上演を禁止する必要があると信じたのであります。

抑も檢閲と云ふ法規が存在し、それを文部大臣が實施することになつて居ますが、時によると文部大臣の取つた處置を不適當であると云ふものもあるでありませう。また時によると、文部大臣自ら、自分の取つた處置を悔む場合もあることゝ思ひます。實際、檢閲と云ふ役目ぐらゐ機微なものはありますまい。禁止をしたが爲めに萬人の恨を買ふこともありませう。許可したが爲めに、また萬人の譏りを受けることもないとは云へない、但し作者を除いてゞあります。（笑聲）

兎に角、檢閲と云ふものが存在する、これはどうすることも出來ない。事ある毎に、新聞などで檢閲の不法を鳴らすけれども、決して此の制度は無くならないのであります。檢閲は其の實劇作家一同の利益の爲めに存在するとまで云はれて居ります。それは、誰がそう云つたかと云へば、最も大膽な、そして最も此の問題に關係のある、つまり、最も頻繁に、最も烈しく取締條令に觸れた劇作家、アレクサンドル・デュマ・フィス其の人であります。……彼の言に從へば「檢閲は姑のやうなものである。一緒に居るとだんだん要領を覺える。たゞ、可なりの辛棒と、少しばかりの機轉が必要だ」そうであります。（笑聲）

そこで、此の度の檢閲が、果して、邪慳な、五月蠅い、辛棒が出來ないほどの姑であつたかどうかを一ト通り考へて見たいと思ひます。

その前に、ミルラン君から、寄席で唱ふ歌詞について御注意がありましたが、これは、檢閲官も手を燒いて居る次第で、一旦禁止した歌詞が、無斷で唱はれて居るやうなことが間々あるのであります。この問題についてこれ以上申す必要はありますまい。直ちに「娼婦エリザ」問題に移ります。

先づ、ミルラン君は、上演禁止の理由を質されました。

このことについては、ゴンクウル氏自身が新聞記者に對して答へた言葉を參考にしたいと思ひます。「今度の上演禁示については、あなたも、いくらか懸念をおもちにはなりませんでしたか」と云ふ問ひに對して「そうですね、文句なしに通るとは思

ひませんでした。禁止されたと聞いて、さほど驚きもしませんでした」と云ひ、「此の作品が社會問題を取扱ひ、政府の施設を攻撃したと云ふ點、あゝ云ふ女の生活を如實に描いてあると云ふ點、それは禁止の表面の理由であらうが、それよりも、當局と、脚色者アジャルベエルとの間に個人的の感情問題があるのです」

諸君、此の一項は、ゴンクウル氏の誤解であることを信じて頂きたい。

ミルラン君――本員は其の點には觸れませんでした。

文部大臣――ミルラン君は觸れられなかつた。たゞ序だから申すのであります。

なほ、「娼婦エリザ」は、ゴンクウル氏が主として云はれる如く、また、ミルラン君が縷述された如く、決して、社會問題乃至政治問題を取扱つたが爲めに禁止されたのではないことを明言します。

我が尊敬するゴンクウル氏は、佛國共和國政府の諸員が、如何なる感情の下に、其の職務に當つて居るかを御存知ないと見える。此の種の問題の研究に對して、不斷の注意と、最も熱烈な同情を向けることはわれわれ當局の名譽であり、目義務であります。たゞ、その研究の態度如何、發表の形式如何が考慮の對象となるのであります。

本大臣は極めて困難な立場にあります。一方、劇場に於ける「娼婦エリザ」の上演を禁止しながら、今、この議場に於て、その内容を公開しやうとして居るのであります。

リヴェ君――此處は劇場ではない。

文部大臣――……そこで、先程、ミルラン君が希望された如く、本大臣も、萬一、目にすべからざることを目にした際は、議長に於て、宜しく制止の勞を取られんことを希望します。(私語するものあり)

先づ、最初に、「娼婦エリザ」の梗概を簡單に申上げます。(議場騒然)

議長――文部大臣の演說を聽かれないつもりですか。(笑聲)

文部大臣――簡單に話を申します。エリザは朋輩の女二人と一緒に家を出ます。日曜日であります。ブウロオニュの森の一隅に、訪れる人もない草地がある。そこへ散歩に出掛けるのであります。そのうちの一人、即ちエリザは、自分の所に通つて來る客のうち、一人の若い兵卒に特別に心を惹かれてゐる。朋輩の女共はこの戀愛について、彼女をひやかしなどする。そこへ、例の兵卒がやつて來る。エリザと二人きりになる。初めのうちはなんでもないが、だんだん二人の感情が昂じて來る。(私語が起る)

諸君、御心配は御無用でありまず。決して不穏な言辭に紊しないつもりであります。

若い兵卒は、エリザに向つて、此の墓地の中で、自分の自由になることを求めます。彼女は拒絶します。兵卒は腕づくで目的を達しやうとする。彼女は遂に其の情人を殺すのであります。第一幕はこれで終ります。第二幕は法廷の場であります、(議長に向ひ)作者の意圖を極めて正確に傳へたつもりですが……。

議長、——さよう、適當に削除はして居られますが……(笑聲)

文部大臣——第二幕は殆ど辯護士の辯論を以て終始して居ります。此の辯論は、實に美事であります。つまり先程ミルラン君が述べられた娼婦の運命より說き起して社會制度の不備を指摘し、エリザの罪は其の質、無智と病毒と貧窮の罪であると斷じて居るのであります。然しながら、結局、エリザは死刑の宣告を受けるのであります。

第三幕は、別に此の問題と關係がありませんから省略します。

筋は大體右の通りであります。成る程これだけでは何等不都合はないと思はれるでありませう。取扱はれて居る問題は、社會哲學の問題であつて、此の問題が論議されることは少しも差支ないと思ひます。然しながら、演劇に於ては、事件が如何に公衆の前に現されて居るかと云ふ問題が含まれて居るのであります。此の點に關し、フウキエ氏が昨日發表された文章中の最も適確な言葉を借用すれば、作者の意圖と作品の外觀との間に一つの間隙があるのであります。つまり、眼前に展開された光景の、或る形態、或る細部が、公衆に、嫌惡、不快の印象を與へると認めなければならない場合があるのであります。

デルウレエド君——其の場合、嫌惡の情は寧ろ道德的である。

議長——さうとばかりも云へません。

文部大臣——さうとばかりも云へません。さうです、議長の云はれることは至極尤もであります。かう云ふやうなことは、舞台を見た直後の印象によつて判斷をしなければなりません。若し公衆に採決の權利を與へたとしたならば、その結果はどうでありませう。此の作品を見て笑つて居るものと、さつさと家に歸つて行くものとの間には、投票の結果に自ら大なる差があると思ひます。われわれは、そのどちらかと云へば、さつさと家に歸つて行く方なのであります。(拍手起る)

それならば、此の戯曲の細部はどうであるか、場面場面の色調はどうであるか。

女共が登場します。互に名を呼び合ふのでありますが、其の名は、「蛹張月」「エリザ」「ブウレット」それから「ぶつた斬

りのマリイ」

會話が交換されます。そして、話が例の兵士のことに及びます。「さうさ、あたしや好きだよ、あの男……。あの人の爲めになら、からだをコマ切りにされてもいゝよ」エリザがから云ふと、先程ミルラン君も引用された通り、今度はプウレットが「こいつあ、可笑しい。お前がそんなだつてこた、夢にも知らなかつたね、誰かに上氣せちまふなんてさ……。だつて、今迄、お前のつていふのが一人でもゐたかい……。(「モウそれでいゝ」「わかつた、わかつた」「ヨショシ」など呼ぶものあり)

議長――文部大臣の演説を最後まで聽かれるやうに……。

文部大臣――此の何は後を讀まずに置きます。先程ミルラン君が讀まれましたから……。然し、ミルラン君は、其の後の返答を讀まれませんでした。「さうぢやないんだよ……あの人とだつて、ほかの男とだつて。あたしや、一度も……。それがだよ、あの人だけはあたしんとこへ通つて來て欲しくない。さう思ふほど、あの人が好きなんだよ……。あたしんとこなんかへ來ると、あの人が汚れるつていふ氣がするの……」するとプウレットが「ちえツ、およしつたら。下らない理屈は……。どうせ女ぢやないか、あたしたちは……。それに人樣のお厄介になつてやしないんだからね……。人殺しをした覺えもなければ、泥棒じたことだつてありやしない……。お前の云ふことを聽いてると、丸で、あたしたちは罪人ぢやないか……。あゝして、家の中で働くのがどこが惡いのさ……。世間にいくらだつてゐる、あの亭主持ちの女と、一體どう違ふんだい……(議場騷然)

かう騒がしくては本文を讀み上げることができません。

マイエ伯爵――文部大臣は上演禁止の責任を負はれたらよからう。閣議はそれでやめられたい。(右翼より「然り然り」と叫ぶものあり)

議長――諸君は文部大臣の脚本朗讀を聞かれたら如何です。

文部大臣――諸君、本大臣は……責任上、問題の性質を明かにして置く必要を認めます。

フィリポン君――その必要なし。理由は正當と認める。

議長――それでは、首相を煩さずに、事件を解決される御つもりですか。(私語起る)それでは少し御熱心が過ぎるでせう(左翼より拍手起る)…………

文部大臣――先を讀みます「ブッタ斬りのマリイ」――「そればかりでなくさ、時間はすぐたつちまふよ……。打ち合せだつてしなくちやならないし。七時の晝見世に遲れちや駄目だよ。プウレット。六時に歸つといでよ、アブサントの時間だからさ……。

エリザ。飲み助！　ぢや、七時十五分前まで………。

プウレット（ほかの女たちを見返り）見ておやりよ、此の色狂氣をさ。

エリザ。あら、さうぢやないんだよ………。だつて、もう十五日も家ん中ばかりに引込んでたんだもの………。たまに一日ぐらゐ檻の外で暮したいよ………。いゝ天氣だね。……ぶらぶら歩いて見たいね。

頬張月。そんなら、歩いとでよ。ぢや、今夜また………。

プウレット。云つとくけど、うつかり　つかつたまゝ眠つちまつちや駄目だよ……。お神さんは、日曜と來ちや、それこそ手におへないんだからね………。時間に間に合ふやうに歸つといでよ………。

第二場であります。戀人二人の場面であります。濡れ場であります。初めは極めて美しい場面であります。幼時の憶ひ出を語つた後、男はエリザに向つて「おゝ、リザ……」と呼びかけます。エリザは「あゝあ、あたしが、働らかなくつてもいゝからだなら………」そこで、男は、女を抱きながら後ろに倒さうとする。

中央の議員——文部大臣、もう澤山です。

文部大臣——何んですか。われわれは、眞面目な問題を討議してゐるのです。（「先を讀んで下さい」と叫ぶものあり）

もう一句だけであります。男は、衆の中を、膝を突いたまゝ、女の後を追ふ。エリザ。あんたが初めて來た時、あの時分のあたしは、それや、なんの役にも立たない女だつたの………。來る男も來る男も、汚ならしいことばかり云つてさ………。殺してやらうと思つたことが幾度あるか知れない………。それに、亂暴でさ………丸で獸さ………。それに、あんたゞけは、それや、優しいんだもの………。大きな聲一つ立てないで………。男は、だんだん興奮して、なほも女に近づかうとする。そして遂に、女の胴に腕を捲きつける。（議場また騒然。「モウヤメロ」と叫ぶものあり）

男は、相手を押へつけようとする。

諸君、作者は、此くの如くにして、此の種の女の生活其の儘を描かうとしたのであります。

レイベエル君——寄席の如く………。

文部大臣——恐らく、縦へ舞台の上に、妓樓の内部を現はしたとしても、これ以上完全に彼女らの生活を觀衆の眼前に髣髴せしめることは至難の業でありませう。此の理由で、此の脚本は、上演を許可することができないのであります。

ミルラン君が云はれるやうに、訂正すべき個所を指摘するこ

とは、かくの如き描寫全般に亘る問題にあつては、何等その効力がないのみならず、一語一句が悉く一情景の藝術的要素として、動かすべからざる役目を務めてゐる場合、われわれ如き門外漢の協力は却つて作者に取つて御迷惑であらうと、わざわざ差控えたのであります。遺憾ながら、文部大臣合作戯曲の處女公演は、次の機會に讓ることゝ致します。（笑聲）

若し、ミルラン君が、作者と共に、此の戯曲の部分的修正によつて上演を可能となし得ると信ぜられるなら、本大臣は、甚だ大なる藝術的興味と、滿腔の好意とを以て、その研究に着手したいと思ひます。

アンマン伯爵——議場で讀み上げるくらゐなら公演を許しても差支ないではありませんか。

ミルラン君——文部大臣は作者自ら修正の個所を示せと云はれますが、これは不合理も甚しい。

文部大臣——作者は、今日、禁止の理由を知つた以上、作者として、その理由を除く方法をとられることはご隨意であると云ふのである。

ミルラン君——繰返して云ひますが、本日は、検閲の方針が場合に依つて異ると云ふことを心外に思ふのであります。ところで、文部大臣は此の戯曲を以て上演不可能なるものとなし、而かも、その戯曲の一部を本議場に於て朗讀せられたのであります。それは既に、ある部分が公然上演せられても差支ないと云ふことを、文部大臣自身裏書をされたやうなものであります。文部大臣は恐らく、検閲官が禁止をした、カフエー・コンセールの小唄を此の議場で口吟まれる事は出來ないでありませう。本日は飽くまでも、當局の態度が、淺薄卑陋たる此等、俗曲に對する場合に、寧ろ寛であり、此等にして、嚴肅な文學的作品に對して、却つて、嚴であると云ふ事實を責めやうとするものであります。（盛なる拍手）

議長——これで討議を終ります。

議會傍聽はこれだけにしてをくが、翌日、新聞フイガロは、此の論議に就いて、長文の社説を掲げ、最後に結んで曰く、

「議會はかくて、一時間餘に渡り、採決を要しない此の討議の一場面を喝采した。わが議員連は實際、あまり文學を談ずる機會を持たない。官報議事錄を讀む者は、演說中しばしば、不適當な半畳を入れるものがあり、彼等の大部分が、如何に劇界の事情にうとく、作者、又は、批評家の社會的地位、乃至、權威に盲目であるかを立證した。然し乍ら、考へて見れば、地方の一選良は、敢て此の種の問題に精通する必要はないかも知れない。

人間廢業

——寂滅の卷——

大泉黒石

人間が厄介なら、人生は面倒だ。人生が面倒なら、話は無理にきまつてらい。AとBとが同じものでございますと言ふから、A^2とB^2も同じものだらう。だから二つの方程式$A=B$と$A^2=B^2$とは、一ッ穴の狸と思つたつて、よささうなもんだが、さうは行きません。$A=B$の方は$A-B=0$となるが、$A^2=B^2$の方は$A^2-B^2=0$即ち$(A-B)(A+B)=0$となつて$A=B$のほかに、$A=-B$といふ無緣の根が飛び出して來るから、こんな方程式を解くために、左右兩邊を平方すると、のこ〳〵出て來る根のなかには、本來の面目とは違つた代物が混つてゐます。と、中學校で教はつたが、それだけぢや、教師の役目が濟まんと見えて、われ〳〵人間も矢張りさうですと言ふのだ。Aといふお父さんと、Bといふお母さんとが、人生の方程式を解くために天降つて御平方なすつた結果、造物者本來の面目に適はん澆季末世の厄介な有象無象が、段々ふへるばかりで、ます〳〵人生は面倒になるのでありますから、數學に於ても、三次四次五次となるにつれて、無理方程式の根の吟味が頭痛の種になるやうに、人間の見さかへも、なか〳〵樂ぢやないのでありますと言ふのだ。田舍の教師だけに、斯はない蛇足をつけたもんだと思つて今でも覺えてゐるが、方程式もさうなると、頭に無理といふ冠がつくさうだ。からなつちや、人生も本來の面目に緣なき衆生ばかりで面倒になるに違ひないから從つて、その一商人を覗いて書く話だつて無理からん譯に行くまい。人生が面倒なら話は無理にきまつてらい、とは此處の理屈だから、話のなかの本來の筋と餘計な筋の見さかいも樂ぢやないかも知れないが、前編「絶倒の卷」を讀んだ人は、お交際だ。終ひまで跟いて來たまへ。と一言斷つて置いて、前編へブッキラ棒につゞけると斯うだ——

智慧があるくらいなら文士になるものか、その智慧のない俺に向つて、川屋公、一體何を御賴みするから相談に乘つてくれとい

ふたか、一向見当が付かずにゐるところへ「へイ、お早うござんす。昨夜はお楽しみさんでしたね。へイ。川尻さんの手紙は御覧なすつたかね？」といふ声あるとゝもに表口から、隣家の九助が飛び込んで来たので、朝の御飯を了ひかけてゐた僕は台所から返答するのだ。「見ましたよ。トルストイの「復活」が、とふた筋書をつくつて、苦心の力作も東京で封切り叶はんとあつちや、さぞ残念だらうと思つてゐるところサ。」「ブツ！残念ぐらいで何となか成つてくれりや、また幾分助かりまさアね――大将――おゥやない――先生だ。ねエ先生――」と、羽織の紐をクルッとめくつて、上り框に腰かけると、例の長い眉毛を一本づつ丁寧に抜きながら語り出すのだ。「とにかく、あいつを仕上げるのに一と月もかゝつたのに、われわれ俳優や小道具連中の巾着には鐚一文も入りやしない。ロハ働きなんだ。会社の社長が現物を抱えて大阪へ売り飛ばしに行つたと川尻さんの手紙にも述べてあつたでせう？その時は安西監督の「復活」が、もう東京で封切りされつゝあつたのサ。だから大阪の交換屋に掛け合せると、二タ月や三月は待つてもヨウオマスサカイ。折角買ふなら、新米本物にしますワイナア、てんだ。そつちはそれでヨウオマスかも知れんが、それぢや此方がたまりマヘンワイ。ナンマイダーさ。どゝのつまりは安い値段に手放しちまつて、もはや斯くなつたからには、いかな苦労、おめおめと、半金かゝえて帰らりやうかい。いでや関西方に聞えたる、女優荒しの色情武者が、遊興のほどを見せてくれん。自家のヤン八。ヤツ。コラショッ！とお出でなすつたもんだから、すつかり空尻になつて、ノコノコお戻り遊ばすと、われわれに向つて、エゝ諸君！暫くはかやうやうの次第で、先方の都合上、映画代金は後から直ぐ送りとゞける約束になつたんだから給料の方は暫く待ちたまへ。なんて、いゝ加減に胡麻化したものだ。その時は頭個に金が送つてくることゝ思つて、毎日待つてたんだが十日たつても二十日たつても音沙汰がないのサ。こいつは妙だなア野郎に訊いて見やうと思つて、社長室を覗いてみると、何所へでも行つたのか、姿がない。この奴が持つて歩く革の紙入れが一ツ、卓子の上に丸々と膨れてゐる。膨れてゐるなら五六枚ついでに頂いときませうか、こんで、こッそり入つて中をあけると、金は一文もない。仲居の勘定書、洋食料理の附出し、月賦収音の受取証といふたぐいばかりで、とんと埒があかないと思つたら、その間に、芸者らしい名前の名刺五六枚と、白粉くさい西陣織の粋な爪用枝入れと、それから斯ういふ有難い御札が一ツ挾まつてゐるのサ。ごらんなさい。」と、懐からかい毛糸の巾着を掴み出して、口をひらくと三寸角の小さい御札が鼠茶色になつてあらはれ

た。「失禮だがこの御札の袋の御符が讀めますかい？」とはひながら袋の小幕を伸べて俺にくれた。この通りだ。上り框からヌツと猿臂をのばして手を出すと、台所へ出くほど狭い代りに、こんな賓客に上り込まれる恐れがないから便利な家だ。だから飯を食ひかけて、御札をいただいて見ると、袋の上にかういふ活字だ。

天下晴天　南都　粉那山
訟ニ　奉禮相汰沙彌陀佐飛立斗御水札
夫婦威泰　色竹　廉酒寺

南都は奈良だ。粉那山は應洞寺の御水札に違ひないが、その他の文句に到つては、卒爾の判斷がつきかねさうだ。「成るほど。こいつは一寸讀めないよ。」と言へば「へ、、。失つ張りさうかね。さうだらう。そこで其の中に御本體がゐらつしやるから、引き出して御覽なさい。立ちどころに解つちまひます」と丸助が教へるから、その御本體を抓み出して見ると、カルタぐらひの小さい白紙で、表に列んでゐる活字の文面は、袋と同じものだが、こつちには親切に振假名がふつてあるから一目瞭然と讀み下せる。曰くだ。「ソモジニ、ホレ、アヒタサミタサ、トビタツパカリ、ゴスキサツ」といふのが、眞ん中の柱で、右側が「テンカハレテ、ナント、コナサン」となり、左側が「フウフナリタイ、イロヨイ、ゴヘンジ」となるわけだ。「成るほど。」こんな物か？」「さうサ。私もそんな物たア思はなかつたが、紙入れに守護符さんを忍ばせてあるくやうな賢い赤髭上人ぢやないからね。調べて見ると、ナント、コナサンと來るんだもの、」アホラシイチヤ、オマヘンカだよ。ほんとうに！そんな物體は何處を探したつて賣つちやない。てツきり大阪邊の白首に貰ひやがつたに違ひないやね。いゝ心地よくバラ撒いて遊んだ證據だ。だから其札の一字一句が、われ〳〵が脊血のドロツプスだと思ふと、もう堪らないぢやありませんか。あなた。煮えくりかへる腸が臍の穴からトビタツパカリ、ゴスキサツ、たア好くも吐したね。泥坊め！待合・料理屋の勘定書でもあつたら最後、奴の獅子鼻に突ツつけて問詰責せいでは置くべきかアと、眼を皿に掻きまわしたが、用心ぶかいね。汽車の窓からでも棄てたものか、遂に見つからんので、せめて其の御水札だけでも、ことによつたら後日に於て物を言ふ火藥になるかも知れない、てんで、奴の紙入れから失敬しちやつたんです。」つらつら慮るに、他社の月給二倍さゝげるなんて物語がチトよすぎる。こいつ危ないと感ずらんこともなかつたが、映畫さへ…

く成功れば、尾上松之助みたいに、牧竹館や激日數箇所に一萬二萬と獻上して勳章が貰へる今日、何んな手厚い待遇でも僞れば出來るのに重役どもが遠慮してゐるのだから、なるん、かういふ命と思はねばこそ、却々血の氣のある赤堀様と惚れたが因果サ。もと籍を置いてゐた大森界隈の撮影所から鞍を替へる砌り、他の連中と同じ手當金三十兩ばかり川尻さんの手を俥つて拜領したきり、總一文の御下賜にもあづからん始末だから、約束が違やしませんかと伺へば、ウーーン、殘念だが確かに違ふけれども、第一回作品の成功があの態と來ちや、賣れるには賣れたかも知れんが、代金回收意の如くならず、手許が苦しいから、吾儕を助けると思つて今しばしの忍耐ちやと、一月も二月も忍耐をすゝめやがるもんだから、一列に眼が窪んで憂ひちやつたね。連中のなかには、今、常盤御前を演つてる江川の延公みたいに長年かゝつて拵へた命から二番目の御代物が質流れになるといつて騷いだり、淸盛入道の坂坊みたいに、米屋が發起人で燒芋屋までが同盟しちやつて溜つてゐる勘定を片づけるまでは掛賣一切御斷りを喰ひ、人心地のない者、その數を知らずてな譯だ。お恥しい話だが、私もその口サ。聞いておくんなさい、實は此間から親父の虱が私にまで湧きやがつて痒くて遣り切れないから、思ひ切つて熱湯に漬からうと思つたら湯錢がないので、着てゐる毛絲の肌衣を曲げに行くと、番頭の野郎、質札に十五錢のツつけて突をつきやがつたなアきだしも、氣がつくと「毛絲シヤツ一枚」とある質札の行目に「但し虱百匹付」と惡戲書きしてやがるんだ。やや！これは！とばかりムカツと來る胸に一物。「入れたばつかりだが、今の代物を受けに來た。」と横さまに引返したら、野郎妙な面アしやがつて出したものサ。そこで「一品足りないよ。」と落ちつい二始める。「おや。それは」と番頭の目玉が丸くなる。「呆けちやいけねエ。虱が百匹だ。逃がしやしめえな。おい。そいつを何からてんだ。」と帳場へ尻まくり。キリリツと刺を見せて思ひ入れたね。さあ。大變。こいつは迂濶り失敗つたらう？グウと詰つて吐血しやがるぢやないか。面ア見ろ！そこへ主人が轉り出て平身低頭よろしく、失禮乍ら足はその何とかでと包んだ物體をくれやがつたんで、その場の鳴りは鎭めてやつたが、外へ出てから包をひらくと金一兩。虱一匹につき一錢だ。こいつは滅多に潰せない毘蟲だと思つたね。へゝゝ」と笑つた。こんな頓智の持ち合はせがあるから、米屋の親爺だつて天然米を擔いで來ると一ばい食はされると思つてゐると鼻毛の九助は引きつゞき話するのだ。

「まあさういつた形況だから、吾儕を助けて専ら忍耐してゐた日には完結がつきますまい？そこでと引一枚の紙入れを元の場所

に置いて――今日こそは確かな挨拶を承はらなくちや退くまいと、暫く待つ間に戸外からやつて來た。來たのをつかまへて先づわれ〳〵が窮境の哀訴から說き起して本題の掛合ひに及ばんとすれば、奴め、「わかつてるよ。わかつてるよ」と手をふりふり途方もないことを言ふたも言ふた。「さうガツガツ催促しなくても、月給を拂ふ意志は確かにあるんだから安堵して部署につきたまへ。」「フン。意志がなかつたら事件だが、拂へる見込みは何時ですかい？」「何時でもいゝぢやないか？そんなに吾輩の人格が信用置けなけりや辭職たらよからう？」「エヽ？辭職たら愈々給金が取れまいつて？フヽンだからサ。さう慌てんで、今取つてゐる義經を早く仕上げたまへといふのだよ。わかつたかい。君。今月の末は大丈夫。まかり間違つたら、吾輩、裸一ツになつても、君達に不自由はかけないつもりだからね。」と矜かしたり宥めたり、頭から舐めてやがるんだが、何しろ分別のつけやうがないので、今月の末はといふ言葉を命の綱に、セツセと働いてる始末でサ。へイ。」といふ調子だが、卒爾ながらも厮をくれば、俺が東京へ着いたのは、確か二十四日で、その翌日此家へ引越したんだから勢ひ「月末といへば明日ぢやないか。九助さん。」「サア。その明日だ。樂しいやうで怖いやうで、まこと六ケ敷い明日になつたんだから、ゆふべ川屋さんとこで同勢揃つて評議の結果、前以て赤髭氏の懷中を探つて置かないことには、今日一日の仕事が手につかねエだらう。そこでた駒君は御苦勞でも赤髭の邸へ隱密に乗り込んではくれまいか、てな譯でげせう？厄介な使ひを頼むときばかり、名まへの下に君をつけて、人並みに扱ひやがる一味徒黨だが、そいつア迷惑だと逃げる場合ぢやないと思つて引受けてやつたんで、これから赤髭を捉まへに行くんです。ちよいと其の御水札を返して下さい。」と臂をのばして俺の手から御札を引つたくり、毛糸の巾着に藏ひ込んで、敵陣へでも乗り込むやうな按配だ。よろ〳〵立ち上つたかと思ふと「あ！さうだ。肝腎な用向きを度忘れしちやつて、どうも近頃めつきり粗忽つかしくなつていけねエ。」と、一たん持ち上げた尻をまた框の上にドツカリ据えて「さうだ。赤髭ンとこへ押し出すまへに、御前さん――ぢやねエ――あなた様だ――あなた様へチト御願ひの筋があつたんだツけ――――あの烏天狗の一件――ね。あいつ如何でせうか？ヘヽヽヽ。」と藪から棒に、附かぬことを言ひ出した九助だ。「烏天狗たア何だい？」「オヤ烏天狗を御存じないかね。ソラ。鞍馬山は東光坊に預けられての牛若丸が、父の仇なる平家一族を討ち滅ぼさうてんで、御山の杉の向ふ隣が一本のこらず擦りむけるまで劍術のお稽古ぢやないか。一尺二寸の木刀を振りまわしてなさ

る。チヂン。チンチンと、此處を長唄で行くとへ折しも俄かに風起り。天狗隊のバラ〳〵と。鳴動なして凄まじく。遙かの杉の梢より。またもや怪しの小天狗。木太刀打振り立ち向へば。シャー―小賢しと牛若丸。つけ入る木太刀を拂ひのけ。上段下段。さそくの働き。チヂン。チンと合ひの手が入つてへさしもの天狗もあしらひかね。跡を晦まし失せにけり〳〵。チヂン。シャンと來らア。常節の與問ぢや、どういふか知らんが、不束ながらも天狗の身うちには、木葉と烏の二色あるんだつてね。その烏の方サ。」「烏の方が何うかしたのかい？」「何うかしたのかいつて？へゝゝ。呆けちやいけませんよ。何も改めて申さんでも、ようがんせう？仔細は田屋さんの手紙に認めてある通りず。手ツ取り早くウンと一言承知しておくんなさいよ。使者の面目だ。」と一人で呑み込んでゐる。勝手な使者があるもんぢやないか。田屋公の手紙には、何か知らん御願ひの筋あつて、隣りの丸助より啓上つかまつる筈だから、宜敷く聽いてくれとあるきりだ。人に頼はれるやうな悧好しい筋も骨もない僕を捉まへて、何を承知させるつもりかしら？と思つてゐたのだ。だから正直にさう言ふと、怪訝さうに金壺眼を凹ませる丸助。そいつは合點が行かんといつた風俗だ。「フーン。して見ると此の話の二部仔什は、つまり私が申し上ぐる筈になつてゐるんだね？そいつは知らなかつた。さうですかい。道理で物がテキパキしないと思つたよ。はゝゝ。何アに、お前さん、大して面倒なこツちやござんせん。烏天狗の一件。あの贋物さ。」「その贋物を何うかするのかい。僕が？」「違えねエ。お前さん。それといふのが大體かうなのサ。今撮つてゐる義經の映畫劇。一世一代の特作品とあつて花形俳優揃にしたいんだ。私の牛若丸を筆頭に、常盤御前に靜御前。淸盛入道に武藏坊辨慶。以下は鞍馬の天狗に至るまでの端役に扮する連中が、お前さん、エハガキ屋の店先に雁首ならべて御婦人に想ひつかれるほど名まへの賣れた一流どこでげエせう？　烏滸がましくも目ざましいこたア、人と生れて凡そ界の横町に眼玉が二つ備はつてゐたら、まこと申し分のない顔ぶれだと仰有るべきところだが、一ツ困つたのは、烏天狗に扮して、チヂン。チン。と杉の梢に雲とあらはれ霧と消える離れ業を見せる役を勤める市川の松公といふのが、甲州の田舍から舞ひ込んで來たばかりの素人猿です。流行に木登りは達者にやるが、カラキシ名前がないので、折角そろつた粒選りの顔ぶれも、この野郎が挾つてゐるばつかりに、櫛の歯一本。ブツ欠けたやうに物淋しいぢやないか。此奴の面が俳優番付の隅つこにでも載つてゐると、名實ともにオール・スター・キヤストなんだが、何うにか出來ないものかねエ、と

田屋さんの殘念上りだ。それがお前さん、昨夜のことよ。へン。漢王に忠武侯。南朝に判官正成。田屋に九助とは、よくも言ふたね。憚り乍らトルストイの「復活」だつて矢つ張り私が仄めかして見せなくつちや、氣がつかんのだらう？ そんな智慧者を召し抱えてゐる癖に、かばかりの事に頭を抱えて思ひあぐむとは贅澤ぢやないか。あんまり曲がなさ過ぎるぜ。大將。構ふこたアねえ。芝居の方は松印に演らせて置いてサ。名前はもツと世間に廣がつたのを借りてクツ附けちや何うだい？ 天狗の面を冠つて出沒するんだもの。正體露顯に及ぶ心配はなからう？ だが、こんな端役にまで瀆れた名前を融通しやうなんて奇特な手合ひがゐるかしら？ 怪しいな？ と慮つてゐる矢先に、お前さんのことがチラと頭に浮んだのサ。御世辭は拙いが、心底は直明だ。然つちやいけません。ようがんすか？ あれで、何の某と親ゆづりの姓名があるか何うか覺束ない癖りの大將だと思つてゐたお前さんが、田屋監督に承はると、天下隱れもない先生だつてえから驚いたよ。成るほど、一昨日お宅の坊つちやんが仰有つた御父さんの御商賣はゴホンゴホンの理窟が通じない筈だ。あはゝ。だから斯んなド偉いお方に面識があるのに、名前を借りないのも損な話ぢやないか。何うだいと言へば、お前さんが俳優ぢやないから都合がわるいといふ挨拶でげエせう？ いゝや。俳優ぢやないから物に訝我だよ。作文の先生の烏天狗と來た日にや、和漢未發。洋秋未聞。神武以來の珍藝とあつて、名まへばかりたア露知らずの世間一列に逆卷いて觀に來るんだからメヽ！ ホツ。漢王の眼巾濟や南朝の家來に係寄りのない發明ぢやないか。我ながら感激に堪えちやつたね。と膝を乘り出せば、ウーン。それもさうだな。然し先生、承知してくれるかしら？ もつとも乃公の工面のいゝ時には、食はせる物も隨分くはせ、京都大阪くんだりまで物見遊山に連れ出してやつた義理もあるから厭たア言ふまいがねエ、と田屋さん考へてゐる。働かねエ頭のゼンマイだ。廣い世界に誰が煎餅一枚でも將來見込みのない助骨に食はせるかい。いづれそのうち何か頼まうと思へばこそだらう？だから折角賴まうぢやないか。折よくも先生、私の長屋に引越してござるほど貧乏の傾斜も天下に隱れてゐさうな樣子ぢやないから、御尊名を拜借させて頂けば一ぷく盛る――んぢやねエ――一ぷう包まうと存じます。七重の膝は八重でございと頭を下げて折り曲げて持ち込みや、泥雜はなからうと、一闘躍氣に口說いたら、やツと田屋さんも心動いて、ゆふべの手紙となつたる次第サ。右の通り、烏天狗の實體は松公だが、名目はお前さんの初舞台、お目見えの出演といふことに決着したんだ。すまねエが、名前を

貸しておくんなさい。居ながらにして金一封の沙汰におづかるのも惡かないよ。へゝゝ一といふ調子の鳴物入りだ。日をも月をも舐め去る勢ひベラ〳〵と、吹みたいな顔の門とりッぱづしに、原稿用紙三枚も管を卷きやがつた。未だ曾て斯んな箆棒なやつに出會つたことがないので、かう滑らかに回轉すれば、人間の舌も大した機械だと思つて驚いたが、むろん驚いたばかりぢやない。昔。バークの彈劾演說をくらつた豪傑のウォーレン・ヘスチングスに言はせると、あの時ばかりは、さしもの吾輩も、地球上で一等悲觀した人間のやうな氣がしたんださうだ。鼻毛の九助のお惣舌を默つて聽いてゐる俺に言はせると、この時ばかりは、地球上で一番悲觀した人間のやうな氣がした。そりや、さうだらう。わざ〳〵俺の顏色を曲げるやうな口上ばかり列べやがるんだからな！何も此奴に念を入れて貰はなくつたつて、虱だらけの長屋の端の流し元に蹲り、砂まじりの冷めしでも噛るくらいだから、貧乏の御芳名なんさ、天下にかくれぬところかも知れないが、鼻毛の九助風情にまで、かう安直に見倒されると、日頃は何處に何うしてゐるのか音沙汰もない「術も一國の文士だ」といふ奴が頭を擡げて來るから妙だ。その妙な現象が三分でも六分でも續いてゐるあいだは、俺も何うやら一國を預る文士になつたやうな大きな了見になるが、

さもない時は、一間ところか一城一家の雜料にも備ひ手のない長屋の親爺で、齋はんこと夥しい、といふのは餘計な恥を晒すやうだが、命賭けの馬力をかけて、洛陽の紙價なんさア、こいつで騰騰しなくちや、下る一方で紙屋が泣くだらうといふ傑作を書いても、その原稿に俺の署名があるばつかりに、他の文士なみに扱はれないのだ。文士開業以來の潔癖に、親分子分なしの偏狹無知と來て、睨みの利かぬせいか、不德の致すところか、原稿料の安いところなら文壇隨一おや、物々しかるべき道理がないから、原稿は何時も傑作につき一錢半厘でも値上げと押しかける工夫はないものかねヱ？と俺の仲間に贈はしくウダツの上らぬ「床落し」に叫いて見たこともある。「床落し」といふのは、本屋の親父が附けた此の文士の諢名だ。書物を拵へても賣れないので、店に積んで置くと重いもんだから床の板が抜け落ちるんださうだ。こいつが泰然として言ふには「そりや、君の腰が弱くつて押し出しが鈍いからだよ。チト僕を見做ふんだね。こないだ或る有名な婦人雜誌の女記者が、何うした風の吹まわしか僕ンとこへ小說を頼みにおいでなすつたんで、僕は原稿一枚金十五圓づつ他所で貰つてゐるから、貴女の方でも十五圓前金でくれるなら傑作しませう、と吹つかけてやつたと思ひたまへ。おどろいて逃げだすだらう？逃がしてたまる

ものか。アッ。暫く待つて下さい。と彼女の袖を捉へて、いかがでせう？折角の御來訪が金錢の多寡で埒らんとあつちや、貴女の雜誌の估見にもかゝわるし僕も廉潔淡白で聞えた男だ、寐覺めがよくないから、思ひ切り五圓にまけませう。それでも高いと仰有るなら三圓でも二圓でも結構です。その埋め合せに、他所からウンと踏奪りまさアね。まあ〳〵そこに御座りなさいと本根を吐くつもりだつたが、何の、彼女のピクともすればこそ、ヘイ、承知いたしましたが、先生、そんなところでよろしうございますの？と心嬉しげにチラリと秋波つかひやがるぢやないか？そんなところでいゝかてんだ。もつと吹つかける奴があると見えるね。然し十五圓と言へば、僕の原稿の定價の三倍だらう？何と思はず暖つたることよサ。かりそめにも是が商賣だ。是に據つて家賃を拂ひ米を買ひ、時にはパチリ、ペラ〳〵と勝つたり負けたりするんぢやないか。この位の掛け引きがなくつちや、一厘花も引けやしない。のみならず却つて馬鹿にされらア。君のやうに原稿は安く踏み倒された上に馬鹿にまでされちや立つ瀬がなからうサ。この呼吸で一ツくらはせて見たまへ。暖るぜ。」とあるのだ。流石は本屋の床の板を拔き落して歩くだけに備はつてゐる膽力だ。そんな具合ひに巧く行くものならと思つて、その後、試みに俺も十五圓の手を出して見ると、案外にも直ちに現はれて、甚だ些少ながら承知いたしまして先生の稿料は後刻お届けいたしますと云ふ事になつた。此時を過ぎには吹いたものだと、暫くは袂に埋めて暖かな仕度をしてゐると、その後刻が翌日になり、翌月が今日になつても稿料の前金は到着しないのだから草臥れた。當にならんこと夢みたいな呼吸で、この體たらく。たまさか拙譯の歐風小說や御自作の創作とか言ふ奴が、ヤレコノサツと買れたとするのだ。活字になつて現はれる其の雜誌を開いて見れば、これはしたり、行燈部屋か物置きみたいな小暗ひところに、二段三段のベタ組みだ。居候あつかいも甚だ猛烈な押し込みに、文脈章血の生き別れよろしく、何處から讀んでいゝのか更に目火の見當がつかんのだから情けない。而も俺の手にかゝつて横の文字を縱に改良されたばつかりに世界一二にを爭ふ歐風原作者の名まへまでが、横を向いたり逆立ちをしてゐる始末だから愈々偉くなるのだ。大泉黑石の恐れられざること右の通り。たまには新聞・雜誌・本屋の胸ぐらとつて片つ端から駁撃してやつたら、俺の取扱ひにも少しや氣を附けるだらうとは常々考へてゐるんだが、いざ胸ぐらといふ際になると、こつちの息の根が先に窒りさうな按排だから、未だに見合はせてゐる。だから依然として俺の幅は利かない、俗はない。俗はない理窟は是を以て成るほど左樣かと領けたらう？だ

から文士と言つたつて懐の内にも十両にも入るほどの風土に座つちやゐないが、それでも身分相應の打算見識はあつたものだ。向ふにまわして損が行くと思へば神妙に尻つぽを垂れて仰向けに引つくり返つて見せるが、大びら公然と癇を起しても大丈夫損はないと見極めがついたら最後、容赦なしに癇を起して見せるところが俺の武士道だから、亜門屋の鼻毛の九助みたいな馬の脚にまで、殘り少く見消化されると、もう默つてゐられるものかと開き直る大和魂の構へもあるのだ。だから俺は食ひかけの朝めしを放り出して旋毛をグツと押し曲げた。「おいおい。默つて聴いてりや、頼むことに事を欠いて、金一封獻上するから、烏天狗になつて鳴動してくれたア何だい！食ひ物も随分くはせた上に、京大阪で眼の保養までさしてやつたから、義理に絡まり、恩に感じて烏天狗になつて見なさい。天下の珍藝。チチン、チーンたア何だい。そりや京、大阪へ遊んだのは嘘ぢやない。嘘ぢやないから天狗の名代を勤めなくちや、義理人情にすまんといふなら、下ノ関まで行つた日にや閻魔にでも成らんことにや立て引きがつくまい。よく物事を積つて見たまへ。近づきになつたばかりの君の前だが、油糟や粃殻で育ちやしまい。君だつて矢つ張り、人並みの飯をくらつた脳膜だらう？　そこで仰せの通り。天下隠れもない一個の文士は俺の名まへだ。滅多なところに、損料貸しが出來るか出來ないか、解りさうなもんぢやないか？」と肩を突つ張つて、一國面になつて見せると、こいつが餘つぽど意外らしかつた。鼻毛の九助は金壺眼を皿のやうに丸々とあけツぱなし、咽佛なんか今にも飛び出んばかりに、叺の大口あんぐりと、やゝ暫くは毒氣をぬかれて呆れた風だつたが、狼狽惶惑の色が濃染めの面の皮にあらはれて來るのだ。「フーン。するとお前さんは厭なんだね？」「むろんのこと。物を頼まれて厭と言ふた例のない俺だ。例のない俺で損をする俺だ。損をする序にしてもいいと思ふ田舎君だ。大概の難題は引受けるつもりだが、天狗ばかりは平に許る。文名にかゝわらア。」「オツと我が君！　そこらに懸念あるべからず。諸事萬端、下僕の胸三寸ツ！」と、ポンと胸を叩いて見せるのだから、飽くまで巫山戯た鼻毛だ。「芝居がゝりの獨白どころか。胸三寸が迷惑だ。苟にも」と俺が言ひかけると、ムツとした調子で九助が遮つた「フン！　友達甲斐もない邪慳なことを言ふたものせ。厭なら厭で勝手にしなせえ。物を言ふから口だと思ふが、默つてりや何ゝしたつて尻の穴としか見えない處から、ご大層に苟めやがる！　ヘツヘツヘ。ごめんなせえ。口が悪いんだからね。然しねエ、大將、厭なら厭で勝手に斷せと申されん譯口があるんですよ。困

つたね。私も円蔵さんも、お許さんが機を横にふるたア今にち思はんから、半分以上仕上つた時分には、ゆふべ大急ぎで御前さんの名まへを焼き入れちまつたんだ。今さら何うにも仕様がないぢやないか。」と言ふのだから驚いた。泥棒をして置いて徐ろと頂きに伺ふ形だから、つまり挨拶の文句が出なくて驚いたのだ。「だから先生。お前さんも男でげせう？　そんなら男らしく、仕方がないと観念したまへ。貰ひたまへの金一封。これサ、大將、ようがんせう？　とさう決つたら、こつちは早速便所を拜借したいね。先刻から忰に採切れるやうな苦しみをさせ居つたが、何うやら話が面倒になりさうな模様なんで、忰の口まで出かゝつてゐた奴が、一時引つ込んぢまつたのサ。から薬直に丸く譯ると、忰め漸く安堵いたしたと見えて、またもや切に促し居るわい。よし〳〵。只今すぐに即心成佛させてやるから控へ居れ。たわけ者――め――か――チチン。チン！」と上りこんでブルッと身ぶるひしながら「へこれぞ烏天狗は飛切りの術！　パッ」と股ぐらに手を入れて横手の便所へとび込んだかと思ふと「へいかに牛若。承はらうぞ。敵もし廠虹に立てこもらば逆落しに責めよせて、雲の白旗ひるがへし、會稽の恥を淨めよや――ついでに此の便所も淨めたら何うです。蜘蛛の巣一ぱいだよ。」と文句に節をつけて小便を足してゐるのだ。通ひ

たれたる土手八丁お茶井權八なら、しやべり馴れたる口八丁は、この馬の脚だらう。のべつ幕なしに獨りで喋るのだから敵はん。此の年齢になるまで、俺も隨分亂暴な下司に掛り合つて、こと細やかに手古摺つて來たものだが、こんな魍魎に見込まれるのは始めてなんだ。奥行きの知れぬ無茶な奴があつたもんだと思つて、一念三千、まヅ正直に膽をつぶしたが、こいつ切つかけとなつて、だんだん此の社會の有象無象と擦れ合つて見ると、おしなべて斯んな手合ひばかりだから、人間なみの常識作法をもつて交際つた日には、あさ晩に何べん目をまわすやうな事件にブツつかるか知れたもんぢやないと言ふたばかりでも、凡その想像はつくだらう。後學のために一例を擧げて見ろといふなら、擧げてもいゝ。俺の近所に俺と同じ名まへの大泉さんが、もう一人わだかまつてゐると思へ。俺を先生と敬ふなら、こつちを旦那と奉つらう。俺の家を訪ねて參るお客さんは、一度必ず此の旦那の門を叩いて、クロイシなんて大泉は知らないよ！　といつた權幕の權助に抓み出されるのが通則らしいから、俺ンチへ伺ふ向きの面々は、ウン、あの肥つちよの布袋かと頷くだらう？　この旦那大泉が、兜町へんの顔役とあつて、花崗の石門崢嶸として奥深きあたり、常にブク然たる御尻の上に鎮座してゐるんださうだから、未だお目にかゝつたこと

はないけれども、血めぐり金めぐり、ともに、先生の大泉さんたア違つて、有りあまるほど通つてゐるんだと思へ。大泉にも色々あるもんだと思つて羨ましくなるが、とき〴〵その花園街の門の中から、踊り出す自動車が、俺ンチの前を跳けぬくのだ。屋鳴り震動。机に向つて据えつけてゐる俺の尻がピン〴〵弾み立つて腰坊主までが浮かれて踊り出すんだから弱つたが、そいつは我慢する。長屋の路次が狭いもんだから、匍ひまわる臭い煙はしばし濛々と立ちこめて、隣にまで迷惑をかけるのだ。讀者諸君もコン畜生と思ふだらう。コン畜生だ。するとコン畜生の家へ投げこまれる筈の郵便が戸惑つて此方へ舞ひ込んだ。他人の手紙に思召しはないが、爲替でも入つてゐたら着服するつもりで封切ると、爲替の代りに帝國旅館舞踏夜會の案内状があらはれた。現はれさうな代物だが、帝國旅館といへば、ほんの四五日まへに、勾配の急な飾男児どもが白刃を振つて舞踏の輪へ亂入した騒ぎの後始末をつけたばかりといふ砌りであつたんだから、性懲りず演るものだ。もうあんな事はないかも知れんが、成るべく有つた方が面白い。この案内状だつて使はずにゐるのも罰があたる。せつかく乘り出して日切の時間をにらしてやらうかと所存するくらいだ。原稿料の些散なこたア見てもわかるだらう。わからんのは旅館の勝手と來た。火事は何處だい。

淺草だい。牛の睾丸まる焼けだい。と昔から決つてゐるさうだが、舞踏と博奕は大概地下室だらう。ちよいと何へば何のこたアないんだが、會場に何はんところが拵つて生れた俺の値打ちやないかと、案内状に添へてあつた造花の白薔薇を襟にとゞめたる姿は天晴れ何でも御承知らしく、薄ぐらい廊下を下へ下へと折れ曲つてゐるうちに、プイと裏門から往來へ出ちまつた。飛の先の堤の上に電車が走つてゐるんだからオヤ〴〵と思つて突つ立つてゐると、その堤の方から、縮れ髪に網をかぶつてやつて來たのが二三人のモダーン・ガールだ。亭主持ちと見て憚かられるのも遣り切れないが、亭主なしと見て無暗に構をつくされるのも後が面倒だから、そのへんの旗印しを曖昧にボカして要領を得たいワ、といつたやうな造作の着付だから、モダーン・ガールに異議はなからう。この一塊の女の胸にも、白い薔薇の花が一ツ〴〵止つてゐるのだ。だから尻について行くとダンスが見られる。いゝ獲物だと身構へてゐると、その中の一人が、俺の顔をチラと見て「おや。先生ぢやございませんか？」と、赤い振袖を空に飛ばせて俺のそばへ跳ね寄つた。ハーテナだ。往來の眞ン中で跳ね上るほど活潑な大人にも令嬢にも近づきはない筈だ。人違ひかも知れんとは思つたが、何しろ斯う風變りに組み上つた俺の顔と、他人の顔と見損なふ盲目もあるまい。俺だつて先生

と呼ばれることもあるんだから、ともかくも左様ですかねと答へると「ねエ・さうでせう？確かにさうだと思ひましたわ。いゝところで御目にかゝりました。妾、花園幸子でございますの、」先日は映畫週刊に妾のことを御書き下さいまして眞個に有り難うございます。身にあまる光榮と思つて、チヤンと切り拔いて保存してゐますわ。」と慇懃に禮を述べるのだ。按ずるに活動女優らしい。らしいと按ずるくらいだ。幸子なんぞ知るものか。知らないのに書く筈はなからう。一國の文士が女優の提灯なんぞ持つものか。だから矢つ張り人間違ひだと思つたが、間違つて貰ふものが、御金と御禮なら遠慮に及ばん流義だから當り前のやうな面色で受取つて置くと、俺の襟の白薔薇に氣がついて、御一緒に參りませうと誘ひにかゝるのだが、御一緒に參つてもつまらん。化けの皮が剝げても感じたものぢやないから、御一緒申し上げるだけの舞踏ぢやないでせう。アバヨと別れちまつたが、俺の住居から此處まで三里の電路だ。何のこたアない。旅館の表口からスツトと入つて、裏口へぬけに來たやうなもんだから頗る意味をなさんと思つて家へ歸ると「あの。映畫週刊社と仰有る方が、ヂイチヤンの談話を聞きに見えてゐます」と俺の細君が言ふのだ。ヂイチヤンには少し閒があるけれども、見渡す限り髭と垢とで總身固まつてゐるもんだから、家の小僧と近所の餓鬼どもが申し合つて、俺を爺イ爺イにするのだ。まあ態だよ。この子は！何故お父様と言はないんです？なんてたツて承知はしない。嘘つけエ。よせやい。ヂイチヤンだア、と囃し立てるんだから寒暄敵しがたく、俺の細君なんかも今では子どもと一緒になつて、御自分の旦那さんを老物にしちまつて、ヂイチヤン、映畫週刊社のお方ですよと言ふたもんだが、映畫週刊については、先刻のモダーン・ガールに人違はれたばかりだ。今度は重ねて何を感違ひにお出でなすつたかと思ふと、鼻のまわりにホンノリと白粉をつけて、お召しの羽織にお御召しの袴をゾロリと佩いた綠色のモダーン・ボーイが、床の間の正面に横柄な胡坐をかいて、一本五錢もするやうな金口の煙草を咬へてゐるのだ。「いや御歸んなさい。これは始めて御目通りいたします。私はかういふ雜誌のもので、山吉川之介と申します。毎度御贔負にあづかりまして。」と、腰の据つたは上は鳥餅みたいに粘つこくて、するのか爲ないのか解らんほど粗末な御辭儀は、顔の先で天井へ放り上つたかと思ふと、ピンク色は縮緬の覆紗包みだ。徐ろに懷中から引き出して、のツぺらぼうな女の面で埋まつてゐる玩具みたいな赤い雜誌を、一冊めぐんでやらうといふ手つきだ。俺の膝元へポンと投げ出した。「エ、。今月號は、アンタの原稿――花園幸子嬢

ーを載せましたので、大部方々から彌次られたやうな按排でしたが、總じて一般の受けは至極よろしうござんしたね。そこでまた來月號にも何か一ッお願ひしろ、といふ社長の號令が下つたんです。私ひとりの存寄りを申すと、何か一ッたア言ふけれども、今度は趣向を替へて、あの桃山作子の罵倒を物して貰ひたいですね。誰も知らないから涼しげな面アしてゐるが、惡いこたア出來きせんや。三年前は洲崎の女郎。大枚三圓五十錢で現に私が一と晩買つたんだからね。へつへつへ。嘘と思ふなら作子の右の腕をまくつてごらんなさい。一錢銅貨大の桃の刺青がチヤンとほツてあります。桃山なんて號名も多方その邊から附けたもんでせう。洲崎時代には確か桃助と言ひましたからね。さあ、それが何處を何う泳いだものか、今ぢや映畫界の流行見とあつて、私なんか雜誌の用で訪問しても、脊髓と一緒にしてマンモスみたいな老犬を嗾かけやがるんだから變じたもんだが生意氣ぢやありませんか。神聖なる藝術の冒瀆者でさア。アンタにでも筆誅して貰はんことには慾る一方の徹底だ!」と一人で慷慨しながら、煙草の吸ひかけを机の上にゴリゴリ擦りつける。打つちやつて置けば何を吐すか方圖のないボーイだから言ふた。「どうも遣り切れん!」「全くだ。お前さん。後生だから鍋燒き饂飩を奢つて頂戴よ。あたい暫く食べないんだもの、と哀れな聲を鼻から出しやがつたこたア忘れて、女弟子の二三匹も飼ひやがつてサ。先生々々と呼ばせるのを見ちや到底やり切れませんや!」とまだ言ひやがる。狂人め。「そんなことは知らんよ。」「へエ。さうですかい。御存じなければ、原稿は手前の方で作製して、アンタの御名まへだけ貰ふことにしませう。」「待ちたまへ。先刻から何うも變だとは思つたが、何かい、僕が此の雜誌に花園幸子の禮讃をしてゐると言ふんだね?それで解つた。矢つ張り振袖の人違ひぢやなかつたんだ。ちよいと拜見しやう。」と、俺は膝元の赤い雜誌をひろつて頁を繰つて見た。有哉々々。正に卷頭に麗々とある。何處で手に入れたものか、俺の肖像と振袖の寫眞と二ツ列べて、顔も照り燒けるやうな大提灯が十頁にわたらうといふ處で「おお!彼女の漆の髮!黒眞珠の瞳!杏目の唇!圓い肩!彼のやうにうねる腕は何うでせう!白い手の纖弱なふくらみは何うでせう!見れば見るほど惚れ〴〵いたします。花園幸子孃よ。貴女は彭城の廢墟からぬけいでた虞美人そつくりです。どんな天才の畫家が、珍貴な絹の上で純白の絹布に彩管をふるつても、貴女と藝術を伴ふやうな美形は斷じて出來ません。いえ〳〵。それでもまだ充分ではない。さうです!どんな天才の詩人が十日も寢ずに考へたつて、貴女を賞めすぎるやうな文句は浮びます

まい。ほんとに一と目見たばかりで、世界中の男が貴女の足もとに錆伏して化石しないのが不思議なくらいです。天下の絕品！古今の傑作！あゝ！この貧しき筆をとりつゝも、貴女の御姿を胸に描いて、あたしはまあ何んなに惱んでゐるあたしでせう！ひとり溢れる淚を拭いもあへず、あたしはまあ何んなに悶えつゞけるあたしなんでせう！お慕はしき世の幸子嬢さまよ。自己の心理を呪はねばならぬ瞳を哀れんで下さいまし。いえ〳〵。もうこんな事は申しますまい。ねエ。あたしは幸子嬢の皆様と一緒に勇ましく、幸子嬢のパトロンとして進んで行つてこそ、生れた甲斐もあるあたしなんだもの。あゝ！いつも悲しく愁はしき、美しの夢に住む君へ、この遣る瀨なき胸をさゝげてよ！」と言ふのだ。自己の心理を呪つた上に瞳を哀れんでも嘆き足りないと見えて、胸も腹も奉つた揚句に、あたしがまあ何んなにあたしでせう！と泣いてゐる感動符の數が百以上もあるのだ。「但し、かう申したからといつて、あたしは決して幸子嬢から一紙半錢の賄賂も頂いてないことも御斷りして置かねばならぬあたしでございます」と最後に書き添へてゐる。馬鹿野郎！「これは誰の作文だい？」と俺は顫える手に雜誌を握りつぶして容を改めた。「ヘエ。私です。」と鼻から煙を吐き溢したる山寺の月之介だ。「フン。誰に斷つて僕の名まへにしたんだい？」と、俺も流石に尖らざるを得ない俺だ。「これはあのクラスケさ。私の名號ぢや、毎度のことだから、事あらたにめづらしくないので、この位の文章でも書きさうな畑違ひの先生はないかしらんと考へたもんです。すると編輯局に居合はせたクラスケがね。アンタの名まへにしちや何うだい。アンタならば大のズボラの善人で、おまけに此位のこたア、得て書きさうだから厭の癖のと折れ曲つて粘着する恐れはないよ。輕少ながらと金一圓も進上すれば喜んで承知する豪傑だと言ふので、さう決めちやつて其の場で宜敷く賴むと金一圓、タラスケに事づけましたが、まだ御受取りになりませんか？おかしいね。」と落ちついてやがる。タラスケといふのは神田へんの私立大學文學士で俺の家に半年も轉つてゐたんだが、地震以來、かういふ赤い雜誌に一枚五錢にもつかぬ原稿を賣つて其の日の雨露を凌ぎ、今流行の煎餅雜誌に、一冊二十錢文學の屑を創作して、その夜の露命をつないでゐるんだが、むろんそれだけでは腹が空るんだから、夏は灰と西洋胡椒と掻きまぜて蚤取り粉を創作し、冬は玩具の爆竹の芯をぬいて、弘法大師は御夢想の灸を創作して、東京の郊外を行商つて歩くのだ。それでも腹が空るときは、俺の原稿を私製して、俺には丸で緣のない娛樂雜誌に賣りとばすくせに、この頃は何とか社の懸賞雜誌の創作月評會に、折り〳〵

頭を出して馬鹿の尻馬にでも乘りたがる新進作家行尾助藏。即ちタラスケ。即ち斯んな奴だ。大抵の悪事は平氣でやるのだから、このボーイの自状が眞實だとすると、野郎、またしても遣り居つたなと思つた。思つたばかりで事をすましちや辯になる。辯になるから何うしたかといふだらう？それは此の物語に關係しないから、言ふべく差し控へるが、とにもかくにも斯んな具合ひの處世法だ。此の社會の十人が十一人まで斯くの如しといつたら腕をまくる向きがありさうだから、滅多な口を辷らすわけに行かない。行かないけれども少なくとも、俺のまへにチラ／＼する人窓を以て論ずれば、御手前の欠損が一紙半錢でも血相をかへるくせに、他人の不利益なら死刑の宣告でも、至極大膽に眺めてゐるのだから迷惑する。する迷惑にも色々あるだらう。振袖の場合なんか、あたしがまあ何うしてゐたしでせうと申し分のないデレ助の痴漢面を晒してゐる極りのわるさに冷汗を流してゐりや、別状はないから、まだしも仕合はせ、あべこべに此の筆力で相手の脾腹をネチ／＼刻つてゐやうもんなら、往來のまん中で跳ね上つて驚くほど潑溂たる元氣だ。いきなり食ひつかれたかも知れない。食ひつかれても怺るまい。鞍馬の天狗になつちや更に往生だ。而も九助の申くによると、往生の手管が半ば以上も相すんでゐるんださうだから悲憤の背なかに狼狽が乘ツかつて、悲狼憤狽ちや成句にならんかも知れんが適切な形容詞か見つからんといふ形だ。俺の名まへが到るところで物の役に立つなら、持ち主の俺なんか、も少し眞ツ直ぐに立つて地球の上を歩いてゐる筈だらう。だらうの理屈がわからんのか？わかツとることたア解つとるが、俺みたいに四方八面の香具師・山師・ペテン師の化中に昇がれ投げ落されるやうな罪の尻の輕い安直な杆子が他に見あたらんのか？己れの正體をさらけ出すと、世間から狂人あつかひにされるとコンテス・デイアヌ先生が言ふた。己れを輕ずる者は人に輕んぜられる。そこで何とかせさる可けんやと唐人が曰ふた。俺は何うだい？フン！すつと以前にアーサー・トムソンの「アウトライン・オブ・サイエンス」を卷頭から讀んだが大して面白くないと思つたら、第一卷のお了ひぎわに立ち判つてプランクトンの講釋に出合した。プランクトンの中に丸だ呑ン氣なる漂浪者あり。水母はその一ツなり。水を食つて但透明または蒼白きゆえに目立たず。折り折り水面にフツリと浮き上り、ポカリと沈み、沈み浮いては他の魚の餌食となる。といふのだ。科學の書物だから、何と氣の毒な身の上の水母さんぢやないかとは書いてないが、俺なら一筆添へて置く。明らかに佛眼をひらいて十方を見たまへ。六道輪回に彷徨して三界出離に及ばんこたア、水母も人間も五十步

百步だらう。「十玄談」は玄機の句に、妙體本來處する所なく、通身何ぞ更に蹤由あらんと仰有る。プランタトンの講釋氏トムソンの後繼者たるルザフオードの「エレクトリシテイ・エンド・マター」にも、世界に物質なるものゝ跡をも見る能はずと書いてある。「チ・フイロソフイ・デル・ウエルテ」のオストワアルトも、エネルギーの最高形は心的だと申してゐるが、申すことに甲乙はない。天涯孤獨の水母法師だ。年が年中、碌なものも食はずに蒼白くフラついてゐるとパックリ食られるところなんざ、俺の宗旨だ。兄弟分が海の中で苦勞してゐると思つたら可哀相になつた。陸と海との掛け合ひだ。毒にも藥にもならんと思へばこそ、眞ツ正直に己れの地金をむき出して、輕々しくフラついてゐるから、輕々しく扱はれても馬鹿にされても仕方がない。仕方がないと諦らめるやうな氣も幅も利かない俺の名まへなんぞ昇ぎ出して何の呪符になるんだい？不思議ぢやないか。さうだらう？だから一言の挨拶もなく烏天狗に見立てられた癇癪のあまりにだ。この野郎！勝手放題な眞似をしやがつて、巫山戯るにも程があらア！と眞向から怒鳴りつけてやらなくちや到底おさまらない悲憤の塊りが、鳩尾まで込み上げて來てゐながら、ハーテ、こいつは不思議だなんて考へる拍子に、そこで引つかゝつたなり立ち消えの形になつたやうだ。もつとも鼻毛の九助みたいな大慾をつらまへて面責したつてブン毆つたつて、悲憤慷慨の所以が呑み込める氣づかひはないんだから、此の事件については、もう少し物のわかつた田屋公に直き談判と出掛ける筈の分別が、肚の一角に据つてゐたこたア事實だ。——そんなことを一々丁寧に詮索してゐた日にや、わざ／＼折角の漫作が、まこと退屈な小說になつちまふ。小說なら俺の細君だつてカカアだらう。だからお肚の成行きは此のくらいにして置くが——恐ろしく悲憤甲斐のない男があるものサ。と、から廻り冗く書いて來ると、鼻毛の九助が便所へ入つてから一年も立つやうな氣持ちだが、僅か五分か十分だ。その間に以上の文章を頭の中で考へてゐたのだ。そこへ便所から九助が出て來たので、一體俺の名まへを烏天狗にくッつけると何の仕掛けで天下の珍藝になるのか、取り敢へず訊いて見ると「感のないお尋ねサ。お前さんだつて、たまには奧方の目先に變動して貰へたら、他かないでよからうと勘考することもありませう？太鼓や提灯みたいに張りかへの利かねヱ我々だ。何時も同じ表情で演つて見せる仕草には、活動寫眞のファンもウンザリだらうよ。そこでチョイと毛色の違つた異り種が、畑違ひからと飛出すてヱと、こいつ何んな珍藝をやらかすかと聚くつて觀に來まさあね。書生あがりの鉛デンがバットを背負ふて水ン中でニャ／＼

茶つたり、公卿の馬鹿息子がノソ〳〵出て來て道化ちをするてヱと、こいつ正氣の沙汰ぢやねヱんだが、ヤンヤと喝采だ。近ごろはまた東郷大將とか何將軍とかの原作。團技商の横綱の態眼で日本武尊が撮影るつて話でサ。この按排だと今に狂人病院から眼の据つた小父さんが飛び出して定九郎に扮るかと思ふと、尼寺のお婆さんがあらはれてお輕を演つて見せなくつちや、觀衆は承知しますめえ。といつた世相だから、お前さんの鳥天狗なんさ、あながち滅法奇手烈にヒネッた魂膽とは言へないが、それでも今のところぢや、先づ以て珍な方でさあ。廣告の宣傳ビラに唄ふ文句まで私は拵へてゐるんだが、ちよいと乙ですぜ。やつて見やうか――ヱ、サ。スットコ。ドッコイ。神に大黒。佛に黒奴。スットコ。ドッコイ。和歌が大伴黒主さんなら、智慧は黒ウ判官義經公ぢや。スットコドッコイ。いもりの黒焼ふッたり惚れたり。黒板べいは盗人の用心。物の上手が黒人通人。黒の紋付門弁横八。黒革おどしは武藏の鎧。鞍馬の天狗は黒石先生。黒々づくしの評判々々――たァ何んなもんですヱ。お前さんも黒石とは附けた名號だね。親ゆづりかい」と、烟にむせた猫のやうに、金壺眼をしばたくのだから、言はせて置けば、何處まで不埒な行列をまわすか底の知れない鼻毛の拗れ者だ。拙い長唄に泡を吹かれたけりや、何の事羅經みたいな口癖に唾をとばすのだから部屋中、霧だらけだ。失禮と思ふこたァさて置いて一種賞められたい了見だから人間はなれがしてゐる。田尾公の手紙に「貴家のお隣りに巣がまへる無學文盲の九助とて、宜敷く御憐れみのほど願ひ上げ候」とあつたが成るほど、無學文盲の工夫も、この域に達すると、もう何を言はれても相手にとつて怒る張り合ひがないのだから偉いもんだ。閑れなどころの騒ぎぢやない。天も恐れをなすと思つて呆れた。

「成る程。さういふ譯かい」「と右衞門が參つて、やれ〳〵やつと首尾よく使者の役目が片づいたと。今度は社長の懐中偵察だ。奴さんに外出されちや大變だから、そろ〳〵お乗り込みと致しやしやうか」と家の中で帽子を冠つて上り框から下駄の上にとび下りた。首尾よくも悪くも、そんな役目に片づかれてたまるものか。「社長の邸は何處だい？」と捉まへて訊いた。「撮影所から二三丁。尾久の瀧へよつたとこサ。」「田尾君は撮影所にゐるかい？」「ゐますとも。この二三日は我々の大車輪ぶりを示して、社長の氣嫌を取る必要があるてんで、毎日起きぬけから野犬撮影に忙がしいのサ。」「俺も田尾君に話があるから、そこまで一緒に行かう」と九助につゞいた。朝飯は食ひかけたままお流れの形だ。長屋の路次から大塚まで足に任せて王子行きの電車にブラ下ると瀧ノ川べりの丘を登つた向側にピカリと光

る硝子屋根だ。こいつがなければ木挽き小屋と間違はれさうなお粗末なバラツクに「日本藝術映畫撮影所」と看板ばかり大袈裟な門を入ると、硝子張りのセツトとは反對側の庭の隅に、一と塊りの男女が縺れあつてゐるのだ。「あ。演つてる。演つてる。ごらんなさい。三人の餓鬼をつれて、延公の常盤御前が旅の道行きとおいでなさるところだ。その餓鬼が、お前さん、この近所の蕎麥屋と肴屋の出前小僧ですぜ。五十錢くれるなんて瞞して引つぱつて來たんだが、始終こゝにやつて來ちや、我々の仕事を見てゐるせいか、器用なものサ。」と九助の說明だ。

近よつて見れば成るほど粧つたものだ。眉間のまん中に黑子眉が二つ。紙でいわいた下げ髮あたまに、丸ぶとい紐つきの市女笠みたいな永曆時代婦人帽を押ツかぶつた常盤御前が、白張黑袴の御曹子を三人、袿の袖に掻いこんで、今や將に一めん蓬々たる草むらに立ち迷ひの姿態だ。繪草紙なんかで御目にかかると、瓜ざね式の菩薩顏で、物の哀れを誘ふた常盤サンだ。いかにも落人らしく見えるが、こいつ流石に有名な江川延子の御前と來てゐるんだ。新聞雜誌の寫眞で仄かに拜んで置いちやあるが、生の雁首とは始めての御目もじだから、ハヽアこれかとツラ〳〵觀ずれば、田屋公の手紙にある通りだ。頂の高いことも穴の深いことも小佛峠だ。峠の鼻をまんなかに出たり窪んだりの畸形な面は、甲州地圖の模型になりさうな[illegible]だから、廷子孃の常盤サンといふよりや、常盤サンの[illegible]だらう。爭はれんものだ。この物騷な御前にからみついてゐる今若、乙若、牛若の三丸が、左馬頭の息子と生れついた氣品ぢやない。どう踏んだつて五十錢で釣られさうな骨柄だ。餓鬼に違ひないと思つた。五六歩はなれて、脊廣の襟に天鵞絨を張つた男が、卷煙草を咬へて蹲んでゐる。中折れ帽子を裏返しにかぶり、カラを引つぱづして、西洋手拭ひを首に卷きつけ、短衣のポケツトからハンカチーフを三角形にハミ出して長靴をはいた裝束が、正に田屋公と同じ寸法だから撮影監督だらうが、田屋公ぢやないから助手かも知れない。後で訊くと矢つ張りさうだつた。この助手が只今常盤御前の姿態をグツと睨まへて需作の最中だ。なか〳〵どうも氣に入らないと言つた顏つきで頻りに首を捻りながら、オイ、延ちやん、もう少々腰をかゞめて、心もち前のめりにソロ〳〵踏み出しちや何うだい？さう〳〵さういふ風に！オツと、顎を落しちや不可ねエ、顏だけや眞つ直ぐ向いて、哀れ愁ひに眉を寄せて、とか何とか一心不亂に敎へてゐる。道行きの稽古だ。さあ、それでよしと決れば、さつそく把手をまわさうと身構へて、助手の肩越しに三脚を据えてゐるのが寫眞技師だ。その後ろに衣粧方か小道具と思はれる仕事着の若い衆か

二人列んで鐵柵を抱えてゐる。そこへ鼻毛の九助の尻について俺も割り込んで行つたんだが、行つたかと思ふと、いきなり闘若が始まつたんだから面食つた。先づ一番に小道具の男が九助をチラと見たのだ。チラと見た口が蛸のやうに丸くなつて「おやア！片岡さんぢやないか。何うしたんです。一體！」と言ふのだ。だから「何だい。出しぬけに何うしたとは？」と九助も言ふたもんだ。その聲が餘り頓狂すぎるのでビツクリした連中みんな此方を向いた。向いた目玉が揃つてまた鮹のやうに丸くなると、いきなり監督をやめて立ち上つたのが大鷲紙襟の助手だ。「おい／＼。君は今まで何處をノタ打ちまわつてゐたんだい？仕様のない甘だなアー！」「おどかしちや不可ねエ。な、な、何だい。おい。ノタ打ちまわるつて挨拶があるかい？」「たつてさうぢやないか。いくら呑氣な君でも、ゆふべ頼んだ一件は、よもや忘れはしまい？今日といふ今日は、赤髭に出て行かれると困るから、早く乘り込んでくれたまへと、繰り返し念を入れて置いたのに、今頃ノツソリ姿を現はすなんて法はなからう？」「無からうと思ふから、今朝は早目に起きたんだが、もつと手前に烏天狗の一件が控へてゐるんで、そいつを先づ始末しなくちやなるめえ？そこで昔に聞えた隣りの大將ンチへ寄つたんだ。昔に聞えるだけ、物は面倒さ。自分に對する世間の取沙汰評判に拘泥らはねエ我々なんか、大概つこたア引受けて行ツつけるんだから氣樂なもんだが、人間、昔に聞えて來ると、名聲の外聞のと、いやに窮屈な枠なんぞ嵌ひやがつて、その枠の手まへ、オイソレ左様かと氣易く承知する譯には行かねエさうだ。行かないと仰有るなら、行くまで動かねエぞ泥棒め！だらう？泥棒を出しちまやア喧嘩に成らア。成つちやお了ひだから、成らないやうにグツと譲つて商賣の百面相だ。ペソを掻いたり笑つたり、その他いろ／＼の顔つきで長唄まで唸つてさ。卒と納得させるまでの手續きと來た日にや、目眩しの金貨婆アを口説くよりや骨が折れて暇がとれらア。そいつを何ゾヤだね。知りもしない癖に、目玉を列べて仰山に露出やがつて、仕様のねエ甘だなアた何だい。これ／＼。皆さん諸君。お前たちの眼玉は、もうそれきり開かないのかい？もちツと大きく明けて、下僕の甘かねえ働きを見てくれ。見てからの文句にして貰はうぢやないか！」と輪ぢゆう泡だらけになつて掃溜するのだ。逆ねぢをくらつて監督助手も少々ひるんだらしい。鼻毛の九助にかゝつちや、誰でも降參すると見えて、極りはよくないが、詫つたが早いといふ形だ「フーン。さうかい。そいつは成る程。あんまり甘くなかつたわけだね。」「甘かないとも。お前さん。わかつたかい？わかつたら、こつちへ面を出しなせえ。」

そら！此處においでなさるのが、お隣りの黒石先生だ。」と、俺の方へ向き直つたかと思ふと、芋蟲みたいな親指をヌッと出して、俺の鼻の先まで持つて來て見せるんだから怯えた。鼻の先へ指を突き付けて紹介にあづかるのはこれで二度だ。例によつて文學講演會を九州の山里でやつた折だ。演壇に立ち上つた俺の尻につゞいて、世話人の一人が上つて來るから一體何をするのかと思ふと、此奴が俺の鼻の先へ指を突き付けて――エヘン。滿堂の諸君に御紹介いたします。この辯士は九州長崎港に產しましたるモノなるが一見はなはだ老けて見えても、當年少かに二十八歲何ケ月とは、おどろき入つたものではございませんか！――といやがつた。畜生、長崎の港で捕はれた鯨の見世物ぢやあるまいし、錢は見てのお歸りイといふ構圖だから、こつちの方が餘つぽど驚き入つた。これが文學講演の一席もお願ひするほどの先生を紹介するに當つて、頗る手厚い禮式作法に適つた挨拶と見えるのだ。言ふ方も大眞面目だが、聽く方も一向ふき出す樣子がないのだ。だから九州も山里へ入ると、不思議な動物が棲んでゐるものだ。日本も存外狹かアないと思つたことがある。改つまつた話ぢやない。人間の種族的血統を區別するのに、鹿爪らしい科學的定義を拾つて與へることが六ケ敷い場合でも、人種意識のつよい人間のことだから、手ッ取り早い感情で片づけツちまう。イギリスの船乘りに向つて「西班牙人とは何だい？」と尋ねると「ウンそれや俺達のやうでない奴等のことサ」と答へるのを見てもわかるなんて、アンソロポロジストの一口斷だざうだ。ださうだから結局、腦味噌の見方や、頭蓋骨の縫ひ目や、神經の糸の操り加減なんか調べなくつたつて、鼻毛の九助といふ奴が、九州の山中に系統を引いた生蕃に屬することたア、人の鼻の先に指を付けて物を申す流儀を見ても、大概わかる筈だ。だから驚いたり怯えたりするには及ばん譯だらう？譯はさうだが、土台こんなところで紹介されやうとは思ひもよらずにポカンと見物してゐる常盤御前どもの前に、エヽ、これが隣の大將ですと、引き出されたんだから、鼻天狗になる氣は毛頭ないだけに、狼狽もしやうぢやないか。おまけに九助が斯ういふと、オヤア！こいつかア！といはぬばかりに、みんな目と目を見合つて妙な面をするんだから赤くなつた。「やア！貴兄が黒石サンですか？僕は助監督の楢井で」と、天鵞絨襟の助手が、卷煙草を咬へたなり、活潑に俺のそばへ進み出たのだ。天鵞絨の襟なんぞに御辭儀をするのは勿體ないがと、帽子をとつて頭を下げた。下げた頭をヒョイト擡げると、奴さん、帽子を冠つたまゝ、ブン反りかへつて、鼻から煙を吹き上げてゐるのだ。オヤ。此奴は？と思つたら、生意氣にも御辭

俺代用に握手で間に合はせやうとするのだ。俺の股ぐらの近所にソッと右の手を出してゐるんだら、俺の間が抜けて、みんなクス〳〵笑やがつた。此奴の血統も大分南の方らしい。人を從つた大惣紙の襟だと思ふと。この際にしては存外丁重な會釋をするのだ。「エ、。まことに此の度は御無理なお願ひを申しまして恐縮の至りです。幸ひの御引許にあづかりましたるは千萬忝けないのみならず、御隣家の甘公が色々御厄介になるさうな。エ。御覽の通り、程も限りも形もない代物ではありますが、交際つて見ると、おつさい。御釋迦樣なら無量劫の入札でもなさるだらうと言ひたいほどの好人物ですから。御迷惑でもありませうが、其邊はよしなに御願ひ下さるやう！」と來るのだ。今どき流行らない口辭をつかつて。乙に氣取るかと思ふと、出しツぱなしぢや、右の手の引ツこみがつかんと見えて、判明股ぐらの近所で俺の手をつかまへた。「愉快ですなア。はつはつは！」と不作法に面を崩すところは愛嬌だ。思つたほどの生蕃ちやない。いはゆる逆居者の淺ましさに、こんな剽輕な眞似をするんだらう。だから斯んな社會では、世間尋常の言語動作は通用しないといふよりも通じないのだらう。あべこべだ。だから「甘くない」の「甘くない」のと、先刻から列べてゐる隱語みたいな獨白なんかも、俺の耳には通じかねたが、「御隣家の甘公」だけ

は、九助の渾名に違ひないと思つたから。一體、何うした理屈で、其が甘公なのかい？と、後で本人に訊いて見ると、說明はかうだ。何でもスツと前のことらしい。鼻毛の九助にも人並みの戀人があつたさうだ。その戀人と一緒に三年のあいだ水入らずの生活を樂んださうだ。だから、一ツ屋根の下に、三年も鼻を突き合はせてゐながら、女房たア言はずに、戀人などと惚けるところは、近世の美談だ。よつぽどの姫君と見えるね？と俺が言つた。鼻毛の返事がまた斯うだ「ウン。違えねエ。お前さん。おすもじの通りだよ。氣性は譬へばだネ。柳か百合か、露をふくみし牡丹芍藥。さはらば落ちんといふ風情だらう？そこへ持つて來て、お前さん、その女が生きてゐさへすりや、後生樂のために見せてやりたい面作は、天のなし給ふ麗質と來るんだから、お前さん、氣を確かに頼んますぜ。い丶かい。大和屋の面の皮に、音羽屋の目鼻をつけてせ、紀ノ國屋の鋳型にはめてポンと打ち出したつて、なか〳〵到底、ああ見事には行かないと言ふ出來ばえだから、流石の私も、堪えられないぢやないか。滅多に落ちて來ない星の玉だヨ。玉に瑕とは言ふたもんだヨさ。瑕があるといへば、ある瑕が二ツ。お聞きなせえ。その私の女が、醉脾羊にかゝると目がなくなるんだ。女子衆と薩摩芋とが、不俱戴天の仇同志たア知つてゐるが、私の相棒と來た

日にや、もはや中毒だ。芋の氣がぬけると脈の數が減るんだから、醫者によつちや、芋中ぐらいの診斷はするかも知れん。」とあるのだ。蟋蟀の觸髭みたいな九助の鼻毛に想ひをかけるほどの姫君だから、芋にかけても尋常の女とは、趣を異にしてゐるんだらうと、感心して聽くと、つゞいて辯ずるのだ。「その芋には苦勞したよ。九助サン。妥。あなたとならば何のやうな貧乏でも厭やしません。けれども心ゆくまで、お芋のいたゞけないのは情けないと、斜めにザアと時雨かゝるぢやないか。何しろ此の節の芋は、十錢に三ツきりないだらう？この不足には泌み泌みこたえた。應えはしたが、不足ながらも支給してやつたから、とかくの始末はついたが、つかないのは、も一ツの搬サ。その女が、お前さん、毎年々々お腹に塊るんだ。出るものは早晩出さんことには定りがつくまい。入れたものなら質草にしろ、流さん限りは、利あげをするか出すよりほかには妙案がなからう？どちみち最初から流す氣で曲げ込みやしねヱのが人情の有り難いところならばだ、虱つきの毛糸の肌着だらうが、九助サン家の紋のついた赤ン坊だらうが、期限がきれても懐中の都合上、もう暫くのあいだ暗やみに逗留して貰ひたいこと山々の節もあればこそ、顏は見たいが儘ならん浮世ぢやなアと糸毛の肌衣に利上げと出掛けるが、赤ン坊にはそいつが利かねヱ。チョッ。仕様がねヱな。と、仕様がねヱから催促すらアね。それから先の仕事は母親の持受ちだらう？だから出すならもつと器用に出しやいゝぢやないか。ね。便所の中へ落ことしたり、電車の中へ放り出したり、處かまわずだ。早い話が、去年の惠方は辰巳だつたと。今年は何方にあたるか、暦を見れば見當がつくだらう。今度のお産が何の方角にまわるか、すんで見なくちやわかんらとい ふ風ぢや、あんまり　の締めくゝりが無さ過ぎる。だらしのない進水式だといふと、お前さん、お腹が痛まないから、産氣づいても感じないんだもの、仕方がないワ。てんだらう？だから赤ン坊は二度生んだが、育つには及ばないんだ。助からんやうでもございませうが、助かつたやうでもございますなアと、妙な風に諦めてゐると、珍哉珍哉、三度目の政事が、舟の上で行はれ始めたね。イヨウ！今度は物になるかな？と思つて、出船を待つてゐると現はれ出でたのが頭ぢやなくつて足だから驚いた。用心深い赤ン坊と見えて、お前さん。　からヌツと伸ばした片足を、モヤ〳〵動かしながら、婆婆の内情をさぐつてやがるんだから、おどろかアね。私は物も取り敢へず、産婆さんへ駈けつけた。ぢつさい此の時の光景を思ひ出すと、五體が慄えるぜ、お前さん。産婆は來たけれども、お祭りは修羅場と化して、おたり一めん

に、虚空をつかみ、齒を食ひしばり、恐ろしい形相でグツと天井を睨まへたなり、私の戀人は冷たくなつて仰向けに、ころがつてゐたらうぢやないか。苦しまぎれに搔きむしつた傷で顔ぢゆう滅茶々々。もう二目とは拜めねヱほど人相が變化てゐるのだ。而も赤ン坊と來たら、自分の五體も、ソロ／＼ひえて來るこたア知らずに、　　　　出したなり、悠々として娑婆の偵察中とござるね。お前さん。事こゝに到りや、涙も出ねよ。おゝ。昨日までは陸軍大將――ぢやねヱ――比翼連理だ――比翼連理の契さへ――と――花に嵐の情けなや――か――さらに別れのなかりせば――千代も八千代も添ひけるに――と三味線の師匠に教つたが、比翼連理の相棒に物故されちやつて、南無阿彌陀佛のパンプレットも近頃は滅多にあけて見ねヱほど久しくなるから、つまりヱ、と――生死別れて年を經れどもサナ。天長地久。時あつて盡くれどもサ。この恨みは綿々として絶ゆる期なけむ――といふのが此のポコポンドの胸の内なんだ。以來。私は戀人に操を立てゝ、女には肌をふれねヱと願かけてゐるんだ。それを不憫とも思はない野郎どもがだ。相手が牡と見たら、親兄弟の生命でも刈りかねない惡魔のくせに、相手が牝と來た日にや、くたばつた娘の死骸まで舐めてゐる甘衞門だと吐しくさるんだ。」さうだ。「甘公由來記」は、こゝに暗然と完結したわけであるが、かういふ頓間な惡魔の甘衞門は西洋にもゐるから妙だ。二時間目から晝まで、九時間目から夕方まで、跳梁跋扈の力なき惡魔をAmimonと言ふなり、と物の本に載せてある。俺も鼻毛と呼ぶ代りに甘公と言はう。時に一寸斷つて置きたいのは、この述懷の中に「戀人」なる文字が散見するが、甘公自身は斯う言はずに「私にもローマンスがあつたのサ。」といふ風に切り出したんだ。ローマンスといふから戀愛事件だらうと心得て聽いてゐると、その戀愛事件が突如として磷摩学を食ひ出したので、おや／＼此奴のローマンスといふのは戀人のことかと氣がついたやうな譯で、從つて解り易いやうに、こゝには始めから「戀人」と訂正して置いたが、同樣に「パンプレット」は「小冊子」。「ポコポンド」は「放浪者」のことだ。そこで實に勝手ながら、話は元の舞臺に引返すと、今いつたやうな調子だ。臨時助手の挨拶に一段落ついたので、俺は田屋公に會ひに來たんだ、あたりに見えないやうだが、何處にゐるのか尋ねやうと思つたら、甘公の九助に遮られちまつた一件ね。楠井さん。さう、事が解つたら文句もあるめえ。今から社長の家へ乘り込んでも、遲かないだらう？」「もう、いゝよ。君の出馬が當にならんてんで、田屋さんが行つたよ。而もそろ／＼歸つて來る時分だ。」と言ひかけて、門の方

肯へ首を捻ぢ向けると一緒に「そら御出でなすつた！」と監督助手が喚いたら、みんな待ち兼ねたやうな顏の筋を引き緊めて一斉にそつちを見た。そこへ田屋公の恐慌面が飛んで來て、俺を見ると「いよう！」と言ふのだ。これが半年も會はない人間同志の久濶の辭ださうだ。「ゆふべの手紙は讀んでくれましたか？」「ウン。それに就て話しに來たんだよ。」「さうですか。あとでゆつくり伺ひます。實は大變なことになつちやたんで、ちよつと失敬。」と言ふのだ。わざ〳〵訪ねて來た俺なんか打ち棄て〻置いて、連中の方へ向きを變へると、みんな心配さうに田屋公を取り卷いて、何が大變なことになつたのかしらんといふ景色だ。助手が一番に吶つた。「ど、ど、どうしたエ？社長はゐましたかい？」「ゐたゐた。いつもの害蟲とは違つて御氣嫌よろしく座敷の將に悠々おさまりこんで、ウヰスキーの盃を舐めてやがつた。僕が入つて行くと、やツ、田屋君。一ぱい何うですてんだ。」と、社長の聲色をつかつて形を眞似るのだ。みんな驚いた。「そいつは珍らしいね。」「だから僕も勝手が違つたやうで、少々面喰つてゐると、まあ、君、坐りたまへ。いゝところへ來てくれたから話をするが、我が社創立以來、せい出して働いてくれる君達の好意と努力に酬ゆるためにだネ。ゆつくり寛いで一緒に飲みたいと思つちやゐるんだが、何しろ、君が知つての通り、吾社も忙しいので、席の暖まるひまもない始末だから、今日まで勘辨して貰つといたが、お蔭で漸く吾社の信用も社の評判も固まつて、萬事巧く運ばれて行きさうだから、もうメたもんだと喜んでくれたまへ。そこでいよ〳〵近々に社員全部を、例の鯉の刺肉で激しく犒はうと思つちよる。ワツハツハア！田屋君。どうだい。と盃を押しつけるんだ。珍らしいよりや、氣味がわるいやね。」「フーン。その話の樣子ぢや、何だか景氣がよさゝうぢやないか。工面がついたかな。へツ。有り難えぜ。」と監督助手が泣き聲で勇み立つのだ。「ウン。だから、その社長の御言葉をきいて、死にかかつてゐる魂がスツカリ甦つたやうに嬉しいです。社長。あゝ社長！み、み、見て下さい。この顏の非道い皺を！この萎んだ瞼を！ちよつと抓んでも頭の毛がぬけるのです。坐つちやゐられないほど尻の肉は削けてゐるのです。夜は眼が見えません。この上痩せるには骨が邪魔になるのです。私達は今日まで貴下の仰有る忍耐を守つた御蔭樣で、人間は米を食はんでも何うにか生きて行けるもんだといふことを實地に知り得て有り難いとは思つたが、もう駄目！遣りくりは盡きたし、瞞す相手は自分よりほかになくなりました。もしも明日中に給料が貰へないやうな事でも―あつちや大變だが―あつたらです。この細い首

に、へ、、、。紐をかけて、へ、、、。だらりと下つて、ベロリと舌でも垂れなくちやなるまいと思へば、芝居の役ぢやないのです。然し私達は貴下に嚙りついてゐるより他に振り方のつかない筈ですから、こんなことを申したら、ブン毆られるかも知れないが、それは覺悟の前と連中相談の上、私がみんなを代表して、お約束通り、明日は是非給料の御下賜にあづかれるやう、お願ひに上つたのですが、今のお話では、どうやら明日は大丈夫さうに思はれるので ホッと致しました。いえもう、鮪の刺肉なんか貴下おひとりで召し上つて下さい。と精一ぱい哀れな聲で、額を疊にすりつけると、あの獅子ッ鼻に皺をよせて、ニヤ〳〵笑ひ乍ら、ウン。よし！わかつとる。わかつとる。氣を大きく持て！高の知れた給料が何だい。吾輩はその何十倍といふ社役を調達せんけりやならんからこそ、日夜東奔西走して居つたんぢやないか？それが解らんのかい？何？解つてゐるつて？ぢや、何も慌てることたアないぢやないか。吾輩も天下の岩堂太十郎だ。約束を反古にするやうな醜態を晒しやしない。支拂つてやると言ふたものは支拂つてやるんだ。何も明日とは限るまい。今日でもいゝが、手許に現金は置かぬ家風だ。銀行の小切手ぢや何うか？と曰ふ。それやもう小切手でも郵便切手でも金にさへ成つたら結構毛だらけ熊の皮です。まことに有り難い仕合せと歸に及んだら、親分、乙に澄しこんで、むろん金になるさ。金にはなるが、そいつはだ、今撮影中の「刃影」を交換所へ賣却して受取る金だ。金のために斷つて置くと言ふぢやないか。エ？おい。して見ると、その小切手はだ、明日と言はず今日くれることたア出來ても、義経一代記が出來上るまでは、一錢の現金にもならない先日附の代物だらう。冗談ぢやない考へて見ろ。何う急いだつて、今撮つてる映畫が一週間や十日で仕上るものか。畜生！悔しまぎれにペコ〳〵頭を下げてりや、途方もないことを言ひやがる。ね。もし大將！明日といふ日が文無しぢや過ごせないと言ふのに、十日も二十日も待つてゐられるかい？と俺も景色ばんで尻まくりだ。ピクッとしたらしい。ウーーン。それもさうだらう？だらうと思つて隨分駈けずりまわつたが、この節の不景氣だ。何處の銀行も金貸しも、總一文融通してくれないんだから、仕方がないサ。ね。君。さうしてくれたまへと拜み倒すやうな手つきだらう？そひつは眞ッ平。困るんだ。何とか法をつけて貰はん限り、かうなつちや金輪際だ。一寸一尺も動くわけにや行かないヨと物々しく構へたね。流行の奴も、暫くの間は術なげに首を垂れて考へてやがつて、君達ばかりぢやないよ。吾輩も實は困つてゐるんだ。かうなりや白狀するが、家は火の車さ。何うしやうかと思つてる

んだ。と氣味のわるい眼玉を据えて相手と僕を見つめるんだ。その眼玉がだん／＼かう物凄く光り出したかと思ふと、やい、こら、田屋！と喚くんだから驚いた。吾輩のいふことが聾と思ふなら、明日の晦日には、借金とりが連がつて來るから見に來い！ついでに其奴等を撃退する吾輩の腕の凄いところを見習つて置け。と言やがるんだ。自慢ちやないが、吾輩これでも劍道のたしなみがあるのだぜ。おい。貴様なんざ知るまいが、元を糺せば壮士あがり。習ひおぼえた脅喝に、刑務所へも二度三度、だん／＼馴れた臭ひめし、ひよんな關係から與鴨なる、活動會社に入りこみ、金につまつて貰ひ込み、帳尻合はずに首斬られ、一文なしの旗揚げも、思ふやうには行かないが、女優あらしで轟いた、名まへは岩堂太十郎だ、いさこさ言ふのが面倒と思やア、遠慮なく引つこぬくんだ、といふのは冗談だよ。顫えちやいけない。田屋君。ワッハッハア！とウ井スキーの瓶を放り出して、蹣々立上りさま、床の間に飾つてある長刀に手をかけるが早いか、エイッと一と聲、ギラ／＼光る奴を鞘ばらつて、おい、田屋君、あざやかなる吾輩の御手の内だらう？こいつの斬れ味が、備前長船と來たものだ。初心下太刀の類は、例の贋眼といふ奴が身分相應だが、吾輩のやうに其の道を極めて來ると、まづは上段が立派だねーと、長刀の先を鼻と口の間にーかう構へて、氣息丹田に充つれば、身中一ただに亘らんことなき狀態に入つたところで、敵の虚實により千變萬化するんだ。いいかい。敵もし實を以て示したならば、虚を以て誘ひ、虚を以て來たならば、實を以て御面！と一本打ち込めば、笠の森は樂に脱れるんだ。もつとも此奴は劍道ばかりちやないせ。吾人今日の社會生活にも、必ず心得て置かんけりやならん秘術だ。好漢。惜むらくは此の秘術の持ち合はせが足りないばかりに、馬鹿正直の佐々木巌柳は、狡猾宮本武藏に殺まれたんだが、殺まれずに生きてゐたところで、今日の生存競爭とは太刀打叶はんね。須田町の交叉點に一日立つてゐたつて、電車にも乘れまいよ。何も宮本武藏が虚に乘ずる空隙狙ひの大祖といふたもんぢやない。溯れば牛若丸の方が其の道ぢや古いね。武藝十八番六韜三略の卷を諳んじて、鞍馬の一流を編み出したと言ふが、姿は大體こんなもんだらうと思ふんだ。吾輩なんか、滅多に手は見せん方だが、折角だ、義經一代記の監督中だから、參考のために、吾輩の早業を見て置きたまへーと、僕の鼻ッ先で、この野郎！ゴタ／＼吐すと眞ッ二つだぞ！ヤッ。エイッ！と光るやつをブン／＼振りまわすんだから、膽をつぶしたよ。然し成るほど自慢するだけのことたアある。でも、見事なもんだ。」と、ここまで一と息に饒舌つて來ると、田屋公舌を卷くのだ。唸りを沈めて

聽いてゐる連中の心配は、おどろきに變つて、悉く呆氣にとられた形だつたが、なかんづく最も狼狽したのは甘公の九助だ。「おいく。田屋さん。そんなものに感心しちや仕様がねエぢやねエか！給料の方は何うなつたんだい？」「いま言つた通りサ。」「先日附の小切手か？」「ウン」「でなくつちや、明日もお金はないてのか？」「ウン」「それで宜敷うございますと言つたのかい？」「言はないよ。有耶無耶だ。」「すると、お前さんは長刀に脅かされて逃げて來なすつたね？」「逃げて來た譯ぢやないが、何と言つたつて話になりやうがないんだもの。下手すると、眞個に打ツた斬られるか知れないからな。」「チエッ！子どもの使ひぢやあるめえし、冗談ぢやないよ。今さらお金が何うの斯うのと、いゝ加減馬鹿にされた上に脅かされて引つ込む奴があるものか！」と躍氣になるのだ。「それだから、君に行つてくれと頼んで置いたのに、いくら待つても來ないから、赤髭に出られちや困ると思つて、口下手の僕だが、敢てのしたんだ。ヘツ。今ごろノソ〳〵あらはれて、人に食ひつく義理ぢやなからう！」と、負けずに田屋公も喚ぶのだ。「口に變りがあるものかい。お前さんの腰が弱いから舐められちまうのだよ。みんな聞いてくんな。ヤイ。君達！社長々々と奉つてゐりや、方圖もなく洒落な熱を吹きやがる。手めえの面ア見ろ。芭蕉行脚は奥の細道の蜘蛛の巣みたいに、引つぱりあつて動きのとれぬ鼻の恰好は、越後獅子の形にしろ、よつぽど出來のわるい座だ。そのぐるりに群つてる赤髭なんぞ怖かつた日にや、棕櫚箒屋の前は通れめえ。ヘン。その面で備前の長船が嗜めたら、俺等も嗜んでやらア。手めえの流儀は何だか知らんが、俺等なんざ、歌舞伎十八番の武藝は悉く秘肉を極め、陰陽和合の法に通じて、春三夏六の道理を明らめつくした清元延光流で、齒の立つ者は更にねエのだ。さあ、斬るなら斬れ。脊に腹は替へられやうと、首に金は替へられねエ。と凄く出るんだ。オヤ。こいつあ手剛いと思ふだらう？そこでそら、無い袖も振らずにやられめえよ。」と九助だ。「巫山戯るな。口をひらけば直ぐ駄洒落だ。歌舞伎狂言ぢやないよ。」と莽然たる田屋公だ。狂言ぢやなからう。明日ぢゆうに金が貰へなければ、首でも絞らうといふ命の瀨戸際だ。社長が社長なら、田屋公が田屋公で、九助が九助だ。この給料問題の闘者が、正氣の沙汰の成り行きならば、よく〳〵並はづれた人間ばかり揃つたものだ。呆れていゝのか感心していいのか、俺には見當がつかない。一體何うなるのかと思つて見てゐると、三脚の前に姿態をつくつて、頻りに身ぶりの稽古をつゞけてゐる常盤御前だ。三人の子どもを裲の袖に掻い抱いて漂泊の旅路を辿りながら、ときどき足を止めては、都の空を

振りかへり、市女笠の蔭から、いと悲しげに打ち眺めてゐたのだ。その傍ら、ちよい／＼こつちを見ては、九助と田屋公の押し問答に耳を傾けるやうで傾けないやうな風だつたが、そのうちに彼女の哀れ弱らしい愁ひ顔が、だん／＼から容易ならん殺氣を帶びた血相に變つて來たのだ。來たかと思ふと、それ「義經記」にもあるだらう。「たゞ三人の子供を助けんとて、馴れぬ夜の下に、新枕を並べ給へり」といふのだから、その三人の身を思ふばかりに、敵の大將清盛に身をまかせやうとまで覺悟するほど可愛いかるべき幼兒だ。その幼兒の天神髷みたいな髮をつかんで、力一ぱひ草むらへ放り出した。放り出されやうとは夢にもないのだから、ワツといふなりモンドリ打つて轉がる御曹子を、後足で蹴とばさんばかりの勢ひだ。こつちへ飛んで來る御前を見ると、心頭に怒り燃えあがつたといつたやうな兩眼血走つてキリ／＼釣り上り、青ざめ顫える唇が竪に裂けてゐるんだから驚いた。「銀缾乍破。水漿迸。鐵騎突出。刀鎗鳴。」と唐人の文句にあるのは琵琶の音の形容だ。大袈裟な言ひ草だが、それでも追ツつきやしない。神代に響いた金切り聲だ。いきなり田屋公の腕を捉へて、腹の底から絞り出したもんだから、ピクツとした連中の耳が揃つてピリ／＼跳ねた。「な、な、何だつて、田アちやん！何だつて？お金がないから、今月も給料が拂へないつて？先月附の小切手をくれるから我慢しろつて？へ、田アちやん。これは眞個かい？穴、穴ぢやないよ！さう／＼馬鹿にされてたまるものか。お前さんは知るまいが、ゆふべ尾久の鉀こくの門口から、あん畜生と交換所の人と連れ立つてニコ／＼出て來るのを見たんだよ。金でも摑まなくつちや笑ひ顏一ツ見せる奴ぢやないんだからね。お金はあるんだよ。お金はあつても、この前みたいに胡麻化して濟むなら胡麻化さうと思つて、嘘をつくのサ。衛策なんだよ。どうせ一筋縄で行きやしないんだから、もつと押し強く出なくちや駄目ぢやないか。何だつてヘイ左樣ですかと、スゴ／＼引き退るんだい。お前さんも存外意氣地なしの腰拔けだね！」と手厳しく眞ツ向から凹ました上に、横倒しにのめるほど強く、田屋公の腕を突つ放した。腕も腕つぷしも確かなアマゾンだ。常盤御前の蟒お龍といつたのは此處に到ると、もはや見かけばかりぢやない。振りまわしのつかん事は日本一の女優だらうと、田屋公の手紙にあつたが、成るほど是ぢや清盛になる役者も災難だ。迂濶に手を出すと張りつけられるかも知れないと思つて帷幕に吞まれてゐると、この勢ひで頭に冠つてゐる笠の顎紐を引つぱづして足もとへ叩きつけると一緒に、袿の尻をからげて、ほてついた着物の裾をまくると、腰から下が、桃色金紗の長襦袢一ツだ。クルツと向き直

つて、下駄をふり〳〵門の外へ駈け出さうといふのだ。みんな一様に慌てゝ「おい〳〵。延ちやん。何處へ行くんだい？」と呼び止めたが、振り向きもしないのだ。「あたり前サ。社長の家へ捻ぢ込みに行くつサ。」「芝居は何うするんだい？どちみち演らなくちやならないんだから、かうなつたら、一時間でも早く撮つちまつたが、手まわしだよ。こゝまで進行しちやつてるんぢやないか！」「そんな氣樂なことは言つてられませんよだ。まかり間違へば、明日の晩は、妾の後生大事なものと、泣きの涙の生別れになるんぢやないか。せめて妾の貰ひ分だけでも、取つて來なくつちや、たまりやしない。」と走りながらの挨拶だ。「われ〳〵だつてさうだよ。何もお延ちやんが掛け合ひに行かなくつたつて、これから、みんなで相談して、誰か行くんだから、おい、よしなよウ。その風采で往來へ飛び出したら、狂人と間違はれて、おまわりさんにフン捕まるぜ。おい。よせつたら。よしなよウ。そオら。帯が解けた。仕様がねエな！」と口に手をかざして田屋公が叱えると「構やしないよ。すぐそこぢやないか。どうせ、お前さん達ぢや駄目さ。妾が行つて來り込まなくちや、埒があくものか。」と、蹴り上げる脛もあらはに、ズル〳〵と帯を引きずつて、門の外へ驅け出した常盤御前の後姿を見送り乍ら「偉い女だなア、おい、とても逞ましい向ふ脛だ。あはゝゝ」と廿公の九助が笑ひ出すと「向ふ脛も莅経もだ。今度といふ今度は、まさか斯うならうたア思はなかつたので、當にしきつてゐたんだから弱つちまつた。」と田屋公が溜息をついて此方を振り向いた。この紛擾に取りまぎれて、持つて來た話の口火を切り出せずにゐる俺が、そこに茫然として突立つてゐたのだ。俺を見ると、漸く氣がついたやうに、物悲しげに笑つた。「大泉さんも呆れましたらうな。土台お話になりませんや。こんな始末にならうと思へば、赤髭の言ふことなんぞ聞いて、こんな所へ來るんぢやなかつた、と悔んでも更に始まらぬ後の祭ぢや仕様がありません。まあ何うにかなるでせう。セットへ行つてお茶でも飲みませうや。あの中で午後から九助と烏天狗の大格鬪を演るんです。先刻からの騒ぎにかまけて、とんだ失禮しました。エ、。ときに何か話したい事があると仰有つたのは？」「他でもない烏天狗に選擧されちや大迷惑だから、平たく謝絶するといふ事なんだ。」と俺が言ふと「エツ」とおどろいた田屋公。二の句が次げないのだ。人間が寂滅する刹那には大概こんな聲を出して、あとが靜かになる。もつとも、これきりお了ひにはならなかつたが。

〔附錄、作者の身邊雜租たる「人間廢業」はまだ書き足りないけれども、あんまり長びくのも感心しないと思ふので、一と先づ此の邊で免としやう。「人間廢業」に及ばんとする理屈が一ツ殘つてゐるから、そのうち御披露する考へである。（大正十五年三月五日。作者識す）

想華

ドナウ源流行

齋藤茂吉

一

この息もつかず流れてゐる大河は、どのへんから出て來てゐるだらうかと熱心に思つたことがある。維也納生れの碧眼の處女とふたりで旅をして、ふたりして此の大河の流を見てゐた時である。それは晩春の午後であつた。それから或る時は、この河の漫漫たる濁流が國土を浸して、汎濫域の境線をも突破しようとしてゐる勢を見に行つたことがある。それは初冬の午後であつただらうか。そのころ活動寫眞でもその實寫があつて、濁流に流されて漂ひ著いた馬の屍に人だかりのしてゐるところなども見せた。その時も、この大河の源流は何處だらうかと僕はやはり熱心に思つた。

地圖を辿つて行くと、河は西南獨逸の山中から細くなつて出て來てゐる。僕は民顯に來てから、〝Die Donau〟といふ書物を買つた。これは、Schweiger-Lerchenfeld の撰で、西紀一八九六年に維也納から出版されたものである。僕は

此の書物を愛して時々拾讀した。その中には Donau（ドーナウ）を中心として、地理學・水路學・船舶學・人類學・考古學・博物學・歷史があつた。おなじ大河でも、Wolga（ウォルガ）と Donau（ドーナウ）とは趣のちがふことをいふあたりには何かの感激があつた。それから、Donau（ドーナウ）に沿うた維也納の古い繪圖などを見ると、やはりなつかしい氣持が湧いた。それは、ヨハン・シトラウスの、"Spiegelt sich in deiner Wellen Tanz." などといふ歌句に因るのみではなかつた。

僕は地圖のうへのその細い流を實地に見たいとおもひ、復活祭の休を利用しようとした。そこで、西紀一九二四年四月十八日、午前七時半の汽車で民顯（ミュンヘン）を出發した。この汽車は、Augsburg（アウグスブルク）、Ulm（ウルム）を經て Stuttgart（スツットガルト）の方へ行く急行列車である。僕はその三等車内にゐて氣を落付けてゐる。今朝、宿の媼 Hillenbrand（ヒルレンブラント）が六時に僕を起して、朝食を食べさせて吳れたのであつた。

朝はまだ早いのに畑では農夫がもう働いてゐた。妻が牛の口を取り、夫が鋤の方を操縱してゐるのなども目についたが、けふは Karfreitag である。復活祭前の金曜であるのにかうして農夫は働いてゐるのが目についた。維也納の郊外に行つたときも日曜に農夫が幾たりも働いてゐた。これは信心ぶかくないといふ證據にはならなかつた。然し春寒であるから耕し了へた畑はまだ幾枚もない。冬枯の草で蔽はれてゐるところを田鼠が恣に步くので、堀りかへされた土が小さい山の樣になつて幾つも見えてゐた。そのうち、汽車が走ると、畑の間を一直線に流れてゐる水が見えたり、白樺の林が松林になり、樅林になり、落葉樹林になる。けれども大體の風光は、ゆるやかな勾配を持つた畑と草野から成立つてゐると謂つていい。これは墺太利でも同じである。

僕は民顯の停車場から買つて來た新聞を讀むと、それに日本人の記事があつた。北米合衆國で日本の移民問題が紛糾しかかつた時に、その記事がちよいちよい獨逸の新聞にも載つた。けふの日本人に關する記事といふのも、自然亞米利

加との問題からの聯想であつた。未だ大戰の起らぬだいぶ前に記者は或汽車に旅したことがある。この同じ汽車に日本の留學生も五六人ゐた。ある時、汽車の旅の無聊に、みんなが卓を共にし、酒も飲んだ。日本の留學生の二三は快活に飲み快活に話したが、二三の留學生は默々として何も語らない。ところが其の沈默の一人が何かのはずみに、『私どもは天皇のために命を捨てることなどは何でもありません』と云つた。これが記者には何かを暗指してゐる異様な響で聞こえたのであつた。そこで記者は、『御國のいまの天皇の御名前は何と仰せられますか』と問うた。するとその沈默の留學生は、『私どもは決して天皇の御名前を申奉ることはありまん』と答へた。そして『それは畏多いことだからです』と附加へた。さういふ話であるが、その沈默の留學生の言葉を記者は今おもひ起して、亞米利加問題と或る關聯を有たせたいのであつた。そして、その記者は、日本の國民は何時でも天皇のために命を捨てるものだと堅く信じて居た。さうして、„Schweigsame Japaner“などといつて、底氣味の惡い國民だといふことを其處に暗指してゐた。

僕はその記事を讀んで心中秘かに微笑した。そして、その沈默の留學生は、天皇の御名は睦仁と申し奉ることを知らなかつたのだらうと思つたのである。併し僕はこの記事を讀んでから、眼を瞑つてしばらく思に耽つてゐた。

そのころの獨逸の漫畫雜誌には、日本人を猿に畫いたのなぞもあつた。絹帽に星のついたのを冠つてゐる老翁の寢部屋に一つの尾長猿が這入つて來てゐるところが先づ畫いてある。老翁が猿の尾をつかんで、„Der verdammte Japs hat nichts bei mir zu suchen!“といつてゐる。その次は、老翁が兩手で猿の尻尾をしつかりと握つて放り出さうとしてゐるところが畫いてある。翁は忿怒の相をして、絹帽は飛んでしまつてゐる。猿は放り出されまいとして兩手で翁の寢衣の腰の處のずぼんにかぢり付いてゐるところが畫いてある。その次は、もう翁の白髮は逆立つてゐる。猿の體が延びて彎曲して斷れさうになつてゐる。それでも猿は苦しまぎれに寢衣にかぢり付いたから、寢衣はずるりと捲れて、老翁

の臀が全く露出したところが畫いてある。そして老翁の眼は爛々と血走つてゐるところが畫いてある。僕はこの繪を見てなかなか旨いと思つたことがある。旨いと思つたのはその描方にあつたが、今はその筋書が頭に浮んで來てゐる。僕はその繪のことを思ひ出してしばらく思に耽つてゐた。

この新聞にも、四月十七日發の華盛頓電報で移民法案が既に決められたことを報じてゐる。四月十七日といへば昨日である。それから巴里發電報では、石井大使がポアンカレを訪うて懇談したことをも報じてゐる。そして、佛國は日本とは親善の間柄ではあるが、この問題に就いては不平の狀態に處るだらうといふことが附加へてあつた。僕には一國のことは餘り大き過ぎる。けれども之を個人の間柄に還元して觀るなら、隨分その例に乏しくはないが、不愉快で寂しい心を起さしめる。僕は依然として考に沈んでゐた。

けれどもその間は十分間ぐらゐに過ぎなかつたであらう。窓外には緩い線の丘から赤い屋根が見えたり隱れたりしてゐる。畑の小路に十字架の耶蘇が祭つてある。小さい沼が見えて靜かな水が湛へてゐる。國家といふことを思ふ。民族といふことを思ふ。コスモポリートのことを思ふ。併しさういふ觀念はいつのまにか朦朧となつてしまふのであつた。

二

車内で少しの間まどろんだとおもふと、汽車はAugsburgに著いた。寺院の大きいのなどが見え、家屋も急に高くなつたやうに思へた。ひとりの貧しい身裝をした娘が、汽車の窓のところに來て、麵麭と燻肉と復活祭の卵を賣らうとしてゐる。Osterei! Osterei! と細いこゑでふれて歩いてゐるのが何となく物哀である。卵は一樣に褐色に色づけてあつた

り、色々の模様があつたりした。僕の近所では誰も買ふものはない。僕は一寸こころが動いたが、心中に何かおそれをなするものがあつて到々その卵を買はずにしまつた。ただ汽車が動いてからもその娘が心に殘つてゐた。

停車場に、殺人犯の者を幾百マルクの懸賞で搜す警察署の貼紙がある傍に、手提かばんを盗まれて、二十余貨マルク懸賞の小さ貼紙などのあるのも目についた。

Offingen驛を過ぎたころ、そのあたり一面は落葉樹林で、また伐木が盛にしてある。土手には菫が澤山咲いてゐる。この菫は日本種とおなじで、萬葉集に、『野をなつかしみ一夜寢にける』といふのとおなじであつた。そこの小流の汀には菖蒲のやうな草がもう萠えてゐる。それから、川柳の背の高いのがそのあたり一帶にあつて、花はもう盛を過ぎてほほけてゐる。僕は、『これは何かの流に近くなつて來たのだな』とおもつたゝもう少し行くと、果してDonauが直ぐ傍を流れてゐた。僕は何だか心のはづむのをおぼえた。川柳の群生を透して、Donauは稍水嵩が増して、岸を浸さんばかりになつて流れてゐるのが見える。即ち『充滿』の氣魄である。汽車は暫らくDonauに沿うて走つた。その岸をふたりの若者がもう外套も著ずに散歩してゐた。汽車の通るとき、まぶしさうにこちらを見てゐたが、手を活潑に振つて僕らの汽車を祝福した。

汽車は Ulm について僕は下車した。伽藍の大きいのが直ぐ家並から擢んでて見える。午にはまだだいぶあるので、僕は手提かばんを停車場に預けて町へ出掛けた。Ulm は十四世紀から十五世紀にかけて榮えた都で、今でもウイルテンベルクの首府である。古い建物が今でも處々に殘つてゐる。Münster（伽藍）の前に行くと悲しい歌のこゑが聞こえてゐるが戶を閉してある。そして僕のやうな旅人は中に這入れない。爲方がないから僕は其處を去つて下手の方へ下りて行つた。そこに古代の石門がある。時代を食つて物寂びしてゐるが、そこを僕はくぐつて行つた。すると直ぐDo

nau の岸に出た。岸のところに石で疊んだ散歩道が出來てゐて、恰も石の廻廊のやうになつてゐる。兩側の石壁も可なりの厚みがあるから、童子等はその上をも歩いてゐる。稚兒などは散歩道からその石壁に兩手でつかまつて、背延びをして、辛うじて Donau の水を見てゐる。その散歩道を大勢の人が往反してゐる。なかには石壁に腰かけて話してゐるものもゐる。そこを歩きながら石壁の向うの家の人と大ごゑで話したりする。石壁の向うの家々は皆古く、壁に古風な繪模樣を畫いたのなどが殘つてゐる。その人通りのなかを僕は歩き拔けたが、誰も餘り顧ない。民謡のやうに、Jazz などといふこゑは一つも聞こえない。僕は靜かにそこを通り拔け、古い砦の殘つてゐるのを右手に見ながら、汀の方へ下りて行つた。

Donau の水は此處は可なり急流になつてゐる。汀に立つて岸の草を浸すところを見てゐると、Donau も平凡で、直ぐ對岸に渡れさうでもある。ただ川上から流れて來る水が、川下の方へ稍低くなつて行き、そこに瀬を作り、瀬が鳴つて二たび川下の方へ流れて行つてしまふところまで一氣に見ると、ここの Donau もやはり犯し難いところがあつた。

そこの岸に、水泳のために建てた粗末な建物などがあつた。そこに童子等の樂書なども見える。Xenia— などと云つて、二つも三つも書いてゐるのは、Achtung の洒落であつた。なかには稚ごころに文字を模樣風に書いたのなどもある。家庭から放たれたやうな氣樂さで旅してゐる僕も、氣が付けばやはり異國にゐるのだといふことが染々と思へた。童子の樂書さへも身に沁みた。天が好く晴れて、日はもう中天にのぼつてゐる。Donau の水の清く澄んでゐる汀のところに踞んで、魚でも泳いでゐるかと思つて見てゐたが魚は一つも見えなかつた。そんなら魚の子でもゐるかと思つたが、それも見えなかつた。川下の方に支流が一つ合してゐる。これは Blau 川である。そこに五六人が釣を垂れてゐた。そして家鴨が水に入つたりまた出たりしてゐた。小學生が十四五名通つて行つた。皆白い帽子を冠つてゐるのが

日に付いたが、僕には好い氣持がしてゐた。

『それでは、一つ鯉をあげませうかね。ドウナウの鯉でございますよ。』

『そいつは珍らしいね。そいつを一つ旨く料理して呉れ』

『よございます。お國ではどうして召上りますか』

『さうだね。一寸むづかしいが、まづ maggi のやうなもので煮ても食べるね。それは樣々だ。何しろ日本は魚を澤山食べるところだから、料理の爲方がなかなか發達してゐるからね』

『さようでございますか。日本は支那の方でございましたね。行くのに何日ぐらゐかゝるのでございますか』

『まあ船で五十日だね』

お上は、『ほお！』と云つて、右の手を妙な工合にあげて臺所の方に行つてしまつた。ここは、Wirtschaft zum Ulmerspatz といふ看板を出してゐる小さい食店である。僕は川岸を離れて、市役所の壁に色々の壁畫の描いてあるのを見、それから市立浴場を覗き、かういふ町にふさはしくないやうな急進派の畫家のものなどを並べてある店を覗いたりして、ここの食店へ入つて來たのであつた。思ひ切つて肥つたお上は愛想よく僕にのしかかるやうにして、今日は獸肉を食はないことを說き、卵と魚ならあるといふので、此の如き問答が始まつたのであつた。僕はここで鯉を食べて秘かに幸福を感じてゐた。それから葡萄酒をやめて、Goldochsen-Bier といふ銘の麥酒を飲んだ。これは通人の飲むものでは無からうが、微かに植物の花のやうな香がして僕には氣に入つた。僕の味覺は、ここの Ulm の住民ぐらゐのものであつた。

物理學者の Einstein もこの町に生れた。それからこのごろ、日本と關係ふかかつた Siebold (1796-1866) の妹さん

か、郊外に住んでゐることを知つたので、上さんに一寸當つて見たが、上さんはまた怪訝な顏をしたかとおもふと、亭主を呼んで來た。亭主も怪訝な顏をしたのは極く順當であつた。僕は稍滑稽を感じ、勘定をすませてそこを出た。麥酒が少し利いたやうである。なるほどこの問答は、恰も淺草寺境內の大天麩羅店に上つて天麩羅を食ひつつ、安井佐夜子の落を訊いたやうなものであつた。

僕は心の抑制から脫して、伽藍の壁の日時計の殘つてゐるのを見てゐた。時計の眞中に黃金の光が炎のやうに描いてあつて、そこに針の影がうつるのである。この伽藍は、十三世紀から始まつて十六世紀頃までに出來た、ゴシック風の大伽藍である。なるほど雀が巣を喰んでとまつてゐる。これが Ulmer-Spatz に相違ない。いろいろな細工と尖りが雜然として居つて、僕には何だか煩はしい。旅人である上は、さういふものをも見逃しては濟まぬやうな氣持が、意識の奧の方で動いてゐるが、疲れと煩しさとがそれを否定してゐる。美術行脚などをする人でも、やはりさうであらうか。

三

僕は錢を拂つて、伽藍の塔に昇つて行つた。狹苦しい石段を一つ一つ昇るのに、麥酒が廻つて來てゐるので、動悸がしてならない。僕は目を瞑つて休んでゐると、下の方から活潑な足音がし出して、少年が僕をぐんぐん追越して行つたりする。僕が難儀してのぼるのに、何人もかうして僕を追越してしまふ。下の方から風があふり上げて來るので、これはなかなか氣流が好く出來てゐるなどと思つて休んでゐたこともある。如是は僻輿といふ奴かも知れんなどと云つて休んでゐたこともあるのは、日本語で洒落めいたので、氣が付いてひとりで苦笑した。さういふ時には餘りよい氣持がしなかつた。けれども僕は遂に頂上までのぼつて行つた。

天が美しく晴れて、其塔の頂上は風がなかなか强かつた。手で欄まり下の方を覗くと町を歩く人馬がすでに蟻行になつて見える。僕は眩暈をおぼえた。僕はいつか夢を視てゐて、飛行將校になるなら僕は屹度おつこちるだらう。それでも僕は君國の爲めに死ぬなどと云つて息卷いたことを、いま思出して慄然とした。僕は目を瞑らさうと欲して下の方を暫らく見てゐたけれども、それは利目が無かつた。

Donau が見える。今しがた僕が汀に立つた Donau が遙か下の方に小さくなつて見えてゐる。その岸を歩く童子などは胡麻粒の様だ。けれども今度は Donau が蜿々として國土を限つてながれて居るありさまが見える。北方はウイルテンベルクであり、南方はバイエルンである。かくの如く國を限つた Donau が西方にだんだん細くなつて行くのを僕は見てゐる。僕の振りさける國土は一帶の平原であるが、平原に村落があり、丘陵が起伏し、森林の斷續がある。そこを Donau はゆるくうねり、銀いろに光つて流れてゐる。そのながれが遠く春の陽炎のなかに沒せむとして、絹糸の如くに見えてゐる。

東方の Donau もつひに國土のなかに沒した。僕は目金を拭いてなほ東方の Donau を見た。Donau は、此處で Iller を合してゐる。この川は南バイエルンのアルゴイ山中から發するものである。次いで、Lech を合する。Lech も南バイエルンのアルプス山系に源を發し、その道に Augsburg の市がある。それから東の方に廻ると、Isar が合する。Isar も亦遠く南方の山中から出て來て北へ流れ民顯を通つて道を東北にとり遂に Donau に合するので、その口に Deggendorf の町がある。それから墺太利の境に來て、Inn が合する。Inn は南バイエルンと境する墺太利の山中に發し、東へ流れ又北へ流れて獨逸に入り Salzach と合して遂に Donau に灌ぐのである。灌ぐところに Passau の町がある。

Donau が墺太利に入り東に流れて匈牙利に入る。その沿岸に、Linz があり、Wien があり、Budapest がある。Budapest 以後は、急に道を南方に取り、バルカンの國土を貫いて、遂に黒海に入るのである。Donau の流れるバルカンの國土には、セルボ・クロアト・スロヴエーンがある。ルーマニアがある。ブルガリアがある。

墺太利に入るまでの沿岸には、なほそのほかに、Donauwörth, Lechsmund, Ingolstadt, Albach, Regensburg などの都邑がある。是等の都邑は Donau と關聯して皆一時繁榮したところである。Ingolstadt の如きは十五世紀に既に大學を以て響いてゐた。僕は伽藍の塔の上にゐて、さういふ都邑の盛衰のことなどをも思つた。

それから朧氣として國の興亡のことなどをも思つた。"die Donau" の著者は、遠くアリアン族の移住から筆を起して、石器、青銅時代の遺物に就いて記述してゐた。それからケルト族のことも說いてゐた。ホメールの川ゐた地圖だの、ヘロドートの川ゐた地圖だの、エラトステネスの川ゐた地圖なども載つてゐた。さういふ地圖を見ると、Donau は、Ister ともなつてゐる。又 Danubius とも云つた。亞歷山大王のこと。トラヤン帝の戰のこと、羅馬街道のこと、などが書いてある。羅馬人の勢が衰へて、異底族の侵入して來たあたりから、いろいろの種族が相興亡し、東洋の種族までその邊にあばれ廻つたりなどして、次いで段々と國の出來て來る有樣が書いてある。西紀第六世の終頃のクロヴアチアと、アヴアールと、東羅馬帝國との境界は全く Donau によつて限られて居り、スロヴエン族の勃興した第七世紀から第八世紀にかけても、その境界はやはり Donau に據つた。匈牙利王國が起り、セルビア國と、ワラカエ國が起つ時でもさうである。それゆゑ、Donau の沿岸には興亡があり、軍が屯し、いろいろな哀な物語などをも殘した。ニイベルンゲンの歌の如きはその一つに過ぎない。それ以後いろいろの國が起るに及んで、Donau は必ずしもその境界ではなくなつた。さういふ興亡の史蹟を此の書物が書いて居る。僕は伽藍の頂にゐて、その輪廓をお

もひ浮べてゐた。

伽藍の塔を降りるときには割合に活潑に降りることが出來た。伽藍の內にはもう誰も喧嘩してゐるものはなかつた。僕はそのなかを無意味に大股に歩いて、そして出て來た。街の近々に Hunde und Katzen sperre などといふ張札がある。犬猫を拘禁して置けといふのは、はやり病の豫防のためだなと僕は思ひながら歩いて行つた。

Blau の水が威勢よく流れてゐる、その流に直に家の建つてゐるところがある。さういふ處は古代その儘の家が建つてゐるので、伊太利のヴェネチアを聯想せしめる。また同じ水郷と云つても、日本のはも少し土地の餘裕があるのに、此處のは水から直ぐ家になつてゐた。そして水は急流で渦卷いてながれてゐる。かういふ建築の氣持は、そのまま腑には落ちなかつたが、ずつと時代を溯つて味ふと、極く靜かな快感をおぼえて來るのであつた。これは恐らく『保存』の欲求のみには本づいてはゐまい。やはり僕にはかういふ鄙びた寂に同情する心があつたのであらう。僕は其處の寫眞を撮らうとおもつてひどく骨折つた。童が二三人來てたかつたのを制しながら兎に角一枚撮つた。流の片側の方は恐らく旨く撮れただらう。

四

僕は午後四時二十五分發の汽車に乘つて Ulm を立つて西へ向つた。汽車は小驛にも一々停るので、非常にのろい樣な氣がする。發車してから暫く窓外を見てゐたが、汽車は Blau の川に沿うて走つてゐて、それに小さい川が幾つも流れ込むのが見える。その細流の出て來るあたりは一寸日本の景色に似てゐた。

急に眠くなつて僕は眠つた。だいぶ眠つたとおもつて目醒めたが、まだ何程も來てゐなかつた。小さな村にも工場が

あり、祭日なのに畑が出てゐるなどと思ひながら、汽車のなかにぼんやりとしてゐた。そのうちまた幾らか眠つた。

Ehingen 驛に五時半に着いた。ここで黑まはし著た羊飼の歸路につくところを見た。しばらく行くと汽車は Donau の直ぐ傍を通つた。Donau は青野と畑と丘の間を極めて平淡にながれて居る。『はあ。だいぶ細くなつて來たな』かうおもひながら、暫く流を見てゐる。極く平凡だが、よく見ると水嵩が多くて流が可なり早いのであつた。水嵩の増すこともあると見え、岸の柳の木に藻くづなどが引掛つてゐた。

Rottenacker 驛を過ぎた頃に、草野の間にあらはれて見える Donau は青く光つた。湖水のやうにも見えた。しばらくすると捨小舟などが一つ浮いてゐた。あるところでは、川筋が二つに分れて洲などを拵へてゐた。何しろ、陸の面と Donau の面とは何程も違はない。時には Donau がふくれて見えるやうなところもあつた。汽車は、川に離れたり近づいたりして走つた。川が見え出すと、『だいぶ細くなつて來たな』いつも僕はさう思つた。けれどもそれにはやはり錯誤があつた。川が崖に沿うて走るやうになり、白巖からなる峽の鐵道橋を渡つたとき、Donau が依然としてさう細くなつてはゐなかつた。

Riedlingen 驛に六時半に着いた。太陽は向うの丘に傾いて、美しく晴れた空にその太陽の光が銀粉をまいたやうにさしてゐた。Donau に支那流の小橋が懸つてゐたりした。向うの山上に寺が建つてゐる。ここでも羊飼が歸るところであつた。年寄つた嫗が一人群羊を連れてゐた。そのうち太陽は紅く大きくなつて落ちた。日がかげると山陰の村落の家々の白と黑との色の交錯のなかに寺の尖塔にいまだ幽かな光の殘つてゐるのなどが目についた。西に黄金の餘光があり、そのうへに雲がしづかに棚びいた。

Donau は山峽に沿うてしばらく流れた。大きな月が出たが、恰も滿月であつた。それが Donau を照らすと、Donau

は全く銀色になつた。汽車は、Sigmaringen驛に着いた。そこで僕は夕食の辨當を買つた。田舍人が二三人乘込んで來た。僕はひとり麵麭を食つてゐると、背嚢を棚へあげて僕のまへに腰かけた男が僕に話しかけた。僕は麵麭を食ふことをやめて暫く應對してゐた。

話はありふれた會話に過ぎなかつた。また僕には込入つたことは旨く言へなかつた。そのうち若者はこんなことを話した。若者は民顯の生れだが、フランクフルトに住んで、今年そこの大學を卒業したのである。これから三つばかり驛を行くと、そこの山上に孤兒院がある。若者の姉はそこの保母になつてゐる。今夜はその姉を訪ねるところであると、かういふのであつた。僕はこの話を聞いて心が動いた。汽車は以上のやうに山峽を走つてゐる。月光は流れるやうに谷間を照らしてゐる。汽車が驛に着くと、若者は山上を指して哭れた。そして慇懃に會釋し、僕の手を強く握つて降りて行つた。そこから僕ひとりになつた。僕は窓をあけてしばらく月の光を見て居た。

僕は山上の孤兒院のことを思ひ、そこに勤めてゐる若い女のことを思つた。遙々と留學して來て以來、月光のこのやうに身に沁みたことは、今までになかつた。業房に閉ぢ籠もつて根をつめて居たせいもあらうが、月光を顧みたことなどはつひぞなかつた。然るに今夜は不思議にも、生れ故郷の月を見るやうな氣がしてならない。この月に照らされてゐる Donau がうねりながら遙か向うに見えなくなるのをみてゐると、目に涙のにじんで來るやうな氣がした。僕は „Tiefsten Ruhens Glück besiegelnd Herrscht des Mondes volle Pracht“ のところのファウストの句、「いと深き甘寢の幸を護りて、月のきよき光華は上にいませり」（鷗外）を思ひ出してゐた。

汽車の窓から、遙か向うの山上の塔に、灯のついてゐるのが見えた。汽車が Immendingen に着いたのは九時四十五分である。そこで僕は汽車を乘換へた。さうしてやはり Donau に沿うて、西北へ向つて走つた。銀いろにうねつてゐ

る Donau が直ぐ窓外に見えたりすると、僕はまた、『これはだいぶ細くなつた』と思つた。
汽車は、十時三十分に遂に Donaueschingen 驛に着いた。僕は月光を浴びて汽車から降りた。

五

手提かばんを持つて、僕は Schütze といふ旅館を尋ねて行つた。さうすると、かういふ邊土の旅舍であるのに、まだ宵の口の樣な氣分が漂うてゐた。僕は部屋を極め、それから料理一品ばかりと麥酒とを部屋に用意しておくやうに命じて外に出た。出口から少し行つたところから戻つて來て、Donau がどの邊を流れてゐるか尋ねると、帳場の若者はかう答へた。流は直ぐ近くにある。これは Brigach 川である。この流をしばらく下ると Breg 川がこれに合する。Donau はそこから始まるといふのであつた。早口で云はれたのだが、前に地圖で調べて置いたので、若者のいふことが略分かつた。若者は出口のところまで來て、流の方を指して呉れた。

なるほど川は直ぐ近くを流れてゐた。僕はそこの石橋を渡らずに右手に折れて、川に沿うて行つた。明月の光は少し蒼味を帶びて、その邊を隈なく照らしてゐるが、流は特に一いろに光つて見えてゐる。それは瀬の波から反射してくるのでなく、底深い急流の面からくる反射であつた。川沿の道は林の中に入つて、川は暫らく寂しいところをながれた。」何だかうすら寒いので、僕は外套の襟を立て、兩の隠しに堅くにぎつた拳を入れて歩いて行つた。深い林が迫つて來たとおもふと、水禽が二つばかり水面から飛び立つた。僕は驚愕したが刹那に氣を取直して、こんなことではいけぬ。何の鳥だらう。今ごろ飛んだりするのはと思つた。若し僕が、Zigeuner であつたら、こんな時にどうするだらうなどともおもつた。それから諸國を渡り歩く越後獅子の童子のことなども頭に浮んだ。もうこのあたりの道は、人の往反が全

く聞えてゐた。

僕は小ごゑで歌のやうなものを歌つた。節も何も出まかせだが、ひとりでに覺えた浪花節の節に似てゐたとおもふ。をりをりは桃中軒雲右衛門のやうなところもあつた。

これやこの、知るも知らぬも逢坂の、行きかふ人に近江路や、夜をうねの野に啼く鶴も、子を思ふかと哀なり。番場、醒が井、柏原、不破の關屋は荒れはてて、ただ漏るものは秋の月。不破の關の板間に、月のもるこそやさしけれ。ありがたの利生や。おありがたの利生や。佛まゐりの利生で、妻に行きあうたのう。悪しきを拂うて助けたまへ、天理わうのみこと。ちよとはなし、神の云ふことを聞いて呉れ、悪しきの事は云はんでな、この世の地と天とを形どりて、夫婦を拵へきたるでな、これはこの世の始だし。あしきを拂うて助けせきこむ、一れつ濟ましてかんろだい。山の中へと入り込んで、石も立木も見ておいた。これの石臼は挽かねど廻はる。風の車ならなほよかろ。み吉野の、吉野の鮎。鮎こそは。枕絣によくにしを鮎、おし鮎の口すふと人のかげごとぞうき。汗水を流して習ふ劍術の役にもたた奴御代ぞめでたき。

何だか出任せであつた。けれども、小さいこゑでうたふ浪花節の道行ぶりのやうな、東家樂燕のやうなところも一寸あつたりして、妙に僕の心を落付かせた。僕は月光を遮へられた流の岸をこんな工合で暫く歩いた。

林が盡きて月が見えたかとおもふと、また急に流の面が光り出した。向うが開けて、平野のやうになつてゐる。月光の涯は煙つてゐるやうでもある。僕は一寸立止つたが、『Donau もこれぐらゐ細くなればもう澤山だ』と思つた。そして其處の汀の草のうへに尻をついてゐると、幽かに水の香がしてゐる。佐賀縣の山中にゐた時に嗅いだあの水の香と同じだと僕はおもつた。たまに水が音を立てたりした。これは岸のところに出來る渦の音であつた。

もう餘程遲いかも知れんと思つて、やをら立ちかけて、平野の向うを見てゐると、また僕は靈仙のことが意識をかすめた。東坊に入つてやつてゐる佛事がなかなか片付かずに難儀した時、僕はたまたま『靈仙大德の死』を思つて自ら慰めたのであつた。靈仙は、興福寺の僧で、最澄、空海と共に入唐した。そして長く向うに居た。長安醴泉寺僧內供奉翻經大德として崇められたが、後、五台山に入つて修道中人のために殺されたといふのであつた。慈覺大師の「入唐求法巡禮記」に「到大暦靈境寺。向老宿問靈仙亡處。靈仙三藏先在鐵勤蘭若及七佛教誡院。後來此寺。住浴室院。被人毒殺。中毒而亡過。弟子等埋殯。未知何處。」から書いてある。最澄は延暦二十四年六月に歸朝して、八ケ月餘しか向うに居ぬ。空海は大同元年十月に歸朝して、二ケ年足らず向うに居たに過ぎぬ。けれども最澄の道邃・順曉・行滿などに於ける關係、經典疏注すべて二百三十部四百六十卷其他を將來したこと。比叡山天台宗開祖となつたこと。空海の惠和・牟尼室利・般若などに於ける關係。最澄よりもずつと澤山書物を持つて歸つたこと。高野山眞言宗開祖となつたこと。この二人に較べると靈仙の一生は奈何にも寂しい。

傳教も弘法も萬代に崇むべき人であつた。けれども遙々ここに留學生となつて來て居る僕の身には、餘り榮々と光明に曝いた二人の徑路と、その求法の努力とが、先づ先づ僕めにはならなかつたと謂つて好い。僕は、當時の『還學生』の名よりも『留學生』の名を好んだごとく、『在外研究員』の名を厭うて、自ら『留學生』と謂つてゐたのであつた。僕はみづから寂しい時には靈仙の寂しい一生を思つたのは、かういふ機緣に本づいてゐた。僕は歩き出してからも、一寸靈仙のことを思つたが、この頃は靈仙のことにもおのづから馴れて、感激の度も薄らいで來て居つた。

僕は何でも大股に歩いた。月光に因緣ふかい東洋國土の感傷から離れて、ぐんぐんと歩いた。併し旅舍に歸つて來た時はもう疾に夜半を過ぎてゐた。僕は自分の部屋に行つて料理を食べた。料理を食べながら麥酒を飲んでゐると、雨籠つ

てゐる』感じで氣持が好い。ことに段々と溪谷の境を離れるところに、いかにも寒氣さがあつた。

六

一夜明けて、寫眞機を持つて出掛けた。なるほど、川は直ぐあつた。Brigach である。僕は昨夜のやうに石橋のところから右へ折れて行つた。川の水量が豐かで、やはり『充滿』の感じである。川底に近いところを凝視すると、魚が群をなして泳いでゐる。その自然な緊張した姿勢が、いかにも『安定』の感じなので僕はいい氣持になつてゐる。あるところでは水草が密生して流の方嚮に靡いて居り、そこにも魚の列が一定の保護色を保ちながら泳いで居た。魚は Forelle の一種で、民顯の市場などでも時にこれを買ふことが出來た。

川藻の靡いてゐるところは直ぐ徒渉し得るやうにも思へたが、さうは行かなかつた。Amsel 鳥が既に啼いてゐる。水面からたまたま魚が跳ねた。汀の或る處に清水が湧いて、其處にいろいろの水草の生へてゐるのなどが目についた。

ゆうべ林中を通つたと思うたのは、公園の一部であつた。落葉樹は未だ芽吹かないと謂つて好いくらゐである。公園から出て來て、Brigach に入る小川も水が極めて豐かで、溢れるやうにして流れてゐる。公園は大名（公）時代の庭園の名殘で、そこに侍醫の碑などもあつた。Dr. W. Rehmann. F. F. Hofrath und Leibarzt. geb. zu Donaueschingen 26. Juni 1792. gest. daselbst 7. Juli 1840. と刻してあつた。僕はその前で一寸脱帽した。僕はその儘ゆうべのやうに流に沿うて歩いて行つた。

しばらくすると森林が盡きて眼界が展けて來た。ここは昨夜、月光に照らされてゐたところであつた。僕は昨夜のことを思ひ出して、『月夜の Donau』を何とかして書いておきたいやうな氣がした。そして昨夜は大分遠く來たやうなつ

もりであつたが、今朝見ればそんなでもなかつた。林間をながれてゐる Brigach は暗く青ずんで見えてゐる。近くの水面に浮寝をしてゐた鳥は、いまもひとつ飛立つた。これは雁であつた。未だ仲秋なので雁は歸らずにゐるのであらうか。晩秋となればもつと北の方へ歸るのであらうかなどと思つた。飛立つた雁は餘り僕を恐れぬらしく二たび少し隔つた水面に落ちた。僕は、秋の Donau に浮寝してゐる雁は、短歌になるだらうと思つた。慌しく明暮れて、短歌のことも餘り考へないのであつたが、ここへ來てから、歌ごころが少しづつ湧くのを感じた。」

暫く行くと、向うから Breg が來て、Brigach に合した。Breg は平野の彼方からながれて來るので、それが幾うねりにもうねつて、平野のすゑに見えなくなつてゐる。その Breg も、僕が汀に立つてゐる Brigach も、無障礙の日光を受けて照りかがやいて居る。まぶしく白い光の反射してゐる水面は、何だか膨れたやうになつて流れてゐる。水面は直ぐ陸から續く氣持で、しやがんでその流水を掬ぶことも出來た。ここから愈々 Donau がはじまるのである。

この張のある、白い光の耀いてゐる水面を見ると、『Donau もいよいよ細くなつて來た』とは言ひ兼ねるところもあつた。けれども僕は秘かに滿足せねばならなかつた。そして、Breg を Donau の支流と看做して地圖を辿つて行くと、Breg は平野から追々谷へ入つて行つた。それから西の方へ折れて、そこの山中から出て來てゐた。僕は Donau の寫眞を撮らうともおもつたが、逆光線で旨く行かない。しかしかまふことがないと云つて二枚ばかり撮つた。僕は息のあるうちに二たび此處に來るやうなことは無いと思つたからであつた。彼岸の平野の道を人が歩いてゐたが、非常に背が高いやうに見えた。

僕は Donau の流に沿うてくだることをやめ、一先づそこで滿足することにした。そして林中に入つたが、林中にも幾筋かの流があり、その淺い處に[illegible]などが架ててあつた。車轍の跡に溜まつた水は、日が差さぬので氷つた

僅になつてゐた。これから公園に入つて來たが、公園は相當に寂びて居り、林泉などもなかなか調つてゐた。赤帽をかぶつた掃除夫が道を掃除して歩いてゐるのに、林中を野兎が駈けてゐたりした。」

七

Donaueschingen（ドナウエシンゲン）は、フユルステンベルヒ公の治めた處で、その居城もあり、加特利教の寺も、醸造所も、美術館も、庭も古い時代からあつたものである。西暦一九〇八年の火事以來、燒けた部分の町は新しく出來たのださうである。

僕は『ドナウ源泉』(Donauquelle) を見に行つた。清冽な泉で、昔は寺の禮讃を終へてこの泉を掬んだといふことである。又公爵が家來を連れてこゝで酒宴をしたといふことである。この泉は、海拔六七八米。海洋に至るまで二、八四〇基米と註され、大理石の群像は、バアル神が童子と娘とを連れて、行手の道を示すところを刻したものである。泉の水は、直ぐ下をくぐつて Brigach（ブリガッハ）に灑いでゐる。その灑ぐところに、ウイルヘルム二世が小さい堂を建てて、（西暦一九一〇年）。Danuvii caput exornavit Guilelmus II, Friderici filius, Guilelmi Magni nepos, Imperator Germanorum といふ銘を彫らせて居る。獨逸人は、このあたりの Donau（ドーナウ）をば "Junge Donau" といふが、快い響を持つてゐるとおもふ。そこにも掃除夫が居た。その老いた掃除夫と少しばかり會話をし、泉の水を飲んでそこを出た。公の居城は直ぐ隣だが見ることは出來ないといふことであつた。

寺を見て、それから Karlsbau を見に行つた。そこには繪が可なりあつた。けれども多くはウルム派、シユワーベン派、それからボーデン湖畔の畫家のものなどが多かつた。ホルバイン。クラナツハ。グリユネワルドなどのものは模寫が多かつた。其等の流派のものは、堅く陰氣で、瀟洒で無いところに特色があつた。僕には、テエーヌなどの議論も

或程度まで受容れていゝやうな氣持がその時して居た。

Bezirksmuseum といふのを見に行つた。簞笥とか、古時計・著物・靴・うば車・額面など、さういふものが澤山陳列してある。ここにも矢張り古い時代の調度道具が並べてあつた。それから玻璃に畫いた農民美術のいろいろのものがあり、この中には、欲しくて溜まらぬものもあつた。素朴な色と、その配合と、女の顏などの邪氣無いところは、僕をして盜賊心を起させた程である。それから古い陶器のいろいろがあつた。陶器は維也納で、チロール山中地方のものを見て來てゐるが、此處のもなかなか好かつた。その單純な模樣が僕の心を引いた。それから、日本の品物のあるのが僕を驚かせた。漆塗の小簞笥があつたり、竹の模樣ある置物臺。膳七重。高砂の翁媼圖の縫取。書棚。香爐。屛風。大花瓶。太鼓など。目ぼしいものは無くとも、かういふ處に日本の物が丁寧に飾られてゐるのは決して惡い氣持ではなかつた。長崎でシイボルトが伊藤圭介に呉れたといふ蘭目金とか、久能山東照宮にある西班牙マドリー製の置時計とか、京都市妙心寺の南蠻寺鐘とか、そんなものを西洋の遊覽者が見て起す氣持に似てゐたかも知れなかつた。少し誇張もあるけれども。

そこに Johann Grund といふ人の繪があつた。これは割合に新締で美術史家の筆端にのぼる繪でないから、かゝる邊土に年を經るのであらうが、僕はその人の畫いた女人圖を見ると、矢張り靜かな快樂を覺えるのであつた。この畫家は華麗な、可憐な女を畫いた。さうすれば、これで本望であつたのではあるまいか。あまり嚴しく考へずに、恣に享樂するところに何かがあつたのではあるまいか。さういふ覺悟に物哀れなところもあり、傲慢なところもあつたのではあるまいか。そんな氣がして、幾つかの可憐な女人圖を僕は目守つたのであつた。

その處を出て僕はカフェに入つた。そこへ遠足に來た女學生の群が入込んで來て、菓子賣るところにたかつてゐた。

僕の傍に兵士が一人來て、麥酒を飲んで出て行つた。僕はそれから、Gasthaus zur Sonne といふ食店に入つた。上さんは顔の赤い肥つた女で、亭主は跛であつた。そこで僕は、分量の多いソップと、鹽辛い料理とを食べた。町内に住む上さんが來て此處の亭主と何か話してゐるのを聞くと、訛が多くて僕には非常に分かりにくい。上さんも亭主も、僕が日本人だなどといふことを氣にせぬらしく、恬然としてゐるところは、民顯(ミュンヘン)の人などとは丸で違つてゐた。机のうへに合本した雜誌のあるのを見ると、西暦一八九六年發行の Münchner humoristische Blätter といふのであつた。これを見ても、僕の今居る食店の程度が分かるのであつた。その滑稽新聞には、日本の事などはいまだ一つもなかつた。そのなかに、泥の様に醉つた學生を二人の學生が引ぱつて連れて行く。雪がさかんに降つてゐる。醉どれの學生の服が引ぱられるので段々ぬげて行く、しまひに服だけを二人が持つて向うの方へ行く。肝腎の學生は見えない。そして雪の中に埋まつてしまつたといふ繪で、verlorener Student と題してある、當時の民顯(ミュンヘン)の學生が如何に澤山麥酒を飲んだかが分かる。それから、vereitelte Liebeserklärung と題された滑稽圖があつた。これは、男と女が自轉車に乘つて相竝んで婚しさうに話しながら來るところが先づ畫いてある。それから一人の男が石橋の袂で待伏してゐるところが畫いてある。二人が石橋のところまで來ると、待伏してゐた男が二人を川のなかに、逆様に轉倒せしめるところが畫いてある。これは、自轉車が流行り出して、如何に色々の事があつたかを暗指してゐるのである。僕が維也納を去つて民顯に來た時、先づ氣づいたのは自轉車乘の民顯に多いといふことであつた。邊土の古びた食店で計らずも二十六七年前の世相を觀たやうな氣がして、秘かに僕は滿足してゐた。

僕はその食店に居るうち、案内書などを見ながら、今日の午前中の出來事を簡單に手帳に書きつけた。さうして稍疲れたやうな氣もする。これからどうしようかと思つた。

この上は一體どうなつてゐるだらうか。自分は此處まで來て、Breg が Brigach に合し、さうして Donau の源流を形づくるところを見て、僕の本望は遂げた。このさき、本流と看做すべき Brigach に沿うて何處までも行くなら、川はだんだん細つて行き、森深く雜つて行つて、谿川になり、それからは泉となり、苔の水となるだらう。そこまでは僕の目は屆かぬ。僕は今夕此處を立たねばならぬ。こんなことを思つて古びた食店を出た。

僕は時計を持つてゐたが彈機が途中でこはれて役に立たぬ。此の時計は目覺まし時計で、闇に見ると數字のところの光る樣に作つたものである。さういふ時計がはじめて日本に入りたてに、鑛山學の方をやつてゐる友の呉れたものだた。鑛山などに行くには是非必要だと云つて呉れたのであつた。その時計はだいぶ古くなつて、神戸を出帆するとき神戸の時計店で彈機を直した。それから維也納にゐるときも、民顯にゐるときも度々その彈機を直した。それが今度も汽車の中で毀れてから役に立たぬ時計を持つて僕は歩いてゐたのであつた。僕は時間を大凡で見積つてやらうと思つて、いつまの間にか川上の方に歩いて行つた。

川の兩岸は少し高くなつて、流を見おろす位置で僕はしばらく歩いた。その兩岸は石垣で堅めてある。大體新開の町はづれの氣分であるが、古い家も間々殘つて居り、大名時代の御用印刷處といふ文字が古びた壁に殘つてゐたりする。或る役所らしい跡にはウイルヘルム一世の像があつた。そのうち道に敷石が無くなつて、歩くと沙塵が立つた。そしてだんだん家が疎になつてゆき、つひに町は盡きた。そこで道は自づと低くなつてゐたから、僕と流とは近づいて來た。そこの川幅は狹くなり瀬をなしてゐる。僕が汀のところに立つと、流が曲らうとして勢づいて來るのがようく見え

る。僕は、大體このへんを源としておかうか。何だか寂しい。もう引返さうかともおもつて、川邊の花のほうけてゐるのを手ぐさにしたりなどして暫くそこに蹲踞んでゐた。

それから身を起して、何向も少し歩かうと思つた。そして、水車のやうなものがあると見え、流が裂いた處をわたつて行つた。人家は全く絶えて、すでに森が迫つて來てゐる。その兩方に迫つて來てゐる森の間を、まばゆい春の日光に照らされた川は、極くゆるく迂つて流れてゐるのである。

僕は川に接近することを努めながら奧の方へ歩いて行つた。ある時は僕はすぐ汀を歩いてゐた。濕地で、靴がぬかり、そこから泡が幾つも音をさせて上つて來るところなどを歩いた。汀の草は冬がれて未だ芽ぶいてゐない。

僕が流とそんなに近く歩いてゐるから、直ぐ口づけて水を飲むことが出來る。然るに、水は流れてゐるやうに見えない。水は銀いろに光つて、ただ一國に湛へてゐるやうに見える。その銀いろの水に、僕は直さま顏を接することが出來る。しかしどうも水は深い。僕は水に顏を寄せ眸をすゑて水中を覗くに、汀のところの土が見えながら漸く水中に沒してゐる。水中に見えるところの土には水草が泥をかむつて生へてゐる。その奧の水は暗くなつて底が見えない。水沫が迫らず流れてゐるから水は死んでないのである。

銀色の光る水を湛へて、川は遙か向うの森かげに曲つてしまふ。僕の近くの川は訣なく跨ぐことの出來るやうにおもふのは、水面と僕と距離の親しさがあるためであつた。けれども川はやはり水の豐かで底にこもつてゐる嚴さを有つてゐた。不可犯のこの嚴しさはおのづから大河の源流を暗指してゐたから、心中に或る滿足をおぼえて僕は水の面を見てゐた。小さい蛙が岸から水中に入つて泳ぐたら、少し泳いだと思ふとまた戻つて來たらう。その蛙は流にながされるやうなことはない。極く放埒に戻つて來ただらうと思つた。

響がして來て對岸の向うの森のところを汽車が通つて行つた。この汽車は流に沿うて川上の方に通じた支線鐵道のう

へを走つて行くのであつた。銀色の川が向うの森の縁をゆくとき紺のいろを現出した。僕は鐵道線路の橋を渡つて、今度は向側を歩いて行つた。まだ芽ぶかない灌木の群生してゐるところから向うを見ると、さつき森のかげに曲つて行つた川が目路から開けて來て、それがまた遙かの方に沒してゐる。そこのところに村が見える。點在してゐる紅い屋根の間に、寺院の尖塔が一つあつて、それが村の中心を保つてゐる。僕は山間にある西洋の村落を見ると、靜かさを越えていつも非常な寂しさをおぼえた。それは村落の色合と寺院から來てゐた。セガンチニの畫いた繪の背景はつまりその畫境であつた。僕は灌木のところを離れて又水際におりて行つた。水は直ぐ僕の顔のそばにある氣持である。さうしていかにも靜かで寂しいが、やはり何かが籠つてゐた。それが僕を滿足せしめる。

僕は二時間半はたつぷり歩いただらう。さう見積つて、汀を離れて、丘をのぼつて來た。そこに村から村へ通ずる道があつた。そこまで來た。眼界が開けたから、森は暗黒の色を帶びて幾重にも帶なはつて見える。その緩漫な曲線は何かの欄のやうであつた。その奥の奥に川の瀬があるのであるが、さういふ、落葉がくれの水、苔の水の趣味は不向きここに要求しなかつた。

けれども僕は、この細くなつて西北の方に消えてゐる川が、寫眞に撮れるだらうかどうかなどと思つてゐると、下手の方から自轉車でのぼつて來た二人の村人が、一寸僕に會釋したから僕も反射的に會釋すると、行過ぎた二人が、「支那人かな。」などと問答するこゑが聞こえた。僕は午食をした食店を出てから、一度も獨逸語を使はなかつた。たゞ水際を歩いて、時々日本語でひとり言を言つたのみであつた。そこから僕は、今度はその道を辿つて、Donaueschingen（ドナウエシンゲン）へどんどん引返した。時間は殆ど目分量で極めてゐて不安心だから、時には驅歩をした。

あるところに來ると家が二軒あつて、そこで鵞が黄いろい家鴨雛を育ててゐるところがあつた。僕はそこで暫く立止つてそれを見てゐた。そんなものにも氣が付くのは、神經が細つたのかも知れない。家鴨雛が無遠慮でゐるのに鵞が少し

きりに氣にしてゐるところも身に沁みた。僕はどんどん急いだ。二たび兩岸の高いところの川べりに來た。古い家に日向葵のやうな花を黄に大きく簇いたのがあつた。宿に著くと時がまだ少しあつた。僕は顔を洗ひ、勘定をすまし、それから麥酒（ビイル）を一杯飲んだ。

九

汽車は午後四時二十分に此處を發した。日は未ださう傾いてはゐない。汽車のなかで僕は幽かに婬欲のきざすのを感じた。民顯（ミュンヘン）に來てから僕は全く不犯（ふぼん）の生活をしてゐたのであつた。僕は蟲目金を出して地圖で川の源の方へ辿つて行つた。川は森と森の間の平地を縫うて、Villingen（ウイリンゲン）の町に著く、そこまではあのやうに銀いろをした靜寂な川に違ひない。そこからは森と森の間が狹くなつて、谿をなしてゐる。そこをGroppner（グロッペル）の谿と名づける。川はそこを流れてゐる。そこからもつと川上へ辿つて行くと、川は西の方へ緩く曲つて、遂に無くなつてしまふ。そこはBrigach（ブリガッハ）の森である。そこから水が出て來るのであつた。

汽車はDonau（ドーナウ）に沿うて走り、Immendingen（イムメンヂンゲン）驛までは元來た同じ道を戻るのである。Donau（ドーナウ）は午後の日を受けて飽くまで白く光つてゐる。そして平野のなかを、流れゐか流れぬか分からぬやうな面持で流れてゐる。岸に枯れた草のあるのが見える。鵜が四五羽岸の處に飛び、時には鴨が浮いてゐる。このあたりは來るとき明月の光で見た處である。或處では原始的な橋の架かつてゐるのなどが目に付いた。麓の村からその背後の森に入つて行く白い路などが見える。その丘のうへに牛が耕してゐる。耕したところだけが褐色になつて見える。暫くすると、峽間になつてDonau（ドーナウ）はその間を流れた。汽車は今度は丘のうへを走つたからDonau（ドーナウ）を見おろすやうになつた。このあたりは來る時に月明で見たのかも知れない。隧道をくぐると落葉樹林でその間に常緑樹も交つてゐる。落葉樹は未だ微かな芽を吹いてゐるに過ぎ

ない。汽車が Immendingen 驛を出ると間もなく、僕等は Donau と別れた。それから大きな隧道一つくゞると谿が開けて、緩く起伏する丘陵と、その間に埋まるやうにしてゐる村が見えた。それから汽車はまた深い山中を走り、やがて谷間を見おろすやうな位置を保ちながら走つた。そのあたりの一面の落葉樹林は廣大で規模が大きかつた。それから國土は下り坂になつて、汽車は南方の平野に向つて穩地に走つた。して見ると、Donau はやはり高原を流れてゐたのだといふことを僕はおもつた。午後五時四十分に、汽車は Engen 驛に著いた。

Göttingen Tübingen などは名ある都市だが、日本の留學生は「月沈原」などといふ字を當てて寂しい心を遣つたものである。さういふ特有の音を有つてゐる町村は Donau の源流あたりを中心にしてなかなか多い。ドナウエシンゲンを始として、ツツトリンゲンといふのがある。リプチンゲン。ハツチンゲン。ウルムリンゲン。シグマリンゲン。ウイリンゲン。ヅンニンゲン。メツチンゲン。デツチンゲンといふのがある。それから東北の方の道筋には、プリンゲン。トロホテルフインゲン。コムメルチンゲン。インネリンゲン。ミユンジンゲン。ライヒンゲンなどといふ都邑がある。かういふ都邑の名稱も旅人の僕の興味をひいた。何となく素朴で、「黑林」の情調と Donau ののろい流の趣とに、この綴音が却つて旨く當嵌まるやうな氣がしたのであつた。

これから、「黑林」地方の女達の風俗などのこともおのづから僕の心にのぼつて來た。男も女も何か事があると、さういふ風俗をして現代の街を歩いて居た。古代の粧をした、繪卷に出て來さうなものが、街頭を歩いてゐるのであつた。さういふ幾たりかの男女を、僕は或日 Freiburg で見た。けれども、それが山間の村などで見ると、非常に靜かな調和があつた。古い寺院からは、皿のやうな帽子に房の澤山ついたのを冠つた女が澤山出て來たりした。女の帽子は或時は小さい土耳其帽のやうな形に黑い布が附いのたを腰のところで結んでゐた。或時は非常に大きなリボンのついた帽子をかぶつてゐたり、紅い大きな毛糸の幾つもある帽子をかぶつてゐたり、大原女が頭に載せるぐらゐの大きさのかざりあ

ろ帽子をかぶつて居たりした。胸當には種々の縫取がしてあり、胸當は紅いのもあり紺のものあり白青のもあり色々であつた。處女は頬が赤く、みな健康な性傾をおもはじめた。何様でもすると、頬に微笑を湛へて、唇の角（かど）のところに一寸竪の皺を寄せてもの言ふのは、モナ・リザを聯想せしめた。このへんから出た兵士の勇猛であるのを僕は以前から好いてゐる。僕は氣は弱いが、いつも六韜の氣魄を崇拜してゐたからである。

十

僕等は Donau（ドーナウ）から別れてだいぶ來た。今著いた Engen（エンゲン）の停車場で窓から僕は外を覗いてゐた。そこから見える寺は尖塔は暗綠に塗られてあつた。そして、小さい窓のところが褐色で、そのほかの寺の部分は灰色である。それを僕は一寸手帳に書きつけた。そのうち汽車が動き出した。そのあたりには實に古い小さい家が竝んでゐる。玩具のやうな窓から童女が顔を出してゐたり、青味がかつた野の斜面に童が五六人固まつて寝てゐたり、するのが見える。向うの道を女が自轉車で通つた。家の前で焚火をしてあつてけぶりゐる。つまりフイルムを見てゐるやうで慌しいが、異境を歩いてゐるやうな感がやはりしてゐる。汽車は平原を走るが、向うには尖つた山が見えてゐる。それがアルプスのやうな峻峰ではない。そして黒ずんだその山がなかなか近寄らないのを、何心なく見てゐたりする。先程から汽車が川に沿うて走つてゐる。岸の柳は芽を吹いてもう萌黄になつて居る。『あの川は何といひませうか』『あれですか、Aach（アーハ）川です』

『どう綴りますか』

『AACHと綴りますよ。この先の方にある町の名を取つたのです』。極く小さい川だが、その者は川の名を知つてゐた。それから、僕が東洋人だなどといふことを除り氣にかけぬらしい。

六時五分に Singen（シンゲン）の停車場に著いた。そこには峻しい山があつて古城の殘りなどが見えてゐた。寺院が三つも四つ

も見えるところで、町のなかを川の流れてゐる、可なりの町である。Reformpädagogium とか、Hauptzollamt などの看板も見える。瑞西へ入る乗客は、ここで乗換へて行くのであつた。さう思へば國境らしいところもあり、暫くすると人がどやどや乗込んで來た。その時可哀らしい娘がひとり乗つて僕の前に腰かけた。やはり三等乗客である。娘は直ぐ手提かばんを明けて、チョコレートを出して食べた。それから手巾（ハンケチ）で鼻をかんだ。それから手提かばんの中を何か音させてゐたが、しまひにそれを閉ぢた。それから綴入雑誌を出して暫く見てゐたが、二たび手提かばんを明けチョコレートを出して食べた。そのうち空が一面に曇つて來て、汽車は、Böhringen-Rickelshausen（ベーリンゲン・リッケルスハウゼン）に着いた。

右手には既に湖が見え出して、そのあたりに並木が規則正しく立つて居るのはポプラアらしい。湖が段々大きくなり、島なども見える。ここは入海の様なところであつた。これが Untersee（ウンテルゼー）である。對岸の村もそこの寺院も霞んでゐる。汽車が岸に沿うて走ると、汀の白き小石さざれが見える。それから養魚池。豚と其の兒ども、枯葉をもやしてゐるところ、犬が棧橋を下つてゆくところ、これ等がやはり映畫のやうである。暮色が蒼然として來つた。

それから急に眼界が廣くなつた。これは、Bodensee（ボーデンゼー）の大湖が見え出したのである。隣の乗客は口笛を吹き出した。これは何か俗謡のやうなものを歌ふらしい。夜霧が低く湖水をこめて、小田の上の方だけが浮出てゐるやうに見える。途中でそこに聯隊でもあるらしく番兵のゐる門などもあつた。それから、煙突の太いのが見え出す。寺が見える。或る橋を渡ると兩側の町が急に綺麗になり、人の往來が活潑になつた。汽車は Konstanz（コンスタンツ）に着いたのである。停車場の時計は七時半を指してゐる。

僕はここの湖畔の旅舍に一夜ねむり、あくる日は此の大湖を縦斷して、アルプス山系の延びて來てゐる南獨逸の山中に行かうとするのである。そこで、つひには Donau（ドーナウ）へ灌ぐ筈の『一辷りながら急いで谷へながれ入る無數の小川』を見ようとするのである。

（完）

うつぼ舟の話

柳田國男

一

今から精確に百六十五年前の八月の或日、辨慶法師の勸進帳を以て世に知られたる加賀國の安宅の浦に、一つのうつぼ舟が漂着したと云ふ舊記がある。「うつぼ舟」とは言ひふらしたけれども、其實は四方各九尺ばかりの厚板の箱で、隅々を白土のしつくひを以て固めてあつた。開けて見ると中には三人の男が入つて死んで居る。沖で大船が難破するとき、船主その他の大切な人、又は水心を知らぬ者を斯うして箱に入れ、運を天に任せて押流す例があるといふ。果して其樣な事があるものかどうかは心元無いが、たとへ死んでも姿だけは、何處かの海邊に打寄せられることを、海で働く人たちが、願つて居たことだけは事實である。

如何なる素性の人間であつたか、久しく郡代の手で尋ねて見たが、終に何等の手懸りも無かつた。そこで亡骸は先づ砂濱の片端に埋め、木の箱は之を毀して、供養の爲として其あたりの橋の板に用ゐしめた。其時諸宗の寺々より三人の塚に會葬して、有難い追福の法事が行はれたのであつたが、尚海上の絕命に迷ひの念慮が深かつたか、但しは南蠻耶蘇の徒であつて、佛法が相應しなかつたものか、夜分は時として此墓から、陰火の燃えることがあつたと謂ふ。

遺念火の怖ろしい話は、最も此類の墓所に多かつた。必ずしも目の迷ひで無くとも、他の場合には心付かずに過ぎて

しまふ出來事を、何かと言ふと思ひ出す者が、其方角ばかり眺める故に、特に見出して騒ぐことになつたのであらう。河内の姥が火とか尾張の勘五郎火とか、石を以て算へる全國の同じ例が、場所や時刻を一定して、其上理由までも略相似て居たことを考へると、たとへば天然普通の現象であつたにせよ、やはり非業の死を傷む人の心の動きから、作り設けた不可思議といふことになるのである。

又箱の板を橋に架けたといふことも、同じく古風な日本人の、優美なる心遣ひであつた。奈良では藥師寺の佛足石の碑の石なども、久しい間佐保川の橋板に用ゐられてあつた。冬の徒渉りの辛さを味つた者ならば、萬人の脚を濡らすまいとする企ての、尊い善根の業であることを理解する。人を向ふの岸へ渡すといふ思想には、更に佛教の深い趣意があつて、地藏様などは牛馬にまでも結縁させんが爲に、橋になつて踏まれてやらうといふ御誓願さへもあつた。けだし北國の渺遠の昔のたつた一つの出來事でも、斯うして記錄になつて傳はつて居ると、次から次に思ひ掛けぬ色々の問題を、考へさせずには置かぬのである。

但し自分が今少しばかり、話の種にして見ようと思ふのは、さ程込入つた民族心理の法則などでは無い。この大海を取繞らした日本國の岸には、久しい年代に亙つて流れ寄る物が無數であつた。曾ては半島の出水に誘はれて、所謂天下大將軍の怖ろしい面貌を刻んだ木の杭が、朝鮮から漂着したことも一再で無かつた。羽後の海濱では蚶滿寺下橋と題した橋柱を、漁民が拾ひ上げたといふ奇聞もある。沖より外の未知の世界は、殆ど有る限りの空想の千變萬化を許したにも拘らず、如何なる根強い經驗の力であつたか、海を越えて浮び來る異常の物は、例へば死人を納めた木の箱の如きもの迄、我々の祖先は一括して、常に之を「うつぼ舟」と呼ばうとしたのである。それが若し偶然の一致で無ければ、即ち何等かの原因の隱れたる、不思議な國民の一つの癖である。つまらぬ問題のやうではあるが、若し之に基いて新たな

て見出さるべき智識があるとすれば、是もやはり學問のうちではあるまいか。

二

うつぼ舟は空洞の木を以て造つた舟、即ち南方の小さい島々に於て、今尙用られて居る所の、刳舟丸木舟のことで無ければならぬが、多くの日本人は、もう久しい間、其の元の形を忘れてしまつて居る。我々の親たちの空想のうつぼ舟には、潜水艇などのやうに蓋が有つた。斯うしなければとても荒海を乘切つて、遙々遣つて來ることは出來ぬものと、思ふ者が次第に多くなつた爲であらう。加賀での出來事から更に四十二年を經て、享和三年二月廿二日の晝頃、常陸の原やどりとか謂ふ濱に、引上げられたと傳ふるうつぼ舟などは、其形たとへば香盒の如くに圓く、長さは三間あまり、底には鐵の板金を段々に筋の如く張り、隙間は松脂を以て塗り詰め、上は硝子障子にして内部が透き徹つて隱れ無く、覗いて見ると一人の生きた婦人が居り、人の顔を見てにこ〳〵として居たとある。

此話は兎園小說を始めとして、當時の江戸人の隨筆には幾らも出て居る。何れも出處は一つであるらしく、疑ひも無く作り事であつた。その女は年若く顔は桃色にして、髮の毛は赤いのに、入れ髮ばかりが白く且つ長かつた。敷物二枚の他に瓶に水二升ほどを入れ、菓子樣の物及び肉を煉つたやうな食物もあつたとある。又二尺四方の一箇の箱を、寸刻も放さず抱へ持ち、人に手を觸れしめなかつた。浦人の評定では、多分蠻國の王の娘などで、密夫あつて其事露顯に及び、男は刑せられたが王女なれば殺すに忍びずして、此の如くうつろ舟の中に入れ、生死を天に任せて突き流したものであらう。然らばその大切にする木の箱は、定めて愛人の首でゞもあらうかなどと、言語は不通であつたと謂ふにも拘らず、驚くべき確信を以て說明する者があつたと記して居る。

常陸海邊に住む人民にしては、出來過ぎた斷定には相違ないが、以前も此近くの沿岸に、同じやうな蠻女を載せて漂著したうつろ舟があつて、それには俎板の如きものに一箇の生首をすゑて、舟の中に入れてあつたと云ふ口碑があつたさうである。常陸の濱には今も大昔も、此種の不思議を談ずる氣風が特に旺盛であつたらしい。從つて海に對する鼓以上の信用が、嘘の根をなして居たことは認めてもよいが、少なくとも記述の文飾、殊に所謂蠻女とうつぼ舟との見取圖なるものに至つては、いゝ加減人を馬鹿にしたものである。官府の長沙汰にすると雜用手數が容易で無い故に、先例に由つて再び元の如く女を舟に入れ、沖に引出して押流したと謂つて、是以外には一つの證跡も殘らぬのだが、舟の中に書いてあつたと稱して、寫し取つて居る四箇の異形文字が、今では最も明白に此話の駄法螺なることを證明する。それを曲亭馬琴が註解して、最近浦賀の沖に繫つたイギリス船にも、此等の蠻字があつた。だからこの女性はイギリスか若くはベンガラ、若くはアメリカなどの蠻王の女なりけんか。是も亦知るべからず、尋ねまほしきこと也かしと、例の恐ろしく澄ましたことを言つて居る。さうして今日までまだ其儘になつて居たのである。

勿論自分たちには近世の僅かな智識を根據にして、古人の輕信を笑つて見ようと云ふ考は無い。第一そんな舟、そんな亞米利加の王女などが、流れて來る筈が無いと謂つて見たところが、然らば何故に是だけの事實、若くは少なくとも風說が出現したかと問へば、今だつて答へ得る者は無いのである。單なる耳目の誤り、又は誇張であつたとすれば、何か基く所がなければならぬ。假に丸うそであつたにしても、斯う謂つたら人が騙されると云ふだけの、見込が最初から有つたものと思ふ。現代の文學才子が必ず實驗したであらう如く、作り話が譬へば鍍金のやうなものならば、其土臺もやはり稍安つぽい金屬であつて、決して豆腐や蒟蒻では有り得ない。どんな空中樓閣にも足場があつた。或は無意識にかも知れぬが、いつの間にかうつぼ舟とは斯んな物と、人も我も大凡きめて居た形式があつた爲に、其寸尺に一致した

出現目だけが、たまたま右の如く成功し得たのである。人間は到底絶對の平安を享け得る者で無いと云ふことが、若しこの「うつぼ舟」から證明することになるやうなら、是も亦愉快なる一箇の發見である。

三

大昔も之とよく似たうつぼ舟　やはり常陸國の豐良の濱と云ふ處に漂着して、漁夫に拾ひ助けられたと云ふ話がある。廣益俗說辨の一節として偶然に傳へられて居る。欽明天皇の御宇、天竺舊仲國霖夷大王の姫金色女、繼母の憎しみを受けて此舟に載せ流された。後久しからずして病みて身まかり、其靈は化して蠶となる。是れ日本の蠶飼ひの始なりと、語る者があつたさうである。此俗說も同じく中世の造り言ではあらうが、起原は必ずしも甚だ簡單で無い。奥羽の各郡に住する盲目の巫女たちが、今に至るまで神秘の曲として傳承する所の物語は、何れも駿馬と婚姻した貴女の靈天に上り、後再び桑樹の梢に降り化して此蟲と成ると稱し、豐後で有名な滿能長者を以て其父の名とする者もあるが、話の内容は支那最古の傳說集、干寶が搜神記の記事と著しく類して居る。蠶の由來を說く必要のあつた者は、多分は蠶の神の信仰に參與した人々であらう。或時機緣が有つて外來の舊傳を取入れ、自他の昔を識らんとする願を充したことは想像してよいが、それとうつぼ舟の漂著とを、一見縫目も知れぬやうに縫合せたのは、別に海國に住む民の數千年に亘つて、馴らされたる一つの考へ方が、働いて居たものと見なければならぬ。

しかも此以外には東部日本に於ては、空穗舟の話は未だ聞く所が無いのである。其信仰も亦舟の中の少女の如く、波に浮んで西南の方から、次第に流れて來たらしい痕がある。本來は人間ばかりの計畫に基いて、開かれたる通路で無かつた故に、乃ち奇瑞として神の最初を說き、また家々の昔を語る者が、之を遠くの故郷から導いて來ることを忘れなか

つたのである。歸化人の後裔としては、九州では原田の一族が、近い頃まで此口碑をもつて居た。是も有に謂ふ俗說辨の中に、筑前怡土郡の高祖明神は漢の高祖を祭つて居る。傳ふらく高祖の皇子一人、虛舟につくり込めて蒼海に押流され、終に此浦邊に到着す。皇子の姿かたち等倫に超えければ、處の者共奏聞を遂げ、勅許を蒙りて此地の主とす。苗裔は即ち原田氏にして、タカズを高祖と書くは其謂れ也と稱したとある。但し此傳は歷史と合致せず、又同じ門流でも更に宗教的色彩の豐かな大藏氏などは、之と異なる由緒を主張して居るから、言はば後々世間の風にかぶれて、斯うも考へられたと云ふに過ぎぬかと思ふ。

瀨戶內海沿岸の古い移住者の中には、之とよく似た家の傳說が、尙幾らもあつたやうだが、そればかりで歷史を推定するが如きは、最も不安全なる學風である。例へば周防の大內氏が歸化人の後たと云ふことは、最初百濟の琳聖太子、當國多々良濱に上陸したまふとの物語から出たのだが、元來の趣意は至つて遠い時代に、此地に降臨なされたと云ふ北辰妙見の宮と、家の起原を一にすることを主張し、其到着が神意に基くことを說くに在つたので、太子は恐くは神の御子を意味し、必ずしも本國の百濟たるを要しなかつたかと思はれる。しかも百濟が佛法の輸入國であつた爲か、或は後に述べんとする第二の理由からでもあつたか、備前の宇喜多氏の如きも、その系圖の最も信用すべからざるものに於ては、やはり百濟の王子を以て第一世の祖として居る。大治二年と謂へば此王國が滅びてから、四百數十年の後の話である。百濟の國から王子を孕める婦宮を、うつぼ舟に乘せて海に放ち、其舟今の兒島に漂ひ寄る。三條中將といふ人此女性を妻に賜はり、腹ごもりの子生長して後に三條宇喜多少將と稱すなどと謂つて居る。或は千人のちごの千人目に當つた故に、京の三十三間堂の棟木を曳かしめたとも謂ひ、(大治二年といふのは其爲であらう)、又は名作の鬼の面を取持した爲に生きながら鬼になつて人を喰ひ、山つて再び兒島に流されたところ、某といふ山臥之に行逢ひ、鬼面を取上げ

て切碎き終に其怪を退治した。兒島の瑜伽寺の東塚はその首を埋めた塚だなどとも傳へられ、今では彼の地方の信仰や口碑と混同して、手輕に本の姿を見定めることが六かしくなつて居る。

併し此等の雜說を丁寧に仕分けて見れば、一つとして備前より外では聞かぬと云ふものが無い。中にもうつぼ舟は系統が明瞭であつて、つまりは遙かなる海の彼方から、因緣あつて來り寄るものは、昔も今も此舟を必要としたことを知るのである。現に對岸の伊豫に在つては、河野家の始祖と稱する小千御子（ヲチミコ）も亦それであつた。大昔興居島（ゴゴノシマ）の漁夫和氣五郎大夫なる者、海上に出でて一艘のうつぼ舟を見た。家に曳き還つて之を開き見るに、內に十二三歲の少女あり、我は唐土の者、仔細ありて此の如し云々。名けて和氣姬と謂ひ養育し奉る。後に伊豫王子の妃と爲つて小千御子を生むと傳へ、船越といふ處には姬の御墓なるものが今も存する。常陸の舍濟の所謂アメリカの王女が、決して突發した空想でなかつたことは、もう是だけでも證明し得られたのである。

四

だから我々は徒らに諸國の類例を列擧して、今更偶合の不思議に驚くよりも、何物の力が斯くまでに根强く且つ年久しく、この民族の想像を導き又約束したかを、尋ねて見なければならぬのである。伊豫の和氣姬は仔細あつてと謂つたが、その仔細なるものは大なる神秘であつた。叨りに語られざる神話であつた故に、忘れられんとして僅かに傳はつて居る。奈良の手向山の勸請以前から、公邊の文書には八幡の祭神は應神天皇であつたが、宇佐には別に一箇の異傳があつて、伊多利亞で成長した耶蘇教と同じく、殊に御母神を重しとし、後に大帶姬を神功皇后と說くに至つても、尙比咩神又は玉依姬の御名を以て、之を中殿に祭つて居た。養老年中に大隅の隼人が亂を起した時、宇佐の神部は頗る不定

の功に參與したと稱し、爾後絶えざる交通があつたにも拘らず、大隅正八幡宮の本緣として、古く記錄せられた物語は、亦全然北方の所傳と一致せず、母の神の御名を大比留女と申し、若宮は即ち大隅の御子であつて、同じく空船の中の人であつた。八幡愚童訓、惟賢比丘筆記等に、詳しく此由緒を載せたのみならず、男山の社に於ても既に大比留女の名を錄して居た。恐らくは朝家の認定と兩立せざるを憚つて、次第に之を南端の一社に押付けたものであらう。

今簡單に其昔傳を述べるならば、震旦國陳大王の娘大比留女、七歳にして懷姙す。父王之を訝かり、汝まだ幼少なるに、誰人の子を儲けたるぞと問ひ玉へば、我夢の裡に朝日の光胸を掩ひて娠む所なりと答へたまふ。彌々驚き怖れて誕生の皇子もろ共に、うつぼ舟を刻みて之に入れ、印鑰を相具して大海に放ち流したまふ。流れ着かん所を所領とせよとの御詞であつた。然るに其舟日本國鎭西大隅の磯岸に寄り來る。太子を八幡と號し奉るに由つて、其岸を八幡崎と稱へた。時は繼體天皇の御宇であつた。後に大比留女は筑前若椙山に飛入つて、香椎の聖母大菩薩と顯れたまひ、王子は大隅國に留まつて正八幡と祝はれ、幼稚の御年にして隼人を討ち平げたまふと謂つて居る。

日の光が少女の胸を掩ふといふことは、はつきりとせぬ言ひ方である。八幡大菩薩御因位緣起には、朝日の光身にさして、寢たる胸間に在りとあるが、それでもまだ納得が出來なかつたものか、後世の俗說では大比留女、日を呑むと夢みてと言ひ替へて居る。太閤秀吉を恐らくは最後として、以前の高僧たちの生ひ立ちの記などに、日輪懷に入ると謂ひ、若くは日を呑むといふ類の母の夢が、幾つとも無く傳へられるが、皆あまりに奇拔なる空想であつた。人もよく知るが如く、此系統の物語で最も早く記錄の上に現はれたのは、百濟と高句麗と二つの王國の、始祖王の誕生に關する奇瑞であつたが、固く信じた人々の作に成つただけに、其記述は之に比べて遙かに精彩があつた。即ち一人の年若き女、一兒を生まばその兒は後に王となるべしとの豫言があつたので、之を一室に幽閉して外界との交通を杜絶して置くと、大

陽の光が戸の隙間より差し入り、直ちに少女の身を射る。之を避くれば何處までも追ひかけ、終に感應して身ごもらしめたと謂ふのである。ペリーの文化移動論には、東印度の諸島にも往々にして此傳承の例有ることを說いて、日の光の物を實らしむる力あることを經驗した者の間に、おのづから成長した說明神話なるが如く解釋して居るが、單にそれのみでは、斯ういふ個人指定の思想などは起り得ない。年久しく密林の底に遊び、又は巖窟の奥に隱れ住んで、大陽の光線の譬へば黃金の箭の如くなるものが、屢々心有つて人に近づかうとするやうな有様を見た者にして、始めて夢まぼろしの間に、之を雄々しい男神として、迎へ親しむことを得たのであつて、日を崇敬した原始人の信仰は、却つて此の如き異常受胎の奇瑞に刺戟せられて、更に强烈を加へた場合が無いとは言はれぬ。從つて記錄の今日に傳ふる者は、假に扶餘の二種族の建國譚を最も古しとするも、之を傳說の根源と解すべからざるは勿論である。日本に於ては山城賀茂の玉依姫、山川に美しい白羽の矢を拾ひ還つて、感じて別雷神を產み給ふと謂ひ、或は大和の三輪の大物主の神は、姿を丹塗りの矢に變じて、流れ來つて少女の身を突き給ふと謂ふの類、單に大陽を男神とする俗信の夙く衰へたばかりに、說明の付けにくゝなつた說話が數多いのみならず、別に又新羅の古き物語として、日の光の虹の如くなるに照らされて、赤い玉を生んだと云ふ賤の女の話を載せ、其玉美麗なる嬢子と化して日矛王子の妃と爲り、後に遁れて日本に渡り、難波の比賣碁曾の社の神に祭らるゝと謂ふからは、我々の祖先も二千年の昔から、必ずしも支那の歷史家の仲介を須たずして、既に日を父とし人間を母とする、貴き神あることを知つて居たのである。平安京の初期に際して、大に用ゐられた武人の家阪上氏は、百濟の遺民であつた。家の由緒を朝廷に奏聞して、詳かに大陽が少女を占有した傳說を述べてゐる。それが後漢書の記事とも合致すれば、亦大隅正八幡の緣起ともよく似て居て、同じ頃に西海に興隆した宇佐の信仰が、之を學び且つ利用したと解することも困難ではない。併し自分達は其樣に窮屈に、一つの物語が次を逐うて諸國を

周流したと迄は思つて居らぬ。遠く太古に溯つてまだ多くの民族が今の如く分散しなかつた時代に、誤つた判斷ながら素朴なる人の心に、深い印象を與へた實驗が殘つて居て、緣に觸れて再び各處に出現したものが、斯うして大切に保存せられ、圖らずも互に比較せらるゝことになつたのかも知れぬからである。但し此點を論究しようとすれば、話が込入つて果しが付かぬ。しかも差當り自分の考へたいのは、何故に海の彼方の大比留女を、うつぼ舟に載せて此島國へは運んだか。或は此賣古爾の社の阿加流姫神が、もと新羅の太陽の御子であつたことを、何人の教へに由つて知り得たかといふ點であるが、是とても決して容易なる問題では無かつた。

五

出雲の佐陀の大神も母あつて未だ父の神を知らず、加賀の岩屋に入つて之を尋ねると、黃金の箭が水に浮んで流れて來たと傳へられる。神が丹塗の矢に化して訪れたまふといふ物語と共に、如何にも美しく朗かなる我國風の空想であつて、之を單純に戸の隙間の日の光が、少女の胸を追ひまはして射たと謂ふ話し方と比べると、元は一つであつたと認めるのさへ感心せぬが、何れの民族でもそれ〳〵の文化の境遇に應じて、常に聽く者の理解を主とするの他は無かつたから、彼等は此よりも更に露骨な、其代りに實感動の深い物語であつた。智力と趣味とは新なる文藝を必要とし、神話の如き保守的の文藝にも、やはり目に見えぬ成長があり、既に形式の固定して時代に適せぬものは、追々に圏外に押出された。今に於て俗間の卑猥なる笑話などの侮輕すべからざる所以である。うつぼ舟に關して一二の著しい例を說くならば、臺灣東岸のパイワン族の中に、美女を朱塗りの箱の中に入れて、海に流したといふ傳承が多く、知本社と呼ばれる部落が之を拾ひ上げたと謂つて居る。此女は身の内に怖ろしい牙があつて、之に近づく程の男は悉く傷き死んだ爲

に、用無き者として棄てられたのであつたが、知本社蕃の若い頭目は、方法を施して其牙を除き、乃ち之を娶つて子孫が榮えたと傳へるのである。此話は所謂金勢大明神の本緣として、今でも奥羽の村の人が笑ひながら、人に語る所の昔話の一つであるが、既に懸け離れた南島の荒磯に、同じ例を遺して居るからには、近代の才子が發明した悪謔では無かつたのである。但し依然たる不可解は其の共通の起原であるが、幸ひに臺東方面の土人の間に於ては、アミの馬蘭社でもパイワン族の卑南蕃でも、等しく海に放した牙の娘が、知本社の海岸に漂着したことを語り、後者自らも之を認めて居るのを見ると、既に交通ある二以上の部落の間に、一方で不用として顧みなかつたものを、他の一方が歡迎し且つ大切に守り立てたと云ふ話、即ち日本の諸州の田舍に於て、神と住民との因緣約束を信じ、流れて來た飛んで來た、或は盜んで來たとさへ傳へて居る口碑が、元來は亦うつぼ舟の信仰から、分れて出たものであるやうに感ぜしめるのである。

又パイワン種の諸蕃社には、殊に人が樹木の中から出たといふ傳説が多い。或は竹の中から卵が轉げ出して、最初の男女と爲つたとも謂へば、又瓮の中若くは瓠の中からも、人の出現したと謂ふことを信じて居る部落があるのである。異人卵生の古傳は印度にも例乏しからず、佛典を通して日本にも知られて居た。即ち寧ろ說話の類似のみを根據として、比鄰民族の血緣を論斷すべからざる反證の一つであるが、斯ういふ意外な未開人の間にまで、同じ思想が稍別種の樣式を以て、年久しく持ち傳へられて居た事實は、其起因を異なる偶合に歸するには、餘りに重要であると思ふ。新羅の國王が金色の卵から出たといふ神話が、朴姓一族の祖先譚として、瓠に乘つて日本から渡つて來たと云ふ瓠公の奇跡を說くものと、本源一つなるべきことは、既に之を說いた人がある。瓢簞に乘つて來るといふ列仙傳の如き繪樣を想像し得た以前から、瓢のやうな內部が空虛で外見の具備した物は、三韓の人民に取つてもやはり奇異であつた故に、夙く此類の口碑を發生せしめたのであらう。殊に渚に近く村を構へ、日月の出入を眺めて海と天とを混同して居た人々に

は是ほど大きな問題は少なかつた筈である。實際人間の智巧を以て箱や樽などを作り出すのにも、天然の手本とすべきものは澤山は無かつた。故に始めて空洞の木や瓠の類が、水に浮んで流れて來た場合の、好奇心は强烈なものであつて、幾多の誤つた宗教觀、若くは後世の詩人の及び難しとする空想境を、誘ひ出すに十分であつたので、其印象が次々やゝ姿容を變じつゝ、永く世に留まつたのに不思議は無いと思ふ。

是が我々の昔話の多くに、作家といふものゝ無かつたことを、推定せしめる有力な理由である。再びパイワン蕃の神話に戻るが、その或社に於ては先祖が生れて出たと云ふ壺を傳へて居る。是にも大陽の光線が壁を通して、又は細くなつて其壺を射たと謂ふものが多く、即ち太陽の子であらうと思つて、之を養育したと説くのである。日本では竹取の物語の如きは、今ある語り方の外に、まだ色々の異傳があつた。鶯の卵から成長したと云ふのも一つである。かくや姫が身より光を放つたといふ代りに、數多の竹の林の中に只一處、特に光がさして居たのを竹取翁が見付けたと謂ふなどは、姫が後に天上に還つたとある一段と相照して、亦一種の日の子神話の流れと見るには足らぬであらうか。又桃太郎の前の型と認められる瓜子姫子の如きも、童話に於てはむざ〳〵と山姥に食はれてしまふが、それでは折角山川をどんぶらこつこと流れて來た甲斐も無い。或は狼の腹を割いて救ひ出された雀の子の話のやうに、後に復活したといふ傳への方が古いにしても、やはり誕生の奇瑞譚としては片輪であるから、斯うして第二の冒險談即ち山姥や天のじやくとの鬪諍と結合する前に、別に亦一系統の瓠公神話が、此方面にも附て繁茂して居たことを、假定して見るの他は無いので、しかも瓠といふ瓜の我々東方民族の生活に與へた影響は、最も複雜にして且つ興味深きものなのである。

今の流行の日本人類學に、自分達から謂へば殆ど土器學である。土器の以前に又は土器と併行して、そこに更に瓢簞學があるべきであるが、その瓢簞は腐つてしまつたから、ショベルで學問をしようと思つても採用すとが出來ない。しかも瓢簞の人間生活との交渉は、若干の忍耐を條件として、之を辿つて行くことが不可能では無い。全體日本の如く天然の惠みが厚く、植物の人に對する役目が、物質界でも精神界でも、是ほど綿密に行屆いて居た國で、稻も櫻も連綿として、今尙以前の種を栽ゑついで居りながら、土中に滯つて腐らぬ遺物ばかりを當てにして、上代の社會を說かうとするのは、極めて無法なる算段であつた。所謂考古學の硏究が進んで來れば來る程、之と對立して無形遺物の採集を急ぎ、兩々相助けて出鱈目論斷の跋扈を抑へねばならぬ。不幸にしてそんな便宜の得られなかつた國の學問が、今迄は主として祖述せられたが、我々は千古の大倭人の相續者である故に、この國民文藝と稱する廣大なる包含層の中には、獨り瓢に關する歌や口碑や習俗のみで無く、まだ色々の珍らしい紋樣や彩色が、大小無數の破片となつて殘つて居るのを、存外容易に發見することが出來る。是が實は自分の過去を自分で硏究し得る民族の幸福であつて、そんな文明國は現在はまだ幾つも無いのであつた。

瓢の用途は至つて弘く且つ久しかつた。土の釜の中に神いますと信じて、祭つて居た神社は僅かしか無いのであつた。食事其他の普通の用には、もはや陶土器の便利を知つて之に移つて後も、信仰は形式が大切だから古風を改め難かつたのである。其前には木の箱や曲げ物が神體の入れものには用ゐられた(勿論開けても中には凡眼に見える何物も入つて居らぬのが普通である)。併し是とても木の工藝の始よりは古くない。目に見えぬ神が物の中に宿りたまふといふ思想が、中世から新に起る理は無いから、箱曲げ物を人が作り得た前には、木地鉢などの如く刳り凹めた物を用ゐたであらう。故に今も家々で臼を重要視し、又屢々臼の上で氏神樣を祭り始めたといふ口碑が保存せられてある。其の今一つ

前は何かと問へば、天然の空洞木と、ひさごとより他は有り得なかつたのである。さうしてこの二物は古風のまゝに、今以て各地に神靈の宿する所として、崇敬せられて居る例が多いのである。

我々の神は日本種族の特性を反映して、頗る移動を愛し又分靈を希望せられた。然るに空洞ある天然の樹木は固より之を動かすことを得ぬ故に、一方には其の神聖なる一枝を折つて、行く先々の地に挿すと云ふ風が行はれたらしいが、それだけでは頼り無い場合が多くて、別に色々のウツボといふものが用ゐられた。八幡太郎の發明などゝ稱する箙の容器の靱の如きも、最初は旅行用の神體であつたかと思ふが、それよりも普通であつたのは、やはり天然の瓠であつたらうと思ふ。その外貌までが幾分か人に似て、堅固で身輕で沈まず損はれぬ故に、何れの民族でも所謂たましひの入れ物として、承認せらることが出來たのである。

但し空穂舟の多くの口碑に於ては、乘客は神に最も近いといふのみで半は人間であつたから、瓠の中に入つて運び來るわけには行かなかつた。昔は神代史の少彦名神を始として、下蟲のやうな御形で莢の間に居られたと云ふ倭姫命、或は赫夜姫瓜子姫子、さては御伽噺になつてしまつた一寸法師等、日本の小さ子思想は徹底したものであつたが、神々の人間味、即ち御仕へ申す家々との、血筋の關係を說く風が盛になつてからは、もつと舟らしいものを必要とするに至り、しかも空洞木の利用に始まつたかと思ふ獨木舟が、追々に稀に見るものとなつてしまふと、各人遺傳の想像力を應用して、終に享和年間に常陸へ漂着したやうな、硝窗入りの硝子張りの、何か器物見たやうな舟が出來上り、おまけに世界どこにも無い文字などを書いて、終に馬琴を驚かすのであるが、しかも尙奇妙千萬にも其船の中には、依然として遠い國の王子らしい若い女性が乘込ませてあつたのである。

七

もう澤山と言はれるといやだから、最後に此話の成長した例を二つばかり附け加へて、饒舌の區切りとしようと思ふ。舞の本では大職冠の一曲に、鎌足勅命を奉じて海底の明珠を求めんとする時、龍王之をすかし返さんが爲に、乙姫のこいさい女といふ美人を、うつぼ舟に作りこめて、浪の上に推し揚げるといふ趣向がある

流れ木一本浮んであり
かこかん取之を見て……
沈香にては無し
惜しや割つて見よとて
此木を割つて見るに
何と言葉に述べ難き
美人一人おはします

とあつて、見た所は流材の如く、割つて見なければ中に美人の居ることが知れなかつた。即ちこの位で無いと海底の龍宮から往來することは六かしいと考へたのである。

之とは反對に肥後の八代地方で、牡丹長者の物語として今も歌はれて居るものは、潜航艇も及ばざる念入りの細工であつた。牡丹長者には三人の子息あり、それ〳〵立派な里から嫁を取つたが、末弟の嫁御は則ち貴人の出であつた。主要なる文句を抜書きして見ると、

弟嫁殿の旋切を開けば
元は源氏の公卿衆の娘
少しばかりの身の誤りで
うつろ舟から島流された
紫檀黒檀唐木を寄せて
京の町中の大工を寄せて
さても出來たやうつろの舟が
びどろさまにはちやんなど掛けて
夜と晝との界がわかる
金と銀との千よ一つ（？）かいて
中に立派な姫君入れて
なんじ（？）灘より押流されて
こゝの沖には五日はゆられ
そこの沖には七日は揺られ
流れついたが淡路の島よ
島の太夫の御目にかゝる
うつろ舟とは話にやきけど
ほんに見たこと今度が始めよ

拾ひ上げてくゞして見れば
中に立派な姫君さまに
頭に天冠ゆら／＼下げて
其日其日の食事をきけば
蘇鐵團子やとくど（？）の菓子よ
菓子の中でも上菓子ばかり
一つ上がれば七日の食事
二つ上がれば十四日の食事
それは立派な食事でござる
國はいづこか名はなにがしか
國は申さば耻かしけれど
元は源氏の公卿の娘
少しばかりの身の誤りで
うつろ舟から島流された
あらば太夫もこれ聽くよりも
國に還るか緣付きするか
うつろ舟から流されたから
二度た我家に還りはならの

御世話ながらも緣付き頼む
あらば太夫も御喜びで
牡丹長者の弟嫁に

是も常陸の濱の人と共に、食事の點ばかりを氣にして居るが、蘇鐵椰子は如何にも殺風景で、天童をゆらめかす女性とも思はれぬ。ピードロやチヤンを說くから時代も凡そ窺はれるが、近代無心の語り部の力でも、此程度の潤色は困難でなかつたと見える。思想統一の感謝すべき影響に由つて、九州の南の端でも夢の樂土は平安の京であつた。遠く唐天竺を求める必要も無かつたのである。

たゞ悠久の年代の間に、肝要な一點だけが村の人々には理解し得られぬやうになつた。鹿兒島縣の西北隅、大隅半島の某部落では、岡の中腹に居世(コセ)神社がある。舊記に依れば大昔の十二月二十九日の夜、此地に住む一農夫潮水を汲まんとして海の渚に到るに、空艇一艘漂流して船中に嬰兒の啼聲がする。火を照らして之を見れば七歳ばかりの童子であつたとあるから、嬰兒の啼聲は如何かと思ふ。是れ欽明天皇第一の皇子であるが、或時堂中に庭に下り、跣足にて土を踏みたまふにより、御擧動輕々しく最早大御位を嗣ぎたまふべからずとあつて、空艇に乘せて海に流しまつると謂ふ。空艇は恐らくは亦空穗舟のことであらう。此皇子は農夫之を奉仕して養育したが、十三歳にして御隱れなされたので社の神に祀ると傳へ、別に御潜居の地が社の東三町の處にあつた。皇子流寓の古傳は何れの地方でも、大抵は神社の由來である。隣國で天智天皇或年巡遊なされ、玉依姫といふ美人を御妃に召されて、男女數所の若宮を御留めなされたことになつて居る。如何にも正史と一致せぬ故に、多分は彦火々出見尊の御事を誤り傳へたものと、土地の學者たちは解して居たらしいが、是とてもやはり古い歴史を現代化したいといふ人情からであつた。[illegible]の「少しばかりの身の誤り」は、殊に事實として考へることが六かしい。たゞ不穿土を踏みたまはずと信ずる者が山谷にはあつたこと

と、社の神は斯うして送くから、祭られに來たまふものと思ふ風が、或時代には盛であつたことゝは、此記一つでも推測し得られ、十二月の廿九日の潮波みが、元は年々の正月神の御迎への用意であつたのを、いつしか此様に固定したことも、幽かながらわかつて來るのである。

神代の舊史に於ては、諸冊二尊の最初の御子を葦船に入れて流し去ると書いて居る。書紀には天磐樟船と出て居るが、それが如何なる形狀のものであるかは、もう西村眞次君より他に知る者が無くなつた。況や何の趣旨を以て、正史に此一條を存せねばならなかつたかは、考へて見やうも無いのである。たゞ後世に及んで、かの有名なる難波堀江を始として、不用の客神を海に送り出す風は有り、それが神自らの意圖に基いて、或は逆流して本の主に復り、或は遠く流れて新たなる地に寄りたまふにしても、共に第二の地位が定まつて後に、始めて說き立てらるゝ習はしであるのに、獨り上代の水蛭子の君ばかり、單なる放流の個條のみを以て顯されて居るのは、恐らくは完全な記錄で無かつたらう。例に取るのも唐突であるが、嘗て賴政が紫宸殿の庭で退治した啼く聲鵼に似たりけりの怪物すら、尾足身首が切れ〲になつて、內海處々の岸に漂著し、乃ち犬神蛇神の元祖になつたやうに傳へられる。しかも京都の東郊には之を埋めたと云ふ鵼塚もあるのに、神戶に近い芦屋浦の鵼塚でも、鵼漂著して之を埋めたことを主張するのみか、更に其乘物までも塚に納めたと稱して、鵼うつぼ塚といふのが淬上江（カスガエ）の村にあつた。ぬえなどに空穗舟は無用の話と考へられぬでは無いが、現に謠曲の「鵼」でも、ぬえの精靈自身が出現して、

賴政は名を揚げて〲
我は名を流す空穗舟に
押入れられて淀川の
よどみつ流れつ行く末の

うど野も同じ芦の屋の

云々と、謂つて居る位だから古いものである。

但し單に文藝上の興味だけからであつたら、那如何に奇異なりとも是だけ弘く、且つ數千年の久しきに亘つて記憶せられるわけは無い。素朴な昔の人の深く心を動かされた如く、我々に向つても時々は作り話にせよ、新たな實例を揭げて刺戟を復習せしめた他に、尚此信仰を保存するに足るだけの、宗教行事が持續されて居たのである。例へば公設の記錄には認められて居らぬけれども、宇佐では近い頃まで神を流す儀式が行はれて居た。伴信友翁の八幡考に松下見林の筆記を引いて、宇佐の御正體といふ薦の御驗は、每年薦形池から刈取つて編み造つた薦枕に、木の枕を包んだものを三殿每に安置し、古い去年の分を取出して次々の社に下し、最末の小山田神社にある舊物は、空穗舟にのせて海に流すと、必ず伊豫國の海上なる御机石といふ石の上に漂着して、そこにて朽ちたまふ也と述べて居る。我々の今の智識では、まだ諒解の出來ぬほどの神秘である。併し每年の儀式として神を流すだけは尾張の津島神社にも例があつて、之を御葭神事と名けて居た。定まつた水邊に行つて葭を刈り束ね、祈禱の後之を川に流すと、遠く近くの海岸の村々に漂着し、其村では必ず新たなる祠として之を祀つた故に、此地方には天王の社が次第に多いのだといふことである。是は勿論分靈であつて、本社の移轉では無いのだが、さうして次々に漂着せしめた所に、此種の教義は存したのかも知れぬ。津島は京都で八阪神社と謂ふ所の祇園樣を祀つて居る。諸國の田舍でも舊曆六月十四日に、祇園に供へると稱して胡瓜を川に流し、それから以後は胡瓜を食はず、中に蛇が居るからなどと說明するのが普通である。思ふに此瓜も亦一つのうつぼ舟であつて、自然の水力の導きのまゝに、次から次へ宣傳した古い時代の信仰の風を、無意識に保存するものであらう。神が最初に蛇の形を現じたまふことは、隨分古くからの日本の習はしであつた。大和の三諸山の天の神も、蛇の姿を以て大御門に參られた。而うして之を世に傳へたと稱する家も、亦其氏の名は小子部(チイサコベ)であつた。（了）

文藝時評

正宗白鳥

二月二十日の午後、私は大阪の道頓堀や心齋橋通りを、寒い埃風に吹かれながら散歩したあとで、一圓均一の自働車に乘つて御靈の文樂座へ行つた。七八年目で人形芝居を觀る氣になつたのであつた。

久振りで入つて見ると、豫想してゐた如く觀客は極めて少かつた。平土間には二百人足らずしか入つてゐなかつた。道頓堀で澤正の芝居に、開場數時間前から、見物が二三丁も列をつくつて切符の賣場へ向つてゐた盛んな有樣とは比べものにならなかつた。出雲や半二などの時代に榮えてゐた特殊の民衆藝術も、二百年後の今日は、「白野辨十郎」などの所のやうな芝居にさへ蹴落されるやうなみじめなことになつてしまつた。私は此處で攝津大椽の美音にうつとりとしたこともあつた。越路太夫の「堀川」に醉はされたこともあつた。しかし、さういふ名人も死絶えて、彼等の後繼者たる憐れたる新人は、時代に取殘された古めかしい藝術の社會には現はれさうに思はれない。

私は、「新薄雪物語」と「戀飛脚大和往來」とを、淋しい小屋で、薄ら寒い思ひをしながら、垢拔けのした老婆と肩を並べて見て、昔の夢を描いてゐたのであつたが、意外にも、この人形芝居といふものが、ひどく面白く感じられだした。津太夫や土佐太夫の語り口の巧拙や、玉藏や文五郎の手わざの巧拙について、細かな批判を下し得るほどの鑑識を私は備へてゐないのだが、彼等の技藝がどうであらうとも、内容がいかに陳腐であらうとも、人形芝居その物は、日本

類特の藝術として、このまゝ滅亡させるには惜しいものゝやうに思はれた。同じ淨瑠璃ものでも、歌舞伎芝居で觀ると、不自然でいやみで馬鹿々々しくてたまらないのが、人形の所演を觀てゐると、殘酷も悲慘も激情も、一種の滑稽味を帶びて、我々に何の反感をも起させないで、一つの面白い藝術の世界の現出されてゐるのを感じた。津太夫は兎に角、土佐太夫は伊達太夫と云つてゐた時よりも、聲が失せて味のないものになつてゐたが、私は義太夫音樂に對しては、さしたる興味も愛着も持つてゐないので、その音樂と不可分の關係を保つてゐる筈の人形の方を重視してゐた。虎渓の三笑と云はれてゐた悲慘な笑ひを一箇の山としてゐる「園部兵衛屋敷」の一場の如き、これが中車や羽左衛門や仁左衛門などの俳優によつて演ぜられたなら、いやらしくて愚かしくて、見るに忍びないであらうが、人形だと、却つて人世の眞實をそこに見るやうな氣持がした。皮相な眞實でないために、却つて人間の深い眞實がうかべるやうに感じた。時々人形遣ひの顏が目障りになつてならなかつたが（遣ひ手が名人だと、その顏が邪魔にならぬと聞いてゐる）何のなにがしといふ現實の俳優によつて眞實を損はされることがなくつて、直ちに作中の人物に接しられるやうであつた。……人間が自分の息の根を殺して血のめぐりも止まるやうな窮屈な態度を押詰めた能樂が、今日も繁榮を保つてゐるのに、その反對に人形に息を吹込んで活躍させる操り芝居が、何故に滅亡しつゝあるのであらうか。能は鑑賞家が自分で舞臺で舞つて樂まれるに反し、操りではさういふ個人的の興味が得られないからであらうが、能樂に日本特得の藝術味があるのなら、操りにもそれに劣らぬほどの特得の妙味はあるのだ。そして、義太夫音樂は時代の波に流されてしまつても、人形藝術だけは、陳腐な内容をもつた淨瑠璃から引離されて、新しい藝術を形造らないだらうかと、私は思つてゐる。

兎に角、かういふ人形藝術が一代の人心に投合してゐたことを回顧して、私は「白野辨十郎」や活動寫眞などが雛然

として存在して世に迎へられてゐることに思ひ及んだ。澤田も、活氣のある上に、落着いた情味を現はし得る域に達して、前途に望みを掛けさせるのだが、物が能のやうな靜寂物だから、今日の雜誌に跋扈してゐる所謂大衆文學以上の藝術味を舞臺に現はしてはゐなかつた。文樂座のやうな傳統的に洗錬されてゐる技藝は、一朝一夕に得られるものではないが、その代り新藝術では、自由自在に何でもやれるのだ。現代の人氣役者のうちでは、澤田こそ、全然舊套を脫した清新で見應へのする芝居をやりさうに思はれるのだが、民衆藝術と言ふ言葉に煽てられて、何時までも淺いところを狙つてゐては、一時の流行に止まるだけで、大したことはなし得ないであらう。人形芝居は昔の大衆演藝であつたのだが、それは、曾我ノ家や澤田が民衆的であつたのとは、まるで質が違つてゐる。……澤田一座や曾我ノ家一座のは、背景や衣裳は今樣に美しくつても、俳優が薄汚くつて、それに汗を流して演じてゐることでも、觀る方で苦々しくしか感ぜられないが、人形は薄汚い感じがしないだけでもいゝ。全體日本人は體質が貧弱で、活動寫眞などでも外國物に匹敵する見込みはなささうだが、その點から云つても、人形を利用して新しい舞臺藝術を作り出したらいいのではあるまいか。

自然主義勃興時代に極端に排斥されてゐた日本の古文學がこの頃復活して、萬葉は云ふまでもなく、源氏や大鏡などの宮廷文學さへ、今更らしく珍重される奇現象を呈して來たが、さういふ流行から云つても、舞臺藝術の古典である人形芝居には、もつと注意を拂つてもいいだらうと思はれる。

蘆の髓から天を覘くやうに、私だちは西歐の文學を仰ぎ見てゐる。そして明治以來六十年を經た今日に至つても、まだ新歸朝者の露佛などの新文學について說立てるものを謹聽してゐるやうな有樣である。外國崇拜を嘲ふ口の下から外

國にかぶれたことを云ふのが、現代の知識階級の眞狀なので、私もその一人でないとは云はれない。日本の古典にもいいところがあるには違ひないが、歐洲の古今の傑作に比べると貧弱極まるやうに思つてゐる。飜譯で讀んでさへこんな感銘を受けるのだから、原文に熟通したらどんなであらうかと思ふことが多い。芝居なら、原語をよく解した上に歐洲の名優の所演を直接に見たらどんなであらうかと思ふこともある。

しかし、いくら外國の批評家や日本の西洋文學通の批評によつて有難味がつけられてゐても、私の心には受入れられないものも少くない。バアナアド・ショウの如きはその一例である。ショウ氏は歐洲現代の文壇の耆宿で、その戲曲は、最近歐米の劇場で最も持囃されてゐるさうだが、私は氏の作品の理窟責めとくどさとに飽き〳〵してゐる。幾つか讀んだ中では、「ウアーレン夫人の職業」と「惡魔の弟子」とが讀むに堪へたもので、有名な「人と超人」の如きは、憤懣を感じて途中で投出した。「よくもこんなにしちくどく屁理窟をならべたものだ」と思つた。外國の讀者や見物の頭はかういふものに馴れてゐるのであらうが、日本人でかういふ作物に感心する者のあるのは、ドストエフスキーの長編を興味をもつて、通讀する者のあるのが、不思議である如く、私には不可解であるのだ。「人と超人」の饒舌とくどさは我慢のなり難いものである。夢の場などはことに甚しい。ショウは才人であらうが、才に過ぎて、簡潔の妙味などは些しも理解しないらしい。「聖ジョウン」の序文に、「本物の芝居は退屈で厄介な代物で」などと云つて、例の皮肉な調子で自作に箔をつけて、辛抱氣のない見物を嘲つてゐるが、して見ると、西洋の見物にも、ショウの芝居のくどく長つたらしいのに愛想を盡かしてゐる譯の分つた者があるらしい。

ショウを讀んだあとで、イプセンを讀むと、イプセンのえらさが私にも多少分つて來る。イプセンには、長くても短くても無駄がない。一分の隙きもないやうにキチンとしてゐる。社會上の問題を取扱つても、イプセンには人間の惱み

がしみ出てゐる。ショウのやうに高慢らしいお喋舌をしたところは決してない。近作「聖ジョウン」は、非常に當りを取つてゐるさうだが、これも日本人には面白くないものである。ドストエフスキーが露國特有の宗教心を取扱つてゐて、それが日本人に理解されない如く、ジアンダアクも外國でこそ最も馴染の深い史上の人物であつても、日本では名前だけが幽かに我々の記憶にあるに過ぎないのだから、新しい解釋が下されてゐてもゐなくつても、何の興味をも惹かないのだ。そして、作その者は例の如く理窟つぽくて冗漫だ。

ショウの如きが第一位を占めてゐるとすると、歐洲の現在の演劇に對して、私は疑ひを挿まなければならなくなつた。

ゲーリングの「海戰」といふものは、築地小劇場で演ぜられて、文壇の人々から過分な稱讃を受けたが、あゝいふ芝居なら、人形芝居でやつたら、もつと深い効果が得られたであらうと思はれる。

ショウの理窟でも、西洋の名優の巧みな臺詞廻しによつて觀客の耳に快く響いて腦裡に深く印象されるのかも知れないが、日本の俳優はかういふ脚本を演じて効果を奏することは甚だ六ケしいであらう。日本の芝居は目に訴へることを主として、支那や西洋の演劇のやうに臺詞に重きを置かないと、一般に認められてゐるが、それは必しもさうでないにしても、俳優でも見物でも見せることと見ることにのみ重きを置き過ぎる。團十郎などは音吐朗々たる名臺詞で有名であつたのだが、現代の俳優の誰れからも音聲の妙味は感ぜられない。それに、脚本にありもしない餘計なことを云ふのによつても、彼等が臺詞の微細な妙味に注意を拂つてゐないことが察せられる。俳優個々の口癖を出して、「イヤ」だの「ハア」だのと間投詞をノベツに發するのが耳障りでならないことがある。

同じ淨瑠璃劇でも、操りの方では無駄はなくつて渾然としてゐるが、歌舞伎では無駄だらけだ。無駄な臺詞や無駄な仕草に馴れて來てゐる俳優は、たとへばイプセンのやうな無駄のない新劇は演じにくいだらうし、茫然として舞臺を見るに馴れてゐる見物も、俳優の一語一語に心を凝らす用意はなし得ないであらう。上演を目的とする新劇の製作は困難な譯だ。

かつて「生きてゐる小平次」を見た時、序幕の臺詞が殆んど聽取されなかつたが、新劇に理解のある菊五郎や勘彌でも、工夫が足りないのだと私は思つた。私自身の新作が上演された時なんか、劇場の構造の悪いせいでもあつたが、作者たる私の耳にさへよく聽取されなかつた。臺詞の通らない所で會話を主とした芝居を演じるのは無法なのだが、それを敢てするのによつても、芝居は見るものだといふ先入主の考へが、劇場關係者の頭にこびりついてゐることが察せられる。

「現代戲曲全集」に於て、坪内博士は史劇を論じてゐられた。今日の新作家の史劇が、あまりに主觀的で、あまりに空想的で史的と稱するにはあまりに杜撰であると非難され、「古の人物を寫さうと思ふと、先づ如く今の我を離れる必要がある。自分の狹い主觀を捨てて、成るべく多く、成るべく廣く、過去の主觀を參照して見る必要がある。それは獨り史劇を作るために必要なばかりではない、人生を知る上にも必要なことである」と斷言されてゐる。

私もさう思ふ。フローベルが「サランボー」を書くために、何千卷の古書を調べたといふやうな周到な用意は、驚歎し尊重すべきものである。今日の新作家の史劇や歴史小說が杜撰であるばかりでなく、その點で、馬琴などの歴史小說や徳川時代の史劇は、もつと甚しい杜撰なものである。ショウも「聖ジョウン」の序文のうちに、シェークスピアの史劇の

杜撰なことを非難してゐる。しかし、過去のうちに今日を見、史上の人物に於て自己を見ることに、私は興味を感じてゐる。徳富蘇峰氏の「近世國民史」でも、今日の世相から押して過去を批判してゐるところが面白い。田山花袋氏の「源義朝」でも義朝の心と作者の心とが融和して一つになつてゐる點が面白い。先日ゲーテの史劇「ギョッツ」を讀んで、主人公たる英雄ギョッツその人よりも、副人物のワイスリンゲンと妖婦アイデルハイトとの關係を面白く思つたが、それはこの二人の間にゲーテの實生活の影が見られたためであつた。アイデルハイトが男を翻弄するところは妙を極めてゐたが、あしこはゲーテの實感で、ゲーテの左右にあゝいふ女がゐたに違ひない。坪内博士は昔、福地櫻痴や默阿彌の史劇を研究して、默阿彌の新作の時代物には、史上の人物がそのまゝには出てゐなくつても、少くも團十郎的清正、團十郎的家康が現はされてゐる。それが櫻痴居士の史劇では、居士的團十郎が現はれてゐるに過ぎないと批判を下してゐられた。しかし、私は、櫻痴居士の作には、作者の影作者の主觀が少しでも現はれてゐたかどうかと疑つてゐる。居士の脚本を通じて居士の實生活を見ることは出來ないので、博士の所謂「居士的」なるものは、脚本製作の外形を評されたのに止まつてゐるのであらう。本當の居士の心身が作中に影を映してゐたなら、その作は輕視すべきものではあるまい。

「新潮」の小説合評會で、葛西善藏氏の「われと遊ぶ子」が醉漢のクダと評されたことについて、作者自身「不同調」誌上で不平を洩らしてゐる。先進者がさういふ辛辣な批評を後進の作に下すのによつて見ると、「小説といふものに一生を打込んで行つても、人格的に救はれない感じのものだといふ氣がする。小説なんてものは五十年七十年苦勞しても、人間の人格なぞつくる力の恐ろしく貧弱なものであるといふことを、僕は感じるのだ。偉さうなことを云つても、本質的の人格には、何等の磨きのかかつてないことを僕は切實に感じるのだ」と云つてゐる。葛西氏が自作の小品に、

して一言の惡評を下されたために、これだけのことを切實に感じたのなら、それは非常に大なる犧牲をした譯であると私は思ふ。小說を書いたつて詩を書いたつて、あるひは政治家軍人の仕事を何十年續けたつて、それが本質的の人格にどれほどの效質を加へるかといふことは、私は長い間疑つてゐる。ブランデスがシェークスピアやゲーテの傳記を立てて、文豪の一生を人格發展史の如く美しく仕上げても、それは批評家の幻想ではないかと、私は思つてゐる。……葛西氏はこの大なる犧牲をたやすく無くしないやうにするといい。そこから、人生に對して、新しい彈みのある覺悟が出て來るかも知れない。

しかし、葛西氏には意外にも同感者が多いらしく、小雜誌「文藝行動」を見ると、例の醉漢のクダの妄評を憤慨してゐる記事が二三箇所出てゐる。こちらでは葛西氏を推稱したさに、他の作家に側杖を喰はしてゐる。文學に關してはどうにでも口が利けるものである。そこが文學の面白い譯なのであらうか。

葛西氏の自傳的短篇も特異の藝術には違ひない。氏の作物にはある生活の苦惱が出てゐるには違ひない。しかし、私は氏の作品に對しては、靴を隔てて痒きを搔くやうなもどかしさを感じてゐる。同じやうにある生活の苦惱を書いてゐる武林無想庵氏の作物に對して感じてゐるやうなもどかしさだ。

自傳小說にも色々あつて、自己や周圍の雜多紛々を材としながら、個々の人物の面目が明晰に描出され、あるひはその心理がしつかりと掴み出されてゐるのもあるし、現今の雜誌に現はれてゐるある小說のやうに、A氏だのB氏だのと、モデルの頭文字によつて、その人物を推察して、やうやく興味を感じさされるに過ぎないやうなのもある。葛西氏のはそのどちらであるか。……それから、筆つかひに苦澁の跡のあるのを深刻と思ひ、樂々と筆を運んでゐるのを淺薄と思ふ批評家や讀者があつたら、それは大間違ひの眞中であるやうに私は思つてゐる。

說にだつてむしろ興味を感じてゐる方だが、ただ、この特異なる作者が、年百年中、一つところばかり足踏みしてゐるのが、私には歯痒く思はれるのだ。

私は戯曲を讀んでさへ、作中に作者の影を捜してゐる。葛西氏の小說の如き、自己の日常の行爲の記錄一點張りの小說にだつてむしろ興味を感じてゐる方だが、ただ、この特異なる作者が、年百年中、一つところばかり足踏みしてゐるのが、私には歯痒く思はれるのだ。

自傳小說だつて、本當の藝術品に仕上げるのは容易なことぢやない。葛西氏などは簡勁な筆を持つてゐるが、他の、平凡無味な筆で自己の日常の瑣末な經驗に多少の感想を加へてだらしなく書流すだけの技能しか有つてゐない文壇人が、久米正雄氏の作物を、一概に通俗視し低級視してゐるのは、可笑しなことである。

三上於菟吉氏が讀賣新聞(二月二十七日)で、「自傳小說書けぬ譯」と題して自白してゐるものには、多少の當てこすりと負惜しみが潜んでゐるやうだが、しかし、我々が同感を寄せられる眞理をも含んでゐる。「僕が若し自分に即した小說を書くとなると、存分に僕自身の泥を吐かねばなるまいし、その泥は極端にきたならしいものに相違ないので、それをブチまける勇氣がちよいと出ないのである。……僕が一度その色懺を筆にする時にだけは多少人間的反省を底に持たせたものにしなければならぬと思ふ。その覺悟が僕を磨き僕を高めるだらうと思ふ。ところが、僕には正直、まだその勇氣がない。生半可告白じみたものを机の上で紙に記して見たところで、若し人間的反省が乏しくつて、單に一人よがりの辯明小說になるに過ぎぬとしたら、僕はむしろ他人の生殖欲望を鼓舞するために、春本をでも書いてゐた方がより人生に寄與するものだと言ふべしだと信じるのである」

私など、自分の過去の自傳的小說を顧みて嫌惡を感じてゐる。そして、他の作家の一人よがりの、生半可な告白小說に對しても不快を覺えてゐる。碌でもない告白なんか聴かして貰はなくつてもいいと思つてゐる。

私の舊作「泥人形」が、日本在住のある外人によつて英譯された。數度叮重な手紙を寄越されたので、私は否む譯に行かなかつたのだが、あんなものを飜譯されることは望ましくなかつた。飜譯の出來榮えはあれでいいのか知らないが、私自身の批判に出ると、原文の文章の味はひも、作中の人物のキビ〱した氣持や行動もちつとも出てゐない。ダラリ〱と筋が話されてゐるに止まる「奥の細道」などを口語に譯したらかういふ感じがしようと思はれた。私の小説は、最も飜譯し易いものださうだが、それでさへかうなんだから、他の名文家の小説はとても滿足に外國語に譯されないだらう。それにつけても、チエホフやモーパッサンなどの名文を日本譯で讀んで彼此批判するのは原作者に對して相濟まぬ譯だ。……お互ひに無學だから外國文學に對しても、大きな口が利いてゐられる。

先頃逝去した小栗風葉氏の小説では、「ぐうたら女」や「世間師」が優れた作品として、私の記憶に殘つてゐる。今日取出して讀んでもさう見劣りはしないだらうと思はれる。長篇では初期の「戀慕流し」がいい。しかし、有名な「青春」は私は取らない。二十年前の文學青年の氣風をこれによつて多少窺ふことは出來るし、風葉氏が紅葉系統の舊い作風を墨守してゐるには堪へられなくて、新しい外來の思想感情を取入れようと苦心したことも察せられるが、作その物は不熟で、廻しくいやみなものだ。「戀慕流し」の方が昔ながらの藝術味を保つてゐた。「青春」が讀賣新聞に連載されてゐた時には、私は新聞社に籍を置いてゐたので、作者がいかに書き惱んでゐたかをよく知つてゐた。そして、社の方では、「魔風戀風」以來の小杉天外氏の方を重んじて、風葉氏を冷遇してゐた。(文學者生活の今昔の相違を知る材料として、當時の新聞小説の原稿料の高を書いて置かう。「魔風戀風」には前例のない報酬で一回三圓。「青春」はその後で出たのに一

同一兩だつた。作者の方で五十錢の增額を要求したのが、容易に容れられなかつた）

この二つの小說には、その頃の新進の人氣作者が、舊套を脫して新方面へ向はうと努力した跡を見ることが出來るので、この二作家は、硯友社時代から自然主義時代に移るまでの中間作家として、明治文學史上に存在の意義を有つてゐるのだが、天外氏のは外面的で風葉氏のは多少内面的であつた。そして天外氏は新聞小說として讀者の人氣を得ることを、あまりに顧慮し過ぎてゐた。風葉氏の苦心は、舊歌舞伎役者が新劇を演ぜんとする苦心で、「青春」はその好實例となつてゐる。

私は、新聞社入社後間もなく、文壇消息の材料採集のため、風葉氏を納戸町へ訪問して、紅葉の病狀などを訊いた。その時氏は「紅葉先生は瀬沼夏葉と共同で、ロシアのチエホフといふ小說家の短篇を譯してゐられる」と話した。私がチエホフの名を聞いたのは、これが最初であつた。新年の「不同調」で氏の「病む秋」といふのを讀んで、久振りで氏を思ひ出したのであつたが、あの文章が氏の絕筆であつたのだ。頽廢だつた氏の過去については、瀧田氏の死と同樣な感じを起させられた。瀧田氏は風葉盛時の文章に心醉してゐて、時々感激した口調で私などに讀んで聞かせた。その濃艶な文章には、及び難いものとして、私も時々感心してゐた（一月末日、大磯にて）

私は織田信長の一生やその時代について興味を感じてゐる。それに關する書類を可成り讀んでゐる。それで、信長の一生を題材として長編の小說か戲曲かを書かうと、かねて企てゐたのであつたが、それは手つ取り早く運ばないので、ふと思ひついて、短い者を書くことにした。

三月十日、信長御小姓衆五六人召しつれられ、竹生島御參詣、長濱羽柴筑前の所まで、御馬にめされ、これより海上

五里、御舟にて御社參、海陸共に片道十五里の所を、日の内に上下三十里の道、御歸城なされ希代の題目也。しかし御機力も餘人にかはり、御達者に御座候の處、諸人希感候也。

途路に候へば、今日は長濱に御逗留候はんと、何れも存知の處、御歸り候て、御覽候へば、御女房達、或は二丸まで出られ、或は桑實寺藥師參りも有、御城内は行きあたり、もだえ焦れ、仰天、無限。則ちくゝり縛り、桑實寺へ女房共出し候と、御使を遣はされ候へば、御慈悲に御助け候へと、長老詫事申上られ候へば、其長老をも、同時に御成敗候也。

蘇峰氏の「近世國民史」によつて敎へられた、信長の最も正確なる生活記録である太田牛一の「信長公記」中の一節を種子として空想を逞うしたのであつた。空想劇であると云つても、私は當時の時世や信長の一生については、可なり知つてゐるのだから、自から歷史の片影がそこに現はれてゐるだらうと思ふ。信長が無雜作に人を斬るのを、私の好みから恣ままにさうさせたやうに、新潮合評會で云つてゐた人があつたが、信長は時として、蘇峰氏の所謂「血に渴した魔鬼」の如くやたらに人を斬つたものだ。小山内薰氏の「吉利支丹信長」にも出てゐるやうに　安土城新築の際には、信長自身白刃を提げて監督して、仕事をなまける人夫を斬らうと目を配つてゐたのだ。

しかし、これまでと同樣に「安土の春」だつて書き放しである。筆を採りはじめた時に、結末がどうなるかさへ分つてゐなかつた。戯曲や長編小説について、豫め立案構圖を微細に定めてかかることは、私には出來ない。だから實際の上演に際しては、隨分差支へが起るだらうと思ふ。でも、これだの「勝賴の最後」だのは、氣持よく書通された。「安土」は空想を逞うし「勝賴」は比較的史實に拘泥したが、この二つに、同じ氣持で續けて書いたのであつた。

上演希望の報知に接したのは、老父の病氣見舞に歸省してゐた時であつたが、あのままで上演が出來るかどうかと、

私はまづ疑つた。三幕目がアッサリしてゐて呆氣ないだらうから、少し書直したらいいと思つたが、時間がないし、迂闊當事者に會ふ機會もないのだから打やつて置いた。

月末に上京して、松竹會社の社員に會つて、實際上のいろ〱な事を聞いた時に、私の注意したのは、桑實寺はクハノミデラと讀む方がいいと云ふことだけであつた。歸郷の際に安土驛の名所案内の立札を汽車の中から見て、寺名にさうルビがふつてあるのに目がついてゐたのだが、しかし、昔はどの書物にもある如く、サウジツジと云つてゐたのかも知れない。

初日を觀て最も失望したのは、信長がノソ〱と歩いて出たことであつた。信長が韋駄天の如く驅けつけて、癇癖を起して二人を叩斬るのは、作者が書いてゐていゝ氣持になつてゐたところだつたのにと思つた。ことに、三幕目に、若武士が使者になつて、主君の愛馬に跨つて、得意然として中庭を數回廻るところを、徒歩の足取りで見せるだけなので、ひどく間が拔けてしまつた。監督の小山内氏に訊くといい馬がないので、かういふ新作には不適當だと思つて見合せたのださうだ。京都で破天荒の馬揃へ(すなはち大觀兵式)をやつた信長も演舞場では一頭の乘馬をすら得られなかつた。

作中の人物と作者と俳優とが、三にして一つとなることは甚しく六ケ敷い。坪内博士の所謂「團十郎的淸正」や「居士的團十郎」たるに留まることが多い。出演者に嵌めて書卸された脚本なら兎に角、私などのやうに氣儘に書いたものは、上演された自作を見てゐると、自分のとは別種のもののやうに思はれるのは止むを得ないのであらう。

觀劇の極致は、靜かな部屋で傑れた戯曲を讀んで、その場景を心に描いてゐる時であるかも知れない。……今日私は、「文藝春秋」所載の新脚本の二三を讀んだ。小山内氏の「吉利支丹信長」はサラ〱とし過ぎてゐるやうに思はれた。眞山青果氏の「江戸城總攻」には、氏の作物にいつも見られる氣込みがあるが、山岡と勝との對照が、「玄朴と長英」

ほどに心理的深味を有つてゐない。勝といふ人物が新劇や櫻痴式の英雄見たいに、何もかも分つてゐて、人の心や將來を見透してゐるやうなので、却つて人間的生氣がない。ショウの理窟を非難したものの、眞山氏や私など、日本の新作家の作物も、稍々もすると、理窟によつて新味を發揮しようとする傾向がある。關口次郎氏の「鴉」は、小品的戯曲として、單純にしていやみなく出來てゐる。しかし、新味があるとは私には思はれない。

此處まで書いて來て、今日の讀賣新聞の文藝欄で、上司小劍氏の「勝賴の最後」の批評を熟讀した。批評が明日に渡つてゐるらしいが、今日のところに、「新劇の作用しのやうな人物が出て何やら云ふ」とあつたのは、私には意外であつた。あれは重要な人物である。見物に豫備的知識を與へるために出したのでもないので、各自個性を有つて死生の術策を彷徨してゐた一人である。はじめ「滅亡する人々」と題をつけてゐたのを、雜誌社と妥協して、英雄中心的題目に變更したくらゐであつた。……しかし、私も書きつづけてゐるうち、次第にお芝居の臭ひがついて來さうに自分でも思はれる。（二月二日、丸ノ內ホテルにて）



最初の泊

里見弴

一

締切の早い正月號の原稿を書きあげて了つたあとほど、纒つた時間をのんびり使へる時はほかにない、――それゆゑ、ひとの忙しがる年の瀬を、反對に私は、一年中のくたびれ休めに、ぎり〳〵大晦日まで、暢氣な旅に出て遊んで來るのを、もうこゝ三四年來のならはしのやうにしてゐた。今年は、四つ五つ年上だが、中學時分からの友達で、この頃は會社の重役をしてゐる、河田といふつれが出來た。洋行から引き續いての疎遠で、歸つて來たとは聞いてもつい逢ふ機會もなく、最近ひよつこり顔を合せた時に、だん〳〵話してみると、なんでももう七八年ぶりの對面だつたけれど、そこが舊い友達の一德で、すぐその場で旅に誘ひ合ひ、それがきまつて、東京をたつたのが二十日だつた。

割房に二人つきりで十二時間、いかに七八年ぶりの積る話でも、暮色に包まれた琵琶湖を廻つて行く頃には、ぼんやり窓のそとを眺めてゐたりした。

倉田の停車場には、佐竹と中井が待ちうけてゐて、すぐその一時間ほどあとの汽車で、ひと思に、山陰の三朝温泉までのして了はふと云つたけれど、河田が、血色のいゝ顔に、穏な笑ひを浮べて、
「さうまア性急にならなくつたつていゝぢアないか。君たちはそれでもよからうけれど、こつちは一ン日さんがいゴト／＼ゴト／＼汽車に揺られ通して來たんだぜ」
と、おどけたやうな調子で云つた。
「そんなことを云ふんだらうと思つてた」
昔日なら、一旦自分の云ひ出したことは、容易にあとへは引かうとしなかつた佐竹も、目もとで笑ひながら、たゞそんな風に云つただけで、「おア、どうするんだい」
「兎に角、一旦僕の宿屋へ行かう」
中井が、手提物をブラン／＼させながら、
「よせよ、めんどくせえ。このまゝすぐたつちまへばいゝぢアないか」
「まア、いゝやな／＼」
佐竹は相手に、「おや、タクシーを云はふか？」
「何、ついそこだよ。荷物だけ車にのつけて、歩いてこうぢやないか」
時々背なかを向けてやり過ごさなければならないやうな、強い、冷い西風のなかへ出て行つた。こゝで一緒になつた二人も、氣心を知りつくしたやうな古い友達だつた。佐竹は、寡作な小說家。荷兵衛々々々と呼ばれる中井は、名ばかりの重役で、いつもぶら／＼遊んで暮してゐた。汽車を降りて、かういふ久振りの友達にも逢ひ、明るい街の灯のなか

を行くことには、なか／＼西風くらゐでは吹き散らされない樣子だつた。

「電報、みたかい？」

「うん、ついそこまで來てからみた。京都で……」

「京都？　こつちは午頃にうつたんだぜ。ねえ、滑兵衛」

「午頃でもないけど、さうだな、二時すぎだつたかな」

「そオら、早速佐竹流が始つた、つて、さんざ二人で笑つたんだ。……伊吾も用があるつて云ふし、俺は、明日ちよつと神戸まで行つて來なくつちアならないんだ」

かふいう友達は、みんな私を、舊い號で呼び馴はしてゐた。

「でも、明日は間違ひなくたつだらうね」

ちよつと二三日のつもりが、やがてもう一週間にもなるといふ中井は、無理に佐竹に勸められて、一緒に山陰を廻る氣にはなつてゐたけれど、然し誰よりも一番歸京を急いでゐた。

「明日もたてないなんて云ふんなら、俺だけ先に歸つちまうよ」

「だから、二人とも、明日中にどん／＼用事を片づけちまつて、なんでも構はないから、晩の汽車に乘つちまふんだよ。……明日の晩たてないやうなら、俺だつて一遍奈良に歸つて來るよ、馬鹿々々しい」

「俺はたてるけれど、河田、君はどうなんだい」

「俺もね、明日午前中に神戸へ行つて來てと……、さうだ、大抵大丈夫だ」

「大抵なんぞでなくさ、斷然たてよ」

「毅然、かい？」
俺いその催眠術を笑つて、一寸は、今夜にもその『毅然』が始るんぢアないかつて云つてたんだ。ねえ、河田
「汽車ンなかで、君たちの顔色をみると、伊吾のやつ恐れをなして、俺に帰る役目を押しつけちまやアがつたよ」
「第一、伊吾なんぞ、なんにも用なんてある筈はないぢアないか」
「ところがどうして、大阪を素通りしたひにやア……」
中井が、いかにも好人物らしい笑ひ聲をたてゝ、
「泣く奴でもあるかね」
「第一無駄だよ。こゝまで來て酒も飲まず、ものも食はないなんて……」
「君たち、飯は？」
と、河田が、襟を立てた陰ぼツたい外套の奥で、目を三角にしながら、佐竹の方へ顔ごと振り向けた。
「食つた。君等はまだか」
「無論さ。大阪へ降りやうといふのに、食堂の飯を食ふ馬鹿があるもんかね」
私もそれに和して、
「ぢアまア、二人でうまさうに食ふところを見物させてやるんだね」
「見物してやつてもいゝが、成可く簡単にしろよ」
「可憐だ！」
河田は、饒舌と同國者の調子で、「なかなかさう簡単にはすまされない」

風のなかゝら、石疊の奥深い路次へ切れ込んで、宿屋の玄關さきに立つと、有村にはツとして、急に火氣や風呂がほしくなつた。

「おい、あがつちまつちアいけないよ」

けれども、和服の佐竹が、いち早く式臺へ踏みかけるのを、河田が呼びとめて、「こゝに、荷物だけ擲り込んどいて、このまゝすぐ飯を食ひに行かうよ」

「こゝで食へよ、簡單に」

「自分たちがすんじまつたと思つて、いやに簡單々々いふね。まア、さう云はずにつき合ふもんだよ」、

「お茶屋か」

佐竹の單刀直入に、やゝ鼻白んで、

「どつちでもいゝが、その方が、まアゆつくりするだらう」

「ちつと、めんどくせえなアお茶屋は」

「まア、そんなこと云ふなよ」

で、そこからまた二つ三つ横町を越したさきの、賑な茶屋街の方へ出て行つた。

二

またもとの洋服を着るのでは、あんまり有難くもなかつたし、湯冷も可怕く、時間も惜かつたので、洗面所に河田と二人並んで、汽車の汚れを落しただけで、座敷に戻つて來てみると、仲居の見習らしい若いのが、大阪の落語家のま

まの早口で、のべつ幕なしに、何やらぺらぺら喋りたてゝゐた。呆氣にとられて、突つ立つたまゝ顔を見入つてゐると、胡瓜の皮をむいてゐた作竹が、目顔だけでこつちを見あげて、

「大へんだよ、どうも」

「ふうん」

來ると、私もさんざお愛想を云はれたが、切目がないので、けつく返事をしないですむのが助かりだつた。

「新東京、ようおまつしやろなア」

その「新東京」で、一旦ピタリと區切つたり、「ようおまつしやろなア」の悠々しさ間拍など、噴き出さずにはゐられないほど落語家調子だつた。癇して口を出した。厚い眼鏡の女將も、話の齒のはづれる、ちつと困りものゝ方だつたが、癇癪の強い作竹でさへ、そんなことに、さう大して拘泥る風は見せなかつた。久振りで逢つても、お互にちつとも變らないつもりでゐるのだけれど、矢つ張りそんなところには、なんとなく「年」が感じられた。

やがて藝者が來たが、みんな年も若く、大人しやかで、馴染のおみなしには構はず、ちよつと才はじけた雄辯がなかなかで、一座をさらつて行く、といふやうな質のはゐなかつたから、私たちは、無遠慮に私たちの話が續けられた。作竹が、「ちつと、めんどくせえなア」といふ言葉で現はしたやうな關心事も起つては來なかつた。けれども、このことは、主人役の河田にとつては、多少ともものの足らなく感じられたに違ひない。それに、仲居との話の様子では、來て貰ひたい人が來ないで、どうでもいゝ顔ばかりが、入れ代り立ち代りはいつて來る、といつた風な座敷の有様らしかつた。

「さうすると、みんなでいくつ貰いたんだい？」

「四つだ」

「四つはなか〳〵大勉强だつたね」

「大勉強でもないんだ。みんな短いものばかりだ」

佐竹と私とで、こんな、仕事の話など始めてゐるそばで、河田は、藝者と一緒に、三味線なしで唄を唄つたりしてゐた。ストトン節といふのが、本場の長崎とかで聞いて來たのと比べると、節も違ふし、間が早すぎて野趣がない、そんなことを云つて、何遍もやり返させたりしてゐるので、（おや〳〵、少しお冠かな）と思つて、河田の顔を見たが、別にそれほどでもないらしかつた。

一體に、さういふ場所の飲み食ひとしては、一向に反跳まなかつたけれど、然し私にとつては、一年ぶりで銜む上方の盃は、なか〳〵措きにくいものだつた。猪口の二三杯で、すぐもう眞赤になる中井が、

「伊吾は、相變らずよく飲むね」

「うん、うまいもの」

「うまいかねえ、こんなものが」

「あんたはんもちつとおあけなはつたらどうです」

「僕か？　僕ァ駄目だよ」

中井は、四人のなかの年長で、それでもまだ五十にはちよつと間があつたが、象のやうに細くて可愛らしい目尻に皺をよせて、間拔じみるほどおつとりと、そんな風にうけてゐる具合は、すつかりもう好々爺の感じだつた。その容子を眺めてゐるうちに、ふと思ひ出したといふ調子で、佐竹が、

「淸兵衛のやつ……」

と、云ひかけて、一人でクックと可笑しがつて、「度々來てゐながら、あんまりどツこも知らないから、今度は、京都中あつちこつち案内してやつたんだがね……」

東京者のくせに、「案内」を、横濱の「關内」と同じアクセントで云つたりして、佐竹が話し續けるのを、中井は、ニヤ／＼ニヤ／＼笑ひながら、自分も一緒になつて聞いてゐた。

「寺の名前やなんか云つて聞かせるたんびに、おゝ、それは謠曲にあつた、それも謠曲にあつたつて、なんでも一々謠曲なんだ。可笑しくつて……」

昔日を云へば、いづれみんな京者の寄り集りで、ものを知らない點では、お互にさう他を笑へた義理でもないのだけれど、このごろ日本の古美術に凝つて、上方のいゝ寺は、片ツ端から丁寧に見歩いてゐる、といふやうな佐竹だけに、中井の、あんまりものを知らなすぎるのも可笑しかつたらうし、大してうまくなる氣もあてもなしに、十年以上も習ひ續けてゐる謠曲からの智識へ、なにかといふと結びつけて、おまけに一々それと正直に白状する具合など、いかにも好々爺らしい惡癖には違ひないのだけれど、私と來たら、その「謠曲にあつた」さへ云へない無智を、自分でちやんと承知してゐるので、可笑しいには可笑しいのだけれど、とても佐竹ほどには面白がれなかつた。

「どうも、なんでも謠曲なのにやア驚いた」

さう云つて話を結んだあとも、まだ佐竹がクス／＼笑ふのに、中井もちよつとてれたやうな顔つきになつて、

「だつて、さうなんだもの」

「實際どうも……」

一生懸命笑ひをおさめやうとしながら、「……どうも實に、呆れた奴だよ」

「なんにも呆れるこたアないぢやないか。ねえ、伊吾。……なアんだい、伊吾まで笑つてやアがる」
その縦惚たやうな、ぼそ〳〵した調子だけでも、決して可笑しくないことはなかつた。
一時近くなつて、勇敢にも、自分できつぱり殘ると云ふ河田一人を置いて、私たちはそこを出た。尾形が、宿屋のすぐそばだといふ藝者が、時々風に吹き送られて、二足三足小走りになつたりしながら、途中まで一緒に送つて來た。

三

「これかな？」
みんなの荷物が一かたまりに積みあげてある次の間で、中井が、何やらガタコトいはせてゐたが、「伊吾、知らないかい」
「何を」
「うゝん、河田がね、俺ンとこから託けた風呂敷包みを一つ持つて來てくれた筈なんだがね……」
「あゝ、そんなこと云つてた」
「寒いから、ひとつ、褞袍を重ねやうかと思つてね……。あゝ、これだらう、うちの紋がついてるから」
火鉢のそばまで持つて來て、すぐ解きかけた風呂敷包に、私はちよつと見憶えがあつた。
「あゝそれは違ふ、違ふ」
「違ふかい？　だつて、これ、俺ンとこの紋だぜ」
「違ふが。まアあけて見たまい。河田もなか〳〵大へんなことをする奴だよ」

諒ふと開いて、手を止めてゐたのを、佐竹がそばから引きよせて、もう一度結び目をときかゝつた。

「なんだい」

「汽車ンなかで見せられたんだがね、お土産だよ、『いま勘定してみると、俺は九つあればいゝんだが、貴公、もし使ひ道があるんなら、一つだけわけてあげてもいゝよ』なんて……。だからさういつてやつたんだ、『一人で人心を收攬しようと思つて……ずるい奴だ！』つて。……なか〳〵あいつやるよ」

佐竹が蓋をとつた薄いボール箱のなかには、御殿模様の古布で拵へさせた横長の手提袋がはいつてゐた。古代紫の紐と云ひ、上品な、それでスキツとした好みで、濱松屋あたりに頼んだものらしかつた。

「ふ、ふうん」

風流氣や洒落ッ氣に乏しい、どちらかと云へば、ボツ〳〵した感じの風采だつた昔日の河田には、凡そ不似合なその土産物の上に、やゝ皮肉な微笑を湛えた目つきを落して、佐竹が、鼻音で唸つた。

「どれ〳〵」

もう一つ別な風呂敷包を取つて來た中井も、そこへ顔をよせて、「どうしてこれア、なか〳〵大したもんだぜ。模造品ぢやアなささうだぜ」

「袱紗かなんかをほどいたもんだらうが、模様が大きすぎないから、丁度いいやね」

「それで、どうしたんだい、御前も分けて貰つたのかい」

「別になんとも云はなかつたけれど、分けて貰やアうちへ持つて歸るよ。さうすりやア、こつちで土産を買つて歸る世話がない」

「どうして、今夜これを持つてかなかつたんだらう」

佐竹は、あとまたきちんと包み直しながら、「餘計なお節介だけれど」

「吹聽はしてゐたね」

「さうだつたかね。……どうも、この樣子ぢア、明日の晩も、たてるかどうかあやしいもんだぜ」

中井が、笑つて、

「あいつ、平氣な顏をして、一人であとへ殘りやアがつたね」

「どれだい、一體」

「俺たちが歸る時までは、來てゐなかつたらしいよ。仲居との話が、どうもさうらしかつた」

「存外、今そこまで一緒に來た奴ぢアないのかい？　あゝして置いて、すぐまた引つ返して行くつて手もあるからね」

「寒いのに、そんな手間をかけてくれるほどの親切はありやアしないよ」

「それアさうだ。そんな他のことはどうでもいゝやね。兎も角寢るとしようぢやないか」

「寢るつたつて、一體どこに寢るんだい」

「このすぐ上の部屋に、三つだけ床が敷いてあるとか云つてたよ」

「河田だけいやに別扱ひなんだな。それとも、一人であすこに泊るところまで、ちやんと豫定の行動だつたのかな？」

「まアいゝや。兎に角誰か呼んで、寢る部屋を訊かうよ」

「だから呼べよ。佐竹のすぐうしろにあるよ、呼鈴が」

振り返ると、柱のつけ根に、頭寄つて小さく釘がつけてあるのへ、坐つたまゝでは屆かないので、ごろりとあほぬけさまに仰向がり、手を延ばしたが、

「まゝあ、どうも、ちつと屆くれえなア」

その、面倒くさそうな、馬鹿々々しいやうな調子には、恐く同感だつた。誘はれて、こちらへ構ひのなくなつた私たちに、間腰から来るへんな可笑しさで、だらしなく、いつまでも笑ひがとまらなかつた。

四

床にはいつて、二言三言交はしたと思ふと、すぐもうすやすやと眠込んで了つた山井を間に挟んで、佐竹と私とは、別だん眠を求めもしずに話し続けた。佐竹が誘ひ、またものゝ考へ方にも幾ぶん喰ひ違ふところのあるはたの二人がゐる時だと、隠すといふほどではないけれど、つい控へて了ふやうな作の話も、可なり沢山あつた。去年の歳尾には、佐竹と二人きりで、山代、山中、粟津、片山津の四温泉をめぐり歩いたのだが、その四日三晩ほどの間に、正味十時間も眠たか眠ないくらゐで、たゞもうのべつに喋り続けた。尤もその時は、私たちが七八年も交りを絶つてゐた揚句に、初てゆつくり落ちあつたのだつたから、話のたねは、あり餘つて困るほどたまつてもゐたのだが。

古い友達でなければ通用しないやうな、僅な言葉に山ほどの意味を托した話し方で、二つ三つも話題が移つたかと思はれる頃には、もうだいぶ白みだして、奥へひつ込んだ奥二階ながら、音ともつかない街のどよみも、なんとなく雨戸のそとに迫つて来てゐた。――やがて、どちらからともなく、言葉少なになつて行つて、眠つた。

「おい、おい」

穏な中井の聲で目を覺した。

「なんじ？」

「十一時半すぎてる。起きようよ」

「うん。起きよう。どうしたい。佐竹は」

「眠(ね)てゐるやうだよ」

「起きてるんだよ」

　夜具に潜つた寢惚聲で呟いた。

「起きて。ひとつ。用事を片づけちまふかな」

「なんだい。用つて。どつかイ行くのか」

「うゝん。電話でいゝんだ。取る金があるから、プラトン社から持つて來させるんだ」

「うまくやつてやがる」

　佐竹が、こつち向きに寢返りながら、

「さういへば、河田のやつどうしたらう」

「どうしたらうね。歸つたんなら、こゝにやつて來さうなもんだがね」

「大きにまだ愚圖ついてるんぢやないのか」

「午前中に神戸へ行つて來るなんて……。電話をかけさせてみようぢやないか。へたアすると、また今夜もたてなくなる」

「それともまた、國に歸つて、神戸へでも出かけちやつたあとかも知れない」

「兎に角、呼んで訊かう」

一間使の十疊の、襖のそとがすぐ階段だつた。あけると、曇り日らしい白ッぽい光が、冷たい空氣と一緒に流れ込んで來た。いつか風がおちて、氣溫も、昨日よりは高さうだつた。薄暗いなかで、呼鈴のありかを探す面倒さに、ねたまま、成可く廊下の方へ延ばすやうにして手を叩いた。

少し年のいつた女中があがつて來て、

「お早う御座います。ようおやすみでしたなア」

「どうしたい、河田、歸つて來たかい」

「いゝえ、まだです」

「電話をかけてみたまい。まだ昨夜のうちにゐるやうだつたら……」

「あのね」

と、佐竹が、口のなかに唾をためてゐるやうな聲で、「……すぐ歸つて來るなり、神戸へ行くなら行くで……、兎に角、さつさと用事を片づけちまへ、つて……」

「へえ。こちらさんは、どなた樣……」

「こつちか」

と、中井が笑ひ聲で、「こつちは佐竹だつて云つてくれたまい」

「いやだよ、俺は」

佐竹も笑ひだして、「こつちはね、……三人だつて、昨夜の三人だつて……」

「なアんだ、弱い奴だなア」

さう云つて中井は、エヘ、、、エヘ、、と笑ひ出した。

「さうぢアないけど……、まア、なんでもいゝや、すぐお歸ンなさいつて……」

間もなく女中が齎した返事は、いま食事中だから、すんだらすぐ歸る、といふのだつた。

「なアんだ、飯まで一緒に食つて來るのか」

中井の、その「一緒に」が可笑しかつた。噴きだしかけて、慌たゞしく腹ン俯ひになり、枕もとの痰壺に唾を吐いてから吃驚するやうな大きな空咳をして痰を切ると、佐竹は、改めて笑ひだした。

「どうも……、實に……、困つた奴だなア」

「ちやアんと、あゝいふ土産ものまで用意して出かけて來るんだから……。初つからもう、どだい心懸が違ふんだから……」

「まア、それもいゝが」

佐竹は、笑ひの頬を、ほんの微にもせよ硬ばらせてゐるらしい調子で、「友達の人心だつて、ちつとは收攬するがいゝんだよ。荷物と一緒に、宿屋に擲り込みばなしぢア……」

「やア、失敬々々」

それを私は、ごく輕い調子で云つて、「……なアんて、あいつきつと、凉しい顏をしてはいつて來るぜ」

その様子を、めいめい眼前に髣髴させて笑つた。

「ときに、伊香なんか、いつごろ東京に歸るつもりなんだい」

と、中井が話頭を變へたのに始つて、三人で相談しい〳〵、今夜からの旅の豫定をたてた。三朝(みささ)から松江、美保ノ關、大社、山陽へぬけて下ノ關、別府、四國へ渡つて道後……、口で云へば、どん〳〵道が捗つた。

「おい〳〵、それアいゝけれど、そんなことしてゐたひにやア、とても今年中に歸れやしないよ」

「大丈夫だよ。いゝかい……」

「俺はね、二十七日には、是非東京にゐなくつちアならないんだから、二十六日の……」

「まア、いゝから聞けよ

と、佐竹は、夜具から兩手を出し、高くさしあげて、右の指を、左の人さし指で一本々々折り曲げてみせながら、

「いゝかい、今夜が汽車で、二十二、……三日の晩が三朝さ。そこがもし氣に入つたら二晩ぐらゐ泊つてもいゝが、まア二十三としておいて、二十四が……」

「兎に角俺は、おそくも二十六日の晩には、こゝまで歸つて來てないと……」

「まア、いゝから聞いてろよ」

「よかアないよ」

「いゝよ。……一體、二十七日に東京に用があるなんて、今までちつとも云はなかつたぢアないか」

「云はなくつたつて、あるんだから仕方がない」

「なんだい、それア」

「なんでもいゝよ」

「だからさ、まア、あとを聞けよ。……それで二十四だらう？　あゝ、二十三か。二十四が松江か……」

「伊香はどうするんだい」

「俺は、大晦日までに歸りやアいゝんだ」

「ぢア、どうしても、俺だけ途中から別れて、先に歸らうよ」

「默つてろつたら、うるさいね！……いゝかい、それで二十四だらう？二十四が……、どこだつけ？……あんまりそばでがアく\うるさく云ふもんだから、解らなくなつちやつたぢアないか。もう一度初つからやり直し……」

そんな騒ぎをしてゐるところへ、女中が、風呂の支度の備つたことを告げに來た。これでみんな、わりに床離れよく起きて、階下の部屋の鞄から、楊子齒磨とか、安全剃刀のやうなものを取り出し、ドヤく\と長い渡りを、離れのやうに建てた風呂場の方へ出かけて行つた。眞先に立つた佐竹が、車のついた輕い引戸を、カラリとあけると、そこに、素ツ裸の河田が、布袋腹を突き出し、もうく\と湯氣を立ち騰らせてつツ立つてゐた。

「やア、失敬々々」

綺麗な齒並を見せて、愛想よく笑ひかけた調子が、あんまり豫想どほりだつたので、却つて笑ふにも笑へなかつた。不淨の身をもつて、默つて先に湯にはいつて了ふとは怪からん、そんな冗談を云ひながら、私たちも、丹前を丸めて裸になつた。——缺けてゐた一人が加つたことで、急に元氣づき、やたらに機嫌がよくなつてゐた。



逆目立つ

佐佐木茂索

一

その宿で大原禮吉が目を覺ました時分には、前夜の遊び友達が、もう二人まで、やつて來た。

二人を見ながら大原は寢不足の顏で云つた。

「ふたりか、ぢや僕を合せて三人だね。三人ぢや仕樣がない。」

「うん三人ぢやね。」

さう合槌を打つたのに、別の一人が附加へた。

「だけど、すぐ誰か來るよ。心配はない。」

「心配はない、か。心配がなさ過ぎて、少し困るくらゐだね。ははは。」

彼等は前夜から、四人でやる遊戲に夢中だつた。その爲に、大原は終列車を失つて、東京へ歸へれず、仕方なしに、實は半分望んだかたちで、この鎌倉の宿に泊つたのだつた。前夜は十二人も集つて、三組に別れた賑かさで、夜中過ぎまで遊び耽

つてゐたのだつた。だから、今來たのは二人だつたが、あとから追つかけ、何人でも來さうなのは、明かだつた。

「だけど、來るには極つてゐても、それまでぼんやりしてゐるのは、もつたいないね。誰か呼ばうぜ。」

「さうだ、時間を尊重しやう。」

他の事だと、恐らく尊重しさうもない時間だつたが、こんな事にかけては、少しの浪費も――といふより遊びたさが一杯で待ち遠うで仕方がないのだつた。

呼ぶとなると、電話の利くところが一番いい譯で、おまけに近所だから、水野へすぐ電話をかけさせた。水野は呼出しを待ち兼ねてゐた樣子で、一とたまりもなく遣つて來た。

「ゆうべの今日、ぢやない、今朝だからね。さう朝つぱらから飛び出しも出來ず、實はむづむづしてゐたのさ。」

水野はさう云ひながら部屋に入つて來た。

「ぢや、渡りに舟だね。では早速――。」

からがら彼等は遊び道具を取り出した。そしてほんの少しばかり進行したときだつた。女中が急ぎ足でやつて來た。

「大原さんに、電報で御座います。」

「――電報と、電報んと、――ぽんと行くか。」

「電報、こちらへ置いて參ります。」

大原は電報を手にとつて、どうせ大した用事でもないだらうと開けてみると、意外だつた。

「――こいつ困つた。歸らなきや。――」

電報は彼の妻からだつた。電文は、妻の母が危篤だといふのだつた。直ぐ歸れとも何とも書いたことが[illegible]は

一度も出してなく、唯常識を働らせてゐるに過ぎなかつた。それだけに、直ぐ彼も歸らなければならない譯だつた。

仲間の一人が云つた。

「直ぐ歸りたまへ、他の事ぢやないのだから。――それにしても、此處だとよく分つたね。」

「これや、當り前さ。どうせ碁會所へ行つて、歸らなければ、此處に泊つてゐると睨むさ。それくらゐの事。――だけど、やりかけた計りで、直ぐ投げるんぢや惡いね。それに、水野君までわざわざ呼んで。」

「こんな事はいいさ。早く歸つたがいいよ。」

時間を見ると、汽車は丁度出たばかりだつたので、その間に彼は東京へ長距離を掛けさせた。妻を呼び出して聞いてみると、病人はちよつと持ち直したらしいといふ事だつたので、大原はやや落着くことが出來た。それで發車時間まで、何事もない風で仲間に加つてゐた。

「ここで投げるのは惡いね。第一、殘念だ。折角ひねつてやらうと思つてゐたのに。」

「そんな事云つてないで、捻り殺されないうちに歸ることだよ。」

「そこもある。」

時間が來て大原が立たうとする間際に、別の仲間が一人來て加つたので、競技は彼が投げても差支なく進行することになつた。

東京へ歸り着くと、大原は直ぐタクシをとばして、谷中の奥に病人を見舞つた。病人は思つたほど弱つてゐなかつた。そして彼を認め、床の上へ起きあがらうとさへした。彼と傍らにゐた者とは驚いてとめた。彼は場慣れないので何と云つていいのか分らず、適當な見舞の言葉も出ないので、ただ幾度となく頭を下げた。そのたびに彼の長く伸びた髮

ゐ、額の前にぱらぱらした。

大原は看病疲れと興奮とで色のなくなつてゐる妻を別室へ呼んで云つた。

「僕がゐても役に立ちさうもないから、歸るよ。明日また來やう。」

「ぢや明日いらつしやる時ね、何か御見舞持つて來て頂戴。こんなですもの——。」

妻はさう云ひながら部屋の隅におびただしく積まれた菓子折だの果物籠だのを指した。そして附け足した。

「何も持つて來ないの、うちだけよ。」

「よし分つた。」

うちだけよと妻が云つたのが大原には少しおかしかつた。妻が實家へ歸つてゐて、さうしてそんな義理めいたものを感じてゐるのが本當は彼にのみとめなかつた。大原は彼自身とその兩親との、むきだした仲などを考へて、どうしてよその家はかう規帳面なのだらうと思つた。

「——持つて來るつもりでは、今日もゐたのだがね、何がいいのか分らなかつたし。——あすまでには考へておくよ。」

それから彼はも一度病室へ行き病人にお辭儀した。病人は彼が來たのを嬉んだと丁寧に答へた。それで彼の氣持ちが輕くなり、來る途中の重苦しさをすつかり忘れることが出來た。

翌日大原は何か持つて病人を見舞ひたいと家を出た。だが、病人を直接慰めさうもない菓子折や果物籠を下げる氣にはどうしてもなれなかつた。さういふ形式だけの事は何としても爽迦らしくて、自分だけはもう少し自分の氣の濟むものを持つて行きたかつた。だが何にしても、彼は餘り金を持つてゐなかつた。三四日前なら、それでも多少はあつたのだが銀行で使つたりしたので、丁度ないどん底だつた。で、考へた揚句だ、植木鉢でもといふ平凡な思案だつた。

花屋で彼の氣に入つた一鉢があつた。大きな花のやうな葉が一枚、綺麗な色彩を見せてゐた。彼は高さうだなと内心恐れながら値を聞くと、それは一圓二十錢だつた。一圓二十錢は安すぎた。それだけの見舞ではと、流石に金に困つてゐた彼にも、何だか安さが氣を咎めた。しかし、彼は自分の氣に入つたものだから、その一枚の葉をぶらさげて病人を見舞つた。

妻も葉つぱを見て綺麗だと云つた。

それでも大原は公然見舞だと出しかねて、彼が歸つたあとで、默つてそつと病人の枕もとに置いてくれるやうに、妻に賴んだ。

その後四五日してまた彼の見舞つた時だつた。ずつと寝泊りの看病してゐる妻が彼にそつと云つた。

「あの葉つぱね、ママの氣に入つてゐるのよ。ときどき、大原の葉つぱ見せて、て云ふの。」

「さう。でもそいつは困つたな。」

「え、何？」

「あれ實は一圓二十錢なんだよ。あまり安いんで何だか――」

「まあ、そんなものなの。だけど――そんな事いいわ、何でもないことだわ。」

「さう思つてくれる人ばかりぢやないんだよ。さうは仲仲思へない人が澤山ゐるからね。」

妻の母は、三月ほど病床にゐたが、やがて奇蹟的に全快した。

それから二た月ばかり經つたある夕、大原と妻とは、僅かばかりの買物かたがた銀座を散歩してゐた。そしてもう歸途に就かうとしたときだつた。大原は不意に云ひ出した。

「やつぱり行つてこやう。このまま歸ると反つて氣になつて、それこそ一頁の讀書も出來やしないから。」

「さう。ぢや行つてゐらつしやい。でも、隨分好きね。一層のこと將棋の先生になるといいわ。」

「なれるものなら、なりたい位だ。ぢや行つて來るよ。」

その日將棋の會のある事は、前から通知されてゐたので、彼はそれを一つの樂しみにしてゐた。しかし、當日になつて、さてとなると、流石にちよつと、會場の遠過ぎることが重かつた。會場は、兩國驛から三十分ばかり汽車に乘る小さな町にあつた。彼はまだ兩國驛から汽車に乘つた經驗は一度もなかつたので、行つてみたい氣も多分にあつたが、不案内のところへ、それも大した用事でもあるのなら別だが、高が將棋でと家人に思はれてまで出かけるのは、さすがに重かつたのだつた。ぢや思ひ切るかといふと、さうもならず、到頭ぎりぎりの時間にやつと銀座で行く決心を固めたのだつた。

その町には大原の知合の有名な將棋の大家が住んでゐた。そしてそれを取卷く數人の同好者があつた。彼は其處へ飛込んで行つて、その晩戰ふのだつた。戰は大原に有利で興が乘りそれにひどく勸められもしたので、彼は到頭その晩その町に泊つてしまつた。

翌日も彼は朝から連中と將棋を指した。夕刻になつて彼が歸らうとすると、將棋の大家は彼を送つて東京まで出やうと云ひ出した。

「無理に泊めておいて獨りで歸しちや奥さんに濟まんからな。送つて行かう。」

「そんなにしなくてもいい。」

さう斷つたが、結局送つて來ることになつた。それで大原とその大家と、それに一人の有志が加つて、東京へ出た。

大原の宅は東京の西郊なのでそこまでは大變だつた、皆で一緒に來ることになつた。

「昨晩は無理に泊めましてね、それで奥さん、送つて來ましたよ。――電報屆きましたらう？」

大原の宅ではすぐまた將棋になつた。そして、やつと中盤どころまで指し進んだときだつた、彼の門前に不意な自動車がとまり、けたたましい呼鈴が鳴らされた。女中と一緒に大原の妻が玄關へ飛び出して行つた。――玄関で、入亂れた會話が聞えたかと思ふと、細君が座敷へ取つて返して來た。

「ちよつと――。」

「何？　其處でお云ひ。」

「パパが歿くなつたのですつて。」

「なに？――。」

大原は妻の顏を見た。妻は興奮の赤い顏をしてゐた。目が光つてゐた。

「稲ちやんが自動車持つて迎ひに來たの。」

「さうか。」

大原は盤を眺めながらちよつと當惑した。それでよかつた。

「一人すぐ行つといで。俺はすぐあとから行くから。」

構はず彼は指し續けやうと思つた。遠來の客の爲に、一番だけでも指し終らうと考へた。が、彼が次の駒を下すより

早く、客の一人は云つた。

「こちらはお構ひなく。遅くなりもするからこれで御暇しませう。また改めて伺ひますから。」

「さうですか。でも、――」

「いやさうぢやありません。こんな時には二人で直ぐ駆けつけるものですよ。どつちかが外出でもしてゐて、間に合はぬといふのなら兎に角、さうぢやなければ揃つて駆けつけるものですよ。」

そこへ妻が口を出した。

「わたし一人で行きますから、どうぞ共儘に。」

「奥さん、そんなこと云ふものぢやありません。是非御一緒にいらつしやい。私達も、ついでに自動車に途中まで乗せて行つて貰ひませう。その方がいゝから。」

「さうですか。そいぢや何ですが、これで失敬させて貰ひますか。」

大原はさういつて、ほつとした。危篤といふのなら兎に角、卒中で死に切つてゐる跡へ急いで駆けつけることは、まして一つの義理を欠いで別の義理を足すことは、よし事の軽重があつても、彼の平常の心持から云ふと若干不賛成でもあるのだが、其場は默つて彼は迎への自動車に乗つた。

自動車に乗ると急に厳かな氣持ちが大原に湧いて來た。人が死んだのだといふ事がはつきり分つて來た。

「ねえ奥さん、これでもう一晩大原さんを泊めておくと大變なことになつた譯でしたね。何も知らずに明日あたりぽんやり歸つて來て、そいつは事だと駆けつけたんぢや、将棋さして家を空けた事が一度で分りますからね。」

から将棋の大家が云ふと、もひとりの客が云ひついだ。

「將棋に凝ると死に目に會へんなんてね——いやさ、それや少し意味が違ひはしますがね、どつちみち、よくは云はれつこなしですからね。こんなときは、とても惡い口實でさあね。」

二人の客を途中で下して夫婦と稻ちやんきりになると大原は妻に云つた。

「この前は鎌倉だし——よくよく妙な日ばかりだね。尤も、今度は歸つてゐたのだが。これだつて、もう一汽車遲く歸りでもしやうなら、やはり後から僕ひとりが驅けつける事になるんだつた。」

「さうね。」

「そしたら、とても評判の惡い事だつたらう。しよつ中、出あるいてゐるやうで。——」

「あんまり出歩るかない方でもないぢやないの。」

「さうぢやないさ。——」

それ切り默つてしまつた。しばらくして何か云ひ繼がうと大原が妻を見ると、妻は自動車の硝子窓に當り出した小さな雨を見入つてゐた。どことなく頼りない夫のことなどを、父の死と一緒に考へてゐるやうだつた。

「——降つて來たんだね。」

「え、さつきから。」

「あんなに病氣だつた母さんが治るし、その時分は丈夫だつた人が急に亡くなるし——。」

「それあたしも今考へてゐたの。」

「ほんとに不思議ね。」

稻ちやんは男だが、時どき女のやうな言葉づかひをした。

行きつくと、妻は門のくゞり戸の扉を手で押へ、音のしないやうにそつと開けた。全で重病人迄でも見舞に來たかのやうだつた。その妻の氣持が移つて、大原も足音を忍ばせたが、一歩這入ると家の中は思ひの外の陽音だつた。線香の匂ひが玄關に一杯だつた。

死者はまだ寢床に横にしたまゝだつた。妻の長兄が裂れをとつて死顏を見せてくれた。

その後で大原夫妻は色色な人に雜多な挨拶をした。大原は死者の血筋の人人に悔みを述べた。さうかと思ふと、他所から來た人の悔の言葉に禮を述べなければならなかつた。右向くと左向くとで彼の身分がぐるぐる變り、何となく落付けない存在だつた。

翌日の納棺の時には大原も手傳つて、死者の冷たい足を握つた。そして棺の前にぬかついて幾度目かの燒香をした。時が經つに從つて人の死んだことがはつきりし、悲しさが本當になつて來た。

彼が人氣のない玄關に坐つて、ぼんやり弔問者の名控えなどを見てゐると、そこへ妻と妻のすぐの姉が來た。妻は大原に云つた。

「香奠出すのよ。」

「さうか。」

「持つてゐる?」

「いくらか。」

そこに妻の姉が口を出した。

「あんたがたは小さいから少しでいいのよ。十圓でいいわ。」

「さうですか。これや――。」

姉が來ると妻は

「横濱は百圓よ。ちい姉のとこも多分さうでせう。」と云つた。

「金の高の問題ぢやないさ。ある人は出すがいい。」

「ある人になつて見たいでしよ。」

「これも問題ぢやないさ。分り切つてゐる。」

妻の姉が香奠を包む紙を持つて戻つて來た。その時妻が云つた

「花をあげたの、姉妹の名で。もつともあたしは一文も出さないで名前だけ出してもらつてあるの。」

「さうか。それは何うも。」

かう云つて大原は心もち妻の姉に頭を下げた。

「どう致しまして。」

姉は冗談にしてしまふやうに微笑した。

告別式の日、妻の長兄は大原に云つた。

「昨晩御親父がお出で下さいましてね、それを私が存じませんものですから大變失禮いたしました。」

「いや、どう致しまして。」

「思ひ違ひを致しましてね、おやぢが生前御贔屓に願つてゐたお茶の宗匠でもあらうと思ひまして、すつかり失禮しました。他の者に注意されるまでは少しも氣がつきませんでしたので。」

「いや。――」

――この父が後日大原に次のやうな事を云つた。

「――わしもお悔みに行つたのぢやが、仲々立派で結構ぢやつた。だが、俺が一つ殘念に思つたのは、わしの花輪が佛前に飾つてなかつた事ぢや。」

「さうでしたか。花輪をおあげになつたのですか。しかし父、どうして飾らなかつたのでせう。」

大原は意外過ぎたので若干の憤慨を藏してさう云つた。

「いや、あげはせん。わしは上げはせなんだ。」

「ぢや――。」

「上げんものの飾つてないのは當り前ぢやといふのやろ？それはさうぢや。ぢやがな、わしのつもりでは、お前がわしの名で上げておいてくれたらうと思つてゐたのぢや。そのつもりで行つたのぢやが、なかつたので殘念ぢやつた。」

それは氣がつかぬことでした。」

「これからもある事ぢやからな。――あのとき内務大臣の花輪があつたな、わしの名であの三倍ものが欲しかつた。――二

父は茶の宗匠と間違えられたことなどは、氣にとめなかつたのか、すつかり忘れてゐた。――

告別式では、大原も親族の席に佇立して、會葬者に默禮してゐた。妻の長兄が可なりの役人である關係から、大原が寫眞で見知つてゐる政治家なども――例へば鼻目金で有名な前官禮遇とか、鼻の穴の上を向いてゐるので記憶しやすい市長だとかも燒香してゐた。その中に交つて大原の兄も、しほたれた紋附姿を現した。

焼香すると其儘親族席に這入つてとどまる人人があつた。その中には、妻の長兄の妻の里の當主もゐた。この人は伯爵だつた。伯爵夫妻は親族席の最前列に立たされた。――こんな事も大原には一寸分らない點だつた。伯爵だから多分右枕になるのだらうとは思つたが、葬式といふものは、そんなものでないやうに思へて仕方がなかつた。妻の姉なり、姉の夫なりが妻の長兄、つまり喪主につづいて立つていい筈だと彼は思つてゐた。死者の子供が先に立たないで伯爵が先に立つのは、大原の多少嗤ひたいところだつた。死者の血筋の又の又の者が、又の者より先に立つ理由は、伯爵の有難味をおいて他には見當らないやうだつた。又の又の者が立ちはだかるなら、大原の兄も又の又として立ちはだかつていい譯だつた。たちはだからないのは、大原の兄が貧しい商人であるからだとしか受取れなかつた。或は若し故人とのなじみの深淺で行くなら、大原自身でさへ、席末にただに立ち得ない筈かも知れなかつた。内輪の者よりは客らしい客を先にするといふのなら、その謙遜の美徳には十分頭を下げてよかつた。死者に一番遠いものが偶然先に立ちはだかつたのなら、それもそれでよかつた。ただ伯爵だけに、偶然とは云はせないものがあつた。事實偶然でもないのであつた。

「いろんな事が厭なものだ。いろんな厭なことがある。――貧乏なんかも厭だな。」

あとで彼は妻にさう云つた。

三

このあと、およそ一と月經つた時だつた。大原と妻とは、雪の降る溫泉場へスキーに出かけてゐた。大原が先に出かけて妻が二日おくれて來、そして二日目の午後早早だつた。彼等は一通の電報を手にした。電文は妻の養父の急死を知

らせるものだつた。あまりの意外が續くのに彼等は言葉がなかつた。

何よりの急務は歸る仕度をすることだつた。山の麓へ電報を打つて彼等は俥を命じた。時間表を調べると、一番手近かな列車にさへ五時間以上の間があつた。大原は仕度をすつかり仕舞ふと妻に云つた。

「ぼんやりしてゐたつて仕樣がないから、僕は名殘りの一と辷りを辷つて來るよ。」

「え、さうなさい。」

一緒に出かけた仲間は、

「これからだがな。」と云つた。「これからが面白くなるといふ時だがな。――しかし、外のことぢやないから仕方がない。」

「ああ。」

簡單に答へて大原は辷つてゐた。妻の養父が死んだといふのに、呑氣らしく辷つてゐて、とも思つたが大原は彼自身が死んだのでない限り、どうせ汽車の出るまでは、やきもきしても仕方のないことが分つてゐる以上、そんな半端な時間は辷つてつぶしてゐる方がいいと考へたがる男だつた。

「これきりだからな、うんと辷るんだ。」

彼は仲間にさう聲をかけた。

「ああ、うんと辷りたまへ。歸りが樂ならくたびれないし、さ。」

「だけど折角諸君を引つぱつて來て、すまないな。」

「あとが淋しくなるね。――だけど僕達ももう歸つてもいいんだよ。」

「これからだつてんぢやないか。」

「それやさうだがね。」

二時間ばかり辷ると彼は宿に戻り、橇にゆられながら停車場へ山を下つた。

「パパの四十九日も濟まないうちに、こんなところへ來たりして。――よつぽど止さうかと考へたのだけど。」

妻は汽車の中でさういふ事を氣にしてゐた。

「俺はよつぽど不思議だ。いつも遊んでゐる最中にこんな事にぶつかる。この前もその前も――實に變だ。」

「勉强なさるときより、遊んでゐらつしやる時が多いといふ事になるのよ。」

「結局さうかな。――それならそれでいいが、兎に角不思議だよ。何かやつぱり罰が當るのかな。」

「――だけど何ね、こんなに遊びあるいてゐると、のん氣に見られるわね。」

「金もありさうに見えるだろ。」

「呑氣あつて？」

「あるもんか。宿料拂つて橇代拂つて、汽車の切符で丁度一杯だ。向ふへ着いてタクシ代ぐらいあるだらう。」

「今度は今までより一番お金がいるわよ乾度。どうするの？」

「どうしやうもない。どうにかなる。」

「あなたの事だから何うせ例によつて、どんなことでも何うかなる、でしよ。」

「さうさ、それ以上は俺には分らない。」

大原は貧棒が好きでなかつた。しかし彼の妻は大原以上に貧棒がきらいだつた。貧棒そのものより、貧棒によつて生

する體面問題を病的に恐怖してゐるやうだつた。月末に勘定取りが來ても、大原なら無いものは無いで云ひ切れるところを、妻は云ひ切れないやうだつた。——

「冗談はおいて、本當に困つたわね。どうか出來ない？」

「出來ない事はなからう。——だけど此汽車が著くのは明日の未明だぜ。そんな早朝どうしやうもありはしないさ。困つたらちい姉にでも一時借りておくさ。どうせ使ひ途のない金もつて先に行つてゐるだらう？」

「なんだか始終のやうで頼み難いわ。」

「なんなら俺が頼んでもいいさ。あとで返せる事は確かだから。」

「こんな事云つたつて仕方がないわ。それより、行けば直ぐお通夜が續くから、一寸でも眠つておきましやうよ。でもあたし眠れそうもない。」

大原も窮屈な手足の伸しやうで、眠れそうもなかつたが、それでも上野に著くまでには幾つかの驛を知らずに過ぎてゐた。

彼等は上野に著くと、手荷物はあり、粗末なスキー服のなりでもあるので、一先づ自宅に歸り、服裝を改め即刻出直した。

「まあお早くございましたわね。お疲れでございませう。」

居合せた人人は大原達にさう云つてくれた。しかし大原達は、遊びに出かけてゐたことで、何處かまだ心にひつかかりがあつた。

ひとしきり手ん手の挨拶で別れ別れになつてゐた大原と妻が落ち合ふと妻は直ぐ云つた。

「早速花崎よ。皆んたは注文したんですつて。ちい姉も。」

「また名まへを出させて貰ふのだらう。」

「さうは行かないわ。それどころですか。ちい姉日くれ。聰吉さんは今度は一人で大きなのを上げなけやいけないて。」

「さうか。ぢや注文してくれ。」

「またさうのん氣ね。お金どうするの。」

「養家と云へばうちも同然ぢやないか。何とか都合してもらへるだらう。」

「さうは行かないわ。第一から混雜してゐて、それどころですか。」

「おや小い姉だ。促してもらへ。それより仕方がない。早くしろよ。早く電話かけて注文しちまへ。」

「仕方がないわ。——それからまだあるのよ。今夜と明晩がお通夜ですつて。その人達に出すものをあたしたちが上げなくちやいけないのよ。小い姉のとこは大阪ずしか何かよ。」

「ぢやうちはしのだとお菓子にしろよ。」

「しのだとお菓子だなんて、それだつてないのでしよう？」

「ないのに分つてるぢやないか。愚圖愚圖云つたつて今さら始まるか。花輪と一緒に先づ小い姉に頼つちまつとけよ。」

わざとぞんさいに口利きながらも大原は酷く寂しかつた。何だか僞にならない事で一杯のやうな氣がしてならなかつた。それが皆一つの原因だと考へると——。彼は不意に父の言葉と思ひ出した。

——またあることだ。——内務大臣の三倍の花輪——。

いつそこれも小い姉が誰かに賴まうかと思つた。だが立て替の立て替は何うも口に出せなかつた。妻だけ迄にも肩身の狭い思ひをさせる事を、ぢつと彼は噛みしめてゐた。

大原は一隅に默つて坐つてゐた。義家に出入する人人は全然知らなかつたので、誰も彼に言葉をかけてくれなかつた。彼は何に手を出していいのか分らなかつた。手傳ひ手は澤山あるので、彼のする事はないやうでもあつたが、誰かが何かを命じてくれたらと彼は心で念つてゐた。妻の義母でも若し言葉をかけてくれたらと彼は幾度か思つてゐた。こんな場合、親しみの淺い目下から目上へはなかなか近寄つては行けないものだ、が目上から目下へならどんなにでも口が利けるものなのだ。何とか一こと云つてくれさへすれば、彼は取りつく島にすぐにとりつくにと、大原は念つてゐた。

—ぼんやりしてゐると妻が來て云つた。

「小い姉に賴んだわ。賴みにくくて困つたけど。小い姉も妙な顏してたわ。だつてスキーに行つてたりしたもんだから——。」

「それやさうだらう。一文なしで遊びに出かけたとはよも知るまいからね。世間の人といふものは、金がはいれば先づ貯めて、貯めて餘つたら遊びに出かけるのだからね。だからとれを逆に行くと、遊びに出かけるからには貯つてゐるんだらうとね、さう考へるだらうさ。無理もないが、無理があつてもなくても、ないものはないさ。」

「ないのに遊びに出かけてゐるとは——この月末の見當さへつかないのに遊びに出かけてゐるとは、まさか思はないのね。」

「思ふものか。さうと知つたら、莫迦だといふよ吃度。金もないに遊んで何が面白いか莫迦な、と云ふよ。その點世間の人は明瞭だよ。」

「寒い中へわざわざ物好きなこといふんでせう、さう云はれて、お金借りるの、隨分つらかつたわ。」

「いい修業だ。買つてもすぐ苦勞だよ。」

「いやいや、買つたつて返すわ。」

「だがまあ、貯金帳のないなんて事は、あの人達には考へられないだらうからな。いざといふ時の仕度が、これくらゐきつぱりないとは夢にも思はんところだからな。思はんどころか、不安で不安で生活しきれん位だらうよ。家中探しても、大抵の場合五圓と餘裕のつかないところ、全く珍だらう。」

「そんなこと厭味たらしく威張つてないで少しは貯める工夫ね。」

妻は、たしなめるやうに強い調子だつた

その晩はお通夜だつた。大原は前晩汽車の中で眠つてゐないのと、その前數日スキーの少し無理な運動の疲勞とが一緒に來て、とても座に堪へられない苦しさだつた。ともすると頭が前にがくりとした。彼は宵張りの朝寢坊なので、大抵ならお通夜位に閉口たれるのではなかつたが其晩ばかりは參つて仕舞つた。眠たくなると彼は懐手した手で腿を捻つてゐた。痛いな痛いなと自分で思ひながら自分の手で抓つてゐるので、仕舞には自身滑稽で仕方がなかつた。昔の人が勉強する時に、眠くなると自分で腿に錐を立てたりしたといふ小學校の讀本を思ひ出したりした。彼は勉強の時にはまだそんな殊勝な經驗はなかつた、此お通夜で始めて經驗して苦笑するのだつた。

基督教なので、翌日教會で葬儀を執行した時には牧師の說教の間、前夜にも增して眠かつた。彼は大せいの中で居眠つてはと袂の下で腿を抓つてゐた。彼の隣りに掛けてゐる親戚の青年は、不意にがくりとやつた。大原は同情せずにゐられなかつたので、自分は腿を抓りながら、此青年の脇腹を肘で時時押してやつてゐた。

教台から墓場へ行つて其處でまた幾度目かの讃美歌があつた。祈禱があつて讃美歌が始まると、大原は急に無暗に悲しくなり、とめどなしに涙がこぼれて来た。彼は人に見られるのが厭で、隅の小暗いところに獨り顔をかくしてゐた。

「さ、お別れをなさい、皆さん。」

牧師がさう云つてゐた。棺の蓋が開かれ、人人は順順に死者の顔を覗き込みに行つた。が大原は、もう澤山といふ氣で、行かなかつた。覗いて、もう一度涙を流すことなんぞ、澤山過ぎるのだつた。一體何故基督教ではこんなに度度棺の蓋を開けたがり、悲しさうな讃美歌をその都度唄ひたがるのだらう。悲しさが汐の引くやうに引いたあとで、また思ひ出させるやうな作事——「遺された者」の悲しさを大根おろしにかけるやうなむごい事を幾度やれば氣が濟むのだらう——大原は牧師を罵りたくさへあつた。睡眠不足で神經が疲れてゐて、彼は泣き易く腹立てやすくなつてゐた。

妻の養父は立派な人物であつたらうが、それよりも立派な容貌を持つてゐた。いつか友の養父の容貌の話が出たとき、大原は妻に云つた。

「ゲエテ型だね。日本人としちや、あれ以上の形ちは一寸ないかもしれない。あれでもう少しインネレ・シエエンハイトといふやうなものがあつたらね。」

「また知りもしない獨逸語ね。」

「とかく使ひたがる。——それは兎に角、立派な顔だよ。ゲエテと常陸山谷右衛門とを一つにして割つた見當に近いかな。」

死顔は生前より立派なやうに見えた。大原は、こんな顔の人が何故みづから死を欲したか、不思議でたまらなかつた。

四

「どうせ何とか思はれついでから、また出かけるよ。」

或日大原は妻にさう云つた。出かけるといふのはスキーに出かけるといふ意味だつた。思ひがけないことで中絶して、それだけに酷く未練が殘るのと、健康の爲にいい氣がするのとで彼は出かけたくて堪らないのだつた。妻には事後承諾にして、彼は友達と出かける事をもう約束してしまつてゐた。

「さう、何日頃から？」

「あす出かけるつもりだ。神速だらう。」

「神速はいいけど、お金あるの。」

「汽車賃と辨當代ほどある。滯在費は向うへ行つてから何とか工夫するつもりだ。」

「そんならいいけど。――だけど埋葬式が二十二日よ。歸つて來られる？」

「來られるさ。明日が十七日だらう。十八日に着いて十九、二十と二日ある。二十一日の夕刻に出發すれや二十二日の朝、埋葬式迄には間に合ふよ。」

「まあ、そんなにまでして出かけたいの。ほんのちつとばかり。」

「また出なほすよ。二十二日の晩、埋葬式濟んで直ぐ出なほすよ。」

そのつもりだつたが、今度は友達の方が都合が惡くて、出發は翌翌日の十八日に延びる事になつた。それでは、なか一日しか居られない事になるので大原は仕方なしに埋葬式を濟ましてから出發することに改めた。仲間と賑かに汽車旅

行してこそ面白いのだが、一人であとから追つかけるのぢや、いささか楽しさを削られるものだつた。

埋葬式の前日、妻が大原に云つた。

「あす花を供へたいわ。あげる人皆告別式にあげてゐるから、明日は淋しいに極つてゐるわ、だから何とかして花をあげたいわ。」

「花か。よし、あした供へやう。」

「だつてもう汽車賃でさへもないでせうし――。」

「あした拵へるよ。」

「あすぢや駄目よ。花輪は今日中に注文しとかなけや間に合ひはしないのよ。」

「花輪作るて、そんなに暇のかかるものなのか？――が、まあいいや。今日つたつて仕方がないのだから、明日金を拵えて、式までに間に合はせよう。引受けたよ。」

當日彼は早目に出て仕事先で前借をし、その近所の大きな花屋で、これから、一時間内に花輪が作れないかと訊ねた。

「それはちと無理で御座います。ここでは綺麗に出來ません。が、ちよつと本店の方へ問合せてみませう。ひよつとすると出來るかも知れませんから。」

店員は本店に電話をかけてくれた。が、本店の返事は駄目といふのだつた。

「駄目かね。――それや駄目でもあらうが、そこを何とか行かないかね。築地までは僕が持つて行つてもいいんだ。拵えてくれさへすれば、僕が本店へ取りに行つて、自分で運ぶから。もう一度交渉してくれたまへ。」

店員は又電話をかけて交渉してくれた。そして、取りに來てくれるなら作らうと話が纏つた。それを聞くと大原は他の仕事先へ廻り、そこでも金を手にし、タクシを花屋の本店へ走らせた。――これで花輪も出來たし、今夜スキーにも直ぐ出發出來る――。彼は勇んで花屋へ飛び込んだ。

花輪は出來てゐた。花輪と彼はタクシ一杯になつて墓地へ馳けた。

「あら花輪出來たのね。」

妻は嬉しさうだつた。大原は得意で、

「さうさ。花輪ぐらゐ何うかならないで何うする。」と云つた。

「いい景氣ね。自動車待たせておくの。」

「いいや、さうぢやない、返すんだ。」

彼は運轉手におつりはいらないと一枚の紙幣をやつた。

「それで今夜出かけるの?」

「出かけるよ。汽車賃も辨當代も、滯在費も出來た。當分行つてゐられるだらう。」

彼がまたスキーに出かける事は外の人達も、妻からでも聞いたのか、知つてゐた。

「面白いものですか。」

そんな事を大抵の人が訊ねた。

「面白いですね。一度辷つたら、辷らなくても轉んでも、忘れられないものですよ。溫泉に浸つて、スキーをやつて、それで東京にゐるよりは結句安上りなんですから、素敵ですよ。」

埋葬式が濟むと大原は急いで家へ歸り、仕度をした。

「これに行つてらしたら、少しは働くことにしませうね。」

「あ、さうしやう。」

「あんまり貧棒も厭ですから。いつ否食がいるか分らないから。」

大原は豫定通りその晩出發した。だが何故だか此前ほど愉快ではなかつた。心が、浮き立たさうとしても、沈みかけて仕方がなかつた。——何か不自然がある、さういふ氣持ちだつた。

五

目的地では、先發した仲間がさかんに滑つてゐた。大原も敗けずに滑り出した。

雪質は此前より惡くなつてゐた。水氣が多くてスキーの裏へこびりつくやうだつた。やたらにパラフインを塗つても、それでも滑りがよくなかつた。クラストが出來てゐて思はぬ轉びやうをしたりした。

「雪質が惡いぜ。」

「惡いとも。あざらしの皮つけてるやうだ。」

本當に、雪がスキーに抵抗して仕樣がなかつた。

雪がスキーに抵抗するやうに、大原は何か心に逆か目立つものを感じてならなかつた。何か不自然がある、これが自分の生活にあると云つて仕舞つては、味のなくなるものだつた。

「大原、また電報が來るぜ。」

仲間の一人がさらからかつた。

「うん、二度ある事は三度あるかも知れんて。今度もし電報が來たら、俺はもう一さい遊戯はお廢しだ。」

「大げさだね。そんなことを云つてゐると本當に來るぞ。」

大原は全く、また電報でも來やしないかと、びくびくものでゐた。ひよつとすると來さうな氣もちがしてならなかつた。妻の危篤でも知らせて來さうでならなかつた。妻が死んだら、これは香奠の心配はいりさうもなかつた。が肝心の葬式が出せるかどうか、出せる當は少しもなかつた。葬式どころか、寢棺一つさへ買へさうもなかつた。

「お前が死んだら、庭の隅に埋めてやるよ。犬や金魚なみだ。」

「今どき土葬は駄目よ、許可されないわ。」

「それは大へんだ。」

「犬や金魚より不便な譯よ。さうは手輕に行かないだけ困りものね。」

こんな妻との會話を思ひ出した。

彼は猛烈に雪の斜面を滑降しだした。

母の秘密

宇野浩二

一　弟の記憶

これは今からさつと三十年ばかり前のことである。もつとも、この物語にはなるべく「さつと」とか、「ばかり」とかいふ曖昧な言葉を使はない方がいいのである。使はない方がいいばかりではない、出來るだけこの年號を正確にいふ必要があるから、もう少し愼重に考へながら始めよう。

私は七月生れで、今年數へ年三十六歳であるが、父は私の數へ年（以後斷書しない限り、唯年といふ時は數へ年のことにしておく）四歳の三月に腦膜炎で死んだ。勤め先の筑前博多で死んだのである。が、私には博多の町といはれても殆ど記憶はない。だが、博多の記憶に違ひないと思はれる、次のやうな記憶が一つある。

何でも私は自分の足でよち〳〵と疊の上を、多分倒れないやうに、といふよりはさういふ幼な兒の癖として兩手を奴凧のやうにひろげながら、よち〳〵と歩いてゐた。自分の身體が小さかつたせいか、海のやうに廣々と疊の敷かれた部屋のやうに

思はれた。たしか自分で唐紙を開けたやうな氣がする。さういふと話が前後するが、自分の歩いて來た背の、唐紙からこちらの部屋の記憶はないから、唐紙を開けて入つたところの部屋が、今いつたその暗い、廣い闇の部屋なのである。闇ばかり覺えてゐるところを見ると、部屋の中に餘り道具類などを置いてない、座敷の間だつたのだらう。その部屋のまん中に、――といつても、廣い座敷だつたから、どちらかといふと、私が入つて行つた唐紙の方寄りに、私の父が如何にも大病人らしく、厚い、大きな蒲團の中に寢てゐるのだつた。あたりは息を凝らしたやうにひつそりと靜まり返つてゐた。考へて見ると、一家の心棒である人が大病の床に着いてゐたのであるから、ひつそりしてゐたのは當然で、多分人々は話聲にも遠慮してさゝやき合ふやうにしてゐたに違ひない。私は目の觸れる範圍にどういふ人がゐたかも覺えてゐない、といふよりも私の記憶の景色にはその中に誰も人がゐなくて、天井から氷嚢が吊つてあつたのを覺えてゐる。蒲團も吊つてなかつたか知ら。その下に父が眼鏡をかけて、行儀よく仰向けに寢てゐた。父が私を見て笑つたやうに思ふ。その時人々が（誰々か分らぬが）何かいつたやうに思ふ、そして私はすぐ父の傍から連れ去られたやうに思ふ。

私の父が死んだのは三月二十日であるから、これは私が生れて滿二年と八ケ月の頃の記憶に違ひない。「私の父は或日突然腦充血を起して、十日程床に就いてゐて、そして死んだのである。」と、以下私が嘗て書いた文章を少しはかり引いておく。「私にその時の暗いそして片附けられた座敷と、天井から吊るされた氷嚢と、物々しい寢床の樣子と、眼鏡をかけた父の顏と、そして不思議なことに、そこへよち〳〵と一人で危なつかしい足取をして歩いて行く私自身の姿とが覺えてゐる。私は小奇麗な着物を着せられてゐた、そして羽二重の袖無しのちやんちやんこを羽織つてゐた。その位の年頃の子供をさして、人は頑是がないといふが、實際その時私は頑是がなかつた。何故といつて、私はその時の私の心持を覺えてゐるが、私はその時殆ど何の心配もしてゐなかつた。だが、謂はゞどこかいつもとは違つた。變にたゞならぬ光

畳を下欲むの底に感じてゐたやうでもあつた。無論、そこに寝てゐる人が死にさうだといふことも、その人が死んだら大變だといふことも、何にも考へてゐる筈はなかつた。そして、唯その眼鏡をかけて仰向きに寝てゐる人の傍へよちよちと歩いて行つただけである。そこへ乳母が現れたのか、看護婦か、母か、そして彼等が私を抱いて外の部屋へ連れ去つたのか、後は全く私の記憶にない。唯かうして書いてゐると、何だか、さうして眼鏡をかけて寝てゐた父が、私の顔を見て何か物をいひさうにしたとも思へるし、何かいつたかも知れないとも思へるし、いへないで悲しさうな顔をしたとも思へるし、割合に穏かな顔をしてゐたやうにも思へる。が、こんな風に無理に記憶を呼び出してゐると、知らず知らずおまけをつける危険があるから止める。（下略）」

もう一つ、たしかに博多の町についての記憶がある。これは後で分るが、父が健在だつた頃のことだから、先のよりも一層古い記憶に違ひない。

それは遙か離れたところに、城の濠と、城壁とが見えるのである。壁は白壁で、下に古びた石垣があつて、石垣の足を青ずんだ濠の水が洗つてゐる。（もつとも、濠の水の記憶は確でない。）そして、それ等のものが、或派の日本畫の背景に見るやうに、それ等だけが一切のものから切離されて、全く背景のやうに見えるのである。さて、それを見る私はといふと、私は乳母だか女中だかに負はれてゐたらしく、彼女の肩と、髪の毛のある後頭とが半分づゝぐらゐ間近に見えた。或は見えたやうに思つたといつた方が正しいかも知れない。そして、その負はれてゐる者の肩越しに、先にいつた城の背景とは別々にして、一つのブランコが極めてゆるやかに動いてゐるのが、私に愉快に眺められるのである。何故といつて、そこに私の兄が乗せられて、誰かゞそれを揺すつてゐるのだらうが、その人は分らない、唯ブランコに乗せられてゐる兄の顔が、笑つたり、或は顰め面をしたりする様だ。……

その外に母もゐたやうな氣がするし、殊にどういふのかばかに大きな洋傘をさしてゐる父がゐたやうな氣がするのだが、それ等は餘りはつきりしない。唯、いつもいふやうに、私の兄の目は少し尻下りで、その目の光が妙にどんよりしてゐるのは、彼は多分父の飲酒のたゝりを受けたのであらう、その爲に生れて間もなく腦膜炎に罹つて、それ以來、白痴といふ程ではないが、頭腦に缺陷が出來た、つまり足りない人になつたのだが、その彼の顏が、その時彼はやうやく十歳位であつたのだらうが、その頃からさういふ薄ぼんやりに見える十歳の少年の顏で、ブランコに搖られながら、笑つたり、顰め面になつたりしたのを、私は長い間覺えてゐた。

私は或時（といつても、十二三か十四五歳の時分だつたらうと思ふが、）母方の祖母にこの城と濠とブランコの話をすると、彼女は「お前はまアそんなことを覺えてゐるか、よく覺えてゐるねえ、」と心から感嘆したやうにいつて、「あの時は私も一所だつたんだよ、それはお前覺えて ゐないかい？ さう、お父さんもお母さんも一所だつだ、それから吉生さんの××さんと、ムムさんも一所で、兄さんをブランコに乘せたのは××さんだつた、たしか。あれは多分お前のお父さんの死ぬ前の年の夏だつた。それは筑前の博多の公園だよ、そのお城の見えるのは。そしてね、あのお城の壁は地震か何かでひとが入つて、半分落ち込んでゐるのを、みんなで話してゐると、お前がそれを目に止めて、みんなの眞似をして「お城の壁、おてこんでゐる」と筑前言葉でいつたので、みんな大笑ひしたことがある、その時のことだよ。」

この祖母のいふのと私の斷片的な、微な記憶とが、必ずしも同じ時のことだとはいへないが、兎に角、これ等が私の最も古い記憶に屬する。三歳の時のこととすれば、三十三年前の記憶だ。

ところで、私は父が死んだのは幾歳であつたか知らない。が、母が私を生んだのは、二十六歳の時である。私の足りない兄は私より七歳の年長だ。父が死ぬと共に、間もなく私たちは母と、前にいつた祖母たちに連れられて、親類のゐ

る神戸兵庫に越して來た。そこで神戸兵庫の記憶が二つばかりある。それは何でも上方風の格子造りの家で、一階かあつたかなかつたか覺えてゐないが、奥の間から中庭を隔てゝ離家がついてゐるのが特徴だつた。その離家へは、奥の間から芝居の兩花道のやうに、廊下が中庭を抱いて兩側に通じてゐた。左側の廊下の中程に便所があつた。離家には緣がついてなかつたが、その他は中庭を挾んで、三方が緣或は廊下でつながつてゐた譯だ。その離家に、神戸へ來てから私たちの家に來たものか、それとも以前からゐたのか知らないが、兎に角私の覺えてゐるのは、この神戸の家の時で、そこに祖母の妹、だから母の叔母に當る、私たちが「濱田のおばさん」と呼んでゐる人が住んでゐた。ずつと後に母から聞いたのであるが、當時このおばさんの一人息子が東京の大學に來てゐたので、彼女を私の母の家で預かつてゐたのである。そのおばさんはいつでも膝の前の疊の上に、鋏と糸卷とを轉がして、何かしてゐたやうな氣がするが、明りを求めて、中庭の方に向つて裁縫でもしてゐたのだらうと思ふ。この廊下を、いつ、どちらが始めたのか知らないが、私は兄と二人で火箸を持つて金盥を叩きながら、緣の板をどん〱踏み鳴らすことに依つて拍子をとり、何か兄について彼のいふ通りの出鱈目の文句をどなりながら、中庭を取卷いてゐる廊下を廻る遊びをやつた。それが「濱田のおばさん」の離家のところだけは、緣側も廊下もないので、遠慮なしに部屋の中を横切るのである。兄は私の先に立つて、例の左手の入廊下の前のところへ來る度に、そこでは何か神様にでもお參りするやうな風に、わざ〱繩の暖簾の下つてゐる便所の入口に頭を突込んで、お辭儀しながら、一頻り金盥を亂打することになつてゐた。そんな風にして幾度も幾度も、中庭の周圍の廊下、緣側、離家の間と、ぐる〱金盥を叩きながら廻るのである。

「これ、これ、兄さん、あんたがそんな先に立つてしなはるよつてに、」と音無しい濱田のおばさんのなだめるのなど、兄も私も聞くことはなかつた。私たちには母も恐くなかつた。唯、母の母である祖母に叱られると、私たちは逃げる

か、止めるかしなければならなかつた。

この思出は私が兄を對稱としての唯一の懐しい記憶である。といふのは、物心ついてから、私は兄を兄のやうに思ひ、私自身弟のやうな氣持で兄の後について兄に見習つたことは、よい事にも惡い事にも、この記憶の外には一つもないからである。その他の場合は、悉く彼のしようとすることを顔を顰めて見せて止めたり、言葉で譯をいつて叱つたり、いつも私は彼に向つて弟に對するやうに、といふよりは、矢張り足りない人として、それも他人でなく、肉親であるだけに、ヒステリツクに叱りつけたり、なだめたり、さうでなければ避けるかするのが常であつた。ところでこの金盥叩きは五歳の頃であつたらうと思ふ。

神戸兵庫の記憶にもう一つ、毎晩下女の背に負はれて、何神社かの境内へ、六方焼（東京でいふ四方焼）を買ひに行つたことがある。何でも石の鳥居をくゞつたやうに覺えてゐるから、神社には違ひない。ずつと後に、母から祖母からか、この神社の名を聞いたことがあるやうに思ふが忘れてしまつた。何でもその頃何日かつゞけて、日が暮れると、「六方焼、お久（下女は房といふ名だつたが、呼びにくいのでかういふ變へ名で呼んだ）六方焼買ひに行かう」といひ出すと、どんなに誰がなだめても、それを何神社まで、お久の背中に乘つて買ひに行かなければ、私は承知しなかつたのださうである。屋台店だつた。そんな神社の中に、而も夜になつて店を出す位だから、周圍が餘程賑かな場所である筈なのだが、私の記憶ではひどく暗いところで、そこにほつと赤い灯を一つともしたゞけの、まるで狐か狸でも相手にしてゐる店のやうな、影畫のやうな印象であつた。それに、六方焼はたゞ鐵鍋に油をしいて、丸い饅頭を六角型に押さへ押さへして焼いて行くだけのものであるから、例へば芋屋のやうに湯氣などの立つ譯はないのであるが、私の印象では、その屋台店に一つとぼつてゐる、陰氣な、赤い色をした明りの中に、夥しく白い湯氣の煙が立つてゐたやうに覺え

てゐる。下女の背中に負はれた私は、「早く」とか、「もつと澤山」とかいつて駄々をこねると見えて、身をもだえしながら、六方燒屋のおぢさんの方に手をさし延ばしてゐる恰好が目に浮かふのである。六方燒屋の主人はそれ程若者といふのでも、又老人といふのでもなかつたやうに思ふが、顏などまるで覺えないのに、角刈のやうな頭に鉢卷をして、その珍しい白い湯氣の前に、眞黑な影畫の形が如何にも甲斐々々しく動作してゐた繪として記憶に殘つてゐる。もつとも、これなども、後にどこかで見た幻燈とでも、或は混動してゐるのかも知れない。氣候は冬のやうに覺えてゐるから、これは四歲の冬頃のことだらう。

それから愈々大阪の記憶に移るのである。

私たちの一家が神戸兵庫から大阪へ越して行つたのは、私の六歲の時だつた。それは兵庫で既に幼稚園に行つてゐたので、大阪へ來て大阪の幼稚園に變ると、いろ〳〵規則が違つてゐたので不便に思つた記憶があるので、思ひ出すのである。例へば兵庫ではお菓子を持つて行つてもかまはなかつたのに、大阪では許されなかつたし、兵庫では私が幼稚園にゐる間中、家のものがついてゐてくれてもかまはなかつたのに、大阪ではそれが許されなくて、或時など送つて來てくれた者に、私が歸つてはいけないといつておいたのに、いつの間にか歸つてしまつてゐたので、私はびつくりして、先生にも誰にも斷らずに家まで走つて歸つたことがある。しかし、大阪の幼稚園では、大變よく出來るといふので飛級をさせられたことがあるが、飛級させられた嬉しさより、組のものが昨今までとは見も知らない顏になつたので、ひどくまごついた。

が、確に大阪へ越してからの家で、

「お前はもう五歲にもなつたんでせう、」と母が添寢しながら乳をすゝつてゐる私にいつた時のことをはつきり覺え

てゐる。その後で多分これ以上乳を飲むと齒がなくなつてしまふとか、五歳にもなつて乳を飲んでゐることを隣の子にいひつけるとかいつては、私に斷念させたものだらうと思ふが、それ等の言葉は一々覺えてゐない。唯、私は彼女の懷の中にもぐり込んでゐるのと、その上に蒲團をかぶつてゐるのとで、蒲暗さと、生温かさと、そしてもう愈々別れなければならぬかと殘り惜しく思はれる乳の甘さとを思ひ出すことが出來る。

「だから。これつ切り。ね、今日のこれでお終ひにするんですよ。」と母はつゞけていつた。が、私は如何にも殘念だと思ひながらも、母のいふことは何故か當然であると思はれたので、素直に乳を含んだまゝ「うむ、うむ。」と答へた。そして相變らず乳を啣へたまゝでうなづいたものだから、頭を二三度乳に打突ける仕草で承諾の意を示した。それが間違なく五歳で、そして間違ひなく大阪の糸屋町の家のことでだつたと思ふのである。

さうして私は七歳の四月に尋常小學校に入つたのだつた。七月生れであるから、俗にいふ早生れで、正規には入學出來なかつた筈なのだが、何とか背後から手を廻して賴んで入ることが出來たらしいのである。母にして見ると、折角七歳も上の長男の兄がこんな風な足りない子供だから、弟の私を一年でも早く學校にやりたかつたのであらう。この學校が陸軍偕行社附屬尋常小學校といふ特殊な學校だつた。それは名の示す通り、主に軍人の子弟を教育すると共に、中流以上の家庭の子弟の爲の學校なのであつた。その時分のことで、尋常一年生から寄宿舍のある學校は、この學校が大阪唯一のものだつた。それから尋常一年から制服制帽で、背嚢を背負つて、靴下から靴まで、すでに制靴下、制靴といふ嚴しい同時に贅澤な制度の學校だつた。授業料なども、一ケ月五十錢といふ、當時では破格のものだつた。無論、當時私の家は最早やそんなにゆつたりした資産があつた譯でなく、もつともそれを全部金に代へたのを什円位づつ入江といふ銀行に預けて、それの利息で生活してゐたのである。だから、そんなに裕福といふ程ではなかつたらうが、母がどうして私たちを

こんな贅澤な學校に入れたのか、私は知らない。一つは彼女の見栄からでもあつたのだらうし、それに私たちの住居の糸屋町からその學校まで比較的近かつたといふ理由もあつたのだらうし、（もつとも、それよりもつと近くに二つも町小學校があるにはあつたが）誰かに勸められたのでもあるのだらう。たしかこの學校に入るには、軍人の子弟の外は、將校二名以上の保證人がいるといふことであつたが、別に私の知つてゐる限りでは、私たちの家の親類にも、知人にも、將校などいふ種類の人はなかつたやうである。

餘談のやうだが、將校といふと、いつ頃のことだつたか覺えてゐないが、どこかで日清戰爭の時の何々城占領といふやうな畫の額が掛つてゐるのを、私は母と二人で見たことがあつた。畫の中で、當時は私たちでも名前を知つてゐたやうな、有名な少將が主人公として取扱はれてゐた。それは戰死しないで、而も大變勳功を立てた軍人だつた。その額は、何でもどこかの洋風の應接間にかゝつてゐたのだつたが、誰の家の應接間だが、どうしてその應接間へ母と一所に行つたのかは覺えてゐない、若しかすると偕行社の應接間だつたかも知れない。さういふ場所だから、その畫も普通繪草紙屋などの店頭にあるやうな有觸れたものではなくて、もつと立派なものだつた。私は子供のことだから、母の袂に掴まりながら、興味をもつてその畫を眺め眺め、母にその說明を聞いたり、又自分もありたけの智識を彼女の前で述べた。

その時、突然彼女が感慨深さうな調子で、

「お母さんは本當ならこの人の所へお嫁に行つてたかも知れないんだ、行つとけばよかつた」と小さな聲でいつたやうにも思ふし、

「この人の所へお嫁に行けといふ話があるんだけど、さうするとお前たちが可哀さうだから、」といつたやうにも思ふし、

今になるともうすつかり私は忘れたが、彼女は兎に角そんな意味のことをいつた。何しろ相手は有名な少將だつたが

ら、私はそれを聞くと、どうして母はその少将の所へ行かなかつたのだらう、そしたら今頃はこの人が自分のお父さんだつたんだな、と残念に思つた。

ところで、この薪屋町時代の知合に沼端といふ家があつた。無論親類でも何でもないが、この家も私たちの町から余り遠くない農人町であつたから、横堀川に近いところにあつたと思ふ。何でも軍用商人とかいつて、軍隊の食物を一手に引受けるといふやうな商売だつた。呉服屋でなく、軍隊の将校を扱ふことだつたらしい。以前に紙屋だつたと聞いたとも思ふし、この時も同じ所で紙屋をしてゐたやうな気もする。ずつと後に誰からか聞いたのだが、私たちが先に、つた偕行社附属小學校に入つたのは、この沼端の世話だつたといふことである。つまり彼は軍用商人であつた位から、将校の二人や三人位は無論知つてゐたのだらう。だが、どうして私の母がこの沼端といふ人と知つてゐたのか、そのいまの私は知る由もない。しかし深く知つてゐたのではなかつた証拠に、薪屋町を越してからは、だんだんその家との交際は絶えたやうだつた。主人はどういふ男だつたかと、思ひ出して見るのに、四十歳位の、太つた、背の余り高くない、色の黒い、余り品のよくない容貌の人のやうだつた。そしてその家に私と同じ位の息子があつた。息子でありながら、田澤といふ別な名字を名乗つてゐたのは不思議だつた。それで、沼端の子であつて、學校は偕行社でなく、町の學校に行つてゐたのも亦不思議だつた。私の母などは何故だか「ぼんぼん」と呼んで、多少敬意を表してゐたやうに思ふ。この田澤と私とが田澤の父の沼端に連れられて、或日道頓堀へ中村時蔵（死んだ歌六）の「孫悟空」の芝居を見に行つたことがあつた。沼端はそれを私に誘ひに来るのに、「子供があの芝居を見ないといふ法はない。あれは子供の見る芝居や。」といつた。なる程、初めから終まで宙吊りになつた役者が悪戯ばかりしてゐる芝居で、その後私は二度とあんな奇抜な狂言のかゝつたのを聞いたことがない。この沼端が時々私の母の家へ来たことがある。もつとも、皆が来て、

どんな事をして行つたか、どんな話をして行つたか少しも覺えてゐない。

これから、もう一つ私の家と親しくしてゐたので覺えてゐるのは、清水といふ一家であつた。この一家とは沼端の紹介で知るやうになつたのだと、最近私はたしか母から聞いたやうに思ふ。何故近頃になつてそんな話が出たかといふのに、沼端と逢つて、この家の人々とは、私の家は糸屋町から外へ移つてからも、消息が絶えさうになると又つゞいて、今に私の母などが大阪へ行く度にその家に寄つてくる位で、三四年前だつたか、母の姉がこの家へしばらく貰はれて行つたといふやうな交渉さへあつた間柄だからである。丁度この家が私たちの家に似て、親子三人だつた。もつとも、三人といつても、この家は母と二人の娘といふ、女ばかりの一家だつた。この一家が當時どこに住んでゐたか私は知らない。こんな事は、もつとも、今でも私の母に聞いて見さへすれば分ることだが、聞いて見る程の興味もないので、知らないまゝにしてある。覺えてゐるのは私のやうな子供が見ても、この清水の姉妹の新子が素晴しい美人だつたことだ。これはしかし私自身の發見といふよりは、母とか、その他の大人の人たちの噂で先に覺えて、その噂から私の判斷が生れたのかも知れない。が、幾ら人の噂で誰それは美しいといはれても、子供の目には又子供だけの見方があるものだが、新子の場合は例外だつた。多分その時分彼女は二十一二歳であつたかと思はれる。色の白い、背の高い、面長の、つまり浮世繪風の颯爽とした美女だつた。そして彼女の筆蹟が亦その姿の通りだつた。しかし、筆蹟のことなどをいふやうになると、これは確に私の十歳以後の記憶になるから、この物語りには必要はないが、顔に似、その筆蹟までが彼女の姿のやうに颯爽としてゐた。「新子はんの手跡はまるで男やな。あんまり達者過ぎて、知つてるから何やけれど、この所書の櫻橋なんていふのは讀めへんがな」と母と誰かとがいつて居るのを私は聞いたことがある。さうだ、櫻橋で思ひ出したが、その時分には何でも北區櫻橋何丁目といふのが彼女たちの住所だつたのだ。先にもいつたやうに、この人とは

今でも年賀状のやりとりをしてゐるが、「志水新子」と、普通の男が書くよりもずつと大文字で、それに文字面が整つてゐるので、それ等が相俟つて愈々颯爽たる趣きを見せて居るのを見ると、私は忽ち三十年前のおぼろに覚えてゐる彼女い、品がれたやうな颯爽たる姿を思ひ出すのである。もつともこの筆蹟から判断すると、彼女の美しさを想像する前に、彼女の男性的な勝気さが潑剌としてゐるやうに感じられた。

ところが、この新子の九歳だか六歳だか、下の妹の清子は、全くの白痴だつた。縹緻は姉ほど美しくはなかつたが、おまけに私さへしつかりした人ならずつと様子が整つて来るから、それに姉さんが奇麗過ぎるから目に立たないといふ損もあるが、智能は十人並以下だ、――といふ大人の噂に依つて私が判断する迄もなく、まづそんな風なところらしかつた。白痴はすぐ近くに私の兄が居るので比べられたが、無論清子と私の兄と比べるのは兄の方が可哀さうだつた。彼女に文字も書けなかつたし、数の勘定さへまるで出来なかつた。ずつと後に、この二人が共に四十歳近くになつてゐた時分のことだつたが、新子の方から話があつて、牛は牛連れといふことがある、両方から食扶持を持ち寄るやうにして、この二人を夫婦にしてやつたらといふ話が出たことがあつた。無論、私の母は不賛成だつたが、念の為に兄にその話をすると、「清子さんおやア、……清子さん見たいな人と私と夫婦になつたら、それこそ一日もやつて行けません、ハハハハハ」と兄が笑ひ出したことがあつた。私の兄は時々そんな風に自分自身が人並より低脳だといふことを自覚して居るところがあつたので、案外頼もしく見えることがあつた。母はこの時の兄の返答が得意であるらしかつた。

この志水の一家の人たちは何でも岡山縣の士族とかいふことで、當時は多分新子たちの死んだ父の遺産ででも生活してゐたのではなかつたかと思ふ。子供の私の観察では確なことはいへないが、母子三人どもかからうな遊んで暮してゐるやうに思はれた。新子はいつも派手な着物を着て、派手な生活をしてゐるやうに見えたが、それが何といふ理由なしに

外から請ふて來る金で新子がどういふ仕事で金を儲けるかといふやうな事は考へられなかつたが、それなしに、彼女の家にある金で(これも彼女の家にそんなに金があつたかなかつたか知らないのだが、さうしてゐるやうに私には思はれたのだが)今考へて見ると、その邊の消息は全然分らない。その後新子が南地から藝者に出たことがあつたが、これは餘程後のことであつた。私たちが糸屋町を去つてからのことで、初めて藝者に出るにしては年をとり過ぎてゐるが、兎に角あれだけの縹緻だから、といふやうな噂を人々がしてゐたのを聞いたやうに思ふ。それにしても、さういふ年頃の娘が唯ふわくと遊んでゐたといふやうなことは、今から考へて見てをかしいが、當時、彼女の遊び相手といふか、うまの合つた友達といふか、私の母は私の年を七歳と見ると、三十三歳時分だつた、そして彼女も亦可成りの美人だつた、美人でそして後家であつた譯だ。三十三歳の後家と、二十歳のおきやんな娘との結合した生活を考へると色んなことが想像されないではない。

私の母の性質は女に珍しく金錢に大さつぱで、少しでも餘分の金があるとそれが持つてゐられない方らしかつた。年とつた今でもその傾向が多分にあるし、その性質のために後家になつてからは親類の評判がよくなかつたやうだ。考へて見ると、神戸から大阪へ引越したのは、神戸の方には彼女からいふと夫の方の親類が多かつたので、態々遺産を金に換へて、先にいつたやうに伊丹在にあつた親類(これも私の父方の親類だが)に預けて、そこから月々送つてもらふ利息で暮せるといふ計算が立つと、彼女は早速窮屈な神戸を去つたと見ることが出來る。もつとも、そんな性質であるから、彼女は夫の在世中の通り自分の里方の母を引取つてゐた、(外に引取手がなかつたのでもあるが、)その上、母を養ふ筈の里方の兄が放蕩で行方不明になつてゐたのを、その住所が分ると彼女は旅費を送つてその兄まで引取つて養つてゐた。糸屋町の家にはまたその外に、どの位の期間であつたか知らないが、その私の家の遺産の金を預かつて月々利息の金を送つてくれてゐる伊丹の親類(利息といつても普通の利息よりずつと多かつたやうである、その後その家が急に破産した

いめに、私たちの糸屋町の家も共倒れになつたのだが、當時は田舎の舊家で相當な資産家だつたから、私の家の金を保護してくれてゐたといふばかりでなく利息の割合など可成り恩惠的なものでなかつたかと思はれる。）の息子も來てゐた。彼は私たちの從兄弟に當るもので、當時二十歳位の青年で、その糸屋町の家から天滿の法律學校へ通つてゐた。陽氣な、お喋りな男だつた。同じ法律學校の友達などをよく連れて歸つて來て、賑やかに書生らしく談笑してゐることがあつた。そして、家で夕飯を濟ますと、彼は私の母を誘つて、（彼女は誘はれると厭とはいはなかつたらしい）それ等の友達と夜店に散歩に行つたり、落語の寄席などを聞きに出かけたりすることもあつたやうだつた。その外に、家主の養子で、榮太郎といふ幾つ位だつたか、多分二十歳餘り位の色の白い役者のやうな風采の男なども時々出入してゐた。この男は唄が好きらしく、來ると、いつも茶の間の火鉢の前にきちんと坐つて、唄をうたつてゐた。始終嬉しさうににこ／＼笑つてゐる男で、坐つてゐるのを横から見ると、背中を丸くして首を突き出してゐるのが癖と見えて、今でもさういふ恰好の彼が私の目に浮かぶのである。「你はうれしや」といふ唄のはやつた頃で、榮太郎も「你はうれしや」法律學生の從兄弟の彦造も「你はうれしや」そして子供の私も「你はうれしや」を覺えて、始終口癖のやうにうたつた。母の評に依ると、榮太郎は節もうまいし、唄の數も知つてゐるので一番、それから彦造は唄の文句を誰よりも澤山知つてゐるので二番、私は唄の數は知らないが、節が一番うまいといふので賞められた。だが、私は從兄弟の彦造とならば交る交るうたつたり、合唱したり出來たが、榮太郎とやるのは何故か極りが惡かつた。それで榮太郎に餘り所望されると、二階の梯子段の上り口に腰をかけて、茶の間との境の唐紙を締めて、姿を見られぬやうにしてうたつたことを覺えてゐる。そんな馬鹿々々しいことが出來た時分だから、せい／＼七歳頃のことだつたらうと思ふ。

何しろ、今考へても糸屋町の家は變な陽氣な家だつた。父のゐる時分からゐた下女のお久も、これは終の頃にはゐな

くなつてゐたが、初の頃はゐたやうに思ふ。或晩、私はこれ迄寝てでもゐたのか、気がつくと誰も家の者がゐないので、大聲上げて泣き出したことがあつた。何でも母も祖母も兄も一所に、私だけを残して本町へ芝居を見に行つたのだ。私は聲一ぱい張り上げて泣くと、下女のお久（彼女は母の従姉妹だつたのだが、親の家が零落してゐたので、私の家へ下女に來てゐたのだ、）は憎らしくなつたのか、私をなだめる代りに、私の尻を抓つたり打つたりして苛めるので、私は一層泣聲を上げた。餘り大きな聲で泣いたので、近所の人がどうしたのかと尋ねに來た位だつた。すると、お久は何喰はぬ顔をして、「いえ、皆さんに置いてきぼりを喰はされたものですから、やんちやんさんで、かうして怒つて泣き出したら止め度がないんです、」といふやうなことをいつたらしい。私が一頻り聲を上げて泣き止んだところで、お久は私に「お母さんたちが歸つていらしつても、お久がお尻を抓つたことなどいふと承知しませんよ。いつたら又お留守の時うんといぢめますから」と脅迫した。私はお久が恐かつたので、彼女のいひつけ通りにした。これは多分先にいつた乳を止めた時と同じく五歳位の時だつたと思ふ。

かういふ記憶の見本を擧げてゐると切りがないから、本題に入ると、その糸屋町時代に、この私の母の家へ、大原桂太郎といふ俳優がよく出入りした記憶である。この男は糸屋町のつい近くの本町座といふ劇場に出てゐた新派俳優の座頭だつた。本町座は山の手でのいゝ劇場だつたが、大原が入つてから一層いゝ劇場になつたらしいのである。この男の顔はどこか志水新子に似てゐた。役者とはいひながら、子供心にも驚く程、色の白い男だつたと覺えてゐる。いつも抱え車に乘つてゐた。それが如何にも役者の車らしく、背中に定紋が入つてゐて、膝から下半分が朱色に塗つてあつた。今考へたらきざでたまらないものらしかつたが、その時分は私も中々いゝ車だと思つた。糸屋町は普通の山の手町の一つであつたから、さういふ車が家の前に止まつてゐると目についた。近所の子供たちが車のまわりに集まつて來て、その覗き込ん

だ淺葱の車の背中に顏を映したり、銀色によく光つた車の輪を撫で廻したりした。又別の一組の子供たちは私の周圍を取り卷いて、「えゝ車やな」とか、「あんたの家の車？」とか、「違ふなア　役者の車やな」とかいつて聞くのだつた。私は一寸得意な氣がしたり、又何故か一寸厭な氣がしたりしたのを憶えてゐる。

この車の腰が朱塗である爲に「火の車」といふ綽名がついてゐるとか、つけられたとかいふ話が出たのを私は耳に挾んだことがある。遠い記憶のことだから、それが誰かゞその車の主の俳優にさういつてからかふのを聞いたのだか、俳優自身がしやれに自分の車のことをさういつたのか覺えてゐない。が、兎に角、その車と共に、俳優の顏と、新子の顏と、母の顏とが巴のやうに私の記憶の奧に渦卷いて、今でも見えることがある。子供の頃だつたから、「火の車つてなアに？」などと母に私は聞いたかも知れない。そしたら彼の女は多分地獄の鬼が引いてゐる、車輪に炎の燃えてゐる車の事だと敎へたに違ひない。何にしても惡い車を意味する位のことには感じてゐた。

車のことをいふと、私は或日私たちの家には見馴れない、大型の、奇麗な、友禪の座蒲團が二枚呉服屋からとゞいたことを思ひ出すのである。多分それは箱に入つてゐたまゝで、蓋をとつて、見えるやうにして床の間に二三日飾られてあつた。それは母と新子とが俳優の大原に贈るものだといふことを聞いた。蒲團が車に積まれて私の家から劇場に運ばれる時も、門には近所の子供が集まつて來た。その子供達の中の一人が、私に「あんたんとこ、大原にえゝ座蒲團やりはるのやな」といつたのが今でも私の耳に殘つてゐる。その時分には、私はもう役者の車が自分の家の前にとまることの、微かな後目たさにも馴れて、そんな事をいはれても唯得意な氣持のやうなものを感じただけであつた。

或晩、私は寢てゐて寢床の中から見たのか、それともそんな時間まで起きてゐたのか忘れたか、異樣な大原桂太郎が現れた時の印象を忘れることは出來ない。何でも一人でなく女連れだつたやうな氣もするし、その女が新子だつたやう

な気もするし、或は硝子がその時丁度私の家に来合はせてゐたのかといふやうにも思へるし、もつと其後に溯つたことばかりいふやうだが、その時は硝子がゐなかつたかも知れない。唯私の記憶にはつきり殘つてゐる印象といふのは、大原が外套の頭巾――それも袋の口のやうに、顔を出すところが紐を締めると大きくも小さくもなる――を被つてゐる顔が、不斷から白いのであるが、その白さが頭巾が黒いためか、まだラムプの時分の夜のことであつたからあたりが暗かつた爲か、化物のやうに白く見えたことである。それは白くて桃色がゝつて見えた。その中に眞黒な切の長い目と、眞赤な唇とがあつた。不斷知つてゐる顔でなかつたら、いくら奇麗な顔だといつても、餘り化物めいた白さなので私は驚いたかも知れない。驚いたことはその時も確に驚いたと見えて、その時の顔の印象は今でもそのまゝ目に浮べることが出來る位だ。が、子供のことだから、ちらと見て、非常に異様に感じただけで、その顔に連れがあつたかなかつたか、その顔がそれからどうしたか、そんなことは注意しなかつたと見えて、それ切りしか覺えてゐない。彼等の方からいつても、私のやうな子供の目のつくところに、そんなに長くゐる筈がなかつただらうから、そのまゝどこかへ消えてしまつた。

この大原に細君があつたのかなかつたのか、どういふ情人があつたのか、その情人が案外私の周圍にあつたのか、そんなことは考へても見なかつたし、噂としても私には聞えなかつた。唯、母などに連れられて、彼の芝居を見に行つてゐると、座頭である彼が舞臺に現れると、乾度大向から「羊羹屋！」といふ聲がかゝつた。それは或金持の羊羹屋の娘が彼に惚れてゐるといふのが、當時の彼の情事方面のゴシップの代表的なものであつたと見えるのだ。私はさういふのは唯さういふ噂だらうと思つてゐた。無論まだ情事などには何の興味も智識もなかつた頃でもあつた。ところが、或日私は彼がくれたといふ羊羹を食べた記憶がある。そしてその時私たちがそれを食べる傍に彼がゐて、彼が次のやうに説明したのだと思ふが、「この羊羹の皮の厚いのは、ほらこんなに厚いでせう、砂糖の固まり見たいになつてゐるのは、」と彼は

ひどい滑稽の男で、これはいゝ芝居のしるしなんですよ。たしかこれは五年芝居といふんです、こしらへてから五年經つたやつです。十年芝居などいふのもあるんですよ、大變高いもんださうです、今度は十年のを持つて來たげませう」といつた。それを人々は少しもひやかさずに聞いてゐたのを、私は不思議に覺えてゐる。つまり芝居屋と大原との關係は餘程當り前のことになつてゐるらしいのだ。

彼の舞臺を私は二つ三つ覺えてゐる。一つはどこかの大きな邸宅の中の離れ座敷の話らしく、そこに若い色男に扮裝した彼が女と二人でゐるところだ。何でもその少し前に庭先の川に死骸が流れて來たので、彼の扮してゐる若い男は非常に狼狽してそれを引上げて隱すか、棹で川下に流してしまふかした後で、刑事がその男のところへ何か調べに來るところがあつて、そこで彼はその刑事を何とかうまくいひくるめるらしいのだ。刑事が納得したやうな顔をして、そこを辭して花道にかゝるところで、幕がしまる合圖の木が鳴るのだ、ほつと安心して刑事の歸つて行く後姿を見送つてゐる男と、花道でふと何か思ひ當つて、決心したらしく突然腕組をしてゐた腕を解いて立止つた刑事が、振り返つてその男と顔を見合した瞬間「こら！」と大喝すると共に、懷中から捕繩を出すといふところで幕が閉まる芝居だつた。もう一つは新派劇で、大原が浪人の恰好で、大勢の者に後手に縛られて、側で花道をやつて來る、舞臺には土藏のやうなものがこしらへられてあつて、その中に縛られたその浪人が入れられて苦悶するところだつた。平素知つてゐる人だけに、そんな可愛さうな役をしてゐるので、私はその舞臺面の物凄さも手傳つて、非常に同情したことを覺えてゐる。それからもう一つは、女形のひどく佻法な役をしてゐるのを見た記憶もある。その頃私は、役者の男が男の役になつて、例へば大原などを見ても髭を生やした男になつてゐたりするのには、扮裝するのだと分つてゐたが、男が女の役にはどうしてなるのだらうと疑問に思つてゐたが、その時の大原の女形の顔を見て、その女のあまり突飛の不器量な彼の顔の所爲だつたので、

何か分つたやうな氣がしたといふ記憶の程度だつた。

大阪の思出はその位にして、彼や妍子とは關係ない、私はその糸屋町の時代で印象に殘つてゐる家に、もう一つとらやといふ小間物屋がある。もつともこの小間物屋は思ひ出したところが、食にする程によく覺えてゐないので、當然省略するのだが、後に出て來る私の兄の記錄と對照するために、思ひ出し思ひ出し書いておくのである。私の家から五六町行つたところに松屋町通といつて、商店の並んでゐる、山の手では夜になつても賑かな通があつた。私の母は割合に無信仰家の癖に、どういふ譯か、よく天滿の天神に參詣した。しかし、こんなことも、今から邪推すると、天神樣でなくて、どこぞの近所に寄る家があつたのかも知れないが、私は覺えてゐない。彼女は先にいつた伊丹の親類へ行く時とか、住吉神社に參る時とかに汽車に乘る時は、いつも一等に乘るのが常だつた。そして私に「家へ歸つて祖母さんに聞かれても、いゝ汽車に乘つたといつちやいけないよ」と耳打したり、又外に出る時は大抵車に乘つたが、歸りにはいつも家の少し手前で下りて、「祖母さんには歩いたといつておくんだよ」と私にいひ含めたり、そんな風なところのある人だつた。が、この天神樣の往復には、どういふ譯か片道だけ歩くのが習慣で、それは歸りに天神橋を渡つて、松屋町通へ出るのだが、そこの平野町の角にあつた、表に岩に嘯いてゐる大きな虎の繪の看板の出てゐる小間物に乾度寄るのが例だつた。が、その店に寄ると、いつも大抵話が長くなるので私は退屈した。日本髮に結つた女の繪のレッテルの貼つてある「キレー水」といふ化粧水の瓶を私はいまでも覺えてゐるが、私の立つてゐる背の高さのところに丁度その瓶の棚があつたと見えて、その化粧水の瓶の並んでゐるのを、退屈の餘り眺めて時を過ごしたものだ。私はそのキレー水に貼つてあるレッテルの美人の繪に計り知れぬ退屈を感じたものだ。それ程私を待たして、母がそこのお上とどんな話をしてゐたのか、その癖大抵店先での會話なのだから、私の耳に入らない譯はないのだが、多分私には少しも興味のない

ことだつたと見えて覺えてゐない。その女は四十歳を出てゐたと思ふが、色の白い、丸い、餅のやうな奇麗な顏をしてゐた。美人だつたのかも知れないが、私は何か厭味を感じた。今考へて見ると、玄人上りの女ではなかつたかと思ふ。夜などもはよく私を連れて松屋町へ散歩に行くと、屹度この家へ寄つた。が、買物をしたことは殆となかつた。終には私がいつも退屈するので彼女は「一寸ね、今日は直ぐだから」と私に遠慮するやうにいつて、そして、寄るといつも同じことで、矢張りながくなるのが常だつた。

以上は、小說家である私が以前に書いた文章の中から、私の十歲以前の記憶に關する部分を拔書きしたり、書き足したり、或は必要に依つて新しく書き加へたりしたもので、甚だ取りとまりのない文章になつてしまつたが、同じ頃の記憶が、所謂「足りない人」である私の兄に依つて、割合に纏つた一篇の文章に作られてあるのを次に揭げて、それ等を對照させて見ることで、私たち兄弟の微な記憶から成立つ、微な物語を傳へようと思つたのである。この文章の功果では、恰好なつもりの向も文章を專門にしてゐる弟のそれよりも、頭腦に缺陷のある兄のそれの方が、遙かに面白いと思はれたのは作者の私ばかりではあるまい。皮肉である。

ところで、先の文章の中に是非加へておかなければならないと思つて、忘れたのは、四五年前、昔の法律學生であつた從兄弟の彥造に會つた時、あの糸屋町時代の話が出たことがあつた。先にもいつた通り、彼は當時二十歲で、私の母たちと芝居に行つたり、寄席に行つたり、唄をうたつたりすることを、商にした位であるから、彼に聞けば私などの六七歲の記憶などと違つて、餘りはつきりしてゐて、呆氣ないやうな事實が分るに違ひないのだらうが、彼も遠慮して

いはないし、私も別に探索したい程の好奇心もないので、詳しい話は聞かなかつたが、何かの話のついでに、その當時の話が出て、新子と大原桂次郎とが熱烈な戀仲であつたこと、さうした戀愛など大いに當てられたといふ話を聞いたことがあつた。新子と大原とが戀仲であるといふことは、今になつて考へるとそれは當然のやうに思はれるのであるが、私の先の文章にも、次にある兄の文章にも、そのことは少しも觸れてないところを見ると、つまり私たち少年には氣がつかなかつたらしいのである。

ところで、次に掲げる兄の文章であるが、そこに書かれてあることは、前の私の文章がさうであるやうに、彼にも矢張り今から三十年前の記憶に依つて作られたものである。が、彼は私より七歳年長であるから、私の五歳の時、彼は十二歳であり、私が七歳の時彼は十四歳であつた譯だ。つまり、これは彼が十二歳から十四歳位までの間の記憶と見ればよい。五歳から七歳までの私と、十二歳から十四歳までの彼とが、同じ屋根の下に住んで、略々同じものを見聞きして來た譯だが、殘念なことには、彼は先にいつたやうに少し普通人よりは腦力の足りない人間であるから、記憶にもその年齢の人としては餘程缺陥があり、智識や見方にも甚だ怪しい、足りないところがあるのだが、それと共に、さすがに私より七歳年長であるだけに、私の持たない記憶と見方とをしてゐるところもある。それに私と同じ兄弟であるをかしさには、彼にも亦小說的なことを書く幾分かの才能と、興味とが與へられてあることだ。今私は三十六歳で、彼は四十歳で、彼は弟である私の家の居候をしてゐるのであるが、三十年前の大阪の家では、私たち兄弟と母との外に、母の母がゐた、彼女は既に十五六年前に墓になつて、その代りに今はその外に私の妻がゐる。夜、私が二階の自分の部屋で仕事である小說の筆を走らしてゐると、兄は、狹い家のことだから、特に彼だけに與へられた部屋がないので、階下の六疊の茶の間で、私の妻が針仕事してゐる傍で、同じ電燈の光の下で、彼は食卓を持ち出して、一心に彼の小說を書いて

ゐる。それは私の原稿紙の書きつぶしを、妻が拾ひ集めたのを、彼が丹念に裏返しにして二枚に折つたもので、私が職業的に仕事をする疲れで、筆がすゝまなくて茶を飲みに下りて來た時でも、便所に通ふために通りかゝつた時でも、彼は一寸も休みなしに、食卓の上に蔽ひかぶさるやうな恰好をして、せつせと筆を運はしてゐる。昼間は庭の植木の手入で土まみれになつたり、父家の使で電車にも乗らずに一里も二里も歩いたりする疲れをけろりと忘れたやうに、彼はほとばしるやうな勢で筆を走らしてゐる。私はそれを見ると、小説を書く頭といふのはどういふ頭だらうと、妙に考へて見ることがある。物事を小説的に見たり、考へたり、そしてそれを現したいといふ考へが、私の頭に起るのと同じやうに、肉親の白痴の兄の頭にも起るのであらう。を分さういふ血が（假りに血としておいて、そんなものが）私と兄とを生んだ父か母かの血にあつたのであらう。弟の私は兄のやうに幼年時分に腦膜炎にもかゝらなかつたし、中耳炎にも見舞はれなかつたお陰で、小學校から中學校といふ世間普通の教育を受けて、世間並の私のやうな境遇の人が通るやうな生活をして來たのであるが、兄は先天的か、それともさういふ悪い病氣のためかに依つて、白痴になり、聾になり、白痴教育なども中途半端で、止めてしまはねばならなくなり、境遇の上からも、十五六歳の頃に親類に預けられて、四十歳になる迄そこで唯食つて寢るだけといふ、犬のやうな生活をして來たのである。が、同じ血を分けた兄弟が、一人は白痴になり、聾になり、文字を半分しか習はず、一生を獨身で、もしかすると人間の生活のうちで可成りな役割を勤めてゐるところの性的生活をも知らず、さういふ點では犬よりも不幸な生活を送つて來た兄にも、世間並の生活をして來た私にも、小説的に物を見、小説的に物を感じ、小説的に物を現す慾望なり才能を持つてゐる點では、鈴に窮し合つたやうに共通してゐるのを知ると、兄は兄に仇、常識を持つてゐる私には何ともいへない一種の驚愕が催されるのである。丁度私が私の離で、二階の書齋に當てゝゐる部屋に床をしいて、そこで腹這ひになつて小説を書いてゐる眞下の階

下の部屋で、私の兄が先にいつたやうに食台の上に蔽ひかぶさるやうな恰好をして小說を書いてゐることを考へると、私はふと打たれたやうな何か眞劍な氣持になつて、疊の近くに顏を寄せるようにして、階下の氣配に耳を傾けたくなるのだつた。兄はその私の書き潰しの原稿紙を裏返しにした紙に、彼の小說が一篇づつまとまると、それを不細工にひねつた紙縒りでとぢて、同じ古原稿紙の裏返しを一枚表紙につけて、それに草花などの模樣で裝飾した輪廓の中に題名を書いたのを、彼の白痴らしい顏を嬉しさうににこ〳〵笑はせながら、二階の私のところへ持つて來る。

「これ、又ちよつと見といて下さい。」

彼は聾の人獨得の響のない音聲で、長者に對するやうな言葉づかひでかういふのが常であつた。

私はこの最近に彼を題材にして「足りない人」といふのと「怪人」といふのと、二篇の小說を書いたことがある。私はしばしば自分の妻とか、母とか、家庭とかその外私自身の生活を、そのまゝでないまでも、骨子にして構想した小說を書くので、自分の小說は家の者には滅多に讀ませぬことにしてある。無論、兄にも見せないように妻にいひつけてある。が、小說の載つてゐる雜誌の廣告が新聞に出てゐるのを差禁じる譯には行かないから「足りない人」が發表された時にもこんなことがあつた。

「兄さんがね、」と妻が私に云ふには「足りない人といふのは私のことでせうな。足りない人といふんですからね、といつていらつしやいましたわ。あなた、あの雜誌をどこかへしまつておくやうにして下さいましね。」

「お前だつて見ちやアいかんよ。」

「無論見やしませんわ。」

が、次の「怪人」といふのは、さすがに彼には氣がつかなかつたらうと私は安心してゐた。それは彼が四十歲を過

ぎる今日迄、配偶者を得ることが出來なかつたといふ彼の悲みを題材にしたもので、丁度私の妻の妹に、夫に死なれて、私生兒を抱えて困つてゐるものがあつて、彼女と私の兄とを夫婦にしたらといふやうな、然し無論そんなことは出來ないことだが、さういふ話が私と妻の間に出たことがあつた。そのことを知つてか知らずにか、彼が時々その私の妻の妹が或る町の料理屋に奉公してゐるのを、覗きに行くといふ話があつた。ところが、同じ女に戀してゐる男があつて、その男が未知の私に寄越した手紙の中で、彼はその女のゐる料理屋の表を覗きに行く男を二三度見かけたらしく、それが私の兄とは知らないで、怪人があの女につきまとつてゐるなどと注意して來たことがあつた。その未知の男も、私の兄と五十歩百歩の頭と見えて、怪しい人とでも書けばいいのに、「怪人」などといふ變な言葉が使つてあつたのが面白かつたので、私は早速それを小說の題に採用したのであつた。

　ところが、最近私の兄が、例に依つてにやく\/笑ひをしながら、私に持つて來た小說の（それが先にいつた彼の二十年前の記憶を書いた文章だつたのであるが）が、「二階上に宿る怪人」或は「或る二日間」といふ表題なので、それがいつもの通り草花の模樣で縁取られた中に、氣取つた字で書かれてあるのを見て、私ははツとした。若しか彼は私の小說を讀んだのではないかと思つたので、私は少し胸を躍らしながら讀んで見ると、彼がその作の中に使つてゐる「怪人」は私のと意味が違つてゐるので安心した。多分、彼は私のその小說の題を何かの新聞の廣告で讀んで、模倣したのだらうと思ふのである。

二　兄の記憶

私の小學校を卒業した時のことであつた。その頃私はO市のI町（作者註、大阪市の桑原町のこと）にゐたのであるがいつの日であつたか、私の家に時々夕方前に自用車か何かのやうな車に乗つた客が來ることがあつた。それはその頃O市のMにK座といふ劇場があつた。そのK座といふのは新派劇であつた。そしてこの新派俳優の一人にO（作者註　大原桂太郎のこと）といふのがあつた。私の家へ來る客といふのはこのOといふ俳優であつた。

Oが私の家へ時折來るようになつた動起（わざと原文のまゝの文字にしておく、以下同じ）は次のようであつた。

Mが私の家へ來たのは、その頃O市のU町（内本町か？）にH座といふのがあつた。今は活動寫眞になつてゐるが、その頃この劇場は二〇加であるとか、喜劇だとか、種々雜多なものをやつてゐた。それが少し改良して壯士二〇加から今の新派劇のやうな物に變つて來たのだが、その頃は今のように戀愛的のような所謂ハイカラぶつた劇ではなかつた。御家騷動式のような芝居が多かつた。そしてその俳優といへば二〇加師が新派に改良したといつた風で、役者もあまり感心する程のものがなかつた。だがその頃の私としてはそんなヒヒョウをするやうな智識もなかつた。只それが面白いからといつて時折見に行つたものである。私はそんなことを今から考へると、何だか私自身田舍であつたような氣がするのである。

その後この劇場がだん〳〵改良して、かなりの俳優がはいつて來た。そして、今迄の様なへマ俳優たちはどこかへ行つてしまつた。その頃M町通（作者註、松屋町通）にI神社の支社（生玉神社の御旅所か？）があつた。その神社の中に小さい劇場があつた。その劇場の俳優の中に、かなりそのカイワイ（界隈）にはゞをきかしてゐたT之助といふのがあつた。その俳優とその外四五人のおもな俳優とがU町のH座に來て、T之助一座といふ新派劇が出來たことがある。これが大分芝居らしいものになつた。そしてH座もこれ等の俳優によつてもうけたさうである。そして芝居が改良する（さ

れる」に從つて俳優もだん／＼上等な者を入れるとかいふ話であつた

或日のことであつた。私は近所の友達とM町邊へ遊びに行つたことがあつた。その時向うから廣告屋が鐘タイコをはやしたてゝ來たので、子供の時の私のことて、連れの子供たちとその廣告屋を見に行つた。一枚の廣告をくれた。見ると、芝居の番附であつた。それが今迄のようなそまつな紙でなく、洋紙か何かのようであつた。番附のはしに長い旗を書き、その中に「新俳優O一座」と誰にも分るように肉太く書かれてあつた。私はそれをフトコロにして友達と一所に家へ歸つた。そしてその番附を母に見せたのである。すると母は、Oといふ人はM區のT堀のK座（作者註、南區の道頓堀の角座か？）の俳優だといつた。そして知つてゐるといつた。

「その人がH座に來てゐるの？」と念を押すやうに母は獨言にいふのであつた。

それから幾日かたつて、そのOといふのが私の家に來たことがあつた。

そして、OがH座に來てから半年すぎた。

私の家へO縣のO市（岡山縣の岡山市のこと）の二人の姉妹が來た。S（前田志水のこと）といふ人で、S（新子をさす）といふ名であつた。後で私が母に聞いたのだが、私がまだ東西も知らなかつた時、家がO縣にゐたことがあつた。それはまだ父のゐた時で、父はそこで勸めてゐた。その時附近にSといふ人がゐて、その近所知合とか何かだそうで、私はその頃のことに何にも知らなかつたのである。Sはその家がO縣にゐたので、その縁で來たのである。姉のS子の方はりこうであつたが、妹のK子の方は頭がわるかつた。それは彼女が十歳の頃まで、口がきけなかつたのと、頭もいけなかつたといふことであつた。しかしS子の方はいゝ顔であつた。このS子がO市のK（大阪市の北區か？）に家を持つようになつてから、時々私の家に來るようになつた。そして時折訪問に來る中に、前にいつたOといふ俳優を母がS子に紹介し

たのである。それ以來彼女が私の家に來る度毎に、Oも時々來ることがあつた。だが私の家は時折こうした客があつて、物樂しい風が吹いてゐた。けれどもこゝに一つの事件が起つた。それは次のやうであつた。

前にいつた通りそれはOといふ俳優がU町のH座に來てから半年過ぎた或夜のことであつた。私の家に二臺の車が來た。そして二人の客が私の家に入つて來た。一人はOであつた。一人は二十位の女であつた。そして二人は二階へ上つてしまつた。私の不審に思つたのはこの二十位の女であつた。それが何者であるか私にはわからなかつた。そして一夜は過ぎてその朝のことであつた。前夜Oと一所に來た女が下りて來た。髪はまげに結つてゐた。だが、その時は何者であるか分らなかつた。私は怪しい女だと思つた。この女を今から考へても怪しい女であつたと思はずに居られない。彼女は私の家へ來て以來、用便の外は下へ下りて來なかつたのである。只Oとだけで何事か話してゐたらしかつた。そして又一日は過ぎた。その夜十二時過ぎにOが來た。Oも私の家にとまることになつた。こうして彼女は三日間私の家に居た。彼女が居る間二階の窓は夜になつて光線が往來にとをらないように防止されてゐた。この女がどうしてOと二泊したのか。私には全く不明であつた。そして三日目の日のことであつた。彼女はその日の夕刻かひる間に出て行つた。

私は後で考へた。どうして彼女は私の家へ來たのか、どうしてOを知つたのか。その時はどうしても分らなかつた。しかし、私の想像するところに依れば次のようであつた。私の母はときどき私とT神社へ（天滿天神か？）へ行つたり、M町通りへ散歩に行くことがあつた。その頃M町にT（とらやのこと）といふ化粧品屋があつた。そのTといふ化粧品屋に母はときをり寄るのであつた。そしてOも自分の材料をこの店に買ひに來るのであつた。そこで、Oが時折この店に買物に來るためにかの怪しい女もこの店に買物に來るらしかつた。こうした行きがゝりから彼女はOを思ひつめるよう

になつたさうである。彼女はT橋の附近の者で澤本（カリ名）といふ名であつた。私も一度彼女の家の附近に行つたことがあつたが可成り廣い家であつた。だが彼女は前にもいつた通り自分で化粧品をM町のT屋へ買ひに行くのださうである。さうした行きがゝりから○と命ふようになつたのだと私は考へるのである。

そして、彼女が時折T店に買物に行く間に、いつしか○に出合ふので、何とかして近づきになりたいと考へたが、ようい（容易）に目的を逹すことが出來なかつた。だが彼女はその後やつと思ひきつてT店で買物をしたついでに、まつかになつて、漸く事情を打明けたのであつた。そしてT店のおかみさんから私の母に話したのであつた。その時のおかみさんの話について私の想像では、

「澤本の娘が○に二三日でいゝから近づきになりたいと、此間私の家へ來て、そんなことを云やはりますので、どうしたものかと考へましたけれども、家に今主人がゐないからよろしおますけど、主人がゐたらこんな話をされると困ります、私はヒヤ汗が出ます」といつてゐた。（作者註。こゝのところは少し意味が分らないが、とらやのおかみが私の母にこんな話をしてゐたのを、彼は聞き覺えてゐたのをそのまゝか、間違へてか書いたのではないかと思はれる）だが、その後彼女はおかみさんといろ／＼話をした結果、おかみさんが紹介で私の家へ來ることになつたのである。だがその當時の私には、彼女は○の知合の人で、只私の家へ遊びに來たのだと思つたが、それが私の家にゐる三日間ヒル間は用便の外下に下りて來なかつたことを考へて、へんな女だと私は今でも思ふのである。そして彼女は三日目の夕刻私の家を出たのであるが、その夜私は二人の友達と天滿細社の附近まで散歩に行つた歸りのことであつた、私たち三人がM町通のH町の四角を歩いてゐると、私の家で三日とまつた女がスキガミになつて、車で通つてゐるのを見かけた。

これを私は後で聞いて見たが、たしかにあの娘は車で送り出したとのことであつた。が、その後彼女はどうしたか、

消息は不明であつた。

その後私はK市（神戸のこと）に行つてから、二十四年ぶりでM町へんを通つたことがあつたが、H町の角のT屋の店はなかつた。ついでにT橋の邊もまわつて見たが、澤本といふ彼女の家もなかつた。

だが、Oは私がK市へ行つてから二度ばかり見たことがあつた。K市のS川のKといふ劇場で見たのと、Iといふ俳優の葬式のあつた時に見たのとであつた。その頃も彼は座頭であつた。そして旅から旅へとかせいでゐるらしかつた。私はK市で彼を見た時、彼女のことを思ひ出さずにゐられなかつた。……それにしても、二十四年前私はM町通を歩いた時、もしT店があつたら、往年のことを聞きたいと思つてゐたのであるが、前にいつた通りT化粧品屋はなくなつてゐたので、彼女のことを聞くことが出來なかつたのである。けれどもT店で聞かなくても、家の母が知つてゐると思つた。私は或日の夜、何かの話のついでに、それを小説の材料にする考から、母にこの話を出すと、そんな事を他の人やKちやん（この頭文字は私にも私の妻にも當てはまるので、どちらか分らないが、母は多分私よりも私の妻をはゞかつたことだらうと思ふ）に云ふのではないと注意されたので、それ以上話さなかつた。（下略）



出鱈目（狂言）

武者小路實篤

人物

作者

舞臺監督

役者

園遊會の主人公

幽靈

ある魂

他の魂

第三の魂

天使二人

へんな男

狼　澤山

作者。今日はよくお集り下さいました。之からお見せする芝居について一寸云ひわけをさしてもらひます。云ひわけをするなぞと云ふことは作者にとつてどの位い恥であるかは十分に知つておりますが、云ひわけをしないと一寸困る代物なので、云ひわけをすることにしました。何しろ昨日までは私がこの芝居をかくことになつてゐなかつたので、ある有名な大家が芝居をかくわけになつてゐたのですが、どうも大家と云ふものは図太い約束にそむくことに馴れてゐるものと見えまして、いさと云ふ所で、急に書けないと云ふ宣告を下したので、私の主人は非常に面喰つてしまつて、百方手をつくしてたのんだのですが、どうしてもかけない、嘘だと思ふなら俺の頭のなかを調べて見ろ、と云ふことになつたので、やむを得ず、あきらめて、さてどうしたらいゝかと云ふことになつて、彼々主人に世話になつてゐる私の處へ白羽の矢が立つたのです。そして明日迄にかゝなければ今後一切出入りをさしとめると云ふことになつたのです。出入りさしとめ一向かまはないわけですが、私には少しかまふわけがあり、その上かけると甚だ都合のいゝこともあるので、つい引き受けましたが、何しろ明日迄と云ふのですから私も考へました。しかし男子にとつて出来ないと云ふのは恥であり、殊に天才をもつて任じてゐる私がかけないとあつては彼のモツアルト先生にたいしても恥かしい話なので、一晩でかき上げましたのがこの作で、主人に見せましたら讀まない前は殊の外のお喜びでありましたが、よむに從つて御機嫌ます〳〵斜になり、まさに御立腹の頂上にたつしましたが、それからやゝ御機嫌がなほり、時計の短針にたとへますと、初め正午に始まつて六時になり、それから七時八時と上つて來ましたが其處らでもう御機嫌がとまり、之でものになるのかと云ふおたづねで御座いました。其處で早速舞臺監督を御馳走いたし、尤もウドンの御馳走ですが、やつと舞臺監督を納得させ、そして始めに私から皆さんに云ひわけをして、それで御承知を願つてから始めることにいたしました。いくら私に才能がありましても昨日の今日であり、役者の方も今日急に覚えたと

云ふやうな有様ですから、科白も隨分まちがふだらうと思ふのです。尤も少しはまちがつてくれた方がいゝかと思ひます。それでこの芝居に少しでも取柄がありましたらそれは私の取柄であり、少しでもわるい處がありましたらそれは内證ですが、役者のしくじりとお考へになつてもちがひはないと思ひます。それに何しろ速成で御座いますから、速成の面白さをねらひ、舞臺の利用を考へ、皆さんを一つ畑にまいてお目にかけ、一たい之は面白いのか、つまらないのか、いゝものかわるいものか、まるで見當がつかないやうなものをお目にかけようと思ひます。（舞臺のなかをのぞき）まだ一寸時間がありますからついでに申しますが、どうせ出鱈目なものですが、役者さへうまくやつてくれゝば作のわるい所位いは十分ごまかせるはづなのですが、役者も舞臺監督もなつてゐないので、實は心配……

（舞臺監督とび出してくる）

舞臺監督。一寸待つた。君はモウ引こんだらいゝだらう。あとは僕が引きうけるから。

作者。さうか、それぢやあとは君に任せるよ。（退場）

舞臺監督。もうすぐ始めますから、暫らくお待を願ひます。今作者がなんとか申しましたが、作者は自分の作がいゝやうに申したやうですが、中々どうして、殆んどものになつてゐなかつたのを、私達が苦心してやつとものにしたのですが、どうももとがもとですし、時間がないと來てゐますから、すつかりなほすと云ふわけにはゆきませんでした。もしこの作の内で少しでもいゝ處がありましたら、其處は全部、私がなほしたものと………

（役者とび出してくる）

役者。一寸待つた。君はもう引こんだらいゝだらう。あとは僕がひきうけた。

舞臺監督。さうか。それぢやあとは君に任せるよ。（退場）

役者。すぐ始めます。何しろ珍らしいものですから御覧下さい。と云つて至つて平凡なものなのです。役者一同も今度程閉口したことはありません。しかも私達の苦心だけは見て戴きたく思ひます。役者と云ふものは御見物の爲にはかう云ふことまでしなければならないのかと思ふと、腹が立つて來ます。それで一同ストライキを起すことになつてゐるのです。何處で起すかはまだきまつてゐません。もしストライキを途中で起すのがお困りの方は樂屋まで御相談においで下さい。元よりこの芝居は何處でやめてもいゝ代物で、早くやめればやめる程いゝ代物です。たゞ早くやめるとこの作が傑作になつては困ると云ふので、ともかくやることにしますが、途中、呼びこがなりますと同時にストライキが始まりますから、それだけをたのしみに見てゐてほしく思ひます。それでは

主人。(飛び出してくる)一寸待つた。

役者。なんですか。

主人。ストライキはいけないね。

役者。賃金を二割あげてくれますか。それともつといゝ芝居をやらしてくれますか。

主人。このつぎからもつといゝ芝居をやらしてあげるから今度は賃金の値上げは一割でゆるしてくれ。

役者。御主人、御心配はありません。實はストライキを起すのは作者からの御たのみなのです。

主人。何に作者のたのみだつて、

役者。作があんまりだらけたらしまいまでやられると自分の名譽に關係するから途中でストライキを起す眞似をしてくれと云ふ作者のおたのみなのです。

主人。けしからん奴だ。

役者。賃金一割ましは本當ですか。

主人。皆で作者を袋だゝきをすることを條件としたら一割ましてやつてもいゝ。

役者。それはよろこんで承知します。あの作者は舞台があくとすぐ動物の眞似をさせようとするのですから、その位いなことはよろこんでします。

主人。それでは早速、始めるやうにしろ。

役者。早速始めます。

主人。皆さん。こんな所をお目にかけて甚だ殘念ですが、之も餘興として大目に見ていたゞきたく思ひます。

黒幕とれる。

（狼が五六疋　うおう／＼吠えてゐる。月夜、森の中一人の男が現はれる。狼とびかゝる。）

幽靈。これ／＼狼、俺を、なんだと思つてゐる俺は幽靈だぞ。いくら喰つたつて腹ははらないぞ。もつと何處か他へ行つて、馬か鹿でも食つてこい。

狼。はい。はい。それなら一つ馬でも食ひに行かう。

狼。鹿の方がいゝぞ

狼。なんでもぶつかるものを食つちやへ、食つちやへ。

（狼、退場）

幽靈。この頃の男は意氣地がなくつて、誰一人、こゝまでやつてくる奴がない。狼が怖いやうな男に何が出來る。この頃の日本の青年の意氣地のないことが、實に慨嘆千萬なことだ。福田大將が立腹するのも尤だ。コスモポリタンなん

か世界へ行くがいゝ。日本はコスモポリタンなんかのゐる所ぢやないぞ、日本は世界の内には屬してはゐないのだぞ。わからずや。外國が皆せめて來たつて、我に日本魂があるから、なんでもない。日本魂は肉體が殺されゝば殺される程生るものぢや。日本人が皆殺されたつて日本魂さへ生ればいゝのだ。さうすれば外國人はさぞおどろくだらう。日本魂を見て感心しない外國人なんてあるわけはないからな。この頃の日人本は生命が惜しいなぞと云ふから本當にしやくにさはる。うん誰か來たぞ。日本にもまだ中々勇士がゐると見へる。

（勇士出て來る。狼も出て來る格鬪、つまり狼二三疋やられるが勇士食はれる。勇士の魂が出てくる）

幽靈。おい、日本魂、お前は何處へゆくのだ。

他の魂。俺は之から護國の鬼となるつもりだ。

幽靈。感心、感心、感心。君のやうな人間が日本にゐると思ふとたのもしい。

他の魂。この頃の日本人はいくぢがなくなつて困る。國家のことを考へては飯が食へんと考へてゐる。國家はどうなつても自分さへ食へればいゝと考へてゐる。どうもけしからん。ロシアに赤のしをつけて日本を進上したがつてゐる奴がゐる。支那やロシアが日本の國體の惡口を云ふとよろこんで贊成する奴がある。どうも困つたものぢや。

幽靈。それは本當か。

他の魂。本當とも。

幽靈。實に憤慨にたへん。

他の魂。どうか、しやうがないか。

幽靈。しかしいくら日本だつて、こんな亡國の人間ばかりぢやあるまい。

他の魂。それはさうだ。中に有望な奴もゐるが、大勢、日に非なりぢや。
幽霊。困つたな。
ある魂。だが困つてばかりもゐられない。
幽霊。さうだそれにはどうしたらいゝかね。
ある魂。それには日本魂を極楽から深山とりよせて、日本の青年の頭のなかに押し込んだらどうかと思ふ。
幽霊。それは妙案だ。
ある魂。それで俺は極楽にゆきたいと思つて狼に食はれたのぢや、あんな狼なんか、百疋や二百疋はふみつぶすことが出來たのだが、
幽霊。尤ぢや。貴公は感心な方ぢや。
ある魂。それなら早速、極楽へ行かう。
幽霊。行かう。だが極楽へゆくにはどつちへ行つたらいゝのかな。
ある魂。君は極楽へゆく道を知らないのか。それは困つたな。
（一人の男登場）
幽霊。又勇士が來たぜ。
ある魂。どうもひよろ〳〵した勇士だな。
（狼出てくる）
一人の男。助けて、助けて、

ある魂。意氣地のない奴だ。食はれろ。―
幽靈。本當に意氣地のない奴だ。喰はれろ。喰はれろ。
（狼にとう〳〵喰はれる）
狼。まづいね。こいつは、
狼。本當だ、こんなまづいのは始めてだ。―
（魂ぬけ出す）
幽靈。あいつにも魂があるのだね。
ある魂。一寸の蟲にも五分の魂と云ふからね。―
他の魂。私は何處にゐるのですか。
ある魂。君は其處にゐるのだよ。
他の魂。私は一體、死んだのですか、生てゐるのですか。
ある魂。死んだのだよ。
他の魂。死んだのですか。助けて！
ある魂。まだ生きたいのか。
他の魂。いゝえ、死にたいのです。
ある魂。それならいゝぢやないか。死んだのだらう。
他の魂。さうですね。だがいやな氣持でしたよ。壽命がちゞまるやうでした。

ある魂。もうとどまりすぎたのだよ。

他の魂。さうですね。與に何處へゆきました。

ある魂。もう肉體がなくなつたものには用がないので何處かへ行つたよ。

他の魂。本當にびつくりしました。

幽靈。君は何しにこんな所に來たのです。

他の魂。首くゝるためです。

ある魂。何のためだ。

他の魂。女にすてられましたので。

ある魂。馬鹿な奴だ、それで女を殺したのか。

他の魂。いゝえ、とても相手が強くつて殺すことなぞは出來ません。その女は目方が二十貫もあつて、私なぞは一突にとろかされてしまひます。

ある魂。いくぢのない奴だな。そんな奴と話をするのもけがれだ。さつさとどこかへ行つてもらはう。

他の魂。そんなことをおつしやらないで。私は一人で淋しいのです。

幽靈。馬鹿な奴だ。見さげた奴だ。それなら行かう。

ある魂。極樂へゆく道を知らないぢや困るね。

幽靈。君は極樂へ行ける身分なのかい。

ある魂。行けなくつて。

幽靈。だが君は人殺をしたことがありはしないか。

ある魂。それは勿論ある。僕は大地震の時、兼ねての望みを果すのはこの時と許り、

幽靈。それぢや極樂へはゆけないね。

ある魂。なぜだ。僕は日本國の男子だよ。日本國の男子で天理教さへ信じてゐれば誰でも極樂へ行けるはづぢやないか。

幽靈。君は天理教かい。

ある魂。天理教ぢやだめかい。

幽靈。なんだつて人殺をしたものはいけないのだ。

ある魂。國の爲に働いてもかい。

幽靈。駄目なのだ。

ある魂。そんなふとどきなことはない。

幽靈。いくら怒つたつて、だめだよ。

ある魂。それは困つたね。國家の大事件だがな。

他の魂。何か極樂にことづけでもあれば私がおとりつぎをしてもよろしい。

ある魂。君は極樂にゆけるのかい。

他の魂。人殺をしたことはありませんから、ゆけるかと思ふのです。

幽靈。だめだよ。女のことで自殺したいなんて云ふ男は地獄にもゆけやしないぞ。

他の魂。だから極樂へ行けるのでせう。

幽靈。馬鹿、云へ。貴様のやうな奴に、中ぶらりんと云ふ奴で、どこにもゆけずに、ぶら〳〵してゐるのだ。」

他の魂。ぶら〳〵結構です。

幽靈。困つた奴だな。君はそれで日本人か。

他の魂。はい日本人です。

ある魂。困つた日本人だな。日本に貴様のやうな奴がゐるから、日本はもうおはりだと云ふのだ。

他の魂。どうして、日本はまだ中々つぶれやしませんよ。之から大いに盛んになるさうです。

ある魂。誰がそんなことを云つてゐた。

他の魂。今朝の新聞にそんなことがかいてありました。

ある魂。貴様の云ふことは一々しやくに觸る。

他の魂。「へーい、死んでもまだ癪があるのですか。」

ある魂。貴様は馬鹿だな。はり倒すぞ。(打つ)

他の魂。もつと力入れて打つて下さい。少しもいたかありません。

ある魂。之でもか。(打つ)

他の魂。何ともありません。」

幽靈。馬鹿だね。君達は自分の死んでゐることを忘れてゐるのか。死んでしまへば痛いなんて感じやしないよ。」

ある魂。それたらどうしたらこいつの性根がなほるかな。

幽靈。もうなほらしないよ。」

ある魂。困つた奴だな。

他の魂。私はもう何にも怖いものはない。いくらでもおどすがいゝ。之ぢや針の山もこはいわけはない。

幽霊。あたりまいよ。そんなものが怖くつてどうする。第一そんなものは地獄だつてありはしない。

他の魂。人間は隨分出鱈目の嘘を云つてゐるものですね。

ある魂。こんな奴と話してゐると日本魂のことを忘れてしまう。

幽霊。さうぞ。日本魂を見つけるのにはどうしたらいゝかな。

他の魂。日本魂をさがしてゐるのですか。あなたたちは。

ある魂。さうだ。

他の魂。物好きですね。あなたゝちは、そんなものはもう何處さがしたつてありませんよ。第一もう通用なんかしませんよ。

ある魂。何を云ふのだ。日本魂を輕蔑すると承知しないぞ。

他の魂。面白い。承知しないと云ふのはどう云ふことです。

ある魂。よし生意氣なことを云ふとかうだぞ。

他の魂。いたくも何ともないから駄目です。

ある魂。こいつが生てゐたらこんなに大きな顔はさせちやおかないのだが、いたくない奴に逢つては叶はない。だが日本魂を輕蔑しちやいけないぜ。

他の魂。それは輕蔑はしませんが、日本魂と云ふものをまだ見たことがないので、どんなものか私にはわからないので

す。あなたは見たことがありますか。

ある魂。見たことはないが、劇場なぞにゆくとよくころがつてゐることがあるさうだ。まあ櫻色をした、實に美しい玉ださうだ。

他の魂。さうですか。それなら隨分値打のあるものでせう。

ある魂。それは大した値打がある。

他の魂。それなら私も一つ大いにさがしてもうけませう。

ある魂。もうけるとはなんだ。

（魂賣り登場）

魂賣り。魂はいらんか。魂はいらんか。魂の大安賣り、魂はいらんか。

ある魂。魂賣り。

魂賣り。へい。

ある魂。日本魂はあるか。

魂賣り。本物は御座いませんが、贋物ならいくらでも御座います。

ある魂。贋物はいらん。

魂賣り。いやお買ひになるなら贋物に限ります。本物をうつかりお買ひになつたらそれこそ厄介ですよ。珍らしくつぶしがきゝませんからな。當世にははやりません。其處へゆくと贋物はすたりません。一寸金をのましておだてると何んでもします。火の中水の中でもとび込みます。この位いお徳用なものは御座いません。

ある魂。まあ見せろ。

魂賣り。へい。

ある魂。隨分いろ〱のがあるな。

魂賣り。へい金で買へる品物なら何んでも御座います。

ある魂。隨分氣味のわるいぶあ〱してゐるのがあるな。

魂賣り。之ですか。之はふやけ魂です。

ある魂。何か役にたつのか。

魂賣り。いや役には立ちません、まあ魂の屑物ですな。だが標本用としてはこんなのは理想的だと思ひますな。中々かううまくふやけたのはないものです。

ある魂。こいつはいやに小さくつてこつ〱してゐるな。

魂賣り。之はいぢけ魂です。こいつは中々厄介ものです。

ある魂。之も標本用か。

魂賣り。まあさうですね。魂のお醫者さんももうかうなつては手が出せないさうです。

ある魂。日本魂の贋物と云ふのはどれだ。

魂賣り。之で御座います。

ある魂。隨分キタナイね。

魂賣り。何しろ研きが足りないのですから仕方がありません。そのかはりうまく研がくと本當の日本魂が出來るかも知

れません。

ある魂。こいつは戰をさせたら强いかね。

魂賣り。それは强ございます。何しろ生命知らずですから。死んで見ないと死んだことがわからないといふ代物ですから。

ある魂。それならそれを百程もらうかな。

魂賣り。ありがたう御座います。それなら百で一萬圓におまけしておきませう。

ある魂。なんだ、一萬圓。まけておけ。

魂賣り。之だつて一萬圓でも得にはなつてゐないのです。へい。

ある魂。何處からひろつて來たのだらう。

魂賣り。どういたしまして、皆、當人から買つて來た代物ですから。

ある魂。嘘つけ。

魂賣り。買つてくれるのですか。くれないのですか。いや命がないのですね。こんな處にながく居するだけ馬鹿氣てゐる。このくさつた魂ならおやすくしておきます。一つどうですか。

ある魂。うるさい。あつちへ行け。

魂賣り。へい。へい。(退場)

(魂ぞろ／＼登場)

ある魂。惜いことをした。今人間が一疋通つたのだぞ。

狼。本當にびつくりしましたよ。
ある魂。お前でもびつくりすることがあるのか。
狼。殺されては困りますからね。
他の魂。あなたたちでも殺されるのは嫌ひですか。
狼。あたりまいですよ。他人を殺すのが嫌いな奴がないやうに、自分の殺されるのが好きな奴はありません。
他の魂。人間は殺されるのをよろこばないと笑はれる。
狼。それは人間は神經がニブイからですよ。
ある魂。なんだつて。人間が神經がニブイつて。
狼。さうぢやありませんか、人間の鼻はなんのためにくついてゐるのです。人間の耳はなんのためにくついてゐるのです。人間の耳や鼻はかざりにすぎない程、鈍感なものぢやありませんか。
ある魂。だが人間には魂があるぞ。
狼。狼にだつて魂がありますさ。だから私達はあの魂賣りの香がしたので逃げ出したのですさ。
ある魂。魂賣りがどうしたと云ふのだ。
狼。あの魂賣りは。私達を毒瓦斯で殺しておいて魂をとつて、人間の魂を製造して賣つてゐるのです。狐の魂や蛇の魂や豚の魂や猿の魂と私の魂とをまぜると人間の魂が出來ると云つて私達の魂をぬすみにくるのです。
狼。私達の族まで樂になるつてひろつてゆく人間がありますよ。
狼。默つてゐろ。日本魂を製造するのには是非私達の魂が必要だと云つてゐます。

ある魂。いやな奴だな。あいつは。

狼。本當にあんな質のわるい奴はゐません。誰か來たやうだよ。

狼。來た。

狼。來た。

狼。靜かに。靜かに。

（一人の男登場。狼とびかゝり食ふ）

ある魂。もろい奴だな。

幽靈。本當にもろい奴だ。

狼。こいつもあんまりうまくないな。

狼。うまくないよ。

（魂出てくる）

ある魂。もしく。

第三の魂。なんですか。

ある魂。あなたは之から何處へゆくのですか。

第三の魂。之から一寸極樂へ。

ある魂。本當に極樂へゆけるのですか。

第三の魂。えゝ極樂へ別に行きたくもないのですが、天使が迎へに來てくれましたから。

両魂。本當だ。天使がゐるよ。

他の魂。天使て、畫にかいてある通りですな。

ある魂。それで僕達も極樂へつれていつてくれませんか。

第三の魂。えゝ、是非いらつしやい。

ある魂。私は人殺したのです。

第三の魂。人殺しゝたつて懺悔をすればいゝのです。

ある魂。懺悔と云ふのはどうするのですか。

第三の魂。自分が惡かつたと思へばいゝのです。

ある魂。處が私は自分のしたことをわるいことゝは思はないのです。いゝことだと思つてゐるのです。國家のために働いたのですからね。

第三の魂。しかしそれでは極樂にはゆけませんよ。

ある魂。なぜゆけないのです。

第三の魂。極樂には各國の人がゐるのですから。外國人を見ると、すぐ敵の奴なぞと思ふものをつれてゆくと極樂の平和がたもてませんからね。

ある魂。極樂にゐるのは日本人許りぢやないのですか。

第三の魂。あたりまいです。何處の國の人でも極樂に住める人は住むのです。

他の魂。極樂つてどんな處ですか。

第三の魂。ごく平和な所です。ごく調和した心をもつた、おとなしい人のゆく處です。

他の魂。どうか私を其處につれていつて下さい。私は他人と喧嘩をするのが何より嫌いなのですから。

第三の魂。だがあなたはふところに何か持つてゐますね。

他の魂。之ですか。之は私が一生かゝつてためた生命より大事な金です。

第三の魂。それをお捨てなさい。そしたら極樂へゆけます。

他の魂。之をすてゝ迄極樂にはゆきたくありません。之を捨てずに行く工風はありませんか。

第三の魂。それはありませんよ。

他の魂　隨分極樂つてうるさい處ですね。そんな處にはゆきたくありません。

幽霊。あなたはどうしてそんな所にゆけるのです。

第三の魂。私は別に何にもしないのです。神樣に愛されるやうに注意してゐる内に、世の中のことに執着がなくなり、生きてゐる内に死ぬことが怖くなくなり、たゞ自分のすることをしてゐると愉快になり、あまつた力で他の人の生命のためになることを働くのが好きになつたゞけです。

ある魂。君は國家のためにどんな功勞があるのですか。何をしてゐたのです。大將ですか。大臣ですか。さう云へば何處か何とかいふ大將に似てゐらつしやる。

第三の魂。いや私は名もない乞食坊主ですよ。

ある魂。へー乞食坊主ですか。

第三の魂。まあ一寸待つて下さい。私は狼さんに一寸話があるのです。狼さん。

狼。はい。

第三の魂。あなたたちの仲間は何人ゐるのです。

狼。百五十六疋をります。

第三の魂。皆さんに集つて戴くわけにはゆきませんか。

狼。それは駄目です。赤坊もゐますし、乳をのましてゐるものもゐますし、病人もゐます。又寝てゐて、起すと怒るのもゐます。餌をさがしに谷を越え、山を越えて出かけてゐるのもあります。

第三の魂。それなら代表の方だけあつまつて下さい。

狼。私達は代表者です。

第三の魂。それなら幸ひです。一つ皆さんに御相談があるのです。

狼。なんですか。

第三の魂。之から人間を食はないやうにして戴くわけにゆきませんか。

狼。そんなことは出來ません。尤も食ひものをうんとくれて、私達がのべつまくなしに滿腹でゐられるだけ羊や、鷄や、山羊、牛、馬をくれゝば人間は食はずにすみます。

第三の魂。昔、聖フランシスと云ふ人が狼に說敎した話をあなた達は御存知ですか。

狼。そんなことは知つてゐます。

第三の魂。それならあの狼の眞似をして下さい。

狼。いや私の方ではあの狼は馬鹿の標本になつてゐるのです。ついあの狼は聖フランシスにだまされた許りに餓え死に

をしたのださうで、あの狼の眞似をしてはいけないと教科書にかいてあります。

第三の魂。そんなはずはありませんがね。

狼。いゝえ、たしかにさうかいてあります。誰か本を持つてゐないかね。

狼。持つてゐません。

第三の魂。それならどうしても人間を食ふと云ふのですか。

狼。えゝ、食へる限り食ひます。

第三の魂。人間があなたを殺さないでも人間を食ひますか。

狼。食ひます。人間はなか／＼おいしいものです。私達の仲間には人間は食ひたし、生命は惜しゝ。と云ふ言葉がありますが、一度食ふと生命なんかどうでもいゝ、又食はうと云ふ氣になります。それに人間さへゐなければ私達は世界の王になれるのですからね。いくら獅子が強いの、虎が強いのと云つても、私達が何千何萬とかゝれば、どうすることも出來ませんからね。

第三の魂。人間と戰へばどうせあなたたちはまけますよ。

狼。だが犬のやうになるよりは死を選びます。

第三の魂。どうも困りましたな。

或る魂。天使が愛想をつかして恥かしさうにこそ／＼逃げ出しましたよ。

第三の魂。私はあなた方に食はれたのは、あなた方と人間とを妥協させるためでしたが、どうしてもきいてくれなければ私は犬死にしたわけです。

狼。どうしてもきゝませんよ

第三の魂。それではあなた達は殺されてもいゝのですか。

狼。火のやうになつて生るよりは死ぬ方がよろしい。

（へんな男が出て來る。狼、おどろくが吠えかゝる）

へんな男。いくら吠えたつてちつとも怖くないぞ。和尚さん、和尚さん。

（狼おほつてある布をはぎとる。男おりの中にゐて烟草をのんでゐる）

へんな男。和尚さん。和尚さん。和尚さん返事をしないと、鐵砲で狼をうちますよ。

第三の魂。打つちやいかん、打つちや。

へんな男。狼逃げないと打つぞ。

第三の魂。狼さん早くお逃げなさい。逃げないとこの男は本當に鐵砲をうちますよ。

（狼逃げる

へんな男。逃げたな狼。和尚さん。和尚さん。（おりに足が生へたやうな格好して、和尚をさがしにゆく。和尚の着物に足がさわる。マッチで着物を見）それ見ろ。だから大きなことを云はないがいゝのだ。

第三の魂。いや俺は喰はれても平氣なのだぞ。

へんな男。和尚の奴馬鹿な奴だな。どれ歸らう。（退場）

（鷄のなき聲が聞へる。段々朝になる。舞台には何にもない。小鳥が啼いてゐる。若い男女が逃げてくる）

若い男。とう〳〵こゝまで逃げて來ましたね。

若い女。えゝ。隨分くたびれました。

若い男。もう大丈夫です。おつてはかゝつては來ません。

若い女。本當によく逃げられましたね。私はどうかと思ひました。

若い男。もうこゝまでくれば大丈夫です。

若い女。少し休みませう。

若い男。休みませう。

若い女。私ねむくなりましたわ。

若い男。僕もねむいのです。

（二人ねむる。狼逆登場）

狼。こいつはうまさうだな。

作者（登場）皆さん。この男女を狼に食はしてしまひませうか。それとも、こゝに勇士を出してこの狼を退治させることにしませうか。どちらにいたしませう。皆さんのお好みに應じます。なんなら狼のこらずに逆立ちさしてお目にかけてもよろしい。

狼。作者を喰へ。作者を喰へ。この恥知らずの作者を喰へ。

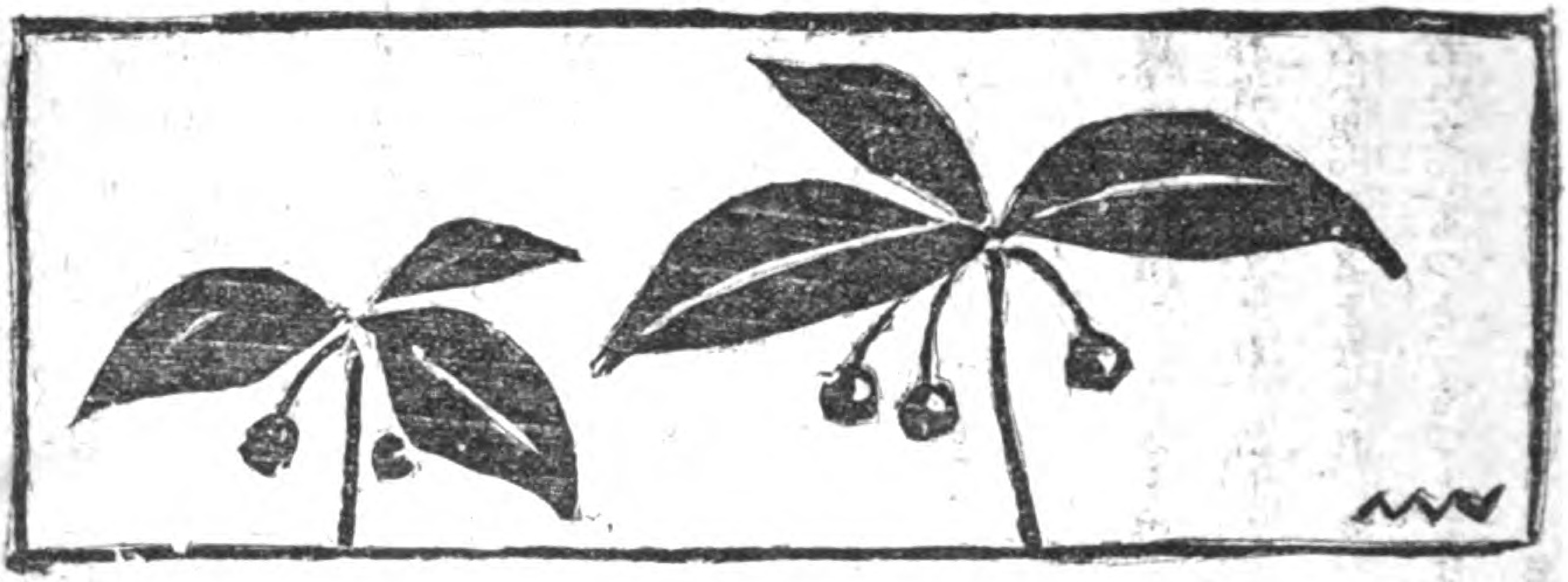
作者。許してくれ、許してくれ。

若い男。作者をなぐれ、なぐれ。

若い女。もつと、もつとおなぐりなさい。もつと、もつと。

（呼びこたゐるめはてて幕をおろす）

二六、三、一二



花束

水上瀧太郎

珠枝は生れて始めて受取つた月給を帶の間に納めて、嬉しいやうな羞しいやうな心で會社を出た。古ぼけたセルのコートを着て居ると、何となく胸の邊がふくらんで居るやうな氣持は消す事が出來なかつた。

時々、敷石の上つ面を濡らして過る雨は、止む後から乾いて、暮春の空は西の方からうつすりと明るくあがりかけて居た。傘をさす程の事も無い名殘の雨が、額や鼻の先をひやりとさせたが、珠枝は一刻も早く我家へ歸り度くて、眞直に電車へ急いだ。自分のやうなものに會社の仕事が勤まるかどうか、何か取返しのつかない失策を人中でやりはしまいかと、心配ばかりして居たのが、たつた今會計の年寄の手から狀袋入の給料を受取つた時、すつかり安心に變つた。みんなは其の場であけてなかみをあらためるのだが、それは羞しくて出來なかつた。人目の無い片隅へ行つて胸をどきどきさせながら調べて見た時の自分の姿を、はつきりと思ひ返した。

「おい。」

低い聲で呼びかけられて、一歩下つた目の前に、思ひもかけない伸次が立つて居た。

「まあ。」

珠枝は顔が紅くなつた。會社の近くだから、誰かに見られはしないかと云ふ不安があつた。何時に變らぬ自分の夫の、うす汚ないみなりが、一層羞しさを強くした。

「待つて居たんだ。」

鐵縁の眼鏡の下で、そればかしは昔の若々しさを殘して居る切れの長い眼が、からかひ面で笑つて居た。

「どうなすつたの。」

電車を待つ雑踏の人の眼が、みんな二人の上にそゝがれて居るやうな、いはれの無い惧れで、珠枝は吾ながら機嫌がよくなかつた。

「どうもするもんか、待つて居たのさ。」

あくまでも本氣で無い、いたづらも度が過ぎて、いやがらせに近いた。珠枝の嫌ひな伸次の癖だつた。

「今日はもう社の方の用事は濟んだのですか。」

「濟んださ。だから此處に待つてゐたんぢやないか。」

「さう、そんなら歸りませう。」

往來中で、冗談口をきくものの相手になつてゐる氣は無かつた。丁度來かゝつた電車の方へ、促し立てゝさつさと歩き出した。

「おい、待てよ。」

附近の人の振返る程大きな聲で呼び止められて、珠枝の足は進めなくなつた。

「お歸りにならないの。」

爲方なしに引き返して來て、出て行く電車を未練らしく見送つた。

「久しぶりで銀ぶらでもしようぢやないか。」

そんな事は幾年にも聞いた事が無いので、愈々不眞面目に思はれた。

「だつて詮一がうちに待つてゐるぢやありませんか。」

「待つてゐたつていゝさ。お土産でも買つてつてやれば。」

「だつて御飯を食べさせてやらなくては可哀さうですわ。一人つきりでは如何にもしやうがありませんもの。」

今年學校へ入つたばかりの子供のある事は、會社勤めをしなければならなくなつた時も、一番強く決心を鈍らせた。留守の間は近處の女の子に來て貰つてゐるのだが、子供がどうして居るかといふ心配は、始終心を去らないのであつた。

「たまには飯位喰はせなくたつていゝんだ。俺達だつて、ろくに物も喰はずに稼いでゐるんぢやあないか。」

「でも子供は可哀さうですわ。」

どうしても同意しかねたが、人中で夫と爭ふはしたなさを怖れて、つい健次の歩く方へついて行つた。

「どうして待つて居たか知つてるかい。」

先に立つて歩いてゐたのが振返つて訊いた。

「お前の懐に月給があるからなんだ。いつぱいおごれよ。」

下卑た笑方をして肩をすぼめた。人のゆききの多い處で、あんまり卑しい男が自分の夫であると云ふ事を恥じて、珠枝は赤面した。その次の瞬間には心が寒くなつた。ほんとに自分の月給を待つて居たのかしら。せめては子供にでもおいしい物を喰べさせ度いと思つて居たのに、酒を飲むとだらしがなく、無闇に氣が大きくなつて、椅子をかけて飲廻る健次にかゝつては、一箇月の苦勞が生んだ月給も、むざんに喰はれてしまふに違ひ無い。賑かな銀座を眼の前にひかへて、珠枝の心は暗くなつた。

「あなた、うちに歸りませうよ。」

ふと足をとめて呼びかけたが、健次は一寸振返つたばかりで、その儘車路を横切つて向側へ渡つて行つてしまつた。珠枝はその後を追かけた。

「坊やが待つてるでせうよ。」

ともう一度云つて見たが、健次は何の返事もしなかつた。

珠枝は久しく夫と一緒に歩いた事が無かつた。結婚の當座にはよく斯うして散歩に來たが、それと今とは餘り違ふ姿だつた。死んだ兄の學校友達で、しかも庭球のパアトナアだつた關係から、年中家に出入するうちに、これも女學校の庭球選手だつた珠枝と戀に落ちた。東京育のお坊ちやんの兄とは違つて、早熟で才子肌の健次は悧巧に見えた。頼母しかつた。不成績は運動家にはつきものだが、健次は何時も級の上席に居て、學生の委員に擧げられ、内外に名が聞えてゐるばかりで無く、萬事はきはきしたとりなしが、初心な少女の胸に清々しく燒きついた。物堅い陸軍々人の家庭に育つた珠枝は、戀を許す事さへ恥と考へるやうなところもあつたが、一方には強い意志を持つて居て、兩親の反對にも拘らず遂に一緒になつてしまつた。父親の反對の理由は、他に上官の息子で且自分の隊附の若い士官から懇望されてゐた

のと、健次の郷里の家柄がよくないと云ふこともあつたが、それよりも二人が親の知らない間に愛しあつて居たのがいけなかつた。さういふ身内の者の反對が、かへつて二人を堅く結ぶますがとなつた形で、思ふに任せぬ新世帶も樂しかつた。子供が生れて、月日はたつたが、その間に思ひもかけない變化が容赦なく襲つて來た。學校を出ると直に勤めた會社で面白くない所爲があつて、健次が馘首されたのが第一の原因だつた。新たに就職口を探しても、前の會社をやめられた理由が、公金を遊興に流用した事にあるので、何處でもていよく斷られた。半年・一年經つうちに、もともと貯蓄も乏しい所帶だから、珠枝の身の廻りのものも見る間になくなつた。性格もがらりと變つてしまつた。年中苛々して、うちに居れば怒鳴りちらし、外にでたと思ふと、何處で醉つて來るのか前後もわからなくなつて歸つて來る。歸つて來るならまだしもだが、歸つて來ない夜も多くなつた。自分の落度は咎めもしないで、やたらに世間を罵つて止まなかつた。郊外の何處かに看板をかけて、市中の銀行會社商店を脅かして廣告料をとつて居る勞資共榮新報とかの外交社員になつてからは、一段と粗暴になつた。同僚だといふ長髪のうす汚ない男が時折たづねて來て、ひそひそ話したあげくに、太いステッキをついてでかけて行くのが彼の此頃の姿となつた。生計の苦しさに、珠枝も意を決して會社勤めの身となつた。珠枝はゆくりなくも、むかし熱烈な戀をして父母にも背いた二人の姿がこれなのかと思はないわけにはいかなかつた。久しぶりで連立つて歩く銀座が寂しかつた。

兩側のはなやかな商店、歩道を押合つて歩く男女、總てが自分達のみすぼらしさをはつきりさせる爲めの存在に外ならなかつた。珠枝は月給のしまつてある胸に傘を抱いて、浮かない姿で、自分の知つてゐる人に逢ひ度くないといふ事ばかり念じて居た。

數限りも無い人出だが、その中で珠枝の心に觸れたのは、四辻に花を賣る外國婦人とそのいとけない娘だつた。時候

はづれの色の褪めた外套を着たのが、大型の帽子の下の血色の冴えない、そばかすだらけの顔に無理に微笑を浮べて、道ゆく人に花を勧めて居るのだ。短い袴と靴下の間に真白な二つの膝子をむき出しにして居る娘も、人の袂に縋るばかり、追かけては花束をつきつける。

「十錢。どうぞ。十錢。」

と覺束ない日本語を繰返す。落魄して知らぬ他郷の街頭に救を求める親子の身の上を、珠枝は他人事とは思はなかつた。母親の方こそ、いくら笑顔はつくつても、貧苦と不安にさいなまれた面影は消せなかつたが、娘の青い瞳には清淨な童女の魂が宿つて居た。珠枝を追かけて來て、花束をさしつけながら、仰ぎ見て訴へる可憐な姿を見ると、うちに待つて居る誼一の事が、俄に胸にこみあげて來た。珠枝は振切るやうに顔をそむけて夫の後を追つた。

「何を愚図々々して居るんだ。」

「あの西洋人可哀さうですねえ。露西亜人でせうか。」

「亡命客といふやつさ。帝政時代に勝手な真似をした役人か軍人の女房どもだらう。むくいが來たのだ。」

健次は不機嫌な様子で、事毎に癪に障る救はれない心持を、もつとはつきりさせる爲めに、ぺつぺつと唾を吐いた。

「おい、腹が減つた。何處かで飯を喰はう。」

「でも遅くなるでせう。あたしはうちで坊やと一緒に頂きますわ。」

「何を云つてるんだ。始めて月給を稼いだお祝をしろよ。」

まるつきり取合はないで、いきなり暗い路地の中へ曲つてしまつた。

「あたしいやですよ。これをつかつてしまつてた。今月はほんとに困るんですもの。」

後から外套の裾をつかんで引止め度い位だつた。狭い路地の中は、今朝からの時行の小雨に濡れて居た。足場の悪さに、珠枝はぬかるみに踏込んで足袋を汚してしまつた。

「吝嗇な事をいふなよ。そんなら俺がおごつてやらう。今日は此方だつて持つて居るんだ。」

とかへりみて胸を叩いた。

「だつてあなたの方は二十八日が月給日でせう。」

珠枝はちやんと知つて居た。

「馬鹿。たかのしれた月給なんかあてにするものか。今日は鴨が引懸りやあがつて、しこたま寄附させてやつたんだ。」

どすをきかせた低聲で答へて、狡猾な忍笑をした。

汁粉屋鮨屋珈琲店などの並んで居る中に、小料理江戸つ子といふ看板を出した縄暖簾があつた。健次は其處に入つて行つた。

「さつさと來ないか。」

逡巡して居る珠枝を強いて閾をまたがせた。

「來たな。」

いきなり大きな聲をかけられてすつかり參つてしまつた。たつた一つ細長い脚の高い食臺があつて、それを差挾んで椅臺が並べてあるのを見下しながら、向鉢卷をした痩こけたぢいさんが、眞魚板にむかつて刺身庖丁を手にして構へて居た。外にはそのぢいさんの娘か孫らしい女が一人お燗番をして居る丈だつた。椅臺に腰かけたばかりで、長年沁込んでゐる酒の臭が、むうつと珠枝の鼻をついた。

「刺身とお俺で一本つけてくれ。」

健次はまんまと珠枝を連込んだ得意を示して目尻で笑つて居た。

「よし來た。」

瘦つぽちのおやぢは鉢卷をしめ直して、大きな鮪の肉塊に庖丁を入れた。その樣子がいかにも芝居がかりで、お玉にはあざとく思はれた。

「愉快だ。」

健次はおやぢの威勢よがつて居るところが氣に入つて、いつぱいの酒が咽喉を通ると、板場を見上て媚を賣つた。

「おやぢ、お前んとこはうまい物を喰はせると彼々聞いて居たが、こいつは凄い刺身だねえ。外に何か出來るなら頼むぜ。」

「何にしやう。其處に書いてあるものしか出來ねえんだ。」

わざとつつけんどんな口をきくのを賣物にしてゐるのは明かだつた。

「さよりわさび、蟹二ばい、入道酢か。入道は驚いたなあ。」

珠枝にも、つけ木を見せて笑つた。

「何でもいゝから、うまいものをくれ。」

「そんな無理を云つちやいけねえよ。俺んとこにはうまくねえ物はねえんだ。」

おやぢはすつかり、いゝ氣持になつて、手もとの茶碗酒をあふりながら、愈々むつつりした面を見せた。

「やりやあがつたな、そんなら入道だ。」

「よし來た。そつちのおかみさんも喰ふかい。」
「あたし。あたし入りませんわ。」
自分などの來可き場所でないと思ふと、珠枝は箸を手にする勇氣も無く、あわてゝ健次を控へさせたが、
「いらねえつて。まあ喰つて見ろよ。まづかつたら代は貰はねえから。」
おやぢの一言におつぶせられてしまつた。
健次は二本目の德利に手をつけて居た。
「うまいぞ、喰はないのか。へん陸軍中將のお孃さんだとおつしやいますつてね。」
少しは酒氣も顏に出てゐたが、それよりもおやぢの意氣に調子を合せようと努めてゐるのだつた。陸軍の將官の娘を妻にして居るといふ事は、昔から彼の得意とするところで、知らない人間にもどうかして知らせようとしたものだつた。おちぶれてからは、自嘲の色彩を加へて屢々口にした。
「何を。少將なら大磯の女郎だとよ。」
直ぐに受けて、おやぢは吐出すやうに云つてのけた。
何時迄も箸をつけないわけにも行かないので、珠枝もつめたくなつたお椀に口をつけた。
「どうだい、うめえだらう。」
うじうじして居るのが癪にさわつて居るらしく、おやぢは意地惡く又聲をかけた。珠枝は折角口に入れた物の刺戟が嚙みきれなくなつて、こつてりした脂肪が口中に漲つてしまつた。
健次は益々上機嫌で、しきりにおやぢの人を喰つた態度を稱讚し、又酒のかはりを命じた。

「そんなに付上つていいんですか。」

お分目に物を言はせて急込つかんだが、

「なんだい、まだ三本目ぢやあないか。」

と大きな声で振切られて、それつきりうつむいてしまつた。

「俺んちの酒ならいくら飲んだつて平氣だ。頭に來るやうなしろものたあ違ふんだ。」

おやぢにとつては珠枝の所作が一々氣に食はないらしく、あてつけがましい事を云つて喘いてゐる。無理に愛嬌や笑顔を作らして、への字に口を結んで黙り切つてゐるのが、珠枝には悪玉としか思はれなかつた。それに調子を合せてゐる健次の態度もいやだつた。珠枝は膝に手を置いて、我家に寂しく残つてゐる子供の事を心配してゐた。

日が暮れかゝると客足は繁くなつた。馴染らしいのがぞくぞく入つて來て、狹い土間は忽ち滿員になつた。みんなが珠枝の姿を無遠慮に見る。誰も彼も酒のみで、見る見るうちに食卓の上には徳利が林立した。自分では氣の付かないうちに、何時の間にか度はづれになる酒のみ特有の高調子で話は入り亂れ、醉つてゐない者には面白くもない事に這笑聲が湧くのであつた。無規律放埒な有様が珠枝には堪へられなかつた。誰憚らぬ猥褻談が續出する。たつた一人の女客を意識に入れて、わざと聞えよがしに喋るのだつた。健次もその仲間に入つて、見ず知らずの人とあられもない閨中の話をして居た。珠枝の全身が其の場にゐたゝまれなかつた。

「あたし一足先に歸りますわ。坊やが可哀さうですから。」

「まあ待てよ。こいつを飲んだら飯にして歸るから。」

健次はとろんと坐つた眼を險しくした。低い聲でさゝやいたのに、高調子で受けられたので、一座はぴたりと話をや

めて、一所に二人の方へ視線を集注した。珠枝は又手も足も出なくなつてしまつた。

「いよう、珍しいぢやあないか。」

突然暖簾を分けて入つて來たのが、大袈裟に聲をかけた。

「こいつあいゝや。此間君がひどく推稱して居たから試しに來たのだ。」

「どうだ氣に入つたらう。」

「氣に入つた。おやぢの意氣が面白い。」

健次は差向の腰かけに割込んだ相手にすぐさま盃をさした。

「おい大將。お前の意氣が氣に入つたとよ。何かうまいものをおごつてくれ。」

その男は下地があつて、體全體がふらふらして居た。一生懸命で舌を使つても、お國訛にかくせなかつた。

「氣に入つて貰はなくたつていゝや。」

おやぢは一段とむつつりした顏をして、愛想氣なく言ひ放つた。

「畜生、そこがいゝんだ。」

健次は拳骨で強く食臺を叩いて叫んだ。

二人はさかんに盃をとりやりしてゐたが、相手の男は珠枝の存在が氣になるらしく、露骨な目まぜで健次にきいてゐた。

「あゝさうか。女房だよ。」

相手の目顏をなかなかさとらなかつた健次は、其處で始めて紹介した。

「社の松永君だ。」

「僕松永。小山田君とは肝膽相照す吞助です。」

と云つて全身をゆすつて豪傑笑をした。その笑方さへ、珠枝とは違ふ世界の人間だつた。

珠枝の氣持は何時か反抗的になつてゐた。最初のうちこそ自分などの來べき處で無いと思つてちいさくなつて居ても尚且居場所の見出せない心持だつたが、今は輕蔑して觀察の眼を向ける事が出來た。第一に此の家のおやぢが、不機嫌無愛想つつけんどんを賣物にして、しかもそれが充分客にはいゝ印象を與へて居ると承知しきつて居る態度、家號に迄江戸つ子とつけた淺い魂膽迄はつきりわかつた。その魂膽がどうして此の男達にはわからないのだらう。誰も彼も、おやぢの態度を是認し、稱讃し、殆んど尊敬して居るのだ。珠枝は、健次を中心として此の場の人間のすべてを見くびつてやり度かつた。

そんな事とは知るよしも無く、隣の二人はしきりに何か話してゐたが、

「何、貳拾圓ふんだくつたつて。」

といふ健次の聲がはつきりと耳に入つた。

「百圓が鐚一文缺けても受取らないと大きく出てやつたが、何分一度目の事だから先方もさう易々とは出さないや。廣告は出さなくてもいゝから寄附金として受けてくれと貳拾圓出しやがつた。今日で一週間も足を運ばせやがつたから、萬一すかを喰はせやあがつたら、あの庶務の野郎ぶん毆つてやらうと思つて居たんだ。」

松永は大得意で話した。それは彼等の新聞を種にして何處かの會社から金をねだつて來たのだと、珠枝にも直ぐわかつた。健次の勤めて居る新聞といふのがそれ專門のものだつた。何といふあさましい事だらう、新聞と云つたところでい

何の新しい報道も無く、別段面白い讀物も無く、たつた四頁の月四回發行といふのだが、廣告だ寄附金だと云つて脅喝し、あまつさへ人前で公言する面の皮の厚さを、珠枝は心から憎んだ。

「うまくやつたなあ。しかし俺も凄いところを見せたよ。」

松永一人を得意がらせては置けないと云つた風に、健次も酒の充分しみ込んだ上半身を食卓の上につんのめらせ、

「あの丸の内の保險會社なあ。一度だつて器用に出した事のねえ奴だが、今日は社長の自動車を玄關で待伏せしてふんつかまへ、たうとうこれ丈ひつたくつてやつた。

片手を開いてみせびらかした。

「五兩か。」

「馬鹿。痩せても枯れても小山田健次だ。五兩や十兩つかんで追拂はれて堪るものか。」

もつれる舌に力を入れて、これも負けない氣でぞんざいな口をきいた。懐から財布を出すと、中から小切手をつまみ出して松永の眼の前につきつけた。

「五十兩か。とても凄いなあ。どうだい、今夜は吉原へ繰込まうじやないか。」

松永はすつかり有頂天になつて大きな聲を出したが、珠枝の方を盗み見て、

「失言々々。」

と云つて頭を掻いた。

「あたし失禮して歸らして頂きますわ。子供に御飯を喰べさせてやらなくては。」

半分は松永に聞えるやうに云つて素早く體を浮かしたが、健次は承知しなかつた。

「待て待て。もう一本でこつちも仮にするから。」
「もう一本もう一本てきりがないぢやありませんか。隨分醉つてゐらつしやるくせに。」
あらん限りの勇氣を振つて止めなくてはならないと思つて、二の腕に手をかけて意見して見た。
「うるさい。」
かけられた手を横に拂ふ積りだつたのが、珠枝の眼から頬へかけて平手打を喰はせてしまつた。
「あなた。」
その亂暴を咎めようとしたが、唇が慄へて何も云へなかつた。
「歸れ。貴様の面を見て居ると酒がまづい。良妻賢母づらしやあがつて目ざわりだ。なあ松本。今夜はつきあつてくれ。一人で飲みあかさうぢやあないか。」
健次は酒瓶を出して、冷さめた酒に癇癪筋を立てながら怒鳴りつゞけた。
「それでは歸ります。」
あぶなく涙の出さうな目を一生懸命こらへて、言葉は健次にいひながら、わざと叮嚀に松本の方へ頭を下げた。もうもうこんな處に居るものかと云ふ勢で立上ると、
「待て。」
と健次が呼止めた。
「財布を置いて行つてくれ。俺は小切手しか持つてゐないんだ。」
見榮も外聞も無く、人前で斯う云はれると、珠枝は財布を出さないわけには行かなかつた それをやらなければ、無

錢飲食になるに違ひ無かつた。大事に帶の間にしまつて置いたのを出さなければならなかつた。今朝うちを出る時はからつぽだつたのが、今は月給が手つかずに入つて居る。

健次はひつたくつて、中から拾圓札二枚をつまみ出して自分のポケットに入れた。

「勝手にしろい。」

なかみの減つたのを食臺の上にはうり出した。珠枝は默つてそれを取ると、暖簾をくぐつておもてに出た。うすい霜のかゝつた春の夜の空に高く、星が涙ぐんで目ばたきしてゐた。

間も無く、珠枝の姿は暗い川岸にしよんぼり佇んで居た。涙で濡れた顏をして大通は歩けないので、知らず識らず反對の方角へ來てしまつた。泥の深い水の臭が微かに浮動して居た。自分の力ではどうする事も出來ない女の一生をはかなむ心が、泣いた後の寂しさの中に冴えてゐた。

長い間水のほとりにしやがんで居たが、やうやく氣を取直して立上つた。此の世の中でたつた一人、我身とも思ふ誰一が俄かに戀しくなつた。まばゆく燈火の大通の方へ引返して來ると、四辻の花賣を取圍んで一群の人が黑くたかつてゐる。たゞならぬ景色に足をとめて延上つて見と、人の輪の眞中に花賣の女を相手に喋つて居る醉漢があつた。

「わかつたかい。わからねえんだらう。ユウ露西亞人、ミイ日本人――ヂヤパンははは……」

長い髮をお河童のやうに切つて、わざと帽子はかぶらない、ルパシユカのやうな服を着た若い男が、ひどく嗄れた聲で云つて居る。

「いゝかい。國は違つても、お互に人間だ。兄弟だ。人類はみんな仲よくしなくちやあならねえんだ。それが吾々の使命だ。いゝかい。それだつてえのに、なんでえ畜生。」

職工らしい醉漢は花賣をかせにつかつて、あたりを取卷いて居る人間に、自分の雄辯をほこるかの如く續けた。

「貴族、金持、こいつらが威張つてゐやあがるもんだから、全人類の幸福は邪魔されてゐるんだ。いゝかい。それでだね。俺のいひたいのは此の花だよ。」

何を云はれてもよくはわからないらしく、當惑した顔に無理に笑を湛へて、背後に怯えて居る娘をかばつてゐる花賣の手の花束を指差した。

「この花は奢侈だ。匂ひもいゝや。貧乏人の俺にだつてそいつあわかつてら。しかし、こいつが喰へるか。喰へねえだらう。」

醉漢は力をこめた拳骨を空に振つて叫んだ。花賣は矢張微笑してゐる。

「喰へねえものを賣つてどうするんだ。不生産的だ。ブルヂョア的だ。今日幾千萬の人間が喰へねえで泣いてゐるのに、誰だ、こんな喰へねえものを買やあがるのは。」

いきなり花賣の手の花束をひつたくると、めちやくちやに毟つて大道に叩きつけ、靴をあげて踏躙つた。取卷いて居る人達の顔にはさまざまの感情があらはれたけれど、誰一人割つて入らうとする者は無かつた。花賣は泣きさうな顔をして救を求めたが無駄だつた。

醉漢はしつこく花の死骸を侮辱したあげくに、ヅボンのかくしからちいさい銀貨を出して花賣に突つけた。

「いゝかい。俺の心持はわかつてくれたらう。花なんか賣つちやあいけねえよ。パンでも納豆でも賣つてくれ。お前さんも貧乏人なんだ。だからこれをやるよ。」

さう云つて、びくびくして手を出さず、しりごみする花賣の手に無理に銀貨を握らせた。

「俺あどろ棒ちやあねえんだ。代に拂つたよ。」

溜飲のさがつたやうないゝ氣持で、あたりの意氣地の無い人間を睥睨しながら、拳骨でとんと胸を叩いて、大手を振つて立去つた。

珠枝は、無責任な見物の散り盡す迄、哀れな親子の姿に心をひかれて立つて居た。どんなむしやくしやを肚に持つて居るのか知らないが、あまりといへば傍若無人の醉漢の振舞を見て、義憤に堪えられなかつた。さんざつぱら勝手な熱を吐いて商賣の邪魔をし、衆人環視の中で恥しいおもひをさせて置きながら、金さへ拂へば濟むと思つて居るのか。誰か素晴しく腕力の強い人が出て、あの醉漢を大地に叩きつけてくれゝばいゝと念じた甲斐の無かつたのも口惜かつた。珠枝は、先刻自分がひどいめに合はされた事と一緒にして、我が身の上の事のやうに殘念がつた。

「その花頂きます。おいくらですか。」

醉漢の騷ぎで怯えてしまつた娘を一心にさとしてゐる花賣の傍へつかつか寄つて、聲をかけた。出來る事ならば殘らず買つてやりたかつた。花賣を慰める爲めと、もうひとつには今は其の場にゐないけれど、彼の醉漢への復讐の心のあらはれとしたかつた。

言葉をかけられた花賣は、珠枝の顏を見上て習慣的の微笑を浮べた。

「これ拾錢。これ參拾錢。」

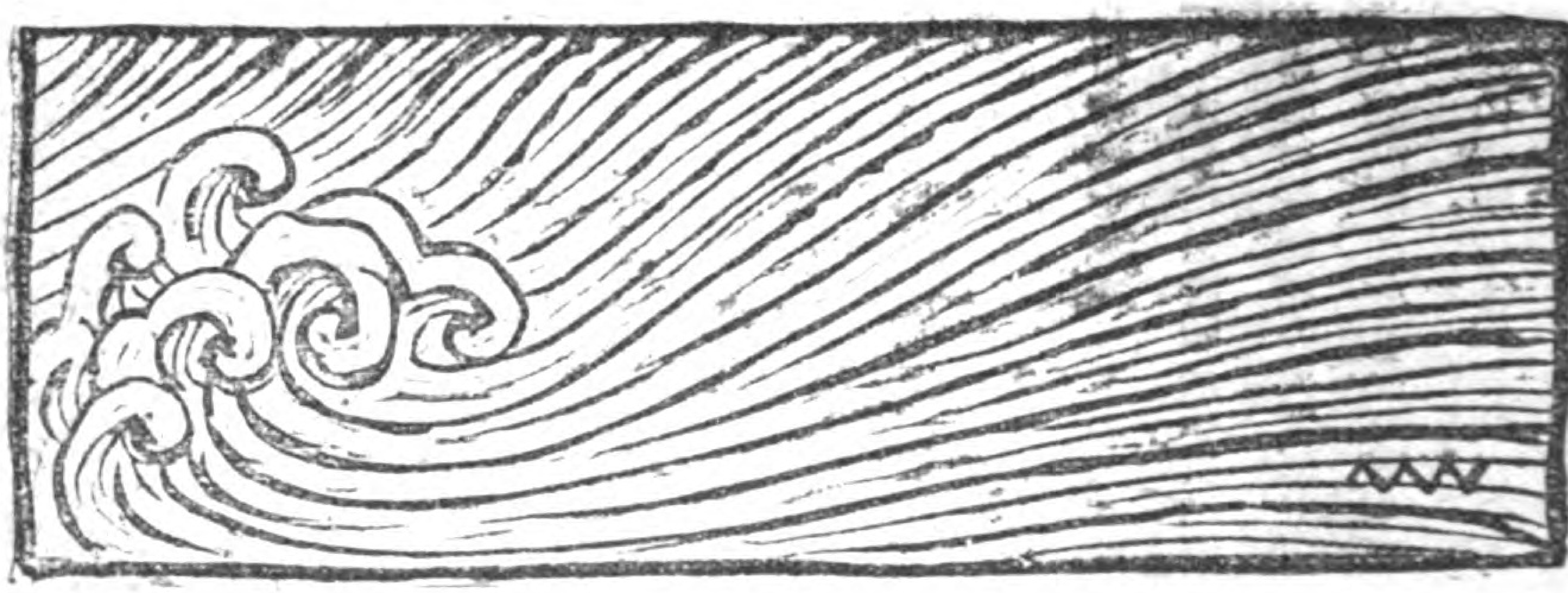
腕にかけてゐる竹籠から花束を取出して見せた。

珠枝は僅かな給料の大部分を拔取られてしまつた財布の底をはたいて親子の者に與へ度い衝動に惱まされたが、往來の人が足をとめて見てゐるのに氣が付いて、自棄のはしたなさを反省した。

「雨が霽きさうね。」

石上は代價を渡して、花屋の表面に満足しながら、花束を傘に持添へて逃るやうに電車へ急いだ。

空いてゐる電車の腰かけに腰を下すと、珠枝はほつと溜息をした。頭も心も疲れてゐた。づきんづきん頭痛がして、額には熱があるやうだつた。車體の動搖には、快い目まいさへ感じた。目を閉ぢて、傘の頭に垂れた手に持つ花束に額を埋めると、薔薇、チユウリツプ、ヒヤシンス、水仙などの入りまじつた強い香が氣を遠くさせるやうに匂つた。花籠に眠るやうだつた。何もきときつては考へられない忘我の境に近く運ばれて行つたが、珠枝の閉じた目のうちにありありと浮ぶのは、先刻醜漢に蹂躙られた花の姿だつた。瞼のうらが熱くなつて涙をあげる事が出來なかつた。（大正十五年三月十五日）



海岸にて

葛西善藏

「これアお珍らしいお客さんがお見えになつたと、旦那やお祖母さんがたいへん喜んでゐますよ。……一體旦那さんのお出でになつたのは、いつ頃のことなんですか、もうだいぶ舊いことなんでせう？……」風呂場で、若い番頭が脊中を流して呉れながら、ニコ〳〵した顏して斯う自分に話しかけた。

「さうかねえ？……よく僕だと云ふことがわかりましたねえ。何しろ十七八年も前のことなんだから。尤も四月から十月頃まで居るにはゐたんだけど、それにしてもよくわかつたもんですなあ……」自分も、多少きまりもわるかつたが、やはり、懷かしいホツとした溫かい氣持にさせられた。

「そりやもう商賣のことですから、……私が宿帳を下げて行きますとね、すぐ旦那さんのことをさう云ひましてね、それに内の旦那も、雜誌なんか取つて讀んでるもんですからね、ふだんから旦那さんのお噂さが出て、私なんかも聞いてゐましたですよ。お祖母さんも明日御挨拶にあがりたいと云つてました」

「お祖母さんと云ふと？……」

「先の大旦那の……」

「大旦那は亡くなりました？」

「え、もう亡くなつて七八年になりますでせう」

番頭と、斯んなやうな話をしながら、ゆつくりと風呂を出て、久しぶりで荒い波の音に聴き入りながら、女中のお酌で膳に向つた。

自分は一週間程前に世田ヶ谷奥の家を出て、數年前に行つたことのある信州の温泉場を二三ヶ所廻つて見たのだが、冬の信州の温泉場の氣分は、自分の弱い神經には荒過ぎる氣がされ、迚も落着いて物なぞ書けさうにもないところから、久しぶりで荒らしい海を見たことだけに滿足して、行路として引返したのだが、途中から、ふとこの大洗のK旅館のことを思ひ出して、反れて來たと云ふ譯だつた。財布は空になりかけてゐるし、ボロ外套のポケットに原稿紙の風呂敷包み一つ入れたきりの見すぼらしい自分の風態を顧みては、躊躇はされたのだが、しかし十七八年も前のことだから自分の顏を見たつてわかりはしないだらう――斯うも思はれたので、思ひ切つてやつて來る氣になつたのだつた。そして、水戸にも昨晩着いて、暗い三里の路を、三四人の合客と晝前からの乘合自動車に揺られて來たのだつた。他の客は途中の村や磯濱の町で降りてしまつて、大洗まで來たのは自分ひとりだつたが、K旅館は、多少の改築はされてゐるのだらうがほとんど昔のまゝの構へで、入口に植つた植木などにも見覺えのある前庭を通つて、玄關から二階の部屋へさつきの番頭に案内されたのだつたが、成程、彼が宿帳をさげてから風呂場に案内しに這入つて來た時の彼の表情は、急に打解けた和らいだ色に變つてゐた。やつぱし來てよかつた。こゝだと自分にも落着いて仕事の出來るやうな氣持にな

れさうだ」信州では別所温泉行きの寒い電車の中で震へあがつたり、歸りには、夜の九時に上田を出る汽車が四時間も遲着して、ひどく弱らされた揚句だけに、一層自分にはホッとした氣持がされたのだつた。御幣擔ぎの自分は、途中ガタ揺れに揺れる自働車の中で「海、海！……今の自分の氣持を救つて呉れるものは、やつぱし海だつたか」そんなことがふと浮んで、そしてこの海を東へどこまでも〳〵行つてしまひたいと云ふ空想を起したりして、一寸子供らしい勇み立つた氣持になつたやうなことまでも、酒を飲みながら、幸先きが好かつたかのやうに考へ出されたりした。

自分はいつものやうに泥醉せず、早目に床に就いたが、ぐつすり睡むつて、九時過ぎ波の音に目をさまされた。一月下旬の風のない晴れた朝の空、凪いだ蒼い海、沖を通る發動汽船の音、それから時々チリ〳〵と鈴でも振るやうな囀き音を立てゝ、その度に渚の小砂利の上に、さながら風に吹かれた木の葉のやうに舞ひ下りたり舞ひあがつたりしてゐる千鳥の群れ——自分は日の射し入る障子を明け放して、蒲團の上に腹這ひになつて煙草を吹かしながら、幾ケ月にも、恐らく幾年にもなかつた好い朝の氣持を、ゆつくりと味はつた。朝飯の濟んだところへお婆さんが遊びに來て、小一時間も昔の思ひ出話をし合つた。七十近い小柄な上品な婆さんで、髮を染めて、如何にも健かさうな澤々しい顏色をしてゐた。「Kさんはほんとにお若いですよ。内の忰なんか、それはもう白髮で眞白なんですよ。年は二つか三つ位ゐしか旦那とは違はないんでせうに……」婆さんは斯う、柔和な瞳を自分の顏に向けながら、云つたりした。

「そんなことあるものですか。この通り髭なんかも半分は白毛ですよ。何しろもう四十ですからなあ！　早いもんですなあ！……」

「さうですか。Kさんは丁度におなりでしたか。それでは宅の忰より三つ少ない……」………

お婆さんの連れ合ひだつた人は、太つた大きな體格の人だつたが、今の主人は母親似の、瘦せた小さな人だつた。彼

はこの日、犬をつれて磯傳ひに鴨打ちに出かけたが、晩にその獲物の御馳走と銚子を運ばせて、自分の部屋に遊びに來て呉れたが、成程お婆さんの話のやうに、多分の白毛混りの髮を綺麗に分け、こまかい縞物に角帶姿の樣子が、如何にも古い旅館の主人らしい人柄を見せてゐた。その時分に彼はもう一人の娘の父だつたが、ひどく寡默な、精悍らしい、宿屋の若主人と云つた樣子のちつともしなかつた人で、自分は酒の上だつたが、女中頭をしてゐたおきんと云ふ自分より年上の女の顏を、眼の縁が紫色に腫れあがるほど激しく拳固で打つた時に、彼は自分の部屋に飛び込んで來て、取組合ひの喧嘩をしたことがあるが、今ではそんな風な面影の少しも見えない、穩かな——同業者中での睨利きだと云ふが——すつかり落着いた柔かい感じだつた。話をしてゐるうちに、さう云つた記憶までが、幾らか耻かしいやうな懷かしい氣持で喚び起された。その年に自分も、二十三で、父になつたのだつた。五月下旬の暗い波の音の荒い夜、自分は今と同じ部屋で、男の子の産まれたと云ふ郷里からの電報を受取つたのだつた。それからの二十年近い無生活の連續——

「先月でしたか雜誌へお出しになつた、お子さんのことを書いた小説も拜見しましたですが、お子さんはご丈夫ですか。やはり世田ケ谷の方に？……」

「え、どうも仕樣がないもんですからね、いつしよに居ることは居るんですけど、何しろ弱つたですなあ。自分も小説なんかに書くからいけないんですけど、どこへ行つてもそんなことを云はれるんで、實際きまりがわるくて仕樣がないですよ。信州の方でも云はれましてね、實は少しへコ垂れてこちらへやつて來たやうな譯ですよ」

「そんなことはありやせんとも！　有勝ちのことぢやありやせんか……」ありやせんとも！……酒の餘りいけない彼は、斯う茨城訛りを强くひゞかせて、慰めるやうに云つたりした。そして、夜中の、干潮時分の巖を洗ふ波の音を聽き

ながら、自分は床に就いたのだつた。

毎日のやうに自分は、すぐ前の大洗神社の境内に登つたり、小一里程、渚傳ひに那珂川の河口近くまで歩いたり、日光を浴びながら紅い小石や貝など拾ひ集めたりして、ホーッとした氣持で四五日を過した。日に幾艘となく漁船の帆が、渚近くでボン〳〵銃砲の音をさせたり、傷ついて水煙りを立てながら水面をのたうち廻つてゐる獲物を、追かけ廻してゐるのなど見られた。宿の主人公もまた毎日のやうに、早暁から犬をつれて御料林の松山の方に出かけて行つたり、磯傳ひに、群がり續いてゐる巖と巖の間に餌ひに來てゐる鴨を、覘ひに行つた。夏場だけの土地柄で、滯在客と云つては母家の方の二階に、呼吸器でもわるくしてゐるらしい商家の内儀さん風の年増女一人きりで、女中は二人ゐても、泊り客は大抵二人か三人だつたので、自分の居る離れの二階の四つの部屋は、自分のほかに、客は入れられなかつた。

自分は久しぶりで幾らか落着いた素直な氣持になれて、午後の二三時間を机に向つて、四年前に死んだ父の思ひ出の小品を、二枚三枚と書き始めた。そして、今更のやうに、父の死後、頓に崩れ出した、汚辱そのもののやうな自分の生活のことが省みられた。生活の希望を失ふと云ふことの怖ろしさ。そしてまた、藝術に活きる?……それが如何に自分のやうに身體も意志も弱い人間に取つて困難なことであるかと云ふことが、今更のやうに痛感された。世田ケ谷奥の六疊四疊半二室きりの裏長屋に殘して來た同棲してゐる女、それに出來た娘、一と月程前に郷里から出て來た病身な不幸な姪——その息詰まるやうな薄暗い部屋で、自分は四ケ月程も持病の神經痛で寢通したのだつた。一二三日でもいゝ、旅にでも出るほか、まつたく救はれない憂鬱な自分の氣分だつた。…………

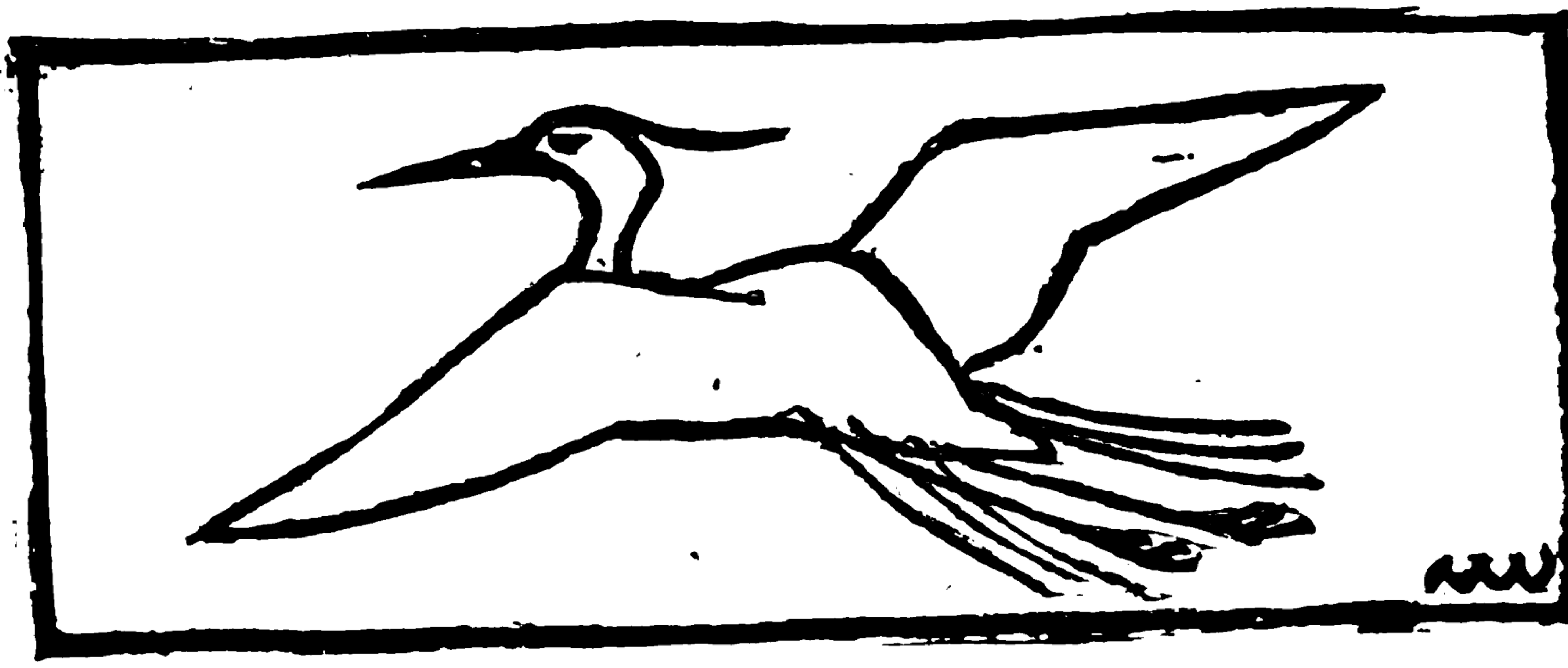
「おきんさんとこへ遊びに行きやせう。あなたが來てると云ふことを話したら、是非つれて來て與んなんせうと、云つ

てゐやしたから……」

今では宿の抱えの俥屋の方は息子に譲つて、近所に夏場は幾間も出來るほどの家も建つて、店に貝細工など土産物を並べて、すつかり樂隱居を極め込んでゐる俥屋爺さんは、ちよい／＼自分の部屋に遊びに來ては、斯う云つて誘ひかけたが、自分はいつも煮え切らない返辭をした。それよりも按摩でも招んで昔話を聽かうと、折紙附きの名人だと云ふ按摩を招んで、爺さんと酒を飲みながら聽いたりした。おきんはその後磯町の大工か何かに縁付いたのだが、今では獨り身で、漁師相手の居酒屋をやつてゐると云ふことだつた。

日のキラ／＼と晴れた朝、思ひがけなく大きな砕片が、ざあと一としきり、吹き下ろされたりした。さうした中を、例の千鳥の群れが、鈴のやうな啼き音をして、野分に吹かれた落葉のやうに舞ひ下りたり舞ひあがつたりしてゐる――そこの渚で、やがて一ケ月で誕生を迎へることになる自分の哀れな娘の土産にと、紅い小石や、いろ／＼違つた形した貝類を拾ひ集めたりしては、小品執筆の日課で疲れた頭を、休ませることにした。

――大正十五年三月――



プラトニック・ラヴ

志賀直哉

戸外は毎日吹雪だ。石ころだらけの廣い河原の中を流れてゐる川では波が流れに逆らつてゐた。その上を雪は眞横に飛んだ。が、降る割には積もらず、山の立木は奇麗に吹き拂はれて、裸で搖れてゐた。

來た當座、いさゝか壓迫され氣味で落ちつけなかつた。烈しい時は部屋の中まで雪が舞ひ込んだ。机を据えた側の掛障子の破れからも、硝子戸の隙間といふ隙間からも小さな雪の粉が飛び込んで來た。炬燵の上で見てゐる本の頁の上にそれが落ちては消え、落ちては消えたりする時、一體が寒がりで、風邪を引き易い私は、これは迚も落ちついてはゐられないと思つた。三日程はそんな氣持で慣れなかつた。

然し私にはラジウムの含有量で世界第一位といふ此所の湯が氣に入つてゐた。如何にも厚味のあるトロリとした肌さはり、そして出てから何時までもぽか〳〵温まつてゐる、これが見捨てかねた。それから遠慮せず我儘をいつて見ると、何んでも快くしてくれる宿の居心地よさも見捨てかねた。只、大社詣の客が一夕組三組と團

節で來る。その連中が毎晩藝者を呼んで騒ぐ、書きものをするものにはこれだけは困つたが、もと／＼さういふ場所柄故、文句をいふ方が無理で、然し隣のない割合に氣持のいゝ座敷にかへて貰ひ、夜具なども今年作つた輕いのに更へさせ、いやがられない程度でなるべく勝手をいつて氣持よく過ごす算段をすると、段々には私も落ちついて來た。山鳥か野鴨が食ひたいといふと宿の者は二里の所を直ぐ取寄せてくれた。

夜、戸外をさくり／＼音をさせながら人が通る。寢ながら聽いてゐると、それが如何にも親しみのある落ちついた氣持にさせた。

或る晩私は炬燵に横になつて、友達の書いた小說を讀んでゐた。雜誌の綴ぢ物で前の所は分らないが、何んでも花柳界藝人界に勢力のあつた西河岸の年寄の息子が洋行をする、それを大勢が東京驛に送る所が書いてあつた。大變た見送人で、雜沓したプラットフォムは身動きさへ出來ず、來は來ても本人のゐる窓きはまで漕ぎつける事は容易でなかつた。さういふ場所で主人公が、古馴染の吉原藝者に會ふ。

「私についていらつしやい」

「といつて別にさう、たつて見なければならないといふお顔でもないんだけど。なアんて惡いことばかり云つて……お若ちやん御免なさい」

「へーえ、お若さんは當時さういふことをなのかい」

「えゝえ。よく見てゝごらんなさい。もうぢきポロッ／＼と……」

かう云ふ事が書いてあつた。私はこの藝者を知つてゐる。知つてゐるせいもあるのか、これだけの會話の中に非常に明瞭とその女を憶ひ浮べた「といつてさう斷つて見なければならないといふお顏でもないんだけど」もよく、「なアんて

悪いことばかり云つて……」と云はる所と辨で、私にはその顔が眼に見えた。あとの「もうおきボロツ〳〵と……」から いつて笑ふ済せた頬の笑くぼまでが見えるのだ。書いてない事がいやに明瞭見えるのは少し癪な位だつた。友達はかういふ事は非常にうまい。うま過ぎると云はれる位にうまいのだが、そのうまい以上に自分がその女を明瞭浮べてゐさうなので、何んの事はない讀みながら頭で勝手に合作してゐるのだと思ふと可笑しくなつた。

私は藝者には餘り知合ひのない方で、書くものにも藝者は殆ど現はれないが、此藝者だけは前に長い小說の中に書いた事がある。登喜子といふ名にしてゐるので此所でも假りに登喜子とするが、今からいへば十七八年前雛妓時代に一寸見た事があり、それから一二年して若い藝者として、度々會つたが、その名は二年目に一度、或は五年目に一度といふ風に、却つて「お父様には時々お眼にかゝります」これは宴會での話だが、それ程私とは疎遠の間がらだ。然し小說では主人公が此藝者を切りに想ふ事が書いてあるので、その緣故といふのも可笑しいが、私としては數少ない藝者の知合ひの中でも此藝者だけは特に通り一遍でない氣持があつた。事實、その小說の主人公といふのは境遇からいつて私自身ではないのだが、人間としてはその頃の自分をモデルとし、其藝者に對する氣持も或程度には本統だつた。それにも書いたやうに、一人角力で惚れてゐたのだ。

最近では去年の春頃だつたか、その前年の秋だつたか、東京の個人所有の名畫を見せて貰ふ爲め上京した折り、前の小說を書いた友達に連れられ行つて會つたのが、これ亦五六年ぶりの登喜子であつた。三十幾つか、年の所はよく知らないが、兎に角藝者としてはもう若い方ではないが、會つた感じでは少しもそういふ氣がしなかつた。矢張り美しいと私は思つた。京都に住んで上方の女ばかり見てゐた眼には奇麗、きたない以外で惹かれるものがあつた。そして關東とは異ふが、その女として內外共に美しさが完成されたやうに思へた。調和が出來、落ちついて來た。好きな役者の噂――

何所で會つたら、かういはれた、あゝいはれた。そんな事を云ひたかつた十八九の時代、その時代を若し罪のない時代とすれば、それを云はなくなつた今は却つて罪の深い時代なのかどうか。その邊の所はよく知らないが、兎に角信者の姐さんに連れられ、岡山縣の金神樣を二等列車の講中で出かけた話など、何の趣味もなしに素直にするのを聴いてゐると、進んだものだとつまらぬ事に私は感服した。

歸途、自動車の中で女は、頭の働き方が少し神經質過ぎる、長く一緒にゐると此方が疲れて來る、と云つた。成程左う云ふ所はあるかも知れないと私も思つた。然しそれは特に此女達の場合強く感じられるのだらうとも考へた。絶えず言葉の應酬を拔け目なくキビキビやる此女にはそれに違ひない。それを聴きながらぼんやりしてゐてよかつた自分には別に氣にならなかつたわけだと思つた。左ういへば、女が便所に立つた一分か二分の間二人きりになつた時、一寸窮屈な氣がした事を憶ひ出した。左ういふ氣分の反射し方が早い所はたしかにあると思つた。それは兎に角自分は昔ながらに淡い氣持で此女に惚れてゐると思つた。淡いながらこれでもプラトニック・ラヴといふものだらうと考へた。そしてかう云ふのもいゝものだと思つた。忘れてゐれば一年でも二年でも忘れてゐる。憶ひ出せば戀人だ。それで、誰一人迷惑する者もない。誰一人迷惑する者もないといふやうな戀は戀として甚だ心細いものかも知れないが、かういふ戀がいけないといふ理由はない。

私達が下保野家の有名な畫帖である「帝耕圖」と「唐畫鑑」とを見せて貰つたのはそれから二三日してからだつた。

その朝、私は一緒に行く筈だつた田端のA氏に時間を知らせる必要があつたので、常に持つてゐる手帳を出し、調べると、「田端四三五、A」その下に「淺一六六六」と書いてある。これは覺えいゝ番號だ、左う思ひながら、早速かけると、女の人が出た。

「甚だ、恐れ入りますが、Aさんの方をお呼び願ひたいんですが……」自分としては物を頼む時の言葉だ。

「Aさん？」

「A・Rさんです」

「へえ。こちらでは左ういふ方は存じませんが、全體何番へおかけになつたんですか？」

「淺草の千六百六十六番です」

「千六百六十六番はこちらですが、でも、何かお間違ひぢやないんですか」

相憎自分はその家の名前を知らなかつた。然し現在手帳のA氏の名の下にちやんと書いてあるんだから、どうも變だと思つた。

「この番號で呼び出して吳れといふ話だつたのですが、」

「御近所にA・Rさんと仰有る方は居らつしやいませんがねえ」女の人は切口上になつた。此方が執拗いので大分苛々した調子だつた。私は先刻から何んだか聞いた聲のやうにも思つてゐたが、そんな筈はないので…………が、此時急に憶ひ出した。出てゐるのは登喜子だ。瞬間何も彼も私は憶ひ出した。震災後暫く電話が來なかつたが最近漸くかゝつたから書いて置いてくれといふので、どうせかける用のない事は分つてゐたが、まあいゝとも云へず、開けた餘白に私は何氣なくそれを書いて置いた。それが偶然にもA氏の番地を書いた下の餘白だつたのである。今更名乗るよりはあやまる方が早かつた。

「甚だ失禮しました」即ち可笑しさを堪えてこちらも切口上になつた。

自分は笑つた。間違ひだけでも可笑しかつたが、如何にも十五六年持ち越して來たプラトニツク・ラヴらしい間違ひ

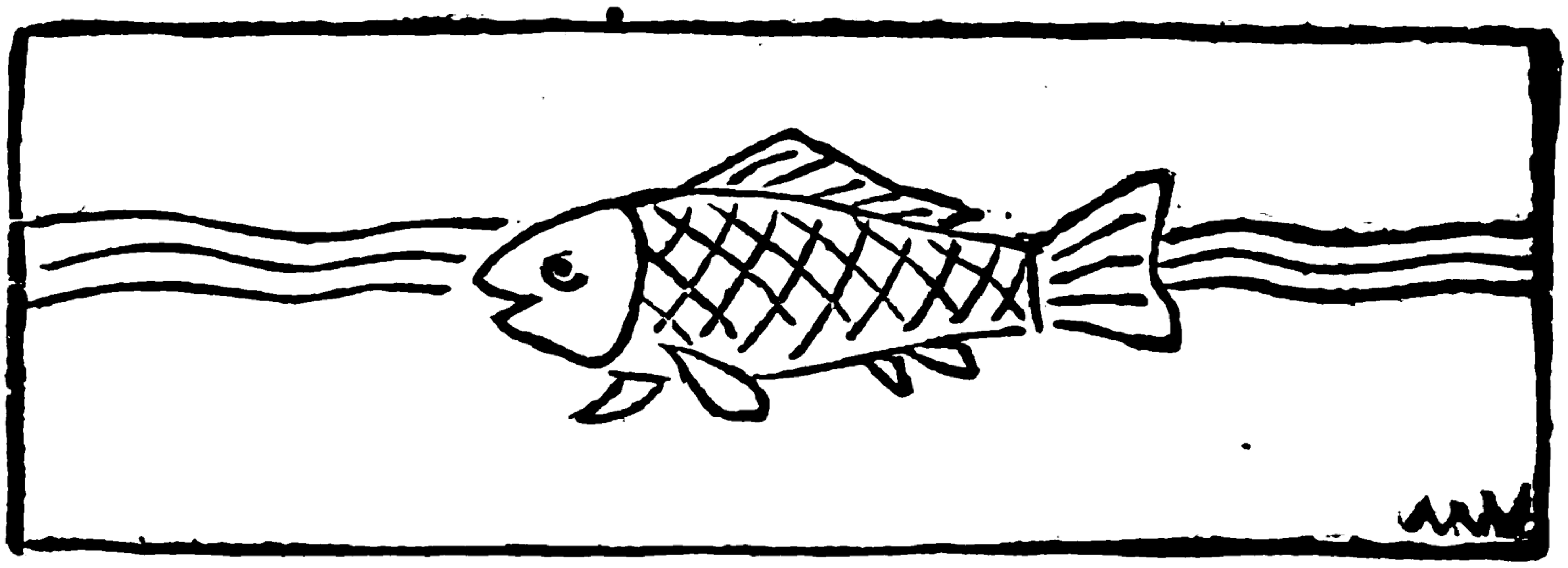
なので可笑しかつた。御近所にないといつて、曲輪の中では成程A氏の家はないわけだと思つた。A氏の呼出しの番號をきいてゐたのは自分ではなく京都から一緒に出て來たHだつたのである。

これが、私と登喜子との今までの一番あとの會話である。そして此つぎ又話すのは何時の事か。三年後か。五年か。

左う思つてゐたが私は今はからず友達の小説の中に登喜子を見出しその言葉を聴いた。私は滿足した。私は早速友達へ端書を書いた。

「吹雪の山陰で會へるとは思はなかつた」

結局私は毎夜の藝者の騒ぎに閉口して此所を引きあげた。東京の藝者を想ひながら、「此所の藝者に辟易されたわけだ。然し私は久しぶりで雪見らしい雪見をした事を喜んだ。汽車の窓から見る景色は時々見える海のほかは見渡すかぎり雪だつた。四五尺の雪だ。鳥取の手前の湖山池、此邊の眺は寂々と殊に美しかつた。湖の水は一面に雪を含んで海苔色に凍つてゐた。岸に近かく、寄せた波がそのまゝ弓なりに凍つてゐた。氣まぐれた鳥が一羽、湖畔の楊の木から楊の木へ氣樂さうに飛び移つてゐた。餌などあるわけはないのだから、遊んでゐるのだらうと私は考へた。枯木の鳥よりは又一段とこれはいゝと思ひながら見て過ぎた。豐岡、それから八鹿邊では汽車から五六間の所に鴇のとりが遊んでゐるのを見かけた。



松吉の立場

犬養健

一

伊豆半島の東海岸にまだ輕便鐵道の出來ない頃である。

或る正月の晴れた夕方だつた。熱海の鶴屋の次男の松吉は三つになつた妹のお米を脊負ひ、羽子板を持つて庭の外れに立つてゐた。芝を植ゑた玄關先の平地は、浴客の子供達の追羽根をつく音で華やかに混雜してゐた。山脈がこの海邊の温泉町の後ろを急に覆つて、日の落ちが早いのである。沖がまだ晝間の色を見せてゐるのに、それと對ひあつたこの丘地面の客達はそろ／＼青い影になつてゐる。たゞ唐人髷や、大きいリボンを結んだ髮に結つた東京の娘達の顏だけが浮き出てゐた。

松吉は人數が半端になつた時に入れて貰つた。これもお米が重くて、彼は敏捷につくといふ譯にゆかなかつた。脊中の妹を彈ませながら羽根を追ふ彼の樣子が、傍で見てゐるとひどく可笑しかつた。

赤いランプを點して、中島の部落を通過する汽車が隧道に入つて來て、人山といふ停車場の前を通る乗り物を待つ
る客達はこの時で來るのだ。樹陰の暗がりの中からしばらく続いた。村の往来はそろ〳〵見えなくなつた。
やがて露地に呼んで來た客が着いた。番頭が立ち出て行つた。——小客、常の客でなくて注文のない客の裏木戸から、
中折をかぶつて平倒して宿を訪ねる〳〵と顔が見えて來た。明は小鳥をかけてゐた。
「お客さい！」とそれを聞かせて云はねばならないと云ふ風だ。番頭の顔の上にかさういふ面をし、そろ〳〵松吉に呼びかけてゐ
た。

「松や——」
と番頭が云つたやうだ。松吉は少く驚いた。その内容はまだよく分らない。……すると番頭は今度にはつきりとし
た。松吉はその声を聞き分けた。彼は本能的に駈け下りた。
それがお前の生家を出た兄の要吉だつた！
「俺はお前に會はうと思つて來たのだ。俺は、今夜は什の旧へ帰るだけのつかり者といふ風になつた要
吉だ。」踏まに云つた。あつとばかりに出てくるやうだ。「お家を聞いて行くな。付いて行くかえ」
「付いて行く」と松吉は利々たる調子を極めて答へた。彼は嬉しかつたのだ。だが家を出たあとの兄に客観的な愛情を感じて
ゐたので、彼は従いて行つた。
「俺は京都で働いてゐた。内の家へ十年ばかりで正月に來なすつた大島さんがなあ。あのお店に勤めてゐるた一奴があるので
ある夜の献上を用心しながら、要吉は自分に叫つたけたのか、聞かするやうに云つた。大島さんもなあ。去年のことには彼
ばかりが思いたおらにはれたぞと何行つたぞ！」

要造は、前の年に松吉の前で兩親から激しく罵られた時の不愉快を思ひ出して默つてゐるのだ。大島さんのやうな客までがあの經緯を知つてゐるのかと松吉は驚いた。要造は家に内密にしてゐた千圓ほどの借金が見つかつた。女に貢つて、それを埋め合せようと無理をしたのだつた。太つて腕力の強い父親の要右衛門の前に出ると、要造は背中を丸くして慘めな顔色を見せてゐた。松吉は旅廻りの芝居の人物のほかに、それほど自分を卑しめた辭儀をする人間を見た事がなかつた。だが母親のおしげが何か――その意味ありげな内容を松吉は知る事が出來なかつたが――父親に口を添へて叱つた時、要造は急にカッとした。要造はおしげにとつて義理の仲だつた。要造は海軍ナイフを出して無茶苦茶に母親に向はうとした。紐付きのやつで普段から松吉に自慢して見せたものだ。精力のあり餘つた要右衛門が一撃で要造を擲り倒した。おしげは足袋のまゝ裏庭へ逃げ、それから女中達に「お内儀さん、お内儀さん」と取り卷かれると、靜かに泣き出した。松吉もその傍で哭いた。媚びて哭いたのだ。母親は横須賀の生れで、勝氣な美しい女だつた。

一體要造は生みの母のほかにある事を幼い時から知つてゐた。そのためにおしげは彼を温かくは扱はなかつた。そこでこの騷ぎも一種の色をつけて客達から眺められた。それが何よりも要右衛門の癇に觸つた。彼はすつかり腹を立てゝ、稼業の人氣にさはるやうな事をする奴はと云つて、要造を勘當した。前から小さい事が度重つてゐて、強いて留めに出る番頭もゐなかつた。トラホームで要造が徴兵に外れた翌年だつた。それ以來、松吉はこの兄を見なかつたのである。

二人は堤防のある濱通りから石段を下りて、粗い砂の海邊へ出た。間歇泉の涌く時刻で、町のあちこちに白い湯氣が立ちのぼつてゐた。沖に漁り火が點いた。

「お前あ苦勞しなえでえゝなあ。俺の子供の時あ生まやさしい苦勞ぢやなえ！」要造は、厭味といふにしては熱を帶び

た語調で喋つた「俺もそりやよかたえ。だがなあ、穏やかにそれあいけなえぞと叱つてくれゝばいゝだ。刃物を向けるやうに仕向けたなあおつ母さんだえ！我慢のならなえ事を云つたた。松や、お前まで俺を悪くとつちやいかなえぞ！お前は俺の親身の弟だ、なあ」

要造はさう云つて松吉を覗き込んだ。煙草の匂が松吉の鼻を突いた。親身の弟――要造はそんな風に考へてゐるのかしらんと、松吉は一寸混乱を感じた。彼は黙つてゐた。

「あゝいふ風に仕向けられては誰もひがむだ。大島さんまでが俺を可哀想に思つて、よう世話してくれるだ。京橋で大屑なもんだぜ。――小田原のおふくろが東京まで行つて大島さんに頼んだゝ。お前、小田原のを覚えて居るらか。前に別館の取締してゐたゞが」

「うゝん。よう覚えちや居なえ」

と松吉は首を振つた。要造の生母の事だなと彼は思つた。――さうだ。別館には小柄な四十女が帳場に座つてゐたやうだ。その笑ひ顔を朧ろげに想ひ浮べる事が出来る。だが松吉は遊ぶ客の泊る所だと云つて、別館に行くのを禁められてゐた。町の通りから別館の帳場まで二四間あつた。その女が横目で笑つて往来を見ると、松吉は狼狽てゝ眼を外らす――どうもさういふ風だつたやうだ。その後四十女は不意に別館に見えなくなつた。

「それ、帳場に座つて、始終煙草をのんで居たゞ。お前処で直す前の別館を忘れたけえ」

「忘れたゞ」と松吉は、今度は隣坊から云ひ張つた。

「さうかな。その小田原のおふくろがお前に會ひたがつて居るぞ！松」

黴臭い薄明りのなかで、要造が不意に感動した聲をたてた。

松吉は意味が分らなかつた。

「何づら――」

「小田原のおふくろがわれに會ひたがつてをるぞ。おい」

松吉は顏がこはゞつた。彼はすぐに物に脅える子供だつた。彼は唯さく〳〵と砂の音を續けた。

「年をとつたせえ無理はなえだ。なあ松、お前うす〳〵は知つてゐづら」と要造はひとりで昂奮して、感傷的に弟の肩に手をかけた。――松吉は自分の近くに非常に大きい危險を感じた。「お前もなあ、小田原のおふくろの子だえ！それからそのお米もだ。お米も――」

「嘘だえ！嘘だえ！」松吉は夢中で遮つて、兄から逃れた。ねんねこのなかでお米が彈むだ。「俺あ歸る。俺あ歸る」

要造の感動にくらべて弟は餘りに冷やかで鈍感に見えた。要造はいゝ氣持になつて築いてゐた幻想を叩き壞された。弟との間に溝のあるのを彼は感じた。それに父親に云ひつけるかも知れない。さう思ふと要造はむか〳〵とした。

「俺が嘘つくか。やい」

だが松吉は顏を醜く歪めて、自分に逼つて來る兄に石を投げた。犬が憎むやうに　彼は無力に石を投げた。

「何する！われあ」要造は殘酷な心持になつた。「そなえにあの母親が好きか！」

しかし傍へ寄つて、要造にははじめて松吉がずつと前から泣き續けてゐる事が分つた。松吉は聲を殺してゐた。鼻汁が口元まで垂れてゐた。要造は變な安堵を感じた。これで同胞三人が落ち着くところへ落ち着いた、さういふやうな安堵だつた。溫泉の蒸氣が流れて彼の顏に來た。彼は弟をいたはる心持で一ぱいになつた。彼は弟の鼻汁を優しく拭いてやらうとした。だが松吉は亂暴に兄の袖をぴしやり〳〵拂ひ除け、それからは聲をたてゝ激しく泣き喚つた。

お米が起きた。お米も動物的に泣いた。

要造は當惑した。

「なあ、俺あたゞ本當を云つたゞけだ。お前を今どうしようといふ譯ぢやなえ。俺あ誰にも頼まれたぢやなえ。なあ、今までのやうにおつ母さんに我儘云ふがいゝぜ――」

「嘘つけ。畜生。――畜生」

と松吉は、お米を器械的にあやしながら齒間につぶやき續けた。だが松吉は要造の云つた眞實をもう信じてゐた。思ひ當る事があつた。彼はお米が不意にねんねこに包まれて家に來たのを思ひ出した。母親が旅先から抱いて來たのだ。松吉に物珍らしくて、當座はお米の枕元に附き切りだつた。――何か家のなかに流れてゐた陰影の謂はれはこれだつた。彼は小田原の母といふ女――あの横目で彼を窺つて見た、艶つぽいところのある四十女を憎んだ。少年の生活慾から嫌惡した。松吉の愉快な生育は自然のものだ。それを今突然妨げに出た者がある。松吉はそれを憎んだ。彼は別館の女の胎に蹲まつてゐた自分だと思ふと不潔なやうな氣がして堪らなかつた。――十二の年で、松吉はかういふ感情を一どきに漠然と感じたので、その打撃はなほ強かつた。

海べりの軌道を何時間も揺られてやつと小田原に往き着く、その隔りが彼にはせめてもの安心の種だつた。

汽船が次の船付場へ徐かに滑つて行つた。松吉は急に不安な叫をあげて「俺あ歸る」とまた云ひ出した。泣き喚ろなどといふ狀態には限度があるものだ。彼は穩和しくなつた。

「うん、それがえゝだ。自家で聞かれたらな、魚見の道を知らなえ人に尋ねられたと云うだぞ」

兄弟は並んで町へ入つた。正月のうへに大漁のあとで、呉服屋や小間物屋は品物を充分に仕込んでゐた。――「伊

豆山には俺あちいつと好きな女が居るだ」松吉の氣を引き立たせるつもりか、要造は冗談のやうにそんな事を云つた。入海で魚の豊かな事、火山帯にぶつかつて温泉の湧く事が、網主や旅館の主人に餘裕を持たせたのである。

翌日も要造は松吉を誘ひに來た。弟に對する甘い感傷が妙な工合に募つたのだ。彼は人車の停車場にゐる車夫に假名の手紙を持たせて寄した。——今日は店の連中が町外れの梅園見物に來た、わたしはそれへ行かないでもいゝ、人車の待合所に待つてゐる、お前の好きなものを御馳走する、などと書いてあつた。だが松吉は厭だつた。兄そのものが、身なりも話し付きも自分に對する優しさも、すべてが厭だつた。松吉は家族の部屋へ入つて、返事も書かずにごろ／＼と寢轉んだ。——やつと長い一時間が經つた。一時間過ぎれば要造はあきらめて別行動をとる筈だつた。だが松吉はそれをはつきり想像したくなかつたので、部屋の隅に重ねた座布團に頭を突込んでゐた。

「松あどうしたづら」

と、やがて帳場から食事に戻つた要右衛門が、おしげに荒つぽく顎で示した。松吉は養母に媚びたかつた。

待合所の要造は落膽したのだらう。それから三年近く、彼は弟に會ふ工夫をしなかつた。

二

その後鶴屋は一度大きい修繕をしたが、それが更に古びて落ち着いた。要右衛門の油ぎつた太い頸すぢには衰へが見えた。彼はきよんとした眼付をするやうになり、眼蓋の下に弛みを作つたが、息子にも使用人にも寛大な物言ひをする老人になつた。おしげの丸髷は小さくなり、今では何處から見ても土着の女らしかつた。彼女の顔は温泉のきゝめを始

終感じてゐるやうにつゐ〳〵したが、頬骨があらはれ、昔の娘の水々しさを失つた。彼女は相變らず終日帳場で切り廻してゐた。

小田原の母といふ女――お銀は鎌倉で旅館の女中取締をしてゐた。お銀に要造よりも大きい息子のある事を、或る時松吉は耳にした。

要造は大島の商會が歐洲戰爭後つぶれて、横濱の土地住宅會社に入つた。要造は妻を二度替へたが、もう三人の子持ちになつてゐた。彼は正式に廢嫡されて松吉が跡を繼ぐ事になつた。

松吉は沼津の中學を終へて早稻田大學の商科に入り、相模原の或る顧客の家に半ば書生のやうにして置いて貰つた。やはり土地の松風館の倅が早稻田大學を出て、今では新式のホテルの經營を初め、三十三四歳ではあるが遊覽地としての町の方針に口を出す重要な人物になつてゐる。それが謂とは手本といふ工合になつて、要右衞門は進んで松吉に學問をさせたがつたのだ。客種がいゝし、旅館の主人が物分りの廣くなる事は、決して惡いことではなかつた。――それに松吉に學問が好きだつた。

お米は髪を結びはじめてから急に女らしくなつた。お米は色が黒く、胴が細く、眼ばかり大きくて、どうも太らなかつた。醫者は胸が弱い性だから用心しろと云つた。彼女はすぐに可笑しがつたり、頬を脹らませたりする神經質な娘だつた。――

一家族にこれだけの變化が起るのに、十年以上の時日が掛つた。

四月はじめの或る朝、休暇で家に歸つてゐた松吉は熱海や小田原の青年團員にまざつて、國府津驛のプラットフォーム

に整列した。立太子の御報告に伊勢へ行啓される御召列車が陽を浴びて通過した。それから軍服や紋服を着た團員の塊りが砂利を敷いた廣場でごた〳〵と散つた。

松吉は半端な時間をどうしようかと考へた。

ふと彼は、廣場の外れで町役場の役員らしいフロックコートの男に如才なく挨拶してゐる要造を見つけた。彼は眼を丸くした。要造まで紋服を着てゐる事が一層意外だつた。

要造が笑つて人ごみを松吉の方へ縫つて來た。それで松吉には、前から要造が彼をみとめてゐた事が分つた。二人は東京で時々出會つても、一二時間談しては別れてゐた。それにこの一年ほどは會はなかつた。

「どうして此處に？」

と松吉が子供らしい驚きを消さずに云つた。松吉は立派な若者になつて、兄を心もち見おろさなければならなかつた。

「どうです、これは」要造は陽氣に紋付羽織の餘つたゆきを示した。青年團といふ柄でない彼にはその鹿爪らしさが愛嬌になつてゐた。「實は今朝訪ねようと思つてね、あんたへ電話をかけさせたんが、此方へ出たといふ話で、わたしもこれを借りて來たんです。どうもこいつを着てゐないと、此處ぢやあ待ち合せにくゝつてね」

要造は起きたての齒磨くさい息を出して笑つた。彼は昔の畏縮けたところがなくなつて、小綺麗な、調子のいゝ男になり濟ましてゐた。

「此地は用かね」弟の方が却つて自然なぞんざいな言葉を改めなかつた。

「それがね、今度店で經營する事にきまつた小田原の新別莊地の係に廻されてね、時々出張ることになつたんです。付

と云つてもこれからの商賣は土地だね！」

廣場の外れに掛茶屋がある。弟は兄の後からカーキーと黒との群を分けてそつちへ進んだ。その時彼は、掛茶屋の明るい卓に添つて年をとつた女がひとり、首を伸ばし氣味に氣を奪はれて立つてゐるのを認めた。年をとつた女はごく小さい皺の多い顏をしてゐた。だがその女が流し眼に松吉を見て、苦笑に似た笑顏を投げた時、松吉は不意に「あゝ、あの人だ」と思つた。

彼はその女――お袂と湯河原の伯父の家で一度入れ違ひになつた事があつた。引込み思案の伯父夫婦が、智慧のないと思はれるほどどぎまぎしてゐた。だがお袂には、その時はまだもう少しの若さがあつた。

「やはりさうだつたでせう」

とその女――お袂が浮き浮きと要造に聲をかけた。海からの柔かい風で國旗が戯れるやうに動いてゐた。

「うむ。――わたしが眼が近いものでね」要造がつとめて工合わるさを紛らせながら松吉に說明した。「先きにあんたを見つけられてしまつたのさ」

兄よりも脊の高い男になつてしまつた松吉は、默つて成行にしたがつた。要造の用事といふのはこれだつたのだなと彼は考へた。お袂とこんな風に平凡に會ふとは思ひも寄らなかつた。だがこの環境に對する弟の從順さに、要右衛門は目をかけたのだ。それは小さい町の客商賣のあるじには、ごく肝要な氣質だつた。

その女――お袂は愛想よく、小田原の妹娘の家にひと晩泊りで來たのだと云つた。青年達がガヤ〳〵と出入つてゐる眞中で、廻つてゐる車の軸のやうに、松吉の加はつた卓は妙に悠つたりと手持不沙汰になつてしまつた。要造は松吉の平靜にしてゐるのがすつかり氣に適つて、萬事弟を持ち上げた物言ひで執りなしはじめた。大學生の弟を、彼は平常か

ら美化してゐる傾があつた。弟は自分の掌に包んでしまへさうに思はれる。その皺の多い乾いた小さい顔と對ひ合せに腰かけて、その年寄と自分との繋りが、最初の間どうもしつくりと感ぜられなかつた。だが少時して、お兼が煙管をはたいて茶屋の婢を呼びながら誂へ物に立つた時、松吉は別館の帳場を淡然と想ひ出して、あゝ、あんな風の動作を憶えてゐると考へた。聲だけが昔の印象のやうに艶つぽかつた。

三人は小田原で鶏を食べる事になつて茶屋を出た。電車の窓を殘らず開け放しても寒くない花時の陽氣だつた。町を外れて車が疾走すると、低い土ほこりが兩側の田へ撒き水のやうにかゝつた。

「あゝあ、小田原も變つた。一年も來ないとこの邊の開け方つてものは、どうでせう」鐵道工事の鮮かな掘土の列を見て、話題に窮してゐたお兼が松吉に話しかけた。「再來年はいよ／＼眞鶴が終點になるつていふぢやありませんか。わたしは昨日湯河原まで一寸御挨拶にあがりましてね、それから熱海がどうなつたかと思つて、伊豆山から輕便道を歩きましてすが、まあ衛戍病院の手前に、赤い屋根の大層な建物が出來たぢやありませんか」

「あれがおつ母さん、待鳳館の翠のホテルだよ」と要造が自分の役目を心得て、上機嫌に口を入れた。「大學を出て、熱海ぢやあもう幅を利かせたものさ。松さんの先輩といふところかね。松さんがまあ熱海で一番目の大學卒業になる譯だね。なあ、青年團も今日びは、この人あたりが采配を振つてるんだ」

要造が澄りを構はず、また眼の前にいゝ氣持な幻想を積みはじめた。お兼はしきりと煙を燻かせながら、笑つて松吉を振返つてゐた。

鶏屋でも話題の少ない彼等は、終始要造の饒舌の聽き手になつて見せるより仕方がなかつた。――お兼は此處でも窓を開け放して、櫻の點點とした早川の山々を眺めてゐた。お兼の案外に放心したやうになつてゐる事が松吉を氣樂にし

た。お兼の松吉を見る眼差には、彼を固苦しくさせるやうな好奇心の光が少なかつた。お兼はいかにも自分のものといふやうに彼を眺めてゐた。仇つぽい手練を持つた、油断のならない女といふ風に松吉は聞かされた事があつたが、寧ろ眼の前のお兼は打算の鈍い、用のない心配をあまり好かない、気のいい不精者に見えた。要造が皮肉を頑張りながら面白可笑しく喋り立てると、お兼は弟息子の笑ふ様子を見てから——それから自分も取つて置きに笑ひ足した。

「お米さんは……」

とお兼が、突然話の切れ目に娘の近況を訊ねた。

「変りはないだ」

「ありあ實際いゝ娘だぜ、おい」

弟は最近のお米を見もしない要造の獨斷に笑つてゐたが、不意に心に起つた警戒の本能に、われながら驚いた。

この同胞は鼬ごつこだつた。要造の學問をしてゐる弟に對すると恰度同じやうに、松吉は心のなかで、色の黒い田舎娘を知らず知らず大切な者に創り上げてゐた。——

お兼が鎌倉に歸る時刻になつた時、要造はためらひながら弟を熱海まで送ると云ひ出した。母親と弟とは同時に、要造にまだ何か云ひ悪い用事が殘つてゐるのだなと察した。

果して要造は熱海行の輕便鐵道がしばらく蜜柑山の中腹を走つてから、不意に忙しく切り出した。——實は社長がわたしに小田原へ詰めてもいゝと云つてゐる。それでどうせ住み込むならば、驛前の店を一軒借りて旅客相手のカッフェーを始めたい。熱海軌道御案内所としてもいゝ。現在の月給ではやつと子供三人を食はすといふだけだ。カッフ

エーであがつた金を溜めてうまい儲け仕事を見つけ。男の子は殘らず帝大を卒業させたいものだ。自分がたうとう學問の有難味を知らずに終つたからね！――わたしの身持が落ち着いたら分けてやるといふ金が、親爺の手元にあるさうだが、そんな端錢(はしたがね)は眞平だ。今に見てくれ、大學の優等生をひとり子供の家庭教師に抱へるぜ！　金はさうやつて費ふものさ。子供つて有難いものだ！　子供の顔を見ると無茶は出來なくなる。――わたしの髪を見てくれ。早白髪といふやつだ。苦勞をしたのだな。わたしの子供の時から見ると本當に暮しにくい世の中になつた！　どうかして一つ、（と要造は感動して、眉を寄せながら腕組みした。）親爺の生きてゐるうちに芽をふきたいものだ！　わたしのやうな境遇は全く子供の精神によくないね。家内(かない)も――ずつと居付いてゐる。前身はあんな譯だが、あれはごく氣立てのいゝ女だ。カツフヱーの主婦には持つて來いさ。それで――決してわたしは親爺なぞから貰はうとは思はないが、（要造はさう云つて不機嫌になりはじめた）借家の權利金や修善費のために、暫時わたしの分に取つてあるといふ金から借用したい。頼むな。こゝに社長秘書の書面がある。なに近頃のわたしの精勤振を證明した書付なのさ。親爺がこれ一通ぢやあ足りないといふならこんなもの、幾らでも束にして送るよ。この件については湯河原の伯父さんにも頼んである。しかしあれは氣が弱くてね。あんた一人が頼りなのだ。兄貴のためにどうか頼むな。わたしのビルディング内の評判を親爺に一度聞かせてやりたいよ！　全く笑ひたくなる。――

要造の話振りは獨特な熱を帶びて、殆んど腹を立てゝゐるやうに見えた。車が建物もない小さい停車場にとまると彼は顔を寄せて聲を落し、海に沿つた斷崖をせゝこましく走ると手振りも交ぜて饒舌になつた。要造は咳や溜息を種々と挿んだが、それは話の内容を妙に浮き立たせ、彼の情熱の度合をむき出しにして見せる效果があつた。これは要造にとつて、いつも立派な外交員として採用される元手になつた。

到頭弟は動かされた。弟は父親に取り次がうと云つて、その證明書といふ奇妙な書付を預つた。話がきまると要造は早速、横濱ですれ違ひの小田原行に乗り移つた。弟との談合も身の周りに積つた用事の一小部分に過ぎないと云つた様子だつた。兄の車が動きに出て、安行炭のひどい火花が暗くなつた裾に吹き捲られた。

翌日松吉が要右衛門にその話を傳へた時、父親は笑つて相手にしなかつた。弟息子が珍らしく云ひ張つた。

「あのやうに本氣で云ふものを、頭から受け付けなえのはあんまりと思ふ」

「そなえなら、まあ、えゝ」と年をとつた要右衛門が苦々しい貌を見せた。「要が云ふだけのものを俺出さう。俺あいつまでも眼が黒いわけのものでなえ。今のうちに松が一度痛え目に會ふも惡くなえだ。われ達あ兄弟だ。なあ、初めからすげなくは出來なえづら」

――だが要右衛門の云つた通り、要造は受け取つた金をその儲借財の一部に廻し、夜逃げのやうにして關西へ姿を晦ました。店に對しても使ひ込みがあるらしかつた。氣の弱い湯河原の叔父の指圖で松吉が横濱の兄の家の前を通りかゝつて見た時には、貸家札がもう新らたに貼られ、塵埃箱が溢れ、小學校の教科書の表紙が破れて路次に落ちてゐた。

兄弟はこんな風にしてまた隔つた。

三

毎年の避暑客の或る一家が、本線の開通してまだ日淺い熱海の停車場から歸つて行つた。鶴屋では遊び事の相手になつてゐた松吉とお米とが送りに出た。東京の雑誌の口繪などに載る人々とそのやうな交渉を持つ滿足を、この痩せた娘は兄と並んで單純に味はつてゐた。お米は物事にすぐと感服しやすくて、客の娘から刺繍や編物などの技藝を教はつた

のだ。列車がプラットフォームになくなると、風が來て新らしいペンキの匂を消してゐた。これが鶴屋に歲暮からかけて逗留した客の最後の組だつた。——松吉は急に退屈になつたやうな氣がした。山向うで隧道工事の爆音が緩く聞えてゐた。

地震以來、彼は家に歸つて働いてゐたのだ。町の中段に見える鶴屋では空いたばかりの座敷を開け放つて掃除をしてゐた。松吉はお米に別れて青年會にでも顏を出して見ようといふ氣になつた。だが小學校の一室を借りてゐるその事務所も、合憎無人でひつそりしてゐた。

この時に松吉は、要造からの久しぶりの便りを狀差に見つけたのだ。——薄鼠の封筒で弟にはすぐに分つた。要造はあの事件このかた、便りと云へば必らず町の青年會宛てに寄したのだ。

弟は正直のところ手に取るのが臆劫だつた。兄の書面には例外なく五六百圓の無心が書き込んであつた。うまい儲け仕事の筋道をくはしく說明して、證據書類まで添へてある事があつた。だがそれを今さら信ずる要右衛門でもなかつた。終ひには弟は一々返事を出すことを止めてしまつた。この町の暮しは緩やかで、同胞を落膽させるやうな文章を書く事はなるべく忘れたかつた。それに彼は、要造が横濱を去る際に鎌倉に立ち寄つて、お兼から巧みに貯金を引き出して行つた事を憤つてゐた。——或る場合弟は、小さい町の生活者にとつての不斷の重荷として要造を憎むだ。

弟が氣のない樣子で封を開いた。いつ幾日に待つてゐろといふ簡單な知らせだつた。

「要兄さんの手紙づら？」

松吉の四疊半の部屋に來てそれを見つけた時、お米は赤くなつて、睨むだやうな神經質な笑顏をあらはした。松吉の幼時の別館に對すると同じやうな考を、この妹は要造に對して持たされてゐたのだ。

――松吉はその時間に停車場に出た。混雑した遊覧客にまざつて要造が會社員風の男と談笑しながら、改札口の方へ見え隠れした時、松吉は兄の流儀で車中に懇意になつたものと思つた。だが要造がその年下らしい男と別れずに、早速どこか用談の出來る場所へ行かうと云ひ出したので、彼は甚く意外な顔を見せた。要造はしきりと伴れに、震災當時この土地を見舞つた際の話を陽氣にしかけてゐた。金井といふ名の、女のやうな皮膚をした要造のその同僚は、名刺を松吉に渡して遠慮がちに振舞つてゐた。自働車の轍の痕のひどい赤土の廣場はガソリン臭かつた。

要造は自分で定めた日よりも半日ほど遅れて來たのだ。麥の目立つこの半島では、冬外套がそろ／＼邪魔物だつた。

松吉は他の土地から來てゐる店を選んで、停車場に近い新築の閑かな西洋料理店の二階へ上つた。要造は女に東京者に扱はれた。窓のすぐ前の地均しをした崖からは、満開に近い桃が何か態をつくつて庭へ枝をさし伸べてゐた。

「この金井君はわたしの親友さかい、この人の前では何も隠さずに云うてえゝのや」

要造はそは／＼とビールを誂へたりして、擽られるさを紛らすために、弟へも故意と關西辯を使つた。彼は一人では弟に顔を合せにくかつたのだ。

「時に先頃手紙で一寸云うた一件はどうなりましたな」と要造が弟の顔を見ないやうにして切り出した。「實は今千五百圓といふ金さへあれば××局の御用いふ甘い口がとれるんや。これや山こやない。山こやない證據にかうやつて金井君にわざ／＼此處まで來て貰うたんや。尤も金井君は東京に用事をつくつて出て來たのやがな。――金井君が明日にも親爺に會うて、よう子供に聴かすやうに說明する云うて呉れるんや。しかし先づその前にあんたに聞いて貰はう思うてた」

内氣らしい金井は明らかに當惑してゐた。松吉は耳馴れない兄の關西辯のために、芝居を聞かされてゐるやうな氣がするのだつた。彼はその愛嬌に釣り込まれまいとしてゐた。

「さうさなえ、親爺にも話して見るが、まああまり當てにしない方がいゝなえ」

と弟は、自分で作りあげた計畫をすぐに自身から信じ易い要造に、さう明らさまに答へた。

「何故や。——まあ〳〵さう云はずと、折角金井君にもかうやつて來て貰うたさかい、あんた一つ頼みまつせ」

弟は段々その陽氣な關西辯が厭になつた。

「多分駄目だと思ふなえ」と松吉は、稍々頑固に同じ事を言ひ張つた。「實は横濱のこと以來、親爺はあんたを全然信用しなえだ」

「うーむ」

要造はぐつと詰つた。彼は同僚の手前自尊心を傷つけられて、焦焦と默り込みながら、敷島の烟を鼻から出してゐた。

「あんたには氣の毒だが、親爺が云ふのもまた無理はなえだ——」

「もうよろし！」と要造がいきなり遮つた。そして彼は無暗とビールを注いだ。「どうでもえゝわ！」

「鵯が啼いとるねえ、須賀野君」と金井がひとり氣を揉んで紛らさうとした。實際金井は山の中腹の、薄紫に煙つてゐる雜木林を眺めてゐた。「あゝあ、僕はぼかんとしてしまうた」

「千や二千の金どうでもよろし！」要造は金井には少しも構はずに高飛車に出た。「わたしはもつと肝心な用で來たんや！ た、あんたのおふくろが今小田原で病うとるぜ。あんたは知るまい！ それでお米をおふくろに會はせに來たんや」

弟は烈しく動揺した。

「なあ、おふくろは先月おとみさんの婚禮や云うて、二三日暇を貰うて小田原に來たんや」一目を置いてゐる弟に對する自分の言葉の效果が快くて、酒の少しまはつた要造は逆錯になつた。「その儘もう十五日も寢ついとるのや。肋膜炎や云うさかい、今度はむつかしいかも知れん。そやから一度お米にも――」

弟が急にサイダーの洋杯を押しやつたので要造は驚いた。

「それあ本氣で云うのか」

「阿呆らしい。誰が嘘に云うものかいな」と、要造はまだ借りたやうな口調を使つてゐた。「お米ももうおふくろを知つてえゝ頃や。――なあ」

要造は弟の場合の素直さに味をしめたのだ。然うだ。――から松吉は思つた。

「俺あ厭だ！」

「厭かというて――」

「厭だ！」

と松吉が兄を睨むだ。彼は同じやうな激しい本能から、昔てこの兄に石を打つけた事があつた。さういふ兄が再た姿を現はしたのだ！

「そりや何故やな」要造の方も顔色を變へた。

「あんたはよう考へたうへで云うのか」弟の聲が震へて來た。「お米のためによう考へて云うのか。これは冗談ごとゝ違うだ！」

「何を！」――と要造が苦い顏をした。上方詞を急に捨てた事に妙な意味があつた。「さつきから下手に出て居ればいい氣になりやがる。弟の癖に今の言葉は何だ！さあ謝まれ」

金井が切りと頼むやうにして要造を宥めてゐた。

「兄ならば兄らしくするがいゝだ」と松吉もなか〳〵讓らなかつた。「それならば何故、そのやうな大切な用を初めに云はなえだ。莫迦げた冗談を云ふ暇に、何故すぐと病氣のことを知らさなえだ。てれ隱しに大袈裟な事を云ひ出したと解られても仕方あるまえ」

「生意氣な事を――」

要造は顏を妙にひき釣らせてせいゝら笑はうとした。――彼は確かに圖星をさゝれた。彼はこれ迄に何度か妹をお袋に會はせる想像をした事がある。しかし現在それを實行しようとは自分でも思はなかつた。ほろ醉ひの心で急に思ひ付いた時、彼は熱心になつたのだ。これが彼の性質だつた。その出鼻を彼は挫かれた。そして挫いた相手は、いつも自分に對して優越を持してゐる弟だつた。

彼はもう暴々しい衝動を押へることが出來なかつた。

「愚圖々々ぬかすと叩き倒すぞ！」彼は目ぶしいやうな眼を据ゑ、留めてゐる金井を引きずりながら卓を廻つて來た。

「母親が娘に會うて何んで惡い」

「お米は身體が弱いだ！」弟は調子の狂つた聲を發した。

「おふくろはどうだ。强いか」と要造が疊みかけた。「貴樣、あのおふくろが十幸五月蝿えのだらう。おふくろもそれは知つとるぞ！よし、俺あ親爺に談判してやる。親爺はまさかおふくろを他人だとは云へまい」

松吉が思はず兄の腕を把つた。

「うむ、擲る氣か？さあ擲れ！」

と小柄な要造が無暗に弟を小突いて來た。松吉は力を入れる爲めに一寸怒た貌をした。が、その瞬間彼は手を離した。彼にはその事が不可能だつた。彼はそれをはつきりと經驗した。

「さあ、擲るなら擲れ！」

要造が、弟へよりは留めてゐる金井に向つて暴れながら怒鳴つた。松吉はだん／＼子供のやうに頭を垂れて、要造から外を向いてしまつた。彼が泣かなかつたのは金井がゐるといふ理由だけだつた。やつと堪へてゐる彼の鼻先に、西日で貝殼のやうに透きとほつた桃の花が何か空々しく媚びてゐた。

「兄さん。——他人の前で何故そんな話をするだ」

と少時して松吉が、衝動が鎭まつてから外を向いた儘弱らしく云つた。

「あゝ、わたくし、失禮しませう」

金井が喋りながら、全く狼狽して外套を引つかけ、要造と陰の事を急いで相談して出て行つた。だが要造も松吉もそれを留めなかつた。

金井がゐなくなつてから兄弟は急に話しよくなつた。

「兄さん、俺あ明日小田原へ行つておつ母さんの容態を見て來ようと思ふ。その上で今の話を母さんに相談しようと思ふ」

「そりや君。——おふくろにそんな事を云うたら氣を揉むぜ」と要造は、弟が急に露骨に出たので困惑した。

「いや様子によつては明らさまに話した方がいゝだ。どうせ心では皆お考へてをる事だ」と弟が静かに云つた「俺の考ではお米が嫁に行つてからが一番いゝだと思ふ。嫁に行くと云つてももうこの一二年うちの事だせゑ。――今は母親が弱えし、何と云つてもあの母親を頼つてをる事だ。それを急にぶち壊すのは可哀想でなえか。俺は學校を終へたと云うても、あんたのやうに家を出て一本立ちに働いてゐるでないせゑ、引込み思案な者か知らないが、お米はわしら男の性合と少し違ふと思ふ。――俺にしてもあれを聞いたあとは辛かつたぞ。俺にしても子供の時からおふくろに逢ひつゞけてゐたらば、學校もあのやうに勉強したかどうかは分らなえだ。おふくろが我慢してくれたで、俺あ助かつたぞ。それだせえ、今度は俺たちがよう考へて、お米を助けてやりたいと思うだ」

毎日のとほりに、そして十何年前のとほりに、町では間歇泉の噴出時間になつた。要造はその物柔かな湯の音を聴きながら穏和しくなつた。弟はお米の縁談のことを考へてゐた。――お米の聟が、自分のやうに環境のなかに落着いてしまふ男でなく、それを新らしく作つて行くやうな人だといゝと願ひながら――考へてゐた。

「お米も十八だせえ、もう暫時(なか)の事だ。――お米によい聟が出來れば、お米は辛い事を聞かされても聟に頼るだ。そんなものだと俺あ思ふ。いま事情(わけ)を聞かされては、母親にこれまでのやうに頼れなえだ。胸の弱えものは氣から病が來るだせえ。――俺あもう一二年おふくろに待つて貰はうと思ふ――」

弟が段々昂奮して、猶も饒舌り續けながらふと前方を見ると、金井が全くつまらなさゝうな様子で、灯の淡く點つた停車場の列車發着表を讀んでゐた。松吉は兄に金井を指した。

「うん。わたしは今夜小田原へ泊る事にしたんや」要造が、一時の感情の去つたあとの寂しさを持て餘して、重苦しく云つた。「だが今夜はおふくろの處やない。金井君にもあゝして廻り道して貰うたから、今夜はあいつと御同道しようと

思うとるのや。——小田原まで四十分か。おゝお早いもんやな」……

「兄さんなら、冗談一つ云うてる暇に着くだ」

と弟は初めて笑つて見せた。實際熱海線が開通してからは、この半島の町々の古めかしい陥りなさ、何でもなくなつたと彼は考へた。

（三月十日作）



通り雨

久保田万太郎

◇

慶藏
喜之助
おのぶ
外に、榎本だの、岩井屋だの、新井さんだの、伊勢喜の若い者だの、無盡へ來る人たち大ぜい。

◇

三月のはじめの夜。

◇

淺草でも本所でもよし。――慶藏のうちの二階。

無言の、まだ、幕にならないまへの光景。六七人の人たちが思ひ〳〵の恰好ですはつてゐる。庄蔵、席主として、机を控へて手持不沙汰に煙草をふかしてゐる。

誰も無言。

間。

伊勢音の若い者、入つて来る。

伊勢音の若い者。今晩は、――遅くなりまして……

庄蔵。いえ。

伊勢音の若い者。伊勢音でございます。――主人が出ますんでございますが……（通ひと掛金とを庄蔵のまへに出す）

庄蔵。御苦労さま。（うけとつて通ひに記入する）

伊勢音の若い者。……………（そのまゝ引下つて隅のはうにすわる）

庄蔵。これを……（通ひを返す）

伊勢音の若い者。へえ……（すぐ、また、前へ出ようとする。――側の一人、うけとつて取次ぐ）あゝ、どうも。――おそれ入ります。

庄蔵。岩井屋さん、時間は…………？

岩井屋。へえ、(帯の間から時計を出して)ちやうど、いま、七時二十分。――ことによると五分ぐらゐすゝんでゐるかも知れませんが……

甲。(腕時計をみて)いゝえ、すゝんでをりません。――ちやうどさうでございます。

岩井屋。さうでございますか?

甲。わたくしの、今月、ドンに合せましたから……

岩井屋。有難う……(龍頭を巻く)

慶蔵。いかゞでせう、皆さん遅くつておいでのやうですが、とにかく時間ですから、花だけでもそろ〱……?

岩井屋。もう少しお待ちになつたらいかゞです?――あともうお一人でもお二人でもおみえになつたところで……

慶蔵。(うなづいて)では、どなたでももうお一人みえたところでかゝりませう。――折角、早く、時間通りおいでになつた方に、でないと、お氣の毒ですから……

乙。今夜は、まだ、榎本さんがおみえになりませんね。――いつも、あの方、早くおみえなのに……

慶蔵。それと和田さんが……

乙。あゝ、なるほど、新井さんもおみえになりませんね。

岩井屋。何のかのいつて日が永くなりましたから。――よつぽど手廻しをしないと七時には出られません。

新井さん、入つて來る。

新井さん。遅くなりまして……

岩井屋。あゝ、みえた。――こちらへいらつしやい。――こゝが空いてをります……

新井さん。へえ、有難うございます。

慶藏。行つて下さい、あつちへ。――あとからみえる方がこまりますゝ。

新井さん。へえ。

慶藏。ほんたうに。

新井さん。左様でございますか？――では、御免下さいまし……（まへにすゝむ）

岩井屋。いまあなたのお噂をしてゐたところで……

新井さん。（岩井屋のそばにすわりながら）左様でございましたか？――いゝえ、出がけに、一寸、客に來られましたもので……

乙。……………（手近の土瓶をとつて新井さんのまへの茶碗につぐ）

新井さん。あゝ、これは。――おそれ入ります。……

慶藏。では　とにかく花を……（机のうへに籤の束をのせる）

岩井屋。こちらへ頂きませう。（立つて來る）

慶藏。有難う。（籤をわたす）

岩井屋。へ、どうぞ御順に……（籤をもつてまはる）

……一本あるひは二本づつ引く。――新井さんは二本引く。――最後に慶藏と岩井屋が引く。（慶藏は不參者の分までそれぐ代理に引く）

岩井屋。（殘つた籤をあけてみて）十九番が殘りました。

慶藏。と、二十番の方は?

伊勢源の若い者。(間)わたくし、二十番でございます

岩井屋。ほう、それは……(頓驚な感じにわざとそのはうをみる)

慶藏。二十一番は?

丙。わたくしでございます。

岩井屋。君は、また、今月も……?

丙。へえ、どうも……(間のわるさうにわらふ)

慶藏。で、二十二番はこちら。(籤をみせる)――岩井屋さん、すまないがおついでに……(札だの銀貨だの取交ぜてのせた盆を出す)

岩井屋。へえ、よろしう……(うけとつて、五圓、三圓、二圓、あとは五十錢づゝ、それぐ\に割賦する)

慶藏。(間、――涙をすゝりながらふッと)新井さん、お小さいのがお悪いと聞きましたが。――いかゞです、その後……?

新井さん。へえ、有難う存じます。――(さびしく笑つて)いけませんでございました。

慶藏。(耳を疑ふやうに)えゝ?

新井さん。亡りました。

慶藏。いつ?

新井さん。六日ほどまへでございます。

慶藏。六日ほどまへ(ト――)ちつともそれア……

新井さん。いえ、子供のことでございますから、どちらへもお知らせいたしませんで……

魔戲。いつから、しかし――まへからそんなにお悪かつたんですか？

新井さん。いえ、煩ひましたのは、ほんのもう三日ほど。――すぐに病院に入れましたんでございますが……

魔戲。ぢやア病院で？

新井さん。へえ……

魔戲。（ほつといまさらのやうに）さうでしたか、まア……

岩井屋。（その尾について）とんだことでしたなア、それは……

新井さん。有難う存じます。（暗然と眼をふせる）

　　榎本、帳場に入つて来る

榎本。今晩は……

岩井屋。遅い〳〵……

榎本。それより、君……（いひながら一座をみまはす）岩井さんに、まだ……？、といひかけて新井さんに）あゝ、昨夜は……

新井さん。（丁寧に）昨夜はどうも。――お忙しいところを……

榎本。あくる日、お寺へ出なければならなかつたんですが……

新井さん。いゝえ、とんだ。――とんだことを……

魔戲。（榎本に）何だ、君は知つてゐたのか？

榎本。えゝ？

慶藏。いゝえ、新井さんの……

榎本。えゝ。

慶藏。なぜいはないんだ、知つてゐたら？――いはなくつていゝ無暗に始終いふくせに……

榎本。いゝえ、わたしも知らなかつたんです。――知らないで、ヒヨツクリそのお通夜の晩に、新井さんのところへ行つてしまつたもんです。

新井さん。相濟みませんでした、ほんたうに。――（慶藏に）そのまんま、榎本さんに、お通夜をしていたゞいてしまひまして……

慶藏。そんならさうのやうに、あとだつていゝ、實はこれ〳〵でお通夜に行合せました。――なぜさういつて來なかつたんだ？

榎本。（わらつて）失敗(しくじ)つたな、此奴は。――すみません……（猪牙がゝりに頭を下げる）

慶藏。氣のきかない、ほんたうに……（本籤の束を机のうへにのせる）

榎本。（ふところから通ひと掛金を出しながら）けど、いひませんでしたか、喜之さんが？

慶藏。何を？

榎本。そのことを……

慶藏。喜之助も知つてゐるのか？

榎本。一しよだつたんです。――一しよにお通夜をしたんです。

慶藏。一しよに？

榎本。いゝえ、その晩、パッタリ往來で喜之さんにぶつかつたもんです。――そのまんま、ぶら／＼あてなしにあるいてゐるうち、新井さんのまへを通つたんで、何の氣なし、いつもの佛によつてみたんです。――と、大ぜい人がゐて、お線香の匂ひがするぢやアありませんか……

麿藏。喜之助、こゝんところ暫く顔をみせない。

榎本。おやア、矢つ張、ほんたうなんだ。――それで出て來ないんだ……

麿藏。何が？

榎本。いゝえ、今日の夕刊の。――御覧になりませんか、今日の夕刊を……？

麿藏。みない。

榎本。大したことが出てゐます。――一寸、まア、これ……（夕刊を出して麿藏にみせる）

麿藏。……………（默つて擴げる）

榎本。どうです、寫眞入りで……？

岩井屋。（うしろから）何が出てゐるんだ、榎本君。

榎本。（ふり返つて）喜之さんが内儀さんをもらふつていふんだ。

岩井屋。いつ？

榎本。近々に。

岩井屋。で？

榎本。それが出てゐるんだ。

岩井屋。それが？

榎本。相手が素敵なんだ。――桐十郎のむすめなんだ

岩井屋。桐十郎？――あの坂東……？

榎本。喜之さんにとると大師匠のお嬢さんだ。――おきよさんといつたらそれァ有名なもんだ。

岩井屋。どうして。また。そんな大したものを……？

榎本。喜之さんにかぎるとおきよさんがいふんださうだ。――ふるやうにある縁談をみんな斷つて喜之さんとこへ來ることになつたといふんだ。

岩井屋。戯談ぢやアない。

榎本。（わらつて）すこし可笑しいとは思ふんだ。――そんなことが幾らかでもあれば。いくら喜之さんが口がすくないつて。ちつとやそつと。そこは子供の時分からの附合だ。何とか氣振りにでもみせさうなもんぢやアないか。――まるつきりそれのないところをみると……（いひかけて慶藏に）それともお聞きですか。何か……？

慶藏。（それにはこたへず一座の人たちに）では。どなたもゝうおみえがないやうですから籤にいたします。

岩井屋。（小さな聲で榎本に）一寸。君。それを……（手を出す）

榎本。…………………（夕刊を取つて岩井屋にわたす。――慶藏から籤の束をうけとつて立つ）

慶藏。伊勢喜さんから。

榎本。どうぞ…………（伊勢喜の若いものゝ前へ行く）

慶藏。おつぎは濱田さん…………

榎本。へえ、どうぞ………（丙の前へ行く）

慶藏。つぎは此方（こつち）だ。

　榎本、慶藏のまへに來る。おと、順にまはる。（このうち、岩井屋、夕刊を新井さんへまはす）

間。

榎本。（殘つた籤をあける。——立身のまゝ）六番が殘りました。

慶藏。と、七番の方。

榎本。七番をおもちはどなたですかゝ（みまはす）

丁。（階のはうで）わたくしでございます。

榎本。（引取つて慶藏に）河内屋さん……（さういつてすわる）

慶藏。（改めて）では、河内屋さんでございます。——（榎本に）階下へ行つて、君、お茶の熱いのを………

榎本。おつと………（立つ）

慶藏。（丁に）河内屋さん、お金は明日の夕刻までに纏めてお宅へおとゞけいたしますから。——お宅へおかへりになつてさう被仰つて下さい。

丁。へえ。（頭を下げる）

甲。どうも有難うございました。（かへりかける

慶藏。まア、いま、お茶が來ます

甲。へえ。——一寸しかしいそぎますから……

堅藏。それは、どうも、お待たせして……

甲。いゝえ。

乙。（甲に）そこまで一しよに行きませう。——（堅藏に）どうも有難うございました。

堅藏。おかへりですか、あなたも……？

乙。へえ。——（岩井屋に）岩井屋さん、おさきへ……

岩井屋。御免なさい。

乙。みなさん、おさきへ……

甲と乙、あいさつしてとも〲出て行く。——それと一しよに、伊勢喜の若い者、丙、丁、その外、新井さんと岩井屋を殘したあとのものすべて、それ〲あいさつして、思ひ〲にかへつて行く。——そのあひだに、榎本、人數だけの茶を盆にのせて運んで來る。

榎本。ばかに、みんな、今夜はかへりあしが早いんだな。

岩井屋。（茶を飲みながら）それだけ陽氣がよくなつたから。——寒いと、矢つ張、うちへ入ると外へ出るのが臆劫になるもんでつい尻が重くなる。——誰しもげんきんなもんだ。

榎本。まだ、しかし、こんなつてことはないだらうね。——あんまりあツたかすぎる……

岩井屋。花がさく、これぢやア……（わらふ）

榎本。ほんたうだ。

岩井屋。だが、君、この新聞ね……（新井さんのまへの夕刊をまた取上る）

榎本。うん。

岩井屋。これ、君……

新井さん。(急に)おさきへ失禮いたします。(あいさつして立ちかける)

岩井屋。(不意を食ったかたちに)おかへりですか?

新井さん。へえ。

榎本。いゝぢやアありませんか、まア。——もう少し……

新井さん。へえ、有難うございます。——一寸、これから、わきへ一けん寄つてまゐりますから……

榎本。さうですか。

新井さん。(慶藏に)どうも有難うございました。

慶藏。いづれ改めてうかゞひます。——どうぞお宅へよろしく被仰つて下さい。

新井さん。おそれ入ります。——いえ、もう、子供のことでございますから……

慶藏。(しみじみ)さぞ、しかし、お内儀さんがお力落しでせう。

新井さん。……………

榎本。ちやうど、いま、可哀いさかりで……

慶藏。(しみじみ)全く死ぬ子眉目よしだ。

新井さん。(同)では、御免下さいまし。——(榎本と岩井屋に)どうぞ御緩り……

岩井屋。どうも、これは……

榎本。そのうち、また、お邪魔に出ます。

新井さん。どうぞ……

慶藏。ぢやァ御免なさい。

新井さん。御免を……

新井さん、そのまゝ出て行く。

間。

岩井屋。（慶藏に）しゆんでますね、新井さん……

榎本。（引取つて）仕方がないよ、それは。――一人つ子を亡したんだ……

岩井屋。けど、來たときはさうでもなかつた。――いつもの通りだつた……

榎本。だから、途中でその話が出たから。――折角忘れてゐたのをそれで思ひ出したんだ。

岩井屋。（わらつて）誰が思ひ出させたんだ？――君ぢやァないか……

榎本。此方はそんなつもりでいつたんぢやァない。

岩井屋。けど、いつも一しよに、あとまで殘るものが殘らないのはへんなもんだね。――何となく恰好のつかないやうな……

榎本。それには、今夜は、喜之さんもゐないしさ。

岩井屋。それだね、矢つ張……

榎本。どんな忙しくつたつて一寸ぐらゐ抜けられさうなもんだ。――（慶藏に）ねえ、月に一度ぢやァありませんか。

慶藏。（こよりを縒つて煙管をとおしながら）だから無理をしていつも來るぢやアないか。

榎本。いゝえ、今夜です。

慶藏。あとで、まだ、今夜だつて來るかも知れない。

榎本。來ません。――必と來やアしません。――いまゝで來ないんですもの……

岩井屋。（もう一度たまゝ夕刊を取つてゐたが、これ。――これがもし、このとほりカケ値のないことだつたら、來月からはもう公然晴れて來なくなるね。――われ／＼とはもう附合はないといふかも知れない……

榎本。どうして？

岩井屋。だつて、君、さうなれば坂東家のれつきとした花形さんだ。――いまゝでの喜之さんぢやアない……

榎本。そんなばかな奴があるものか。――どんな出世をしようと古い友だちを袖にするやうな喜之さんぢやアない。――それア大丈夫だ。

岩井屋。でも、喜之さんはそのつもりでも、先方には先方のそれだけの格式がある。――無暗とさうホイ／＼出しつこない。

榎本。出て來なければ此方から出て行くからいゝ。――そんなことは構はない。

岩井屋。玄關拂ひだね、まア……

榎本。人ウつけ。何さまぢやアあるまいし。――多寡が役者のうちぢやアないか。――そんなまた不實な喜之さんぢやアないよ……

岩井屋。（急にわらつて）だが、こんなに騒々と書立てゝ根も葉もなかつたら可笑しなもんだらうな。

榎本。うそにしたつてこれだけ書かれゝば大した浮名儲けだ。――人氣になる。――どつちへ轉んだつて損はない。
岩井屋。それはまアさうだ。
榎本。だが、何とか。――それにしても、何とか、いつ式を擧げるまではつきり出てゐるんだ、跡方のないつてことはない。――一ト言、こんな話があるんだがぐらゐいつたつて……（慶藏に）ねえ、さうぢやアありませんか。
慶藏。こんなに早く世間へ分るはずぢやアなかつたんだ。
榎本。と？――知つてるんですか、あなたは？
慶藏。知らないでどうする。――はじめから相談にのつてゐる……
榎本。人が悪いな。――そんならさうと早く……
岩井屋（榎本に）君、祝ひものは一しよにしようぜ。
榎本。無論さ、それア。――君と、わたしと、新井さんと、さ。――猪瀬も入れなくつちやアいけまいな。
岩井屋。それと吉ちやんと……
榎本。吉ちやんを入れゝば尾越も入れなくつちやアいけない。
岩井屋。大ぜいのはうがいゝぢやアないか。――樂屋總出のはうが賑だ。
榎本。（慶藏に）だが、何がいゝだらうね、それだつたら？――縮緬細工の、から、でかばちもない鯛かなんか……
岩井屋。そんなものはつまらない。――幾らもそんなものは外から來る……
榎本。しかしね。――何かゝうエグるやうなものがやりたいな。
慶藏。（わらつて）まだ世は遙だ。――いまから騒がなくつたつて……

榎本。いゝえ、さうはいへません。――四月のはじめつていへば、あなた、あと一ト月ありません。――來月の無盡のときはもう先方の籤になつてゐるんです。

岩井屋。なるほど、さういへば。――らちもない話だ。（わらふ）

榎本。幾時だらう、もう……？

岩井屋。（時計を出して）八時十分……

榎本。これから猪瀬んところへ行つてやらうかしら？――彼奴、悋氣だから、必とまだ知らないに違ひない。

岩井屋。あすこぢやアこの新聞をとつてゐまい。

榎本。とつてゐたつて。彼奴は、新聞てものは續きものを讀むものと思つてゐるんだ。――みたつて氣がつきやアしない。――行かないか、一しよに？

岩井屋。うむ。――早ければ、一寸、こつちにも目算があるんだが……

榎本。どこかへ行くのか？

岩井屋。岩瀬へ行かうかと思つて……

榎本。岩瀬？――誰だ、いま？

岩井屋。琴凌……

榎本。何をよんでる？

岩井屋。「延命院」……

榎本。其奴は行きたいな。――琴凌、しばらく聽かない……

岩井屋。昨夜は行き損つたが、一昨日も、一昨々日も行つた。――すばらしい出來だ………

榎本。とにかく出よう、一しよに。――工合で猪瀬んとこは明日にしてもいゝ……

岩井屋。（わらつて）何をいつてるんだ、たよりない……

榎本。（慶藏に）ちやア、また……

慶造。何だ、かへるのか？

榎本。えゝ。――明日の晩でもまた上ります……

慶造。（わらつて）來なくつてもいゝ。

榎本。いゝえ、來ます。――（岩井屋をふり返つて）行かう、君……

岩井屋。（慶藏に）どうもお邪魔を……

慶造。酷く愛想盡しなんだな、みんな……

岩井屋。何だか、今夜は。――また上ります……

榎本をさきに岩井屋出て行きかける。

慶造。（榎本に）入らないのか、通ひ……？

榎本。あゝ、さうだつけ……（もどる）

慶造。これが花だ。（通ひと一しよにわたす）

榎本。（不足らしく）兵隊ですか。

慶造。人に代りを引かして贅澤いふ奴があるか。

榎本わらふ。――岩井屋をさきに出て行く。

間。

鷹藏、しづかにそのまゝ煙草をふかす。

間。

おのぶ、入つて來る。

おのぶ。みんな早いんですね。今夜は。（散らかつてゐる茶道具をまとめたりする）

鷹藏。うむ。

おのぶ。どうかしたんですか？

鷹藏。どうもしやアしない。――勝手についていろ／＼になる……

おのぶ。わたしは、また、いつものやうに遅くなるんだと思つて……

鷹藏。何かしたのか？

おのぶ。いゝえ、生憎今夜は何にもなかつたから、お汁粉でもこしらへようと思つて……

鷹藏。こしらへたのか？

おのぶ。えゝ、おけさへすれば……

鷹藏。喰ふよ　それは。――誰もゐなくつたつていゝ。

おのぶ。（わらつて）さうですか？

鷹藏。すぐでいゝ。

おのぶ。ぢやア、いま、階下へ行つたら。――けど、新聞に出たんですつてね、吉之さんのこと？

慶藏。うむ。

おのぶ。こまるでせうね？

慶藏。こまりもしないだらう、もう。——本極りになつたんだから……

おのぶ。ぢやア、もう？

慶藏。どこからもゝう故障の出るところはない。——あとはもう結納をすればいゝばかりになつてゐるんだ。

おのぶ。でも、ようござんしたわね。——どうかと思つたけれど……

慶藏。運だ。——矢つ張あの男に運があつたんだ。

おのぶ。新聞をみて、今夜、はう／＼でいろ／＼いつてるこつてせうね。（わらふ）

慶藏。驚いてるだらう、みんな。——何にしても不意討だから……

おのぶ。それには先方が聞えた娘さんだけに……

慶藏。これで、まア、あの男も立つ瀬が出來たのさ。

おのぶ。（ふつと）どう思つたでせうね、あの人？

慶藏。誰？

おのぶ。いゝえ、おさとさん。——今夜のこの新聞をみて……？

慶藏。さう思つたか、お前？

おのぶ。えゝ。——すぐ　わたし……

慶藏。やつぱり女だな。

おのぶ。どうしてゞす？

慶蔵。で、どうだ？――どう思つたと思ふ、おさとさん？

おのぶ。いゝえ、ですから。――寂しい氣がやつぱりしたらうと思ひます。」

慶蔵。寂しい氣が？

おのぶ。えゝ、――寂しい、から、取返しのつかないやうな……

慶蔵。おさとさんが、もし、毛ほどもゝう以前の、そんな料簡をもつてゐなかつたらどうする？

おのぶ。それは、おさとさんは、あゝいふ音無しい悧口な。――それには、新井さんと、あんなにいま仲よく暮してゐるんですから、そんな以前のことなんぞ思ひ出す暇はないでせうけど。――でもそこは。――そこは、矢つ張、人情で……

慶蔵。思ひ出すか？

おのぶ。と思ひますけど、わたしたんぞ。――新井さんには何ですけど……

慶蔵。だが、何事もありやァしなかつたんだぜ、喜之との間に。――ほんのたゞ幼馴染といつたくらゐの…

おのぶ。ですから。――ですから、よけい……

慶蔵。…………

おのぶ。何事かあつたのでしたら、喜之さんのこつてすもの、新井さんとあゝ……

慶蔵。（引取つて）附合ふわけがない。――だからよ……

おのぶ。…………？

慶藏。(ふと耳を傾けて)誰か來やアしないか?

おのぶ。さうですか?

慶藏。格子があいた……

おのぶ、出て行く。——すぐ、またかへつて來る。

おのぶ。喜之さんです。

慶藏。來たのか?

おのぶ。えゝ。

喜之助、入つて來る。

喜之助。遲くなりまして。——うちは早く出たんですけど……

おのぶ。此方(こつち)へいらつしやい。(蒲團を直す)

喜之助。へえ、有難う。——(み廻してけゞんらしく)みなさんは……?

慶藏。かへつた。

喜之助。(信じられないやうに)大へん早く……?

慶藏。お前の新聞が祟(たゝ)つたんだ。

喜之助。(いつそ探るやうに)御覽でしたか?

慶藏。傾木が持つて來てみんなにみせてゐた。

おのぶ。お目出度う、喜之さん……

喜之助。（わらつて）そんな。――いけません、お内儀さん……

おのぶ。もういゝでせう、でも、さういつても……？（わらふ。――茶道具を片附けてそのまゝ出て行く）

喜之助。どうしてあんなことが出たんですか？――どこから分つたもんですか……？

慶藏。それは先方は稼業だ。――探らうと思へばいくらだつて探れる。――でも構はないぢやアないか、もう……？

喜之助。構やアしませんけれど。――（内氣に）何といつてをりましたらう、みんな？

慶藏。こんなことがあるならあると、一ト言ぐらゐいつてくれたら好いだらう。――酷く榎本は腹を立てゝたぜ。（わらふ）

喜之助。ですから。――それがありますから……

慶藏。…………

喜之助。（あぐねたやうにも　必とさういはれるだらうと思つてゐました。

慶藏。なに戯談だ。――何と思つてゐるもんぢやアない。――みんな喜んでゐる……

喜之助。…………

慶藏。ほうぼうへなほ觸れに行つた。――それで、みんな、早くかへつたんだ。

喜之助。いつものやうに、いゝえ、遲くまでゐるんだらうと多寡をくゝつて……

慶藏。（間）だがね。――いまもしかし内儀さんとさういつてゐたんだが……

喜之助。…………？

慶藏。ほうぼうで、今夜は、新聞をみていろいろいつてゐることだらう。――不意討だから驚いてゐるだらう……

喜之助。（わらつて）さぞ惡くいはれてゐるこつたらうと思ひます。

慶藏。と、内儀さんはいつた。——どう思つたでせう、あの人は？

喜之助。…………？

慶藏。あの人といふのはおさとさんだ。（づけりと）

喜之助。…………（ふつと顔のいろをかへる）

慶藏。（つゞけて）實は俺も。——俺もすぐさう思つた……

喜之助。…………（眼をふせる）

慶藏。と、こゝに。——もう一人こゝにさう思つたものがゐる……

慶藏。新井だ。——和三さんだ……

喜之助。…………（急に顔を上げる）

慶藏。といふのは。——（しづかにわらつて）ついぞこんなことをいつたことがないから何をいふかと思ふか知らないが……

喜之助。…………

慶藏。先刻こゝで、それまで何のこともなかつた和三さんが、榎本のもつて來た新聞をみると一しよに急にしづんでしまつた。——子供の話が出たからだと……（いひかけて）何だつてね、さういへば小さいのが死んだんだつてね……

喜之助。へえ、この間……

慶藏。こつちはちつとも知らなかつた。——今夜はじめて聞いた……

喜之助。さうでございましたか？

慶藏。まアいゝ。――それはまアいゝ。――子供の話が出たからだと、あとで、外のものはさういつたが、わたしにいはせればさうぢアない。――わたしのすぐ思つたことを和三さんもすぐ思つた。――たしかにわたしはさうとみた。

喜之助。…………

慶藏。で、いつもゆつくりして行く人が、わきへよるといつて、盃がすむと一しよにさきへかへつて行つた。――和三さんにすると、こゝにゐて、そのうへこの話の渦ん中に何としても捲きこまれたくなかつたんだ。――はつきりそれがわたしには分つた。

喜之助。…………

慶藏。知るまいが、喜之さん、平生から和三さんは、決して君といふ人をうれしく思つちやアゐなかつた。………

喜之助。…………（顔を上げる）

慶藏。かういつたら、いゝえ、驚くかも知れない。――そんなことはないと君はいふだらう。――が、それは、あゝいふ内端なやさしい人だから外へそれを出さないだけだ。――おもてへそれをみせないつきりだ。――君に憚りなくわらつてみせればみせるほど、和三さん、肚では君へそれだけ肱を張つてゐた……

喜之助。…………

慶藏。無論、和三さんは、何も知らないでおさとさんと一しよになつたんだ。――氣に入つておさとさんをもらつたんだ。――貰つたあとで、おさとさんには、まへに君といふ好きな人がゐた……

喜之助。しかし……

慶藏。それは分つてゐる。――それはよく分つてゐる。――が、正のものよりうはさの影のはうがどうしたつて大き

い。──そこへもつ來て、和三さんが、因果とまた君が好きと來てゐる……

喜之助。………

慶藏。で、そのときはもう遲かつた。──君と和三さんとの間に附合が出來てゐた。

喜之助。…………

慶藏。そつちにすれば痛くない腹をさぐられたくない。さうでないといふ明しをはつきり立てたい。──さう思ふからわざと平氣でうちへも行く。──おさとさんに遠慮のない口もきく。──それこそ子供が死んだと聞けば飛入に通夜もする……

喜之助。そ、さうなんで。──ほんたうにさうなんで。──何にも後暗い……

慶藏。分つてゐる。──君のそのいぢらしい料簡はわたしには分つてゐる。──が、和三さんには分らない……

喜之助。しかし？

慶藏。分らないといふより通らない。素直にそのまんま響かない。──それが證據には、和三さん、だん／＼このごろ君を避けて來た……

喜之助。………（意外の面もち）

慶藏。ありやうは、ほんたうに、わたしはどうなることかと思つた。──どんな取返しのつかないことに。──いゝえ、ほんたうによ……

喜之助。…………

慶藏。が、いへなかつた。──兩方がいはせてくれなかつたからいへなかつた。──今夜までそれがいへなかつた

喜之助。…………

歴蔵。これでいゝ。――君にいへば和尚さんにはいはなくってもいゝ。――君にさへいへばつゞまりは自然につく……

喜之助。（念に）分りました。――いゝえ、それで分りました。

歴蔵。…………？

喜之助。いま、わたくし、新井さんに門で逢ひました。

歴蔵。どこで？

喜之助。新井さんのうちで……

歴蔵。…………？

喜之助。（さびしく）そんなこととは知りません。――さそつて一しよに来るつもりで門までよりました。――と、いま出たといふところで……

歴蔵。…………

喜之助。すぐあとを追つかけようと思ひましたが、つい心やすだてに、御佛前にお線香を上げたりしてうつかり。――ついゝつものやうに……

歴蔵。引返して話込んだ……

喜之助。へえ。――と、そこへ歸つてみえました、新井さん……

歴蔵。どうした？――何といつた……？

喜之助。ブツリとも口をきゝません。――ついぞない不機嫌で……

慶藏。……………

喜之助。はじめて、わたくし、新井さんのあゝいふところをみました。

慶藏。（急に）それでいゝ。――それで濟んだ……

喜之助。…………？

慶藏。それでいゝんだ。――さう來なくつちやアいけないんだ……

喜之助。しかし……？

慶藏。いゝえ、いゝ。――それでいゝ。――それでいさくさはなくなつた。―君は君、和三さんは和三さん。――もう安心だ……

喜之助。…………

慶藏。ふッつきればいゝ。――さうふッきれゝばいゝんだ……

喜之助。…………（再び眼をふせる）

おのぶ、汁粉の椀を盆にのせて入つて來る。

おのぶ。お待ち遠さま。――出來ました、おあつらへが……

慶藏。喜之さん、どうだ一つ……

喜之助。へえ、有難う……

おのぶ。内どしらへだからどうせおいしかアありませんよ。

喜之助。いゝえ…………

おのぶ。何だかボツ／＼ふつて來たらしいんですけど……（窓のそばへ行く）

慶藏。あんまりあツたかすぎるから……

おのぶ。（窓をあけて）あゝふつてゐます。――でも空は明るいんですよ……

慶藏。大丈夫だ、通り雨だ。

おのぶ。だらうと思ひますけど……

慶藏。どうだ、喜之さん……（盃をとる）

喜之助。へえ、いたゞきます……（ぼんやり盃をとる）

（幕）

（十五年三月）



或賣笑婦と少年

廣津和郎

『まあ、眠い顏をするわ、可愛らしいのね、あんたは』物を云ふ時、眼ばたきをして、一寸伏眼になつて、それからぼうつと頰を染める少年の顏を、お京はじつと見てゐた。『ほんたうに初心なところがあるわ、この子は』彼女は心の中でさう呟くと、何だかその少年の頰をちゆつと吸つてやるか、指で一寸小突いてやるかしなければゐられないやうな氣がした。

『どうしてこんな子供が遊びになんか來るんだらう？』

彼女は朋輩のお君やお貞が、少年を『男にして』やつた數を、よく指折り數へて、互に自慢し合つてゐるのを思ひ出した。彼女はさういふ自慢話の仲間入をした事もなかつたし、そんな事を微に入り細に入りしてきやつきやつ笑つてゐる女達の氣持を輕蔑して、こんな稼業はしてゐるけれども、自分はあすこまで恥知らずにはなりたくないと、そんな事を考へてゐたが、併しこの少年の事は、お君やお貞に一寸自慢してやりたいやうな氣がした。――この子があたしを好きなのよ。まあ可愛

らしいぢやないの。五日前からかうして三週、あたしのところに通つて來るのよ。みんな、見てやつて頂戴……

『ねえ、一寸』

お京はさう云つて、少年の頬を指で輕く小突いて、笑ふと無くなる彼女の眼を無くなして笑ひながら、じつと少年の顏を見てゐた。

『何をするんだよ』

少年は嶮しい顏をしながらも、子供扱ひにされる事が氣に入らないと云つたやうに、小突かれた頬を外方に向けた。

『だつて、あんたがそんなに可愛らしい顏をしてゐるんですもの。あんた、何處のお坊つちやん？』

『莫迦にするない』

少年は首を振つて、眉をしかめた。

「おほほ。大人見たやうな顏をして、――あんた幾つ。十八？」

『二十だよ』

『二十？　嘘仰い。十七か八でせう？』

『二十だよ』少年はむきになつて答へた。

『二十？　それならもう一人前だわね。さうね。さう云へばさうかも知れないわね』

お京は一寸考へるやうな眼付をした。彼女は或事を思ひ出したのである。――最初、彼女はこの嶮しい顏をし、伏眼になる少年が、ちよこんと床敷の眞ん中に、不器用な恰好で坐つてゐるのを見た時、彼女は何も知らない子供――童貞の小年に對する好奇心を覺えた。男女間の事を實際に於いて何も知らない少年――彼女はそこに或歡びと期待とを持つた。

用選法が『男にして』やつた子供の數を數へる興味、それが彼女にも解る氣がした。

ところが、彼女のこの期待はすつかり裏切られたのだつた。

『生意氣だわ、こんな子供が！』意外にも何事でも心得てゐた少年の顏をまじまじと眺めながら、彼女は心の中でこんな事を呟いた。——もつとも『生意氣だわ』と呟いても、それが不愉快といふ程のものでは無論なかつた。こんな子供がまあ、こんな子供が……期待が裏切られながらも、直ぐ別な微笑が浮んで來る、と云つたやうな心持だつた。『おしやまなものだわ、男つて、ほんたうに。——こんな子供までが』——彼女は彼女の少女時代を思ひ浮べた。十九の時まで、ほんたうに子供で、無邪氣だつた自分の姿を思ひ浮べた。……

『でも、二十と云へばね』彼女はうなづくやうに心に呟いた。

川蒸汽の汽笛が、ぼうつぼうつと時々きこえてゐた。空氣がどんより濁つて、閉切つた部屋の中は、むしむししてゐた。

『ねえ、あんた、學校？』

『うん、學校に行つてるよ』

『何處？』

『W』

『中學？』

『うん、大學の豫科だよ』

『大學の豫科？……まあ、あんた角帽を被るの、まあ、そんな子供見たいな顏に……』

『だつて、十九で中學を出て、直ぐ入つたんだもの。——子供、子供つて云ふなよ』

「おほほ」

何か堪らない嬌音と云つたやうなものに、身體がこそばゆくなつて、彼女は少年の胸に自分の頰を持つて行つた。

「あんた見たやうな弟が一人あつたら、あたしどんなに好いだらう。苦勞してゐても、苦勞のし甲斐があるわ。弟が大學に行つてゐて、弟が卒業するまであたしが働くつて云ふんだつたら……ねえ、さうして弟が學校を卒業してしまつたらあたしはこの世の中に用のない身になるの。――あたしほんたうに、いつでもそんな空想をするのよ。ねえ、さうして弟が學校を卒業してしまふでせう、さうするとあたし自分が弟の邪魔になるから、死んでしまふの。姉さんがこんな稼業をしてゐたと云ふことが、弟の出世の妨げになるといけないから。そしてゐたつて、始終それを考へたら、あたしといふものゝために、世の中に肩身が狹いやうな氣がするでせう。そんな思ひはさせたくないの。――人つて云ふものは、人の邪魔になるまで生きてゐるものではない、つて、あたし始終さう思つてゐるのよ」

そんな事を云つてゐる中に、彼女は夢見てゐるやうな好い心持になつて來た。ほんたうにそんなだつたら、どんなに好いだらう？この少年のやうな弟があつたら、さうしたら、あたし一生懸命稼いでやるわ。構やしないから、どんな男でも、騙して、お金をうんと取つてやるわ。そして、弟に不自由なく、ほんたうに何不自由なくさせてやるわ。何んでもかんでも、みんな弟のためにしてやるわ。どんな事でもしてやるわ……

「ねえ。あんた」とお京は少年の頰を撫でてやりながら、細い眼を溶けるやうにうつとりさせて、考へてゐた。――兩親に早く死に別れた彼女は、叔母の家から或商館の女事務員になつて、通つてゐる中、その商館のボーイから社員に取り立てられて行つた一人の青年と戀に落ちた。ところが、これを叔母が承知しなかつた。そこで二人は逃げ出して世帶を持つた。墮落、さう云つたものが、この世の中で美しいものの最上のもののやうな氣がする彼女だつた。ところが男が

門もなく死んだ。——このよく有り來りの解者の自分の經歴を、『あたし程不幸なものはない』彼女はそんな風に思つてゐる種類の女だつた。

少年は一體無口な少年で、いつでも默り勝だつた。が、彼女が彼の頭を撫でてやつてゐる中に、少年は不圖こんな事を云つた。

『僕、君が好きなんだよ』

『まあ』彼女は夢から覺めたやうに、少年の顏を見守つたが、おほほと笑ひ出した。『何を云つてるのさ。——あたし見たやうなものを好きになつたつて、駄目よ、あんたが。あんたなんかは、今にどんな人だつて好きになれるのよ。——唯、時々會ひに來て頂戴。時々會ひにね』

『だけれど、僕好きなんだよ、君が』

『おほほ』

彼女は再び笑ひ出して、少年の頬に兩手をかけて、じつと少年の顏を見てゐたが、

『ほんたうに、可愛い顏をしてゐるのね、あんた』さう云ひながら、突然の情熱の勃發に、少年の頭を彼女の胸にぐつと抱きかゝへた。『あたしなんか好きになつたつて駄目。——ねえ、だつて、あたしがあなたのおかみさんになつたつて、一寸も似合やしないぢやないの。——時々會ひに來て頂戴。ね、時々會ひにね』

『…………』

けれども、少年の云はうとする事は別にあるらしかつた。彼は彼女の胸に押當てた顏を、耳まで眞つ赤にして、何か云はうと躊躇してゐるらしかつたが、

『僕、困つちやつた事があるんだよ。友達に相談されて……』と思ひ切つたやうに云ひ出した

『何が困つたの?』

『僕その男が可哀さうなんだよ。ほんたうに苦しんでゐるんだよ、その男が。――それだからね、僕、君に相談するの。僕、君を好きなの。僕君なら、屹度好い考があるだらうと思ふんだよ。それで……』

『何を云つてるの?　相談てどんな事なの?』

『友達がね。女の事で失敗しちやつたんだよ。――女がお腹が大きくなつちやつたんだよ。それでね、僕にいろいろ相談するんだよ。だけれど、僕好い智恵がないんだよ』

『まあ。いくつなの、そのお友達つて?』

『僕と同い年なんだよ』

『まあ、わるいね、あなた方は。――不良少年ね、あなた方は』

『…………』

『それで、あたしに相談て……』

『ねえ、友達が薬が欲しいつて云ふんだよ』

『……』彼女は急に、少年の頭を彼女の胸から引離して、少年の顔をじつと見守つた。『嘘仰い、友達だなんて。――自分の事でせう』

『…………』少年は伏目になつて、彼女の視線を避けるやうに、首を垂れてしまつた。

『まあ、あんたといふ人は、あんたといふ人は……』彼女は呆れ果てたといふやうに、そんな言葉を繰返して云つてゐ

たが、何だらう譯の解らない、いらいらした、憎しみが胸に込み上げて來た……嫉ひ、あんた見たやうな人！——何て悶々しい人！——何て悶々しいの。あんたは。子供の癖に』

彼女は少年が、五日前から、彼女のところに三度も來た理由が、すつかり解つて來た氣がした。それが目的だつたのだ、その藥を手に入れたいといふ事が。——そればかりでなく、少年は彼女をほんとうに好きな様子を裝つてゐた。今もそれを云ひ出す前に、「僕、君が好きなんだよ」そんな事を云ひ出した。——自分をうまうまと手に入れて……そんな事を、こんな年端も行かない子供が考へてゐたのだ。男つて、何といふこまつちやくれた、惡智慧に長けた動物なんだらう。

『あたし、あんた見たやうな人、憎くつてよ。あんた見たやうな男がゐるんで、どんなに澤山の女がひどい目に會ふか、あたし考へると、憎らしくなつて、憎らしくなつて、堪らなくつてよ。——誰がそんな相談に乘るもんですか。うまうまとあたしを騙すつもりになつて……何て悶々しいんだらう、子供の癖に！』

お京は何か男全體に向つての憎しみ、と云つたやうなものが胸に込み上げて來た。彼女は最初の男に死に別れてから、いろいろの男と關係した。善良で、氣が弱くて、正直で、そしてかなり多情なところのある彼女は、男に惚れつぽかつた。だが、それ等の男が、みんな巧みに彼女から逃げて行つた。……それから、流浪此處に來て彼女をなぐさみものにする男達、それが別段今まで彼女を怒らせたり、彼女の憎惡を惹起したりした事はなかつたのだけれど、今一瞬に、彼女は嘗て覺えなかつた憎しみと云つたやうなものが、男といふもの全體に向つて、湧き起つて來るのを感じた。

『……』少年は默つてうつむいてゐた。

『あんた、その人と結婚しておやり』お京は少年を前に置いて、彼女の心に湧いて來る譯の解らない嫉情を思ふ存分吐

き出してみたが、それを吐きだしてしまふと、心が少しおちついて來た。『何故、あんたは結婚してやらないの？』

『だつて、そんな事、出來やしないんだよ』

『出來ない。そんな薄情な事があるもんですか。――その女の人の身になつて御覽なさい。あんた一人が頼りなんぢやないか。どんなに苦しんでゐるか知れやしないよ』

『でも、出來ないんだよ。そんな事』

少年がしよげ返つた駄々つ子のやうに、さう云つて、首を振つてゐるのを見ると、彼女は急に可笑しくなつて來た

『まあ、そんな事云ふなら、何故初めつからそんな事になつたのさ。――ほんたうに、あんたはそんなに子供の癖に』

彼女は少年と少年の相手の女とのいろいろの光景が頭に浮んで來た。――この少年が、この少年の身體だ、子供を生む……さう思ふと、とても考へられないやうな滑稽な事に思はれて來た。

『相手はどんな人？』

『…………』

『やつぱり、女學生？』

『…………』

『幾つ？』

『…………』

お京はこの少年の相手として、十五六の小娘が頭に浮んで來た。――まあ、どんなに可愛らしいだらう。この少年と十五六の小娘とが、人眼を忍んでゐる光景は。

『あんたから云ひ出したの。女の人から云ひ出したの。一寸、どつちから云ひ出したのよ』

お京はさう云つて、頬笑みながら、少年の頬を一寸小突いた。少年はうつむいたまま苦笑ひをしてゐた。

『ちよいと、恐かつたでせう。初めはね』

そんな事を云ひながら、彼女は彼女の最初の男と始めて叔母の眼を忍んだ時の事を思ひ出した。『でも、よく何ね、その女の人が……』

『僕はいやなんだよ、その女が……』

『いやなんだつて、そんな薄情な事がありますか。初めはいやでもなかつたんでせう。だから、男つてみんな駄目なのよ、手前勝手で……』

『さうぢやないんだよ』と少年は困つたやうな顔をして、憐みを乞ふやうな笑ひを浮べながら、『僕よりも年上なんだよ』

『年上？』

『うん、年上なんだよ。――藥を欲しがつてゐるのは、僕よりもその女なんだよ』

『女の方が？――どんな女なんだか、みんな被仰い』

少年はそこでぽつりぽつりとその女の事を話し出した。それは彼が下宿してゐる家の娘だつた。これもよくある筋書の、二度も三度も男と關係したり、同棲したり、別れたりしてゐるうちに、いつか年を相當に取つてしまつたやうな女だつた。

『莫迦ね。その女の人が藥を欲しがつてゐるなんて！』お京は話を聞き終ると、急に吐き出すやうにかう云つた。『折

角、出來たものをね。あたしだつたら、自分で育てるわ。子供なんて、ほんたうに授かりものなんですもの、欲しかつたつて出來るものぢやないわ。――あたしも子供があつたら、どんなに好いだらう。あたしなんかには、もう出來つこないし、その女の人が羨ましいわ。ほんたうに莫迦ね、今に子供があるとないとどつちがいいか解るのに――』

『…………』

『ねえ、あんた』お京は優しい調子で云つた。『あんたに心配かけるなんて、その女が無理よ。あんた見たやうな子供に心配かけるなんて。――あたしがあんたの子供を生むんだつたら、どんなに好いだらう。ちつともあんたに相談なんかかけないで、あたし自分で生んで、自分で育てるわよ。ええ、きつと自分で立派なものに育て上げてやつてよ。どんな苦勞だつて、あたし厭やしない事よ。――あたしよく子供が一人ある事を想像するのよ。さうしたらね、あたしその子供が出世するまで、どんな事でもして働くの。そして子供が出世したら、あたしはもうこの世の中に用のない身……』

彼女は自分の云つてゐる事に、身につまされるやうな氣がして來て、へんに悲しくなつて來た。

『あたしはほんたうに不幸なのよ。あたしのやうに不幸な女はない事よ』彼女は自分の聲のセンチメンタルな響に、一層センチメンタルになつて來た。そして彼女は少年の頭をぎゆつと抱きしめて、少年の頬に彼女の頬を押しつけた。

『ね、あんたは可哀さうよ。あんた見たやうな子供が、そんな事で苦勞するなんて、ほんたうに可哀さうよ。ではね、あたしがその藥はどうかして上げてよ。ええ、あたし達ならどうでもなる事よ。あたし毎朝、此處の歸りに御醫者に行くんですもの、あたし達なら、お腹の具合がへんだと云へば、直ぐ呉れるわ。秘密なんですもの。これは大丈夫。そこの先生がね、あたしを好きなの。助平な先生なのよ。おほほ。――ねえ、もうだから、心配しないでいらつしやい。ほんたうに、そんな事であんたが心配するなんて、可哀さうでもあるし、又つまんなくもあるわ。ねえ、それぢや勉強も

出來なかつたでせう。ね、安心して勉强なさい。そしてもうそんな間違ひはこれからしないやうになさい。玄人の女の人なんて、ほんたうに恐ろしい事よ。――ね、女が欲しくなつたら、時々、あたしのところに會ひにいらつしやい。あたしのところにね』

『……………』

少年がさも感謝に堪へないやうに、感動した顏付をして、うなづくと、

『それでもうそれはいいわ。ね、安心していらつしやい』と云つて、彼女は少年の頭を撫で始めた。彼女は何か堪らないやうな、うつとりした感激に、心がなごやかに、涙に濡れて行くのを覺えた『ねえ、あんた、でも、あんたよくあたしにそんな事を打明けてくれてね。あたし初めは吃驚して、あんたが憎らしくなつたのよ。でも、ほんたうに可哀さうよ。あんたが。――ねえ、あんたが打明けてくれたから、あたしもあたしの身の上をあんたに打明けてよ。あたしほんたうに不幸な女なのよ。ねえ、聞いて頂戴よ』

彼女は彼女の心いつぱいになつてゐる身の不幸を、語り出したら、語る事があつてあつて仕方がないといふ氣がした。――ところが、それを語り出さうと思ふと、案外それが妙に簡單な事のやうな氣がし始めて來た。

彼女は帶の間に、彼女の大切なものと一緒にしまつてある一枚の寫眞を取り出して、少年の前に見せた。あんまり上手でない寫眞師が寫した手札型の一人の青年の寫眞だつた。背廣服に髮の毛を綺麗に分けてゐるその男の感じは、ひよわな、綺麗な顏はしてゐるが、何となく新派に出て來る會社員と云つたやうに、へんに取りすましてゐた。

『ねえ、好い男でせう、一寸』彼女は細い眼でにつと笑つて、少年の顏を見て、『これがあたしの初戀の人なのよ』

『……………』少年は寫眞を受取つて、無言のままそれを見てゐた。

『あたし誰にも身の上なんか話つた事ないのよ。ほんたうよ。――あたしその人が生きてゐたら、こんな身になりはしなかつたのよ』

『死んだの、その人？』

『ええ、死んぢやつたの』彼女は鼻をすすつた。『死んぢやつたの……』

彼女は自分の聲にすつかり悲しくなつて來て、ほろりほろり涙を流した。

『どうして死んぢやつたの？』

『病氣で……』

『……』少年はふうんと云つたやうな聲を出して、彼女の樣子に引きつけられたもののやうに、溜息をした。

『あたしね、叔母のところにゐたのよ。神田なの。あたし兩親に早く死に別れて、叔母に世話になつてゐたのよ。――そしてその時分その人と知つたの』さう云ひかけたが、彼女が通つてゐた商館のボーイ上りの事務員と戀に落ちたといふ事が、餘りに簡單に過ぎて、何だかそのまま話せないやうな氣がして來た。彼女は喋つてゐる中に、自然に一種の空想が浮んで來た。『その人はあたしの隣りの家の息子さんだつたのよ。隣りの家と云つても、その邊でのお金持なのよ。お金持のひとり息子なのよ。――あたしの叔母の家の屋根の上が物干になつてゐるのよ。そこに毎朝物を干して、夕方取り込みに行くのよ。するとね、その人の部屋がお二階なの。とても立派な家なのよ。土藏があつてね。――それでその人のお二階の窓が、あたしの行く物干台の方へ向いてゐるのよ。その窓から始終その人があたしの方を見てゐるの。――優しい人よ。早く病氣で死ぬやうな人だつたので、おとなしくつて、靜かでね、それは思ひやりのある人なのよ。……それでね、或日、その時は物干にゐたんぢやないのよ。あたし下の流し元で、お洗濯してゐたのよ。夏の事よ。さうし

たら、眼の前の路次に、上から白いものが落ちて來たの。見ると、封筒に這入つてゐるものなのよ。――手紙だわ、あたしさう思つて、ふと上を見ると、その人がお二階の窓から首を引つ込めたのが見えたの……』

彼女は喋つてゐる中に自然に出來て來る物語が、自分でも嘘かほんたうか解らないやうな氣がしてゐた。――彼女は何とも云はれない、淋しい、だが愉快な心持だつた。ほんたうに自分がさうしたローマンスの女主人公だつたのだと云ふ氣がして來た。

『あたし胸がどきどきしちやつたわ。だつて、あたし十九と云つても、ほんのから子供だつたんですもの。叔母さんが始終さう云つてゐたのよ、お京ちやんたら、ほんたうに柄ばかり大きくつて、からねんねえなんだからね、つて。――でも、あたし胸がどきどきしながら、それを拾つたの。あたし便所に駈け込んでそれを讀んだのよ。便所なんて、をかしいわね。でも嬉しかつたわ。あたしもうどうしていいか解らない程嬉しかつたわ』

『純だつたんだね、君は』と少年が溜息しながら云つた『僕より君の方が餘つ程純だつたんだね。――僕のはね、そんなに美しい話ぢやないんだよ。だから、僕自分で自分が厭になつちやうんだよ』

『あんたは子供なのよ。あんたは子供だから、その女の人に好い加減にからかはれたのよ。屹度さうよ。……でもあたしは純な事はほんたうに純だつたのよ』お京は、自分の話が、少年に或感動を與へかけてゐるらしいので、有頂天になつて來た。『あたし、でもその人が窓から忍んで來るやうにと云つても、どうしても忍んでなど行けなかつたんですもの。――でも、やつぱりその人の家で、その人のお父さんが許してくれないの。親父さんといふ人はね、金持なんてみんなさうよ、區會議員をやつてゐる、髭の生えた横へいな人でね』さう云つた時、彼女の頭には、彼女のところに時々通つて來た事のある、自分では辯護士と云つてゐるが、三百代言か何かをやつてゐるらしい、でつぷり肥えた、威張りや

の、髭の生えた五十男を思ひ出した。威張つて、大きな事ばかり云つてゐるけれども、金を見せびらかすだけで、その使ひぶりはけちけちした、いけすかない男だつた。彼女はその男が嫌ひだつた。それだのに、彼女はその男のからだには、根こそぎ自由にされた。それが彼女には餘計に腹立たしかつた。そんな事を自慢にしてゐるらしい男の、横つ面をはり拔つてやりたい位の嫌惡を感じながら、結局彼女はさんざんな目に會ふ事を思ふと、自分で自分に嫌惡を催した。——その男の顔が、彼女の喋つてゐるローマンスの主人公の親父の顔として、具體的な形で、彼女の頭に浮んで來た。にくてらしい、さう云つた感じで浮んで來た。『それで、たうとうその人とあたしと駈落したのよ。頑固なお父さんの云ふ事なんか、どんな事があつても聞くもんか、とその人は弱々しい身體で、優しい人なのに、我を通し始めると、どんな事があつたつて、後に引かない人だつたのよ。優しいのに、強い人だつたの。あたし幸福だつたわ。ほんたうに幸福だつたわ。「あたしのやうなもののために、あなたが不幸に陷るなんて、そんな事、あたし忍ばれません」あたしがさう云ふと、「何を云つてゐるんだ。お前からそんな言葉を聞くのは何より一番いけない。強くなれ、強くなれ、何も恥しがる事はない、自分を恥ぢる事はない」つてその人は云ふの。自分も戰うんだから。お前も戰へつて……。』

彼女は曾て見た外國物の活動寫眞のさういふ場面を思ひ出した。その時辯士が、彼女が今喋つてゐるやうな言葉で、その場面を說明した。彼女はそれに大變感動した。——彼女の心持は、今その時の場面と一致してゐた。

『そしてね、とどのつまり、あたし達は郊外の方に家を持つたのよ。その人のお父さんが承知しないので、その人は勘當同様になつたのよ。それでその人はつとめに出たの。身體が弱いので、大學を途中で止めたんでせう。そんな人だつたのに、つとめに出たの。隨分苦勞したわ。あたしの叔母も、二人が家出をしたといふ事を、大變怒つてね。あたしを寄せつけないつて云ふの。叔母は深切な深切な人なのよ。あたしをそれは大變可愛がつてくれたのよ。氣の毒な人で、

叔父さんが早く死んでしまつたもんで、二人の娘を自分の手一つで養つて來てゐるやうな堅氣な人なんでせう。——ゆくゆくは、叔母はあたしのお嫁に行く先を、自分で見つけるつもりでゐたのよ。ところがあたしがそんな風に、逃げ出してしまつたでせう。大變怒つたのよ。——あたし叔母の事はよく思ふのよ。今頃どうしてゐるか知らつて。——でも、もうこんな身體になつてしまつては、會へないわ。あたし叔母には濟まないと思つてゐるのよ。一遍會ひたいと思ふんだけれど、勝氣な叔母は、今會つたら許してくれないわ。いえ、許してくれる事は許してくれてよ、幾度許してくれてよ。——でもあたし會へないわ』

彼女の叔母についての言葉は、ほんたうだつた。彼女が商館の男と逃げた時、叔母がどんなに怒つたかを、彼女は思ひ出した。彼女は叔母の二人の娘をも思ひ出した。彼女を『姉さん』と呼んでゐた二人の娘……彼女はほんたうに心から悲しくなつて來た。『厭がさしたんだよ、厭がさしたんだよ』叔母がさう云つて彼女を叱つた時、彼女が思ひ止つてゐたら。叔母の言葉を聞いてゐたら。——彼女はこんなやうな身にはなつてゐなかつたかも知れない。

『何も彼も、今更仕方がないわ』彼女は心底から出たやうな溜息をした。『みんな運命だと思つてゐるわ』

『そして、それからその人が病氣になつたの?』と少年が訊いた。

『ええ、さうよ。それから間もなく病氣になつたの』彼女は急に實際的の悲しみから呼びさまされて、彼女が少年に物語つてゐた空想話の方へ、頭を向けようとした。が、何だか心がちぐはぐな氣がした。

『さうよ、病氣になつたのよ』彼女は實際の彼女の初戀の男と、彼女の空想の主人公とが、へんに不愉快に交錯するやうな氣がしながら、再び同じ言葉を繰返して、そして一寸の間默つてゐたが、やがて語り出した。『風邪がもとなの。あたしまさか死ぬとは、その時まで思つてゐませんでしたわ。風邪を引いたと思つてゐる中に、急性の肺炎になつてゐた

のよ。——四十度以上の熱が、一週間もつづいたのよ。そして朝死んでしまつたの」

それも實際の事だつた。彼女の初戀の男は、つとめ先から歸つて來ると、風邪心地で寢たまま、もう起上れずに、肺炎を引き起したのであつた。——彼女はその時の事をまざまざと思ひ浮べた。男の友人で、同じ商館につとめてゐた男が、いろいろの世話をしにやつて來た。彼女はどうとも手のつけようがなく、唯泣いてゐたのを、その男が慰めてくれて、そして葬式などを濟ませてくれたのだつた。——けれども、彼女はその後のことを考へたくなかつた。——まして、彼女はその後の事を、人に語りたくなかつた。——いや、彼女は自分自身にも語りたくなかつた。彼女はその時だつたら、未だしも叔母のところに、詫びて戻つて行けたかも知れない。けれども、彼女は初戀の男の葬式をすまして、未だ日の經たないのに、相談相手になつて呉れた男の友達に云ひ寄られたのである。——深切に對して、恩に感じたといふ點もないではなかつた。氣の弱い、善良な、正直な彼女は、その男を直ぐ信用した點もないではなかつた。だが、それと同時に、彼女は彼女自身の心にも、直ぐ多情な血が流れ始めてゐたといふ事に、自分で辯解するわけに行かなかつた。

「ほんたうに、浮世つて思ふ通りにならないわ。——いやになつちまふわ」

そんな思ひ出が浮びかかつて　折角の彼女の夢見心地の空想が、滅茶苦茶に破壞されて來たのに、いらいらしながら彼女はさう叫んだ。

「……」少年は、彼女がさういふ心持で云つたと氣がつかないやうに、同情を寄せた眼で彼女の顏をじつと見てゐた。

「あたしほんとうに苦勞しちやつたわよ」さういひながら、彼女は少年の顏を見たが、少年の眼が彼女の言葉をそつくりそのまま信じてゐるやうに光つてゐるのを見ると、急に又力を覺えて來た。「ほんたうに、女つて云ふものは、最初が肝腎なのよ。最初踏み外したら、もとには歸らないのよ。……どうしても歸られないのよ。……ほんたうに女の運命つ

て、情けないのよ』

『……』

『ねえ、折角あたしがその人の爲に一身を捨ててゐた男の葬式だつて、自分の手でお葬式も出來ないんですものね』彼女は自分の現實の經驗をそんな風に、ぼかして云ひながら、少年が熱心に聞いてゐるのを見ると、思はずそれにつゞいて、次のやうな言葉が、自然に彼女の唇に浮んで來る快さを覺えた『あたし自分の手でお葬式を出さうと思つてゐたのに、あの人のお父さんが、急に出しやばつて來たのよ。横へいな、威張りやの、あの人のお父さんが』

彼女の心の中では、いけすかない代言人の肉慾的な髭面と、深切ごかしに彼女を葬式後間もなく口說き落してしまつた、彼女の初戀の男の友達の顏とが、ちやんぽんに浮んで來た。――彼女を肉慾だけの對象として、もてあそびにかかつた最初の男は、實際、その彼女の初戀の男の友人だつたのである。

『あたしが自分の手で葬式を出すといふのに、親の權利を楯に取つて、どうしてもその親父がゆるしてくれないのよ。あたし口惜しかつたわ。棺に獅嚙みついて泣いちやつたわ。でもね、どんどんその棺を持つて行つてしまつたの』髭面の代言人と、彼女を騙して振捨てた彼女の初戀の友達との事を、憎さげに考へながら、言葉はこんな風に出て行つた。

『ひどい事をするんだね、實際!』少年が興奮したやうに云つた。

『でも、そのお葬式は立派だつたことよ。あたしが出すんだつたら、あんなお葬式は出せないと思つて、あたし我慢したの。でもね』と彼女は少年の眼に表れる彼女の言葉の反映に、再びすつかり有頂天になつて、自分の思ひ付を喜びながら、彼女の空想の物語の中に、再び這入つて行つた『あたしを親族席にも入れてくれないのよ。一般の會葬者の中に這入るだけだつて、ほんたうは喜ばないの。――でもあたし、態と會葬者の一番前にゐてやつたわ。……女つて、どう

してこんなに情ない目に會ふんでせうね。あたし口惜しくつて、口惜しくつて……」

「實際、無茶だ、そんな事があるもんか。そんなひどい親父があるもんか！」と少年は再び興奮したやうに叫んだ。

「ねえ、あんたはあたしの悲しみを解つてくれるわね。女つてほんたうに、情ない、か弱いものなのよ。自分で自分をどうする力もないものなのよ」

彼女は急に何か胸いつぱいに溢れて來るものを感じて、泣き出した。自分の云つてゐる事が、少しも嘘でもない何でもない、自分の心の中では、はつきり經驗した事なのだといふ氣がして來た。——彼女は枕の上に突つぷして、聲を上げて泣き出した。

すると、その瞬間、少年が彼女の肩に手をかけて、彼女の背中をさするやうにした。そして彼女が泣いてゐる合間に、その少年がすすり泣いてゐる聲が、彼女の耳にきこえて來た。

「まあ、この子は泣いてゐる。あたしの話に身につまされて泣いてゐる」

彼女は何とも云はれない喜びが胸にこみ上げて來た。そしていきなり少年の頸に獅嚙みついて、少年の顏の到るところに、彼女の唇を、熱狂的に持つて行つた。

「あたしのために泣いてゐる、あたしのために」

狂暴な肉感的な歡び——興奮は殆んどさういふものにまで高まつて行つた。

*

朝、八時の規定通りに、お京はそこの家から一度歸つて行つて、それから十時に、例の藥を持つて、再びその家にやつて來た。——それが少年との約束の時間だつた。

醫者は彼女の云ふ通りに直ぐ、その藥を呉れた。

『唯か餘つ程可愛がりすぎた人でもあるんだらう』かういふ町のかうした社會に馴れた醫者は、彼女の曇た白い頰を一寸輕くつついて笑ひながら、『併し二ケ月や三ケ月では、よく見なければ解らないよ。でも三ケ月位までなら、この藥で大丈夫だ。その中よく診察してやらう。——四ケ月になつたら手術だね』

最後の聲を、嚇かすやうな、おどけた調子で云つた。

お京は容易に求める品が手に入つたといふ事に、いそいそとして、その家にやつて來た。ところが、少年は歸つてしまつたと云つて、女中がお京に少年の殘して行つた手紙を渡した。

それには次のやうな事が書いてあつた。

『僕はあなたの昨夜の話にすつかり感動しました。女と云ふものは、かよわい、たよりないものだ。女が墮落するも墮落しないも男の心一つにある。——あなたのお話が、僕にはつきりそれを囁きました。僕はどんなことがあつても、責任を廻避すべきではありません。自分のした事は、自分で責任を負はなければいけません。僕は彼女と結婚しやうと思ひます。僕は彼女を愛するやうに努力します。——あなたの御深切を感謝します。僕のお頼みしたもの、僕の決心と共に不必要の品となりました。折角お頼みして置きながら、失禮ではありますが、あしからず』

それを讀んで、お京は呆然とした。とんでもない、取返のつかない事をしてしまつたやうな氣がした。——あの可憐な少年が、子供を抱いて、年上の妻から虐げられてゐる、さういふ姿が彼女の眼の前に浮んで來た。

『嘘吐き！』

何處が家か解らない少年を呼戻す術がないといふ事に、憂鬱になつて、彼女は藥の紙包を手に握りしめたまま、ぼんやりと彼女の家——朋輩連のゐる置屋の方へ歩きだした。（終）





喜劇

根管充塡（二幕）

長谷川如是閑

人物　出島豐　齒科醫

　　　房枝　出島の妻

　　　河井銀　漂泊の女

　　　源兵衛　家主

　　　お仙　源兵衛の妻

　　　山北　刑事

　　　其他

場所　關西のある小都會

第一場

貧弱な齒科醫の診療室。部屋の片隅に田舍の理髮店にあるやうな舊式な齒科用の椅子一つ、小卓子一つ、小椅子一つ、エンジン一臺などがあり、中央に

火鉢が置いてある。怪しげな口腔解剖圖がかゝつてゐる外何の裝飾もない。正面の襖は取り拂はれて、玄關の三疊の間に續き、その奥の玄關の土間まで見通しで、スリ硝子の表戸が閉つてゐる。右手は茶の間へ通ずる襖。

舞臺は空。正面のスリ硝子の表戸が開いて、源兵衞老人玄關の土間に現れる。

源兵衞　ご免…。誰れも居らんのかいな。川島さんは居やはらんか。奥さんは居やはらんのか。わしが來たんで逃やはつたか。二人とも逃げんで一人は出て來なはれ。どつちやでもえゝがな。ハテ全くの留守かいな。用心のわるいこつちや。なんぼ流行らん齒科者かて、ひる日中家をあけるといふ法があるかい。（上り込んで座敷をそろ〳〵して、茶の間に入つてすぐ出て來る。）居らんな。臺所の方にも居りやへん。（卓子の上を指でこすつて）こりやえらい塵や。字がかけよる。齒醫者かて醫者は醫者やないか。もちと衞生に注意せぬ事にやどもならんがな。客が來んかて道具位はあんじよして置くもんや。妻君も妻君ぢや。ハイカラのをなごはどもならん。自分の顏のほか掃除しよらん。（座敷の眞中に座つて火鉢をのぞき込んで）火鉢に火も埋めてあるぢやなし。座布團一つ出て居らん。尤も座布團はないのかもわからん。これでは家賃も入れん筈や。氣の毒やな。こつちやも氣の毒や。もう半歳になるが、家賃は一度入れたきりやないか。尤もわしの方ばかりぢやない、米屋も酒屋も。もうかけ賣りせんといふ。そやろ、借りたがしやうが金を拂ふことはせんのやから。……さてまだ戻つて來よらん。どこへ行きよつたか。のんきな人逹やな。煙草など呑みたらなつたがマッチがないのかいな。（立ち上つて茶の間へ入る。）

臺所の硝子戸の開く音。

源兵衞の聲　奥さん、何處へ行つてなはつた。家を明け放しのまゝで。

房枝の聲　まあ源兵衞さんでしたいな。どうもすみませんでしたこと。

源兵衛・房枝・茶の間から現はれる。

房枝　いんえね。實はうちの人が今朝お風呂に行つたきり歸らないのでね。近所を尋ねて廻つてゐましたの。

源兵衛　出島さんが迷子になつたんか。アッハハヽ。ぢきに歸つて來なはるやろ。

房枝　手拭とシャボンを下げて出て行つたきり歸つて來ないんですものね。何處をほつつき歩いてゐるのでせう。今もあなたの所でうかゞつたら、およりしなかつたんですつてね。ほんとうに、患者でも見へたら困つてしまふわ。

源兵衛　そりあ何たらいふあの將棋の相手の家へでもいつてゐるやなからうか。

房枝　いゝえあすこにも見へないの。

源兵衛　まあ案じることはない。何處へ行つたかて、大の男が家へ歸る道を忘れもしまい。時より、夜分など朝まで戻らんこともありますやろ。アッハハハ。

房枝　そんなことが出來るやうだと結構なんですけど、この頃はそれ所ですか、あなた。お米櫃のガタつきで毎何をちゞめてゐるんぢやありませんか。

源兵衛　實はこつちやもやつぱり米櫃のガタつきでな、餘儀なく度々催促するやうな譯やが。何でやろか、一月分でも二月分でも入れて貰へませんやろか。

房枝　ほんとうにお爺さんには相濟まないと思つてますのよ。でも此頃と來たらちつとも患者があらせんのでね、何うにもかうにも方法がつかないんですわ。

源兵衛　さうやらうが。わし共も、もう年をとつて稼ぎは出來ず、ちつとばかりの土地や家のあがりでくらしてゐるのやさかい、あんた方から廻つて來にや、こつちやも乾上るやないか。おつゝけ爺さん婆さんの乾物が出來るで、もの

や。

房枝　ほんとうに濟みませんわね。私共もこの土地に來てこんなことにならうとは夢にも思つてゐませんでしたわ。まあこちらの御厄介になつてゐたればこそ、今日までかうして居られんだと思ふと、何と御禮を申していいのやら、ほんとうにありがたいと思つて居りますのよ。

源兵衛　御禮なんかいふて貰はんかて、家賃さへ入れてくんなはればこつちやも助るのや。何せ川島さんも、こちらが郷里とはいひ條、小さい頃から皆で東京へ出られてしまつて、身内も一人だつてこちらには殘つて居らんやうな譯で、知らぬ土地も同様やと思ふと、何かにつけ面倒を見てあげん事には嘸お困りやろて思ふて居つたんやが、いつまで經つても同じやうなんでな、ちと考へていたゞかんければ、わし共の方もさう〳〵は續きやせん。どんなもんやろ、此月中に少し入るやうな見込はないかいな。

房枝　相憎の留守なんでね……

源兵衛　居つたかて、同じことやらう。アッハッハ。しかしまあ戻つて見へたらよう相談してや。此月中に少しは入れて貰へんかいふて居つたつてな。いつものことやが、こんどは眞劍になつて貰はにやかなわん。ぢや失禮しますわ。ようい ふてや、此月中に是非いふてたてな。

源兵衛が玄關に下りる途端に、硝子戸を開けて、脊廣の山北刑事現はれる。

山北　御免。これは源兵衛さん。今一寸あんたのところに寄つて來たのです。

源兵衛　何か用事やつたか。

山北　いや一寸こちらの奥さんに用事があるので、實は……

山北と源兵衛とは暫く呻き合ふ。源兵衛驚いた様子。

源兵衛　奥さん。この方は山北いふて、こゝの警察の方やが、少しあんたに用事がある相な。待つてやつて下され。ちやわしはまた後刻参りますわ。（去る）

房枝　何うぞお上り。

山北　では一寸（座敷に通つて座り、名刺を房枝の前へ置いて）私はかういふ者ですが、實はその、早速ですが、出島さんのことについて少し妙なことをお尋ねする次第で……

房枝　只今出島は留守でございますが……

山北　（手帳と鉛筆を手にしながら）えゝそれは承知して居ります。實はあなたに伺ひたいのです。少し變なお尋ねですが、しばらく拙へていたゞきます。えゝゝゝ、十日、さう七日の晩ですな、出島さんはその晩に何處へかお出かけになりはしませんでしたか。

房枝　十日？　十日て申しますと今日が十五日、十四、十三此前の土曜日になりますね、いんえ、前の土曜日には何處へも出かけません。

山北　確かに出られませんでしたか。お思ひ違ひぢやありませんね。

房枝　えゝ出島は大抵夜分に外出いたしますけれど、前の土曜日には、宅へ將棋のお友達が見へたので出ませんでした。……何かさういふことがあなたの方の問題にでもなつて居るのでございますか。

山北　えゝ一寸警察の方に必要がありますので……しかし七日の晩に、こちらの御主人に町でお目にかゝつたといふものがあるやうですか……

房枝　それは確かにその方の思ひ違ひです。あの晩こちらに見へた方にお聞になればおわかりになりませう。あの玄何院とか申しました裏町のお寺の和尚さんでございます、夜分遅くお歸りになりました。

山北　はゝあ、あの玄境院の住職ですか。それでは確かですな。成程。（書き留める。）ではなほ一つ、やはり少し妙なお尋ねですが、十二日の晩にですね。こちらから佐野屋、あの質屋ですな、あすこへ質物をうけにおいでになつたといふことですが、それは間違ひありますまいな。

房枝（赤くなつて）え、うちで參りました。

山北　それは何ですか、少し異なお尋ねですが、その財源……と申しませうか、……

房枝　金高でございますか。

山北　いや金高ではございません。つまりその、あなたの方の融通の方法……といふやうな問題で……

房枝（ムツとして）一體何の必要があつてさういふことをお尋ねになるのでございます。私共が、何か警察からこんなお調べをうけるやうな悪いことでもいたしたんでございますか。

山北　いや實はあなたに警察まで來ていたゞくのですが、警察の方の好意で、なるべく世間にパッとならぬやうに、私が出たやうな譯です。

房枝　御好意かも知りませんが、いきなり私共においでになつて、質がどうの財源がどうのつて、お調べになるのは、まるで私共が贓物買ひか何かのやうぢやございませんの。

山北　それは警察としては已むを得ないのです。實はこちらの御主人は窃盗の嫌疑で今朝警察にあげられたのです。

房枝（かつとなつて）何ですつて、出島が窃盗をしたんですつて！　あなたは氣が違つてゐるのぢやありませんか。

警察でなくて氣違ひ病院からぬけ出して來たおちやないんですか。（身を悚はして）出島が竊盜ですつて！　出島が、出島が泥棒をしたんですつて！　あんまりです。あんまりです。何うして出島がそんな眞似をしませう、出島は立派な紳士です。出島は立派な歯科醫です。出島は立派な學者です。出島は立派な才能と學問とをもつた堂々たる紳士です。いくら生活に困つたたつて泥棒なんかする必要はありません。出島が泥棒した！何といふ恐ろしい侮辱だらう。あゝ私は口惜しい。（身をふるわして泣く。）

山北　何うか落ちついて下さい。たゞ嫌疑です。それだけです。警察でも可なり秘密に穩便に取調べを進めてゐるのです。本來ならば、あなたも警察へ引張られる所なのです。

房枝　え、警察へでも何處へでも引張られて參ります。何が好意です、何が穩便です。堂々たる紳士を泥棒呼ばりして、それで人民保護の警察だなんて威張たつてダメです。善良な人民を泥棒呼ばりして、何が人民保護です。出島を返して下さい。すぐと返して下さい。

山北　嫌疑さへ晴れゝばすぐと返されるでせう。只今承つた所では、私一個の考としては嫌疑はすぐ晴れ相に思はれます。では失禮します。（立ち上つて、玄關の方へ行く。）

房枝（山北を追ひかけて）私も一緒に連れて行つて下さい。私警察へ行つて出島を取り戻して來ます。出島は一刻でもそんな侮辱を忍ぶことは出來ない人間です。出島はそんな侮辱をうければ死んでしまひます。出島は死にます。（泣く）

山北（靴をはきながら、機械的に）いやお主人は間違ひなくすぐ戻られるでせう。たゞの嫌疑です。それも警察の好意で、出來るだけ秘密にして居ます。もしあなたまで召喚でもされたら、今頃はもう町中の評判になつてゐるでせう。

房枝　そんなこと構ひません、私は行きます、出島を取戻しに行きます。私は行きます。

硝子戸をあけて源兵衛現はれる。

源兵衛　奥さん、何うしたんや。まあ靜かにしたはれ。わしも今駐在所で一寸聞いたんやが、まあゆつくり相談するさかい。警察へなん行きなさることだやめにしなはれ。

房枝（泣きながら）川島は死にます。川島が死ねば私だつて生きてはゐません。警察は罪もない人間を二人殺してしまひます。警察は人殺しです。人殺しです。

源兵衛　どもならん。奥さん、靜かにしたはらんか。まあこつちやへ來なはれ。（房枝を介抱して座敷に連れて來ながら）山北さん。あんた用事がすんだら早う去になはれ。奥さんはこつちが引うけるさかいに。

山北去る。

源兵衛　そないに昂奮しちやどもならん。今あんた山北にどないに云やはつたか知らんが　まんじよ云やはつたんなら、山北が警察へ歸つて報告さへすれば、川島さんはすぐ返されますやろ。何の事ありやへん。

房枝　侮辱です、恐ろしい侮辱です。警察では、私達をえたいの知れない風來人か何かのやうに思つてゐるのでせう。私達は立派な教養をもつた人間です。田舍者の郡長や署長なんか、教養の點に於ては川島の足下にも追ひつく人間ぢやありません。私達はたゞ貧乏なだけです。けど貧乏が何です。今日は人間が立派で善良であればあるほど貧乏しなければならない時代です。私達ほどの教育があり學問があつて、さうして惡人だつたら、誰れでも大金持になれます。私達が立派な人間でなかつたら何で貧乏なんかしてゐるものですか。川島が泥棒なんか出來る惡人だつたら、とうに局長か重役か議員になつてゐます。こんな田舍にくすぶつて齒科醫なんてしてゐるもんですか。警察はそんな大頭には手が出せない癖に、貧乏な人民をつかまへて泥棒呼ばりをするんです。

源兵衛　警察も。この頃は、議員たら局長たらいふ連中を段々縛りよる。警察も中々やりよりますわい。出島さんの一件は、弘法も筆の誤りで、警察だつて間違ふ時にはやつぱり間違うやらう。出島さんた警察かとにかくどつちやかゞ間違つたんや。

房枝　何ですつて、源兵衛さんまでそんなこと仰つしやるの?出島が何を間違つたんです。出島がいつ泥棒をするやうな間違ひを仕出かしました。あんたまで警察と一緒になつて、そんなこと仰つしやるなんてあんまりだわ。(泣く)

源兵衛　奥さん、何をいやはるのや。わしの云ひ方がわるかつたから許してんや。筆の誤りやのうて舌の誤りや。警察と云ふ奴は、何か事があると、ぢきに前科のある者に目をつけるでな。そいで出島さんも一寸睨らまれなさつたんやろ。

房枝　前科のある者?出島に前科でもあるつて仰つしやるのですか。

源兵衛　アッ!あんたそれを知んなはらんのか。

房枝　出島に前科があるのですつて?

源兵衛　そないにいふてゐました。違ひまつか?

房枝　出島が前科者?!(急にヒステリックに)嘘です。嘘です。そんなこと警察のでたらめです。出島は立派な教養のある紳士です。出島が前科者!何といふ恐ろしい誣告でせう。嘘です、そんな事。嘘です。嘘です。嘘です。

源兵衛　それやあんたのいふ通り出島さんは前科者でないかもわからんが、しかし、學者や紳士にも、前科持ちは澤山おますやらう。

房枝　誰れが出島を前科者だなんて云つたんです。そんな失禮なことを誰がいひました。

源兵衛　わしも、ほんいま駐在所で聞いたばつかで、嘘か本間か知らんが、警察では出島さんは、詐欺や横領で前科

三犯たらいふてゐる相な。あんた全く出島さんから何も聞いちや居らんのか？

房枝　詐欺ですつて？横領ですつて？前科三犯ですつて？人を馬鹿にするにも程があります。出島にそんな事があつたら私は生きちやゐません。嘘です。嘘です。私命にかけて保證します。夫れは嘘です！

源右衛　でも警察の帳面にさう載つてゐるいふから困つたもんや。嘘なら、どないかして、それを取消して貰はんことにや、これからも度々、迷惑をかけられる。

房枝（考へ込みながら、機械的に）嘘です、嘘です。

源兵衛（機械的に）嘘だすやろ。嘘だすやろ。

房枝（何か思ひ當つたやうに、宙を見ながら、機械的に、）嘘です。嘘です。

源兵衛（機械的に）嘘だすやら、嘘だすやろ。

房枝急に顔を掩ふて泣き出す。

源兵衛　そないに泣きやはつてもどもならんが。忘れとつた、わしがいま駐在所できいたことわけを話さにやならんかつた。まあ聞きなはれ。十日の晩に、あの表町の、上總屋な、あこの離れに泥棒が入つて隠居の手文庫を盗み出しよつたが、その中に三百兩たら金子が入つてゐた相な。警察では、出島さんが昨日たら一昨日たら、佐野屋からいかいこと貰ろけをしなはつたといふことをきゝ込んで、疑をかけたんや相な。そこはそれ前科三犯といふことがあるよつて目星をつけたのやらうが、それは嘘かいな。あんた全く出島さんから何も聞いちや居なはらんのかいな。して見ると全く嘘かいな。警察がそないにあわてて臭つてはどもならがな。

房枝　私どうしませう。（急に痙攣的に泣き出す。）

源兵衛　（驚いて）どうしなはつた？

房枝　（泣きながら）私いやです。私いやです。

源兵衛　何んがいやなんや？

房枝　前科者なんか私いやです。

源兵衛　前科者がいや？だから出島さんが前科者でなけにやよいやないか。

房枝　前科者なんかいやです、前科者なんかいやです。

源兵衛　出島さんが前科者やといふのかいな？

房枝　（痙攣的に）前科者なんかいやです。前科者なんかいやです。

源兵衛（獨語）はゝアやつぱり前科者やな。（間）けどあんた、現在生眞面目に働いてさへをりや、前科者も何ンもありやせんがな。みんな同じ人間やないか。もう何にも惡い事せん人間を、前科者や前科者やいふのは、よくないこつちや。出島さんが何や知らんけど、人のことを無暗に前科者前科者いひなはんな。警察ぢやあるまいし。

房枝　それならなぜ前科者といふことを妻にまで隱すのです。何故隱してゐたのです。

源兵衛・わしは何にも知らんがな。誰が隱したといひなはるのや。

房枝　出島が隱してゐたといふのです。何故自分の妻にまでそれを隱してゐなければならないのです。

源兵衛　さあ、出島さんがあんたにそれを隱してゐたにしろ、それや、わしの知つたことではないが。よしんば、隱して居やはつたつてよいやないか。惡い云ふたかて今更らしやうもない、

房枝　何がしやうもないのです。惡いことはいつまで經つても良い事に變りやしません。私は今の今まで出島は少しも

瑕瑾のない善良な紳士だと信じてゐたのです。出島は自分を私にさう信じさせるやうに仕向けてゐたのです、それが虚偽でなくて何です。虚偽です。瞞着です。ペテンです。私がこんな、皮膚病にかゝつた犬見たいな人間ばかりしか居ない田舎に引込むことを承認したのも、たゞ一個の出島といふ人間を信頼してゐたからです。これからも私はその出島を信頼しなければならないのです。過去の問題ではありません、現在の問題です、将來の問題です。その出島が現に私を欺いてゐるのです。これからも欺いて行かうとしたのです。何が『今更しやうもない』のです。『もう仕方がない』なんて事は、あなた見たいにかぼちやを油紙につゝんだやうな人間になつてしまつてからいふことです。私はまだ生きてゐる人間です。生きてゐる人間は『諦める』なんて生氣地のない氣持になることは出來ません。私は生きてゐます。

源兵衛　誰れもあんたを死んでゐるとはいやせんがな。わしにはあんたのいふことはようわからんが、つまり要領はどないになるのや？

房枝　だから私はもうあんな卑劣な男に追従して行く必要を感じないのです。

源兵衛　卑劣な男とは誰れのことや？

房枝　出島のことです。彼は私を欺いたのです。けれども私は彼れを欺くことは出來ません。私が私の心の偽みを隠して彼れに此の上追従して行けば、つまり彼を欺くことになるのです。私はすぐと東京へ歸ります。

源兵衛　それはあんた少しばかり間違つちやをらんか。

房枝　私が何を間違つてゐます。間違つてゐるのは彼です。彼れは……

源兵衛　まあ待ちなされ。彼れが……いや出島さんがあんたに前科のあることを隠してゐたのは悪いかも知らんが、然し、あんたも苟も一旦夫とかしづいたものに、前科があるからいふて、すぐと去んでしまうといふのは不人情やない

かいな。あかの他人同士かて、これを知らいで長い間美くしうつき合つて来た以上は、それがわかつたかてすぐと、他らもう知らぬといふ譯には行くまい。そこが人情といふものや。まして夫婦の間であつて見れば、どつちやかにさういふことがあつてそれがわかつたいふたからて、すぐとおさらばときめるといふ法がありやすかい。まして妻たるものは常住、夫の幸福をはからにやならん人間やないか。夫がさういふ不幸な人であつたらなほの事親切にかしづいて夫を幸福にするのが法でもあり、又人情といふものや。そやないか。

房枝　妻は夫の奴隷ではありません。妻を欺いた夫に對して、妻は何うして貞淑を守う必要があるのです。

源兵衛　必要不必要いふことやない、それが人情やないかといふのや。石川五衛門の女房かて、見なはれ……

房枝　そんな、女が男の奴隷だつた時代のことは問題になりません。もしも男子が女子に、あなたのいふやうなことを要求するなら、男子自から女子に對して同様の態度を示さねばなりません。私は、川島が全くさういふ態度を示して ゐる立派な男だと信じてゐたのです。然るに彼れは私を裏切りました。彼れは、自分といふものを私に隠蔽して置きながら、私には毛筋程も隠させまいとしたのです。何といふエゴイスティックの男でせう。私はさういふ男に反抗することを私の主義としてゐる女です。それは私の氣儘な感情ではありません、私のプリンシプルです。彼れと此上一緒に居れば、私は自分で自分の主義を踏みにじつてゐることになります。私は戰はなければなりません。卑劣な彼れなどと戰ふのではありません、自分自身の弱い心と戰はなければならないのです。私は戰ひます。

源兵衛　そないな演説をしなはつても、わしのやうな老人には皆目わかりまへんがな。六づかしいことは知らんが、ともかくも川島さんとあんたとは何年か夫婦で居やはつたに違ひないやろ、そんなら夫婦の情合といふものがなけにやならぬ筈や。川島さんに前科があつたいふて、よしんば、これから先き川島さんが人殺しをしやはつたかて、そこには

妻の情合といふもので、あんたはさういふ夫が倍增しかわいくならにやならん筈やがな。

房枝　僞はられたものに追從するなんてのは奴隷の心理です。今日は女だからといつて、人情なんかよりも勇氣を必要とする時代です。人情なんかに溺れてゐれば、いつまでも奴隷でゐなければなりません。

源兵衛　よくはわからんが、わしにはあんたのいふことが腑に落ちん。

房枝　わたしも、あなたのいふことが氣に入りません。

源兵衛　わしのいふことなど氣に入らんで結構やが、出島さんのことはもうちと落ちついて考へて見なはれ。いつまで言ひあつてゐたかて埒あかん。わしはこれから警察へ行つて様子を見てくるさかい、その間に氣を落ちつけてよう考へなはれ。おつゝけ出島さんが戻つて見へた時に、あんたがそないなことといふてむづかつたら、出島さんも默つて居やはるまいし、それこそ問題や。そんなことよりも、家賃を入れる相談でもしなはれ、ほんまや。（去る）

房枝　もう決心した。あゝ私はすつかり氣が輕くなつた。さつきは何うしてあんな男のためにあんなに泣いたのだらう。あんな男のために、私の眞珠のやうな貴い涙を流したのが口惜しい。嘘つき！　卑怯もの！

幕

第二場

同じ場所、前幕より數時間後。

出島、着流しで、手拭とシャボン箱を手にして玄關に現はれる。源兵衛續いて現はれる。二人座敷に來る。

出島　やれ〳〵漸く無罪放免か、馬鹿〳〵しい！

源兵衛　でもまあほんまの泥棒が早うつかまつてよかつた。あやつが捕まらなんだら、あんたはともかくも未決まで

は行かにやならんかつたかも知れやせん。けんのんな話や。

出島（茶の間をのぞいて）おい歸つたよ。何うだ此のちらかしやうは、箪笥も何もあけつ放しだ。おい房枝さん！

源兵衛　居なはらんのかよ。おゝこりや何うぢや、えらひ取りちらしやうや。空巣狙ひでも入りよつたのやないか。

出島（卓子の上の紙片を取りあげる。默讀）フム。

源兵衛　何やそれは？

出島　讀んで見て下さい、（紙片を源兵衛に渡す。）

源兵衛　何や？（眼鏡を取り出してかける）奥さんの手やないか。えゝと『さやうなら』か。何や『さやうなら』た。えゝ『私は歸ります。私を尋ねないで下さい。私は私の心の傷を癒やさなければなりません。私は生きなければなりません。あなたは、あなたの胸の奥に、私より大事にひめてゐるあなたの前科を抱いて、何うぞあなたの生き得られるやうに生きて下さい。』出島さん　こりや一體何の事や。けつたいなこと書いたもんやな。まだ何かいふてある『ではさようなら。もう一度さやうなら、永久に。』畜生！　これ出島さん　あの女、あんたの妻君やけど、わしてんからすかんのや。亭主に前科があることわかつたいふて、すぐ『さやうなら』とは何や！『永久に』だとぬかしよる！　わりや人間かいな！

出島（獨語のやうに）それを隱さなければお前は決して俺の所へ來やしない。それがわかると同時に『さやうなら』をいふお前だから、俺は隱したのだ。

源兵衛　出島さん、見なはれ、（茶の間をさして）空巣狙ひはあんたの妻君や。前の汽車で去によつたに違ひない。わ

「じもぬかつたおまはさいせんもな。あんたのことを嘘つきや、卑法ものやつて、蔭味噌にいふさかい。そりやいかん、あんたが間違つてゐる。人情といふものはそないなもんやない。石川五右衛門の女房かてそないにはいはなんだ、まあ落ついて考へなはれつて、わしもこん〳〵いふたんやがな。とう〳〵逃げよつた。こりや警察へ行かずにあんたの戻らはるまでこゝに居つたらよかつたんや。あんたには濟まんが、全くわしの手ぬかりや。

川島　いや飛んでもない。あなたは私の家内の番人でも何でもないのだから、少しもあなたの手ぬかりのことはありません。何にしても、今度は飛んだ御心配をかけて全く恐縮です　お禮の申やうもありません。

源兵衛　いや禮などいふて貰ふことはいらん。あんたこそえらい災難や。警察へは引張られる、妻君には逃げられる。こりやどないしたものや。すぐ追つかけるか、心當りに電報でもうつか。どないにかせにやなるまい。警察へいふて捕らまへて貰うか……

川島　いや〳〵放つて置きませう。私の身體に一旦ついたシミは拭いても洗つてももう消へやしません。しかも隨分念入りに汚れたんですからネ。アツハツハ。

源兵衛　何をいひなはる。あんたがそないなことといひよつたらどもならん。前科があらうが何ンがあらうが、今は立派な齒科醫やないか。それをとやかういふなら、前科者はどないにしたらいゝのや、やつばり悪いことをして喰て行かにやならんやないか。

川島　さうです。悔ひ改めの眞似をして見ても、第一自分の女房からが承知しないのだからダメなことです。あゝあ、今日は警察と女から辛い教訓を與へられた。源兵衛さん。これでもう私はこの町に居つたつて誰れ一人相手にしてくれるものはありません。患者などは無論ある筈はない。蟲齒に喰ひ殺ろされたつて私の所へは來やしません。〈椅子に

よつて）然し、これで全く重荷が下りた。今日からは、隠したり氣取つたりする氣苦勞がなくなつたんですからね。今朝も刑事に連れられて行く途中で、もう何處かの小僧が『泥棒歯醫者』なんてからかつて居ましたよ。立派な人間ばかりゐる世の中では、悪いことをしたものは、徹底的に追求されます。つまりそんな人間は生かして置かん方がいゝのだからね。（立ち上つて歩るき廻りつゝ）然し、こつちの身になると、生きて行かねばならない。成る程僕は詐欺を働いた、横領をやつた。所が僕はちつとも得はしてゐやしない、臭い飯を喰はされただけが儲け物だつた。何かたいした儲けをしたとでも思はれたらそれこそ間尺に合はない。それで大儲けをしてゐるものもあるだらう。然しそれは僕ぢやない。そんな連中は牢屋へ入らないで、牢屋に人を入れてゐる。いはゞ僕の前科は清算済みだ。差引勘定ゼロになつてしまつてゐる。ゼロどころかマイナスが出て、贓品でもない女にまで逃げられてしまつた。（間）一體彼等は僕を何うしやうといふのだ。僕の方では彼等をどうすることも出來んのだ。彼等は、僕の將棋の駒だけは前に出られないといふ規則を作つて置いて、さうして、僕に勝負しろといふのだ。僕等は逆立したつて勝てる筈はない。それでも僕等は勝たなきやならないんだ。その時は僕等は何うすればいゝのだ。一體何うすれば僕等も彼等のやうに勝つことが出來るのだ。誰れかそれが云へるなら云つて見ろ！

源兵衛　君方はよう演説をする夫婦やな。

出島　ねへ源兵衛さん。上總屋は、隱居の臍くり位盗まれたつて、象が蚊に止まられたやうなものだが、盗んだ方では、それで人間一人餓え死を助からうといふんですよ。

源兵衛　まあそない理窟かいな。それはよいが、あんたまあ着物でも着更へて、いつものやうに歯醫者らしうなつたらどうや。妻君は居らんでも、患者は來る。

川島　何が案ずるもんですか。これに先達時計を質に置いて受け出した洋服も着物も、皆質屋に逆戻りしてゐますよ。

源兵衛　あんたの洋服まで空巣狙ひが持ていんだが。いよ／＼家賃は貰へんことになつた。

川島　源兵衛さんには全くお氣の毒です。わたしももうこの土地に居る必要もありませんから、なけなしの道具を皆賣り拂つて少しでも家賃を入れて居きます。

源兵衛　いや、わしも家賃は欲しいが、あんたの災難を見てゐて『家賃をくれ』とも云へやへんがな。わしも災難やが、わしの災難は高が知れとる。空巣狙ひも家はよう持つちや行かん。

川島　女といふ空巣狙ひは、自分で自分を持つて逃げます。

源兵衛　アッハッハ、そないなもんかい。女といふ奴は、足腰が利かなくたらにや本心に立ち歸りよらん、『七人の子はなすとも女に心を許すな』といふてな、女は魔ものや。わしの婆さんだつて相應魔ものだつたんやすぜ。そないなことはどうでもよいが、あんた夕飯をどないする？今晩は、さしむきわしのところからもて來ることにしやうか。何せ一軒の家に魔物が一匹だけは居らんとどもならん。とにかくわし家へ歸つて婆さんに相談するわ。

川島　家賃も拂はない上に、そんなお世話にまでなつて全く濟みません。

源兵衛　家賃が拂へるやうなあんたならわしは世話など燒きやせん。まあ短氣を起さんとな、よう思案しなはれ。この土地かてさう見果てたものでもないやろ。（去る。）

川島　あの爺さんでも居なかつた日には惨じめ見るとこだ。あゝあ。いやになつた。突つ立つてゐるのも馬鹿／＼しい氣がする。（大の字に寢る。）息をしてゐると損をしてゐるやうな氣がすら。（起き上つて）寢てゐると、生きてゐちやいけないやうな氣がする。けんのん／＼、（立ち上つて歩るき廻る。）フン『ではさようなら』か、『もう一度さようなら』

か、「永久に」だつて?! 人を馬鹿にしてゐやがら。尤も馬鹿にされる値打がないでもないがね。こつちら多少向ふを馬鹿にしてゐなかつた譯でもないんだからな。最初はさうでもなかつたんだが、段々そんな風になつた。お互に、かも知れない。「つまり兩方共地金が出たんだ。てんから地金で行けばいゝんだ。それを兩方共空想の男と女を捉へてゐたんだ。だがてんから地金で行つたら二人は他人だ。影法師が今消へてなくなつたので、二人は他人に返つたんだ。一體こんな面倒臭いことを、俺達は何度繰返へなければならないのだ。馬鹿馬鹿しい。もうやめだ。全く止めだ。!

硝子戸を開けてお銀現はれる。

お銀（ハンケチで片頰を押へながら）御免下ださい。

出島　ハイ、何の御用ですか。

お銀　あの、齒の御療治をしていたゞきたいんでございますが……

出島　齒の療治?

お銀　あのこちらは歯醫者さんでおいでなんぢやございませんか?

出島　えゝさうです……今一寸誰れも居らんので……

お銀　あの先生はお留守で?

出島　いや先生は僕ですが、その、助手が居らんので……然し治療はします。上つて此椅子にかけて下さい。すぐやります、(茶の間に入つて、白い仕事服を着て出て來る。)

お銀　昨晩から急に痛み出しまして、居ても立つても居られないやうに痛みつゞけでございます。

出島（口內を檢しながら）何すぐ癒ります。今すぐ神經をとることも出來ますが、藥を入れて一二日後にしてもいゝ

です。

お銀　なるべく早く痛の止まるやゝに願ひます。

出島　では局部麻酔をやつて神経をとつてしまひませう。(注射をしたり。エンジンを踏んだり。治療に忙しい。)

子供達の聲(玄關の外で)出島の齒醫者！　貧乏齒醫者！　ドロボー齒醫者！

お銀(飛び上つて)あ痛た(口にハンケチをあてゝ)あらこんなに血が出ましたわ。

出島　今一寸機械が外づれたんで……血止をつければすぐ止まります。どうかおかけ。(治療。)

出島　すみました。神經をとつてしまつたからもう大丈夫です。あとは一日二日してセメンで埋めればよろしい。

お銀(立ち上つて)どうもありがたうござんした。ではあの又明日來ることに……

出島　私共では一回々々治療代をいたゞくことになつて居ります……

お銀　あらさうなんで……あのおいくら……

出島　二圓いたゞきます。局部麻酔をしたので少し高くなつてゐます。

お銀(もぢ〳〵して)誠にすみませんけど、お鳥目が少し足りませんので、明日お一緒にお願ひいたすわけに參りませんでせうか？

出島　えゝよろしいです。(紙と鉛筆をもつて)一寸御名前と年齢とお所を伺ひます。お姓名は？

お銀　あのや……やま、山岸……

出島　山岸、ハア、お名前は？

お銀　し、しん……

出島　ぎんですか。

お銀　いへえ、しん。

出島　しゆんですか。

お銀　えゝしゆんです。

出島　しゆん。お歳は？

お銀　二十三。

出島　二十三。お所は？

お銀　所はあの、何の、あの、表ちようでございます。

出島　表まちですか。何丁目？

お銀　三丁目……

出島　表町は二丁目しかありませんが……

お銀　さう〳〵私、二丁目でございました。

出島　表町二丁目。番地は？

お銀　二十三番地。

出島　二十三番地？さうするとあなたあの薬屋においでなんですか。旭堂に？

お銀　え、その旭堂に居るんでございます。

出島　あゝさうでしたか。何うやら東京の方のやうだか、旭堂の御身うちでゞも……？

お銀　えゝ東京でございますが、一寸あすこに厄介になつて……

出島　さうでしたか。いやあすこは私共でも始終薬を買つてゐる店で……いや何うもお恥しい話ですが、大分支拂もたまつてゐます。アッハッハ。（間）ぢやいつそあなたに御願ひしませうか。實にあの店から十五日に、つまり今日ですね、勘定をとりに來る事になつてゐるのですが、お歸りになつたら一つ、今日は御覧の通り取り込んでゐて都合がわるいから此晦日にしていただきたいといふことを仰つて下さいませんか。實際變なお頼みをしてすみませんが、お互に手數が省けますから。

硝子戸をあけて、旭堂の半天を着た若者現はれる。

旭堂　今日は。

出島　おゝ噂をすれば陰だ。今日はだめだよ君、實は少し取り込みがあるんでね。それで今、（女に）あなた何とか仰しいましたね、さう山岸さん、（旭堂へ）この山岸さんに……君の所に居られる御婦人だ……その傳言を御頼みしてゐた所なんだ。つまり此三十日にして貰ひたいつてね。

旭堂お銀を見て怪訝な顔をする。電燈がつく。お銀顔をそ向ける。

出島　この御婦人だ、君知つてゐるだらう。

旭堂　いんえ。

出島　何、知らん？

お銀　あの、實はこれから參ります所なんで……

出島　お銀をジロ〳〵見て、（諾く。）あゝさうでしたか。（若者へ）いやこれから行かれる所なんだ。君のとこの主人

公のお身内でね。まあいゝや、とにかく此の御婦人にも話したんだが、晦日にしてくれ給へ。

旭堂　どうも先生は困らせるな。私店へ歸つていつも叱られるんですよ。

出島　アツハハハ。それは氣の毒だな。然し今日は、此の御婦人が行つてよくお話をするからといつたら大丈夫叱られないよ。叱られたつて、君の叱られるのは、僕はいくらでも我慢する。

旭堂　アツハハハ。先生に逢つちや叶はない。ほんまに今日はダメなんですか。

出島　ほんまにダメだ。歸つたり〳〵。又將棋で敗かしに行くつて主人公に云つてくれたまへ。

旭堂　晦日にも屹度ダメだらうな。

出島　君は察しがいゝ。將來えらいひものになる。

旭堂　あほらしい！　左樣なら。(歸る)

出島　(小椅子にかけて)はゝあ、あなたも東京ですか。この邊では東京の人が少いので懐しいです。

お銀　ではまた明日參ります(お辭儀をして行きかける。)

出島　一寸お待ち……。これから旭堂へ行かれるのですね。當分あすこにおいでといふ譯ですか。

お銀　えゝ……

出島　あなたは旭堂の妻君の御身內なんですか、あの先逹なくなつた妻君の？

お銀　えゝ……

出島　妻君も氣の毒なことをしましたな。あなたは何に當たられるのですか。

お銀　あの[illegible]……姪でございます。

出島　ハヽア、さうですか。……ではさやうなら。

お銀お辭儀をして行きかける。

出島　アッハッハッハ……。

お銀びつくりして立ち止る。

出島　とう／＼化けの皮を現はしたね。君、旭堂の妻君は亡くなりやせんよ。ぴん／＼してゐるぜ、可哀相に。さうして君よりもずつと若くて、向ふが妹の筈だ。

お銀（一寸どぎまぎしたが、すぐと立ち直つて、）ホツホツホ、とう／＼ばれちやつた。

出島　ウン、中々いゝ度胸だ。（間）一體君は何うした女なんだ。どうして僕のやうな貧乏醫者を踏み倒さうとしたのかね。

お銀　でもわたしこれで文なしたのですもの。

出島　成る程。（間）何うして文なしなんかになつたのかね。さうして何處から來たのかね。これから何處へ行かうといふのかね。

お銀　そんなに一時に聞かれたつて返事が出來ないぢやありませんか。

出島　參つた。ぢや先づ、何處から來たのかね。

お銀　刑務所。

出島「刑務所」なんて、生意氣な云ひ方をするな。で何處へ行くの？

お銀　刑務所。

出島　こいつはどうも。で刑務所行きの原因は何だつたね。

お銀　大いて解つてゐるぢやないの。

出島　どうもこれはヘッポコ歯醫者の挺には合はんわい。でそれは大てい解つてゐなくもないが、どの位居た？

お銀　三月と二年と二度。

出島　振つてゐるな。解つてゐる原因にしては少し長過ぎるぢやないか。

お銀　（人差指で鍵をこしらいて見せて）二度目はこれも手傳つたんでね。

出島　益痛快だね。何うしてね。生れつきかい？

お銀　まさか！お客のを一寸失敬しちやたの。でもつまらなかつたわ、ちとも使はないうちにこれなんですもの、（兩手を後に廻して見せる。）

出島　何うだか。然し君の話はてきぱきしてゐて氣持がいゝ。ちとも嘘がないといふ氣がする。がそれだけ居たらちつとは工錢位あつたらうに。

お銀　それはちつとばかり有りましたけど、何しろどこへ行つても前科者で構つてくれず、隠して行つても、知れればすぐお拂箱ですもの。とう〳〵すてつん〳〵になつてしまつて、こんな地獄の一丁目見たいな川合へころげ込んだのですけど、やつぱりこゝも日本ですわ。

出島　『日本です』はよかつたね。ぢやシンガポールへでも行くか。

お銀　それに如才があるもんですか。

出島　ぢやもう出かけたといふのか。これは何うも。流石の我輩も白旗を揭げる。（立ち上つて）君、本名は何とい

ふのかね。僕を信じて働かして貰へんかね。

お銀　大層六かしいのね、なんでもないわ、河井銀。

川島　河井銀。お銀さんかね。僕は川島豊といふのだ。でゐて極端の貧乏なのだ。（間）然し、文なしで、相當の身内でないとすると、實際の話、これから何處へ行く？

お銀　足の向いた方。

川島　今までは何處で泊つてゐた？

お銀　桂庵だの安宿だの。文なしになつたのでたつた今追ひ出されのほや〳〵よ。

川島　今夜は何處へ寝る？

お銀　こゝへ寝ちやいけない？

川島　さう。萬更らいかんこともない。

お銀　あなた獨り者ぢやない？

川島　僕もたつた今一人者になりたてのほや〳〵だ。

お銀　奥さんがあるのね。痴話喧嘩でせう。

川島　いやもう少し根底はあるが……たつた今逃げられたのだ。

お銀　逃げられたの？何うしたの？

川島　僕が前科者だといふことを知つたといふのでね。

お銀（ムッとして）あなたが前科者？人を馬鹿にしてゐるよ。何が面白くつて人を玩弄物にするんだい。どいつもこ

いつもこつちをけだ物か玩弄物だと思つてやがら。人間扱ひにする奴は一人もありやしない。勝手にしろい!。(行きかける)

出島　待ち給へ。一寸これを見てくれ給へ。(紙片を渡さうとする。)

お銀(一寸見て)何ですこんな陳芬漢芬。見たつてわかるもんか。

出島　僕の嬶……ぢやないつひさつきまで嬶だつた女の置手紙だ。『お前は前科者だといふことを知つたから、もう永久にさやうならだ』と書いてあるのだ。

お銀　ぢやあなたの前科者といふのはやつぱりほんとうの話なの?

出島　無論さ。君が僕にほんとうのことを云つてゐるのに、僕が何うして君に嘘がいへる。

お銀　ほんとうだつたの?　ぢや私すまなかつたわね。今私何か大變わるい事いつちやつたわ。お免なさい。

出島　あやまることがあるもんか。で此手紙にある通り、僕の嬶はたつた今、僕が前科者といふことを知つて永久にさやうならをきめたのだ。

お銀　ずいぶん高慢ちきの奥さんね。

出島　高慢ちき?

お銀　でも自分だつていつなん時前科者にならないとは限らないじやないの、人間だもの。

出島　(眞面目に)ウム……。

お銀　でもあなたほんとうにお氣の毒ね。どうにかして捻りが戻せないの?

出島　全くダメだ。それに僕等の嬶としては適任の女じやない。何しろ、一日物の喰へない日でもあると、もうすぐ

死んでしまうやうな騒ぎをする女なんだからね。高慢なことはいふが、やつぱり男に放り出されると生きて行かれないといふ女の仲間に過ぎないのだ。僕も、居なくなつて肩が輕くなつた處だ。

お銀　ぢやあなた今日から一人ぼつちね。ぢや私こゝへ泊つてもいゝぢやないの？

出島　それはいゝさ、然し實はもう全く喰う道がなくなつてしまつたのだ。食ふ道がなくなつたならいゝが、食ふ物がなくなつた。夜逃げをする兵糧さへなくなつてしまつた。といつてこゝにも居られないから、こゝらにある物を屑屋へ賣つてすぐにも立ち退かうとしてゐる所なのだ。

お銀　私も一緒に連れて逃げて頂戴な。精々邪魔にならないやうにするわ。

出島　何しろ自分の身體一つを持ち扱つてゐるのだからね。さうかといつて明日から泥棒稼業をする氣になるといふ程悟りも開けてゐないしな。尤も君だつて同斷だが……

お銀　さうね。そんな所へ餘計な荒がくツついちやなほお氣の毒ね。（間）けど私……何だかこのまゝお別れするのがいやなやうな氣がして來たわ。

出島　僕もそんな氣がする。

お銀　でも私行きますわ。いまの御療治代はお金が出來るまでお借りします。さやうなら。

出島　まあ待つてくれ給へ。さう急いで行く所もないのぢやないか。

お銀　でも私、長くお邪魔してゐると、なほのこと行くのがいやになり相だわ。どこへも行けなくならないうちに出懸けなきや。

出島　行けなくなつたら行かないまでのことさ。（間）さつきほじくつた君の齒の穴も塡めなければならないが、僕の

この胸に出來た眞空も充たなければならないのだ。(いきなりお銀の兩手を取つてぐいと引き寄せ)お銀さん！

硝子戸が開いて、源兵衛、お仙、玄關に食事の仕度を持ち込む。出島、お銀離れる。

源兵衛　夕飯をこしらへて來た。無罪放免の祝ひに、こつちやで一杯やらうと思つて、婆さんに來て貰うた。あんたも、氣晴しに一杯やつて景氣をつけなはれ。

お仙　あんたさんも飛んだことで、重ね〳〵の御災難やつて、うちもえらうお氣の毒やいふてゐますのや。

二人はお銀を見つけて怪訝な顏をする。

出島　それはどうも重ね〳〵有りがたう。ところで、お爺さんにもお婆さんにも喜んでいたゞかなければならないことがあるのです。此の婦人ですがね。今偶然療治に來られて。いろ〳〵話した結果　私に同情してくれて、これから貧乏生活の手傳をしてくれるといふのです。

源兵衛　それは奇特な方もあつたもんや。同じをなごでも、かた〳〵で逃出すものがあるかと思ふと　かた〳〵で助けに來るものがある。世の中によう出來たもんや。これはお婦人、わしは源兵衛いふてな出島さんの家主だす。まおあんたも袖すり合ふも他生の緣や　何分よろしく願ひます。

出島　源兵衛さん　袖すり合ふどころぢやない、實はもう結婚の約束もしてしまつたのです。

お銀　(驚いて)あれあんな……

出島　(お銀に合圖して)さうなんです。ねお銀さん。

源兵衛　それはちと早や過ぎる。君方若い者はそれでいかんのや。結婚といへば一生の大禮やおま　へんか。出島さん、あんた生も煉りもないことを何度でもやんなはる。嫁とるのを餅でも釣る氣でゐなはる。そやさかいさいぜんのや

うな事にもなるのや。

出島　づいぶん長く考へてゐたのです。たゞ　その相手に今ぶつかつたといふだけです。まあ一つ承認して下さい。

源兵衛　何もわしが承認するせんといふわけもないが、もちと愼重の手續を踏んでやんなはるがよいやないか。

出島　いくらでも愼重の手續をふみます。何うするのですか。

源兵衛　何うするいふて、先づ媒酌人といふものがなけにやならん……

出島　それは丁度あなた方に御願ひしやうと思つてゐたのです。

源兵衛　まあ聽きなされ。さうして黃道吉日を撰んで三々九度の盃をあげる……

出島　ではそれを早速御願ひします。重ね〲御厄介ですが、源兵衛さん、御面倒序に一つそれをたつた今片付けていたゞきたいのです。

源兵衛　序に婚禮を片づけるといふ法がありますかい。第一、今が今いふて出來ることではない。

出島　今出來なければ、私共はこれから何處かへ行つて二人で心中してしまひます。

源兵衛　まあ待ちなはれ。緣儀でもない。そないな事、戲談にもいひなはるな。いやらしい。

出島　でも二人が今結婚出來なければ自然さうなるより外はない。ねへお銀さん。

源兵衛　待ちなはれといふに。誰れも媒酌人にならんとは云はんがな。婆さん一寸來てんか。どないしたもんや。

お仙　なんせ東京の方は氣が早いに。同じ早うするなら、心中よりも婚禮の方がえゝやないが。

源兵衛　それは婚禮の方がえゝ。

出島　では早速御願ひします。その三々九度といふ奴をね。

源兵衞　今すぐかいな。

出島　今すぐです。遲れると、それ一方の心中……

源兵衞　おきなはれ。婆さん、そいぢや三々九度やと。仕度をせにやならん。

お仙　三組の盃がいるのやな。おますかいな。

源兵衞　あほういひなはれ。この家にそないなものあらうかいな。何とか工夫しなはれ。えゝわ、そこの小皿を二つ組んで、その上に猪口を載せなはれ。そや／＼、それでよい。三組が出來たわ。

お仙　けつたいな三組やな。三寶がありやへん。

源兵衞　その小さい膳でよいわな。さあ出來た。二人ともこの前に向ひあひで座りなはれ。時に、御婦人は何といふお名前や？仲人が嫁御寮の名も知らんではどもならん。

出島　銀といふのです。

源兵衞　お銀さん。えゝ名やな。それ婆さん御酌や。先づ、小さい盃で、嫁御から始めるのや。そや／＼それお婿さんや。そいからわしがうける。二度目はと、かうと、そや、先づ御婿さん……嫁御……さあ婆さんおぬしや……三度目は、下の小皿、でない盃で、かうと、嫁御や……お婿さん……わしがいたゞく。……これで目出度三々九度や。あゝあ肩が凝つた。

出島　あの『高砂や』といふのは何時やるんです。

源兵衞　そや／＼。これからわしがやる。この二三年仲人もやらんのでな、うまう行くかいな。扇子がないな。扇子をかうこことこへ置かにや。

出島　この笄箱では何うです。

源兵衛　けつたいな扇子やな、ま、えゝわ。（笄箱を膝下に置いて。）高砂やー　この浦風に……

お銀、急に袂を顔にあてゝ泣く。

出島　アハハハハハハ。

幕



過ぎゆく日

徳田秋聲

融が漸くのことで毎日の仕事に取りかゝれるやうになつた或日の晩方、古くから親しくしてゐる杉田氏が何か用ありげに遣つて來た。

「ちよつと君に話したいことがあつて。」杉田氏はいつものにこ〳〵した顔をして、彼の小几の端の方へ來て坐つた。

小几の上には、葬禮のをりの係員の書附だとか、會葬者へ出した禮狀の殘りだとか、彼の几上には相應はしくない小さい算盤、白い花の徽章の使ひ古し、さういふものの入つた箱があるかと思ふと、後れて來た年始狀が原稿紙の下から顔を出してゐたり、消化劑や解熱劑があつたりした。融は何から整理していゝか解らなかつた。また整理しやうとする氣もなかつた。暮に貰つて來た外國劇に關する書物や、芭蕉傳が紛失したり、小型の交友名簿がどこを探しても見つからなかつたりするので、さういふ些細なことだけでも、氣が欝々するのであつた。別にさう文化的に整頓された家庭でもなかつたので、融は出外する先へ立つて、洋服の附屬が在るべきところ

にならなかつたりして、氣を苛々させることも珍らしくなかつた。

「頭腦がわるくて仕樣がない。もつと規律的にやらなくちや。」融もよく不平を言つたものであつた。

彼女は困つたやうな顏をして、不機嫌な良人に解らないやうに、そつと女中を表面へ立たせることもあつたが、「何しろ家が狹いんですもの」と鼻のうへを顰めることもあつた。しかし彼女が搜すと大抵そこに其の物があつた。又た何々が何處にあるかときくと、それは何處に有りますとか、有りませんとかいふ答も明瞭であつた。で、何うにかお茶を濁せた。

しかし是からは總てを殆んど自分でやらなければならないのだと思ふと、融は氣が滅入つてしまふのであつた。何もかも自分の思ひどほりにやれると云ふ愉快さもあつたが、自分獨りではやれない事の方が多いことを思ふと、うんざりしてしまふのであつた。

大した苦しみもなくて、融が出てゐたホテルから歸つてから、三時間ばかりで死んだ彼女が、大詰の今になつて考へると、一緒になつた其の時から其の事がちやんと極まつてゐたことのやうに思へるほど、彼の氣持に取つて其の死が不自然でもなかつた。最近十年弱のあひだに幾度となく近親の死に出逢つてゐるのと、同じ運命が段々間近に迫りつつあることが意識されるのとで、風にけし飛んだ露のやうに、他愛なく現世から消えて行つた彼女の死も、さほど悲しいものではなかつた。ちよつとした適當な手當さへしてやつたら、危いところで生命を取留め得たのではなかつたかと、死んだ後で彼は子供と顏を合せる度に、直ぐそんな話に落ちて行つて、際限なく死の前後にわたつて思ひ返すのであつたが、それを考へても仕方がなかつた。彼は多くの重荷を投げつけられて獨り殘された病弱の自分の體が、危なつかしく思へて仕方がなかつた。

「風はいつも吹荒んでゐるんだな。」

「何うせ人間の生活なんて、幻影のやうなもんで、御母さんとして考へれば悲しいけれど、仕方がないですね。御母さんはお父さんのことを悦んでゐたから可いでせう。あの前晩もお父さんの机の前にすわつて、何か讀んでゐましたが、顔が透徹るやうな綺麗さだつたな。僕は不思議に思つた。Tーさんが來てゐて、キラソオを三杯くらゐ飲んだらしいな。」

「己がゐたら一と口も甞めささなかつたんだ。」

「御父さんが外へ出てゐなかつたらと云ふ氣もしますね。地震の時も獨りで心配して、今度も獨りのとき仆れて……。」

融は彼とさう云ふ話をしだすと、際限がなかつた。一番いぢらしく哀れに思へるのは、いつも臺所を働くとき着てゐた、ちよつと面白い柄の格子縞の筒袖を着たまゝ、死んで行つた彼女の姿で、後で着かへをさせる時、帯のあひだから、融が使ひ古して、くしやくしやになつた縫ひつぶしの蟇口が、潤んだまゝに出たことが、殊に済潮ない感じであつた。中を開けてみると、銀貨と銅貨と少しあるだけであつた。そんな物を帯の間へ入れながら、ころりと死んで行つたのであつた。黄色いものを夥しく吐いてから、「私、もう駄目です」と言つたきり、寒さうな頬の筋肉をぶるぶる戰かせて、目を閉ぢて行つた印象は、「私駄目です」を屢ば聞かされてゐた融に取つて、信じられないやうな事實であつた。融は世帯女房として、彼女を使ひすぎたのを悔しく感じた。そして其を考へだすと、自分ばかりが惡人のやうな氣がするのだが、しかし死んだあとでも正當な批判をもたなければ、彼自身が生きて行けないのであつた。彼は夜獨り、妻の死の床の迹に寝ることになつてゐた。位牌や飾附はまだそつくり床の前に据ゑられたまゝで、融が拾つて來た骨の幾部も、位牌の前においてあつた。融は彼女の離れて行つたことが、何となくさばさばした感じで、涼しい風が頭腦を吹きぬけるや

うな爽やかさを感ずるのであつたが、それと同時に、寒いおそろしい感じが、彼の心魂をわななかせた。愛着が近來殊に深まつて行つてゐたことが、彼の心を劇しく責め苛んだ。夜更に目がさめると、彼女の幻影がそこに現れた。時とすると彼女の肉體を自分の床に感じたりして、ふと目のさめることもあつた。何故もつと大きな愛を以つて、彼女を包んでやらなかつたかと考へたりしたが、それも對象を失つたときの心弱さで、それを推詰めて辿りこんで行くと、是からの生活をまるで一變しなければならないほど忍從的な氣持にさせられるのだが、彼女の愛に殉ずることは、彼の性格から言つて餘りにも寂しい果敢ない無理強ひであつた。死と共に一時に凋んでしまふほどの愛とも言へなかつたけれど、その記憶のなかに埋れるには、餘りに本質的でなさ過ぎるほどの、運命的なものでもあつた。融は枕がしめるほど、止度のない涙に浸ることが、幾夜もつゞいたが、それは恐らく心から湧返つてくる寂しさ痛ましさからで、一途に彼女の死の悲みに滲透して行くことのできない惱しさに堪へ切れないからであつた。でも彼も時々思ひのほか感傷的になつてゐるのを恥かしく感ずるほど、幸福の陰に勞苦の多かつた彼女の可哀さうな生涯を悲しんだ。

杉田氏は四邊へ氣をかねるやうに、用談をはじめた。

「君も早速困るだらう。何うだね、仕事ができるかね。」

「新聞を長く休むわけに行かんから、今日から初めたんだがね。その方が紛れていゝと、M―君も言つてくれるもんだから。」

「それあ好いね。僕も何うかと思つてね。こんな話をするのは少し早いかも知れないけれど、何に今が今決めなけあならないこともないし、ちやうど適當と思ふ人があるので、話だけでもしてみようと思つてね。」

緑は彼の親切を嬉しく思つた。そして格段迷惑を感ずるといふほどではなかつたし、さう云ふ必要が本當にありさうな氣もしてゐるので、寧ろ好意を感謝したいのであつたが、しかし彼の氣持のうへでは、その問題は極めて重大であつた。良人の貞操などと云ふ抽象的な問題は、此の場合蹴飛ばしてもかまはないとして、單に世間的な生活上の必要問題としても、輕々しく觸れることの出來ない困難と危險が伴ふのであつた。今でも彼は妻が殘して行つた子供達に對して、今までは思ひもつかなかつた深刻な自我が動き出してゐるのを拒む譯に行かなかつた。子供は自分だけのものではない。彼は妻の死と共に、妻よりも愛してゐた子供に對してすら、何うかすると幻滅に似たやうな寂しい感じを抱いてゐた。自分獨りで子供たちに直面してゐるのが苦しかつた。それほど過去の一切に興味を失つてゐた。今までに比べて、拔差しのできない強い責任感に縛られるのであつた。

「それは有難いんだけれどね。」融は淋しい氣持で答へた。

「どうも世帶をやつてくれる人が無いと、矢張り不自由だらう。君が一切のことを遣らなけあならんやうぢや勉強が出來やしない。」

「さうなんだ。今のところ姉が一人殘つてゐてくれるし、女中がよく働いてくれるんで、何うにか遣つてゐるけれど、矢張自發的にはやつてくれませんから。こゝに坐つてゐても、始終勝手の方のことが氣にかゝつてならないんだ。それよりも一番困るのは家の狹いことで、家内が生きてゐるうちは、何うにか遣繰をつけてゐたけれど、居なくなつてみると、非常に不自由なんだ。これから色々の不都合が生じて來るだらうと思ふが、誰か後へ來るにしても、家から何うかしなければね。單純から複雜へと、自然に慣れて來てゐるものは可いけれど、新らしく割込んでくる人は氣の毒だ。多勢の子供よりか、先づその人の立場を考へるな。」

融は下宿屋から行李や蒲團や机やランプのやうなものを車に積んで、友人の建てた長屋風の家へ入つて、初めて一箇の世帶主となつて間もなく妻と同棲することになつた當初に溯つて考へた。硬い蒲團や着物の汚ないのに驚いて、融が氣味わるく思ふやうな綿のふかく〳〵した蒲團を新調してくれたことや、袷の破けた着ものを繕いたり、汚れものを洗濯したりしてくれた頃のことを思ひ出した。いつも混亂してゐた、埃ぶかい机のうへを整理して、磨いたやうに拭いてくれたことや、彼女の手にかゝると、何んなものでも生き〳〵して來るやうな食物が、初めて食膳に上つた頃の幸福やを思ひ出した。それは本の外面的な些細なことに過ぎないにしても、生活の荒んでゐた彼に取つては、魂の寄り場を得たやうなものであつた。そしてそんな單純なところから出發した彼の家庭が、內面的にも外延的にも今のやうな煩雜さに來るまでには、種子から吹出した芽が成長して、不用意に枝から枝をうつて行くやうな、盲目的な意志が働いてゐた。それは融自身の創造でもなければ、彼女自身の創造でもなかつた。融が家庭の幸福を感じる方が多かつたか、それとも年々硬くなつて行く外皮が、强く彼を締めつけて來るにつれて、世帶くさい雰圍氣の重苦しさを感ずる方が多かつたかは、別問題として、兎に角彼の家庭はそんな風にして一つの體裁のやうなものを、自然に形造つて來たので、歲月といふものと切放して考へることは不可能であつた。融はしかし第二の彼女を、今更ら求めようとは思はなかつた。それが世間的な意味では、何んなに貞淑な妻であり、賢明な母であるにしても、自然的な發生であつた彼女が、彼に取つてたとひ不滿だらけの妻であつたとしても、それよりももつとしつくり來ないのは當然であつた。そしてそんな事のために、家庭を今より一層內製的にすることは、彼の堪へ得ないところであつた。眞の意味の子供たちの箇性を尊重するうへから言へば、彼はむしろ父とか子とか云ふ緊縛から脫れて、一箇の共同團體のやうな、自由で柔軟で生氣のある家庭を慾するのであつた。

「旨く行くか何うか、最初先づ家政婦でもおくやうな考へでね。いづれ結婚は或る機會に於てすることにしても可いぢやないか。本人は五十くらゐかと思ふ。××市の大家の娘で、財産家に片づいてゐたんだが、良人が委狂ひや政治運動で家を潰してしまつて、今はちよつと氣の毒な境遇なんだ。たゞ少し美人すぎるかと思ふが、僕もづつと以前に一度見たきりだから。」

「考へちやおきますが、今のところちよつとさう云ふ氣分になれないんでね。家政婦としたところで、この狹苦しい家では、寢るところもないんだ。」

「何に可いぢやないか。妻の家もあるから。」

融はその話には氣が動かなかつたけれど、しかし後妻とか再婚とか分明した意味はないにしても、何か知ら漠然とした欲求を感じてゐたことは拒めなかつた。その證據には或朝新聞を讀んでゐると、いつも氣のつかなかつた廣告欄の上の方に出てゐる求婚の廣告の一つに、ふと目のついたことがあつた。勿論それはほんの興味的のものであつたけれどその心根が彼にはちよつと寂しい感じを與へた。それは辯護士の未亡人で、年が四十三とか出てゐた。多少財産あり、持寄りでも可し。當方美人。そんなやうな文面であつた。それから又その次ぎの日にも、一つ目についた。これは高等官の未亡人で、年齡や生活も略同じやうな條件であつた。しかしちよつと見ただけで、格別の興味も湧かなかつた。たださういふ人も世間にあることを思つただけであつた。

「杉田さんが、後妻の話に來てくれたんだよ。」彼は杉田氏の後へ入つて來た妻の弟や子供に言つた。

二人は返事もしかねてゐた。

「しかし早晩こんな問題は起るかも知れない。年が五十だといふんだ。」

「四十や五十になつた人はいけませんな。若い方が闘つてゐないで、弱ろいゝな。」子供はいふのであつた。

「しかしまあ皆なで共同でやつて行かう。仕事の分量の減るのは已むを得ない。それだけ節約すれば。」

「そんなに贅りませんよ。御母さんは買物が好きだつたからな。」

「世間的なお義理とか、虚榮の多い人だつたからな。そんなものはこの際一切止してしまふ。――だが大變だな。子供の必要品を調へるだけでも。」

「細いところまで頭を使つちや大變ですよ。遣切れるか何うかね。己は毎日の市間客にさへ疲れ切つてゐる。」融は溜息を吐いた。

「細いところまで頭を使つちや大變ですよ。」妻の弟がいふのであつた。

融は彼の上さんなぞに頼めば、別に今一個の世帯を張つてゐる彼女等夫婦でもないので、子供の面倒くらゐ見てもらうのに面倒なことくらゐ知つてゐたけれど、妻の死を機會として、そんな煩ひは一切振ひ落したいと思つてゐた。一人の姉だけを頼りにしてゐたやうな、意氣地のない彼には、融は好感がもてなかつた。それは彼一人ではなかつたけれど、長いあひだ妻が本當に良人のものに成り切らず、融がほんとうに素直な愛で、彼女を包むことの出來なかつたのは、彼女にさうした係累のあつたことが、重なる原因であつた。

第二のお産がある頃に、融は歸省の旅から歸つてみると、彼が新たに引越した家に、放浪の旅から歸つた彼女の弟と、姙娠中の彼の情婦と、そして田舍から出て來た父とがゐるのであつた。間もなく彼等は融の近くに、今迄離散してゐた親子三人が世帯をもつことになつた。そしてそれからづつと、全部さう云ふ家族を背負つた譯ではないにしても、彼の家庭生活に、彼の氣持に、彼の氣質に、何のくらゐ苦しみと煩ひとを與へたか知れないのであつた。勿論彼女は彼の仕事の理解者でもなかつた。本質的に彼を愛してもゐなかつた。彼女が融の仕事を思ひ、家を思ひ、子供を思ふやうになるまでには、融は長い間爭闘を續けなければならなかつた。

「私だつて親や兄弟のことも考へない譯に行きません。」さう云ふ彼女には融が我儘な利己主義者のやうに見えた。
「今度こそ本當に別れよう。」融は幾度心に叫んだかしれなかつた。
今度の不幸が、彼に取つて、彼女の良人や子供達よりも一層痛切に響いたのも無理はなかつた。妻の苦しかつた立場を考へる融は、彼と悲しみを共にする氣になれなかつた。報知によつて、臨終の床に駈けつけたときも、彼は啼聲をあげて、彼女の首に武者ぶりついた。
「おい、靜かに死なしてくれ。」融は見兼ねて彼を押退けた。
融と差向ひになると、彼はいつでも極度の感傷癖で苛々してゐた。その晩も彼は醉つて、啜泣いてゐた。
「親の時はさほどでもなかつたが、今度くらゐ厭な氣持になつたことはありませんよ。弟もさう言つて歸りましたよ。」
「それほど大事な姉なら、不斷病氣の心配くらゐしてやれば可かつたぢやないか。お前は姉さんを何時でも吝だ〳〵と言つてゐたさうだけれど、己の方がづつと吝な人間だつたといふことが、是から判るだらうよ。」
「それあまあ引締めなけあならないでせうが、餘り細かいことに干渉しない方がいゝでせう。」弟は臺所の世話までやく此頃の融を非難するやうに言つた。
「しかし己はあれの遣方を、さう有難く思つてゐた譯ぢやないんだよ。是から姉に働いてもらつて、何も彼も自分でやらうと思つてゐる。お前のところも一人格として交際ふから、もつと何うにかなつてくれ。働けなくなれば、いつでも引取るから。己より後に死ぬ場合は別だけれど。酒は止せと言つても止せないだらうが、醉ふと絡みつかれるんで、まあ成るべく飲まんことにしてもらはう。」
融はしかし、最近心臓で二三日床についたこの弟の死が、さう遠いことではなささうに考へて、動けなくなつた場

合を心配してゐた彼女が、先立つてゐたことを思ひだすと、友愛の情の厚かつた彼女を憐れまずにはゐられなかつた。

融は周圍の或るものに對すると、そのやうに時々昂奮したけれど、その後で夜更けに獨り佛前の香煙を眺めながら枕についてゐると、まるでヒステレー患者のやうに、涙がだら〱と流れて仕方がなかつた。さう云ふ場合の彼は、彼女に對する批判を超越した心弱い愛憐の情だけが、恥しいくらゐ入染み出るのであつた。

「あゝ、早くこの佛事が終つてくれないと、己は何にも出來ない。」

無精な融は、どんな暇なときでも、七日目七日目にはきつと寺へ行つたが、時とすると逮夜とかに人が集まることなぞがあつて、それがひどく億劫でもあり、惱ましくもあつた。煩雜な事務的な仕事が、またそれに伴つて、神經が苛立ちがちであつた。金を扱ふことが何よりも嫌ひな彼は、大抵子供に委かせきりであつたが、全部委せ切りでもゐられないのが苦痛であつた。

「自分で金を扱ふと、莫迦に吝になつて苦しいもんですよ。」子供もこぼしてゐた。融はよくさういふ心理を知つてゐた。

「さうだ。己は財布のなかを調べて見るのが厭でならない。御母さんも長いあひだ見て苦勞して來たんだな。御母さんの手には、いつでも金があるやうな氣がしてゐた。」

「御母さんは吝ちやありませんでしたね。」

「でも己にはちよつと狡いやうなところもあつた。己の財布の中味に無關心でゐられないのが、あの女の癖で、何だか

厭な氣がした。その代り委しておけば、何時でもお金が有り餘つてゐるやうに出してくれたもんだ。しかし本當に世帶がうまかつたんか何うか解らないね。買ひものなんか自分でも上手のやうに思つてゐたけれど、それが何うかね。案外好いお客さまぢやなかつたかな。」

「何しろ買ひものは好きでしたね。まあ御母さんとしては、そんな道樂でもなければ。」

「しかし別にこれといふものも買つてやらなかつたからな。」

「御母さんは滿足してゐたからいゝでせう。御母さんはお父さんの手紙を、みんな仕舞つてゐますね。」

「さう。己の母の手紙も殘らず仕舞つておくやうだつたが……。」

融は文字のない彼女を時々腹立しく思つたが、しかし文字を職業にしてゐる彼の妻として、それを解することの出來ないのが、彼女の生涯――殊に年取つてからの彼女の氣持を、何んなに寂しくしてゐたかを考へると、融は酒飲みの彼女の父と暗愚な母とを憐まずにはゐられなかつた。

「手紙くらゐ書けるだらう。旅へ出ても、手紙をくれないんで不便だ。今に子供が書くからいゝやうなものゝ。」

「それが書けるくらゐなら。」彼女は寂しい顏をした。

「何んでもいゝぢやないか。意味さへ通ずれば。ずつと前に小使帳をつけてゐたことがあるだらう、字がうまかつたぢやないか。」

「私の字なんか……。」

それ以上何を言つても彼女は答へなかつた。でも日常生活の上では、それを埋め合せて行くだけの頭腦を彼女はもつてゐた。最近彼女は嬉しさを隱すやうに融にこんな事を告げた。

「×××女學校でね、あすこの校長さんが私のことを生徒に話したんですつて。」

融は何か惡いことでも言はれたのではないかと、神經をぴりつかせた。最近は寧ろ彼の職業が或人達からは羨望の目をもつて見られるやうになつたけれど、そこまで來るには、厭な思ひをさせられたことも多かつた。下等な新聞の三面記事やゴシップやで侮蔑を受けるのはいゝとしても、子供が學校で排斥されるやうなことも、社會的迫害といへば迫害であつた。

「何んなこと。」

「女は學校教育を受けたから、きつと好いと極つてはゐないし、教育がないからと言つて駄目だともいへない。××夫人などはまるで無教育だけれど、出入りの若い人達に大變に評判がいゝといふやうなことなんですつて。」

融はにやりともしなかつたけれど、惡い感じはしなかつた。不斷その校長の人格に尊敬を拂つてゐた譯ではなかつたけれど、妻の讃められたことを聽くと、彼自身が讃められたよりも嬉しかつた。そして其を悦んでゐる彼女を涙ぐましいほどいぢらしく思つた。

融は日常の世間的問題で、時とすると過激に流れたり、妥當を欠いたりすることが度々であつたが、傍にきいてゐる彼女は、その時は默つて聽いてゐても、後で融の可けない點を擧げて、正當な判斷を與へるのであつた。融は世間から、よく苦勞人だとか、世間人だとかいはれたけれど、彼自身にはさう人生經驗の甲羅は生へてゐなかつた。勿論想像されるやうな家庭人でもなかつた。そして妻が死んで、獨りになつてみると、そこに家庭から解放された昔しながらの書生々々した自由人の姿が、まざ／＼と浮びあがつて來るのであつた。死後日がたつに從つて、悲しみが深くなつて來るにつれて、何ものにも拘束されない新しい生活慾が、むづ／＼動いて來るのを感じた。高踏的な藝術人となるには、彼は餘り

に通俗的興味を持ちすぎてゐたが、應接間を巷に開放するには、餘りに自分の好みに囚はれすぎてゐた。

妻を亡つて彼の一番心配してゐたことが、早くも彼の家庭に遣つて來た。それは三番目の子供の病氣と、彼の病氣とであつた。子供の病氣は肋膜であつた。融は妻を誤診したいつもの掛かりつけの醫師を迎へるのは、ちよつと惡いやうな氣がして、別の醫師に來てもらつた。そしてストウブで温ためた彼の部屋で、子供を診てもらつた。その醫師も融の妻の二七日がすぎた頃に、急病で妻を失つたことなどが、この場合の彼の家庭に、ちよつと相應はしい感じを與へた。

「お宅でも奥さんがお亡くなりになつたさうですね。」

「此方でも大變でしたね。何でしたかね。」

融は少しばかり説明した。

「誤診でなくても、あゝなれば駄目でせう。」

「さう、さう。」

醫師は妻を失つた人のやうには見えないほど、不斷以上にも氣輕るさうに見えたが、いくらか極り惡さうにも見えた。

「しかし隨分人が死にますね。此邊で私のところを入れて三軒、通りにも三軒ばかりあつたさうで。陽氣が變調を來してゐるんぢやないですかね。それに近來頭腦の病氣の多くなつたこと。」

醫師は「へへ」と唯笑つてゐた。そして子供の脊を叩きながら、

「右と左ではこんなに音がちがひます。これは肋膜ですよ。」

融は心が暗くなつた。大變だと思つた。しかし霧のかゝつたやうな彼の頭腦には、そんなこともさう明瞭に響かなくなつてゐた。

彼は肋膜は初めてなので、それに就いて少しく説明を聴いたが、醫師は安心してゐるやうであつた。

「病院へ入れた方がいゝと思ひますが、附いて行くものがないので。好いのに當れば幸ひですが、普通看護婦くらゐ信用できないものはありませんからな。それとも家で看護婦をつけませうか。」

融は言つたけれど、看護婦の横になるところもないくらゐ、部屋がぎつちりであつた。

「いや、それには及びますまい。長引くだけで、さう手のかゝる病氣ぢやありませんから。」

醫師は手當の仕方を教へて、やがて歸つて行つた。

融はまた苛々しくなつて來た。そして女中を藥を取りに遣るやら、油紙を買ひに走らせるやら、繃帶の裂を捜させるやらして、獨りで騷いでゐた。彼自身も慢性の氣管支を、少し悪くして頓藥など飲んでゐたが、毎日毎日頭に濛濁のかゝつたやうな、憂鬱な氣分に囚はれがちでゐた。悪くすると妻の跡を追ふのではないかと思つた。そしてそんなことも有りがちな人生であつた。昨日も彼は弔みに來た女客から、不幸な人の身のうへを聴かされた。

「私の知つてゐる宮内省のお役人で、好いところにいらつしやる方が、田舎へ片づいておいでになる妹さんがお亡くなりになつた知らせの電報を見ると、吃驚したはづみに、腦溢血でお亡くなりになつた方がございますがね。」彼女は話した。

「いくつ位の人です。」

「先生くらゐのお年でしたでせう。一度玉投げをやつておいでになつて――あのお役所では、そんなお相手もしてお遊びになるんださうでしてね。すると急に氣分が悪くなつて、櫻の木の下で、仆れさうにおなりになつたのを、皆さんで介抱して、好いお醫者さまはお手のものですから、早速十分なお手當があつて、その時はお癒りになつたさうですけれ

ど。」

融は周到な手當で癒つた腦溢血患者の話を、この頃外にも一つ二つ耳にしたが、好い氣持がしなかつた。

「あの電報を見なければ、こんなとにはならなかつたらうつて、奥樣が狂氣のやうになつていらつしやいますんですよ。」

融はそんなことを思ひ合せると、危なくて仕方がなかつた。それを皆なが餘所事のやうに、氣樂さうに暮してゐるのが今の融には、寧ろ不思議であつた。長い間生活の不安を胡麻化すために、色々の美しい蜃氣樓を築くのに熱中して來た、人間生活の有ゆる營みに、何の實相性があらうとは考へられなかつたが、生きる刺戟にはなりさうであつた。

融は二三日感冒で寢てゐた。妻の三七日も過ぎ、四七日にも近い頃であつた。彼は二三日前に、友人の葬儀に行つて、暫らくぶりで汽車に乘つた。

「お父さん何處へ行くの。」立際に末の女の子が彼に絡みついて來た。

「お父さんはね、ちよつとお友達のお葬式に行つてくるからね。」

「遠いところ。」

「少し遠いけれど、直き歸つてくるからね。」

「厭だな。」

「それぢや止してもいゝけれど、家でもお母さんのお葬式に多勢來てくれたでせう。」

子供はしばらく考へてゐた。

「行つてもいゝね。」

「行つてもいゝ。お土産を買つて來てね。」

「あゝいゝとも。今夜は姉さんと此處にお寢。」

「こゝは厭。あれがあるから。」子供は床の前の佛壇を指さした。

「やつぱり夜なかに目がさめる。」

「え。昨夕もお茶の間のあの襖のところにお母さんが見えたわよ。私こわいの。」

「そんな事があるものか。お母さんは死んでしまつたんだから、何處にもゐない。」

子供はふと位牌の傍にある、骨の袋に目をやつた。

「あれ何に。」

「あれ何でもない。お母さんの齒です。」

「さう。」

「學校のお友達のなかには、お母さんのない人もあるでせう。」

「そんな人無い。みんな有る。」

「でも愛子さんにはお父さんや兄さんや姉さんが澤山ゐるからね。」

融は幼いながらに、不思議と誰よりも人情的のことを解する愛子の心持が、一番神經に觸れてくるのが苦しかつたでも案じたほどではなかつた。彼女は母を亡つた兄弟たちの心を慰める役目を仕遂せてゐた。たゞ日がたつに從つて、大人しくなつて行く姿が、融には堪らなく淋しかつた。彼女は今迄のやうな駄々ッ子ではなくなつた。そして母か父かの膝より外に取つかなかつた子が、少し親しい女の客と見ると、誰にでも飛びついて抱かれた。

融は女中にスウトケースを出させて、羽織や袴や、襦袢の着替のやうなものを詰めさせたが、旅立つとき何時も世話造つてくれた肝腎の妻のゐないのが、頼りなかつた。

融は死んだ友人とは、幾年目かで三月前に逢つて、彼の健康の衰へてゐるのに驚いた。その後また彼は融の留守中に來て、久しぶりで妻と暫らくしみ／＼した話を交へて歸つて行つた。彼は融の妻の死んだ日に仆れて、それから幾日か經つて亡くなつた。融は妻の死に對して、彼の弔電を受けたくらゐであつた。生前家と庭を一度見に行く約束があつたので、柩が門を出ないうちに行かうと思立つた。さうでもしなかつたら、彼の友情に酬ふる機會は永久に去つてしまふであらう。

融は夜明近くに其の家に辿りついた。そして彼の柩の前に跪いたとき、彼は何ともいへない朗らかな悦びを感じた。南國めいた明け方の靜かな氣分が好かつたせいもあつたが、それよりも藝術家としての彼の後半が、何んなに安らかで幸福な隱栖の地を得てゐたかを面り感じ得たからであつた。

朝になつた。融は故人の造つた廣い庭へおり立つて、あちこち逍遥しながら、爽やかな朝の空氣を吸つた。庭は手の込んだ彼の文章を思はせるやうな、寧ろそれよりか好い意味の技巧の洗煉されたものであつた。するうち麗かな日が外つて來た。人々は朝鮮芝を敷詰めた庭へおり立つて、椅子やベンチに腰かけて、日南ぼつこをしながら、出棺の時刻を待つてゐた。

「生きてゐるうちにくるんでしたな。」

「先生がおいでになつたら、何んなに兄が悦んだでせう。ちやうど此家にも飽いて、先生なんかゞお出でになつてお普請になるやうな部屋も一つくらゐ造るつもりで、普請に取かゝるばかりになつてゐたんです。兄が居なくても、是から

何うぞ時々お出で下さい。」と東京でも親しくしてゐた彼の弟の一人が、心から融の來訪を悦ぶやうに、話した。

葬式がすんで、皆んなでそこへ引揚げて來たのは夜であつた。故人と密接の關係をもつた槇田と融を中心にして食事が初まつた。

「しかし貴方も何んとかしなくちやならんでせう。」酒に醉つていくらか感傷的になつてゐた槇田は、故人が中央文壇にゐた頃の、放縱な生活の追想談などをやつたあとで、次ぎの間へ來て、手酌でちび〳〵飲みながら、融に鉾を向けて來た。

「皆んなさう言つてゐますよ。何か代りをもらはなければ、迚も仕事はできないだらうつて。」

「さうかね。そんな事を言つてゐる人があるかね。」

「みんな言つてゐますとも。誰にしたつて、仕事のあるものはさうですよ。」彼はさう言つて、政治家などの世間の例を引出した。

「けど家内だからあれで可かつたんだけれど。僕んとこなんか家庭の體裁も出來てゐないんだし、子供は多いし後妻に來る人が氣の毒だよ。僕が仆れたあとで子供の負擔になるやうでも困るしね。」

「そんなものでもないでせう。貴方のとこなら、候補者はいくらでもありますよ。僕のとこにも一人あるんだ。貴方にその氣があれば、いつでもお世話します。」

「今のところそんな氣はないね。杉山君も何だかそんなことを言つてゐた。それは先きの女が五十とかいふんだ。」融は恥かしさうに言つた。

「五十？」槇田は笑ひだした。

「五十ぢや可哀さうだ。先の人よりお婆さんぢや、再婚の意味がないぢやありませんか。」
「でもさうなんだよ。」
「そんな莫迦な話があるものか。先あ四十か三十五六なら適當、二十代でも決してをかしくはありません。」
「まあ考へておきませう。」
その晩おそく醉つた槇田や二三の人達と、融は大人の家を辭して歸途についた。そして朝方家に着いた。

或る晩方融が病床から這出して、机の前にすわつてゐると、そこへむら子がやつて來た。むら子は融の妻の計音に接して、しばらく引込んでゐた田舍の家から出て來て、前から居なじんだ近所の旅館に寢起きをしてゐた。もう三年もの長いあひだ、融は若やかな派手な彼女の姿を、折々書齋に迎へてゐた。今度も彼女はその旅館の一室で、創作に熱中してゐた。そして其の隙に時々融の書齋をおとづれて、愛子と遊んで行つたり、愛子の洋服を編んだりしてゐた。むら子はいつにない親しさを示して、蒲團の裾の方へ來て坐つた。融は今まで遠い世界の人のやうに眺めてゐた彼女が、何かに特殊な親しみをもつて來たことを感じた。
「私でよければ、何んなことでもお助けさして戴きます。」むら子は心持含羞んだやうに言ふのであつた。
融はそんな言葉を、彼女の口から二度ばかり聞いてゐた。
「貴女のやうな人に私の家のことなんか遣つてもらつちや大變だ。」融は笑つてゐた。
「何うしてでございませう。私はこれで派手なことは嫌ひなんでございますわ。」むら子はパンヤの厚い綏蒲團の端に、その輭やかな片手をおきながら言つた。

「さうですかね。貴女は幾歳でしたつけね。」

「二十六ですの。」

「私の娘が生きてゐたら……尤も貴女よりは少しは若いけれど。」

しめやかな話が、しばらく續いた。そこへ杉田氏の番頭が手紙をもつてやつて來た。ちよつと行かうかと思つたが、お差支へなかつたら今直ぐおいでを待つといふのであつた。

融は歩くのが嫌いので、俥で出て行つた。彼は何となし興奮を感じてゐた。

案内されて書齋の廊下まで行くと、杉田氏があわてゝ部屋を出て來た。

「ちよつと君こつちへ……。」

融はそのとき、色の白い四十五六の婦人が一人、部屋のなかから此方を振返つた顏を、ちらと見たが、そのまゝ客間の方へ引返して來た。

「實は今來てゐるんだがね。まあ逢はん方がいゝかも知れんが、僕も昔し一度逢つたきりでね、今見るとちよつと幻滅を感じた。本人も今更片づかうといふ氣もないらしいが、子供の世話くらゐならばして見てもいゝやうな意嚮らしいんだが、何しろわざ／＼といふ譯でもないけれど、出て來たものだからね。」

「成程綺麗な人だね。しかし氣の毒だな。」

「いや、それは可いんだ。それに年も五十一だといふんだ。」

「それにしては若いやうだが……しかし手數をかけて濟みませんでした。」

「それともちよつと逢つてみるかね。」

「いや、逢はない方がいゝ。」融は首をふつた。

融はやがて車で引返して來た。そして部屋へあがると、そこにむら子が愛子を相手に、クレオンで畫なんか描いて遊んでゐた。

愛子はすつかり彼女に馴染んでゐた。

巣父犢に飲ふ

戯曲一幕

佐藤春夫

堀口長城先生に捧げます。孝行な息子が年とつた父のために見せる芝居なのです。わたしはこれを令息大學作のために代作いたしました。

人物

ひとりの花嫁について行く村人たちの一群

隠士、許由

帝王、舜

舜のお供をしてゐる人々

許由の友、巣父

巣父に伴はれた犢

時代

童話時代

場所

美しい面白い國

やや遠いあたりから笛の音と太鼓のひびきとが、洩れ聞えてゐます。

細流に沿うた往還です。流の向側には木々が生ひ茂り、桃の花さかりです。そのなかから草で葺いた小さな屋根の頂が見えます。この林のうしろに、おまり遠くないあたりに容のやさしい山が見えます。ほんのりと霞んでゐるのです。

林のなかから、のどかな調子の歌が聞えてきます。歌つてゐる人の姿は、木のかげになつて見えないのです。

箕山のふもと
潁川のほとり
山に採り
川に飲む

人と生れて
性を養ひ
春に逢うて
花を見る

雲よ
せせらぎよ
そよかぜよ
友よ

歌うて
啼鳥の如く
許由は
不足を知らぬ

この歌聲が終ると、これとは別に關係なく、またもう一つ別の歌が聞こえて來ます。合唱です。

日が出れや稼ぐ！
日が入れや休む！
井戸にや水が出る！
田にや米が出る！
天子のお陰は！
どこで蒙ろ？

この合唱を歌ひながら、人々が川上から出て來るのです。この人たちは中にひとりの花嫁を守つてゐます。人々はみんな藍色の袍をつけてゐるし、花嫁だけは桃色の袍を着てゐる。みんなは跣足です。帽をも頂いてはゐない。只、花嫁だけは髮の上に一ぱい堆く花を飾つてゐます。合唱をやめて會話が始まる——

A「だんだんと、太鼓がよく聞えて來たね」

B「もうすぐ近くだからね——ここは許由先生のところだから」

かういふ話と同時に、別にひとりの老人が、花嫁にむかつて言ひます——

老人「みんなは、あのやうな騷ぎをして、お前の來るのを待ちこがれてゐるんだよ」

花嫁は含羞みながら笑つてうなづく。彼女の頭に戴いた花束がゆつたり動くのです。

人々の列は順々に過ぎて行く。この群のなかの後の方から行く人々の會話——

C「許由先生はこのごろでもやつぱり、手のひらで水を飲んでゐられるかね」

D「うん。さうらしいよ」

E「瓢瓜の盃はどうしたのだ」

F「知らない」

群衆はみな通りすぎてしまふ。

間。――犬の吠える聲がする。

やがて美しい吹流しの旗を持つた男がひとり、川下から現れる。

ひきつゞいてきらびやかな行列が出て來る。それが立ちとまる。

行列の七分どほりまでは觀客に見える。殘りの部分は舞台の外につゞいてゐる心持。この行列は、前に通りすぎた花嫁の一行の素朴さとコントラストするものです。

行列の中央には大仁舜が、四人の奴隷によつてかつがれた輿の上に乘つて居られます。王冠をいただき、白い長い鬚がある。彼は紫色に金絲と寶玉を縷め縫ひつけた袍を着てゐます。彼をとり繞つた家來たちも、それぞれまに黄色や綠色などの華麗な袍を纏ひ、また履を穿つてゐます。但、奴隷は素足できた殆んど裸體であります。

侍從の一人「陛下。只今、行き逢ふた者どもの話のとほりでございますれば、許由先生のお住居は、ここであらうかと存ぜられます」

舜「さうか。それではわたしたちが此處へ來たことを、ちよつとその人に傳へて貰はう。わたしがその人に相談したい事があるのだと申してくれ」

侍從の一人「畏りました」

彼は、もつと若い別の侍従をふりかへつて命令する――

「許由先生に、陛下をお出迎するやうに申すのだ」

若い侍従は一禮してから、流のあたりをきよろ〳〵と見まはす。向ふ側に渡るべき橋がないからです。最後に彼は行列の遠い後方を見て、手で六度さし招く。

六人の奴隷が出て來る。

若い侍従は、六人の奴隷に手で何ごとかを命令する。口は利かない。

奴隷達は流のなかへ這入つて行く。水は、せいぜい一尺五寸ぐらゐしかないものである。

奴隷たちは前後に並んで立つて、いづれも深く腰をかがめる。第一の奴隷の尻に第二の奴隷の頭が、第二の奴隷の尻に第三の奴隷の頭が、以下かういふ風にして六人の彼等が身をかげめた上を、若い侍従は奴隷達を橋にして、その背中の上を履で踏みながら、流れの向ふに渡る。

彼は木立のなかへかくれてしまふ。

舜「わたしに履をはかせてくれ」

老侍従「どうなされるのでございますか」

舜「わたしは土の上へおりなければならない」

老侍従「いやいや。決してそれには及びますまい」

舜「どうしてだ。わたしは地におりて、その人に會はなければならない。さうして歸る時には、この輿の上にその人を乗せてわたしはその人のうしろに従うて行く筈ではないか。わたしはもう決心したのだ。ためらふことはない。わた

しの履を用意してくれ」

老侍從は默つて一禮する。それから別の侍從たちをかへり見て言ふ――

老侍從「陛下にお履をお上げ申せ」

二人の別の侍從が出て來て、手に手に一つづつの履をもつて、跪いて舜の足にはかせる。

この間に、流れを渡つた侍從が許由と一緒に川の向ふ側に現はれて來る。

許由の容貌と風俗とは普通の人と大差ないもので、さきの嫁人の一行のうちに雜つても別に目立つところはない。鼠色の袍をつけて、跣足である。その許由に、侍從が、慇懃な樣子で先づ川を越すやうに勸めてゐることがその擧動でわかるのです。

許由「いゝえいゝえ。わたしにはどうぞお構ひなく」

侍從「どうぞ、さう仰言らないでおさきへ」

許由「さうですか。それでは」

許由は袍の裾をからげると、つかつかと流れのなかへ歩み入つて、直ぐ川を越してしまふ。

侍從は、奴隸たちがさつきからその船をもつて造つてゐる橋を横目でみたが、彼は履を脫いで、許由が今したやうに裾をからげて、水の中を渉る。

奴隸たちに向つて、

許由「ありがたう。君たちはもうそんな形をしてゐなくつてもいいのだ」

舜が自分の方から歩いて許由に近づいて行く。侍從たちは敬禮する。

舜「あなたがわたしの民どもの呼んでゐる許由先生ですか。わしは天子の舜です」
許由「わしが許由でございます」
　　許由は丁寧に禮をする。
舜「甚だ出し拔けなやうであるが、わたしは實は、これをあなたの頭にのせて貰ひたいのです」
　――舜は自分の頭の上の王冠を指さす。
許由「全く。それは少し出し拔けですね。困つた事でございます」
舜「さうあなたのやうに一口に言つたのでは相談にはならない。もしも、あなたがこれを戴いてくれなかつたら、天下にこれを置くところはないのです」
許由「どうして今のとほり、あなたのお頭の上ではいけないのでせう」
舜「それがです。年をとつたせいか、それがわしの頭の上では坐りが惡いのですよ。まあ聞いて下さい。民はそれを望んでゐないのです。許由先生は、このごろ民がどういふ唄を好んでうたふかを知つてゐますか」
許由「はて、どういふ唄が流行るのでせう」
舜「わたしはよく知つてゐる。臣はみんな一樣に、『太陽が上つたならば起きて働く、太陽が沒した時には休息する。井戸をうがてば水は湧くし、田を耕せば米はみのる。天子の徳といふのをわれらは一向に知らぬ』とまづかういふ意味ででもあらうかと思へるやうな事を、下々の言葉で歌つてゐる。到るところで唄つてゐる」
許由「さう仰言ればわたしも聞いたことがあるやうに思ひますよ」
舜「さうでせう。ところで、一たいわたしがこの唄を始めて聞いたのは、いつのことであつたか、ともかくも最初にわ

たしが世の中がうまく治まつてゐるかどうかを知りたいと思つて、忍びの姿で町へ出てみた時のことであつた…」

侍從の一人なる史官「お言葉のあひだでおそれ多くございますが、それは陛下が御即位の第六十一年目でございました」

舜「さうか。ともかくも、その時に始めてわたしはあの唄を聞いた。或る年寄が何か慰みごとをしながら歌つてゐた。尤もその同じ時には、また別の唄も歌はれて居つた。それは言葉はもうわすれたが、確にわたしの治め方に滿足してゐる者の言葉であつた。わたしがあればこそ世の中もおだやかだと言つてゐたやうに思へた。これを歌つてゐたのは若者だつた。わたしはまるで意味の反對なこの二つの唄を聞いて迷つたものだ。しかし、わたしはどうもやつぱり身びいきで、自分に都合のいい方を聞いてゐた。といふのはね、年寄といふものはいつも不平のあるものだし、若い者はいつも希望のあるものだから、若い者の唄こそ本當の民の聲だらうと信じてゐたのだ。それがどうであらう！その後、わたしが忍び姿で町へ行く度毎に、あの年寄の歌つた唄はいつも聞くけれども、以前それと同じように流行つてゐた若者の歌つた唄は、どうもごく稀にしか聞かれない。それももう近年になつては全く聞くことが出來ない。その反對にもう一つの唄は、もういつどこででも、誰の口からでも聞かれるのだ――『天子の德といふものをわれらは一向に知らない』といふ意味がね。わたしはこれに就て一度誰かに相談してみようと思つた。さうして民が許由先生と呼んでゐるあなたこそその人であらうと考へた。今日はうららかな天氣ではあり、わたしは思ひ出してここに來たのだが、その途で遽に思ひ立つて、――これは相談するまでもなく、この頭の上の重いものを、是非ともあなたの頭にのせて貰はねばならないと決心した。といふのは、わたしは途で、――それもここからあまり遠くもないところで民どもが集つて酒を斟んで音樂を奏して踊つてゐたのだ。それがいかにも太平の群と思へたから、わたしは乘物をとめさ

せてそれを見てゐたのだ。その時、民どもが何と唄ひ出したと思ふ。やつぱりあの流行唄だつた。わたしは悲しくなつたよ。むかしはわたしの忍びで歩いてゐることを知らずに唄つたものを、今はいかに酔ひ痴れてゐるからとは言へ、わたしのこの行列を目の前に見ながら唄ひ囃してゐるのだ。民には何の悪意もない。わたしはただ自分の寡徳を自ら責めるより外はない。わたしはその場で決心をした。許由先生。民はあなたの欲心の尠いことを慕うてゐる。則天無私なあなたのやうな人を、今から、今までのわたしの輿へ乘つて頂いて、わたしは歸るつもりです」

許由「いやいや。陛下。あなたは間違つてゐられます。わたしが考へるのに、天下が今日のやうに太平なことはありますまい。陛下の民が歌つてゐる唄こそ、陛下の徳を讃美してゐるものだとわたしには考へられます。日とともに起きて働き、日とともに休む。地の下には清い泉があり、地の表には豐に草が實る。それでゐながら、民がもし不服をいふとしたならば、民の求めるところはわたくしにも判らないのです。上に好き天子がゐられることをさへ有難いと思はない世の中こそ、わたしには理想の時だと思へるのです。明君の徳を民がしみじみと感ずるやうな時代は、何か有難くない事のあつたあとかも知れないのです。どうぞその冠はただ今のままのところへお置き下さいませ。たとひわたしにお乘せ下さつても、わたしもただあなたが今なされてゐるとほりの事より外には出來さうにもないのですから」

舜「どのやうにでもあなたの好きなやうにするがいゝ。ただわたしの頭の上にこれがあるのは、今はもう適當ではない。わたしはもう年をとつて來て、頭にでこぼこが出來たと見えて、冠がうまく乘つてゐない。それに頭が痛い。肩が凝る。どうかこれをわたしの頭の上からとらして貰ひたい。さればと言つて、これは貴いものだから、無闇なところに置くことはならないのだ。許由先生どうぞ、あなたの頭の上へ置かせて下さい」

許由「お言葉ではありますが、陛下。あなたはわたしといふものを御存じないからそんなことを仰せられるのです。

下、わたしは、實は、瓢を二つに割つてこしらへた盃でさへ、指角人から貰つてもてあますやうな頑固な男なのでございます。」

許由「いや、つひこの間のことでしたが、わたしが掌をくぼめてこの川で水を飲んでゐるのを見て、親切な人がわたしに瓢箪でできた盃を一つくれたのでした。指のあひだから水の洩れるやうなことがなくてよいといふことでした。なるほどそのとほりでしたが、これで飲むと言つてもやつぱり腰をかがめて水の面から掬むのは同じことです。同じことならば盃もいいわけですが、水を飲まない時には盃は手よりも厄介なものです。枝へつるして懸けて置くと風がふくたびに揺れて、ガタン／＼と音がするのです。それがうるさいので、わたしはたうとう　その盃は水のなかへ捨てて流してしまひました」

舜「へ、へ、へ」

許由「わたしはそのとほりの頑固でございます。況んや、天下は瓢箪の盃よりはもつと持ちにくいものだといふことは、お話を承つただけでも充分に判るのでございます。それほどのものをわたしが戴いたならば、わたしはまあどんなにか持ちあつかふ事でございませう」

舜「フム」

舜は歎息する。

許由「しかし、陛下がもし、どうしてもお位をどこか別のところへおうつしなさらねばならないとお考へならば、わたしは到底お受けすることは出來ませんけれども、わたしの友だちに巣父と申す人がございます」

舜「さういふ人がゐると、名前だけはわたしも聞いた事もある」

許由「すぐこの山の上にゐるのでございます。大きな木の洞のなかに住んで居ります。その樹の根元には犢がうづくまつて居りますから直ぐにわかります。わたしがお供を申上げてもよろしうございます。この人ならば、ひよつとすると、そのお冠を持つことが出來るかも知れないのですが。あの人は瓢箪の盃を持つことならばたしかに出來たのですからね。わたしが、柱にそれがぶつつかる音がうるさいから捨てたといふと、折角貰つたならば捨てるにも及ばなかつた――風が吹いて盃がゆれ、それが柱に觸れるのも自然の發する音なのだから、それを樂しむすべもあつたらうに、と彼がさう申した時には、わたしも彼を尊敬したものです」

侍從たちをふりかへつて

舜「お前たちは、今、許由先生の言はれた巣父先生といふ方を知つてゐるか」

侍從たちは互に顔を見合す。たうとうしばらくして

老侍從「存じては居ります。しかし、陛下、巣父に御相談なさることは、多分御無用だとわたくしは信じます。いや、わたくしばかりではなく他のすべてのものも。さやうであらうかと存じます。巣父は狂人――でございませんければ、きつと神仙でございます。外のことに就てはおそらくさまざまな學ぶべき事も御座いませうが、例へば許由先生の言はれるやうな瓢(ひさご)の盃などに就てはきつと賢者ではございませうが、天子のお位のことなどに關してはおたづねなされても御無駄であらうかと存ぜられます。畏れながら、何にいたせ、この御問題についてはもう少しお氣ながくお考遊ばされたがよろしからうかと存じます」

他の侍從たち「わたしどもも、畏れながらさやうに存じます」

舜「さうか」

　舜は愁然としてゐる。それから再び許由に

舜「それではもうお別れをしよう。わたしは、民のうたふ唄については、しばらくあなたの解釋に從うて自分を慰め、その上で更に自分の德を積まなければなるまい」

　許由は默つて敬禮する。

舜は歩いて輿に乘る。二人の侍從が左右から助ける。彼等は舜の履を脱がせて、各一つづつそれを彼自身の頭の上に戴いて持つ。先づ旗を持つた者が動いて、行列はもと來た道をかへつて行く。

どこかからのどかに犢の聲が聞えて來る。

突然、許由は流に近づいて、その岸の土の上へ坐つた。彼は顏の半面を水のなかへ浸し、しばらくしてまた別の半面を同じく流に浸す。このやうな不思議な動作をしばらくつづける。

その時、一個の奇妙な人物が下手の森のなかから現はれて、流を渉る。この人物は大體は袍に似た形のものを纏うてゐるが、それはすべて木の葉をつづり合せてつくつたものである。まだ青い葉や、或は枯れた栗色の葉や、黄色い葉などもところどころに無雜作につないである。「この人物のうしろには、犢がのこ〱とついて來てゐる。この異風な人物が巣父である。彼は許由のしてゐる事を見る。

　許由は巣父の來たことに氣がつかないらしい。

巣父「許由。どうしたのだ。何をしてゐるのだ」

許由「耳を洗つてゐたのだ」

巣父「耳？　耳を？」

許由「うん」

巣父「耳へ何か這入つたのか」

許由「あ。非常なものが這入つてしまつたのだ。つひうつかりしてゐるうちに。――つひ今のさつき、天子の舜が見えて、王冠の置きどころがないからわたくしの頭の上へ置かうと、仰言るのだ。わたしは無論御辭退をして、君のところへ行くやうにおすすめしたのだ。しかし家來たちは君のことを氣違ひか、それでなければ仙人だといふやうなことを言つて、君のところへは行かうとはしないのだ」

巣父「ハ、ハ、ハ、ハ。殘念なことをしたな。それで君はまた何だつて耳を洗ふのだ」

許由「君のところへならば行かなくつて、わたしのところへならば來る。それはどういふわけだらうと考へてゐるうちに、まだわたしの不充分なところがわかつたのだ。さう云へば、天子がそんなことを仰言つた時、わたしの耳は――右の耳だか左の耳だかはわからないが、一瞬間その話に氣をとめて聞いてゐたやうな氣がする。それでわたしは耳を洗つたところだ」

巣父「さうか。それはよかつた。それにしてもどうしてわたしのところへお出なされないのだらう」

許由「君は欲しかつたのかい」

巣父「うん。わたしはそれを戴かせるのにいいものを知つてゐるんだ。君にはまだ話さなかつたか知ら。泰山の頂きに立派な石があるんだよ。めづらしい紫色をしてゐて、これに金色で龍のやうな模様の紋が出てゐる。まるで天子の袍のやうなのだ。この上へ王冠を置いたらさぞ似合ふ[illegible]らうと、それを見つけた時からわたしはさう思つてゐたのだよ。

石はいいものだよ、それだから千古不滅の徳[illegible]のだ」

巣父話しながら歩き出す。

許由「どこへ行くのだ？　犢に水を飲ませるのではないのか」

巣父、歩きながら「さうだよ。だがこの邊の水は今日は汚い。汚いことを聞いた君の汚い耳を洗つたのだから。面倒でも今日はずつと川上まで行かなけやなるまい」

犢、歩きながら「もおう」

巣父、歩きながら「わたしの犢は汚い水に飲まない」

犢、歩きながら「もおう」

巣父と犢とはもう行つてしまつたのです。

文壇の四大家を報知新聞に迎ふ

文壇未曾有の盛事
新聞界空前の大飛躍

報知新聞は、進んで文明の最前線に立つことになりました。新聞の粗としての新聞紙の最高使命を果すためには、第一に新聞の芸術化が必要であります。

その理想に向つて進むために、報知新聞社は、現時日本文壇の代表的作家にして、一流中の一流を以て推さるゝ上記四大家を客員として迎へ、四月以降の紙上からその新作長篇小説をかゝげます。

四氏の創作は、新聞紙としては、報知新聞が独占することは申すまでもありません。

宇野浩二氏
菊池寛氏
佐藤春夫氏
里見弴氏
（五十音順）

本誌の読者諸君にして、報知新聞を購読せざる方は、即日最寄の新聞店に御申込下さい。

報知新聞は、日本に並ぶものなき優秀なる超高速度輪転機を据付け、内外通信網を完備し、米国における二大通信を独占し、社員の大増加を行ひ、新聞として理想的の設備を完成しました。

報知新聞は、日本の文運を代表する金字塔であります。現代人たることに、誇りを持つ人、悩ましさを感ずる人は、是非この三稜塔に反影する時代の姿を読んで下さい。

大正十五年四月

報知新聞社

毎月一回一日發行

定價

	定價	送料
一冊	八十錢	參錢
六冊	四圓八十錢	送料共
十二冊	九圓六十錢	同

〈但し前表は普通號のみの定價にて年四回發行の特別號は定價送料共不同に付其の都度別に申受けます〉

〈外國行送料は普通號一冊に付十六錢申受けます〉

〈御送金は前金にて可成振替貯金を御利用下さい　郵券代用は一割增の事〉

〈雜誌郵便で誌代取立希望の方は其旨御通知願ます〉

廣告料

〈御照會次第詳細御回答申上ます〉

大正十五年三月二十二日印刷
大正十五年四月一日發行　（禁轉載）

編輯兼發行人　高野敬錄
印刷人　高木島三
印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　株式會社秀英舍

中央公論社
東京市丸ノ內ビルヂング七七六區
電話牛込五〇八九番
振替東京三四番
同長野三二〇五番

GHU(…)

By THE CHUO KORON SHA PUBLISHING Co, Published Monthly.

Terms of Subscription : Annual subscription yen 12.48. Single copy 80 sen including postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.

